

デート・ア・リリカルなのは

コロ助なり～

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日死んだ少年は転生しました。

特典もたくさんで、頼んでも無いのにチートの家族もいました。

それなら楽に生きていけるかなと思いきや、物語が進むに連れて前世が転生後の物語にも関わってしまう。

ハーレムあり死亡キャラ生存ありでやっていくと思うのでよろしくお願いします。

台本形式でしたがやめました。出来るだけ誰が会話しているかわかるように頑張ります。台本形式のままがよかったという方は申し訳ありません。

## 目次

|               |     |
|---------------|-----|
| キャラ紹介         | 1   |
| プロローグ         | 22  |
| 無事転生しました！     | 28  |
| 友達出来ました！      | 35  |
| 迷子になりました！     | 49  |
| 少女救いました！      | 60  |
| 俺、至ります！       | 71  |
| 家族増えます！       | 80  |
| 魔法少年始めました！    | 90  |
| 学校行きます！       | 103 |
| 翠屋で修羅場です！     | 113 |
| ケンカのあとは仲直りです！ | 120 |
| 転生者の話し合いです！   | 127 |
| 絡まりました！       | 142 |
| 無印編           |     |
| 原作始まるらしいです！   | 155 |
| 幼馴染は魔法少女です！   | 163 |
| まさかの二天龍激突です！  | 174 |
| 誘拐事件です！       | 186 |
| 俺、キレます！       | 196 |
| 正体バラします！      | 204 |
| サッカーやります！     | 214 |
| 管理局来ました！      | 224 |

星明かりを壊すものです！

232

無印編終わりました！

239

新たな神器です！

250

冥界で使い魔ゲツトです！

261

アリシアとデートです！

274

フェイトとデートです！

288

## A's編

ヴォルケンリッター参上です！

306

誕生日パーティーが始まります！

319

魔王と真剣勝負です！

336

兄が出来ました！

353

魔力集めです！

366

イギリスに行きます！

381

狂三とデートです！

395

闇の書完成です！

408

逆境覆します！

419

最強の戦士です！

434

そんなの関係ないです！

446

新しい名前です！

461

これが俺達の全力です！

474

A's編終了しました！

494

## 未来トラベル編

何かが始まりそうです！

509

通りすがりの転生者です！

520

側に立つ者です！

533

一日執事です！

547

裁くのは俺達です！

563

最後のスタンド使いです！

577

閑話 目覚め

585

全力勝負です！（前半）

587

全力勝負です！（後半）

597

空ハッピーデイリー編

裁判の判決は大抵覆りません！

604

俺の恋愛への価値観はズレているらしいです！

615

「理」のマテリアルは殲滅者です！

626

「力」のマテリアルは襲撃者です！

638

闇を統べる王様です！

650

ヴァーリの友人です！

662

魔王少女、降臨です！

675

シヤマルさんのお料理（地獄）です！

688

桜木遥は謎多き少年です！

697

伝説の三提督と会談です！

708

本気は出しません！ ええ、きっとです！

720

遺跡発掘は危険でいっぱいです！

732

海へ行きます！

745

妻は夫よりも強いです！

761

人生は何があるかわかりません！

771

海の神様です！

783

真夏の夜の悪夢です！

798

夏祭りで万由里とデートです！

810

THE GEARS OF DESTINY 編

GODは神じゃないらしいです！

姉妹喧嘩はほどほどにしましょう！

未来からの来訪者です！

求婚されました！

砕けないのはダイヤモンドじゃなくて闇です！

キリエさんの想いです！

やはり聖王様が無双するのは間違っていないです！

完全無欠の戦いです！

更に家族が増えちゃいました！

ガチンコ対決です！

星、救っちゃいます！

元の時代に戻ります！

衛宮ヒーローズ編

未来感ハンパないです！

L B X、発進します！

相性最悪です！

ルーン魔術学びます！

オカルト研究部にお邪魔します！

謎解きは朝飯前です！

一日生徒会長です！

魔法少女、育成します！

空ハッピーデイリー編 2

彼女が出来ました！

アザゼルの実験です！

無限と夢幻です！

ランスター兄妹です！

VRゲーム体験します！

ボス戦は皆でやれば楽勝です！

クリスマスパーティーです！

大晦日です！

正月の遊びです！

龍神ファンタジーワールド

時を止めます！

紅魔館の再会です！

妖怪と戦います！

煌きの龍神です！

フランと仲直りします！

蛇王カイラです！

異変解決です！

宴会です！

妖怪のせいです！

空インデックス

学園都市です！

異世界での再会です！

転生者達と戦います！

番外編

空ハッピーデイリー編

3

1289127312631254

1248123712231211120011881179116911591147

11361124111011011090108010691058

これが超次元サッカーです！ (前編)

これが超次元サッカーです！ (後編)

乙女の、乙女による、乙女のための会議です！

OS

OS 2

## キャラ紹介

### キャラ紹介

龍神たつがみ 空そら

- ・年齢：9歳
- ・身長：130cm
- ・体重：27kg
- ・魔力光：蒼色
- ・魔力量：SS（転生したころはS+）
- ・容姿：黒髪。蒼眼。（BLACKCATのトレイン・ハートネットがモデル）

・性格：基本的には誰に対しても優しく、怒ることは滅多にない。年上の人には敬語をきちんと使う。仲のいい人には冗談を使うことが多い。

大抵のことは何とかなると思ってる割と軽いところがある。  
鈍感・天然ジゴロ・一級フラグ建築士の三拍子が揃った主人公。

意外と初心なところもある。

- ・趣味：家事。修行。
  - ・特技：家事（いつ、どこの嫁に出しても恥ずかしくないレベル）。スポーツ全般。
  - ・特典：1、デート・ア・ライブの精霊の力全部。
  - 2、ハイスクールDXDの神セイクリッド・ギア 器を創る力。
  - 3、ONE PIECEの覇気三色。
  - 4、成長限界無し。
  - 5、家事スキルEX。
  - ・デバイス：ブレイブハート。愛称はブレイブ。
- 待機状態では銀色の腕輪。戦闘時では片手銃や双剣になる。

バリアジャケットは同じ名前のキャラがIIで着ていた

服。

・他の転生者たちと違い、赤子からではなく5歳児から第二の人生をスタート。

凛祢曰く、特別な存在だからそうなった。

・前世の記憶は天照に会ったときにはすでに無く、最近まで覚えていたはずの

デート・ア・ライブやハイスクールD×Dの原作内容をスタンドを目覚めさせる矢に

貫かれた時にほとんど失った。

・特典では精霊の力だけを選んだが、転生すると天照によって本来いるはずのない精霊達が

いて一緒に暮らしている。

・精霊の力は多少なら使える。(自分を変身させたり、〈サンダルフォン塵殺公〉を出す程度)

体の中に入れていれば完全に力を使うことができ、霊装を纏うことが可能。

体に負担が大きいので一日に1時間しか使えない。

龍精霊化のおかげで使用時間が一気に伸びた。

・セイクリッド・ギア神器

・ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手

・バラン・ブレイカー

禁手

——【ブーステッド・ギア・サンバーストナックル赤龍帝の太陽神拳】

髪が赤くなり、眼は緑色に変化。

全身鎧じゃなくて両手に赤いグローブ、足に赤いシューズで緑色の宝玉が埋まってる。

バリアジャケツトも赤く染まる。

・デイバイン・デイバイデイング白龍皇の光翼

禁手——【デイバイン・デイバイデイング・ルナティックフェザー白龍皇の月光神翼】

髪は白くなり、眼は青色に変化。

全身鎧じゃなくて青い宝玉の埋まった面積の少ない白い装甲が付く。

周囲には白銀のドラグーンが10機ある。基本的にはアルビオ

ンが制御してる。

・黄昏の聖槍  
トゥルー・ロンギヌス

禁手——【天空舞う金色龍の聖槍】  
ヘブンズドラゴン・ロンギヌス

髪は金色。眼の色はそのまま。

六対十二枚の金色の翼が生え、異常に伸びた髪を髪飾りでまとめられポニーテール。

体中に橙色の模様が入った面積の少ない黄金の装甲。

なぜか空が創り出すのではなく、ヤハウエが自分の意志で出てきた。

初めて禁手に至った神器。

・永遠の氷姫  
アソリユート・デイマイス

禁手——【永遠なる氷覇龍】  
アソリユート・フォース・ドラゴン

本来、独立具現型である神器を纏う禁手。

髪は淡い水色。眼の色も淡い色に変化。

体の至る所から氷が付き、氷の翼や尻尾が生える。

・魔剣創造  
ソード・パース

禁手——【??】

空がよく使っている神器。鍵のような黒い魔剣の形をしてる。

(キングダムハーツの“過ぎ去りし思い出”がモデル)

・聖剣創造  
ブレイド・ブラックスマイス

禁手——【??】

魔剣創造と同じで空がよく使う神器。鍵のような白い聖剣の形

をしてる。

(キングダムハーツの“約束のお守り”がモデル)

聖なるハリセンは色々効果がありそう……？

・幽世の聖杯  
セフィロト・グラール

禁手——【??】

生命に関する能力を持つ。失った部位の復元や蘇生が可能。

この神器の能力でアリシアを蘇生した。

・魔獣創造  
アナハイアレインジョン・メーカー

禁手——【??】

イメージした生き物を創ることが出来る神器。

空が創るのはポケモンをモデルのしてるのが多い。

デイモン  
シオン・ロスト

・ 絶霧

禁手——【??】

結界を作る神器。攻撃力皆無。

ゼニス・テンベスト

・ 煌天雷獄

禁手——【天獄龍の煌雷星】  
ゼニス・テンベスト・ドラゴン・ライトニングスター

天候を操り、いかなる自然属性をも支配できる神器。

髪と瞳が薄い金色に染まり、背中からは六対十二枚の黄金の翼、頭の上には三つの光輪。

バリアジャケットもそれらに合わせて黄色に変わる。

・ 龍精靈化

・ 赤龍帝の籠手+灼爛殲鬼——〈灼爛殲鬼・紅天〉  
カマエル カマエル クリムゾン

赤い龍の紋様が入った薄橙の着物を着崩し、紅い袴、紅い下駄に黒い帯。

両手首には緑色の宝玉が埋まった赤い腕輪。

側頭部からは白い角が2本。

緑色の宝玉が埋まった巨大な紅い戦斧。

髪は琴里のように赤い。眼の色は右が赤く、左が緑色。

琴里とドライグとほぼ完全に融合した影響で身長が伸び、腰からは赤い尻尾が生えた。

・ スタンド：アバター

【破壊力—A／スピード—A／射程距離—D／持続力—

A／精密動作性—C／成長性—E】

能力：消滅。

但し、スタンドかスタンド能力、スタンド本体にしか触れることが出来ない。

加減をすれば一時的に消すことも可能。

アバターが出ている間は空は他の能力が一切使えない状態になる。

特徴：空とそっくりのスタンド。自我もある。

空……というよりは遙のことを色々知ってる模

様。

桜木 遥 さくらぎ はるか

- ・年齢：？
- ・身長：？
- ・体重：？
- ・容姿：髪が金髪。眼は蒼い。頭から水晶のように透き通った2本の角が生えてる。

・性格：空とほとんど同じ？

・空が記憶を失う前の存在。

中から空の様子を見ていたので、皆のことを知ってる。

本人曰く、「龍の神様」……らしい。

世界を救って死んだらしいが詳細は不明。

昔の友達や仲間に出たいと思ってるが、死んでる身だから諦めてる。

天河 愛衣 あまかわ あい

- ・年齢：9歳（前世は21歳）
- ・身長：129cm
- ・体重：「死にたいなら教えてあげる」
- ・魔力光：白色
- ・魔力量：AAA+
- ・容姿：髪は亜麻色。眼は緑色。（魔装学園H×Hの千鳥ヶ淵愛音がモデル）
- ・性格：（男性以外）物怖じしない。礼儀正しい。冷静だけど真顔でボケることもある。
- ・趣味：空の観察。

・特技：絵を描くこと。

・特典：1、原作組と同じ魔力。

2、それなりに裕福な家庭。

3、嘘を見抜く力。

・デバイス：アストラル。愛称はアスト。

待機状態は白いネックレス。戦闘時は錫杖だったりナックルになったりする。

バリアジャケットは黒いインナーに制服のような白い上着、

白いミニスカート、ブーツ。

・スタンド：プロテクト・タイガー

【破壊力―A／スピード―B／射程距離―D／持続力―A／精密動作性―B／成長性―B】

能力：半径2m以内に入った敵に噛み付き、攻撃を防ぐ。

自分からは攻撃できない。

特徴：白い毛並に黄色い縦縞の入った虎。

・転生者の一人。

前世では、小さい頃から家に父親がいなくて、兄弟や親戚もほとんど女しかいなかった。

幼稚園から大学まで全部女子校で 男と触れ合う機会が無のまま事故に遭い、死んで転生。

家や学校で男は野蛮だとか不潔だとか教えられてきたせいで男性恐怖症になった。

しかし、本人としてはアニメや漫画の影響で男に優しい人もいると信じており、

空が彼女の理想の男性像だったらしい。

今ではほぼ毎日アタクしてる。

最近では雄人やユーノ達とも少しは会話ができるようになってきた。魔法はなのと同じ魔法を使用することが多い。

八神<sup>やがみ</sup> あかり

- ・年齢：9歳（前世は16歳）
- ・身長：132cm
- ・体重：「何か言ったかな？」（威圧）
- ・魔力光：紺色
- ・魔力量：S
- ・容姿：はやてよりも少しだけ髪が長く、小さなポニーテールにしてる。
- ・性格：大人びてる。但し、ヴァーリのことに関しては乙女になる。はやてのことにしてもシスコンなどところがある。

・趣味：料理研究

・特技：料理（はやて程の腕はないがかなり美味しい）

・特典：1、八神はやての姉として転生。

2、八神はやてと同じ魔力。

3、視た者の能力や詳細がわかる力。

・デバイス：プレリカ。愛称は無し。

待機状態は黒い指輪。戦闘時は刀や銃、様々な武器になる。

バリアジャケットは紺色の上着に紺色のホットパンツ。

黒いブーツ。

（ワールドトリガーの小南桐絵の服装の色違い）

・スタンド：プレリユード

【破壊力―なし／スピード―D／射程距離―B／持続力―A／精密動作性―A／成長性―D】

能力：手に持った楽器を演奏すると様々な効果が表れる。

特徴：アンドロイドのような形をしてるスタンド。

直接的な破壊力は皆無。戦闘ではサポート向き

のスタンド。

楽器を色々持っていてあかり次第で変えられる。

・転生者の一人。

前世でははやてと同じく足が不自由で車椅子に乗っていた。

アニメを見て、はやての力になりたいと思つて転生するとき特典として

はやての姉になることを天照に頼んだ。

足は特別に治してもらつたわけではなく、転生して体が変わつたら動かせる。

ヴァーリに好意を寄せてるが、朱乃や黒歌のことを聞いて焦りだしてる。

王城 おうじょう 雄人 ゆうと

・年齢：9歳（前世は25歳）

・身長：134cm

・体重：29kg

・魔力光：金色

・魔力量：SSS+

・容姿：イケメン。金髪。右眼が黄金色、左眼が薄紫色。（モデル無し）

・性格：前世では年齢≪彼女無しだったらしく、空以上の初心さ。

転生者の中で前世の年齢が一番高いけど、一番子供っぽい。

誰にでも分け隔てなく接するのでクラスでは男女ともに人気がある。

妹が一人いて高町恭也並にシスコン。

時折ヘタレになる。

・趣味：魔法の特訓。

・特技：高魔力のごり押し。

・特典：1、金髪オッドアイのイケメン。

2、頑丈な体。（核ミサイル受けても傷一つ付かないほど頑丈だよ！）

3、魔力SSS。

・デバイス：レオン。愛称は無し。

待機状態はライオンのネックレス。戦闘時は銀色のガンブレード。

バリアジャケットは革ジャンにジーンズ。ブーツ。

(FFのスコールの服装がモデル)

・スタンド：スリーピングライオン

【破壊力―A／スピード―E／射程距離―A／持続力―

A／精密動作性―B／成長性―D】

能力：眠らせる力。

特徴：眠そうにしてる黄金の鬣の獅子。獅子のあくびを見ると眠くなる。

基本的にはあくびをするだけであるが、

攻撃するとスタンド本体の雄人自身でも止めら

れないほど暴れ狂う。

・転生者の一人。

前世ではアニメ好きの社会人。転生の話を聞いてニコポ・ナデポをもらおうとしたが、

女の子に免疫がなさ過ぎてできないと思いつめた模様。

踏み台転生者を演じようと思っていたが、初心だったことと空に指摘されたことできっぱりやめた。

妹が一人いてかなり溺愛してる。妹には若干鬱陶しく思われてるようだが、気にしてない。

ちなみに前世ではかなりのイケメンだったが自覚がなかった。

まさだ  
正田 輝義

・年齢：9歳(前世では15歳)

・身長：133cm

・体重：30kg

・魔力光：赤色

・魔力量：AA

・容姿：赤髪。眼は黒い。そこそこイケメン。（モデル無し）  
・性格：転生して自分がハーレム&チートオリ主だと信じて疑わな  
いでいる。

原作キャラ以外は皆下に見てる。

特典のおかげで特訓はしなくとも無双できると思ってる。

・趣味：？

・特技：大抵のことが出来ること。

・特典：1、NARUTOの忍術全部。

2、九尾の力（九喇嘛付き）。

3、大抵のことは何でもできる才能。

・デバイス：アカツキ。愛称無し。

待機状態は手裏剣の形をしたストラップ。戦闘時は刀。

バリアジャケットは赤い着物の下に黒い服。

（ナルトの仙人モードの時の服装）

・転生者の一人。

一年生の時に九尾がいなくなり、ジュエルシード事件でそれを知つて空を憎んでいた。

最後の6個は空を殺すために拾い集めたが暴走し、強大な力を得るも空に敗れて

ミッドチルダの病院に入院。

ジュエルシード事件は最初から関わろうとしたものの、出るタイミングを逃してしまい、

管理局が来るまでなのは達とは関われずにいた。

ちなみに原作開始の時は、夜中に家を出ようとしたら親に止められて行けなかった。

次の出番は……考え中。

高町<sup>たかまち</sup>

なのは

・プロフィールは原作通り。空や精霊と修行してるのおかげで原作よりも強くなってる。

・スタンド：ムーンライト・プリンセス

【破壊力―C／スピード―A／射程距離―A／持続力―D／精密動作性―C／成長性―A】

能力：一定範囲に重力を発生させる力。

特徴：ピンク色のドレスを着た貴婦人。

重力の強さはなのが調節可能。

・魔法少女リリカルなのはの主人公。

今作では主人公ではなくヒロイン。

・5歳の時に空と公園で出会い、そこから一緒にいるうちに友達とは別の意味で好きになった。

・中学卒業後は管理局に入ろうかと考えて始めているが、

空と高校を一緒に通いたいという気持ちもあって悩み中。

・聖祥組の中で空のことを一番知っているとこの自負があるらしい。

・最近、空をデートに誘おうと計画中。

フェイト・テストロッサ

・プロフィールは原作通り。なのは同様、空や精霊と修行してるおかげで原作よりも強い。

・スタンド：ブラック―マイナス

【破壊力―B／スピード―A／射程距離―E／持続力―C／精密動作性―A／成長性―D】

能力：電気を発生させて身体能力の強化や、相手を麻痺させることが出来る。

相手にやる場合は直接手で触れないとできない。

特徴：黒色メインの電気を纏った一角獣。(モンハンの

キリンがモデル)

・魔法少女リリカルなのはの原作キャラ。アリスアのクローン。

本来なら母親のプレシアと仲が悪いはずだったが、今作ではアリスアの話が聞かされてからは

険悪ではないものの気まずさがあった。

・空がアリシアを甦らせ、空の言葉によって家族との仲は良くなった。

空のファーストキスの相手。

その時から空を意識し始め、徐々に恋心が募っていった。

・空や精霊達のおかげで原作よりも明るい性格だが、人見知りはある。

・最近、ヤンデレというのを知ったらしい。

アリシア・テストアロッサ

・身長はフェイトと同じ。使う魔法もフェイトと全く同じだが、超電磁砲レールガンはアリシアだけ。

・デバイス：フォーチュンドロップ。愛称はフォーチュン。

待機状態は翡翠色のネックレス。戦闘時はバルディッシュと同じ。

バリアジャケットは innocent と同じ。

・スタンド：ホワイトプラス

【破壊力―E／スピード―A／射程距離―E／持続力―A／精密動作性―A／成長性―D】

能力：フェイトのスタンドと同様で、電気を発生させ身体能力の強化が可能。

直接機械類に触れば動かすことが出来る。

特徴：水色メインの電気を纏った一角獣。（モンハンのキリンがモデル）

・魔法少女リリカルなのはですでに死亡していたキャラ。元幽霊。

蘇らせてもらってから毎日元気に生活してる。

・空に好意を寄せ始めたのは一緒に生活し始めてからいつの間にかだった。

毎晩空の部屋に忍び込み、キスしてるかどうかは不明。

・最近、デバイスマスターの資格を取るために勉強してる。

八神 やがみ はやて

・プロフィールは原作通り。なのは達同様、原作よりも強い。

・スタンド：ナハトヴァール・セカンド

【破壊力―A／スピード―D／射程距離―B／持続力―

C／精密動作性―E／成長性―C】

能力：触れたものを石化する力。

特徴：ナハトヴァールの小型に近い姿。そこから名前も

付けた。

・魔法少女リリカルなのはでは孤独な車椅子少女。

・原作だと12月に闇の書が完成するが、今作では空達の協力があつて夏休み前半で終わった。

足は聖杯のおかげで夏休み明けには学校に通えることになっている。

・あかりが学校に行ってる間はプレシアやりニス、精霊達が世話をしていたおかげで

孤独な時間は全くなかった。

・空には一目惚れ。一緒にいるうちにその想いが強くなっていった。

・最近、ヴァーリとあかりの仲を応援してる。

月村 つきむら すずか

・プロフィールは原作通り。

・魔力光：青紫色

・魔力量：A A +

・デバイス：スノーホワイト。愛称無し。

待機状態は白い腕輪。戦闘時は槍（滅多に使わない）。  
バリアジャケットはinnocentと同じ。

- ・神器
- ・氷の創造手<sup>アイスメーカー</sup>

禁手——【??】

氷を操る神器。色んな武器を創って攻撃。魔力と合わせる攻撃も可能。

- ・スタンド：ニブルヘイム

【破壊力―C／スピード―B／射程距離―B／持続力―

A／精密動作性―B／成長性―B】

能力：冷気を操る力。気温を下げることも可能。

特徴：全身が氷でできた東洋風のドラゴン。

・原作では魔力を持たなかったが、今作では持つてる。  
 ・夜の一族という吸血鬼だが、人間の血が混じった吸血鬼であるため神器を持っていた。

・誘拐事件で空に助けられてから（すずかだけ）吊り橋効果で恋をした。

誘拐事件後に盟約を結んだ空との結婚は9割方本気で考えてる。

・最近、人外がたくさんいると知って、自分が吸血鬼であることを忘れかけてる。

ちなみに中の人は魔王少女と同じだったりする。

アリサ・バニングス

・プロフィールは原作通り。

・魔力光：赤色

・魔力量：B

・デバイス：フレイムアイズ。愛称無し。

待機状態は橙色の指輪。戦闘時は日本刀（滅多に使わない）。

バリアジャケットはinnocentと同じ。

- ・神器

・灼天の炎刃

禁手——【??】

炎を操る神器。燃え盛る日本刀の形をしてる。

体に炎を纏わせることができる。

・スタンド：Sソウル・Oオブ・Fファイヤー

【破壊力—C／スピード—B／射程距離—D／持続力—

A／精密動作性—B／成長性—B】

能力：熱を操る力。触れたものから水分を蒸発させるこ

ともできる。

特徴：体が炎でできた鳥。

・魔法少女リリカルなのはなのはの親友。今作でも同じ。

・原作では魔力は持っていなかったが、今作では持つてる。

魔力量は周りと比べると少ないものの、頭の良さを活かして無駄のない戦い方をする。

デバイスと神器を合わせた必殺の二刀流を考え中だとか……。

・誘拐事件で空に助けられてから、(すずか同様アリサだけ)吊り橋効果で恋に落ちた。

あの時のことは今でも忘れられないらしく、アリサにとって空は白馬に乗った王子様の存在。

・空の前で素直になれないことを直したいが、頭の中にピンク色の魔法使いや、

炎髪灼眼の少女、2丁拳銃を持ったツインテールの少女が止めてくる幻聴が聞こえるらしい。

・両親が勝手にだが空をアリサの婚約者にした。……本人はまんざらでもないようだが。

・最近、割と本気で聖祥の中学部を共学にしようかと考えてる。

結城 明日奈

・年齢：9歳

- ・身長：128cm
- ・体重：「フフフ」(目が笑ってない笑顔)
- ・魔力光：淡い水色
- ・魔力量：A
- ・容姿：本人だからそのまま。小さいころは閃光へアーをまだしてない。
- ・デバイス：(未定)

待機状態は赤色の腕輪。戦闘時は細剣型(滅多に使わない)。

バリアジャケットはSAOの血盟騎士団の制服。

(閃光へアーじゃないから微妙……?)

- ・神器：揺らめく閃光

禁手——【??】

細剣の形をした神器。

攻撃する瞬間に閃光のごとき力を得る。空達の中で一番速い攻撃ができる。

- ・スタンド：ソード・ヴァルキリー

【破壊力—A／スピード—A／射程距離—D／持続力—

A／精密動作性—C／成長性—A】

能力：実体のないものを切断する力。(ex. 空気、幽霊、魔力etc……)

特徴：剣を持った女性の騎士。(パズドラのヴァルキリーがモデル)

- ・ソードアート・オンラインに登場するキャラ。
- ・誘拐事件で空に助けられてから、(すずか達同様明日奈だけ)吊り橋効果で恋に落ちた。

……その前にフラグが建ってないでもない……?

- ・家族仲はかなり良好。多分、家出はしないと思う。
- ・アリサが空と婚約した話を聞いてちよつとどころか相当羨ましがってる模様。

両親は空のことを気に入ってるから、案外婚約するのは難しい話で

もないかも……？

・最近、将来のために花嫁修業を始めた。

ヴァーリ・ルシファー

・年齢：9歳

・身長：130cm

・体重：27kg

・魔力光：蒼白色

・魔力量：SS+

・容姿：本人だからそのまま

・神器

・白龍皇の光翼

禁手——デイベイン・デイベイディング・スケイルメイル白龍皇の鎧

白龍皇——アルビオンの魂が封じられた神器。神滅具の一つ。

「半滅」と「吸収」の力を持っている。

神格に対しては上手く能力が作用しない。

以前、空——桜木遥の体——に効いたのは、現在神格や力を

ほとんど失っているため。

・赤龍帝の籠手

禁手——【??】

誕生日に空からもらった神器。

本来なら白龍皇の力とは相反する力だが、ヤハウエの調整によつ

て問題ない。

ヴァーリは籠手を大剣の形状にして使う。

・スタンド：ルシフェル

【破壊力—なし／スピード—A／射程距離—E／持続力—A／精密動作性—A／成長性—A】

能力：能力を反転させる力。（ex. 「半滅」の力を「倍加」に変える）

特徴：黒い六枚の翼を生やした片翼の墮天使。（FFの

セフィロスがモデル)

自分が触れたものか自身にだけ能力が発動可能。  
ヴァーリがスタンドをしまうか、戦闘不能になる  
まで効果は続く。

・ハイスクールD×Dに登場するキャラ。

・空の一番の親友であり、ライバル。一緒にいることが多い。

・悪魔と人間のハーフ。旧・魔王「ルシファー」の曾孫。

捨てられたところをアザゼル——正確にはシエムハザ——に  
拾われてからは

人間界の海鳴市に住み、聖祥の小学部に通う。

・原作同様、才能に溢れてる。戦闘狂。空と同じく鈍感。

・(描写が少ない) 入学当時は少々不愛想なところもあつたが、空達  
の明るさに釣られて

いつの間にか原作よりも明るくなった。

家庭訪問で明るくなったことを聞いたアザゼルは大号泣したらし  
い。

・アザゼルと二人暮らしだが、アザゼルが多忙なので実質一人暮ら  
し。

カップ麺ばかり食ってることを知った空がヴァーリの弁当を作る  
ようになった。

(周りからヴァーリの嫁と言われるようになった)

朱乃達が一緒に暮らすことになったので、食事面はだいぶ改善され  
る予定。

・ 出番は未定だが、幾瀬鳶雄いくせとびおと関りがある。

・ 最近、空の作ったラーメンを食べることが至福の一時らしい。

精霊達：空の家族。

天照が空に寂しい思いをさせないために特典を少し変更し  
て創り出した存在。

空が完全に力を使うには空の体にはいないといけない。

空達の修行の相手になつてゐるが誰も歯が立たないほどチート。

……空が学校にゐる間に鍛えてるらしい。

ドライグ：二天龍の片割れ。空の持つ赤龍帝の籠手に宿る赤い龍。聖杯の力で体が出来てからは、空だけでなく他の人の体にも入ることが

可能となり、神器を使えるようになる。

琴里がドライグの神器を持てば、龍精霊化も可能だったりする。

大きさは子犬サイズのアルフと同じ。

アルビオン：二天龍の片割れ。空の持つ白龍皇の光翼に宿る白い龍。

ドライグ同様に体が出来てからは空以外にも入ることが可能になり、

神器を使うことが出来る。

大きさは子犬サイズのアルフと同じ。

ヤハウエ：空の持つ黄昏の聖槍に宿る聖書の神。

ドライグ達同様、体が出来た。しかし、本来の力は出せない模様。

空の持つ神器を管理・調整してる。

本来、「意志」ではなく「遺志」のはずだが、空の持つ聖槍にはヤハウエ本人が

宿っていた。

九喇嘛：尾獣の一体で九尾の魔獣。

半分に分かれてゐない完全な九喇嘛だから原作よりも強い。元々は正田輝義の特典だったが、彼に嫌気がさして気に入つ

た空の下に来た。

ドライグとの仲はかなり険悪だが、重要な時には協力する。

逆に空との仲は良好で自ら進んで力を貸したり、使い方を見せてくれる。

空に教えた忍術はナルトが使っていたもののみ。

空の体の外にいるときは子犬サイズのアルフと同じ大きさの狐になる。

ティアマツト：カオス・カルマ・ドラゴン「天魔の業龍」ティアマツト。

空の使い魔。

愛称はティア（空だけに呼ばせてる）。

五大龍王の一角で龍王最強と言われている。

空との勝負に負けてから（空を脅迫して）使い魔になつた。

空を気に入つたのは、空もとい遥が龍の神様だから惹き付けられた。

人間形態は蒼い長髪の美女。

たまに空の修行の相手をしてる。

シエラ：元防衛プログラムの一部。

容姿はリインフォースの眼が蒼くなっているバージョン。

ステラ星 + シエル空を合わせてシエラと名付けた。

夜天の魔導書の防衛プログラムの中でシステムの壊れた部分を取り離れた存在。

空のベッドに潜り込んだリインフォースを色んな意味で危険視してる。

空に助けられてからは空を新たな主としている。

ヴァーラ

・年齢：9歳

・身長：130cm

・体重：27kg

・魔力光：蒼銀色

・魔力量：SSS

・容姿：銀色と黒色が混じった髪が逆立ってる。眼は深い青色。（ゴジータがモデル）

・性格：元々戦闘狂のヴァーリと空が混ざったのでシグナムでもド

ン引きするぐらいに悪化。

鈍感さも悪化してる。

相手が年上でも敬語は使わない（ヴァーリ寄り）。

困っているなら手を差し伸べる程度には優しい（空寄り）。

基本的には常に冷静。……ただ、余裕があると調子に乗る。

・デバイス：ブレイブハート。

待機状態&戦闘時はネックレス。

バリアジャケットは袖無しの黒いパーカーに縦に赤い

ラインの入った

七分丈のゆつたりとした白いズボン、青いシューズ。

・スタンド：???

・<sup>スリパー</sup>超 天龍

赤龍帝の籠手+白龍皇の光翼を同時に禁<sup>バランス・ブレイク</sup>手化したモード。

相反する力をヤハウエが調整したおかげで一緒に使えることが出来た。

髪は金色に近い橙色。

両腕に緑色の宝玉が埋まった赤い腕輪、両足に踵部分に青く透き通った小さな羽根が

ついた白いシューズ。

<sup>スリパー</sup>超 天龍2や3もあるかも……？

・空とヴァーリがドラゴンボールを読んで、ノリでフュージョンしてみたなら、

奇跡的に成功してなんか生まれたちやっただ存在。

・使用する技はゴジータが使う技と同じ。

・リインフォースを圧倒するほどの実力を持つてる。

基になった二人の戦闘センスと戦闘力が高いので戦闘面では最強。

（フリーザ様ぐらいならワンパンだぜ！ ……多分）

・次に登場するのは……高校編か番外編あたりの予定。

## プロローグ

### プロローグ

目が覚めると、俺は見渡す限り真っ白な空間にいた。

あれ、どうして俺はこんなところにいるんだ？ さっきまで何してたんだっけ？ うーん思い出せない。それに名前も……誰かと何か大切な約束をしてたような……？ あれ？ 約束って何だっけ？ まあ、思い出せないなら大したことじゃないのかもしれない。

「それは私が説明しましょう」

今まで何をしてたか思い出そうとしたら後ろから急に声をかけられた。

声のした方に振り向けば、銀髪金眼のスタイルの良い美人さんがいた。

「美人ですか……。まあ否定はしませんけど」

……否定しないんだ。確かにそうだけど。ん？ 俺、今口に出てたか？

「いえ、私がああなたの心を読み取っているからですよ」

「はあ……最近の美人さんはそんなこともできるのか。スゲー」

「違います。それが出来るのは私が “神” だからです」

もしも本当に神だというのならそのくらい当然事なのだろう。

「へえー神なんですかーすごいですねー」

しかし、いかにも嘘くさいので棒読みで返した。

「……信じてないんですね」

こめかみに血管がビキビキと音を立てて浮き上がっていたことから、神様はかなり怒っているようだった。

「そりゃあ、急に言われても痛い人にしか見えませんかよ？」

「童貞で死んだくせに生意気ですね」

「ちよッ!? 何で知ってんの!? とうか、俺死んだの!? サラツと大事なこと言わないでよ!？」

慌てて自分の体を見たら、手が透けていた。神様の言う通り、俺は死んでしまつて今は幽霊みたいなものなのだろう。

「ああ、そう言えば言ってますね。……私のミスであなたは死んだのです」

伏し目がちに神様から伝えられたのは衝撃的事実だった。

「！……ハハハ、そっか。あーあ、まだやりたいこといっぱいあったのになあー」

「……責めないんですか？ あなたを殺した張本人ですよ？」

「だって、あなたを責めたって生き返る訳でもないですし、死ぬのは生物として当たり前ですよ」

「ツ！ ですが！ 本当にまだ生きられたんですよ!? 私はあなたの未来を奪ったんですよ!? そんな相手をあなたは許すんですか!? (どうしてあなたは……!-)」

本来なら俺が怒るべきはずなのに怒らない、そんな俺の代わりに神様が声を荒げる。

「それでもです。俺はあなたを責めないですよ。ホントはスゲー泣きたいけど……」

それだけじゃない。辛くて、苦しくて、悲しい思いでいっぱいだ。でも、弱音を吐きたくない。理由は一切わからないが吐きたくないのだ。

「なぜですか？」

「あなたが美人さんだから」

「……………は？」

あれ、固まった。そんなに変なこと言ったか？ 理由がないから適

当に言っただけなんだけど。

「そ、それだけですか？」

我に返った神様が確認するように聞いてきた。

「うーん、それだけじゃないけど八割はそうかも」

「……フフツ、あなたは面白い人ですね。神である私を口説くなんて。前代未聞ですよ。(やっぱり、この方は変わりませんね……)」

「え、今の口説いたことになるんですか？ そんなつもりじゃなかったんですけど……」

「あなたがそう思ってなくても相手はそう感じてしまうんですよ？」

気を付けないと大変なことになりますよ?」

「はい。気をつけまーす。……つてそんなことより俺、これからどうすんの!?!」

どうしてここにいるのか分かったけど、天国にでも行くならこんな場所に来させるはずないだろう。ましてや地獄というのも考えにくい。

「! そうでした! あなたには転生してもらいます!」

「ワンモアプリーズ」

思わず聞き返してしまった。

「あなたには転生してもらいます」

「……つまりもう一度人生を送れると?」

「そうなります。ただし、あなたがいた世界とは別の世界です」

「別世界……か。友達できるかな?」

ボッチは嫌だな……。

「心配するところですか?! 普通はどんな世界だとか聞きません!?!」

神様からすれば、俺の心配事が小さすぎたのかツッコまれてしまった。

「いやー、特には。行ってからのお楽しみつてことでいいじゃないですか」

「……わかりました。あなたがそう言うのであれば特には言いません。では、あなたの特典を決めましょうか。(あなたはホントに変わってますね……)」

特典? プレゼントつてことか?

「まあ大体そんな感じです。……あなたは神様転生とか二次創作とか知らないのですか? (記憶がそこまで消えていますか)」

再び心を読まれてしまった。プライバシーの侵害だ。神様に法律は適用されないだろうけど。

神様転生? 二次創作? なんだそれ? と首を傾げてたら何かため息つかれた。

「い、今時珍しいですね。そういったことを知らない人は」

「えつ、もしかして俺時代遅れ!? マジか! これってもしかして常識?」

「い、いえ、そこまでではないです。ただ大抵ここに来る人は皆知ってますよ」

「へえー他にも転生してる人いるんだ。じゃあ、俺がこれから行く世界にも転生した人がいるんですか?」

「はい。その人達も私のミスで死んでしまつて転生させたんです」

俺みたいなのが他のもいたのか。仲良くなれるかな? というかミス多くね?

「さあ、どうでしょうかね? 出来るんじゃないですか? ってそんなことはいいいです!」

早く特典を決めて下さい! あまりここには長くいられないんですから!」

「おつとく今更ながらの新真実が発覚したく!」

ここにずっといると転生できなくなつたりして。

「ふぎけないでください!」

「はい。ところで特典は何個もらえますか?」

「ホントは三個までですが、あなたのことが気に入ったので特別に五個にしてあげます。さあ、何でも言っちゃって下さい」

「なら、一つ目デート・ア・ライブの精霊の力全部」

確か、そんなラノベがあつた気がする。何故だか、思い出そうとする度に記憶が曖昧になりかけてる。

「いきなりチートですね。(その記憶は残ってるんですね……)」

「もしかしてダメでした?」

「だ、大丈夫です………多分」

その反応で不安になるんだけど……。

「二つ目はハイスクールD×Dの神セイクリッド・ギア器を創る力。

三つ目はワンピースの覇気三色。

四つ目は成長限界無し。

五つ目は家事スキルEX。以上です」

家事ができたかどうか思い出せないから入れてみた。多分必要。

きつと必要。将来的に必要。あっても損はないはずだ。

「かなりチート能力にしましたね。まあいいでしょう。それではあなたを転生させます。準備はいいですか？」

「あ、ちよつと待って下さい。最後に聞きたいんですけど……」

「？ 何ですか？」

「神様の名前教えてくれませんか？」

転生させてくれる恩人の名前を知らないはダメだと思い、尋ねてみた。

「（私のことは覚えてませんか……）いいですよ。私は——」

神様は誰も見惚れるような笑顔で教えてくれた。

——アマテラス天照です。それでは頑張ってください」

そこで俺の意識は途絶えた。

Side out

Side 天照

「彼はもう行ったのか？」

「ええ、行きました。それで、何か用ですか？ ——ゼウスさん」

私に話しかけてきたのはギリシヤ神話の主神——ゼウス。

ここは神が神話に関係なく他の神と会える場所の為、ゼウスさんがいてもおかしいことはない。

「彼に一言言いたかったのだが間に合わなかったみたいだな」

「言いたいことは何となく想像が付きますがね」

「ああ、なんせ彼は私達を救った英雄だからな」

そう、彼は私達神を、世界を救った。

自分の命と引き換えに。それに記憶や力も失ってしまった。

「その所為で彼の人生を台無しにしてしまいましたかね……」

私はどこか自嘲気味に言った。

理由は何であれ、私達が彼を殺したようなものだ。

特典を五個にしたのも口説かれたからではなく、彼に次の世界で長生きしてほしかったから。

まあ、美人って言われてちよつと嬉しかつたですけど……。

記憶は失つても相変わらぬの性格でしたね。

「彼の新たな人生が幸せになることを、私が世界中の神々を代表して言わせてもらおうとしよう。——我らが英雄に幸あらんことを」

言い終えたゼウスさんは私の傍からいなくなった。

「さてと、あとはあなた達です。……彼のことを頼みます」

私が創り出した少女達に彼のことを託して送り出す。

頑張ってください、——様。

そして、いつかまた会えることを私達は願っております。

無事転生しました！

無事転生しました！

神様に転生させてもらってから目が覚めると、知らない天井が目に入った。

ここどこだろう？ とりあえず、色々調べないと。

起き上がって周りを見渡すとそばにある机に高級そうな羊皮紙の紙が置かれていた。

あれ、机高くないか？ それに全体的に家具が大きい気がする……。この家はひよつとしてデカイ人でも住んでんかな？ まあいいや。先にこの紙から見ますか。えーと、何々？

『拝啓 転生した方へ』

この手紙を見ているということは無事に転生に成功したということですよ』

……え、失敗とかあんの？

『いえ、基本的にはないですよ』

ん？ 返事してる？ もしかして会話できるのかな？

『はい、少しだけですが。それより、この家が大きいと感じませんか？』

おお、便利機能だ！ で、大きく感じましたけど。この家は大きな人でも住んでるんですか？

『違います。あなたの体を5歳児にしたんです』

なるほどなるほど。……何故に？ ハッ！ まさかシヨタコン!?

『違います！ ……原作キャラと同じ年にしたほうが面し——都合がいいからです』

おい今面白いっていいかけてた。

『なんのことですか？』

白々しい。それで？ 原作キャラ？ つてことはもしかして漫画とかラノベの世界に俺はいるんですか？

『随分と頭が回るんですね。あなたの言う通りここはとあるアニメの

世界です』

へえー、ならここはどこの世界なんですか？

『ここは『魔法少女リリカルなのは』という世界です。正確には似たような世界なので本物との違いは多少あります』

魔法少女？ リリカルなのは？ うーん、どつかで聞いたような聞いてないような……。まあ、なんでもいっつか。先のことがかつてたつてつまらないだけだし。

『そうですか。では新しい人生頑張ってください。後のことは別の方が説明しますので』

はい、わかりました。転生させてくれてありがとうございます。

『ああ、それとあなたの名前ですが、龍神空たつがみそらという名前にしました。もし気に入らなければ好きに変えて下さい。それでは』

神様との会話が終わると突然紙が燃えて消えてしまった。

「龍神、空か。うん、良いかも！」

「そ、ならこれからのこと話すからよく聞いておきなさい」

「ほえ？ どな……」

俺は振り向いて声のした方を見ると、そこには予想外の人が、いや、複数の人がいて固まってしまった。

むむむ？ おかしくないか？

「む？ 固まってるが大丈夫か？」

「あ、あの大丈夫……ですか？」

『あらーよしのんも心配だよー』

夜色の髪を靡かせた高校生ぐらいの少女と、ウサギのパペットを左手につけた海色の髪をした中学生ぐらいの少女が心配そうにしていたが、驚きで頭が動かない。

「くく、きつと我の美貌に見惚れているに違いない」

「嘲笑。美貌（笑）。耶？ 矢にそんなものが備わっていたとは初耳です」

「なッ！ 無表情の夕弦よりはまだ可愛いし！」

「反論。夕弦の方が可愛いです。耶？ 矢はぶっちやけ下の上くらいです」

「な、なんじやとこらああああッ！」

今度は瓜二つの顔をした少女達が言い争いを始めた。体の一部に差があるのは言わない方が良いだろう。

「あらあら、相変わらず仲がよろしいことですわ」

黒い髪をツインテールに分けて、右眼が赤、左眼が反時計回りに動く時計になっていた。

「七罪ちゃん！ 私と仲良くしましょう！ さあさあ！」

「い、いや身の危険を感じるからパスで」

紫紺色の髪をした少女が緑色の髪をした少女に両手を広げていたが、見事に逃げられていた。

「ははは、皆元気だねえ。六喰ちゃんもそう思うよね？」

「むくには騒がしいのじゃ」

赤い縁取りの眼鏡をかけた銀髪の女性が隣にいた長い金髪を垂らしている少女に同意を求めたが、それは叶わなかったようだ。

「それは私も同感。特に夜刀神十香がいるのは気に食わない」

「それはこちらのセリフだ！ 鳶一折紙！」

肩に触れるか触れないかぐらいの白い髪の少女が名前を上げて、不満を垂らしていた。

「そろそろいいかしら？」

……ッ！ いきなり現れた人達にあっけにとられていたのからようやく立ち直った俺は

赤い髪を黒いリボンでツインテールにした少女——五河琴里に顔を向けた。

「はい、大丈夫ですが……あれはいいんですか？ 放置してて」

「いいのよ。いつものことだから」

いつものことって……。

「それで？ これからの事って何ですか？」

「あなたが原作に関わるかどうかってことよ」

原作かあ……はつきり言って興味はないんだよなあ……。でも、折角神様から貰った特典を使わないのも罰当たりな気がして何かやだなあ。

「なら、修行でもすればいいんじゃないかしら？ いざという時の為にもなるから」

「うくん、それが良いですかね。って考えてること読まないで下さいよッ!？」

「淑女の嗜みよ。気にしないでちようだい」

嗜みでそんなことが出来るのかよッ！

「んで、次は自己紹介しましょうか。知ってるとは思うけど一応ってことで」

「はい、そうですね。じゃあ俺からいきますね」

「ん、どうぞ。それとあなた達！ 今すぐ静かにしないと砲<sup>メギ</sup>放すわよッ！」

琴里さんの脅しに皆は素直に頷いてその場に座った。

琴里さんってこの中で一番怖いのかな？ そんなことを考えていたら琴里さんに睨まれた……。コエー……。

「じゃ、じゃあ自己紹介しますね。俺は龍神空って言います。よろしくお願いします」

「もうちよつとマシなの出来ないわけ？ 一発芸の一つや二つ出来ないよこの先生きていけないわよ?。」

ええッ!? ダメ出し!?

まさかの琴里さんにダメ出しをくらってしまった。いや、この人なら当たり前のことかもしれない。

「クツ、わかりました。それでは一発芸やります!。」

「おお? ソラは何か披露するのか?。」

「ええ、皆期待してなさい」

ちよッ! ハードル上げないで下さいよッ!

「くく、我に見せるがいい。御主の奥義を」

奥義って何さ……。ええい、とりあえずやろう! しかし何をしたら……。ハッ! あれなら!

「それではやります! ……ハニエ<sup>ハニエ</sup>魔女<sup>エル</sup>」

俺が贗造魔女と小声で呟き、とある人物をイメージしながら指をパチンと鳴らすと煙に包まれた。

「ジャーン！ 五河士道さんに変身してみました！」

『……………』

あ、あれー？ 反応がないなーこれはスベツた？

「なあ、ソラ。士道とは誰のことだ？ 私は知らんぞそんな奴」

……………は？

「え？ え？ どうして？ 五河士道だよ？ 皆を助けた『デート・

ア・ライブ』の主人公でしょ？ 知らないなんておかしくない？」

……………どういうこと？ 他の皆も知らないって顔してるし。

「あー……………そっか、そういうことね」

「琴里さん、何か知ってるんですか？」

「簡単に言う顔、声、姿、性格、能力、その他諸々は基本的に原作の私達と変わらない。けど、私達は別の存在って事になるかしら。というか、そもそもあなたの特典でここにいるわけだし、そうなくてもおかしくないと思うわ。わかったかしら？」

つまり、原作に登場する本物の精霊達ではないってことか。となると当然、五河士道を知らないことは何もおかしくない。

「並行世界の存在だとも思えばいいのかな？」

「そうね、それが妥当かしら。じゃあそろそろ私達の方も自己紹介しましょうか。知ってるだろうけど一応ね。私は五河琴里、よろしく。それと敬語はいらさないから」

「私は夜刀神十香だ！ よろしく頼む！」

「鶯一折紙。よろしくあなた」

「折紙！ 貴様は変なことを抜かすでない！」

ん？ あなたって俺？

「よ、四糸乃って……………言います。よろしく願います……………ッ！」

『よしのんはよしのんだよー。よろしくねー』

「時崎狂三ですわ。仲良くしてくださいまし」

「我が名は八舞耶？ 矢！ 貴様を我が眷属にしてやろう！」

「紹介。八舞夕弦と申します。よろしく願います」

「あなたのアイドル、誘宵美九ですう！ よろしく願います、だーりんー！」

はい？ だーりん？

「……七罪。よろしく。別に覚えなくてもいいから。どうせ私なんて――」

おやー？ 勝手にブツブツ言い始めたぞー。

「あたしは本条二亜。漫画家やつてるよ。よろしくー」

「むくは星宮六喰っていうのじゃ。よろしくなのじゃ」

「う、うん、何人が突っ込みどころたくさん自己紹介だったけど、これからよろしく！ ……ねえ今更なこと聞いていい？」

「何かしら？」

「何で精霊のみんながいるの？」

俺が頼んだ特典は力であって精霊達ではないはずだ。だから、ここにこの人達がいるのはおかしいのだ。

「ホントに今更ね。 ……まあ、あれよ。神様の気まぐれって奴よ。気にしなくていいわ」

琴里にそう説明されてそれ以上は気にしないことにした。一人であるよりは全然マシだから。

「ふーん……ん？ じゃあ俺はこれから皆と暮らすの？」

「ええ、そうよ。何か問題でもある？」

「お金って足りるかなーって」

「大丈夫よこれを見なさい」

そう言っって琴里から渡されたのは通帳だった。中を見ると……やべーなこの額。

「わかったでしょ。一生遊んでも余裕のある額よ。心配しないでちようだい」

「う、うん」

頷くとどこからか腹の鳴る音がした。

「むう、お腹が空いたぞ。そろそろ昼餉の時間にしないか？」

確かにそうだね。俺もお腹が空いてきたからご飯が食べたいな。

「でも、まずは材料買いに行かないと」

「なら、皆で行きましょうか。ついでに日用品も買えたら買いましよう」

琴里の提案に皆頷き、買い物に出かけた。

買い物を終え、ある程度日用品も買えたのでご飯の時間。

もちろん家事スキルを貰った俺が率先して作って皆に食べてもらった。転生して初めての料理を美味しいと言ってもらえてすごく嬉しかった。

それからこのバカでかい家の探索や部屋割りをして修行は明日からということになり、

晩御飯を食べて新しい人生の一日目を終えた。

何だか、転生していきなり大所帯になったけど、一人じゃなくてよかった。

友達出来ました！

友達出来ました！

Side空

俺——龍神空が転生してから、数週間が経った。その間にしたことと言えば修行だ。というかそれぐらいしかやることがない。

ほぼ毎日琴里達に修行を付けてもらって何度も死にかけたんだけどね！

でも、そのおかげか精霊の力を限定霊装で引き出すことが出来る様になり、ロンギヌス神滅具である神セイクリッド・ギア器の赤龍帝の籠手や白龍皇の光翼セライロト・グラール、幽世の聖杯を創ることが出来た。

え？ どこで修行したのかだって？ それは家の地下なんです、これが。

前に言ったけど龍神家はかなりの大豪邸だ。部屋もまだまだ余裕があるくらいに。具体的に言うと、ハイスクールD×Dの兵藤家よりも大きかったです。ハイ。

まあ、龍神家の大きさ云々はさておき。話を戻すと赤龍帝の籠手と白龍皇の光翼を禁バランス・ブレイカー手に至らせようとしているが、中々上手くいかず、あと一步というところで止まっていた。

使い始めて間もないのに出来るわけもないのだが、やはり使えるようにはなりたい。

うーん、どうしたらいいかな？ どっかの戦闘民族みたいに死にかければ至れるのか？

でも、それじゃあいつもと変わらないしな。琴里に相談してみるか。

「あのさ、どうやってたら禁手出来る様になるかな？ あともうちよ行ってところなんだよね」

琴里はしばらく考えた後、

「焦る必要はないわ。今は体力や基礎をしつかりやりなさい。でないと、禁手したときにもたないわよ。それに霊装のことも考えて、体力はかなり必要よ」

と教えてくれた。

無茶して体壊したら元も子もないないか。

「それもそっか。ありがとう」

「これぐらい別にいいわよ。その……一応家族、なんだし」

「うん！ そうだね！」

琴里は少し恥ずかしそう言ってから顔を背けた。

「あ、それともう一つ良いかな？」

「何かしら？」

「最近噂の翠屋っていうお店に行ってみたいなって思ってた。今から皆で行って見ない？」

「(翠屋といえば、原作キャラの両親がやっているお店じゃない。でもこれはこれで何か面白いことがあるかも……) いいわ。皆で行きましょう」

「という訳で、翠屋にやってきました！」

「誰に言ってるのだ？」

『修行の疲れでもたまってるんじゃないのー？』

「だ、大丈夫……ですか？」

「大丈夫だよ？ 確かに少し疲れてるけど、それ以外は何ともないから。でも心配してくれてありがとう、四糸乃」

そう言っただけ俺は四糸乃の頭を撫でた。四糸乃の方がまだ身長が高いから精一杯手と足を延ばして何とか届いた。

……何かカツコ悪い。

「……そ、そうですか」

ん？ 何で顔が赤いんだ？ 熱でもあんのかな？ まあ聞いてみたら何ともないって言われたから大丈夫か。……ところで何で皆して睨むのさ！ 俺なんかした？

「何で不機嫌そうなの？」

「だーりんは女心を学んだ方がいいですよ」

と、言われましてもどうしろと!？」

他にも鈍感だとか、朴念仁だとか色々言われた。

もうやめてッ！ 俺のライフはゼロだからッ！

しばらくして琴里が皆を止めてくれたので助かった。

「ハイハイ、いいから中に入りましよ」

翠屋に入ると、イケメンのお兄さんがやって来た。

「六名様でよろしいですか？」

その言葉に琴里が「はい」と返事をして奥のテーブルに案内された。周りのお客が皆を見て驚いていた。

そりゃあ美少女集団だからね。皆の目がいつちやうよ。何か俺だけ普通だからやだなあ。

ちなみに六名というのは俺、十香、琴里、四糸乃（よしのん）、美九、七罪のメンバーで、他の精霊たちはというと、折紙が買物、八舞姉妹は勝負をすると言って審判に六喰を連れていき、二亜は面白そうとか言っけて付いていってためここにはいない。

で、狂三はというと――

『中々オシャレなお店ですわね』

そう、俺の中ちゆうにちゆういるのである。

これは修行中にわかったことなんだけど、どうやら精霊が俺と一体化していないと力が封印されている状態と同じらしく、俺はほとんど力を使うことが出来ない。でも、ある程度の簡単な能力は使うことが出来る。

基本的には精霊が中にいなくても神器があるので平気ではあるんだけど、何故か狂三はよく俺の中ちゆうにいる。本人曰く、居心地がいいとか。よくわからん。

と、無駄話はこのくらいにして人気のシュークリームでも頼みますかね。

注文したシュークリームを食べて俺たちは帰ることにした。

シュークリームは大変美味でした。

家事スキルEXの特典貰ったけど、あの味出せるかな？ 今度作っ

てみよつと。

後日、挑戦してみたが俺には作ることが不可能だったことは別の話。

翠屋からの帰り道で、公園を過ぎよつとしたら俺と同一年ぐらいの金髪の少年と赤髪の少年が公園の中でケンカしていた。

あと、栗毛のツイントールの女の子が二人を見て怯えていた。

これはどうしたものか……。

なんて考えていたら後ろから声を掛けられた。

「あの女を助けたいのか？ ならば行くべきだと私は思うぞ、ソラ」

「私達は先に帰るけど、あんまし遅くなるんじゃないわよ。（あの二人は転生者っぽいけど、今の空でも問題ないわね）」

『わたくしもいますし、大丈夫ですわ』

狂三がいるのでこちらは安心だ。

「うん、出来るだけ早く帰るね」

そこで琴里達とはお別れして、俺は公園内に入った。

S i d e o u t

S i d e なのは

私——高町なのはは公園で一人でいるの。

一人でいる理由は、お父さんが事故で大けがをして入院して、お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃんは最近始めた「翠屋」という喫茶店のお仕事で大忙しなの。

だから、皆に迷惑を掛けないように「いい子」でいないといけないと思つて一人で公園にいたら、いきなり知らない男の子に話しかけられた。私は俯いていたから顔はわからないの。

「よう、なのは俺と遊ぼうぜ！」

顔をあげると、金色の髪で右と左で目の色が違う男の子がいたけど少し怖かったの……。

「ど、どうして私の名前を知ってるの？」

「それは、お前が俺の嫁だからだ」

意味わからないことを笑いながら言って来た。嫁の意味がわからないわけじゃないけど。正直言って男の子の笑顔は気持ち悪かった。私が嫁なんかじゃないって言っても、照れるなよって言ってきて嫌だった。

勝手に頭を撫でようとしてきて余計に怖くなった。私は男の子と目を合わせたくなくて俯いていると、

「おい、お前！　なのはが怖がつてるだろ！　離れろ！」

また、知らない子が来たの。

なんでこの男の子も私の名前を知ってるの？

そしたら金色の髪の毛の男の子が怒ったのか、モブとか俺の嫁とか言いながらケンカを始めちゃった。私は怖くてどうすることも出来なくて、ただケンカを見ているしかできなかつた。

誰か助けて……。

「あらまーすごいね。子供のケンカって」

にや!?!　いつの間にか知らない黒髪の男の子が隣にいたの!?!

Side out

Side 空

俺は二人がケンカしていて俺に気付いてないみたいなので、女の子の隣に立ってケンカを見てた。

「あらまーすごいね。子供のケンカって」

呑気に呟いたのが聞こえたのか、ブランコに座っていた女の子が驚いていた。俺がいたことに今気が付いたらしい。決して俺の存在が薄いわけじゃないと思いたい。

「と、止めないの?」

「巻き込まれると思うからパスで。というか、君が困ってそうだったから助けに来たんだ」

「ふえ?　助けてくれるの?」

まさか助けに来るとは思ってもみなかったのか、随分と呆けた顔をしていた。

「まあね。んじゃここから出よっか」

そう言っただけは女の子の手を引いて公園を出た。もちろん、二人には気づかれないようにこっそりと。

公園を出てしばらくしてすると、とくに目指す当てもなく歩いていった。

うーん、自己紹介でもすつか。

「さっきは急にごめんね。俺は龍神空って言うんだ。空って呼んでね。もし良かったら君の名前を覚えてくれない？」

「ううん。助けてくれてありがとうなの。私は高町なのは。なら私もなのはって呼んでほしいの」

「うん、なのは。よろしくね」

ん？ なのは？ それってどつかで聞いたような……ま、いつか。つい最近聞いたような気がしたが気のせいかと思っただけ以上は考えないようにした。

「ところでなんであんなことになったの？」

俺が聞くと、なのはは嫌なことを思い出したのか怯えながら話してくれた。

「う、うん実はさっきね——」

なのはの話をもとめると、

公園に一人でいたら知らない金髪が話しかけてきてキモかった。

また知らない子が来て金髪とケンカをし始めた。

どうしようか困ってたら俺が来て助けてくれた。

「要するにあれだよ。君が可愛いから仲良くなりたかったんじゃない？」

モテるのも辛いんだねえ。

「にや!? か、可愛いってそんな……」

「えー、俺だったら仲良くなりたいたいと思うけどなー?」

なのはは将来すごくモテそうな気がする。

『(……これは皆さんに報告いたしませんと)』

「で、でも金色の男の子は俺の嫁とか言ってたの」

「いや、法律上無理でしょ。普通に考えて……」

あー、5歳児だから解る訳ないか……。いや、しんのすけだって知ってると思うぞ。

「君は何で一人でいたの? 友達いないの?」

「友達いないって普通ズバズバ聞かないからね!」

まあ、俺もこの世界には居ないんだけど……。

「……実はね——」

またまとめると、

お父さんが大怪我で入院。

← お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんが最近お仕事で大忙し。

← 皆に迷惑かけないために良い子でいないといけないから一人でいた。

「ふうん、なるほどね。でも、君は寂しくないの? ホントは一緒にいたいんじゃないの?」

この歳で寂しくないなんてことはないですよ。俺だって十香達いなくて一人だったら今頃寂しい思いしてるだろうし。

「そ、それはそうだけど……」

「なら甘えなよ。君はまだ子供でしょ? 甘えて何が悪いのさ」

どうしたもんかね? とりあえず、なのはの家族のところに行くか。

「ねえ、今から君の家族のところに行こうよ。そんでもって君の気持ち伝えてみよ?」

なのははしばらく迷ったけど、小さく頷いて俺を案内してくれた。

「ここって……」

なのは案内で着いた場所は――

「翠屋ってお店だよ。行ったことある？」

「うん、さつき来た」

まさかのここか！

『運命を感じますわね（知ってましたけど）』

（そうだね）よし！ 行きますか！

「ふええええ!? ま、待つてなの!?!」

なのは何か言っただけど、残念ながら答えは聞いてないよ！

再び手を引いて、俺達は中に入った。

店の中に入ると、もう今日は閉店の準備をしているのか店員さんしかいなかった。

「あの今日はもう終わりなのでっすなの！ どうしてここに!?!」

「お姉ちゃん……」

眼鏡のお姉さんが俺の隣の少女を見て驚いていた。

「どうしたんだ？ 美由希何かあ――！ なのは!」

「お兄ちゃん……」

あ、さつきの店員さんだ。この子の家族だったのか。よく顔を見れば確かに兄妹だとわかるくらいには似てる。

「どうしてここにいるんだ？」

「そ、それは、その、なんていうか……」

なのはが俺の方に向いて来た。助けを求めるような視線だった。

え、代わりに答えろっすこと？ ……まあいいけど。

「えっと代わりに説明しますとね、この子が困っていたので助けたいんです」

俺はさつき在ったことを説明した。

「……そうか。君はさつき来てくれた男の子だったな。俺は兄の高町恭也だ。なのはを助けてくれてありがとう。……だが、なのはと手を

繋いでいるのは何故だ?」

お? 急に殺気を出してきたぞ。十香達ほどじゃないから大して怖くないけど。

それにしても、誰かと手を繋ぐのって前世であったかな? だんだん前世の記憶が薄れていつてるからわかんなくなってるんだよね。というか思い出そうとするたびに消えてく感じがするんだよね。

「流れ? ですかね?」

そう言っつて俺は手を離そうとしたけど、なのはが離してくれなかった。

「……ねえ、離してくれない? 君のお兄さんが睨んできてるから」

「誰がお前のお兄さんだッ! なのははやらんぞッ!」

「誰もそんなこと言っつてませんよね!」

「何だ?!? なのはに魅力が無いっつて言いたのか!」

「じゃあなんて言えばいいのさ!」

思わず敬語じゃなくなっただけど仕方ないよね!

「すまん。ただの冗談だ。だが、後悔も反省もしてない」

この人マジ何なん? 何が言いたいの? 誰か助けて〜!

『面白い方ですわね』

見てる分にはね。

「もうさつきからうるさいわよ。早く片づけしちやいなさいっつて、あら? なのははどうしたの? 隣の男の子は誰かしら? あ、もしかしてボーイフレンド?」

なのは似のお姉さんが厨房からやって来た。

あ、自己紹介してなかった。

「初めまして、龍神空っつて言います。俺が妹さんを助けて連れてきたんです。あと、ボーイフレンド(?)とかではないです」

「そうだったの。ありがとね空君。娘を助けてくれて」

……………ん? ムスメ?

「娘っつてこの子が?」

俺はなのはを見ながら聞いた。

「ええ、そうよ。その子は私の娘よ。あ、私はこの子たちの母親の桃子

よ」

若ッ!! え、この人母親なの!? 一番上っぽい恭也さんが高校生くらいだから少なくとも四十手前のはずなのにこの若さでいるってすごッ!?

『この方、ホントに人間ですか? 実は精霊でした、なんて言われても驚きませんわ』

俺と狂三が驚いていると、今度は眼鏡のお姉さんが自己紹介してきた。

「こんにちは、空君。私はなのはの姉の美由紀っていうの。よろしくね」

「はい、よろしくお願ひします。それとなのは、言いたいことあるんでしょ?」

なのはとつないでいる手が少し強く握られた。

「うん……あのね皆に聞いて欲しいことがあるの……」

そう言ってからなのははじぶんが寂しかったことや悲しかったこと、辛かったことを全部吐き出した。それを聞いていて途中から桃子さんと美由希さんは謝りながら涙を流し、恭也さんは悔しそうに拳を握りしめ静かに涙を流していた。

「良かったね、なのは。気持ち伝わって」

「うん! 全部空君のおかげなの!」

なのはは先程とは違って可愛らしい笑顔をしてくれた。

「全部じゃないよ。俺は君の背中を押しただけだよ」

自分の気持ちを伝えられたんだから十分。花丸あげちゃいます。

「それでもなの! 本当にありがとうなの!」

そこまで言われるとなちよつと照れるなあ。まあ悪い気はしないからいいか。

「うん、どういたしまして」

「私達からお礼を言わせてもらうわ。本当にありがとね、空君。今度お礼をしたいのだけれど良いかしら?」

「お礼なんていいですよ。ただなのはを放っておけなかつただけですから」

「それでも——」

「それに、“友達”を助けるのに理由は要らないですから」

「……そう、わかったわ。でも、お礼はきちんとさせてもらおうわね」  
そこまで言われると流石に断りづらいなあ。

「わかりました。それじゃあこれで失礼します。そろそろご飯の時間なんで」

「え、もう行っちゃうの……?」

「そんな悲しい顔しないの。俺達はもう友達なんだから二度と会えないわけでもないでしょ? それに翠屋のシユークリーム美味しいから来ないわけがないよ」

「……で、でも、もう少しぐらい……」

グツ! 泣きそうな顔はズルくない? だが、俺は負けない!

「これ以上はちよつと……」

「……グスン……わかったの……」

え、ちよ、泣かないですよ! 桃子さん助けて!

「なら、家でご飯食べない? それならなのはもいいでしょ?」

桃子さんに助けを求めたが何を勘違いしたのか俺の考えとは別のことと言った。

何ですか!?! 助けてくれないんですか!?! 俺の意見は無視なんですか!?!

おかげでなのは嬉しそうな顔してるし。

桃子さんが断ったらどうなるかわかってるわよね? って感じの視線を向けてきて、背筋に寒気が……。

あれー? 何度も死にかけたのにそれすら凌駕するのは気のせいだよな?

「はあ、わかりましたよ。今晚お邪魔しますね」

結局、俺は折れた。

『押しに弱いですわね』

「(……だって怖いんだもん! これは仕方がないと思うんだ!)」

「やったー!」

なのはは嬉しそうにその場で飛び跳ねていた。

こうして俺は高町家に行くことになった。  
そして、高町なのはというこの世界で初めての友達が出来た。

高町家で晩御飯を食べた俺はなのはに誘われて好きな物や嫌いな物、趣味、特技、e t c……。翠屋の他には道場をやってるそうなの。高町家の皆と色んなことを話した。そしたら、いつの間にか8時を過ぎていた。

ヤベツ！ 遅くなりすぎた！ 皆に怒られる！

俺は慌てて帰ろうとしたが、なのはによってそれは阻まれた。

「……えつと帰りたいので手を離してもらえると嬉しいのですが……」

「いやなの……」

どうしたなのは！ 我が儘言うんじゃありません！ ……俺が子供だから甘えろーなんて言ったせい？ バツカじやないの過去の俺！

「も、桃子さん」

「あら、もう時間も遅いし泊まっていったらどう？ お家には私から言っておくから」

「いきなり知り合った人にそれはどうかと思いますけど？」

「私は空君を信用してるから言ってるのよ。それに子供が何言ってるの？」

イケない！ このままではさつきと同じになってしまう！

「……空君は私のことが嫌いなのか？」

ウグツ！ そ、そんな悲しそうな顔してもダメだからな！

そう思ってた時期が僕にもありました。

はい、ただいまなのはと一緒にベッドで横になっております。

テレビで言ってたけど女の涙は武器。わかっているも防げないチートだった。

『はあ、結局折れてしまうとは情けない限りですわ、空さん』

「(仕方ないでしょ！　なのはが泣きそうだったんだから！　俺にどうしろと!?)」

「空君……手、つなぐ?」

「え、う、うん、いいよ。おやすみなのは」

「おやすみなさい……」

こうして俺達は二人仲良く手を繋いで寝ましたとき。

そう言えば、なのはって名前どつかで——あ、リリカルなのは。え?　ってことはこの子が魔法少女になんの?　マジで?

と、ようやく割と肝心なことを思い出したが、俺にも睡魔がやってきてすぐに寝てしまった。

翌朝家に戻ると、玄関に般若十香達若がいた。

普段は大人しいあの四糸乃でさえ少し不機嫌そうな顔をしていた。

あれー?　何故に怒ってらっしやる?

「昨日は随分とお楽しみだったみたいね」

「え?　ま、まあそうかな」

あれ、何で知ってるの?

「女の子と寝たんだったー?　聞いたよー。少年も中々やるねー」

「な、何でそれを!?　って狂三か!」

「あらあら空さんが悪いんですのよ。わたくしは何度も止めたというのに」

「止めてないよね!?!」

俺の体から出てきた狂三は大げさなりアクションを取りながら俺のせいだと言った。

「とりあえず……歯を食いしばれ」

ひッ!?　こ、これはやばい!!　普通に死ぬる!!

「逃がしませんわ」

逃げようとしたら狂三の能力で影から大量の手が出てきて逃げら

れなくなった。

その間にも皆は近づいていた。

「は、話せばわかるよ皆。ね？」

「……問答無用。皆全力で構わないわ」

その日、一人の少年の叫び声が海鳴市に響いたとかなんとかで噂になった。

迷子になりました！

迷子になりました！

Side空

なのはと友達になってからしばらくした頃、十香達が高町家と仲良くなった。

そして、なのはのお父さん——士郎さんが目覚めた、というのをなのはから聞いたので退院祝いにケーキを作ってプレゼントした。

「お味はどうです？」

「……これはホントに君が作ったのかい？」

「え、はい。そうですけど」

「君ぐらいの歳でこれほどとはすごいとしか言いようがないよ」

「ありがとうございます！」

見たか！ これぞ、家事スキルEXの力！

「あら、ホントに美味しいわね」

「お母さんと同じくらい美味しいの！」

それはいくらなんでも言い過ぎでしょ……。

何回やってもあのシュークリームは作れなかった。それは桃子さんの腕が俺では及ばない高みにあるのだ。どうしてそんなに美味しいのが作れるのか聞いたら、遠月学園とかいう卒業がものすごく厳しいらしい学校を主席で出たとかなんとか。

「ああ、確かにすごく美味しいな」

「美味しい……美味しいけども！ 女の子として負けた気分だよ……」

あー、そう言えば美由希さんは料理が下手っていうレベルでは言い表せないほどひどい腕なんだよね。一回食べたけど、ホントに死ぬかと思った。あれは料理じゃなくてもはや兵器だと思うんだ……。まあ、そんなことはさておき皆に満足してもらえてよかった！

「空君、今、失礼なこと考えなかった？」

美由希さんからジト目で睨まれる。

「え!?! ま、まさかー美由希さんの料理が兵器だなんてこればっちも

考えてないですよー！」

あ、つい言ってしまった。

「やっぱり考えてんじゃん!? うわーん! 恭ちゃん慰めてー!」

「断る。事実だから仕方がないだろ」

「グハツ!」

あ、美由希さんが精神的にダメージ受けて倒れた。

「ねえ、空君。家で働いてみない?」

「え、俺まだ5歳ですよ? まともには出来るとは思わないんですが……」

美由希さんは無視ですか……。

誰も美由希さんを慰めようとしない。皆もフォローに困る内容だからだろう。

「大丈夫よ、あなたはかなりしつかりしてるから。士郎さんもそう思いますよね?」

「ああ、僕も同じだよ。もちろん君さえ良ければ、だけどね?」

ふむふむ、バイトみたいに考えればいいのか。

でも、5歳児が働くっていいのか? 法律に触れませんか? ……

そういうの考えても仕方がないか。

「じゃあ、家族と相談してから考えますね」

「それで構わないよ」

そして、俺はそのまま帰ろうとしたら誰かに腕を掴まれた。見なくてもわかるけど視線を掴んだ方に向けてみると——案の定、犯人はなのはだった。

「えーと、帰りたいのでその手を放してくれると嬉しいんだけど」

「お昼一緒に食べようよ」

またか……。

「桃子さん……」

桃子さんに助けを求めたが、

「ええ、わかってるわ。すぐに用意するわね」

え!? 違いますよ!? 助けて下さいよ!?

俺の意思を完全に無視してお昼を作り始めた。

はあ……実を言うとこれは今日に始まったことではないんだよね。  
なのはと仲良くなってから、よくなのはの家や翠屋に行くことが多  
くなって、そのままご飯と一緒に食べるという流れに何故かいつも  
なってしまうのである。

しかも、休みの日には泊めようとしてくるし……。断ろうとすれ  
ば、なのはは泣きそうだし、恭也さんは睨んでくるし、桃子さんに助  
けを求めているはずなのに、了承したと勘違いされるし……。もう何  
のさ!? しかもそのことを皆が知ると修行が辛くなるんだからね!?

『最終的には空が折れるがの』

ウグツ! ……事実だから言い返せない。でも、仕方ないと思う!

「(あ、あのー六喰。このこと皆には……)」

『安心するのじゃ——』

まさか伝えないでおいでくれるの!?

『皆にばっちし伝えたからの』

一つも安心できないんですけどツ!?

俺の夢い願いは六喰の幻想殺<sup>裏切</sup>りによって粉々に崩れ去った。

その後、ご飯を食べて帰った俺は十香達によって完膚なきまでに叩  
きのめされたのだった。

士郎さんが退院してから数日後のことだ。目が覚めると知らない  
場所にいた。

「……………どこ? さつきまで修行してたはずんだけど……」

トレーニングルームで修行していたのは確かだ。

『少年の力と十香ちゃんの力がぶつかり合った衝撃で空間に裂け目が  
出来たんだ。それに少年は巻き込まれてここにいるんだよ』

二亜に言われて何があつたのかを思い出す。

「そっか。でき、二亜。俺の中から出てこのこと調べてくれない?」

『りよーかーい』

二亜が返事をする俺の胸あたりから光の粒子が溢れて人の形に  
なり、一人の女性が現れた。

「二亜ちゃんただいま参上！」

すでに霊装を纏った状態の二亜がすぐに本型の天使——  
囁告<sup>ラッセル</sup>篇帙を出して調べてくれた。

囁告篇帙の能力は『超々高性能検索エンジン』。要するに、この本にはなんでも書かれているのだ。ここがどこだかわからないはずがない。

「終わったよー、少年」

「相変わらず早くて便利だね。その力」

調べる過ぎると色々嫌な部分も見えてくるが。

「お、何々？ もっと褒めくれちゃっていいよー」

「はい、とてもすごいですね。で、ここはどこなの？」

適当に流しつつ再び質問した。

「少年ヒドー。もうちよつとは構ってよー。……まあいいや。ここは『時の庭園』って言われる場所だね。（また原作キャラがいるところじゃん……）」

「人は住んでるの？」

「……え？ あ、ああ、うん。ここには人は住んでるよ」

？ どうしたんだ？ 二亜らしくない反応……。何かマズイ場所なのかな？

「とりあえず、人がいるところ案内——」

「あなた達は誰ですか？」

「……知らないみたい」

「そうみたいだね……（早速遭遇かー）」

目の前に猫耳生やした女性と犬耳生やした女の子と金髪の女の子が現れた。

金髪の女の子だけは黄色の刃の鎌を所持していた。

「俺の名前は空です。で、こっちは俺のお姉ちゃん。二亜って言います」

「よろしくー」

「ここには何しに来たんですか？」

「修行してたらいつの間にかここにいたんです」

「そうですか……。 (ウソをついているようには見えませんね)」

「ところで出来ればそちらの名前を教えてくださいんですけど……」

「申し遅れました。私はリニスと言います。それと敬語は要りません」

猫耳お姉さんはリニス。礼儀正しい人だね。

「フェ、フェイト・テストロツサ……です」

金髪の女の子はフェイト。歳は俺と同じくらいで……人見知りかな？

「……あたしはフェイトの使い魔のアルフだよ」

犬耳の女の子はアルフ。少し怪しまれてるかな。

三人の中で一番警戒しているのが鋭い視線から窺えた。

「へねえ、この後どうしたらいいかな？」

俺は二亜に最近覚えた念話を使って聞いてみた。これは霊力を使って行われる念話らしい。

「へーん、取りあえず……ご飯でももらおうか」

「へよしわかった。……つておい！ 何でご飯!？」

「へいやー修行で疲れちゃってさあー」

そう言われると、俺も何だかお腹が空いて来た気がする……。でも二亜って俺の中にいただけだよ？ 疲れるのかな？

俺が二亜の力を使えば、二亜も体力や霊力が減るかどうかはわからないけど、俺も休みたいと思いはじめてきた。

「悪いんだけど、休めるところないかな？ 修行で疲れちゃって、アハハ」

「そうですか……わかりました。付いて来て下さい」

意外と簡単に許可が出ちゃった……。

少し驚きながらもリニス達に付いて行った。

「ここで少し待っていて下さい。すぐにご飯を用意しますね」

リニスの案内で大きな城のような場所に入って食堂？らしき場所

で待機させられた。

「ご飯まで暇だなー。フェイトとアルフと話してみよっかな。」

「ねえねえ、フェイトは何歳なの?」

「え、ご、5歳だよ……」

「そっか。じゃあ俺と同じ年だね」

『……………』

俺とフェイトの間に長い沈黙が続く。

……………ハイ、会話

が続きません!

「お見合いかッ!」

沈黙が嫌だったのか、二亜が思いつきり机を叩いて叫んだ。言い分は最もだけ俺も好きで沈黙してるんじゃない。話のネタがない。

「ど、どうしたの? 二亜」

「どうしたのじゃないよ!! イベント発生してんだよ!! フラグ建てないでどうすんの!?!」

は? イベントってギャルゲーかよ……。しかも何でフラグ建てなきゃいけないの。

「何言ってるの? ほら、二亜のせいで二人が固まってるよ」

「少年は何もわかつちやいない!」

「何をさ……」

「今君の前にいるのは誰だい!?!」

「フェイトとアルフだけど、それがどうかしたの?」

ホントにどうしたんだろ? いつもとテンションが違うぞって思ったけど大抵こんな感じだったね。

二亜は俺の回答が気に食わなかったのか余計にヒートアップした。

「美少女がいるんだぞッ!? なら、キザっぽいセリフの一つや二つ言えやッ!! それでもフラグメーカーの称号を持つ男かッ!! この軟弱者がッ!!」

「俺がいつそんな称号貰った!? 全然嬉しくないよ!?!」

「ええい! やかましい! とつとつ口説いてしまえ! そして後で皆にボコられる!」

「やかましいのそっちだよね!?　というか最後のがぜってー本音だよね!」

勝手に不名誉を貰った挙句、ボコられろって……。

しばらく小学生もしいようなケンカを繰り広げていたら、

「プツ、フフフ……」

「アハハハハハハッ!」

フェイトとアルフの二人が笑いだした。

「お、やつと笑ってくれた」

「そうだねー。体を張ったかいがあつたよ」

ちよつとだけ場の空気が緩くなった。

「え、二人はそのためにあんなことやつてたの?」

「まあね。沈黙なんてつまらないだけだし」

シリアスな空気はあまり好きじゃないんだよね。

「そ、それにしちや出来すぎだろ」

「家じゃいつものことだけどねー」

基本的に二亜や、折紙、美九が勝手に暴走してるだけだと思っただけど……俺は何故か巻き込まれてるんだよね。

「そ、そうなんだ。空の家は明るくて楽しそうだね……」

あれー?　地雷踏んだ?　フェイトが急に暗くなったぞ。

「あー、フェイトはもしかして家族と仲悪い……とかあったりする?」

「ううん、そんなことないよ……」

うわー、これは何かあるね……。

「そつか……。ねえ、フェイト」

「?」

「笑顔っていうのはね、たったそれだけでも周りを明るくするんだよ。特に君みたいな可愛い女の子はね。だから君には笑って欲しいな」

よし、これで「もう何言ってるの?　空ってば変なの」と言ってるはず!　そして、アルフもそれにつられて笑うに違いない!

「か、可愛い……」

あ、あれ?　フェイトの様子がオカシイなー?　思ってた反応と違う。

「(ホントに口説きやがった!? 空……恐ろしい子ッ! ……でもこれ以後で死刑確定だね。ご愁傷様ー♪)」

「だ、ダイジョブかいフェイト!? 顔が真っ赤だよ!」

「だ、大丈夫だよ、アルフ。ちよっと休めば問題ないから……」

「……フェイトがそういうんだっいたらいいけど」

ホントに大丈夫かな?

「フェイト、ちよっとおでこ貸してね」

俺はフェイトのそばまで行くと自分のおでこことフェイトのおでこをくっ付けた。

「ひゃあっ!」

フェイトが変な声を上げて更に顔が赤くなった。そして、限界だったのか倒れてしまった。

「フェイト!」

「やっぱ、無理してたんじゃない。どっかで休ませないと」

「いやいや少年のせいだからね!」

「え? 何で? 俺なんかしたっけ?」

んー? 思い当たることがこれっぽっちもないんだけど……。

「(この男はく! これはもはや病気と言っても過言じゃないほどの鈍感さだね! さすがの私でもこれは後でお灸を据えねば!)」

二亜が霊力放ってる!?

「へ突然霊力出すなんてどうしたの!」

「へ……別に何でも無い。ただ……明日からの修行覚悟しておいてね」

そう言われて、一方的に念話を切られてしまった。

フェイトはアルフにソファアに寝かされていた。

しばらく二亜が不機嫌そうにしていたのでアルフと話していたら、知らない人が出てきた。

「さつきから五月蠅いわね。研究に集中出来ないじゃない」

「ぷ、プレシア! フェイトが! フェイトが倒れちゃったんだ!」

「任せなさい! 私の可愛いフェイトには怪我一つだってさせないんだから!」

プレシアと呼ばれた人はフェイトの名前を聞いた瞬間、目にも止まらぬ速さでフェイトに近づいて診察していた。

速ッ！ 今のスピード人間やめてない!?

「(……?) プレシアってこんな性格じゃないはずんだけど……)」

プレシアさんを見て二亜が何か言いたそうにしていたがプレシアさんの動きに驚いていてそれどころではなかった。

「大丈夫ね。ただ気絶してるだけよ。でもどうしてこうなったのかしら?」

「空がフェイトに近づいておでこどうしをくっ付けたら急に倒れたんだよー!」

「空? ああ、その男の子のことね。わかったわ。ねえ、そのあなた」

「あ、はい」

「今のはホントのことかしら?」

「え? 俺の——」

「アルフの言ったことはホントだよ。間違いなく彼がやりましたー」

「……おい、二亜さーん? 何を言ってるの?」

だから、俺が何をしたって言うんだよ。

「そう……。なら、死になさい」

へ?

俺は茫然としていたらプレシアさんは杖みたいなものを出すと、雷を放ってきた。

「ちよッ!? いきなりなんですか!?!」

急なことだったが何とか躲せた。

「私の大切な可愛いフェイトを気絶させた罰に決まってるでしょ!」

「俺はそんなことしてないですよ!?!」

「いえ彼はウソを言っています! それどころか口説いていました!」

「はあ!? 何言ってるの二亜!? 俺がいつフェイトを口説いたって  
いうのさ!」

「……何ですって?」

「いやいや口説いてなんかいませんけど!」

「なら、私の世界で一番大切な可愛いフェイトに魅力が無いと言いたいのかしら!」

「そんなこと言ってますんよね!」

この人めんどくさい! っていうかこのやり取り前回もあつたよね! 恭也さんがシスコンならこの人は親バカかよツ!

しばらくプレシアさんが放ってくる雷を躲していると、料理を作り終えたりニスが戻って来た。

「ご飯が出来ましたってプレシア! あなたは病人なんですから安静にしていなさい!」

いやいや病人であの動きはありえないでしょ……。

「娘に手を出——」

「プレシア」

「……で、でも——」

「プレシア!」

「……ハイ……」

リニスのおかげでプレシアさんが止まった!

「ありがとう、リニス!」

「いえ、私の主が迷惑をおかけしました。それとプレシアはここを片付けて下さいね」

「……はい」

病人に片付けさせていいのか? ありえない動きしてたけど心配になる。

「それではご飯にしましょうか」

「……あれ、ここは……」

「フェイト! 目が覚めたのね! どこか痛いところはない? 辛くない?」

プレシアさんが一番早くに気付いてそばに駆け寄り、抱きしめた。

「か、母さん……苦しい……」

アハハ、ホントに苦しそう。

「ご、ごめんなさい！ 倒れたって聞いて、つい心配で……」

「フェイトく！ 無事かい!?」

「……母さんもアルフも心配し過ぎだよ」

「家族ならそんなもんじゃない？ よっほどひどい家庭でなければね」

「……うん、そうだね」

「それから、さつきはごめんね。俺のせいで倒れたみたいだし」

「え、あ、いや大丈夫だから！ 気にしてないよ！」

ほっ、それは良かった。

「もう平気そうならご飯一緒に食べよ」

「うん。ってうわッ！」

フェイトはプレシアさんから解放されて立ち上がろうとしたらフラついた。

俺はフェイトを支えようとしたが、よろけたフェイトの足にぶつかり俺も一緒に倒れてしまった。

何とか俺がフェイトの下に入ったのでフェイトにケガはないはず。

……? 少し口が痛いけど何か柔らかいかな……って!?

『んんッ!?!』

「あああああああああああああああッ!?!」

目を開くと目の前にフェイトの顔があった。

距離がゼロと言ってもいいくらいに。

要するに——俺とフェイトはキスをしていた。

少女救いました！

少女救いました！

Side空

.....ものすごく  
気まずい空気。どうすればいいんですか!? 誰か助けて下さい!!

「.....」  
顔真っ赤のフェイト。

「.....」  
超不機嫌そうな二亜。

「フェイトが.....フェイトが.....」  
真っ白になったプレシアさん。

「みんなどうしたんだい?」  
「色々あったんですよ。フフツ」

遠くで状況がよく分かってないアルフと微笑ましそうに見ている  
リニス。

『おおく! すごいもの見ちゃった!』  
いつの間にかいたフェイトそつくりの浮いている少女が俺のそば  
にいた。

.....え? 誰?

「.....君、誰?」

俺以外は誰も彼女に気が付いてないみたいだった。

『私はアリシア! フェイトのお姉ちゃんだよ!』  
「へえく、フェイトってお姉ちゃんいたんだね」

『まあ、死んでるけどね!』  
.....は? 今何て言った?

『だから私死んでるんだってば!』  
し、死んでる!? じゃあ、ゆゆゆ、幽霊!?

『Yes, I am!』  
無駄に発音の良い英語で答えてくれた。

ハハハ、アリエナイアリエナイ。ユウレイナンテイルハズガナイン

だ。

『ホントだつてば。証拠見せてあげよ。こつちに来て』

アリシアに言われて俺は付いて行くことにした。

っていうか、さつきから心の声読まないでよ!?

『気にしない気にしない』

アリシアに付いて行くと大きな扉のある部屋に着いた。

「ここは？」

『この奥に私の体があるんだよ』

アリシアは扉を開けずに素通り、俺は扉を開けて中に入って行った。中にはポッドに入ったアリシアらしき体があった。

「……マジだったのかよ」

『ほらね。私の言った通りでしょ？』

「うん。だけど——余計に怖くなったわ！」

『えく！こんなに可愛い幽霊なの？』

「確かに可愛いよツ！でもそれとこれとは別だよ！」

『えへへ♪ 可愛いって言ってくれた』

アリシアは空中で器用に体をよじらせていた。

ダメだ……何を言っても通じない気がする。

「で、君はどうしたいの？」

『え？ どうもしないけど？』

「未練とかないの？ プレシアさんと話したいとか、フエイトと遊びたいとか」

『……それは無理だよ。確かにしてみたいことはたくさんあるけど、死んでるからね。君以外には見えてないみたい。でもこうして話してるだけでも私は楽しいから！』

「そっか……俺にしか見えてないのか……」

まあ、幽霊なら仕方ない……ん？ 幽霊？ アリシア死んでるんだよね？

じゃあ、あれなら蘇らせることができるじゃん！  
——  
セライト・グラール  
幽世の聖杯なら！

「ねえ、もし生き返ることが出来るって言われたらどうする？」

『うーん、もしそうならぜひともそうしたいよ。でも誰かに迷惑なし、でならだよ』

そりやそうだ。俺だって誰かに迷惑をかけてまでして蘇りたくない。

「じゃあ、俺が君を蘇らせてあげるよ」

『……………へ？』

アリシアのこいつ何言ってるの？って言う顔をスルーして、ポッドに近づいて、アリシアの体を取り出して寝かせ、そこら辺にあった布を体にかけて俺は幽世の聖杯を出した。

……………流石に裸は可哀想だし、俺的にもちよつと……………。

「幽世の聖杯、アリシアの魂をこの体に戻してくれ」  
『ちよツ!？』

次の瞬間、幽世の聖杯が輝くとアリシアの体にアリシアの霊体が吸い込まれるようにして入って行った。

しばらくすると、アリシアはゆっくりと目を開けた。

「あ、あれ？ 私……………いきなり……………」

「気分はどう？ 初めてだったから変なところがあつたら言っつね。すぐ治すから」

「あ、空！ うーん……………うん、何ともないよー！」

アリシアは体を軽く動かしたり、触ってみてどこにも異常が無いことを確認した。

ほっ、何とか成功したみたいだね。

「もう立てる？ もし無理そうならおんぶくらいするけど」

アリシアは立とうとしたが、しばらく動かなかつたため筋力が落ちていて立ててそうになかった。

「無理みたいだからお姫様抱っこして〜！」

「うんわかった。元気そうだから俺は要らないみたいだね」

「ひど〜い！ フェイトにキスしたんだからそれくらいいいじゃん

！」

頬を膨らませて文句を言ってきた。

「あれは事故だから仕方がないでしょ!？」

せつかく人が忘れようとしていたのに……。

「はあ……わかったよ。お姫様抱っこするよ」

「最初からそうすればいいんだよ♪」

「ハイハイ、しっかり掴まってね」

「うん♪」

そう言つて、皆がいるで部屋に戻つて行つた。

皆がいる部屋の近くまで戻つた俺とアリシアは部屋の前で止まっていた。

「さてさてさーて、皆にどう説明すればいいのかな？」

「二人の愛の力で蘇つた! なんてのはどう?」

「却下。そもそもアリシアとは初対面だからね?」

しかも愛の力ってなんだよ……。プレシアさんにまた攻撃されるんだけど。

「そこは前世からのつながりとか何とか言つてさあ」

「誰が信じるの? 証拠もないのに」

あ、一応俺転生してるか。記憶ほとんどないけど。

「なら、童話のお姫様みたいにキスで目覚めたとかは?」

「それはプレシアさんに殺されるから!」

「私たちの愛にはそれくらいの障害がつき物だよ! 乗り越えなきゃ!」

「誰と誰がいつ愛し合つたんですか!？」

「ヒドイ! 私とは遊びだったんだね! 最低!」

「何も始まってもないよね!？」

それからウソ泣き止めい。嘘だと分かつても結構効くんだから。あの頃のあなたはもういないんだね……別れよ? ……じゃあね」

「ちよつとー、勝手にどっか行かないでくれませんか？」

「じゃあ、残されたあの子はどうしたらいいの!？」

なんか大分エスカレートしてないかこの子の妄想……。

「あの子って誰だよ……。話が飛躍し過ぎて着いていけないんだけど……。」

めんどくさくなった俺はアリシアをお姫様抱っこしたまま部屋に入った。

……まあ、なるようになるでしょ。

俺達が入った瞬間、誰もが目を大きくしていた。

「そ、空君、あなたがお姫様抱っこしている女の子は誰かしら?」

プレシアさんが震えた声で訪ねてきた。

それだけ俺が抱えてる少女が気になるのだろう。

「アリシア。本人からそう聞きましたよ」

「お母さん、久しぶり〜!」

死んでた本人は気軽に挨拶した。

「ウソ……。あ、アリシアが蘇った!？」

「で、でも、死んだはずじゃ……。」

「そうだよツ! アリシアは死んでるはずじゃないのか!？」

「……空、あなたが何かしたんですか?」

誰もが驚く中、リニスは俺が何かしたんじゃないのかと怪しんでいた。

能力バラすのはちよつとなー……。

「あー、き、禁則事項です☆」

「うわーないわー」

アリシアに真顔で否定された。

分かってるよ! 似合っていないことくらい!

「へ少年、幽世の聖杯を使ったんだね」

二亜が念話で聞いて来た。俺が使った能力をすぐさま言い当てた。

「へそうだよ」

「へそう……。でもわかってると思うけど多用はしないでね。絶対に」

幽世の聖杯を使いすぎると幽霊が見えてしまうようになるが、今回初めて使ったので問題はないはず。

「へわかってる」

「へそれと、原作ブレイクおめでと」

「へえ!? フェイト達ってなのはと同じ原作キャラだったの!？」

うそーん! そんなの聞いてませんよ!

「へうん。しかもかなりシリアスな展開だったんだけど……」

「へそれって……マズイことしちゃった?」

「へさあね。まあ、良い結末だからいいんじゃない?」

「へ……そっか。なら、いつか! それにアリシアを蘇らせたことに後悔してないし!」

ハッピーエンドならいいじゃん! 誰もが笑っていられるなら!

「へハハハ、少年らしいよ」

そう言われてから、二亜との念話を終えた。

「とりあえず、アリシアを蘇らせることが出来たのは――」

「私と空の愛の力だよ!」

「……余計なことは言わないでくれるかな、アリシア」

「今のはどういうことかしら!? フェイトだけでなく、アリシアにまで手を出していたのね! いいわ! 今度こそ殺してあげるわ!」

「ほらー! アリシアのせいで余計な誤解を生んだじゃんツ!」

プレシアさんがまた雷を放ってきたので、アリシアを抱えながら躲し続けた。

「てへツ☆」

アリシアは舌を可愛く出して自分の頭をコツンと叩いた。  
こいつはく! ……でも、少しでも可愛いと思ったのは内緒の方向で。

「リニスさん! プレシアさん止めて!」

「わかってますよ。プレシア! 今すぐやめないとあなたの黒歴史を

ばらしますよ！」

「え!? そ、それだけはやめてちょうだい！」

リニスの脅しにすぐに攻撃をやめたプレシアさん。

主の方が使い魔に頭が上がらないって……。

黒歴史つてのも気になるな。二亜の天使で調べてみようかな？

ようやく落ち着いたので、アリシアについて聞かされた。

どうやら昔の実験の事故でアリシアが巻き込まれ、そのまま亡くなってしまうらしい。

しかもプレシアさんもその実験の影響で不治の病になってしまったのだ。しかし、プレシアさんはその時の後悔から、アリシアを蘇らせたくて色々研究をしていて、その中の研究で生まれたのがフェイトというアリシアのクローンだった。

最初、実験が成功し、フェイトが生まれたときはアリシアの記憶を受け継いだだけの偽物だと思っていた。しかし、アリシアが生前に「妹が欲しい！」と言っていたのを思い出し、接する態度を改めたそう

だ。だが、フェイトはその事実を聞かせられて、プレシアさんとどう接したらいいかわからなくなってしまうらしい。

だから、家族の話題であんなに暗かったのか……。

「ふむふむ、そうだったんだ」

「……今のを聞いて、私のこと嫌いになったでしょ？」

フェイトはかなり暗い表情で聞いてきた。

その時、少しだけ胸がムカムカした。

原因を探ろうとしたがまずはフェイトの質問に答えなければ。

こういう時って何て言えばいいのかなー？ 少なくとも嫌いになる要素はないけど。

「……えーつとき、フェイトは俺と出会えてよかった？」

「それは……」

フェイトはどうなんだろと言う顔をしていた。

そこは嘘でもいいから肯定して欲しいところなんだけど……まあいいや。

「俺は君と出会えてよかったって思ってるよ」

「……どうして？ 私はクローンなんだよ？」

……なんだろう。また少しだけイラついた気がする

「別にクローンが何だったっていうのさ。生まれ方が少し違うだけでじゃん。それにさフェイトはフェイトなんだよ」

「……？」

分からないという顔のフェイト。周りの皆もキョトンとしていた。

「あーだからさ、クローンであろうがなかろうが今君が俺の前においてさ、生きているのに変わりはないってこと……なのか？」

「少年、格好悪いぞー」

段々言葉に詰まりましたら、二亜が茶々を入れて来た。

自分でも何言ってるかだんだんわからなくなってきてるんだよ！

「う、うるさい！ こういうの慣れてないの！ ってまああれだよあれ。えーつと、フェイトがプレシアさんの娘でアリシアの妹ってこと！ そんでアルフのご主人様！ それで十分だよ！ それでも足りないなら俺が君の友達で、は、初キスの相手！」

最後のは自分で言ってるて恥ずかしい……。言わなきゃよかった……。

「空……」

フェイトもその時の事を思い出したのか顔が赤い。

「それにさ……フェイトは血の繋がりがあるだけマシじゃない？」

あれ？ 俺、何を言ってる……。

「……え？」

「俺なんか二亜と血が繋がってないんだよ……」

やめろよ……そんなこと言うなよ……。

心に反して、口は動いたままだ。

「しかもさ、他にも家族はいるのに、誰とも繋がってないんだよ……」

ああ……そっか……。

フェイトの言葉にイラつとした理由がわかった。

俺は寂しかったんだ……血の繋がりにて言うだけで。クローンでもフェイトには血が繋がっている人達がいる。俺にはそれが無い。この世界のどこにも。

でも――

「でも、それでも！ 皆は俺のことを家族だって笑顔で言ってくれたんだ!! だから！ フェイトも自分がクローンだからとか言うなよ！ 誰が何て言おうとお前だって大切な家族なんだよ!! ここにいる皆にとって!!」

気が付けば泣いていた。溢れる涙が抑えられないほどに。

背中に温もりを感じた。後ろから二亜に抱きしめられていた。

「だからッ！ だからさ……ッ！」

「少年、もういいよ……。十分伝わったと思うよ……」

二亜も少しだけ泣いているのが声からわかった。

「……そう、だね……私は……母さん達の、家族だ……家族でいたい！」

フェイトの顔を見れば、大粒の涙が流れていた。

『フェイト……』

周りを見れば、プレシアさん達も泣いていた。

「……言いたいことそんだけ」

「ありがとね空君……」

「カッコ良かったよッ！」

「とても心に響きました」

「良い言葉だったよ♪」

「……ただ思ったことを言っただけだよ」

泣いたのが恥ずかしくてしばらく一人になりたかったから俺は部屋を出た。

「はあ……」

外に出て座ると思わずため息が出た。

「しよーねん♪」

二亜が隣にやって来て座った。

「転生してきあ、皆がいたから、記憶が無くても寂しくないと思ってたけど……案外、血の繋がりがって大きいんだね……」

フェイトにどうしてあんなことを言ってしまったのか、原因はなんともなくわかつている。友達になったなのはとその家族達を見て、無意識に嫉妬していたんだと思う。

「それはそうだよ。私だってそう思う」

血の繋がりが。それは大きなもので今の俺には無いモノだった。

「でも、それ以上に皆がいてすごく嬉しかった。幸せだった。出会って一年も経ってないのにこれでもか！っていうくらい毎日が楽しいんだ……」

「ハハハ、皆も同じこと思ってるよ」

「それは囁告<sup>ラッセル</sup>篇帙<sup>エル</sup>で調べたから？」

二亜は違う、と首を振った。

「そんなの調べなくてもわかるよ。皆楽しそうに過ごしてるから」  
「……そっか。それならいつか」

前世の俺の家族ってどんなだったかな？ 今みたいに血の繋がった人がいなかったりして。記憶がほとんどないから今となっては知る余地もないが。

「そろそろ戻る？」

「うーん、もうちょいしたらで」

今頃、フェイト達は何かしてるんじゃないかな？

俺自身がまだ恥ずかしいからってこともあるんだけど。

「そっか。なら今のうちに甘えてもいいんだよ？」

少しニヤついた二亜が冗談めかして言ってきた。

「じゃあ甘える。膝枕して」

「えッ!？」

二亜は冗談のつもりだったらしいけど今の俺はそんなことは気にせず、倒れるように二亜の太ももに自分の頭を置いた。

「おやすみ」

それだけ言い残して目を閉じた。



俺、至ります！

俺、至ります！

Side空

二亜に膝枕をしてもらってから目が覚めると、青空が広がっていた。

「ありや？ 二亜はどこ行っただ？ ……ていうかそもそもここどこ？」

先程とは違う景色と二亜がいないことに俺は戸惑っていた。

『ここはお前の精神世界——言わば心の中だ』

まるでダメなおっさんのような声が後ろから聞こえてきたので振り向くと、

「……………え？」

見上げる程の巨体。獐猛な目付き。トカゲのような頭。頭部から生える角。鋼を容易に切り裂けそうな鋭い爪。なんでも砕きそうな牙。それらを持ち合わせた赤いドラゴンと白いドラゴンがそこにはいた。

『ようやくお前と会話が出来る様になったな』

『と言ってもこいつはまだガキだ。仕方があるまい』

『それもそうだな。むしろ早い方だから褒めるべきか』

何か二体で仲良く話してるけど、こいつらって——

『そう言えば、自己紹介をしていなかったな。俺は赤龍帝——ドライグだ』

『私は白龍皇——アルビオンだ。よろしく頼むぞ』

「あ、これはどうも。俺は龍神空って言います。初めまして……ってそうじゃないよ！ な、なんでここにドライグとアルビオンがいるの！？」

『何をバカなことを言っている。お前が俺達の神セイクリッド・ギア器を持っているからに決まってるだろうが』

確かに俺は神器を持つてはいるけど……。

「で、でも今まで声何て聞こえなかったよ？」

『それはお前の心が問題だったのだ』

お、俺の心……?」

『どういうこと?』

『お前は体は十分に鍛えられているくせに精神は何かを抱えていた。だが、それが急に完全ではないが無くなった。そのおかげでここにお前はいる。心当たりはあるんじゃないのか?』

「もしかして、いや、もしかなくてもさっきのアレだよな?」

『ああ、恐らく今お前が考えていることであっているだろう』

『フェイト・テスタロッサに対して言ったあの言葉が引き金となったのだろう』

うわー! 今思い出すだけでもスゲー恥ずかしい!!

『中々にいい言葉だったんじゃないのか?』

そういうこと言わないでいいから!

そのせいで俺はしばらく恥ずかしさで悶えていた。

落ち着いた俺は二体ここに呼んだ理由を聞いた。

『それはお前に禁 バランス・ブレイカー 手に至ってもらうためだ』

「ッ! ……なるほどね……俺、ワクワクしてきた!」

『そ、そうか……なら早速行くぞ!』

ドライグにちよつと引かれたけどそんなことはどうだっついていい!

今は禁手じゃああああああああ!!!

『では、私達と戦ってもらうぞ。そして、私達に認められれば至れるだろう』

はい? 戦う? 二体と?」

「いやいや死ぬから! 普通に死ぬからね! 君たちバカなの? い

やバカだよな! 頭オカシイよ! 人間が敵うはずないでしょ!」

『大丈夫だ。ここは精神世界だから死ぬことはない』

『そういうことだ! さあ、行くぞ!』

「マジかよ!? っとうわ!」

開始宣言早々に巨大な赤い腕を振り下ろしてきた。

いきなり押しつぶす気かよ!? しかも滅茶苦茶デカイクレーターが出来てるんだけど!?

『どうしたどうした! そんなものか! 貴様の力は!』

言わせておけば! この赤トカゲマダオ野郎! ぜってー泣かしてやる!

『マダオ言うな! それは別のキャラだろうが!!』

さり気に心を読まれた!? 精神世界だから読まれやすいのかな!?

『メタ発言をするな、ドライブグ』

アルビオンがマダ……じゃなくてドライブグを宥めようとしたが、

『うるさい! バレーの上手いキャラと同じ声のお前に何がわかる!』

『な! わ、私はただお前を庇っただけではないか! それをうるさいとは何だ!』

『大体前からお前は気に食わなかったんだよ!』

『それはこちらのセリフだ! お前は日々短期過ぎる!』

何か、ドライブグとアルビオンの取っ組み合いケンカが始まった。

……俺、空気じゃん……。でも、今のうちに赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手で倍加しておこつと!

左手に赤い籠手を纏うと能力を発動させる。

《Boost!》

それにしてもドライブグとアルビオンは仲悪いのか?

《Boost!》

最初見た感じはそんなことはないって思ったんだけど……。

《Boost!》

あ、そう言えば、ジャガーノート・ドライブ 覇 龍 出来んのかな?

《Boost!》

原作みたいに歴代の所有者達の怨念とかはいないみたいだから暴走はしないはず……だと思っただけ。

《Boost!》

十香達に手伝ってもらおうか、ここでやってみるか!

《Boost!》

あ、どうやって二体倒せばいいかな？ と忘れかけていたことを思い出すと、光が集まり、一本の黄金の槍が俺の眼の前に出現した。

《Boost!》

これって……黄昏の聖槍、だよな？ トウルー・ロンギヌス どんなのか見たことないから

解んなかったけど、この聖なるオーラからそんな感じがする。でも、俺はまだこの神器は創ってないはずんだけど……なんでここにあるんだろう……。

《Boost!》

まだ倍加する気!?

そんなことを考えていたら、どこからか優しい声が聞こえてきた。

『それは私が勝手に出てきただけですよ』

「え？ 今の声どこから？」

《Boost!》

『あなたの前からですよ』

「前？ って聖槍から!？」

『ええ、そうです。初めまして、空さん。神です』

《Boost!》

いきなり神発言された……。

「……ああ、はい。神（笑）ですな」

『ち、違います！ 神です！ 聖書の神です！』

「アハハ、ダイジョブデスヨ。キニシテナイデスカラ」

《Boost!》

『信じてませんよね!? とうかさつきから五月蠅いですよ！ その

籠手!』

「そう言われても、あなたがドライブを封印して創ったんでしょ？

自業自得だと思えますけど」

『ウグツ……そこを突かれると何も言い返せません……』

「だから神（笑）とかドジツ娘とかって原作キャラの皆に言われるんですよ。特に天使達に」

《Boost!》

『そんなの嘘に決まっています！ 私は天使たちを創った言わば母なん

ですよ!?! 子供が親に対してそんなこと言うはずがないですよ!?!  
……え、う、嘘ですよね? その可哀想なものを見る顔は何ですか?  
ちよつと答えて下さいよ!?! ねえ!?! どうなんですか!?!』

「真実は時に残酷なんですよ。だから知らない方が良いこともありますよ」

ホントは誰もそんなこと言っていないけどね。

《Explosion!》

お、倍加が終わった。これなら倒せるのか!

『そ、そんな……じゃあ私がしてきたことは一体……』

あくあ、落ち込んだじゃった……どうすんだこの人(?) ……。めん  
どいから後にしよ……。

「この槍であいつら止めますか!」

《Transfer!》

ブーステッド・ギア・ギフト  
赤龍帝からの贈り物で今まで倍加していた力を聖槍に譲渡した。途  
端に、聖槍から聖なるオーラと赤いドラゴンのオーラが溢れて混ざ  
り、橙色のオーラが煌いていて幻想的だった。

『こ、この力は! まさか——』

神(笑)が何か言ってるけど、気にしないで逝きます!

バランス・ブレイク  
「禁手化!」

聖槍から眩い光が発せられると、すぐに収まった。

体中を見たり触れたりして確認してみると、六対十二枚の黄金の  
翼、髪が異常に伸びていて金髪のポニーテールになって髪飾りが着い  
ていた。面積はそんなないけど足や腕に黄金の防具に橙色の模様  
が入ったのを纏っていた。聖槍は特に変化はなかった。

『どうして禁手になれるんですか!?! 私はまだ認めてないのに! そ  
れに……これは私の知らない禁手の形!?! あなたは一体……』

「知らなーい。それに出来ちゃったもんは仕方がないし、今更どうこ  
う言われたって無理」

『わ、わかりました……ただし! あまりその力を使い過ぎないで下  
さいー!』

「わかっています。強すぎるから、ですよね?」

最強の神滅具ロンギヌスと言われるこの聖槍、力の制御が上手く出来ないと暴走した時が厄介だ。今も体中から溢れる力を何とか抑えつけている。『わかっているならそれでいいです。後、そ、それからですね……』  
何かを言うのをためらう感じがする……。

「どうかしました?」

『わ、私の名前はヤハウエと呼んでください』

「あー、はい、わかりました。ヤハウエさん」

『さんはいいです。それと敬語もです』

「うん、わかった。よろしくねヤハウエ!」

『はい! (何だか少しだけ彼女たちが羨ましく思えますね……)』

「そうそう、ヤハウエ! さっきのアレ嘘だから!」

『……後で覚えておいてくださいね』

やば?!? かなり怒っていらっしやる!?

「と、取りあえず! あいつら止めるから!」

『……まあ、いいです。やっちゃって下さい』

翼を広げて二体よりも高く空中に上がると、槍を構えた。

「うん、一撃で終わらせる。輝け! 聖槍よ!——」

『ん? 何だこの力はって空か!?!』

『お、おいあれはマズイのではないか!?!』

ようやく気が付いたケンカしてた馬鹿共ドライグとアルビオンだけど、もう遅い!

「——聖槍ライジング・サンの夜明け!」

聖槍から放たれた金色の砲撃は二体の巨体を容易く飲み込んだ。

俺の攻撃による爆発の煙で二体がどうなったかは分からない。

『どうやら、無事倒せましたね』

先に気付いたヤハウエが倒したと教えてくれた。

しばらくして、煙が晴れると二体は目を回して気絶していた。

「これにて一件落着——」

『なわけあるか!』

「……あれ? もう復活したの?」

予想外にもドライグとアルビオンはすぐに起き上がった。

『俺達を殺す気か! 精神体とはいえ、死の恐怖を感じたぞ!』

『かつてないほど恐ろしかった……』

そこまで恐かったのか……少し悪いことしたな……。

「ごめんごめん、加減が難しくてさ。つい全力でやっちゃった」

初めて使用した神器——それも神滅具の禁手化であるが故に力の制御が上手くできなかった。元々倒すつもりだったから加減をす  
るつもりは毛頭もなかったけど。

『ついで済まされるか!』

ドライブがかなりご立腹のようだった。

『五月蠅いですよ、ドライブ。そもそもケンカしていたあなた達が悪いのです』

『な!? その声は、聖書の神か!?』

突然のヤハウエの声にドライブだけでなくアルビオンもかなり驚いていた。

『お前が何故ここにいる!』

『自分の意思で出てきました』

二体はそんなことは有り得ないといった顔をしていたが、

『私、神ですから』

その一言で片づけた。

無茶苦茶だな……ヤハウエ……。

『まあそのことはもういい。……それよりも空、その姿は何だ?』

ようやく禁手について触れてきた。

「黄昏の聖槍の禁手だよ」

『何!? もう至ったのか!? ていうかお前は神に認められたのか!?』

「ううん、何かやってみたら出来た」

これまた二体は有り得ないという顔をしていたけど、できちゃったもんは仕方がないでしょ。ヤハウエもあり得ないって言ってたからイレギュラー的な感じだと思う。

『しかも普通の禁手とは違うようだな』

「うん、ヤハウエもそう言った」

『ええ、これは今までにない禁手です。名前は————  
ヘヴンズドラゴン・ロンギヌス  
天空舞う金色龍の聖槍というのはいかがですか?』

「他には思いつかなさそうだからそれにしよっか」

こうして俺の初の禁手は黄昏の聖槍の天空舞う金色龍の聖槍となった。

「で、いい加減ここから帰りたいたいんだけど……」

『おお、すまん。禁手に夢中で忘れていたな。ここにはお前次第でいつでも行き来できる』

え？ そうなの？ まあ俺の精神世界だから当たり前か。

「わかった。じゃあねー皆ー！」

俺は禁手化を解いてここから出たいと念じると目の前が暗くなった。

S i d e o u t

S i d e ドライグ

空がいなくなった後、俺達は空の禁手について話していた。

『何故、あんなにも簡単に禁手に至ったのだ』

『何か知っているのか？ 聖書の神よ』

ヤハウエは不意に上空を見上げた。

俺達も做って広がっているのはどこまでも澄み渡る青空を見つめた。

『彼の心……ですかね？』

『どういうことだ？』

『この世界を見ればわかるのでは？』

「この世界……この青空が何かを意味するのだろうか……」

『いや、もしくは……あいつの前世が関係しているのか？』

『もしそうなら、誰にも知るすべはないでしょうね。彼自身を除いて』

『これ以上考えていても仕方があるまい。この話はまたいずれにしよう』

『ああ、そうだな』

話し合いが終わり立ち去ろうとした時、聖書の神に呼び止められた。

『あなた達は空さんを認めたのですか？』

『愚問だな——』

『あいつのことは——』

隣のアルビオンと確認しあうまでもなく、答えは決まっていた。

『』とつづくに認めている！』

家族増えます！

家族増えます！

Side空

精神世界で二天龍と聖書の神——ヤハウエと出会い、トゥルー・ロンギヌス黄昏の聖槍の禁手に至った。

それから俺は現実に戻って来た——  
が、起きると琴里がいた。

「……何で琴里がここにいるの？」

「ここが私達の家だからよ」

「……え、家？ 俺って二亜と時の庭園にいたんじや？」

「ええ、そうよ。それであんたが目覚めないから心配になつて家に連れて帰つたつて訳」

「昼寝してただけなのに？ 大げさでしょ」

まるで俺が何日も寝てみたいじゃん。

「大げさでも何でもないわよ。ほら見てみなさい空達がいなくなつてから三日経つてるわ」

琴里が指で示した方を見ると、カレンダーがあり、あの日から三日が経つたことが分かった。

「……マジか」

「これで分かった？」

「うん、まあ……」

精神世界にいたことがそんなに時間経つていたのか……。

俺はそこでふと思ひ出したことを聞いた。

「他の皆は何してるの？」

琴里は少し呆れたように答えた。

「皆、寝てるわ。時間が時間だしね。後でお礼言つときなさいよ。寝ないで看病してくれたんだから」

部屋の時計は夜中の三時を示していた。皆に心配かけちゃったか……。

「うん、言つとく。それから——」

「何？」

「琴里もありがと。ずっといてくれたんでしょ？」

「べ、別に大したことないわよ。こ、このくらい普通よ普通」

琴里がそっぽを向いて当たり前とばかりに言ってきた。

ツインテールがピコピコと動いていたのが見えたので、お礼を言われたのが恥ずかしかったらしい。

「そっか。それでもありがと」

「わ、分かったからさっさと寝なさい！ 私はもう寝るから！」

そう言い残して部屋を去っていくかと思いきや、立ち止まり――

「……お休み。……それと、おかえりなさい」

と言つて、出て行った。

「うん、お休み……。ただいま」

俺の声は自分以外いない部屋に静かに響いた。

そんじや、寝ますか。

起きると身動きが取れなかった。

首を左右に向けてみると、何故かフェイトとアリシアがいて抱き枕にされていた。

……どうしてこうなった？ ていうか何で二人がいるんだ？

しばらく考えていたが、さっぱり分からなかった。

まあいいやと思っていたら、この部屋のドアがノックされた。

『フェイトちゃん、アリシアちゃん。お昼ご飯が出来ましたよ』

声の主はどうやら美九のようだ。

「美九、教えに来てくれてありがと」

俺の声を聞いた瞬間、美九がすごい勢いで部屋に突入してきた。

「だ、だーりん!?! 目が覚めたんですか!?!」

「うん。……あー、心配かけてごめんね……それから看病ありがと」

「ホントに心配したんですからね！」

抱き着いて顔を近づけてきた美九は今にも泣きそうな表情だった。つて近い！ 近いから！ あと、数センチで口と口がぶつかりそう

だから離れて！

「ご、ごめん……それと出来れば、少し離れて欲しいんだけど」

「ダメですう！ 心配かけた罰ですう！」

ウグツ……そう言われると、何も言い返せない………いいや、まだ勝機はある！

「で、でも、もうご飯でしょ？ だから二人起こして食べにいき？」

「……わかりましたあ。でもあとでたくさんしますからね♪」

あ、あとで……か。結局逃げられなかった……。

「はあ……わかったよ。ご飯食べたらね」

「はい！ じゃあ二人を起こしましょう！」

そうして二人を起こして、リビングに向かった。

二人は俺が起きたことに騒いでいたけど、それは後で言うということとでその場は収まった。

行く途中で美九が、

「二人に抱き枕にされて鼻の下伸ばしてたので特訓追加ですう♪」

と言ってきて、今すぐにでも逃げたくなった……。

リビングに行けば皆揃っていた。プレシアさんやリニス、アルフもだ。

『空（君／さん）！?』

皆が俺に気が付くと、一斉に名前を呼んだ。

おお、何か一斉に注目浴びると恥ずかしい気がする。

「もう大丈夫なのか!？」

「うん、心配かけてごめんね。もう大丈夫！」

それを聞いて皆は安堵の息を吐いていた。余程心配を掛けてしまったらしい。

「さ、空の無事も確認できたからご飯にしましょ。その後に空に色々聞くわ」

皆は領いてそれぞれ自分の席に着いた。

「そんじゃ、いただきます！」

『いただきます！』

そう言えば時の庭園に行った時から食べてなかった……。  
こうして、プレシアさん達も加えて三日ぶりに皆でご飯を食べた。

「ご飯を食べ終わったあと、俺の精神世界であつたことを話した。

「まさか寝ている間にバランス・ブレイカー禁手に至るとは……」

「俺もびっくりだったけどね」

「しかもいきなり黄昏の聖槍からってチートでしょ……」

「アハハ……確かに言ってる」

『おまけに二天龍も倒しちゃうなんてね』

「す、すごいです……」

「まあ、聖槍の禁手のおかげだけどね」

「何はともあれ結果的には良かったわね」

「うむ！　これで一層修行が捗るな！」

十香が修行が捗ることを嬉しそうにしていた。

「えっ？　更に厳しくなるの？」

冗談、だよね……？

「今までは序の口」

マジかよ……。

俺が軽く絶望していると、おずおずとフェイトが手を上げた。

「どうしたの、フェイト」

「さつきから皆が話してるバランス・ブレイカーとかトゥルー・ロンギ  
ヌスとか二天龍……だっけ？　それって何のこと？」

「そうね。私達にも良ければ教えてもらえるかしら？」

アリシア達も同じ気持ちだったのか同時に頷いた。

「あー……、まあいつか。教えますよ。俺の力のついて」

「話しても良いのか？」

「プレシアさん達だったらダイジョブでしょ」

「お主がそう言うのであれば構わないのじゃ」

「うん。じゃあこれから説明しまーす！」

それから俺は自分の使える力——十香達精霊についてや  
セイクリッド・ギア ロンギヌス  
神器、神滅具のことを簡単に纏めて説明した。

「って感じですかね。何か質問はありますか？」

聞いてみるとプレシアさんが律儀に手を上げた。

「アリスアの蘇生はどうやったのかしら？」

「それはこれ——セファイロト・グラール幽世の聖杯ですよ」

そう言っただけは幽世の聖杯を出した。

「この力は生命に関する能力があるんですよ。その力で生き返らせました」

「そ、そんなのロストロギア並みですよ！ しかもそれと同等の力を複数持つなんて……」

「ロストロギアっていうのはよく分かんないけど、まあすごい力だよ。例えばプレシアさんの病気だつて治せるし。ほいっとな」

プレシアさんが突如光に包まれた。

しばらくして光が収まると先程よりも若くなったプレシアさんになっていた。実際にそんな変わった様子はないけど顔つきが良くなくなり、若干皺が減った……気がする。

「全然苦しくない!? 本当に治ってるの!？」

自分の体中を触って確かめるプレシアさん。リニスが魔方陣を展開して体中を調べてみたらしいがどこにも異常はみられないそうだ。

「しかも若くなっています……」

「空って何者……?？」

「前世が神（笑）だった」

「そんなんじや説明になるか！ 絶対嘘だろ！」

うん、全くの嘘です。前世のこと知らないからホントの事なんてわからないけど。

「落ち着いきなよ、アルフ」

「で、でも……!」

フェイトがアルフを宥めるも、アルフは納得がいかない顔をしていた。

「なんでもいいよ！ 空は空だもん！」

お、アリシア良いこと言うね。俺自身普通の人間じゃない気がするけど。

「そーゆうことだよ。分かったかね、アルフ君？」

先生口調でアルフをバカにしてみた。

「むかつく！……けど、フェイトのことがあったから私もそれで納得するよ……」

そんな感じでアルフは渋々納得してくれた。

「で、プレシアさん達はこれからどうするんですか？」

「そうね……。アリシアの蘇生は済んでしまったからすることはないのよね……。どうしようかしら」

「もし良かったら、ここに住みませんか？」

「はあ……。絶対に言うと思った。私はOKだけどね」

二亜が真っ先に賛成してくれた。

何か精霊の皆に呆れられてる!？」

「で、でもいいの？ 迷惑じゃないかしら？」

「そんなことないですよ。それにこの家広くて部屋がいっぱい余ってるんで」

「私は賛成！ ここに住みたい！」

アリシアが元気よく手を上げて賛成した。

「私も……。その、いいかな？」

フェイトはおずおずと控えめに手を上げていた。

「あたしはフェイトがいいなら何でもいいよ」

「私はプレシアに付いて行きます。あなたの使い魔ですから」

「って他の皆は言ってますけど？」

「……わかったわ。ありがたくここに住まわせてもらおうわ」

「はい！ もちろん皆もいいよね？」

精霊達に聞いてみた。何の相談もなしに決めてしまったからちよつと不味いかもてお思ったが杞憂に終わった。

「うむ！ 問題ないぞ！」

「私も賛成、です……ッ！」

『よしのんもよー』

「ええ、特に反対する理由がありませんもの」

「そうね。文句はないわ」

「構わない」

「むくもいいのじゃ」

「かわいい子が来るのは大賛成ですう！」

「……別に私には聞かなくても全然平気だから」

「くく、新たな我が下僕として歓迎しようぞ！」

「翻訳。新しい家族が出来て嬉しいけどライバルにならないか不安だ  
そうです」

「ちよッ!? 勝手なこと言うな！ そんなこと全然思っていないし！」

「虚言。嘘は良くないです。ちなみに素直に物事を言う娘が空は好き  
だと言っていました」

「へ？ そ、そうなの空？」

「え？ うーんまあ素直な方が良いとは思うけど……」

「けど？」

「追求。けど、何ですか？」

「ありのままの笑顔でずっと隣にいてくれたらそれだけで十分……か  
な？」

「そういったことってあんまり考えてこと無いからよく分からない  
けど。」

「って何で皆してメモしてるの!? フェイトとアリシアも!? どっ  
から出した!？」

「そ、そう。ありがと……」

「感謝。ありがとうございます。大変勉強になりました」

「え、あ、うん。よく分かんないけど、どういたしまして。あ、そうだ  
！今日は夕飯と一緒にプレシアさん達の歓迎会にしようか！」

「折角新しい家族が増えたのだからしつかり歓迎してあげたい。  
「いいんじゃないかしら」

皆も賛成してくれた。

「早速準備してこーい！」

俺の掛け声と共に皆で買い出しや準備をした。

そして、準備が終わって歓迎会を始めた。  
作ったのはもちろん家事スキルEXを持つこの俺がやりましましたと  
も！

皆のことを改めて自己紹介したり、ドンチャン騒いで楽しんだ。

途中で折紙がセクハラしてきてそれに気づいた十香とケンカになつたり、耶？矢と夕弦が大食い競争したり、四糸乃と七罪が会話しているのを見て癒されたり、美九にハグされたり、プレシアさんが酔って絡んできたり、フェイトとアリシアが楽しそうにしているのを見て和んだり、狂三に玩具にされた後、琴里にプロレス技を掛けられて六喰に慰められたり、二亜がそれを見て大爆笑していた等々、色々あった。

え？ リニスやアルフ？ リニスは片っ端から掃除をされていて、アルフは途中から床で寝ていたよ。……うん、いつものことだから気にしない気にしない。フェイト達は初めてだけど。

そうして楽しい時間はあつという間に過ぎて行った。

「あーあ、こんなに散らかして……。リニスが掃除してた意味がないじゃん……」

他の皆は騒いで疲れたのか先に寝てしまった。

「……まあ、皆楽しそうだったからいいか」

今日あったことを思い出すと、少しだけ笑ってしまった。

「あ、空……まだ起きてたんだ」

隣にフェイトがやって来た。

「どうしたの？ 眠れない？」

「うん、なんか目が冴えちゃって。掃除、手伝う？」

「ううん、もうじき終わるから大丈夫だよ」

それからフェイトと話しながらも手は動かし続けていると片付け

はすぐに終わった。

「よし！ 終わった！」

一息つくために二人でソファアに並んで座った。

「お疲れさま。ホントは手伝いたかったんだけど……」

「いいのいいの。騒いで疲れたでしょ？」

「うん、少しね。……初めてあんなにはしゃいだよ」

「これからそんなの当たり前になるよ。ここにいれば嫌と言うほどね」

「アハハ……確かにそうかも」

「もうそろそろ寝よつかって思ったけどまだ眠れそうにない？」

「……うん、まだかな」

「じゃあ俺の部屋でおしゃべりでもしよつか」

「いいの？」

「いいもなにも、俺達はもう家族なんだから遠慮しないの。わかった？」

「空……うん！ わかった！」

あの一件があつてからフェイトはちよつと変わった気がする。三日前のことで、ほんの些細な変化だろうけど……。でも、きつとそれがいつかフェイトをより大きくするつて俺は思ってるし、そう願ってる。

俺の部屋で俺とフェイトは魔法の事を話していた。

どつちかつていうと主に俺が聞いているんだけど……。

どうやら俺にはフェイトと同じで魔力というものがあつて魔法を使えるらしい。

でも、精霊の十香達にはないと言われた。

まあ精霊だからそうだろうね。霊力があるからそれで一応念話は出来るけどね。そう言えば、魔力使ったことないや。知らなかったのもあるけど基本的にずっと戦闘か筋トレだったし。あと勉強。

皆は多分魔力が無いから教えること出来なかつたんだろうね。

色々考えていたら、隣から静かな寝息が聞こえてきた。

「ここで寝ちやったか……」

部屋に運ぶでもいいけど起こすと可哀想だしなあ……。

「しゃーなしてやつだな。俺も寝よつと」

べ、別に下心とかは無いらねツ！ ちよつと可愛いつて思ったくらいだからッ！

意味の分からない言い訳を心の中でしてから眠りについた。

翌朝に起こしに来た琴里に二人で寝ていたのがバレて、言い訳をする暇もなく正座で説教されて修行でこつてり絞られた。

更には時の庭園であつたこともバレていたらしく、余計にゴゴゴコにやられた。その後何故かキスを皆にせがまれた。

……その時の皆は目が血走っていても怖かった。

後日、俺の知らない間に俺と一緒に寝る当番なるものが決まっていたらしく、毎日強制的に誰かと寝る羽目になった。

………何故に？

魔法少年始めました！

魔法少年始めました！

S i d e 空

フェイト達が家に来てからしばらくした頃。今日も今日とて修行で扱かれたあと、突然琴里に言われた。

「空、学校に通いなさい」

学校、ねえ……。

「嫌です！ メンドイです！」

一秒ほど考えて即刻断った。

「もう手続きはしてあるから無理よ」

なん……だと……ッ!? いつの間そんなことを！

「はい、これ制服。着てみなさい。私は外にいるから着替えたら呼んで」

琴里から渡された紙袋の中には制服が入っていた。

学校の名前は——私立聖祥大附属小学校。このへんじや結構頭良い学校だったはず。

着替えが終わった俺は一旦部屋の外で待っていた琴里を呼んだ。

「着たよー」

「へえ、中々似合ってるじゃない。サイズも大丈夫みたいね」

「そうだね。でもピッタリ過ぎない?」

「あなたを転生させた神様が送って来たのよ」

あー、それなら納得。天照様が全部やってくれたんだね。

「他には何か入ってなかった?」

そう言われて、袋の中を見てみると手紙と銀色の細い腕輪が入っていた。

「手紙と、腕輪? 何だろこれ」

「それは後にして先に手紙を読んでみたら?」

腕輪は気になるけど、仕方がないから後回しにして手紙に目を通した。

『空さん、お久しぶりです。転生してからいかがお過ごしでしょうか』

毎日皆と楽しく過ごしていますよ。

前回と同じく会話が出来る手紙のようだ。

『そうですか。それは良かったです』

それで、俺に学校行けってどういうことですか？

『これはどの転生者にも送っているのですよ』

あーそういうことですか。分かりました。

『それとあなたにはデバイスをお渡しするのを忘れていたので入れておきました』

デバイス？ ああ、この腕輪ですか？

『はいそうです。その世界では必要になるはずですからなるほどなるほど。』

『使い方はプレシアさんにでも聞くといいでしょう』

どうしてプレシアさんの事知ってるんですか？

『空さんのことはいつも見守っていますから』

アハハ、なんか恥ずかしいです……。でも、ありがとうございます。

『それでは、これで失礼します』

手紙にそう書きこまれた瞬間以前と同じように燃えて消えてしまった。

「で、神様は何て言ってたの？」

手紙が消えたのを確認したのを見計らって琴里は声をかけてきた

「これ、デバイスって言うんだって。使い方はプレシアさんに聞けて」

腕輪を琴里に見せながら教えた。

「それが良いわね。私達じゃ教えられないから」

どこか申し訳なさそうに答えていた。力になれないことが嫌なのだろう。

「そんな申し訳なさそうな顔しないでよ。琴里達には修行相手になつてもらってるから。それで十分だから。じゃあ、早速聞いてくるよ」

俺は腕輪を持ってプレシアさんのところに向かった。

「それがあなたを転生させたっていう神様から貰ったデバイスね？」

「はい、そうです」

答えてからプレシアさんにデバイスを渡した。

ちなみにプレシアさん達には俺が転生者であることを特に隠す必要がないから話している。信じられてない気もしたが俺自身も未だ実感がわからないからあまり気にしていない。

「これは……！」

デバイスを見ていたプレシアさんが驚いたような声を出した。

「すごいわねこのデバイスは。ミッドチルダの技術でもここまで行っていないわ」

まあ、神様が作ったからね。そりゃ、すごくなるでしょ。

「それで、使い方を教えて欲しいんですけど……」

デバイスを見ることに夢中になっていたプレシアさんに恐る恐る声を掛けた。

「ごめんなさいそうだったわね。そうね……今リニスがフェイトとアリシアとアルフの三人に魔法のことを教えていると思うからリニスの部屋に行ってみなさい。フェイトも丁度デバイスが出来て使う頃だと思うわ」

「わかりました。ありがとうございます」

今度はリニスのところに向かおうとしたところで、

「その制服、似合っているわよ」

後ろからプレシアさんに言われた。

「ありがとうございます！」

笑顔でお礼を言っただけで部屋を出た。

「事情は分かりました。それでは教えましょう」

リニスに説明をするとすぐさま理解してくれた。

「うん、お願いします」

「空のデバイスってその腕輪？」

フェイトが俺の持つ腕輪を指差して尋ねてきた。

「うん」

「名前はなんていうの?」

「名前? 無いけど。フェイトのはあるの?」

「バルディッシュユって名前があるよ」

フェイトは手に持っていたペンダントを見せてくれた。

《初めまして。バルディッシュユと申します。マスター共々よろしくお願ひします。——旦那様》

その場の空気が凍った。

……………へ? 旦那様? 俺が?

「ななな、何言ってるのバルディッシュユ!」

フェイトが顔真っ赤にしてバルディッシュユに怒鳴った。

「そうだよ! 空は私の旦那様なんだからね!」

「アリシアも何言ってるんだよ!」

俺がいつアリシアの旦那になった!?

「フェイトというものがありませんながらアリシアと浮気かい!? 許さないよ!」

「アルフも何勘違いしてるの!」

「そ、そうだよ! 変なこと言わないで!」

「はあ……そろそろ説明したいのですが……」

リニスがどこか疲れた様子で言ってきた。

「あ、ごめん……」

「いえ、悪いのはバルディッシュユですから。それでは起動させましようか」

「はーいって言いたいけど、どうやって起動させるの?」

「目を閉じて集中して下さい。そうすれば起動パスが頭に来るはずですよ」

俺はリニスに言われた通りにやってみた。

「……我、目覚めるは、覇の理を神より奪いし二天龍なり——」

『おい! それは覇ジャガーノート・ドラインフの呪文だろうが!』

フェイト達にも聞こえる声でドライグが突っ込んできた。

彼らのことも説明済みなので驚かれることはない。

彼らのことも説明済みなので驚かれることはない。

彼らのことも説明済みなので驚かれることはない。

彼らのことも説明済みなので驚かれることはない。

「おお、いっけね。では、気を取り直してもう一回」  
深呼吸をしてから改めて唱えた。

「——我、二天龍従えし者なり」

「契約の元、その力を己が手で示せ」

「絆は無限に、願いは夢幻に」

「蒼天の希望はこの魂に」

「この手に輝きを！」

「ブレイブハート、セットアップ！」

起動パスを言い終わると同時に俺の体は蒼白い閃光に包まれた。

光はすぐに収まり、俺の服は学校の制服から紺色メインで所々に赤、青、黄の刺繍が施されているフード付きの半そでの上着に、七分丈程のズボン、手には指抜きグローブ、靴は黄色いシューズになっていた。

「え!? 服が変わった!?!」

「その服はバリアジャケットと呼ばれる防護服のようなものです」

リニスが俺の服装について説明してくれた。

「な、なるほど……」

「おう! カッコイイ!」

「うん、とつても似合ってるよ!」

「ああ、いいんじゃないか!」

皆が似合っていると喜んで嬉しかった。

「これで魔法が使えるんだよね?」

「ええ、そうです。ですが、その前にデバイスの設定をしなければなりません」

えー、これだけじゃダメなのか……。

肩を落としながらそんなことを考えていた。

《大丈夫です。そこまで難しいことはありませんし、時間は掛かりません》

突如、知らない声が部屋に響いた。

「今の誰の声だ?」

キヨロキヨロ周りを見ても皆違うと言わんばかりに首を横に振った。

「恐らく、いえ間違いなくその腕輪ですね」

リニスが腕輪を指さしながら結論付けて言った。

《はい、そうです。私はマスターのデバイスのブレイブハートと言います。以後お見知りおきを》

「あ、こちらこそよろしくお願いします」

思わずデバイスに向かって一礼をした。

《では設定をしましょう。まずは愛称を決めて下さい》

愛称、か……ここはシンプルでいいか。

「愛称はブレイブにするよ」

《了解しました。次に、私に魔力を送って下さい。マスターの登録と魔力量の測定をします》

俺の魔力がどのくらいあるか気になるな。

「了解」

短く答えて、魔力？ らしきものをブレイブに送ってみた。

普段、使ってるかどうかかわかんないから流れてるかどうかかわからないけど。

《ありがとうございました。登録完了。魔力量測定中………測定終了。魔力量はS+といったところですね》

『S+!?!』

おお、びつくりした！

皆がいきなり叫ぶから耳が地味に痛い。

「S+ってそんなにすごいのか？」

皆があまりに驚いていたので理由を尋ねた。

「すごいだけで済まされませんよ！ S+なんて滅多にいないんですよ!?!」

「フェイトでもAA+なのにそれ以上……」

「しかも、それ以外にロストログア並みの力があるし……」

「チートやチート！ チーターや！」

四人共興奮したように言ってきた。S+というのはそこまですご

いモノらしい。

「……そこまで言う？ あと、何故に関西弁……。それにチートって言うなら十香達でしょ。俺、未だに勝てないからね」

十香達は流石精霊って感じかね……。

それからこの魔力量は特典の『成長限界無し』のおかげだと思っ。十香達との修行で無意識に魔力で身体能力を強化していたとドライグ達が言っていた。

「それでもです！ というかあなた達がおかし過ぎるんです！」

「それは、ほら、俺って転生者だし仕方ないと思うんだ」

「まあ、確かに……」

その他の皆も渋々納得してくれた。

「と言うことで俺のチートについてはここまで。待たせてごめんねブレイブ。続きお願いね」

俺はそこで話を切り上げて、ブレイブの設定の続きを頼んだ。

《いえ、問題ありません。最後に私の武器形態を設定して下さい》

「武器か……」

基本的には神セイクリッド・ギア器で格闘、槍、剣だけど、遠距離も出来るし、精霊の力でも色々出来ちゃうからそんなに武器って言われてもなあ……。「うーん、じゃあ銃にしてもらえる？」

悩んだ末に狂三の力でしか使わない銃にした。

《どんな銃がいいか頭にイメージして下さい》

こんな感じかな……。

イメージが伝わったのか、左手にあった腕輪が形を変え、俺の手にすっぽり納まる銃になった。

《イメージと同じですか？》

「うん、バッチシ！ すごいね！ ピッタリの大きさだし！」

《それは良かったです。以上で設定終了となります。お疲れ様でした》

ブレイブが労いの言葉を掛けてきたので俺もブレイブを労った。

「ブレイブもありがと。お疲れさま」

《これくらいは当然ですよ。マスターは早速魔法の練習に入られます

か?》

「基礎程度の魔法なら練習しようかな。あとは君の使い方も知りた  
い」

《わかりました。場所はどちらで?》

「トレーニングルームが地下にあるからそこにするよ」

《どのようなメニューにしますか?》

俺は魔法に関してはまだ素人だからメニューは決められないな。

「リニス、どうしたらいいかな?」

リニスに助けを求めるとすぐに答えを出してくれた。

「それならフェイトと戦闘訓練をしてみませんか?」

普段十香達としか戦ってないから偶には違う人もいいね!

「うん、俺は賛成! フェイトはどう?」

「私も構わないよ」

フェイトも快く賛成してくれたので皆でトレーニングルームに向  
かった。

俺とフェイトがバリアジャケットを着て、互いに向かい合った状態  
で立っていた。

「二人とも準備はいいですか?」

審判役を務めるリニスが聞いてきた。

『うん!』

「それでは、始め!」

始めの合図とほぼ同時にフェイトは突っ込んできた。

S i d e o u t

S i d e r i n i s

私——リニスは空とフェイトの試合の審判をしています。

私の試合開始の合図とほぼ同時にフェイトが空に突っ込んで行き  
ました。

「はああああッ！」

良い動き出しですね……。彼女に魔法を教える師としては嬉しい成長です。

空の実力はあまり分かりませんが、あの速さなら防ぐのは難しいでしょう。

一撃で試合が終わってしまう可能性もあると考えていたが、私の予想は大きく外れた。

「ほいっとな」

フェイトが切りかかって来たのを空は少し体をずらして意図も容易く躲した。

『え!?!』

ここにいる、戦っているフェイトも含めて皆が驚きの声を上げていた。

あの速さの動きが視えているというのですか!? ……いや、そうか。空は十香さん達と修行していると言っていたから彼女達の速さに慣れてる。フェイトの攻撃くらい見切れるのか。

「くッ！ てやッあああああああ！」

「ほい、ほい、ほい」

その後も空はフェイトの攻撃を簡単に躲し続けていた。

これが空が言っていた神セイクリッド・ギア器の力……。でも、その可能性はありませんね。空はここに来る途中で神器や精霊の力は使わないと宣言していましたから。それなら、まだ別の能力がある、ということでしょうか……。試合が終わったら聞いてみましょう。

一旦、空について考えることを止めて二人の試合を見ることにした。

フェイトは近接攻撃が当たらないので距離を取り、遠距離攻撃をしようとした。

空は追いかける気が無いかその場に立ったままだった。

……恐らく、フェイトがすることが気になるんでしょうね。

フェイトが魔法を放った。

「フォトンランサー！」

《Photon Lancer》

これはフェイトが最初に覚えた魔法ですね。体の周囲に生成したフォトンスフィアから、槍のような魔力弾を発射する直射型射撃魔法です。

今のフェイトではまだそんなに数は出せませんが速さは十分です。

フェイト自身のスピードよりも速いし、連射も可能なので今度こそは躲すのは無理なはず！

放たれた8本の黄色い槍は空に真っ直ぐに向かった。

Side out

Side 空

「(一応見聞色でさっきみたいに躲せるけど、そろそろブレイブも使うか。)へブレイブ、銃の弾丸みたいなのって撃てる?」

ブレイブに念話で聞くと「可能です」と返って来た。

「(なら、漫画の技やってみよ!)」

俺は向かってきた黄色い槍に向かってブレイブを構えて素早く引き金を引いた。ブレイブから放たれた小さな弾丸は、槍の先端部分に当たるとガラスが割れるような音と共に二つの攻撃が消えた。

おお、出来た! 銃弾撃ち!

まだ試合中なので声には出さなかったが、心の中でガッツポーズをしていた。

「よし、このまま行くよー!」

フェイトは防がれたことに驚いていて反応が遅れて、俺が接近して再び撃った弾丸を躲せず、そのまま直撃してその場で倒れた。

「試合終了です」

フェイトが立たないことを確認して試合の終わりを告げた。

「フェイトは大丈夫?」

「ええ、少しすれば目が覚めます」

フェイトのことが心配になり、かなり不安になったが、大丈夫だと

言われて安心した。

そしてしばらくしてからフェイトも起きてさっきのことを聞かれた。

「それにしてもどうやってフェイトの攻撃を躲し続けることが出来たんですか?」

「あ、私もそれ気になってたんだ〜!」

「最後のフェイトのフォトンランサーもあんな小さな弾丸でどうやってたんだい?」

「そんなに難しいことでもないよ。十香達の方がまだ速いし、力もあるから、フェイトはちよつと速いくらいで視えるよ。それに見聞色の覇気で簡単に避けれるよ。で、あの槍はただ魔力を小さく圧縮して密度を濃くした奴をぶつけて相殺しただけ。ね? 簡単でしょ?」

『へえ〜確かに簡単そう……じゃない!』

四人共納得していない様子だった。

「え、そう?」

そこまで難しいこと言ったかな?

「十香達との修行で空がフェイトの動きが視えるのはわかりました。ですが! 見聞色の覇気って何ですか!? しかもいきなり魔力のコントロールなんてまだ知らないはずなのに!」

「魔力のコントロールはブレイブが全部やってくれたんだけど……覇気についてこの間説明しなかったっけ?」

「してないよー!」

アリスアにまったくもって言われてないと否定された。他の三人も頷いていた。

「それなら説明するよ。簡単に言えば、覇気っていうのは人間に潜在する力のこと。武装色、見聞色、霸王色の三色に分けられるんだよ。武装色は体や武器に纏わせると威力を上げたり、実体のないものでもいいのかな? まあ、炎とかゴムの体で出来たらダメージが通るって感じ。見聞色は気配を感じ取ったり、相手の動きを読めたりするんだ。それから三つ目の霸王色は、使える人がそんなにいないけど、威圧の力で弱い相手なら気絶させるぐらいは出来るよ!」

「……なるほど、大体はわかりました」

「それは私も覚えられるの？」

「そのはずだよ。もしフェイトが覚えたいなら教えるよ」

「私も教えてね！」

「あたしも！」

「りよーかーい」

そんな約束をして部屋に戻ろうとした時、

「む、空ではないか！ どうした？ 修行でもしていたのか？」

上の階から十香がやって来た。

「そうだよ。デバイス貰ったからフェイト達と戦闘訓練してたんだ」

「ふむふむ、ならば次は私の番だな！」

うんうんと頷くと戦闘準備を始めた。

「えっ」

これはやばいな……冷汗が頬を伝っていくのがわかる。

「あ、あのそろそろ部屋に戻ろうかなって思ってたんだ。だから、また今度に……」

何とか避けねば！ 俺が死んでしまう！

「……ならば、仕方がないな……。私も戻るとしよう……」

かなり落ち込んだ十香は悲しそうな表情をしていた。

うっ……罪悪感がハンパない……。はぁ……腹括るしかないか……。

「ち、ちよつと待って！ 十香！」

「ぬ？ どうしたのだ？」

「魔法の特訓に手伝って欲しいんだ」

「だが、先程は戻ると言っていたではないか」

「十香にどのくらい通じるか試したいんだよ。……ダメ、かな」

「そんなことはない！ もちろんいいぞ！」

十香は目を輝かせ、首を縦に振っていた。

「ありがとう！」

魔法だけでどれくらい持つかかな？

《マスター頑張ってください》

「うん……死なないように頑張る」

「空！ 早くやろうではないか！」

すでに霊装を着て準備万端の十香は俺を待っていた。

「よし、龍神空！ 逝きます！」

《マスター字が違います》

それは気のせいだ！

ブレイブの突っ込みに心の中で返し、十香と戦った。

結果は――

――手も足も出ず、ボコボコにされました。

俺と十香の戦闘を見ていたフェイト達はポカーンと口を開けていた。

「空ってかなりすごいと思ってたけど……」

「この戦闘見ると……」

「十香って……」

「いえ、十香だけでなく、恐らく他の精霊の皆も……」

『チート過ぎるでしょ!!』

こうして俺、龍神空は“魔法少年”となったのである。

学校行きます！

学校行きます！

Side空

俺がデバイスを貰い魔法少年になった。そして、神様によつて学校に行くことになってしまった。

フェイトとアリシアも一緒に通うと思っていたけど、まだ日本語の読み書きができないから、勉強してから学校に通うことになった。

「今日が入学式か……」

現在、学校までの通学バスに向かいたいところだけど、途中にあるのはの家に向かっている。

理由は俺が聖祥に通うこと高町家に教えたら、なのはも同じ学校に通うらしく、なのはに「一緒に行こ！」と言われた。

通学路の途中に高町家があつて断る理由もないのでOKを出した。

《不安ですか、マスター》

俺のつぶやきが聞こえたのか心配してきたデバイスのブレイブ。

「まあね。……友達出来るかね？」

《マスターの不安はそこですか!?!》

珍しく声を上げて、突っ込んできたことに内心驚いた。

「え、普通そうでしょ？」

《……他の転生者について気にならないんですか?》

ブレイブは呆れが混じった声で聞いてきた。

「そりゃあ気になるよ。同じ転生者として友達になりたいし」

当然とばかりに答えたが、また呆れられた。

……何故に？

《はあ……もういいです……。それよりも高町家に着きましたよ》

ブレイブと話しているうちにいつの間にか高町家の前に着いていた。

「そんじゃ、ブレイブはしばらくスリープモードね」

《了解しました。何かあれば起こしてください》

それっきりブレイブからは反応がなくなった。

俺は高町家のインターホンを押した。すると、扉が開き——口ケツトが飛んできた。

「ぐふッ！」

見聞色を使ってなかったので油断しきっていた俺はモロに体当たりを喰らって倒れた。

「おはよう！ 空君！」

俺を殺った犯人——高町なのは俺に抱き着いたまま元気に挨拶してきた。

「う、うん、おはよう。出来ればすぐに離れて欲しいな」

「今日から一緒の学校だね！」

「うん、そうだね。だから、離れて欲しいんだけど」

恭也シズコンさんの殺気がやばいから……。それから、後ろの三人は笑ってないで助けて下さい！

「学校すっごく楽しみ！」

「うん、そうだね！ だからいい加減離れてくれないかな！」

この子はさつきから無視し過ぎだと思うんだ！

「ふえ？ ……ぐ、ごめんなさい！」

三度目にしてようやく気が付いたなのは慌てて離れた。

「二人共、事故には気を付けてな」

「私達も後から行くからね」

「終わったら翠屋でお祝いだよ！」

精霊やフェイト達も後から来ると言っていた。

『行つてらっしゃい！』

『行つてきます！』

元気よく手を振ってから、なのはと並んで歩き始めてバス停に向かった。

学校に着いた俺となのははクラス分けの書かれた掲示板の前이었다。

「俺は1年……3組か」

「私も3組だったよ！」

お、なのはも一緒か！ それは良かった！

「じゃあ教室行こっか」

「うん！」

教室に入りこのクラスの担任の先生——おかみねたまえ岡峰珠恵先生が入学式の説明をしていた。俺はその名前を聞いた瞬間叫びたくなるのを堪えて説明を聞きつつもクラスを見渡してみた。

うん、このクラス黒髪少ないね……俺ぐらいじゃないかな？

カラフルな髪の色をしたクラスメイト達に若干の疎外感を感じた。更に驚くことに、隣の席を見ればどっかで見たことがあるような顔だった。

ダークカラーの強い銀髪に俺と同じ透き通った蒼い眼をした美少年。

うん、完全にヴァーリ・ルシファーだよね!?

でも悪魔っぽい感じはしないんだよね。

もし彼が本人で悪魔だというなら聖槍や聖杯があるのに何も感じないわけがないからね。

考えごとをしていたら先生の説明は終わったらしく、廊下に並んでと言われた。

「俺は龍神空。君の名前は？」

立ちながらさりげなくヴァーリもどきに聞いてみた。

「俺？ 俺は——ヴァーリ・ルシファーだ」

まさかの同じ名前だったー!?! え、マジで本物!?! いや、いや、同姓同名だつてあるからまだ本人と決まったわけじゃない!

「そ、そっか！ あ、俺のことは空って呼んでね！」

「なら俺もヴァーリって呼んでくれ。苗字はそんなに好きじゃないんだ」

ん？ どうして？

俺が不思議そうな顔をしてたのかヴァーリは教えてくれた。

「ほら、ルシファアって中二病みたいだろ？」

「あー……そういうことね。でもさわかる人なんてそんなにいないんじゃないの？」

この年でそれを知ってるヴァーリはどうなんだ？　もしかしてヴァーリの父親って……。

「ハハ、それもそうだな」

「まあ、俺はヴァーリって呼ぶさ。これからよろしく！」

「こちらこそよろしく、空」

それから二人で体育館に入場するまでしゃべっていてかなり仲良くなっていた。

体育館に入り、保護者の横を通る瞬間――。

「ヴァーリ！　ちゃんと父さんはお前を撮ってるからな！」

中年ぐらいのちよい悪風のおじさんが人目も気にせずに立ち上がり、ヴァーリにビデオカメラを向けていた。

「呼ばれてるよヴァーリ」

からかいを込めてヴァーリに言ってみたら、本人は相当恥ずかしくて耳まで真っ赤にしていた。

「アザゼル……あとでシバく」

え!?　やっぱリアザゼルなの!?

「アハハ……」

アザゼルにご愁傷さまと心の中で言っていたらまた声が上がった。

「あ！　空だ！　おーい！」

げっ！　アリシア！　しかも隣には皆が並んで座ってる！

「ホントですう！　だーりんカッコイイですう！」

美九、外でだーりんって呼ばないで！　周りに勘違いされるから！　その後も十香や耶？矢、よしのんなどが声を掛けてきたが恥ずかしくて全部無視した。

「呼ばれてるぞだーりん」

さっきのお返しで今度は俺がからかわれた。

「……男に言われると寒気がするよ」

はあ……俺もヴァーリと同じで耳まで真つ赤なんだろうな……。  
というかこの場に在る全員が美少女集団十香達に目がいっちゃってるね。  
俺の名前と顔が知られたらメンドイことになりそう……。

そんな恥ずかしい体験をしながら入学式を終えて、教室に戻り自己  
紹介になった。

ちなみに、体育館から戻る途中なのはから金髪ヘアの女の子とどんな関係か

笑顔なのにすごい怖い顔で問い詰められた。

あとで紹介すると言つて何とかその場は収まった。

そう言えば、なのはにフェイト達のこと紹介してなかつたな。すっかり忘れてた。

自己紹介で気が付いたけど一年前にケンカしていた金髪君と赤髪君がいた。

金髪君——王城雄人おうじょうゆうとは前、なのはに俺の嫁発言していたけど今回はなのはに会つても何も言わなかつた。

一方、赤髪君——正田輝義まさただてるぎは将来は正義の味方になりたいみたいなことを言つていた。

なのはは隣の席の女の子——天河愛衣あまかわあいと仲良くなつていた。  
「このクラスは中々面白い人がいるんだね」

「ああ、そうだなだーりん」  
「だーりんやめろ」

いつまで言い続けるんだよ！

ヴァーリと話していたら、俺の右隣の席から声が掛かつた。

「もしかして二人はその、そう言つた関係なの？」

明るい茶髪の女の子——結城明日奈ゆうきあすなが気まずそうにしていた。

「いえ、全然まったくもつてこれぼっちもそんな関係じゃないよ」

「俺もそんな趣味はない」

きつぱり二人共否定した。

「でも、だーりんってことはそうじゃないの?」

「それは空の家族がそう言ってたからフザケて言ってるだけだ」

明日奈はヴァーリが理由を説明してようやく納得してくれた。

「ああ! 君がだーりんって呼ばれてた人なんだね!」

「まあ、一応そうだけど」

すごく恥ずかしい思いしたけどね。

「じゃあ、あの人は君の恋人なの?」

「まさかー。歳が離れすぎでしょ。それにあの人は俺のお姉ちゃんだから」

「ふーん、そうなんだ。で?」

「で?」

なにが、で? なんだろうか。

「二人は結局どんな関係なの?」

あ、そういうことか。そんなん決まってるよ。

『友達だよ』

自然とヴァーリと声が重なった。

「そっか。なら私も二人の友達にしてもらってもいいかな?」

「えー? 違うないか?」

「……? なにが違うの?」

明日奈はどうしてと言わんばかりの顔をしていた。

「友達ってそうやってなるもんじゃないと思うんだ」

「ああ、俺もそう思うな」

俺達の物言いに怪訝そうな顔をする明日奈。

「じゃあ、どうしたらいいの?」

「名前だよ」

「名前?」

「俺は龍神空。空って呼んでね。君の名前は?」

「俺はヴァーリ・ルシファーだ。ヴァーリって呼んでくれ」

明日奈はようやくわかったのか、顔を輝かせて言った。

「私は明日奈。結城明日奈だよ。よろしくね! 空君! ヴァーリ君!」

『よろしく！ 明日奈！』

やった！ 学校で二人目の友達が出来た！

再び明日奈を交えて話していると、今度は俺の前の席から声が掛かった。

「三人はもう仲良くなったんだね」

前を見るとなのはのような焦げ茶の髪色で短いポニーテールの女の子——八神<sup>やがみ</sup>あかりがいた。

「君は八神あかりって名前だよね？」

魔力がこの子から感じられる。もしかして転生者かな……？

「そうだよ。よく分かったね」

「そりやあクラスメイトの名前ぐらい覚えるよ」

「……もしかしてもう全員の名前覚えたのか？」

「そうだよ」

『え!? たった一回聞いただけで!?!』

そろって三人が信じられないと言わんばかりに声を上げた。

「そんなに驚くこと？」

「普通はそんなすぐには覚えられないよ！」

「まあまあ落ち着いてよ。そんなに大した事でもないから」

「いや、かなり大した事だと思うよ……」

「いいのいいの。取りあえず君はどうするの？」

俺はあかりの方を見て聞いた。

「私も友達になりたいな」

「なら、わかってるでしょ？」

「もちろん！ 八神あかりです！ よろしく！ もちろん名前が良いからね！」

『よろしく！ あかり（ちゃん）！』

そしてしばらく四人で会話していたら、なのはがやって来た。

見慣れない顔ぶれに戸惑うも口を開いた。

「空君、そろそろ外に行かない？ 皆が待ってると思うから」

あ、皆のことすっかり忘れてた。

「わかった。そうだねそろそろ行こう。三人もどう？」

三人も「いいよ」と返事をしてくれたのでなのは達は自己紹介を交えながら外に向かった。

外に出ると、龍神家に住む皆と高町家が集まっていた。

うん、美男美女が集まってすごい注目浴びてるよ。少し近づくのを躊躇うぐらいに……。

「む、空ではないか！ 待ちくたびれたぞ！」

一番に気付いた十香が俺のところに来るとそれに気付いた他の皆も自然と俺の方にやって来た。

「ごめんごめん。友達と話してて忘れてたんだよ」

「もう友達が出来たのだな！ 良いことだぞ！」

遅れてきたことに特に怒ることもなく、むしろ俺に友達が出来て喜んでいた。

「うん、この三人が新しい友達だよ」

俺は皆に三人を紹介した。

「主役も集まったことだし早速撮ろうか」

士郎さんがカメラを出して準備していた。

「あ、待っててください。私の妹がいるんです。一緒に良いですか？」

「ああ、構わないよ」

「この人混みだと大変そうだから俺も行くよ。特徴教えて」

「私に似ててショートカットに車椅子の子なんだ」

車椅子……下半身不随かな……？

「わかった。それだけ分かれば十分だよ。……魔獣創造」

俺は神セイクリッド・ギア器をこっそり使い、小さなネズミを三匹創ってあかりの妹を探させた。

数十秒後に一匹のネズミが戻ってきて場所を教えてくれた。

「ありがとうね」

『キューー』

お礼を言ってからポンつと音を立てて消えた。

俺はネズミが教えてくれた方にあかりを呼んでから向かった。

「あ、いたいた！ はやてー！」

はやてと言われた少女はこちらに気付いた。

「ん？ あ、お姉ちゃん！ もう探したで！ どこ行ってたん？」

「ごめんね、友達が出来て浮かれちゃって……」

あかりが苦笑いしながら妹に謝っていた。

あかりは標準語ではやてと呼ばれたあかりの妹は関西弁なのはどうしてだろう？

「ああ、その人が友、だ……」

俺を見てフリーズしていた。

あれ？ 俺、そんなに変だったかな？

「はやて？ あ、彼が友達になった龍神空君だよ。これから写真一緒に撮りに行く」

「た、龍神君、やね……」

「別に苗字じゃなくていいよ。気軽に空って呼んでね」

一応怖がらせないように笑顔で言ってみただけど、

「は、はい！ じ、じゃあ私のこともはやてって呼んでください！」

あ、噛んだ。すごく恥ずかしそうにしてる。それと、なんで敬語？

もしかして人見知り？

「よろしくね、はやて。あと敬語はいいから」

「よ、よろしくですー！」

はやては顔を真っ赤にして頭を下げた。

「ホントにどうしたの？ はやてらしくないよ」

「だ、だって……」

顔を俯かせてから時々俺の様子をチラチラと見ていた。

……？ 何かのサインかな？ それとも俺が何かした？

「えーと、取りあえず皆のところに行こっか」

「うんそうだね。はやてもいいよね？」

「う、うん、もちろんいいで」

三人で人混みに苦戦しながらも皆のところに戻り、はやてを紹介して、俺達が探している間に明日奈の両親やアザゼルさんも合流していたので挨拶をしてから写真撮影を始めた。

まずは入学した俺達が五人で並んで撮った。その後はなのはやヴァーリ、フエイト、アリシア、各精霊達の順にツーショットで撮っていた。

あと何故か、はやてに顔を真っ赤にしながらツーショットを頼まれた。

そして最後に家族写真をそれぞれ撮って撮影は終わった。

それから桃子さんが翠屋にヴァーリ達を誘ったら皆も行くことになったのだった。

翠屋で修羅場です！

翠屋で修羅場です！

S i d e 空

『……………』

さつきまで仲が良かったはずなのは、フェイト、アリシア、はやての四人がただ無言で座っていた。

ヴァーリ達も一言も発することなく四人を見守っていた。

予定よりも人数が増えたので俺が桃子さんの手伝いをしていただけ、俺のいない間に何があったんだろう？

皆の親は子供の自慢話をしていてこっちの様子に気が付いてないみたい。精霊の皆も心なしか不穏な空気になってるし……。

状況がよく分かってない俺は一部始終を見ていたであろう、ヴァーリに聞いてみた。

「ヴァーリ、俺がいない間に何かあったの？」

「……あつたさ。お前がいない間に色々……」

ヴァーリはどこか達観したような表情で俺に返してきた。

S i d e o u t

S i d e ヴァーリ

俺——ヴァーリは人生で初めて修羅場というのを見た。

そして、それは恐怖でしかなかった。

女とはここまで変わるのか、と。

それは、遡ること1時間ほど前のことだった。あかりの何気ない一言がきつかけだった。

「フェイトちゃんとアリシアちゃんって空君と仲がいいみたいだけど、どんな関係なの？」

「あ！ 私もそれ気になってた！ 教えて！」

確か……空の幼馴染の高町、だったな。まだあまりしやべってなかつたな。

あかりの質問に高町が「私、気になります！」みたいな感じで声を上げた。

アイスクリームは無いぞ。ん？ 俺は一体何を言ってるんだ？

「ふっふっふ！ 空と私はねー将来を誓い合った仲だよ！」

——ブチッ！

その発言で俺達は固まった。それからどこから何かが切れる音がした。

「じゃ、じゃあ婚約者ってことなのかな？」

俺達の中で比較的に影響の少なかつた明日奈が聞いた。

「うん、そんな感じ！」

そうなのか、と俺が納得しかけたとき、

「アハハ、アリシアちゃんは冗談が上手いんやなー。騙されかけたでー」

全く信じてないのか、あかりの妹のはやてが冗談はよせとばかりに笑っていた。

「そうだよ。空君がアリシアちゃんとなんてねー」

「姉さん、あんまりウソは良くないよ？」

高町とフェイトもはやてに続いて笑っていた。光の消えた瞳で。

——ブチッ！

また変な音が聞こえた。

さつきからこの音は一体……。

「冗談じゃないよー。だって空とはよく一緒に寝るもん」

そのぐらいいたら良くあることじゃないのか？ 俺もよく……

いや、これはいいか。でも、それだけで婚約者って言えるのか？

「それなら私だってあるよー！」

「私だってー！」

「さ、三人とも羨ま……けしからんでー！」

……言い直せてないぞ。というか、はやてはもしかしてそういうことなのか？

隣に座るあかりに小声で聞いてみた。

「なあ、あかり。はやてつて空のこと……」

「多分……いや間違ひなく惚れてるね。しかも一目惚れだと思う」

「……そうなのか。一目惚れつて本当にあるんだな……」

俺が軽く驚いていると話は益々大変になっていた。

「わ、私、空とキスしたことあるもん！」

うわー、これはすごいこと言ったなあ。言った本人は真っ赤だし。

あ、明日奈もあかりも耐性が無いのか真っ赤になってた。

フェイトの発言に高町とはやては何も言えなくなつてしまつたが、アリシアは違つた。

「あれは事故でしょ？ それにキスぐらい寝るときにいつもしてるし」

「え!? 私初めて聞いたんだけど!? いつの間に!」

「空が寝てるときにこつそりとね。つまりそういう仲なんだよ」

それつて襲つてるようなものじゃないか？ まあ、俺にはよく分かるんが。

「そんなの余計に認められないよ！」

「そっだよ姉さん！」

「そっや！ しかも寝ているときになんて羨ま……羨まし過ぎるで！」

今度は言い切りやがつた……。はあ……空、早く戻つてこいつらを止めてくれ……。この空気は俺には耐えられない……。

それから更に会話はヒートアップしていった。

途中で俺や明日奈が宥めようとしたのだが、四人ほぼ同時に「黙つてて！」と言われて、

ただ見ているしか出来なかつた。しかも、ここでまたあかりの発言で場の空気が悪くなつた。

「空君つてあんなに綺麗なお姉さん達がいるから、その中の誰かが好きとか結婚したいとかつてあるんじゃない？ とうか、空君本人に聞いてみたら？」

その言葉に四人は黙り込んでしまつた。

確かにそれは考えられなくもないな。

あんなに綺麗な人たちがいれば誰だってそうなるんじゃないのか？

俺はそんなことを考えていたら、空がようやく戻って来た。

そして、冒頭に戻る。

Side out

Side 空

ヴァーリから大まかに事情を聴いていたけど、原因は俺ってこと？

でも、今は――

「おやつ食べよっか！」

『空気読め！』

おお！ 息ピツタリ！ もう仲良くなったんだね！

「なら、俺はその幻想空をぶ『言わせねーよ！』……答えは『聞け！』……だが『だが断る！』先に言われた!？」

俺の漫画で覚えたネタを言いきれず皆に遮られ続けた。

「俺の辞書に空気を読むという文字は『今すぐ書け！』……皆、中々やるね……」

『空（君）の所為だ！』

「よろしいならば戦争ゲーム『するか！』……もう、我が儘だなあ……。まあいいや。とりあえず……これでも食らえ！」

俺は一番近くにいたヴァーリの口に切り分けたケーキを突っ込んだ。

「ツ!? ……う、美味しい！」

一口食べてよほど美味しかったのかすぐに食べ終えてしまった。

「ふっふーん♪ 俺も結構自信あったんだ！」

「空君がそのケーキ作ったの!？」

「そうだよ。皆もどうぞ召し上がれ！」

そうやって俺はテーブルに色とりどりのケーキを置いた。

『いただきます！』

全員がケーキを口に入れると美味しいと言っていくれた。  
桃子さんから教わった甲斐があったよ。

「それは良かった。じゃあ俺はお姉ちゃんのところに行ってくるね」  
見事にごまかせました。

離れること皆に告げて俺は十香達のいるテーブルに向かった。

「ケーキ作ったんだ。もし良かったら食べてよ」

「うむ！ 頂こう！」

一番に食いついたのは、やはり十香だった。

「空、ここに座って」

折紙は自分の膝の上をポンポンと叩いてここに座れと示していた。

「うん、わかった」

俺は躊躇うこともなく膝の上に座った。

なんか、最近皆の好意に甘えることが多い気がする……。

「大丈夫、問題ない。むしろもつと甘えるべき」

「サラッと心を読まないでよ……。ところで、なんでそんなに不安そうな顔してるの？」

「原作の事ですわ」

狂三が困ったように頬に手を置きながら告げた。

「そーいや俺って原作壊したんだっけ？」

「ええ、しかも今度は八神はやてにも出会うなんてね」

「え!?! はやても原作キャラなの!?!」

向こうには聞こえないように出来るだけ声を抑えて叫んだ。

「そうですね。でも、あのあかりさんという方は……」

「恐らくだけど、転生者だろうね。何となく視られてた気がするんだ」

「じゃが、むくは悪い娘ではないと思うのじゃ」

「そうだね。俺も今日話してて思ったよ」

「それに今の空なら大抵のものには負けないでしょ」

「同意。耶? 矢の言う通りです。空には私達があります。一応神(笑)や自称最強(笑)の天龍もいますから」

『誰が神（笑）ですか!?!』

『俺達にも（笑）をつけるな!』

「驚嘆。このケーキ美味しいですね」

『無視するな!』

突然やハウエ達の声がしたが夕弦は当たり前のように無視をしてケーキを食べていた。

『ところでー空君は四糸乃達の中で誰が一番好きなのかなー?』

「よ、よしのん……ッ!?!」

よしのんの言葉で十香達は一気に俺に視線を向けてきた。

『どうしたの急に?』

『さつき向こうの話が聞こえちゃって気になってしょうがなくてさー』

ああ、そういうことね。

「うーん、一番好きな人は無いか。皆のこと同じくらい好きだから」

『!?!』

俺の言葉に皆が目丸くした。

『じゃあさー、結婚したい人はー?』

「出来るなら皆としたい……かな? 皆綺麗で可愛いし、一緒にいて楽しいから」

まあ、俺じゃ全然釣り合わないけど……。

『!?!?!』

『そっかー。まあそれでいっかー。ありがとねー』

「うん、どういたしまして。じゃああつちに戻るね、お姉ちゃん達」  
『バイバイ』

再びなのは達のいるテーブルに戻ったのだが、なのは達が俺を逃がすまいと無理矢理席に座らされた。

「空君、好きな人っているの?」

なのはに無駄に迫力のある笑顔で問い詰められた。助けを求めよ

うとするも他の皆も聞きたがっていた。

「そりやいるよ」

「ツ！ だ、誰のことが好きなの？」

「皆！」

『……………』

皆が固まったと思ったらしいきり盛大に溜息をつかれた。

あれ？ 俺おかしいなと言った？

「ど、どうしたの？」

「いや、ある意味すごいって俺は思ったよ」

「え？ え？ え？」

「これは四人とも苦労するだろうね」

四人？ 苦労する？

「空君、頑張ってね」

何を頑張ればいいのか？

結局最後まで意味の分からないままその日のお祝いパーティーは  
終わり解散した。

ケンカのあとは仲直りです！

ケンカの後には仲直りです！

Side空

俺が入学してから一週間ほど過ぎた頃、お昼休みの時間に屋上で俺、ヴァーリ、明日奈、あかり、なのは、なのはの友達の天河さんの六人で食べている。

天河さんはなのはが誘ってから一緒に食べるようになった。

天河さんはまだ友達とは言い難いというか、嫌われている節があるんだよね……。俺、嫌われるようなことしたかな？

ふと、視線を天河さんに向けてみれば「何よ？」みたいなイラついた感じで睨み返された。

むう……。どうしたものか……。会話も全然したことないし。

どうやったら彼女と仲良くなれるのか少しばかり悩んでいたら、明日奈が俺のお弁当を見ていた。

「どうかした、明日奈？」

「空君のお弁当っていつも綺麗で美味しそうだなって」

「そう？ まあでも、ありがと。これでも手抜きなんだけどね」

昨日の残り物の詰め合わせだからね。

「この前のケーキみたいなのに空君が作ってるの!？」

なのはだけでなく答えた俺と天河さん以外の三人も驚いていた。

天河さんは全くの興味無しですか……。

少しでも興味を持つてくれればそれをきっかけに話せると思ったんだけど。

「そっだよ」

「ケーキだけじゃなくて弁当も出来るのか……。すごいな」

「お姉ちゃん達が全くってほどでもないけどそんなに出来るわけじゃなくてね」

折紙か琴里が精霊達の中では一番できるのかな？ あとは……。プレシアさんとリニスぐらいかな？ あれ？ 七罪も料理人に変身すれば出来るんじゃないか……？

「大変そうだね。あんなに家族が多いのに」

「それを言ったらあかりとはやてもじゃないの？」

俺達はあかりとはやての両親が事故で亡くなったことを聞いている。

子供がたつた二人でなんて俺よりも大変なはずなのに……。

「まあね……でも、二人でこれからも頑張るし、もしもの時は皆を頼るから」

「うん、いつでもいいよ。出来ることは少ないけどね。あ、いつそのこと俺ん家に来る？」

「ありがたいけど、それは最終手段かな」

「空の家はそんなに大きいのか？」

俺の発言に疑問に思ったヴァーリが口に出した。

「まあ普通の家よりはね」

「空君、あれは普通の家よりもかなり大きいからね」

この中で唯一俺の家に来たことのあるのはに半眼で突っ込まれた。

普通の家には地下室とかプールとかないもんな。

「そうだ今度家で遊ぼっか！」

そこで丁度お弁当を食べ終えた俺は先に教室に戻ろうとしたが、問題が起こった。

「ちよっとそれ貸しなさいよ！」

「は、離して！ 痛い！」

金髪の女の子が紫髪の女の子からカチューシャを奪おうとしていたのが目に入ったのだ。

「あそこにいるのって同じクラスのアリサ・バニングスと月村すずかだよね？」

バニングスさんも月村さんも誰かと親しそうに話している姿は見たことがなかった。俺自身、先生からの伝言を伝えるとかくらいしか話したことがない。

「うん、そうだよって！ 呑気なこと言ってる場合じゃないよ！ 止めに行かないと！」

「でもさ、あれ」

俺が指で示した方向にはなのはが二人に歩み寄り、

——パシンツッ!

バニングスさんをビンタした。

うわー、痛そー。

「痛いじゃない! 何すんのよ!」

「痛い? でも大事なものを盗られちゃった人の心は、もっともっと痛いんだよ?」

そつから今度はなのはとバニングスさんのケンカが始まった。

なんだか今のなのはの台詞、名言みたいだね!

「余計に酷くなってない!」

「止めるつもりだったんだろうけど、悪化したな」

「だから止めようよ!」

えー、俺にはあの中に入る度胸は無いよー。ほら、女の喧嘩は男よりもヤバいってよく言うし。え? 言わない?

心の中で嫌がっていたら、王城君が颯爽と現れてなのは達に向かって行った。

「やめろ、俺の嫁達よ。ケンカなんてつまらないことはするな」

そう言つて王城君が仲裁に入った。

「おい、王城! なのは達に何してる! 離れろ!」

だが、正田君が王城君に掴みかかり今度は男子のケンカが始まった。それを見ていた俺達は呆れた。

「……正田君はバカなのかな?」

「あれを見て、何をどうやったら止めようとした王城が悪者になるんだ?」

「王城君の言い方もどうかと思うけどね……。 (うわー、二人共絶対に転生者じゃん! 視なくてもわかる!)」

「二人がどうかしたの、あかりちゃん?」

「ううん、何でも無い! それより早く止めようよ! あれ? 愛衣ちゃんは何?」

「男子がケンカし始めてから帰ったよ」

「え、そうなの？ ……じゃなくて！ あなたは早く止めてきなさいッ！」

イツテーーーーッ!? 女の子とは思えない蹴りだよ!?

何故か明日奈に思いつき蹴られた俺がなのは達の方に向かった。

とりあえず、二人が喧嘩を始めてしまったため何もできずに泣きそうになっていた月村さんのところに行った。

「月村さん大丈夫?」

「た、龍神君?もしかして止めに来たの?」

「まあそんなところ」

女のケンカって男のよりも怖く見える……。

「で、でも、危ないよ!」

「大丈夫だよ。俺に任せて。……破軍歌姫」

俺は一回深呼吸してから歌った。

「~~~~~♪」

完全には美九の力は使えないけど、ケンカを止めるくらいは出来るはず。

「綺麗な声……」

そんな声が聞こえたが、気にせず歌っていると二人の動きが止まった。

「歌? 誰が……?」

「この声……空君?」

「正解。ようやく止まったね」

「……何しに来たのよ?」

私怒ってますって声で睨んできた。

「月村さんにパスで」

「え? え!?! わ、私!?!」

いきなりフられた月村さんは慌てた。

「だって俺は止めに来ただけだから、あとのことは三人でどうぞ」  
「で、でも私は……」

チラチラとバニングスさんに視線を向けていた。

「何よ！ 言いたいことがあるならばつきり言いなさいよ！」

それが気に入らなかつたのか月村さんに怒鳴り出した。

「そんな言い方はダメだよ！」

「あんたもさつきから邪魔しないで！」

バニングスさんが再びなのはに掴みかかったところで――

「やめてッ!!」

月村さんが叫んだ。

『ッ?!』

普段クラスでもおとなしい性格の月村さんが大声出したから二人は動きを止めた。

そろそろ戻りたいんだけどこれ解決しないと明日奈にグチグチ言われそう……。

「はあ……ねえ、バニングスさん」

「何よ？」

「君は月村さんのカチューシャを奪おうとしてたけどどうして？」

「ちよつと見たかっただけよ。でもその子が貸してくれなかつたから

……」

「……そう。君には大切な物ってある？」

「あるけどそれが何だっっていうのよ？」

「誰だっって自分の大切な物は人に貸したくないってあると思うんだ。

君だっっていきなり貸せ！ なんて言われて貸す？」

「そんなことするわけないじゃない！」

それはそうだ。俺だっって嫌だし。

「でしょ？ だから月村さんは君に貸さなかつたんじゃない？」

「それは……」

「なら、言うべきことがあるんじゃない？」

「うッ………月村さんご、ごめん、なさい」

気まずそうに月村さんの方を向いて謝った。

「うん、いいよ！ もう気にしてないから！」

「それと……あんたもごめんなさい」

今度はなのはの方にも謝っていた。

「私もごめんなさいなの!」

なのはも自分が悪かったことはわかっていたので謝った。

「これで万事解決! じゃあ俺は戻——」

「ちよつと待ちなさいよ!」

「グエツ!」

帰ろうとしたら、いきなりバニングスさんに制服の襟を掴まれて喉が詰まった。

「ゲホツ、ゲホツ……な、何、するの?」

「そ、その……あ、あんたも止めてくれて………ありがとう」

最後の方が小さくてよく聞き取れなかった。

「え? 最後何て言った?」

「うるさいうるさいうるさい! 何でもないわよ!」

「えー、なら何で止めたの?」

「あんたが勝手に帰るからでしょ!」

「でも、解決したからいいでしょ?」

「ダメに決まってるでしょ!」

うわー何という理不尽な言葉でしようか。

「わかったよ。で、何?」

「あ、あんたと、ととと、友達になってあげても、いいわよ?」

「遠慮しときます」

即答。だってこの性格はメンドイ。

「なツ!? 何ですよ!」

「俺よりもその二人と友達になったら?」

「二人ともなるわよ! でも一番はあんたがいいの!」

友達に順番いりますか?

「まあ、いいけどさ。バニングスさんって友達いないの?」

「いないわよ! 悪い!」

きつとこの性格だからなんだろうな……。

「俺は龍神空だよ。空って呼んでね。君の名前は?」

「アリサ・バニングス。アリサでいいわ」

「よろしくアリサ」

「フンツ……まあよろしくしてあげるわ空」

そっぽを向いたアリサは少しだけ嬉しそうに笑っていた。

「ハイハイ。じゃあ次は二人だね」

「月村さん、高町さん、私と友達になつてくれない？」

俺の時と態度が違くないか？ べ、別にいいんだよ、全然拗ねてる訳じゃないし。

ただ、俺の時のあれは何だったのかなあって思うぐらいだから。

ホントに気にしてないからね。ウソじゃないよ。

「もちろんOKなの！ 私が高町なのは。なのはって呼んでね！」

「私もいいよ！ 月村ですかです。さすがでいいからね、アリサちゃん、なのはちゃん。あと、空君も！」

俺はおまけですね？ すすかさんや。

とまあ、何はともあれこうして新しい友達が出来たのだが、翌日。

「空、ご飯一緒に食べるわよ」

「私も一緒に良いかな、空君？」

アリサとすずかが一緒に昼飯を食べようと誘ってきた。

「それなら皆で食べようよ！」

「アハハ……一気に賑やかになったね」

「でも皆で一緒の方がご飯も美味しくなるよ。ね？ 愛衣ちゃん」

「……そうね」

「男女の比率が……」

「言わなくていいから」

その日から、アリサとすずかも毎日一緒に食べることになった。

ちなみにケンカをした男子——王城君と正田君は先生に説教をされたとき。

王城君可哀想に……。ただ止めようとしていただけなのに。

## 転生者の話し合いです！

転生者の話し合いです！

Side空

朝、学校に行くと、下駄箱の中にピンク色の手紙が入っていた。

「これは……」

「空君どうし————ッ!? そ、それってまさか……!?」

なのはがとても驚いた表情をしていた。

「この手紙がどうかした?」

「だ、誰からのお手紙なの?」

表裏を確認してみたが名前は無かった。

中の方に書かれてるのかな?

「わかんないけど、とりあえず教室で読んでみるよ」

教室で読んでみるとこう書かれてあった。

『私と同じ転生者である龍神空君にお話があります。』

放課後、屋上に来て下さい。

天河愛衣より

なるほど。彼女も俺と同じだったのか。

「それで、誰からの告白だったの?」

なのはが真剣な表情で訪ねて来た。

「告白?」

「だってそれってラブレターじゃないの?」

へ? ああ、その考えはなかった。

「全然違うよ」

「よ、よかった。あれ? じゃあ、その手紙は何だったの?」

「俺がらみのこと」

なにが良かったんだ?

「空君がらみ? ……ッ! まさか!」

なのははしばらく考えて思いついたらしいが口には出さなかった。

俺がらみというのは転生の事で、最近になって高町家の人達にも話した。

理由は俺が子供らしくないところがあつたらしく士郎さんに怪しまれたからなんだけどね。

「そーゆーこと。あ、ヴァーリおはよう！」

「おはよう、空、高町」

「あ、おはよう、ヴァーリ君」

その後、明日奈やあかりも登校してきていつもの学校生活が始まった。

お昼の時間になっていつものメンバーで仲良く食べていた。

「空、そのだし巻き玉子と私のお肉と交換しない？」

俺の弁当を見て、アリサが玉子焼きが欲しいと言ってきた。

「お、いいよ。はい、あ〜ん」

俺は箸で玉子を掴んでアリサの口に持って行った。

「え!?! ちょッ!」

「何? ほら、早くしてよ」

何故かアリサは顔を赤らめていた。

「し、仕方ないわね。あんたがそこまで言うなら食べてあげなくもないわ」

「はい、あ〜ん」

もう一度アリサの口に運んで行ったのだが、途中で玉子は別の人物の口に入った。

『あッ』

「美味しい!」

「ちよつとなのは! 私の子何食つてのよ!?!」

「空君のあ〜んは幼馴染の特権!」

何それ? 初耳ですよ? それに幼馴染って言っても一年無いぐらいの付き合いだよ。

「そんなの知らないわよ!」

「まあまあアリサ。まだ玉子はあるから、ほらどうぞ」

「すずか！　なのはを押えといて！」

「う、うん、わかった！」

頷いたすずかはなのはを羽交い絞めにした。

「にゃ!?　すごい力!？」

「今よ！」

切迫した表情のアリサに気圧されながらももう一度あくんをした。

「お、おう。はい、あくん」

「あ、あくん。……お、美味しわね」

「それは良かった。今度はアリサのお肉ちよーだい」

「そうね。じゃあ、……は、はい、あくん」

恥ずかしくて顔を赤くしたアリサが箸で掴んだお肉を持ってきた。

「あくん」

その時になのはが叫んでいたが、気にせずにお肉を口に入れた。

「ど、どう？　美味しかった？」

「うん！　すつごく美味しい！」

「そ、そう。ま、まあ当然だけどね！　感謝しなさい！」

「ハイハイ、感謝感激雨霰♪」

「全然感謝してないじゃない！」

「え？　意味知らないの？　アリサは勉強した方がいいよ」

「ムカッ！　私は頭良いわよ！」

俺の態度に怒ったアリサが俺をポカポカと叩いて来たが全然痛く

も痒くもない。

「なんだか二人って恋人みたいだね」

明日奈が不意にそんなことを呟いた。

「な!？」

「確かにそうだな。二人の周りには桃色の空間が出来ていたな」

ヴァーリも同じようなことを思っていたらしい。

「へ、変なこと言ってるんじゃないわよ!？」

「思わずブラックコーヒーが飲みたくなくなるぐらい甘々だったし」

「だ、誰がこんな奴と！　ってニヤニヤしてるんじゃないわよ！」

「アハハ！ アリサの顔真つ赤だよ」

「あんたの所為じゃないッ！」

アリサが俺に掴みかかろうとしてきたので逃げだしたら、二人だけの鬼ごっこが始まった。

「ホレホレ、捕まえてごらん！」

「見てなさいよ！」

鬼ごっこはチャイムが鳴るまで続いて俺は疲れてなかったが、アリサはバテバテだった。

教室に戻る時、あかりに呼び止められた。

「今日の放課後屋上に来てくれないかな？ 話したいことがあるんだ」

「わかった」

短く答えて、俺とあかりも戻った。

午後の授業も終わってホームルームをしたあと、屋上に行こうとしたのだが、

「なあ、龍神。今から屋上で話したいことがあるんだ。来てくれ」

王城君に誘われた。

「いいよ。俺も行こうと思ってたから」

何か、思ってた感じと違ったな。

「？ まあいいや。じゃあ行こうぜ」

「うん」

屋上に行くとすでに俺を呼び出した二人がいた。

「遅れてごめん、二人共」

「大丈夫だよ」

「……問題ないわ」

「で、話って？」

「うん、そうなんだけど……どうして二人がいるの？」

「二人というのは天河さんと王城君のことだろう。」

「私は龍神くんを呼んだの」

「俺も同じだ」

「そう。でも丁度いいかな。ここに居るのは皆同じ転生者だから」

「ええ、そうね」

「八神や龍神はそうだと思ったが、天河もだったのか」

「あ、やっぱり三人ともそうだったんだね」

魔力を感じたからそうなのかなって思ってたけど。

「じゃあ話をするけど、私が最初でいいかな？」

あかりの問いかけに俺達は揃って頷いた。

「皆は原作をどうするつもり？ 私は無印では特に動くつもりはないんだけど」

む、無印？ いきなり知らない言葉が出てきたぞ。今日は精霊達がないから知ることが出来ないんだよね。

「私は一応なのはを手伝うつもりよ」

なのは？ あ、リリカルなのはってなのはが主役だったね。

「俺ももちろん動くぜ！ 踏み台を演じるためにな！」

ふ、踏み台？ また知らない言葉……。って俺だけ付いていけないの!?!

「で、空君はどうするの？」

あかりが俺はどうするのかと訪ねて来た。

「あー、その前に一つ良い？」

「何？」

「無印とか踏み台ってどういう意味？」

『はあ!?!』

俺の言葉を聞いて三人は驚いていた。

「た、龍神はリリカルなのは見たことないのか!?!」

「踏み台を知らないってことは二次創作も知らなさそうね」

「これは予想外だよ。てっきり知ってるものだと思ってたんだけど」

「ご、ごめん……」

三人は知ってるのか……。

「あ、別に責めてるとかじゃないんだよ！ 気にしないでね！」

「う、うん、大丈夫」

俺、場違いだなあ。

「ゴホン、では気を取り直して、空君に無印について説明します」

急に先生口調のあかりの話を集中して聞いていた。

——十分後。

「はあ、願いを叶えるジュエルシード、ねえ……。で、なのはがそれに巻き込まれると」

「そう。でもね問題が一つあるんだよ」

「問題？」

「フェイトちゃん達のこと」

「正史通りならアリシアとプレシアさんは死んでるんだっけ？ でも今は生きてるから……」

「だからすでに原作が改変されているってこと」

「ふむふむ……む？ それって、俺の所為?!」

そう言えば、前に二亜が原作壊したとかなんとかって言ってた！

「空君が何をしたのかはさておき、これから原作で何が起こるかわからないんだよ」

「な、なるほど」

あ、これも前に精霊の皆が言ってたか。

「それで、改めて聞くけど空君はどうする？」

原作か。以前ならどうでも良かったんだけど、なのはとフェイトが関わるんだよね。

だったら——

「友達を助けるのに理由は要らない。俺は原作に関わるよ」

「そっか。わかった。私からは以上かな」

そこで、俺は疑問に思ったことを口にした。

「あ、正田君は？ 彼も転生者なんじゃないの？ 魔力感じたし」

その名前が出た途端、三人が揃ってため息をついた。

「彼はダメだと思ったんだ」

「私も同感ね」

「ああ、あいつはムカつく」

三人共正田君に協力を求めるのは嫌らしい。

「いきなり殴られた王城君はわかるけど、他の二人はどうして？」

「私は自分の特典で相手がどんな人か解るの。それで彼は危険だっと思っただの」

なるほどね。それなら仕方がないか。それにしても、あかりの特典は相手の性格も把握できるわけか。便利そうだ。

「私は生理的に無理」

「それだけ!?!」

天河さんの答えはまさかの理由だった。

「ええ、それだけよ」

「かなりキツイな……」

「アハハ……」

あかりと王城君も苦笑いだ。

「まあ、理由は分かったよ。それなら仕方がないか」

「あ、次俺いいか？ 皆の特典教えてくれよ。ちなみに俺は踏み台を演じるために金髪オッドアイと頑丈な体と魔力SSSだ」

頑丈なのか……なら、十香達と戦っても大丈夫なのかな？ 今度やってもらいたいな。

「私は原作組と同じぐらいの魔力にそれなりに裕福な家庭、それと嘘を見抜く力よ」

天河さんには嘘が通じないってことか。

「私は八神はやての双子の姉に同じ魔力、それとさっき言った相手のことを知る力。能力とか身長や体重の細かいことも解るよ」

「俺はデート・ア・ライブの精霊の力にハイスクールD×Dの神セイクリッド・ギア器器を創る力、覇気三色、成長限界無し、家事能力EX」

『チート過ぎる!!』

「それと何で五つも特典があるのよ」

「何か気に入られて五つになった」

あんなんで五個にされるとは思わなかったけど。

「あの時にデアラのキャラがいたのもお前の特典か？」

「らしいよ。神様の気紛れらしいけど」

「やつと納得できたよ。空君がやけに特典の数が多いから気になってたんだ」

「アハハ……。あ、あかりの能力で正田君の特典って解るんでしょ？」

「うん。確か、NARUTOの忍術全部と、九尾の力(九喇嘛付き)、大抵のことは何でも出来る才能だったはずだよ」

「それってすごいのか？ 最後のはわかるけど」

ナルト？ 忍術？ 九尾？ 知らないです。

「……お前はNARUTOも知らないのか？」

「いや、知らないっていうか記憶が無いんだ」

「それって前世の記憶ってこと？」

「うん、自分の特典に関することぐらいなら覚えてるけどそれ以外はさっぱり」

「なるほどね。だからリリカルなのはも知らないんだ」

「王城君の話はこれでおしまい？」

「ああ、ありがとな答えてくれて。正直、断られるかと思ってただけだ」

「王城君がワザと言ってるのは能力ですぐに解ったからね」

「私もあなたが本心で言っていないって分かったから」

「俺はさっぱりだったけど。何となく悪い人じゃないって思ったんだ」

悪い人ならもうちよつと問題くらい起こしてるだろう。

「お前ら良い奴だなー」

「ねえねえ、王城君さ。どうして踏み台とかいう奴やろうとしたの？」

そもそも踏み台って何？」

「それはオリ主の引き立て役だよ。例えば俺が高町達に「俺の嫁ー」って言うんだ。そしたらオリ主がやってきて「なのは達が嫌がつてるだろー」って言って俺を殴る。それでオリ主が高町達に笑顔を向けて

「もう大丈夫だ」と言って高町達は赤面する。そして俺はオリ主と高町達がイチャイチャしているのを見て俺はニヤニヤして楽しむつてわけ」

……………？　それだけ？

「その何が楽しいの？　ただ嫌われること言って痛い思いするだけじゃん。俺には何が良いのかさっぱりだよ。確かに俺には君の生き方を否定するなんて出来やしない。でも、わざわざ辛い思いをしてみても楽しむことじゃないと思うんだ」

「そ、それは、そうだけど……」

「もつと自分のこと大事にしなよ。君は今ここで生きてるんだよ？」

前にいた世界と同じで、簡単にとまではいかないけど死ぬことだってあるんだから」

「それは王城君だけじゃなく、私達にも言えることだね」

「グヌヌ……………ああ、わかったよ。龍神の言う通りだ。自分のことは大切にしろ。だけど！　高町達がオリ主君に赤面するのを見て楽しむのは絶対に諦めないからな！」

王城君が俺に指をビシツと突き付けて宣言した。

「うん、それで良いと思う。まだ良く分かってないけど頑張れ。あ、あとさあんましろのはと関わろうとしないのは何で？　踏み台やるとか言ってたのに」

踏み台をするのであれば、なのは達に関わるべきなのに全然何もしてないことに気が付いた。

「あー、あれは思ったよりも声かけるのが恥ずかしくてよ……」

「そっか、王城君は意外と初心なんだね」

「う、ウルサイ！　俺は前世で女子と会話するなんて滅多になかったんだよ！　あ、ヤベ！　俺はそろそろ帰るな！　親が心配しちまうからー！」

「あ、私もはやてが寂しいだろうから帰るね」

「バイバイ！　また明日！」

二人は屋上からいなくなつた。

「天河さんは帰らなくて大丈夫？」

「……………」

あれー？ 無視ですかー？ さつきまでたくさんしゃべってたよねー？

「え、えつと天河さん？」

「……実はあなたと二人つきりで話したいことがあったの」

「それは誰にも聞かれたくないようなこと？」

「やつと返してくれた……」

「ええ」

「それで、話したい事って？」

どんな内容か全く思いつかないな。ま、まさかッ！ 俺があまりにも嫌いだから今この場で――。

「と……に………さい………」

へ？ とにさい？

「ご、ごめん。良く聞こえなかったからもう一回お願い」

「！ わ………とも………になって下さい！」

わとともになつて下さい？ どういう意味？

「ごめん……もうちよつと大きいと助かるんだけど」

「だ、だからッ！ 私と友達になつて下さいッ!!」

天河さんの叫びが校舎全体に響いた。

「あ あ、友達ね。うん うん …… …… え？ ええ

ええええええええええッ!」

今度は言葉の意味を理解した俺の叫びが校舎全体に響いた。

「だ、ダメ、かな？」

あ、あれ雰囲気変わった？ いやそれよりも！

「きゅ、急にどうしたの？」

「わ、私、実はね、男性恐怖症なの………そんなに酷くはないんだけど」

「え？ それがさつきさんのセリフとどう繋がるの？」

さつきぱりわからん。あ、今まで睨まれたのはそういうことなのか。

「で、でもね！ ホントは男の人とおしゃべりとかそ、そのお付き合い

とかしてみたいの！」

顔を赤くして俯きながら伝えてきた。

男性恐怖症なのに男と話したいってどーゆことー？ 矛盾してないか？

「私の前世のことになるんだけど、私は小さい頃から父親が出張や単身赴任が多くていえにあまりいなくて、兄弟や親戚もほとんど女しかいなかったの。しかも幼稚園から大学まで全部女子校で、男の人と触れ合える機会が無いまま事故に遭って、死んで転生したの」

……？ それだけで男性恐怖症になるの？

「男性と接する機会が無いだけでそれだけでなるの？」

「えっと、それは家や学校で男は野蛮だとか不潔だって言われてたから、それを聞いてから私は男性が怖くなったの。だから休日もほとんど家でアニメや漫画ばかり見てたわ」

「えーっと、もしかして男子と話してみたいのってアニメや漫画の影響？」

「ええ、そうね。現実とは違うって分かっているながらも男の人には優しい人もいるんだってずっと信じてきたの。でも転生してから共学のこの学校に入ったはいいけど、男子と全然話せなくて困ってたの。そしたらあなたが……空君がいたの」

俺？

「俺がいたからなんなの？」

「なのはがね、あなたの自慢話をたくさんしてくれたの。あなたがカッコイイ、優しいって」

おっふ。そんなこと言われると照れるな。

なのはにカッコイイって思われるようなことしたっけ？

「それでね、その人が私の思い描く理想の優しい男性なんだ！ って運命を感じたの」

興奮したように語る天河さんにちよつとビックリ。

運命って大きじやない？ どこにでもいる転生者だよ？（普通はいない）

「そ、そっか、それは良かったね、理想の人が見つかって……」

あ、その理想の男性って俺か。実感が湧かない……。

「だから、あなたと話してみたかったんだけど、何話していいか分から

なかったの。しかも、あなたが一人の時に声を掛けようかなって思ってもいつもヴァーリ君達が出て来なかったし、お昼の時も皆がいて恥ずかしくてどうしても言えなかった。でも、あなたが同じ転生者って分かったときにこれなら話せるって思ってた手紙を出して呼び出したの」

あの手紙はそういう意味だったのか。

「そ、それで私と……」

天河さんがモジモジと恥ずかしそうにしていた。

「俺の名前は龍神空。空って呼んでね。君の名前は？」

「あ、天河愛衣です！ その、ふ、不束者ですがよろしくお願いします！ で、出来れば愛衣って呼んでください！」

「もちろんだよ。よろしくね愛衣！」

愛衣は俺の返事を聞いて顔を輝かせた。

「じゃあ、次は恋人ね！」

は？ 恋人？ ああ、お付き合いしたいとかなんとか言ってたね。

「そっか、頑張れ。俺にも手伝えることがあったら言ってくれ」

しかし、愛衣は俺の言葉が分からなかったのか首を傾げていた。

「何を言ってるの？」

「へ？ だって恋人作るんでしょ？」

「ええ、そうよ」

「だから、頑張って作って言って言ってもりなんだけど」

話しが噛み合っていない？

「あなたが恋人になるに決まってるじゃない」

………はい？

「え？ は？ へ？ お、俺？ な、何で？」

「空君が理想の男性って言ったじゃない」

「た、確かに言われたけどそれは男友達としてじゃないの？」

「私はそんなこと一言も言って無いわ」

言われてみるとそうだ……。

「で、でも……」

「言わなくても分かっているわ。友達になったばかりでいきなりは流石

にどうかと思っっているのですよ？ 私も同じね。でもそれは、これから互いのことを知っていけばいいのよ。

そしてある程度仲が良くなったら付き合い始めてデートかしら。何事も順序というものがあるからね。で、しばらくすれば互いに恋人以上の関係を欲するようになると思うの。そうね……成人したぐらいに親に紹介しましょう。私の家はある程度裕福だから式も盛大に挙げられるだろうし——」

「ちよ、ちよと待って！ 話に付いていけてないんだけど！」

「もう、すっかりして。私達の将来のことなのよ？ わかつてる？」

「ごめんなさい！ 一つも分かりたくないです！ というかキヤラ崩壊し過ぎじゃないですかねえ!? 男性恐怖症じゃないの!? と、とにかく今の状況を変えねば！」

「え、えつと……気持ち嬉しいんだけど、もう時間が時間だし帰ろ？」

俺がそう言うが残念そうにしたが、仕方ないと言って頷いてくれた。

助かった……。

「それじゃあ、一緒に帰りましょうか」  
嫌な予感しかしないのは何故？

「う、うん帰ろつか。家まで送るよ」

「フフツ、やっぱり空君は優しい人ね」

「これくらい普通だよ」

そして、俺は愛衣の家に着いたのだが——

「まさかの俺ん家の向かい側!?!」

やばい。これは明日からやばいぞ。

「あなたの家と近くて良かったわ。これから毎日一緒に登下校が出来るわね」

「そ、そうですね」

なんで今まで気付かなかったんだ!?!

「これから少しずつ仲を深めていきましょ？ それではお休みなさい」

「う、うん、お休み」

俺、今引きつった顔してんだろうな……。

「明日からどうすればいいの!?!」

愛衣が家の中に入った後で俺は叫んだ。

「とりあえず、今までどこで何をしていたか言いなさい」

声のした方を見れば玄関に精霊達が立っていた。

これはバレると殺されるんじゃない?!

「ごめん。先生に手伝いを——」

『頼まれたというのはもちろん嘘で、ホントは天河愛衣という女と将来結婚しようという話をしてたぞ』

「な、何言ってるか俺には分からないなあ?」

ドライグツッ！ テメエ余計なこと言うなよ!?

「アルビオンとヤハウエは?」

『ドライグの言っていることは事実です!』

琴里の声音にビビったアルビオン達はあっさり白状した。

お前らも裏切るの!?

「どういうことか説明してもらおうわよ」

「はい！ 全て包み隠さずお伝えします！ だから命だけは!」

「……そこまでしないわよ」

俺は今日あったことを全部話した。

俺が話し終えた途端、琴里が俺を抱きしめた。

「バカ……心配したんだからね」

「琴里……ごめん」

嬉しくて涙が出そうになるのを堪えた。

「でも、それとこれとは別よ」

「へ?」

あ、あれ?このまま家で皆に謝ってハッピーエンドになるんじゃないの?!

「皆、ヤっちゃっていいわよ。死なない程度にね」

『うむ（はい／ええ／了解）！』

精霊達がそれぞれの天使を出して構えた。

「いや、あの待っぎゃあああああッ!!」

絡まりました！

絡まりました！

Side空

転生者で話し合った次の日の朝、龍神家のインターホンが鳴った。  
こんな時間に誰だろ？

俺が玄関の扉を開けるとそこには――

「おはよう、空君。学校に行きましょ」

昨日友達になった愛衣がいた。

「おはよう、愛衣。でも俺、朝ご飯食べてないから家の中でくつろいで待ってて」

「分かったわ。それじゃ、お言葉に甘えてお邪魔します」

「愛衣はいつもこんなに早いのか？」

「ええ、大体この時間には家を出ているわ」

愛衣をリビングに案内しながら気になったことを聞いてみた。

リビングでは皆が待っていた。

「ソラー！ お腹が空いたぞ！」

俺を待っていて空腹に耐えかねた十香が急かしてきたので、愛衣をソファアームに座らせて俺も自分の席に着いて手を合わせた。

「ごめんごめん。よし、いただきます！」

『いただきます！』

龍神家のいつもの朝が始まった。

朝食を食べ終えた後で折紙が愛衣に話し掛けていた。

「天河愛衣、あなたは空とどんな関係？」

「空君とは昨日友達になりました」

「そう。では、空から聞いたが、恋人や結婚とはどういうことか説明を求める」

「そのままの意味ですよ。彼は私の理想の男性ですから」

「あなたの言いたいことはわかった」

「それでは将来的に認めてくれるということですか？」

「それは絶対はない」

「……ほっ、ちよつと安心。」

「……何故ですか？」

きつぱりと否定した折紙に不機嫌になった愛衣が理由を聞いた。

どう答えるんだろ？

「それは空が——シスコンだから」

「待って!? それはおかしくない!？」

黙って聞いていた俺はツツコンでしまった。

「おかしいことは何もない。実際、空は入浴や就寝を何度も共にしている。これをお姉ちゃん大好き甘えん坊コンプレックスと言わずして何と言う」

「なんで余計なこと追加したの!? 普通にシスコンって言えばそれでいいよね!? そもそも俺はシスコンじゃないから! あと、ほとんどそっちが勝手にお風呂やベッドに侵入してるよね!？」

「でも嫌がつてはないし拒んでもいない」

ウグツ! ……確かに俺はつい受け入れてしまってる。あれ？

そうすると俺はやっぱりシスコンなのか？

「それに、空と私達は血が繋がってない姉弟。よって結婚が可能」

た、確かに出来るね……。

「……なるほど、分かりました。今だけ」はあなた達に譲ります。それではそろそろ学校に行きますので、失礼します。行きましょう、空君」

「え、ああ、うん行こつか。皆、いつてきます!」

『……いつてらっしやい』

話を聞いていて若干不機嫌に挨拶を返してきたが、俺は愛衣に促されるままに家を出た。

「愛衣、将来のことなんだからもっと良く考えなよ」

「あら、私は昨日からあなたとの将来を考えているわ。その何がイケないの?」

「いや、急にあんなこと言われても……。それに愛衣って男性恐怖症

「じゃなかったの？」

「……………」

男性恐怖症という言葉聞いた瞬間愛衣は固まった。

「愛衣？」

心配になって顔を覗き込んでみると愛衣の表情は青褪めていた。

「わ、私、お、男と……しゃべった？」

「昨日からそうだけど？」

何をいまさらって感じだけどね。

「……………」

突如、愛衣が声にならない悲鳴を上げて、学校とは反対の方に走り出してしまった。

「え!?! 愛衣!?! どこ行くの!?!」

慌てて俺は愛衣を追い掛けた。

愛衣が100mぐらい走ったところでようやく追いついた。

同じ転生者でも修行をしてないっぽい愛衣にはあまり体力が無かったので楽だった。

「あ、愛衣……えーつと、……」

こういう時ってなんて声かければいいのか!?!

《情けないですね、マスター。まるでダメなマスターで私は悲しいです》

「何で急に毒を吐いたの!?!」

《別に他意は無いですよ。ただ出番が少ないなあとか、最近忘れられてるんじゃないのかなあって思ってマスターに八つ当たりとかしてるわけじゃないですからね? 本当にですよ?》

「……………何かごめん」

ブレイブにもう少し構ってあげないといけないのかな? 結構話してると思ってたんだけど……。

《安心してください。怒ってはいませんからいつも通りでいいですよ》

「そっか。で、愛衣、学校行く？ このままじゃ遅刻しちゃうよ？」  
あ、なのはの家にも行かないと。今頃家の外で待ってんだろ  
うなあ。

「……………」

「えっと、さつきは、その俺が無神経過ぎたというか何というか…………ご  
めん」

しどろもどろになりながら愛衣に謝ると愛衣が反応した。

「…………もう、大丈夫よ。…………心配掛けてごめんなさい」

「うん、行く——ッ!?!」

愛衣の手を取り立ち上がらせようとしたところで、背後からの攻撃  
に気付き、すぐさま愛衣を抱えて躲した。

「…………随分と物騒な挨拶だね、——正田君」

俺を攻撃した犯人はバリアジャケットを展開して鎧の無い日本刀  
を構えていた正田輝義だった。

「おい、龍神！ 今すぐ天河から離れろ！ さもなければお前に攻撃  
する！」

いや、もう攻撃してるじゃんと言いたかったが、言っても意味がな  
さそうなので言わなかった。

「俺が愛衣に何したっていうの？」

「お前が嫌がる彼女を追い掛けていたからだ！」

？ あ、さつきのアレか。…………タイミング悪すぎでしょ。

「確かに追い掛けていたけど、そんなつもりじゃなかったんだけど」

「ウソを吐くな！ 全部見ていたんだぞ！」

「君は会話の内容まで聴いたの？」

「そんなの聴かなくても天河の顔を見れば一目瞭然だ！」

あーあ、絶対に誤解されてる。こういう人ってメンドイなあ。どう  
やって誤解を解けばいいかなあ？

「愛衣も何とか言ってくれない？ このままじゃ誤解されたままだし  
遅刻しちゃう」

「嫌よ。昨日言ったでしょ？ 彼は生理的に無理だって。出来ること  
なら視界にすら入れたくないわ」

愛衣が正田君には聞こえないように呟いた。

そこまで酷いと彼が気の毒に思えてくる……。

「はあ……とりあえず、先になのはの家に行つて、学校で先生に遅れるつて言つといて」

「わかつたわ。あなたは……心配ないだろうけど気を付けてね?」

それだけ言い残して愛衣は俺から離れてなのはの家に向かった。

「はい、これで離れたけどもう良いかな?」

「ああ。だが龍神、お前は僕と同じ転生者だな?」

「転生者つて何?」

まるで初めて聞いてたかのように恍けてみせた。

「恍けるな! お前がデバイスや魔力を持っていることぐらいわかっているんだ! それにどうしてあんな動きが出来る? 転生者だからだろ!」

正田君が刀を突き付けて問い詰めてきた。

誤魔化しきれないか。でも、あの動きつて転生者じゃなくても出来ると思うんだけど。

「はあ……そうだよ、俺も君と同じ転生者だよ。でも、もし俺が転生者じゃない一般人だったら君はどうしてたの? そんな相手に君は刀を振るつた場合は管理局、だっけ? そこに捕まるんじゃないの? まあ、そもそもいきなり攻撃とかどうかしてるとしか言えないんだけど」

「うるさい! 結局、お前は転生者だったじゃないか!」

「それは結果論でしょ? 俺が言いたいのは普通に考えてみればわかることのはずだよ。

ともかくそれはすぐにでも仕舞つてくれない? 学校行きたいんだけど」

「黙れ! お前はなのは達にも手を出すつもりだろ!」

手を出すつて……。

「勝手な憶測だけで言わないでくれる? 相手を不快にするだけだよ?」

「もういい! お前は僕がここで倒す!」

正田君、いや正田でいいや。正田が俺に向かつて刀を振り下ろした。

ダメだ……こいつ、全然話が通じない……。しかも見聞色の覇氣を使わなくても遅いし、動きが滅茶苦茶だから簡単に躲せる。

「避けるな！」

「何言ってるの？ 当たったら痛いに決まってるじゃん」

そう言えば結界がないから不味くない？

「へっ、結界よろしく」

《へっ、結界あります》

流石と言ってから念話を切って、ブレイブを銃にして正田の刀に向かって魔力の銃弾を撃った。

そして上手く刀に当たり、正田の手から刀が離れた。

「なッ!？」

驚いている正田を無視して接近して腹を殴ったら一発で気絶した。

……弱ッ！ あんだけ大口叩くから強いのかと思ったたら弱過ぎでしよ！

「ブレイブ、結界解除して」

《了解です。……解除終わりました》

「ん、いつもご苦労さん」

これで学校に行けると思ったら、正田が突如立ち上がったので距離を取って身構えた。

手加減はしたけどすぐに起き上がれるとは思わなかったな。

「……………」

俯いているので表情が全く分からない。

「お前さん、名は何という？」

口調や声音が変わった正田が問いかけてきた。

さつきと雰囲気が違う……？ それに俺の名前は知ってるはずなのに何で聞くの？

「空、龍神空だよ。君こそ誰？」

「ワシはこいつの中にいる九尾——九喇嘛だ」

……あかりが言ってた九尾か。

「で、そんな九喇嘛さんが俺に何か用ですか？」

「クハハツ、クハハハハツ！」

なんとなく敬語で話し掛けたら笑われた。

「ああ、すまん。ワシみたいな化け物相手に敬語を使う奴は今までいなかったもんでな」

「はあ、そうですか」

化け物、ね……目の前にいるのが正田だからそんな感じは全くしないけど。

「ナルトの奴は変わっていたがお前も中々なもんだな」

「それって褒めてないですよね!? 変人だつて言いたいんですよ!?」

突如出てきた名前に首を傾げながらも変人扱いされてツツコんでしまった。

「いや、むしろ褒めている。お前はワシを恐れては無いみたいだからな」

「単に正田の姿だから恐いとか全く感じられないだけです」

「ハツ、それもそうだな。こんな雑魚じゃ話にならない」

「あー、もういいですか？ そろそろ学校行きたいんですが」

「まあ、待て。ワシが表に出てきたのはお前さんに頼みたいことがあるからだ」

「頼みたいこと？ 何ですか？」

「空よ、ワシの人柱力になってくれねえか？」

『空！ こいつの頼みなんか聞かなくていい！ 人柱力になれば碌なことにならないぞ！』

九喇嘛さんの頼みを聞いたら、ドライブグが止めてきた。

「碌なことって？」

『そこにいる九尾のように尾獣は自分の宿主を暴走させる奴が多い。そうしなければお前だけでなく、家族や友人も失うぞ！』

「おいおい、それはお前ら天龍も同じようなもんだろ？」

『今の俺の中に怨念は存在しないからジャガーノート・ドライブ覇 龍での暴走は無い！』

「ハツ、だが、空が弱かったら何かを失った拍子に暴走なんてあり得る

んじゃないのか？」

『それは……ッ！』

否定しきれずに声を詰まらすドライブ。

……それもそうか。俺が弱かったらなっっちゃうのかな……？ いや、仮に暴走しても十香達なら止められそうじゃないかな。というか、お互いのこと知ってるんだね。俺、初耳です。

「それに決めるのはそいつ自身だ。別にワシは空のどんな答えでも構わん」

「一つ聞いて良いですか？」

「なんだ、言ってみろ」

「九喇嘛さんは寂しいんですか？」

「……ククッ、クハハハハハッ！」

また笑われた……。そんなに変なこと言ったかな？

「寂しい、か……。そうだな、寂しくないと言ったら嘘になるな。俺はナルトの中にいた所為か、全く会話の出来ないこいつがすごく退屈だった。しかも自分が選ばれし者だと疑いもせず、自分が正義だと信じ切っているこいつは、ナルトとは別の意味での馬鹿だった。それも治しようがないほどのな。だが、空、お前さんはたった一回見ただけだがこいつとは全然違う。……まあ、何となくだがな」

あかりが言っただのつてこういうことか。

「……決めた。九喇嘛さんの人柱力になります」

「ほう……」

『いいのか？ 後悔しても知らんぞ』

「大丈夫。むしろこれからワクワクするぐらい！」

もし暴走しても十香達なら止めてくれるし。

『お前がそこまで言うなら止めはしない。神やアルビオンも拒否はしないだろう』

「うん、ありがと。で、どうしたら人柱力になれるんですか？」

「知らん。自分で考えろ」

えッ!? 知らないの!?

『使えん狐だな……』

「ああん？ ヤんのか赤トカゲ！」

『上等だ！ 掛かってこい！ バカ狐！』

「はい！ 二人共ケンカはダメです！ 今から二亜呼ぶから大人しくする！」

『……わかった』

二人は案外簡単に大人しくなった。

「へ二亜、今から俺がいるところに来てくれない？」

「へ分かった。すぐに行くよ」

二亜の返事を聞き念話を切った。それから五分ほどして二亜がやってきた。

「二亜ちゃんとうちやーく！ それでどうかしたの？」

「うん、俺、九喇嘛さんの人柱力になるからどうやったらなれるか調べたいんだ」

「……もう一回言ってくれるかな？」

しばらく茫然としていた二亜が聞き返してきた。

「だから、俺、九喇嘛さんの人柱力になるからどうやったらなれるか調べて欲しいんだ」

「分かったよ。すぐに調べ——られるかーッ！」

「痛ッ!？」

二亜が出した囁告篇帙ラジエールで殴られた

「少年は何をしたら九尾の人柱力になるって話になるんだよ!？」

「えーっと、正田に絡まれたから？」

「……はあ、よく分かった。少年が無茶苦茶だっということが」

溜息を吐かれて呆れられてしまった。

「いいから早くしろ、小娘。こいつが目を覚ます前に」

待たされるのが嫌いなのか二亜を急かしてきた。

「はいはい、すぐに調べますよーっと」

囁告篇帙を開き、調べ始めてくれた。

「ふむふむ、そういうことか……」

「どうだった？」

「意外と簡単だったよ。六喰ちゃんミカエールの封解主ミカエールでその少年の精神世界か

ら九喇嘛を引きずり出して、今度は少年の精神世界を開けてそのまま入れて、また閉じるって感じかな」

「ありがと。助かった」

「ここではやらない方が良いかな。九喇嘛はかなりデカいからね」

「それだったら絶デイメンシヨン・ロスト霧の中でやれば問題ないよ」

「なるほど、それはいい考えだね。じゃあ六喰ちゃん呼んで早速やろう」

「うん。へ六喰ー、今からここで手伝って欲しいことがあるんだけど、いい？」

「構わんのじゃ。すぐに向かう」

六喰が来る前に絶霧を創ることにした。

「……よし、完成つと」

創り終えるのとほぼ同時に六喰が現れた。

「来てくれてありがと。それじゃあ早速やるよ。絶霧発動」

絶霧を発動させると俺を中心に濃い霧が広がっていった。

「これで準備万端だね。待たせてごめんなさい、九喇嘛さん」

「構わん。それよりも早くやってくれ」

「むくは何をすればいいのじゃ？」

「彼の精神世界を開けて欲しいんだ。それで九喇嘛さんが出てきたら今度は俺の方を開けて、完全に入ったら閉じて」

「わかったのじゃ。——封解主」

六喰が天使を発頭させると長い鍵が手に握られていた。

【開ラータイン】

正田に近づき鍵を心臓辺りに翳して回したら正田の胸から門のようなものが現れて開いた。

すると門は徐々に大きくなっていき、限界まで大きくなると橙色の狐が顔を出した。

「……あなたが九喇嘛さん？」

『ああ、ワシが九喇嘛だ』

予想してたよりも遥かに大きくてビックリだった。ドライグと同じくらいの大きさだろうか。

俺が驚いている間にも九喇嘛さんは門から体を出していき、やがて全部が門から出た。

「六喰、次は俺の方お願い」

「うむ。【開】」ラウタイブ

六喰が俺の前にやってきて先程と同じように鍵を回した。

そして俺の前に門が現れて九喇嘛さんが通れるくらいに大きくなつた。

『それでは入るとするか』

そう言つて俺の前の門に入つて行つた。

『もう閉じていいぞ』

「うむ。【閉】」セクツァ

今度は反対に鍵を回すと門は閉じて消えた。

「九喇嘛さんどう？ 上手く入れた？」

『ああ、問題はねえみたいだ。ただ——』

ただ？ 何だろう？

『赤トカゲが一緒なのは気に食わん！』

『なら、とつとと出て行け！』

『出るのはてめえだけで十分だ！』

『何だと！ ケンカなら買ってやるぞ！』

『上等だ！ ボコボコにしてやる！』

はあ……これからは仲良くしてもらわないと五月蠅くて頭が痛い……。

「ヤハウエ、アルビオン。二人(?) 止めて……」

五月蠅くて頭が痛くなつてくる……。

『はい(ああ)——』

ふう……これで少しは静かになるはず。

「二人も手伝つてくれてありがと」

「どういたしまして。それじゃあもう行くね」

「あやつはどうするのじゃ？」

六喰が倒れている正田を指して言った。

「俺が学校に連れてくよ」

そのあと俺は絶霧を解除して、正田を背負って学校に向かった。

学校に着いて保健室に正田君を寝かせて教室に入ると、丁度お昼休みの時間で人が少なかつた。

「屋上に行きますか」

お弁当を出して屋上に行った。

屋上に着いて回りを見渡すと、皆がいた。

「やつほー皆ー」

軽めに挨拶をすると、なのはが無言でやって来た。

「どうしたの、なのは？」

「愛衣ちゃんと結婚ってどういうことなのかな？　かな？」

笑っているはずなのに目が笑ってない笑顔で聞かれた。

「い、いや、それは愛衣が勝手に言ってるだけで俺は知らない！」

愛衣の奴、なのは達にも言ったのか!?

「あら、皆の前だからって照れているの？」

誰も照れとらんわ！

「空君」

「ひゃい!？」

なのはが黒いオーラを纏っていたことに驚いて、思わず変な返事になっちゃった。

「O☆H A☆N N A☆S I Iしよっか♪」

ええ？　お話し？　何それ？

「よ、よく分からないけど何か怖いからお断りするよ」

逃げようとしたらなのはにすごい力で掴まれて逃げられなかつた。

力強ッ!?

「拒否権なんてないよ」

「い、嫌だ！　何かよく分からないけど！　た、助けて！」

皆に助けを求めたが目をそらされた。

薄情者ーーッ!!

「さあ、楽しい時間の始まりだよ♪」

「ぎゃあああああああああああッ!!!!」

のちに昼休みには男子生徒の音が校舎中に響くという七不思議の一つになったとか。

『(こいつはナルトとは違った意味で面白そうだな)』

## 無印編

原作始まるらしいです！

原作始まるらしいです！

S i d e 空

九喇嘛が俺の中に入ってから、俺は小学三年生になった。

……時間が経つのは早いね。

そして、九喇嘛とも大分仲が良くなり、敬語もさん付けも辞めた。

まあ、九喇嘛に要らんって言われたからなんだけど……。

でも、相変わらずドライグと九喇嘛は仲が悪いのはどうにかならないかなあ？

あ、そうそう二年生になる頃にはフェイトとアリシアが学校に編入してきたんだ。

アリシアは明るいから誰とでも仲良くなってたけど、フェイトは人見知りだからなのは達に助けてもらってた。

なんか、最近じゃ男子達の中で聖祥初等部の八大美少女って言われてんだって。

ちなみに、言われてるのは、なのは、アリサ、すずか、愛衣、あかり、明日奈、フェイト、アリシアの仲良しメンバー。

はやても足が治って学校に行けるようになったら、九大美少女かあ……。学校を救うために九人がアイドルにでもなったり……なるわけないか。でも、なったらなったで相当人気が出そうだね。

とまあ、そんなこんなで今はいつもの学校へのバス停に向かっている。歩きながら今日の授業とか休日は何したとか他愛もない会話をしていた。

「あ、そう言えば昨日変な夢を見たの！」

なのはが思い出したように言ってきた。

「どんな夢？」

「男の子が助けを求めてた！」

あー、俺もそんな感じの夢見たなあ。

「お、それなら私も同じ夢見たよ！」

「ええ!? アリシアちゃんも!?!」

「私も見たわ」

「じ、実は私も……」

アリシアだけでなく愛衣とフェイトも同じ夢を見たことにはのはかなり驚いていた。

確か、ユーノというフェレットになる少年がSOSを出したってあかりは言ってた。

「昨日の夢が原作開始の合図ってこと?」

「へええ、そうよ」

「そっか」

愛衣に念話で聞くと、俺の考えで合ってたらしい。

それからバスが来て乗り込むとアリサ、すずか、ヴァーリ、あかり、明日奈がいた。一年生の途中から皆が時間を合わせてバスに乗るようになった。

「おはよう、皆」

最初に気付いた明日奈が挨拶してきたのを始めとして、皆が挨拶を済ませて座った。

バスの中でも皆は他愛無い会話をしているのだが、女子達は最近の流行りやファッションの話をしていて俺とヴァーリの男子二人は肩身が狭い思いをしている。

「いつも思うんだけど、よくあんなに会話が続くよね」

「ああ、俺もそう思うよ。不思議で仕方がないってアザゼルも言ってたし」

まあ、こうしてヴァーリと楽しく話せるから良いんだけどね――

「空君はどう思う?」

こうやって突然話題を振るのはどうかと思う。かと言って、俺、全く聞いてませんよなんて言えば皆から文句を言われるので、いつの間にかマルチタスクを使えるようになったのだ。それで、振られた話題は昨日の夢についてだった。

「うーん、何かが始まる予感じゃないかな」

「そっかー。でもその方がロマンが溢れるね！」

その後も男の俺とヴァーリにはよく分からない会話を続けて学校に着いた。

そこから時間が過ぎ、昼休み。

「うー悔しい〜！ 今日空君に当てられなかった！」

普段大人しいすずかにしては珍しく声を荒げていた。

今日やった体育の授業はドッジボールだったのだが、すずかは俺を毎回当てようとして最後まで当てることが出来ないでいたのが理由だ。

「空はよくあんなこと出来るよね」

アリシアがありえないものでも見ているかのような視線で聞いてきた。

「そうでもないよ？ バレーボールのレシーブの容量で上に弾くだけだからボールが視えてれば誰でも出来るよ」

すずかのボールは普通に捕ろうとするとそのまま腕ごと持ってしまうから、バレーのレシーブで弾いてから捕るようにしている。この戦法は中々使えると思ってる。

「それでも十分すごいよ。私だってやろうとしたけど反応出来ないし、腕が痛いよ」

フェイトは若干腫れ上がった腕を見せながら言ってきた。

確かにすずかのボールは他の子と比べて強いからねー。

「俺もギリギリ視えるくらいだな」

「皆すごい……。私なんて全然見えないのに」

「大丈夫だよなのはちゃん。皆がおかしいだけだから」

なのはをフォローするあまりに酷いこと言われた。

「アハハ、確かにそうだね。あ、そうだ、さっきの授業で言ってた将来の夢って皆はなにか考えてる？」

明日奈が別の話題に切り替えた。

「俺はアザゼルと同じ研究者だな」

「私はパパの会社の経営を継ぐことよ」

ヴァーリとアリサは親孝行するつもりかあ。親が聞いたら泣きそうだな。

「私は機械が好きだから、工学系に進もうかなって思ってるよ」

へえ、すずかは機械が好きなのか。

「私は看護系の専門職かな」

あかりははやての為かな？

「私は母さんの仕事を手伝いたいな」

「私も〜！」

……ここにも親孝行者がいた。プレシアさんが聞いたら発狂するな……。

「皆、すごい。愛衣ちゃんは何かなりたいものってあるの？」

「そうね……永久就職で空君のお嫁さんね」

愛衣の言葉で空気が凍った。その内何人かが黒いオーラを出していた。

「空くん、どういうことなのかな？ かな？」

「愛衣とそんな関係になってたんだね」

「私というものがあがりながら浮気〜？」

三人ともとても怖い笑顔で俺を見てきた。

「お、俺はそんなこと一言も言って無い！ それから俺にその黒いオーラを向けるの可笑しくない!？」

なんでこういう話題になるとなのは達は過剰に反応するのさ!？」

「照れなくてもいいのに」

だから照れとらんわ！ それとお前の男性恐怖症はどこ行った!？」

「空君限定で大丈夫になったわ。これが愛の成せる技ね」

「さらっと心を読むな！ しかも余計なこと言ったから余計に空気が悪くなったわー！」

「皆、諦めなさい。空君は私のものよ」

いつ誰が誰のものになった!？」

「空は私のものだよ！」

「たとえ姉さんでもこればかりは譲れないよ！」

「空君は幼馴染の私のもの！」

おうおう、皆して俺を物扱いですか？

「俺、泣きそう……。明日奈く慰めてく」

「え、ええ!? わ、私!? えーつと、よ、よしよし大丈夫だよ」

隣にいた明日奈に泣きつくくと外野が五月蠅かったけど無視した。

「よし。俺、将来明日奈と結婚する」

なんて冗談を明日奈に言ってみたら、

「そ、そんなこといきなり言われても困るよ！」

案の定、顔を真っ赤にして慌てていた。そんな明日奈が可愛くて更にからかつてみたくなった。

「じゃあ、恋人からならいいの?」

「~~~~ツ!!」

今度は耳まで真っ赤にして俯いてしまった。

「アハハ、可愛いな明日奈」

そんな明日奈の反応が可愛くて笑っていたら、後ろから殺気を感じた。ギギギツと錆付いた機械のように首を動かすと鬼がいた。

「そ〜ら〜くん? さつきから何してるのかな? かな?」

「そうだよ、私達を無視して他の女の子とイチヤつくなんて」

「これは許せないな〜！」

「流石に浮気は見過ごせないわ」

「お、俺は別にそんなつもりじゃ……」

浮気つてそもそも付き合つてすらないよ!

ジリジリと寄ってくるのは達に恐怖を感じて後ろに下がっていく。

「ま、あんたの自業自得ってことよ」

我、関せずといった風にアリサは弁当を食べ続けていた。

「アハハ……」

すずかは苦笑いしているだけで助けてくれない。

「これは大変だね……フッフ」

あかりは困ったようにしてるけど笑うの堪えてるのバレバレだか

らね!？」

「骨は拾ってやるさ」

「ヴアーリ、拾うとかいいから助けてよ！」

「あうあう……」

「ダメだ……誰一人助けてくれない。」

「さあ空君、O☆HA☆NA☆SIしよっか」

「なのは達の悪魔のような微笑みを最後にそれから俺には昼休みが終わるまでの記憶はなかった。」

放課後、ホームルームを終えて夕飯の買い物を買ってアリシアと共にしていた。

「今日のご飯は何が良いかな〜と」

「ハンバーグ！」

「OK。それにしようか」

アリシアの提案を採用して、お肉コーナーに向かった。そこには見慣れた車椅子の少女がいた。

「あ、はやて〜！」

名前を呼ばれたことに気付いたはやてがこちらに振り向いた。

「そ、空君！ き、奇遇やね。夕飯の買い出しなん？」

「そうだよ。今日はハンバーグにしようと思ってさ」

「はやてと会話すると、はやては緊張してる気がするんだよねあ……。」

「怖がられてるのだろうか？」

「実は私も今日はハンバーグにしようって思ってたんや」

「へえ〜。あれ、あかりは一緒じゃないの？」

「ああ、お姉ちゃんなら別のコーナーにいるで」

「そっか。じゃあ、あかりによく伝えといてね」

「わかったで。ほな、さいなら」

お肉を取ってからはやてに挨拶を済ませて、野菜なども買い物かご

に入れてレジに向かった。

「随分、はやと仲がいいんだね」

帰り道でアリシアとフェイトにジト目で睨まれた。

「普通でしょ？ 友達なんだから」

「向こうはそうは思っていないけど……」

「え!? 俺ってはやとに友達だと思われてないの!?!」

「……別にそういうことじゃないんだけど」

「? じゃあどういう意味?」

「空は鈍いってこと」

へ? 鈍い? ますます分からないや。

結局、分からないまま家に着いて夕飯を作って皆で食べた。

夜の8時ぐらいに念話が流れてきた。

『へお願いです……誰か……力を貸して下さい……』

それだけ言って念話が切れてしまった。

「空、今のって……」

フェイトやアリシアにも今の念話が聞こえてみたいだ。

「誰かが助けを求めているみたいだね。俺と十香で行ってくるよ」

「気をつけなさい。油断はダメだからね」

「わかってる。行くよ十香」

「うむ! 初陣だな!」

初陣か……。なら――

「さあ、俺達の戦争<sup>デールト</sup>を始めようか」

幼馴染は魔法少女です！

幼馴染は魔法少女です！

S i d eなのは

私——高町なのはは動物病院に向かっている。

どうして向かっているかというところ、塾に向かう途中で夢に出てきた不思議な声が聞こえた。

その声のする方に行くところケガをしているフェレットを見つけた。

……この子が私を呼んだの？

それから私達は慌ててお医者さんのところに連れて行った。

その日の夜、再び声が聞こえてきた。

『へお願いです……誰か……力を貸して下さい……』

助けを求める声を聞いた私は急いでフェレットがいる場所に向かった。

動物病院に着くと、黒い塊のような何かがフェレットを追っていた。

「えー！ な、何あれ！」

「あ、あなたは！」

フェレットがしゃべった！ やっぱり普通のフェレットじゃないってこと!?

「お願いです！ 僕に力を貸して下さい！」

「わ、私!？」

「はい、あなたには魔法を使う資質がある！」

魔法ってホントにあるの!?! しかも私が使えるの!?!

「……わかった。私はどうすればいい？」

ホントはすっごく怖かった。でも、何となく私がやらなければならぬという使命感を感じた。だから、フェレット……さんを助ける

ことに決めた。

フレットは私のところまで来て、赤い宝石を渡してきた。

「目を閉じて、心を澄ませて、僕の言葉を繰り返して」

私は頷いて、フレットさんの言う通りにした。

「我、使命を受けし者なり」

「……わ、我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「……契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「……風は空に、星は天に」

「不屈の『ギヤアアアアア!!』っ！ しまった！」

フレットさんが続きを言おうとしたところで黒い怪物が叫びをあげて襲ってきた。

逃げなきゃいけないのに、私は恐怖で動けなくなってその場に座り込んでしまった。

黒い怪物がうねうねと動く触手のようなものを私に振り下ろした。怖くて思わず目を瞑ったけど、何故かいつまで経っても痛みは無かった。

あ、あれ？ 何が……？

ゆっくりと目を開けていくと、黒髪の男の子が大きな剣で触手を斬ったようだった。

そしてこっちに振り向いた男の子が誰だかようやくわかった。

私の初めて出来た友達で、一番大好きで大切な男の子——

「こんばんわ、なのは。散歩にしては遅い時間じゃない？」

「……空君」

Side out

Side 空

俺は十香と一緒に声のした方向に向かった。

そこにはすでになのはがいて、黒い怪物に攻撃されそうになってい

た。

「十香、力貸して！」

『うむ！ もちろんだ！』

「来い！ 〈サンダルラフォン麿殺公〉！」

十香の天使である麿殺公が刺さった玉座が後ろに発顕し、すぐさまそれを引き抜いた。

そして黒い怪物となのはの間に入り、襲ってきた触手を斬り裂いた。

黒い怪物が触手を斬られて怒ったのか叫んでいたが、無視して後ろのなのはの方に振り返った。

「こんばんわ、なのは。散歩にしては遅い時間じゃない？」

「……空君」

冗談のつもりで言ったんだけど、今の状況じゃ伝わらないか。

「大丈夫？ ケガは無い？」

「う、うん、大丈夫……」

なのはの身体を心配する。見たところがどこにもケガは無いみたくいで安心した。

「そんなじゃ、あいつ倒して帰ろっか！」

そう言っただけ俺は麿殺公を両手で構えたのだが、フェレットに止められた。

「ダメです！ いくらあなたが強くてもあれは彼女でないと封印出来ません！」

え、何それ。俺無駄じゃんか。

「……じゃあ、なのは頼んだ」

「で、でも……」

なのはが気まずそうにしていた。

「怖い？」

「……うん。空君は怖くないの？」

そりやそうだよな。

「まあ、そこそこ。だって十香達の方が『ソラ、私達がどうかしたのか？』……何でもないよ」

十香の低い声が俺の頭に響いて嫌な汗が止まらなかつた。

「そ、空君、大丈夫？　すごく汗かいてるけど」

「ダイジョブダイジョブ」

「片言で言われても心配でしかないんだけど……」

「アハハ。まあ、それは置いといて。なのは俺が護るから自分に出ることをして」

「それじゃ空君が危ないよ！」

「でも、封印はなのはにしか出来ないんだから俺がすることなんてそれぐらいだよ」

「……わかつた」

渋々なのはは納得してくれた。

「うん、ありがと。それに俺は一人じゃないよ」

俺の中にいる十香達のことでもあるがそれ以外にもいる。

「え？」

「いつまで見てるの、愛衣、王城君」

名前を呼ぶと、愛衣と王城君が出てきた。

「いつからいるって分かつてたの？」

「君らがそこに着いた時から」

「……マジかよ。デバイスで魔力は消したつもりだったんだけどな」

王城君が驚いていたが、気配で分かつた。

それに二人は原作に関わるって言ってたから来るのは当たり前だろうと思つた。

「で、二人はどうして隠れてたのかな？」

「あなたのあの強さなら私達の出る幕は無いと思つたのよ」

「だから、高町の変身するところだけでも見ようかなって」

変身？　あ、今日なのはが初めて変身するからか！

「わかつた。まあ、いいやって言いたいけど手伝つてくれる？」

「構わないわ。それに、どのくらい出来るか確かめてみたいから」

「俺もだ」

二人は快く頼みを受けてくれた。

「ありがと。俺と頑丈な王城君で敵を引きつけるからなのははフェ

レット、君？　さん？　の話聞いて封印の準備、愛衣は援護。OK  
？」

『分かった』

「あ、僕はユーノって言います」

何でこの状況で自己紹介したの!?　まあ、いいんだけどさ……。そう言えば、あんなに話してたのに全然攻撃してこなかったのはどうしてだろう？　……ハッ！　これが二亜の言っていたご都合主義なのか!?

そんなことを考えながら怪物の方を見たら、さつきよりも現在進行形で大きくなっている。

「あれ？　大きくなってない？」

「なってる。確実に」

「僕達が話してる時に強化されたみたいです。先程より魔力がすごいです」

ユーノ君？　さん？　がサラツと言ってるが、俺達からしてみれば最悪だ。

「強化って、勝てんのか……？」

「俺らは時間稼ぎだから無理はしなくていいよ」

「分かった。レオン、セットアップ！」

「私達も行くわよ。アスト、セットアップ！」

二人がバリアジャケットを纏うとそれぞれ、王城君は銀色のガンブレード、愛衣は黄金の錫杖を手にしていた。

「十香、今の俺が完全な霊装を纏ってどのくらい持ちそう？」

『……五分が良いところだろうな。それ以上は出来ないこともないが、身体への負担が大きいかからおすすめはしない』

最近になってようやく完全な霊装を纏うことが出来るようになったは良いけど、使用できる時間が少ないな……。

「でも、そのぐらいでなら問題ないか。〈<sup>アドナイ・メレク</sup>神威霊装・十番〉！」

俺の体に光が纏わりついて、紫の鎧となった。

「……えっと、空君、だよね？」

霊装を纏っている俺を全員が不思議そうに見ていた。

「うん、そうだよ」

「姿変わりすぎだろ！」

そう、王城君の言う通り、完全な霊装を纏うと姿が変化する。

例えば、今回の十香の霊装なら髪と瞳が十香と同じ紫色になり、髪が腰あたりまで伸びて髪飾りでまとめられて、十香の霊装に似た鎧を纏っている状態になる。

要するに、使う精霊本人と似た感じになるのである。

「君は、一体……」

「話は後で。今は目の前のこと優先だよ。時間も無いから」

「そうですね。それではお願いします！」

「うん、まかせて」

俺と愛衣、王城君はデカくなった怪物からなのはを護るように向き直した直後に、怪物は先程よりも強力そうな触手で攻撃してきた。

俺はその攻撃を片手を突き出して、透明なバリアのようなものを出して弾いた。

その後も、二人に攻撃が行っても俺が間に入ってすべて防いだ。

やっぱ、精霊の力ってすごいな。

「今のうちに二人は攻撃して！」

俺が指示を飛ばすと、二人は魔力弾で攻撃をしたが、怪物にはあまり効いていないようだった。

でも、目的は倒すことじゃないから今は注意を引くだけでいい。

「さっきと同じように繰り返してください！ 我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「不屈の魂はこの胸に」

「不屈の魂はこの胸に」

『この手に魔法を！』

「レイジングハート、セットアップ！」

なのはが言葉を紡ぎ終わると、眩い光に包まれた。

光が収まると、なのはが赤い宝石が付いた杖を持ちバリアジャケットを着ていた。

なんか、聖祥の制服に似てないか？

「おお！ 夢に見た光景が生で見られた！」

王城君が何か言ってるのを無視して、俺達なのは達がいるところまで下がった。

「これで封印が出来るの？」

「……もしかするとこのままでは出来ないかもしれないです」

「それは強化されたから？」

「はい、恐らくですけど。でも弱体化させれば可能なはずです」

どうやら俺の推測は当たっていたらしい。

「残念なことに私達の攻撃ではあまり効果が無いみたいだけどね」

「じゃあ、俺がやるよ。この状態もあまり持たないし」

「お願いします。気を付けて下さい」

「ん、りょーかい」

軽めに返事をしてから怪物前に塵殺公を構えて立った。

再び触手で攻撃してきたが、塵殺公を縦に一閃して全てを薙ぎ払い、その斬撃は怪物を半分にした。

おおー、よく斬れる！

『……は？』

それを見ていた全員が啞然とした。

『まあ、このぐらいは当然だな！』

「そうだね。じゃあなのは、封印よろしく」

きつとドヤ顔をしているであろう十香の言葉に頷いて、なのはに託す。

「ふえ？ あ、うん！ リリカル・マジカル！ 封印すべきは忌まわし

き器、ジュエルシード！ 封印！」

なのはのデバイス——レイジングハートからピンク色のリボンが怪物を捕らえた。

「ジュエルシード、シリアルXXI！ 封印！」

ピンク色のリボンはなのはの声に反応して、怪物を貫いて消滅した。

そして、小さなひし形の青い宝石——ジュエルシードがそこには落ちていた。

「レイジングハートでその石に触れて下さい」

なのははユーノに言われた通りに杖でジュエルシードに触れると、杖の中に吸収されていった。

これでようやく終わったと思つて俺は霊装を解除したら、疲れが一気にやって来た。

「それじゃ、無事終わったから帰ろ」

『身体は大事ないか？』

「うくん、結構体に来るなく」

『なら体力をもつと付けねばならないな！』

「そうだね。もしかしたら、セイクリッド・ギア神器と一緒に使うこともあるだろうし」

バランス・ブレイカー精霊の力と禁手を同時に使つたらすごいだろうけど反動も相当なものになるんじゃないかな。

「あ、あの！ 君は一体何者なんですか!? それに他の二人もデバイスを所持しているなんて……」

唐突にユーノ君？ さん？ が聞いて来た。

俺は答えようとしたが、周囲からパトカーのサイレンが鳴り響いた。

結界張り忘れてたー！

「それはまた今度ね。今はここから逃げよう」

俺達は急いでその場から離れて、それぞれの自宅に帰った。

そう言えば、正田はどうしてここに来なかつたんだ？

俺みたくに原作を知らない？ よく分かんないな……。

Side out

S i d e ???

俺は今、ある人物と電話をしていた。

『何か分かったか?』

相手が聞いているのは先程の起こった戦闘についてだ。

「ああ、色々とな。後で報告する」

『そうか。なら早くこっちに戻ってきてくれ』

それだけ言って相手は電話を切った。

「それにしても、まさかあいつがいるとは思わなかった」

S i d e o u t

S i d e 空

家に戻ると念話が聞こえた。

『へもしもし、こちらユーノです。先程はありがとうございました』

「へうん、どういたしまして」

『俺らがいる必要あったのかは疑問だがな』

王城君の声が聞こえてきた。複数人で念話も出来るんだね。

『へそれで、どうしてあんなったのか教えてくれるかしら』

『へ実はあのジュエルシードは僕が遺跡で発掘したもので、次元船での移送中に』

原因不明の事故でこの街に散らばってしまったんです。自力で回収をしようとしたんですが昨夜の思念体との戦闘でケガをしてしまい、そこから誰か僕の声が聞こえる方に協力を求めたんです。そこからは皆さんが知っている通りです』

「へ一つ聞いてもいい?」

『へはい、えーっと……』

ん? ああ、自己紹介してなかったね。

「へ俺は龍神空。空でいいから」

『へ分かりました。それで空さんが聞きたいことは何ですか?』

「へさんは要らないよ。ジュエルシードって危険な物なの?」

『へ……はい、あれは願いを歪んだ形で叶える物で、全部で二十一個あ』

ります。』

歪んだ形で願いを叶える、かあ……。

「へそっか。ありがと、教えてくれて。』

『へそれでお前はこれからどうするんだ、ユーノ。あ、俺は王城雄人つていうんだ。好きに呼んでくれ。』

『へすぐにでも探すつもりです。』

『へ一人でするつもり？ 私は天河愛衣よ。好きに呼んで。』

『へ……はい、皆さんにはこれ以上迷惑をかけられませんから。』

一人じゃ無理があるだろ。

『へそんなのダメだよ、ユーノ君！。』

なのはがユーノを止めた。

『へなのは……で、でも……。』

『へ私はユーノ君の手伝いをするよ！。』

『へだそうよ。あなたはどうするの？。』

『へ……分かりました。皆さん手伝っていただけませんか？ 報酬は必ず出します。』

『へバツキヤロー！ んなもんいらねえよ！。』

ユーノの報酬というのが気に入らなかつたのか怒鳴り出した王城君。

……念話で怒鳴られるとスゲー五月蠅い。頭がキンキンするんだけど。

『へありがと、雄人……。』

『へへッ、これくらい良いんだよ。気にすんな。』

意外と王城君は熱血キャラだったんだね。

踏み台なんてなろうとしなきゃよかったのに。

『へ私も手伝うわ。もちろんタダよ。』

『へありがと、愛衣。』

二人も手伝うのか。だったら――

「へじゃあ、俺はパスで。』

『へええッ!? そこは手伝うところですよ！。』

息の合った四人のツツコミに驚きよりも笑いが込み上げてきた。

「へへへへ、冗談だよ。ちゃんと俺も手伝うよ」

『へありがとう！』

「へそんじゃ、そろそろ切るよ。あ、そうそう他にも魔導師はいるから今度紹介するね」

『へホントに!? それは助かるよ！』

そこで念話を切り、お風呂に入って、疲れていたためすぐに寝てしまった。

まさかの二天龍激突です！

まさかの二天龍激突です！

S i d e 空

昨日の戦闘の次の日、俺はいつも通り学校に行った。教室ではいつもよりも騒がしかった。

もちろん理由は昨日の動物病院での出来事だ。

何でもガス爆発が起こったらしいと噂になっていた。

「そう言えば、あのフェレットは大丈夫なのかしら」

いつものメンバーで話していたらアリサが独り言のように呟いていた。

「フェレット？ 何のこと？」

事情を知らない明日奈がアリサに質問した。

「実は昨日の塾に行くときにケガをしているフェレットを見つけたの。それで、その子を病院に連れていったんだ」

「でも、昨日の騒ぎはあの病院の近くだったから心配ね」

「そ、それなら心配ないよ」

なのはが気まずそうに鞆を開けると、フェレットことユーノ君が顔を出した。

「キュー！」

『可愛いー!!』

それを見ていた女子は黄色い声を上げた。

あつという間にユーノ君はこのクラスの人気者となった。

何故か正田はユーノ君のことを睨んでいたけど……。

そして、時間は過ぎて放課後。

帰ろうかと思ったら、ヴァーリに呼び止められた。

「少しいいか？」

「いよ」

珍しいこともあるもんだなと思いつつも、短く答えてヴァーリと

共に屋上に行った。

「それで、どうしたの？」

「単刀直入に聞くがお前は何者だ？」

「え、何？ どういうこと？」

突然の質問に頭が追い付かない。

「すまない、質問が悪かったな。実は昨日お前が黒い怪物と戦っているのを見たんだ」

あそこにいたのか!? これはごまかせないか……。

「ヴァーリは転生って信じる？」

「……は？」

今度はヴァーリの頭が追い付いてないみたいだった。

「簡単に言うと、俺は一回死んでるってわけ」

「……じゃあ、あの力は？」

「神様からの贈り物だよ。ほら」

そう言つて、俺は昨日ヴァーリが見たであろう剣

——サンダルフオン塵殺公を

見せた。

「それは……セイクリッド・ギア神器とはどこか違うな……」

今何て言つた!?

「せ、神器を知ってるの!?!」

「あ、ああ知ってるぞ」

え？ じゃあ、もしかして悪魔や天使も存在するのか!? でも、今

までそんな反応は無かったのに……どうということ!?!

俺の頭の中が混乱している。

「空は神器を持ってるのか？」

「え？ ああ、持ってるよ」

「どんなのなんだ？」

こういう時つて何見せればいいんだ？ もう何でもいいや!

「……えっと、デイバイン・デイバインング白龍皇の光翼!」

だが、これを見せたのは間違いだった。

「……な、何で、何でお前が俺と同じものを持っている……？　ありえない……。……本当にお前は何者なんだ？」

……へ？　同じもの？　ま、待って、これはヤバいんじゃないか？　で、でもどういふことか余計に訳が分からなくなった！

一旦、深呼吸をしてからしゃべりだした。

「えーっと、さっき、俺は一回死んだって言ったでしょ。そこで神様から色んな力をもらったんだ。で、その中の一つに神器を創る能力っていうのがあるんだ」

「つまり、全部の神器を持っているということか？」

「まあ、そうなるね」

まだ、全部の神器は創ってないけど……。

「なりほどな。だったら同じものが存在していてもおかしくはない……ということか」

「どうしてそんなに驚かないの？」

「ん？　いや、これでもかなり驚いているぞ」

どこがだよ！　普通は声を荒げるとかしない!?

「そ、そっか。で、同じってどういうこと？」

「ああ、俺も白龍皇の光翼を持っているんだ」

今度はヴァーリが自分の神器を見せてきた。

「……………」

「そういう空の方こそあまり驚いてないな」

「俺が創ることが出来るのは（原作で）知ってるものだから、同じものがあつても不思議じゃないよ」

内心スゲー驚いてるけどねッ！

ヴァーリは納得したように「そうか」とだけ呟いた。

「じゃあ、今度は俺が聞くけど、ヴァーリは何者？」

俺の質問にヴァーリは答えるのを一瞬躊躇った。

「……そうだな。俺だけ聞くのはフェアじゃないな。俺は半分、人間以外の血が流れているんだ」

「それは……苗字に関係することなの？」

……ここまで来ると大体予想がつくけど、一応聞いておかないと。



「それはこっちのセリフだ。態々すまん」

「そんなことないよ。あ、ヴァーリつてもう禁バランス・ブレイカー手に至った？」

自分以外の神器使いなんていなかったから、色々聞けるいい機会だ  
と思った。

「ああ、もちろんだ。空はどうなんだ？」

「俺も創った内の三つは出来るよ」

全部、亜種の禁手になったけどね。

「三つもか……。それはすごいな。ぜひ手合わせしたいな」

ヴァーリの瞳がメラメラと燃えていた。

「お、いいね！ やろうよ！」

これを断る理由なんてないから、俺は喜んで受けた。

「なら、冥界に行こう」

冥界に行けるのか！

俺はヴァーリの提案に頷いて、魔方陣に乗って冥界へと転移した。

転移をして目を開けると、空の色が紫だった。

「おおー！ ここが冥界！」

初めて見た世界に興奮が抑えきれなかった。

「こっちに来てくれ」

ヴァーリの後ろに付いて行くと、大きな研究施設のような建物が見  
えてきた。

「大きいな……」

建物の大きさに圧倒されながらもヴァーリに付いて行き、中へと  
入った。

「お、ヴァーリじゃないか。今日はどうしたんだ？ おや、そちらはの  
子供は友人か？」

体の厳つい男性がヴァーリに話し掛けてきた。

あれ、この人って――

ヴァーリが仲良さげに会話する。

「やあ、バラキエル。今日は友達を連れてきたんだ。試合をするため

にな」

バラキエル来ましたー！

「そうか。ならば、私の方からアザゼルには伝えておこう」

「すまない、助かるよ」

「これぐらい構わんさ。ああ、それからたまには家に来てくれ。妻や朱乃、猫又姉妹が会いたがっていたぞ」

「わかった。近いうちに必ず顔を出すと言っておいてくれ」

「うむ、伝えておこう。それではな。君もゆつくりしていつてくれ」

それからバラキエルさんは仕事があるのかどこかに行ってしまった。

俺達もまたしばらく歩くと、訓練場らしき場所に着いた。

「ここでもいいか。空、ルールはどうする？」

「相手が気絶か、戦闘不能でいいんじゃない？」

「そうだな。バランス・ブレイク禁手化！」

《Vanishing Dragon Balance Breaker!!》

ヴァーリが早速、白龍皇の鎧を纏った。

「なら、こっちはドライブで行きますか！ 禁手化！」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!》

俺の禁手は亜種だから全身鎧姿ではなく、髪は赤く染まり、若干逆立っていて、瞳は宝玉と同じ鮮やかな緑、両手には宝玉の埋まった赤いグローブで両足にも宝玉が埋まっている赤い靴になった。

服はバリアジャケットを着ている、同じように赤く染まっていた。

ブーステッド・ギア・サンバーストナックル  
名前は赤龍帝の太陽神拳。

「まさか、赤龍帝の力も持っているとはな。これは楽しめそうだ」

『あれは明らかに亜種の禁手だな。油断するなよ、ヴァーリ』

「ああ、もちろんだ」

ヴァーリが鎧の中でも笑っているのがわかった。

互いに準備は終わって構えた。

「そんじゃ、行くよ、ヴァーリ！」

「来い、空！」

最初から全開で互いの拳をぶつけると、その衝撃で足元に小さなクレーターが出来た。

そして、ほぼ同時に距離を取り、神器の能力を使った。

《BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!!!!!!!!!》

《DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide!!!!!!!!!!》

『倍加』と『半減』が同時に発動したので、俺の力は元に戻り、ヴァーリは半減で吸収した力で強化されて、俺の方が若干不利になった。

『向こうの方が今は若干だが強いな……』

「うん。だけどこっちは速さで負けてないからそこで押し切る！」

俺は足の裏から炎を噴出してブースターの要領でヴァーリに急速接近して炎を手に纏って殴った。

「グハッ！」

俺の速さに反応出来ずに鎧が砕け吹き飛ばされたが、すぐに体勢を立て直し鎧も直っていた。

「……すごい速さだな。全然反応出来なかった」

「鎧が無い分、速さに特化してるんだ」

「なるほどな。だが、俺は負けない！」

ヴァーリが更に闘志を燃やして魔力弾や半減を使い攻撃してきた。俺だって負けないさ！」

炎を纏った拳や足で魔力弾を弾いていたが、何回か被弾した。

バリアジャケットのおかげで大したケガには繋がらないけど、一発一発が強い……。

『空！ そろそろ持たんどー！』

「え、もうそんなに時間経った!?」

『ヴァーリ、こちらもだ。思ったよりも消費が激しい』

「……わかった。空、そろそろ決着をつけよう」

どうやら互いに禁手の維持時間が限界らしい。

「だったら、最後にとっておきを見せるよー！」



だった。

子供でも二天龍、と言ったところか。

「アハハ……ごめんなさい」

「はあ……まあ、壊したもんは仕方がねえ。それからお前さん、空、だったよな?」

「はい、そうですよ」

「お前が今代の赤龍帝なのか? ……だが、それ以外の力も感じてよく分からんな」

訝しむように俺を見つめるアザゼルさん。聖槍や九喇嘛に気が付いているようだ。

「正確に言うと、俺は赤龍帝であってそうじゃない、みたいな感じですよ」

「何じゃそりや?」

自分でも言ってるよく分かんないや。

「空は複数の神器を持っているんだ」

「他にも神器を持つてるだど!? 他のも見せてくれ!」

アザゼルが興味を持ったのか肩を掴まれて、問い詰められた。

「え、あ、はい。えっと、ソード・パース魔剣創造」

俺は黒い剣を創り出した。形は六喰の封解主ミカエルの鍵をイメージした。

「魔剣創造、か。……だが、それだけじゃこの歪さは足りないな。まだ何かあるんじゃないのか?」

鋭いな……。流石は墮天使の総督って事か。

「黄昏の聖槍、トウル・ロンギヌス 白龍皇の光翼、デイベイン・デイベイディング 魔獣創造、アナイアレイション・メーカー 幽世の聖杯、セファイロト・グラール

永遠の氷姫、アフソリユート・デイマイズ 絶霧、アブソリュート・デイマイズ 煌天雷獄、アブソリュート・デイマイズ 聖剣創造ぐらいですかね。

あ、あとは九尾の九喇嘛がいます」

言い終えると。アザゼルは顔を引きつらせていた。

「……………ホントに何もんだよ。神滅具のバーゲンセールじゃねえか」

「簡単に言うと、神様からの贈り物です」

そこから俺は貰った力のことを説明した。

「転生……それで、力を得た訳か……。それによって本来一つしかない

「ロンギヌスの神滅具が二つ存在、か……」

「並行世界の神器って言えばいいんですかね？　大体それがしつくりくるんで」

「確かにそれが妥当だな。お前を転生させた神様にはお前から会えないのか？」

「無理だと思えます」

「そっか……まあ、それはいいか。空、『神の子を見張る者』に来ないか？」

おっと、まさかの勧誘?! どうしよう……。

「ちよつと時間下さい。皆と相談したいんで」

「おう、いいぜ。ゆっくり考えてくれ」

『考えるまでもありません、空さん！』

十香達に念話で聞こうとしたら、勝手に聖槍が出てきて、ヤハウエがしゃべりだした。

「なにッ!?　その声、まさか聖書の神か!？」

『ええ、そうですよアザゼル。先に言っておきますが彼を入れたことを他の勢力が知れば大変なことになりますよ』

「確かにそうだがよ……。かと言って、こいつを放っておく訳にも行かねえぞ?。」

『そう言っておきながら珍しい存在の彼を研究するつもりではないのですか?』

「ギクツ! ……そ、そんなこと……はねえぞ」

凶星だったのか、目をそらしたアザゼルさん。

『やっぱりこいつは信用できませんよ!　帰りましょう、空さん!』

「まあ、ヤハウエがそう言うなら……」

「送っていくか?。」

「ううん、大丈夫。それじゃ、お邪魔しました。ヴァーリ、また明日」

「ああ、また明日な」

「え、あ、おい!。」

アザゼルさんを無視して別れを告げて、ブレイブを使って転移をした。

転移して家の前に着くと、すっかり日は沈んでいた。

「たっだいまー!」

扉を開けて、たっだいまを言うと皆出てきた。

「あ、だーりん! どこに行ってたんですかあ!」

「冥界」

『……………は?』

俺の言葉に誰もが驚いていた。琴里なんてチュツパチャツプスを口から落としていた。

「……………何があつたのだ?」

「ヴァーリが悪魔だった」

『……………は?』

皆は余計に分からなくなったようだった。

「まあ、そんなことよりご飯にしようか。すぐ作るから待ってて」

「あ、それなら私が作ったのですぐにでも食べられますよ」

俺の代わりにリニスが今日は作ってくれたらしい。

「ありがとう、リニス。ほら、皆も席に着きなよ」

『え、ああ、うん……………ってそうじゃない!!』

「うわツ! 急に叫ばないでよ」

『冥界ってどういうことなのさー。説明してよねー』

「ご飯食べてからね」

俺がそう言っていると、皆はそれに従って座った。

「いただきます!」

『いただきます!』

そして、ご飯を食べ終えてから今日あったことを説明した。

「なるほどね。大体は分かったわ」

「しかし、勧誘をされるとは……………」

「どうすんの?」

「皆で考えようかなって思ったんだけど、ヤハウエは嫌だって」  
『当たり前です!』

ヤハウエはアザゼルさんに対して厳しいね……。

「まあ、それは置いといて。ジュエルシードの方はどう?」

「えっと、今日一つ見つけたよ」

「お、そっか。あと、十九個か……」

今度、フェイト達を皆に紹介しないといけないな。

皆に今日あったことを話して、風呂に入ってから自分の部屋に戻った。

「それにしても、悪魔や墮天使が存在してたなんて驚きだよ」

『ああ、俺達も全く分からなかった』

『しかし、この街にはあまり人間以外はいなさそうだな』

「そうだね。あ、そしたら、魔王や神に会ってみたいな」

『あなたならすぐにでも会えると思いますよ』

「もし会えたら、戦ってみたいなあ……」

俺の力はどのくらい通じんのかな?

『その時にはワシの力を貸してやるぞ』

九喇嘛がそう提案してきた。

「ありがと。今度から修行に入れてみよっかな」

『夢の中でも修行を付けてやろう』

「うん、じゃあ今日からやろっか」

俺は目を閉じて精神世界に潜り込み、九喇嘛の力を使いこなす為の修行を開始した。

誘拐事件です！

誘拐事件です！

Side空

墮天使の存在を知った翌日、龍神家のトレーニングルームに俺、なのは、フェイト、アリシア、

愛衣、王城、ユーノ、プレシアさん、リニス、アルフと言った面々が揃っていた。

「それじゃ、これからジュエルシード回収に向けての会議しまーす」  
『はい』

俺の気の抜けた挨拶に皆も同じように返した。

「じゃあ、ユーノ君や、頼んだよ」

人間の姿になったユーノに進行を頼んだ。

どっちが本来の姿なのか聞いたら人間の方だと言われた。

「あ、うん。まず、ジュエルシードは全部で二十一個あります。そして、そのうち二つが回収済みです。ここまでは皆の知つての通りです」

ユーノの確認に全員が頷いた。

「それで、一刻も早く回収するために今日は皆の実力を知って、探索するチームを決めたいと思ってます」

「要するに模擬戦をしようってことか」

「その通りだよ。戦力が偏ると危ないからね」

「どういう組み合わせで対戦かしら」

「じゃあ、俺対フェイト&アリシア&アルフ、プレシアさん&リニス対なのは&愛衣&王城君&ユーノ、でどう？」

「空君一人で……問題ないわね。心配するだけ無駄だわ」

プレシアさんにさらっと酷いこと言われた気がするが気にしない気にしない……。

「その組み合わせにした理由は何だ？」

「フェイト達三人は普段からやってるからって言うのと、なのは達はプレシアさん達から」

色々学べると思ったから。ついでに言えば、俺のモルモ……ゲフンゲフン……訓練相手だよ」

おっといけない。決して九喇嘛の力を試したいとかじゃないんだよ？ ホントだよ？

「今、モルモットつて言おうとしてなかった!？」

「気のせい気のせい。俺が(家族として)好きな人にそんなことするはずないじゃないか」

「(異性として)す、好きな人……。うん！ そうだよね！」

ふう〜、何とか誤魔化した。でも、何で顔赤いの？

「空とアリシアの言ってることが噛み合っていない気がするんだが……」

「それは私も思ったの」

なのは達が何か言ってるっぽいけど、良く聞こえなかった。

「そんじゃ、最初は俺のグループからやろつか。審判はリニスお願いね」

「はい、任せて下さい」

「今日こそ空に勝ってやる！」

「そうだね。いつも負けてばかりは嫌だから」

「たまにはギャフンつて言わせてやる〜！」

お、三人とも気合バツチリだね。

「じゃあ、俺に勝ったら、何でも一つ言うこと聞いてあげるよ!？」

三人は俺の提案に目を見開いていた。

「な、何でも……。あう……。……」

「あんなことやこんなことを……。キヤ〜！」

「中々面白いじゃないか！ フフフ……」

フェイトとアリシアが何を想像したのか分からないけど、なんか顔を赤らめ悶えていた。

アルフは俺が嫌がることしそうな感じで不敵に笑っていた。

まあ、そんな簡単に勝たせるつもりはないけどね。

「両者とも準備はいいですか？」

リニスの問いかけに全員頷いて、バリアジャケットを着て構えた。因みに、フェイトは黒いバリアジャケットで、アリシアはその色違いで二人は同じ武器。

アルフは露出の多い服にマントとグローブのバリアジャケット。出会った頃からかなり成長して今ではすっかり大人の女性だ。スタイルのかなり良いアルフのあの露出は目の毒。スベ、別にやましい気持ちなんて無いからねツ！

「それでは、始め！」

開始の合図と同時にフェイト達三人共、速攻を仕掛けてきた。

いつもと同じパターンから来るか……なら——

「ソード・バース プレイド・ブラックスミス  
魔剣創造十聖剣創造！」

右手に黒い魔剣、左手に白い聖剣が俺の手に握られた。

剣、というよりも鍵に近いけどね……。

なんとなくこれが一番しっくりきた形状の武器だったのだ。

俺はそのままフェイトとアリシアの攻撃をいなして、アルフの拳を剣の腹で受け止めた。

「クッ！ やっぱり簡単には行かないか……」

一旦、距離を取ると、アルフが悔しそうにしていた。

「でも、諦めない！」

「それに今日はいつもと一味違うからね！」

……？ アリシアが何かするのかな……？ いや、考えてても仕方がないな。でも、いざとなれば禁バラス・ブレイカー手バラス・ブレイカー使うまで！

「見せてあげる、私の新しい力を！ フォーチュン、ガンモード！」

《了解。Gun mode》

アリシアのデバイス——フォーチュンドロップが返事をする、アリシアの手に二丁のハンドガンが握られていた。

「それが新しい力？」

「それはこれからのお楽しみだよ♪」

気になって聞いてみたが見て確かめろという感じに返された。

そりゃ簡単にはバラさないか。

「まあ、なんでもいいさ。今度はこっちから行くよ！」

最初は……フェイトから！

狙いを定めてからフェイトに接近して、斬りかかった。しかし、間にアルフが入って、防御魔法で防がれた。無理やり壊そうかと思ったが、アリシアの射撃で離れざるを得なかった。

「……」

どうしたもんか……。

攻撃手段を変えようかと思っていたら、向こうは動き出した。

「フェイト、アルフ、時間稼ぎお願い！」

『うん（あいよ）！』

アリシアがデカイ一撃を放つための時間稼ぎ……といったところだね。

「させないよ」

狙いはアリシアに変更したが、当然二人は邪魔をしてくる。

「はあああああッ！」

「てやあああああッ！」

フェイトが斬り掛かり、躲したところにアルフの拳がやってくるのを防御魔方陣を展開して防ぐ。その後もフェイトとアルフの連携攻撃で中々アリシアに近づけない。

「……チッ」

思わず舌打ちしてしまった。

「（九喇嘛、力借りるよ）」

『早速ワシの出番か。存分に使え』

「（ありがと）」

使えると言ってもまだ一部しか使えないんだけどね……。

九喇嘛にお礼を言ってから集中すると体に力が漲って来た。

「へ!? 空の魔力が上がった!? 気を付けて、アルフ！」

「へ……ああ、もちろんだよ」

一度深呼吸をしてから、二本の剣を構え直した。

フェイト達は警戒していたが、構うもんか。

まずは、最初と同じくフェイトから狙った。

フェイトやアルフは魔力弾を放ってきたが、全部剣で斬った。

『ッ!?!』

フェイトに斬りかかれば、さつきと同じでアルフが入って来たが、防御魔法陣を斬り裂き、アルフを吹き飛ばした。そのままフェイトに行こうと思ったが、目の前にいなかった。

……後ろ。

見聞色の覇気で気配を感じ取り、フェイトの攻撃を剣を背中で交差させて防いだ。

フェイトも段々速くなってるな……。

「クッ！」

フェイトの猛攻に俺は防戦一方になった。でも――

「まだまだだね」

フェイトの攻撃を弾いた瞬間に後ろに回り込み、背中に斬りつけた――  
——と思ったら、俺の視界からフェイトが消えた。

「……………え!?!」

なにがどうなっているのか分からないで呆けていたら、フェイトと起き上がったアルフがアリシアのそばにいた。どうやらアリシアのチャージが完了したらしい。

「アルフ！」

「ああ！ チェーンバインド！」

二人のバインドを受けて身動きが取れなくなってしまった。

「これでフィニッシュ！ 超電磁砲<sup>レールガン</sup>、発射！」

人ひとり飲み込めそうな翡翠色の砲撃が俺に放たれた。

ヤバッ！ って固くて外れない！ こうなったら――

Side out

Side アリシア

「これでフィニッシュ！ 超電磁砲、発射！」

バインドで逃げられない空はまともに喰らって、激しい爆発が起こった。

フェイトとアルフが時間稼ぎをしてくれたおかげでフルパワーで

打ち込めた。

いくら空でもこの威力は耐えられないはず！

煙で確認出来ないが、手応えは感じていた。

「姉さん、やったね！」

「とうとう勝てたよ！」

「うん！ 私達の勝利！」

私達はようやく空に勝てたと思い、喜んでいた。

だけど、突然強い風が吹いて煙が晴れ、空の姿が見えると、

「ふう、危なかった。もうちよつとで負けてたよ」

金色の聖槍に天使のような姿に変わった空が平然としていた。

S i d e o u t

S i d e 空

俺の姿を見て皆が固まっていた。

まあ、あんな砲撃受けて平然としてたら固まるのも仕方がないよね。

「良い攻撃だったよ、アリシア」

「え、ああ、ありがと……」

「……えつと、空……だよ、ね？」

「それ以外誰がいるのさ」

「いや、姿変わり過ぎだから……」

姿……？ あ！ トウル・ロンギヌス 黄昏の聖槍の禁手を見せたの初めてか！

アルフに言われてようやく気が付いた。

「ごめんごめん。説明はしたけど、まだ見せてなかったね。あ、ところで勝負はどうする？」

「ううん。さっきのほとんど魔力切れ……」

「私もキツイかな……」

「というか、勝てるイメージが無い……」

三人共地面にへたり込んでいた。

どうやら勝負はここまでのようだね。

「分かった。じゃあ、俺の勝ちってことで」

「……また、負けか……」

「姉さん……」

「アリシア……」

三人とも相当落ち込んでるね……。ちよつと悪いことした気分だよ。

「えーつと、三人共いいかい？」

『？』

「良い攻撃だったから、ご褒美つて言うつと変だけど、試合前に約束したこといいよ」

『え、いいの!?!』

三人が一気に元気になった。

「こいつら、俺に何させる気……?」

「うん」

「じゃあじゃあ、デートして!」

アリシアが最初に要望を言ってきた。

「え、ああ、そのくらいならいいよ。フェイトは？」

ほつ、良かった。大したお願いじゃなくて。

「わ、私も、その、デートで……」

「うん、OK。そんで、アルフは？」

フェイトもか。問題はアルフだな。

「これを着てみてくれよ!」

そう言つてアルフが見せてきたのは、犬？ いや、狼の着ぐるみだった。

「わかった。あとで着るよ」

なんだ、皆大して変なこと言わなかったな……。ビビって損した気分だよ。プレシアさんの教育に感謝だね。

「じゃあ、次はプレシアさん達だから、俺達は移動しよう」

『うん♪』

やけにご機嫌の良い三人に思わず微笑んでしまった。トレーニングルームの端に座るとプレシアさん達は試合を始めた。試合を見な

がら先程気になったことを聞いた。

「フェイトはどうやって俺の攻撃躲したの？ アレ、結構驚いたんだけど……」

実際、決まると確信してた。

「体に電気を流して無理やり動かしたんだけど消費が激しくてまだ上手く使えないんだ」

体に電気を流す……。それなら普段よりも速く動けるようになるのか……。

「考えとしてはすごく良いと思うよ。後は、練習次第じゃないかな」「うん！ 私頑張ってみる！」

それから、四人で話しているうちに試合は終わっていた。結果はプレシアさんとリニスの圧勝だった。

「どうだったって聞くまでもないか……」「すごく強かったの……」

「攻撃しても簡単に防がれちゃう」

「互いのフォローも早かったわ」

「流石、と言ったところかな」

四人は床に倒れながら、それぞれの感想を述べていた。

「でも、あなた達には才能はあるわ」

「ええ、私達も何度か危ない場面がありましたから」

「それは、ユーノ君のおかげなの」

「そうね。教わったのが昨日の一日だけとはいえ、かなり助かったわ」

「指示も的確だったしな」

「そんなことないよ。僕なんてまだまださ」

皆に褒められてユーノは謙遜していた。

「よし、これで大体の実力はわかったでしょ。チームに分けよっか」

「そうだね。チームは……空となのは、愛衣に僕。それとフェイト、アリシア、アルフ、雄人。プレシアさん達はもしもの時の場合にどちらかに加わってもらおう形でいいかな？」

「そうね。それが良いと思うわ」

他の人も問題は無いみたいだった。

「じゃあ、チームはこれで決定して、本日はここまで！あとは練習するなりなんなりどうぞ」

今日やることは終わったので解散を言い渡した。

「さてと、俺は夕飯の買い物にでも行きますかね」

トレーニングルームを出て、暇そうにしていた耶？矢と夕弦を誘って買い物に出かけた。

買い物で済んだ後の帰り道、耶？矢と夕弦の間に挟まれて帰っていた途中で見知った顔を見つけて、声を掛けようとして、止まった。黒服の男達に、抵抗する明日奈、アリサ、さすがに車に押し込まれて、連れ去られてしまった。

『……………へ？』

俺達は三人して変な声を出してしまった。

「えーっと、あれは……………誘拐、だよな？」

「そ、そうじゃない、かな…………？」

「動揺。ビツクリです。目の前で誘拐を目撃するとは…………」

……………。

『はあああああああああああああああああああああああああああああッ!?!』

俺達の叫びが街に木霊した。

「ヤバくないか!?! どうすんの!?!」

「と、取りあえずけ、警察に連絡！ えっと、119だっけ!?!」

「指摘。それは救急車です。確か911です」

「いや、それも違うから！一旦、落ち着こう！ こういう時は深呼吸だよ！ ヒツ、ヒツ、フー、ヒツ、ヒツ、フー」

「それはラマーズ法だしッ!」

俺達は目の前のことにテンパって訳の分からないことを口走っていた。

それから何とか落ち着き、耶？矢と夕弦を体に入れて、風を纏う。颯風の御子の力舐めんなよッ!

そう息巻いて、体に風を纏い、人間離れた速度で車を追い掛けた。

俺、キレます！

俺、キレます！

Side 明日奈

私——結城明日奈は気が付くと、薄暗い部屋で椅子に座っていた。

……あれ？　ここどこだろう？

見覚えのない空間に戸惑っていました。

確か……さっきまでアリサちゃんとすずかちゃんとパーティーで会って話したのに……。

ッ！　そうだ！　私達は黒い男の人達に無理やり車に押し込まれて、それで……。

そこからの記憶は無かった。気絶させられたのだろうと考えた。

アリサちゃん達はどこかな……。

立ち上がろうとして、何かに縛られていて動くことが出来なかった。

「アリサちゃん！　すずかちゃん！　いたら返事して！」

幸い声は出せたので、二人がそばにいるかを確認した。

「……ん？　……あれ？　ここは……？」

「わ、私達攫われちゃったの……？」

二人の声が返ってきて、私は安心した。

「多分、そうだと思う……」

『明日奈（ちゃん）！』

暗くて姿は見えないが私の左辺りに二人は居るみたいだった。

「これからどうすればいいのかな？」

「私達がいなくなったことに気付いて、今頃探してるわよ！」

「そうだね。でも、どうして攫われたんだろう……」

「お金……だろうね。これでも私達はお嬢様ってわけだし」

「ま、それが妥当ね」

私達が呑気にしゃべっていたら、突然、扉を開く音がして光が差し込んだ。

「おやおや、お目覚めですか、お嬢様方」

見知らぬ男性が数人の黒服の男を連れて入って来た。

「あんた達が攫ったの!？」

「ええ、そうですよ。ああ、紹介が遅れました。私は横田と申します」  
男性は横田と名乗って来た。

横田……？ 今日のパーティーに参加していた人！

「……何が目的ですか？」

「そんなに睨まないで下さいよ。目的は彼女だけなので、用が済めばあなた方二人はすぐにでも解放しますよ」

横田さんが彼女と言って指をさしたのは、すずかちゃんだった。

すずかちゃんだけが目的……？

名指しされた瞬間、すずかちゃん表情が強張っていた。

「どうしてすずかのことを狙うのよー！」

「ふむ……その様子ですと、彼女の正体をご存じないようですね。彼女は――」

「やめて！ それ以上言わないで！」

横田さんが何かを言いかけた所で、すずかちゃんの悲鳴が響いた。

だが、横田さんは気にすることなく、続きを言った。

「彼女は夜の一族という吸血鬼なんですよ」

……え、吸血鬼？ すずかちゃんが？

頭が追いついていない中横田さんは続けた。

「化け物が平気な顔して日常を過ごしている。なんて笑える話でしょうか。ハハハハハ！」

「どうです？ お二方は幻滅したのでは？ 今まであなた達を騙していたのですよ？」

「……い………な………」

アリサちゃんが俯いて何かを言っている。

「おや？ 何ですか？ 怖くなりましたか？」

「関係無いって言ってるのよッ！ この、ハゲツ!!」

「そうだ………そんな関係ない！」

「そうです！ すずかちゃんは私達の友達です！」

「アリサちゃん、明日奈ちゃん……」

アリサちゃんが思いつきり罵倒していた。それを聴いて横田さんは頬を引き攣らせていた。

「私はまだ二十代です！ 禿げてません！ ムカつくガキです……！」

「横田さん、他の二人はこっちで貰っても？」

「ん？ ああ、構わん。好きにしてくれ」

横田さんが許可を出すと、二人の男がアリサちゃんと私の方に一人ずつやってきた。

「なあ、俺、こつち貰っていいか。どうせ暇だし遊びてえんだよ」

「お、いいね。そいじゃ俺はこつちの態度のデカイ娘に教育してやるか。グへへ」

「何よ！ 気安く近寄るんじゃないわよ！」

「やめて！ 二人には何もしないで！」

アリサちゃんやすすかちゃんは相手を怒鳴りつけているが、私は怖くて声も出なかった。

男が手を伸ばしてきてもう駄目だと思って、目を閉じた。

……怖い……誰か……誰か助けて……。

「空君ッ！ 助けてッ！」

心の中で来るはずのないと分かっていたいながら、ふと頭に思い浮かんだ少年の名前を大声で叫んだ。

瞬間、強い風が吹いた。

あれ……？

私に向かって伸びてきていたはずの手は何時まで経ってもやつてこなかった。

気になって目を開くと、二人の男がいつの間にか倒れていた。

「お、おい、お前！ どっから入って来た!？」

横田さんが誰かに向かって叫んでいた。

その方に目を向けると――。

「どっつて、普通に正面からだよ」

橙色の髪に腕や足に拘束具を付けた男の子がいました。

この声、もしかして――

Side out

Side 空

三人を攫った車を追い掛けると、街の郊外にある港の倉庫に着いた。

「ここか。見張りがいるね……」

『提案。私達八舞の力で吹き飛ばしましょう』

『我が眷属の友に手を出すなど万死に値する!』

「ああ、俺達の戦争を始めようか」

魔剣と聖剣を創りだし、風を纏って見張りの男達が何かを叫ぶ前に気絶させていった。

「やっぱ、八舞は速いから速攻で倒しやすいね」

『当然よ。だが、我らの力はこの程度ではない』

『歓喜。そう言ってもらえて嬉しいです』

あとは中だけか……。

確認しようとしたところで、

空君ッ！ 助けてッ！

「エロヒム、ツァバオトへ神威霊装・八番へ！」

明日奈の声を聴いた瞬間に霊装を纏い中に入って二人の男を全力で蹴り飛ばした。

「お、おい、お前！ どっから入って来た!？」

いきなり現れたのにビックリしたのか腰を抜かした男が叫んでいた。

「どこって、普通に正面からだけど」

「嘘だ！ 外には何人もの見張りがいたんだぞ!? お前みたいなガキに何が出来る!」

「……だから倒したってことじゃん。……ところで、あんたが誘拐犯のリーダー?」

「あ、ああ、そうだ！ 私が命令した！ この化け物を手に入れるためにな!」

立ち上がった男はずかしの髪を掴んで見せつけてきた。

さすがが化け物ね。出会った時から人間ではないと薄々そんな感じはしていた。

「……………」

でも、だからどうした。

「どうした!?! こいつが化け物と知ってこグオオッ!?!」

男が最後まで言い切る前に俺は腹を殴りつけて軽く吹っ飛ばした。

「……立てよ。死なないように手加減したんだからさ」

「ゴホッ、ゴホッ……ま、待ってくれ! と、取引をしないか!? 君に二人は返そう! だからその化け物と私のことは見逃してくれなしか!? 頼む! もし不満なら金! 女! 名声! 何でも君に渡そう! だからどうか!」

呆れた……。自分が不利になると今度は命乞いか……。

「……わかった……なんて言うと思った? ……お前は俺を怒らせた

んだ！」

俺を中心に風が吹き荒れ、一步一步男の下に近づいて行く。

「ヒイツ！ だ、誰か助けてくれ！」

逃げる男が壁に寄り掛かった時、ポケットから何かが落ちた。

「ッ！ ジュエルシード!? しかも五つも！」

慌てて回収しようとしたが遅かった。男の歪んだ願いを叶えてしまったのだ。

そしてジュエルシードの発動によって男の姿が人間から異形のものへと変わっていった。

『ナ、ナンダコレハ!? アハハハハハ！ カガ！ カガ溢レテクルゾオツ！』

肌はドス黒く、体は服を破り、腕や足は太く、3m近く巨大になった。

『怪物……だな』

「……ああ、そうだね」

化物物って言ったはずかよりもよっぽど化物してるよ。

『死ネエツ！ クソガキガアツ！』

もはや怪物としか言いようがない男が殴り掛かって来た。

「……鈍い」

『ガハッ！』

男の身長よりも高く跳んで躲し、頭に踵落としを入れて地面に叩き付けた。

『マ、マダダアツ！』

だが、すぐに立ち上がり俺に掴みかかってきた。

「……あんたに俺は捕まえられないよ」

腕を薙いで発生させた暴風が怪物をよろめかす。

そのまま腹に一撃入れて、怯んだところを回し蹴りで吹き飛ばした。

『クソツ！ ナゼダ！ ナゼ勝テナイ!? ……コウナツタラ！ オイ

小娘！ 人質ニナツテモラウゾ！』

「い、痛い！ 放して！」

男はすずかを掴み、倉庫の天井を突き破って逃げ出した。

「逃がすか！」

風を纏って空を飛んで追い掛けると、怪物の背中から歪な羽が生えて飛んでいた。

『空、全力でやっちゃえー！』

『賛成。思いつきりやっちゃってください』

「うん、これで終わりだ」

八舞の天使——颯風騎士を発顕すると、左右の肩に無機質の翼が生え、腕を覆いつくす手甲が出現した。

二つの翼が合わさって、弓のような形状を形作った。

次いで、夕弦のペンデュラムが弓の弦となり、耶？矢の巨大な槍が矢となつて番えられた。

最大まで引いた弓を飛んでいる男に向ける。

そして。

『颯風騎士

ラファエル

——【天を駆ける者】!!』

俺達の声が重なって、巨大な弓を打ち放った。

その瞬間、今までで一番強い風が辺りを襲った。

余波で海は荒れ、港に置いてあったドラム缶が宙を舞っていた。

絶対にして無敵の一点集中攻撃は男を意図も容易く打ち抜いた。

「すずかを助けに行かないと」

落下する男の腕から滑り落ちたすずかをついでに壊れなかったジュエルシールドをキャッチした。

「あ……そ、ら……く……ん」

それだけ言っですずかは気絶してしまった。

無事か……。それにしても手加減したとはいえ良く壊れなかったな、ジュエルシールド。

丈夫なジュエルシールドに思わず関心してしまった。

気絶したすずかを抱えて、明日奈達のいるところに戻った。

すずかを寝かせて、明日奈達のロープを外すと二人にいきなり抱き着かれた。

「ちよッ!？」

『い、いきなり空に抱き着くなんて!』

『請願。後で抱きしめて下さい。いえ、抱きしめます』

二人の行動にビックリしてたら、泣きじゃくる声が聞こえた。

「……怖かった……ずっと……怖かったよ……」

「……もう皆に会えないって……思った……」

ど、どうしたらいいの!?

明日奈はともかく、普段勝気なアリサがここまで弱ってる姿にかなり動揺する。

「え、えっと、よ、よしよし、もう大丈夫だよ。怖くなくい怖くなくい」  
霊装を解いて、二人が泣き止むまで抱きしめて頭を撫で続けた。

二人が落ち着いてからしばらくすると、すずかの姉の忍さんや恭也さんを始めとして、皆の家族がやって来た。

ついでにジュエルシード反応もあったから魔導師組も来ていた。

「事件は解決しましたよ」

「空、お前がやったのか?」

「えっと、それは……」

恭也さんは俺の力のことを知っているからなんとなく察しがついたのだろう。

答えたいところだけど事情を知らない人がいるから話しづらい。

「今はすずか達が先よ。私達の家に行きましょう」

忍さんの指示で皆は月村家にお邪魔することになった。

精霊の力を使って疲れてるけど、帰れる雰囲気じゃない……。

正体バラします！

正体バラします！

Side空

月村家に着くと広い部屋に大勢の人——あの場にいた全員——が集まっていた。

俺、なのは、フェイト、アリシア、アルフ、リニス、プレシアさん、愛衣、王城君、ユーノの魔導師組。すずか、アリサ、明日奈。あとはメイドのフアリンさんとノエルさんに、執事の鮫島さん。

アリサと明日奈の両親は別室に待機してるらしい。

最初は誘拐されたと聞いて相当焦っていたが、すでにアリサ達三人が無事だったのを確認して今は落ち着いている。

因みに忍さん達とは翠屋でのアルバイトや家に遊びに行つたときに知り合った。

「えっと、話をしたいのだけれど……いいかしら、空君？」

忍さんから、いやここにいる全員から注目を浴びている。

何人かが殺気出してくるんですけどッ！　そして、王城君笑うな！

「そう言われても……二人が放してくれないんですけど」

さつきから隣にいる明日奈とアリサが俺の手を放してくれないのである。

試しに放してと頼んでも明日奈に笑顔で「無理♪」と言われ、アリサには「うるさい！」と言われ頬を赤く染めて、そっぽを向かれる。

恥ずかしいなら離せばいいのに……。

「まあ、いいわ。最初に聴くけど、私とすずかは夜の一族っていう吸血鬼よ」

それがあの男の言っていた意味か……。

「それでここにいる人には二つの選択肢があります。一つ、私達のことをきっぱり忘れる。二つ、盟約を結んで、生涯を共にする。その二つです。さあ——」

『二つ目でー』

迷うことなくアリサと明日奈は答えた。

「アリサちゃん、明日奈ちゃん……」

「さすがの眼からは嬉しかったのか涙が零れていた。」

「……そう。他はどうかしら？　といつてもいきなり聞かされても困るわよね」

「それは魔導師組の人に言っているのだろう。」

「私はすずかちゃんとお友達でいたいです！」

「なのはを皮切りに学校で仲がいい人達は迷いなく答えた。」

「ユーノや王城君みたいな友達という関係でない人も一応盟約を結ぶことになった。」

「それで、空君は？」

「最後に俺の番が来た。」

「そりやもちろん盟約を結びますよ」

「ここで一つ目選ぶ奴は勇者を通り越して神だと思おうよ。」

『私が神ですか？』

「ヤハウエが何か言ってるけど無視！」

「分かったわ。それじゃあなたはすずかの婚約者になつてもらおうわ」

『……………は？　婚約者？』

「ちよ、ちよっと待つてください！　何で俺なんですか!?　ユーノや王城君だっているじゃないですか！　それにすずかの気持ちを無視してまですることじゃないです！」

「それと隣の二人はどんな握力してんだよ!?　滅茶苦茶痛いんだけど！」

「だって、男の子三人の中で一番仲が良いのはあなただし、すずかも満足ではないみたいよ？」

「お、お姉ちゃん！　勝手なこと言わないで！」

「すずかが顔を真っ赤にして姉に怒鳴っていた。」

「そうです！　空君は私と結婚するんです！」

「それも違うよ、なのは！　空は私とだよ！」

「空が好きなのは私なんだからね！」

「皆諦めなさい。空君の運命の相手は私よ」

「し、仕方がないからこいつは私がもらってあげるわ！」

「空君は私と一緒にが良いよね？」

ええッ?!? これ、どういう状況?!? それと王城君吹くな！ ユーノ助けて！ あと、明日奈の笑顔が怖い！

「皆、落ち着いて。私に良い考えがあるわ」

プレシアさんによってその場の喧騒が一旦治まった。

良い考え？ 嫌な予感しかしないのは何故だろう？

「詳しいことは後で説明するけど、ミッドチルダには一夫多妻制があるのよ。それなら皆と空君が結婚が出来るわ」

「それはいい考えですね！ そうしましょう！」

皆も納得したのか『賛成！』とばかりに頷いていた。

なるほど、その手があったか……って違うだろ！ それと王城君腹を抱えて笑うな！ ユーノ、目をそらすな！ 助けて下さい割とマジで！

「いや、あの俺の意見聞いてくださいよ！」

「あら？ うちのすずかじゃ不満なのかしら？」

「そ、そういうことじゃなくてですね。その、不純と言いますか何と言いますか……。恭也さんだつて反対ですよね?!?」

「いや、お前ならなのをこのことを幸せに出来ると思ってるから構わな  
い」

ウソでしょ!?!? あの恭也<sup>シスコン</sup>さんが反対しなかった?!? じゃあ今まで

なのはといるとあんなに殺気送つてたのは何だったの!?!?

「(ど、どうすればいいの!?!? 皆ー)」

『ハハハハハッ！ ドラゴンは力と異性を惹きつけるからな！』

『受け入れるしかないんじゃないのか?』

『面白いぞ。ナルトの奴もモテてたしな!』

『ダメです！ このままではアザゼルと同じになってしまいますよ  
!?!?』

『そんなの私達が許さないんだし!』

『否認。姉に許可無く結婚など認めません。空は私達の共有財産です  
から』

俺の中にいる奴らに聞いたがまともな答えはほとんどなかった。

それとドライグを後でぶっ飛ばすことを決意した。

「と、とりあえずそれは置いて。次の話しましょうよ」

『逃げたな……』

ウグツ……皆の視線が痛い……。でも、めげない！

「まあ早急に決めることでもないから今はいいわ。……それで聞くけどあなた達は何者？ 特に空君は」

「へどうすんだ？ 話すのか？」

「へうん。でも二人のことは言わないつもり。俺は転生者です」

聞いたことが無い人は首を傾げていた。

「簡単に言うと、一回死んで神様に生き返らせてもらったっていうことです。信じ難い話だと思いますが、ホントのことです」

「(信じられない話だけどウソではないわね。)……分かったわ。じゃあ他の皆は？」

「他の皆は魔導師と言われる存在ですよ。こっからはユーノに頼むよ」

説明が面倒だから能力のことは話さなかった。

「うん。えっと、実はこの街にジュエルシードと言われるものがあるんです。それはとても危険な物で、一刻も早く回収するために皆に協力してもらっているんです。今回の事件でもそれが発動した反応があったので駆け付けました」

その後も、ユーノはどうしてそうだったとかの経緯も全部話した。

「……なるほどね。大体の事情は分かったわ」

「ちよつといいい？ あんたユーノとか言ってたけどなのはが飼ってるフェレットと同じ名前なのは何で？」

「え？ ああ、それは僕がそのフェレットですよ」

一拍置いて、事情を知らなかった人の声が屋敷に響いた。

「つまり、なのはの着替えを見たのか!? もしそうならこいつは生かしておけない！」

おっとく！ ここで修羅の登場だく！ 対するユーノはどうするく!? 俺を助けなかった罰だ。少しは痛い思いをしろ！

「落ち着きなさい恭也」

「だが！」

「——恭也」

「……分かった」

まさかの忍さん乱入で試合は引き分けになった〜！ チツ……  
ユーノめ、命拾いしたな……。

「これで互いに秘密を話し合ったわけね。それじゃ、今日は解散しましょう。皆、長い話に付き合ってくれてありがとう」

その言葉でようやく帰れると思ったのだが、そうは問屋が卸さなかつた。

『今日、空（君）の家に泊まる』

と、それぞれの両親に会うなりそう言った。

親達は微笑みながらあっさり了承しやがった。そのあとお礼を言われたけど。

俺の意思は無視ですか!?

しかもそれを聞きつけたのはや愛衣、すずかも泊まりに来るとか言い出した。

というわけで、我が家に泊まることになったメンバーを引き連れて家に入ると、  
玄関に皆はいた。俯いていて表情が分からない。

デジャヴを感じますね……。

「た、ただいま戻りましたー……」

『……………』

なんで誰も返さないの!? 逆に怖いよ!

「えっと、今日は友達が泊まることになったんでいいかな……?」  
『……………』

だからなんで何も言わないの!?

無言の十香達は怖いがいつまでも皆を外にいさせるわけにもいかないのを通り抜けようとした。

——ガシッ!

誰かに肩を掴まれた。振り向けば、十香が俺を掴んでいた。

「な、何でしょうか……?」

「あとで、覚悟しておくんだな……」

それだけ言って皆中に入ってしまった。

……どうやら、今日が俺の命日らしいです。

悟った俺はなのは達を家にいれて、ご飯の用意をして皆で食べた。

そして、今は大浴場に十香達と入っている。

あれ? どうしてこうなったんだ? でもありがとうございます

! 眼福です! ってそうじゃない! いや、眼福なんだけど!

「ね、ねえ、なんで皆してここに居るの?」

「空さんがイケないんですのよ?」

「え? 俺?!」

俺がなんかしたの!? それと狂三! 腕を胸に挟まないで!

「空君が色んな女の子を引つ掛けるからお姉ちゃん達心配になつてね。そろそろ攻めに行かないとって思ったの♪」

大人モードの七罪が後ろから抱き着いて来た。

や、柔らかい! 大きい! ってやばいよ! 耳たぶ噛まないで!

理性が崩壊しそうになりながらもなんとか耐えていた。

「それで、空はどうするの?」

「どうするって何を?」

「結婚のことに決まってるじゃないですかあ!」

「……それは簡単に決められるもんじゃないよ」

「そ、そうです……よね」

皆はどこか安心したように息を吐いていた。

「そろそろ上がりたんだけど……」

「む、ダメだぞ。まだ、ゆっくり浸かってないではないか」

もう勘弁してください……。

「私達が言いたいのは出来れば私達のことと考えて欲しいなーってことだよ、少年」

皆のこと……あ、自分の認めた奴じゃないと結婚はさせないという訳か……。ブラコンここに極まれり。

「分かった。皆のことも考えるよ」

なんて言いはしたが、彼女達が認めるような相手って誰？

「まあ、空のことだから心配はしてないけどね」

「いつそのこと全員幸せにすれば問題ない」

え、俺にハーレム作れと!?

「期待してるのじゃ、空」

えーマジですかー？

「じゃあ、はい、その、頑張らせていただきます」

適当に返事して早くここから出たかった。

「もういいよね？ 俺出るから!」

「まだ良いではないか」

「請願。七罪、空を貸して下さい。抱きしめます」

「はい、どうぞ〜♪」

今度は正面から夕弦に抱きしめられた。

ギャー! む、胸が当たってるー! 顔近い!

「私も抱きしめたいですう!」

美九にも後ろから抱きしめられた。

ヒヤア! 挟まれてる! 胸で挟まれてる! 鼻血が出そう!

「あ、あの、もう、は、放して……」

「拒否。嫌です。もっと空を堪能させてください」

「そうですね! 減るもんじゃないんですからいいじゃないですかあ

!」

今現在進行形でガリガリ俺の理性が減ってますよ!

「そろそろ交代。次は私の番」

「了承。名残惜しいですが、マスター折紙どうぞ」

夕弦から折紙へと受け渡されて後ろから抱きしめられた。

まだ続くの!?

『四糸乃も抱き着いちゃえー』

「う、ん……し、失礼、します……ッ!」

「四糸乃まで!？」

前からは四糸乃が抱き着いて来た。

四糸乃は胸が大きくない分密着する部分がデカイよ！ 折紙！  
首筋舐めないで！

『空君、どうよー？ 気持ち良いー？』

気持ち良いよ！ 気持ち良いけどぎッ！ このままだとホントにヤバイよ！

結局、皆に交代で抱き着かれてようやく解放された。

『もう……お婿に行けないよ……』

「その時はむく達がもらってあげるから安心するのじゃ」

嬉しいこと言われているのにそんな気がしないのは何故だろうか……。

先に風呂から上がり、アルフとの約束通り狼の着ぐるみを着た。

「うんうん！ 似合ってるよ！」

アルフは満足そうにしていた。

「ありがと。気に入ったからパジャマにでもしよっかな？」

意外と悪くないかも。

『ぜひー!』

なのは達にも大絶賛だった。

「そっか。じゃあそうするよ。俺は先に寝るけど皆は好きな部屋で寝ていいから」

『空（君）と一緒に寝たい！ え？』

『え？』

見事なまでに皆のセリフが被った。

「別に同じ部屋でもいいよ。あ、布団出さないよ」と

「私は空君と同じベッドで全然いいよ♪」

「お、そっか。明日奈は俺の隣ね」

『なッ!?!』

明日奈を除いたメンバーが驚きの声を上げていた。



同じ部屋にいるアリサ達にも聞こえてたらしくアリサが反応していた。

「一緒に住んでるからね〜！」

「むう〜二人が羨ましいの！」

「なのはだつて空と寝たことあるんでしょ？」

「それはそうだけど……」

「皆一緒に結婚出来る様になったんだからいいじゃない」

俺は結婚するとは言ってないし、そんな簡単に決められないよ！

「それもそうね。ところで、明日の休日どうする？」

それもそうねって俺の意思はないんですか？

「私は明日、お父さんがコーチしてるサッカーチームの応援に行こうと思うの。皆も一緒にどうかかな？」

「そう言えば、俺士郎さんに出ないかって誘われてたな。暇だったしヴァーリと参加することになったんだよね」

「皆応援に行くわよ」

『おー！』

即決ですか……。まあ、いいんだけどさ……。

「それじゃ、お休み」

『お休み！』

よし、九喇嘛の力じゃなくて何か禁<sup>バランス・ブレイカー</sup>手に至らせるか！

俺は目を閉じて精神世界に潜り込んだ。

サッカーやります！

サッカーやります！

S i d e 空

朝早くに起きて、河原のサッカーコートがある場所に俺はいた。他にも昨日一緒にいたメンバーにヴァーリや士郎さんもいる。

「おはよう、空君、ヴァーリ君。今日は頼んだよ」

「出番があればですけどね」

「なくても問題ないけどな」

「そ、そうかもしれないね。ハハハ……」

士郎さんが監督をする少年サッカーチームの試合に出ないかと誘われていたのだが、俺達はあまり乗り気じゃなかった。

「お前ら！ 今日の試合、我らが聖祥の美少女達に捧げるぞ！」

『おー！』

応援に来ているなのは達がいいところを見せようとチームの少年達がやる気十分だからだ。

「別にあんたらの応援に来たんじゃないんだけどね」

「確かにそうだけど、それは言っちゃダメだよ、アリサちゃん」

「すずかちゃんも酷いと思うよ……」

ベンチで会話するのは達の声はプレイヤー達には届いてなくてよかったと思った。聞いたらやる気下がりそうだしな……。

「ところで相手は強いんですか？」

ゲーム開始の笛が鳴ってから士郎さんに聞いてみた。

「ああ、この辺りでは強豪チームと言われているよ」

「あいつら勝てるのか……？」

「そのための君達でもあるんだよ」

「そんなに期待されても困りますよ」

「練習試合だから負けても構わないさ」

なら、もし出ても多少は気楽にプレー出来るな。

「ダメよ！ あんたは全力でやりなさい！ そして私達に勝利を捧げなさいー！」

俺の心を見透かしたようにアリサが無茶苦茶なことを言ってきた。  
チームのメンバーに向けていた態度とは明らかに違う。

「えー!? あいつらは良くて俺はダメなの!？」

『ダメー!』

なんでさー!

「私は空君の頑張ってるどころ見たいな♪」

「むう……わかったよ。俺も負けるのは嫌だし、全力でやるよ。でも、出れたらね」

「士郎さん! 空を出して下さい!」

「流石に始まったばかりでは無理だよ……」

アリサの我が儘に士郎さんは困っていた。

「落ち着きなよ、アリサ。士郎さんが困ってる」

「……分かったわよ。ごめんなさい、士郎さん」

士郎さんは「気にしてない」と言いつて試合しているプレイヤー達に指示を飛ばした。

試合の流れを見ると相手の方がシュートチャンスが多い。

キーパーがナイスプレーをしているが、点が入るのも時間の問題だろう。

それから気合が空回りして、プレイヤー達のスタミナの消費が激しい。

これはマズいな……。

そして俺が予感していた通り、ゴールを決められて前半を終了した。

皆にドリンクを配っていたら相手チームから笑い声が聞こえた。

「あいつら弱くね?」

「こっちは全然本気出して無いのになー!」

「手抜きでも勝てるぜ!」

どれもこっちのチームを馬鹿にした内容だった。

「あいつらー!」

キレたアリサが相手チームに行こうとしたがなのは達に押さえつけられた。

「放しなさいよ！ あいつらをぶっ飛ばさないと気が済まないわ！」  
アリサが怒るのも無理ないか……。俺もムカついたし。

「士郎さん」

「ああ、後半から空君、ヴァーリ君をF Wフォワードで出すよ。叩き潰すくらい  
全力でやってくれ」

どうやらムカついているのは士郎さんも同じようだ。

『はい』

ハーフタイムが終わり、メンバーを交代して俺とヴァーリがフィールドに立った。

「今更交代かよ？」

「でも、弱そうだな」

「サッカーできんのか？」

相手がまた俺達を馬鹿にしてきたが無視した。

「さてさて、俺達の戦争サッカーを始めようか」

後半戦を始める笛が鳴った。

相手ボールから始まってドリブルで攻めてきたが、ヴァーリが簡単に奪った。

「空！」

ヴァーリからパスをもらい今度はこつちから攻めた。

『空（君）！ イケー！』

応援されたら頑張るしかないじゃん！ 周りの男どもからの視線は痛くなったけど！

俺とヴァーリの二人がワンツースでドンドン抜き去り、ゴール前まで行った。

「ここは通さない！」

相手D Fディフェンスが止めに来たが、ボールを踵で上げて相手の後ろに落と  
して抜いた。

残るはキーパー！

最後の砦—— G Kゴールキーパーが前に出てきたところで思いっきりシュー  
ト——

と見せかけてループシュートであっさりキーパーの背中を越えて

ゴールに入った。

「ナイスシュートだ、空！」

「そっちもナイスパス！」

二人で拳をコツンと軽くぶつけて喜んだ。

ようやく周りの人達もゴールが決まったことに気付いて歓声が上がった。相手は点を入られたことに驚いてたけど。

「すごいな！ 二人共！」

「カッケー！」

「あんな動き見たことねえよ！」

「俺達も負けていられないな！」

俺達のプレーで仲間が活気づいた。

「たかが一点だ！ 取り返すぞ！」

『おー！』

点を入れられて向こうにもようやく火が付いたようだ。再び相手ボールから始まった。

「おい！ こっちだ！」

「ああ！ —— なっ!？」

「よつと。ヴァーリ！」

俺は相手のパスをカットして、ドリブルで二人抜いてヴァーリにパスした。

「空！ 決めろ！」

ヴァーリはサイドから攻めると、中にセンターリングを上げた。

む、少し低いな……。

一旦、胸で止めて少し上に上げてからもう一度跳び、その場で体を後方宙返りの要領で回転させつつ、ボールを蹴った。要するにオーバーヘッドシュートだ。

蹴られたボールは地面をワンバウンドして、ゴールネットを揺らした。

「オーバーヘッドとは驚いたぞ」

「お前だってやろうと思えばできるだろう？」

さつきと同じように拳を合わせて、今度はなのは達がいるベンチに

向かってピースした。

「さあ、まだまだ点取るぞ、ヴァーリ！」

「そうだな！」

Side out

Sideアリサ

それからも空達の猛攻は続き、試合は終わった。結果は6―1という圧勝だった。

空とヴァーリが3得点ずつ取ってハットトリックした。

これだけだと空とヴァーリが頑張ったようにしか聞こえないと思うけど、チームの皆も前半の空回りがなくなり、全力で互いのフォロージャブ、ディフェンスをして頑張っていた。特にキーパーはホントにすごかった。

相手は負けて大分落ち込んでたわね。ハッ、いい気味だわ！ それにしても……空はすごく楽しそうにサッカーをしていたわね。何て言うか、普段と違う一面、とでも言えばいいのかしら？

喜ぶときは全力で喜んで、悔しいときも全力悔しがって、なんだかいつも以上に表情が豊かだったわ。

オーバーヘッドを決めた後にこっちに向いてピースをしたときの年相応の満面の笑顔に私は、いや私だけじゃなく、空のことが好きな娘は見惚れてたと思うわ。

何だっであいつはあんなにカッコイイのかしらね！

はあ……これからも空を好きになる娘が増えるんだろうな……。

考えただけで頭が痛くなるわ。

って私はさつきからなに言ってるのよ!? 考えるのやめやめ！

Side out

Side空

「皆、お疲れ様！ よく頑張ったな！ これから祝勝会を翠屋でしよう！」

『はい!』

俺達は片づけをして翠屋に向かった。

行く途中でなのは達に今日のプレーを褒められまくってかなり恥ずかしかった。

たまにはこういうのもいいな。

不思議と今までにないくらい楽しかったと今日のサッカーで感じた。

翠屋に着くとテーブルにたくさんのお食事が乗っていた。

「早速食べたいところだが、誰かに一言貰おうか。誰がいいかな?」

『龍神以外いいです!』

「ハハハ! 満場一致でご指名だよ、空君!」

「俺ですか!」

急な指名に驚いた。

「さあ、早く言わないと桃子の美味しい料理が冷めてしまうよ?」

料理を人質に取るとは……! 卑怯です! 土郎さん! それが

大人のやり方なんですか!?

周りを見れば皆が俺を待っていた。

「……分かりましたよ。それでは僭越ながら一言言わせてもらいます。——ご飯食うぞオオオツ!」

『おおー!』

『もつと真面目なこと言いなさい!』

なのは達はズッコケて文句を言ってたが皆はご飯を食べるのに忙しくて気が付いてない。

「ふう〜いい仕事した〜」

『どこが!』

「そんなことないさ。な? ユーノ」

「キュ! へ僕に聞かないでよ!」

「ほら、ユーノもこう言ってることだし問題ない」

『絶対に言っていない!』

「キュキュ！ へ言つてないよ！」

「まあまあ皆も食べようよ。美味しいよ？」

『食べる！』

なのは達も食事を始めて、あっという間に楽しい時間は過ぎて行った。

解散したあとの帰り道で俺達はキーパーとマネージャーの子が二人で帰っているのを目撃した。

「あれってチームの人だよね？」

「そうだね。あ、もしかして！」

「アリシア、もしかしなくてもアレよ」

？ 何がアレなんだ？

事情を察したらしい女子だけで盛り上がり始めた。

「アレって何？」

「いや、俺にも分からない」

どうやらわかつているのは楽しそうに話す女子達だけのようだ。

「ねえねえ、付けてみない？」

「面白そうね！」

「ダメだよ！ 邪魔しちゃ悪いよ！」

「そうだよ！ 二人が可哀想だよ！」

ノリノリのアリシアとアリサをすずかとフェイトが止めに入った。

「すずか、フェイト、考えてみなさい。将来のための勉強になるんじゃない？」

『!? 皆行くよ！』

『変わり身早ッ！』

とまあ、なんだかんだ言つて付けることにした俺達であった。

二人は公園の中の大きな木の下にいた。

キーパーの人が光輝く石をマネージャーに渡していた。

「なんでプレゼント？ あ、誕生日だったとか？」

「それが妥当じゃないか？」

『はあ……』

『なんで溜息!?!』

その場の女子達に溜息を吐かれた。

「あんた達がいかに残念なのかが分かったわ」

「少しは勉強した方がいいと思うな……」

えええッ!?! 酷い言われよう！

「つてあれつてジュエルシードじゃん！ 発動したら大変だよ！」

『!?!』

アリシアの言葉で気付いたがすでに手遅れだった。

ジュエルシードが発動して、光を放ち二人を包んだ。

光が収まるとジュエルシードは大きな樹木に変化していた。

「ユーノは結界！ 愛衣となのははアリサとすずかと明日奈を安全なところへ！ ヴァーリと俺は街に広がらないように根つこの破壊！

アリシアとフェイトで二人を探して！」

素早く指示を出して、体勢を整えた。

『分かった！』

「つてヴァーリのことつい入れちゃったけど大丈夫か？」

「ん？ ああ、全然いいぞ」

「サンキュー！」

ヴァーリがいればやりやすい！

『バランス・ブレイク禁手化！』

《Vanishing Dragon Balance Break  
er!!》

『セットアップ！』

「今回はダブル白龍皇だ！」

白くなったバリアジャケットに宝玉が埋まった軽い白銀の装甲、形

の変わった白龍皇ディバイン・ディバイディングの光翼に合計十機ほど浮かぶ白銀のドラゴン、

髪は白くなり眼は宝玉と同じ青に染まった。それが俺の亜種の

バランス・ブレイカー  
禁手だ。

名前デイベイン・デイベイキング・ルナティックフエザは白龍皇の月光神翼

「その力の空とも戦ってみたな」

「それだったら今度やろうよ」

戦う約束をして、二人で樹木の根っこを破壊し始めた。

「大したことないな。これがジュエルシードの力なのか？」

『だが、油断はするなよ、ヴァーリ』

「そーゆこと。まあ、ヴァーリなら問題ないね。アリシアの援護も頼むよ」

「了解した」

《Half Dimension!!》

俺とヴァーリで半減する空間を広げて、猛スピード成長し続ける樹木の成長を縮めた。

「これで被害も抑えられるな」

まだ油断は出来ないけど、これで十分だろう。

「アリサちゃん達を安全なところに置いて来たよ」

アリサ達の移動が終わったのはと愛衣がこっちに戻って来た。

「お疲れ。あとは二人を探さないと……」

フエイト達は探すのに手こずっている。

「それだったら私が魔法で探してみるね！」

「え？ そんなこと出来るの？」

《出来ますが、時間と集中力が必要です》

「じゃあ、それまで俺が護るよ」

敵も小さくなってるから出来るでしょ。

「レイジングハート！」

《了解です》

桃色の魔方陣がなのを中心を広がり、少しづつ形成されて行く。

その間、俺はなのはを樹木から護っていた。

《探索完了まで残り5……4……3……2……1……探索完了》

二人の探索が終わったことをレイジングハートが告げた。

「なのは、このまま封印しちゃって。へフエイト、アリシアは退避」

「わかった！」

『へ了解!』

フェイトとアリシアが退避して、残りなのはに任せた。

「封印には接近しないとダメだ!」

「大丈夫! レイジングハート!」

《Shooting mode》

なのはの呼びかけにレイジングハートの形が変わり、槍のようになつた。

「デイバイン……バスター!」

《Divine Buster》

レイジングハートの前に桃色の魔法陣が展開され、そこに魔力が充填されいく。

一秒程で充填が終わり、即座に桃色の砲撃魔法を発射。樹木を跡形もなく消滅させた。

どうやら今の砲撃で封印が出来たみたいだ。

『……………』

それを見ていた誰もが開いた口が塞がらない状態だった。

正直言つて、俺かヴァーリ一人でも封印出来た。街への被害を抜きにすればの話だが。

一応、なのはの力をつけるためにやらせたのだが、なのはがここま  
で出来るとは思つてもいなかった。

たった一撃……! これが主人公の力なのか!?

「す、すごいね……」

「えへへ〜」

なのはは封印出来て嬉しそうにしていたが、俺の背中に冷汗が流れた。

もし、あの砲撃が自分に向けられたら防げる自身が無い……かも。

戦闘好きのヴァーリでも顔を青褪めさせていた。

「か、帰ろつか……」

『うん……』

「にや!? 皆のテンションが低い! な、なんで!」

誰もなのはの所為とは言えず、トボトボ帰路についた。

管理局来ました！

管理局来ました！

S i d e 空

サッカーの試合をした休日明けの月曜日、放課後に俺は翠屋で手伝いをしていた。

いつもの皆はジュエルシードの探索をしている。

これは決してサボリではない！ 戦力的休暇というやつだ！

「ご注文は何になさいますか？」

「シュークリーム一つとオレンジジュース一つで」

「私はシュークリーム一つとミルクティー」

「かしこまりました。少々お待ちください」

注文を受けてから厨房にいる桃子さんに伝えて、用意されたものをテーブルへと運んで行く。

「お待たせしました。シュークリーム二つとオレンジジュース、ミルクティーです」

それから接客を続けていった途中、フェイトからの念話が入った。

『へ空！ ジュエルシードが発動した！ すぐに来て！』

「(タイミング悪……。) へ分かった。これから向かうよ」

ジュエルシードに軽く悪態を吐きながら、桃子さんに抜けることを言って、店を出た。

そして、俺は現場に着いたのだが――

「どういう状況？」

俺が来る前に封印が終わってしまったらしい。

その場には皆がいたのだが、他にも見知らぬ少年と正田がいた。

ていうか終わってるなら俺来た意味ないじゃんか……。それと王城君がケガしてるのは何で？ 丈夫なはずだから服が汚れてるだけだと思っけどそんなに手こずった？ でも、その割には早く片付いて

るな。

「君は彼女達の仲間か？」

見知らぬ黒髪の少年が俺に聞いてきた。

恰好から見て少年はバリアジャケットを着ているようだ。持っている機械的な形状の杖がデバイスだろう。

「いえ違います。赤の他人です」

『嘘吐くな！』

チツ……メンドそうだから逃げたかったのに……。

「えつと、知り合いつてことでもいいんだな？」

「彼女達は俺の友達の友達です。要するに知らない人です」

『おい！』

「というのは嘘で、彼女達は友達ですよ」

これ以上冗談を続けるとなのはから桃色の砲撃が来そうなので真面目に答えた。

「そうか。紹介が遅れたが、僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウ  
ンだ」

黒髪の少年はクロノという名前だ。いかにも真面目ですつていう  
雰囲気がある。

「あ、これはどうもご丁寧に。俺は龍神空です」

管理局。プレシアさんに以前聞いたことある組織の名前だったこ  
とを思い出した。

もし、管理局がジュエルシードを探すのであれば、あんまり神セイクリッド・ギア  
器  
や精霊の力を使わない方が良さだろう。

「ところで、君は彼女達と同じ魔導師なのか？」

「一応は」

「それなら君も一緒にアースラ来てくれ。聞きたいことがあるんだ」

“も” つてことは皆も行くのか。アースラが何なのかはわからな  
いけど、警戒しておくことに変わりはない。

「はあ……それじゃあ、お邪魔します、なのか？」

それからアースラと呼ばれる大きな艦船に転移した。

「へえ。ここがアースラか……SF映画みたいな場所だね」

未来を思わせるような内装にそんな言葉が漏れた。

「君達からするとそんな風なのか……。ああ、それからバリアジャケットは解除していいぞ。そのフェレットもどきも人間に戻ったらどうだ?」

「うん、そうさせてもらおうよ」

皆はバリアジャケットを解除して、ユーノは人間に戻った。

「それでは僕に付いて来てくれ。艦長室に案内する」

クロノ君の指示に従い、後ろから付いて行った。

「艦長、連れてきました」

『ご苦労様です。中に入れて下さい』

扉越しに女性の声が聞こえた。

クロノは「失礼します」と言っ、俺達を通した。

中に入ると、部屋を見て俺達は言葉を失った。畳や盆栽、鹿威しなどが置かれたまさかの和室だった。未来感があるアースラにこの和室は合わさっていない。

「こんにちは、艦長のリンディ・ハラオウンです。こちらに座して下さい」

素直に向かい合うように畳の上に座った。

「それでは、詳しい事情を聞かせてくるかしら」

代表してユーノが今回のことを説明した。

説明を終えるとクロノに色々厳しいことを言われた。

クロノ君の言う通り、子供だけでやろうとするなんて無理があるよね。

「話は分かりました。これよりジュエルシードの回収は管理局が全権を持ちます」

「君達は今回のことを忘れて元の生活に戻るといい」

どうやら、俺達はお役御免らしい。専門家でもない俺達がこれ以上関わるのは管理局の邪魔になってしまうのかな? まあ、暇になったなら冥界で修行してみたいし、丁度いいかな……。

なんてことを呑気に考えていたら皆は不満そうにしていた。

「お願いです！ 私にも手伝わせてください！」

「私もお願いします！」

他の人も手伝いと言いだした。一度やり始めたら最後までやり遂げたいのだろう。

「次元干渉に関わる事件だ。民間人や部外者に介入してもらうレベルじゃない」

だが、皆の熱意はクロノの一言で一蹴されてしまった。それでも納得のいかない皆は食いが下がった。

「わかりました。それではあなた達に協力を要請します」

最終的にはリンデイさんが折れてしまった。管理局としても、子供とは言え、魔力量がすごいなのは達に手伝わってもらった方が効率がいいと判断したのだろう。

なのは達ってスゲー頑固だね。それにしても管理局って人手不足なのかな？ 魔力が高いのってクロノ君とリンデイさんくらいだし、他はそこまで強そうには見えない。

そのあと色々今後の予定を話し合いをして解散。

ずっと気になったことを王城君に聞いた。

「なんで王城君はそんなにボロボロになったの？」

「聞いてくれよ！ 正田の奴が襲って来たんだよ！」

「どうして？」

「いきなり現れて「邪魔をするな！ 王城！」とか言って攻撃したの」

「それで王城が吹き飛ばされて正田が戦ったんだけど……」

「逆にあいつが私達の邪魔にしかならなかったんだよ！」

皆の話を聞いて、なんじゃそりゃ？ としか言えなかった。

とりあえず、今回の一件は正田が悪いでいいらしい。

「で、当の本人は一切悪気はないと？」

「ああ、謝りもしなかったね」

邪魔するなって言うぐらいなら、自分が間違ってるとは思ってないみたいだし、謝らないだろうね。

「しかも終わった後に「大丈夫か？」なんてよく言えたものね……」

「なるほどね……。ちょっと本人に聞いてくるから皆は帰ってて」  
「なのは達は何か言いたそうにしていたが、何も言わず転移した。」

正田は探してみるとすぐに見つかった。

「あ、いたいた。ねえ正田、王城君を攻撃したのってホント？」  
「俺に気付くと苛立った様に反応した。この間のことを根に持っているに違いない。」

「まだ九尾を盗られたこと気付いてないんだね……。それに魔力に変化がないから、あんまり修行もしてないみたい。」

「……そうだが、それがどうかしたのか？」

「なんで攻撃したのかなって思ったんだよ。彼はなのは達と協力してたのにさ」

「……協力？ ハッ……。あいつがそんなことするわけないじゃないか。僕というオリ主が活躍するための踏み台だよ！ もちろんお前もだ。そして、なのは達は最後に僕の活躍を見て惚れるだろうな！ ああ、それからアリスアもいるのは助かった。これでフェイトを落とすやすくなったはずだからな」

「あかりの言う通りだったね……。何というか、うん、バカだ。ろくに関わってもないお前になのは達が惚れるとは思えないんだけど。それに、ハーレムって最終的に尻に敷かれるだけじゃない……？」

「どうした？ 自分がオリ主じゃないと分かって絶望したか？ お前は最初から選ばれた僕のための踏み台でしかないんだよ！」

「正田は愉快そうに、見下すように俺を笑っていた。でも、特に何か言われてもムカつくとかは思わない。」

『お前はやはり馬鹿だな……』

「なッ?! この声は九尾!! どこから!」

突如、正田にも聞こえる様に九喇嘛がしゃべりだした。正田は九尾の声が聞こえて驚いていた。九喇嘛から聞く限りでは彼とは一度も会話したことが無いらしい。

『てめえの目の前だよ』

「龍神が!? なんで!? お前! 僕から盗んだのか!」

正田の目の前、つまり、俺の中にいるということを伝えたらさらに驚いていた。

『おいおい。盗んだとは人聞きの悪いこと言うんじゃないよ。ワシ自らこいつの中に入ったに決まってるだろ』

そうです。合意のもとです。

「ぶぎけるな! お前は僕の特典なんだぞ! 勝手にどっかに行くな!」

『断る。お前の中は今ままで一番退屈でつまらんし居心地最悪だ』

「それに九喇嘛にだって意思はある。だから九喇嘛は悪くないよ」

「クソツ! 返せ! 今すぐに!」

『だから、嫌だって言ってるんだろアツ! 噛み殺すぞツ!』

「ヒツ!」

九喇嘛の叫びに腰を抜かした正田は怯えていた。

「……出来れば俺達にはもう関わらないで欲しいな。それと次王城君に何かしたらただじゃ置かないから……。……じゃあね」

それだけ言って自宅に戻った。

家に入ると心配していたのかフェイトとアリシアに抱き着かれた。

「ど、どうしたの?」

「正田に何かされなかった心配で……」

「大丈夫だよ。俺は何もされてないよ。だからご飯食べて風呂入って寝よう。」

『……うん。ご飯食べて一緒にお風呂入って寝る』

……え?

「俺と……?」

『うん』

「……」

むむむ……。これはどうしたもんか。

『ハツハツハ! やっぱ最高だな空は!』

「(いやいや、全然笑い事じゃないから!)」

今度は俺だけに聞こえるようにした九喇嘛の笑い声が響いた。

「ダメ……………」

「私達のこと…………嫌い?」

グツ! 涙目で俺を見ないで! 罪悪感がハンパないから!

「……………はい、一緒に入ります……………」

結局俺が折れました。

どうしてこういうのに弱いかなあ……………?

『フッフ……計画通り……』

フェイトとアリシアが俺の見えないところでニヤリとしていたことを俺が知ることは無かった。

星明かりを壊すものです！

星明かりを壊すものです！

S i d e 空

管理局が来てから一週間が経過。

俺達だけでやっていた時よりも管理局が来てからの方がジュエルシードの探索は捗り、残りは六個となった。

ちなみに正田はあれから顔を見ていない。

そんなに怖かったのかな……。まあ邪魔しないならどうでもいいけど……。

そして今は新たにクロノを入れて、外で魔法の特訓をしている。それなりに親しくなってるからはクロノのことは最近君付けしなくなった。クロノもそれでいいらしい。

「今日は試合形式でやろうと思うんだが……。なのはと空。君達二人にしよう」

俺となのはの試合か……。そう言えば、あんまり戦ったことないな。

「分かった。そんじや、やりますか！」

「頑張る！」

クロノの前では俺は精霊の力や神セイクリッド・ギア器を使っていない。

バレたら色々研究されるかもしれないとプレシアさんに言われたからだ。

一応ヴァーリに頼んで能力を隠すためのネックレスを着けるようにしているから、そう簡単にはバレないとは思うけど。

俺達はバリアジャケットを纏い、戦闘態勢を取った。

「それでは始めてくれ」

クロノの合図で試合が始まった。

「ディバイン……バスター！」

《Divine Buster》

開幕直後に砲撃を打ち込んできた。

いきなり飛ばし過ぎだろ！

驚きはしたものの、桃色の破壊光線を躲して魔力弾を撃ち放った。  
《久々の出番ですね》

ん？　ここ最近結構使ってたはずなんだけど……。

ブレイブの言葉に首を傾げるも、戦闘中なのですぐに切り替えた。  
なのはが魔力弾を何個も放ってくるが銃弾の形にした魔力弾で簡単に打ち消せた。

んん？　なのはがいつもより好戦的だな……。

普段と違う戦法に戸惑いが出てきた。

何か狙ってるのかな？

しかし、考えても思いつくことは無かった。

とりあえず、離れすぎるとこっちの攻撃が当たらないから少し距離を詰めよう。

そう思っただけ動いたのだが、当然なのははそう簡単には縮めさせてくれない。

なのはは接近戦に持ち込まれることにまだ慣れてはいないから、そこが弱点だ。

「ブレイブ、初めてだけど砲撃魔法やってみようか」

《了解です。魔力コントロールは任せて下さい》

「ありがと。じゃあ、枝分かれして細くして貫通力高い奴にするかな」  
「アリスアやなのはの砲撃は人ひとり？　み込める大きさだけどここまでは要らない。」

撃ちたい砲撃のイメージを浮かべ、魔力を貯めてから引き金を引いた。

名付けて――

「ホーリーレイ！」

《Holy ray》

俺の魔力光の蒼白い光がいくつかに枝分かれしてなのはに襲い掛かった。

「！　プロテクション！」

《Protection》

避けられないと判断したのか、防御魔法を発動して防ごうとし

た。

だが、貫通力を高くした魔力弾は簡単に突き破った。

「キヤアツ!」

《マスター!》

持ちこたえたか……。それにしても今のは燃費が悪かったから改良しないと。

「だ、大丈夫……まだ戦える……!」

《了解です。頑張りましょう!》

「うん!」

この一週間で大分強くなったなあ……。

なのはの成長に少しだけ嬉しくなる。

それから十分ほど戦っていると、なのはが動いた。

なのはが再び<sup>はかい</sup>デイ<sup>こ</sup>バイ<sup>う</sup>ン<sup>せ</sup>ン<sup>ん</sup>バスターを撃ってきた。

先程と同じように躲したのだが、

「え!? バインド!」

設置型のバインドに掴まってしまった。

急いで外そうとしたのだが、魔力がかなり込められていて時間が掛かりそうだった。

なのはを見ればなのはより更に高いところに魔力が集まっていた。

蒼い魔力光もその中に混ざっていた。

!?! あれってまさか俺の使った魔力も集めてる!?

「受けてみて、デイ<sup>は</sup>バイ<sup>こ</sup>ン<sup>う</sup>バスターのバリエーション!」

魔力の集束が終わった。

「これが私の全力全開! スターライトオツ! ブレイカーアツ!!」

宇宙の帝王もビツクリの桃色の集束砲撃魔法が俺に向かって振り下ろされた。

「バリアー!」

ギリギリでバインドの解除が終わった俺は回避は間に合わない判断して防衛魔法を五枚出した。しかし、桃色の集束砲撃魔法は意図も容易く突き破り、俺ごと?み込んだ。

そこで俺の意識は途切れた。

「……………あれ？　ここは……………」  
目が覚めると白い天井が目に入った。

「……………ああ……………俺、死んだのか……………」  
転生する前の空間を思い出してそう呟いた。

「安心しろ、君は生きてる。少し気絶してただけだ」

「おろ？　クロノ？」  
首を動かせばクロノが立っていた。

「何があったのか覚えてるか？　……………いや思い出さない方が良くかもしれないが……………」

クロノが顔を強張らせて気まずそうにしていた。

えーっと、確か……………なのはと試合して……………ッ!?　元氣玉喰らったんだっけ!?

あ、あれ？　おかしいな？　思い出すと体が震えてくる……………。ア、アハハ……………ふ、不思議だなく。

「……………まあ、そういうことだ。それとなのはがやり過ぎて落ち込んでる。慰めてやってくれ」

体がすぐ動けるようになりクロノに言われた通り、なのはのところに向かった。

「お、いたいた。なのは、元氣〜？」

落ち込んでいるらしいから出来るだけ明るく話し掛けた。

負けた奴が勝った奴を慰めるといふ不思議な状況だ。

「空君！　もう平気なの!？」  
グハッ！　お、お腹が……………。

なのはの頭突きをお腹にもらい悶絶しそうになりながらも耐えて、もう平気だと伝えた。

「ごめんなさい……………」

「謝ることじゃないよ。むしろなのははすごいよ」

本当になのははすごいと思う。魔法に触れてから一月もたっていないのにあそこまで戦えるんだから。魔法の練習をあんまりしてない俺よりも強いんじゃないかな？

「でも……」

「それだけ頑張ったんだから、少しは誇っていいんだよ」

「……うん、ありがとう」

「それじゃ、皆のところに行こ？」

「……もうちよつとだけこうさせて」

なのはが抱き着いたまま言ってきた。

「分かった。ちよつとだけね」

俺もなのはの背中に腕を回して抱きしめた。

まだまだ甘えたい歳だもんね……。寂しがっていたのがつい最近の事のように思えてくるよ。

そう思ったらつい頭を撫でてしまった。

なのはは最初はびっくりと体を震わせたが嫌がることなく受け入れていた。

しばらくなのはの頭を撫でていたら、突如部屋の扉が開いた。

「いないと思ったらこんなところにいた！　って二人して何やってんの!?!」

「姉さん落ち着いてって何で抱き合ってるの？」

「なのは変わりなさい。次は私の番よ」

「嫌なの！」

愛衣の要求を断り、俺を抱きしめる腕に更に力を込めた。

「ズルい！　私も抱きしめて頭撫でて！」

「私も！」

アリシアとフェイトも甘えたい年頃だもんね。仕方ないか。

「ハイハイ、あとでね」

「騒がしいぞ。静かにしてくれ」

アリシア達に続いて他の皆もやって来た。

「まあいいじゃないか」

「黙れ、フェレットもどき」

「フェレットもどき!? 君は失礼な奴だな!」

「事実じゃないか」

「た、確かにそうだけでも……!」

「まあまあ、二人共落ち着けて」

ケンカしそうになった二人を雄人が宥めてその場は治まったのだが仲は険悪になってしまった。

「それじゃあ、帰りましょうか」

「そうですね」

プレシアさんの提案に俺達も帰ろうとした。

だが、そこでジュエルシードの発動を告げる警報が艦内に響いた。

『ジュエルシード!』

俺達は急いで状況を確認しにモニター室に入った。

「エイミィ! 状況は!」

部屋に入るなりクロノはエイミィと呼んだオペレーターに聞いた。

「クロノ君! 海の方から発動したみたい! しかも六個も!」

六個……残り全部か……。精霊の力や神器無しで行けるかな?

皆がいれば大丈夫だろうけど……。

「映像をモニターに映してくれ!」

「了解!」

エイミィさんがすぐに映像を映すと、誰もが目を見開いた。

「あいつが何で……?」

荒れる海の上に立つ人物がジュエルシードを持って紫の骸骨を纏っていた。

「あれは須佐能乎!? しかもサスケバージョンか!」

雄人の反応を見るに特典の能力だろう。

「あれは厄介ね」

「どういうことだ?」

「あれはあらゆる攻撃を防御出来るわ」

絶対防御かよ……チートじゃん。

『そうでもないぞ。確かにあれは防御力は高い。だが、破壊することが出来るし、永遠の万華鏡写輪眼じゃないから足元から簡単に攻

撃が通る』

「(メリットがデカい分、デメリットもデカいってことか……)」

『そういうことだ。それにもしものときはワシの力を貸してやる。ナルトの友人の力を使うなんて良い度胸してやがる!』

雄人がさつき言った『サスケ』とかいう人がナルトさんの友達か。

「(そうさせてもらうよ。まだまだ維持時間は少ないけど)」

九喇嘛と心の中で会話して色々とその能力に付いて分かった。

『まあ別に出なくてもいいんだがな』

「(それはどうして?)」

さつきまで怒っていた九喇嘛の態度が変わったことに軽く拍子抜けした。

『あの術は体への負担がデカいからな、放っておけば勝手に自滅するだろうよ』

「(そっか。でも目の前で死なれるのはやだなく。寝覚めが悪くなりそう……)」

見殺しって嫌じゃん。

『ハッ、だったら行ってこい! こんであの馬鹿の目を覚ましてやれ!』

「(おう!) クロノ! 俺行ってくる!」

「お、おい! 勝手に!」

クロノが止めてきたが無視して転移した。

海に転移すると酷い荒れようで竜巻が起こり、雷が轟いていた。そして紫の骸骨を纏った人物——正田が荒れ狂う海に立っていた。

「さあ、俺達の最後の戦争を始めよう」

無印編終わりました！

無印編終わりました！

Sideクロノ

僕——クロノは空が勝手に転移して頭を抱えていた。作戦も考えずに突っ込むなんて……。だが、僕達もすぐに向かわないといー！

正田の纏う紫色の骸骨は尋常じゃない魔力を放っていた。

それも次元震を起こしかねないほどに。

「僕達も急いで現場に向かうぞー！」

『はい（うん／おう／ええ）！』

今回のジュエルシード事件で手伝ってもらっている民間協力なのは達と転移した。

Side out

Side空

正田は瞳孔が赤く変化した瞳で虚空を見つめて動かずにいた。

確か、写輪眼とかいうものだど九喇嘛から聞いた。

《マスター》

「どうかしたの、ブレイブ」

どうやって倒そうかと考えていたらブレイブが話し掛けてきた。

《正直に言つて、精霊の力や神セイクリッド・ギア器無しで勝つのは難しいです》

「あー、ブレイブもそう思ってたか……」

俺も正田の魔力を感じて薄々思っていた。でも管理局にバレると色々面倒だから出来るだけ使わずに勝ちたい。

「ブレイブじゃ火力不足なんだよな……」

普段から精霊の力や神器ばつかを頼ってたのが仇となった。

《でしたら火力を上げてしまえばいいのです》

「え、どうやって？」

そんなことが可能なの？

《カートリッジシステムです》

それって確か……圧縮魔力を込めたカートリッジをロードすることで、瞬時に爆発的な魔力を得るシステムだね。ブレイブはそれを推奨してるわけだ。

「でも、俺にもブレイブにも負担が出るんでしょ？」

インテリジエントデバイスとは相性が悪いってプレシアさんが言ってた。

《マスターは私が誰によって作られたかお忘れですか？》

「天照さんでしょ？ それがどうかしたの？」

《神様が創ったデバイスがそんなものを起こすと思いますか？》

「……ないかな」

「これがご都合主義なのかね？」

《だから遠慮なく使ってください》

「そうさせてもらうよ。それから銃以外の武器って出来る？」

《マスターが望めば私はどんな武器にでもなります》

ブレイブは俺の質問に得意気に答えてくれた。

「そっか。だったら俺が普段使ってる二刀流の剣お願い」

《了解です。——モード変形完了です》

ブレイブが光り輝くと、いつもの銃から黒と白の二本の剣に変わった。

軽く振って感触を確かめる。

俺がいつも使っているのと同じだ。

「ありがと。これで少しはマシなるでしょ」

《それにマスターは一人ではありませんから》

「……そうだね、俺にはブレイブや皆がいるからね」

後ろに振り向けば、皆が転移してきた。

「空！ 勝手に突っ走るな！」

「やっと追いついた！」

「……これで最後だね」

「頑張ろう！」

「でも須佐能乎だぜ……？ 勝てんのか？」

「このメンバーなら出来るわ」

「そうだよ！ それにこの日のために頑張つて来たんだから！」

「あんな奴とつととぶつ飛ばしちまうよ！」

「早く帰つてフェイトとアリシアと寝たいわ……」

「プレシア……場をわきまえて下さい……」

一人だけ違うこと言つてたけどある意味平常運転だから気にしない。

「皆揃つたことだし、あいつ止めよっか」

《そうですね》

目の前のターゲットを見据えて、全員が動いた。

「デイバイン……バスター！」

《Divine Buster》

戦闘開始の合図代わりにいきなり砲撃魔法を打ち込んだ。

「……………」

正田に直撃はしたものの効いて無いようだった。

全く意にも介さず、未だ動かずにいた。

「なのはの砲撃を受けてものもしないなんて……」

「だったら近接でも攻めるよ！」

「うん！」

フェイトとアリシアがサイズフォームで斬り掛かった。二人は「魔力変換資質・発電」というレアスキルをもっていて、体に電流を流して通常よりも速い動きが出来る様になった。

あの時の模擬戦闘で回避として使った技を完全にものにしていたのだ。

「……………」

フェイトとアリシアが高速で攻撃したが、防御をすることなく受けたが紫の鎧——須佐能乎には傷一つ付いてない。

堅いな……。でも行くしかない！

水面に立ち、正田に向かって走り出した。

「……………タ……ツ、ガ……ミ……コロ……ス」

ようやく言葉を発した正田は俺を殺すと呟いた。狙いは俺だけら

しい。

九喇嘛を盗られたこととんだけ根に持つてんの？

「……天照」  
あまてらす

『ツ！空！今すぐその場から離れろ！』

九喇嘛の言葉に従いすぐさまその場から離れた。すると俺がいた場所に黒い炎が出た。

何も無いところから黒い炎が出た？

『あれは天照と言つて対象が燃え尽きるまで消えることのない炎だ。絶対に触れるなよ』

「対処法は無いの？」

『あいつの視界に入らないことぐらいだな……。それと須佐能乎同様消費が激しい技のはずだが、ジュエルシールドのおかげでいくらでも出せるだろうな』

うわ……。チート技……。あ、ドライグも何でも燃やす炎があったか。

「へ皆、正田の狙いは俺みたいだから、俺が囷になって引きつけてる間に攻撃して」

「へ一人でだなんて危険だよ！」

「へそだよ！ 無茶だよ！」

なのはとフェイトが反対してきた。心配してくれるのは嬉しいがこれが一番だ。

「へ……クロノ、良いよね？」

「へ……ホントはこんなこと言いたくはないが……頼む」

「へクロノ君!? どう——」

「へただし、絶対に死なないでくれ！ 死んだら許さないからな！」

なのはの念話を遮って、クロノが「死ぬな」と命令してきた。

「へ分かった。でも、別にあいつを倒しても構わないでしょ？」

『へそれ死亡フラグ！』

ツツコミを受けて念話を切り、あいつの視界にわざと入り視線を釘付けにした。

『動きを止めるなよ。止まったら焼かれるからな』

九喇嘛の忠告を受けて一層気を引き締めた。

「……水遁・水鮫弾ノ術」

正田が手を動かして水面に手を付けると、鮫を象った水の塊を飛ばしてきた。

俺は剣に魔力を込めて鮫を縦に斬り、真つ二つにした。

『まだ来るぞー!』

「……水遁・千食鮫」

正田が再び水面に手を付けると今度は千匹の鮫が大波のように押し寄せてきた。

マジかよ! あの数は反則でしょッ!

「ブレイブ! カートリッジ!」

《カートリッジ、ロード》

片方の剣の柄から葉莖が排出されると、俺の魔力が急激に上がった。

あいつごと斬る!

全力で魔力を込めると二本の剣から魔力が溢れ出し、天に届きそうなほどにまで伸びた。

それをそのまま鮫の大群へと振り下ろすと激しい水しぶきが起こった。

姿は見えないけど鮫だけでなく正田まで届いた手応えはあった。

しかし――

「……無傷。しかも骸骨から鎧になってる……」

水しぶきが収まって確認をすると纏っていた骸骨は鎧を着ていた。全然堪えてないじゃん……。

効いて無いことが何気にショックだったがすぐに動き出した。

「……死ネエッ!」

先程よりも流暢に話すようになった。

紫の骸骨から武者になった須佐能乎は弓を構えて黒い炎でできた矢を撃ってきた。

『あれも天照に似たような黒い炎だがそこまでの効果は無い。だが、気を付けろよ』

「(了解)」

撃ってきた矢をシールドを傾けて張って別の方向に逸らした。威力は高そうだけど、当たらなければどうということないね！

「クソツ、クソツ！ クソオツ！」

矢が当たらないことに段々と正田が苛立ちの声を上げてきた。

「へ空！ 皆の砲撃の準備が整った！ 急いで退避してくれ！」

「へ分かった」

時間稼ぎはもう十分だと言われて皆が天照に狙われないように別の方に退避した。

「ユーノ！ アルフ！ 愛衣！ 雄人！ バインド！」

『了解！ チェーンバインド！』

クロノの指示で四人がそれぞれの魔力光の色をした鎖を須佐能乎に巻き付けた。

正田が動く鎖はギシギシと軋む音を出す。

「次！ フェイト！ アリシア！ リニス！」

『うん(はい)！ アルカス・クルタス・エイギアス！ 疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ！ バルエル・ザルエル・ブラウゼル！ フォトランサー・フアランクスシフト！ 撃ち碎け、ファイアー！』

三人がほぼ同時に詠唱を終えて魔法を発動させた。

一人につき38基のフォトンスファイアが生成され、毎秒7発の斉射を4秒継続することで合計1064発のフォトランサーを三人分で総計3192発が須佐能乎に叩き込まれた。

更に。

「愛衣！ 雄人！ プレシアさん！」

『ええ(おう)！』

「デイバイン……バスター！」

「ガトリングショット！」

「サンダーレイジ！」

「ブレイズキャノン！」

なのはと同じ砲撃魔法に特大の魔力弾の乱れ撃ち、紫の雷、クロノ

の最大の砲撃が当たった。

だが、まだ彼らの攻撃は終わらない。

「これが私の全力全開！ スターライトオツ！ ブレイカーアツ!!」  
最後に桃色の集束砲撃魔法が追加で叩き込まれた。

俺が先程叩き付けた攻撃よりも明らかに強い攻撃に正田も耐えられないと思っていた。

直撃すると激しい爆発と煙が起こり、正田の姿は見えなくなった。あれって全部非殺傷設定なんだよね……。それなのに生きてるから不安になるんだけど……。

「ソナモノキクカアツ！ ボクハサイキョウナンダツ！ マケルハズガナイツ！」

『!?』

煙が晴れてくると誰もが目を見開いた。

須佐能乎は無傷どころかより大きな紫の巨人へと変化していた。

『チツ……本来なら永遠の万華鏡写輪眼じゃないと出来ないことをジユエルシードで完成体須佐能乎にしゃがったか……』

「死ネエエツ！ タツガミイイツ！」

巨人は手に持っている刀を振るった。たったそれだけで海が割れた。

「グッ！」

『空（君）！』

何とか直撃は免れたものの余波だけでも吹き飛ばされダメージを受けた。

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ！ ヨワイナアツ！ マルデムシケラダナアツ！」

巨人の頭の方にいる正田が顔を歪めて笑っていた。

『こりやあ管理局の前だからといって四の五の言ってる場合じゃねえぞ。空、ワシを使え』

「（……そうみたいだね。九喇嘛の力、貸してもらおうよ）」

『ああ。だが、そんなに時間はねえぞ？ 尾獣モードを使えば十分が限界だな。本来なら仙人化もあつた方がいいが無いもの強請りをし

てても始まらねえ。とにかく、さっさと片付けるぞ!』

「おう! 九喇嘛モード!」

掌を合わせて合掌のような形にすると体が橙色の包まれ、魔力で出来たコート状の上着が具現化した。バリアジャケットのズボンも長くなり体に勾玉や黒いラインが入っていた。

NARUTOの世界だとチャクラと言われるものがあるらしいがこの世界には存在しないため、魔力が代わりとなって使われると九喇嘛から教わった。

「キサマアツ! ボクノチカラヲカエセエツ!」

俺の変化に気付いた正田が攻撃してきたが、躲して正田の目の前にいた。

九喇嘛モードの速さは俺の力のなかで一番だ。とても目で追える速さじゃない。

「ナツ!? イツノマニ!?」

「九喇嘛直伝! 螺旋丸!」

『ワシが創った忍術じゃないんだけどな……』

正田の顔面目掛けて高速で乱回転する魔力の塊をぶつけたが須佐能乎に簡単弾かれてしまう。

「かって〜!」

一旦、離れて体勢を整えようとすると念話が入った。

「空! その力はなんだ!」

「説明すんのメンドイから後! それから皆連れてここから退避して!」

「一人で倒す気なのか!? 無茶だ!」

「出来るから言ってるの! いいから早く退避! 巻き添え喰らいたいの!」

「……分かった」

それからクロノは俺以外に念話で退避を命じたらしく、なのは達から色々言われたが全部無視して戦いを続けた。

Side out

S i d e アリシア

空が橙色の魔力に包まれたと思ったら、クロノから退避命令が出た。空が言い出したことを知って、従いたくはなかったが退避した。私達の実力じゃ空が本気を出して戦うのに邪魔になってしまいうら。

アースラに戻ると、モニターに空と須佐能乎とか言う紫の巨人と戦う姿があった。

私達はまだまだ弱いんだな……。

映像を見ていて改めて自覚させられた。

隣にいるのはやフェイトもそう感じたらしく、暗い顔をしていた。クロノも自分では役に立たないことが悔しくて拳を強く握っていた。

誰もが己の弱さを知った時だった。

もつと強くなりたい……空みたい……。

S i d e o u t

S i d e 空

皆が無事にアースラに戻ったことを聞いて安心した。

「これで心置きなく戦える……」

『尾獣化するのか?』

「うん。でもそれだけじゃ足りないと思うからドライグも使う」

『……非常に不本意だが、今回は赤トカゲの力に頼るしかねえな』

『空の頼みなら協力してやる』

こういう時だけは力を合わせてくれるなら、多少のケンカぐらいは目を瞑らないとね。

「ありがと。尾獣化+赤龍帝の籠手、ブーステッド・ギア 禁手化!」バランス・プレイク

橙色の魔力の衣が九喇嘛の形となって現れ、禁手したことによって



Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost

九喇嘛の口の中に先程とは違う黒い球体が生まれた。

「これで終わりだ！ 尾獣玉ッ！」

「フ、フザケルナアアアッ！」

須佐能乎の刀で斬ろうとしてきたが、限界が近かったのか刀は簡単に折れ、スターライトブレイカーを受けた時とは比べ物にならないほどの大爆発が起こった。

今度こそ終わったでしょ！

煙が晴れると、須佐能乎が解けて落下していく正田が見えた。

捕まえようとしたが、力が入らず尾獣化と禁手が解けて俺も落下し始めた。

やば……もう魔力が無いから飛べないや……。

重力に身を任せ、頭から海面に向かって行った。しかし、途中で誰かに抱きかかえられた。

「あ、なのは……フイト……それに皆もか……」

助けてくれた二人にお礼を言おうとしたが、力尽きてそのままゆっくり意識を手放した。

新たななる神器です！

新たななる神セイクリッド・ギア器です！

S i d e 空

ジュエルシード事件が解決してから三日ほど過ぎた頃、いつものメニューバーと屋上でお弁当を食べていた。

「で、どうなったのよ、ジュエルシードは」

アリサが事件のことを聞いてきた。

「それは無事に終わったの。けど……」

「けど、何？」

なのはの言う通り事件は無事解決したのだが、その後になんかちょっとした問題が起こった。

それは最後に見せた俺の力に関してのことだった。

クロノに問い詰められて一応それとなく適当に誤魔化しておいた。

それだけなら大した問題ではなかったのだが、ジュエルシードを破壊し、次元震を軽く起こしかけた力を持つ俺を危険視して管理局に入れと言われた。

俺としては前にプレシアさんに実験体として扱われる可能性があると言われたことがあったので、それを危惧して断った。

だが、クロノは食い下がらずに俺を勧誘してきた。

あまりにしつこいので、俺はきつめの言葉を言った。

『俺はクロノやリンディさんだったら信用も信頼もしてる。でも、管理局のことは信用も信頼も全くできるほど知ってるわけじゃないんだ。だったら知ればいいじゃんか、って思うだろうけど、俺はやりた  
いことがたくさんあるんだ。それにね——

——こんな力、周りの人が見たら『化け物』って言うに決まってるんじゃない』

クロノは「そんなことは無い！」って言ってくれた。でも実際、九喇嘛やドライグ達は宿っていた人達にはそういうことがあったと言っていた。

なのは達は優しいから俺のことを何も言わずに受け入れてくれたけど、他の人もそうだとは言いつれなれないと言ったら、クロノは黙り込んでしまった。

それから俺は「ごめん」とだけ言ってからその場を去った。

ちなみに、正田はミッドチルダの病院に連れていかれ、入院。眼の負担が相当なものらしい。

アースラが地球から離れた後もユーノはフェレット姿で地球に残って、なのはには魔法を教えている。

なのは達は今後、囑託魔導師になって、将来的には管理局で働くつもりらしい。

「……色々あったってことさ」

「……そう……まあ良いわ。あ、それよりも聞いて欲しいことがあるんだったわ！」

アリスは何となく察してくれたのか特に深く聞こうとせず、話題を変えてきた。

「何かあったの？」

「最近、不思議な力が出るようになったのよ」

不思議な力？

アリス以外誰もが首を傾げていた、と思っただらそうでもなかった。

「あ、私も同じだよ」

「実は私も……」

アリサと同じようなことが明日奈とすずかにもあったらしい。

三人も!?

「どんな力なの?」

「突然炎が出たわ」

アリサは炎。

「私は周りが凍りついたよ」

すずかは氷。

「私は剣が出たよ」

明日奈は剣。

炎に氷に剣? まさか……。

「ヴァーリ、もしかしてこれって……」

「恐らく、セイクリッド・ギア 神器が発動したんだろうな」

やっぱりか……。

ヴァーリに小声で聞くと、俺と同じ考えだったらしい。

「それっていつから?」

「確か……二日前ぐらいね」

他二人もそうだったらしい。

ん? 二日前? それってジュエルシード事件が解決した日だね。

「そう言えばその日はすごく大きな揺れを感じたんだけど、お姉ちゃんに聞いたたら、地震なんてなかったって言われたんだよね」

「あと、海の方の空が赤く見えた気がしたんだよね。それで気が付いたら剣が出てたの」

空が赤い? あれ? 心当たりがある気がするけどよく分からないな。

『お前が撃った、ロンギヌス・スマツシャーの影響で赤くなった空を小娘達を見たんだろうな』

それって俺の所為じゃんか!

「ああ、えーつとですね、それはもしかしたら俺やヴァーリと似たような力だと思うよ」

とりあえず、アリサ達に説明をすることにした。

「それと、地震は魔力を感じられるようになったということだろうな」  
「実は、この世界に住む生物は誰もが魔力を持っているんだ。でもね、魔力の量には個人差はあるし、生まれつき魔力を感じられる先天的な人もいれば、何かしらの影響を受けて感じられるようになる後天的な人がいるんだ。まあ、その力と同じように全然気付かないまま人生を終える人がほとんどだけどね」

フェイトやアリシアは元から、なのははレイジングハートを手にしたときだろう。

「要するに、なのはちゃん達みたいに魔法が使えるのかな？」

「しかも空君と似た力があるんだね」

「うん、そういうことになるかな。うーん、三人はその力どうする？」

「出来れば使えるようになりたいわ」

「なのはちゃん達の力になれるかもしれないし」

「前みたいに誘拐にあっても大丈夫になると思う」

三人共同じ意見か。

「分かった。じゃあ今日の放課後俺の家で使い方を教えるよ。ヴァーリはアザゼルさんを

連れてきてくれないかな？」

「そうだな。こういった類は得意分野だからな」

そして昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り、教室に戻った。

放課後、龍神家のトレーニングルームいつものメンバーに加え、プレシアさん、アルフ、リニス、はやてやアザゼルさんがいた。はやては以前にあかりが紹介したから皆は既知の仲だ。

「あかり、どうしてはやてが？」

「一人じゃ寂しいかなって思ったんだ」

「そっか。俺としては全然構わないんだけどね」

「ありがと」

「どういたしまして」

そんなやり取りをあかりとしてアザゼルさんに三人を調べても

らった。

「……なるほどな、これは興味深いな……」

「三人はどうでした？」

「ああ、こいつらはどうやらお前が言っただ通り神器持ちだな。しかも、俺が見たことない神器の可能性がある。益々興味が湧いたぜ！」

新種の神器……。原作に無いものなら俺には創れないな。

「それで？ どうやったら使えるようになるのよ？ 早く教えなさい！」

「おう、悪い悪い。すぐに教えるぜ」

アリサの偉そうな態度にもアザゼルさんは気にせず続けた。

それだけ新しい神器に興味があるんだろう。

「発動させるにはイメージするんだ」

「何をイメージすればいいんですか？」

「簡単に言えば、自分の中で一番強いと感じる何かを思い浮かべればいい」

『……………』

アザゼルさんの言う通りに三人は目を閉じ、頭の中にイメージを浮かべた。

しばらくすると彼女達の神器が発動した。

アリサは炎を纏った日本刀、すずかは手の甲に氷が付き、明日奈には細身の剣があった。

「こ、これが神器とかいうやつなの？」

「ああ、そうだ。それにしてもホントに新種のような」

「それでどうやって使うんですか？」

「すまないが、新種だと使い方がさっぱりだ。聖書の神なら何かわかるんじゃないのか？」

『私はこの世界の聖書の神ではないのでなんとも言えませんね……』

自分が創ってない神器にヤハウエもお手上げのようだ。

「アリサと明日奈は接近戦の武器だろうね。でも、すずかは……見た感じ遠距離なのかな？」

大雑把な予想でしかないが大体はそんな感じだと思う。

「とりあえず、戦ってみたらどうだ？　それが一番手っ取り早いからな」

アザゼルさんの提案で模擬戦を行うことになった。

「お手柔らかにお願いね、空君」

「この刀で斬ってやるわ！」

「斬ったら危ないよ、アリサちゃん」

というわけで、俺が三人の相手をする事になった。

「力を引き出すのもいいが、手加減してやれよ？」

だったら俺じゃなくてもよかつたんじゃ……？　まあ、いいや。

「影分身の術！」

ボンツと軽快な音を立てて、三体の分身を作った。

「三人の力を引き出して欲しいんだ。頼んだよ、俺達」

『任せて！』

分身が返事をする、一対一で戦ってもらうことにした。

さてと、俺はのんびりしますかね。

俺は皆のところに戻り、見学することにした。

「空君って忍者だったんか!？」

「え、違うけど」

どうやら、俺が分身したのを見てそう思ったらしい。

「やあああああああああッ！」

試合が始まり、早速アリサが刀で俺の分身に斬り掛かった。

分身は魔剣創造で剣を創って、軽くないなしていた。

すずかはどうかな？

すずかの方を見てみると、手に氷の弓が握られていた。

「……こんな感じかな……えい！」

矢が無い状態で弦を引くと、彼女の周りに数本の氷の矢が展開された。

そして手を放し、氷の矢が一気に襲い掛かった。  
すごいな、もう力の使い方を覚えたのか……。

最後に明日奈の方を見ると、細身の剣で連続で攻撃していた。

「今！ リニアアー！」

明日奈の持つ剣が淡く光ると、分身に閃光の如き速さで突き刺した。

速い……。一瞬だけの動きなら、フェイトよりも速いかも。

明日奈の一撃で役目を終えた分身は消えて煙となって戦闘は終わった。

二人の方を見ると、丁度分身が消えているところだった。

「三人共お疲れさん。中々いいもんが見れたぜ」

「それで、私達の力はどうなんですか？」

「金髪の嬢ちゃんは炎を自在に出せる能力、逆に紫髪の嬢ちゃんは氷だな。で、最後にお前さんは剣速がとてつもなく速い。三人共極めればかなりのもんになるだろうぜ。バランス・ブレイカー 禁 手に至れば益々スゲーものになるだろうな」

「でも、これってかなり体力を使うんですね……」

「それは慣れていくしかねえな。とりあえず今日はここまでだ。俺にはまだ仕事もあるしな。そんじゃあな」

アザゼルさんは別れを告げると、上の階に上がり帰った。

「と、まあ、大体の使い方は分かっただろうけど、次は魔法のことも話す？」

「そうね。そうさせてもらおうわ」

他の二人もアリサと同じ意見みたいだった。

「なあなあ、空君。私にも魔法って使えるん？」

「使えるよ。はやては魔法に興味あるの？」

「もちろんや！」

「なら、三人と一緒に学んでみるといいよ。ついでにわかりもどう？」

「おおきに！」

「そうさせてもらおうよ。折角の機会だからね」

「俺もいいか？ 異世界の魔法には興味があるからな。ぜひ、聞きた

い」

「もちろん大歓迎だよ。リニス、教えるの頼んでいい？」

「はい、問題ないですよ」

リニスは二つ返事で快く受け入れて、休憩を挟んでから六人の生徒達に講義を始めた。

時々なのは達が実演して、アリサ達を驚かせていた。

「————と言った感じです。今ので基礎は大体言っただけですが、何か分からないことはありませんか？」

誰も挙手をしなかった。それだけリニスが分かりやすい説明をしたのだろう。

「無いみたいなので、講義はここまでとさせていただきますね」

「ありがと、リニス。まあ、これからも教えていくつもりだから魔法少女の先輩、なのはやフェイト、アリシア達に色々聞いてみなよ」

「アハハハハ！ なのはが魔法少女って！」

「わ、笑っちゃダメだよ、アリサちゃん……フフツ」

「二人共、笑うなんてひどい！」

アリサとすずかに笑われて、なのはが怒っていた。

「なのはちゃん達が魔法少女だから空君は魔法少年だね」

「あんまり魔法少年として働いてないけどね」

《マスターはもっと、私を使うべきですよ！ プンポン！》

プンポンって、キャラ壊れ過ぎでしょ……。

「なのは達との修行で使ってるでしょ？」

《この小説での出番をもっと増やせと言ってるんです！》

「それは俺に言われても困るんだけど……。まあ、それは置いといて、そろそろ皆は帰った方が良くんじゃない？」

ブレイブのメタ発言に困ったので適当に流して、皆に帰宅を促した。

「そうね、今日は泊まっていくわ」

「……は？」

アリサは何を言っているのかな？ 俺は帰れって言ったんだよ？

なのに何で電話してんの？

「なんやて!! なら私も泊まってええか!」

「空君、私からもお願いしてもいいかな? 久々に空君の家に来て、はやてが喜んでるし」

二人も!?

「えーつと……」

「ダメ、なんか……?」

「グハッ!」

はやての涙目攻撃＋上目遣い攻撃のコンボ! 会心の一撃! 空の精神に99999999のダメージ! 空は倒れた!

「……わ、分かった……泊まっていつていいよ……」

「ホンマに!? ありがとうな! あ、夕飯作るの手伝うで!」

結局、なし崩し的に他の皆も泊まることになった。

気が付けばヴァーリはいつの間にか帰っていた。

あいつ、俺を見捨てやがったな!?

皆で夕飯を食べて風呂に入った後部屋に戻ったのだが、この前のように皆も同じ部屋で寝る気満々らしい。

今回も何故か互いに火花を散らしながら、ジャンケンで隣に寝る人を決めたいた。

勝者はアリサとはやてだった。

「そう言えば、もうじきはやてとあかりとヴァーリの誕生日だね」

今日の日付を思い出し、ふとそんなことを思い出した。

「空も誕生日でしょ?」

「え、ああ、そっか。俺もだったね」

前世の記憶が無いから、俺がこの世界に転生した日、6月8日を誕生日にした。

4年目にして未だに忘れそうになる。

「今年もここでパーティーやるの?」

「一応そのつもりだよ。皆が他がいいとかの要望が無ければだけど。あ、はやてとあかりは誕生日プレゼントに欲しいものとかある?」

はやてとあかりは6月4日、ヴァーリは6月6日と2日ごとに誕生日があるので、毎年四人まとめて6月4日に祝っている。

「せ、せやな……ほんなら空君のき『それはダメ!』……チツ……」  
はやてが何かを言っている途中であかり以外からダメと言われた。

「あかりは?」

「私は「ヴァーリ君とのデート」がいいな……って、今の誰が言ったの!?!」

誰かに口を挟まれてあかりは声を荒げた。

「私よ。でも、あながち間違いでもないでしょ?」

犯人の愛衣は悪びれた様子もなく平然と正体をバラした。

「そ、それは……ってそうじゃないよ! 何で知ってるの!?!」

「確信したのは最近だけど、今までのあなたを見ていれば一目瞭然よ。他の人と話しているときよりもヴァーリ君とのときの方が嬉しそうな顔をしているもの」

うん、二人は仲が良いからね、あかりが嬉しいのも分かるよ。

俺も皆と話せるのは嬉しいからね。

「ええッ!? ウソ!? 私、そんな感じだった!?!」

「正直に言えば分かりやすいな……って思ってた……」

『うんうん』

他の皆も二人の仲がいいと思ってたらしい。

「も、もしかして空君も?」

あかりが気まずそうに聞いてきた。

「え、ヴァーリとあかりが仲良しってことでしょ? そんなの知ってるよ」

『……………はあ』

俺以外の全員が一斉に溜息を吐いた。

「何で溜息吐くのさ!?!」

「空君ってつくづく残念なほどに鈍感だよね」

「まあ、今に始まったことじゃないんやけど」

「それにしたって今のは少し考えればわかることじゃない!」

「空君は女の子のこと勉強した方が良いよ?」

皆から色々言われた。

むう……何が間違っていたんだ？ さっぱりわからん。

俺が一人で唸っている間に、皆はあかりに質問攻めをしていた。

逆にあかりも皆に好きな人のことを聞いていたらしいのだが、その時も考えていたので、

全員が躊躇いなく『空（君）』と答えていたことに気付かなかった。

そして最後まで答えが分からず、そのまま布団を被って眠りについたのだった。

冥界で使い魔ゲットです！

冥界で使い魔ゲットです！

S i d e 空

明日奈達セイクリッド・ギアが神器を使い始めてから数日後の休日、俺は冥界の森に来ていた。

ここに来た理由は、このあたりに五大龍王の天魔カオス・カルマ・ドラゴンの業龍——  
ティアマツトがいるらしく、

ぜひ戦ってみたいと思ったからだ。

「さてさてさーて、どこにいるのかな？」

『……なあ、空よ、ティアマツトを探すのは止めにしたか？』

どうしてドライグはこんなに消極的なのかな？

「アルビオンはドライグがティアマツトに会いたくない理由とか知ってる？」

『ああ、もちろんだ。昔、こいつが——』

『ワー！ 止めてくれ！ アルビオン！』

『……すまないが本人の為にここは黙っておこう』

アルビオンが喋ろうとしたら、ドライグが必死に止めた。

そこまで隠したいことなんだね。

「でも、ドライグってこの世界のドライグじゃないんだから関係ないでしょ？」

『それはそうなのだが、俺がいた世界でも仲が悪くてな……。こつちの世界のティアマツトとはいえ会いたくない』

「そっか。まあ、なんでもいいけど。ほら、さっさと探すよ」

それから数時間後。

「……全然見つからない」

どこを探してもティアマツトどころか、生物が一匹も見つからない。

『お前は動物に嫌われやすいからな。それが魔獣にすら影響を及ぼす

とは、笑えてくるな』

『普通、そこまで嫌われるかな?』

九喇嘛の言う通り、俺は動物に何故か嫌われている。それも超がつぐらいついてもおかしくないぐらいに。

すずかの家の猫やアリサの家の犬も俺が来ると怯えて部屋から出ようとせず、無理に触れようとしようものなら、触れる前に気絶してしまう。

あのときは相当ショックを受けたのを今でも覚えている。

……思い出したら泣きそうになつてきた。

『原因はワシらがいるからだろうな』

九喇嘛が愉しそうに自分達の所為だと言つてきた。

お前らの所為かよ!? ふざけんな! 俺が今までどんな思いでいたと思つてるんだ!

『ならティアマットを使い魔にすればいいのでは?』

『なるほど! ……いや、ティアマットが使い魔つてどうなんだ?』

そもそも、するしない以前に早く見つけないと話が進まないんだけど。

『はあ……とりあえず、さが——』

『キヤアアアアアアアアッ!』

『悲鳴?!』

誰かの悲鳴が森全体に響き渡つた。

『空! あっちの方だ!』

あっちつてどっち!? それだけでわかるかッ!

『空から見て、左に直進すればいるはずだ』

『サンキュー、アルビオン!』

方向を教えてくれたアルビオンに感謝して、一番速い九尾モードで駆け付けた。

あそこか!

女の子三人が全長5mはありそうな魔獣数匹に食べられそうに

なっていた。

「させるかああああああああああ!!」

『ガウ!?!』

俺の声に振り向いて、攻撃対象を俺に変えて突進してきた。俺は魔力を右手に集め、手を巨大化させてから魔獣の一体を殴り飛ばした。「まだまだ! てつやああああああああああああああああああ!」左手にも同じようにして、他の魔獣を拳の連撃でどんどん吹き飛ばしていった。

「これでおわ———」

『グオオオオオッ!』

「まだ起き上がるの!?!」

あれだけ殴って立ち上がった魔獣に驚いた。

今の九喇嘛の力じゃパワー不足か……。

「今度はドライグで行くよ! バランス・ブレイク 禁手化!」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!》

『ガウ!?!』

俺が放つドラゴンのオーラに魔獣達は一瞬怯んだものの、すぐに攻撃してきた。

《BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost

BoostBoostBoostBoostBoost!!!!!!!!!!》

「紅蓮天龍連撃!」

炎を纏った拳で魔獣達を数十回殴り続けた。

魔獣達は再び吹き飛ばされて、今度はちゃんと気絶したことを確認した。

「よし! 今度こそ終わった! あ、君達は大丈夫?」

後ろにいる女の子達に振り返り、安全かどうか確認した。

「え、あ、だ、大丈夫です!」

「うん、あなたのおかげでケガは無いよ」

「あ、ありがとうございます!」

言葉通り、三人共大丈夫なようだ。間に合って良かった。「それはよかった。じゃあ、俺、急いでるから。バイバイ」

別れを告げてその場から離れようとしたところで、

『グオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

『!?!』

さつき戦った魔獣とは比喩物にならないほどの咆哮が聞こえた。

「あー! あれ、もしかしてドラゴン!?!」

小豆色の髪をした女の子が上を見て叫んでいた。

蒼い鱗のドラゴン……。

『……しまった! 俺の力をたどってここまで来たのか! あいつ!』

ドライグの反応を見ると、あれがティアマツトか!

「よっしゃー! やつと見つけた!」

「見つけたってどういうこと?」

女の子の一人が不思議そうに尋ねてきた。

「ん? ああ、俺はティアマツトと戦ってみたいから探してたんだよ!」

『え?』

三人は驚いてるけど、そんなことよりも今はティアマツトだよ!

「おーい! ティアマツト! 降りて来ーい!」

大声で叫ぶと、俺の声が聞こえたのか、すごい風圧を起こしながらゆっくりと降りてきた。

『……一つ聞くけどあなたがドライグを宿す者?』

「うん、一応!」

『そう……なら——』

『マズイ! 空、逃げろ!』

『死になさい!』

ドライグの忠告虚しく、ティアマツトの口から蒼炎のブレスが放たれた。

『!?!』

避けたらこの子達にも被害が出る! だったら——

「禁手化!」

トウルー・ロンギヌス・バランス・ブレイカー

黄昏の聖槍の禁手になり、聖槍で斬り裂いた。

『!? あなた、聖槍を持っているの!?』

俺の手にある聖槍を見て蒼い眼を見開いていた。ティアマツトもこんなところで聖槍が見られるとは思ってもしなかったのだろう。

「まあね。危ないから三人共ここから離れた方が良いよ」

『はいっす（うん／はい）!』

三人は素直に従って、俺達から離れた。

「さあ、俺達の戦争を始めよう」

『ふん！ 人間風情が舐めないでちょうだい!』

俺達は互いに翼を広げて、空中戦で戦うことにした。

「はあああああああああああああああ!」

聖槍を伸ばした突き攻撃でティアマツトの硬そうな蒼い鱗を簡単に傷つけた。巨大な拳で殴り掛かってくるのを聖槍で上手く捌く。

『クツ！ やるわね、あなた！ でも、まだよ!』

ティアマツトも負けじとブレスを大量に放ってきた。

俺はそれを回避しようとして横にズレたが、ブレスには追尾効果があったらしく、俺の後ろを追い掛けてきた。

「追尾するなら落とすまで!」

俺は翼を巧みに動かし、ブレスを叩き落したり斬り裂いた。

そろそろ頃合いかな……。

次で決めようと思ひ、攻撃のチャンスを作るために相手に仕掛けた。

接近するとティアマツトが拳を突き出してきたが、聖槍でなんとか受け流した。

しばらく激しい攻防をしていると、チャンスが訪れた。

ティアマツトが俺の攻撃によるめいたのだ。

今だ!

「輝け！ 聖槍よ!」

『させないわ!』

ティアマツトが今回で一番、デカイブレスを放ってきた。

「——— 聖槍龍の夜明け!」

聖槍から放たれた特大の黄金の砲撃がティアマツトのブレスを搔

き消し、ティアマツトすらも？み込んだ。

『空さんの勝ちですね』

ティアマツトが落下していくのを見て、ヤハウエが呟いた。

『私の負けね……。しかも人の子に負けるなんてね』

地面に横たわるティアマツトが負けを認めた。

「やったね！ 龍王に勝てたよ！」

『中々良い戦いだっただな』

『まあ、当然の結果だな』

アルビオンは俺の戦いを称賛し、九喇嘛は勝って当然といった感じだった。

「そう？ ありがとう。ティアマツトは怪我平気？ もしよかつたら治すけど」

『これぐらい問題ないわ。気にしないでちょうだい』

ティアマツトはそう言うतとすぐに立ち上がった。

流星は龍王と呼ばれるだけのことはあるね。

「そっか。じゃあ、俺は帰るね。暇なときにまた相手してくれると嬉しいな」

『ちよつと待って。あなたは戦うためだけに私を探していたのかしら？』

帰ろうとしたらティアマツトから質問された。

「そうだけど？」

『……それだけなの？』

本当に戦う為だけに来たのかともう一度聞いてきた。

「それだけだよ」

『……………フフ、アハハハハハ！ 面白い！ 実に面白いわ！』

「ええー？ 何で笑われんの？」

突然笑い出したティアマツトに理解が出来ないでいた。

前に九喇嘛にもそんな感じで笑われたのを思い出した。

俺ってそんなに変かな？

『普通だったら使い魔にでもすると思っていたんだけど、戦うだけって……。これは驚きだわ』

「はあ、それはどうも……?」

褒められてるのか変人扱いされてるのかわからない……。いや、褒められてはないよね。

『あなたの名前は何と言うの?』

「龍神空だよ。空って呼んでくれていいよ」

『そう、空っていうのね。ねえ、空。私を使い魔にしてみない?』

「え、結構です。それじゃ」

ティアマツトが使い魔になるという提案をあつさり断り、今度こそ帰ろうとしたが、

『まあ待つて待つて。さつきあなたはまた戦ってほしいと言ってたじゃない。私を使い魔にすればいつでも戦えるわよ。お得じゃないかしら?』

ティアマツトが食い下がり、帰ることが出来なかった。

「いや、そこまでして戦いとは思わないんだけど……」

『ティアマツト、いい加減に諦めなさい』

困っていたら、ヤハウエが止めに入ってくれた。

『その声は聖書の神ね? でも、私を止める権利はあなたには無いわ。それに私は空が気に入ったのよ。だから、いいじゃないの。空には何が何でも私のことを使い魔にしてもらおうわ』

ヤハウエがいることに興味がないのか、特に気に留めることもなく続けてきた。

何か気に入られてた!? これがドライグやアルビオンの力を引き寄せる特性なのかな?

「でも、アジユカっていう魔王の盟友なんですよ? 使い魔になってもいいの?」

『それぐらいなら構わないわ』

「うくん、ドライグとしてはどうなの?」

『……俺としては遠慮願いたいな』

『黙りなさい、変態。今でもあの事を私は許す気はないわ!』

俺と話すときは優しい声音だったのに、ドライグに対しては底冷えするような声音に豹変した。

「あの事？ それって仲が悪くなった原因の事？」

『ええ、そうよ！ その変態は私のむ、むむむ、胸を触ったのよ！ そのことを百歩譲ったとしても、ドライグのせいで貸してあげた宝のほとんどが各勢力の宝物庫の中に行ってしまったわ！』

おー、胸つてことは正しく乳龍帝ですね。宝に関してもドライグが悪いですね。

詳しく話を聞いてみれば、アルビオンとの決着を付けるためティアマットに宝を借りたらしいのだが、アルビオンと一緒に退治され、神器に封印されてしまった所為で、ティアマットの宝は人間の盗賊に奪われ世界中に散らばったそうさ。

『それはこの世界の俺だ！ ここにいる俺はお前にそんなことをした覚えはない！』

『覚えてない……ですって？ それは私以外の雌の胸も数え切れないほど触ったというの!? 益々、許せないわ！ やはり死ぬ！』

「ちよつと待って！ ティアマット落ち着いて！」

『……チツ…………わかったわ。命拾いしたわね、ドライグ』

暴れそうになったティアマットを何とか抑えた。

ドライグが死ぬってことは俺が死ぬってことだからね!?

「ドライグはこの世界のドライグじゃないって言ってたでしょ？ だから、ティアマットが許せないドライグは別の人に宿ってるんだよ」  
『つまり、空に宿るドライグは私の知らないドライグだと言いたいのか?』

「そういうことだよ。分かってくれた？」

『……分かったわ。空がそこまで言うのなら信じるわ』

ほつ、これで俺が殺されることは無くなったよ。

『ただし、空が私を使い魔にしてくれたらの話だけだね』

『は?』

俺だけでなく、中にいるドライグ達も俺と同じ言葉を発した。それに反して、ティアマットはしてやったりな顔した。

『狡賢いな……』

『こりゃあ一本取られたな』

『さあ、どうするの？ 使い魔にする？ それともこの場で焼かれる？』

答えを待つティアマットが、こちらを楽しそうにニヤニヤと見ていた。

もし俺が断ればティアマットに攻撃されるんだよね？ それは勘弁してほしいな……。

「はあ……分かったよ。ティアマットを使い魔にするよ」

『賢明な判断よ』

『ほとんど脅迫に近いがな……』

『何か言ったかしら？』

『いいえ、何でもありません！』

ティアマットに睨まれたドライグは即座に謝った。天龍の貫禄が丸つぶれだ。

それから、俺はティアマットに連れられて、アジユカさんに会いに行った。

「そういうわけで私は空の使い魔になるわ」

蒼く長いストレートの髪をした人の姿になったティアマットがアジユカさんに今日あったことを伝えた。

「俺としては仕事に支障が出なければなんだっていいよ。それでは、ティアマットのことを頼んだよ。龍神空君」

「は、はい！ 頑張ります！」

魔王に初めて会ったので酷く緊張していた。

これが魔王……強いな……。

今の俺じゃとても敵いそうにないと、見た瞬間に思った。

「それでは失礼します」

やっと帰ることが出来ると思ってドアノブを回そうとしたところで、ドアがひとりで開いた。反対から誰かが開けたのだ。

「アジユカ、仕事のことと話し……おや？ 君は人間だね。どうしてこんなところに？」

赤よりももつと濃い紅い髪のイケメン成人男性が入って来た。

この人、サーゼクス・ルシフアーだ！

「えつと……」

「彼はティアアマットを使い魔にした龍神空君だ」

俺が困っていたら、アジユカさんが助けてくれた。

「あの龍王最強のティアアマットが使い魔になるとは……。これは驚いたね。君はまだ小学生ぐらいか。その年でティアアマットに勝つとは素晴らしいよ」

「あ、ありがとうございます」

「そうだ。今度、君さえ良かったら私と試合をしてくれないかい？ ティアマットが認める実力をぜひこの目で確かめてみてくたね」

魔王と試合!? マジで!?

突然の提案だったが、嬉しい内容だった。

「おいおい、子供相手に試合なんて大人気ないぞ」

「偶にはいいじゃないか。執務ばかりでは体が鈍ってしまうからね。空君の方はどうだい？」

「ぜひやらせてください！ こんな機会滅多にないので！」

嬉しい！ 俺、魔王と戦えるんだね！

「それは良かったよ。日取りが決まったらティアアマットに伝えておくよ」

「はい！ 楽しみにしています！ それじゃ、失礼します！」

やばい！ これはやばい！ ワクワクが収まんない！

Side out

Sideサーゼクス

空君がいなくなった後で、アジユカとティアアマットと彼のことを話していた。

「彼は何者なんだい？」

「さてね。私も会ったばかりで分からないことだらけ。ただ聖槍や赤龍帝の力を持っていた。それに彼は面白いわ」

彼は二つも神器を持っているのか!? それも神滅具ロンギヌスを二つ!?

……これは彼と戦うのが楽しみになって来たよ。だが、それと同時に彼は何者なのか益々知らなければならなくなってしまうた。

「それが本当なら、他の勢力に付かれるとパワーバランスが一気に傾くな」

「そうだね。彼の存在に気付けばどの勢力も声を掛けるだろう」

出来ればこちらの陣営に入ってもらいたいものだが……放っておくはずがない。

「空はそんなことに興味なさそうなんだけどね……」

「確かにそうだね。彼は生きることを楽しんでるみたいだからね」

今度の試合のついでに妹のリーアさんに紹介しよう。

そんなことを考えていたら、突然ドアが乱暴に開いた。

「ティアマツトと人間の子供が戦ってるって本当か!？」

入ってきた人物は天界の神王——ユーストマ様と私と同じ魔王のフォーベシイ様だった。

ティアマツトの盟友であるアジユカのところに行けば何かわかるのでは? と思ってここに来たのだろう。

「私ならここにいるわ。神王に魔王」

「え!? まさか食べちゃったのかい!？」

遅かったかと絶望したような表情になったフォーベシイ様。

「私の事なんだと思ってるのかしら? ……あの子ならならとつくに帰ったわ」

心外だとばかりにティアマツトが答えた。

「どうやら入れ違いになったみたいだな」

「それだけでお二方はここに来たのですか?」

これくらいのことでお二方が動くとは思えないのだが……。

「ああ、実はティアマツトと戦った少年がネリネちゃん達を魔獣から助けてくれたと本人達から聞いてね。ぜひお礼が言いたかったんだよ」

彼は三人を魔獣から護ったのか。

「それでしたら今度彼と私が戦う時に言ってみてはどうでしょうか？」

「お、それは丁度いいな」

「ぜひそうさせてもらうよ。じゃあ、僕達は失礼するよ」

お二方は満足そうにして部屋を出て行った。

Side out

Side 空

「たっだいまー!」

「おかえりー! ティアマットとかいうドラゴンは見つかったの?」

玄関を開けるとアリシアとフェイトが迎えてくれた。

「うん! 戦ったけどメツチャ強かった!」

「ドラゴン相手に良く無事だったね……」

「それだけじゃないよ! ティアマットが使い魔になったんだ!」

脅迫に近いけどね!

『え?』

「しかも今度魔王の一人と戦うことになったんだよ!」

これはティアマットが使い魔になったことよりも嬉しいかも。あ、

これじゃティアマットに失礼か。

『は!? 魔王!?!』

「そんじやご飯作るとしますか」

「毎度のことだけど、空って色々おかしいよね?」

「もはや人間辞めてない?」

「いやいやまだ人間辞めてないからね!」

「まだってことは……」

「そのうち……」

「今のは言葉の綾って奴だから! 勘違いしないで!」

「ハイハイ、そうですね」

うわッ! 絶対に信じてない!

「あーあ、今日はアリシアの大好きなカレーにしようとしたのになあ  
〜」

「ごめんなさい言い過ぎましただからカレー作って下さい」

土下座するほど食べたいの!?

「わ、分かったよ。今日はカレーにしてあげる」

「ホントに!?! やったー!」

現金な奴だなあ……。

「あ、ねえ、空。その、さ……そろそろ、いいんじゃない、かな?」

「何が?」

フェイトが急にモジモジし始めたけど何が言いたいんだろうか?

「そんなの決まってるじゃん! デートだよ! デート!」

!?! 約束してたのすっかり忘れてた!

「もしかして忘れてた?」

ギクツ!

「え!?! そ、そんなことはないよ!」

「絶対忘れてたよね?」

アリシアに半眼で睨まれた。

「……はい、忘れてました」

「酷いよ! ずっと楽しみにしてたんだから!」

「ご、ごめん……」

完全に俺が悪いな。

「罰として今日は一緒にお風呂とベッドだからね!」

「うツ……はい、わかりました」

……ここで逆らえば俺の命は無いな……。

「そして明日は私とデートしてもらうからね!」

「うん……わかったよ」

こうして明日はアリシアとデートすることになった。

アリシアとデートです！

アリシアとデートです！

Side空

「琴里、大事な話があるんだ」

「な、何かしら？（まさか告白とかなの!?）」

俺は今、真剣な表情で琴里と向き合っている。琴里も真剣さが伝わったのか、緊張していた。

「デートってどうすればいいの？」

「死ねばいいと思うわ（期待した私が馬鹿だったわ……）」

一蹴された。

「ヒドッ！ 真剣に聞いてんのにその返しは無いでしょ!?!」

「うるさいわね……分かったわよ。付いてきなさい」

琴里に付いて行くと、何も無い壁で立ち止まった。

「？ ここに何かあるの？」

「ええ、見てればわかるわ」

琴里が壁に触れると、壁の一部が反転してパネルのようなものが出てきた。

パネルに番号を打ち込むと何かが動く音がして、壁が横にスライドして通路が現れた。

「これってどういうこと!?!」

「説明は後よ」

琴里は颯爽と通路を歩いて行ったので、慌てて追いかけた。

「明かりをつけて、鞠亜」

琴里が暗い空間に向かって命令すると、部屋の明かりが一斉につけた。

明かりのついた部屋を見て俺は目を見開いた。

「ここって……フラクシナスの指令室!?!」

「ええ、そうよ。それから、この子はこの部屋のAI、鞠亜よ」

琴里が何も無い空間に手を向けると、一人の少女が現れた。

体が時々ブレてるから、ホログラムだろう。

「!?」

『初めまして、空。私は或守<sup>あるすまりあ</sup>鞠亜と言います。よろしくお願ひします』  
「え、うん、うん、こちらこそよろしく……」

鞠亜って、ゲームの方で出てきたキャラだよね……? ……じゃあ、他の子もまだいるのかな?

「明日のデートは鞠亜を通してあなたに指示を送るわ。分かったかしら?」

「それってつまり……」

「ここからあなたのデートをサポートしてあげるってことよ」

「ありがと、琴里! 愛してる!」

嬉しさのあまり琴里に抱き着き、愛してるなんて叫んでしまった。

今の俺はそれぐらい琴里に感謝してる。

「えええッ!?! あああ、愛してる!?! いきなり何!?!」

『なるほど……これが『愛』なんですね!』

琴里がかなり慌てているけど、どうしてかな? 家族だからこのくらい当たり前だよな?

プレシアさんもフェイトやアリシアに良く言ってるし。

あ、琴里はこういうの恥ずかしがるタイプだっけ?

「それじゃ、俺はもう寝るね。琴里、鞠亜、お休み!」

『お休みなさい、空。明日は頑張りましょう』

「告白、されたのよね……? あ、愛してるって……」

鞠亜は返事をしてくれたが、琴里は何かブツブツ呟いていた。

俺は明日の確認だろうと思ひ、部屋に戻って寝た。

翌日。アリシアとデートの日がやって来た。

朝食を食べているのだが、心なしかアリシア以外もそわそわしてるみたいだ。

十香達はデートが上手くいくか、姉として心配なんだろうね。

「それじゃあ、俺は先に行ってるから」

「うん、私も準備してからすぐに行くよ」

俺は手早く準備を済ませて、待ち合わせ場所に向かった。

「えーっと、待ち合わせは駅前の広場の噴水だったから……あ、ここか」

待ち合わせの場所を見つけると、そこに立って待っていた。

「おーい！ 空ー！」

数分後にアリシアが手を振ってやって来た。

「あ、アリ……………」

「こちらも手を振り返そうとして固まった。

「あれ？ 空、どうしたの？」

「え？ ああ、えーっと、その、何て言うか……その髪どうしたの？」

「ああ、これね。お母さんにやってもらったんだ！ どうかかな？ 似合う？」

「う、うん、とっても似合ってる」

アリシアの言う通り、いつもと髪型が違っていた。

普段はツインテールなのに対し、今日は長い金髪を頭の上で編み込み、長い髪の一部を一つにまとめ、右肩から垂らしていた。

服装は白いブラウスに水色のミニスカート、黒いニーハイだった。

あ、あれ？ アリシアってこんなに可愛かったっけ？

今までとは違うアリシアに完全に見惚れてしまった。

「あれれ〜？ もしかして私に見惚れちゃった？」

「……………うん、正直に言うとかかなり見惚れた」

「え!？」

アリシア本人は軽いからかいのつもりで言ったのだろうけど、俺は真面目に返した。

「そ、そっか……………ありがとう」

アリシアも恥ずかしくなったのか、顔を赤らめて俯いてしまった。

俺も自身が言ったことに今更恥ずかしくなり、二人そろってしばらく俯いていた。

「そ、そろそろ行くうか！ 時間が勿体無いから！」

「う、うん！ そうだね！」

ようやく立ち直ったものの、二人共ぎこちなかった。

『デレデレし過ぎよー！』

「(うう……はい、すみません……)」

家を出るときに渡されたインカムから、家のあの部屋で観ている琴里に怒られた。

「それでどこに行く？」

「うーん、特に決めてないんだけど……空はなんかない？」

むむっ……いきなり詰まったぞ。こういう時は――

「(こどもん、助けてー！)」

アリシアにバレないように小声で助けを求めた。

『はあ……いきなりね……』

『それでは、選択肢を出しますね』

『分かったわ。鞠亜が選択肢を出してくれたわ』

① 遊園地に行く。

② 動物園に行く。

③ 映画館に行く。

俺の耳にも選択肢が聞こえてきた。

『総員！ これだと思っ選択肢を五秒以内で選びなさい！』

『了解！』

琴里が誰かに命令すると、返事が聞こえてきた。

総員って誰だろう？あとで聞くとしよう。

『結果は出たわ。③の映画館よ』

「(その理由は?)」

『①だとその歳の子供が二人だけというのはあまりいいとは思わないわ。②は単純に空が動物に嫌われてるからよ』

なるほどね。

「(ありがと) アリシア、映画でも観に行こっか」

「オツケー！ 映画館へレッツゴー！」

俺はアリシアと手を繋いで、映画館へと歩き始めた。

Side out

S i d e 琴里

私——五河琴里は空とアリシアのデートを成功させる為に、指令室からモニターを通して現状を確認していた。

なにデレデレしてんのよ！ あいつは！

空がアリシアに見惚れていたのが私は気に入らない。

「むう〜！ 空はアリシアにデレデレし過ぎではないか！」

「まったくです！ だーりんは可愛ければ誰でもいいんですか!？」

『これも愛の形なのでしょう？』

どうやら私以外にも皆と同じ思いだったみたいだ。鞠亜は愛だとか言ってるけど違うと思うわ。でも、嫉妬ばかりしては今回の目的は失敗に終わってしまう。

その所為で空が落ち込む姿は見たくない。だから、非常に不本意ながらだが、一応このデートを成功という形で終わらせてあげたい。

「二人が映画館に入ったわね」

『どれを見ようかな？』

『うくん……あ、これなんてどう？』

そう言ってアリシアが指で示したのは、恋愛ものの映画だった。

子供が見るにはまだ早いんじゃないかしら。

最低でも中学生ぐらいじゃないと内容なんて分からないと思うわ。

空の反応もイマイチって感じだし。

そう思っていたら、本日二度目の選択肢を鞠亜が出した。

①「アリシアの選んだ恋愛ものでいいよ！」

②「俺達には恋愛映画はまだ早いよ！ それよりもこっちのほのぼのの系にしよう！」

③「いや、やっぱり映画は止めて買い物に行こう」

「総員、選びなさい！」

『了解！』

私が指示を出すと、十香、四糸乃、よしのん、美九、二亜が返事をした。

ちなみに、このメンバーには渾名がある。すべて私が付けた。  
十香は〈無限の食欲〉。

四糸乃はよしのんとまとめて〈砂漠に咲いた一輪の花〉。

美九は〈同性殺し〉。

二亜は〈最強の漫画家〉

我ながら良いネーミングセンスだと思ったわ。

え？センスが無いですって？ そう思った奴には【砲】をプレゼン  
トしてあげるわ。

一人で考え事をしていたら、全員が選択を終えたようだ。

結果は②だった。

「皆も私と同意見みたいね」

私が聞くと皆は一斉に頷いた。

「①はだーりんが理解出来ずに眠ってしまいそうですう」

「それはかなり言ってるわね」

ただでさえ鈍感な空が恋愛ものでは思えないわ。

それと、アリシアが何かをしそうだわ。

「③はここまで来て変えると、優柔不断な奴って思われちゃうだろう  
から、絶対じゃないね」

皆の意見を聞いたところで、マイクを引き寄せて、空に指示を出し  
た。

S i d e o u t

S i d e 空

琴里から指示が来た。

②番か。

「アリシア、俺達には恋愛映画はまだ早いよ。それよりもこっちのほ  
のぼの系にしない？」

「え〜？ そんなことないと思うんだけどなく？ それにほら、空は  
少しぐらいこういうことを勉強すべきじゃない？」

アリシアはすんなり承諾してくれず、反論してきた。

「勉強？ 何を？」

だが俺は、何を学ぶべきなのかが分からなかった。

「それは恋とか愛とかだよ！」

恋とか愛、ねえ……。

「それはその内でいいんじゃないかな？ 何時か気付くものだと思うし……」

「空は絶対に気付かないと思うんだけど……まあいつか！ だったら二つとも観ちゃおうよ！」

二つか。ここは琴里に指示を仰ぐべきだな。

「(琴里、どうすればいいの?)」

『……二つとも行くしかないわね。断ってアリシアが不機嫌になるのも困るわ』

「(了解) 分かった。二つとも観よう」

「うん！」

最初に恋愛映画を観ることになり、チケットを買って席に着いた。

映画の上映が始まると、アリシアが俺の手を握ってきた。

なんで手を繋ぐんだ？ ホラー映画じゃないのに怖いのかな？

あ、もしかして暗いところが苦手なのかな？

そう思っ、俺は手を握り返した。

アリシアは一瞬肩を揺らしたが、すぐに何でもないかのように映画を観ていた。

映画が終わってから一旦外に出た。

「すごく良い話だったね！ 何回も泣きそうになったよ！」

「うん、話は良かったと思うよ。でも、あの男の人はあの女の人のどこに惚れたの？」

いつの間にか女の人のこと好きになってたみたいだし、女の人もどうして告白を受け入れたんだ？ その辺がよく分からなかったんだけど……。あと、寝そうになるの頑張って堪えるのに疲れた。

「……………はあ、やっぱりかあ……………」

「何がやっぱりなの？」

溜息を吐いた理由を聞こうとしたのだが、「何でもない」と言われた。

『空はアレですね。鈍感を通り越してとてつもなく残念ですね』

インカムから鞠亜が言ってきた。

「(会って間もない鞠亜にも酷いこと言われた!?)」

『今更何言ってるのよ。それよりも昼食にするといいわ。その後もう一つを觀ましょ』

今更なのか……。

「(……分かったよ)アリシア、そろそろお腹が空いてきたからご飯にしようよ」

「時間も丁度いいしね！　じゃあ、翠屋に行こうよ！」

「うん、分かった」

再び手を繋いで、翠屋に向かった。

「いらっしやいませ！　って空君にアリシアちゃん！」

翠屋に入ると、美由希さんが出迎えてくれた。

『こんにちは！』

「こんにちは。ところで二人はどうしてここに？　あ、もしかしてデートとか？」

ニヤニヤした美由希さんが冗談交じりに質問してきた。

「はい！　デートですよー！」

「……え？　ホントに？」

アリシアの答えが信じられないのかももう一度聞いて来た。

「えーっと、まあ、一応前からの約束だったんで……」

「そ、そっか……じゃあ、こちらにどうぞ……。 (小学生に先越された……)」

急に元気が無くなった美由希さんに案内されて席に着いた。

注文を決めてから美由希さんに伝えた後、しばらく談笑していると、見慣れた短いツインテールの少女が注文したものを運んできた。

「こちらがカルボナーラとオムライスです。へあとでどういうことか説明してね……」

「へ……………はい」

なのはに念話で言われ、何故だか背中に冷や汗が伝った。

「お〜！ 美味しそう！ 空、早く食べようよ！」

何も気づいてないかのように、アリシアは食事を促してきた。

「そうだね」

手を合わせて、いただきますを言ってから、アリシアと共に食事を始めた。

「ねえ、空」

「うん？」

「はい、あ〜ん」

食べている途中でアリシアがいきなり自分のオムライスを差し出してきた。

これは食べるってことだよな？

「あ〜ん」

特に断る理由もなかったので、素直に口を開けて食べた。

「どう？ 美味しい？」

「うん、美味しい。アリシアも俺の食べる？」

流石桃子さん！ 俺もいつかこの領域に行けるかな？

「うん！ 食べさせて！」

「はい、あ〜ん」

「あ〜ん！」

フオークに巻いたカルボナーラをアリシアの口に持っていくと、パクツと食べた。

「う〜ん、最高ー！」

どれを食べても美味しいものばかりだと、改めて思った。

ただ、食事中になのはが殺気を送ってくるのは勘弁して欲しかった……。俺、そんなに悪いことしたかな？ それと、なのは以外からも殺気を感じたような気がしたのは気のせいかな？

食事を終えて一息吐いていると、次の映画の始まる時間が近かった

ことに気付いた。

「次の映画が始まる時間が近いからそろそろ行こうか」

「そうだね」

俺達は会計を済ませて、映画館へと戻った。

S i d e o u t

S i d e 狂三

わたくし——時崎狂三は今現在、空さんとアリシアさんのデートをストー……ではなく、監視をしているのでございますわ。

何故こんなことをしているかというところ、空さんが誰かとデートするのがつまら……失礼しました。二人のデートの障害となるようなことが無いように見張っているのですわ。

決して、決して空さんがデレデレしているのが気に食わないとか、アリシアさんが羨ましいなんていう理由で監視をしているわけではありませんのよ？

……もし、疑うのであれば、〈ときばみのしろ時喰みの城〉で時間を吸って差し上げますわ。

「なあ、狂三よ。何故我らもここにおるのだ？」

「疑問。普段のあなたからは考えにくいのですが……。熱でもあるのですか？」

「……失礼なことをおっしゃいますわね。別に良いではありませんか」

わたくしは一人ではなく、八舞姉妹と共に空さんのデートを追っている。二人を呼んだのは、もしも、空さんにバレたときに言い訳をするためだ。

あら？ よくよく考えたら、わたくし一人の方が良かったのではありませんか？

まあ、いいですわ。それよりも空さんが移動したみたいなので追い掛けませんと。

二人を引き連れて尾行を続けた。

## Side out

### Side 空

二本目の映画を観た後、外に出て近くにあったベンチにアリシアと並んで座っていた。

「……………」

「……………」

「あの映画って……全然ほのぼのしてなかったね」

「……うん。しかも、それどころか、滅茶苦茶重かった……」

『はぁ…………』

二人して、深い溜め息が出た。

最初は主人公が敵と戦って、苦戦しながらも勝ち、笑いや感動も多少はあるだろうと思っていた。

だが、見ていくうちにだんだんと話が重くなっていった。

俺と同じ年ぐらいの女の子が、人が死ぬ瞬間を目撃したのだ。

「なんか……ごめん……」

「ううん……別にいいよ……」

アリシアには悪いことしたな……。

「(琴里、何とかしたんだけどどうすればいい?)」

『そうね……買い物かしら。服かアクセサリーでも買ってあげなさい』

「(分かった)アリシア、買い物でもしない? お詫びと言っちゃなんだけど、何かプレゼントさせてほしいんだ」

「それは空に悪いよ……」

普段のアリシアなら食いつくと思っただけだなあ。

「えつと……俺がアリシアにプレゼントしたいから、じゃダメ? その、今日のデート記念に、みたいな?」

「デート記念……うん! 分かった! でも、私も空に何か買わせて欲しいな」

「えっ、なんで?」

どうしてアリシアが買う必要があるんだ？

「だって、デート記念だったら空にとつてもでしょ？ 違う？」

「あ、そっか……。じゃあ、お互いに買うとしようか」

「うん！」

近くのショッピングモールに入って、一時間後に入り口で再び集合することにした。

「うくん、それにしてもプレゼントか……。何が良いかな？」

『空は琴里達にはプレゼントしたことはないのですか？』

悩んでいたら、鞠亜が質問してきた。

「いや、あるよ。でも、大抵の物なら皆優しいから喜んでくれたんだよね」

特に何も言わないから何がダメなのかがイマイチ分からない。

『それは単に……。いえ、なんでもありません。あ、小物なんていいんじゃないですか？』

「ふむふむ、それはいいかもね」

俺は鞠亜の意見を取り入れることにして、小物を置いてあるお店に入った。

「お、これなんか良いんじゃないかな？」

『そうですね。私もいいと思いますよ』

「じゃあこれにするよ」

鞠亜も賛同してくれたのを買うことにした。

待ち合わせ場所に行くとアリシアはすでにいた。

「随分早かったね。もしかして待たせちゃった？」

「ううん、全然待ってないよ。それよりも買ったもの見せあおうよ！」

「うん、それじゃあ同時に見せよう」

「分かった！」

『せーのっ！』

そうして俺とアリシアは同時に見せたのだが、

『あれ？ 同じ物？』

正確に言うとからは違うのだが、それ以外は全く同じマグカップだった。

『フフツ……アハハハハッ!』

俺達はどちらからともなく笑いだしていた。

「アハハ、まさか同じ物買うなんて思わなかったよ」

「私もだよ」

「でも、これはこれでいいんじゃないかな?」

「そうだね! なんだがとつてもロマンチックに思うよ!」

ロマンチックか……。こういうのも悪くないかもね。

それから、お互い買った物を交換して帰ることにした。

S i d e o u t

S i d e アリシア

私——アリシアは空と手を繋いで家に向かっていた。

あと少して空とのデートが終わってしまう。

それを考えると寂しく思ってしまう自分がいた。

でも、今日は今までで一番楽しい思い出になったかな……。

空とこんなに話せたし、たくさん触れ合うことが出来たんだもん!

おまけにプレゼントは同じマグカップだったし、それだけで十分に

満足だよ!

お揃いのマグカップだと恋人みたいかな?

そう考えただけで、顔がニヤけそうになってしまう。

空は何とも思ってたなさそうだけど……。

ううん、そんなこと関係ない! いつか絶対に空の事振り向かせて

みせるんだから!

だから今はこの気持ちを心に仕舞っておこう。

——  
大好きだよ、空。

フェイトとデートです！

フェイトとデートです！

S i d e 空

アリスアとのデートが終えて、本日はフェイトとのデートの日の前日の夜。

夕飯も食べて、風呂にも入った。

あとは明日に備えて寝るだけ——と言いたいところだが、フェイトから明日のデートの要望があった。

「フェイトは明日どこに行きたいの？」

「えっとね、ここに行ってみたいんだけど……」

そう言つて、フェイトはおずおずとパンフレットを差し出してきた。

「ふむふむ、遊園地ねえ……」

パンフレットを見ると、最近出来た遊園地だった。

テレビのCMでもよく見かけるようになってる程に人気だ。

クラスの子も楽しかったと言っていた。

「どうかな？」

「俺は構わないんだけど、ここに行くなら保護者が必要かな」

「それだったらアルフとリニスに頼んであるから大丈夫だよ」

「そっか。それなら明日はここでデートだね！」

「ホント!? 明日が楽しみだよ！」

「デートの場所も決まったことだし、明日は早いだろうからもう寝よっか」

「そうだね。お休み、空」

フェイトは俺にお休みを言つてベッドに入った。うん、だけどね、一つ言わせて欲しい。

そこは俺のベッドだから！ 当たり前のように俺のベッドに入るっておかしいよ！

「あの、フェイト？ そこ、俺のベッドなんだけど……」

「知ってるよ。それがどうかしたの？」

いや、何馬鹿なこと言ってるのみたいな顔しないでくれませんか？  
「だから、自分の部屋に戻って寝なよって言いたいんだけど……」  
「大丈夫、私はここでも寝れるから。むしろ、ここの方がぐっすりだよ。ほら、明日は早いんだから空も早く寝ようよ」

それは一緒に寝ろって言ってるの？ あと、なんでここの方がグツスリなんだよ……。

「はあ……分かったよ。俺も寝るよ」

色々ツツコミたいところだが、明日に響くといけないので諦めて大人しく寝ることにした。

「うん♪」

俺は大人しくフェイトと寝ることにして、ベッドに入ろうとしたら、突然、扉が思いつきり開けられた。

「だーりん！ 私も一緒に寝ます！」

可愛らしいパジャマを着て、腕には枕を持った美九がやって来た。

「一応聞くけど、拒否権は？」

「もちろんありません！」

ですよねー。聞く前から予想は着いていたよ。

「……分かったよ。どうぞ」

「はい！ それでは、誘宵美九！ 行っきまーす！」

俺が許可を出すと、美九がルパンダイブの如く飛び込んできた。

「ちよっ!？」

「グへへへへ、今夜は寝かせませんよー？」

「いや、寝かしてよ。明日早いんだから」

オヤジみたいになった美九を止めないと明日が大変だ。

「ええー？ つまらないですう。もつとイチャイチャしましょうよお。いつもみみたいにい」

「……誰と誰がいつもイチャイチャしてるって？」

勝手なこと言うな！ むしろ被害しか受けてないんだけど！

「そうだよ！ それに明日はデートなんだからもう寝なきやだよ！」

暴走しそうな美九をフェイトが止めに入った。

「そういうこと。分かった？」

「ぶう〜、しょうがないですねえ。今日のところは我慢してあげますう。で・も♪」

うわー、嫌な予感がするー。

「だーりんを抱き枕にしちやいますー!」

「ムグツ!?!」

美九に抱き着かれて、俺の顔が美九の豊満な胸に埋めるような体勢になってしまった。

や、柔らかい……。

「ズ、ズルい! 私も空を抱き枕にする!」

美九が羨ましかったのか、フェイトも俺に抱き着いてきた。

「それではお休みなさ〜い♪」

え、このままの体勢で寝るの!?

翌日。

……眠い。ヒジョーに眠い!

「おはよう、空、美九」

「おはようございますう、だーりん、フェイトちゃん。今日も二人共可愛いですー!」

「……うん、おはよう」

元気に挨拶してきた二人とは反対に、俺は眠さで元気が全く無かった。

「眠そうですけど、昨夜は眠れなかったんですかあ?」

「……うん」

主にあなた達の所為だけどねツ! 抱き着かれて寝れるかってのツ!

「そ、そんなに私とので、デートが楽しみだったの?」

「……え? ああ、うん、そうだよ……」

ここでフェイトを落ち込ませるわけにもいかないの、働かない頭で何とか答えた。

「……それじゃ、俺は朝ご飯の準備してくるから、二人は皆を起こしてきて」

『はい』

二人は返事をして、部屋を出て行った。

「……さてと、眠いけど頑張りますか」

顔を洗って、キッチンで朝ご飯を作り始めた。

いつも通り皆で朝ご飯を食べて、出かける準備をした。

「今日もあの部屋から見といてあげるわ。今回はそんなにサポートもいらなと思うわ。」

でも、もし何かあったらすぐに連絡しなさい」

「……うん、ありがと。………眠い。………行つてきます」

玄関で見送ってくれた皆に挨拶をして、俺とフェイトとアルフとリニスの四人で家を出た。

ちなみに、フェイトの服装は黒のシャツに白いスカートに黒いニーハイで、髪型はいつもと同じ黒いリボンで結ったツインテールだった。

電車にしばらく乗り、遊園地がある場所に着いた。

「……ここが……遊園地」

「そうだよ。想像してたのよりも大きかった？」

「ああ！ これはすごいね！」

「……人がいっぱいいますね」

遊園地を初めて見た三人は、遊園地の大きさや人の多さに圧倒されていた。

「そういうもんさ。ほら、いつまでもボケっとしてないで中に入るよ」

俺が促すと三人は頷いて付いて来た。

「それで？ フェイトは乗りたいものはあるの？」

「えつとね、最初はあれに乗りたい！」

そう言つて、フェイトが指で示したのは――

『ワー!!』『キヤー!!』

高速で動く乗り物に乗っている人の叫び声が聞こえる。

「いきなりジェットコースター、か。分かった。行こう」

フェイトの提案に従い、最初はジェットコースターに乗ることにした。

これで、少しは目が覚めるかな？

「大分混んでいますね……」

「出来たばかりの遊園地だからね。そりやあいつぱい来るだろうさ」

俺達は長蛇の列に並んで、睡魔と戦いながら時間つぶしに話をして過ごしていた。

「長かった……。ようやく乗れるよ」

「そうだね」

「……早く乗りましょうか」

フェイトとアルフは待っていただけで疲れた様子だった。リニスも心なしか口数が減っていた。

誘導員の指示に従い進んでいくと、一番前の席にフェイトと二人で座れた。

ジェットコースターがスタートすると、ドンドン車体が上昇していった。

「もしかして、怖い？」

「う、うん……少し……」

「でも、そんなのはすぐにワクワクに変わるさ！」

「空……そう――ツ!?!」

フェイトが何かを言いかけたところで、車体がガクツと落ちた。

すると、ものすごいスピードを出した車体によって、負荷が体に掛かった。

「ヤッホーイッ！」

「キヤーッ！」

後ろの方からも、様々な叫び声が聞こえてきた。

『好きです！付き合ってください！』

『ごめんなさい！好きな人がいるので！』

『AIBOOOOOOOOOO！』

『ハルトオオオオオオオ！』

『カカロットオオオオオオオ！』

『粉碎！ 玉砕！ 大喝采！ フハハハハ！』

『俺は人間をやめるぞ！ ジョジョーツ！』

『我が生涯に一片の悔い無し！』

……………カオス過ぎるでしょ。というか、フラれちゃうんだね  
……………可哀想に……………

そんなことを思いながら、曲がったり、一回転したりしてジェット  
コースターが終わった。

「楽しかったよ！」

「ああ！ もう一度乗ってみたいよ！」

「わ、私は遠慮します……………」

「リニス、大丈夫？」

ジェットコースターはリニスには合わなかったみたいだった。

俺はおかげで少しだけ目が冴えたけど。

「ええ、ご心配なく……………。ただ、次はゆったりとしたものでお願いしま  
す……………」

「アハハ……………そうだね。えーつと、そうになると……………あ！ あれが良い  
んじゃない？」

周りを見て、リニスが望んでいるようなものが目に入った。

「あれは何ですか？」

「メリーゴーランドっていうんだよ。あれなら大丈夫だと思うな」

「そうですか。でしたらお願いします」

「フェイトとアルフもいいかい？」

「大丈夫だよ」

「あたしも構わないよ」

二人の了承も得たので、メリーゴーランドの方へと向かった。

「さて、どの馬に乗りますかね」

「あ、あのね、空。あの馬に二人で乗らない？」

「二人で？ まあ、いいけど」

フェイトが二人で乗りたいと言ってきたので、大きめの馬に二人で座った。

「お嬢様、しっかりと掴まっけていてください」

「お、お嬢様!？」

冗談で言ったことを真に受けて、顔を赤らめていた。

やっぱ、フェイトはからかうといい反応してくれるね。

メリーゴーランドが始めると、音楽が流れ出した。

あ、ヤバイ……寝そうだわ……。

ゆったりとした音楽によって、再び睡魔がやって来た。

ウトウトし始めた俺はフェイトに後ろから抱き着く体勢になった。

「そ、空!？」

「ごめん……眠い……」

睡魔には勝てず、メリーゴーランドが終わるまでフェイトに抱き着いていた。

琴里からもインカム越しに声が聞こえたが、眠過ぎて何言ってるかさっぱりだった。

あとから聞いたけど、フェイトはその間ずっと顔が真っ赤だったらしい。

メリーゴーランドが終わってから俺達は色んなアトラクションを楽しんだあと、少し遅めの昼食をとっていた。

「三人共どう？ 楽しい?？」

「うん!」

「連れてきてもらって良かったよ!」

「本当なら皆で行きたかったですがね……」

「それはまた今度にしよう？ 今は俺達で思いっきり楽しもうよ!」

本音を言えば、俺も皆で来たかった。でも、今回はフェイトを楽しませるのが目的だから文句なんて言っていられない。というか、言えるはずがない。

「それもそうですね。そもそも今日はフェイトと空のデートなんですから」

「……あたしらがお邪魔な気もするけどね」

「そ、そんなことないよー!」

冗談めかしてアルフが言ってきたのを、フェイトが周囲が注目を集めるほどに大声で否定した。

「でも、空との折角のデートなんだろう?」

「それはそうだけど……」

「はいはい、そこまで。楽しい気分が台無しになっちゃうよ」

「そうですよ。さあ、このあとも回るんですから、少しでも体を休めておきましょう」

二人は大人しく返事をして、食べかけの昼食を再び食べ始めた。

昼食を食べて、次に乗るアトラクションへとは向かっていたのだが、トイレに行きたくなった。

「ちよつとトイレに行つてくるよ。すぐに戻ると思うから、先に行つてくれる?」

「うん、わかった。先に行つて待つてる」

断りを入れて、トイレに入った。

「ふう、スッキリした。さてと、フェイト達に追い付かない……誰か泣いてる?」

どこからか泣きじやくる声が聞こえてきた。

辺りを見回すと、人目につかないところにしやがみ込んでいる銀色の長髪の女の子がいた。

あの子かな……?」

俺は心配になって声を掛けることにした。

「ねえ、君、どうしたの?」

「はぐ、グスツ……れちゃった……お兄……グスツ……ちゃん達と……」

女の子がしやがみ込んだまま教えてくれた。

家族とはぐれた。つまり、どうやらこの子は迷子らしい。

「そっから、迷子から。どうしたものか……」

この人混みの中で探すのは大変だな……。

「ううツ……お兄ちゃん……」

「わあああああ!? ちょ、ちよつと! 泣かないで! 君は一人じゃないからさ! それに俺も一緒に君の家族を探すよ! だから泣き止んで——いや、泣き止んで下さい!」

女の子が余計に泣きそうになったので、慌ててあやした。

誰かが泣いてるのを見るのって苦手だなあ……。

「……探してくれるの?」

女の子が顔を上げて尋ねてきた。そのおかげでようやく女の子の顔が見れた。

日本人離れたした容姿に、宝石のルビーを思わせる紅い瞳が俺の眼に映った。

太陽の光によって輝く銀髪や雪のように白い肌も相まって、彼女を幻想的に思わせた。

つまり、俺が言いたいことは、

メツチャ可愛いやないかー!!

この一言に限る。思わず関西弁になるほどに。

十香達やなのは達にも引けを取らない美貌だと思うな。将来モデルにでもなりそう。もしくはハリウッド女優かも。……今の内にサイン貰うか?

「か、可愛い!? 私が!」

「あれ? 口に出してた?」

女の子が顔を赤くして驚いていた。白い肌だから余計に分かり易い。

「……う、うん、相当大きな声で」

マジか!? 自分でも気付かない内に叫んでた!?

「えつと……ごめん。……いきなり変なこと言っ」

ウワー! 恥ずかしー! 知らない女の子にいきなり可愛いなんて叫んじやつたー!

「え? ううん! 大丈夫だよ! 私は気にしてないよ!」

今度は俺が恥ずかしさでしゃがみ込んだ。それを女の子が慰めてきた。

あれ? いつの間にか立場変わってない?

しばらく悶えて、ようやく立ち直った俺は本題に入った。  
顔が熱いけど気にしない気にしない。

「……ゴホン。俺は龍神空。空って呼んでね。君は？」

「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。長いからイリヤでいいよ」

イリヤ、か。うん、憶えた！

「分かったよ、イリヤ。それで早速だけど、君の家族を探しに行くよ」  
「うん。よろしくね、空君」

それから俺達はイリヤの家族を探すために歩き出した。

「あ、一応手繋いでおこうよ」

「えええッ!? 私達まだ会って間もないのに手を繋ぐなんて早すぎるよ!」

……? 手を繋ぐことに早いも遅いもあるの?

「でも、俺達までバラバラになったら面倒でしょ?」

「あ、そっか——いやいや、でも!」

「はあ……悪いけど勝手に手繋がせてもらうよ」

イリヤの独特の感性に疑問を抱きつつも、多少強引にイリヤの手を掴んだ。

! まだ目覚めてないけど魔力があるのか……それも結構な量。  
何かに巻き込まれなきやいいけど……。

「あわわ!」

イリヤの手を握ると、イリヤは顔を真っ赤にしていたが気にせず進んだ。

女の子にこんなことホントは良くないんだろうけど、ことがことだから仕方がないよね?

なんて、内心で言い訳をしつつ、イリヤの寂しさを紛らわすためにイリヤと家族や学校のことなどの他愛無い会話をしていた。ちなみに俺達は同い年というのが会話で分かった。あと、イリヤの友達は中々濃いキャラらしい。

「空君はどこに向かっているの?」

歩いている途中でイリヤが問いかけてきた。

「迷子センター。普通行くでしょ」

イリヤの家族も行っているはずだろうと考えた。

「地図見ないで道わかるの?」

「全部憶えてるから問題ないよ」

昨日パンフレット見て憶えた。

琴里曰く、エスコートするためにデートの場所くらい覚えて当然と  
のこと。

「全部!?!」

「驚き過ぎだよ。別に大したことじゃないって」

「そんなことないよ! すごいよ! それに比べて私なんて……」

自分には何も無いと言ってイリヤは落ち込んだ。

「え!?! だ、大丈夫だって! イリヤにも何かすごいことあるって!  
それにほら、イリヤってすごく可愛いじゃん! それだけでも充分  
だと思うよ!」

「うう~~~~っ!」

え? 何で睨むんですか!? 可愛いのが褒め言葉だよね!? 俺  
間違ってるじゃないよね!? それから頬を膨らませてメツチャ睨んでるけ  
ど、逆に可愛いだけだから!

「あの……イリヤさん?」

「ふんッ!」

俺が話し掛けてもそっぽを向くだけだった。手を離さないだけマ  
シだが。

どうしたもんか、と悩んでいたらインカムから琴里の声が聞こえ  
た。

『空! 聞こえる!?!』

「(どうしたの、琴里。何かあった?)」

『どうしたじゃないわよ! 今何してんの!?! フェイト達はどうした  
の!?!』

フェイト達の名前で固まった。

ヤバい! 完全に忘れてたー!!

「(どどど、どうしよう!?! 電話しておけばよかった!)」

『はあ……幸い、フェイト達は動いてないわ。まだトイレが長引いてるって思ってるぐらいだから今から行けばフェイトの状態はそこまで悪くないでしょ』

「(でも、今は迷子の女の子が一緒だから先に迷子センターに連れてかないとー)」

『こんな時に迷子? ……しかも、よりによって女? ふざけているのかしら?』

「ビイツ!? (ふ、ふざけてないよ!)」

威圧感の籠った琴里の声にかなりビビった。

「空君、どうかしたの? すごく汗かいてるけど……」

イリヤが心配そうに尋ねてきたが、大丈夫だと手を振ってごまかした。

『まあ、いいわ。それよりもフェイトに連絡でもしておきなさい』

「(分かった) ……もしもし、フェイト?」

携帯を出して、フェイトに電話した。

『空? どうかしたの?』

「今さ、迷子の子と一緒にだから、行くのに時間かかると思う。もし暇なら三人で色々と回ってていいよ」

『え、でも……』

「あー、その、ごめんね。デート中なのにこんなことしてて。今度埋め合わせするから許してくれないかな?」

『……分かった。どうせ空のことだから迷子の子が放っておけなかったんでしょ?』

呆れたようにフェイトが言ってきた。

「アハハ……まあ、そんなところ。じゃあ、切るね」

『うん。ちゃんと助けてあげてね』

そこでフェイトとの電話を切った。

「……今の電話の相手って彼女?」

彼女? あ、恋人ってことかな?

「ううん、違うよ。なんでそんなこと聞くの?」

「だ、だって、デートって言ってたから……。私の所為で空君達に迷惑

かけてるんでしょ?」

イリヤが申し訳なきさそうにしていた。確かにイリヤといることで、フェイトとのデートの時間は少なくなる。

「あー、まあ、確かに少しはそうかもね」

「…………ごめんなさい。私が迷子になんなきやよかったのに…………」

罪悪感からイリヤが再び泣きそうになってしまった。

「ちよ、泣かないで! ごめん! 今のは俺の言葉が足りなかった!」  
「でも…………」

「いいの! これは俺がしたいことだから! それに、泣いてる女の子がいるのにほつとくことなんて出来ないよ!」

「空君…………」

「さあ、行くよ。イリヤの家族だって待ってるだろうし」

「うん!」

「あ、君の家族の携帯の番号って分かる?」

「分からない。…………ごめんなさい」

「謝んなくていいの! 一応聞いただけだからさ」

また落ち込みだしたイリヤを宥めて、迷子センターへと向かった。

迷子センターに着くと、イリヤがスタッフに家族の名前や特徴を伝えて放送を入れてもらった。後は待つだけだ。

「ふう…………これでしばらくすればイリヤの家族も来るでしょ」

「うん、そうだね。空君、ここまで連れてきてくれてありがとう」

「どういたしまして。それじゃ、俺は——いや、もう少しだけいるよ」

「…………え?」

どうして残る必要があるの?という顔をしてこちらを見てきた。

本当ならデートの最中なのにイリヤにかまけてる場合じゃないのは自分でもわかってる。

「なんとなーく、だよ。さつき泣いてた女の子が一人でいたら、また泣くんじやないかなーって思ってたなりなんてしてないから」

「それって私の事だよね!？」

「さあ、どうだろうね？」

「バカにしてー! 一人でも私は平気だもん! 空君はもう行っていいよー!」

俺にからかわれて、イリヤは無駄に強がった。

「うん、分かった。俺は行くよ。じゃあね、イリヤ」

「あ……ま、待って!」

俺が立ち去ろうとすると、イリヤが弱々しく腕を掴んできた。

会って間もないけどなんとなくイリヤという少女のことが分かった気がする。

「あれれ〜? 一人でも平気じゃなかったの〜?」

ニヤニヤしてイリヤに問いかけた。

「そ、空君がどうしてもって言うならここにいさせてあげる!」

ここは俺が折れた方がよいよね?

「あーどうしてもここにいたいなー心優しいイリヤならここにいさせてくれないかなー」

「し、仕方がないから特別に空君をここにいさせてあげる! 感謝してよね!」

全部棒読みで言ったのに、イリヤは嬉しそうに笑っていた。

「うわーありがとーすごく嬉しいなー」

それからしばらくイリヤと会話をしていると、橙色に近い茶髪の高校生ぐらいの男の子が汗を大量に掻きながら、迷子センターに入ってきた。

イリヤがいないことに気が付いて相当走り回ったようだ。

「あー! お兄ちゃん!」

どうやら、あの人イリヤとの会話で出てきたお兄ちゃん——衛宮士郎らしい。何でも義理の兄妹だとか何とか。

「ハア……ハア……! イ、イリヤ! ……見つかってよかった……!」

士郎さんはイリヤの姿を見て安心したように息を吐いた。

「迎えも来たことだし、俺は今度こそ行くよ」

「空君! 私を助けてくれてホントにありがとうね!」

「うん、やっぱり女の子は笑ってた方が良いよ。泣いてる時のイリヤよりもずっと可愛い」

「もうっ！ からかわないでよー！」

顔を赤くしたイリヤがからかわれたのかと思って怒ってきた。でもさつきまでのように頬を膨らませるのではなく、少し呆れ混じりに笑っていた。

けど褒めてるのに怒られるってやっぱりおかしくない？

「あ、待ってくれ！ 君がイリヤをここまで連れてきてくれたのか？」

「一応はそうですよ」

「そうか。俺からもお礼を言わせてくれ。本当にありがとう」

「そんな大したことじゃないですよ」

年上の人に頭を下げられるってむず痒いなあ。

「もし良かったらお礼をさせてくれないか？」

この人は随分律儀な人だな。でもこういう人って大概――

「そんなのいらないますよ。ただ泣いてる子がほっとけなかつただけですから」

「だけど大切な家族を救ってもらったんだ、何かしないと俺の気が済まない」

頑固なんだよなあ……。まるでなのはみたい。

「私もお礼がしたい！」

お前もか！

「えっと、気持ちは大変嬉しいんですけど、俺にも一緒に来てる人がいるんでそろそろ行かないと怒られちゃいますから。それじゃ、失礼します。イリヤ、もう迷子にはなんないでね」

「あ、おいー！」

「……もしどうしてもお礼がしたいというなら、海鳴市の翠屋に来て下さい」

それだけ言い残してフェイト達の下へと急いで向かった。

フェイト達と合流すると、迷子の問題は解決したことを伝えた。

「三人共ホントにごめん！」

「いいよ。空がそういう性格だつて知ってるから」

「逆に見捨ててたなら一発殴ってるどころだったけどね」

アルフらしいや。イリヤを助けて正解だったね。

「残り時間もあまりありませんからあと一つが良いところですね。何にしますか？」

「それだったら、やっぱりあれでしょ！」

「わー！ 高い！」

「景色もいいね」

俺とフェイトが乗っているのは観覧車だ。

皆で乗ろうとしたら、何故かアルフとリニスとは別のゴンドラに乗ってしまった。

「ねえ、空。私ね、言いたいことがあるんだ」

俺と向き合う形で、フェイトが真面目な顔をしていた。

「言いたいこと？」

ハッ、やっぱりさっきのこと怒ってる!?

「昔にさ、空が「俺と出会えて良かった？」って聞いたことあったでしょ？」

あれ？ 怒るんじゃないの？ というか昔話？ そう言えば、俺も

色々言ったなあ……。

あの時は俺も若かった。今も若いけど。

「そうだね。それがどうかしたの？」

「今ならはつきり言えるよ。十香達やなのは達に会えて、空に会えて、私は良かった。すごく幸せに感じてるよ」

「ッ！ ……そっか……幸せか……。うん、それが聞けて良かった」

あの時の言葉はちゃんとフェイトに届いていた。

「今度は私が空に聞くよ。空は私と出会えて良かった？」

「そんなの出会えて良かったに決まってるよ」

俺にとつては考えるまでもない質問だ。

「なにせファーストキスの相手だもんね？」

意地悪そうな顔をしてフェイトが恥ずかしいことを俺に思い出させた。いつもからかわれる側のフェイトにからかわれるのはなんか癪だけど、そんな表情が出来る様になったことを素直に喜びたい。……話の内容がアレだからやっぱり喜べない。

「それは言わないで！ 今でも恥ずかしいんだから！」

ウワー！ 今のであの時のシーンが思い浮かぶんだけど！

「アハハ、空って意外と初心だよね」

「フェイトだって同じようなもんだろ!？」

「私にとつてはいい思い出だから、恥ずかしくなんてないよ」

なんだよそれ!?! 普通恥ずかしいでしょ!?!

「そんなわけで空、これからもそばにいてね」

「え? ああ、うん。そばにいるよ。そしてフェイトを、皆を護るよ」

……でどんなわけでなのはツツコンではいけない。

「……やっぱり空は空だね」

どういう意味なんだ？

俺がわからないという表情をしていたので、フェイトがクスクス笑ってやっぱり何でもないと行ってその話は終わった。それと同時に観覧車も下に戻った。

S i d e o u t

S i d e f e i t o

今日は空とデートをした。

……まあ、アルフとリニスもいたからデートとは言い難いんだけど。もう少し大きくなったら、今度は二人で来たいな。

今日のデートではたくさん笑った。そう考えると、自分は変わったなと思う。

私は空と出会ってから表情が豊かになった。家族の温もりを知った。

龍神家や学校での毎日が騒がしくて、楽しくて、それが当たり前のようになっていた。

自分がクローンであることを忘れるくらいに。

これが幸せなんだろうな……。

あの時、空が私に教えてくれたこと。それは今でも一語一句違わずに憶えてる。だから、いつか私と同じ境遇の人がいたらこの言葉を伝えてあげたい。幸せになってもらいたい。

その時には、空にこの想いを伝えてみるのもいいかもしれない。

空、私を幸せにしてくれたあなたのが大好きです。

## A's編

ヴォルケンリッター参上です！

ヴォルケンリッター参上です！

S i d e は や て

私——八神はやては、明日双子の姉の八神あかりと共に誕生日を迎える。

そして、今はお姉ちゃんと一緒にベッドで横になっている。

明日が誕生日ということもあり、6月4日の0時を一緒に迎える。それが二年前からの私らの中での決まりみたいなものになっていた。

「明日はついに誕生日パーティーかあ。すんごい楽しみやー！」

空君の家で行われる誕生日パーティーは私とお姉ちゃん、空君、ヴァーリ君を祝うものだ。

「そうだね。私もだよ。今年はどうなことがあるかな？（本来なら、今日まで孤独でいたはやてだったはずだけど、皆のおかげで寂しい思いをさせなくてよかった……）」

「考えただけでもワクワクしてくるで」

去年は桃子さんが用意した特大ケーキを食べた。その前の年はアザゼルさんが作った花火を皆で観た。そのどれもが嬉しくて、楽しかったことを私は今でも憶えている。

「もしかしたら、魔法で驚かせてくれたりして」

「アハハ、ありえそうー！」

私の言葉にお姉ちゃんは笑って同意してくれた。

「もうちよいで明日や……」

時計を見ると、あと10分ぐらいで日付が変わるところまで来ていた。

「……そうだね。（今年はやてにとって、嬉しいことも辛いこともあるかもしれないけど……）」

お姉ちゃんが優しく微笑んだ。何故だかその顔は悲しさが感じられた。

私の考えすぎかな……？

「あ、グレアムおじさんから手紙来るかな？」

両親のいない私ら二人がこれまで生活出来たのは、父の友人を名乗る——グレアムおじさんがいたからだ。イギリスに住んでいるため手紙でのやり取りしかしたことはないが、手紙の内容からとても優しい人なんだろうと思う。

「毎年来てるんだから今年も来るよきつと。はやて、そろそろ時間だよ」

「ホンマや。それならカウントダウンしようや」

「うん、いいよ」

時計の長針が11時のところから始めた。

『5……………4……………3……………2……………1……………0——  
——!?!』

カウントダウンを言い終え、誕生日を迎えると同時に、本棚にあった、鎖を巻かれた一冊の本が突如輝き出した。

「(ついに来た!)」

「な、なんや?! 何が起こってるんや?!」

私が驚いている内に本の鎖が外れ、ページが勝手にパラパラと捲れていった。

「お姉ちゃん、これなんなん?! 大丈夫なん?!」

「だ、大丈夫だよ! 何があっても私は一緒だよ!」

お姉ちゃん……。そうやな! お姉ちゃんと二人なら大丈夫や!

そう思ったところで、本から眩しい光が溢れた。

「こ、これは! バルス!」

光の眩しさに顔を手で覆った。

「随分余裕だね……」

お姉ちゃんの顔は良く見えないが、隣でジト目をしてるのだろうと思っただ。

光が収まると、四人の男女が片膝をついていた。

「闇の書の起動を確認しました」

「我等、闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にございます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター。何なりとご命令を」

や、闇の書？ 守護騎士？ 主？ ヴォルケンリッター？ な、なんやそれ？

眼を開けた先にはいつの間にか桃色のポニーテールのお姉さんと金髪のお姉さん、筋肉もりもりの犬耳生やしたお兄さん、赤い髪を三つ編みにしている四人の中で一番容姿が幼い少女がいた。

「と、とりあえず眠るわ。お休み、お姉ちゃん」

これは夢やな。私はいつの間にか寝落ちしてたみたいや。もう一度寝れば、この夢は覚めるな。

「ちよ!? そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!？」

私が寝ようとしたら、お姉ちゃんがそれを遮った。

「せやかて、明日はパーティーなんやで？ 寝坊したらあかんよ」

「そっか……じゃない! この人達のことどうすんの!？」

「え〜? 明日で良いなやないか? あ、皆さんは空いてる部屋を勝手に使つて下さい」

「え、あ、はい。それでは失礼します」

ピンク色の髪をしたポニーテールの女性が返事をすると、他の三人も部屋を出て行った。

ふう〜、これで一安心や。さ、明日に備えて寝なきや。

「それじゃ、お休み」

「お、お休み……。あれ、ヴォルケンリッターの扱いつてこんなんでいいの!？」

S i d e o u t

S i d e 空

6月4日、誕生日パーティー当日の朝。俺とヴァーリは八神家にはやて達を迎えに行った。ついでに朝ご飯と昼ご飯もそこでいただいたて、それから、龍神家でパーティーになる。

「何で毎年俺らが迎えに行ってるの?」

……誕生日の人が行くっておかしくない？

「さあな。皆が準備をするためとかじゃないのか？」

「あー、そういうことね」

俺らがいたら準備なんて出来るわけないか。そんなもって、時間稼ぎのために朝ご飯も食べるわけか。

八神家に到着したところで、魔力を感じた。

「中にあかりとはやて以外の魔力がある……これは一体……」

「うーん、二人の魔力の感じからして無事だと思うから大丈夫でしょ」  
平気だと思いインターホンを押すと、あかりが玄関の扉を開けて出て迎えてくれた。

「いらっしやい、二人共。ご飯の用意は出来てるから、早く上がってよ」

「毎年悪いな。朝から訪ねるなんてことして」

「き、気にしないで！ 私もはやても嬉しいからさー！」

「そうか。それではお邪魔させてもらうか」

「お邪魔しまーす」

家の中に入ると、黒い肌着を着た見慣れない四人の男女とはやてがいた。

四人には警戒の顔をされたが、すぐに解かれた。能力を隠すネットワークのおかげで、俺達が普通の人間だと思ったのだろう。

「あ、二人共いらっしやい！ じゃあ、ご飯にしようや。皆もええな？」

「はい、主。ところで、そちらのお二人は先程言っていたご友人ですか？」

あ、主？ どういうこと？

「ちよ、シグナム！ 主は止めてや！」

「しかしですね……」

はやてが注意をすると、シグナムと呼ばれたピンク色の髪の女性は困ったようにしていた。

「ふむふむ。つまり、はやてとシグナムさんは人には言えないような怪しい主従関係だということだね」

はやてが変な道に行っても俺は友達だよ。

「ちやうわ！ 昨日、本からいきなり出て来たんや！」

「本から？ 不思議なこともあるんだな」

「そうだね。まあ、そんなことはさておき、ご飯食べたいな。お腹空いちやった」

朝飯抜きでここまで来たので、お腹が限界だった。

「そうやな。話は後にしようや」

皆で机を囲んで座った。

『いただきます』

『いただきます』

俺達四人は食事を始める挨拶をしたのだが、四人の男女は分からなかったらしい。

「いただきますってなんだ？」

赤い髪を三つ編みのツインテールでおさげにした女の子が聞いてきた。

「これは食事をするときの挨拶や。昔からの日本の文化やで」

昔というよりも昭和時代辺りから慣習化されたらしいけどね。

「へえ、それじゃ、私達もいただきますをしましょうよ」

「そうだな。主がするのであれば我らもしなければ」

金髪ののほほんとした女性が提案すると、銀髪のムキムキマッチョのお兄さんが賛成した。

今更だけど、男性の獣耳って誰得？

なんとなくツツコンではいけない気がして聞くに聞けなかった。

『いただきます』

四人も挨拶をするとご飯を食べ始めた。

「これは……ギガウまだぜー」

赤髪の子が一口食べると美味いと言って、勢いよく口に入れて行った。他の三人も美味しいと呟いていた。

「これははやてが作ったの？」

「そうやで。どうかな？」

「また腕上げたね。すごく美味しいよ。毎日食べたいぐらいに」

いつか追い越されそうだな……。

「ま、毎日!? そ、それってプロポーズ!？」

「え、なんで? そんなわけじゃない」

俺の感想にはやてがプロポーズされたと勘違いしたみたいだ。

「はやて、空君がそんなこと言う訳無いでしょ?」

「そうやな……ありえんわ……」

はやてを諭したあかりにサラツと酷いこと言われた気がする。

「……これ美味しいな。これもはやてが作ったのか?」

ヴァーリが玉子焼きを食べて呟いた。

「違うで。それはお姉ちゃんや。メツチャ美味しいやろ?」

「ああ、そうだな。何故だか心が温かくなるな」

「そ、そう言ってもらえると作った甲斐があるよ」

ヴァーリに褒められたあかりは恥ずかしさを紛らわすために、髪をいじっていた。

「毎日食べてみたい?」

「ああ、そうだな。もしそれが叶うならばお願いしたいくらいだ」

「え、ええ!?! えええええええええええええええええ!?!」

「よかったな、お姉ちゃん」

あかりがひどく狼狽していたのを見てはやてがニヤニヤしていた。

その後、ご飯を食べてシグナムさん達の話をする事になった。

「じゃあ、自己紹介から。俺は龍神空です。空って呼んでください」

「俺はヴァーリだ。よろしく」

「私はシグナムだ。敬語は無くてもいいぞ」

「あたしはヴァータだ」

「私はシャマルよ。よろしくね」

「ザフィーラだ」

「それで、あなた達は何者ですか? 見た感じ悪い人には見えませんけど」

「我らは主はやての守護騎士だ」

……いや、そんな真面目な顔で守護騎士だつて言われてどう反応しろと? 一般人だったら、間違いなくドン引きしてるよ。

「アツハイ……」

「どこから来たんだ？」

「それはこの本からやで。今日の0時ピツタシに現れたんや」  
「そう言っってはやてが見せてくれたのは一冊の本だった。」

「……つまり、魔法関係か」

魔法を知ってることを話すと、四人は驚いた顔をした。

「!? ……魔法を知ってるのか？ 見たところ魔力は感じられないが……」

「今は隠してるんです。管理局とか変な組織に目をつけられると厄介なので」

「……そんなにヤバい力でも持ってんのか？」

「ある意味そうだな」

下手すると街一つは破壊できるんじゃないかな……。

「ほう……それは興味深いな。ぜひ、手合わせをしてもらいたい」

シグナムさんの眼が獲物を見つけたと言わんばかりの肉食獣のようだった。

「この人戦闘狂!？」

「ちよつと、シグナム。いきなりすぎるわよ」

「いいではないか。それにこいつがどんな奴なのかがわかる。空、どうだ？」

「俺は構いませんよ」

俺もこの人がどのくらいの強さか知りたいしね。

「だったら俺も戦いたいな。残りの三人の誰か相手をしてくれないか？」

「ならば、私が相手をしよう」

俺達は立ち上がり、視線をぶつけ合った。

「皆、まだ話は終わってないで!？」

外に出ようとしたところで、はやてからストップがかかった。

「お、いっけね。ところで、シグナムさん達の目的って何？」

「それは主の持っている魔導書——闇の書を完成させることだ」

「この本を？ どうやってやるんや?？」

「魔力の蒐集をするのよ」

「完成するとどうなるの？　〈あかりは何か知ってる？〉」

闇の書とかいうヘンテコな名前からして危なさそうだけどね。

「へうん。はやての足が動かないのもこの本が原因だよ。集めれば色々あるけど治るよ」

!?!　じゃあ、完成させた方が良いのか……？

「666ページを埋めることで、主が大いなる力を得る」

666!?!　不吉でしかないじゃんか！　トライヘキサ666と同じだし！

「……そういうのって大抵、危ないものだよな」

「そ、そんなことはないはず……？」

ヴァーリの呟きに自信なさげにシグナムさんが返した。

何で疑問形なのさ……。

「しつかりしろよなーシグナムウー」

「煩い！　よくよく考えてみれば不吉な数だと思ったんだ！　仕方ないではないか！

それにヴァーリだって今まで疑問に思ってもいなかっただろう!?!」  
ヴァーリに責められたシグナムさんはヴァーリを睨みつけていた。

「だが、我々の目的だ。成し遂げねばならん」

その言葉には強い意志が感じられた。

「そうですか。なら、手伝いますよ」

「……それはどうして？　あなたにはメリットなんてないわよ?」

メリットはないけど、デメリットがたくさんあるんですよ。

「はやてが友達だからです」

「それだけで十分だな」

むしろそれ以外の理由があるんだったら聞きたいね。

俺は内心でドヤ顔を決めた。

「空君、ヴァーリ君……。ホンマにありがとうな」

「……そうか。それは助かる。お前達の言葉は嘘に思えない。(空と  
いう少年は不思議だな……。会って間もないというのに信じられる  
気がする。だが、どうしてここまで信じられてしまうのだろうか?」

彼のカリスマ性?　いや、それ以上にもっと何かがある気がする)」

「でも、お前らの強さが分かんねえな。蒐集つて結構危険だぜ？」  
「それをこれから試すんでしょ？」  
「ああ、手合わせといこうか」

俺達は八神家の庭に結界を張った。最初はヴァーリとザフィーラからだ。

「そう言えば、ヴァーリ君ってどんな魔法使えるん？」

「ん？ ヴァーリは魔法は使わないよ。どっちかっていうと、魔力そのものって感じかな。まあ、それだけじゃないんだけどね」

魔法というよりも魔術も使えるだろうけど、セイクリッド・ギア神器があるからね。

「それはどういうことだ？ それからバリアジャケットは着ないのか？」

「それは見てればわかりますよ」

他の皆も分かなさそうにしていたので、試合でわかると教えた。

「それでは、始め！」

最初に仕掛けたのはザフィーラさんだった。

「はあああああああああああああああああッ！」

ヴァーリに接近すると、自身の剛腕を全力で振るった。

しかし、ヴァーリはその拳をバックステップで避けると魔力弾を放った。

「その程度効かぬ！」

ヴァーリの魔力弾を片手を突き出してバリアーを張ると、簡単に防いだ。

「どうした？ その程度か？」

「これぐらいでは効かないか……」

……ヴァーリの奴、遊んでる？ 神器も使わないなんて……。

「……舐められたものだな」

本気出されてないことぐらいわかっちゃうよね。

自分が試されていると思ったザフィーラは拳を構えて、怒涛のラッ

シユを放ってきた。

顔、腹、脚や腕。いたるところを狙って攻撃していた。しかし、ヴァーリはそれをすべて紙一重で躲していた。

「あいつ、スゲーな！ ザファイラの攻撃が全く当たんねえぜ！」

「紙一重なものも最小限の動きで躲しているからか」

「でも、ザファイラだって負けてないわよ」

シャマルさんがそう言うと、ザファイラが一旦、距離を取って魔法を発動させた。

「縛れ！ 鋼の軛！」

ヴァーリの足元から、無数の白い杭のようなものが生えてきた。

「ッ！ 白龍皇の光翼！」

素の状態じゃ躲せないと判断して、神器を使って飛ぶことで躲した。

『!?!』

「おー、皆さん驚いていらっしやる。

「アレなんや!?! なんで飛んでるん!?!」

「人は飛ぼうと思えば飛べるんだよ」

『出来るか!』

戦ってるザファイラにまでツッコまれてしまった。

「ホントのことを言うと、あれは聖書の神が創った神器っていうものだよ」

「そんなものがこの世界にはあるのか……」

「で、更に言うならヴァーリのように強い神器は、神すら屠れる力があることから神滅具ロンギヌスと呼ばれてるんです」

「神を滅ぼす力!? そんなの危ねえに決まってるんだろ！」

「あ、そっか。だから力を隠していたのね？」

「そういうことです。俺も同じ力を持つてるんで」

「そしてこれが俺の神器の力だ！」

《Divide!!》

ザファイラに触れてから能力を発動させると、ザファイラの体がグラツと揺れた。

「なッ!? 力が抜けただど!?!」

「今のがヴァーリ君の能力?」

「そうだよ。あれは触れた者の力を十秒ごとに半減にできる力があるんだ。しかもそれを吸収して自分の力に加えられる」

「強すぎやろ……」

「うん、しかもヴァーリ自身の強さもあるから余計に厄介な組み合わせだよ」

「これぞまさしくチートだね！」

「もう手合わせはいいか?」

「ああ、私の負けだ。このままやっても私の不利に変わりはないからな」

「あれ? 解説してたら戦闘が終わった?」

「それでは、私達もやるとしようか」

「はい!」

俺達は立ち上がり、ヴァーリ達と入れ替わった。

「それでは、始め!」

「最初は譲ってやる。来い!」

「じゃあ、遠慮なく!」

俺はいつも通りに魔剣と聖剣を創って斬り掛かった。

「甘い!」

鞘から抜いた剣で簡単に弾かれた。恐らく、あれがシグナムさんのデバイスだろう。

あっちの方がリーチがあるから俺の方が不利かな。剣の扱いでも向こうの方が上っぽいしね。

「今度はこちらの番だ!」

シグナムさんが魔力を纏わせ、襲い掛かってきた。

速ッ! 見聞色でギリギリ!

「ふんッ!」

「グッ」

俺の頭に向かって振り下ろされた剣を、二つの剣をクロスさせて防いだ。予想以上に重くて地面に膝をつきそうになった。

……強いなー。これは苦戦しそうだ。でも、簡単には負けたくないね！

「てツやああああああああああああああああ！」

俺も魔力を使い、無理やり剣を押し返した。

「なかなかやるな。お前との鬪い、面白くなってきたぞ」

「すぐくやりますね。あなたとの鬪い、怖くなってきました」

どちらからともなく小さく笑うと、それから互いの剣を幾度もぶつけ合った。

あ、ヤベ！

シグナムさんの攻撃で俺に決定的なスキが生まれた。

「そこだー！」

切り上げの攻撃によって二本の剣は俺の手から離れた。勝ちを確信したシグナムさんがトドメに斬り掛かってきたが、俺がしたこと表情をいつきに変えた。

「これで——な!?!」

『なツ!?!』

シグナムさん以外からも驚きの声が聞こえてきた。そりやそうだ。決まったと思った攻撃を防がれたのだから。吹き飛ばされたはずの二本の剣によって。俺は怯んでいる内に攻撃を仕掛けた。シグナムさんは慌てて防御に入ろうとしたが、もう遅い。俺の攻撃はシグナムさんを一閃した。

「俺の勝ちってことでもいいですか?」

「……そうだな。私の負けだ」

片膝をついたシグナムさんに聞くと負けを認めた。

「最後のはどうやって防いだのだ? 私の勝ちを確信していたのだが……」

「それは——ま、前隠して下さい!」

美九といい勝負の巨乳をポロリしているシグナムさんから慌てて俺は目をそらした。

薄着だったせいで簡単に切れてしまったのだ。

「前? ああ、さっきの攻撃で切れてしまったか」

自分の胸がさらされていることを恥ずかしがることもなく呑気にしていた。

羞恥心とかないわけ!? いや、俺が悪いんですけど!

「空くうくん? これはどういうことなんかなく?」

ヒイツ!? 何この殺気! メツチャ怖ッ!

振り返るとどす黒いオーラを纏ったはやてがいた。

「いや、あの、その決して悪気があつたわけじゃなくてですね。事故と言いますか偶然と——」

「ちよつとO☆H A☆N A☆S Iしようか」

.....どうやら神は死んだみたいだ。

『死んでますけどあなたのそばにいますよ!』

フツ、所詮神など今のはやての前に意味はないね。

そのあと、一人の少年の悲鳴が街に響き渡った。

誕生日パーティーが始まります！

誕生日パーティーが始まります！

Side空

シグナムさん達との手合わせが終わり、はやてからO☆H A☆N A☆S Iを受けた俺が再起動すると、四人の服を買いにデパートに行くことになった。皆の服は、俺が〈贗造魔女〉ハニエルで普通の服に変えた。

流石にいつまでも薄着じゃいられないもんね。特にシグナムさんの胸は目の毒でしかないし。

「ところで、いい加減に種明かしをしてくれないか？」

皆で歩いている時にシグナムさんが聞いてきた。

「あれは魔剣創造と聖剣創造ソード・パース ブレード・ブラックスミスっていう神セイクリッド・ギア器の力です。剣ならいくつでも創れるんですよ」

実際にシグナムさんの前で同じ魔剣を創って見せてみた。

「だから、あの時にもう一度創って防いだ、という訳です。多分シグナムさんがこの能力を知っていたら負けてたと思いますよ。戦闘経験も剣の腕もシグナムさんの方が確実に上ですから」

「……そうか。教えてくれて助かった。また手合わせしてくれるか？」

「そりやもちろん！ こちらからもお願いしたいくらいですよ！」

喜んでいると、ヴィータが不満そうに口を挟んできた。

「シグナムばっかじゃなくてあたしとも戦ってくれよ」

「もちろんオツケーだよ」

ヴィータはどんな魔法を使うのか、俺も知りたかった。

「俺も空と戦いたくなってきたな」

「お前とはほぼ毎日やってるだろ！」

しかもお前との戦いはシャレになんないんだからな！

お互い本気でやるから周りが滅茶苦茶になるし、疲れるんだよ！

「だが、他の力もあるだろ？ あまり見れない力もあるからな」

「む？ 他にも何かあるのか!？」

おっふ。食いついてきやがりましたよ、戦闘狂が……。

表情はあまり変わらないが、眼が子供のようにキラキラしたシグナムさんに軽く引いた。

「ええ、一応……」

「しかもさつきよりもかなり強いぞ」

余計なこと言うな！

「ほう……益々戦いたくなってきたな」

「そ、それは今度で……」

うわー、この人の印象が今のやり取りで一気変わった気がする。

「そうや！ 今は四人の服が優先や！」

「ごめん、はやて」

「すみません、主」

俺達ははやてに怒られて、急いで目的地へと向かった。

そして、買い物を済ませた俺達はデパート内の休憩所で一休みしていた。

「えーっと、これで必要な物は揃ったかな」

あかりが買った物を確認して言った。

「そうやな。必要な物があつたらいつでも言つてな」

「そこまですていたたくわけにはいきません。ただでさえ大変な負担が掛かっているというのに、これ以上は……」

遠慮がちにシグナムが断った。自分が守護騎士だから遠慮してるのだろうか。

「シグナムはアホか！ 今日から私達は家族なんやで！ 遠慮なんかしないでやー！」

「そうだよ。皆のことは私達がちゃんと面倒を見るよ」

「……感謝します。主、あかり殿」

他の三人もそれぞれ感謝の言葉を述べた。

はやて、あかり。新しい家族が増えて良かったね。

「さてと、そろそろお昼やし、家に帰って食べようや」

「あ、だったら先に帰ってくれない？ ちよつと買いたい物が出来た

んだ」

「一人で大丈夫？」

「うん、そんな大したもんじゃないからね」

「わかった。それじゃ先に帰ろっか」

皆はあかりに従って先に家に戻った。俺はそれから昼ご飯に間に合うように、出来るだけ早く買い物を買って戻った。

「戻ったよー」

「あ、おかえり。目当ての物は買えたんか？」

玄関を上がると、はやてが迎えてくれた。

「うん、ちゃんと買ったよ。ご飯はもう出来てるの？」

「ちようど今出来たところや。早く食べようや」

「はい」

リビングに入ると、皆は席に着いていた。

『いただきます』

『いただきます』

今度はヴォルケンリツターの皆も一緒にいただきますを言った。

ヴィータがまたギガウマと言ってすごい勢いで食べていた。

昼ご飯を食べ終わると、この後のことを説明した。

「シグナムさん達にも一緒に来てもらってもいいかな？」

「ああ、もちろんだ」

「先に言っておくが、俺達以外にも魔力を持っている人がいる。その人達もはやてやあかりの知り合いだから警戒しないで欲しい。……楽しいパーティーにしたいからな」

折角皆が用意してくれたのを台無しになんてできない。俺もヴァーリと同じくそう思っている。

「そんなことしねえよ。もし、管理局の人間がいたとしてもよっぽどのことがない限りは黙って過ごすつもりだぜ」

「……ありがと。あ、もしかしたら皆にも頼めば協力してくれるかもよ？」一応聞いてみようよ」

その言葉を聞いて安心した。

「……その者たちが信用できるかはともかく、そこまでしてもらっていいのか?」

「友達のためなら出来るだけのことはしたいんです」

「……そうか。本当に迷惑かけてすまない」

「そこはありがとうが聞きたかったです」

「フツ、そうだな。ありがとう、空、ヴァーリ」

『どういたしまして』

区切りのいいところであかりが皆に声をかけた。

「それじゃ、そろそろ行きますか!」

「そうやな!」

皆も賛成して龍神家に向かうことになった。

家の前に着くと、自分の家なのに緊張してきた。今年はどんなパーティーになるのか楽しみで仕方がない。隣のヴァーリもいつもより浮かれた表情をしていた。

「さ、インターホン押すか、って思ったけどシグナムさん押してくれませんか?」

「……? 何故だ? 空が押せばいいだろう?」

インターホンの前にいた俺がどうでもいいことで譲ったことに疑問を持ったシグナムさんが聞いてきた。

「そうですね。じゃあ、シグナムさんがやらないならやっぱり俺がやりますよ。〈ヴァーリ達も合わせてね〉」

シグナムさん以外に念話で伝えた。

「! いや、私がやるで」

俺の意図にいち早く気付いたはやてが俺に続いた。

「いや、俺が行こう」

「私がやるよ」

「い、いやあたしが押すぜ!」

「あら、私が押してもいいかしら」

「ここはあえて私が押そう」

流れる様にシグナムさん以外の皆が拳手をしていた。

「? 皆どうしたのだ? ……そこまで言うなら私が押すでしょう」  
『どうぞどうぞ』

シグナムが宣言した瞬間に皆で一斉に譲った。

「な、なんなんだ!? 何がしたいんだ!」

俺達の行動に完全にシグナムさんは困惑していた。

『プ……フフ……アハハハハハ!』

皆で笑いだすと余計に困惑していた。

「いやー、見事に決まったねー」

「ああ、決まると何だか清々しい気分になるな」

「それにしてもよくヴィータ達はわかったな。何でや?」

「空が念話でやれって言ってきたんだよ」

「最初は意味が分からなかったけど、やってみると楽しいわね♪」

「どうしてこんなことしたの?」

「何となく面白そうだったから」

「それだけの理由で私を晒し者にしたのか!」

晒し者って……。そこまでのつもりはなかったんだけどな……。

「ごめんごめん。ホントは何となく緊張してたからほぐす為だよ」

「緊張? 誰が?」

皆もヴァーリと同じ疑問符を頭に浮かべた表情になっていた。

「俺」

自分を指差して軽く言った。

『……………』

思ったよりもくだらない理由に誰もが固まった。

「……どうやら、我が剣、レバンティンの錆になりたいらしいな……」

急に肩を震わせてデバイスをこちらに向けてきた。

「え、ちよ、怒っていらっしやいます?」

顔を下に向けているので表情が分からない。

「……主、先に行って下さい。それと、しばらく空をお借りしてもよろしいですか?」

え？ 俺何されちゃうの？

「え、あー、分かった。でも、ほどほどにしてな」

俺とシグナムさんを置いて皆は先に家に入った。

「了解です」

「え？ これから家に入るんじゃないんですか？」

「少しぐらい遅れても問題ないはずだ」

俺はシグナムさんに首根っこを掴まれて、人気のないところに連れて行かれた。

無理やり引き剥がそうとしてもすごい力で逃げ出せなかった。

「えーっと、シグナムさん？ 早く戻りましょうよー」

「————フッフ……さあ、空、逝こうか」

「絶対にニュアンスが違いますよね!? え!? ちよ!? まっ、ギャアアアア——!?!」

本日二度目の悲鳴が街に響いた。

シグナムさんからありがたい説教理不尽な暴行を受けてから立ち直り、家に戻った。

……正直、久々に三途の川が見えたよ。

家の中が静かだ。皆がいるのはこの家の奥にある大広間だ。

「この家は広いな……」

「まあ、たくさん人が住んでるんでね。あ、ここが会場です」

大きめの扉には張り紙があり、『パーティー会場』と書かれていた。俺はその扉を勢いよく開け放った。だけど、次の瞬間、自分の目を疑った。隣にいるシグナムさんも小さく驚きの声を上げた。

「あれ？ 真っ暗!?!」

そう。俺達の目の前の空間は明かりの無い部屋だった。

「ここが会場ではないのか?」

「そのはずですけど……」

一応明かりをつけて確認しないと、そう思って部屋に入った瞬間、スポットライトの光が部屋の奥に当たった。そこにはアイドルが着

るような煌びやかな衣装を着た、一人の少女がステージの上にいる。  
「美九!」

「待ってましたよお! 今日ほだーりん達のために一日アイドルやっ  
ちやいます! ミュージックウゝスタートッ!」

その正体は俺の家族の誘宵美九だった。

軽快な音楽が流れ始めると、周りから歓声が上がった。

驚いて周りを見回してみれば、そこにいたのはいつもの顔ぶれだっ  
た。

『Happy Birthday』

美九が歌い終わると、盛大な拍手と歓声で部屋は埋め尽くされた。

今年は美九の歌か! 美九の声はやっぱ綺麗だね!

部屋の明かりがつかとマイクを持ったリニスが現れた。

「ようやく本日の主役も揃ったので始めましょうか。空達はこちらま  
で来て下さい」

俺達はリニスに呼ばれてステージの上上がった。

はやてはヴォルケンリッターの皆で協力してステージに上げた。

「それでは皆さん飲み物の用意はいいですか?」

「え、無いよ」

入ったばかりの俺とシグナムさんが持つてるはずがない。

「……空気を読んで下さい。……仕方ありませんね。どなたか二人に  
も飲み物をお願いします」

俺らが悪いの!?

そう思っていたら、四糸乃とよしのんが持つてきてくれた。

「あの……どうぞ、これ……」

『君がシグナムちゃんだよねー? よろしくー』

「ありがと、四糸乃、よしのん」

「ありがとう。こちらこそよろしく頼む」

「今度こそいいですね? それでは、これより誕生日パーティーを始  
めたいと思います! 最初は翠屋特製のケーキです!」

扉が開かれると、大きな荷台に乗った色とりどりのケーキが俺達の前にやって来た。

「空達にはロウソクの火を消してもらいますよ」

『はーい』

部屋が再び暗転すると、ロウソクの火が揺れていた。

俺達はせーので息を吹きかけて火を消した。

『誕生日おめでとー!!』

皆が一斉に祝いの言葉と共にクラッカーを鳴らした。

『ありがとう!!』

「さて、お次はプレゼントを渡しちゃいましょうか」

皆はそれぞれラッピングされた物を持つと、手渡してきた。

「はい、空君！ 私達からはこれをプレゼントするの！」

皆で一つの物を買ったということは多少は高価な物なんだろうか。

開けてみると、中には金色の懐中時計が入っていた。

「え!? これって滅茶苦茶高いんじゃないの!？」

「大丈夫よ。誘拐された時のお礼も兼ねてパパ達がほとんど出してくれたから」

そこまでしなくてもよかったのになあ……。

「空にはもう一つあるよ。それが私達からのプレゼント」

フェイトから受け取ったもう一つのプレゼントはアルバムだった。

俺達が出会ってから今までの写真がたくさん入っていた。

これからも思い出をたくさん増やしていきたいな。

ヴァーリ達にも同じ物がプレゼントされた。他にもアザゼルさん

や恭也さん達からも色んなものを貰った。

「私達からはこれをプレゼントするぞー!」

「開けてもいい?」

「もちろん。今年は期待していいからね!」

ほうほう、そこまで言われると期待してしまうね。

包装紙を綺麗に取り中身を見た俺は驚愕した。

「これって……ギャルゲー!？」

タイトルは『恋してマイ・リトル・ソラ』。作画は二亜と七罪、八舞

姉妹が、シナリオは琴里と狂三、四糸乃、よしのんが、スクリプトを折紙、美九は歌をそれぞれが担当したと書いてあった。

十香と六喰は手伝いつて感じ……？　そもそも、ギャルゲーをプレゼントされるとは思わなかったんだけど。

「それで少しは勉強を下さいまし」

ギャルゲーから何を学ぶんだろう？

「一応、現実に忠実になっているわ」

「……まあ、空がクリア出来るとは思えないけどね」

「む、そこまで言うならこの空さんが本気を出してクリアしてやりますとも」

七罪に馬鹿にされて、俺はムキになって答えた。

だが、それが間違いだった。俺の宣言を聞いていた琴里が反応した。

「へえ、そう。なら、今からやってもらおうじゃない。もちろん、罰ゲーム付きでね」

「ば、罰ゲーム……。何をさせるの？」

愉しそうに笑う琴里に身構えてしまった。琴里に何をやらされるか不安で仕方がないのだ。

「それはあとで考えておくわ。とりあえず、鞆亜、パソコンの準備して」

『はい。あと数秒で出来ます』

琴里が虚空に向かって命令すると、鞆亜が出てきた。

そして鞆亜の宣言通りに数秒経つと、一台のパソコンが俺の前に出て来た。

……この家どうなってんだ？　自分の家なのに知らないことが多い……。

「さあ、準備は出来たわ。早速やつてもらいましょうか」

なんか自信が無くなってきた……。

「空、何かするのー？」

「うん、まあね」

俺達が何かするのか気になった皆がワラワラと周囲に集まって来

た。

「それじゃあ、スタートよ」

友達や知り合いに見られながら、モノローグを適当に流し読みしてゲームを進めていく。

ちなみに、操舵するキャラの名前はソラで固定されていた。

途端に画面が真っ白になると一人の女性が現れた。

神様『あなたは私のミスで死にました。お詫びとして別の世界に転生させます』

「いやいやいやいや、こんなのが現実にあつてたまるか!」

いきなり死にました宣言されたんだぞ! 現実離れしすぎだろ!

……あれ、俺ってこうやって転生したんだっけ? いや、そんなことはどうだっていい!

「煩いわねえ。さっさと進めなさい」

俺は琴里に急かされてゲームを進めると、神様からの特典で可愛い女の子と出会えるようになったらしいのと家事スキルを貰った。

女の子との出会いねえ……。

正直、胡散臭さしか感じなかった。神様との会話が終わると、どうとう転生した。

一旦、画面が暗転してから明るくなると、俺が操作するキャラ——ソラ君が目を覚まして、『知らない天井だ……』とテンプレよろしくの発言をしてからボーっとしていると、扉が突然開けられた。

??? 『あ、お兄ちゃん! やつと起きた! 早くご飯食べよ!』

俺の部屋に入って来たのはピンク色の髪をツインテールにした中学生くらいの女の子だった。

ソラ『えーつと、ごめん。君は誰かな?』

??? 『えー!? 忘れちゃったの!』

俺の言ったことに酷くショックを受けた表情をしていた。

そう言われましてもねえ……知らない世界に転生したばかりなんですよ?

リコ『しょうがないから教えてあげる！ 私は妹のリコだよ！  
ちゃんと憶えてね！』

意外にも親切に教えてくれた。ゲームだからそういう仕様なのか  
と俺は思った。

ソラ『ああ、わかったよ。よろしくな、リコ』

この世界では妹がいるのか……。

リコ『そうだ！ おはようのキスしよ！』

………は？

ソラ『………は？』

妹のリコの台詞にソラ君と俺の気持ちは同じだった。

リコ『は？ じゃないよ！ 毎日してるじゃん！』

ソラ『そう、なのか……？』

ソラ君が困惑していると、選択肢が現れた。

①「わかった。いつものことならキスしようか」

②「流石に兄妹でいつまでもそんなことはダメだろ。もうこれっき  
りにしよう」

③「それよりも早くご飯にしよう。冷めちゃうぞ」

「むむむ……」

これは①はないね。兄妹でキスなんてしたら犯罪だよ。

③は無視すると可哀想だからちゃんと返さないと。

だから、ここはきつぱり②で断ろう。

俺は選択肢の②を押しした。

ソラ『流石に兄妹でいつまでもそんなことはダメだろ。もうこれっ  
きりにしよう』

ソラ君が断るとリコはこの世の終わりのような表情をしていた。

リコ『は？ え？ 何で？ 何で断るの？ ねえ何で？ ナンデナ

ンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ——あ、

そっか。あの女の所為か……。へえ、そんなにあの女が良いんだ？

だったらそんなお兄ちゃんは要らない。私のこと愛してくれないお

兄ちゃんなんて——死んじゃえ』

リコがどこから取り出した包丁でソラ君は刺された。

そして、画面が暗転して「BAD END」の文字が映った。

.....え？

「む？ もう終わってしまったのか？」

「ふむん。空は失敗してしまったのじゃ。これで罰ゲーム決定なのじゃ」

「何でだー!! おかしいでしょ!! 何この終わり!! あの女って誰!?

何で妹に殺されなきゃならないんだよ!!」

どう考えても理不尽すぎるでしょ!

「空もまだまだよのう。その程度もわからんとは」

誰も分かんねえよ!

「嘲笑。さつきまの宣言はフラグでしたね。ププ」

喧しい! こんな無理だつて!

「まさか一回目から間違えるとは.....」

「流石はだーりんです! 私達の期待を裏切らないですね!」

「さあ、罰ゲームをしてもらいましょうか。そうね——」

「ちよ、ちよつよ待つてよ! これおかしくない!?

「どこもおかしいことなんてないよ。ちゃんと答えだつてあるしね」

どれが正解なの!?

「嘘でしょ.....。こんな.....こんな終わりだなんて.....あんまりだよ!」

「これが現実。諦めるべき」

「いいさ、何でもゲームの思い通りに出来るつてんなら、まずはそのふ

ざけた幻——」

「ハイハイ、罰ゲーム決まったわよー」

「最後まで言わせてよ!」

『空君に何してもらおうのー?』

「それはね——」

Side out

Side 七罪

私——七罪は空が罰ゲームを受けることになって後悔していた。  
空の罰ゲームが終わった後で、もし空が挑発した私を恨んでたらどうしょよ……。

というか、絶対に恨んでる！ きつと酷いこと言われるんだろうな……。

『お前の所為で罰ゲームなんて受けることになったんだぞ！ 七罪なんて大っ嫌いだ！ この家から出て行け！ このブス！』

ヤバい……考えただけでも死にたくなってきた……。もし、そんなこと言われたら……うん、死のう。

これから先のことに絶望していたら、部屋の明かりが消えて暗くなった。

それからすぐに明かりがついた。

美九が歌った時と同じようにスポットライトだけがステージを照らしていた。

そして、そこに立つ一人の黒色の長髪の少女。

アイドルが着るようなフリルをたくさんあしらった可愛らしい衣装を身に纏って、恥ずかしそうにモジモジとしていた。

その姿に誰もが目を見開いた。

その少女を一言で表現するならば——可憐。

それが一番シツクリときた。

ヤバい……嫁にしてえ……はッ！ そうじゃない！

だってあの娘は——

空なんだから！

Side out

Side 空

恥ずかしい。今の自分の現状を表すならただその一言に限る。  
告げられた罰ゲームの内容は皆の前で女装して歌うことだった。  
だから贗造<sup>ハニエ</sup>魔女<sup>エール</sup>で女の子になった。というかさせられた。  
うう……足がスースーする……。女の子っていつもこんなの履いてるのか……。……よし！早く終わらせてとつとと着替えよ！  
「……それでは歌います。聴いてください」

『Follow Me』

若い世代に人気の歌を振り付けも加えながら歌った。  
ちよつと楽しいかも。でも、女装無しだったらもつと楽しかっただろうになあ……。

歌い終わると、会場が静まり返っていた。  
あれ、下手だったかな？ それとも女装が似合わない過ぎて観てらんなかった？

どっちにしろ誰か何かを言ってくれないと辛いんだけど……。  
そう思っていたら、一斉に『すごい！』や『可愛いー！』などが聞こえてきた。

ほっ、よかったよ。

ステージを降りて皆のところに戻った。

「琴里。もう着替えていいよね？ 終わったんだし」

「え！ もう着替えちゃうの!？」

「ええ〜!? 勿体無いですう!」

「俺はいつまでもこんな格好でいたくないの!」

なんでそんなに残念そうなの!？」

「もうちよつとだけお願いなの!」

「もつとその姿で欲しいな……」

「これは予想以上の破壊力だよ……」

十香達だけじゃなくてなのは達も!？」

「ヴァーリもとか言わないよな……?」

「……結構タイプかもしれない」

「よし、お前は俺に近づくな」

「冗談だ」

「冗談に聞こえねえよ!」

「いいじゃねえかよ。中々似合ってるぜ」

「ああ、このままその姿の方が良いのでは?」

「絶対にヤだよ!」

「あら残念。折角可愛いのに」

「あく聴こえない! 俺には何も聴こえない!」

部屋から逃げて急いで〈贗造魔女〉を解除した。

「はあ……ようやく終わった。あ、これ渡すの忘れてた」

部屋に戻ると、シグナムさん達の方に寄った。

「はやて、あかり。これプレゼント。誕生日おめでと」

俺は二人に色違いのクマのぬいぐるみをあげた。

「ありがとなー! 一生大事にする!」

「私もありがとね」

二人が喜んでくれたのが嬉しかった。

「それから、シグナムさん達にもこれどうぞ」

「私達にもか?」

「あたし達は別に誕生日でもねえぞ?　というかそんなもんねえよ」

「はやてとあかりに新しい家族が出来た日ってことで」

「……そうね。空君の言う通りね」

「ありがたく頂くとしよう」

俺は紙袋から、シグナムさんにネックレスを、ヴィータに呪いウサギの人形を、シャマルさんにブレスレットを、ザフィーラさんにはカメラをそれぞれに渡した。

「その、なんだ、えっと、あああ、ありがとな!」

「大事にするとしよう」

「今までこんなことなかったから新鮮でいいわね♪」

「これで主達との思い出をたくさん残そう」

四人にも喜んでもらえてよかった。

あとは、ヴァーリか。

「ヴァーリ、今年の誕生日プレゼントはこれあげるよ」

「ッ!?　いいのか!?　それは——」

「これを使いこなせるようになったらもつと強くなれるよ。そしてそのヴァーリと俺は戦いたいな」

「……わかった。絶対に使いこなしてみせる」

これで楽しみがまた増えた。その時が来たらどうなるかな?　どんな戦いになるんだろうか?

誕生日パーティーはその後も色々やった。

美九だけでなく精霊全員で歌ったり、なのは達も歌った。

ヴァーリとデュエットもした。士郎さんとアザゼルさん親バカ二人もはしゃいで演歌を

歌った時は皆大爆笑だった。

「さてと、そろそろ終わりかな」

時間もそろそろ頃合いだ。

そう思っただけで片づけを始めていたら、部屋に魔方陣が浮かび上がった。

『蒼い魔方陣———ティアマツトだな』

魔方陣から一人の女性が現れると、ドライグの宣言通りティアマツトの人型モードだった。

「こんにちは、ティアマツト。どうしたの？」

「空、サーゼクスとの試合の日取りが決定したわ」

！ ついにこの日が来た！ 俺の、俺達の力が魔王にどのくらい通じるかやってみよう！

魔王と真剣勝負です！

魔王と真剣勝負です！

Side空

ついにこの日がやって来た。

魔王の一人、サーゼクス・ルシファーと戦う時が。

「負けられない戦いがここにある！」

「……いや、普通に考えて絶対に勝てないでしょ」

「そういうことは言わないでよ！　もしかしたらワンチャンあるかもしれないんだよ!？」

七罪に否定されたが、こういうのは気持ちの問題で変わることもある。

一応、この日のために秘策も考えて来たしね！

「ま、精々足掻いてやりましょ」

「うん！」

「それでは行くとしましょうか。……見学者がかなりいるみたいだけど」

ティアマツトが俺の後ろにいる皆を見て呆れていた。

「アハハ……皆に伝えたら見たいって言われちゃってさ……」

皆も魔王に興味があるのか、行きたいと言い出して断り切れずにつれてくことになったのだ。

「まあ、問題はないはずよ」

ティアマツトが転移の魔方陣を展開して、俺達を転移させた。

転移が完了すると、何度目かの紫色の空が目に入った。

初めて来た皆は驚いたり、感嘆の声を上げたりと様々な反応だった。

大きなスタジアムに着くと、サーゼクスさんやメイドさんが出迎えてくれた。

「やあ、龍神君。待っていたよ」

「こんにちは、サーゼクスさん。今日はよろしくお願ひします」

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ。グレイファイア」

「はい、かしこまりました。龍神様以外はこちらの方へ付いて来て下さい」

名前を呼ぶだけで、グレイファイアさんはサーゼクスさんの言いたいことをすべて理解して、皆を応援席へと案内してくれた。

「それでは、我々も移動するのでしょうか」

サーゼクスさんが紅い魔方陣を展開して、別空間へと転移した。

「ここはレーティングゲームで使われる空間でね、本気でやつてもよっぽどのがない限りは、負けても医務室に転移されるだけだから安心してくれ」

「わかりました」

よかつた。これで滅びの魔力を受けても多少は大丈夫なわけか。

サーゼクスさんの配慮で命の危険はあまりないとわかって安心してると、グレイファイアさんのアナウンスが入った。

『どちらも用意はいいですか?』

俺達は黙って頷いた。

『これより魔王サーゼクスルシファー様対龍神空様の決闘を行います。それでは始めて下さい』

スタートの合図が出されると、サーゼクスさんが話し掛けてきた。

「龍神君、君の全力を私に見せてくれ」

「はい! 折紙! アルビオン! 行くよ!」

『了解』

『任せろ!』

二人が返事をすると同時に折紙の限定霊装と白龍皇デイベイン・デイベイディングの光翼デイベイン・デイベイディング・ルナティックフェザーの禁手バランス・ブレイカーを纏った。いつもの白龍皇デイベイン・デイベイディング・ルナティックフェザーの月光神翼に加えて、不思議な色をしたヴェールを体に巻きつけている。

ツ! やっぱり二つの力が一緒だと負担が大きいな……。

何回か練習していたから多少は慣れたが、それでも相当な負担がある。

「ツ!? ……君は一体何者なんだい? (三つ目の神滅具だど……ロンギヌス)」

?)」

俺の変化にサーゼクスさんは目を見開いていた。

「精霊……いや、龍精霊? そんな感じですかね?」

「疑問で返されても困るんだが……まあ、いい。掛かって来なさい」

そんなこと今まで考えたことなかったんですけどいいですね!

「<sup>メタトロン</sup>絶滅天使!」

俺が発頭させた天使はいくつもの細長い羽状のパーツで構成される王冠型の翼。組み合わせを変えることで攻撃方法が色々変えられる。

「<sup>カドウール</sup>光剣!」

俺が天使に指示を出すと、十機のドラゴンと共にサーゼクスさんに向かって無数の蒼白い光線を放った。最初は防御魔方阵で防ごうとしていたが、危険を感じたのか回避に専念していた。

光線が当たった地面には綺麗な穴が開いていた。

「……少々驚いたよ。今のを躲していなかったら間違ひなく貫かれていただろうね」

今ので少々なのか……。流星は魔王ってことか……。

「今度はこちらの番だ」

サーゼクスさんが周りにいくつかの紅い魔力の塊を浮かべていた。

「あれが滅びの魔力……。躲しきれるかなあ?」

『出来るだけこちらでもサポートはする』

『それに隙があれば「半滅」や「反射」の力を使うといい』

「頼もしい限りだね」

折紙とアルビオンにはホントに感謝だな。

サーゼクスさんが魔力弾を撃ってきた。逃げようとするとう然の如く追尾してくる。

原作だとこの技を極めるために才能の大半を使ったのかなんとかってあった。

速さがそこまで無いってことは手加減されてるなあ……。

「<sup>アルマク</sup>天翼!」

小さな羽が白龍皇の月光神翼に纏わりつき、より一層大きく綺麗な

翼へと変わった。この変化によって、俺はさつきよりも速い高速移動で追尾弾を振り切り、サーゼクスさんに接近していった。

今がチャンス！

「せつやあああああああああああああああああああああッ！」

右のストレートを振り下ろしたが、左手で簡単に受け止められた。「ガハッ！」

その上、右足で脇腹に蹴りを入れられた。

そう言えば、この人体術もすごいんだっけ。メツチャ強いな――

……。でも――

《D i v i d e D i v i d e D i v i d e D i v i d e D i v i d e  
D i v i d e D i v i d e D i v i d e D i v i d e D i v i d e  
!!!!!!!!!!》

一度でも触れられればこっちの能力が使える！

「手で触れたのは悪手だったね……」

それでもサーゼクスさんの表情は変わらない。

魔王としてのプライドからか、それとも本当に余裕なのかは俺には分からない。

だが、そんなことを気にしている暇はない。俺は再び接近して格闘戦を挑んだ。

ツ！ そろそろ魔力弾が来るか。

魔力弾が背後に迫っているのを感じた俺は、上昇して逃げた。

「<sup>シエムッ</sup>日輪<sup>ツ</sup>――」

羽が円環状に組み合わさり幾千幾万もの光の粒子をバラまいた。

粒子と魔力弾がぶつくと、半減されていたおかげか相殺することが出来た。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

「素晴らしいね。だが、その力は消耗が激しいようだね」

息切れを始めた俺はサーゼクスさんの言葉にその通りだと頷いた。

「なら、早めに終わらせよう。私は十分に楽しめたからね」

サーゼクスさんの呼吸は乱れてないことからかなり余裕のように

見える。実際、力を無理やり合わせているだけの今の俺じゃ、相手にもなっていないのだ。

「……そうですか。でも、俺はまだとっておきがあるんで、それやって終わりにします」

乱れる息を整えて、深呼吸をした。

「――〈神威<sup>エイ</sup>霊装<sup>エイ</sup>・一番<sup>エイ</sup>〉ツ！」

周囲の空間が歪み、俺の体に絡みついて、純白の霊装の形となった。背中にある白龍皇の月光神翼とドラグーン、純白のタキシードのような不思議な色をした霊装と無数の小さな羽。

これが俺のとおき。霊装と神<sup>セイクリッド・ギア</sup>器の組み合わせ。

『時間は十秒が限界だ』

まだ二つの力を同時には上手くは使えず、現在体力も少ない俺にはこれが限界。

「りょーかい」

返事をする、すぐさまカウントダウンが始まった。

「それが君の全力ならば、私もそれに応えよう」

紅い魔力がサーゼクスさんの体から溢れ、巨大な魔力弾を作り出した。

「――ルイン・ザ・エクステインクト  
滅殺の魔弾！」

俺はドラグーンと〈絶滅天使〉の羽を周囲に集めて一つに束ねた。

両手を前に突き出して、極大の白い砲撃を容赦なく撃ち放った。

「――【白龍皇の月光砲冠<sup>パニシング・ストライク・アーティリフ</sup>】ツ！」

俺の砲撃とサーゼクスさんの紅い魔力がぶつかった。

しばらく小競り合いが続いていたが、それもすぐに変化した。

クソツ！ 限界かツ！

徐々に俺の方が押され始めていた。

体力や魔力、霊力を大量に消費して使っているこのモードを維持する力が俺にはもう無い。そして、完全に競り負けたことが分かった時、霊装も神器も解除され、そこで意識を失った。

「……ッ……んあ？　ここは……？」

目を開けると、知らない天井が目に入った。

周りを見ようと起き上がろうとしたら、体中に激痛が走った。

「ウゴツ!？」

その痛みで自分が何をしていたのか思い出した。

「あー、俺負けたのかー」

『ああ、そうだ。空の体に限界が来て倒れたのだ』

『もう少し休んでおけ。今は体力も魔力もすっからかんだからな』

あのモードは消費がデカいから、少しでも慣れることがこの後の課題だな。十秒だけだったから筋肉痛だけで済んでよかったと思う。

「……そっか。わかった。ところで皆は？」

『空さんが倒れてから見に来たあと、魔王に呼ばれてどこかに行きました』

「俺どのくらい寝てた？」

『三時間程度だな。あの魔王が手加減してくれてたおかげだな』

「はあ……やっぱりか〜」

手加減されてたことを知って、少しシヨックを受けた。それは、まだまだ魔王相手に実力不足であることが分かったからだ。

俺がサーゼクスさんに手加減されていたことを知って凹んでいると、この部屋のドアがノックされた。

『龍神様、入っても構いませんか？』

声の主はグレイフィアさんだった。俺が目を覚ます頃合いを見計らってやって来たのだろう。

「はい、どうぞ。どうかしましたか？」

「そろそろお目覚めになられる頃かと思ひまして」

グレイフィアさんの中に入れると、俺の様子を確認しに来たようだ。

「歩くことは出来ますか？」

「まあ、なんとか……」

動かすと痛いけどそこは我慢するしかない。

「それではこちらに付いて来て下さい。魔王様達がお呼びです」

魔王様「達」？ サーゼクスさん以外にもか……。誰だろ？ ア  
ジユカさんはいないって聞いてるけど……。

「わかりました」

覚束ない足取りで何とか付いて行き、サーゼクスさん達が待つ場所  
へと向かった。

部屋に入ると、サーゼクスさんと話している知らない男性二人と、  
どっかで見たことがある女の子四人が十香達やなのは達と楽しそう  
にしていた。

「中々有意義な時間でしたよ。彼は————おや、体はもう大丈夫  
なのかい？」

「歩くぐらいなら。ところでお話って何ですか？」

「ああ、それはね、君にお礼を言いたい方々がいるんだよ」

「お礼？ 俺何かしました？」

そんなことしたっけ？ と首を傾げていると、サーゼクスさんの近  
くにいた体の厳つい男性と細身の男性が俺の前に来た。

「お前が龍神空だな？」

体の厳つい男性が確かめる様に尋ねてきた。

「え、あ、はい」

ガタイの良さに気圧されたものの何とか返事をした。

「さっきの戦い見事だったよ」

今度は細身の男性から褒められた。

「あ、ありがとうございます」

結局何が言いたいんだ？ この人達がさっきの戦いを観ていたこ  
とは分かったけど。

「お二方共、早く本題に入りませんか？」

「そうだね。それでは言わせてもらおうよ」

「龍神空——いや、龍神殿」

サーゼクスさんが二人に促してくれたのは良いけど……殿？ つ  
てどういうこと？

『娘を助けくれてありがとう!』

「娘? 助けた? 俺がですか? そもそもお二人はどちら様でしょうか?」

「そんなことあったかな?」

「あ、あれ? 僕達のこと知らない? これでもサーゼクスちゃん達と同じ魔王なんだけど……」

「え、お二人も魔王なんですか!?!」

「いや、俺の場合は天界の神王だ」

「神王?」

聞きなれない単語に首を傾げてしまう。神王って名前からして相当重要な役職なのは想像が付く。

原作には居なかった人だよな?

「それも知らねえみてえだな。まあ、いいか。俺は神王のユーストマだ」

「僕は魔王のフォーベシイだよ」

「俺は龍神空って言います。空で構いません。それで、娘というのはあの娘達でしょうか?」

なのは達と一緒にいる女の子達の方を向いて尋ねてみたら、当たり前だった。

「ああ、そうだ。おーい! シア! こっちに来てくれ!」

「ネリネちゃんトリコリスちゃんもね!」

『はーい!』

呼ばれた三人は元気よく返事をする、こちらにやって来た。

「あ、やっと会えたっス!」

「あの時はホントにありがとうございます」

「さっきの試合も観てたよ! 強いんだね、君!」

「は、はあ……どうも……なのかな?」

初めて会う小豆色の少女と顔が瓜二つの青髪の少女二人にもいきなりお礼を言われて困惑していた。

「ごらごら、三人共ちゃんと自己紹介をしないと」

「忘れてたっす! 私はリシアンサス! 長いからシアって呼んで下

さいつす！」

小豆色の髪をした少女はシアっていう名前か。元気がいい子だね。

「……私はネリネです。よろしくお願いします」

蒼髪の女の子はフェイトみたいに人見知りかな？

「私はリコリス。リン——ああ、ネリネちゃんのことなんだけど、私達姉妹なんだ。あ、シアちゃんとは従姉妹同士の関係だよ」

ネリネは赤い眼で、リコリスは紫の眼か。フェイトやアリシアと違って分かりやすいかも。

「俺は龍神空だよ。気軽に空って呼んでね。よろしく。できあ、俺が助けたってどういうこと？」

「ええッ!? 覚えてないんすか!?!」

「……ごめん」

「私達が魔獣に襲われていた時のことです」

「魔獣? そう言えば前にそんなことがあったような……?」

記憶をたどるとそんなことがあった気がしなくもない。

「あ、ティアマットがその後に来たじゃん!」

リコリスが重要なことを思い出したように告げた。

ティアマット……?」

「あ! あの時の女の子達か! 思い出した!」

「……やつと思いついてもらえたっす」

呆れたように呟かれた。会ったのはほんのちよつとはいえ少し前のことを忘れられていてショックだったみたいだ。

「ごめんごめん。あの時はティアマットに夢中だったから。アハハ……」

「ま、何はともあれ改めて——」

『助けてくれてありがとうございました!』

「いえいえ、女の子を護るのが男の子の役目です。お役に立てたのならそれだけで十分です」

「フフ、何だか昔話に出てくる騎士ナイトみたいですね」

ネリネが俺の行動を騎士ヒロインに例えていた。

「そしたら、三人はお姫様ヒロインってことだよね?」

「それいいかも。それでその内恋に発展したりして……」

「ないない。俺なんかじやお姫様達に全然釣り合わないよ」

周りには俺なんかじやもつたいないくらいに将来有望な少女がたくさんだ。

「そんなことないよ！ 空君の戦う姿とってもカッコ良かったもん！」

「そ、そっか。ありがと。そう言われると嬉しいよ」

といった風に仲良く談笑していたら、フォーベシイさんが入って来た。

「空ちゃん、君にお礼がしたいんだけど何か欲しいものはないかい？」

「もちろん俺の方もさせてもらうぜ。何でも言ってくれ」

何でもって言われると困るんだよなあ……。っていうかたまたま偶然助けただけだからそこまでしてもらう必要なんてないのに。

「じゃあ、娘さんを下さい」

なんて冗談を言ってみたら二人が固まった。あと殺気がすごい。主に十香達からの。

ふむ。これはやらかした感があるな。

「空様!? 何を言ってるんですか!？」

「そそそ、そうっす！ いきなりどうしたの!？」

「もしかしてホントに恋しちゃったの!？」

三人共顔を真っ赤にしていた。

「まっさかー。冗談に決まってるじゃん」

まずは誤解を解くことにした。このままでは俺の命が危ないと思う。

『え!?!』

「さっきも言ったでしょ？ 俺なんかじや釣り合わないって」

『そ、そうなんだ……』

ちよつとふざけ過ぎたかな？

「……わかった。空ちゃんを婚約者とまでは行かないけど、婚約者候補にしようか」

「……そうだな。それで我慢してくれねえか？ 流石に知り合ったば

かりだしな」

二人は何かを決めたのか、真面目な顔で言ってきた。

あれー？ 俺、冗談だって言ったんだけどなー。おかしいなー。

「あ、あの、俺、冗談——」

「みなまで言うな空殿！ 分かってる！ 分かってるからなー！」

「え？」

「ごめんなさい。俺は何一つ分かってないんですけど……。」

「うんうん！ 僕にも分かるよ！」

「だから、何がですか!?!」

二人して頷いているだけなので、俺にはさっぱり分からない。

「照れることはないんだよ？ 僕達は君の気持ちは分かっているから

ね」

「ああ、そうだな。空殿は——」

「ネリネちゃんトリコリスちゃんに——」

「うちのシアに——」

『惚れてるんだよ（な）！』

「……………は？」

『……………え？』

二人の息ピッタリの台詞に俺達は固まった。

「いやーうちのシアは天界で一番可愛いからなー。空殿が惚れるのも分かるぜ！」

「それを言うならネリネちゃん達だって冥界で一番可愛いからね！ 惚れないはずがないよ！」

親バカなのか自分の娘達を自慢しながらも二人の会話はドンドン進んで行く。

「いや、だから——」

「いいんだ！ みなまで言うな！ 俺達は全部分かっているからなー！」

絶対に何も分かってないですよね!?

「俺は別に——」

「惚れてないって言いたいんでしょ?」

「え、あ、そうです」

やっと分かってくれた……。さっきのは冗談だったのか。

「その年頃で理解するに少し難しいもんね。誰しも最初はそんなもんだよ」

「だが、俺達は全部お見通しだぜ! 空殿のシア達への熱い思いにな!」

やっぱり何も分かってないよ!

「いや、だから、俺は——」

『みなまで言うな、みなまで言うな!』

さっきからみなまで言うなって二人の中で流行ってるんですか!?

「さ、今から空ちゃんやんはネリネちゃん達の婚約者候補だよ」

「きつとシア達と仲良くなれると思うぜ!」

そう言い残して、二人は笑いながら部屋を出て行った。

「三人共ごめん! 俺の所為でこんなことになって……」

「き、気にしないで欲しいっす!」

「私達も最初は驚きましたが……」

「でも、お父さん達、勝手に決めちゃうなんて酷いよね」

「ホントにごめん……」

俺があんなことを言わなければよかったと今更後悔しても遅いのだが。

「で、でも! 空君となら……その……いいかもってちよつと思ったりしなかったり……」

「それに、私達と同一年の男の子なんて今まで会ったことありませんしね」

「ま、別に無理することはないよ。気楽に仲良くしていこうよ♪」

「うん、ありがと。これから友達として仲良くしてくれると嬉しいな。

あ、ところでさ。あの紅い髪の女の子って誰?」

見た感じからすると恐らくあの娘何だろうけど……。

「あの女の子はサーゼクス様の妹のリアスちゃんです！ 今呼ぶつすね」

「やっぱりか！」

俺の予感が当たると、シアがリアスを連れて来た。

「どうしたの、シア？ ああ、あなたがお兄様と戦ってた空ね？」

「どうして俺の名前——ってなのは達から聞いたのか」

俺が戦ってる時になのは達と仲良くなったみたいだった。

「ええ、そうよ」

「ふーん」

「……なに？ どうかしたの？」

俺がリアスを見つめていると怪訝そうな顔をしていた。

「あ、ごめん。ただ、可愛いなーって思ったぐらいだから。もちろんシア達も含めてね」

『か、可愛い!? やっぱり私達に……』

「……あなたって誑し？ それとも天然？」

三人は顔を赤くして俯いてしまったが、リアスにはジト目で睨まれた。

「え!? 何で!？」

「だって、初対面の女の子に可愛いなんて普通言う？」

「……それもそっか」

実際にイリヤに言ったことがあるけどね……。こういうのって黒歴史になるんだろうか？

「そんなことよりも空。将来私の眷属にならない？」

「ヤダ」

「む、どうしてよ」

俺の答えが気に食わなかったのか、少しムスツとしていた。

「だって、なる理由がないもん。それに眷属って何？」

まあ、ホントは知ってるけど……。

「眷属っていうのはね、上級悪魔の主に仕える僕よ。それで眷属を集めてレーティングゲームに出て競い合うの。空は強いから活躍出来ると思うわ。どう？ 眷属になってみたくなかった？」

「全然」

それだけでなるか！　そもそも悪魔になりたくないし。

「どうしてよー！」

「眷属になるってことは何かしらあるんでしょ？　例えば、眷属になる奴は悪魔になるとか」

「ええ、そうよ。眷属になって貰うには悪魔に転生しなきゃいけないの」

「だったら、尚更嫌だよ。俺は人間でいたいもん」

『すでに人間を辞めているがな。(そもそもこいつが人間かどうかも怪しい……)』

「うるさい！　俺はれっきとした人間だわー！」

「そんなのいいじゃない！　寿命だって1万年ぐらいになるのよ！」

「悪魔になったら本でよくあるみたいに光とか十字架とかダメそうじゃんか」

「それはそうだけど……」

「1万年も生きる気ないし、初対面の人にそんなこと普通言う？」

さっすきの意趣返しのもりで言った。

「むく！　いいじゃない！　私の眷属になりなさいよ！」

おう……こりや見事にキレてますね。我が儘だなあ。

「絶対に嫌だね。そもそもどうやって俺を悪魔にするの？　君はその手段を知ってるの？」

この歳のリアスはまだ悪魔の駒イーヴァル・ピース持ってないはず。

「うツ……それは……」

案の定リアスは言葉に詰まっていた。俺の予想通り、駒は持っていないのだ。

「ということは出来ないって事でしょ？」

「だから将来よ！　私が眷属を作れるようになった時に、あなたが他の人に奪われたら嫌だから今のうちにキープしておくの！」

メツチャ我が儘だなー。サーゼクスさんやシア達も後ろで苦笑いしてるし。

「そっか。言いたいことは分かった」

「じゃあ、眷属に——」

「だが断る」

「なッ！」

決まった……。今まで皆に途中で邪魔されてたから全然言えたことのないセリフが、今ようやく言えたよ！ 使い方が若干怪しい気がしなくもないけど。

「そんな訳で諦めて」

『どんなわけだよ……』

「(細かいことはいいの！)」

九喇嘛に呆れられながらツッコまれた。

「諦めないわよ！ あなたのこと絶対に眷属にしてやるんだから！」

俺のどこがいいんだか……。いや、確かにこの世代じゃ強い方になるのかもしれないけど、君には将来スケベだけど熱血で頑張り屋さん  
の主人公が眷属になってくれるよ。スケベだけど……。お、これが大事なことなので二回言いましたって奴だね！

どうでもいいことを考えつつ、リアス達から離れて十香達の方に行った。

「ごめん、負けちゃった」

「あまり気にするな！ 空は良く頑張っていたと思うぞ！」

「……想像してたよりは良かったんじゃない？」

「とつても……カツコ良かったです……ッ！」

「これからもっと頑張れば勝てるはず」

「次はリベンジなのじゃ」

「あれだけやれば十分であるぞ！ まあ、我なら余裕で勝ってたがな  
！」

「指摘。耶？ 矢は空が戦ってる時に一番ビビってました」

「ハア!? そ、そんなことないし！ 超余裕だし！」

目がメツチャ泳いでるよ、耶？ 矢。

「いい試合だったよー。漫画のネタになったよ」

「ハッ！ これは落ち込んでるだーりんを慰めて好感度アップのチャ  
ンスー！」

「大丈夫。上がらないから」

「お疲れ様。課題はまだまだあるけど十分な戦いだっただわ。ただ――

「？」

「さっきの婚約者だのなんだのみたいな話はどういうことかしらア？」

「ヤバい！ 皆さん怒ってらっしゃる！」

「えーっと、あれはですね単なる冗談のつもりだったんですけど何故か本気だと勘違いされてしまったわけですのでどうか天使を出さないで下さい死んでしまいます」

綺麗なジャンピング土下座を決めて謝った。

『……チツ……』

今舌打ちした!?! え、俺もう少しで死んでた!?! 怖ッ！

恐怖のあまりなのは達の方に逃げた。

「家でじっくりやってあげるわ……。フフフ……」

この時、十香達が歪んだ笑顔をしていたことに気が付かなかった。

「あ、空君！ 試合お疲れ様。戦ってみてどうだった？」

「いや〜魔王って強いね〜って感じだよ。まだまだ遠い存在」

「チートの空でもそう思うんだ……」

失礼な！ 魔王の方がチートだよ！

「しかも今まで見たことない姿だったわね。アレは何？」

「神器と霊装を同時に使ったの。負担が半端ないけどね……」

「ホンマ無茶し過ぎやで」

「そうだね。でも、それだけ挑んでみたかったんだ」

「あんたは馬鹿なの？ いや馬鹿だわ」

ヒドッ！ 他の皆もうんうんと頷かないですよ！

「空君の無茶は今に始まったことじゃないの」

「それよりもさっきのシアちゃん達のことはどういうことなのかなあ？」

「詳しく聞かせて欲しいから、ちょっとO☆HA☆NA☆SIしよつか」

皆の目からハイライトが消えて笑顔なのに怖い顔だった。

「……ちなみに拒否権は？」

『ある訳無いよ』

あかりとシグナムさん達以外から有罪の判決を下された。

「フツ……逃げるん——!?」

か、体が動かない！ バインド!? いつの間に！

「た、助けて！ ザファイラさん！」

「……ワン。へ……スマン。無理だ」

犬形態（本人曰く、狼）のザファイラさんに見捨てられた。

「ティアマツト助けて！」

自分の使い魔に助けを求めたが、

「諦めなさい♪」

とびっきりの笑顔であっさり見捨てられた。

こんな時はあの言葉を叫びましょう。それでは皆さんご一緒に。

「不幸だア——!!」

兄が出来ました！

兄が出来ました！

S i d e 空

俺の誕生日が過ぎてから数日後、龍神家に魔法を知ってるメンバーに集まってもらった。

「それでは、八神はやてを救うためにどうやって魔力集めようか会議を始めます」

『長い！』

長いなら、縮めてみよう、作戦名。

「じゃあ略して『やぎ』で」

『今度は略し過ぎ！』

「もう、皆我が儘だなー。この先心配だよ」

全くやれやれだぜ。

「主、こいつを斬ってもいいですか？」

「流石にそれはあかんで！ 我慢せなあかんよ！」

「クツ……」

はやてに止められて、シグナムさんは悔しそうに拳を握りしめていた。

「そうだそうだ。短気は損気だよシグナムさん。ま、そんなことは置いといて。魔力は魔導師から集めると犯罪になるらしいから魔獣とかはぐれが中心かな」

シグナムさんがいつ襲い掛かってもおかしくない様子だけど気にしないで続けた。

「はぐれって？」

「はぐれって言うのは自分の主を殺してお尋ね者になった悪魔だよ。あとは教会から追放された神父や悪魔祓いとかのことも指すね。ていうか、この世界で集めれば普通に管理局にバレないで出来るでしょ」

「そうね。ここにいる人達だけでも十分な魔力が集められるだろうし……」

「なら、さっさとこいつらから魔力貰おうぜ」

「だが、完成して何が起こるかわからんだぞ？ 場所を考えてからやらねばならん」

「なら、ギリギリまで集めて、無人世界で完成させれば問題はあるまい」

「それがいいかな。皆は何か意見ある？」

周りを見ると、愛衣が挙手した。

「私達は囑託魔導師の仕事もあるから全員の魔力が無くなっていると疑われるんじゃない？」

「それだったら一人ずつ期間を空けてやろつか。他に何かある？」

「完成したらはやてが大いなる力を手に入れるってことは分かったけど、どんな風に入れるのか具体的なことを知りたいんだけど」

言われてみれば、どうやって大いなる力を手に入れるかは聞いてない。

「シグナムさん達は何か知ってる？」

「そんなもんなんかこう……ほら、バーン！ みたいな感じじゃね？」

『……………』

ヴィータの適當すぎる答えに誰もが呆れた。

「確か……………む？ どうなるんだ？ 完成した後の記憶が全くない

……………？ 何故だ!？」

「あれ？ 私も思い出せないわ……………」

「それどころか前の主のことすら思い出せん……………」

他の人達の反応からして具体的なことは分からないらしい。

「これはマズイな……………。〈転生者の三人は知ってる？〉」

『もちろん』

転生者の三人が知っているならまだ何とかなるか。

〈説明とかしてもらってもいい？〉

〈それなら私がするよ〉

〈お願いね〉

「あ、私からいいかな？ 完成した後のことは知ってるんだ」

「どうなるの!？」

「闇の書——正確には夜天の書って言うんだけど、それを完成させると管制人格って呼ばれる人が出てくる。でも、夜天の魔導書は昔に何度も書き換えられてしまった所為で制御しきれないために管制人格が暴走して世界を壊そうとするんだよ」

『世界を壊す!?!』

はやての持つ本はそこまで強力な物だったのか……。ジュエルシードと同じロストロギアに含まれるのかな？

「だから、その人を倒さないといけないんだ」

「その人魔王より強いのか？」

「それはない……。かな？」

「まあなんにせよ、強いなら戦ってみたいな」

俺とヴァーリは管制人格がどれだけ強いか気になっていた。

「あんた達はホントに馬鹿なの!?! 世界が危ないのよ!?!」

「アリサちゃん落ち着いてよ。二人のこれはもはや病気なんだから」

『そこまで言うか!?!』

病気と呼ばれて反論せずにはいられない。

『うん（ああ／ええ）』

『ヒドッ!』

俺達は満場一致で皆に頷かれてシヨックを受けた。

「その馬鹿二人は置いといて、そうなるにあたし達はどうすりゃいいんだ?」

「それは——」

ここで俺はシグナムさんの言葉を遮って言い放った。

「そこはやつぱり——」

そして自然とヴァーリが続いた。

「魔力を集めつつ——」

最後に声を合わせて言い切った。

『修行しかない!』

という訳で今日から皆で修行を始めることにした。

「んじゃ、まだ意見があればどうぞ」

「そう言えば、どうしてあかりちゃんは闇の——じゃなくて夜天の

魔導書のことを知ってたの？」

なのはが気になっていたことをあかりに尋ねた。

「あ、それはね私のレアスキル？みたいなものだよ」

『レアスキル!?!』

その言葉に誰もが興味を持った。

って原作知ってるから当たり前か。

「私は視たものがどんなものなのかが解るんだ。まあ、大雑把なことしか解んないけど」

それを聞いて皆がすごいといった表情をしていた。

特典の能力をちよつと言ひ換えただけか。

「なるほど。その力のおかげで大変助かりました」

それから会議が終わった後、地下のトレーニングルームで早速試合を始めた。

組み合わせはなのはとヴィータ、シグナムさんとフェイト、アルフとザフィーラさん、

雄人とアリサ、すずかと明日奈、シヤマルさんとユーノ、アリシアとリニス、あかりと愛衣。そして俺とヴァーリ。

「よろしくね、ヴィータちゃん」

「ああ、高町……な、ナントカ？」

「なのは！ 私はなのはって言うの！」

「うるせえ！ 言いくいんだよ！ 高町な、な、なによは！」  
というやり取りが試合前にあったそう。

「さて、俺達も始めよつか」

「ああ。だが、ここは狭いから今回は体術のみだな」

「この人数だし仕方ないさ」

お互い構えをとってどちらからともなく相手に接近した。

「せいッ！」

「はあああああッ！」

それからしばらくは二人で、皆が終わってから一時間ほど拳を交えていた。

『ハア……ハア……ハア……』

互いに力尽きて、地面に大の字になって寝そべっていた。

俺達が終わるのを見計らってアリサと明日奈がタオルと飲み物を持ってきてくれた。

「あんたら異常だわ……」

「よくあんなに続けてられるよね」

「日頃から鍛えてますから」

「右に同じく」

呼吸を整えてから立ち上がり、皆が集まるところに行った。

「さて、他の皆はどうだった?」

聞いてみると、なのはとフェイトがやけに落ち込んでいた。

「? 二人は何かあったの?」

「実は……」

「私達のデバイスが壊れちゃったんだ……」

そうやって二人は折れた杖を見せてきた。

「自己修復モードで直せないの?」

デバイスにはそんな能力があると聞いたことがある。ブレイブが壊れることって今まで見たことないからよくわからないが。

「出来ないこともないけど時間が掛かっちゃうの」

「だったらプレシアさんに頼めば?」

「そうね。私とりニスに任せてちょうだい。絶対に直してみせるわ。

(フェイトの為に頑張るわ!)」

何故だろう。プレシアさんが考えてることが手に取るように分

かってしまう。

「そんじゃ、今日はここまで!」

その日はそこまで解散をした。

翌日。俺は翠屋でお手伝いをしていた。

扉が開く音がしたので振り向くと、お客様が来たことが分かった。

ただ、その入ってきた一人の少女には見覚えがあった。

「いらっしやい——ってイリヤ!?!」

「あ、空君！ 久しぶりだね！」

「お、君はあの時の」

「確か、イリヤのお兄さんでしたよね？」

橙に近い赤髪をした中学か高校生ぐらいの少年がイリヤの後ろに立っていた。

その後ろからさらに顔が似通った二人が入って来た。二人もイリヤの連れみたいだった。

っていつまでも驚いてないで接客しないと！

「お客様は四名様でよろしいでしょうか？」

「ああ、そうだよ」

「それではこちらのテーブル席へどうぞ」

イリヤ達が席に着くと、メニューを渡した。

「すぐにお水をお持ちします」

厨房に入って水を入れて、四人へと差し出した。

「メニューが決まりましたら店員をお呼び下さい」

イリヤ達の注文を受けて桃子さんに頼んだ。そして、他のお客の所に行こうとしたら桃子さんに呼ばれた。

「空君、あのテーブルの人は知り合いなのかしら？」

「一応そうですよ。それがどうかしました？」

「時間帯もちょうどいいから、休憩ついでに話してきたら？ 幸い、それほどお客さんもないから恭也達だけでも十分だと思っわ。それからこれを持っていつってゆっくりして頂戴♪」

「分かりました。それではお言葉に甘えて休ませていただきますね」

桃子さんから俺の分のシュークリームとリンゴジュースとイリヤ達が注文したものを貰い、イリヤ達の席に向かった。

「ご注文のシュークリーム四つとコーヒーと紅茶二つとオレンジジュースです。イリヤ、今から休憩なんだけど、もしよかったら一緒にいい？」

「うん、いいよ！ お兄ちゃん達もいいよね？」

イリヤが聞くと三人は快く承諾してくれた。

「ところであなたはどなたですか？ イリヤさんとお知り合いみたい

ですが……」

「あ、そうでした。初めまして。龍神空つていいいます。空つて呼んで下さい。イリヤとはまあ、知り合いですね」

「ああー。あなたがイリヤさんの言っていた空さんですか！ あ、申し遅れました。私はメイドのセラと申します。その説はイリヤさんがお世話になりました」

「妹で同じくメイドのリズだよ。よろしく」

うん。いかにも反対って言葉が似合いそうな姉妹だね。どこかは言わないけど体のある一部分も正反対……。

「あの時は全然話せなかったから俺も自己紹介しとくな。俺は衛宮士郎。イリヤの兄貴だ。改めてあの時のお礼を言わせてくれ。イリヤを助けてくれてありがとう」

やっぱりこの人は真面目だな……。

「どういたしました。ホントは大したことしてないんですけどね。ところでお味はどうですか？」

「とつても美味しいよ！」

「これを作った方に作り方を教わりたくらいです」

残念ながらそのシュークリームは作れないですよ。桃子さんも翠屋を継ぐなら教えてくれるらしいけど。

「いくらでも食べられる」

「今まで食べたことがないくらい美味しいな」

「それは良かったです。なにせ、そのシュークリームはこのお店の人氣商品ですから」

翠屋で働く者としてはこれ以上ないほど大絶賛だった。

「そうだ！ 今日空にお礼をしに来たんだ。美味しさのあまり忘れるところだった！」

士郎さんが突然お礼のことを思い出したらしい。

「アハハ……別にいいんですけど……」

ぶっちゃけ忘れてもらってもよかったんだけどね。

「それでお礼なんだが……何かないか？」

まさかの何も考えてないの!?

「えーつと、そう言われましても……」

「何がいいかな？ 断る？ でも、士郎さんのことだから……ん？ 士郎さん？」

「そう言えば、なのはの父親の士郎さんと名前が一緒だし、二人共さん付けで呼んでるから……」

「あつ、だったら——」

「兄さんって呼んでもいいですか？」

「ブフツ！」

それを言った瞬間、イリヤが飲んでいたジュースを嘔き出した。

「イリヤさん！ お下品ですよ！」

イリヤはセラさんに叱られてテーブルを拭いていた。

「に、〃義兄さん〃？ 理由を聞いてもいいか？」

「実は俺の知り合いに士郎さんと同じ名前の人がいるんですよ。二人共士郎さんって呼んでるから分かりにくくて……。あ、ちなみにその士郎さんという人はあそこで接客してる方です」

「なのはの父親の方の士郎さんを指さすところらに気付いたのかこっちへやって来た。」

「どうしたんだい、空君」

「実はこちらにいる人が士郎さんと全く同じ名前なので呼び方を変えようかと思ひまして」

「ふむ……だったら僕のことを〃お義父さん〃と呼んでもいいんだよ？」

「お父さん……ですか？ それは流石に……」

「そう言うと、士郎さんは少ししょんぼりして立ち去った。」

「それで、兄さんと呼んでも構いませんか？」

「あ、ああ。俺なんかで良ければいいぞ（そういう意味だったか……。てつきり、イリヤとの将来を考えてるかと思つてたんだが勘違いだったな）」

「ありがとうございます、兄さん」

「ああ、よろし——」

「ちよつと待ていッ！ 空、お前には俺という兄がいるだろ!？」

士郎さん改め兄さんが何かを言いかけたところで、恭也さんが割って入って来た。

「え?」

この人はいつから俺の兄になったんだ?

「お前との仲はもはや家族と言ってもいいレベルだ! それなのに! 面識の少ない人を兄呼ばわりするのはいかななものかと思うぞ!」  
確かに恭也さんとの付き合いは長いけど……。

「いや、ただ単に同じ名前が呼びづらから別の呼び方であつてですね。他意は特にないんですけど……」

「それなら父さんをお義父さんと呼んで、俺を義兄さんと呼べばいいだろ!」

「さっき断りましたよ。第一、恭也さんて兄らしいところありました?」

昔からなのはといると睨まれてた気がするんだけど。

「そ、それは……」

「そんなわけで俺がなのはと結婚でもしない限りは恭也さんのままだと思いますよ」

「なん……だと……!」

なんでそんなに衝撃的なこと言われたみたいな顔してるんですか?

「どうか働いて下さい。さつきから美由希さんしか働いてませんよ。俺はちゃんと休憩時間貰ってますし」

美由希さんがメツチャ大変そうにしてる。

「そんなことよりもだな! 俺にとっては——」

「恭也く? いつまでしゃべってるのかしら?」

「か、母さん! 待ってくれ! これには深い理由ワケがあつて——」

恭也さんは桃子さんに首根っこを掴まれて厨房まで引きずられていった。

「な、中々賑やかな知り合いだな……」

「アハハ……」

「……すみません。俺の知り合いがご迷惑をおかけしました。お詫び

「何か作ってきますね」

「空さんはお料理出来るのですか？」

「はい、結構自信あるんですよ」

「ほうほう。真面目で優しく顔もかなり良い方。それに加えて料理が出来る。イリヤ、これはかなりいい物件だよ？」

「そ、それがどうしたの!? 私には関係ないよ！」

「ふうーん、そっか、ならいいけど。いつか後悔しても知らないからね？」

「ウグツ……」

後悔？ 何のことかな？ こういうのは余計な詮索をしない方がいいね。

「じゃあ、少し待ってて下さい」

俺は厨房に入り、すぐにお菓子作りを始めた。

今回作るのは、アップルパイ。

使う材料は、リンゴ、砂糖、レモン汁、バター、冷凍のパイ生地、卵です。

まず初めに、リンゴを1cmに小さく切り分けます。

それをそのままバターと一緒に鍋に入れて炒めて、ある程度バターが行き渡ったら砂糖とレモン汁を入れ、蓋をして10分ほど煮ます。

そして、煮込み終えたのものを焦がさないように水分を飛ばしていきます。

完全に水分を飛ばしたらボウルに入れて冷まします。

ここで重要なのが、冷ますときに〈氷結傀儡ザドキエル〉の力を少し使うと素早く出来ます。

〈氷結傀儡〉が無い場合は氷を入れたボウルの上に置けばいいと思います。

次に、冷凍のパイ生地を解凍させます。

この時に白龍皇デイバイン・デイパイデイングの光翼の「半減」ですぐに解凍させられます。無い場合は解凍されるまで待つてください。

解凍したパイ生地を切り分け、片方には切り込みを入れておきます。

そして、切り込みを入れてない方の上にリンゴを乗せて、上から切り込みを入れたパイ生地を被せます。

パイ生地を乗せたら、更にもその上に溶きほぐした卵を塗ります。これであとは焼くだけです。

180度に予熱したオーブンで20分〜25分ほど焼きます。

しかし、ここでもさらに短縮します。

ブーステッド・ギア  
赤龍帝の籠手の「倍加」で火力を上げます。

すると、あっという間にこんがり焼きあがります。これで完成です。

※赤龍帝の籠手を使う場合は焦げないように注意しましょう。

俺は完成したアップルパイをテーブルに持って行った。

「完成しました。アップルパイです」

「わあー！ 美味しそう！」

「これはすごいな！」

「折角ですし冷めないうちに食べましょうか」

「一番乗りは頂いた！」

全員がアップルパイを口に入れた。リズさんがフライングしていたがセラさんに阻まれた。

『美味しい！』

「お口に合って何よりです」

皆で食べるとアップルパイはすぐに無くなった。

『御馳走様でした！』

「お粗末様です」

イリヤ達とそれから少し話して、会計をした後、店の出入り口まで見送った。

「イリヤ、兄さん、セラさん、リズさん。またいつでもお越しください」

「また来るね！」

「今度は俺も何か振舞うよ」

「その時はぜひ我が家にいらして下さい」

「ゴチになりまーす」

「それではお気を付けて」

イリヤ達がいなくなったところで、休憩時間は終わったので気合いを入れ直した。

「さてと、休憩時間は終わりだね。あと少し頑張りますか!」

今日のアルバイトはイリヤと再会したのと士郎さんという兄ができた。なんだか、不思議な気分だ。今まで姉と呼べる人はたくさんいるけど、兄と呼べる人はいなかったからだろう。

え、恭也さんは違うよ。だってあの人シスコンじゃん。弟は要らないでしょ。さっき言ってたのは弟弟子が欲しかったんだらうね。

「空くーん! お客様に注文聞いてくれるかしら!」

「はーい! すぐに行きます!」

急いで指示されたテーブルに向かった。

「ご注文を……………ど……………う、ぞ」

ヤバイ。冷汗が止まんない。

「それじゃあ、さつき店員さんが楽しそうに話してたのはどこの誰なのか教えてくれないかしらア?」

だって、何か知らんけど怒ってる顔をしてる十香達が目の前にいるんだもの。

「ほ、他のお客様の個人情報は流石に教えられません……………」

「あれえ? お客様は神様って聞いたことがありますう。そういうこと言ってもいいんですかあ?」

「い、いくらお客様といえど、限度がございます」

今すぐ逃げだしたい……………」

「そう。ならば家に帰ってからじっくりと聞くことにする」

よし、逃げよう。逃げるが勝ちだ!

「逃がしません……………ッ!」

逃げようとしたら四糸乃に手首を掴まれた。

よ、四糸乃も怒ってるの!?! 嘘でしょ!?!

『大人しくしなよー』

「これは正当なる裁き。自分の罪を悔い改めよ!」

「要約。お前いい加減にしろよ。一体何人落とす気? 少しは反省しろというこです」

何を反省しろと!?

「……………ざまあ」

七罪のその言葉が一番グサツと来る!

「フッフ、ホントに空さんはどうしようもない人ですね」

「ふむん。これはむくの能力で治せるかの?」

俺の何を治すの!?

「今夜は寝かさんぞ」

それは男が言うセリフじゃないのか!?

「お、これはいいネタになるかも!」

こんなことネタにされるなんてヤダツ!

『私達は惜しい人を亡くしました』

勝手に殺すな!

結局、家で色々大変でした。ええ、それはもう、身も心もズタボロにされたましたよ。

この街の七不思議になりつつある俺の叫びが、今日も街に響き渡った。

魔力集めです！

魔力集めです！

Side空

七月の初旬に入り、季節は夏。

ここ最近ではシア達がよく遊びに来るようになったり、イリヤの家に遊びに行くこともしばしば。

その度にリアスから眷属になれとしつこく言われるのはお約束になっていた。

そして、今日は魔導師組が龍神家に集まって模擬戦やらアドバイスやらと、色々していた。

と言つても囑託魔導師組は仕事があつてここにいないし、ヴァーリも用事があるらしくない。

なのはとフェイトのデバイスはプレシアさんによつて強化されたと聞いた。

強化されてからまだ一度も戦つてないからどれくらい強いか知りたいな……。

「シグナムさん。今どのくらいページ埋まってますか？」

一応ここまでの進捗状況を聞いてみた。

「大体500は過ぎていたな。お前達の魔力が予想以上に多かつたから他から集めた魔力はまだそんなには無いがな」

「お前らの魔力で大分楽なのはいいがよ、スゲー魔力を持つ奴が多くてびっくりだぜ」

「そんなにすごかつた？」

予想は何となくつくんだけど……。

「ええ、そうね。特に空君とヴァーリ君、雄人君の三人は異常に高かつたわ。最初は埋まつたページが信じられなかつたくらいですもの」

ま、当然っちゃ当然だね。俺は特典のおかげで増やそうと思えばまだまだ増えるし、ヴァーリは魔王の血を引いてる。雄人も特典で最初からかなり多めだったけど、今も毎日の特訓で増えてるって言つてた。

「ペース的にはどうですか？ あとどのくらいで終わるとかの目安は

付いてます?」

「そうだな……これだと空達の言う夏休み中には終わるのではないかな? 皆の協力があれば、それほど苦でもないだろう」

「ザフィーラの言う通りだな。大体そのぐらいで終わるはずだ」

「そうですか。あ、最近誰かに視られてるっていうか監視されてる気がするんですよ……」

俺は最近気になっていたことを皆に話した。

「それって空君のストーカーか!？」

俺の発言にはやてがすごく驚いたように声を上げた。

「いや、どっちかっていうとはやての家に行くといつも視線を感じるんだ」

「我々を監視? だとするなら管理局ではないのか?」

闇の書もとい夜天の書は昔にプログラムを書き換えられバグが生じた所為で多くの人に被害をもたらした。そんな危険な力のある物を管理局が探さないわけにはいかない。

「考えられるならそうでしょうね。もしかしたら三大勢力のどれかの可能性も否定は出来なですけど……」

一応、アザゼルさんやフォーベシイさん、ユーストマさんに干渉しないで欲しいと頼んではいるんだけど、はぐれの場合はどうしようもない。

三大勢力とは悪魔、堕天使、天使の三つの勢力のことを指している。

「ハッ、襲ってくるなら返り討ちにするまでだ!」

「あー、それは止めといた方が良いかも」

俺がそう言うのとヴィータが食いついてきた。

「何でだよ! はやてに危険が及ぶかもしれないんだぜ!? 黙って見過ごせるかよ!」

「その人がはぐれとかなら問題ないけど、もし管理局なら無理矢理一方的に罪を押し付けられる可能性がある。そしたらはやてに迷惑掛かるよ」

「チッ……わかったよ」

舌打ちをしながらもなんとか分かってくれたみたいだ。

「ま、もしもはやてが大変な時は管理局ぐらい潰すけどね  
俺がサラツと言ったセリフに皆が固まった。

「……あたし達よりもこいつの方が危険なんじゃねえか？」  
「……否定できないな」

「空君が味方でいてくれてホントに良かったわ……」  
「出来るだけ穏便に終わらせよう……」

四人は何かを強く決意したみただった。

「えへへ、空君が私のためにそこまで……。えへへへ……」  
はやてははやてですごくニヤついていた。

「じゃあ、そろそろ今日の分の魔力集めに行きますか」

「メンバーはどうする？」

「はい！ 私行くわ！」

「私も行かせてください」

「私も」

模擬戦を終えたアリサ、すずか、明日奈が手を上げて言ってきた。

「うん、わかった。後は俺と——」

「私とシャマルで行くでしょう」

「了解です。そうだ、今日の場所は次元世界にしましょう」

「？ どうして？ いつもみたいに冥界か人間界じゃダメなの？」

「俺らを監視してる人をおびき出す為だよ。管理局の魔導師なら俺達に付いてこられるだろうし。それに偶には異世界もいいんじゃない？」

「気分転換的な？」

「そうとも言うし、色んなのと戦った方が修行になるからね」

俺の提案に皆は頷いて賛成してくれた。実際は上級クラスのはぐれに会ったら守れる自信がないという理由がある。

「皆気を付けてな。ちゃんと夕飯までには帰ってくるんやで？」

「ケガしないでね。そんなに心配はしてないけど」

「もちろんです。それでは行って参ります」

はやて達に見送られながら次元世界に転移した。

Side out

S i d e ???

「あいつらが動いた。今回は……どうやら次元世界に行くみたいね」  
「それなら好都合ね。私達も急いで向かうわよ！」

絶対に闇の書を封印する！ お父様の為に！

S i d e o u t

S i d e 空

転移すること数回。ようやく目的地の無人世界に到着した。ここ  
の荒野には原生生物がたくさんいるらしい。

「前から思ってたけど、どうして何回も転移するの？」

態々数回も転移することに疑問があったのか、明日奈が聞いてき  
た。

「それはね、俺達の住む世界だったり目的地を悟られないようにする  
ためだよ。ストーカーがいたら嫌でしょ？」

まあ、今回はそのストーカーをおびき寄せる為なんだけど。

「そんなの当たり前よ！」

「分かったところで、早速蒐集作業始めますか！」

『ああ（ええ／うん）！』

探索を始めるとすぐに原生生物は見つかった。ティラノサウルス  
を思わせるような形をした全長5mはありそうな黒い生き物が三匹  
だった。シア達を襲った魔獣ほどでの強さはないと思う。

ここは明日奈達に任せてみよつと。

「二人一体ね。アリサ、すずか、明日奈の三人でやってみて。（狂三  
は倒された奴からほどほどに“時間”奪って）」

『了解ですわ』

指示を出すと、三人が各々の武器とバリアジャケットを展開した。

「灼天の炎刃！」  
クリムゾン・ブレイズ

アリサの手には炎を纏った刀。

「アイスメーカー  
氷の創造手！」

「さすがの手の甲には氷。」

「ランベントライト  
揺らめく閃光！」

明日奈の手には淡い水色がメインの細身の剣。

そして三人が言っていたのはそれぞれの神セイクリッド・ギア 器の名前だ。ちなみ

に命名したのはアザゼルさん。

「まずは私からよ！ 緋翼ひよくいつせん一閃！」

一番乗りのアリサが炎の翼を背中から生やすと、勢いよく滑空しながら炎の刀で斬り裂いた。アリサがデバイスを持っているため非殺傷なので黒い生物は気絶しただけだった。

「おおー！ 今のすごい！ いつの間にあんな技覚えてたんだね！」

「アレぐらい出来て当然よ！」

なんて胸を張って当然のことのように言っているが、本人は嬉しそうな顔だった。

「中々良い技だな。今度手合わせしてくれないか？」

「望むところよ！」

アリサの技を見て触発されたのか、シグナムさんが手合わせをお願いしていた。

「次は私だね！ 氷の槍！」  
フリーズランサー

さすがが片手を上空に向けると一本の氷でできた槍が生まれ、腕を振り下ろすと同時に槍は黒い生物へと真っ直ぐに突っ込んだ。そして、当たった瞬間、一瞬にして黒い生物は氷漬けになってしまった。

「さすがもすごい！ 一瞬で凍った！」

「そ、そう言ってもらえると頑張った甲斐があったよ」

俺が褒めるとさすがは照れたようで髪をいじっていた。

「それじゃあ、最後は私！ ペネトレイト！」

明日奈が剣に淡い光を纏わせると、高速の三連突きが繰り出され、明日奈が剣を仕舞うと黒い生物は力が抜けたように倒れていった。これにはシグナムさんも舌を巻いていた。

「速いな……。下手するとその内目で追えなくなるかも……」

「フフフ、いつか空君のここだって刺し貫いてあげるんだから♪」

明日奈が剣を向けていたのは俺の心臓辺りだった。

「俺を殺す気!？」

「この子、笑顔で人のこと刺すとか言ってるよ！」

「蒐集終わったわよ〜」

俺が明日奈にドン引きしている間に魔力の蒐集は完了したとシャルさんから伝えられた。狂三の方も影が縮んでいるので終わったことがわかった。

「じゃあ、次行きましようか」

次の獲物を探すために移動を開始した。

数分間探索していると、全長3mほどの大きさの猪に似た生物が数十匹はいた。

「多いな……」

「そうね。これだけの数になるとちよつと骨が折れるわ……」

他の三人も何も言わなかったが同じ気持ちらしい。

「あー、だったら俺がやってもいいですか？」

「何か手があるの？」

「まあ、それなりに。効くかどうかは分からないけど」

霸王色を使って気絶させることが出来ればかなり楽が出来る……  
といいなあ。

俺は猪達の前に降りると、猪達は一齐に俺に気が付き、若干怯えた様子を見せた。

そのことに首を傾げていると、あることを思い出した。

あ、そう言えば俺って動物に嫌われやすいんだっ……。でもその方が効き易いのかな？ とりあえずやってみるか。

一度深呼吸をしてから霸王色の覇気を使った。すると、猪達は次々に倒れていった。明日奈達は何がどうなっているのか分からず、ただ困惑していた。

「シャルさんお願いします」

「……え？ あ、ええ、分かったわー!」

遅れて反応したシャルさんだったがすぐに魔力の蒐集を始めた。その間に、俺は四人に問い詰められていた。

「今の何!? 何したのよ、あんた!」

「いきなり猪が倒れちゃったけど空君はどうやったの!」

「あれだけの数を一気になんて……」

「……お前はホントに人間か?」

「い、今から説明するよ! あと、俺は人間ですからね!」

それから蒐集を終えたシャマルさんも加えてから説明をした。

「覇気、そんなものがあるとは……」

「私達も使うことは出来るの?」

「さつき使った覇王色は限られた人しか使えないけど、それ以外の二つは可能だよ。実際、フェイトやアリシアは使える様になったし」

フェイトとアリシアの名前を出すと明日奈は不満そうな顔をしていた。

「ふーん、フェイトちゃん達には教えてたのに私には教えてくれないんだ?」

「教えるタイミングが無かったと言いますか何と言いますか……。と  
いうか何で拗ねてんの?」

「別に空君が私に隠し事してたからって不満がある訳じゃないよ?」

フェイトちゃん達に教えてるのに私には教えなかったことになんて、  
全然! これっぽちも! 1mmも! 気にしてないから!」

「そ、そう? ならいいんだけどさつきから剣でつつくの止めてく  
ない?」

地味に痛いんだけど……。

「……………」

「無言で刺さないで! あく、もう! わかったよ! ごめん! も  
う許して!」

そっぽを向きながらもチクチクと攻撃してきたのが嫌になってよ  
く分かんないけど俺が悪いみたいなのでとりあえず謝ることにした。

「……デート」

「は……………」

「……デートしてくれたら隠し事してたのキャラにしてあげる」

「何でそんなこ——喜んでデートさせていただきます!」

何でそんなことしなきゃいけないんだよ、と言おうとした途中で首筋に剣を突き付けられた。その時の明日奈の目はヤバかった。さっきの猪なんて視線だけで簡単に殺せそうなほどに。

「うん、楽しみにしてるね♪」

……これは俗に言う脅迫なのでは？

そう思ったが何か言えば殺される気がして黙っていることにした。

「ズルいわよ！ 私ともデートしなさいよ！」

「私もデートしたいな……」

明日奈との会話を聞いていたのか二人もデートをしたいと言ってきた。

「えーそれはちよつとめん——」

『何か文句でも？』

「アハハ、文句なんてある訳無いじゃないですか！ そんなこという奴がいるならぶん殴ってやりますよ！」

明日奈と同じく二人にも武器を突き付けられて、デートするハメになつてしまった。

「お前は将来嫁の尻に敷かれるな」

「まさしく青春ね♪」

実際尻に敷かれそうかもしんないけどそんなこと言わないで！

それと、これのどこが青春なの!? 脅されただけじゃん！

『空さん、途轍もなく情けないですわ……。あ、私とも今度デートしてくださいまし』

「(狂三も!? 何回もしてんじゃん!)」

『読者の方は一度も見てませんのでよいではありませんか』

「(読者? よく分かんないけど分かったよ。デートしますよ。すればいいんですよ)」

『しくしく、空さんがいつになく冷たいですわー。悲しいですわー』

「(ぐぬぬ……。はあ……。狂三、デートしよ)」

ウソ泣きと分かっていてもこれを無視すると後が怖いからなあ……。

『ぼんぼん』

狂三ともデートすることが決定した後もしばらく蒐集を続けた。

「今日はもうこれぐらいでいいですかね？」

「そうだな。私はまだいけるが、三人はキツイだろうしここらが潮時だろう」

三人の方を見ると、ケガは少ないが体力が持たなそうさ。

「それじゃあ、シヤマルさんお願いします」

「ええ」

しかし、シヤマルさんが転移魔法を発動させようとしたところで邪魔が入った。

「待て。その本を渡してもらおうか」

仮面をつけた男が少し離れた所に浮かんでいた。

「嫌だつて言つたら？」

「力づくで奪うまで！」

言い切るとほぼ同時に仮面の男は俺達へと接近してきた。

「シヤマルさんは三人を連れて先に帰って！ シグナムさんは俺と残つてあいつを止める！」

「ほう……やれるものならやってみろ！」

男が殴り掛かってくるとシグナムさんがレヴァンティンで受け止めた。

「(行くよ、狂三！)」

『ええ、あんな雑魚は早く消して差し上げましょう』

「―――〈神威靈装・三番〉ツ！」

周囲の空間が歪み、俺の体に絡みついて、黒と赤で彩られた貴族服と黒のシルクハットに、

右目は赤で左目は狂三と同じ時計になった。

「―――〈刻々帝〉ツ！」

そして、天使を発顕すると両手に古式の長銃と短銃が握られて、背後には巨大な時計があった。

時間を減らすのはやだけど仕方がないか……。

【七の弾】

ローマ数字のⅦの部分から出た黒いモノが、握られた長銃に吸い込

まれた。俺はそれを仮面の男に向けて引き金を引いた。

「ふん、こんなも——」

男が魔力強化で弾こうとしていたが、それは間違いだ。腕に触れた途端に男は時が止まったように動かなくなった。「七の弾」の効果は相手の時間を止める。フォービドゥン・パロール・ビュウ停止世界の邪眼でも止められるが実力差があると効かない。

それを考慮して、今回は狂三の力で止めた。

よし、四人は無事転移出来たか。

「シグナムさん！」

「分かっている！ はあああああああああッ！」

俺が言うより早く、シグナムさんは男に斬り掛かっていた。男は【七の弾】の効果で切れて動けるようになっていたが、その時にはすでにシグナムさんが目の前にいて、レヴァンティンを振り下ろしていた。

「——なッ!? グハッ!」

男は斬られたものの、気絶するには至らず、シグナムさんから距離を取った。

「すまない。仕留めきれなかった……」

「次で決めればいいじゃないですか」

「それもそうだな。それよりも、さっさと終わらしてお風呂に早く入りたいものだ」

シグナムさんはお風呂が好きらしい。気が付けば何時間も入っていることもあるとか。

「その意気です。援護は任せて下さい」

「二対一などあまり好きではないが、場合が場合だ。全力で叩きに行くぞ」

「え、相手も二人ですよ？ 魔力は隠せてますけど、気配は全然です」「なにッ!? 全く気付かなかった……。それも覇気の花なのか？」

このことにはシグナムさんだけでなく仮面の男も驚いていた。

「そうです。ちなみに場所は俺らの背後ですよ。ね？ もう一人の人」

背後の何も無い空間に俺が躊躇いなく引き金を引くと、銃弾は何かによって防がれた。

「……バレるとは予想外だったな」

ノイズのようなものが取れると、仮面の男と同じ姿の男がもう一人増えた。

「だが、そんなことはもうどうだっていい」

「こいつらを倒して、情報を吐かせよう」

「無理無理。あんたらじゃ俺達は倒せないよ」

「ガキ風情が調子に乗るなよ!」

俺の挑発でムキになった男がシグナムさんに攻撃を始めた。

「シグナムさん、そつちは任せます」

「ああ、我らヴォルケンリッターに二対二での負けは無い!」

確かにシグナムさん達は二対一ではなのは達には圧勝してたけど、初めて会った頃や模擬戦で俺とヴァーリに負けたのはカウントされないのだろうか？

なんてことを思ったが、この空気ですんなことは流石に言えなかった。

まあ、任せておけば何とかなるでしょ。

こつちはこつちで倒さなきゃなんないし……。

「さあ、俺達の戦争<sup>デイト</sup>を始めようか」

久々に決め台詞を言ってから、もう一人の相手へと攻撃を始めた。

男の方も魔力弾をいくつも放ってきたが手を突き出すだけで不思議な壁が形成され、すべて防いだ。

俺の相手は遠距離型でシグナムさんの方が近距離型か……。九喇嘛使った方が早く終わるかな。

「(狂三。能力はここまでにしとくね。こんな相手に勿体無いから)」  
『分かりましたわ。空さんがそうおっしゃるなら私は何も言いませんわ』

相手から距離を取ってから霊装を解除した。

「なんだ？ 諦めたのか？」

「そんな訳無いじゃん。この力をお前如きに使うのは勿体無いって

思ったんだよ」

「馬鹿にしてるのか？」

「そうだけど。伝わんなかった？（九喇嘛、行くよ!）」

『ワシの出番か。あんな雑魚一分で片づけるぞ!』

「子供が粹がるなよ……ッ!」

男が魔力弾を放ってきたときにはすでに九喇嘛モードへと変わっていた。そのおかげで容易に回避が出来た。

「なんだその姿は!」

「敵にそんなこと教えると思う? そもそも説明がメンドイからしないけど……」

俺の姿が変わったことに驚いていたが、そんなことを気にしている場合ではない。俺は男に高速で接近しながら、両腕から魔力の腕を作り出し左右の掌に魔力を乱回転させて集めて蒼い球体——螺旋丸を作った。

「!? は、速い!」

「螺旋連丸!」

そして、反応の遅れた男の腹に螺旋丸二つを全力で叩き込んだ。相手は螺旋状に吹き飛ばされ、そのまま地面に落ちた。

《バインドで拘束しておきますか?》

「うん、お願い」

ブレイブに頼んでバインドで拘束した。拘束されたのを確認してからシグナムさんの援護に向かうことにした。

一応、この人も連れてくか。最悪記憶は封印すればいいし。

Side out

Side シグナム

私——シグナムは男の一人を引き受けて、接近戦で勝負をしていた。

どうやらこいつは私のように接近戦が得意のようだな……。それが戦っていて分かったことだった。

「ところで、貴様の目的は何だ？ 闇の書を手に入れてどうするつもりだ？」

「……貴様には関係のないことだ」

当然だが答えてはくれないか……。

「まあ、何にせよ我らの目的を邪魔するのならば斬るだけだ！」

私が男に斬りつけると、シールドで防がれた。だが、先程斬られたダメージが残っているのか、男は態勢を崩した。

今が好機！

「レヴァンティン！ カートリッジロード！」

《Load Cartridge》

私のデバイス——レヴァンティンから葉莖が排出されると、レヴァンティンが炎を纏った。

「——紫電一閃ッ！」

炎を纏ったレヴァンティンで男を縦に斬った。

「グッオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

男は魔力強化した腕で防ごうとしていたが、斬撃はあっさりとその防御を壊した。

毎日のように空達と模擬戦をした甲斐があったな……。こちらもダメージは合ったものの、おかげで少しは楽に勝てた。

私は気絶した男をバインドで拘束すると、丁度空がもう一人を連れてやって来た。

S i d e o u t

S i d e 空

「シグナムさん、終わりましたか？」

「見ての通り、たった今終わったところだ」

シグナムさんのダメージが酷いな……。

「シグナムさん、今治療しますね」

「……すまないな」

「謝らないで下さい。これくらいなんでもないですから。」

両手の指に緑の宝石が埋まった指輪を付けてシグナムさんのケガの部分に当てると、光が傷口を優しく包み込んだ。

「なんだか、温かい光だな……」

シグナムさんが感慨浸ったように呟いた。

しばらく、治療をしていると完全に傷は無くなった。

「それじゃあ、俺達はいつらも連れて帰りますか」

「こいつらも連れて行くのか？」

「何が目的なのか聞き出さないといけませんから」

「だが、こいつらが話すとは到底思えんが……」

「そういうことなら家にはスペシャリストがいますから。（ね、狂三）」

『ええ、お任せ下さいな』

「……？」

シグナムさんは心当たりがないのか首を傾げた。

それも無理はない。だって、十香達の力についてはまだ説明してないのだから。

「さてと、帰り——」

「待て！……こちらは管理局の者だ。大人しく——って空じゃないか！」

声のした方を向くと、クロノが驚いた顔をしていた。それと、ついでになのは達もいた。

「おおー、クロノ。久しぶりー。なんでこんなところにいるの？」

「ああ、久しぶり——じゃない！……こんなところで何をしている！」

「何って……このお姉さんとデート？」

デートと言った瞬間になのはとフェイトとアリシアと愛衣から一斉にデバイスを向けられた。

「あ、あの……冗談なんでそのデバイス降ろして下さいマジで調子に乗りました真に申し訳ございませんでした！」

その場で土下座を決めて謝った。

「……お前にプライドは無いのか？」

プライド？……そんなモノは犬にでも食わせておけばいいんだよ！

「……そろそろいいだろうか？ とりあえず君達二人は僕らに付いて来てくれ」

「どうして?」

「それは————君達が闇の書に関わっていると報告があったからだ」

イギリスに行きます！

イギリス行きます！

S i d e 空

クロノ達に連れられて、久々にアースラの中に入り、リンデイさんやエイミイさんと再会した。

捕まえた二人は別の部屋で監視されているらしい。

「久しぶりね、空君」

久しぶりと言っても、ジュエルシード事件から一月も経ってない。

「ご無沙汰です、リンデイさん。それでご用件は何でしょう？へ何でバレたと思う？」

俺はこつそり念話で雄人と愛衣に聞いた。

なのは達がバラすとは思えないな……。

「へお前らが捕まえた仮面の男だな。実はそいつらが結構今回の事件に関わってるんだ」

「へはやとあかりに援助をしている人物、ギル・グレアムの使い魔二人が正体よ。その二人が管理局、というよりクロノ達に伝えたいんでしようね」

「へそつか。教えてくれてありがとう」

ギル・グレアムって人が二人の男の背後にいるのか。

二人にお礼を言ってから念話を切った。

「それは先程クロノから聞いてるとは思うけど、改めて聞きます。あなたとシグナムさんというそちらの方は闇の書に関わっているのかしら？」

「へ正直に答えるのか？」

「へはい。愛衣がいるので嘘は吐けないですから。でも———答えはいいえです」

「へどういうつもりだ!? 正直に話すのではなかったのか!？」

俺の答えにシグナムさんが驚いていた。事情を知っているのは達も驚いた表情をしていた。

「闇の書って何ですか？へ俺らの目的は夜天の魔導書であって闇の書

「ではないです」

ある意味正直に答えたと思う。

「それは屁理屈なのではないか……?」

「へいいんですよ。だって、闇の書って名前は誰かが勝手に付けて広まっただけですから」

そう言うと、シグナムさんは困ったように唸っていた。

「……知らないのであればそれでいいわ。引き留めちゃってごめんなさいね」

あつさりと身を引いたことに軽く拍子抜けした。

クロノが何か言ってくると思ってたんだけどなあ……。まあ、あの時本を持っていたのはシャマルさんで、クロノ達が来る前に帰ったから証拠があるわけでもないし、強くは言えないのかな？

「いえいえ。それよりもあの二人の男は頼みましたよ。……多分、ストーカーなんで」

「そ、そうなの？ まあ、分かったわ。任せてちょうだい」

「じゃあ、失礼します。あれ、そう言えばユーノとアルフは？」

今更ながらにユーノとアルフがいないことに気が付いた。

「ああ、フェレットもどきなら無限書庫という場所で調べものをしてもらっている」

「アルフも手伝いで行ってるからしばらくは帰ってこれないんだよ」

無限書庫？　なんか面白そう！　って、アルフはしばらく帰ってこないのか……。

「ねえ、クロノ。そこに行つて来てもいい？」

「残念ながら管理局の者でないと立ち入ることは出来ないぞ。フェレットもどきは一応管理局の手伝いという名目で入っている。まあ、空が囑託魔導師になるなら話は別だがな」

「むー！　クロノのケチ！　ハゲ！　中二病！　まっくろくろすけ！

頑固者！」

思いつく限りの軽めの罵倒をして不満だということを伝えた。中二病と言ったのはクロノが14歳だからだ。

「何でそうなる!?!　これは規則だからどうしようもないんだぞ！　あ

と、ハゲとらんし、中二病でも無いからな!？」

「え、じゃあ、他のは認めるんだ……」

「自分でも分かってたんだ……」

「はあ……。まあ、言いたいことは言ったんで帰りますね。行きましようかシグナムさん。」

あ、皆は仕事頑張つてねー。バイバーイ」

部屋を出て転移しようとしたが、俺はそれを辞めて、あの二人がいる場所へと向かった。

「待て。どこに行くつもりだ？ 帰るのではなかったのか？」

「その前にあの二人の目的を知りたいんです」

「……そうか。なら、私も付き合おう」

「すみません。勝手なことをして」

「構わん。お前は主の為に頑張ってくれてるのだから。感謝してる」

「それほどでもないですよ。まだまだ頑張らないと」

「そうだな。あと少しだけ頑張ろう」

そんな会話をしているうちに二人がいる部屋の前に着いた。俺は影を伸ばし、狂三に中を確認してもらって二人はまだ気絶中だと聞かされた。

「さてと……うん、問題ないね。二人はまだ寝てる。入りましようか」

部屋に入ると二人はベッドに拘束された状態で寝かされていた。

「狂三」

俺の中にいる狂三に頼むと、狂三がすでに霊装を着た状態で出て来た。

「!? お前は空の姉ではないか! どういうことだ、空!」

突然目の前に現れた狂三にシグナムさんは警戒心を抱く。

「説明は後でします。狂三、お願いね」

「はい、お任せください。〈刻々帝<sup>ザフキエル</sup>〉——【二〇<sup>ユツ</sup>の弾<sup>ダ</sup>】」

狂三の背後に現れた天使——〈刻々帝〉のXの文字が刻まれた場所から出た黒いモノが短銃へと吸い込まれた。その銃で男の一人と頭を横に並べた俺を撃ち抜いた。そして、俺の頭の中にこの人——

―リーゼアリアの記憶が流れ込んできた。

……なるほどね。こりや闇の書が欲しい訳だ。

「貴様！ 何をしている！ 何故空ごと撃った!？」

説明を受けてないシグナムさんが狂三にレヴァンティンを向けていた。

「やれやれ。ちゃんと見て下さいまし。空さんは無傷ですわよ」

「そんなわけ――なに……？ これは一体……」

「今のは撃ち抜いた対象の過去を伝えるという技です。驚かせてすいません。狂三、ありがと。もう戻っていいよ」

「それでは失礼いたしますわ」

貴族のようにスカートを軽くつまんで一礼してから俺の中へと戻っていった。

「これで、ここにはもう用はありません。今度こそ帰りましょうか」

俺は転移魔方陣を展開して、龍神家へと帰った。

転移が完了すると、先に帰ったシヤマルさん達四人が迎えてくれた。

「もう、あまりに遅いから心配したわ!」

ただいまより先にシヤマルさんから怒られた。かなり心配をかけたみたいだ。

「……すまない。情報を集めるためにちよつとな……」

「俺達がやってることはあの仮面の男が管理局に伝えたみたいでバレました」

「それって不味いんじゃない?」

不安そうに尋ねてきた明日奈だったがそうでもなかったことを伝えた。

「いや、関わりがないって言ったならよく分かんないけど見逃してくれな」

でも、どうしてあっさり見逃してくれたんだろう……。記憶を見た限りじゃ、クロノもリンディさんも闇の書を憎んでるはずなのに

……。いくら俺達が犯罪をしてないとはいえ、知り合いからの情報を信じないのかな？

記憶を見てから何度考えても答えにありつけない。いつそのこと二重の力で調べるかとも考えたが、それはやはりダメだと思い、使うのは止めておくことにした。

「で、これからどうすんの？」

「うーん、とりあえずイギリスに行ってギル・グレアムさんと話し合うこと……かな？」

リンディさん達と同じように被害者のはずのあの人が、どうしてもやて達の援助をするのかが気になるし、これからどう動くのかも知っておきたい。

「え、イギリス!? あの外国の!?!」

「それ以外何があるのさ……」

「どうやって行くつもりなの?」

「クロノの知り合いみたいだから、頼めば行けんじやない?」

「うわー、超行き当たりばったりな考え……」

明日奈だけでなく他の四人からも変な目で見られた。

「そんなに褒めないでよ。照れるじゃん」

『全くもって褒めてない!』

うん、知ってた。

「まあ、それはさておき。またアースラに戻んのかあ……」

関わりはないと言っておいたそばから戻るのは、正直進まないなあ……。でも、ここで止まってもはやては救えない。だったら動くしかないし、頼れるものはなんでも使う!

後曰。

「そんなワケで俺、龍神空と!」

「私、八神あかりと!」

「私、八神はやては!」

『イギリスにやってきましたー! イエーイ!』

『よしのん達もいるよー』

イギリスの空港に着くやいなや、三人で仲良くセリフを言いきってハイタッチを決めた。

本人達の強い要望もあり、念のために十香達も俺の中に入れて連れて来た。

「どんなワケだ！」

「まったく……これだからクロノは……」

ノリが悪いクロノに俺達はやれやれと言った仕草をしていた。

「そうやで。あんまりカリカリしてると将来禿げるで」

「友達少ないでしょ？ 可哀想に……」

俺の後に続いてはやとあかりもクロノを弄った。

「余計なお世話だ！ 僕にだって友達ぐらいいるからな！ とうるか君達二人は初対面なのに失礼な奴だな！」

クロノの顔が今にも噴火しそうなぐらいに真っ赤だった。だけど、俺達は煽るのを止めない。

「嫌やわー。失礼じゃなくてフレンドリーって言って欲しいで」

「そうだそうだ。だから真っ黒チビ助って言われるんだよ。……

聖書の神<sup>ヤハウェ</sup>かっつての」

「誰が真っ黒チビ助だ！ それ以上言ったら置いてくぞ！」

『酷いッ！ あんまりです！ こんな少年と一緒にされるなんて！

ただでさえ出番が少ないというのに！』

それは聖書の神が言っている言葉なのだろうか……？ まあいいや。

「ええー、こんな知らない土地に年下の子供を置いてくの？」

「それは引率者としてどうなのかねー？」

「責任感や年長者としての自覚が足らんとちやう？」

「お前達……ッ！ いい加減に——」

「おお、無事到着したようだね」

クロノがそろそろ本格的に怒りそうなので謝ろうとしたら、おじさんが声を掛けてきた。

この人があの使い魔二人の主——ギル・グレアムさんか……。

「ッ！ お、お久しぶりです！ グレアム提督！」

クロノはグレアムさんの方に振り返り、慌てて挨拶をしていた。

「ハハハ、そう畏まらなくてもいい。それよりも、八神家の二人は分かるが、その少年がクロノ君の言っていた少年かね？」

「そうです。こちらは僕の友人の龍神空と言います」

「こんにちは、ギル・グレアムさん。クロノから色々聞かせていただきましたよ。なんでも、クロノのお父さんの元上官だったとか」

「……ああ」

グレアムさんは悲しそうに呟いた。

「やっぱり、辛い思い出みたいだね……。ちょっと悪いことしちゃったなあ……。」

「それよりも、ここにいっても何も無い。私の家に向かおうじゃないか」  
俺達はグレアムさんが運転する車に乗り、グレアムさんが住む家へと向かった。

グレアムさんは町の中心から少し離れた所に住居を構えていた。そして、俺は着くやいなや気まぎれになった。理由は二人の少女が睨んでいたからである。

「うわー……リーゼロッテとリーゼアリアだっけ？ 殺気がすごいんだけど……。というかどうやってアースラから逃げたんだ？ その後俺が二人の正体を教えたならクロノが落ち込んだなあ。」

俺達はグレアムさんに案内されて、客間に五人は座った。使い魔二人はお茶を出すためにキッチンに入った。

「さて、聞きたいことはたくさんあるだろうが、まずは八神はやて君、あかり君。手紙では言葉は交わしているが、こうして直接会うのは初めてだな。住んでいるところが遠くて中々会えなかったがようやく会えて嬉しいよ」

「私もです。手紙の内容で想像してた通りに優しそうなおじさんでしたから」

「ハハハ、そうかそうか。それはよかったよ」

どこか安心したように、嬉しそうにグレアムさんは笑っていた。

「いつも支援をして下さってありがとうございます」

「気にしないでくれ。子供が二人だけで見過ごせなかっただけだよ。さあ、挨拶はこれぐらいでいいだろう。龍神君、君の聞きたいことは何かね？」

「では、単刀直入に伺います。あなたの目的は何ですか？」

遠回しに聞いていても時間の無駄だから、一気に聞くことにした。

「はて、目的とは何のことだね？ 私には心当たりが——」

「闇の書」

その単語が出た瞬間に、グレアムさんの表情は苦々しいものへと変わった。キツチンから現れた二人はものすごい形相で睨んできた。

「ッ!? ……どうして君がそれを？」

「あなたも知ってるはずです。ここにいる八神はやてが今代の闇の書の主だということを」

はやてが闇の書の主であることは俺がここに連れてきてもらうためにクロノにもすでに知ってもらっているのですが、俺達の方は誰も驚きはしなかった。教えた際に、黙秘していた理由やウソを吐いた理由など色々聞かれたが、今は割愛。ただ、その後にはクロノには闇の書に対する個人の憎しみよりも、誰かを、はやてを救うために協力すると言ってくれた。

「それで、答えはどうなんでしょうか？」

「……ああ、私は復讐の為に闇の書を探していたよ。そして見つけた。それで、アリアとロツテに頼んで完成させて、はやて君ごと闇の書と共に封印するつもりだったよ。……今のを聞いてどうだね？ 私は君達が思っているような優しい人間ではなかったら？」

自嘲気味にグレアムさんははやてに尋ねた。だが、はやてはその首を横に振った。

「そんなことはありませんよ。例えそれが事実でも、私はグレアムおじさんが手紙をくれるのが嬉しかったし、毎回お姉ちゃんと楽しみにしていました」

「あんなに優しい文を書く人が本当に悪い人だとは思えませんよ」

二人の優しさに自分の頬が緩むのがわかる。

「出来れば、その……理由を聞いてもいいですか？ どうして憎んで

いるのかを」

「? それを聞く必要は君には無いはずだが……」

「こんななんでも一応今代の主なんで、聞いときたいんですよ」

「……わかった。君が聞きたいのならば、過去に起こったことを話そう」

しばらく迷ったのちにゆっくりと語ってくれた。グレアムさんが闇の書を憎むようになった理由を。

「——以上が私の過去だ」

語り終えたグレアムさんは一息ついてソファアの背もたれに体を預けてゆったりとしていた。

話を纏めると、グレアムさんの部下だったクロノの父——クライド・ハラオウンさんと共に確保した闇の書の運搬をしていた。その途中でクライドさんの乗る艦で闇の書は発動してしまい、艦の制御を乗っ取られた。クライドさんはギリギリまで暴走を食い止めるために艦に残っていたが、暴走していた艦はグレアムさんの艦に攻撃しようとしたために、クライドさんの要求でグレアムさんの艦はクライドさんの乗る艦を沈めて、彼を死に追いやってしまった。

そして、多少の犠牲を出そうが闇の書を封印するために使い魔二人に指示を出して、今に至るというわけだ。

でも、おかしな点が一つあるな……。

「一つ聞いてもいいですか?」

「それは構わないがどうかしたのかね?」

「どうして、管理局の運搬中に発動したんですか?」

「? それはどこもおかしくはないんじゃないのか?」

クロノ以外にもどこもおかしくはない、といった表情をしていた。

「いや、あの本は魔力を集めることで完成するんだ。だから、発動したってことはその時その場にいた誰かが魔力を集めて完成させてつてことになるんだよ」

「それってつまり……」

「意図的に暴走を引き起こしたって事なん!?!」

「もし、それが事実なら……」

「管理局の誰かが行った……。空はそう言いたいんだな？」

俺の考えは皆に伝わったようだ。

「うん、そう考えるのが妥当じゃないかな」

「でも、どうして暴走なんて引き起こしたんだろう？」

「さあ？ グレアムさんに心当たりはありませんか？」

「特には……いや、もしかすると上層部が関わっているのかもしれない……」

はあ……。それが本当なら管理局って腐ってるなあ……。

「まあ、それは後で調べるとして。グレアムさん、これからあなたはどうしますか？」

「バレてしまった以上は無意味だろうから、自分の罪を償うことにしようと思っっている」

「罪？ 何か悪いことしたんですか？」

俺の言ったことに誰もが言葉を失った。

「おい、それはふざけているのか？」

クロノが怒気を含んだ声で尋ねてきた。ついでに使い魔に関してはずっと睨まれてる。

「ふざけてなんかないさ。もしグレアムさんが闇の書のことを言っているなら罪なんて何も無いじゃんか。二人に襲われはしたけど返り討ちにしたから問題ないし、むしろ悪いのこつちじゃない？ やり過ぎたかなーって思ったぐらいだからね。それ以外には何かある？」

「……言われてみると目的は未遂に終わったわけだ。それなら問題ない……。のか？」

俺の意見にクロノは納得した（？）ようだった。

「しかし、私は彼女達を騙して接していたんだ。それは許されないことだろう」

「はやてとあかりはどう思う？」

「私には優しいおじさんやなーってことぐらいしか思わないで」

「私も同じかな。特に何かされたわけでもないし。お金も貰ってるからね」

「だそうですが、それでもまだ罪がどうか言いますか？」

「……………ハハハ、完全に論破されてしまったな。何も言い返せない」  
グレアムさんは最初と同じように優しそうな笑い方をしていた。

「さてと、話し合いは終わったね!」

「そうやなく。話してる時なんて心臓バクバクだったで〜」

「でも、きちんと話合えてよかったよ」

「君たちには内心冷や冷やしていたぞ。特に空にな」

話し合いが終わったので、一気に気が抜けてソファーにもたれ掛かった。

「あ、グレアムさん、俺達に協力してくれませんか?」

暴走する管制プログラムの実力がわからないため、出来るだけ多くの魔導師がいた方が楽になるはずだと俺は思ってたグレアムさんをお願いした。

「それは構わないのだが……何か手はあるのかね?」

「うーん、多分何とかなるはずですよ」

「多分って……大丈夫なのか?」

呆れたようにクロノにツッコまれた。

「いいだろう。アリア、ロツテ」

『はい、お父様』

「話は聞いていたな? これから彼らの手伝いをしてくれ」

『分かりました!』

「それからクロノ、君にはこれを託そう」

そう言っただけでクロノに手渡されたのは一枚のカードが渡された。

あれはデバイスかな?

「これは?」

「エターナルコフィンという氷結魔法が登録されてるデバイス——  
—デュランダルだ。今回のことにきつと役に立つだろう」

予想通りクロノに渡されたのはデバイスだった。

「ありがとうございます。必ず役立ててみせます」

お礼を言っただけでクロノが立ち上がり、帰ろうと言ってきたので頷いて付いて行った。

「それでは失礼します」

俺達も頭を下げてから部屋を出て行った。

「それでこれからどうする？　一応泊まる予定でここに来たわけだが……」

「やっぱり観光でしょ！」

「賛成や！　折角、こんなところに来れたんやから色々観なきや損やで！」

「私も観光してみたい！」

「わかった。では、先にホテルに荷物を置いて行こう」

『はい』

クロノの提案に賛成してホテルに荷物を置いてから四人で色々観光した。それから、ホテルに戻ってから、観光ではしやぎ過ぎたのかすぐに眠りについた。

ホテルに泊まった翌日。

目が覚めると、左腕が動かせなかった。横を見ればはやてがスヤスヤと気持ちよさそうに寝息を立てていた。

「……何してんだか。それより時間は——まだ5時前って……」

うーん、二度寝するのもなあ……。あ、散歩にでも出かけるかな。折角のイギリスの朝なんだから。

俺ははやてを起こさないように引き離し、着替えて外に出た。時間的に日はほんのわずかしか昇っておらず霧もかかっている薄暗かった。

「よし、公園で軽く体を動かそうっと」

昨日の観光で近くに公園があつたのでそこに行くことにした。

「十香達はまだ眠ってるから力は使わないでおくとして。ここはブレイブ使って遊ぶか。起きてるよね、ブレイブ」

問いかけるとすぐに返事が返ってきた。

《もちろんです。私は何をすればいいですか？》

「そうだなあ……あ、魔力で球体作って、それでリフティングでもしようか。ブレイブは球体の維持をお願いしてもいい？ あと結界よろしくね」

《了解です。いつでも始めていいですよ》

「それじゃあ早速、レッツトライ！」

俺は魔力の球体を作って落とさないように足で何度も蹴り上げた。時折、頭や膝、肩、背中など、体全体を使ってリフティングを楽しんでいた。

《マスター。誰かが結界内に侵入しました》

十分ぐらいリフティングをしているとブレイブが知らせてくれた。

「知り合い……じゃないみたいだね」

《はい。方向はマスターから見ても後ろです》

後ろに振り返ると、シルエットは見たがそれ以外は霧が邪魔で何も見えなかった。だが、徐々にその人は近づいてきて姿がようやく見えた。

あれは――

「老人だね」

現れたのはグレアムさんみたいな顎鬚をしたおじいさんだった。

《ええ。ですが警戒はしておきましょう。ここに入れるということは普通の人間ではありませんから》

言われるまでもなく、俺はいつでも動けるように構えていた。

「なんだ、結界が張られてたから誰がいるのかと思えば、ただの子供か」

「……あなたは何者ですか？」

「人に名前を聞くときは自分から。そう親から教わらなかったのか？」

「俺に親は居ません。すでに他界しています」

正確にはこの世界には最初からいないし、前世に関しては全く憶えてない。

「む、それは悪いことを言ったな。すまなかった」

「あ、いえ、こちらこそ失礼でした。すみません」

いきなり謝られたことに驚いてこちらも謝った。

「あ、俺は龍神空つていいいます。空でいいです」

「キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ。それが私の名だ。長いから好きに呼ぶといい」

「じゃあ、ゼルレッチおじさんと呼ばせていただきます。それであなたは何者ですか？ 結界内に入れるということは普通の人ではないですよ？！」

「ああ、そうだな」

俺の質問であつさりと正体をバラした。

「私は———魔法使い」だ」

この人が、かの有名な「魔道元帥」や「宝石翁」の二つ名や、第二魔法「並行世界の運営」の使い手だと俺が知ることになるのは、今からそう遠くない未来のことだった。

狂三とデートです！

狂三とデートです！

S i d e 空

イギリスから帰って来た俺達は龍神家に集まってリーゼ姉妹やクロノやリンディさんを紹介した。

「とまあ、なんやかんやで管理局のクロノ達も手伝ってくれることになったから仲良くしてね」

紹介が終わってそう言ったが、守護騎士達とリーゼ姉妹は睨み合っていた。

「……空、こいつらは本当に信用できるのか？」

はやての命が狙われたんだから信用出来ないのも無理ないか……。

「大丈夫ですよ。信用できます」

「なんでそう言いきれるんだよ!? 敵だったんだぞ!？」

「„だった”でしょ？ なら、今は問題無しじゃない？」

「でもねえ……そう簡単にはちよつと……」

「それだけでは信用には至らないな」

「じゃあ、こういう時はアレしかないですね」

『アレ?』

全員が首を傾げていた。

「ズバリ！ You達仲が悪いなら戦って仲良くなっちゃえYO！」

『……………は?』

「青春漫画でよくあるやつですよ。最初は険悪だけど戦いが終わって相手を認めるっていう」

「なるほどなる。それはいいかもしれんで」

はやてと同じように何人かは頷いていた。

「シグナムさん達とクロノ達はそれでいいですか？」

「……いいだろう」

「わーったよ。やればいいんだろ、やれば」

「クロノ達は？」

「それで信用してもらえらなら安いモノさ」

「ついでにこの前のリベンジもさせてもらおうよ！」

誰も異論はないみたいなので試合をすることにした。

「そんじゃ、俺はこれから用事があるからあとよろしくね」

「ああ、分かった」

「どこかに行くの？」

「え、ああ、ちよつと買い物にね」

実際には別の理由があるけどね。

「ふくん。で、ホントは？」

「へ？ だから買い——」

「私にウソが通じないことを忘れたの？」

普段からあんまり使ってないって愛衣が言ってたからすっかり忘れてた！

「女の子？」

「いや、そんなわけ——」

「はい、ダウト」

やっちゃった……。

「もしかして……デート、とか言わないわよね？」

『!?』

デートという単語に何人かが反応してこちらを見た。

言えばバレるから黙ってればいい！

「……………」

「沈黙は肯定として受け取るわよ。つまり誰かとデートするのね？」

って今の質問に黙ってたらダメじゃん！

「……………はい」

「誰と？」

これは黙っていても問題ない質問だから黙っていることにした。

愛衣の特典は嘘かどうかわかるだけだ。つまりYesかNoで答えられるものしかわからない。

「なのは達の中で今日デートする人はいる？」

聞かれたなのは達は一斉に首を横に振った。

「(誰もウソを吐いて無い……) 相手は私達の知ってる人？」

「いや、何でさっきから根掘り葉掘り聞いてくんの!？」

「気にしないで答えてちょうだい」

「無茶苦茶気にするよ!」

お前は夫の浮気調査を依頼された探偵か!？」

「と、とにかく俺は用事があるからもう行くね! 絶対に付けてくるなよ!」

急いで自分の部屋に戻って着替えてから、待ち合わせの場所へ向かった。

S i d e o u t

S i d e 愛衣

私——天河愛衣は空君がデートすると聞いて、相手が誰だかわからないまま逃げられてしまった。

本人からは付いてくるなど言われたが、そう言われて付けないわけがない。

ええ、わかってるわ空君。あれはついてこいっていうフリよね?

「なのは、フェイト、アリシア、アリサ、すずか、明日奈、はやて、分かってるわよね?」

『もちろん!』

「流石に今それはマズイン——」

『O☆H A☆N A☆S I Iしたい?』

「……な、何でもない」

「ドンマイ、ヴァーリ君……」

私達の迫力に負けてヴァーリ君は大人しく引き下がった。

賢明な判断ね、ヴァーリ君。さあ、空君のデートの相手は誰かしらね? 相手によっては……フフフ……。

あとのことはリニスさん達に任せて私達は空君を尾行し始めた。

S i d e o u t

ツ!? 今背筋に悪寒が……。いや、気のせいかな？

まあ、いいや。それよりも早く待ち合わせ場所に行かないと待ち合わせ場所の駅前に着くと、デートの相手を探し始めた。

「さてと、どこに——」

「だーれだ？」

突然視界が暗くなったと思ったら、女の子の声が聞こえた。

「狂三でしょ？」

「正解ですわ♪」

問題に正解すると、狂三が手をどかしたので俺は後ろに振り向いた。

「よく分かりましたわね」

「今日デートしたいって言ったの狂三の方じゃんか」

狂三は「そうでございましたわね」と言って小さく笑った。

「それにしても……」

？ 俺をジロジロ見てどうしたんだろう？

「狂三？」

「フフ、普段の空さんは可愛らしくていいですけど、こちらの大人に变身したのもカッコ良くて素晴らしいですわ」

「そ、そうかな？ でも、そう言ってもらえると嬉しいよ」

実は十香達とデートするときは〈ハニエ魔女〉で姿を変えている。

以前、その方がデートらしいと皆に言われて姿を変えることにした。

今日は狂三が相手なので、俺は高校生の姿になっている。

あと、五、六年したらこうなるかなあ？

「それでどうでしょうか」

「どうって……何が？」

「もう、服のことですわよ」

少し拗ねたように頬を膨らませプイッと横を向いた。

「え、ってあれ？ いつもと違うのはどうして？」

狂三をよく見てみると驚いた。いつもの狂三だったら夏でも黒で

統一されたブラウスやロングスカートなのだが、今日の狂三はフリルをたくさんあしらった白いノースリーブに赤と黒のチエツクの膝丈程のスカート。二つに結った髪と片目を隠す前髪、黒いタイツは相変わらずだが。

「わたくしだって女の子なんですよ？ 折角のデートなのにいつもと同じでは飽きてしまいますわ」

「……そっか。うん、とっても似合ってる。いつもの狂三も可愛いけどこっちもアリだね」

狂三もそういうことに興味が出て来たのか……。

「そ、そうですか……。頑張った甲斐がありましたわ」

照れたようにそれでいて嬉しそうにしていた。

「うんうん、将来狂三の彼氏になる人が羨ましいね」

「はあ……」

え、何で溜息吐くの!?

「……流石は空さん、と言ったところでしようね」

よく分からないけど多分褒められてないんだろうなっただけはわかった。

「まあ、いいですわ。早く行きましょう。時間は限られていますし」

「うん、俺達のデートを始めよっか」

S i d e o u t

S i d e なのは

私——高町なのはは絶賛空君のデートを尾行中なの。

そして、空君のデートの相手はなんと狂三さんだったの！

「あの人って空でいいんだよね？」

大きくなっていった空君に未だ確信が持てないのかフェイトちゃんも聞いてきた。

「ええ、間違いないわ」

「高校生ぐらいの空かあ」

「ま、まあ、そこそこカッコいいんじゃない？」

……アリサちゃん、頬を赤くしてたら説得力皆無なの。

「空君って狂三さんのこと好きなのかな？」

「すずかちゃんの言葉に不安が出て来た。」

「もしそうだったら私のこの想いは届かないのかなあ……。」

「それは無いんじゃない？」

「でも、すずかちゃんの質問を明日奈ちゃんは簡単に否定した。」

「どうしてそう思うん？」

「だって空君だよ？」

『あく納得』

その一言だけで私の中の不安は消えた。鈍感な空君が恋愛に興味があるとは思えない。他の皆も安心したように息を吐き出していた。

S i d e o u t

S i d e 空

「そう言えばさ、ずっと聞きたかったんだけど狂三達って俺が学校に行ってる間何してんの？」

「二亜が漫画を書いていることぐらいは知ってるんだけど、他は知らないんだよね。」

「あら、教えていませんでしたか？ わたくし達は勉強をしていますのよ。最近ではアルバイト感覚で三大勢力から討伐の依頼なども受けていますが」

「アルバイト感覚で討伐って逆に相手が可哀想に思えてくる……。」

「依頼は何となくわかったけど、勉強は何のために？」

「空さんと同じ高校に通うためですわ」

「でも、狂三達って年齢的に——」

「空さん、女性に年齢のお話はタブーですわよ」

「は、はいッ！」

「迫力のある笑顔の狂三に逆らえず、それ以上は何も聞かないことにした。」

「そもそもわたくし達に年齢なんてあつてないようなものですわ」

「え、どういうこと？」

「空さんが転生してから四年ほど経ちましたが、わたくし達の姿は変わっていませんのよ」

「そうなの？ あ、でも、そうかも。だって服や下着のサイズ変わってないし」

最初の頃は洗うの苦労したなあ。耐性が付いた今じゃ普通だけど。慣れてって恐ろしい……。

あ、原作でも二亜は結構前に精霊になったのに姿が変わらないでいたっけ。

「そこで判断されても困るのですが……概ねその通りですわ」

「そっか。あと六年近くあるけどその時が楽しみだよ。ところでどこに向かっているの？」

今日のデートは狂三がエスコートしたいと、本人がそう言っていた。

「七夕は二日程前に過ぎてしまいました。サービスや限定品が今日まであるんですの。」

それで、折角だから空さんと一緒に楽しんでみたくてお誘いしたんですわ」

あー、七夕ってもう過ぎてたか。

イギリスにいたから全然気づかなかったなあ。

「それでそろそろ……あ、ありましたわ。ここですわ」

俺達が着いた場所は――

「……………結婚式場？」

建物の入り口のすぐ横に置いてあった看板に、「カップル限定で無料で写真撮影出来ます」と書かれていた。これは彦星と織姫にちなんでやっているサービスなのだろうと思った。

「さ、入りましょうか」

俺は狂三に手を引かれるままに中に入った。後ろの方で知り合いらしき叫び声が聞こえたのは気のせいだと思いたい。

「ようこそおいでくださいました。本日は写真のご希望ですか？」

中に入ると店員さんが営業スマイルで出迎えて来た。

「はい、そうですわ」

「それでは女性の方はこちらへ、男性の方はあちらのお部屋へお入りください」

俺達は店員さんの指示に従って別々の部屋に入った。それから中にいた別の店員に渡された服を着て、狂三の方はどうやら時間の掛かるみたいなのでそれまで部屋で待機していた。

「これって……彦星でいいのかな？」

自分の今の格好を見てそう呟いた。彦星にしては少し、いや、かなり豪華過ぎる気がするが。

「そうですよ。七夕フェアということでカップルの方には彦星と織姫にコスプレしてもらって写真撮影をしているんです。彼女さんとはつびきり綺麗な姿になっていると思いますよ！」

独り言が店員さんに聞こえたのか答えを返してくれた。

……彼女じゃないんですけどね。バレると色々言われそうだから言わないでおくけど。

「どうやら織姫さんの準備が終わったみたいですね。彦星さん、奥の部屋にどうぞ」

「わかりました」

大きめの白い扉を開けると、部屋は和風を彩っていた。七夕に合わせて部屋を模様替えしたのだろう。そして、部屋の奥に一人の少女に目を奪われた。降ろされた艶やかな黒髪に、その上には金色の髪飾り。少女が体に纏うのは、色彩豊かな十二単<sup>じゅうにひつえ</sup>。問われれば誰もが美少女と答えるような少女——時崎狂三がそこにいた。

「さあ、彦星さん。織姫さんがお待ちですよ」

しばらく呆けていた俺に店員さんが促してきた。

「……え？ あ、はい」

狂三の前まで行くと顔には薄っすらと化粧が施されていたことがわかった。

「どうですか？」

「ど、どうって言われてもその……似合ってるよ。でも、それだけじゃ全然足りないな。」

なんていうか……ああ、ごめん。ボキャブラリーが少な過ぎて可愛いや綺麗ぐらいしか思い浮かばないや。ホントにごめん。でも、これだけははつきり言えるよ。すごく綺麗だよ。思わず惚れちやいそうになるぐらいに」

「！……フフ、それだけ聞けたら十分ですわ♪」

俺の言葉に狂三は満足したみたいだった。

……いつかはちゃんと褒められるようにしておきたいな。

「それではお二人はこちらを向いてください！」

俺達は視線をカメラに向けると、撮影が始まった。撮影が終わり、現像されるのを待つこと数十分。

「こちらが今回のお写真になります。お二人は今回で一番の格好良さと美しさでした！」

「ありがとうございます」

店員から写真を受け取り外に出た。

別れ際に、「お二人の結婚式はぜひうちで！」と言われた時は思わず吹きそうになった。

俺、まだ小学生なんで当分無理です……。

俺達は近くの公園のベンチで一休みすることにした。

「さてと、お次はどこに行く？」

「そうですね……あ、少し外させてくださいまし」

「うん、分かった。ここで待ってる」

これはお花を摘みに行くというやつですね。前に琴里に絶対に覚えろ！ ってしつこく言われたからなあ。

「さて、君達はいつまで尾行するつもりなのかな？」

ベンチの後ろにある茂みに声を掛けた。

『……………』

答えは返ってこなかった。

「……三秒以内に出て来ないともれなく剣の雨が降ってくるよー」  
『それは止めて！』

軽い脅しが効いてなのは達が茂みの中から出て来た。

「……いつから気付いていたの？」

「家を出た時からずっと。魔力は隠せても気配でバレバレだよ」

狂三も気付いてただろうしね。

「それって最初からじゃない！」

「それでどうして尾行してたの？」

「そ、それは……」

「浮気調査だよ！」

言い難そうにしていたフェイトの代わりにアリシアがハッキリと答えた。

「いや、俺に恋人なんていないから浮気もなにもないんだけど……」

「うるさい！ デートしたんだからあんたは有罪よ！ 罰として全員にケーキ奢りなさい！」

「……それは色々おかしくないか？ というか、アリサともデートするって約束してるよね？」

『……アリサ（ちゃん） どういうこと？』

デートすることになった経緯を知ってる明日奈とすずか以外がアリサを睨んだ。

「うぐツ……フ、フン！ いいじゃない、デートぐらいしたって！ 大体、すずかや明日奈だって約束してたでしょ!？」

開き直ったアリサはすずかや明日奈ともデートすることを暴露した。

『二人も!？』

「うん、そうだよ♪」

「えへへ……」

「三人共ズルいよ！」

「そう言うアリシアやフェイトはすでにデートしたでしょ？」

「……というか何がズルいんだろう……。ハッ！ 金か!? いや、無いか……。皆はそんな性格じゃないだろうし、というかほとんどが金持ちのお嬢様じゃないか？」

「やっぱりあの時の二人はデートしてたの!？」

「まあねえ〜」

その後も、私ともデートしてだの、さつき何してたか言えだの色々言われたが、狂三が来たのでうまいこと言ってその場から離れた。

「助かったよ、狂三」

「まったく……空さんには困ったものですわ……」

「え、俺が悪いの!?!」

「自覚の無いところがまた……はあ……いつか痛い目にあうんでしようね……」

……さつぱりわからない。

「まあ、嘆いていても仕方ありませんわ。デートを続けましょうか」

「うん、そうだね」

それから、狂三に半ば強制的に腕を組まされてデートを続行した。

狂三は猫が好きなので猫カフェに行きたかったが、俺の体質故に入れなかったのが残念だった。

動物に嫌われないように何とか出来ないかな？

「あ、クロノ達はどうかだったかな？　なのは達も戻って一緒にやってみるのかな？」

日が大分沈んできたのでデートを終了すると、そんなことに思い至った。狂三とのデートですっかり忘れていたのだ。

「さあ？　こればかりは当人達次第ですわ。それよりもふと思ったのですが、クロノさん達はもうしてあの時、空さんに何も言わなかったのでしょうか？　彼らには深い恨みがあるはずなのに」

「あの時？　ああ、クロノに闇の書に関わってるのか？　って聞かれた時のこと？」

「ええ、そうですわ」

「それなら今日聞いたんだ。そしたら面白い答えが返って来たよ」

「それは何ですか？」

「確かに恨みはある。管理局としても見過ごせはしない。でも、それ以前に君は友達だ。『友達を信じられない』なんてことはしたくないんだよ、絶対に。それが出来なくなったら人として何かを失う気

がするんだ。だから問い詰めなかった。付き合いは短いからまだ完全に君を知ってるわけではないが、君は冗談をよく言うけど真面目な場面では嘘は吐くような奴じゃないって思ったんだ。……まあ、結局はただの屁理屈で誤魔化されてたわけだが……誰かの為ならいいさ。それに君ならこの事件を何とかしてくれそうな予感がするんだ』って言われたんだよ」

その時のクロノはいかにも年上っていう威厳を感じられた。

リンデイさんとエイミイさんなんてそれ聞いて感動して涙を流していた。

「……そうでしたか。期待されているのであれば頑張らないといけませんね」

「あんまり期待されても困るんだけどね」

家に着くと、俺はトレーニングルームに行くことにした――

「空さん、待ってください」

ところで狂三に止められた。

「？」

「少々、目を閉じていて下さいまし」

「え、何で？」

「いいから目を閉じて下さいまし」

「わ、わかった」

狂三の気迫に押され、大人しく言うことを聞いて目を閉じた。

すると、唇に何か柔らかいものが軽く触れた。

「もう目を開けてもいいですよ」

「……今、何したの？」

俺はそう聞いたが、狂三は「内緒ですわ♪」とだけ答えて、踵を返してそそくさと自分の部屋へと戻ってしまった。振り返る瞬間、狂三の頬が赤くなっていたことに気付いたが夕日の所為だろう思い、それ以上気にしなかった。そして、姿を元に戻してからトレーニングルームに向かうと――

「……なんじゃこりゃ？」

ヴァーリと戦えないはやてを除く誰も彼もが地面に横たわって

た。死屍累々。その言葉が今の状況にはピッタリだ。

「えーっと、これは何があつたの、ヴァーリ」

「ん？ 帰って来たのか、空。これは模擬戦をしていたら何故か俺もするハメに——」

「ああ、もういいや。今のだけで大体わかつた。要するに全員と戦つたんだろ？」

「ああ、そうだ。よく分かつたな」

「その光景が容易に浮かぶよ……」

多対一でも禁 バランス・ブレイカー 手 使つて圧勝したんだろね、きつと。

俺は溜め息を吐きながら倒れている皆をベッドまで運んだのだつた。

闇の書完成です！

闇の書完成です！

S i d e 空

クロノ達が魔力蒐集を協力してくれるようになってから、俺達小学生組は夏休みに入った。

本来なら長期休暇で嬉しいはずだが、今年は夜天の魔導書完成に向けて大忙しだった。

「ページはあとどれ位で埋まりますか？」

「昨日の蒐集で残り20ページとなったな。今日で完成させられるだろう」

皆で手分けしてはぐれ悪魔や次元世界の生物から魔力を奪ったのであつという間にページは集まっていった。

「クロノ、無人世界でなら完成させてもいいかな？　ここだとちよつと面倒だし」

「この世界だと色々な勢力に目をつけられそうだから、それを考慮して尋ねた。」

「そう言うと思ってすでに決めてあるさ」

「おい、仕事が早いね！」

「そつか。じゃあ、早速皆に準備してもらおうように伝えてくる」

念話で皆に準備が出来たらトレーニングルームに集合してと伝えた。

「(琴里、今回は頼んだよ)」

『任せなさい。どれだけ私が傷付いても治してあげるわ』

「全員準備はいいな？」

『うん (はい／ええ／ああ／おう)！』

クロノ皆が領いたのを確認してから次元世界へと転移をした。

ちなみに、ユーノとアルフは無限書庫の整理が大変らしくあとから合流することになっている。

「ここが次元世界……」

初めて見た異世界に、はやてはそう呟いた。

「感想はある？」

「うーん、なんか思うてたのと若干違うかなーってとこやな」

「あー、それわかるわ。あたしも初めて来たときはそう感じたわ」

他の面々もアリサに同意とばかりに頷いていた。

「ここは無入世界だからそんなもんさ。かくいう俺も人がいる次元世界には言ったことないけど。さあ、無駄話はここまでにして最後の蒐集して完成させるとしますか」

「……ほんまにごめんな。こんなことさせちゃって。本当なら夏休みを——」

「それは違うよ、はやて」

「……？」

「ここにいる皆ははやてを助けたいから協力してるんだよ。だから、感謝するのはいいけど謝らないで、絶対に」

「そうやな……お姉ちゃん言う通りや。皆、ホンマにありがとうな！」

「でも、それは全部が無事終わった後じゃないかな？」

苦笑いしながら言った。

そこで一旦、会話を終了させてからいくつかのグループに分かれて魔力集めを始めた。

各グループにはアザゼルさんが作った小型の魔力吸引機を持たせている。

これのおかげで俺達の蒐集活動はスムーズに行ったと言っても過言じゃない。

「そんじゃ、サクツと終わらせますか」

「ああ、そうだな」

「このメンバーならすぐにでも終わるだろ」

「私は三人の足を引っ張らないように頑張るよ」

飛行しながら上から目標を探しながらそんな会話をしていた。

「お、早速いたぜ。アイツから魔力をいただくとするか！」  
俺達から大分前方にいたのは一頭の大きな生物だった。  
あれはゾウかな？

飛行速度を上げて目標に近づいて行くにつれて俺達の顔は引き  
攣っていく。

「ね、ねえ、ちよつと不味くない？」

「ああ、俺もそんな気がしてきた……」

「同感……」

そして、目標とした生物の全体がようやく視界に収まった。

「こ、こいつは……デカすぎだろオツツ!!」

体長はおよそ500メートルくらいだろう。

「というか、あれは……マンモス？」

牙の形がゾウというよりもマンモスのそれに近かった。

「だが、鼻が二本あるぞ」

うん、ヴァーリの言う通りで鼻が二本ある。しかも体に鳥の翼みた  
いなものが付いてる。

あと何故か脚の数が六本もある。

次元世界って色々な生物がいて面白いなあ。

「(つて、トリコのリーガルマンモスじゃん！　なんでこんなところに  
いるの!?)」

『まあ、倒せないことはないね』

「お前らホントにアホだろ!？」

「このサイズの生物をどうやって倒すの!？」

「気合」

「根性」

そう答えたら中にいるドライグ達にまで呆れられた。

「でも、こいつを倒す方法は簡単だよ」

「……まともな策何だろうな？」

俺を疑っているのかヴァータが睨んできた。

「うん、問題ないよ。まずはヴァーリが半減の力で動きを止める。そ  
の時にあかりはヴァーリに注意が行かないように出来るだけ大きい

砲撃で誘導。俺は倍加した力をヴィータに譲渡するから、全力で撃つてそれで止め。OK?」

俺が立てた作戦にヴァーリはすぐに頷いたあとに、二人はしばらく迷ったのちに頷いた。

『アイツの正面に入らないようにしなさい。吸い込まれると大変よ』  
「(わかった)ヴァーリ、あかり、出来るだけ正面に入らないようにして」

琴里からの忠告を受けて、より注意することにした。

『わかった』

返事をしたヴァーリはすごい速さでマンモス(?)に接近、あかりはヴァーリに注意が行かないようにスナイパーライフルの形をしたデバイス——プレリカで目元に砲撃を行っていた。瞬く間にヴァーリの半減の力が発動された。

こつちも倍加を始めないと。

「ドライブ、行くよ」

『任せろ!』

《Welsh Dragon Balance Breaker!!》

「こつちも行くぜ、アイゼン! カートリッジ、ロード!」

《Load Cartridge》

ヴィータのデバイス——グラフアイゼンから空薬莖が排出されると形が変わっていく。最終的に身の丈の10倍以上はあるであろう超巨大なハンマーになった。

だが、これだけでは大きさも威力もまだ足りない。

《BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!!!!!》

もうイツチヨ!

《BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!!!!!》

これで行けるでしょ!

「ヴィータ、受け取って!」

《Transfer!!》

ヴィータの肩に触れて倍加した力を譲渡すると、アイゼンは先程よりも数倍の大ききになり、ヴィータから感じる魔力が膨れ上がった。「すげえ……。これならあんなデカブツだって一撃で行けるぜ！」

自分の力が大きくなったのを左手を開いては閉じてを繰り返して感じていた。

「二人共下がって！」

指示を出して二人を下げた。下がる直前に二人は砲撃でマンモス(?)の視界を潰した。

「轟天爆砕！ ギガントシユラークツ！」

そして、二人が戻るのと同時にヴィータの全力＋赤龍帝の倍加でさらに威力が跳ね上がったハンマーをマンモス(?)のガラ空きの背中に振り下ろした。

「ブツ潰れるオオオツ！」

巨体を意図も容易く呑み込み、聞こえはずの悲鳴はハンマーが地面にぶつかる音にかき消された。

うわー……。あんなの喰らったら一溜まりもないわー。

今の技に非殺傷設定が無かったらほぼ確実に死んでるよ……。

ヴィータがハンマーを小さく戻すと、マンモス(?)は地面に横たわっていた。

近づいて反応を確認すると、ものの見事に気絶させられていた。

「よし、魔力貰おう。……。痛い思いさせてごめんね。あとで治してあげるからね」

一度謝ってから魔力を抜き取った。その後でトワイライト・ヒーリング聖母の微笑で回復させた。

「デカブツのくせに全然魔力ねえな、こいつ。はあ……。無駄に疲れちゃったぜ」

魔力吸引機に入った魔力を見てヴィータが呟いた。

「そういうこともあるって！ 次、頑張ろうよ！」

「そうだな。それにもうじき完成なんだ、これだけでも今はありがたいえし」

あかりの励ましでヴィータは立ち直り、俺達は次のターゲットを求

めて移動し始めた。

魔力集めが開始されてから二時間後、クロノから念話で集合が掛かった。

「全員集まったな」

「十分に魔力が集まったと判断したから集めたのね？」

「ああ、そうだ。それで闇の書——じゃなかったな。夜天の魔導書を早速完成させたいところなんだが、最終確認と休憩を挟んでからにしよう。……約二名ほど元気な奴らもいるが」

約二名つてのは俺とヴァーリですね。クロノの眼がそう語っているのが嫌というほど分かるよ。

「先に最終確認だ。あかり、もう一度説明してくれないか」

「分かりました。それでは僭越ながら説明させていただきます」

久々にあかりが先生口調で話し始めた。

「夜天の魔導書を完成させると、所有者である八神はやてが魔導書に取り込まれます。そのあとは管制プログラムが現れます。私達はその人の暴走を止めなければなりません。そして、ここからが重要です！ 私達が戦っている間はやては夢を見ることになります」

「夢ってどんなん？」

「……それは私には分からないよ。はやてが最も幸せな夢でも見るんじゃないかな？」

「幸せな夢……つまり、空君と……。何か目覚めなくてもいい気がしてきたで」

『お願いだから目覚めて（下さい）！』

あと、何でそこで俺の名前が出てくるんだろう……。

「ジョークやジョーク。ちゃんと夢から覚めてみせるで！」

それはシャレになんないよ……。

「……若干不安になって来たが、まあいい。続きを頼む」

「はい。ええと、はやてが夢から目が覚めたと仮定しますね。目が覚めた時には管制プログラムがそばにいると思うので、管理者権限を手

に入れて防衛プログラムを魔導書から切り離して下さい。そのあとはこつちに戻ってこられるはずです。そして最後に私達で暴走している防衛プログラムを倒す。それで終わりです。あ、戦ってる人は取り込まれないように気を付けて下さいね。はやてと同じで夢を見せられることになりませう。今ので説明は以上です。何か不明な点があればどうぞ（終わったあとのことは空君に任せるしかない）」「えーっと、俺からいいかな?」

気になることがあったので質問するために俺は手を上げた。

「なんでもどうぞ」

「はやてが取り込まれている間ってその管制プログラムが管理者権限を持っていないんだよね?」

「そうなるね」

「だったら、ヴォルケンリッターの皆って例えばだけど、俺達と戦えって管制プログラムに命令されたら従わざるを得ないんじゃないの?」  
『!?』

俺の質問に全員が目を見開いていた。

『いや、気づきなさいよ、それぐらい……』

『全くだな』

中いる琴里達が呆れたように呟いた。

アハハ……はやてを助けたいって気持ちで一杯だったんだろうね。

「それは困ったな……」

とか言ってるけど、ホントに困ってるのかな? 表情が全然そういう風に見えないんだけど……。

「失礼なことを言うな。いくら私でも少しは困っているぞ」

「心を読まないで下さい! それと困っているのは少しだけですか!？」

皆俺の心読むの上手すぎない!?

「しかしだな、いつもの模擬戦では互いに全力を出し切れていなんだ。だから全力で戦えるいい機会だと思ってるな」

「いや、負けてくれへんと世界が危ないんやけど……」

「いくら主のためでも騎士として手加減なんて出来ません!」

ダメだこの騎士……。

「まあ、シグナムがそう言うなら俺達も全力で相手をしないとな。今のうちに組み分けをしておくのが良いんじゃないか？」

「そうだな。じゃあ——」

「はい！俺、管制プログラムと戦いたい！」

「はあ……分かったから落ち着け。それに元からそのつもりだ。この中で一番の戦力は君とヴァーリ、君達二人だからな。二人で管制プログラムに当たってもらおう」

管制プログラムと戦えることが決定して内心でガッツポーズをしていたら反論がでた。

「ちよつと待つて！二人だけじゃ危険だよ！」

フェイトだけでなく他にも不満そうな顔をした人がいた。

「それは僕も思う。だが、二人に着いていけるメンバーは残念ながらこの中にはいない。

正直に言えば、僕達では足手纏いになる可能性の方が高い」

『……………』

クロノの正論に誰も反論できないでいた。

「……それにだ。なのはやフェイト達は二人ほどではないが貴重な戦力だ。それも考えて二人が妥当だと判断したんだ」

『確かにそれが良いでしょうね。守護騎士達も中々の強さですから』

「では引き続き組み分けを——」

結果として、

ヴァイタにはなのは、愛衣、クロノ、あかり。

シグナムさんにはフェイト、アリシア、明日奈。

シヤマルさんにはすずか、アリサ、プレシアさん、リニス。

ザファイラさんにはリーゼアリア、リーゼロッテ、雄人。

管制プログラムには俺とヴァーリ。

といった組み合わせになった。

「それでは各自休憩にしてくれ」

休憩を取り始めたところではやてが側にやって来た。

「どうかした、はやて」

「……不安なんや。……空君が、皆が無事でいられるか」

「うーん、それを言われるとなあ……。もしかしたらこの戦いで大怪我をするかもしれないし、最悪の場合、死ぬこともあるかもね」

「ッ！……私は皆が戦っているのを何も出来ずに夢を見てるだけかいな」

無力な自分を恨めしそうに顔を歪ませていた。俺はそんなはやての手を取って言った。

「だったら、信じて」

「……へ？」

「俺達が全員無事で勝ってはやてを助けられるってことを信じて待ってよ」

「でも、それだけじゃなん——」

「何にもならないなんてことはないよ。誰かが誰かを想う気持ちって案外すごいんだよ？」

漫画とかアニメでよく悪役は下らないとか無駄だって言うけどそんなことは決してない。

『あら、意外と分かっているのね。姉として嬉しいわ』

「空君……。うん！ 私、信じる！ 信じて待つとる！」

「うん、それでよろしい」

はやてと話し終わったあと、クロノから休憩が終わりだと伝えられ、魔導書を完成させる準備をした。と言っても、結界張ってバリアジャケットを展開して魔力を入れるだけなんだけど。

「それではプレシアさん、お願いします」

「ええ、任せてちょうだい」

最後の魔力蒐集を終えた魔導書がはやての側で光を放つと、はやての足元に魔方阵が浮かび、強い光が天高くに放たれた。光が収まるとそこにははやてではなく長い銀髪に赤い瞳、黒い翼を生やした女性がいた。

あれが管制プログラム……。強いなあ……。

そう言えば名前はリインフォースってはやてが付けるんだよね？  
でも、今は無いみたいだし、一々管制プログラムって長いから……  
夜天、でいつか。

目の前にいる女性——夜天から感じる魔力だけでも十分に強  
さが伝わる。

「また……すべてが終わってしまった……」

「随分ネガティブな奴だな」

「うん。いかにもこの世の終わりだって顔してるし」

「……お前達も闇に沈むがいい」  
手を掲げると黒い魔力が集まった。

『ツ！ 空間攻撃が来るわよ！』

まさかの開幕ブツパですか!?

「全員退避して！」

全員が即座に夜天から離れた。

「——デアポリック・エミツション」

放たれた魔法は半径数kmのありとあらゆるものを消し飛ばした。

「いきなりとんでもないことをするな……」

何とか全員の回避が間に合った。だが、喜ぶ暇もなく敵は動き出  
す。

「……守護騎士達よ、敵を倒せ」

『ハッ！』

彼女の命令に従い、シグナムさん達は俺達と敵対するように前に立  
ち塞がった。

「ホントに空の予想通りになったか……」

「なら私達の役目を果たすまでよ」

全員が先程決めた通りの組み合わせで分かれ、それぞれのグループ  
ごとに互いの戦闘を邪魔しないため、騎士達に援護をさせないために  
距離を取った。

「……私の相手はお前達二人か」

「ああ、そういうことだ」

「……無駄な足掻きだ」

やる前から決めつけないで欲しいな。まあ、いいか。

「さあ、俺達の戦争<sup>デート</sup>を始めよう」

逆境覆します！

逆境覆します！

Sideなのは

夜天の魔導書を完成させると現れた綺麗な銀髪の女性と空君、ヴァーリ君が戦い始めた。

その一方で、私達もいくつかのグループに分かれて、女性からの命令で動く守護騎士達と戦うことになった。

操られているとはいえ、ヴァーリたちやん達といつも以上に本気で戦うのは辛い……。

戦うことを躊躇していたら、隣に来ていた愛衣ちゃんが声を掛けてきた。

「戦うの辛い？」

「……うん、やらなくちゃいけないってわかってはいるんだけど……」  
そう答えると、愛衣ちゃんは小さく笑った。

「それでいいんじゃないかしら。私だってなのはと同じ気持ちだもの」

愛衣ちゃん……。……そうだ、別に私だけが悩んでるわけじゃないんだ。

「まあ、それでもダメならいつもの模擬戦程度に考えればいいさ。それぐらいなら君だって悩まず攻撃できるだろ？」

「そっか……。うん。そう考えれば出来る気がする！」  
いつも通りにやれば、こっちは四人だからいける！

「それに動かせない程度にするだけだから、何もスターライトブレイカーを撃ってって言うてるわけじゃないからね？」

「そ、そんなことしないよ!?!」

あかりちゃん酷い……。いくら私でもそんなことは……。……ば、場合によつては撃つかもだけど……。基本的には撃たないから！

だけど、今の会話で私の覚悟は決まった。

「力を貸してね、レイジングハート——ううん、レイジングハート・エクセリオン！」

《もちろんです、マスター》

私の呼び掛けに、プレシアさんの手によって進化したレイジングハート・エクセリオンが答えてくれた。

「絶対にはやてちゃんを救ってみせるー！」

そして、私はレイジングハートの新しい機能——カートリッジシステムを使ってアクセルシューターを十二個放った。それに対して、ヴィータちゃんは鉄球を出して相殺した。

その後に、ヴィータちゃんは私に接近してきた。

「——ハウンド！」

けど、それを遮るかのようにあかりちゃんが目標を自動で追尾する魔力弾——ハウンドを撃った。

「チツ……」

ヴィータちゃんは避けきれないことが分かったのか、防御魔法を発動して防いだ。

魔力弾とバリアがぶつかって爆発が起こり、ヴィータちゃんは煙に包まれた。

「愛衣ちゃん、クロノ君！ 今だよ！」

『ええ（ああ）ー！』

煙が晴れるのと同時に私と愛衣ちゃん、クロノ君の三人が砲撃を打ち込んだ。

いきなりやって来た砲撃にヴィータちゃんは声を上げる間もなく？み込まれていった。

再び激しい爆発が起こり、その中からヴィータちゃんが落ちていくのが分かった。

「よし、こっちは終わったな。念のため四人でバインドを掛けておこう」

ヴィータちゃんにバインドを掛けて、まだ戦ってる皆の状況を確認することにした。

S i d e o u t

S i d eフエイト

私と姉さん、そして明日奈を含めた私達三人でシグナムと対峙していた。

「……さあ、掛かって来い」

……どこことなく眼がキラキラして見えるのは私の見間違えかな？

本当に操られているのかが疑わしいんだけど……。

「なんだか、シグナム楽しそうにしてない？」

「うん、私もそう思っちゃった……」

どうやら二人も私と同じことを考えていたようだった。

「と、とにかく！ シグナムを止めるよ！」

二人だけでなく自分にも言い聞かせるように声を出した。

「そうだね！ 早めに倒して防衛プログラムとか言うのにも備えておかないとだし！」

私達はデバイスを構え直して、シグナムとの戦闘を始めた。

先制攻撃は私と姉さんが新たに手に入れた力——カートリッジシステムを使ってハーケンセイバーを放った。二つの三日月型の刃は高速回転してシグナムへと真っ直ぐ向かった。

「ロードカートリッジ」

シグナムのデバイスから空薬莖が排出され、レヴァンティンは連結刃——シユランゲフォルムへと形を変えた。それを振るうことでハーケンセイバーは二つとも撃ち落とされた。

「そう簡単には倒せないか……」

「だねー」

「次は私が行くよー！」

明日奈の動きに呼応するかのようにシグナムが連結刃を振るってきたが、明日奈の高速の突きで弾いていた。

「やるな！ だが、甘い！」

シグナムが剣を元の形態に戻すと、カートリッジを使った。すると、剣が炎を纏った。

アレは！

「(来る!)」

互いの手の内を知ってるので、明日奈もシグナムが何をするのかに分かっている。

「紫電——くッ!」

炎の斬撃が明日奈を襲う——よりも先に明日奈はすでにシグナムの背後にいた。

……………え? 今何が起こったの?

「……………今のは何だ? 全く動きが視えなかったぞ」

「今のは私の神セイクリッド・ギア器の能力だよ。ほんの一瞬だけなら閃光の如き速さを得ることが出来るんだけど、空君と一杯練習していくうちにいつでも使えるようにしたんだ」

むう……………明日奈ばかり空と一緒にズルい…………。

「……………そうか。しかし、威力はそこまで無いみたいだな」

「うん、それが今のところは改善点かな。また、空君に協力して貰おうと♪」

楽しそうにしている明日奈を見ていて少し——いや、かなり羨ましかった。

フン! あとで一杯甘えるからいいもん!

そんな言い訳をして、戦闘に集中することにした。

「あれ? そういえば姉さんは?」

さつきから声がしないことが気になって辺りを見回すと私の後方にいた。

いつの間にか両手にはハンドガンが握られていて、魔力をチャージしていた。

そして、魔力を集めるのが終わったのか何も言わずにシグナムに打ち放った。

後ろにいた明日奈も巻き込んで。

「ちよつとアリシアちゃん!? 私がいたんだけど!」

直撃したシグナムは気絶して、巻き込まれたと思っていた明日奈は何とか避けていたみたいだ。

「あーごめんごめん。手元が狂っちゃって。決して空と一緒にいたの

が羨ましいからとか、ムカついたからとかじゃないからね……。……  
チツ……」

今の舌打ち、明日奈には聞こえない距離だけど私にははっきり聞こえたんだけど……。

それに棒読みだし。姉さんも羨ましかったんだね……。

「あ、それよりもバインドで拘束しておかないと」

二人にも伝えてシグナムを拘束した。

S i d e o u t

S i d e ず か

私とアリサちゃん、リニスさん、プレシアさんの相手はシャマルさんだ。

さつきから攻撃をしようとはしているんだけど、シャマルさんの魔法——旅の扉で死角から砲撃や振り子型のデバイスの攻撃が来るから、その対処が大変で全然攻撃が出来ない。

「ムキーツ！ やりずらいったらありやしないわ！」

「アリサちゃん、焦ってもいいことないよ」

「じゃあ、どうしろって言うのよ!?!」

うつ……それを言われるとちよつと返答に困るよ……。

「だったら、私とリニスで死角からの攻撃を防ぐわ。その間に倒してちょうだい。リニスもそれでいいかしら？」

「ええ、問題ありません。二人は防御を気にせず攻めて下さい」

やっぱりこの二人は頼もしい。その一言に限る。

「そうと決まれば、行くわよすずか！」

「わかってるよ、アリサちゃん」

私達がシャマルさんに突っ込んで行くと、シャマルさんは旅の扉を使った。

「させないわ！ フォトンランサー！」

何かが衝突する音が後ろから聞こえた。プレシアさんがシャマルさんの攻撃を相殺したんだろう。

「喰らいなさい！ 緋拳！」

アリサちゃんは刀を握っていない方の手に拳の形をした緋色の炎を纏わせ、シヤマルさんへと先程から攻撃出来ていなかったイライラも込めて殴りつけた。

あれって空君の技を真似したのかな？

「すずか！ とつとと決めちやいなさい！」

余計なことを考えていたらアリサちゃんの攻撃を防いだものの威力が高かったのか隙が出来ていた。

「うん！ アイスバズーカ 氷雪砲！」

自分の体よりも巨大な大砲を作り出し、シヤマルさんに狙いを定めて引き金を引いた。

シヤマルさんに当たると当たった部分から凍り付いていった。最終的には、全身氷漬けにされて動けなくなった。

ふう……なんとか終わったね……。

私は神器の練習ばかりしていた所為か魔法はまだそんなに出来ないのでプレシアさんとリニスさんにバインドでの拘束をやつてもらった。

S i d e o u t

S i d e 雄 人

俺とリーゼ姉妹の相手はザファイラだ。特徴としては防御が堅い。

そして――

「せいッ！」

「ヤベッ！ レオン、バリア！」

単純にパワーが強い。

魔力強化されたパンチだけでも十分な威力があるのだ。

一度殴られたことがあるが、あの時ほど体が丈夫であったことに感謝した日は無い。

はあ……帰りたい……。というか俺いなくてもリーゼ姉妹だけでもいけんだろ。

原作ではすごいコンビネーションでザフィーラ倒してたんだし。  
試しに聞いてみるか？

「なあ、俺いるか？ 二人だけの方がやりやすいんじゃないかねえの？」

「私も最初はそう思ってたんだけどねえ……」

「管制人格の力の所為かかどうかは分からないけど模擬戦いっつもより強いわ……」

マジか!?

じゃあ、他の皆もか？ と思つて周りを見れば、他の守護騎士達は  
バインドで拘束されていた。

あれえ!?! 皆余裕で終わってんじゃないか!

「他の奴らは終わってるぞ!」

「え？ あ、そうみたいね」

「おー、クロ助やる〜」

いやいやいや、関心してる場合じゃないからな!?

「俺らも早く倒そうぜ!?!」

「そんなの言われなくても分かつてるわよ」

「じゃあ、何でそんなにゆったりしてんだよ!」

俺が怒鳴ると、二人そろつて溜息を吐かれた。

「……あのですね、私達二人なら連携は完璧ですよ」

「それがどうかしたのか？」

「でも、あんたが入った即席チームでの連携なんて出来るわけないで  
しょう?」

「だったら、二人で倒せばいいだろ?」

そう言つたら再び溜息を吐かれた。

「アンタねえ……さつき相手が強いって言つたばつかでしょうが!」

あ、そうだった。

「つてそれは分かつたけどそしたらどうやってアイツ倒すんだよ!?!」

「ああ、それならもう問題ないです」

「へ?」

「さつきまででアンタの動きや癖は全部分かったから好きに動きなさい。  
私達がそれに合わせるから」

「そ、そんなんでいいのか？」

メツチャ簡単じゃねえか！

「ええ、どうぞお好きに」

「分かったぜー」

俺は作戦を理解するなりザフィーラに突撃をかました。

当然、向こうも俺に攻撃を仕掛けてくる。

俺のガンブレードでも攻撃が弾かれると、今度はザフィーラの拳がやってくる。

咄嗟にバリアを張ろうとしたが、ザフィーラの背中に魔力弾が当たったことで怯み、攻撃はやってこなかった。

「今よー、全力の一撃をやんなさいー」

俺は返事をするよりも先にカートリッジを使って、その場で独楽のように一回転した。

「フェイテッドサークルー」

剣先から放たれた波動がザフィーラを斬り裂いた。

「グハッ！」

これで倒れるかと思ったら、ザフィーラはまだ持ちこたえていた。

『これで！ 終わりだ！』

二人はもう一度砲撃を浴びせ、アリアが蹴り上げ、ロツテがトドメに叩き落とす。見事なコンビネーションの連撃でザフィーラに反撃を許さずにそのまま気絶させた。

ああ……ザフィーラ、ごめんな。お前のことは一生忘れないぜ……。

ボコボコにされたザフィーラを見ていて、心の中で謝った。

頭の中に「勝手に殺すな！」とザフィーラの声が聞こえた気がしたが、ザフィーラは気絶しているので有り得ないと思いい、すぐに忘れることにした。

S i d e o u t

S i d e 空

「(どうする？ 様子見で九喇嘛の力からでいいかな？)」

今使える俺の力の中では最速の動きが出来る九喇嘛の力なら相手の力量はある程度測れるはず。

『そうね。いきなり精霊の力を使うのはあとのことを考えると遠慮したいわ』

「(分かった。九喇嘛、行くよ)」

『……様子見で使われるのは癪だが仕方がねえ。遠慮なく使え』

「(ありがと) よし、準備万端！ ヴァーリもいい？」

「ああ、いつでも行ける」

俺が九喇嘛モードに入ると同時に、ヴァーリもバランス・ブレイク禁手化していた。

「……それは九尾と白龍皇の力か」

「あれ？ 何で知ってんの？」

「……主に記憶の中からその情報を得たにすぎない」  
なるほどね。

「知っていようが関係ない。お前が強いなら俺はお前を越えるだけだ」

「そういうこと。じゃあ、早速——」

「……ッ!？」

「螺旋丸ッ！」

夜天に接近し、螺旋丸を腹に当てて吹き飛ばした。

「いきなりだな……」

「さっきの空間攻撃のお返しだよ」

でも、見る限り全然効いてないみたいだけど。

「……その程度で止められると思うな」

体勢を立て直した夜天がその場で魔法を発動させた。

「……穿て、ブラッディダガー」

夜天の周囲に幾つもの赤い短剣浮かび、ものすごい速さで向かってきた。

回避を試みたが、追尾型の魔法らしく追い掛けてきた。

《Half Dimension!!》

追いつかれて回避が間に合わないと思っていたが、ヴァーリの半減

の力で速度が落ちたおかげで、ブレイブの魔力弾ですべて撃ち落とせた。

「俺を忘れてもらっては困るな」

夜天はその言葉を特に気にすることなく手を前に翳して、同じ魔法を発動させた。

「……? 何で同じことを? さっきので防がれることは分かっているはずなのに……。」

もう一度ヴァーリは半減の力を使い速度を落とし、俺が撃ち落とそうとした瞬間――

「……倍加」

『なッ!?!』

短剣の速度が上がり、俺とヴァーリは夜天の攻撃をもろに受けた。

「な、何でドライグの力を使えるの!?!」

『俺にも分からん! どうなっている!?!』

「まさか……。」

『はやてさんの記憶や空さんの魔力から赤龍帝の力を魔法で再現したというのですか!?!』

「魔法でドライグの力を使うってアリッ!?!」

「……その通りだ。だからこういうことも出来る」

消えた!?!

夜天が俺達の目の前から消えたと思ったら、突如目の前に現れ、蹴りを入れられた。

「がッ!」

吹き飛ばされて体勢を立て直したが、突然力が抜けていくような気がした。

これは……!?!

「……半減」

アルビオンの力!

『私の力もか! 空、ここはドライグの力で戦った方がいい!』

「うん! バランス・ブレイク 禁手化!」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!》

俺はヴァーリとアイコンタクトをとって、二人で攻めた。

「……今度は赤龍帝の力か。だが、無駄だ。——盾十倍加」

俺とヴァーリの拳は強化されたたった一枚のバリアに阻まれた。いくらこつちが倍加してないとはいえ、今までで一番堅い！

「……吹き飛ば」

夜天の手の中には乱回転する黒い球体があった。

螺旋丸も使えんのか！

俺の魔力を吸収し、二天龍の力を再現できるならこれぐらい出来るのは当然と言っている。

そして、俺達はその螺旋丸を受けて吹き飛ばされ、そのまま地面に叩きつけられた。

『へ空、こつちは守護騎士全員拘束状態だ。そつちはどうだ？』

夜天に吹き飛ばされてから立ち上がると、クロノから念話で守護騎士達を倒したことを教えられた。

「へお、そつかー。思ったよりも早かったね。……こつちは結構苦戦してるよ」

『へ……手助けはいるか？』

「へううん、いらない」

『へ……分かった。だが、いつでも助けられるように近くで待機するからな』

「へりょーかい」

そこでクロノとの念話を切り、戦闘に集中し直した。

「それにしても、強いね」

『感心してる場合じゃないでしょ!』

「こうなったらアレをやるしかないか……」

アレ……？　ってアレのことか!?

「でも、アレは失敗すると確実に負けるよ」

『だが、今のままでも負けるぞ』

うーん、確かにドライグの言う通りなんだよね……。このままでも確実に負ける。

「よし、わかった。やろう。へクロノ、さつき断ったばつかで悪いけど

時間稼ぎして」

『それは構わない。どのくらいあればいい?』

「三十秒あればいいかな」

『たったそれだけか!』

「いや、夜天は強いからそれだけでも大変だともうよ」

『へッ!? ……わかった。僕達に任せてくれ。到着するまでは耐えろよ』

そこで念話を切つてクロノ達が来るまでの間、出来るだけ体力や魔力の消耗を抑えながら戦うことにした。

S i d e o u t

S i d e あかり

クロノ君から時間稼ぎをすることを伝えられたあと、急いでヴァーリ君達がいる場所に着いたのだが、

「す、すごい……」

「一体、何がどうなって……」

「動きがほとんど視えないよ!」

三人の動きが速過ぎて目が追いつかない。戦闘の衝撃で地面にクレーターが出来ていた。

光が動いてるようにしか見えない……。

「この中で時間稼ぎとか無理ゲーだろ……」

「だが、やるしかない。行くぞ!」

雄人君が弱音を吐くがクロノ君は空君とヴァーリ君に託すために動き出した。二人が離れた瞬間を狙って戦闘に割り込み、時間稼ぎを始めた。

「……お前達がここにいるという事は守護騎士達は倒されたか。まあいい。大方、お前達の役目は時間稼ぎだろう」

……バレバレだね。私達の実力じゃそんなもんか。あの二人は遠いな……。

「総員、バインド!」

私達はバインドを使つて管制人格を拘束したものの、一秒経たずに解除された。

「……やはり、あの二人でなければ相手にすらならないか」

その言葉に私達の頭の中に不安という単語が浮かび上がる。

「でも、私は空君達が勝つて信じるの！」

「そうね。『私の』空君ならきつと勝つわ」

やけに『私の』ってところだけ強調してたね……。まあ、言いたいことは分かつてるんだけど。

「愛衣ちゃん、寝言は寝て言うものだよ？」

「そうそう！ 空は私のだつて言つてんじゃん！」

「あんたも何言つてんのよ！」

愛衣ちゃんの一言から話が段々変な方向に行く。

「お、おい、お前達！ 今は戦闘中だぞ！ 無駄話は後にしてくれ！」

『無駄話……う？』

あーあ、クロノ君、やつちやつたね……。

「無駄話つてどういうことかな？ かな？」

「い、今は管制人格を止めることが優先だろ!？」

確かにその通りなんだけどね。この話題に入ったら止めるのは至難の業だよ。

「……………」

あれ？ 管制人格が止まつてる？

不思議に思っていたら不意に口を動かした。

「……お前達より、主はやての方が家庭的で彼に相応しい」

『ああん？』

ウワー……年頃の女の子が絶対に人に見せられないような顔してる……。クロノ君なんか後ろで怯えきつてるし。

「……もうすぐ世界は滅びる。今更そんなことはどうでもいい」

管制人格が手を私達に手を向けると、桜色の光が集まりだす。

「あれつて……スターライトブレイカー？」

自身が使う魔法だから一番早く気が付いたのはちゃんが呟いた。

「マズイ！ 全員距離を取れ！ あの魔法の前では防御なんて無意味

だ！」

「……倍加」

十分な距離を取ったところで届かないと安心しきっていた私達は途端に恐怖に駆られた。

届かないと思っていた砲撃が眼前に迫っていたからだ。

突然のことで何をすればいいかわからず絶望しかかっていた時、誰かが私達の前に躍り出た。

『あとは俺に任せておけ』

その人物は身長から見て私達と同じぐらいの年齢だろう。

服装は青いシューズに縦に赤いラインが入った七分丈のゆったりとした白いズボン。

上は袖無しの黒いパーカーといった格好。

そして、銀と黒が混ざり合ったような何とも言えない色をした髪が逆立っていた。

「誰だか知らんが危ないぞ！ 今すぐに逃げろ！」

『まあ、見てろって』

クロノ君の忠告を無視して少年が両手を前に突き出すと、蒼い光が両手に集まる。

『ビッグバン——』

少年から膨大な魔力とそれとは全く違った何かを感じた。

『——かめはめ波アアアアアッ！』

蒼色と桜色が衝突し、閃光が視界を覆う。均衡していた光は数秒して完全に相殺された。

あの技って漫画の技だよね!?

『ウソ……』

その光景に、私達はそれしか言えなかった。あの一撃を防ぐとは誰も予想だにしていなかったからだ。

『こんなもんか……』

「……お前は一体何者だ？」

今の結果にどこか不満がありそうな少年に、管制人格が問いかけた。

『ん？ 俺か？ 俺は——』  
少年は不敵に微笑むと自信満々に言い放った。

『お前を救う者だ！』

最強の戦士です！

最強の戦士です！

S i d e 愛衣

知らない少年が私達の前に現れてから、いきなり管制人格に「お前を救う」と宣言した。

「……私を『救う』だと？」

『ああ、そう言っただけ』

少年はニヤツと笑った。

「……どこの誰だか知らないが、それは誰であろうと無理だ」

『おいおい、勝手に決めつけんなよ。そんなもんやってみなきゃわかんねえだろ？』

「……いや、絶対に——」

『なら、どうしてお前は外に出て来た時から泣いてる？』

「……それは……」

『……ホントはこんなことしたくないんだろ？ 誰かに助けて欲しいんだろ？』

「……」

『どうにかして主を助けたいって、誰かに迷惑を掛けたくないって今まで何度も思ってきたんだろ？』

「……」

『そもそもお前は空とヴァーリが戦ってる時でさえ、時々何か考え事をしていたみたいだしな。最初から本気出されてたら二人は今頃死んでるだろうし』

管制人格の力はそこまでのものなのね……。

「……う……さい……ッ」

『あ？』

「……うるさい、ウルサイッ、煩いッ！ 私だっけどうにかしたかった！ だが、やりたくもないことを無理やりさせられ、何かを守りたくても何も守れないことが！ お前のような子供に何がわかるといなんだッ！」

それは、管制人格の心からの叫びだった。  
それに対して少年は、

『そんなん分かるわけねえだろ』

知るか、と言わんばかりの答えだった。

『俺はお前じゃねえんだから、お前の考えや気持ちなんてわかるはずないだろ?』

それは確かにそうなんだけど、言い方ってものがあるんじゃないかしら……。

「……だったら——」

『だが、手を差し出すことや一緒に悩んでやることぐらいなら俺には出来る。少なくともそこにいる白い悪……ゲフンゲフン……白い娘達はお前を救いたいってきつと思ってるぜ』

「……ッ」

今、明らかになのはを見て、白い悪魔って言おうとしたわよね?

というか、さつきから思っていたんだけど、空君とヴァーリ君は?

時間稼ぎは十分したと思うんだけど念話の一つもないわね。ん?

よくよく考えると彼の正体って……いや、まさか……。

でも、二人がもし、もしもあの漫画のあの技をやったのならこんな感じになるのかしら?

そこまで考えたが流石にそれは無いと思い、二人の会話に集中することにした。

『さあ、お前はどする? 手を伸ばすか? それとも諦めるか?』

「……私は……悪いが私には救われる価値は無い。……救われてはいけないんだ」

『そうか。——ま、そんなのはどうだっていいけどな』

『………は?』

管制人格も含めて私達は固まった。

……自分で聞いておいてそれはどうなの?

『はあ………なんでお前達も固まってんだよ。こいつが世界滅ぼしてみんな死ぬんだろ? そんなのは絶対に御免だろうが。だから、全力で止める』

「……もう、誰にも止められはしない！ お前も主と共に眠れ！」  
管制人格が高速で接近して彼に拳を振るった。

『——フン、遅いな』  
『ッ!』

だが、それ以上に彼の反応速度が凄まじかった。  
拳を掌で受け止めていたのだ。

『今度はこっちから行くぜ……。——オラッ!』  
彼が拳を離して右足で蹴りを入れると、管制人格の体は数m後退つた。

もしかして、彼は空君やヴァーリ君よりも強いのかしら……。  
いや、もしかしなくても強いと断言できるわね。

「………………。……お前は誰なんだ？ 先程から龍神空とヴァーリ・ルシファアの二つの魔力がお前から感じられるのは何故だ？」

管制人格が未だ正体の分からない彼に質問をした。

それは私達も知りたかった。

『なんだ、まだ気がついて無かったのか？ ……つてことは、まさかお前達もか？』

私達の方に向いて聞いてきたので、わからないという意味を込めて首を縦に振った。

『おー、そつかそつか。それは悪かったな。俺の名前はヴァーラ。龍神空とヴァーリ・ルシファアが合体して生まれた存在だ』

『え……がつ、たい……？ えッ! ええええええええええッ!!??』

私達の驚きの声が無人世界に響き渡った。

S i d e o u t

S i d e 琴里

遡ること数分前。

私——五河琴里は空の中にいるドライグ達と共に、まるで映画でも観るかのようには戦闘を観ていた。

なのは達が時間稼ぎに入ってから、二人は距離をとって地面に降り

立った。

『さてと、やりますか!』

『……まあ、ダサイとか、恥ずかしいはこの際我慢だな』

はあ……まさか、ホントにアレをやる気なのね。

確かにアレはすごい力よ? 管制人格に勝てる見込みだつて十分だろうしね。

ただ、その力を使うまでがちよつとアレなのよね……。

『行くよ、ヴァーリ!』

『ああ!』

二人が一定の距離を開けて並列になると、動き出した。

『フュー……』

腕を回しながら脚をカニのように動かして近づく。

『ジョン————ッ!』

片足を上げ、腕は外に向ける。

『————ハッ!』

最後に足を下げ、外に向けていた腕を中に戻して二人の人差し指同士をぶつけ合うと、光が二人を包む。

光が晴れるとそこに二人はおらず、代わりに一人の少年がいた。

『ここは……? ああ、前と同じか』

二人が合体したフュージョンことによつてヴァーリのアルビオンと精神世界を共有することが、以前にふざけてやって成功したときに判明した、というのをヤハウエ達から聞いた。

ふう……何とか成功したわね。凄まじい魔力と……これは龍の力かしら? それはあとで聞くとしましょうか。

『ところで、あいつの名前はどするんだ?』

『空さんとヴァーリさんですから……ヴァーラという名前でどうでしょうか?』

ヤハウエが少年の名前を付けた。

空の“ラ”と、ヴァーリの“ヴァー”を合体させたわけね。

「つて感じだけどあなたはどうか?」

『他になさそうだし、それでいいかな。その名前、ありがたく頂戴する

ぜ』

こうして二人が合体して最強の戦士が生まれた。

Side out

Sideヴアラ

アイツらうるせえな……。そんなに驚くことでもねえだろ？

なのは達の声の大きさに思わず耳を両手で塞いでしまった。

夜天も声には出さなかったが、目を大きく開いていた。

『ていうかお前はこれぐらい知ってると思ってたんだけどな……。』

「……その技を魔力蒐集した後で主が知らないところで覚えたのならば、私は知らない」

ふーん、そういうものなのか……。そういえば、この技はドラゴンボール読んで、二人がノリでやったら出来ちゃったんだよなあ……。本人達も出来るとは思ってたなかったし。まあ、今はどうでもいいけどな。

『さあ、お前の持てる全力を使って掛かって来いよ。俺がお前の抱えてるもん全部ぶっ壊してやるから』

右手をクイクイツと動かして挑発しながら言った。

「……来い、騎士達よ」

夜天が魔方阵を展開すると、倒されて気絶しているヴォルケンリツターが夜天の周りに召喚された。

何をする気だ？

「……騎士達よ、私と今こそ一つとなれ」

五人が夜天を中心として黒い線みたいなものに繋がれると、守護騎士達は消えて夜天の魔力が膨れ上がった。

……合体したってことか？

『油断するなよ。感じる魔力からして、さっきよりも強くなってるはずだからな』

『(わーってるよ)』

こりゃあ、益々面白くなってきたな……。

「……分身」

夜天がそう唱えると彼女の隣にもう一人の彼女が現れた。

『増えたあッ!?!』

俺達の技が使えるんだから普通だろ。

そう思っていたら、二人のうちの一人が接近して攻撃してきた。

片方は接近戦で、もう片方は後ろから援護射撃ってわけか。

『甘えよー!』<sup>あめ</sup>

俺が近づいてきた方の攻撃をいなして掴むと、後方からやってくる砲撃の盾にした。

当たった瞬間、彼女は煙となって消えた。

どうやらこっちは分身だったようだ。

うーん、どつちも同じ魔力しか感じねえから本物と分身の見分けがイマイチできねえな。

まあ、何にせよあいづつ飛ばせばいいか。

俺は残りの夜天、つまり、本物の方に少しだけ魔力を込めた右拳で殴りつけた。

『オラアッ!』

「……盾+倍加! ……クツ……」

俺の攻撃は防がれたもののシールドには罅が入っていて、もう一度攻撃すれば今にも砕けそうだった。

『もうイツチョ! セイツ!』

空いていた左拳でシールドは完全に砕け散った。

そして、ガラ空きになったところに回し蹴りを放ち、綺麗に脇腹に入った。

『お前、そんなもんなのか? もっと全力で来ないと俺を眠らせるなんて無理だぜ』

吹っ飛んだ夜天を煽ってみると返事は来なかったが、代わりに膨大な魔力を解き放ってきた。

「……分身」

再び分身の術を発動させると、今度は二人ではなく五人だった。

『……穿て、ブラッディダガー』

周囲に展開した短剣の総数はざっと見るに、二百は下らないだろう。

「ヴアーラ、援護するぞ！ 全てとはいかないがこちらで少しは減らしてみせる！」

『へそりや助かる。頼んだ』

『……倍加』

ま、そりやあ倍加するよな。予想の範囲内だ。

五人で一斉に倍加したから短剣の数が増えるだけじゃなくて、恐らく威力も速さも段違いになってるだろうな。……アイツらが落とせるのは精々半分が良いところだな。

俺の方は……防いでみるか。失敗しても琴里がいるから死にはしねえだろ。

『ブレイブ、防御魔法頼んだぜ』

《任せて下さい、マスター……って呼んであつてるんですかね？》

そんなの知らん。というか、お前いないと思ったたらネックレスになつてたんだな。

防御魔法を五枚展開してブラツディダガーに備えたが、

『……透過』

あ、やべ。

ドライブの透過の力の前に防御魔法など無意味に等しい。

『グアアアアアアッ！』

よって、俺はもろに攻撃を喰らった。

『あんたバカなの？ 倍加が出来るんだから透過も出来るに決まつてるでしょ？』

『(わかってたなら教えてくれても良かったんじゃないやねえの?)』

今の攻撃で体中に短剣が刺さって血が溢れたが、刺さった個所から突如青い炎が噴き出して短剣を燃やすと同時に傷口が塞がる。

なのは達を見れば、距離が大分離れていたのがギリギリで躲せていたらしく、そこまで酷い傷はなかった。

回復の力は便利だけど熱過ぎ！

『……そんなことぐらいわかつてると思つてたのよ』

そう言われると、自分の愚かさを呪うしかない。

『ていうか本気出しとけば、今のだって躲そうと思えば躲せたはずでしょ?』

『まあな。むしろ、全部掴むことすら出来たと思うぜ』

意外と目で追えるぐらいの速さだったな。

『あ、こいつ絶対にアホだ』

ドライグ達が息をそろえて呟く。

うるせえ。簡単に勝つても面白くないんだよ。

『はあ……分かったよ。そろそろ本気出すとしますか』

この状態も30分しかいられないからな。

『だったら今こそ二天龍の力を合わせるときじゃないか?』

本気を出すことを決めたら、アルビオンが提案してきた。

『(でも、二天龍の力つて相反する力だろ? 一緒に使えないはずじゃないのか?)』

『そこは私にお任せ下さい! 何たって私がセイクリッド・ギア神器を創りましたからね! そのくらい造作もないです!』

『ヴアーリの方にある歴代の白龍皇の怨念は私ともう一人の私で抑えよう』

頼もしい連中だな。

『そこまで言うなら頼んだ。禁手バランス・ブレイク化ッ!』

《Emperor Dragon Balance Breaker

!!

ブリストテッド・ギア デイバイン・デイバイディング

赤龍帝の籠手と白龍皇の光翼を出して禁手になると、二天龍の力が合わさった影響なのか、いつもとは違った声が神器の宝玉から響き渡った。

『……変身したのか? その力は一体何だ? (先程から感じる魔力以外の力が強まった……)』

『そうだな、サイヤ人を超えたサイヤ人が超スーパサイヤ人なら、天龍を超えた天龍だから……超スーパ天龍ってどこか』

『そのまんまね(だな/ですね)』

『それ以外に思いつかねえんだよ! ってか夜天もツツコんでんじや



避けれるぜ』

管制人格の攻撃は一度も当たらずにいた。

「……クツ……だったら！ デアボリック・エミッション十倍加！」

『ツ!? ヴァーラ（君）、避けて（避ける／避けなさい）！』

だが、俺は皆の忠告を無視して何もせずに喰らった。

S i d e o u t

S i d e クロノ

僕は声がギリギリ届きそうな場所から、サーチャーで二人の戦いを観ていた。

空とヴァーリが合体してできた存在——ヴァーラが戦い始めてから、管制人格はともじやないがほとんど相手になつていなかった。

つ、強い……。二人が力を合わせればここまでのものなのか……？  
そう思っていたのも束の間、管制人格が最初に放ってきた空間攻撃を、僕の忠告を無視してかなり近い距離で受けた。それも、バカ丸出しのノーガードでだ。

あいつは何をしているんだ！ あんなのを受けたらただじゃ済まないんだぞ！

だが、煙が晴れてそこにいたのは、無傷のヴァーラだった。

『無傷ツ!？』

ぶ、無事だったか……ってそうじやない！

「君は馬鹿なのか!? どうして防御魔法すら発動しないんだ!？」

『何となくイケそうだったから!』

なんでそんなにいい顔で言えるんだ！ サムズアップもするんじゃない！

「……いい加減真面目に戦ってくれ。君しか止められそうにないんだからな?」

『大丈夫だって。そんなに心配すんなよ。俺は強いぜ?』

心配なのはその性格なんだが……。ああ、頭が痛い……。

再び管制人格と戦い出したが、さつきと同様に目を瞑って攻撃を回避したり、大量の短剣を全部掴んだり、魔力弾を蹴り返したり、管制人格よりも速く動いて髪型を弄る、管制人格が蒐集した魔法を発動する際、そばにある魔導書を開かなければならないのを無理やり閉じて発動させなかったり、どこから取り出したかわからないハリセンで叩いたり等々の無茶苦茶なことをやりまくっていた。

……最早、これは戦いと言えないんじゃないのか？

なのは達もどこか遠い目をしてるし。

管制人格なんて涙目だぞ？ あ、最初からすでに泣いてたか。

彼は人間離れた動きをして管制人格を完全に弄んでいたが、彼女を掴んで地面に叩き付けた。

『これで終わりにしてやる！ 100倍ビッグバン——』

あの時の赤い砲撃よりも膨大な魔力量だ!?

アレをあんな距離で喰らえば魔導書もろとも消しかねないぞ!?

「止める！ そんなのを放てばはやても死ぬぞ！」

『——かめはめ波アアアアツ！』

忠告虚しく砲撃は放たれ、眩しい光に目を閉じて、来るであろう衝撃に備えたのだが、やってくるはずの衝撃どころか音一つしなかった。

何が起こったのかと思って目を開けてみたら唐突にクラッカーの音が聞こえた。

『なーんちゃって。見事に引つかかったな！ ハッハッハッハッハッ！』

『……はあ!?!』

僕達だけでなく管制人格の方もただただ茫然とするしかなかった。

「……つ、つまり、君はただ単に驚かせた、ということなのか?」

『まあな。お前らの驚いた顔をも中々よかったぜ!』

『アホカアアアアアアアアアアアツツツ!!!』

自分でも驚くほどの声が出たことに驚いたがそれどころではない。  
「ふざけ過ぎだ！」

『だってはやてが目を覚まさねえとどうしようもないんだから仕方ねえだろ?』

「それにしたって限度ってもんがあるでしょうが!」

『別にいいだろ? こいつはもう勝てないって分かってる諦めてるだらうし』

「諦めるどころか、今現在メツチャ攻撃されてるんだけど!」

でも、ヴァーラは攻撃されながらもそっぽを向きながらすべて躲し続けている。

見てるだけで頭が痛くなってくる……。

『お前も懲りねえなー。知ってるか? しつこい女は嫌われ易いんだぜ?』

ヴァーラが反撃しようとしたところで彼に変化が起きた。

彼の体が突如輝き出し、空とヴァーリに分かれてしまったのだ。

『えッ!?!』

「あ、あれ? 戻った?」

「そのようだな」

「つてことは……」

「……眠れ」

「一応聞くが、慈悲は?」

「……勿論無い。——吸収」

その瞬間、二人は光となって魔導書の中に入れられた。

「普通だったら、二人が吸収されたことに対して管制人格に怒りたいんだけど、ヴァーラのあの戦いを見てたら……」

「怒るに怒れないんだよね……」

フェイトとすずかの言葉に周りの皆も同意とばかりに頷いていた。

……すまん、二人共。こればかりは君達二人が悪いとしか言いようがない。

そんなの関係ないです！

そんなの関係ないです！

S i d e は や て

私は今、夢を見ている。

夕暮れの小高い丘のベンチに空君と座っている場面だ。

まるで恋人であるかのように——いや、この夢の中では恋人って  
いう設定だ。

本来なら皆や世界のために一刻も早く目を覚まसानあかんのやけ  
ど……。

「はやて……キス、しよっか」

ただいま絶賛目茶目茶良い所なんや！

夢と分かっていても、も、もうちよつとだけならええよね……？

「はやて？ どうかした？」

返事がない私を心配したように空君が聞いてきた。

「うえ!? だ、大丈夫やで！ そ、それよりも……そ、その……」

「うん、分かってる。じゃあ、するね？」

「は、はいいッ！」

空君の顔がどんどん近づいて来るにつれて、心臓のドキドキが大き  
くなっていく。

あ、あと少しで空君と——

——のところで大きな揺れが起きた。

「なッ!? 今良い所やのに何で邪魔するんや！ 空気読めや、ボ

ケエッ！ ——つてここどここや？」

気が付けば景色は変わり、薄暗い空間にいた。

「目が覚めてしまいましたか、主」

「へ？ お姉さん誰や？」

いつの間にか目の前には銀髪の綺麗な女性がいた。  
中々ええ乳をお持ちのようで……。

「私は闇の書の管制人格です」

闇の書？ 夜天の魔導書が正式名称やなかった？

この人がお姉ちゃんの言ってた管制人格なんか……。

って今はそんなことよりも——

「よくもいいところで邪魔してくれたわな！ あとちよいでキス出来たのに！」

「えッ!? も、申し訳ございません！」

「ふう……まあ、ええか……。とりあえず、お姉さんの名前を教えてくださいな」

「私に……名前などありません」

「そっか。ほんなら、私が付けたる。管制人格って一々呼ぶのは可哀想やもん」

「しかし……私はもう……」

「なんや？ 何かマズイことでもあるん？」

「私は——」

「——大丈夫や！ きつと空君が全部なんとかしてくれると思うで！」

お姉さんの台詞を遮って、彼女が何に困っているかもわからずに自信たっぷりと言い放った。

「……それほどまでに彼に信頼……いや、それだけではなく好意も寄せているのですね」

「え!? あ、いや、……その……はい」

うー！ ストレートに聞かれるともものすつごく恥ずいんやけど！

「そ、それはともかく！ お姉さんの名前や！」

「はい……お願いします」

話を戻して名前を考え始めた。

「うーん、……ハッ、トメでどうや！」

「いくら主でも怒る時は怒りますからね？」

「あわわ！ 今のは無し！ 無しや！」

全国のトメさんごめんなさい！ この人メツチャ怖ッ！

「せやなー、……リイン……フォース……。うん、決めた！ お姉さんの名前は今から、祝福の風——リインフォースや！」

これなら文句無しやろ！ 図書館通いがここで役に立つとは思いませんでしたけどな。

「それが私の名前……リインフォース……。ありがとうございます、主」

喜んでもらえてよかったわー。

「さて、ここからお次はここから出ないといかんな」

「それでしたら外にいる者達に頼み——ッ!? これは！」

ん？ 急にリインフォースの顔が険しくなつたで。

「どないしたん？ そんなに慌てて」

「どうやら龍神空とヴァーリ・ルシファアの二人が魔導書に取り込まれたようです」

S i d e o u t

S i d e ヴ ァ ー リ

『——ッ！ ヴァ……ッ！』

……？ 誰かが呼んでるのか？

少しずつ目を開けてみると、どこかで見覚えのあるバカでかい顔が目の前にあった。

「アルビオン……お前が俺を起こしたのか？」

『そうだ。先程までのことは覚えてるか？』

先程……？ あ、魔導書に吸収されたんだっただな。

「ああ、覚えてる。ところでここはどこなんだ？ 取り込まれたのならこれは夢の中なのか？」

俺がいた場所は広くて、ただ白い空間だった。

これがもし、夢の中であれば自分は随分とつまらないな、と思うだろう。

『ここは神セイクリッド・ギア器の中だ。お前が取り込まれる瞬間に精神をここに引き込んだのだ』

「そうか。……ところで、あいつらは何だ？」

俺の指で示した方には、虚ろな表情をした亡霊のような存在が何人もいた。

『あいつらはかつての白龍皇であつた者達だ。つまり、お前にとっての先輩だ』

あれが歴代の白龍皇達か……。

「それは分かったが、何故歴代の奴らがここにいるんだ？」

『ここにいる者達全員は碌な死に方をしなかった。大切な誰かを失つたり、他の神滅具ロンギヌス所有者に殺されたりとな。……私の神器を持ったばかりにそんな末路を歩んでしまった。そして死後に怨念となって私の神器の中に残つたというわけだ』

「俺も死んだらここに来るのか？」

『さあな。それはお前の生き方次第じゃないのか？』

「そうか……」

俺も恐らくはここに来るのだろうか……。

空達という時々忘れそうになるが、アイツへの憎悪が今も俺の心の奥深くで蠢いてる。

「アルビオン、俺はいつになつたら外に出られる？」

『すまないが、それは私にも分からない。それまでここで居心地は悪いだろうがゆっくり待っているしかない。暇なら先輩達にでも声を掛けてみてはどうだ？ 反応が返ってくるかはわからないがな』

いつ出れるかもわからないなら暇潰しには丁度いいだろうと思ひ、話し掛けてみることにした。

「なあ、お前達はどんな奴だったんだ？ 大切な人とかいたのか？」

強かったのか？」

『……………』

返って来たのは沈黙だけだった。

『やはり何も答えないか』

特に気落ちすることもなくアルビオンは淡々と告げた。自分でも

何度か話し掛けたのだろう。

今は諦めるとするか。どうせならここで修行でもするか。

「アルビオン、修行に付き合ってくれ」

『構わない。どこからでも掛かってくるがいい』

「来い、ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手」

さつきは聖書の神が色々やってくれたみたいだが、普通は白龍皇の力と赤龍帝の力は一緒には使うことが出来ない。無理にやろうとすれば出来ないこともないだろうが。確実に体に悪影響を及ぼすだろう。

それにしても、聖書の神の力は悪魔の血が半分流れている俺からすれば毒でしかないのに何故影響がなかったんだ？ ……ダメだ、さっぱり分からない。帰ったらアザゼルにでも相談してみるか。

『どうした？ 掛かってこないのか？』

考え事をしていたらアルビオンが訪ねてきた。

軽く謝ってから、修行を始めた。

「……アルビオンから見ても、俺はお前の力を使いこなせているか？」

『唐突にどうした？』

適当なところで動きを止めて、アルビオンに聞いてみた。

「ふと、気になってな」

『そうだな……今の段階ではまだまだの所もある。しかし、お前は半分悪魔、それも魔王の血筋だ。間違いなく歴代最強の白龍皇になると断言してもいいくらいだ』

歴代最強か……。

「……………」

『最強になれると言われて実感湧かないか？』

「まあ、それもあるんだが……どうせならもつと上を目指したいと思っただ」

俺が強くなればなるほど、空もきつと強くなるだろうしな。

『もつと上か……。フツ……。だったら共に行こうではないか！ 更なる高みへと！ 今のお前には私の力だけでなく紛い物とはいえずドライグの力があるんだ。必ず最強へと至ってみせようではないか！』

それにお前の友人、空にも負けてはいられないのだろうか?』

「ああ、そうだ。だから、アルビオンだけじゃなくってお前も力を貸してくれ!」

左手にある赤龍帝の籠手にも頼んでみれば、宝玉から「もちろんだ」と言っているかのように輝いた気がした。

S i d e o u t

S i d e 空

「……ん……あれ? ここは……家なのかな? それも俺の部屋みたい」

目が覚めると、見慣れた自室の天井だった。

……琴里達の力を感じないのはなんで?

「あ、やっと起きたみたいだね」

「ん?」

自分の中の違和感の理由を考えていたら、後ろから声が掛かった。声のする方に顔を向ければ知らない女の子がいた。

いや、正確には名前は知ってるが知り合いというわけではないといった感じだ。

俺が一方的に知っているだけの存在。

「……どうしてここにいますか?」そのがみりんね園神凜祢さん

「む、他人行儀過ぎない? 互いのことは知ってるんだから敬語は止めようよ」

可愛らしく頬を膨らませて呟いた。

じゃあ、お言葉に甘えて敬語は止めよう。

「互いに知ってるってことはどっかからずっと見ていたってこと?」

俺が知ってるのは知識としてだから、互いに知ってるとは言いがたい気がするけど。

「うん、そういうこと♪ちなみに私を通して神様も君のことを知っているらしいよ」

それってストーリーカーじゃないの? と思ったが言っではいけない

気がしたので言わなかった。

「それで、最初の俺の質問の答えは何？」

「えーっとね、簡単に言うと、私にはとある役目があるんだ」

「それがここで俺と会うこと？」

「まあ、正確にはその後の方が重要な。それよりもまずは空が自分のことを知ることが先なんだけど」

俺のことで心当たりがあるのは一つか二つぐらいだ。

「もしかして——」

「うん、空が今言おうとしてることで合ってるよ。私が君に話すことは——」

空の前世のことだよ

S i d e o u t

S i d e は や て

空君とヴァーリ君が本に吸収されたと聞いて、助け出すためになのはちゃん達に協力してもらって、管理者権限をなんやかんやで奪い返すことに成功した。

なんやかんやって便利な言葉や。

あと、いつの間にか消えていたシグナム達を復活させることも出来た。

そして、外に出て中にいる二人を出そうとしたんやけど、

「なんで空君は出せないや!? リインフォース、どういうことなん!？」

出て来れたのはヴァーリ君のみだった。

「……すいません、主。私も先程から調べてはいますが原因は分から

ないんです」

「……ッ……」

折角、権限を手に入れたのに何もできない自分が悔しくて腹立たしい。

「はやて、アイツならゼツテー大丈夫だ！」

私を励ますかのようにヴィータが力強く言う。

「……何でそう言えるん？」

帰ってくる根拠などどこにもないのだ。

「だって、あの空だぜ？ それによお、あたし達がアイツを信じなくて誰が信じるんだよ」

ッ！ ……そうや……空君は信じて待っててって言った。

だから、私は信じて待つとるだけや！

空君が必ず戻ってくることを信じて待つことにして、私達は管理者権限を奪い返した際に切り離れた暴走中の防衛プログラム——ナハトヴァールとの戦いに備えた。

Side out

Side 空

凜祢の口から出た台詞は俺の前世についてだった。

そっちだったか。俺はてっきり精霊の力のことかなって思ってたんだけど……。

「空は気になる？ 自分の過去が」

「気になるか気にならないかで聞かれたら、当然気になるけど……」  
「けど？」

「——俺は龍神空だから」

続きを言うと凜祢がポカーンとしていた。

あれ？ 変なこと言った？

「うーん……うん。普通に意味わかんないや。ごめんね」

申し訳なさそうに両手を合わせて謝ってきた。

あ、意味が通じてなかったのか。

「要するに、前世は前世、今は今ってことだよ」

それでようやく通じたのか、凜祢は「なるほどー」と手をポンツと叩いた。

「そっか。意外と割り切ってるんだね、そこらへん」

「どっちかかっていうとそもそもその記憶が無いから未練もクソもないんだけどね」

知ったところで何になるんだって話だし。

「あ、そういうことかー……ってそういうことじゃないよ！ 空には知ってもらわなきゃいけないんだよー」

突然、我に返った凜祢が叫んでいた。

「それって強制なの？」

「うん、そうしなくちゃいけない役目だってさっき言ったでしょ？」

「でも、知ってもどうしようもないんだけど……」

「それでもだよ。君はいずれ記憶を取り戻して元の世界に帰らなくちゃいけないから」

は？

その言葉は俺を動揺させるには十分なものだった。

「ど、どういうこと……？ 俺が元の世界に戻るって……」

「そのままの意味だよ。空、君は特別な存在なんだよ。この世界で誰よりもね」

「特別？」

俺の何が特別？ この世界にはそんな奴は五万といるでしょ？

「色々あるんだけどね。例えば……君が出会った転生者は全員赤ん坊からやり直しているのに対して、君は5歳からこの世界にやって来たんだよ」

俺は5歳からこの世界でスタートしたことは確かなことだし、正田の家族に関しては知らないけど、愛衣や雄人、あかりには血の繋がった家族がいることは知ってる。

「でもそれだけじゃ——」

「もちろん他にもあるよ。本来なら劇的な変化が無いと至れない  
禁 手にどうしてあんな簡単になれた？ 特に黄昏の聖槍トウル・ロンギヌスにそれ  
が言えると思うんだけど。フュージョンだってそれにはいるだろう  
ね」

「ッー」

確かに俺は黄昏の聖槍に出来るかとも思ってたやらホントにな  
れた。

理由はヤハウエ達にも分からなかったし、俺自身も気にすることは  
なかった。

「それは……」

でも、それは『偶々』の一言で片付けられるほど甘くはない話だ。

「わからないよね？」

悔しいが凜祢の言う通りだ。自分のことなのにさっぱりわからな  
い。

それどころか、自分のことを気にすることなんてほとんどなかった  
と今更ながらに気付いた。

「……わかった、俺が特別だったことは認めるよ。それで話は……ま  
だ終わりなわけないか。俺が元の世界に戻るってことを聞いてない  
もんね……」

「うん、こっちの方が重要だからね。次は……君がどうして特別であ  
る理由かな。これは私が空を転生させた——というよりはこの世  
界に送った神様から 聞かされただけなんだけどね、空は前にいた世  
界を救った英雄なんだってさ」

……うん、ごめん。普通に頭の整理が追い付かない。俺が世界を  
救った英雄？

作り話か中二病を拗らせたアホとしか思えないんだけど……。

「アハハ……やっぱりそうなるよね。私達も聞かされたときはへ？  
って感じだったし」

「いや、誰だってなるで——待って。今、私達って言った？」

他にも俺の事を知ってる人がいるってことだよな？

「え……あッー！ いや！ 今のは、その……」

「……他に誰が知ってるの？ 教えて———というか教えろ」

威圧感を込めて凜祢に詰め寄った。最早、質問ではなく脅しに近い。

「ううッ……ハイ……答えます」

俺の迫力に負けて涙目になっていたが、今はそれどころじゃない。

「それで、誰が知ってるの？」

「———十香ちゃん達、精霊の皆だよ」

その答えは俺が元の世界に戻るということよりも大きな衝撃を与えた。

「……それってどういうこと？ ……十香達は俺が選んだ特典だからいるんじゃないのかよ!？」

声が自然と震える。

「ううん、違う。だって空が選んだのは力であって彼女達じゃないからね」

「でも琴里は神様の気まぐれでとか言ってた———」

「……それは神様が空に寂しい思いをさせない為の配慮だよ。他の転生者に家族がいるのに君だけいないのは可哀想だって思ったらしくてね、せめて君が記憶を取り戻して、元の世界に戻るまでの間だけでもいいからって、神様が十香ちゃん達を創って君の下へ送ったんだ」  
たったのそれだけの為にあいつらはいたのか？

「……何だよそれ……。何なんだよ一体！ 俺に寂しい思いをさせない為だけにいて、俺が記憶を取り戻したらあいつらは消える!? たったそれだけのことで神様に創られたのか!? だったら、あいつらが俺に向けてた笑顔は全部偽物だっていうのかよ!? いつもあいつらに無理に気を遣わせていたのか!? 俺が勝手に一人であいつらのことを家族だって思い込んで———」

「それは絶対に違うッ!!」

「ッ!？」

凜祢の予想だにしなかった大きな声と頬を叩かれたことに竦み、

ベッドに押し倒された。

反論しようとしたが、泣いてる凜祢の顔を見てそれ以上何も言えなかった。

「確かに最初は与えられた使命だったかもしれない！ 本心じゃなかったかもしれない！ だけど、今の彼女達を見ればすぐわかるはずでしょ!? 心の底から空のことを大切に想ってることは、ずっと空達を観てきた私にだってわかる！ わからないんだったら彼女達の気持ちをしる！ 想いを聞いてみればいい！ なんなら、〈囁告帙篇〉で調べたって構わない！ その後で煮るなり焼くなり空の好きにすればいいッ!!」

言い切った凜祢は目元を赤く腫らし、息切れしたように呼吸を荒くしていた。

……ハハ、俺ってホント馬鹿じゃん……。

こんなんだから鈍感とか言われるんだろうね。

凜祢から説教を受けて最初に思ったことはそれだった。

「あー……涙が止まんないや。そういうえば、こんな風に誰かに怒られたの初めてだよ……」

でも、不思議と悪い気はしなかった。

5分ほどして、俺は泣き止み、凜祢も呼吸が落ち着いていた。

今はベッドに並んで座っている。

「でき、話を戻すけど、どうして俺は戻らなきゃいけないの?」

「ごめん、それは分からない。あの神様には空が記憶を取り戻すまでの間、側にいろとしか言われてないんだ」

詳しく知ってるのは天照さんだけか……。〈囁告篇帙〉で調べられるのかな?」

「凜祢が俺の側にいなかったのはどうして? 役目だったのさつき聞いたけど」

「私が純粹な精霊じゃないってことは知ってるでしょ? 空は精霊の力を選んだけど、その中に私や鞠亜ちゃんは含まれてない。だから、

私は十香ちゃん達とは別の場所から——夜天の魔導書から覗いてたつてわけ。近くにしていると分からないこともあるからね」

「となると……万由里つて子どもどこかで俺をストー……監視してるの？」

「察しがいいね……。うん、空の推測通り彼女も君を観てるよ。場所は言えないけどね」

「それから俺が特典貰った意味ってある？ 世界を救った英雄なんでしょ？ すごい力とかあるんじゃないの？」

「それは君が一番分かっているんじゃないの？ 記憶が無いのに力が使えるはずないでしょ？」

あー、それもそっか。当たり前前の事過ぎるね。

「記憶を取り戻したら、十香達は消えて今ある力も無くなるの？」

「うん、そういう仕組みになつてる。もちろん転生者の中では君だけだよ」

「そう……。じゃあ、最後の質問」

「何かな？」

「俺が記憶を取り戻して元の世界に帰ることや十香達が消える運命を変えられる？」

「……それは無理だと思う。空は元の世界に帰りたくはないの？」

あんまし良い答えは期待はしてなかったけど、ふーん、そうなのか程度。

「うん、正直言つてそんな気持ちは皆無だよ」

「それもそうだよ。記憶は無いし、ここには大切な人がたくさんいる。それで、帰りたいつて言う方がおかしいって私でも分かるよ……」

「そもそも俺は向こうでは死人でしょ？ だったらもういいじゃん。世界を救つたらしいけどそこにいる必要なんて無いし、俺は第二の人生——と言つても記憶は無いから初めてみたいなものだけど、ここが大切だから。それにさ——」

「俺は龍神空だから、だよな？」

お見通しだよと言わんばかりの凜祢のドヤ顔に多少イラつと来た

ものの、合ってるから何も言えない。

「まあ、そういうこと。前世が何？ 記憶が戻ったら消える？ 元の世界に帰る？」——そんなの関係ない！ たとえ神様に決められた運命だとしても俺は抗う！ この世界で皆と一緒に生きる為に！」

俺が宣言しきつたと同時に部屋が音を立てて崩れた。

完全に部屋が崩壊して暗い空間になると、自分の中に琴里達の力を再び感じられるようになった。

『話は終わった？』

「うん、結構キツイ話だったけど、皆に色々聞きたいことも出来た……。あ、そうそう。俺、決めたから」

『……？』

「あー、今言うのは止めとく。何か死亡フラグになりそうだから」

『……そう、わかったわ』

『二人の会話はよく分かんが、それよりもここからどうやって出るのが問題だぞ』

『だったら、空！ 君の本気を出しちやえ！』

『誰だ（ですか）!? いつの間にかいたんだ（いたんですか）!?』

ホント、何時俺の中に入ったんだろう……。

しかし、そんなことを考えるよりも、先にドライグが言った通りここから出ないといけない。

「——さてさてさーて、……って誰がいる？」

空間が暗いので見えにくいのが誰かがいるのがぼんやりとわかる。

それも、二人ほど。

「あの人、こんなところで何してるんですか？」

「……人、なのか？」

近づくと、黒髪の男性と蹲っている銀髪の女性がいた。

「え、あ、はい」

「なんだって!? また、私と同じような人が……。しかも今度はこんな子供まで……。」

あれ？ この人ってクロノに似てる……。よね？

男性の顔を見てみれば、それが真つ先に思い浮かんだ。

お姉さんも顔は見えないけど管制人格に似た雰囲気がある。

「えーっと、とりあえず、ここから出ませんか？」

「それは残念ながら無理だ。ここでは魔法は使えない」

魔法は使えない、か。

「俺の……レアスキルのなノリのアレでここから出ます」

『レアスキルのなノリのアレって何（何だ／何ですか）？』

君達の能力を隠すためですよ！

「ち、ちよつと待つてくれ！ たとえ外に出られたとしても彼女から聞いたんだが、これから防衛プログラムが暴走する！ 危険だぞ！」

「大丈夫です、問題ありません」

「今ので一気に不安になったんだが……。それでもどうしてかな……不思議と心のどこかで期待している自分がいるよ」

「なら、期待しててください。お姉さんもそれでいいですか？ とうか、お姉さんって管制人格なんですか？」

俺と男性が話し終わってから聞いても未だに蹲り続けていた。

「……いえ、私は防衛プログラムです」

「えッ!? これから暴走するんじゃないですか!？」

「正確にはこの子は暴走する部分と分離された存在……とでも言えばいいのかな？ まあ、何にせよここから出ても問題は無いはずだ」

ほっ……よかったあ。

「それじゃあ、行きますね（ドライグ、琴里、力貸してね）」

『ええ（ああ）！』

今なら何でもできそうな気がする。  
バランス・ブレイカー 禁 手と精霊の力を合わせることだっていけそうだ。

一度深呼吸をしてから、言葉を紡ぐ。

「——我、目覚めるは——」

新しい名前です！

新しい名前です！

Side空

「——我、目覚めるは——」

「……私のことはいいです。放っておいてください」

暗い空間の中でも目立つ銀色の髪を持つ女性——防衛プログラ  
ムが置いていけと言いつ出した。

えー？ それ、今言うの？ 折角の詠唱が止まったんだけど……。

「お姉さんはこんな暗い所が好きなんですか？」

「それは違うと思うんだが……」

「それもそうですよねってあなたは誰ですか？」

「ん？ ああ、私はクライド・ハラオウン。管理局で働いてたよ」

「ツ！ そうですか……。俺は龍神空って言います」

ハラオウンってやつぱりそうだったか！

「それで、お姉さんはどうして？」

「私はここを出る資格を持ち合わせていません。二人だけで行つてく  
ださい」

「資格？」

そんなモノがここから出るのに必要なのかな？

「私は分離されてるとはいえ、今まで多くのものを傷付け、壊した。そ  
んな私が外に出ていいはずがない。だから、置いて行つてください」

「嫌です」

「……そうですよね。……は、はい？ 今、何て言いました？」

断れたことに気が付いたお姉さんが顔を上げて聞き返してきた。

あ、ようやく顔が見れた。管制人格と違って瞳が蒼いんだね。

「嫌ですって言ったんです」

「な、何故ですか!？」

「放っておけないんで」

たったそれだけの理由でしかないが、このお姉さんは何となく放つ  
ておけない。

そう思ったからこそお姉さんの提案を断った。

「だから私には生きる価値なんて無いんです！　そう言ったはずですよ！」

「何かを傷付けたり、壊したのは自分の意思じゃないですよ？　後悔も反省もしてるんですよ？」

「それは……そうですね……」

「だったらいいじゃないですか。お姉さんは生きていいと思いますよ」

自分で無茶苦茶なこと言ってるのは自覚してるけどね。

「で、ですが……私は——」

「大丈夫、例え何が来ようと俺がお姉さんを護るし、世界が否定しようとな俺が肯定する。——だから、手を伸ばして。きちんとその手を離さないで握ってるから」

お姉さんは一瞬手を伸ばし掛けたがすぐに引込めた。

まだ迷いがあるのか質問をしてきた。

「……迷惑を沢山掛けるかもしれないですよ？」

「誰だって誰かに迷惑は掛けるよ。もちろん俺だって」

『いつも一杯迷惑掛けられてるな、空に』

「……住むところや食事はどうすれば？」

「俺の家に来ればいいよ。今更一人くらい増えても問題無いよ」

『ホントに今更ですよ！　多過ぎです！』

「……予想外のこと暴走するかもしれませんよ？」

「そしたら全力で止めるよ。俺の家族は強いから」

『思いつきり他力本願だな』

「本当に、私は生きていてもいいんでしょうか？」

「うん、生きていいんだよ。さ、お姉さんの答えを聞かせて？（お前ら後で覚えておけよ）」

「……あ……あ、あッ………生きてたい………行きたいッ、ですッ！」

お姉さんは涙で顔をクシャクシャにしていたが、しっかりと返事をしてゆつくりと俺に手を伸ばした。

「ちゃんと届いたよ、お姉さんの手」

伸ばされた手を俺は力強く握り返した。

「——我、目覚めるは」

S i d e o u t

S i d e あかり

『あと五分で防衛プログラムが暴走開始します！』

アースラのオペレーター、エイミーさんからの連絡が入った。

私達の目の前には黒い何かがウヨウヨと蠢いてる。

それが防衛プログラム、ナハトヴァールだ。

「……時間がない。このままだと空抜きでやるしかないな」

「そんな……！」

私達は一応いつでも戦える準備はしてる。

それとユーノ君とアルフの二人とようやく合流できた。

ぶつちやけ空君がいなくてもこのメンバーなら防衛プログラム暴

走体は止められるんだよね。でも、空君がいるいないで士気が変わる

からなあ……。

特に好意を寄せてる娘達にとつては。

残り時間が無くなっていく最中、<sup>さなか</sup>突如誰かの呪文<sup>うた</sup>が聞こえた。

『——我、目覚めるは』

それは、私達全員が待ち望んでいた声。

『——炎の精霊と赤き龍帝と共に歩む者なり』

いつも屈託の無い笑顔でいる少年。

『無限の焰ほのおが舞い、夢幻の赫あかが彩る』

誰かを助けることに躊躇わない心。

『我、全てを灰燼と化す？いつえき焱あかの龍精霊と成りて』

そんな彼なら、平然とやってのけるに違いない。

『——汝の未来を希望溢れる真紅で染め上げよう』

《Crimson Dragon Elemental Over  
Drive!!!!》

何かの詠唱が終わると、曇っていた空が割れて龍の形をした炎が降りてきた。

「な、なんだありや!？」

「炎のドラゴン……」

「綺麗……」

炎は一定の高さにまで達すると球体となった。まるで太陽のようだ。

その光景に私達の視線は釘付けだ。

「まったく……待たせてくれる奴だ」

「だが、そこがアイツらしいではないか」

球体が切り裂かれ、声の主が姿を現した。

やっと帰ってき——へ？

『……………へ？』

「到着つと。お、皆いる。龍神空、ただいま戻りました！ ……なんつって。つてどうしたの？ 固まってるけど」

彼のあまりの変貌と、知らない男性と女性を抱えていて誰もが固まった。

Side out

Side 空

「え、クライドさん、皆固まってますよ？ どうでしょう？」

俺と共に魔導書内から脱出した黒髪の男性——クライドさんに助けを求めた。

「……ハハハ、側で見ていた私達でさえ君の変身に驚かされたんだ。変身するところを見てない人だったら尚更の事だと思うよ」

「そんなにですかね？」

まだ自分の姿を見てないから何とも言えないんだけど。

『誰がどう見ても変わり過ぎよ。自分でも見てみなさい』

自分の姿を見ると、確かに大分変わっている。

軽く着崩した赤い龍の紋様の入っている薄橙の和装と紅い袴、紅い下駄。

腕にはヴァーラが付けていたのと同じ緑色の宝石の埋まった腕輪が二つ。

髪は伸びてはないようだが琴里のように赤くなり、側頭部には感觸的に白い角らしきものがあつた。

一番目立つのが子供が持つには不釣り合いな緑色の宝玉が埋まった紅い戦斧。

そして、腰辺りに違和感を覚えると、ドラゴンの尻尾らしきものが付いていた。

「おお、スゲー変わってる。尻尾まで生えてるし」

露出が増えた気がする。

「君からは分からないだろうけど瞳の色も右が赤で左が緑に変化しているよ。それから身長も伸びてるね。大体……14、5歳辺りかな」

自分ではわからないところはクライドさんに教えてもらった。

「そんなに変わってたんだ……」

瞳の色は琴里とドライグの力が合わさったからで、身長の変化も琴里と合わさった影響と考えていいだろう。

一旦、それは置いて。

「クライドさん、クライドさん。あそこにいる真つ黒少年が、あなたの息子のクロノですよ。会ってきてはどうですか?」

俺はクロノのいる方向を指し示した。

「クロノだつて!? ……夢の中で見ていたクロノよりも小さいな」

それ、本人も気にしてるから言わないで上げて!

「クロノのところまで行きましようか」

「あ、ああ、頼む」

デバイスが無いので飛べないクライドさんを俺が支えながらクロノ近くまで連れて行った。

「クロノ君、ここで問題です! この人、だくれだ?」

「にゃ!? クロノ君に似てるの!」

「ツ!? ま、まさか……父さん、なのか……?」

「え、でもクロノお父さんって十年前に……」

「実はそれは違うんだ。私が砲撃に?まれる直前に魔導書内に吸収されてね、その中で今日まで夢を見ていたよ。知らない少年にハリセンで叩かれるまではね」

死んだはずのクライドさんが生きていることが有り得ないという表情をしているのは達にも、クライドさん自身が説明した。

しかし、そこで気になることが出て来た。

「ハリセンで叩かれるって……まさか」

皆の視線が一気に俺とヴァーリに向けられる。

「そう言えば、フュージョンしたときにハリセンで管制人格を叩いたな」

「あー、あれって聖剣ブレイド・ブラックスマス創造で創ったハリセンだったからなあ、きつと聖なる力のおかげで目覚めたんじゃない?」

「じゃあ、私が目を覚ましたのも……」

「ヴァーラ君に叩かれた、というわけね」

「うう……あとちよいでキスできたのに、それを好きな人に止められるって……」

何か、はやてがブツブツ言ってるけど大丈夫かな？ って――

「はやてが不良になってるツ!? 何があつたの!?!」

はやての髪がクリーム色になり、目は碧眼。服装も私服から黒いバリアジャケットに変化していた。

「え!?! ち、ちやうで! これはリインフォースとユニゾンした影響なんや! ていうか、空君にだけは言われとうないわ! 何や知らんけど身長も伸びとるし! 露出が多いのは正直言つてエロいですあれがとうございます!」

へえ……管制人格、もといリインフォースははやての中か。

最後の方にお礼を言われたのは予想外なんだけど……。

「俺のは……ほら、色々あつたから。だからいいの」

『何が!?!』

適当にはぐらかして自分のことは棚に上げた。

説明が面倒くさいというよりもどうしてできたか自分でも分かってないからだ。

「もう一人の方は誰だ? 管制じ――いや、今はリインフォースだったか。彼女にそっくりだな」

「そうや! 何でリインフォースそっくりなん!?!」

うん、俺もさつき顔見た時はびっくりだったよ。瞳の色以外はほとんど一緒だし。

「こちらのお姉さんは防衛プログラムのボーちゃんです!」

『ボーちゃん?』

「……勝手に人の名前を鼻水垂らした五歳児と同じ名前にしないで下さい」

あ、そのアニメ知ってるんだね。

「ごめんなさい。良い感じの呼び方が無かったもので……」

「でしたらあなたが付けて下さい。それと敬語はやめて下さい。さつきまでタメ口だったではありませんか」

えー!? いきなり名付け親になれと申しますでございませるか!

「わ、分かったよ（何か良い案在りますー?）」

『あなたが指名されたんだから自分で何とかしなさい。ヤハウエも手伝うのは無しよ』

『私は構いませんが……』

ぐぬぬ……ヤハウエの力が借りられないのはキツイです。

『偶には頑張ってみろ』

『そうだな、それぐらいしても良いではないか。良い経験になると思うぞ』

『ワシは面白いから、ボーちゃんでも構わねえがな!』

『空、ファイトだよ!』

誰も助けてくれないのね……。もう諦めて自分で考えようか。

「うーん……ステ、ラ……? お? おお! あ、いや待てよ……?」

ねえ、お姉さんはステラとシエルのどっちがいい?」

「え、そう言われましても……二つの意味は何ですか?」

「ステラはイタリア語で星とか恒星って意味で、シエルはフランス語で空って意味」

「……星と空……。悩みますね……」

「いつそのこと合体させてッシエラ」でもいいよ」

「……シエラ……: 気に入りました。私は今からシエラを名乗ります。ところでどうしてその二つが出て来たんですか?」

「ステラはイタリア語で星や恒星の意味って言ったでしょ? お姉さんとさつきまでいた場所って暗い所だったのに、その中でも綺麗な銀髪が目立ってたから星みたいだなんて思ってたんだ。シエルに關しては俺の名前から偶々思いついたんだよ。……もう、自分に生きる価値はないか思わないでね? いい?」

「それはもちろんです。ここに誓います、我が主」

「うん、よろ——我が主?」

あまりの自然な流れによろしくと言い掛けて気が付いた。

『我が主?』

「何で俺が主なの? はやてが魔導書の主だからシエラの主ははやて

でしょ」

「名前を付けてもらった時点で主は八神はやてから龍神空に書き換え  
ました。……それに」

「それに？」

続きを促すと、シエラの肩がワナワナと震え出した。

「……わ、私にあ、あんなことを言っておいて責任を一切取らないとい  
うおつもりですか!？」

『あんなこと!?!』

シエラの発言に過剰に反応したのは小学生組の女子達だった。

「(え、俺そんなこといつ言った?)」

『そりやそうよ。あのセリフ、ほとんど告白に近いもの』

「(こ、告白ってそんなつもりじゃ……)」

『これは責任は取った方がいいんじゃないかねえのか?』

『ホントにあなたという人は……』

『まあ、空だしなあ……』

『もげろ』

『私は空が幸せなら何でもいいよ』

うーん、どうしたもんか……。とりあえず、ドライブはぶん殴るの  
確定だね。

悩んでいたら後ろから凄まじいほどの殺気を感じた。

バツと振り返るとなのは達から黒いオーラが出ていた。表情は俯  
いているのでわからない。

「あのー、皆さん? どうかなさいました?」

『……あんなことってどういうことなのか説明してもらえる(かな/  
かしら)?』

「こ、これにはかくかくしかじかでマリアナ海溝よりも深い事情がご  
ざいまして……あー、ナハトヴァールが出そうだ! よーし、頑張る  
ぞー!」

『あ、逃げた』

うるさいよ! あんなの相手にしてられるか! ……これ終わっ  
たらさっさと逃げないとヤバい気がする……。

でも、今はアイツに集中しなくちゃいけないのは事実だからね。

『ナハトヴァール、出現します！ あ、空君おかえりつてクライドさん!?! クライドさんなんですか!?!』

「それは後で説明する。とりあえず父さんをアースラに転移させてくれ」

『よく分からないけど、分かったよ!』

クロノがエイミイさんに指示を出すと、すぐにクライドさんがアースラに転移された。

「で、あれが暴走した防衛プログラム——ナハトヴァールつてわけ? デカいね」

俺達の前に現れた黒い塊が大地に降り立つと地割れが起こり、黒い蛇の頭八つが生え、その後ろには名状し難い何かがあった。

「な、なんだあれは!?! 後ろのはともかく、あんな蛇、私は知らないぞ!」

『ッ!?!』

防衛プログラムのシエラでさえ知らない変化が魔導書に起きたとでもいうのだろうか。

『あー、詳しいことは省くけど、実は神様が空の為にやったんだよね……』

凜祢が気まずそうに教えてくれた。

『(何だそれ!)』

『だ、大丈夫だよ！ 今の空ならいけるって！ ………………多分』

おい、最後のでメツチャ不安になったんですけど！ はあ……結局やるしかないんだけどさ……。

「よし！ どうすんの!?!」

俺が問い掛けると、皆は空中にいるというのに器用にズッコけた。  
「……何も考えてなかったんだね」

「空君だったら一人で行くかと思ってただけど……ちよつと意外……」

「考えてないわけじゃないけど、アレを倒すには俺一人じゃ無理だか

らね。それなりの作戦が必要でしょ」

意外って何だよ……。すすか、君は失礼過ぎない？

「……君だったらあの蛇一匹倒すのにどれ位掛かる？」

「30秒……ってところかな？ ヴァーリだってそんなぐらいいけるでしょ？」

「そうだな。今の俺ならそれぐらいが妥当か」

「それなら二人に全部任せてもいいか？」

「いや、それはキツイかも。だから」

『だから？』

「雄人、明日奈、フェイト、アリシア、シグナムさん、ヴィータに手伝ってもらいたいな」

「え、そんなにそつちに割くのかい？」

俺とヴァーリがいるのに更に人数を加える。

単純に考えて一人一匹と言ってるのだから当然の意見だ。

「一匹倒す間に他のから攻撃されたらいくら俺と空でも無理だ。今呼ばれなかった奴らは後ろの本体を出来るだけ抑えて欲しい、つてところか？」

「うん、正解」

俺の考えをヴァーリが全部まとめて答えてくれた。

「あ、ちなみにだけどフェイトとアリシア、明日奈の三人で二匹。俺、ヴァーリ、雄人、シグナムさん、ヴィータが一匹ずつ」

「それだと計算が合わんで？ 最後の二匹はどうするん？」

「早い者勝ちの勝負！」

『やっぱりか！ でも誰も乗らな——』

「その勝負乗った」

「私も乗るぞ！ 騎士として勝負事で負けてはいられん！」

『ここにいた！ それも二人！』

ノリが良いことだなによりなにより。

「相変わらずだな……。まあ、いい。これで作戦は——」

「ちよつと待ってくれ！ 俺一人であんなバカでかい蛇なんて倒せねえよ！ せめてもう一人ぐらい寄こしてくれよ！」

作戦決行直前に雄人が待ったをかけた。

一人では蛇には勝てない、それが雄人の意見だった。

「大丈夫、大丈夫。雄人は無駄に頑丈だから」

「無駄ってなんだよ！」

「僕も君なら出来ると思うぞ」

他の面々も頷いていた。

「なッ！ お前らマジで言ってるのかよ！」

「本気と書いてマジと読むぐらいに大マジだよ」

「で、でもよお……」

「あー！ もう！ だらしないわね！」

渋る雄人に痺れを切らしたリーゼロッテが雄人の胸ぐらをつかんだ。

「この日の為にあんたは頑張ってきたんじゃないの!? それとも何、あんたのその魔力やデバイスはお飾りだって言いたいのか!?」

「もう少し自分に自信を持ってもいいのよ。あなたにはそれだけの実力が備わっているのだから」

「グッ……ああもう！ 分かったよ！ やりやあいんだろ！ 俺がアイツぶった切る！ 二匹目だって俺が貰ってやるぜ！」

『……今のは俺（私）達に対する宣戦布告と見なしていいんだね（いいんだな）?』

「あ、今の無し！ 一匹で十分です！ 調子に乗ってすみません！」

勢いに乗って勝負に乗った雄人が慌てて取り消そうとするが、もう遅い。

おかげで俺達三人の闘争心が更に燃え上がった。

そして今の会話でどこからともなく笑顔が広がった。

「指揮は誰がするの？」

「私に任せてちょうだい。こう見えても守護騎士の中じや参謀役なのよ」

「なるほど。無駄に歳を重ねて——」

「はやてちゃん？ 何か言ったかしら？」

「ナ、ナンデモアリマセン……。……怖かった」

『自業自得だよ（です／よ／なの／だな）』

女性に年齢のことは禁句だよね。それがたとえ同姓であっても。準備は完了してる。あとはアイツをぶっ飛ばすのみだ。

「さあ、俺達の最後の戦争<sup>デイト</sup>を始めよう」

これが俺達の全力です！

これが俺達の全力です！

Side空

夜天の魔導書の防衛プログラムが暴走した姿——ナハトヴァー  
ル。

それに加え、俺を転生させた神様が何か細工をしたらしく、防衛プログラムもとい、シエラが知らないという黒い蛇が八つも地面から生えてきた。

「これから作戦を開始するわ！ 黒い蛇を倒す人以外は後ろの本体を  
バインドで動きを止めて！ 最低でも一分はお願い！ 別に倒して  
もいいけど、無理は絶対にダメよ！」

『了解！』

シヤマルさんの指示に俺達は返事をする、各々の役目を果たすた  
めに動き出した。

当然相手は見ているだけでなく、蛇が巨大な火球を放ってきた。

直径20mはありそう！

「全員退避して！」

火球の速さはそこまでのものではないので簡単に避けることが出  
来る。

それが一つなら、という条件付きでだが。

「これじゃ近づけねえぞ！ どうすんだ!?!」

雄人の焦りが皆にも伝わり、動きが悪くなる。

「……斬る?」

『そのぐらい楽勝だ。あんな蛇如きに天龍この俺が負けるなんてありえん』

道が無いなら自分で切り開くまで！ ってね。

「切り裂け———カマエル灼爛殲鬼・クリムゾン紅天〉ッ！」

《Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost



？ ヴァーリが持つてるあの赤い大剣は何だろう？  
ヴァーリとは若干距離があるのであの大剣が何なのかはわからない。  
い。

あとで聞くか。今はフェイト達が優先だね。

『二人共、終わったのなら他の所に回ってあげて！』

『了解』

シャマルさんからの念話が入り、周りを見渡す。

俺からしたらフェイト達が近いな……。

「俺はフェイト達のところに行くよ。ヴァーリは二匹目任せた」

『へいや、ヴァーリが危なさそうだ。そっちに行く』

ヴァーリが？ あ、ホントだ。大きい一発が蛇のしつこい攻撃の所  
為で決めきれてないな。……相手が不規則に動くせいで当てにく  
いっていうのもあるのかな。

「了解」

ヴァーリとの念話を切って、フェイト達の方に倍加を使いつつ向  
かった。

『！ 空（君）！』

俺に気が付いたフェイト達が俺の方に視線を向けた。

「戦闘中によそ見しない！ 攻撃来るよ！」

『ッ！』

三人は何とか回避が間に合った。

まったく、危ないなあ……。

「あれ？ フェイトとアリシアっていつの間にかバリアジャケット  
変えたの？」

戦闘中だったが気になったことを蛇の攻撃を防ぎながら聞いてみ  
た。

「あ、これはソニックフォームって言うんだ」

「性能は何か変わってるの？」

「速度が更上がったんだ！」

名前からして速そうだしね。

「で、防御力をその分落としたと？」



蛇は暴れていたが少しずつ力をなくしていき、倒れた。

「お見事！ もう一匹は三人だけで行けるね？」

『うん！』

それなら俺はもう一匹狙うとしますかね！

Side out

Sideシグナム

私は蛇と交戦しているのだが、中々攻めきれないでいた。私にも空やヴァーリのように一撃で倒せる技は一応ある。だが、それを使うにはアイツの注意を逸らさなければならぬ。それが上手くないかないでいる為に攻めきれないでいたのだ。

……空とヴァーリに先を越され、空の補助があつたとはいえテスタロツサ姉妹と結城にも負けてしまうとは……それでいいのか、烈火の将シグナムよ。

答えは断じて否だ！ 私は騎士だ！ このままで終われるはずがない！ 終わっていないはずがないのだ！

「おおおおおおおおおッ！」

私は蛇に近づき右目を潰す。

潰された痛みで蛇が苦しんでいる内がチャンスだ。

「レヴァンティン！ ロードカートリッジ！」

《Load Cartridge》

レヴァンティンから薬莖が排出されると、私は剣と鞘を結合させ弓の形——ボーゲンフォルムに変形させた。

「翔けよ、隼！」

《Sturmfalken》

更にカートリッジを使用して矢を作り、すぐさま蛇に放った。

矢は加速しながら火の鳥に変化した。蛇が口を大きく開けて？み込んでしまった。

その時蛇は勝ち誇ったような顔をしていた。

まるで、お前の技は俺には効かんとでも言っているかのように。

フツ、甘いな……。

「私の矢はお前如きに止められるものではない！」

私の叫びに呼応するかのように蛇の口の中が急激に膨れ上がった。そして、火の鳥が蛇の後頭部から姿を現した。

炎で喉を焼かれたのか、蛇は叫び声をあげることもなく倒れた。

「次の蛇だ……。私はまだ戦える！」

次の目標に向けて進みだした。

S i d e o u t

S i d e ヴ ィ ー タ

「……チツ……やりづらいつたらありやしねえぜ！」

ウザってえ攻撃をする蛇に悪態を吐いてどうにかなるわけじゃないが、吐いておかなければ余計にイライラが募っていくだけだと思っ  
た。

『キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

だが、攻め切れていないのは向こうも同じだった。

この小さな体に傷一つ付けられていないのだ。

このままじゃ耐久レースになっちまうと圧倒的にこつちが不利だ  
な……。

そう思い始めた時に白銀の鎧がアタシの横に現れた。

「助けはいるか？」

鎧を着た奴の正体はヴァーリだ。

「ああ、助か——いや、やっぱいらねえ。アタシ一人で十分だ」

「……そうか。なら、俺は次の所に行くとするか」

ヴァーリはアタシの返答に特に気にすることもなく別の蛇の所に  
向かった。

「……………」

ヴァーリを行かせたのはただの我が儘や騎士としての誇りだ。  
プライド

「アタシらヴォルケンリッターに一对一での負けは無え！ てめえを  
ぶっ潰すのはアタシ一人で十分だ！」

蛇に宣言すると、それに応えるかのように咆哮した。

「行くぜ！ アイゼンゲホイール！」

アタシは魔力弾を一つ生成してアイゼンで叩くと、轟音を伴った光が放たれ蛇の視界を奪った。これは相手の聴覚・視覚を奪う、いわゆる目くらましだ。自身にはバリアを張っているので問題ない。

騎士にあるまじき魔法と思われるかもしれないが、

「てめえみたいな化け物にはどんな手を使ってでも勝てばいいんだよ！」

怯んでる隙にアタシはカートリッジを二つ使い、次の魔法を発動させた。

「轟天爆砕！ ギガントシユラーク！」

アタシの一番威力の高い魔法で蛇を力の限り叩き付けた。

反応はもうない。アタシの勝ちだ。

「ヨッシャアアッ！」

勝った喜びにガッツポーズをしてから、残りの蛇は他の奴らに任せではやての下に行くことにした。

Side out

Side 空

『へ一匹倒したぜ！』

『へこつちも二匹目倒せました！』

ヴィータも倒したし、フェイト達も無事に二匹目を倒せたから残りは余った奴と雄人の方が。

『マズいわ、空。ノーマークだった一匹が本体を攻撃してる人を狙ってるわ』

「そうみたいだね。倍加！」

《BoostBoostBoostBoostBoostBoost  
BoostBoostBoostBoostBoostBoost  
BoostBoostBoostBoostBoostBoost  
BoostBoostBoostBoostBoostBoost  
BoostBoostBoostBoostBoostBoost

Boost!!!!!!

倍加をして一気に加速し、蛇と蛇が狙っていた標的——なのの間に入り、炎の壁を作って防いだ。

「ッ!? 空君、どうしてここに!?!」

「蛇がなのはを食べようとしてたから護りに来ただけ。なのはは気にせずに向こうに集中して。俺はあっちを片付けるから」

「分かったの!」

俺となのはは反対方向に進み出した。

「切り裂け—— 灼爛殲鬼・紅天ッ!」

三度目の同じ技で一匹目と同じように一刀両断し、最期には灰になった。

『これで空の勝ちだね♪』

あ、そうか!

「俺、二匹目取った!」

『そうか……って負けじゃないか!』

『何!? もう倒したというのか!?!』

『んなのどうだっていいからこっち助けてくれ!』

俺達の会話を遮った雄人はピンチそうだった。

『私達が行くよ! 空達は皆のところ!』

『了解』

雄人の応援にはフェイト達が行くことになった。

S i d e o u t

S i d e アリシア

二匹目を倒した私達は雄人の方に行った。

「雄人君大丈夫!?!」

「何とかな……。でも、俺一人じゃやっぱ無理だったみてえだ」

諦めるの速過ぎでしょ! さっきまでの雄人はちよつとカッコよ

かったのになあ……。

「私達も手伝うから頑張ろうよ!」

「へあ、ぶつちやけ倒せるんだよね。一人でも」

『はあ!? 何それ!?』

雄人のカミングアウトに思わず念話ではなく声に出してしまった。もう念話を使わなくても声が届く距離だったので、雄人は私達の叫び声に耳を塞いでいた。

「じゃあ、さっきは何で無理とか言ったの!?!」

「いやー、改めて近くで見るとこいつ怖いなーって思いまして……」

「ビビッて攻撃出来なかったと?」

「そういうことになるな!」

『胸を張って言うな!』

まったく……心配して損したじゃん……。

「でも、一人じゃないってわかったら、もう何も怖くない! レオン、リミッター解除!」

《了解した、マスター。モード・ライオンハート!》

雄人がリミッターを解除すると、普段は制限していた膨大な魔力が雄人から感じられるようになった。

デバイスであるガンブレードにも変化が起きた。銀色の刀身が青くなったのだ。

す、すごい……久々に雄人の全開の魔力を肌で感じた……。

サラッと死亡フラグ建てたけど無視無視。

「エンドオブハート!」

そこから繰り出されるのは、目で追うのがやっとの高速の17連撃。

「はあああああああああッ!」

蛇の体が斬られる度に苦しきからのうめき声を上げる。

最後の一撃が叩き込まれた時には、蛇の頭と首がバラバラにされていた。

「はあ……はあ……はあ……終わったッあ〜!」

蛇を倒した雄人は地面に降り立つと大の字に寝転んだ。

「そう言いたいところだけどまだ全部終わってないからね?」

「ホントホント! むしろこれから本番でしょ!」

「ほら、さっさと立つ！ 男のなんだからアレぐらいで休まないの！」  
「うへ〜マジか〜……。 (何だか空の気持ちがちよつとだけ分かった  
気がする……)」

私達は倒れてる雄人を無理やり起こして皆と急いで合流すること  
にした。

S i d e o u t

S i d e 空

『へこつちもなんとか終わった……』

疲れた雄人の声が念話で聞こえた。

「雄人、お疲れさん。大丈夫？」

俺が本体の方に到着すると、雄人からの念話で倒したことを大分疲  
れてそうな声音で告げられた。

『何か、お前の大変な気持ちがちよつとわかったよ』

「へ……？ 何のこと？」

大変なことって前世関係？ いや、まだ話してないからそんな訳無  
いし……。

『へえ？ あ、分かんないんだったらいいや。それよりすぐにそっち行  
く』

「へうん、わかった」プレシアさん、本体はどうですか？」

本体を足止めしてもらっていたプレシアさんに聞いてみた。

「バリアが視ただけで五枚、もしくはそれ以上あるわ。しかも弱い  
だと弾かれるし、連続で破壊できないとすぐに再生されて手詰まり。  
おまけに砲撃がやたら強力よ。……もう嫌になってくるわ」

プレシアさんでさえ嫌気が出てくるほど本体のガードは堅いらし  
い。

これは全員が合流するのを待った方がいいだろう。

「シャマルさん」

今回の作戦指揮をするシャマルさんにどうするか質問をするため  
に念話をした。

「へ何かしら、空君?」

「へ本体が堅いのはもう知ってると思いますけど、倒すためには全員の協力が必要かと」

「へ私もそう思ったわ。それまでは時間稼ぎと相手の分析をしましよ  
う」

「へ了解です。皆もそれでいい?」

『へ了解!』

「ねえ、この状態ってあとどれ位持つと思う?」

中にいる琴里達に聞いてみた。

『今のアンタは精霊と龍が上手い具合に混ざった状態よ。だから、体への負担はそんなに感じてないでしょ?』

言われてみるとバランス・ブレイカー禁手と霊装を同時に使った時よりも体への負担がそこまで出てはいない。

『時間としてはあと十分位は持つ。もちろん使い方次第で変動するがな』

「そっか。ありがとう」

まだ戦えることさえわかれば充分だ。この力がどうして使えたのかも後で考えればいい。

「へ全員退避を! 雄人君達も合流したので一旦回復します!」

シヤマルさんからの指示で全員が本体からの攻撃が安全に避けられる距離まで下がると、ほんのしばらくぶりの全員集合となった。

「全員揃ったわね。今来た雄人君達にも本体の事を説明するわ。相手は五枚以上のバリアを持つと攻撃していた分かったわ。しかも生半可な攻撃では壊すことが出来ないし、一枚破壊した後すぐに次のを破壊しないと再生されてしまうの……」

「そんなの一体どうやって倒すって言うんだい?」

「うーん、皆のカートリッジシステムに加えて俺とヴァーリが倍加した力を譲渡。あ、はやてとシエラも出来そう?」

「出来ると思うで!」

「可能です。主のように連続での倍加は無理ですが」

はやてとシエラは魔法で倍加が可能だと分かっただけでも充分だ。

「それがわかれば充分！ 俺の倍加は三人と違つてすぐできるから二人分は余裕だね」

カートリッジがある人は一回分で、無い人なら三回分で行けるだろう。

「なら、サポートは任せたぞ。で、その後は？」

「バリアを全部破壊したらはやてちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃんの三人にナハトヴァールのコアを露出させるほどの全力の魔法を撃ってもらうわ。最後は……ごめんさい。まだ考えられていないの……」

「それならアースラのアルカンシエルでも撃てばいいんじゃないかしら」

「き、君はなんてことを言うんだ！ そんなモノを撃てば僕達にまで被害が出るぞ！」

アルカンシエルって何？

俺と同じくわからない人は揃つて首を傾げていた。

クロノの反応からしてすごい威力なんだろうけど……。

「……だれもここで撃てなんて言つてないでしょ？ 上よ、上。そこでなら何も問題ないわ」

「上つて……宇宙？」

なのはが空に人差し指で差しながら聞いた。

「そういうこと。露出したコアを転移させて宇宙空間でアルカンシエルを撃つ。そうすれば被害はゼロよ」

なるほどね。良い考えだ。

「おお！ すごいね、愛衣！」

「もつと褒めてくれていいのよ？」

俺が賞賛すると、愛衣は少しだけ嬉しそうに微笑んでいた

「へいや、原作でも同じことしてたからな!？」

「へえ、そうなの？」

「へ……ええ、そうよ（……あとで覚えときなさいよ）」

まるで親の仇でも見てるかのような視線を何故か雄人にぶつけていた。

「と、まあこれで作戦は決まりましたね。シヤマルさん」

「ええ！ 皆行くわよ！」

『はい（ああ／ええ／おう）！』

「まずはバインド！」

「ケーシングサークル！」

シヤマルさんの合図でユーノが緑色の輪っかでナハトヴァール全体を囲う。

『チエーンバインド！』

アルフの橙色の鎖と雄人の金色の鎖が体中を縛る。

『ストラグルバインド！』

それでも暴れるナハトヴァールにリーゼ姉妹の青白いバインドが二重に巻かれる。

「囲め！ 鋼の軛くびき！」

ザファイラがダメ押しとばかりに白い杭を何本も投下した。これでナハトヴァールの動きを完全に止めた、と誰もが確信したところでそれを裏切るかのように簡単にバインドを引きちぎった。

『ウボオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

「プレシアさん！ ヴァーリ君！」

ブーステッド・ギア・ギフト  
「赤龍帝からの贈り物！」

《Transfer!!》

「サンダーレイジ！」

赤龍帝の力が譲渡されたことで紫色の雷は赤紫になり、当たった瞬間、蛇の咆哮よりも大きな轟音を鳴り響かせながらバリアの一枚を壊した。

「あかりちゃん！ はやてちゃん！」

「行くで、お姉ちゃん！ 譲渡！」

効果に大差は無いが、はやては魔法でまねているだけなので掛け声が異なる。

「プレリカ、ロードカートリッジ！」

《了解だ。Load Carttridge》

プレリカから葉莖が二つ排出され、あかりの紺色の魔力光が輝きを

増す。

「旋空——弧月！」

黒い刀から放たれる居合切りがバリアを紙のように切り裂いた。  
あれがあかりの本気か……。

「愛衣ちゃん！ 空君！」

お、俺の出番か！

「私達の愛の力を見せ付けてやりましょう」

「はい、ブーステッド・ギア・ギフト赤龍帝からの贈り物」

《Transfer!!》

軽く受け流して一回分の倍加を譲渡をした。

「つれないのわね……。アスト、ロードカートリッジ！」

《了解です。Load Cartridge》

白い魔力光が赤と混ざりピンクとなった。

「喰らいなさい！ これが私と空君の愛の一撃よ！」

愛衣は拳に魔力を溜めて触手を躲してバリアを思いつきり殴りつける。

バリアはビキビキと音を立ててゆっくり崩れ去った。

うん、すごいね……。あの変なところが無ければもつとカツコ良  
かっただろうに……。

「……………。……ハッ、次！ アリサちゃん！ シエラちゃん！」

我に返ったシャマルさんが慌てて指示を出す。

愛衣の台詞に茫然としたんだろうね……。

「さっさと譲渡しなさい！」

「分かっています。譲渡」

アリサが偉そうに言ってきたも気にすることなく譲渡の魔法を発動した。赤と赤が混ざっても特に変わりはないが、感じる魔力がケタ  
違いだ。

「緋翼一閃！」

背中から炎の翼を生やして上段から燃える刀を振り下ろした。

炎の斬撃がバリアに罅を入れた。

マズイツ！ このままじゃ！

バリアを壊せそうにないアリサの手助けに入ろうとしたが、それよりも先に銀色が動いた。

「剣よ、刺し貫け！」

黒と白の鍵の形に似た剣が何本も現れ、罅の入った部分にねじ込むとバリアが壊された。

「一応礼は言っておくわ……ありがとう」

「主のためです。勘違いしないで下さい」

「んなッ!？」

アハハ……あの二人は仲悪くならないといいけど。それよりも――

『空さんが使う剣と同じ形をしてましたね』

「うん、何かちよつと嬉しいね」

「なのはちゃん！ ヴィータちゃん！ 空君もお願い！」

「おう！ 合わせろよ、空。それと……高町なのは……」

お、ヴィータがなのはの名前をちゃんと言えた！

「！ うん！」

なのはも名前を呼ばれて嬉しそうに返事をした。

「行くぜ、アイゼン！」

ヴィータがカートリッジを使うとアイゼンが変形する。

「アクセルシューター、バニシングシフト！ シュート！」

桜色の誘導弾がヴィータに追いつくと枝分かれして流れ星のように落ちていく。

「空！」

「ああ！ ブーステッド・ギア・ギフト 赤龍帝からの贈り物！」

ヴィータの呼び掛けに俺は倍加した力を渡す。すると、ヴィータの魔力が上昇する。

「赤天！ 龍碎！ ウエルシュインパクト！」

態々技名を変えてまで強化された一撃はナハトヴァールを軽く呑み込む。

バリアが無ければ今頃コアも潰れていたんじゃないかな？ まあ、いいか。これで五枚バリアを割ったけどまだあるね。

「ところで何で技名変えたの？」

「さつき力を貰った時思いついたんだ。中々良い感じだったろ？」

「そ、そうだね。アハハ……」

「シグナム！ アリシアちゃん！ ヴァーリ君！ 空君ももう一回お願い！」

「行くぞ」

「はあああああッ！」

アリシアがフォーチュンドロップを鎌から大剣へと変え、一振り。

翡翠色の刃がバリアとぶつかるが壊すまでには至らない。

「あちやく……」

悔しいが嘆いている暇はない。アリシアは即座にその場を離れた。

「ヴァーリ、頼む！」

「ああ、ブーステッド・ギア・ギフト赤龍帝からの贈り物」

《Transfer!!》

シグナムがヴァーリから譲渡された力を受けると、レヴァンティンをボーゲンフォルムに変えた。

「翔けよ、ドラゴン龍！」

《StormDragon》

お前もか！ 技名変えるの流行ってるの!?

シグナムが放った矢は始めは火の鳥だったが譲渡を受けた影響で炎の龍へと進化した。

龍はバリアを貫通し内部で爆発を起こした。

「アリシア、受け取って！」

《Transfer!!》

後ろで翡翠色の大剣を構えていたアリシアに譲渡をした。

「撃ち抜け、雷神！」

《Jet Zamber》

ナハトヴァールを超えるほど巨大になった大剣を振り下ろしてようやくバリアが破れた。

これで全部のバリアが壊せたか？

『まだまだ！ 一枚だけバリアが残っている！』

俺の中にいるアルビオンに教えてもらおうと、ナハトヴァールが歪な翼を広げて浮いていた。

「俺が行く！ 空はもしもの時に備えておけ！」

「……分かった」

ヴァーリに最後の一枚を任せた。

え!? 籠手が剣になった!?

ヴァーリの左手にあった赤龍帝の籠手が消えたと思ったなら先程見た大剣になっていた。

《Divide!!》《Boost!!》

あれがヴァーリが見つけた力か……。

ヴァーリは半減の力でバリアを脆くし、倍加で一撃を強化したことで、あつさりと最後の一枚を破壊した。

「はやてちゃん！」

シャマルさんが指示を出すときにはすでにはやては詠唱を始めていた。

「彼方より来たれ、ヤドリギの枝。銀月の槍と成りて、うち貫け！」

白い魔方陣が展開し、七つの光がはやての上空に出来る。

リインフォースさんの声も聞こえた気がするのは気のせい……ではなさそうだね。

「石化の槍——ミストルテイン！」

ナハトヴァールに光の槍が当たると、当たった個所から体が石に変えられていく。体がほぼ石となり、巨体が地面に落ちる。

……石化つてあげつない魔法だね。

これで終わったかと思いきや、ナハトヴァールは石になった部分を切り離して再生した。

コアを完全に壊さない限りは無限に再生し続ける仕組みなのだろう。

『クロノ君、やっちゃええ！』

アースラにいるエイミイさんの声を聞いてクロノを見ると、クロノの周囲が冷気を放っていた。

あれってグレアムさんから貰ったデバイスの魔法？

「凍てつけ！」

《E t e r n a l c o f f i n》

冷凍ビームが地面を凍らせながらナハトヴァールへと直進する。

……一応念には念を入れておくか。

「さすが」

「何？」

「俺の血飲んで」

「……え？ え、どういうことなの？」

俺は自分の左手の親指を嚙んで血を出した。

「もしかしたらクロノだけじゃ足りないかもしれないから」

「それはわかったけど空君の血を飲んで何か変わるの？」

「説明メンドイから省くけど、一時的に神セイクリッド・ギア器が強くなる」

吸血鬼であるさすがが神器を持っているならギヤスパーと同じことが出来るはず。

「……わかった。空君を信じて飲むね」

そう言つてさすがは目の色を赤くして俺の親指から出る血を舐めた。

「……？ 何も——!? 力が……上がった？ こ、これは一体……」

自分の力が格段に強まったことに驚いていたが今はそれどころではない。

「悪いけど考えるのはあと！ アイツに全力ぶつけて！」

「うん！ アイスメイク——グングニル戦神槍！」

左の掌に右拳を打ち付けると、凍つてもなお暴れようとするナハトヴァールの体の下から鋭く尖った氷柱が突き出した。

危なかった……クロノだけじゃ足りなかったか……。

「今のさすがが出したの!?!」

「う、うん、そんなところだよ……」

自分でもあんな技が出せたことに驚きを隠せないでいた。

よし、計算通り！

「なのは！ フェイト！ はやて！」

『うん!』

桜色と俺達が使った魔力の光がなのはの下に集まる。

「全力全開! スターライト——」

紫色の雷がフェイトの大剣に落ちる。

「雷光一閃! プラズマザンバー——」

「……ごめんな……お休みな……」

それがたとえ分離された暴走体であっても、凍り付くナハトヴァールにはやてが別れの言葉を告げる。

「響け! 終焉の笛! ラグナロク——」

三人の砲撃の準備が整った。

『——ブレイカーツ!!』

桜、金、白の三色の最大の砲撃がナハトヴァールに直撃し、凄まじい衝撃波が起こる。

「——捕まえた!」

「長距離転送!」

「目標、軌道上!」

『転送!』

シヤマルさんがコアを見つけて、ユーノとアルフが協力して三人で宇宙へと転送した。

S i d e o u t

S i d e r i n d e i

「ナハトヴァールの転送確認しました! 転送されながらも再生中! 速いです!」

エイミイが操作をしてアルカンシエル発射の用意をする。

「ファイアリングロックシステム……オーブン!」

私の目の前に小さな四角い箱が展開される。ロックを解除して箱が緑から赤に変わる。あとは手を翳して「発射」と言うだけだ。

「——アルカンシエル、発射!」

ほとんど原型を留めていないナハトヴァールに向けて発射した。

S i d e o u t

S i d e 空

お、一瞬光った？ あれがアルカンシエルなのかな？

俺が呑気なことを考えた矢先だった。

『え!?! う、嘘でしょ!?!』

「どうした、エイミー！ 何があった!?!」

エイミーさんの驚きの声にクロノが冷静さを欠いて聞いた。

『……な、ナハトヴァールまだ消滅してません!』

……え?! マジで?!

A, S 編終了しました!

A, S 編終了しました!

Sideクロノ

——ナハトヴァールはまだ消滅していない。

エイミイからそう告げられた。

クソツ! どうする? 考えろ考えろ考えろ——!

「——ツ! おい! クロノ!」

「ツ!? な、なんだ! 僕は今どうするか考えてるんだ! 静かにしててくれ!」

考え事をしていた僕に話しかけてきたのは雄人だった。

「そうじゃない! アイツがいなくなってるんだ!」

「……アイツ?」

誰がいなくなっただけ? というかこんな時にどうしていなくなる?

「空の奴がどつか消えたちまったんだよ!」

「はあ……驚かすな。そんなことどうでも——よくない!」

空が消えただって!? どこに? ……いや、待てよ? 今世紀最大に嫌な予感がしてきたぞ……。アイツは僕達の中で一番何かをやらかす可能性があるからな。

「空がどこに行ったか知ってる者はいるか?」

『……え、空(君)? あれ!? いない!』

僕の問いかけで空がないことに気が付いた者ばかりか……。ん?

皆が知らないと言っている中で一人だけ挙動不審な奴がいた。

「おい、フェレットもどき。どうしてそんなに汗をかいている?」

「うえ!? し、知らない! 空がどこに行ったかなんて知らないよ!」

「僕は汗をかいてる理由を聞いただけなのに、何故空が出てくる?」

「あつ……」

なるほど、こいつが共犯者か。

「どういうことか説明してくれるよな?」

ユーノを尋問して分かったこと、それは空が一人で宇宙に行ったということだった。

空が転移しようとしたことにいち早く気が付いたユーノは、危険だから止めようとしたが空は皆に黙ってとだけ言って転移した、と。

「君はふざけてるのか？ どうして空を止めなかった?!」

「ぼ、僕だって止めようとしたさ！ でも、空にあんなに真剣な眼差しをされて何も言えなかつたんだよ！」

考えればそうだ、そんなことをする奴は誰だって止めるはずだ。

「……そうか。すまないな、当たってしまつて……」

『クロノ君大変だよ！ 空君が——』

「宇宙にいるんだろ？」

『そうなんだよ！ って何で知ってるの？』

「さっき聞いた。共犯者からな」

はあ……ホントにあいつは無茶ばかりするな。帰ってきたら説教してやる！

Side out

Side 空

俺は今、宇宙にいる。

呼吸は霊装を纏っているおかげで問題はない、らしいと琴里が言っていた。

六喰が宇宙にいたことから出来るんじゃないかってことでやってみたら案外行けた。

「そろそろあつちは気が付いた頃かな？」

『さあね。ただ一つ言えることは、帰ったら全員からの説教確定でしようね』

……ナハトヴァール消したら家に逃げるか？ いや、結局変わんないか。それどころか余計に怒られそう……。



「ウエルシュ・メギド【赤龍砲】ッ!!」

全身全霊を込めて放った赤よりも紅い熱線が、ナハトヴァール全体を捉える。

熱線が途切れた後に残ったものは何もない。

全てが消え去った。

そこには最初から何もなかったかのように全てを焼き尽くし、灰すらも残さなかった。

「……今度こそ終わったよね？」

《はい、ナハトヴァールのコアは消失されました》

ブレイブに確認してもらい終わったことを確認した。

「じゃあ、転移よろしく」

《了解です。皆さんのところに転移します》

残り少ない魔力を使って何とか転移した。

《転移完了。無事に着きました》

「ありがとう」

皆のところに戻ると同時に、光に包まれて新たな霊装(?)は自動で解けた。

身長も元に戻り、服装もバリアジャケットではなく私服に戻った。

えーっと、皆は……お、良かった。

「おーい！ 皆あ……って体が、おも……い……」

地面に降り立った瞬間、体に力が入らなくなり、その場に座り込んだ。

魔力も霊力もほとんど感じない。

今の俺は、念話すら使えないほど消耗しきっていた。

『当然です！ あれだけの力を使っておいて代償無しなんてありえませんかよー！』

でも、あれぐらいしないと倒せそうになかったし……。

『まあまあ。空も頑張ったんだから労ってあげないと可哀想だよ』

凜祢は優しいなあ……。涙が出そう……。

『それもそうだな。あいつらからの説教が待ってるだろうからな』

あー、嫌なこと思い出した……。

こんな状態では動くことも出来ないのどうしようもないが。

「ヤハウエさん、何とか治してくれませんかねえ？ 家に帰れる程度

で良いんで」

『出来ませんが嫌です。皆さんに説教されて反省してください！』

……ですよねー。

倒れ込むと、夜天の魔導書を完成させてから曇っていたはずの空模様が快晴に変わっていた。

眩しい日差しに目を細めていたら、急に誰かが太陽を遮った。

「おかえりなさい、主」

「あ、シエラ。うん、ただいま」

「体はどうですか？」

しゃがんで俺の様子を尋ねてきた。

「指一本動かせない」

「今、肩をお貸ししますね」

そう言っただけでシエラは俺を両腕で持ち上げて抱えた。所謂、お姫様抱っこである。

「あのー……シエラさん？ この体勢は何ですか？」

「お姫様抱っこと呼ばれるものです」

シエラは質問されることに疑問を持った顔をしていた。

「それは知ってるよ。何でお姫様抱っこしてるのって聞いてるんだよ」

「主の世界ではこれが普通なのでは？」

いや、世間一般でやってる人なんてそうそういないから。

「はあ……疲れてるせいでツツコむ気力もないからこのままでいいや……」

この際どうにでもなれだ。

俺の体を気遣ってゆつくりと進んで皆のところに着いた。

『空（君）！』

俺達に気が付くと、一斉に駆け寄ってくる。

あ、クロノが説教しそうな顔してる。

「ただいま。あ、説教ならあとで聞くから今は寝かしてね。もう限、界……だから……」

体をシエラに預けて意識を手放した。

「……んっ……ふあゝ……うぎゃ!？」

目を覚ましてから軽く体を伸ばすと体に激痛が走った。

霊装と禁手を合わせた時よりも負担は少なさそうだが、キツイことに変わりはない。

「で、ここは……」

「アースラの医務室だ」

俺の代わりに答えてくれたのは、部屋の丸椅子に座るリインフォースだった。

「教えてくれてありがとうございます。俺ってどのくらい寝てました？」

「丸一日だ。体の方はどうだ？」

サーゼクスさんと戦った時は数時間だったのに予想以上に力を使ったらしい。

フュージョンした影響もあるのか？

バランス・ブレイカー 禁

手も使ったから当た

り前か。

「……体中が痛いです」

「……そのすまなかつた。私を止めるために色々……」  
本当に申し訳なさそうにしているのか視線を落とす。

「これくらいなんでもないですよ。気にしないで下さい」

「……そうか。私は目覚めたことを主達に伝えて来る」

「あ、待って下さい」

部屋を出ようとするリインフォースを呼び止めた。

「どうかしたか？」

「リインフォースさんはいなくなるつもりですか？」

「……どうしてそう思う?」

そんなに睨まないで下さいよ……。

「何か、今にも消えそうな感じの雰囲気をしてたからですかね?」

ホントはあかり達に聞かされたからんだけど……。

「……君の言う通り、私はもうじき消える」

こちらには振り向かず自分が消えることを認めた。

「何度も改竄された魔導書のバグが完全に消えることはない。このままでいればまた暴走するのは確実だ。それだと主はやてにも君達にも迷惑が掛かってしまう。だから——」

「皆に黙って消えるつもりですか?」

「ツ! ……そうだ。主には申し訳ないがそうするしかないんだ……」

リインフォースさんはようやくこちらの方を向いたが、その顔はとても悲しそうだった。

「あとどれくらいですか?」

「? 何がだ?」

「リインフォースさんが暴走しないでいられるのはあとどれくらいですかって聞いたんです」

「……三日ぐらいなら持つと思うが、それがどうかしたのか?」

タイムリミットは三日。それなら俺の体も回復するからギリギリ問題ないか。よし、決めた!

「リインフォースさん」

「なんだ?」

「——俺とデートしてくれませんか?」

S i d e o u t

S i d e リインフォース

龍神空からデートに誘われた。

彼は何を考えている? 彼の誘いを断らなかつたのは何故だ?

主はやてが言ったように、彼なら何とかしてくれるとどこかで期待してるから？

いくら考えてもその答えは出ない。

思えば魔導書に吸収した時からそうだった。

ヴァーリ・ルシファーは心の奥に誰かへの復讐心——心の闇があった。別にそれに関してはおかしいことは何も無い。誰だってそう言ったモノはある。

それに対して、龍神空という人物にはそれが無かった。名前の通り青空のような心の中に光が満ち溢れていたのだ。

だが、それと同時に得体の知れない何かがあった。まるで心がもう一つあるかのように。

彼は——龍神空とは一体何者なんだ？

S i d e o u t

S i d e 空

リインフォースさんをデートに誘ってから二日が経ち、俺は普通に歩けるようになった。

ダメ元で誘ったんだけど、まさかOKを貰えるとは思わなかった。消える前に何かしたかったのかな？

デートに誘った直後、皆に知られて勝手に宇宙に行ったことよりも何故か説教が長かった。というか、なのはさん達のO☆H A☆N A☆S Iだった。

病人にやっていいことじゃないでしょ！ 万全な状態でもやって欲しくないんだけどね！

「さ、そろそろ待ち合わせの時間よ」

「うん、行ってくる」

とまあ、これからデートなわけだ。別にリインフォースさんをデレさせる必要はない。

……俺が何をしてもデレることは無いだろうけどね。

シエラのように自分が生きていちゃいけないと思ってる心をぶっ

壊して、生きたいという気持ちにさせればいいだけの簡単な役目です。

全然簡単じゃないよ！

それは置いて  
閑話休題

問題は魔導書の中にあるバグなんだけど、トゥルー・ロンギヌス黄昏の聖槍で何とかなるはず。確証はないんだけど、奇跡ぐらい起こせるでしょ。

それから、今更だけど最初からそうすればよかったと気が付いた。そもそもデートして治るわけでもなんでもないので誘ったのはアホだった。

何で誘ったんだろう？ シエラと同じで放っておけないからかな？

これ以上考えても答えは出なさそうなので諦めた。

「……せめて楽しませるぐらいはしないとね」

独り言を呟き、待ち合わせ場所に向かった。

俺が待ち合わせ場所の駅前に着いてから、五分ほどしてリインフォースさんはやってきた。

「待たせたか？」

「いいえ、待ってないですよ。あ、その服似合ってますね」

彼女は薄橙色のミュールに白いフレアスカート、水色のノースリーブ、金色のネックレス、日焼け防止のつばの広い白い帽子という涼しそうなファッションだった。

銀色の髪が風に靡く度に老若男女問わず周囲の視線を独り占めする。

デート中の彼氏は鼻の下伸ばして彼女にシバかれてたがそれは仕方がないと思う。

それだけ今のリインフォースさんが魅力的な女性なんだから。

「ああ、これか？ これはデートが決まってから主達が君に対する文

句を言いながらも選んでくれたんだ」

「え、俺文句言われるようなことしました？」

説教なら十分受けたはずなんだけどまだ言い足りないのかな？

「……自覚がないのか。いや、君はそういう性格だったな」

「??」

「まあいい。ところでその姿は……〈贗造魔女〉だったか？」

「そうです。今回はリインフォースさんに合わせて二十歳くらいの姿にしました。子供の姿だとデートどころか歳の離れた兄弟ぐらいにしか見えませんかからね」

「それなら敬語も辞めてはどうだ？」

「わかり……：わかった、そうさせてもらうよ。それじゃ、俺達のデートを始めようか。(で、どうすればいいですか、琴里様)」

『早速か！ 少しは自分で考えなさいよ！』

琴里の怒鳴り声がインカム越しに伝わり、耳がいたくなる。

『つたくしやうがないわね……鞠亜』

『はい、ただいま選択肢を出します』

『えー何々……なるほどね。空、選択肢が出たわ』

①恋愛物の映画に行く。

②遊園地に行く。

③リインフォースの行きたいところに連れてく。

『総員！ これだと思いう選択肢を五秒以内に選びなさい！』

今回はいつもとは違ったメンバーが選んでる。

『結果は②よ。もちろん相手にそんな気が無ければ止めときなさい』

無理は良くないからね。

「(了解)リインフォース、遊園地に行ってみない？ もちろん無理にとは言わないけど」

「ああ、構わない。……そういう選択肢が出たのか？」

「え、知ってたの？ って俺の記憶見たんなら知ってるか」

「そういうことだ。特には気にしてないがな」

「アハハ……そう言ってもらえると助かるよ……」

俺一人じゃリインフォースさんを楽しませられるか不安だからね。

十香達の場合は向こうがリードしてくれる時があるし、そんなにサポートがいららないんだよね。

「決まったことだし、早速行きますか!」

「あ、おい!」

俺はリインフォースの手を引いて駅の中に入った。

周りの男性が殺気の籠った視線を出してきてすぐに放したが。

電車に揺られること一時間。目的地の遊園地に着いた。

「すごいな、これは……!」

リインフォースは人の多さに呆気にとられていた。以前一緒に来たフェイト達のようにだ。

記憶で知っているのと実物を見るのとはまた違ったものがある。

「でしょ? さ、一杯楽しもうか!」

「……ああ、そうだな」

リインフォースはそんなにノリ気じゃない反応をした。

やっぱり、まだ……いや、こんなんじやいけない! 目的を果た

さない!

「どれから乗ってみたい?」

「そうだな……君に任せる」

「おいおい、人任せでいいのか?」

「私は来るのが初めてだからな。なら、知ってる君の方がいいと思うんだ」

別に直感でもいいんだけどなあ。まあ、任されて悪い気はしないけど。

「わかった。うーん、だったら……最初はアレに乗ろう」

そうやって俺が指したのはメリーゴーランドのように回転するブランコだった。

「あれは?」

「正式な名前は知らないけど、見たまんまの空中ブランコさ」

リインフォースの反対は無かったのでブランコに乗ることにした。

夏休みの平日のおかげで割と早く列は進み、俺達はすぐに乗れた。柱が回転すると遠心力が働き、少しずつブランコが宙に浮き始める。

「どーだー!? 気持ちいいだろー!」

大声を出さないと場所が俺の後ろにいようと聴こえそうになかった。

「ああ! 気持ちいい!」

おおツ! てつきり念話でもするのかなって思ってたけど、リインフォースも大声で返してくるとは思わなかったツ!

『これは意外だったわね……』

これには家で観ている琴里も驚いていた。

一分ほどしてブランコは徐々に高度を下げていき止まった。

「感想は?」

「……その、中々いいものだな。風が気持ちいい」

リインフォースは少しだけ恥ずかしそうに微笑んで答えてくれた。それが聞けただけでもここに来てよかったと思ってしまう。

「ハハ、そっか。じゃあ、ドンドン行きますか!」

だが、まだまだ満足はしない……。お楽しみはこれからだ!

それからシューティングゲームで点数を競い合ったり、お化け屋敷に入ったり、絶叫マシンに連続つで乗ったりした。

面白かったのはリインフォースがシューティングゲームで負けて悔しそうにしていたことだ。

叫んだことといい、勝負ごとに熱い所といい、知らない一面がたくさん知れた。

「む……何だ、人を見てニヤニヤして」

「ごめんごめん。リインフォースの色んなところを見れたことが嬉しくてさ、つい」

「あ、あれは忘れてくれ! 思い出すと恥ずかしいんだ!」

よほど恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「ハハハ!」

「わ、笑わないでくれ!」

最初は綺麗だっと思ってたけど、今は可愛いつて感じかな。

「(今、リインフォオースの状態ってどんな感じ?)」

『悪くはないわ。十分に楽しめてるんじゃないかしら』

「(そっか)そろそろ帰るか。あんまし遅いと皆が心配するし」

「……そうだな」

「あ、最後に観覧車乗ろうよ」

「ああ、構わない」

帰る前に締めとして観覧車に乗った。

デートの時間はあつという間に過ぎ、夕方ごろになっていた。遊園地を出て、帰宅することにした。

「ねえ、ちよつと公園に寄ってかない? 話があるんだ」

「……………。……………わかった」

リインフォオースを八神家に送る途中にあった公園に、二人で入った。

日はほとんど沈んでいて公園に二人つきりだ。

「それで、話とは?」

二人でベンチに座って話を始める。

「今日は楽しかったか聞きたかったんだ」

「そうだな、長生きしてきたが自分でも信じられないくらいワクワク、とでも言えばいいのか? ……まあ、悪くはない時間だった。今までそんな経験してきたことは無かったからな」

長い時間を生きて来たリインフォオースはこういったことは初めての事だった。となると、シグナムさん達も同じだろう。

「そりゃ、あんだけはしゃげばね」

「う、うるさい! 初めてだったから仕方がないだろ!」

リインフォオースが顔を真っ赤にしている姿からあの戦いをしてたのがまったくの?のようだ。

「はいはい。……また行きたいって思った?」

「ああ、今度は主達も一緒——ツ! ……いや、それは無理な願いか」

自分が消えることを思い出して、さつきまで楽しそうにしていた顔はどこにもない。

「そんなことないよ」

「……え？」

「多分だけど俺の力で消えないで済むと思う」

「やったことないから何とも言えないけど……」。

「……だ、だが、私は救われて、幸せになっていいのだろうか……。この手で多くのものを壊した。恨みを持つ者だって少なくないだろう。それを償うならやはり……。このまま痛ツ!？」

「惜しい! 今のところで、いた」じゃなくて、いたい」だったら、このままいたい」になつたのに!」

「それは残念つて何をする!」

「何つて頭を聖なるハリセンで叩いただけだけど?」

俺の手には聖なるオーラを放つハリセンが握られていた。

「またそれか!」

「このまま消えても寂しいだけだぞ? それでいいのか?」

怒りだしたリインフォースを無視して話を戻す。

「それは……。わかつてる。わかつてはいるが……」

「ならさ、お前が不幸にしてきた人の分だけ他の誰かを幸せにすればいいんじゃないか?」

「し、しかしだな……。そんな簡単に済む話ではない……」

あー! メンドイ! どんだけネガティブなの!? さつきまで楽しそうにしていたリインフォースはどこに行つた!?

「もういい! お前の意思なんて知らん! トウル・ロンギヌス 黄昏の聖槍、バランス・フレイク 禁手化ツ!」

即座に禁手になり、黄金の光が公園内を照らす。

「聖槍よ、俺の想いに応えろ。—— ヘブンズ・ミラクル 聖槍龍の奇跡ツ!」

六対十二枚の黄金の翼がリインフォースを包み込む。

しばらくして翼を離すと、何が起こったのか分からずに茫然としているリインフォースがいた。

「今、何を……。? ツ! 正常に直つてる!?!」

「よく聞いておけよ！ お前が幸せになっていいかわからないな  
ら、——」

一拍置いて、近所迷惑すらも気にせず告げる。

「——俺がお前を幸せにしてやる！」

それだけ言っただけ俺は先に家に帰った。

S i d e o u t

S i d e リンフォース

——俺がお前を幸せにしてやる！

私のバグが全て消えたあと、彼は私にそう言った。

つ、つまり、あれは……:……:……:……:……:……:プロポーズ!?

いや、落ち着け！ 落ち着くん、リンフォースよ！ 彼は鈍感  
なんだぞ!?

だが！ 駄菓子菓子！ って違う！ わ、私は何を言っているんだ  
!?! ……とりあえず、彼はそう言ったんだ。『幸せにしてやる』と。

これに間違いはない。な、ならばやはり……:……:……:……:……:……:そういう意味でいいのだ  
ろうか？

……:……:……:……:……:……:これ以上は私の頭が破裂しそうだ！

ええい！ こうなったら責任を取ってもらうまでだ！

あんな台詞を言ったお前が悪いんだからな！ 空！

S i d e o u t

## 未来トラベル編

何かが始まりそうです！

何かが始まりそうです！

Side空

「……………？ ……あれ、動けない？」

上半身を起こそうとして体を動かそうとしたが動けなかった。  
理由を探してみると、俺の右側に綺麗な銀髪が映った。

その人が俺を抱き枕代わりになっていた所為で動けなかったようだ。

「つてシエラ？ おーい、シエラ、起きろー」

「……………うーん？ 何だ……………もう朝か……………？」

シエラが赤い眼をこすりながら、体を起こす。

……………眼が赤い？ シエラつて蒼い眼だったはずじゃなかったか？

となるとこの人物は誰……………いや、容姿がまったく同じ女性が一人だけいた。

「リ、リインフォースさん、こんなところで何してるんですか？」

「ああ、おはよう。君が……………その、私を幸せにしてくれるだろう？」

リインフォースさんは少しだけ頬を赤く染めて聞いてきた。

「え？ あ、はい。昨日そう言いました」

昨日はリインフォースさんとデートをしてバグを直した。

実際の所、いつまでもグチグチ言うリインフォースさんに嫌気がさして勝手に直したただけだ。

俺はリインフォースをその場に置いて帰ってしまい、琴里にプロレス技掛けられた。

「そ、それでだな……………その、この世界では男性が女性に贈る言葉だと聞いている。そ、そういう意味と……………受け取っていいんだな？」

「もちろんです。俺は本気ですから」

この人はシエラと同じで放っておけない。不幸な人生を歩んできたんだから俺が少しぐらいは幸せになる手助けをしてあげたいって思った。

「ッ！　そ、そうか。こういつた時は確か……ああ、そうだ。ふ、不束者ですが末永く願います……お願いします」

「ラインフォースさん、それは嫁入り前の人が言うセリフですよ。それじゃまるで、俺と結婚するみたいになりますよ？」

「そうじゃないのか？」

「えっ？」

「えっ？」

あれれれー？　話が噛み合っていないぞー？

まさか、俺がラインフォースさんにプロポーズしたことになってるなんて思いにもよらなかった。

確かに世間一般ではそう受け取られてもおかしくはない。恋愛事に疎い俺でもそのくらいはわかる。

でもそんなつもりで言ったんじゃないんだけど……。

この空気をどうしようかと悩んでいたら部屋のドアがノックされた。

『主、そろそろ朝食の時間です』

「はーい、今行くー！　ラインフォースさんは朝食家で食べます？　それとも家に帰りますか？」

「……………え、ああ、家で食べる」

『その声は管制人格か？　主、勝手ながら入らせていただきます』  
そうやって俺の了承無しに部屋に入ってきた。

別に許可なんて要らないんだけどね。

「管制人格、何故貴様がここにいます？」

「私がここにいて何か問題でもあるのか？」

「問題大ありだ！　貴様の家はここではなく八神はやての家ではないか！」

「昨日は彼とデートをしていたんだ。つまり————朝チユンだ！」

へ？　朝チユンって何？

ラインフォースの言った単語の意味が解らずにいたら、シエラは意

味が通じたのか顔を真っ赤にして肩を震わせていた。

「貴様アツ！ 主を食べたのか!？」

「? 食べた? 俺を?」

俺って美味しいの? というかどこを食べられたんだろうか……。空は私に言ってくれた。『幸せにしてやる』とな。なら、そう言った行為に及んでも当然だろう? (実際はそんなことしてないが……。いづれは)」

その言葉は言った。でも、そういう行為って何? 帰ってからご飯食べて、風呂入って、夏休みの宿題ちよつとやって寝たはずなんだけど。何でシエラはこの世の終わりみたいな顔してて、反対にリインフォースさんはドヤ顔してるんだ? あと、何気に名前で呼んでるし。

「はい、二人共ケンカはそこまで! 俺はご飯作るから先にした行くから。リインフォースさんははやく達によく言っておいてください。それから勝手に人の布団に入るのはダメですからね? いいですか?」

「言い換えると、空の了承があれば一緒に寝てもいいのか?」

「えーっと、まあ、それなら構いませんが」

「そんなもの認められるか! 貴様が主に何をするかわかったもんじゃない!」

「フツ、貴様に認められずとも本人が良いと言ったんだから貴様が私を邪魔立てする理由は無いはずだが?」

「クツ……このままでは……ハツ! 主!」

シエラは何かを閃いたのか、俺を呼んだ。

「何?」

「主の了承があれば私でも共に寝ていただけののですか?」

「え、うん。そうだね。というかそろそろご飯作りたいんだけど……」

二人の口論がまだ続きそうなので、止めるのを諦めて部屋を出た。

S i d e o u t

S i d e ???

俺は管理局で働くしがない人間だ。管理局は給料は安い。

その上、上司はウザいし、臭いし、人使いが荒いし、臭いし、臭いし、嫌なことばかりだ。要するに俺が言いたいことは上司は臭いということだ。

臭い言い過ぎだな……。実際そうだけでも。

ちよつと魔法が使えるくらいで良い気になって管理局に入ったものの、俺が憧れてた管理局の仕事なんてそこには全く存在しなかった。俺よりも才能がある奴なんて五万といた。

最近では、管理外世界の「地球」とか言われる次元世界出身の囑託魔導師がすごい戦力になったとかなんとか聞いた。

はあ……。魔法の才能がある奴はいいねえー。周りからちやほやされてるんだろーな！。

物語の登場人物で言えば名前すらないモブでしかない俺とは住む世界が違う。

噂のすごい奴らの話を聞く度にそう思い知らされる。

今日もデスクワークか……。

毎日毎日同じことを繰り返している内に何事にもやる気が起きなくなってしまうた。

何か面白いことでもねえかなー。

そう思った矢先に、職場に行く道の途中で変な矢を見つけた。

何だこれ？ まあ、どうせゴミだろ。

拾ってしばらく眺めた後すぐに捨てた。

次の瞬間には俺の背中から何かが貫通した。

それは俺が拾ってすぐに投げ捨てた矢だった。

——ガハッ!? い、痛い！ 矢が何で!?

すぐに矢を抜き、治癒魔法を使って傷を塞いだ。

何なんだよ、一体!?!? な、なんだ……? 力が溢れて来る?

矢をその場でへし折ろうかと思っただが、得体の知れない力が溢れてきた。

ハハ、ハハハ……ハハハハハ！ こりゃいい！ 最高に「ハイ！」っ

てやつだアアアア!

その日から俺の運命は変わった。

Side out

Side 空

「今日の予定は……何かあった?」

朝食を食べ終えてから部屋に戻って、今日の予定をブレイブに聞いた。  
た。

《クロノさんにアースラに来るよう言われてます》

「あー、そうだったね。早速フェイト達も誘って行くか」

部屋着から外出用の服に変え、フェイト達を誘って家を出た。

アースラに転移すると魔導書に関わった人達がほとんど集まっていた。  
いた。

「おはようございます。英語で言うとGood morning」

「来たか。君達で丁度最後だ」

あ、無視ですね。まあ、いいんだけど。

「それで話って何ですか?」

「はい、これから説明します。まずは夜天の魔導書の暴走体、ナハトヴァールの討伐協力ありがとうございました。おかげで被害はゼロという素晴らしい戦果でした。それで空君、あなたに聞きたいことがあるのだけれどいいかしら?」

「? 何をですか?」

「あなたが来るちよつと前にリインフォースさんから聞いたんだけど、魔導書内のバグを直したって本当?」

「一応そうですけど、直ったかどうか知ってるのは本人だけですよ」

「……そう。それから今でも信じ難いのだけど宇宙に行ってナハトヴァールを倒したのもあなたでいいのよね?」

「あー、そんなこともありましたね」

アルカンシエルとかいうのでも滅びなかったときはどうなるかと思っただけ。

『四日前のことだから!』

「……そ、そう。じゃあ、最後に一言。これは私事なんだけどね。私の夫でクロノの父、クライドさんを助けてくれてありがとう!」

「僕からも礼を言わせてもらう。本当にありがとう!」

「僕がもう一度この手で家族が抱きしめることが出来たのは君のおかげだ。本当にありがとう」

ハラオウン一家にお礼を言われた。

「はい、どういたしまして!」

「そ、それでね、空君。あなたが最後に撃った砲撃がちよつと、ね……」  
「上層部に目を付けられて、俺を何としても入れる、とか言われたんじゃないですか? あわよくば自分達の言いなりにでもするつもりでしようかね?」

『ツ!』

「……君はエスパーか? ほとんど正解だ」

「普通に考えたらそうなるかなって思っ

「どうするの、空は」

誰も心配そうな顔をしていた。

「断ればちよつかい出してくるんですよね?」

「恐らくはそうなるだろうね」

「なるほどなるほど。なら、そう出来ないようにすればいいだけです  
ね」

「出来ないようにするって何をどうするんだい?」

「そ・れ・は——」

『それは?』

「弱みを握る!」

『それなら出来なくなりそうだけど、やり方がエグイ!』

「というわけで、ハイ。これどうぞ♪」

「これは……メモリーカードか?」

俺からメモリーカードを受け取ったクロノは何が入っているのか

質問してきた。

「それの中にはね、管理局の上層部の人が、人には言えないような真つ黒なことをしてきた証拠がたくさん入ったデータだよ。これをチラつかせればビビッて何も出来なくなるね！ そしたら空君大勝利♪やったね！」

「い、いつのまにそんなことを調べてたの？」

質問してきたエイミイさんだけでなく、この場にいる俺以外が頬を引き攣らせていた。

「俺が目覚ましてから、知り合いに頼んで調べてもらつたんです」

二亜の〈囁告<sup>ラッセル</sup>篇帙〉で調べただけだね。いやー便利だよ。調べれば調べるほど出てくるんだから。

「これで空君が無理に管理局に入ることも無くなるわけね」

「そういうこと。それでも突っかかってくるならまだまだ手段はあるし、最悪、管理局を潰すことも考えてるんで」

「君ならホントに出来そうだから勘弁してくれ……」

クロノが嫌な汗をかきながら頼んできた。

「それは上層部の対応次第だよ。これで話は以上ですか？」

「え？ あ、そうね。話はこれで終わりよ。この後何か予定でもあるのかしら？ もちろんプライベートなことだから答えたくなければ答えなくてもいいけど」

「これから明日奈とデートです」

隠す必要もないのであっさりバラした。

『そうなの!?!』

「うん、動物園に行くんだ♪」

皆からの質問に明日奈は笑顔で肯定した。

「じゃあ、失礼します」

明日奈と共にアースラから出て、一旦家に戻ってから集合することにした。

最近では駅前に集まるが多くなった。

昨日デートして、今日もまたデートは正直お金が……。

ちなみに今日は動物園に行くんだけど、俺は九喇嘛やドライグが俺の中にいる所為で動物に嫌われやすい。

だが、それも昨日までのこと。

元々体のある九喇嘛には小型化してもらい、ドライグとアルビオンには体を幽世セライロト・グラールの聖杯で創って、三匹を俺の中から出した。

それによって嫌われる要素をすべて無くした。

ドライグ達も体が出来て喜んでたからWINーWINです！

あとは俺自身の問題だ。これでもし嫌われるようならどうしようもない。

それと、ドライグ達がいないので当然の如く能力は使えない。

「空君、お待たせ！」

「大丈夫、俺も今来たところだから」

明日奈の服装はフリルがたくさんついた白いワンピースに、ミュール、腕輪型のデバイスを付けていた。

「なんだか、今の台詞って恋人みたいだね」

「そう？　なんか毎回言ってる気がするんだよね」

「……毎回。ふーん、そんなにデートしてきたんだ……。空君って節操無しの？」

『いきなり相手を不機嫌にしてんじゃないわよ！』

言われなくても明日奈が不機嫌そうなことは分かる。

「え、えっと、お姉ちゃんにそう教え込まれてるから……アハハ」

苦笑いで誤魔化せるとも思えないが、どうすればいいかわからない。

「まあ、いいけど……。さ、行く？」

「うん、俺達のデートを始めようか」

どちらからともなく手を差し出し、繋いだ。

S i d e o u t

S i d e 未来

僕——かじやみらい 門矢未来はジョジョの奇妙な冒険という漫画の世界に転生した転生者だよ。

僕を転生させた神様から特典として異世界に行ける扉を貰い、それを使ってこの世界やって来たんだ。

やって来たんだけど——

「ここがどんな世界なのかさっぱりわからない！ よし、とりあえず寝ると——痛い！ 何すんだよ、イフ！」

『寝ルナ、未来。寝テモ何モ変ワリハシナイゾ』

僕を殴った奴の正体は僕のスタンド——イフだ。ウルトラマンマックスに出てくる完全生命体が小さくなってる。

「なら、どうしろっていうんだよ……」

『ハイミット・パール 隠者の紫ヲ使ツテ、コノ世界ニ転生者ガイルカドウカ調べレバイイ』

「そっか！ それでそいつに近づいて聞けばいいんだ！ もし、そいつが悪人であってもヘブンズ・ドアで一発だしね！ さすがイフ！

僕に出来ない事を平然とやってのけるツ！ そこにヘブツ!？」

またしても自分のスタンドに殴られた。

自我があると話し相手には退屈しないが、攻撃は痛いからやめて欲しい。

『フザケテイナイデサツサト調べロ』

「ノリが悪いな……。まあ、いいや。それよりもカメラだね。あ、あそこのカップルにお店の場所を聞いてみようかな」

僕の視界に偶々いた、小学生ぐらいの少年少女に声を掛けることにした。

Side out

Side 空

「ねえねえ、その小学生カップルさん、ちよつといいかな？」

明日奈と歩き出して数秒で、いきなり知らない人に話し掛けられた。

「はい、なんででしょうか?」

「カメラを売ってるところを探しているんだけど、どこにお店があるか知らない?」

赤い革ジャンとその中に青い和服を着ているお姉さんは、カメラを売ってるお店を探してるようだった。

「えーっと、……確かあそこの大きいデパートの中にカメラの専門店があつたはずですよ」

「あのデパートだね。わかったよ。ありがとう! お礼は出来ないけど、二人のデートが良いものになることを願ってるよ!」

それだけ言つて、すぐにデパートに向かった。

「そんなに急いでたのかな? それにしても変わった服装だったね……つて明日奈?」

「えへへ、カップルかあ。私達そんな風に見えるんだあ。フフフ♪」話を振つても明日奈の反応が無いので心配して覗き込んでみれば、だらしない顔をして惚けていた。

「おーい、明日奈? 大丈夫?」

「プロポーズは夕日の綺麗な浜辺がいいですよ!」

「いきなり何言つてんの?」

どこかに頭でもぶつけたのかな?

「へ? あ、いや、今の無し! あ、やっぱり無しじゃない!」

「? ……よく分かんないけど行こうよ」

「そ、そうだね! うん、行こう! 張り切つて行こう!」

ホントにどうしたんだろう……。

未だ惚けてる明日奈の手を引いて、動物園に向かった。

さつきあつた人、なんだか近いうちにまた会いそうな気がするな……。

ただの直感でしかないけど。

S i d e o u t

S i d e 未来

この街は海鳴市というらしい。

カメラを購入した後、人気の無いカフェでドリンクを飲みながら  
ハイミット・バーブル  
隠者の紫を使った。

写真は全部で五枚出て来た。

「ふーん、これがこの世界の転生者か。ん？ この写真は……」

一人目は武器を持って練習に励む、金髪オツドアイの少年。

二人目は亜麻色の髪の少女。何人かの少女と誰かを付けているよ  
うな感じだった。

三人目は茶髪の短いポニーテールの少女。側には瓜二つの顔をし  
た車椅子の少女がいた。

四人目は赤髪の少年。病室のベッドで眠っていた。

そして、五人目は僕がさっき話し掛けた黒髪の少年だった。

なんだ？ 最後の少年だけ違和感がある？

具体的なことは分からないが、五人目の少年——龍神空は他の  
転生者と違う気がする。

「この少年にもう一度会いに行くとしますか」

席を立ち、この少年の目的地——動物園に向けて歩み出した。

通りすがりの転生者です！

通りすがりの転生者です！

S i d e 空

「う〜ドキドキするな〜」

今日が俺の動物園デビュー。これが俺の今後に関わってくると言っても過言ではない。

「ようやく動物に触れられるかもしれないから、だもんね」

「うん。アリサの家の犬もすずかの家の猫も触れたことないんだ。一度も。だから、今日が俺の人生初の動物との触れ合いにしたいんだ！」

アルフやリニスは家族だからカウントしない。

他の動物だからこそ意味があるのだ。

「……といっても触れる動物なんてほとんどいないよ？」

「それでもいいの！ 確かに触れたらいいけど、見れるだけでも俺は十分だから」

「（今日の空君可愛い過ぎだよ〜）なら、早く行ってみようよ！」

「そうだね！ 待ってる、動物達よ！ 今行くからな！」

入園料を支払い、一番近くにいる動物がいる場所に向かった。

「ここは……鳥がたくさんいるエリア——空君が近づいたら一気に鳴き始めたね」

俺が近づくと鳥達が一斉に鳴き出した。

「俺ってやつば、き、嫌われてる？」

開始早々心が折れそうだよ。

「でも、アリサちゃんやすずかちゃん達のペットとは反応が違くない？」

「え？」

あ、そうかも。あの二人のペットは静かになって気がする。

「仮に嫌われてないとして何で騒いだんだ？」

「元々空君自身は好かれやすいのかもよ。もっと近づいてみればわかるんじゃない？」

明日奈の提案に頷き、鳥が入ってる檻の一つに近づいてみた。  
すると――

「わ!? 一杯近寄ってきた!」

「す、す、すいね……」

『これは成功したとみていいんじゃないかしら。良かったわね、空』  
インカムから琴里が自分のことのように嬉しそうにした声で囁いた。

「(うん!) よし! 次に行ってみよう!」

俺が檻から離れようとする、鳥達はさつきとは逆に悲しそうな鳴き声をしていた。

うツ……ごめんよ……。また会いに来るからさ、それまで待っててね。

俺自身も悲しいが他の動物達も見たいので、次のエリアに向かうことにした。

S i d e o u t

S i d e 明日奈

今日は待ちに待った空君とのデートをしています。

鳥達を粗方見て、次に見ることにしたエリアは猿やゴリラ、オラウータンなどがいる所だ。

「なんだか、私達……ううん、空君に動物達が視線を集めてる気がするんだけど」

「え、そう? あ、今あの猿がバク転した!」

本人は気にしてないようだが実際視線を集めてる。

空君の気を引こうとあり得ないことまで動物達はやっている。

飼育員の人も動物達の動きに困惑してる。

でも、空君がメツチャ可愛い! だから私も気にしない! というか動物達もつとやっちゃって! 空君の目がキラキラしてて最高!

もちろん私はスマホのカメラにその姿を保存している。最高画質で。

両親が私の安全のために持たせていたが、今日という日ほどスマホを持っていたことに感謝した日は無いと思う。

「うわー！ あっちのオラウータンがすごい動きしながら綱渡りしてる！ そっちではゴリラが筋トレしてるー！ ゴリラに筋トレって必要なのかわかんないけどすごい！」

うん！ いいよ！ 動物達のおかげで私幸せだよ！

しばらくして私達は次の場所に向かう。

その時に動物達が悲しそうにしてたのは言うまでもない。

それからしばらく回っていたんだけど、全ての動物が普段絶対にしないような行動をしていた。

例えば、ライオン二匹がダンスを踊ったり、パンダが正拳突きで竹を纏めて吹き飛ばしたり、昼にもなっていないのに夜行性の動物が活発に動いたり、ゾウが鼻を使ってリングでキャッチボールしたり、カングルーが柵を飛び越えようとしていたり、草食動物の餌やり体験でそこにいた草食動物が全部集まったり等々。

他にもまだあるけど、これ以上は私の身が持たないので止めておくことにした。

雌の動物が空君に求愛行動をしたときは、視線だけで殺せるんじゃないかってくらい睨んであげたけどね♪

「すごいね、動物って！ あんな動きやこんな動きが出来たなんて知らなかった！」

うん、それは全部あなたが来たからなんだよ。

飼育員の人も段々頭の整理が追いつかなくなっただったからね。

私にとってはご褒美でしかなかったけどね！

「次は——」

『これより動物達のサーカスをします。お時間があればぜひ見に来て下さい』

「これにしようか」

聞かなくても答えが分かるよ。

「うん！ 行く！」

手を繋いで、サーカスをやる場所に行った。

S i d e o u t

S i d e ???

俺はとある方に出会って力を手に入れた。

自分の人生を変えられるくらい素晴らしい力だった。

初めは漫画の中だけの力だと思っていたが、この力を使ってみて本物だと知った。

この力で俺をコケにしてきた奴らに復讐してやる！

そう思いながら、俺は与えられた力——スタンドの能力を使った。

S i d e o u t

S i d e 空

「サーカスって何やるのかな？」

「うーん、動物達がすごいことしてくれると思うよ。(空君がいたら絶対に予定よりもすごいことしてくれるよ)」

俺達は幸運なことに簡易式のステージの一番前に座ることが出来た。

今か今かとサーカスが始まるのを待っている。

「お客様、ようこそおいでくださいました！ これより当園のサーカスを始めさせていただきます！ 最初の演目はこちら！

お猿さんのジャグリング！」

ステージ裏から現れた一匹の猿が五個のボールを落とさないように器用に投げ続ける。

「おー！ すーいー！」

周りも拍手を送ると、猿がさらにやる気になったのかボールの数を増やし、頭や足も使ってジャグリングし出した。

「(え?! 何これ?! 練習してないことが何で出来るんだ?!)」

飼育員の人が驚いている気がしたが、それよりも猿のジャグリングを見たかったので気にしないことにした。

「つ、続きまして、犬達の玉乗りです！」

大成功に終わった猿の次は、大きめの球に乗った可愛い犬がたくさん出て来た。

最初は一つだけでやっていたが、途中から球を増やしてすごい平衡感覚だった。

俺がやれと言われても精々二つが限界だと思ふことを平然とやってのけた犬達はすごいと思う。

帰る時に、一度俺のところに来て抱きしめさせてくれてありがとう

！

どうして俺の所に来たのかよくわかんないけど満足だった。

「(ま、またなのか!! 一体何が……) つ、続いて、本日のメインイベント! ライオンの赤ちゃんです! この演目にはお客様に手伝っていただきたいと思ひます。何方か、ぜひやりたいという方はいますか?」

「はい! やりたいです!」

「え!?! 空君!?!」

だって、動物に触れあえるんだよ! しかもライオンの赤ちゃんに!

「他にはいないようなので、手を上げた男の子、前へどうぞ!」

俺が飼育員さんに指名されて、ステージに上がった。

「まずは君の名前を教えてください!」

「龍神空です」

「ありがとう。それではこちらにいる空君にライオンと演じてもらいましょう! 空君、君には最初にライオンの赤ちゃんと仲良くなってもらうね」

「はい!」

「それじゃあ、ライオンの赤ちゃん、シーちゃんに来てもらいます!」

飼育員の人が「ちゃん」を付けたということは雌なのかな?

そう考えたら黄色い何かがいきなり抱き着いてきた。

「うわッ！ え、あ、君がシーちゃん？」

「ガウ！」

「うん、その子がシーちゃんだよ。（私でも仲良くなるのに一月かかったのに、彼には会ってすぐさまに懐いた!?!）」

いきなり抱き着いて来た時には驚いたが、ただじゃれついてるだけのようだ。

「うわー！ もふもふだー！ 可愛いー！」

『（何この可愛い生き物……。これは撮るしかない！）』

もう死んでもいいかも。なんかこれで前世の世界に戻っても悪い気はしない。

……明日奈は何でさっきから視線に殺気を込めてるの？

あ、やっぱり触りたかったのかな？ あと、皆写真撮り過ぎじゃない？

「さ、仲良くなったことだし、二人に頑張ってもらいます！」

「頑張ろうね、シーちゃん」

「ガウ！」

飼育員が俺に指示を出そうとした時だった。

—————キヤアアアアアアアアアッ！ 動物が暴れてるわ

！

誰かの悲鳴が聞こえた。

……動物が暴れ出した？

どういうことだと考えた矢先だった。沢山の動物が狂ったようにサーカスの会場まで来ていたのだ。

「飼育い————ツ!? ……何するんですか？」

飼育員さんに避難誘導を頼もうとしたらナイフで攻撃された。

シーちゃんを抱えていたが何とか躲せた。

「ああ、外れちまったかあ……。もうちよいで死ねたのによお」

飼育員さんの口調がいきなり変わった。これがこの男の本性ということか。

「この騒ぎ、飼育員さんがやったんですか？」

「おー、正解正解♪ご褒美に……。殺してやるよ！ この俺—————

獅子釜動魔ししがまどうまがな！

再び飼育員——獅子釜動魔がナイフを振るってくるが、見聞色の覇気を使って容易に躲す。

「お兄さん、遅いね」

「……テメエ何もんだ？ 普通だったら最初のだけでも十分パニックになるのに、ナイフで攻撃されても平然としてやがる？」

「まあ、潜ってきた場数が違うからね。それにお兄さんの動きは素人丸出しだよ。……お兄さんが動物達に何をしたか知らないけど、ぶっ潰す」

「ハッ！ ガキが調子こくなよ！ 死ねええええええ！」

「へブレイブ、封時結界よろしく」

獅子釜の攻撃を躲しながら、ブレイブに念話で封時結界を張るよう頼んだ。

封時結界とはユーノから教わったのだが、通常空間から特定の空間を切りとり、時間信号をズラす魔法とかなんとかだとユーノは言っていた。簡単に言うと、結界内で壊れた物が結界を解くと元通りになる。

あのユーノでも詳しく説明するのは大変らしい。

《張り終わりました。中にはマスター、明日奈さん、おの男、暴れる動物達。それからマスターが抱えてるシーちゃんです》

《へありがと。これで能力やデバイス使っても問題ないね》

セットアップして攻撃しようとしたら、俺よりも先に閃光が迸った。

「俺のナイフがいつの間にか弾かれていただど!? おい、ガキ！ テメエが何かしたのか!？」

「あー、いや、違う」

「だったら何が……」

犯人はあなたの後ろにいますよー。何かすごい殺気放ってます。よくも……よくも空君とのデートを台無しにしてくてたわね……」

「ああん？ 何だて——グホッ!? な、なにしや——グエツ!? お、おい！ タン——ウガッ!? ま、ままま待って——ウ

ギヤアアアツ!？」

うわー、容赦ないな。

獅子釜が何か言おうとする度に明日奈が自分の神セイクリッド・ギア器——  
揺らめく閃光で閃光の如き速さの突きを繰り出す。デバイスが非殺傷設定にしてあるので、獅子釜の体には傷が付かないが相当痛い思いはする。

「さつきと動物達を元に戻して。あなたがやったのよね？」

レイピアを突き付けながら命令する。

「わ、分かった！ 解除する！ だからその剣をしまつてくれ！」

……うん、実にテンプレな悪役の発言ですね。

「明日奈、しまう必要なんてない。しまつたら解除せずに襲ってくるだろうから」

「ツ!? チツ……カンの良いガキだ……」

あつきり認めちゃうんだ……。

この人がどんな力を持っているか知らないけど、手に入れたばつかで完全には使いこなせてないみたい。

いや、元々一般人だった人には無理な話か。

「早くして！ 終わらないとデートが出来ないじゃない！」

《〈100%私情ですね〉》

「へアハハ……」

「分かった！ 解除する……なんていうと思ったか！ この馬鹿共め！ さあ、来い！ 俺の動物達よ！」

ツ！ さつきまで静かにしていた動物達が一斉に襲ってきた！

数が多くてブレイブじゃ無理だ！

「来い！ 永遠の氷姫！ 動物達を——」

『『イフ』！』

『時ヨ止マレ！』

「凍らせろ……ってあれ？ 動物達が……倒れてる？」

ど、どういうことなんだ？ 一匹残らず倒されてる。いくら明日奈でもこれだけの数を一瞬で倒すのは不可能だ。

「や、少年。また会ったね」

今起こったことに混乱していたら、動物園に行く前に出会った変わった格好のお姉さんに出会った。

「へ？ え？ あ、どうも……」

このお姉さんどうやって結界内に入ってきた!?

「……お姉さん、何者ですか？ そもそも人間ですか？」

バリアジャケットを解除してからお姉さんに質問する。

動物達を倒したのはこの人で間違いないと思う。何をしたかわからないが。

「僕？ 僕は門矢未来。——通りすがりのスタンド使いだよ。そ

れから一応言っておくけど、僕は男だし、人間だからね」

このお姉——じゃなくて門矢さんは、自分のことをスタンド使  
いって言った？

スタンドって『ジョジョの奇妙な冒険』に出てくる能力のはずじゃ  
……。

だったら動物達が一瞬で倒されたのも、もしかすると……。

それらを考えると導かれる答えはただ一つ。

「あなたは転生者なんですね？ ……え、というかその格好で男なの  
!？」

「そういうこと。ちなみにあの男もスタンド使いだよ。（反応遅くな  
いか!）」

門矢さんが指で示した方向にいたのはいつの間にか動物達と同じ  
ように気絶していた獅子釜動魔だった。

「え、じゃあ、あの人も転生者!？」

「いや、それは違う。転生者は君を含めて五人だけだよ」

「……どうしてそれを？」

獅子釜が気絶しているのを確認してから明日奈がやってきて、質問  
をした。

「スタンド使いだからね。能力でちよちよいのちよいだよ」

「……ハイミット・バール隠者の紫カレット・ホット・チリ・ペツパーじゃないですか？」

その二つのスタンドの情報収集能力が凄まじいことは漫画を読んで  
知っている。

「(知ってる人がいればそうなるよね……) 正解さ。出て来て、『イフ』  
『イフ』と呼ばれる、ナハトヴァールよりはまだまともだが、小さな怪物  
物といった感じの生物(?) が門矢さんの側に現れた。」

『それが門矢さんのスタンド?』

「え、二人は『イフ』が見えるのかい!?!」

俺達の反応に門矢さんはかなり驚いていた。

スタンドはスタンドを持っているか、スタンドの才能が無いと見え  
ないはず。

俺達が見えたということはスタンドの才能があるのかな?

もしかしたら魔力や神器が関係してるのかもしれないけど情報が  
無いから分からない。

あとで二亜に調べてもらおうかな。

「そう言えば、門矢さんはどうしてここに?」

「あ、僕のことには名前でも構わないよ。僕の目的は君に聞きたいことが  
あったからさ」

俺に?

「わかりました。でも、あの男を警察に突き出さないとイケないです。  
それに今、デート中なんで……」

「それもそうだね。なら、僕はこれから寝泊りする——」

「わ! シーちゃん!?!」

俺の腕の中にいたシーちゃんがいきなり暴れ出した。

腕から離れると、獅子釜の方に行き、俺達から獅子釜を護るように  
立っていた。

「……まだ、終わってないか」

「みたいですね」

「チツ……最悪な目覚めだぜ。おい、シー! アイツらを殺せ!」

「ガウ! ガオオオオオオオオオオオオオオ!」

獅子釜がシーちゃんに命令を下すと、シーちゃんに異変が起きた。

体が急激に膨れ上がり、背中から羽、尾が蛇の頭、頭からは捻じれ  
た角が生えて、5mを超える巨体となった。

「ハハハハハ! これが俺のスタンド——」

コンバージョン

『改造』だ! 触れ

た生物を好きなように弄れる能力が備わっている！　いくらお前達が強かろうとこいつとは戦えまい！」

襲ってきた動物達もその能力で自分の命令に従順になるようにしたのか。

「あなたなんて最低なの！」

「外道の極みだね。『イフ』！　アイツを——……空君？」

「……あなたのイフじゃ、シーちゃんを殺すことになる」

「甘ったれるな！　アレはもう君の知ってるライオンの赤ちゃんじゃないだぞ！」

そんなこと言われなくてもわかってる。分かっているけれども！

「——俺がシーちゃんを助ける！　助けなくちゃいけないんだ！」

「……わかった。君に任せる。……手助けは一切しないからね」

「すみません。それとありがとうございます。イフもごめんね。出番奪って」

『我ハ構ワナイ。——！　（コノ少年、既ニスタンドガ目覚メテイル!?）』

イフって話せるんだね。転生者だからそうなのかな？

イフに謝りながら頭を軽く撫でてシーちゃんの前に立ちはだかる。

「シーちゃん、今助けてあげるから」

「どうせハツタリだろ？　シー！　そいつを殺れ！」

「グオオオオオオオオッ！」

姿の変わったシーちゃんが襲ってくる。

俺は手を前に翳し、一言。

「——【止まれ】」

「ガウツ!？」

霸王色の覇気でシーちゃんを威圧して動きを止めた。

『止まった!？』

「よしよし、いい子だね。今、元に戻してあげる」

翳した手でそのままシーちゃんの額に触れるとガラスが割れるような音を立てて、シーちゃんは光に包まれた。

光が収まるとそこには元の赤ちゃんライオンの姿になった赤ちゃんがいた。

「あ、ありえねえ！ 何なんだよテメエは!? 何しやがった!」  
今起こったことに獅子釜は頭の整理が追い付かず混乱していた。

「お前に答える義務はないよ。さあ、あとはあんだだ」

「か、簡単にはやられるか！ この動物園の動物全部で襲ってやる！」  
「あ、それ無理だと思うよ。さっきの『止まれ』は全部の動物に届くように威圧したから。」

信じられないだろうから試しに呼んでみたら？ 来ないだろうけど」

「ク、クツソオオオオオオオオオオオ！」

自分の能力が完全に封じられて自棄になったのか、明日奈に弾かれたナイフを拾って襲ってきた。

「はあ……最初に言ったでしょ？ あんたは『遅い』って。——  
吹っ飛べ」

俺の背後から黒い腕が伸びてきて、獅子釜を数m後ろに吹き飛ばした。

「(今のが彼のスタンドか……)」

今度は暴れられないように未来さんに『天国への扉』<sup>ヘブンズ・ドア</sup>を使ってもらい、その場に放置した。

獅子釜のスタンドの力を受けた動物は俺が全部元に戻した。  
未来さん曰く、俺のスタンドの能力らしい。

「あーあ、折角動物達にあんなに好かれたのになあ」

動物園を出て、明日奈とのデートを続けることにした。

「……ホントそうだよね。(空君の写真もつと撮りたかったのに!)」

「明日奈もごめんね……。今度埋め合わせするよ」

「え、そんなのいいよ！ 十分楽しめたから!」

「俺が納得がいかないんだよ。もちろん、明日奈が嫌って言うなら——」

「埋め合わせ期待してるね！」

余りの変わり身の早さに思わず苦笑いしてしまう。

そう言えば、未来さんが聞きたいことって何かな？

しばらくこの海鳴市にいるみたいだし、今度聞いてみればいいか。

俺もスタンドについて聞きたいこと沢山出来たし。

今日の出来事が俺達を更なる事件に巻き込む切っ掛けに過ぎないことはまだ誰も知らない。

側に立つ者です！

スタンド・バイ・ミー  
傍に立つ者です！

Side空

動物園に行った翌日、家に未来さんがやって来た。

「おはようございます、未来さん」

「おはよう。今日はお邪魔させてもらおうよ」

未来さんを俺の家に招いたのはスタンドのことを聞くためだ。

早速、俺達は地下のトレーニングルームに行き、スタンドについて

話し始め――

「あんたが空と同じ転生者ね？」

「そうだけど……君は？」

「私はアリサ・バニングスよ。名前でもいいわ」

話し始める前になのは達の自己紹介が始まった。

自己紹介を終えて、未来さんがスタンドについて教えてくれた。

「教えることといっても、この世界にはジョジョの原作があるわけだし、それを読んだ方が早いと思うよ。僕がいた世界は4部の世界だったから全部を知ってるわけじゃないしね」

「未来さん、小学生の女の子がジョジョ読むってちよつとあれじゃないですか？」

それは言ってる。ジョジョは結構グロテスクなシーンが書かれている。

いくら少年ジャンプで連載されていようと女の子に薦める物ではないと思う。

「わかった、話すよ。でも、まずは君達がスタンドの才能があるかどうかだね。『イフ』、出て来て」

『いきなり現れた!?!』

あれ、思ってたよりも反応が違う……。

昨日見た俺と明日奈は驚かないのは普通だけど、初めて見たはずなのは達がどうして驚かないんだ？

……あ、もしかしてこいつら――

「昨日のデート付けてたな？」

『可愛い空（君）最高でした！』

全部見られてたの!? 動物に夢中で全く気配に気が付かなかった……。

「はあ……まあ、いいや。それで、この中に見えない人はいる？」

手を上げたのはシエラにシグナムさんやリインフォースさん、はやての守護騎士達だった。

そのメンバーに共通することは魔導プログラム体であることだ。スタンドは生命エネルギーが無いと出せない。

こういう言い方は好きじゃないが、要するに生物じゃないシエラ達には見えないということだ。

「こ、こんなにスタンドが見える子がいるなんて思いもしなかったよ……」

頬を引き攣らせた未来さんがそう呟いた。

昨日調べてみたら、この世界の俺達が見える理由は魔力も関係してことがわかった。

魔力も人間が持つ生命エネルギーの一種であるからこそ見えた。

つまり、この世界では魔力を持つ全ての生物がスタンドを使える可能性がある、というわけだ。

それから昨日倒した男、獅子釜動魔はどうやってスタンド能力を手に入れたのかを調べたら、漫画でも出て来たスタンドを発現させる矢によって貫かれたらしい。もちろん、誰によって貫かれたかも、他にいるスタンド使いも調べは着いている。

正直言つて、これから起こることのために早いとこ片付けてしまいたいとこだが、相手のスタンドに対抗するにはスタンドしかない。

だから、今日は未来さんと呼んでスタンドの使い方を覚えることにした。

「次はスタンドを目覚めさせてみようか。あ、もちろん強制じゃないから」

強制ではないと言ったが、拒否する人は誰もいなかった。

「それじゃあ、皆は『イフ』に触れてね」

全員が触り終えたら、次はスタンドを出すことだ。

「どうやって出せばいいんですか？」

「自分の中で最強だと思うものをイメージ——」

『！ 出来た！』

「早くない!？」

皆は才能の塊って感じだしね……。

「それが皆のスタンドか……」

なのははピンク色のドレスを着た貴婦人、フェイトと黒色メインでアリシアは水色メインの色違いで電気を纏った一角獣、アリサは燃える鳥、すずかは氷で出来た東洋風の細長い龍、明日奈は剣を持った女性の戦士、愛衣は白い虎、雄人は黄金の鬣たてがみの獅子、ヴァーリは六枚の黒い翼を生やした片翼の墮天使、はやては黒い蛇女、あかりはアンドロイドのような形をしていて楽器を持っているスタンドだった。

それぞれの自分のスタンドを見た反応は様々だった。

「空、お前のスタンドはどんなのなんだ？」

「そうよ！ あんたもさっさと出しなさい！」

「空君のスタンド見たいの！」

俺だけ出さないのが不満だったのか、皆が見せろとせがんできた。

「あー……俺のつてき、変わってるんだよね……。それでも見たい？」

「私のはメデューサなんやで。それよりも変わってるん？」

「いや、見た目はそこまでかな。むしろまともな方だし」

「え〜！ ならいいじゃん！ 早く早く！」

「わ、わかったよ。……来て、『アバター』」

大人しく観念して、俺のスタンドを呼んだ。

そして、俺の側に現れたのは俺と瓜二つの顔をしたスタンドだった。

『え……これが空（君）のスタンド？』

「まあね。そっくり過ぎてあんまし見せたくなかったんだよね」

『違うところもあるだろうが』

『しゃべった!？』

俺のスタンド——アバターは何故かイフと同じく会話が可能

だった。

アバターは側頭部から金色の角や、ドラゴンの尻尾と思わしきもの、髪が白で眼が赤、服装は全身黒づくめだ。あと口調も違う。

今ので俺のスタンドについては納得いったようなので、次の段階に進めた。

「自分のスタンドの能力を知ってもらおうよ」

未来さんの数時間に渡る指導のおかげでそれぞれの能力を把握できたみたいだ。

練習の最後に実際に戦ってみることになった。

「試しに空君と僕で試合をしてみようか」

「はいー!」

「それじゃ、試合始め」

俺と未来さんが一定の距離を取ると、審判役のヴァーリがスタートの合図を出した。

「(空君のスタンドは他の子達と比べてかなり異質だ。気を付けないと……) 先攻は譲るよ。それでもスタンド使いの先輩だからね」

「じゃあ、お言葉に甘えて……アバター!」

俺は未来さんに接近し、アバターで殴った。

「イフ、迎え討て!」

イフが体の至る所からミサイルを出し、発射した。

! ミサイル!?

でも、残念ながらそれは――

「アバター!」

『言われなくてもわかってるっての! 消えろ!』

アバターがミサイルを殴りつけると、昨日と同じようにガラスが割れるような音を立てて、爆発することなく消え去った。

「消されたツ!」

未来さんとイフが驚いている間に更に詰め寄り、腹に一発、右回し蹴りで吹き飛ばした。

「まだ出来ますよね?」

「もちろんさ。僕を舐めるなよ……。イフ!」

『時ヨ止マレ!』

『無駄だ、バーカ』

イフが何かしようとしたのをアバターが防いでくれた。

『時よ止まれ』ってことは『世界』?<sup>ザ・ワールド</sup>

いや、4部だけしか行つてないと言つてたから、『スタープラチナ・ザ・ワールド』の方だ。

「んな!? ……だったら、『スタープラチナ』での真つ向勝負だ! (アバターにスタンド能力は効かないのか!?)」

未来さんがイフではなく『スタープラチナ』を出して、殴ってくる。スタープラチナまで使えるのか。

『ハッ、スタープラチナねえ……ゴリ押しで勝てると思つたら大間違いだぜ!』

スタープラチナの高速の拳を前にしても物怖じせず、それどころか逆に――

「受け止めた!? ありえない! スタープラチナは最強のスタンドなんだぞ!」

アバターはスタープラチナの拳を掴んでいた。小さな体のスタンドが2mを超える巨人の拳を掴むとは俺とアバター以外誰も予想だにできなかった。

『そう簡単には教えねえよ。これで――』

「そこまででいい!」

『……分かった……』

俺が止めると、不満そうになながらも従った。

試合をそこまでにして、未来さんは治療を受けながら質問してきた。

「アバターの能力は何だい?」

『それは空を見てればわかるだろ』

「……? 空君から……魔力を感じない?」

「そんなわけ……あら? ホントだわ。どういふことなのかしら」

「俺のスタンドはあらゆるスタンド能力を弾く、というか壊す? まあ、そんな感じですよ」

「それって最強じゃね？ スタンドで時を止められることも本にされることもないんだろ？」

「良い点だけ見たらね」

雄人の言う通り、スタンドの能力が効かない強いスタンドではある。

昨日の動物達を元に戻せたのもスタンド能力を弾いたからだ。

「悪い点は？」

「明日奈達が気付いてたけど、アバターを使ってる間、俺は他の力——  
—魔力や神セイクリッド・ギア器が一切使えない。スタンドを解除しても魔力が能力で弾かれて無くなってるから回復するまでしばらく使えないままだしね。しかもアバターは俺の異能は全部使えなくするくせに、スタンドかその本体、又はスタンド能力に掛かった生物や物にしか触れないし、効果もない」

『強い力には代償は付き物だ。諦めろ』

「だそうです。つまり、今の俺は一般人よりちよつと動ける程度の子供ってこと」

「スタンドに対してはチートだが、それ以外の異能には弱いつて事か……。微妙だな」

「だよねー」

ヴァーリが神器使って、俺がスタンドを使つて勝負することになったら確実に負ける。

これから起きることにだけは使えるからいいんだけどね。

「でも、それだけじゃ納得がいかない。スタープラチナのパワーに勝るスタンドなんていないはずだよ。それにイフが覚えた能力は元の能力より強化される」

『それは俺が単純に強いつてハナシだ。さつきも言つたら？ 俺を使うには代償がある。だつたら、それ相応の力がなきや代償の意味ねえ』

「……なるほどね。君はホントに異質なスタンドだよ」

『本体が特別なもんでね』

……こいつも俺のことを何か知ってるのか？

聞いても答えてくれそうにないなあ……。

その後も皆で試合をして今日の特訓は終わった。

皆が帰った後、俺は十香達精霊を部屋に集めた。

「俺が呼んだ理由は分かっているよね？」

「うむ。前世のことであろう？」

「そう。皆が知ってることを聞かせて」

「その前に空がどこまで知ってるかを知っておきたい」

「そうだね。二度手間になるし」

俺は夜天魔導書内で凜祢に聞かされたことを十香達に伝えた。

記憶が戻ったら、十香達は俺を護る、寂しい思いをさせないという役目を終えて消えることを。

俺は特典が消えて、前いた世界に戻ることを。

「以上だよ。……改めて話すと結構来るモノがあるね。それで、知ってることは？」

「ジュエルシード事件の時に空は前世のことを知るといのが天照の予定だった」

「予定、だった？　じゃあ、予定が狂ってるってこと？」

「だーりんが発動する前のジュエルシードに触れるだけで良かったんですが、誘拐された時は別の人が発動させてましたし、海の時は壊してしまいましたからねえ。それ以外は他の人が発動させてましたから、だーりんが前世を知る機会が丸潰れだったんです」

「夜天の魔導書内でも前世に関する夢を見るはずだったので、ジュエルシードに触れていなかったせいで見ることは無かったんですの」

「……それで予定が狂ったわけか」

「そうよ。それにあんたはこの世界に対する強い思いが芽生えた。だから、前世の記憶があらうとなかろうと帰りたくないって気持ちに変わりはないでしょうしね」

「そうだね。俺はこの世界で大切な友達や家族が出来たんだから帰り

たくないよ。天照さんの予定がズレたことはわかった。他は？」

「あ、あの……空さんは、自分の前世の記憶が無いのに、特典で選んだ原作の内容を憶えてるのは、おかしいと思ったことはありませんか……？」

「え、それって……別に普通じゃ——！」

俺が特典で選んだものが出てくる原作が前世にあったのならどうしてそれは憶えてる？

それもキャラ、技、物語の流れまで細かく憶えてるのは。

「これって偽物の記憶……なの？」

俺が選んだ特典は、選んだんじゃないやなくて選ばされてた？

『あー、それは流石に違うよー。前世に原作はちやんとあったらしいよー。憶えてたのも特典で選んだおかげだよー』

自分の記憶だったことにちよつとだけ安心した。

「……そっか。あー、あとさ、俺って人間なの？」

「……はつきり言えば、人間ではない」

「そっか。まあ、そんな気はしてたけど」

何となくそんな気はしてたからそこまで驚くほどでもない。

「中にいるドライグ達も薄々気付いてるのではないか？」

「そうなの？」

自分の中からドライグ、アルビオン、九喇嘛を出して尋ねた。

ヤハウエは体を創ってないので、聖槍だけが出て来た。

『最初から何となく違和感があった』

違和感？

『一つは空の心がどこまでも澄み切った青空だったことだ』

「……？」

そのの何が問題なんだ？

『誰しも喜んだり、怒ったりすれば精神世界に変化がある。ワシらみたいの中にいる奴はその変化を見る』

『ですが、空さんはどんなに笑ったり、怒ったりしても変化がみられませんでした』

「……それって俺に心が無いって言いたいの？」

『それは違う。心が無い奴があんな綺麗な青空なわけがない』

「じゃあ何？」

『お前の心は全てのが小さいと感じるほどに広すぎるんだ』

「寛大なだけじゃない？」

『それでも異常なんだよ。誰もが心地いいと感じるような心の世界なんてのはな』

以前に狂三が居心地がいいとは言ってたけど、そう言うことだったのか……。

「他に分かったことは？」

『聖槍の禁バランス・ブレイカー 手に至ったことです。初めて使っていきなり至ったなんておかしいと思ってましたが』

「うん、俺もおかしいとは思ってたけど使えるならいいかって思ってそれ以上は考えなかった」

『それからティアマットに勝てたこともだ。まあ、精霊達が修行を付けたおかげでそうなったのかもしれないがな』

「そうかもね」

『霊装を纏うのもだ。精霊が持つセファイラ霊結晶、だったか？ それを持っていない者が纏えば体に多大な負担が掛かるはずなのに5分も使っていない。それが空が人間ではない一番の理由になるだろう』

「それは特典で使えるようにしたんじゃない……」

「ううん、霊結晶は私達が持つてる。流石に私達だけが力を持つてる」と空が選んだ特典とは違っちゃうから、結果として空は一定の能力を持ち、私達が空の中にあることで完全に使えるようにしたんだけど」  
「結論。空が人間であれば限定霊装を使うだけでもアウトですが、使えるということは人間ではない存在になります」

「なるほどね。人間ではないことは分かったけど、俺が何なのかはわかるの？」

俺、人間じゃないのか……。この世界に神様やらドラゴンやら悪魔やら、色々いるからそんなに落ち込むこともないね……。

『中にいる俺達は知らん』

「私達は知ってるわ」

十香達は天照さんに聞かされたから知っているわけか。

「それで俺って……あー、今は俺の正体はいいや。それで一番聞きたいのがさ……」

それを聞いて返ってくる答えが怖い。明日からどうすればいいかわからなくなる。

大袈裟だけど、もしかしたら誰も信じられなくなるかもしれない。それくらい聞くのが怖い。

「お、俺達って……『家族』……？ 本心で皆はそう思ってくれてるのかな……？」

『……………』

誰も答えない。

「空は皆のことを家族だっと思ってる？」

口を開いたのは凜祢だった。

「当たり前だよ！ 家族だっってこの世界に来た時からずっと思ってるー！」

「だっってよ。十香ちゃん達の方は？」

「むく達に最初はそんな気持ちなんて無かったのじゃ」

「役目を終えれば消えるだけ。それが私達の未来だとしても何も感じなかった」

「……でも、何時からだっったかはわからないけど、気付けばここでの生活が楽しかった」

「心の底から消えたくないって、空と皆ともっといたいって思うようになった……」

「それじゃあ、皆の答えは？」

『空と一緒にいたい！ これからも家族としていたい！』

「ッ！ ……そう。俺もいたい。これからも俺のお姉ちゃんदैて下さい」

『あ、それは無理』

え？

「え？ は、はあ!? なんで!? おかしくない!? 皆お姉ちゃんでしよ!」

さつきまでシリアスだった雰囲気がち壊した。

「無理なものは無理なのだ! ずっと姉という立場では困る!」

困る? 何に? さっぱりわかんないよ!

「ど、どういうこと、ドライグ」

『それは空がいつか気付くべきことだ』

アルビオン達に聞いても適当にはぐらかされてしまい、結局わからないままだった。

「うーん、よくわかんないけどこれから家族でいてくれるんだよね?」

「もちろんですわ」

見回すと他の人達も頷いていた。

家族はよくて、姉は嫌だって何で?

「まあ、いいか。その前に何とかして消えないようにしないとね」

『何か考えでもあるの?』

「一応ね。俺が持つてる神滅具ロンギヌスなら何とかかなんじやない? その名の通り神様に抗ってみようよ」

考えとしては、十香達の体を幽世セフィロト・グラールの聖杯で創り直す。

そうすれば天照さんが創った体じゃなくなって記憶が戻っても消えることは無いと思う。

それで、俺の記憶が戻ったら他の力——ドライグ達も消えてしま

う。

それはヤハウエに体を創って、神器をヤハウエに託す。

託した神器はすでに俺が貰った特典ではなくなるから記憶が戻っても十香達と同じで消えないはず。

覇気や家事に関してはまだ一度覚えればいいというただそれだけの事だ

「それが俺の考え」

『上手くいくかはさっぱりですけど、やってみる価値はあると思います。ついでに私の体も創ってくれと嬉しいです』

鞠亜がサラツと注文をしてきたけど、データの鞠亜をどうやって創った体に入れればいいんだらう？

「鞠亜のお願いは出来るかわかんないけど、これからすることに比べれば簡単だろうし、頑張ってみるよ」

『ありがとうございます！』

『どういたしました。……それから、『アバター』』

その名を呼ぶと、俺そつくりの奴が現れた。

ドライグ達は見えてるようだが、十香達は見えてないらしい。

『何だ？』

「お前は俺の考えをどう思う？」

『さあな。俺にはさっぱりだ。というか興味がねえ』

こいつはよくわかんないな……。

「何も無いならいいさ。そんじゃ早速やろう」

アバターを消してから十香達の体を新たに創り直し、ヤハウエに神器を託す。

作業は十分もかからずに終わった。

「これで消えずに済むといいんだけど……」

「大丈夫だよ！ 〈囁告帙<sup>ラジエ</sup>篇〉でも調べたし」

「二亜に一度騙されたから信用できないんだけど」

時の庭園で何が調べなくても分かるだ。家族だって思ってたのは俺だけだったじゃんか。

「ウグ……今度は大丈夫だって！ 信用してくれよ！」

「……まあ、いいけど」

これを知って天照さんは何かしてくんのかな？

前世の世界から俺の知り合い——今の俺からすれば知らない人だけ——を呼んで連れ返しに来るとか、この世界を壊しに来るとか、かしなきやいいんだけど。

やることはやったので夕飯までの時間をどうしようかと悩んでい

たらブレイブが通信を受けたみたいだ。

《マスター、クロノさんからの連絡です》

ブレイブが空中にディスプレイを展開すると、クロノの顔が映った。

『空、今良いか?』

「うん、丁度今片付いたとこだよ。用件は何?」

『昨日、君がくれたデータのおかげで上層部は何とか止められたし、父さんを嵌めようとした奴も捕まえることが出来た。ただな……』

「?」

『ある方達が君にぜひ会いたいと言っていてな……』

「ある方達?」

『ミゼット・クローベル本局統幕議長、レオーネ・フィルス法務顧問相談役、ラルゴ・キール武装隊荣誉元帥という管理局の黎明期を支えた伝説の三提督と呼ばれてる方達だ』

「三提督? ふーん……」

艦これの提督だったら面白いんだろうけど、管理局の人つてのがなあ……。会ってどうしたいんだか……。管理局に入れる気?

「わかった。会うだけ会ってみるよ」

断ってクロノやリンデイさんに迷惑が掛かるのも嫌だし、管理局の人だからって全員が黒い訳じゃないでしょ。

『ホントか!? ありがとう! 日取りは追って連絡する!』

俺の答えを聞くなり、クロノはすぐに通信を切った。

クロノの反応を鑑みるに、余程上の立場の人からの命令だったのだろう。

「ってことでお茶菓子でも用意した方が良いのかな? 伝説っていうくらいだしよぼよぼのお爺ちゃんお婆ちゃんだろうから甘くない方がいいかな?」

《相変わらず呑気ですね。もう慣れましたけど》

すごい人って言われてもサーゼクスさんやユーストマさんほどでもないでしょ。

管理局に勤めてるわけでもないのに恐れる必要もないし。

「あ、醤油が切れてたんだっけ？ 買いに行かなきゃ  
外に行く用意をして、買い物に出かけた。」

一日執事です！

一日執事です！

買い物に出かけた俺は、商店街に向かった。

「おじさん、醤油下さーい」

「お、空坊！ よく来たな！ 今日は美人の姉ちゃん達は一緒じゃねえのか？」

「これくらいは一人で出来ないとね」

「そうかそうか！ 空坊は偉いな！」

おじさんは笑いながら俺の頭を大きな手でガシガシと掻き回す。乱暴な手付きだが嫌ではない。

五歳の頃からこんな感じの付き合いで、今でも変わらないのが嬉しいとさえ思う。

「おっと、いけね。醤油だな、五百円だぜ」

俺はお金を渡して醤油を買った。

「ありがと、おじさん！」

「おう、じゃあ——あ、ちよつと待ってくれ」

別れを告げて別のお店に行こうとしたら引き止められた。

「ん？ どうかしたの？」

「最近、隣街で物騒な事件が起こってるらしいんだ。もしかしたらこの街も危ないかもって警察も言ってるよ、それを伝えておきたかったんだ」

物騒な事件……。

「それってどんなのか教えてもらえる？」

「俺も詳しくは知らないんだけどよ、噂では人が消えたり、……その、子供に言うことじゃないんだが……あまりいい見つけ方じゃねえんだとよ。空坊も気を付けろよ」

「……そっか。お姉ちゃん達にも伝えとく！ ありがとね！」

「おうよ！ またいつでも来いよ！」

おじさんに手を振って、買い物続けた。それから買い物続けたのだが、他のお店でも同じような話を耳にした。

さつきの話、嫌な予感がするな……。

家に帰ると、夕飯の支度をして、皆が揃ってからご飯を食べ始めた。食事の最中に今日聞いたことを皆に伝えた。

「何か最近、隣街が物騒らしいよ。もしかしたらこの街も危ないかもって商店街のおじさん、おばさん達が言ってた」

「なら、出来るだけ一人で動かない方がいいですね。というわけで主、明日は一緒にいましょう」

「あ、明日はアリサと遊ぶ予定があるんだ。だから無理かな」

「……そうですか」

「あらら、落ち込んでるよ。今度暇なときに何かできればいいけど。」

「それって、アリサとデート？」

「やけに真剣な目付きでフェイトが訪ねてきた。」

「うーん、家に来いって言われただけだからデートじゃないと思う」

「それはアリサに聞いてね。あ、ドライブ達は留守番しててね。犬が怖がるから」

「本音は俺が犬に触りたいだけなんだけどね！」

『分かってる』

『ただ、気を付けておけ。先程の話は嫌な予感がする』

「ドライブ達も俺と同じ考えだったようだ。未来さんにも伝えておくか。スタンド使いの可能性もあるし。」

「その後は他愛無い話を続けてご飯を食べ終えた。」

「アリサと遊ぶ日、朝のテレビ番組で行方不明者や変死体が出たということを伝えていた。」

「割とこの街付近の出来事らしい。」

「益々きな臭くなって来た。気を付けて行ってきて」

「うん、わかってる。行ってきます」

朝ご飯を食べ終えて、アリサの家に向かった。

「遅い！ いつまで私を待たせる気よ！」

「えー……これでも約束の10分前に着いてるんですけど」

開口一番にアリサが言ったことは、来るのが遅いだった。

こっちは約束の時間には余裕で間に合っているのに何故か怒られる。

ちなみに現在カーペットの上で正座させられてる。

「うるさいわね！ 私が来て欲しいと思った時にいなきやダメに決まってるでしょ！」

この金髪小娘様はなんとという無理難題を言うのであろうか。

無理だと言っても「そんなくらい何とかしなさい」と言われそうな気がして言わなかった。

「それで、今日呼んだのは？」

「！ そうだったわ、危うく説教で時間が潰れるところだったじゃない！ もし、潰れたらあんたの所為だからね！」

無理難題に続いて、理不尽なことを言われた。

でも、本人は本気でそう思ってるわけではない（と思いたい）のでそこまで気にすることもない。

というか学校でも散々あったから今更のことだ。

「アリサちゃん、その辺にしといたら？」

「それもそうね……ってなんであんた達がいんのよ!？」

『暇だったから』

今、暇と答えたのはなのは、フェイト、アリシア、はやて、明日奈、愛衣、あかり、ヴァーリ、すずかのいつもの仲良しメンバーだ。雄人は囑託魔導師の仕事で、ユーノも無限書庫の整理をしていて残念ながら来ていない。

「……まあ、いいわ。鮫島」

「はい、アリサお嬢様」

アリサが名前を呼ぶと、鮫島さんが音もなくいきなり現れた。

「空……とついでにヴァーリの二人にアレを着せて指導しなさい」  
「かしこまりました。それではお二人共私に付いて来て下さい」  
「???」

俺達の頭には疑問符が浮かびまくりだが、鮫島さんに付いて行つた。

「お二人にはこれを着てもらいます。アリサお嬢様の我が儘ですが、どうか聞いていただきたいのです……」

「大丈夫です。いつもの事なんで」

「俺も時々巻き込まれるからな。気にしてない」

「ありがとうございます。お嬢様は良いご友人を持たれました……つといけない。早速着ていただいて、サイズが合わなければ別のものをご用意しますので申し付けてください」

そう言つて手渡されたのは黒い服だった。

どんな服かは着てから確認すればいいかと思い、着てみた。

『これは……執事服?』

鮫島さんが着ている服をそのまま子供サイズにしたものだった。

「その通りでございます。サイズは問題ないようですね。次は執事の『イロハ』を学んでいただきます。一時間で」

『えっ』

そんな短い時間で覚えられるのかと思つたが、鮫島さんに一時間という短い時間で執事のイロハを叩き込まれた。超スパルタで。

「お二人共かなり筋がよろしいですね。きつといい執事になれます」

「そ、それは……どうも」

「こ、こんな機会……中々ないな」

一気に頭に詰め込んだので二人共肉体的にも精神的にも疲れがすごい。

「さ、休憩は終わりです。今度はお嬢様達で実践です」

『えっ』

鮫島さんに意見する間もなく、再びアリサ達が待つ部屋に連れていかれた。

「扉を開けて入るところから執事としての振る舞いをしてください。」

いいですね?」

『はい!』

「良い返事です。お嬢様、鮫島です。新人執事二人をお連れしました」  
『そう。入っていいわよ』

「ここからはお二人の出番です。緊張せずに頑張ってください」  
背中を押され、ヴァーリと揃って「失礼します」と言ってから入った。

鮫島さんは後ろから見ているだけのようだ。

『……………』

中にいる皆と目が合ったが誰も言葉を発さない。

「……………どうかなさいましたか、お嬢様方」

「え、あ、いや、その……………お、思ってたよりも似合ってるじゃない」

『お褒めに頂きありがとうございます』

二人で一礼して感謝の言葉を述べた。

「紅茶をお入れいたします」

俺達がティーセットを運んでいき、一人ずつに紅茶を入れた。その最中も皆は静かに待っていた。

「談笑をされなくていいのですか?」

「い、今からしようと思ってたのよ!」

「ねえねえ! 今の空とヴァーリは執事なんだよね?」

「そうです。今日という日限定ではありますが精一杯務めさせていただきます。私共にして欲しいことがあれば何なりとお申し付けください、アリシアお嬢様」

『な、何でも……………お、お嬢様……………』

「じゃあね、じゃあね! ケーキをあくんして!」

『!?!』

「かしこまりました。はい、あくん」

ケーキを一口サイズに切り分けて、アリシアの口に運ぶ。

「あくん! うくん、美味しい!」

両手で頬を抑えて満足そうに食べていた。

「ちよ、ちよつとあんた何してんのよ!」

「鮫島さんに、出来るだけの要望に応えろと言われておりますので」「むむむッ！」

「それにあちらをご覧下さい」

「なによ……ってあかり!?!」

手で示した方にアリサが顔を向けると衝撃を受けた顔をしていた。

「そ、その……あくん……」

「あ、あくん」

本来ならヴァーリがするはずのことをあかりが代わりにしていた。

「もちろん、無理に命令する必要はどこにもございません」

「は、はい！ 私にもあくんして欲しいの！」

「わ、私も！」

「私にもお願いや！」

「私にもして欲しいな……」

「私にも当然してくれるよね？」

「かしこまりました」

「私には口移しでお願いするわ」

「かしこま——はい？」

「口移しよ」

愛衣は澄まし顔で同じことをリピートした。

「……それは流石に……」

「こいつ、平然と何言ってるんだよ！ 出来んわ！」

「あら、さつきは何でもしてくれるって言ってなかった？ ？だったのかしらっ！」

「限度というものがございしますので。それにはしたないかと存じ上げます」

「あくんも十分はしたないと思うんだけど違うの？」

「……それは言ってる。」

「そ、それは……何と言いますか……」

「何？ 言いたいことははっきりと言いなさい」

「愛衣、その辺にしておきなさい」

「ああ！ アリサが止めに入ってくれた！ 感動で涙が出そう！」

「……わかったわ。私にもあくんを頼むわ」

「かしこまりました。アリサお嬢様、助けていただきありがとうございます  
ございます」

「べ、別にあんたの為じゃないわよ……。愛衣のおふぎけが過ぎたか  
ら止めただけだから！ 勘違いしないでよね！」

ツンデレですね。あれ？ 俺にデレてるわけじゃないからツンツ  
ン？ ……ツンツンって何？

「分かっております」

とりあえず、一人一人にあくんをして命令は一通り終わった。

ヴァーリもいるのになぜ俺があかり以外やらされたんだ？

それから俺とヴァーリは色々なこと（ほとんど無茶ぶり）を命令  
された。手品をやれと言われれば、どこからともなく花束を出した  
り、歌えと言われれば、ヴァーリとデュエットをし、アリサが呼び寄  
せた恭也さんやシグナムさんと素手で戦わせられたり、ケーキを作れ  
と言われて作ったり、e t c……。

「あ、あんた達どんな無茶ぶりにでも応えるわね……」

「す、すごかったの……」

むしろ命令した側が疲れていた。

『執事たるものこの程度のことが出来なくてどうします』

『（カ、カツコイイ……）』

皆の無茶ぶりに付き合わされている内に、時間は夕方となった。

その日は解散となったのだが、今朝のニュースでここも危ないかも  
しれないので、俺達を送ってくれるらしい。

「あ、空はもうちよつとだけ執事ね」

着替えて、帰りの仕度をしようとしたらアリサがそう言ってきた。

「え、俺だけ帰してくれないの？」

「ええ。元々、今日一日執事でいてもらう予定だったから」

「もう少しだけお嬢様にお付き合ひしていただけないでしょうか？」

「……わかりました」

この後の予定を聞くと、アリサは習い事があるらしくそれに付いて  
行くことになった。

アリサの習い事はピアノだった。

その時に暇そうにしていた俺をみかねて、アリサが俺にピアノを触らせてくれた。

夢中になって弾いていたらアリサに驚かれた。

「前から思ってたけど、あんたってホントに万能よね……。勉強や運動できるし、私が結構練習してた曲すぐに弾けるし、執事の仕事はすぐ覚えちゃうし……。(その上優しいからモテまくりでファンクラブも出来てるらしいし……)」

「執事ですから」

「今執事関係ないでしょ！ さ、今日の習い事はもう終わりだから帰るわよ」

「かしこまりました」

車に乗り込み、バニングス家へと向かう。その後で鮫島さんが俺を家まで送ってくれるそうだ。

「今日は……ありがとう」

そっぽを向きながらお礼を言ってきた。

「……いえいえ、中々いい経験が出来ました」

「それなら呼んだ甲斐があったわ。あんたが暇なら……また執事をやらせてあげなくもないわ……」

「はい、その時はまたお願いします」

「フ、フン……よろしくして——ッ!？」

アリサが何かを言い掛けた時、車が急停止した。

「鮫島！ 危ないじゃない！」

「も、申し訳ありません！ と、突然人が現れたものですから……」

突然現れた？ 何か怪しいな……

「俺が見てきます。二人は中において下さい」

気になって車を出してみると、そこには倒れた老人が一人いた。近くには倒れた所為か老人の杖と思わしきものがあった。

このおじいさんが出て来たのか。普通に考えたら突然老人が出て来るなんてのはありえない……

ん？ このおじいさん、確か……。

「おじいさん、大丈夫ですか？ どこかお怪我はございませんか？へア  
リサ、未来さんに連絡して。多分、敵」

「へ！ 分かったわ」

「だ、大丈夫なわけあるか！ おかげで腰が痛くなってしまったわい  
！ アイタタタ……」

「申し訳ありません。お詫びに今から治しますね」  
トワイライト・ヒーリング  
聖母の微笑の光を腰に当てて治療を始めた。

「お？ おお！ よくわからんが段々痛みが引いて行く!？」

「これでもう大丈夫なはずです。本当にご迷惑をおかけしました」

「いや、もう気にしてはおらんよ。お前さんのおかげで助かったわい。  
最近の若者は年寄りには冷たいと思っていたが、そうでない者もまだ  
いるもんだな」

怪我が治って元気そうにしていた。

「……つかぬことをお聞きしますが、突然飛び出してきたのはどうし  
てですか？」

「わしが通ろうとしたら車が出て来たんじやよ。それ以外に何がある  
というんじや？」

「そうですね。……しかし、おかしくありませんか？」

「な、何がじや？」

「あなたが杖を持っているということとはそこまで早く動けるはずがな  
いんですよ。走るか乗り物にでも乗ってない限りは走ってる車の前  
に突然出るなんてありません。というか安全運転をする鮫島さん  
がそんなミスするはずありませんから」

「なッ!? わしを疑うというのか!？」

「ええ、そうです。この際だからはっきり言いましよう。あなたは敵  
です。——スタンド使いの宮田道影みやたまちかげさん」

「な、何故わしの名前を!？」

名前を言い当てると、酷く驚いた表情をしていた。

俺が知っている理由はもちろん「ラッセル囁告篇帙」で調べたからだ。

「執事ですから」

「執事関係なくない?」

俺にツツコんできたのは、先程アリサに頼んで呼んでもらった未来さんだった。

こんなにも早く来れたのは、近くにいたか、スタンドを使ってきたのだろう。

「まあ、今は良いや。それよりもアイツの能力は知ってるのかい？」

「調べた限りでは、ゲートを開いて別の場所に移動できる能力——『ディメンション・ウォーカー』っていいいます。最近の事件もこのおじいさんが起こしていたそうですよ」

宮田はその能力を使つて、色んな人をどこかに飛ばしたのだろう。変死体に関してはまだ別の犯人だった。そっちの方も出来るだけ早めに片付けたい。

「……なるほどね。どうやって調べてるか知りたいよ。『天国への扉』<sup>ヘブンズ・ドア</sup>よりも便利そうだ」

イフの能力は「自分が受けた攻撃に対して相手方の能力を身に付け反撃する」。

しかも厄介なのがより強化されるどころだ。

強化された能力使つて体が持つかは知らないけど、未来さんを見る限りその辺はどうにかなっているのかな？

「教えません。……あんまし良い能力でもないですし」

調べるだけ見たくない部分が出てくる。人間誰しも負の感情はあるから仕方のないことではあるのだが、見続けると危うく人間不信になりそうだ。

「そうかい。まあ、いいんだけどね。『イフ』！」

特に気にした様でもなく、イフを出してミサイルを撃った。

「小娘！ お前もわしと同じスタンド使いか！ ゲートよ開け！」

手を前に翳すと空間に穴が開き、イフが放ったミサイルが吸い込まれてしまった。

「これが奴の能力か。（時を止めて片付けたいけど、空君がいると使えないんだよね）」

ふむ、未来さんは時を止めて片付けたいんだろうな、きつと。ごめんなさい。

「あ、アイツ、どっかからさつき吸い込んだミサイル撃ってくるんで」「なんとなく予想していたよ。でも、そうなると近づけないな……」  
「なら、俺がサポートするんで、突っ込んで下さい。アバターよろしく」

『任された』

「へ？ ちょ、タンマ！ 心の準備が——！」

『んなの知らん！ ほらよッ！』

アバターが未来さんの首根っこを掴んで、野球選手の投球フォームを真似て投げた。

「うわあああああああッ！」

投げられた未来さんが宮田に向かって一直線に進んで行く。

「自分の攻撃をくらえ！ ゲートよ再び開け！」

宮田が再び手を翳すと未来さんの正面に穴が開き、先程撃ったミサイルが出て来た。

「アバター！」

『オラよッ！』

すかさず未来さんの前に入り、ミサイルをアバターに消してもらう。

「何!? ミサイルが消えただと!?!」

「驚いている暇は無いよ！ イフ！」

『了解シタ！ オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ……オラッ！』

イフが体から太い腕を二本生やすと驚いている宮田にラッシュを叩き込んだ。

「グアアアアアアアアアッ!?!」

宮田は数m吹き飛び、動かなくなった。完全に意識がなくなったよ  
うだ。

「終わったの?」

車から出て来たアリサが確認してきた。

「うん……はい、気絶しました」

いけないいけない。まだ、執事の仕事は終わってないんだから敬語

は使わないと。

「そう。なら、とつとと帰るわよ。早く車に乗んなさい」

「かしこまりました。未来さんはどうしますか？」

「僕はこいつから情報を奪ってから記憶を消すよ。先に帰って構わないよ」

「わかりました。お先に失礼します」

宮田のことは未来さんに任せ、俺はアリサにドヤされる前に車に乗り込み、バニングス家に向かった。

「すまないね、娘の我が儘に付き合ってもらってしまつて」

バニングス家に着くとアリサの両親が出迎えてくれた。桃子さんやプレシアさんのように若々しい人だ。

「いえ、貴重な体験をさせていただきました。お礼を言うのはこちらですよ」

「ハハハ！ 君は実に素晴らしい少年だよ！」

「本当にいい友達を持ちましたね、アリサ」

アリサの父親と母親が嬉しそうに微笑んでいた。

「ま、まあね……」

アリサはそれが恥ずかしくてそっぽを向いていた。

「やはり私の眼に狂いはなかった！ お前もそう思うだろう？」

「ええ、そうですね。彼が相応しいかと」

？ 何の話だろう？

アリサの方を見ても心当たりがないと首を横に振った。

「パパ、何の話？」

「ん？ ああ、そう言えば二人にはまだ言っていなかったな」

「それなら今言ってしましましょうか」

「それがいいな！」

『？ ？ ？ ？』

俺とアリサは二人だけで勝手に盛り上がっているので会話の内容が全く分からない。

「あの……そろそろ教えていただけじゃないでしょうか？」

「おお、すまない。実はね、アリサの婚約の話なんだがそれを――

「待ってよ！ いきなり婚約だとか言われても、私はまだ小学生よ！  
変な奴と結婚なんて絶対に嫌だからね！」

父親からの婚約話にアリサは怒りだした。お嬢様であるアリサならそう言った話は珍しくもない。明日奈も以前にそう言った話をしていた。

小学生のうちから婚約話を聞かされるのはどんな気分なのかな？

一応俺はシアやネリネ、リコリスの婚約者候補になってるけど、あくまで候補だから重く考えなくて済むから全く違うんだろうな……。

「アリサ、最後まで話は聞きなさい」

「で、でも！」

「いいから聞きなさい」

「……はい、ママ」

母親に窘められてアリサは最後まで話を聞かなくてはならなくなった。

「……ゴホン……それでだな、婚約の話なんだが彼にしようと思うんだ」

「え……パパ、それってまさか……」

アリサは父親の言いたいことが分かったのか確認していた。

「ああ、そうだとも。彼なら文句はないだろう？」

「ま、まあ……私は……」

アリサは途端に顔を真っ赤にして俯いてしまった。

俺はさっぱり分からないんだけど……とりあえず婚約の話は終わったよね？ 俺に視線が集まっているのは早く帰れてことだよね？

「えーっと、話は終わったようなので自分は帰ってもいいでしょうか？」

「そうだな。鮫島……いや、空君。今日は家で晩御飯はどうだい？」

今日のお礼を兼ねて」

「そ、そんなことしていただかなくてもいいですよ。送っていただくだけでも十分ですし」

あれ？ 帰れってことじゃないの？

「そう固いこと言わずに。今日は目出度い日でもあるんだからいいじゃないか」

バニングス家にとって目出度くても俺からすれば何でもないんですけど！

「家族が心配するのでこれ以上はちよつと……」

「それなら先程連絡したわ。ご家族は構わないだそうよ」

アリサ母いつのまに!?

「ですが……」

「あ、あんたは私といるのが嫌なの!？」

「へ？ 別にそんなことないけど……」

あ、敬語忘れた。でも、もう終わったっぽいし、いいか。

「じゃあいいじゃない！ 家でご飯食べていきなさいよー」

「むう……わかった。今日はアリサの家で晩飯をいただくよ。へ今日はご飯、アリサの家で食べます」

アリサ母連絡がしたけど、一応俺の方からも念話で龍神家にいる皆に伝えた。

「ふ、フン！ 最初から素直にそう言えばいいのよー！」

それブーメランだからね？ それに俺は困ってただけなんだけど。

俺はバニングス家で夕飯をいただき、今度こそ帰ろうとした。

「それでは今日は——」

「まあ、待て待て。もう少しくらい良いじゃないか」

アリサ父の顔が若干赤いから酔ってると思うな。

「こ、これ以上は……」

「あ、いつそのこと今日は泊まってしまいなさい。時間もだいぶ遅くなくなってしまいましたし丁度いいわ。アリサもそう思うでしょ？」

部屋にある時計を見てみれば九時を回っていた。

「そ、そうね。今日は泊まっていくのがいいんじゃないかしら。夏休みだしそのくらい構わないでしょ？ それに今まで何回も泊まった

ことあるんだから今更遠慮なんてすんじやないわよ！」

泊まったのは俺一人じゃなくて皆がいるときだけなんだけどね。うわー、周りの視線が痛い。

「はあ……わかりました。今日は泊まりますね」

誰にも聞こえないように小さく溜め息を吐いてから了承した。

「そうかそうか！ それは良かった！ もし断られていたらどうしようかと思っていたよ！」

それって俺を殺すってことですか!? こ、断んなくてよかった……。

風呂に入って借りた寝間着に着替えてから気が付いた。

「俺ってどこで寝ればいいんですか？」

「む？ それならアリサの部屋だ」

「……はい？」

「今日は客間があるとある事情で使えなくてなー、いやー非常に申し訳ないー」

全部棒読みで言われても説得力皆無ですからね！

「ほ、ほら、行くわよ！」

アリサに手を引かれてアリサの部屋に連れ込まれた。

力強くね!? って魔力強化した上にスタンド出してんのかよ！

抵抗する暇もなくアリサの部屋へと入れられ、ベッド上に放り投げられた。未来さんにやったことが別の人から自分に返ってくるとは思いつかなかった。

「って一緒に寝るの？」

「ッ！ そ、そそそそうよ！ 何か問題でもあるの!?!」

「え、無いけど」

「じゃあ、黙って寝なさい！」

「は、はい」

二人でベッドに横になった。

「……何か話なさいよ」

「さっきは黙って寝ろって言ってなかった？」

「ウグッ……うるさいッ」

俺は苦笑いして軽くアリサと話すことにした。夏休みの予定だったり、勉強の事だったり色々だ。親バカな両親のことも聞かされた。

「……スウ……スウ……」

気が付けばアリサは可愛らしい寝息を立てて眠っていた。ふと、手が温かいと思ったらアリサが俺の手を握っていた。それを見て思わず笑みが零れた。

俺も寝ますかね。

眼を静かに閉じて体を休めることにした。

翌日。家に帰ると、早朝だったため誰も起きていなかった。

「そんじやご飯作り始め——え？」

キッチンに入ったところで誰かに肩を掴まれた。振り返ってみると十香が俺の肩を掴んでいた。後ろには皆もいた。

「あ、おはよう。皆早起きだね。今からご飯いいいいいいいい痛  
いッ！ 何すんの!？」

肩が潰れそうなんだけど！ メキメキって音出してるんだけど！

「昨日、アリサの母親から電話があったのだ」

「そ、それが何？」

「空はアリサの婚約者になった、とはどういうことだ？」

「へ？」

何それ？ あれ、昨日のって……まさか、そういうことなの!？」

「一緒に寝たのは？」

「え、ああ、うん。って何で知ってるの!？」

「ほう、そうか。寝たのか。なら——」

「ちよ、待って！」

「問答無用だ！ 反省しろオオオオオオオツ！」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!？」

いつの間にか街の名物になった俺の叫び声が街に木霊した。

裁くのは俺達です！

裁くのは俺達です！

S i d e ???

矢に貫かれて不思議な力を得た日から、俺は矢について調べた。

最近噂になってる魔導師達がいるという『地球』とかいう管理外世界に行き、何人かを矢で貫いた。

調べて分かったことは、この矢に貫かれた生物は俺と同様に不思議な力を得る。

しかし、全員が力を得られるわけではなかった。力を得られなかった生物は死んでいったのだ。それからも矢で貫いたが、結局地球で力に目覚めたのは三人だけだった。

正確にはたくさんの奴が力を得ることは出来たが、その三人以外は俺をいきなり殺そうとしたり、逃げようとしたので殺した。

そして、俺に従順な三人のうちの一人、獅子釜動魔とかいう奴に、この力にスタンドという名前があることを聞かされた。

スタンド……いいねえ。この力で無能な上司をいたぶってやろうか？ いっそのこと管理局を自分の物にしちまうってのも悪くないな。……いや、今俺がいるのは『地球』だ。噂のガキンチョ魔導師を潰すか。

どれだけ優秀な魔導師だろうとスタンドに魔法は効かない。その特性と魔法があれば俺は最強になれる。

さあ、どうやってガキンチョ共を壊そうかねえ。

S i d e o u t

S i d e 空

アリサの婚約者に（勝手に）されてから一日が経ち、午前中ずかから電話があり、デートをして欲しいと言われた。俺の予定は特に忙しくはなかったのでそれを了承し、一時間後に駅前に集合することに

なった。

「よし、到着つと。すずかは……何ですとオツ?! もういる?!」

駅前植えられた木が作った日陰にすずかはいた。

これでも三十分前に着くようにはしてただけど、それよりも早く来るとは予想していなかった……。

「あ、空君！ おはよう！ 随分と早いね？」

「うん、おはよう。それから、その言葉はそっくりそのまま君に返してあげる」

早いのはどう考えてもあなたの方です。

「アハハ……家で時間が来るのを待ってたら居ても立ってもいられなくて、気が付いたらここにいたんだよ……」

「まあ、いいよ。遅れて時間が無くなるよりは全然マシだよ」

「ありがとう。……それで、どうかな？ 私の服装、変じゃない？」

すずかの今日の服装は赤い靴に白いソックス、青いスカートに黒のTシャツ、白い薄手の上着を着ていた。頭の後ろには、去年すずかの誕生日に皆で選んでプレゼントした、白い花の形をした髪留め。頭にはすずかの象徴ともいえる白いカチューシャがあった。

「問題無いよ！ というかすずかは元が良いんだから何着ても似合うと思うけど」

すずかだけじゃなくてなのは達にも言えることだ。服のセンスがあった方が綺麗に見える。でも多少のセンス無かろうがそれを覆すほどの美少女達なのだから。

「もうっ、そんなこと言っ……。（嬉しいんだけど、どうして恥ずかしげもなく空君は言えるのかな？）」

「デートの相手を褒めるのは基本です。それですずかは行きたいところはあるの？」

「えっとね、今日は水族館に行ってみたいなって思ったんだけど、どうかな？」

水族館。動物園と同じで俺が今まで行けていなかった場所だ。ドライグ達がいる状態で行ったときはほとんどの魚が白目をむき、凶暴な鮫——ホオジロザメでさえ目を合わせた瞬間に死んだふ

りをしていた。

『ドライブ達がいなくて丁度いいじゃない。初めての水族館行ってきなさいよ』

琴里の言った通り、今日はこういうことも予想してドライブ達を連れて来なかった。だから、問題なく水族館に入ることが出来るのだ。

「了解。それじゃ、行きますか!」

「うん!」

すずかに手を差し出すと、すずかは俺の意図を理解したのか俺の手を握った。それを確認してから二人で歩き出した。

今回はバスに乗って目的地まで向かう。目的地に着くまでに他愛無い話をして時間を潰すことにした。

「空君って進路とか将来何したいこととかかかって決めてるの?」

「とりあえず、高校までは行きたいな」

この間調べたら、駒王町と現在は女子校だけど駒王学園は存在した。管理局に入るよりかは、高校に行きたいと思ってる。

「え、高校? 大学じゃなくて?」

「将来なりたいものがある人は早い内から決められるんだろうけど、俺はまだそういうの無いから大学は学部とか学科の選択が大変そうかなって思ってた、その時になってみないと分かんないから」

それ以前に俺がいつまでここにいられるかが問題になってくるんだけどね。俺がしたことは神様も知ってるだろうし何もしてこないなんてことはないだろう。

「それもそっか……」

「すずかの方はどうなの?」

「私は……あの力を持つまでは工学系に進もうかなって思ってたんだけど……」

すずかの言うあの力とは、セイクリッド・ギア 神器や魔法、スタンド能力のことだ。

「別のことにも興味が出た、ってこと?」

「……うん。管理局でなのはちゃん達と一緒に働くことや、デバイス

を作ってみるのも悪くないかなって最近思い始めてるんだよ」

機械が好きなすずかの性格なら、ミッドチルダの技術に興味を持つてもおかしくないと思う。

「そっか。良いと思うよ、そういうの。決めるの大変だろうけど応援してるから」

「ありがとう」

お礼を言われたあと、すずかは話題を変えてきた。

「もう一つ聞きたいんだけど、中学生になったら部活とか生徒会に入るの？」

部活や委員会かあ。面白いのが無かったら作るってみるのもいいかも。

「中学？ うーん、それは学校次第。あ、そういえば聖祥は中学部から女子校になるから男子とは別の学校だね。だから小学校卒業したら、俺やヴァーリ、雄人は皆と会える時間が減っちゃうのか」

雄人の場合は管理局で会えるのか？ 働く部署が違ったりすると会えないのかな？

でも、一緒の家に住んでるフェイトやアリシアは家で会えるか。

「……………え？」

「ん？ もしかして知らなかった？」

遅れて反応が返って来たかと思えば、すずかはまるでこの世の終わりのような顔をしていた。

「う、うん……………今、初めて聞いた……………み、皆は知ってるかな……………」

何やら独り言をブツブツ言い始めたすずかはスマホで誰かとやり取りを始めた。しばらくすると俺の携帯に誰かからの連絡があった。俺もスマホを取り出して確認すると、LINEで作ったグループチャットにすずかからの連絡が来ていた。

すずかが送っていた先は俺達のグループだったのか……………

ちなみに俺達のグループというのは俺、ヴァーリ、フェイト、アリシア、なのは、はやて、あかり、アリサ、すずか、愛衣、雄人の所謂異能を持つ子供組がメンバー。

「さすが『聖祥の中学って男子と女子って別々なもの!』」

「なのは『にや!』 そうだったの!』」

「フエイト『それ本当!』」

「ヴァーリ『そうらしいぞ。俺もどこかで聞いた覚えがある』」

「アリシア『ええッ?!』 じゃあ、空やヴァーリと小学校までしか一緒に通えないの!』」

「はやて『私、そもそも皆と一緒に学校に行ったこともないんやけど!』」

「あかり『はやての場合は仕方がないでしょ? それに、脚が動かせるようになって、」

「夏休み明けからは一緒に通えるんだからね。でも、中学は別」

「なのかあ……残念だね』」

「愛衣『空君はこの学校に通うの?』」

「空『うーん、候補としては近くの学校だと思うよ』」

「アリサ『パパに頼んで共学にしてみようかしら』」

「明日奈『私もお父さんに頼んでみようかな……』」

「雄人『お前らが言うところじゃレになんねえよ!』」

それからグループチャットでの会話が続き続いたが、目的地に着いたので適当なところで切り上げた。降りたバス停ですずかの顔を見たが、先程のことが余程衝撃だったのか、落ち込んでいた。

「はあ……色々とシヨックだよお……」

「それは仕方ないことだよ。それに今生の別れじゃあるまいし、そこまでの事じゃないと思うんだけど」

「だって修学旅行や文化祭、体育祭と一緒に参加できないんだよ? シヨック以外何物でもないよ」

「あー、そうか。一緒の行事が無くなるのは寂しいな。」

「そしたら、文化祭や体育祭は互いの学校に行ってきた、修学旅行は場所や日取りが違おうと会えないけど、もしかしたら偶然に偶然が重なって会えるかもよ?」

「そうだね……。 (確かにそうなんだけど、それ以上に私が心配してる」

のはこれ以上フラグを建てないかが心配なんだけど……無理だろうな……)」

『暗い話題はそこまでにして、さっさと中に入んなさい』

「(了解) ずずか、中入ろうよ」

琴里に指示を促されたので、中に入ることにした。

水族館の中は平日だったのにも関わらず、カップルらしき男女のペアがチラホラ見えた。

「ここってデートスポットとしても有名なのかな？」

「そうみたいだね」

今度は十香達とも行きたいな。最近、一緒にいられる時間が少ない気が……全然しないや。

お風呂やベッドに侵入するわ、暇さえあれば抱き着くわ、向こうの方が年上なのに甘えてくるなんてこともあるのがほぼ毎日だ。特訓に関しては精霊の力と神器を合わせること——ヤハウエが龍精霊化と名付けた——を追加されて消耗が激しい。

まあ、一撃一撃が強すぎるから家の中じや使えなくて、龍精霊化して体に馴染ませることに専念してるんだけどね。

とりあえず、現段階で維持出来る時間は龍精霊化するだけなら30分。戦闘するなら10分が限界といったところだ。

考えるのはここまでにして、ずずかとのデートをしないと。

『水族館は暗いからはぐれないようにちゃんと手を握ってなさいよ』

「(うん、わかってる。今度琴里達も一緒に行こうね)」

『え、ええ、その時は楽しみにしてるわ』

インカムから嬉しそうな声を琴里が発したような気がしたが、館内は電波の届きが悪くてそう聞こえたのだろうと思ってすぐに忘れることにした。

「ずずか、はぐれないように手握ろっか」

先程までも繋いでいたが、バスに乗った時に一度離していたため、再び手を繋ぐために差し出した。

「うん♪」

ずずかが俺の手を取り、近くの水槽から眺めることにした。

「お魚さん綺麗だね」

「うん、そうだね。えーっと、ここは熱帯魚中心のコーナーみたいだね。今見てるのはエンゼルフィッシュ系の熱帯魚みたいだよ」

「さすが水槽の下にあるプレートを見ながら魚の種類を教えてください。読書家であるすずかは自分の知ってる知識も加えて説明してくれましたので、魚達を見るのが一層楽しくなりました。」

それから、珍しい古代魚や、深海魚などを見た。海の中にいるように感じる透明なトンネルをくぐった時はいろんな魚が寄ってきて周りが騒がしくなったのはいい思い出だ。

「そろそろお昼にしない？」

「賛成！でも、近くに食べるところあった？」

「フフフ、その辺は抜かりないよ。この水族館内にはレストランがあるんだよ。しかも、普通じゃみられないようなレストランで人気なんだって」

「普通じゃ見られないレストラン。これは興味が湧いてくるね。」

「へえ、気になるね！」

「すずかに案内されてレストランに入ると、俺は驚きの声を上げた。」

「レストランの中でも魚が見れるんだね！」

「そう、この水族館内のレストランでは食事をしながらでも魚を見ることが出来るのだ。俺達が座る席付近にも魚の入った水槽が用意されていた。」

「さてさてメニューは……流石に魚介類の料理はないね」

「ここでその種類の料理を食べるって微妙だからね」

「魚を見ながら魚を食べるといのは中々に酷なことだ。水族館側もそれを配慮して魚介類は使わないようにしたのである。」

「注文をした後、先程と同じように世間話をしてると未来さんから連絡があったので、すずかに断りを入れてから電話に出た。」

「もしもし、未来さん。どうかしました？」

『ああ、実はさっきスタンド使いと遭遇してね、倒してきたところさ。君がすずかちゃんとデートしてる間にね。君がデートをしている間にね！』

何故か厭味つたらしく二回同じことを言われたが、とりあえず――

「門矢未来！ 貴様！ 見ているなッ！」

恐らく『ハーミット・バーブル隠者の紫』をテレビか携帯にでも繋いで覗いたんだろう。

「何そのポーズ？」

携帯電話に向かって変なポーズをとると、すずかに呆れられながらツッコまれた。

「ごめん、なんかやらないといけない気がして」

「そ、そうなんだ……」

「未来さん、そのスタンド使いの名前って分かりますか？」

『みなかみはるさめ名前は水上春雨。スタンドは―― なッ!? 体が水になって溶

けた!?!』

「今の反応からして……逃げられたってことですか？」

『ああ、そうみたいだ。ごめん。すぐに追い掛ける!』

それだけ言い残して、そこで電話は終わった。

一旦情報を纏めようか。

水上春雨。

ミッドチルダから来た奴に矢で貫かれてスタンド使いになった人。

年齢は16歳で都立海鳴高校の二年生。

性別は男。身長は170 cm。体重65 kg。

特技は水泳で水泳部に所属。全国大会に小中高で出ているほどの水泳選手。

性格は明るい方で友達が多く、学校では割と顔が広い。家庭や友人関係は良好。

年齢〓彼女無し。

学力は学年で真ん中程度。

容姿は黒髪黒目の東洋人に在り来たりなもので、自他共に普通と言っている。

スタンド名：『ウォーターライフ』。

能力：水を操る能力。生物に触れば水分を奪うことが可能。

また、水が大量にあれば、変幻自在の水で出来た生物を作ること

出来る。ただし、基本的には自分の体積と同じ量の水が無いと使えない。

【破壊力―D／スピード―C／射程距離―A／精密動作―B／成長性―C】

以前、二亜に調べてもらった情報はここまでだ。余計な物もいくつがあるが、広めたりする気は毛頭ない。

この人を放置してたのはスタンド能力に目覚めたものの、殺人や暴力沙汰を起こしていない為放置していた。ただ、能力で女子更衣室の覗きをしていたみたいで、今回はそれを運悪く未来さん見つかかり戦闘になったがすぐ倒された。体が溶けたと言っていたので、倒したのは能力で作った分身体ということだ。本体はまた別の場所にいる。

「空君」

「うん、わかってる。ご飯食べたらず探そうか」

注文していた料理が来たので、急いで食べて水族館を出た。体を魔力強化しながら走ったので、数分で目的地の学校に着いた。

「今回の人は水を利用するんだよね？」

「そうだね。だとすると水が多い場所にいると思うな」

「覗き魔なら学校のプールが一番じゃないかな？」

「俺もそう思う。能力に使うための水はプールがあるから、部活が終わった後に居残り練習でもして覗いてると思うな」

「最低！ そんなの許せない！」

うーん、いくら人を傷付けていないとはいえ、犯罪であることに変わりはないか。放置してたのは不味かったかな？ ……でも、スタンドの相性が悪いんだよね。アバターはスタンドに対して最強と言ってもいいくらいの能力があるけど、流石に複数で攻撃されると防ぎきれない……と思う。実を言うと、その辺のことを試したことないから、あくまで俺の推測でしかないんだよね。

「あ、あの人だ。水上春雨は」

俺達は相手にバレない位置で様子を窺っていると、何やらブツブツ呟いていた。

「クソツ、俺の楽しみを邪魔しやがってあの女！ 殺すなんて出来ない

いが、少し痛い目にあつてもらうしかねえみたいだな」

あの女……あ、未来さんか。相変わず女と間違えられるんですね。あんな格好してれば当然……かな？

「どうする？」

「うーん……あ、いいこと思いついた。ちよつと耳貸して」

相手に俺達がいることをバレないように、すずかの耳元で作戦を伝えた。伝え終えるとすずかの顔が真っ赤で心配になったが、大丈夫だと言われてそれ以上は気にせず作戦を開始した。

「こんにちは、お兄さん」

「お？ 何か用か？」

小学生の俺が高校にいることを気にすることなく気さくに聞きました。

「お兄さんって水泳部の人だよね？」

「おう、そうだけ！」

「そっかあ。じゃあさ泳ぎを見せてもらえないかな？ 高校生の泳ぎを近くで見たいんだよ」

「そんなのお安い御用だけ！ 見てな！ 俺のふつくしいバタフライを！」

水上さんは俺の頼みを快く引き受けると飛び込み台に立ち、すぐさま飛び込んだ。

おお！ これは速い！ 伊達にふつくしいと言うだけのことはある！

水上春雨の泳ぎは素人目から見ても綺麗だとわかるくらいに見事なバタフライだった。

俺が純粹に驚いている間にあつという間に100mを泳ぎ切っていた。

「どうだ！ 凄かっただろ！」

「うん！ すごい綺麗で速かった！」

「ハッハッハッ！ そうだろうそうだろう！ これでも全国大会に何度も出てるからな！ アレぐらい当然だ！」

「全国にも出てるんだあ〜！ ホントにすごい人なんだね！ でも覗

きはダメだと思っうな！」

「もつと褒めてくれていいんだぜ？ 何なら他の泳ぎも……………ん？  
今何て言った？」

「覗きはダメだと思っうなって言っただよ」

まあ、放置しておいてホントに今更な話なんだけどね。

「ツ！ テメエツ、どうしてそのことを知ってる!？」

「どうしてだろうねー？」

「だ、だけど俺がやったって証拠はどこにもないぜ？ この能力が見えるのはスタンドを持つ奴だけだからな！ つまりそれが見えない警察は俺を捕まえることが出来ないし、裁判所は俺を裁けない！」

確かにその通りだ。残ってプールにいるだけなら覗くなんて不可能だから、彼が犯罪をしただなんてことは誰にも分からない。

「あとは俺がお前の口を封じればいいだけだ！ 『ウォーターライフ』！」

しかし、何も起こらない。

「何で水の分身体が出ねえ——んなツ!? プールが凍ってるだど!？」

プールの方に振り返ってみればプールの全体が凍っていた。

凍らせた犯人はもちろん、

「これであなたは能力が使えませんね」  
すずかだ。

「チツ、仲間がいたのか！ こうなったらー！」

水上さんが逃げるように走り出した先にあるのは体を洗うためのシャワーだった。あそこから水を出して能力を使うつもりだろう。

「これで俺の勝ち——」

「いいや、君の負けだよ」

シャワーと水上さんの間に次元の裂け目が出来、そこから未来さんが現れた。

この間の宮田さんのスタンド能力をイフでコピーしたのか。

「なツ、テメエはさっきの！」

「これで完全に詰みだね。さあ、大人しくしてください」

「はっ！ 嫌だね！ さつきも言ったろう？ 誰も俺を裁けないってな！」

投降を呼びかけたが、その意志は皆無だ。

「そうだね。普通の人には裁けない。俺達があなたを捕まえて警察に突き出して説明したところで信じてもらえるはずがない」

「おう、そういうことだ。だから——」

「でも断る」

「なにッ!？」

「裁判で裁けないって言うんなら俺が……俺達があんたを裁く！ アバター！」

俺のスタンド、アバターを呼び出す。

『ようやく出番か。待ちくたびれたっての』

「ふ、増えた!？」

水上さんは俺とスタンドであるアバターが瓜二つなことに驚いていた。初見の人からすれば驚くのも無理はないと思う。

「三対一で勝てると思う？」

余裕の笑みを浮かべる未来さんが訪ねた。

「クッ……ここまでか……。はあ……降参だ、降参。流星にこれ以上は無理だ」

長い溜息を吐いてから両手を上げて降参の意思表示をした。

「やっと降参かい？」

「ああ、これ以上は抵抗しない」

「そうかい。——じゃあ、歯を食いしばれ」

「……………え？ 何で？」

突然未来さんが言ったことに水上さんだけじゃなくて俺やすすかも首を傾げた。

「だって、まだ君の事裁いてないじゃないか」

「あ、そっか……いやいやいやい！ 待って！ 俺降参したよね!？」

「ああ、そうだね。確かに君は降参を宣言した」

「ならこれ以上何かするのは——」

「僕は降参したからといって裁かないとは一言も言ってはないよ」

うわー……これは酷……くはないかな。覗きしてたんだから正當な報いだよね。

「というわけで……オラオラオラオラオラオラ……オラッ！」

「……で、悪いんだけどプールが凍ってるの何とかしてくれねえか？

明日も使うからこのままだと使い物にならない」

未来さんにオラオラを喰らい、体中に青いあざを作った水上さんがお願いしてきた。

「分かりました。アバター」

アバターの力で、凍りついたプールの水が元に戻る――

――ことはなかった。

ガラスが割れるような音がした後には、プールの中にあつたはずの水は無かったのだ。

――まるで、初めから無かつたかのよう。

「……………え？」

「消えた…………？」

「空君やり過ぎじゃないかい？」

「いや、俺にも何が何だか！ アバター、どういふこと!?!」

『ワリ。やり過ぎちまつた』

やらかした本人は悪びれた様子もなく軽く謝った。

「軽いなオイ！ って説明してくれ！ 何で凍っていたプールの水が消えたんだ！」

『それは――』

アバターは一度深呼吸してから告げた。それは誰もが絶句するほどの理由だった。

『次回明らかに!』

最後のスタンド使いです！

最後のスタンド使いです！

S i d e 空

すずかとのデートを終え、自分の部屋でアバターを出し、今日の事の説明を求めた。

「……で、アバター。今日のアレはどういうことか説明して」

俺の言う「今日のアレ」とは、アバターの能力のことだ。

俺が知る限りではアバターの能力はスタンド能力の無効化だったはずだ。

だが、今日は凍っていたプールの水が溶けるのではなく消えた、ということは無効化の能力じゃないということになる。

『……………ま、今更言い逃れなんて出来ないしな、大人しく説明するっての』

長い沈黙の後にようやく口を開いた。

『俺の能力は無効化じゃない。——消滅の力だ』

消滅……消す力。何となく予想はしてたけどやっぱりなのか……。

「でも、それだと辻褃が合わない？ 無効化じゃないなら、シィちゃんが改造された時はシィちゃんは消えなかったし、未来さんに時間を止められたのだから……」

『動物園の時は目覚めたばっかでそこまでの力が無かったから偶々あのライオンに掛かったスタンド能力だけ消すことが出来た。時を止めるのが効かなかったのは、止められた時間を消したからだ』

そっか、アバターはスタンド能力が掛かったものなら消すことが出来るのか。それが時間だとしても。

「説明ありがと。消滅の力は加減さえすればスタンド能力だけ消すことも出来るんだよね？」

『ああ、その通りだ。今日は加減を間違えて全部消えちゃったけどな、ハハハハハ』

「いや、笑い事じゃないから！ ……あれ？ アバターの能力が無効化じゃないなら、未来さんに能力コピーされてるんじゃないの？」

『それは無いから安心しろ』

「どういうこと？」

『簡単なことだ。一時的に覚える能力を消した。だからあいつは俺の力を覚えられない。いやー、あんどきは加減するのに大変だったな。俺、超頑張った』

一時的に消すことも可能なのか。意外と便利……でもないや。スタンド関係にしか使えないんだったらちよつとなあ。

そこで話を止めて、残りのスタンド使いについて考えることにした。

残りはただ一人、ミッドチルダで矢を拾った奴だ。そいつがあの人をスタンド使いにした張本人。

「最後の一人はこの近くにいるんだよね。明日にでも倒さない」と

本当ならもつと早く倒すべきなんだけど、こつちがスタンドでの戦闘に慣れてなかったので行くことが出来なかった。

『それから矢の破壊だな。あれで死んだ奴もいるだろうからこれ以上そうならないようにも破壊すべきだ』

スタンドを発現させる矢。二亜の〈囁告篇帙〉で調べようとしたんだけど、何故ミッドチルダにあったか分からなかった。

未来さんが来た所為？ いや、それはないな。未来さんが来る前にはすでに矢は存在してたみたいだから。

だとすると、有力なのは俺がいる所為……かな。

『最後にこれだけは言っておく。矢には絶対に触れるな』

一人で悩んでいたら、いつになく真剣みを帯びた顔でアバターがそう言ってから消えた。

……矢に触れるな？

その言葉を聞いてから妙な胸騒ぎを感じるようになった。

「それじゃ、未来さん。探しましょうか」

「ああ。最後のスタンド使い、イグラーズ・ガランをね」

朝早くに未来さんと連絡を取り合い、集合してから隣町に乗り込むことにした。

「なのはちゃん達は誘わなくてよかったのかい？」

隣町に向かう途中で未来さんが聞いてきた。

「……今日はもしかしたら子供なのは達には辛いものがあると思います。だから呼びませんでした」

ちなみにヴァーリはその辺大丈夫だろうけど、朝に弱いから呼ぶことはしなかった。

「おいおい、いくら転生者とは言えそういう君も子供だろう？」

「俺は……多分大丈夫だと思います」

確証はないけど何となく大丈夫だと思う。本当はこういうのに大丈夫になつてはいけけないんだろうけど。

「君がそう言うならそれでいいさ」

「……はい」

二人でしばらく歩いてしていると目的地に着いた。今は使われていない廃工場だ。

「あいつはここに来るんだね？」

「はい、そうなるように仕組みました。あと五分できます」

イグラーズが来るまで工場の隅に隠れることにした。

そして、五分後——

「ここに何かあるのか？」

イグラーズ・ガランは来た。

「で？ どうする？」

「すぐ終わらせます。(六喰、力借りるね)」

『構わんのじゃ』

「——〈神威靈装・六番〉」

六喰の霊装を纏い、〈封解主〉を発顕する。

「〈封解主〉——【開】」

空間に孔を開け、男の背後に鍵を出す。

「——【閉】」

鍵を回し、イグラーズのスタンド能力に関する記憶を全て封印し

た。

「これで終わりですね」

「うーん、僕いらなかったような……」

「いえ、未来さんには『オーバーヘブン』でこの事件が無かったことにしてもらいます。未来さんはデメリット無しで使えるんですよ?」

「そうだけど……説明したっけ?」

「してませんよ。調べたんです」

「うわ、何そのチー——ッ!? 矢が!」

イグラーズの服の中から矢が飛び出ると、イグラーズの体に突き刺さった。

「ガハッ!」

お腹を貫かれ吐血した。だが、貫かれた傷はすぐに塞がった。

スタンド使いが矢に貫かれたってことは……スタンドが強化されるって事か! しかもイグラーズから感じる魔力が急激に増えた!

「これはマズイぞ……! 早く止めないと!」

「分かってます! アバ……!?! ……!?!」

「そ、空君の声が出てない!? 一体……!?! (僕もか!)」

こ、声が出ない!? アイツのスタンド能力!? でも、調べた時はこんな能力じゃなかったのに、どういうことなんだ!?

急に声が出なくなったことに狼狽していると、イグラーズがこちらを向いた。

「へえ……お前らもスタンド使いか。しかも、そっちの金髪は魔力持ち。いいねえ、潰し甲斐がありそうで」

スタンドの記憶があるということは六喰の力がさつき矢に貫かれた時に消されたようだ。

「(アバター、俺と未来さんに掛かってるスタンド能力消して!)」

『分かってる』

アバターが俺と未来さんに触れると、声が出るようになった。そして、アバターを出したことによって強制的に霊装が消えた。

「あ? スタンドの能力を消したのか? ハッ! お前の魂頂いて俺の力にさせてもらおうぜ! (あのスタンドが出た途端に魔力を感じな

くなつた……?）」

魂を自分の力にする? アイツの元々の能力は魂を壊すスタンド『ソウルデーモン』だったはず。まさか……矢の所為で力に変化が起きたのか? さっきの声が出なくなるのも他のスタンド使いの技だったのを殺して奪ったってことか!

「これでも喰らえー!」

イグラーズが地面を強く叩き付けると、地面が隆起して岩の杭が飛び出してくる。

また別のスタンド能力!

「アバター!」 「イフ!」

『ああ!』 『任セロ』

アバターが岩に触れて粉々にし、イフは口からミサイルを出して木っ端みじんにした。

「キリがない……」

「おかげで近づけやしない」

防戦一方であるものこのちらは相手の攻撃をすべて防いでいる。見たところ、イグラーズは力を同時には使えないようだ。

「未来さん、援護お願いできますか?」

「……分かった。道は僕が作る。背中は任せてくれ」

「それじゃあ、スリーカウントで行きます! 3……………2……………1……………0!」

0と同時に走り出し、イグラーズに向けて真っ直ぐに向かう。

「バカかテメエ。そんなのやって下さいって言ってるようなもんだぜ?」

イグラーズは俺を嘲笑い更なる杭を地面から出し、ありとあらゆる方向から攻撃してくる。

「空君はやらせないよ! イフ!」

俺に襲い掛かって来たすべての杭をイフが機関銃やミサイルで粉砕する。

「チツ! だったらこれならどうだ!」

今度は指を弾くと大音量のノイズが頭に響く。頭が割れそうにな

痛みに耐えきれず、その場に蹲ってしまおう。その上、イグラーズがバインドで俺を空中に縛り上げる。

「アツ……ガツ!？」

音が響くのは空気があるから！ それならその空気を消せばいい！

アバターにすぐにノイズの響く空気を消してもらおうが、バインドで動きが封じられている。

「これで止めだ！ ソウルイーター！ 奴の魂を喰らえ！」

男の背後から死神が持つような大鎌を持った巨大な古びた人形が現れた。傍から見ても不気味としか言いようのないスタンドだった。

コイツがイグラーズのスタンド！

人形が大鎌を振り上げ俺の首を刈ろうとしてくる。アバターを動かそうにもバインドで俺が動けない所為か、アバターも動けないでいた。このままではアイツに魂を刈り取られ、他の人が死ぬ。

「アバター、俺の中に戻って！」

アバターが消えると俺の中に力が戻るのを感じる。

「ブーステッド・ギア  
バランスブレイク赤龍帝の籠手、禁手化ッ！」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!》

《BoostBoostBoostBoostBoost!!!!!!!!》

即倍加をして無理矢理バインドを引きちぎり、人形の大鎌を紙一重で躲した。

「なッ!？」

完璧に決まると思っていたイグラーズは余裕そうにしていた顔を驚きで一気に豹変させた。

「ま、まだだ！ やれ！ ソウルイーターッ！」

人形が大鎌を乱暴に振り回して俺の首を狙ってくるのを倍加して躲す。攻撃の最中に砲撃やバインドを放ってくるがブレイブに防御魔法を出してもらいすべて防ぐ。

……そろそろかな？

「空君に夢中になり過ぎじゃないのかい？」

「て、テメエー！」

俺に攻撃している間に未来さんは完全にノーマークだった。その隙を突いてイグラーズの背後に回り込んでいた。

「ソウルイーター！」

急いで人形を未来さんに向かわせるがそうはさせない。

「アバター！ アイツのスタンドを消せ！」

再びアバターを出した為、バランスブレイカー禁手が解除された。そのことを気にする間もなく、アバターに命令を出した。

「消えろ！ 木偶人形が！」

アバターによって殴られた人形は、アバターの能力によって光の粒子になった。イグラーズがスタンドを出すことはもうできない。消滅の力でこの世界から消え去ったのだ。

「これでお前は戦えない。——殴られる覚悟は十分か？」

怯えるイグラーズを無視してアバターとスタープラチナの二体の全力高速ラッシュをイグラーズに叩き込んだ。

「さてと、こいつはもうスタンドは使えないから記憶を封じるだけでもいいかな」

「そうですね。あつ、その前に矢を回収しないと」

「これ以上増やされても困るからね」

俺はアバターに触るなど言われているので未来さんに頼んだ。

未来さんがイグラーズの制服をまさぐり、数秒ほどで矢は見つかった。

「よし、イフ——また光出した!？」

イグラーズの時と同じように矢が突然光出し、俺に向かって飛んできた。

俺と未来さんの距離は1mも離れていなかったので躲すことが出来ない判断し、腕で防ぐことにした。

矢は俺の腕に刺さる程度で止まり、光が収まった。  
すぐに矢を抜きさろうとしたところで頭に大量の映像が流れてきた。

「あ、頭が割れそう……！ さつきの比じゃない……！ なに……これ……？」

未来さんが叫んでいるようだが上手く聞き取れない。徐々に視界がブレていき限界が来て意識を失った。

S i d e o u t

S i d e ???

真つ白な空間に一人の少年が死人のように眠っていた。年は高校生ぐらいに見える。

「……………ツ……………？」

少年は突然何かに強制的に叩き起こされた。

眠っているところを叩き起こされて若干不機嫌そうだが、寝ぼけた眼をさすり周りを見回した。

「……………？ ————「ここ、どこだ？」

青空のように澄み渡った蒼い眼を何度も瞬かせ、少年は自分以外誰もいない空間でそう呟いた。

S i d e o u t

## 閑話 目覚め

閑話 目覚め

Side???

自分の見たことのない空間で目が覚めた少年は、ベッドから起き上がり、軽く伸びをした。長く眠っていたのか、体のあちこちからポキポキと音が鳴った。

「うーん、さつきまで長い夢を見てたような……?」

不思議な感覚が頭の中にあるが、どうにも形容し難い。いまいはつきりとしないのである。

しかし、数秒考えて答えが出ないと思ったのか、今現在自分が置かれている状況について整理することにした。

「ここは……うん、俺の記憶には無いね。周囲に人の反応は……無しか」

ぱつと見で、ここは自分の知らない場所だと判断した。

「天井も壁も真っ白。変わった部屋だ」

少年は次に部屋を物色し始めた。何か手掛かりになりそうなものを見つけるためだ。

「とりあえず、こんなものか」

見つかった物はどれも変な物ばかりで小物が多かった。

白い指輪、二巻目だけある漫画、反時計回りの時計、ウサギのパペツト、赤いリボン、金色の小さな鍵、ハロウインの飾りつけのされた姿見、二つを組み合わせると8の字になる橙色のアクセサリ、女性アーティストのCD、きな粉パンの抱き枕などがあった。

「二貫性がまるでないな！ こんなじゃ手掛かりにもならないっての！」

他にも赤い宝石やフェレットの人形なども見つかったが先程と同じようにさっぱりだ。

「はあ……はあ……はあ……何だよこの部屋。よくわかんないモノばっかだな……」

少年は探しつくしたのだが、最後まで手掛かりになるようなものは

一つもなかった。

疲れが出たのか、少年はベッドに倒れ込み天井を見上げた。

「とういか……俺ってどうなったんだ？ 何でこんなところにいるんだ？ それから——」

一旦、頭を休めると次々と疑問が出てくる。部屋の物色に夢中でその辺りのことが頭から抜け落ちていたようだ。

「俺は確か……ああ、そうだ。——を止めるために……で、ここは知らない部屋だから……もしかして死んだのか？ だったら、これが死後の世界ってやつなのかな？ 天国とかあるわけじゃ……あ、天界なら行ったことあるか。じゃあ、ここは地獄……なわけないな。俺が聞いた話じゃこんな感じのとこじゃないって言ってたしな。うん、さっぱりわからん！」

結局、ここがどこなのかは分からず仕舞いだった。それがわかった途端に少年は暇になった。この部屋を出ようにも出入り口である扉はないし、窓はあるが不思議な力が働いているのか一向に開きそうにない。起きてから時間もそこそこ経っているというのにお腹が空く様子はない。幸いっと言っていいのかテレビと何冊かの小説が置いてあるが、それに飽きるのも時間の問題だ。

「ま、いいか。まずはテレビでも見ますか」

この空間でテレビが映るのは甚だ疑問だが、少年は試すだけ試してダメなら本でも読むことにした。

「お、付いた。あれ？ ……この映像……」

テレビが付いたことに驚いたが、それ以上にテレビに映った映像に更に驚くことになった。

少年が見ている映像は自分にそっくり——生き写しとっていいほど——の小学生ぐらいの少年の日常だった。

複数の女の子に囲まれアタフタしたり、その中の誰かとデートをしていた。時たま誰かを助けるために戦っていたりもしていた。

「何か……俺が見ていた夢の内容に似てる気がする……？」

## 全力勝負です！（前半）

全力勝負です！

S i d e 空

「……………」

目を開けるといつもの見慣れた自分の部屋の天井が目に入った。時計を見れば、いつもよりちよつと早めの時間に起きていた。大きな欠伸をしてからベッドから起き上がると、体に違和感を感じた。

……………いつもより体が軽い？

ああ、そう言えば昨日、イググレース倒して……………倒して……………どうなったんだ？

未来さんと一緒に倒したことは覚えている。でもその後になんになったのかの記憶が無い。そもそもどうやって帰って来たのかも覚えてないのだ。

あ、ドライグ達なら知ってるかな？

「昨日、俺に何があったか分かる？」

『お前の腕にスタンドを目覚めさせる矢が刺さった。そして気を失った。……………覚えていないのか？』

ドライグが答えてくれたが全く身に覚えがない。

「うーん……………ま、いつか。体に問題はなさそうだし」

『だ、だが、今のお前は……………』

アルビオンが心配そうな声を上げるが異常は無い。それどころかいつもよりも体の調子がいいのだ。過去一番といってもいいくらいに。

「大丈夫だって。さ、ご飯作る……………前にまずは顔洗わないと」

自分の部屋を出て、洗面所に向かう。

冷たい水が夏の暑さを和らげてくれて気持ちいい。

今度、海かプールに皆で行ってみよう、なんてこと洗いながら思った。

「夏場に水を浴びると気持ちいいね」

顔を洗うのが終わり、タオルで吹き終わった顔を鏡で見て、俺は目

を見開いた。

「……………え？」

自分の眼がおかしくなったのかと思い、もう一度顔を洗い鏡を見る。

しかし、問題はなかった。いつもの自分の顔がそこにはあった。

気のせい……だよ？ 俺の髪が黒色じゃなくて金色なわけない。

アバターみたいに角なんてあるはずがない。

でも、違和感が——

《マスター、大丈夫ですか？》

「へ？ あ、うん、大丈夫大丈夫！ いつも通り——ッ!？」

《マスター!》

水を一杯飲もうとしてコップを握った瞬間に割れた。自分では軽く握ったつもりだったのにそんなに力が入ってしまったのだろうか？

《マスター、お怪我はありませんか？》

「う、うん、無いよ。あーあ、やつちやった……。片付けないと……」

はあ、と溜め息を吐きながら割れたコップを片付けた。

それから俺の災難は続いた。

朝ご飯を作るためにフライパンを使おうとしたら取っ手の部分が歪んでしまった。

軽くぶつかったただけなのにその部分が凹んだ。

他にも色々あったのだが、どれも同じように壊してしまうことがほとんどだった。

「さつきから五月蠅いわよ。一体誰がこんなこと……空？ あなた何して……というか目が覚めたのね!？」

俺が食器や家をボロボロにしている音が聞こえて目が覚めたのか、琴里がキツチンに入ってきて来た。そして、俺をみるなり駆け付けて体の至る所をまさぐってきた。

「え、ちよー！ 琴里!？」

「ど、どこもおかしい所はないわね。良かったわ……」

俺に異常が無いことを確認すると、琴里は心の底から安堵したかの

ように息を吐いた。

「それにしてもこれは一体……?」

「えーっと、何か俺が触ったら簡単に壊れちゃって……それで――」

「あーッ！ ソラ！ 起きたのだな！ 本当に心配したんだぞ！」

琴里に、何があったかを説明しようとしたところで起きてきた皆がぞろぞろとやって来た。

「お、おはようございます。あ、そうだ。朝ご飯なんだけどき、リニスに今日は頼んでもいい?」

「え? ええ、それぐらい構いませんよ。というか空がいつ起きるか分かりませんでしたから、元からそうするつもりでした」

「そつか。それじゃあ頼んだ」

朝ご飯はリニスに任せてリビングで寛ぐことにした。

「いただきます」

『いただきます』

朝ご飯が出来たので席に着き、手を合わせ食膳の挨拶を済ませて箸を――

「……あ」

パキッと小さな音がした手元に目を向ければ――箸が折れていた。

「その箸って最近買ったばかりじゃなかった?」

「不良品でしょうか?」

「疑問。それよりもこの家が荒れているように見えるのは気のせいでしょうか?」

「あ、それ私も思ったし。それにさっきまでうるさい音まで聞こえたんですけど」

「そうですね。キッチンのゴミ箱に多くの割れた食器がありました。それが関係しているのでは?」

「あー……その、実は――」

家の中が荒れている原因が自分にあることを皆に話した。

「――で、今朝の騒動は空が原因ってことね」

「うん。自分でもよく分かってないんだけど……ドライブ達は俺に何か変化あるように感じる?」

『分からん。……ただ』

「ただ?」

ドライブグの言葉には続きがあつた。

『お前の心の中に扉が現れた。開けようとしたんだが俺達では弾かれてしまった』

心の中に扉? 何でそんなものが突然……。あとで見に行かないと。

「でも、それ以上に参つたなあ。これじゃあまともにご飯が食べられないよ……」

「それならば私が食べさせてあげる。口を開けて」

「え? 何言つて——ムグツ!」

『ツ!』

俺が話してる途中で折紙が、フォークで刺したベーコンを口の中に突っ込んできた。

いきなりのことで驚いたが、何とかベーコンを食べることが出来た。

「はい、次。口を——」

「待て! 折紙だけズルいぞ!」

「そ、そうです……ツ!」

「むくも食べさせてみたいのじゃ」

「私もです! あ、七罪ちゃんでもオツケーですよ。口移しで」

「絶対に嫌よ!」

他にも俺に食べさせたいと言つてくる者がたくさん出てきた。

「はいはい、落ち着いて。皆の気持ちは分かるわ。一回ずつで交代しましよ」

「俺に拒否権は?」

「この状況でそれ言う? というかあるとでも?」

ですよねー。分かってたけど聞いてみただけってやつだよ。

代わる代わる食べさせてもらおうという恥ずかしい行動に耐えてい

たら、いつもより遅くに朝食が終わった。

その日のお昼頃、未来さんから連絡が来た。

『やあ、空君。目が覚めてよかったよ』

『その節はどうもお世話になりました。それでご用件は？』

『実はね、もうじきこの世界から出ていこうかなって思うんだ』

……そっか、未来さんはもう行っちゃうのか。

『——それで最後に君と勝負がしたいんだ』

未来さんからの決闘の申し込みを受けて指定された場所に向かった。指定された場所は海鳴市の公園。誰かが結界を張っているのか気が全くない。到着するとすでに未来さんはいて、なのは達が少し離れた所に立っていた。

「お待たせしました。未来さん」

「ああ。さあ、始めよ——」

「おい、決闘しろよ」

「……急にネタぶつ込んだきたね。まあいい、その決闘受けて立つよ！ 一人の決闘者としてね」

『戦いに集いしデュエリスト達が！』

『モンスターと地を蹴り、宙を舞い！』

『フィールド内を駆け巡る！』

『見よ！ これぞデュエルの最強進化形！』

『アクション……デュエ——へブツ!?』

最後まで言い切る前に止められた。未来さんはイフに、俺は琴里にはたかれていた。

「とつとと始めなさい！」

「……はあーい」

さてと、ふざけるのはここまでにしてと……どうしようかね？

未来さんがこの世界からいなくなるから最後に戦ってくれと言わ

れて即OKを出したあとに後悔した。もし時間を戻せるなら、戦う日を今日でいいと言った自分を殴ってやりたい。

今の状態の俺が戦えばどうなるか分かったもんじやない。

もう一度言うけど、どうしようかね？

「それではこれより試合を行います！ 始め！」

審判役のリニスが手を振り下ろし開始の合図を出した。それと同時に未来さんはミサイルと機関銃を撃ち込んできた。

……あれ？ イフの攻撃ってこんなに遅かった？ ————これなら掴めそう。

そう思っ手を手を動かすと自分に当たりそうな銃弾を簡単に掴めた。熱いはずの銃弾からは何故か全然熱さを感じない。遅れてやって来たミサイルは掴んだ銃弾をぶつけて爆破させた。

『……………あ？』

誰もが目を見開いていた。未来さんも口を開けて呆けていたので、その隙に近づいて蹴った。

「……………え？」

今度は俺が驚く番だった。未来さんがいなくなったのだ。

どこに行ったのかを周りを見回していると結界が何かとぶつかる音がした。

S i d e o u t

S i d e 十香

「まさか、空……未来を結界の端まで吹き飛ばしたってこと!？」

私達の中でいち早く気付いた耶？ 矢の発言に誰もが驚愕した。

「ほ、ホンマに……？」

「この結界内に何かが入った様子は無いし、方角的にも未来君がぶつかったと考えていいはずよ」

「しかし、空はどうやって門矢を飛ばしたのだ？ 見たところ魔力を感じなかったのだが……」

「……………え、シグナム、今何て言ったの？」

「む？　だから魔力を感じ……は？」

シグナムも自分で言っていて気が付いたようだ。空は魔力を一切使わなかった。要するにただの蹴り……いや、それは恐らくないだろう、と首を横に振る。私にも空の動きはほとんど見えなかったが、一瞬だけ魔力でも霊力でも、ましてや龍の力で足りない力を感じた。私達が知らない力を空は使ったと考えていいだろう。そして、その力の正体は恐らく空の前世の力のはずだ。

昨日門矢未来から聞いた話では空が矢に触れたと言っていた。それが引き金になったとみるべきか。

「へえ、空の髪が一瞬だけ金色に染まらなかった？」

「同意。夕弦もそのように見えました」

「私も見えた」

「へやっぱりあの矢は神様の……」

「空の記憶を戻すため、と考えていいでしょうね」

「これからどうなるのかな？」

「それは……空さん次第では？」

『よしのんも四糸乃の意見に同じかな。空君のこれからを見守るしかよしのん達にはできないからね』

私達精霊の中だけで霊力による会話を行った。会話からも分かるように、私達が空に出来ることは悔しいことに少ない。

……やはり、運命は変えられぬものなのだろうか？

S i d e o u t

S i d e 空

皆に話し声が聞こえて未来さんはすごく遠くに吹き飛んだことが分かった。

あれ？　俺ってこんなに力あった？　いや、確かにさ、いつもより体が軽い感じはしてたよ？　でもここまでするか？　いくら未来さんが魔力持たなくてもスタープラチナが反応出来ないほど吹き飛

ぶ————イッ!?

いきなり足に激痛が走ったことに顔を顰める。

未来さんに何かされた？ ううん、そんな感じはなかった。じゃあ、何で……？ クソツ！ ワケが分かんないよ！ 自分の体なのに自分の体じゃないみたいだ！ 何だよ！ 何なんだよ！………つて、今はそんなこと考えてる場合じゃない。

今すぐにでも叫んでしまいたいが、今は戦闘中だと言うことを思い出し、一旦深呼吸をする。その後、足に治癒魔法と聖母トワイライト・ヒーリングの微笑を使う。

何時かは過去と向き合わなきゃいけない時が来るかもしれない。でもそれは今じゃない。今はこの戦いに集中するべきなんだ。

自分の中で切り替えてからその場で集中する。未来さんを倒す方法を考える。今の自分出来る最善の手を使って。

S i d e o u t

S i d e 未来

開始早々僕は吹き飛ばされた。正直に言っただけをされたかさっぱりだ。迅い。ただただ迅かった。しかも、それはスタープラチナの動体視力をもつてしても捉えることは不可能だった。

これが空君の本気？ だとしたら相当不味い子にケンカ売っちゃったなあ。

これでは勝負になるかも怪しいな、と思っただら、僕の前に突如灰色のオーロラが現れた。

灰色のオーロラ？ まさか！

「ふーん、暇潰しに来てみれば酷い様だな」

「お前は……！」

オーロラの中から出てきた人物は僕がボロボロなのを見て鼻で笑った。

「ま、それも当然か。あの子供はお前よりも戦い慣れてる。強くなるための努力を怠っては来なかった。その点お前はどうか？ ジョジョの第四部の世界に転生して一年も経ってない。前世で普通の人

生を歩んできた奴が、高々物真似が出来る力で勝てるかでも思ったか？ 不老不死だからって勝負に負けないかでも思ってたか？」

「イフが高々物真似が出来る力だって？」

「イフを馬鹿にするな！」

「何言ってるんだ？ 別にそのマシユマロには何も言っていないだろ。俺はそいつに頼りきりのお前に言ってるんだよ。どうして漫画が描ける？ 岸部露伴をそいつが真似たからだ。他のスタンドが使えるのは？ そいつが真似したからだ。全部お前の力じゃない。何一つとしてお前の才能でも何でもない。お前は何一つとして努力をしていない存在なんだよ。それである子供に勝つ？ ——無理だ、絶対に」

「そんなのやってみなくちゃ——」

「やってみなくても分かるから言ってるんだよ」

「コイツ！ いつのまに僕の前に!？」

10m以上は離れていたはずなのに気が付けば頭を掴まれていた。

「はあ……出来損ないの弟で俺は悲しいな」

男はどこからどう見ても悲しそうな表情なんて微塵もしていなかった。

それに——

「お、弟ってどういうことだ!？」

「複雑な事情があんだよ。今はいい。……それよりも、盗み聞きは感心しないな——龍神空」

Side out

Side 空

未来さんを倒す方法を考えていたが、未来さんが一向にやってこないことを怪訝に思い、吹き飛んだ方に行ってみることにした。

ん、誰？

未来さんを見つけると、未来さんの前に知らない人がいた。ここからでは聞き取れないが何かシリアスな内容を話しているのだろうか

雰囲気から感じ取った。

……しばらく見守るか。

そう思つて隠れていたら――

「複雑な事情があんだよ。今はいい。……それよりも、盗み聞きは感心しないな――龍神空」

バレバレでした。

「えーつと、盗み聞きはしてないです。この距離じゃ聞こえませんでしたから」

「そうか。……そういえば、こいつと決闘の最中だったな。邪魔して悪かった。――門矢未来、これをやる。それで少しは成長しろよ。時が来たらまたお前の前に来てやる」

「余計なお世話だ」

何て言いつつも男性が渡してきたカードをちやつかり貰うんですね。

用は済んだのか、男性は灰色のオーロラの中に入って消えてしまった。

「未来さんのパワーアップイベントも終わったことだし再開と行きましようか」

「待たせてすまないね」

互いに向き合い戦闘準備を整える。

「さあ、俺達の戦争<sup>デイト</sup>を始めようか」

全力勝負です！（後半）

全力勝負です！（後半）

Side空

先程未来さんは男性からカードを貰っていた。それはきつと未来さんを成長させるものだろう。

「早速使ってみたらどうですか？ そのカード」

「言われなくても使うさ。イフ！」

未来さんがイフの名前を呼ぶと側にイフが現れる。現れたイフは、そのまま形を変化させ未来さんの腰に巻きつく。

白いベルトの周りに色んなマーク……どっかで見たような……。

未来さんに巻き付いたベルトの形に既視感を覚える。

「これが無限の可能性を秘めた僕達のだ！ 変身！」

未来さんがカードを白いベルトに挿入すると、ベルトの中心が赤い光を放つ。

『INFINITE RIDE！』

残像のようなものが出て未来さんと重なり合い、体の一部がマゼンタ色に染まる。

『INFINITY DECADE！』

ああ、そつか。あのベルトはそういうことか。

変身が終わってようやくわかった。そこにいたのは紛れもなく――

――仮面ライダーディケイドだった。

「えーっと、一応聞くべきなんでしょうかね？ —— 貴様は何者だ？」

「通りすがりの転生者で仮面ライダーだ。覚えておけ！」

俺の問いかけに対し、ビシッと指を突き付けて決め台詞を言い放つた。

「はい、覚えました。 —— 第二ラウンド始めましょうか！」

「ああー！」

返事をする未来さんが距離を詰めて右拳を突き出す。俺はそれを弾き、腹に一発 —— とはいかなかった。空いていた方の左手

で掴まれていた。そして、掴んだ手でそのまま俺を投げ飛ばした。空中で体勢を立て直し、地面に着地する。

むう……リーチの差があるからやり辛い。それに变身してから力も増した気もする。かと言って加減をしないと俺がヤバいんだよな。……全然出来る気がしないけど。ともかく、こんなにも神経使う戦いつて初めてだ。

どう戦うかはさつき考え付いた。あまりやりたくはないが卑怯な手も思いついてる。

『INFINITE ATTACK！　〈STARPLATINUM！〉』

未来さんがベルトの横に着いたケースからカードを取り出し、ベルトに入れるとイフの音が響く。すると、未来さんの側にスタープラチナが出現する。スタープラチナで来ると思いきや、二人は合体した。今までに覚えた力を自分に憑依させて使えるって事か。

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ……オラッ！』

スタープラチナお得意の高速ラッシュ。だが、——視えない速さじゃない。

今の状態で上手く出来るか分からないけど、武装色の覇気を使い拳を受け流す。

よし、出来た。

心の中で小さくガッツポーズをする。覇気でならスタンドに触れられることをちよつと前に知ったことが功を奏したようだ。

「やっぱりこれくらいじゃ効かないか……だが、これならどうだい！」

『INFINITE ATTACK！　〈STARPLATINUM！〉　〈CRAZYDIAMOND〉！』

今度はクレイジーダイヤモンドもか！

未来さんは二体のスタンドを出し攻撃の手段を増やしてきた。これは流石にきついいと思ひ、未来さんから距離を取る。なのは達の所まで戻って来た。

十分に距離を取ったことを確認し、深呼吸をする。

これ勝てるかな……？ とりあえずは攻撃防いだら逃げる。時間稼ぎ十力の制御。そう何度も使えるわけじゃないけどしばらくはこれだな。

考えを纏めたところで未来さんがやって来た。

稼げたのは十秒つてどこか。

「攻めてこないのはどうしてだい？」

「様子見です。その力がどれほどのものか分からないんで」

「そうかい。だが、様子見と言っていてられるのも今の内だよ」

未来さんは大量の機関銃を作り出してターゲットである俺に照準を合わせて一斉砲火。最初とは比べ物にならない数の銃弾が襲ってきた。

見聞色の覇気で躲そうと思った時、足場がぐらついた。

スタープラチナのパワーで地面を揺らしたのだ。

更に、俺が怯んだ隙について地面から鋭く尖った岩が周りから突き出してきた。

イググラスが殺して奪った力まで……！

逃げ場を失った俺は絶体絶命のピンチに陥った。

逃げ場が無いなら作ればいい！

「アバターー！」

『……あいよ』

いつもよりやる気を感じられないアバターが現れ、周囲から突き出す岩や俺に当たりそうな銃弾を撃ち消す。

「一筋縄じゃないかないか」

未来さんもこうなることがわかっていたのか特に気落ちした様子はなかく、新たにカードを再び取り出す。

「そうはさせませんよ」

「ッ！」

足元に転がっていた石ころを蹴って、挿入される前のカードを狙い、未来さんの手から撃ち落とす。

未来さんはカードを諦め肉弾戦で攻めてきた。

「はああッ！ せいッ！」

それからも未来さんによるスタンドを複数使う戦い方に防戦一方だった。

——だが、それは長く続かなかった。

「はあ……はあ……クソッ！ 全然当たらない！」

肩で息をしながら悪態を吐く。未来さんの体力に限界が来たのだ。

「あちゃー、時間切れか……。この方法で勝ちたくはなかったんだけど、時間稼ぎしてた俺が今更言えることじゃないな。」

「未来さんって弱点ありますよね。それも相当な」

「……………」

「二つ目は体力。今の戦闘で分かったと思いますけど、スタンドを纏う代わりに自分で動かなくちゃいけなくなつた。それが体力の減少につながつた」

「デイケイドに変身してからの戦いは10分もない。スタンド使いはスタンドが強くても本体の力や体力があるというわけじゃない。空条承太郎は鍛えてみたいだし、DIOは吸血鬼だから別だけど。」

「二つ目ということは他にもか」

「はい。二つ目は技術力の無さです。スタンドの使い方は分かつてると思いますが、それを纏つての戦い方が……。正直に言つて素人です。それなら纏わずに使わない方がマシでした」

「スタープラチナでのラッシュがいい例だ。お世辞にもあの肉弾戦は良いとは言えない。」

「……………そっか」

「三つ目ですが——」

「まだあるの!？」

「不死身だからといって勝負には負けないわけじゃないんですよ?」

「それはさつき言われたよ」

「さつき? ああ、あの男性にか。」

「この短い時間で言われたとなるとあの不思議な男性しかいないだろう。」

「確かに不死身は本気の闘いだつたら強いでしょうね。なにせ殺せないんですから。でも、倒す方法はある。例えば、首を切り落として海

中の奥深くや宇宙空間に転移させれば終わりですね」

「……………」

「それに六喰の力でイフを封印したり、デイモンシオン・ロスト 絶霧でスタンドを使えない空間にしたら叩く手段が無くなる。要するに——」

「要するに不死身だからって自分の力を過信するなって事だろ？」

「そういうことです。それで降参します？　こんなつまらない戦いになってしまいました」

今回の戦いで俺が攻撃した回数は片手で数えられるほどだ。未来さんの攻撃をほとんど見聞色の覇気で躲すかアバターで消した。我ながら卑怯だと思う。

「ああ、降参だ。これ以上は無意味だろうからね。君に逃げ続けられるイメージしか湧かないよ」

未来さんは完全に諦めたのか、両手を上げて変身を解いた。

「勝った！ 第3部完！」

「……確かに僕は負けたけどその言われ方は釈然としない」

結界内を逃げ回っていたので皆のいた場所より大分離れていた。未来さんがある程度回復してから再び皆の下に戻った。

皆からお疲れ様と言われたが何人かは不服そうな顔をしていた。特にそれが顕著だったシグナムさんが俺の側にやってきて言ってきた。

「……………空」

「分かっていますよ。あの勝ち方が気に入らないんですよね？　他にも何人か言いたそうにしていますし、……何より自分が一番分かっています。でも、未来さんが相手だとしてもそれがベストだったんです。……………それに」

「それに？」

「あ、いや、何でもないです。気にしないで下さい」

シグナムさんは不思議そうな顔をしていたがすぐにいつもの凜とした顔つきに戻した。

《良かったのですか？　言わなくて》

「へうん、いいの」

流石に言えないよね。何でか知らないけど、今の俺が魔力や  
セイクリッド・ギア  
神器、精霊の力がほとんど使えないだなんて。アバターだけが使  
えたことにも当然疑問を抱いた。……ホントにアイツは何なんだ？

このことに関してはブレイブと俺の中にいるドライグ達しか知  
らない。

「ほな勝負も終わったことやし帰ろうや。そんで未来さんのお別れ  
パーティーしようや」

「あ、いいね！ 未来さんはどうです？」

「折角だからお言葉に甘えさせてもらうよ」

はやての提案で未来さんのお別れパーティーを急ぎよ開催するこ  
とになり、速攻で準備をした。

龍神家でお別れパーティーが始まった。

「即席ですけど今日は楽しんでください、未来さん」

「ありがとうございます。ここまでしてもらえるなんて嬉しいよ」

「どういたしましてです。どうせなら皆に一言言っして下さい」

「そ、そういうのガラじゃないんだけどなあ……まあ、今日は僕が主役  
なわけだしやるよ」

「はい、お願いします」

未来さんにマイクを渡し、皆から見える場所に立ってもらおう。

「今日はありがとう。僕の為にわざわざパーティーを開いてくれて。  
……今日は初めての敗北だった。完全に空君の作戦勝ちさ。僕もま  
だまだだって分かった。イフという力を手に入れて気が付かないう  
ちに天狗になっていた。それをへし折ってくれた空君には感謝して  
る」

感謝かあ……。あんな勝ち方しておいてされるってのはちよつと  
なあ。

「だから僕は強くなる！ 強くなってまた空君に挑戦する！」

「いつでも受けて立ちますよー！」

『我モ何時マデモ負ケテハイラレン』

イフも未来さんの隣に立ち、強くなることを宣言した。

「短い間だったけど楽しかったよ。それじゃ——あ、そうそう、空君」

未来さんがポケットからドアノブを出すとは何もない所に扉が出来た。扉を開け、別れを告げようとする前に俺の方に振り返って来た。

「何ですか?」

「周りの女の子の気持ちを考えてあげなよ。その内後ろから刺されるかもよ」

『ッ!』

気持ち? 周りの女の子ってことは十香達やなのは達のことなんだろうけど……どういうこと? というか刺されんの!?

「え、えっと、良く分かりませんが気を付けますね。よし、そのためにももっと修行しなきゃ!」

『(分かってはいたけどもやっぱりそうなるんだ……。これはまだまだ苦労しそう……)』

「あ、アハハ……まあ、そういうことでいいさ。じゃあね」

『さよなら(またな/またね)!!』

未来さんが扉を開けると大量の光が部屋中を満たす。眩しくて目を閉じているとドアが閉まる音がした。目が見えるようになって周りを見回したが、さっきまであった扉と未来さんが消えていた。

行っちゃったか……また会いましょう! 未来さん!

## 空ハツピーデイリー編

裁判の判決は大抵覆りません！

裁判の判決は大抵覆りません！

黄金の龍と黒い「何か」が戦っている。

戦いの影響で周りには酷い有り様だ。大地は抉れ、海は荒れ、天は陽の光を通さぬ黒い雲で覆われていた。

』  
』

龍と「何か」は話しているようだが声は聞こえない。

ただこれだけは分かる。黒い「何か」は憎しみや悲しみ、負の感情で溢れかえっていた。

龍と黒い「何か」がぶつかり、激しい閃光が生まれる。

———そこで夢は途切れた。  
映像

## Side空

「……………何だろう、今の夢……………」

いつもの変わらぬ朝ではなく、やけに鮮明な夢を見た。知らないはずなのに知っている気がする、そんな感じの夢だった。

《マスター、おはようござい———どうされたんですか!?!》

枕元に置いてあるブレイブを腕についたらブレイブが心配する声を上げた。

「? どうされたってどうもしないけど?」

《ですが、マスターの目から涙が……………!》

え、涙? あ、ホントだ。

ブレイブに言われた通り、俺の目からは涙が流れていた。

自分でも気が付かないうちに涙を流すことなんてあるのか……………。

自然に止まった涙を拭ってベッドから出ると、体が重く感じた。い

や、正確に言うのと、いつも通りに戻っただけだ。

昨日が偶々軽かったただけなのだ。

……魔力が使える。元に戻った……？

体が元に戻っているなら力も戻っているのでは？ と試してみたら案の定、理屈は分からないが昨日使えなくなっていたはずの力が使えるようになっていた。

『力が戻ったみたいですね』

『そうなんだけど……昨日は何だったんだろう？』

『現段階では何とも言えんな……』

アルビオンの言う通りだ。判断材料が少なすぎる。二亜の天使で調べてもいいけど、出来るだけ使わないって二亜と約束してるから使わない。

「ま、これで料理が掃除が出来るから問題ないけどね！」

『ハッ、すっかり主婦みたいになってやがるな』

九喇嘛の言葉は一応誉め言葉として受け取っておいて、朝ご飯の仕度を始めた。

「これより、裁判を始めます」

裁判長の開始の合図で裁判が開廷された。

「被告人前へ」

呼ばれた被告人が前へと出る。

この裁判での被告人は——俺だ。

遡ること数時間前のことだ。

お昼まで特訓をした後、小学生組が翠屋に集合した。今日は平日。しかし、夏休み中なのでお店に来るお客さんはカップルや学生が多い。

「こんにちは、桃子さん、土郎さん、恭也さん、美由希さん」

「いらっしやい。今日は皆来るんでしょう？　あとでおやつ持っていくわね」

「ありがとうございます」

桃子さんは俺達が来るといつもお菓子をくれる。正直言って商品になるものをただで貰っているから気が引ける。

「空君にはお店のお手伝いしてもらってるんだからこれくらい当然よ」

「そうですか？　じゃあお言葉に甘えます。けどさも当然のように心の中読むのやめて下さい」

「あら、ごめんなさいね。空君は分かりやすくて、つい」

そんなに分かりやすいのかな？　いや、周りがおかしいんだきつと。

勝手に結論付けて皆がいる席に座る。

「これで全員揃ったな。で、今日はどうしたんだ？」

雄人が全員揃ったのを確認すると俺達を集めた本人、アリサに尋ねる。

「フッフ、よくぞ聞いてくれたわ！」

待ってましたと言わんばかりにアリサが口を開いた。

「皆で海に行くわよ！」

『お、おー……』

「ちよ!?　テンション低過ぎじゃない!?　海よ！　海なのよ!？」

『いや、だって、ねえ……毎年のことですし』

「グツ……！　そ、それもそうね……」

「コホンと咳払いをしてアリサが続ける。

「まあ、それはともかく。今年も海に行くわ！　異論は認めない！

いいわねー!」

『ほいきた、合点承知の助!』

「……古いけど、まあいいわ。さっさと予定を合わせましょう」

それから皆の予定を聞き日程を合わせた。毎年の事なので小学生でも決めるのにも手慣れている。

今年はユーノヤクロノのなども誘ってみようと言うことになった。

「そうだ！ 新しい水着、空が選んでよ！」

『(そんなことしてもらってたのツ!?)』

アリシアの提案に何人かがビクツと肩を揺らした。

「それって毎年じゃなかった？」

去年も一昨年もアリシアやフェイト、更には十香達の分まで選んでいる。

「細かいことは気にしないの！ それよりも選んでくれるの？」

「俺のセンスでいいならいいけど……保障はしないよ？」

「大丈夫！ 空が選んだのものなら私は何でもいいもん！ むしろ喜んで着るよ！」

俺が選んだので喜んでもらえるなら嬉しいに越したことはない。

「あ、あの！ 空君！」

「ん？ どうかした、なのは？」

「私のも選んでくれたら……嬉しい、かな」

恥ずかしそうになのはが、

「私にも選んでくれないかしら」

平然と愛衣が、

「私も！ 姉さんだけじゃなくて私のも選んでね！」

アリシアだけじゃなくて自分も、とフェイトが、

「私も選んで欲しい……かな」

少し控えめにすすすが、

「私にも選んでくれるよね？ 空君」

俺が選ぶのが当然とばかりに明日奈が、

「わ、私は別にどうでもいいんだけど、あんたがどうしてもって言うなら選ばせてあげるわ！」

選んで欲しい……らしい(?)アリサが、

「わ、私のも折角やから選んでくれへん？ べ、別に深い意味はないんやけど……」

視線をこちらにチラチラと寄こしながら上目遣いにはやてが、俺に水着を選んでも頼んできた。

「(わ、私もヴァーリ君に……いやいやいやでもでもでも！)」

若干一名だけ頼んでるんだか頼んでないんだかわからないがついでに選んでおけばいいのだろうか？

それとあかりは突然頭を横に振ったりして皆が軽く引いていた。今年も大変だ。この数に加えて十香達もだろうし、今年は凜祢とシエラが増えるから。

それからあつという間に予定を決めていき雑談をしていたら翠屋のドアが開いた。

俺が座っている位置からだとは自然と出入りする人物がわかる。今回は新しいお客様が来たようだ。

二人組で片方は中高生ぐらいの赤毛の少年で、もう片方は綺麗な銀髪で俺達と丁度同い年ぐらいの少女だった。

少女の方は店内を見回していると、俺とぼつちり目が合った。

「あ、空君！」

銀髪の少女——イリヤスフィール・フォン・アインツベルンことイリヤは手を振りながら俺の近くにやって来た。

「やつほー、イリヤ。兄さんもこんには」

「ああ、こんにはは。元気にしてたか？」

「それはもちろんですよー！」

イリヤにつられるように、赤毛の少年——衛宮士郎こと兄さんもやって来たので挨拶をかわす。

「今日はどうしたんですか……って聞くのはおかしいですね」

「実はイリヤが空に——」

「わーッ！ お兄ちゃんは何言ってるのーッ!？」

兄さんが何か言いかけたところでイリヤが大声で遮った。

「……？ よくわかりませんが、その席に座ったらどうですか？ お水持つてきますね」

二人分の水を用意して二人に渡す。

「注文は何にしますか？」

「じゃあ、シュークリームと紅茶を。イリヤは？」

「私もシュークリーム。飲み物はオレンジジュースがいいな」

「はい、しばらくお待ちください」

桃子さんに注文を伝えた——ところで気が付いた。俺、今日は手伝いでも何でもないじゃん！

「フフフツ、空君も大分翠屋の店員としての自覚が出てきたわね♪」

ツ!? これは桃子さんの罠だったんですか!? 知らないうちに動きが染みついてしまった……!」

笑顔の桃子さんが今は悪魔の笑顔に見えてしまう。

と、まあ注文は受けたので運ぶところまではやっておくべきだと思いい、注文したものをトレイに乗せテーブルに置く。

「お待たせしました。シークリームと紅茶、オレンジジュースです」  
トレイを戻した後、イリヤと兄さんに許可をもらい同じテーブルに座らせてもらった。

「あ、あのさ、空君。この後の予定とかがってある?」

「ううん、ないよ」

「じゃ、じゃあさ、一緒に遊ばない?」

「おっ、いいよいいよ。遊ぼうか。今日は俺の家で遊ぶ?」

「空君のお家? うん! 行ってみたい!」

「よし、決定! 兄さんも来ますよね?」

「イリヤの面倒見ないといけないからな。お邪魔させてもらおうよ」

「了解です! 食べ終わったらい——」

『行かせねえよツ!』

なのは達が一齐に立ち上がってツツコンできた。相変わらずツツコミが息ピッタリなことに感心してしまう。

いきなりのことでイリヤと兄さんがビクツとなっていた。

「……えっと、空の友達か?」

「うん、そうだよ——って紹介してなかったけ?」

ヴァーリの質問に紹介してないことに気が付いた。

「ああ、全くもって知らない」

「こっちの可愛い子がイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

「か、可愛い!? またそんなこと言って〜!」

イリヤがポカポカと肩を叩いてくるが全然痛くない。

「で、こっちの赤髪の人が兄さん」

「お、おいおい空、それじゃ俺が誰だかわかんないだろ？」

「あ、そつか。兄さん改め衛宮士郎さん。イリヤのお兄さん」

『(え、じゃあ、そっちの女の子の兄を兄さんって呼ぶってことは……義兄さん!?)』

「紹介終わったからもう行って——」

『いいわけがない!』

えー？ 何がダメなの？ ヴァーリ、雄人、あかりの三人は納得してるのに……なのは達は何が不満なのかな？ 心なしかなのは達の額に青筋浮いてるのは気のせいですよ？

「えーっと、どの辺がダメなんでしょうか？」

『色々！ とうるかその他諸々全部!』

ぜ、全部？ そんなに？

「これはもう裁判よ！ 空は今までしてきたことを裁かれるべきなのよ！」

『異議なし!』

アリサの主張は多数決によつて決定され、こうして裁判は確定となった。

そして、現在。龍神家の一室でアリサの宣言通りに裁判が行われている。俺の背後にはたくさんの傍聴人がいる。

「被告人、最期に言い残すことは？」

「それ最初聞くの!？ まだ始まったばかりかだよね!？」

裁判長の琴里がいきなり裁判を終わらせようとしてくるとは思わなかった。

「それが最期の言葉でいいのね？ なら判決は——」

「ちよつと待って！ 俺の罪状はそもそも何なの!？」

「この期に及んで聞くの？ いいわ。あなたの罪状は——  
女誑しかつ鈍感でいる、という最低な罪。検察官側から意見があればどうぞ」

琴里が俺とは対面に座る人物に視線を向けた。その先にいたのは

「これまでの調査によると何人もの少女を誑かしていると断定できません。本日翠屋に来た、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンも被害者の内の一人で間違いはないかと」

折紙だ。淡々とした口調で正確に告げていく。

「被害者って何!? 俺誑かすなんてことしてないはずなんだけど……。」

「……被告人は分かっているようなので証言人を呼びましょう。入って下さい」

琴里が部屋の外に呼び掛けるとリインフォースさんが入って来た。

「リインフォースさん、あなたは龍神空に特別な想いがありますか?」

「………………。あります。彼には消えるはずだった命を救ってもらいました。それに……幸せにするとも言ってくれました。……なのに、こんなにあんまりですッ」

証言台に立ったリインフォースさんが静かに泣き始めた。それだけで罪悪感で押しつぶされそうなのに言われた内容が内容だけにさらに肩に負担が出てくる。

「それだけ聞ければ十分です。被告人は何かありますか?」

「え、えーっと、あの時は——」

「なるほど、無自覚だったわけですね? 最低です。今すぐにでも

【砲】<sup>メギテ</sup>をぶち込んでやりたいくらいです」

「全然聞いてくれないんだね!? それから【砲】はやめて下さい死んでしまいます」

「まあ、いいでしょう。次の証言人入って下さい」

まだ続くの!?

リインフォースさんと変わるようにして入って来たのはイリヤだった。

「イリヤスフィールさん、あなたはどこで龍神空と出会いましたか?」

「は、初めて会ったのは遊園地です。……実はそこで迷子になったところを助けてもらって……。」

イリヤと初めて出会ったのは遊園地だったね。フェイトとの時間潰しちやっただけ……。」

「なるほど。あなたは龍神空に特別な想いはありますか？」

「えッ!? ええええええええええええええええッ!? いや、その……何と言いますか……。空君は……か、カツコいいなあって……。あ! でもでもまだそういう関係になりたいってことではなくて……!」

「あ、今の反応で大分わかりました。もう結構です」

「えッ!? ……あ、はい」

琴里に適当にあしらわれ、どこか落ち込んだ様子で部屋を退出して行った。

そういう関係ってどんな関係？

「裁判長」

イリヤが言っていたことについて考えていたら折紙が拳手していた。

「何でしょうか、鳶一検察官」

「被告人には有罪を下すべきだと検察側は判断いたします」

「そうですね。判決は——死刑でいいでしょう」

「死刑出すの軽いな! こつちの意見は!? というか弁護士! 弁護人を要求します!」

「……無駄な足掻き」

ちよつとー? 聞こえてますからね、鳶一検察官?

「良いでしょう。弁護士、意見があればどうぞ」

弁護士と呼ばれて立ち上がったのは——

「これはもう言い逃れは出来ません。いつかはこうなるんじゃないかと思っていました……もういつそのこと死刑でいいのではないのでしょうか?」

友人のクロノ・ハラオウンだ。彼は判決に対して異議を唱えることなくあっさり受け入れていた。

「弁護にいいいいいいいいいんッ!?」

まさかの弁護士ですら味方でなかった件。それなんて無理ゲーですか?

「なるほど。弁護人に異議はないようですね。では、判決は——」  
「異議あり! ありまくりです!」

五河裁判長が判決を下す前に何としても意見を言わねば！

「……何でしょうか？ 今更判決は覆るものではありませんよ。」

敵はこれまでで一番強敵だ……ッ！ だが、ここで負けるわけにはいかないんだ！

「お、俺は女の子を誑かした覚えは一切ないです！」

「あなたになくとも被害者が誑かされたと言っているんです。それは如何様にも変わりません」

た、確かに……。

「ですが！ 誑かされたの意味は騙すことや欺くことを言います。今までで俺は誰かを欺きましたか？」

『ッ!』

俺の発言に誰もがハツとなった。

「……それでは言い方を変えましょう。被告人は女の子と仲良くし過ぎではありませんか？」

今度は鳶一検察官からだ。

「そのどこがいけないのでしょうか？ 俺はただ仲のいい友達といえるだけです。それ以上の関係になった覚えはありません。それなのに裁かれる？ 死刑？ どう考えても行き過ぎじゃありませんか？」

「ッ！」

鳶一検察官の顔が小さくだが歪む。しばらく考えていたが突然ハツとなったように顔を上げた。

「確かに被告人が言う通り、ただ友達と仲が良いだけでしよう。しかし、鈍感であることについてはどうでしょうか？」

これ以上責められないと分かったのか別の方に攻撃を仕掛けてきた。だが、甘い。

「鈍感？ それは何に対してでしょうか？ まさか……人の心だなんて言いませんよね？」

「……………」

押し黙ったということはそれを言おうとしたのだろう。

「心とは見えないモノです。その心を持つ者以外には決して。確かにこの世の中には以心伝心や何となく考えることがわかっていった方

もいるでしょう」

「だったら——」

「だがしかし！ それが全員に通ずるわけではありません。以心伝心だって相手の趣味や傾向、好みを知った上で頭が判断しているに過ぎない。だからこそ相手が今どんな想いでいるか、考えているかなんてわかるはずありません。口に出してみなくては伝わらない想いもあるのです！」

だから、俺は想いを口に出して伝えないんだろう。皆に伝わって欲しくないから。伝わったら悲しむことがわかっていいるから。

「裁判長、判決を」

「……判決は——」

「異議あり！」

「なにッ!？」

琴里が判決を下そうとしたところで誰かが阻んできた。

その声の主は鳶一検察官でもハラオウン弁護士でもなかった。傍聴人席にいた夜刀神十香だった。

「空は口に出してみないと伝わらない想いもある、そう言ったな？」

「え、うん……」

「だから、私も口に出して伝えてみることにする」

十香は証言台まで出てくると声を大にして告げた。

「私は——夜刀神十香は龍神空のことが好きだ！」



『……………はああッ!?!』

空は鈍感だと分かっただけどまさかここまでだとは思わ——  
——いえ、違うわね。空は恋愛を知らないだけなのね。デート・ア・ライブやハイスクールD×Dの原作の内容を知っていれば別なんでしょうけど、最近になって能力の使い方や登場人物ぐらいいしか憶えてないって言っていた。

そもそも空は小学三年生だ。他の転生者と違って前世の記憶は無いし、転生してから十年も生きていない。不思議な力を持っていてもそこらにいる小学生とは何ら変わらないのだ。なら、何故返答せねばならないのか疑問に思うのも無理はないという考えに至る。

周りの娘達<sup>は達</sup>が精神的に異常に成熟してるだけね。……これはこれで空の成長になるのかしら？ 人の恋路を邪魔するわけにはいかないし、ここは黙っているしかないわね。

S i d e o u t

——あなたが好き、愛してる。

S i d e 空

十香に好きだつて言われた時、不思議な感覚が頭をよぎった。ただあまりにも一瞬の事だったから何だったのかは分からない。気にはなったが、それよりも今は返事をどうすべきかが問題だ。

えーつと、十香は好きって言っただよね？ それで……十香は返事を求めている。うーん、俺は何て返事したらいいんだ？

しばらく考えて、正確な答えは分からないけど大よそこんな感じなのでは？ と思い、返事をすることにした。

「十香」

「な、なんだ？」

十香の名前を呼ぶと何故か身構えられた。

……返事を待ってたんだよね？

「十香の好きだって言葉への返事言うよ」  
『ッ!』

あれー？ 今度は皆も身構えだした？ もしかして俺の返答次第で戦いにでもなんの!? じゃあ間違えられないじゃん!

学校で習っていないことを間違えずに当てろだなんて中々厳しい問題だ。今度タマちゃん先生に聞いてみようかなと思った。

「——俺も十香のこと好きだよ」

「そ、それは本当か!? 異性として好きなのか!?」

「当たり前じゃん」

俺は男で十香は女だから異性でしょ？

「likeではなくloveの方なのだな!」

「どちらかと言えばそうかな」

大袈裟かもしれないけどlikeよりはloveの方が合ってる気がする。

「で、では私と付き合ってくれるのだな!」

「付き合おうって、買物に?」

『(うわー……それ言っちゃうのかあ……)』

突如皆の視線が冷たくなった気がする。

「ち、違う! そんなバタなボケは求めてなどいない! 男女交際の方だ!」

別にボケているわけではないんだけど……男女交際……? ってことは恋人? ………………恋人っ!?

「だ、ダメッ! いくら十香でも恋人にはなれないよ!」

「…………ツ! そうか…………」

俺が恋人になることを断ると、十香はきな粉パンをお預けされた時以上に物凄く悲しそうな顔になった。

「……私とは付き合えない理由を聞いてもいいか?」

「そんなの決まってるよ!」

理由はたった一つしかない!

「恋人とキスすると赤ちゃんが出来ちゃうんでしょ!？」

フエイトの時は恋人じゃなかったからセーフ!

『……………』

断った理由を言ったら場の空気が凍った——いや、死んだ。誰も  
が固まっている。これぞ正しく『世界』だ。

「あ、あのー……皆さん? どうされたんでせうか?」

『……………あ……………』

あ?」

『アホかあああああああああああッ!!!』

鼓膜が破けるんじゃないかってくらい!!の爆音が部屋に響き渡った。

「うひゃあ! 突然叫ばないでよ!」

『これが叫ばずにいられるかッ!』

「え? え? え?」

何が何だかさっぱりわからず頭の中が混乱している。

「ま、知らないのも無理ないわね……」

「琴里は知ってるの? 赤ちゃんが出来る方法」

「ブフォッ!」

赤ちゃんが出来る方法を聞いたら琴里が噴いた。

「あ、あんたなんてこと聞いてくんのよ!」

「だって、さっきの皆の反応からするに俺が知ってる赤ちゃんが出来る方法違うみたいなんだよね?」

アホだ、だなんて言われれば自ずと気が付く。

「え……そ、そうね」

「だから正しい方法教えてよ」

「(言えるわけないでしょ!?) そ、それは……」

「それは?」

「それは……結婚して子供がいる人に聞いてみればいいんじゃないかしら?」  
そこにいる土郎さんとかどう?」

お、その手があったか!

「士郎さん！　なのはってどうやって生まれてきたんですか？」

「え、僕かい!?　（琴里ちゃん、僕を売ったな!?）」

「子供がいるんだから知ってますよね？」

「ウグツ……ま、まあ知ってはいるよ。一応ね」

「じゃあ、教えてください！」

「……残念ながら教えることは出来ないんだ」

「ど、どうしてですか？」

「それは——君が結婚してないからだよ！」

「!?　そ、そうだったのかー!?」

「……俺が結婚したら教えてくれるんですか？」

「え？　あ、ああ、そういうことになるね。（その頃には空君は知って

るだろう。フツ、我ながら完璧な答えだ）」

そっかー、結婚したらか……。今9歳だから、少なくともあと9年だ。

「今知れないのは残念ですが仕方ないので諦めます……」

「それよりも十香ちゃんへの返事はどうするんだい？」

「……返事？」

『あ』

士郎さんに言われてさっきのことを思い出す。俺は十香に告白された。でも、恋人になってキスすると子供が出来ると思ってたから断った。でも、それは俺の勘違いだった。

「そうだぞー！　変な理由があったから先程はフラれたが、それが無いなら私と付き合ってくれるのか？」

「有り得ない」

え？　今の誰？

「な、なぜだ!?　誤解は解けたのであろう!?」

「いや、待って！　今の俺が言ったんじゃないから！」

「む？　……ッ、折紙、貴様だな！」

俺の声を真似ていたの犯人は折紙だった。それがわかると十香は折紙の胸ぐらを掴んで問いただした

「何故私の邪魔をする！」

「あなたは一度フラれた負け犬。負け犬は引っ込んでいるべき」  
負け犬つてのは言い過ぎじゃない？ そもそも俺の勘違いだったわけだし。

「あれは空の勘違いでフラれたのだ！」

「勘違いでもフラれたことに変わりはない。他の人の番」

「ぐぬぬッ……！ ふん、いいだろう！ 他の人の番が終わるまで待つてやる！ ……その者に告白する勇気があればだがな」

「えつとき……その告白云々の事なんだけど、ちよつといいかな？」

俺が話し掛けると全員がこちらを向く。

「——俺、誰とも恋人になる気は無いよ」

「な、何故だ!？」

一番大きな反応をしたのは告白してきた十香だ。

「だって俺小学生だよ？ まだ付き合うつてのは早いと思うんだ。それに告白するひとなんてそうそういるわけでもないのにね」

恋人を作るとしたら高校かな？ ……出来るかどうかは置いといてだけど。

「だから、十香への返事は『今』はごめんなさい。その時が来たらちゃんと考えるね」

十香にこの先俺以外の人を好きならなにとも限らないわけだしね。

「……………わかった。考えてくれるのであればそれで構わない。今は待つとしてよう」

「ごめんね」

今ので終わりかと思いきや夕弦が傍にやって来た。

「質問。空は昔に私達と結婚したいと言っていました。あれは嘘だったのですか?..」

あー、そういえばそんなこと言ってたね。

「ううん、嘘じゃないよ。結婚できるならしたい……と思うよ」

「疑問。それは告白と受け取ってもいいですか？ 空は私達のことを好きなのでしょうか？」

「——うん、好きだよ！」

Side out

Sideフェイト

胸が痛い。今にも心臓が張り裂けそうなくらいに痛い。

似たようなのなら何回か味わったことがある。空が私以外の女の子と仲良くしているのを見た時に胸がチクチク痛んだ。

でも、今回は今までの比じゃない。私の好きな人が好きだと言ったのだ。私ではない別の人を。

……空は十香達が好きなんだね。だとしたら私には一生振り向いてくれないのかな？

Side out

Side美九

「でもさあ、どうなんだろうね？」

「どうなんだろうと言われてもどうなんでしょうとしか返せないんですが……。」

『……………はっ？』

「なんていうのかなあ？ あ、……………うん、皆のことは大好きなんだよ」

「それはさっき聞きましたよ？」

「好きなんだけど、えつとえつと、だから……………側にいたい？ 独占欲？  
みたいな感じなんだと思う。あ、ようするにシスコンか！」

だーりん、シスコンという結論に至りますか……………。

だーりんは精神的に大人びている部分もありますがまだまだ子供です。そんな子に恋愛をしろ！ と求めるのはまだ早いのですよ

う。

「あれ……じゃあ、なのは達に対する想いって何だろう？　好き……なのは確定なんだけど……」

あ……そういうことだったんですね。

だーりんの今の反応を見てようやくわかった。彼は「好き」という感情を特定の誰かに向けることを分かっている。好きな食べ物や好きなこと、それらに向けるものと同じものだ。「好き」という大きな括りの中に私達が入っているにすぎないのだ。

だーりんはこれからというわけですね。

「だーりん、今はそれでいいです。でもいつかはちゃんと気付いてくださいいね？」

「？」

分からないという表情が可愛くて今すぐ抱きしめたいが何とか抑え、周りを見回す。この場のほとんどの人が私と同じ考えに至ったようだ。そして、琴里さんの方に向く。

「裁判長、被告人はまだまだ子供です。今回は無罪という判決でいかがでしょうか？」

「ええ、そうね。被告人、龍神空を無罪とする。これで裁判を閉廷します」

こうして（途中からよくわからなくなった）裁判は終了したのであった。

S i d e o u t

S i d e 空

裁判が終わって一時間ほどが経った。今はイリヤだけでなくなのは達も一緒に俺の家で遊んでる。

やっていることは皆バラバラで、ゲームをしたり、漫画を読んだり、ガールズトークに励んだりと色々だ。

海に行くことをイリヤに話したら行きたいと言ってきたので兄さんやセラさん、リズさんも一緒に来てくれるらしい。

今年は人数凄いな。シア達も誘ってみようかな？

俺とヴァーリと雄人と兄さんの四人でゲームをしていたら誰かに後ろから抱き着かれた。

「うわっ、アリシアか。ビックリしたなあ」

「ねえねえ、空。私頑張るね！」

「お、おう……？」

目的語が抜けているから何を頑張るのかがさっぱりだ。けど、アリシアの目は本気で真剣なものだった。なら、それを応援するのは当然のことだ。

「うん、頑張れ。応援してる」

会話が終わってアリシアが離れるかと思いきやそうではなかった。俺がゲームを続けていても抱き着いたままだった。

「……二人はいつまで抱き合ってるつもりなの？」

しばらくして冷たい愛衣の声が聞こえた。愛衣の方に振り向くとその近くにいたなのはやフェイト達の鋭い視線までもが突き刺さる。それだけで何となく悪いことをしている気分になる。

「いいじゃん！ 空は嫌がってないんだからさ！」

「それに俺はアリシアのこと抱きしめてないけど、何か問題でもある？」

「ええ、大アリよ。それ以上のスキンシップは独占禁止法に触れるわ。アリシアは即刻私と代わりなさい」

「ぶうっ、ケチっ！ ……ま、自分たちで決めた「ルール」だから守るけどね」

アリシアはケチと言いながらもすぐに退いた。俺の知らない間に愛衣達だけのルールが出来ていたらしい。

「背中借りるわ」

俺に一言断ってから愛衣は俺の背中にもたれ掛かった。

ページをめくる音。愛衣は漫画か雑誌でも読んでるのかな。

「ありがとね空君。こういうのも中々悪くはないわね」

本を読み終えたのか愛衣は立ち上がり、俺の背中から離れていった。

愛衣がいなくなった後も、代わる代わるなのはやフェイト、はやて、アリサ、すずか、明日奈が俺の背中にもたれ掛かったり抱き着いてきたりした。

一番最後だったらしい明日奈が離れたときにゲームが終わり、時計を確認すると6時過ぎだった。

もうこんな時間か。夕飯にはいい時間帯だな。

「俺、夕飯の買い物に行くけど皆はどうする?」

『泊まる!』

「はやてが泊まるなら私も」

いつものメンバーの女子が元気よく答えた。

……求めていた答えと大分違う気がするんだけどツツコんだら負けだな。うん、そうに違いない。

「りよーかい。ヴァーリや雄人も泊まりでいい?」

「ああ、今日はアザゼルがいないからな」

「俺は一応親に聞いてみる」

「うん。あ……イリヤと兄さんはどうします? このまま夕飯だけでも食べていきますか?」

「あー、そうだな……俺達は――」

「泊ってもいいの!?!」

義兄さんの言葉を途中で遮ったイリヤは目を大きく開いて尋ねてきた。

「この家広いから泊まりたいなら泊ってもいいけど……」

兄さんの方をチラッと見たら首を縦に振っていた。

「セラには後で連絡しておくよ」

「わかりました。今日はいつもより大人数だから……カレーにしよっか」

『さんせーい!』

多数の賛成を貰ってメニューを決定し、買い物に出かけた。

出かける際に、兄さんも何かしたいと言ってきたので買い物や料理の手伝いをしてもらった。はやてやあかりもいたから苦労は少なかった。

「兄さんは普段から料理するんですか？」

「まあな。セラがほとんどやってるから俺は時々なんだけどな」  
いつも賑やかな夕食がより賑やかな喧騒に包まれた。

夕飯を終えると風呂に入り、再びゲームをしたあと就寝時間が来た。

俺の部屋ではいつものメンバ——ではなく、パジャマ姿の十香がいた。

「今日は私と共に寝てもらうからな！」

「う、うん」

やけに気合の入った十香に気圧されながらも二人並んで向き合う形でベッドに横になる。

『……………』

二人の間に会話は無かった。それもそうだ。数時間前まではあんなことがあつたのだから。

「……………私は……………」

沈黙を破ったのは十香だった。

「私はお前のことを振り向かせる。絶対にだ。だから、その……………だな」  
一拍置いてから続きを言う。

「簡単に他の女のものになどなつてはダメだからな？」

「はーい」

多分俺に告白する娘なんて滅多にいないと思うんだけどなあ。  
優しく十香に抱きしめられたまま眠りに落ちた。

「理」のマテリアルは殲滅者です！

「理」のマテリアルは殲滅者です！

新緑の広がる森に大樹や変わった生物がいた。

木々が風に揺れる音と動物の鳴き声、川のせせらぎが聞こえる。

正確には聞こえないのだが、そんな感じがする。

陽の光に遮られて顔は見えないが、少年と少女が互いに体重を預けながら気持ち良さそうに昼寝をしていた。

二人が寝ていると、周りには小さな動物達が寄って来た。

動物達はそれぞれの鳴き声を使って合唱を始めた。

どんな歌を歌っているのかは分からないが、きつと聞いていて幸せな気分になれる歌だと思う。

眠っている二人の穏やかな表情を見てそう思った。

——これが癒しと呼べる時間なんだろう。

S i d e 空

「……また知らない夢だった」

昨日に引き続き、変わった夢を見た。頬に触れてみればそこも同じで涙がつつたっていた。

涙を拭い、一緒に寝た十香を起こさないようにしてベッドから抜け出して、顔を洗いに行く。

「——今日も一日頑張りますか！」

それは朝ご飯を食べてから買い物に出かけていた時の事だった。帰り道の途中でなのはと出くわしたのだ。

「あれ？　なのは、奇遇だね。なのはも買い物？」

「……………」

俺が呼び掛けるも、なのはから返って来た反応は無かった。

……いや、そもそもこの子はなのはなのか？

『似ているだけじゃないか？ よく見ていれば所々違ふところがあるな』

ドライグの言う通り、なのは(？)の姿を見て見るとなのはそっくりではあるがいつもと違う点が多々ある。髪はショートカット、瞳の色は青色、展開している理由は分からないが、着ているバリアジャケットや持っているデバイスは赤紫に近い色をしてる。

それに名前を呼ばれて反応が無いってことは他人の空似なんだろう。

「ごめんなさい。人違いでした」

反応されなかったが、間違えてしまったことをなのは似の少女に謝ってその場を立ち去ろうとした時、少女がようやく口を開いた。

「……あなたの名前は何ですか？」

「え、名前？ 空……龍神空だよ」

「タツガミ……ソラ……ソラ……」

少女は口元に手を当てながら何度も俺の名前を口にする。

「ふむ……どうやら私はあなたと戦わなければいけない気がします」

名前を連呼するのが終わったと思ったら、急にデバイスを突き出し戦闘態勢をとった。

「ええッ!? 急に何!？」

「私がどうしてここにいるのかはわかりませんが……心が叫んでいるんです。ソラ、あなたを倒せと、砕いて喰らえと、胸の奥が叫んでいます。安らかな闇と破壊の混沌を呼び覚ませと訴えている。もしかこれが……恋、というものなのでしょうか?」

「どう考えても殺意だよね!？」

戦うっていう時点で少なくとも恋じゃないことは確実にわかるからー!

「はあ……事情はよくわかんないんだけどいいよ。君の気が済むなら君と戦う」

「ありがとうございます。……断られても攻撃してましたけどね。

『理』のマテリアル——星光の殲滅者。行きます」

なのは似の少女は星光の殲滅者と名乗り、デバイスを構え直す。

「ブレイブハート、セットアップ！」

《set up》

対する俺は(最近知った)ブレイブの圧縮空間に買った物を仕舞い、バリアジャケットを展開した。

「さあ、俺達の戦争を始めようか」

いつもの特訓とは違い、開始の合図は存在しない。その代わりに、俺達二人が戦う空間を覆う結界が形成されると同時に動き出す。

先手必勝！

ブレイブを銃の形にして牽制しながら接近する。放った魔力弾は上昇することで簡単に躲かれるが問題ない。俺も同じように上昇してある程度距離が縮まると、銃を持ってない方の手に魔剣創造で魔剣を一本作り出し投擲。少女は顔色一つ変えることなくデバイスで撃ち落とした。

なのはだつたらプロテクションか避けるはずだけど、この娘はデバイスで弾いた。……姿は似てても戦闘スタイルは違うかもしれないね。

そのことを念頭に置き、相手が撃ち出してきた複数の魔力弾を防御魔法で防ぐ。

「へなのはと比べて威力はどう？」

ブレイブには防御魔法を展開するとともに今防いだ魔力弾の威力も測定してもらっていた。

《へなのはさんと互角です》

魔法の威力はなのはと互角。それに加え、今撃ってきた魔法はなのはが使うアクセルシューターに似ていた。細かい所は違いますが容姿までそっくりとききた。となると——

「戦いの最中に考え事とは余裕ですね。ブラストファイアー」

俺が少女について考えている間に砲撃を放ってきた。ブラストファイアーと呼ばれた技はデイベインバスターに似ていた。威力がなのはと同じならこれを防ぐのは危険だと判断し、足元に防御魔法を

展開して踏み台にすることで勢い良く上に躲す。

「防御魔法を踏み台にして躲すとは、中々変わったことをしますね」  
「そりゃどうも」

抑揚も表情も無いのでいまいち褒められている気になれず、素っ気無く返してしまう。

戦い方はなのはと大体同じ感じだし、恐らくなのはのスターライトブレイカー並みの砲撃魔法も使えると見ていいだろうね。

ただ、なのはと違って冷静だ。それが一番厄介になるはず……。

少女はカートリッジを一回ロードし、魔法を放つ。

「パイロシューター」

最初に撃ってきたなのはのアクセルシューター。その数はなのはの最大数と同じ12発だった。俺はブレイブで撃ち落とそうとしたが、一発一発が別の動きをするせいで当てられずにいた。これほどの制御ができるとは舌を巻かざるを得ない。

色々な方向から迫るシューターを防ぐために後方へと下がり、一か所に集める。ブレイブを腕輪に戻してから魔剣と聖剣を作り出し、ギリギリまで引き付けて一気に切り裂いていく。

「動いて当てられないなら、引き付けて叩き落とすまでってね」

「流石はソラですね。私の期待通りの動きです」  
ッ！

その言葉にゾツとした。彼女の表情は変わらないが眼は語っていたのだ。揺るぎない勝利を。

少女の下に膨大な魔力が集まっている。つまり、彼女は砲撃の準備をしながら、その上俺が移動することも考えてシューターを制御していたということになる。

「集え、<sup>あかほし</sup>明星。全てを焼き消す炎となれ」

砲撃のチャージが完了し、狙いを定めて彼女の最強の魔法であろう一撃を放つ。

「ルシフェリオン……ブレイカーッ！」

この距離からでは逃げられない。

このままじゃ、なのはにやられた時と同じになるだけだ！

「アブソリュート・デイマイズ バランス・ブレイク  
永遠の氷姫、禁手化ッ！」

俺の足、膝、腰、手、肘、胸、頭に氷が着く。背中からは氷の翼が、腰からは尻尾が生える。バリアジャケットや髪もそれに合わせて淡い水色に変化する。

永遠の氷姫の禁手、永遠なる氷覇龍。バランス・ブレイカー アブソリュート・フォース・ドラゴン 本来、独立具現型の神器だが、禁手では俺自身が纏っている。

両手を突き出して砲撃を受け止める。

「凍りつけええええええええええッ!!」

手の触れている箇所から徐々に凍りついて行く。

「させません」

台詞だけだと抑揚が無いから分かりづらいが、出力が上がったことから彼女も負けまいとしていることがわかった。

「アブソリュート・ウイング  
氷覇の龍翼ッ！」

氷の翼が大きく広がって砲撃を包み込む。翼から発せられる冷気が砲撃に触れると、凍りついて行く速度が一気に上がっていく。

そして——完全に砲撃は凍りついた。

「……驚きです。私の最強の魔法だったんですが、まさか凍らされるとは……」

氷った砲撃を粉々に砕くと、少女の目が大きく開かれていたのが見えた。逃げる様子はないが一応念のため顔以外を氷漬けにする。

「君もすごいよ。常に冷静だし、頭の回転も速い。俺の二手も三手も先を考えてるんでしょ?」

「それくらい当然です。なにせ、「理」のマテリアルですからね。考えるのは得意です」

「理」のマテリアルか。

「君の話し方からすると、他にもマテリアル? とか呼ばれる人がいるんだよね?」

「どうでしょうね。暇なら自分で探してみるといいのでは?」

「目的は?」

「あなたを倒すことです。が、それはたった今叶わなくなってしまうました」

「本当にそれだけ？」

「……どういう意味でしょうか？」

「君との闘いが終わって気が付いたんだけど、ここ以外にも結界が発生してる。ということはこの街で何か起こってるのは確かでしょう？で、君を倒しても消える様子はないから他にも仲間がいるんじゃないのかなって」

少なくとも今起きていることにこの娘が関与しているのは確定だ。

「……あなたの言う通りです。私の目的は——ああ……どうやら時間切れですね」

少女の体が徐々に消えていく。

「ブレイブ、この娘はどうなってるの？」

《そちらの方は守護騎士の方達と同じ魔導生命体です》

短い説明ではあったがそれだけで理解した。魔導生命体にとって魔力は生物という水分や血液と同じで、大量に失えば死につながる。恐らく彼女は最後の一撃で相当な量を消費してしまったのだろう。

「もう……会えない？」

「さあ、どうでしょうね？ ……ですが、もしもう一度見えることが可能ならば、私の元となったオリジナル——タカマチナノハに会ってみたいです」

「その時は連れて来るよ。とっても良い娘だよ」

「そうですね。期待してます。ああ、それからもう一つ。次は、決して碎け得ぬ力を手にしてあなたに勝ちます」

リベンジに燃える瞳が俺を映していた。

「そっか。うん、待ってるね。あ、ところで君の名前って無いの？」

「理」のマテリアルで星光の殲滅者であることは聞いたが名前は言っていない。

「名前ですか？ ……そのようなモノはありません」

名前が無い……か。

「わかった。だったら宿題ね」

「？」

少女は可愛らしく首を傾げる。どうして宿題を出されるのかが分からないのだろう。

「次会うまでに自分の名前を考えてくること！　いつまでも『君』とかって可哀想だから」

「そういうことですか。分かりました。次会う時までには必ず。それでは……さらばです」

「うん、『またね』！」

光の粒子となつていく少女が消えていくのを見送つて再会を誓う言葉を告げる。

——少女は消えゆく最後まで笑顔だった。

「まずは十香達に連絡だね」

携帯で連絡を入れるが繋がらない。念話の方も試してみるがそれもダメだった。

「この結果の所為か」

十香達精霊は魔力を持っているわけではない。だから一般人と同じように結界の外に弾き出されたのだろう。

「次は……なのは達か。ブレイブ」

《すぐに繋がります》

ブレイブがディスプレイを出すとなのはの顔が映った。

『あ、空君！　無事だったんだね!?!』

「うん、大丈夫だよ。なのはも無事そうだね」

……やっぱりあの娘と全然違うね。

なのはの顔を見て先程まで戦っていた少女の事を思い出す。

「今何が起こってるのか分かる？」

『えっと、ユーノ君曰く、この間倒した防衛プログラム、闇の書の闇の残滓が凝縮されたような存在がいるんだって』

闇の書の闇つてややこしいな。それはともかく、完全に消したと思つていたはずの防衛プログラムが蘇ろうとしている。

『それで、その存在がある限り、闇の欠片は生まれ続けるらしいの』  
闇の欠片？

「闇の欠片って？」

『え、空君は私達の偽物に会ってないの？』

「偽物？ 会ってないけど、それってどんな感じ？」

もしかして先程の少女が闇の欠片と呼ばれる存在なのかな？

『あ、でも、偽物……って言うよりも本人の過去を写し取った感じに近いと思うの。私はさつきヴィータちゃんの偽物と戦ったんだけど夜天の書の魔力を集めているみたいだったよ』

魔力集めはすでに終わっているから、なのはの例えはかなりの射ていると思う。それにその話からすると、あの娘は闇の欠片じゃないことになる。となるとあの娘の正体は闇の残滓と呼ばれる方だ。

「じゃあ。この事件の解決方法は闇の書の残滓を倒せばいいってことか」

『うん、ユーノ君もそう言った』

「多分だけど、その残滓は俺達の誰かに似てる」

『でもそれだと欠片と同じなんじゃ？ そもそもどうしてそう思うの？』

「さつきなのはそつくりの娘と戦った」

『え!?! 私そつくり!?!』

「声も容姿も魔法も似てた。けどね服の色や髪型、性格は違うんだ」

『……そっかあ……私そつくりの残滓かあ。少し……会ってみたかったかも』

「会えるよ」

『え?』

「約束したんだよ。また会おうねって、それになのほも紹介するってね」

『じゃあ、楽しみにしてるね!』

互いの情報を伝え終えて通信を切る。そして、頭の中を整理する。

現在、街中に結界が張られて、なのは達の偽物、闇の欠片が生まれている。欠片は残滓を倒さないと無限に湧き続けるとのこと。

欠片は俺達にそっくりらしく、過去の自分がそのまま存在してる。残滓は俺達の誰かにそっくりだが細かい所は違う。

あの娘は自分を残滓、ではなくマテリアルと名乗ってた。

無限に湧くってゴキブリみたい。

「こっから大変だね」

《マスター、休憩中の所悪いのですがシエラさんからの連絡が入ってます》

通信を繋げるとブレイブ越しにシエラの声が伝わって来た。

『主、ご無事ですか!』

「うん、大丈夫。そっちは?」

『我々の偽物と何体か遭遇しましたが、プレシアやリニスの助けもあって即刻まつさ……ゴホンゴホン、倒しました』

今、抹殺って言おうとしたよね?

『私と合流していただけませんか?』

「わかった。一人でいるよりは楽になるだろうからね」

禁手で無双は出来るだろう。しかし、使える時間に限りはある。だからできるだけ体力を温存するためにシエラと合流するのが得策だと考えた。

シエラから合流地点を教えてもらいそこに移動を開始した。

S i d e o u t

S i d e ヴァーリ

この街に結界が張られてから顔見知りと遭遇したが、俺に襲い掛かって来た。話しかけてみたが、誰一人まともな会話を出来ずに戦わざるを得なかった。そして、力加減を間違えて相当なダメージを与えたら消えた。

「……これはどういうことだ?」

『あいつらの偽物……と考えるべきだな。言動だけじゃなく、感じる魔力もどこがおかしかった』

「そうか」

とりあえず、空達と合流すべきだと考え、移動を始めた。  
しかし、それを邪魔するものがいた。

「やあ、ヴァーリ。ちよつと戦つてくれない？」  
バリアジャケットと呼ばれるものを着て、右手には銀色の銃が握られていた。

そいつは俺の一番の友でライバル。  
だから、見るだけで分かる。こいつは偽物だと。本物に遠く及ばない紛い物だと。

「……ああ、思う存分に戦つてやる——空」

S i d e o u t

S i d e は や て

海鳴市全体に結界が張られてから、皆の偽物が現れた。リインフォースが言うには、夜天の書が闇の書と言われていた時に生まれた闇。つまり、闇の書の闇が復活しようとしているということだ。

完全に復活したら、またあんなのと戦わなあかんの？ ……あ、でも、空君さえいればそんなでもなさそうや。

勝手に不安になって勝手に解決した。

「あ、はやて。遊ぼうよ」

「はやて、アイツは闇の欠片だぜ」

「うん、分かつとる。他の人じゃ区別つかへんけど、アレは何かすぐに偽物だつてわかつたわ」

自分でも不思議なんだけど、アレは空君やないって分かる。いつもの空君から感じる温かさ？ 優しさ？ うーん、ともかく何か足らんや。

もちろんそれがわかるのは私だけじゃなく、私の家族も同じだ。

「ハッ、テメエじゃ遊び相手にもなんねえよ！」

アイゼンを振り回し、準備万端のヴァータ。

「あらあら、空君の偽物って……」

優しい微笑やけど目が全然笑ってないシャマル。

「我が剣の錆にしてくれる」

ある意味いつも通りのシグナム。

「最近出番がない所為でストレス溜まつてるんだよねー。発散させてもらおうよ?」

完全に八つ当たりする気満々の私の姉、あかり。

「……………」

無言のザファイラ。いや、なんかコメントせんか!

「偽物死すべし、慈悲はない」

なんか物騒なこと言ってるリインフォース。メツチャ怖いんやけど。

「七対一が卑怯、なんて言わせへんで。私らは皆の偽物がいることにただでさえ頭来とんのに、好きな人の偽物なんて尚更や。覚悟してもらうで?」

八神家総出で空君の偽物を潰しにかかった。

Side out

Side 愛衣

今起きてることは確か……リリカルなのはポータブルの奴だったかしら?

正確なストーリーは大雑把にしか分からないが、現れた偽物を見て思い出した。

戦ったのはシグナムやシャマル。原作キャラは原作通りの感じだったわね。ただ、問題は――

「愛衣、なのは、雄人、三人で何してんの?」

空君の偽物がいることだ。見た目は彼と全く変わらない。でも違う。彼は偽物だ。私の本能がそう告げるのだ。

「気に入らないわね」

「うん、私も」

「とつととぶつ飛ばそうぜ」

構えてすらいらない空君の偽物に私達は容赦なく砲撃をぶつけた。

S i d e o u t

S i d e アリシア

「フェイト、アルフ、アレは本物だと思う？ 私は絶対に違うと思う」

目の前にいる空の偽物。私達が良く知ってる彼と全く同じ姿をしてる。だが、それだけだ。

「私も違うって断言できる」

「私もだよ。匂いが全く違うね」

「だったらすることは一つ。アレを倒さないかね！」

私達に向かって手を振る彼に対し、攻撃という返事を返す。

「力」のマテリアルは襲撃者です！

「力」のマテリアルは襲撃者です！

S i d e アリサ

——ムカつく。

そいつを最初に見て思ったことはそれだった。

理由は簡単だ。そいつが私の好きな人の偽物だったからだ。たったそれだけの理由で？　と思う人もいるかもしれないが私には、私達にはそれだけで十分だった。

「……自分の偽物を見た時よりも空の偽物が一番嫌ね」

燃え盛る刀——クリムゾン・ブレイズ灼天の炎刃で空の偽物を簡単に切り裂いたあとで呟く。

「そうだね。他の人達のも見たけど空君のは何だか違うって思っちゃうんだよね」

「一々本人に確認を取らなくてもいいくらいになぜかハッキリするぐらいだから」

明日奈もさすがにも私と同じで不機嫌そうだ。

「さ、今回もさっさと片付けましょ」

二人と一緒に闇の残滓と呼ばれる元凶を見つけるために移動を開始する。

S i d e o u t

S i d e 空

シエラと合流する場所に向かっていている途中でフェイト(?)に出会う。

この娘も偽物かな？　しかも、色違いだからさっきのなのは似の娘こと同じマテリアル……だと思う。

髪型がフェイトにそっくりな少女は髪は水色、デバイスの先から出

る魔力光も水色だった。瞳の色は赤く、ややツリ目がちな少女。

「ねえ、君もマテリアル？」

「ああ、そうだよ。僕は「力」のマテリアル、雷刃の襲撃者。……そういう君は闇の書の闇を倒した魔導師……いや、炎の精霊」

話し掛けただけなのにいきなり殺気をぶつけられる。言葉を続ける度にその濃さは増していくばかりだ。

……龍精霊化したあの時の事覚えてるんだ。

「……何故だろう。君の存在は、著しく不愉快だ。君を見ていると苛立ちが募る」

俺、何か恨みを買うようなことした……ね。闇の書の闇——  
——ナハトヴァールを消したんだからそりゃ恨んでるか。

「上手くは言えないが、今の自分が自分でない感覚がある」  
「そっか」

自分が自分でない感覚、か。何となく親近感が湧くなあ。

「そして、僕の魂がこう叫ぶ！ 君を殺して我が糧とすれば、この不快も消えるはず、と！」

「悪いけど、俺は簡単には殺されるわけにはいかないよ」

「そうはいかない。僕は帰るんだ。あの温かな闇の中に……！ 血と炎いが渦巻く、永遠の夜に。さあ！ 我が剣の前に……君は死ぬ！

僕は飛ぶッ！」

温かい闇、永遠の夜ってどんな感じなのかね？ 少なくとも碌でもないモノなんだろうけど、ちょっと気になる。

「いいよ。——君の持てる力の全部を使つて掛かって来なよ。君の全てを壊して、俺が勝つ！」

睨み合うこと数秒。

「光翼斬！」

先に仕掛けたのは相手だった。フェイトやアリスアのよく使う魔法、ハーケンセイバーに似た魔法を使つてきた。

青い魔力刃が回転しながら俺に向かってくる。

あの技の弱点は……横からの攻撃に弱い！

ギリギリまで刃を惹きつけて躲し、魔力と武装色の覇気を纏った蹴

りで粉々にする。

「殺すとか言ってた割にこんなもん？」

「クソッ！」

馬鹿にすると悔しそうに歯ぎしりをするのが窺えた。

そこから、ムキになった彼女はガムシヤラにデバイスを振り回したり、魔法を発動するが、見聞色の覇気でそれらすべてを躲し続ける。

「何で当たらないんだよ！ このッ！ このッ！」

数十分俺が躲し続けると攻撃が当たらない事に苛立ち、痲癩を起しだした。

その隙を突いて俺は魔力弾を撃ち込むが寸でのところで避けられた。

「僕の速さなら君の鈍重な攻撃位躲せるんだよ！」

意趣返しのもりか、俺を馬鹿にしたようにハンッ！ と鼻で笑う。

「じゃあ、君が捉えきれない速さを見せてあげる。九喇嘛」

『おう！』

両手を合わせて魔力を練り上げる。体いっばいに魔力が伝わると、体中から橙色の魔力が溢れて魔力で出来たコート状の上着ができ、黒い勾玉やラインが入る。

「変身！」

足元に防御魔法を出し、思いつき踏み込んで接近。少女とすれ違いざまに一閃。

「ッ!？」

少女は目を大きく見開いて言葉が出ないほど驚いていたようだ。

「もつと行くよ！」

同じように足元の防御魔法を強く蹴り一閃。更に空中で体に向きを無理やり変え、再び足元に作った防御魔法を蹴って少女に肉薄し攻撃をする。それを幾度となく繰り返す。

「舐めるなアー！」

攻撃されっぱなしで手も足も出ないかと思いきや、デバイスを水平に振り回して円状の魔力の刃を飛ばす。

どこから攻撃が来るか分からないから全体にやって防いだきたか

！

「影分身の術！」

一旦、距離を取ってから印を結び影分身を四体出す。

「増えた……!?」

『行くぞ！』

分身が一斉に詰め寄る。俺はその間に技の準備をする。

「は、はや——ガッ！」

一人目の分身が脇腹を蹴る。

「こ、これくらいなら……ッ！」

彼女が耐性を立て直したところで二人目が正面に入り、上に蹴り上げる。

更に三人目が先回りし、上から魔力で作った巨大な拳を叩き付ける。

「ガハッ！」

彼女が地面にぶつかる、俺はすかさず止めに入る。彼女の上空に立ち、大きめの魔力の球体を完成させる。

それがヤバいと本能的に感じたのか、彼女はすぐにそこから逃げ出そうとする。——が、彼女の足元から出てきた魔力の手が彼女をガシツとつかんで離さない。

「は、離せ！」

四人目が抑えてる間に俺は急降下して手に持った魔力球をぶつける。

「大玉螺旋丸ッ！」

通常の螺旋丸よりも大きいサイズで乱回転する球体が彼女に触れた瞬間、一気に膨張し、周囲を削る風を呼び起こす。

「——ッ!!!」

彼女が叫んでいるのだろうが、その声は吹き荒れる風によってかき消される。

風が止んだ時には、ズタボロになった少女が抉れた地面の上に仰向けになって倒れていた。

「……ちよつとやり過ぎた?」

『やり過ぎだな』

九喇嘛にハッキリと言われ軽くへこみながら少女のもとに寄る。

「えーつと、大丈夫……なわけないよね」

「当たり前だ……」

「アハハ……ごめん」

いくら敵であってもフェイトに似た子を痛めつけるのって辛いなあ……。

「あーあ、僕の負けか……。悔しいなあ……。でも、なんだろう? 気分は悪くない……。かも」

少女が話し出すと体が徐々に光と化す。この娘もなのは似の娘と同じように消えるのだ。

「悔しいと思ったならきつとまだ強くなれるさ」

「ホントに?」

「ああ、きつと。今よりも速く、強くなれる」

「……そつか。その時はまた僕の相手してくれる?」

「うん、喜んで!」

「それならよかった。……安心して逝ける」

「逝く、だなんて大袈裟だよ。君はちよつと眠るだけだから」

「そうだ、そうだった。ちよつと眠るだけだ」

「だから……あ、君も名前ないんだよね?」

「それがどうかしたの?」

「さつき君と同じような娘に言ったんだけどさ、次会う時までに関の名前考えてきてって宿題出したんだ」

「名前、か……。分かった。考えてみる。そして、君が追い付けないくらいに速さを身につけて勝ってやる!」

最期に精一杯の力強い笑顔を作ってから彼女は完全に消えた。

「さて、シエラの所に行かないと」

上昇してシエラとの合流地点に向かう。

数分ほどしてシエラに指定された目的地に着いた。

「えーつと、シエラ——」

「主！」

周りを見回していると、後ろからシエラがやって来た。

「ご無事で何よりです、主！」

「そつちこそケガは無い？」

「はい！」

シエラは嬉しそうに頷いた。

「ちよつと、私をのけ者にしないでくれない？」

「あれ？ ティアマット？ 何でここにいんの？」

声のした方に振り向けば意外な人物がいた。蒼くて長いストレートの髪の毛の麗人、人間形態のティアマットが来ていた。

「今日、空の家に行ったらあなたと入れ違いになったのよ。そして運悪くこの出来事に巻き込まれたわけ」

「ここまで来れたのはシエラのを付いて来たからか。

「それは災難だね……。でも、ティアマットがいれば百人力だよ！」

「フッフ、ありがと。あなたの使い魔として、五大龍王として存分にやらせてもらおうわ。……。ああ、それから一々ティアマットって長いからティアでいいわ」

「わかったよ、ティア」

「むーッ！」

俺がティアマットもといティアと話していると、シエラが面白くなさそうに頬を膨らませて俺達を見ていた。

「どうかした、シエラ？」

「主、その女は誰ですか!？」

「誰って……使い魔のティアマット。あ、そう言えば、二人はまだ会ったことなかったね」

二人は揃って頷いたので、互いのことを紹介した。

「じゃあ、早く終わらせようか。と言ってもティアがいるからそんなに苦でもないはずだから」

「あら、そこまで期待されてるなんてね。嬉しいわ」

「わ、私だって主のために頑張ります！」

《嫉妬乙》

「なッ!? この駄バイス! ふざけたことを抜かすな!」

「プ……フフフツ。こういうの楽しくていいわ。長生きしてきたけど今までに無かったことだもの」

ブレイブが唐突に毒を吐き、シエラが顔を真っ赤にしてブレイブに怒鳴り散らす。それを見ていたティアが軽く嘔き出す。

女(?)三人(?)寄れば姦しいとはこういうことなんだろうね。なのは達や十香達でかなりの頻度で見てるけど未だに慣れない……。……ティアはドラゴンで雌。シエラは防衛プログラムで女性。ブレイブはデバイスで声からして女性のAI。性別が女でも人間が一人もいない……。だと……。!? しかも俺も人間じゃない!

改めて自分と一緒にいるメンバーを見て驚愕する。

《私はマスターのデバイスですが何か? 未だユニゾンされてないシエラさん》

「グツ……」

どこか棘のあるブレイブの言い方にシエラは言葉を詰まらせる。

「まあまあ、いいじゃない。デバイス? とかいうのは私にはまだよくわかんないけどあなたも空の家族みたいなものなんでしょう?」

「そ、そうだ! 私はどこかの駄バイスと違ってあんなことやこんなことが出来るからな!」

あんなことやこんなこと?

《あんなことやこんなこと? 具体的にはどのようなことで?》

「そ、それはあれだ! その……ごによごによ……」

頬を赤らめさせながら小さい声で何かを呟いていたがよく聞こえなかった。

《なるほどなるほど。シヨタコンとか生きてて恥ずかしくないんですか?》

シエラの小声はブレイブには聞こえたらしく更なる毒を吐いた。

「グハアッ!」

「ブレイブ、もう止めてあげて。シエラのライフはもうゼロだから」  
それからシエラはシヨタコンではないと思うな。

《……分かりました》

「フッフ、やっぱり空の使い魔になって正解だったわ。こんな日々が毎日あるなら退屈しなさそうなもの」

「そう？ それならよかった。じゃあ、おしゃべりはこの辺にして――」

『空君、聞こえる?!』

「エイミーさん、聞こえています」

モニター越しでもエイミーさんの焦りが伝わる。

『空君の近くに巨大な魔力反応が出現したみたい！ 急いで向かって対処をお願い!』

「了解です」

通信を切ると、今度はリインフォースさんからの通信が来た。

『今回の事件だが、闇の欠片の中枢を叩かねば無限に増え続けることは知っているな?』

「はい、そう聞いてます」

『恐らくだが、その中枢は私か空の側にいるシエラの姿になっているはずだ』

「分かりました。そいつを倒せばいいんですね?」

『……すまないが頼む』

「任せて下さい」

巨大な魔力反応がした方に向かい、欠片の中枢を探す。

「いたわ。あそこにいるのがそうじゃないかしら?」

真っ先に見つけたティアの指さす方を見る。そこには銀色の髪を靡かせた女性がいた。

「情報と一致します。あそこにいるので間違いないかと」

シエラからの確認も取れたので、その人が中枢だと判断する。

「おーい！ リインフォースさん!」

「……リインフォースとは誰だ？ 私は闇の書の管制人格だ」

大声で呼び掛けるも返って来た反応は素っ気無いモノだった。

あれは初めて会った時と同じ雰囲気だね。

「……お前は何をしに来た？ ここにいれば時期に私は暴走する。早くどこかへ消えろ」

「ごめんなさい。それは出来ません。あなたを止めないといけないんです」

「……私を止める？ それは無理だ。今まで誰も止められなかった。それをお前のような子供に出来るはずがない」

うわー、あの時と全く同じじゃん。全てを諦めた眼。疲れて摩耗しきった心。今考えてみてもあの人がどれだけ辛い思いをしてきたのかは、俺には全く分からない。

「……私達完全に無視されてるわね。ちよつとムカついたわ」

ティアが手に蒼い炎を出し、リインフォースさんの偽物に対して容赦なく放つ。

「……盾」

ティアの攻撃は簡単に防がれるもののティアも注意を引くだけで手を抜いたのか、特に気にして無いようだった。

「ごめんなさいね。あなたがあまりにも空に夢中だったからつい攻撃しちやっただ」

「……どうやら何を言っても無駄なようだな。逃げるなら今の内だぞ」

「逃げる必要なんてないわ。あなた如き私一人で十分なもの。むしろあなたが逃げなくて大丈夫？」

マジかー、流石龍王だわー。

ティアがものすごくカッコよく見える。

「……戯言をほごくな。そこをどけー」

リインフォースさんの偽物が大量のブラッディダガーを展開し、俺達に向かって放つ。

ティアがドラゴンの翼を生やしてそれらすべてを大きな翼で叩き落とす。

「ふーん、やっぱり大したことないわね」

傷一つない翼を見てティアが不敵に笑う。

今度はこちらの番だと言わんばかりにティアは腕だけを龍化させ、蒼い巨腕で殴る。

「……盾！」

何!?!」

ティアのパワーはリインフォースさんの出したシールドを粉々にし、そのまま殴り飛ばした。

「グアアアッ！」

吹き飛ばされたリインフォースさんは叫びながらビルの中に入った。

そして、止めとばかりに特大の蒼い炎をリインフォースさんが吹き飛んだ方向に向けて放つ。炎が着弾すると大爆発を起こし、偽物が突っ込んだビルは跡形もなく瓦礫と化していた。

「龍王ヤバいな」

『龍王最強と言われるだけの實力だ』

中にいるドライグ達はティアの實力を知っているから、驚きは無かった。

「あれ？　じゃあ俺と初めて戦った時は手加減してた？」

今の圧倒的な戦いを見るとそう思えてくる。

「……正直に言うと、最初は人間の子供と思って舐めてたわ。でも、最後の一撃は本気だったのよ？　それにあなたの實力を認めたら使えい魔になったわけなのだから」

俺に申し訳なさそうにしながら答えてくれた。

「そっか。だったら今度は最初から本気をお願いね」

「ええ、そのつもりよ」

実のことを言うと、ティアが使い魔になってから一度も戦ってない。理由はティアがレーティングゲームの運営で忙しいのと、俺が最近まで夜天の書の魔力集めで忙しかったからだ。

「ブレイブ、リインフォースさんの反応はまだある？」

ティアとの会話を切り上げ、リインフォースさんについてブレイブに尋ねる。

《消えかかっていますが何とか反応はあります》

「わかった」

瓦礫の山をどかしてリインフォースさんを見つけ出す。

「こんにちは、リインフォースさん」

消えそうになっているリインフォースさんを抱き起して俺の膝の

上に頭を乗せる。いわゆる膝枕の状態だ。そのままの体勢でリインフォースさんに話しかける。

「……まさか本当に止められるとはな」

「ティアは強いですから。……悪い夢は、長い長い闇の夜は終わったんです。リインフォースさんはもう一人じゃないんですよ」

「……そう、なのか？」

「はい。今のリインフォースさんは、はやてっという優しい主やはやてのお姉ちゃんのあかり、それに守護騎士の皆と仲良く過ごしてるんです。だから、もう何も心配しなくていいですよ。安心して下さい」

「……そう、か。私は……もう……」

「眠って起きたらきつとわかりますから。それに……」

「これ言うの恥ずかしいな……。あの時はムキになって言っちゃっただけなんだよね……」

「それに？」

「あ、あう………。そ、その………幸せにするって約束しましたから」

「………。そうか。君が幸せにしてくれるのか………。嬉しいよ」

それは小さな微笑だったが、とても綺麗だと思った。数秒ほど見惚れていたらリインフォースさんが口を開いた。

「………。どうやら時間のようだ。君との時間は五分にも満たないが有意義に感じたよ」

「大した事じゃないのに大袈裟ですよ……。……でもまあ、お休み、リインフォース」

消える直前に体を抱き起し、リインフォースさんのおでこに軽くキスをした。

——— ツ!?

光の粒子になって消えたリインフォースさんを見送った後で背筋に寒気を感じた。

後ろに振り返れば、

「大きな爆発音がして来てみれば———」

「リインフォースのおでこにキスとか———」

「何してんのよ!」

「ちよつとばかし——」

『O☆H A☆N A☆S Iしよっか♪』

それはそれは綺麗な笑顔の少女達般若(目は笑ってない)と呆れた表情をした仲間がいました。彼女達の額には青筋が薄っすらと浮かんでる。若干一名だけ顔が真っ赤になっていた。

「ティア……」

「助けないわ」

満面の笑み断られる。

まさかの使い魔に二度も捨てられるとは……うん、何となくこうなるって分かってたけどね！

「ふう……。……正直に言っつて反省も後悔もしてます本当に調子乗ってましたのでどうかO☆H A☆N A☆S Iだけは勘弁してください」

一息吐いてから、土下座しながら言い切った。

『謝って許されるとでもっ…』

デスヨネー。

結局、その場でボロボロになるまでO☆H A☆N A☆S Iを喰らった。

闇を統べる王様です！

闇を統べる王様です！

S i d e 空

「……………ハッ！ 俺は一体何を…………？」

「あら、目が覚めた？」

目を開けると上から声が聞こえた。声の方に目を向けてみれば、蒼い長髪が映った。

頭に柔らかい何かがある？

「ティア…………？ 俺、眠ってた？」

さつきまでリインフォースさんと話して…………それでは達が…………。あらら？ その先が上手く思い出せない。

「あなたは疲れて眠ってしまっただけよ」

「で、でもこんな時に眠るなんて…………」

それにそんなに疲れるようなことをした覚えもないんだけどなあ…………。

「あなたは疲れて眠ってしまっただけよ」

「そ、そう？」

「そうよ」

やけに迫力のあるティアに二の句が継げなくなる。

「…………ところで、何でティアに膝枕されてるの？」

「主、目覚めたのであれば早急に退くべきです」

ティアの声が上から聞こえることに疑問を持つてみれば、答えは簡単に見つかった。さつき言った柔らかいものとは、ティアの太ももの感触だったのだ。

そして、すぐ側にいるシエラが冷たい声音で急かしてくる。

「一度こういうことしてみたかったのよ。あ、もしかして嫌だった？」

「ううん！ そんなことないよー！」

「あ、主!？」

「そう、それはよかったわ。ウフフ♪」

余程機嫌がいいのか鼻歌まで歌い始めていた。

「俺が寝てる間に事件はどうなった？」

「欠片の中樞が消えたから無限に沸き上がることはもうないわ。あとは残った欠片だけよ。他の皆はそれを倒しに行ってるわ」

「なら、俺も行かないと」

「そうね。いつまでも休んでいられないものね」

ティアの太ももから頭をどけて立ち上がる。

軽く体をほぐしてからバリアジャケットを展開し、移動を開始した。

「貴様……あの時の……ッ！」

移動開始から五分ほどして、はやて似の顔に銀髪、緑色の瞳、そして色違いのバリアジャケットとデバイス、側で浮遊する紫の表紙の本を持った少女と遭遇した。

向こうは俺のことを知っているらしく、親の仇でも見るかのように睨んでいた。

フェイト似の娘と同じで、俺がナハトヴァールを吹き飛ばしたことを覚えてるみたいだね。

「君はマテリアルだよな？」

聞かなくてもあの二人のように色違いだから分かるんだけど、一応確認をしてみた。

「ふんッ！ 貴様なんぞに教えてたまるか！ やられたことでさえ腹立たしいと言うのに、貴様は我の一部を持って行ったのだから忌々しいことの上ない！」

一部……？ あの娘の言う一部……それってまさか！

「シエラのこと!?!」

隣にいるシエラがビクツと肩を震わせる。

「シエラというのは知らんが、貴様の隣にいるその者が我の一部に相違ない」

元々防衛プログラムだったシエラは目の前にいる娘とは一つだった。でも、それは今や俺の所為でバラバラ。あの娘からしたらシエラ

は裏切り者にも見えるのだろうか。

「……君は、シエラをどうするつもり？」

「そんなの決まっているであろう？ そやつを捕獲し、我が復活の糧とさせてもらう！ 無論、貴様も殺して糧にさせてもらうぞッ！」

「そう……だったら尚の事、君には負けられない理由が出来たね。シエラ、ぶつつけ本番だけやってみよっか」

「い、今ですか!? それはいくらなんでも無理があります！」

「大丈夫。シエラの事信じてるから」

「で、ですが……ッ！」

「この戦いは俺一人で終わらせても意味はないと思う。シエラにも手伝って欲しいんだ。防衛プログラムの一部じゃなくて、俺達の家族として。……どうかな？」

「わかりました……。ですが無理だと判断した場合、即座に解除しますからね！」

「それでいいよ。さあ、行くよ」

『——ユニゾン、イン！』

俺達二人が光に包まれて、一つになる。

光が収まると、体から魔力が溢れて来るのを感じる。

「それがユニゾン？ 随分と姿が変わるのね」

近く似たティアは俺の姿が変わったことに驚いていた。

「まあね。俺も初めてやってみたけどそうなるらしいよ」

体を見回すと、バリアジャケットの形は変わって無かったが、色合いが水色メインになり、白いラインが入っていた。

「眼はより深い青に、髪は彼女と同じ蒼銀……中々似合ってるんじゃない？」

「ありがと。〈適合率はどのくらいある？〉」

『〈90%を超えています。これなら問題ありません〉』

よし、これで問題なく戦えるね。

「ティア、悪いけど……」

「分かってるわ。大人しく見守らせてもらおうわ」  
空気を読んで大人しく離れてくれた。

「随分と待たせちゃったね」

「よい。なにせ貴様らの最後の戦いなんだからな。後悔を残さないようにさせたまでよ」

この娘、意外と……いや、今はいいか。

「最後にはならないと思うな。——だって、今の俺負ける気しないから」

「舐めた口を……ッ！」

「あとで泣いても知らないよ？ ホーリーレイ」

《Holy ray》

挨拶代わりに複数に枝分かれする魔法を放つ。シエラとユニゾンしてる影響なのか、チャージがほとんどなくなつて撃てた。

ユニゾンのおかげで、魔力の消費もいい感じに削れてるのか。

「この程度——ッ!?!」

侮つて防御魔法を展開したが、それは悪手だ。ホーリーレイは貫通に優れた魔法であるため、大抵の防御魔法ぐらいなら貫ける。

少女が出した防御魔法を壊し、少女の体を枝分かれした砲撃が霞める。

直撃は避けられたか。

「今度はこちらの番だ！ 喰らえ、塵芥！ エルシニアダガー！」

少女の周囲に幾つもの魔力弾が展開されて、一斉に発射。

『へあれは誘導性のある魔力弾です！ 引き付けてまとめて撃ち落としましょう!』

シエラの指示に従い、後方に下がり、魔力弾を惹きつける、

「まだだ！ ドウムムブリンガー！」

五本の魔力刃が扇状に広がりながら、俺に差し迫る。

俺は特大の魔剣と聖剣を両手に作り出して、縦に振り下ろす。二本の剣が魔力弾と魔力刃を一気に破壊———と思いきや、誘導性能がある魔力弾はまだまだ残っていた。

……やっぱ全部は無理か。

ブレイブを銃にして撃ち落とそうとするが、見聞色の覇気で攻撃が来るのを感じ取ってバックステップをすると、横から黒い砲撃が通り過ぎた。

「危ない危ない。もうちよつとで直撃だったよ」

砲撃が来た方には少女が舌打ちをしていた。

「ってそんなの見てる場合じゃない！ 誘導弾を何とかしないと！」

目前に迫る誘導弾を落とすために急上昇。手が届く範囲まで引き付け――蹴る。

「蹴った……だと……!?」

まさか自分の攻撃が蹴りで防がれるとは思ってなかったのか、目を大きく見開いていた。

「驚くのは早いんじゃない？」

足元に作った防御魔法を蹴って、少女に――

「ライダーアア………キイイイイックッ！」

男なら誰もが憧れるライダーキック。簡単に言うと、ただの魔力を足に込めた跳び蹴りだ。

「あ、アロンダイト！」

先程横から撃って来た砲撃魔法を慌てて放った。

「テエエエヤアアアアアアアッ！」

それを飛び蹴りとぶつけるのは明らかにこちらが不利だと思い、その場で無理やり体を縦に回転。砲撃に向けて武装色の覇気と魔力を纏った踵落としをして、文字通り砲撃をへし折った。

「んなッ!？」

これには相手も開いた口が塞がらないでいた。

偉そうな態度をとってた人が驚く顔は中々悪くない気がした。

「そして今度こそ……ライダーアアアアア………キイイイイイックッ！」

「またか!? しつこいぞー！」

今度は慌てることなく何重にも防御魔法を展開し、防ぎにきた。

「ハアアアアアアアアッ！」

俺の足と少女の防御魔法が衝突。触れている個所から激しい火花と轟音が出る。

俺は蒼白い魔力を全開で放出して更なる力を込める。

「負けぬ！ 王である我が負けてたまるものかアアアアアアッ！」

執念にも似た思いが少女の口から零れた時、一瞬押し返されそうになるが負けまいと、こちらも押し返す。そして、防御魔法に亀裂が入る。

「砕けるオオオオオオオオッ!!」

亀裂は徐々に広がり、ついに粉々に砕け散る。防御魔法を砕いて、そのまま少女を貫く。

「グアアアアアアアアッ！」

仮面ライダーの敵と同じように数秒して爆発を起こす。

あの娘は……いた！

爆発で起きた煙の中から少女が墜落していくのが見えると、急いで救出に向かう。少女を抱きとめるてから、ゆっくり地上に降りて公園のベンチに寝かせる。少女の体は限界が来たのか光の粒子となり始めた。

「……何故、我を助けた？ あのまま見過ごせばいいモノを……」

「君が負けて泣いてないかなーって思って」

「性格最悪だな！」

「ま、半分は冗談だけど」

「なら残りの半分は本気だったのだな!？」

「あ、ごめん。やっぱり九割くらい本気だったかも」

「尚更最低だな！」

おふざけはここまでにしようか。

「……本当のこと言うと、はやてに似た娘が落っこちるのって嫌だったんだ」

「ああ、なるほどな。我の映し身と重なって見えたわけか」

「そういうこと。敵だつてことは分かってもどうしてもね……」

「その割には貴様の攻撃は容赦の『よ』の字も無かったがな……。となるとあれか？ ひよつとして我の映し身である八神はやてが嫌いなのか？」

「なわけないじゃん！ はやてのことは好きだよ！」

「それもそうよな。もし嫌いなら、似ている姿だけの我を助けたりなんぞあるはずもなからう」

少女はどこか上の空で一人納得したように呟く。

「……時に聞くが」

少女はしばらく黙っていたら再び口を開いた。

「なに？」

「貴様は我以外のマテリアルに出会ったか？」

「うん、二人ほど。それがどうかした？ 王様」

「そうか。他の者たちも……。おい、貴様。今何と言った？」

突然こちらに振り返ると、今にも掴みかかりそうな感じの視線を向ける。

「二人ほどって言ったけど？」

「それではない！ その後だ！」

「それがどうかした？ って言った」

「それも違う！ その後は！」

「君のことを王様って呼んだ」

「！」

何か不味かったかな？

「……どうして我が王だと分かった？」

「え、だつてさつき自分で『王である我が負けてたまるかー』って言うてたじゃん」

あの時の叫びにはものすごい気迫を感じたなあ。

「そ、そうか……」

「何か間違ってた？」

「いや、構わん。我は『閻統べる王』なのだからな。……それよりも我は二人には会えなかつたか……」

二人？ あ、あの二人の事か。

王様の言う二人が誰なのかはすぐに解った。それに今の言い方からすると、マテリアルは全部で三人ってことになる。そしてその三人とは戦いが終わった。となると、残りは闇の欠片のみになるわけだ。なのは達が動いてるから、この事件が終わるのに時間はそれほどかからないだろう。

「結局、私の野望はここで終いになるのか……」

「そうだね。『この世に悪が栄えたためし無し』って言葉がこの世界にはあるぐらいだからね」

この娘の野望——それは闇の書の闇の完全な復活。

「まあよい。例え、私が倒れようと第二第三の——」

「あ、そういうのいいんで」

ネタに走り出した王様を遮る。かなり不満そうな顔だが無視を決め込む。

「実はさ、他の二人とは約束したんだ。また戦おうって。あと名前を考えてきても頼んだんだ」

「それを我にもしろと？」

「うん。ダメかな？」

「構わん。戦うのはともかく、名前ぐらいなら容易いことだ」

予想外にも王様は俺の提案を容易に受け入れてくれた。

「……なんだ？　もしか私が断るとでも思っていたのか？」

「うん、かなりの確率で断れるとばかり」

「……貴様は我を何だと思ってるのだ？　貴様は我に勝った。なら、その頼みを聞くのは敗者たる私の責務であろう」

やっぱりこの娘は——

「王様って実は優しいでしょ？」

戦っていた時にも思っていたことを口にした。

「なッ!?　貴様ふざけたことを抜かすな！　我が優しいはずなどなからうー！」

「えー、そうかなー？」

「そうだー！」

ムキになって否定してくる王様が面白くて笑ってしまう。

「はいはい。じゃあ、そういうことにしておくよ」

「絶対に信じておらんな……。はあ……。貴様の相手は疲れる。我はもう眠る。……。防衛プログラム、シエラとか言ったな。そのものを大切にしなければ貴様を許さんからな」

最後の最後でシエラの事を頼んでから王様は消えた。

「やっぱり王様って優しいよね？」

『素直じゃないがかなり』

俺の中にいる奴らやティアにも聞くと、全く同じ答えが返ってきた。

「さて、これからどうしたもんか」

シエラとのユニゾンを解き、これからどうしようかと悩んでいたところ通信が入った。

『空。こちらクロノだ。至急アースラに来てくれ』

「分かった」

短い連絡を終えて、アースラに転移した。

クロノに呼ばれアースラの艦長室に行くと、魔導師組が勢揃いしていた。

「来たか。……ところで、そちらの女性は誰だ？」

クロノの視線の先にはティアがいた。シエラ同様初めて見るので紹介を求めてきた。

「この人は俺の使い魔のドラゴン、ティアマツト。で、そっちの真つ黒で偉そうなの奴がクロノ」

「一言余計だ。というか実際に僕はそこそこ偉い。よろしく、ティアマツト」

へえー、執務官って偉い役職なのか。

「ええ、こちらこそ」

「……あれ？ ティアがドラゴンだってことに驚かないの？」

クロノやエイミイさん達があまりにあっさりスルーするもんだからつい聞いてしまった。

「この地球はどこか馬鹿げてる。それに君がすることに一々驚いていられないことを最近知っただけさ」

周りではなのは達もうんうんと頷いていた。

俺って変人扱いされてんのね。初めて知った————わけでもないや。何度か言われてたなあ。

「それで今日集まってもらったのはほかでもない。本日起きた事件のことだ。あとは艦長お願いします」

クロノがリンデイさんに話しを頼むと、リンデイさんが立ち上がって話し始める。

「今回は先日倒した闇の書の闇、その残滓が復活を果たそうとして起こった事件です。ですが、皆さんのおかげで無事に解決できました」

リンデイさんが、その後もこの事件の詳細を語ってから一旦区切ると柔らかな笑顔を浮かべた。

「本当にありがとう。皆、お疲れ様」

そこからは解散となったのだが、しばらく皆とおしゃべりタイムだ。互いにどんな偽物と戦ったのが気になるのだろう。

「空君は私に似た娘にあったって言ってたけど、どんな娘だったか教えてくれないかな?」

アースラ内の休憩スペースでなのはから、俺が戦ったなのは似の女の子について聞かれた。

「うーん、なのはより髪が短くて、バリアジャケットの色が黒というか赤紫って感じ。性格も大分違って、あの娘は常に冷静で感情がほとんど顔に出ない娘だったよ。なのはとはまるつきり逆じゃないかな?」

「逆、かあ……。もしかして、あの時空君に会わなくて、ずっと一人でいたらそうなってたかもしれないなあ……」

家族に迷惑をかけないために「良い子」でいなくちやいけないとずっと思いつけてた。それが昔のなのは。今でも多少はそう思っているようだが、なのはは大丈夫だと思う。支えてくれる家族や友人がいてくれるならきつと。

「空は他には会わなかったの?」

「えーっとね、フェイトとはやてのそっくりさん。あとは皆も知って

るだろうけどリインフォースさんくらいかな」

『え、私!? どんなんだった!?』

名前が出されたフェイトとはやてが詰め寄ってくる。

「近い近い。二人共落ち着いて。ちゃんと話すからさ」

『ご、ごめん……』

二人が離れてからわざとらしく咳払いをしたあと話す。

「フェイト似の娘は髪の色が水色、ツリ眼で赤い眼。性格はフェイトより感情豊かで顔に出やすかったよ。でも、あの娘は……自暴自棄っていうか我が儘? 幼い子供? って感じがした。これは俺の勝手な推測なんだけど……もしも、フェイトがプレシアさんと仲が悪かったらあんな感じになってたんじゃないかなって思ったんだ」

『……………』

俺の勝手な推測でフェイト、アリシア、プレシアさんが黙り込んでしまう。

「でも、結局は〴〵もしも〴〵の話だから。今、ここにいるフェイトはプレシアさんと仲が良いでしょ?」

「う、うん!」

「変なこと言っでごめんね。で、最後にはやて似の娘は……うん、良い子だった」

王様は言葉は刺々しいけど悪い娘じゃないんだよねえ。

「髪は銀髪で眼は緑。バリアジャケットが黒くて、夜天の書に似た本と紫の杖。口調は偉そうだけど本当は優しい娘だって思ったよ」

「偉そうな私か……。どうなったらそうなるんやろ?」

「はやてはぼーっとしてるからどうあってもならないと思うよ」

「お姉ちゃん、それって褒めてるん?」

はやてがあかりをジト目で見ると、あかりはそっぽを向いて誤魔化していた。

「皆の方はどうだったの? 俺って残滓と欠片の中枢しか戦ってなくてさ、欠片の方には会わなかったんだ」

「ここにいる人ほとんどに会ったわ。空君の偽物にも会ったし」

『私（アタシ／俺／僕）も!』

「俺の偽物？　どんな感じだった？」

「あー、それは何て言うのかな」

「性格とか姿はまったく同じなんだけど」

「雰囲気？　感じる魔力？　が違うっていうかなんていうか」

「説明するのが難しいんだよねー」

「それでもコイツは偽物ってことはすぐ分かったんだよな」

ヴァーリの一言に皆が揃って頷く。

どれも要領を得ない答えだったが、まあいいか。

「そろそろ帰るとしますか。家族が心配するだろうからね。今日は疲れたー。後でもう一回寝よつと」

ティアに休ませてもらったが、その後も戦った所為か欠伸が出る。

「じゃあ、また膝枕でもしてあげましょうか？」

「え、別に――」

『膝枕ってどういうこと!?!』

別にいいと断ろうとしたら、それを遮ってなのは達がものすごい形相で詰め寄ってくる。

「いや、何か疲れていつの間にか眠ってたらしくてさ、起きたらティアに膝枕されてんだよ」

今日はリインフォースさんに膝枕して、ティアにされるといふ不思議なこと起こったもんだ。

『私も空君に膝枕したいし、されたい!』

「そ、そう……お好きにどうぞ……?」

そして、家に帰ると膝枕のことが十香達にも伝わり、時間制で代わる代わる膝枕をして、されたのだった。

ヴァーリの友人です！

ヴァーリの友人です！

Side空

闇の書の闇が復活しようとするのを阻止してから一日が経った。

アースラの人達は管理局の本部からの命令でしばらくは地球に留まるらしい。なんでも、事件が立て続けに起こったことと、高い魔力を持つ人が多くて調査をすることになったとのことだ。それとついでにアースラの職員は休暇を貰うこととなり、海に行く旅行にも参加してくれることになった。

そして、今日はヴァーリに誘われて、とある場所に向かっていた。

「——で、いい加減目的地を教えてくださいただけ」

誘われてから何度か同じようなことを質問していたが、ヴァーリは答える気がないのか、「あとで」、とか「もう少しで分かる」の一点張りだ。

「んー、まあいいか。ヴァーリが変なところに誘うとは思えないし、気楽に待つとするさ」

「ああ、そうしてくれ。といっても大したところじゃないがな。

………着いたぞ。今日の目的地はここだ」

ヴァーリの視線の先にあったのは、古びた赤い鳥居と神社の境内へと続く石段だ。

「神社？　ここに何か………ってヴァーリ、悪魔なのに大丈夫なの？」

「問題ない。ここは堕天使——アザゼルの知り合いが管理してるところで、俺悪魔が入っても害が出ない術式が施されてる」

「へえー、そんなことも出来るのか」

二人で石段を登ると神社があり、ヴァーリはそのまま直進すると消えた。

………え、消えた？

「え!?!　あれ!?!　どうなってんの!?!」

『今のは……恐らく空間移動の術式でしょうね』

驚いている俺をよそに、ヤハウエが冷静に分析してくれた。

「空、そのまま真っ直ぐ入って来い」

俺が来ないことに気が付いたヴァーリが、空間の変わる境目から生首だけの状態で顔を出して言ってきた。

見方によつてはホラーになつてくる！

「う、うん」

多少不安になりながらも真っ直ぐ進むと、一瞬だけ眩暈がしたがすぐに収まった。

俺が通つた先にあつたものは先程と変わらない神社の境内なのだが、神社の奥に続く道があつた。

「こつちだ」

ヴァーリは俺が来たことを確認すると、その道を歩き始めた。はぐれないように付いて行くと一軒の家が目映つた。

「ここが今日の目的地？」

「ああ」

ヴァーリが玄関のチャイムを鳴らすと、家の中から「はい、今行きまーす」と女性の声が聞こえた。数秒ほどして声の主と思われる女性が玄関のドアを開けた。

「はい、どな———あら、ヴァーリ君？ 久しぶりね？ 今日はどうしたの？」

出て来たのは艶やかな黒髪を一つに束ねた美人だった。

……この人って確か……。

「久しぶりだな、朱璃。今日は友人をあいづらに紹介しに来たんだ」

あ！ そうだ、この人ってバラキエルさんの奥さんで姫島朱乃のお母さん———姫島朱璃だ！ 原作では姫島朱乃が幼い時に亡くなつてたはず………だったと思う。……最近原作のことが上手く思い出せないでいるから仕方ないことなんだけど。

「じゃあ、そつちの子がヴァーリ君のお友達なのね？ お名前は何て

言うのかしら？」

「俺は龍神空つていいいます。ヴァーリの友達です」

「空君ね。私は姫島朱璃つていうの。よろしくね」

「はい、こちらこそ」

「さ、立ち話もなんだから家の中に入って。あの子達がヴァーリ君が来るのを首を長くして待ってたから」

家の中に入り、この家の居間に通される。

居間では、一人の少女と黒と白の毛並みの二匹の猫が戯れていた。

少女と猫達がこちらに気が付くと駆け寄って来た。

「ヴァーリ君！ 久しぶり！」

「ああ、久しぶりだな、朱乃。黒歌と白音も元気そうだな」

うわーお。ここには姫島朱乃だけじゃなくて黒歌と白音もいるのか。そういえば、バラキエルさんに初めて会った時にそんなこと言ってたな。娘や猫又姉妹が会いたがってるって。

朱乃と呼ばれた少女は、和服で朱璃さんと同じように髪を一つに束ねてポニーテールにしていた。

「ホントに久しぶり過ぎるよ！ この前来たのって一か月くらい前だもん！」

一か月、つてことは魔力集めやらなんやらで忙しかったからか。

「すまない。ここのところ忙しくてなかなか行くことが出来なかったんだ」

「ふーんだ、謝っても許してあげません」

朱乃は頬を膨らませてそっぽを向いた。猫二匹も揃ってそっぽを向いていた。どうやら長期間ヴァーリに会えなかったのが余程嫌だったらしい。

「これはどうしたものか……」

ヴァーリは困ったように頬をポリポリと搔いて、こちらに助けを求める視線を向けてきた。

「さあね。お願いでも聞いてあげたら？」

ぶつちやけてしまうとこれぐらいしか俺には思い浮かばない。

だって、皆が突然拗ねたり怒る理由が全く分かんないんだもん！

だから俺に出来ることを何でも一つどうぞ、という形で機嫌を直してきた……のだけど、実は皆が俺に命令することって恥ずかしくてすごく大変なんだよ！

「それしかないか。朱乃、俺に出来ることならなんでもする。だから、機嫌を直してくれないか？」

ヴァーリが「何でも」と言った瞬間に朱乃の肩がピクっと動いた。

「今、何でもって言った？」

「ああ、そう言った」

「じゃ、じゃあ……」

何かを決意したように強い意志を感じる眼だった。そして言った。

「——将来、朱乃のことヴァーリ君のお嫁さんにして！」

………はい？

「いいぞ」

………はい？

「（えーつと………今何が起きたのかどなたか説明してくれませんか？）」

『ヴァーリ・ルシファーが姫島朱乃にプロポーズされてOKした』

俺の質問に中にいる全員が揃って答えてくれた。

文字にすると三十字にも満たないが、それだけでも十分理解できた。

そ、そっか、プロポーズかあ………え？ ええッ!? えええええ

えええええエエエエエエエエエツツツ!?

あまりに突然の出来事に驚き過ぎて何を言えいいのか分からずにいたら——

「ちよつと待つにゃー！」

「………待ってください」

——いつの間にか見知らぬ少女が二人いた、といっても正体は予想が付くのだが。

「何か文句でもあるの？」

「あるに決まってるにゃー！ むしろない方がおかしいにゃー！」

「……そうです。……抜け駆けはあれほど禁止と言っていたのに」「いいじゃない！ ヴァーリ君が何でもいいって言ったんだから！」「いくらなんでもそれは行き過ぎだってことにゃ！」「確かに、いきなり結婚ってどうなんだろうか……。」

「それだったら制限をせずにも何でもいいと言ったヴァーリ君が悪いもの！」

それを言われると、提案を出した俺も悪くなってくるんだけどなあ……。

しばらく三人のいがみ合いが続きそうなので、廊下に退避。

「三人は何故ケンカし出したんだ？」

「それは、ほら………何でだろう？ 俺にも分かんないや」

『(ダメだこいつら……早く何とかしないと……)』

あれ？ 今、ドライグ達に呆れられた気がする……。

「まあ、とりあえず、あの二人の娘にも聞いてあげたら？ というかあの二人って何者？」

一応、知ってるけど聞いておかないとね。

「……そうするしかなさそうだな。それとあの二人は妖怪で、猫又の中でも強い力を持つ「猫？」ねこしょうと呼ばれてる」

悪魔、天使、堕天使、ドラゴン、魔法少女には会ったけど妖怪はこれが初めてになるわけだ。

「更に言うと、仙術が使えるにゃ」

ヴァーリの話に耳を傾けていると別の声が混ざってきた。

「どうやら三人のいがみ合いは終わったみたいだ。」

「それでだにゃ、朱乃だけじゃ不公平だと思っにゃ。ウチらも会えなくて寂しかったので、朱乃と同じことを要求するにゃ！」

同じこと。つまり、朱乃だけでなく黒歌や白音とも将来結婚ってことになる。

流星に二度目ともなれば、この龍神さんも驚きませんことよ。

「ああ、わかった。将来、結婚すればいいんだな？」

「……そうです。……ところでそちらにいる人は誰ですか？」

「誰だろうね？ 黒歌ちゃんを知ってる？」

「知らないにや」

まさか、今の今まで気づかれてなかった!?

自分の存在感の無さに若干ショックを受ける。

「俺の友人だ」

『ゆ、友人!?!』

今度は三人が驚いていた。

「あ、えっと、龍神空です。ヴァーリの友人やってます」

「あのヴァーリに友人……ッ!」

「……目出度いです」

「今夜は赤飯だね!」

三人の目尻に光るもんなんて無かったんや。それはきつとワイが見た幻なんや。

「……俺って友達がいなと思われてたんだな」

「あ、アハハ……」

すまない、親友よ。否定できる言葉が見つからない。本当にすまない。

その場は苦笑いで誤魔化すしか出来なかった。

「私は黒歌っていうにゃん。よろしくにゃ、空」

黒い髪に黒い着物をはだけさせた少女、黒歌。

「……妹の白音です」

白い「……銀髪です」……銀髪で白い着物を着た少女、白音。

「姫島朱乃だよ！ よろしくね!」

先程も紹介した少女、姫島朱乃。朱璃さんの娘さん。

「うん、よろしく」

自己紹介を終えた後で黒歌から質問をされた。

「空はヴァーリの友達だけど、正体とか知ってるかにゃ?」

「知ってる。半分悪魔でしょ?」

それぐらい知ってなきや親友は名乗れないよ。

「それなら話は早いにゃ。ウチらは妖怪で朱乃は半分墮天使だからそこんとこよろしく♪」

「はーい」

と言つても俺も普通の人間じゃないけどね。

正確なことは何も分からないので無駄に言う必要もない。

「さてと、自己紹介も終わったことだし遊ばない？」

四人は快く了承して、最初は白音の提案でかくれんぼから遊ぶことにした。

「皆、お茶が入ったわよ」

次に何して遊ぼうか考えていたら、朱璃さんがお菓子とお茶を持ってきてくれた。

丁度小腹がすいてきたのでいったん休憩に入ることにした。

「黒歌って仙術使えるんだよね？ それって俺も使えるの？」

かくれんぼで使われると黒歌が鬼の時こっちの位置はまるわかりだし、逆にこっちが鬼の時黒歌の居場所が分かり辛くて黒歌の圧勝だった。

仙術チートですよん……。

「才能次第にや。本来なら仙人とか猫？のウチらぐらいにしか使えないんだけど、極稀に使える奴もいるにや」

極稀か……望みは薄そう……。でも、使えるようにして九喇嘛モードを完成させたいんだけど、どうにかならないかなあ。夏休み中に闘戦勝仏でも探そうかな？ 会ったところで教えてくれるかどうかは分からないけど。

結局、仙術の話はそこで終わりにした。

「今年は海に行ってみないか？」

『海?! 行きたい!』

ヴァーリが海の話題を出すと、三人の食いつきぶりは相当なものだった。

今年は……龍神家が俺、シエラ、凜祢、十香、美九、耶? 矢、夕弦、七罪、六喰、琴里、四糸乃、狂三、二亜、折紙、フェイト、アリシア、プレシアさん、リニス、アルフの19人。高町家が士郎さん、桃子さん、恭也さん、美由希さん、なのはの5人。バニングス家がアリサと

鮫島さんの2人。月村家が忍さん、すずか、ノエルさん、フアリンさんの4人。八神家がはやて、あかり、シグナムさん、シヤマルさん、ヴィータ、ザフィーラさん、リインフォースさんの7人。結城家が明日奈、京子さん、彰三さん、浩一郎さん4人。王城家が雄人、雄人の妹、母親、父親の4人。天河家が愛衣、愛衣の姉、母親、父親の4人。衛宮家が兄さん、イリヤ、セラさん、リズさんの4人。天界がシアとユーストマさんの2人。冥界がネリネとリコリス、フォーベシイさん、サーゼクスさん、グレイフィアさん、リアスの6人。墮天使がヴァーリ、アザゼルさん、朱乃、黒歌、白音、朱璃さん、バラキエルさんの7人。

この時点で68人。多すぎだなー。それに加えてアースラ組とユーノを入れると100人近いんじゃない？

今思い返すと誘い過ぎたなあと思ったが今更のこと過ぎてどうしようもない。

ちなみにフォーベシイさんが所有する島のホテルに全員無料で泊めさせてもらうことになってる。正直、それぞれの親御さんに説明するのが大変だったけど、フォーベシイさんに手伝ってもらって何とかなった。

——ネリネちゃんとリコリスちゃんと結婚したら空ちゃんにあげるよ。

なんてこともサラツと言われたが聞かなかったことにした。

というか、子供の立てた計画がここまでになるとは予想だにできなかった……。もうちよつと先の考えて行動すべきだ、という戒めにもなったからよかったのかもしれないけどね。

「そろそろ帰ると——？——？（何か家の周囲が変な感じしない？）」

『ああ、俺達も感じた。あの空間を越えて来るということは只者ではあるまい』

帰ろうとして立ち上がった時に不穏な気配を感じ取った。中にいる奴らに聞いても俺と同じく感じ取ったようだ。

「へブレイブ、反応からして人間？」

《へはい。人数は……ざつと30は下らないかと》

只者じゃない人間が30。

「……どうかしたんですか、空さん？」

「ううん、何でもないよ。俺はそろそろお暇させてもらうね」

「それなら俺は入り口まで送る」

「また遊びに来てね！」

「二人共気を付けてにやん」

白音と朱乃は分かっただけだが、ヴァーリと黒歌は気が付いていたようだ。

玄関で靴を履くと、朱璃さんに声を掛けられた。

「待ちなさい。今出るのは危険よ。家にいなさい」

それは大人としての心配だった。外にいる人たちとは何かしらの因縁があつて、そのことに子供を巻き込みたくないというのが、目を見て理解できた。

朱璃さん、いい人だな。

「大丈夫です。ヴァーリと俺がいれば大抵の奴らに負けないんで」

「その通りだ。朱璃はアイツらのそばにいてやってくれ。それとバラキエルを呼んでおけ」

『……………』

「……………。はあ、わかつたわ。……その代わり約束よ。絶対に死なないで。いい？」

数秒ほど視線をぶつけ合った結果、先に朱璃さんが折れた。

『はい（ああ）！』

了承を貰い、元氣よく返事を返して玄関のドアを開ける。

玄関から10mぐらい離れた辺りに刀や槍、お札らしきものを持った人がたくさんいた。

「おじさん達、不法侵入って知ってる？」

「小僧共、ここに住む者の関係者か？」

ここに居る人たちのリーダーらしき人物が問い掛けて来る。

俺の質問はスルーですかそうですか。

ということはあれだね、人の話聞かないんならこっちに何されて

も文句は言えないわけだ（暴論）。

「（力借りるよ、七罪）」

『……一々許可何てとんなんくていいわよ』

いやいや、力を借りるわけだし、親しき中にも礼儀ありっていうから、こういうのはちゃんとしておかないとね。

「――  
〈アドナイ・ツァバオト神威霊装・七番〉

周囲の空間が歪み、体に纏わりつく。それはやがて霊力で編まれた鎧である霊装になる。

頭にはエメラルドの宝石が散りばめられたとんがり帽子、橙色と夜色で構成されたマント付きの服。髪は七罪と同じ緑色で、セミロングぐらいの長さになる。

七罪の霊装が一番女装に近いんだよね……。

そして、手には七罪の天使――〈ハニエル贗造魔女〉が握られている。相方のヴァーリもすでに禁バランスポレイク手化を終え、準備万端だ。

「さあ、俺達の戦争デートを始めようか」

「ヴァーリ」

「任せろ」

《Half dimension!!》

名前を呼ぶだけで俺のして欲しいことが伝わったようだ。

ヴァーリを中心にとありとあらゆるものが半減する空間が広がっていく。

向こうで違和感に気が付き始めた人が出てきた。

「これは……白き龍の力かッ！」

「正解です。ご褒美に服をプレゼントいたしましょう♪」

〈贗造魔女〉を振るうと、答えた人の服装が変化する。――ピエロの服装に。

「ハハハッ！ 中々お似合いじゃないですかっ♪」

「な、なんだこれは!? 貴様、一体何をした!?!」

「残念ながらその質問はお答えできませんね」

「クソツッ! お、おい、お前達もさっさと動かんか! あの小僧共を捕まえろ!」

『は、はいッ!』

リーダーらしき人が命令を下すと、周りの人達が慌てて動き出した。しかし、半減している空間では動きは鈍くなる。こちらのやりた放題だ。

「はい、皆さん!注目!」

足元に落ちていた木の枝を拾って、その場にいる全員に見えるように高く掲げる。

「こちらの何の変哲もないただの木の枝です。ですが、指を弾くと……あら、不思議! 鉄の槍になってしまいました!」  
わざとらしく大袈裟に演技する。

「さらにさらに、周りに落ちている石や葉っぱなんかも変えちやいましょうか!」

再び指を弾くと、石は苦無に、葉っぱは手裏剣に変化した。

「あらら、いつの間にか大量の武器が!」

「き、貴様、それをまさか……!」

「そのまさかですよ。でも、それじゃあ面白くないので……そうです、三秒数えるまで待ちましょうか♪ いーち——」

「今の内に小僧共を——」

「ハイ発射!」

〈贗造魔女〉を振り下ろすと、大量の武器が浮かび上がり、侵入者に向けて凶器の雨が容赦なく降り注がれる。

『二と三はどこいったッ!』

「そんなものがなくても生きていけるから問題ないよネ!」

人のこと無視したんだから、そのくらい許して欲しいんだけど。

幸い、急所は外してる……と思いたい。とりあえず、ヴァーリの半減の力があの凶器の雨にも働き、誰も殺すほどのダメージは与えてないはず。それに、無駄に殺して問題にされても困るからね。

「ヴァーリ、あとは縛っておくか」

「ああ、そうだな」

動けない侵入者達が暴れないように縄で縛る。

「朱璃！ 朱乃！ 皆無事——何だこれは!？」

縛り終わると同時に、大粒の汗を迸らせたバラキエルさんがやって来た。

「ヴァ、ヴァーリ？ それに君は確かあの時の……。これはお前達がやったのか？」

どうやらバラキエルさんは俺のことを覚えていたみたいだ。

「そうだ。恐らくこいつらの目的は朱乃や朱璃だろうな」

「となると、姫島家の者か……」

一旦家に戻ってから理由を尋ねると、バラキエルさんと朱璃さんの結婚は親族にとっては快くないと思われていた。さらには、二人の間に朱乃という娘も産まれたことによって、姫島家との関係が余計に悪化したようだ。

そして、姫島家は忌むべき存在である朱璃さん達の居場所を突き止め、バラキエルさんがいない日を狙って襲撃したのだろう。

「なるほど。そうなることも危ないですね」

侵入者たちは姫島家どっかその辺に転移させたに帰ってもらったが、また襲ってこないとは限らない。

「それはそうなのだが……。ここ以外に住むとなると……」

「冥界は？」

「あそこも少なからず危険が多い。それに朱乃は半分墮天使の血が流れているが、朱璃は人間だ。生活を続けるには、冥界の環境では厳しいやもしれん」

「では、海鳴市でどうでしょうか？」

「海鳴市？ そこはヴァーリが住んでる街だったか？」

「はい。あそこはどの勢力にも属してない街で異能に関わる人も少ないです。それにバラキエルさんが仕事で忙しくても、ヴァーリや俺が近くにいればご家族を守りやすいでしょうしね」

「……なるほど。それはいい案かもしれないな。……朱璃」

「私はあなたに付いて行きますわ。だってあなたの妻なんだから」

「……そうか。では、近いうちに引っ越しをしましょう！」

おしどり夫婦というかなんというか……見ていて、良い家族だなんて思える光景だな。

襲撃があった日から一週間ほどして、バラキエルさん達は海鳴市に引っ越してきた。住居はヴァーリの住む家を改造して、一緒に住むことになった。

それから今まで学校に行けていなかった朱乃が、一つ上の学年に夏休み明けから編入することになった。

魔王少女、降臨です！

魔王少女、降臨です！

「何でッ……俺がッ……こんな目にッ……合わなくちゃいけないんだよッ！」

俺は一人で巨大な魔獣から逃げていた。周りは何もない平地で隠れようもない。

「全然、振り切れない……ッ！」

全力で走るが、ソイツとの距離は広がるどころか縮まるばかり。

とうとう疲労がピークに達して、脚がもつれて転倒。

早く起き上がってここから逃げないと！

頭ではそう思っているけど、思うように体は動かない。

クソ……ッ！ ここまでなのか……ッ！

俺の周りが暗くなる。ソイツの影が俺を覆いつくしたからだ。

ここで終わりかと思うと、悔しさから涙が零れる。

これが最後になるぐらいなら……。

死を覚悟した時。

「その子から離れなさい！」

ッ！ 一体誰が——

「もう大丈夫！」

その声を聞いたのは初めてのはずなのに、何故か安心できた。

「あとは、この——」

顔を上げて後姿しか見れないが、その背中に憧れた自分がいた。

「——魔法少女レヴィアたん」に任せといて！」

「はい、カットー！」

監督の指示が出たので、立ち上がる。

「いやー、二人共良かった！ 特に空君！ 君の迫真の演技で、見ているこっちまでハラハラしてしまっただけ！」

「ありがとうございますー！」

監督の側によるとお褒めの言葉を貰った。

「やっぱり、サーゼクスちゃんを紹介であなたを誘って正解だったわ☆」

「（こちらこそ普段できないような体験をさせてもらってるんです、セラフォルーさんに誘っていただいて感謝してますよ）」

監督から休憩を貰い、セラフォルーさんと並んで椅子に座る。

え？ 俺が何してるかだつて？ そんなの決まってるでしょ？

—— 『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』の撮影です。

遡ること昨日。

姫島家の襲撃を退けてから家に帰ると、サーゼクスさんが龍神家に来ていた。

「やあ、空君。私と戦った時よりもさらに強くなってるみたいだね」

「えへへ、おかげさまで。またリベンジしたいです」

一目見ただけでそんなことわかるんだね。

「すまない。私の方もそうしたいのだけどね、仕事が忙しくて時間があまりとれそうにないんだ」

「あ、いえいえ、一回戦ってもらえただけでも十分なのに、もう一回だなんて図々しいにもほどがあります！」

冥界の長である魔王が忙しいのは当たり前のことだ。

「そうか。試合はまた時間を作ってやろう」

「ありがとうございます。ところで今日はどうしたんですか？　まさか……仕事さぼったわけじゃないですよね？」

サーゼクスさんに訝しむような視線を向けると、両手を振って否定する。

「や、止めてくれ。そんなことすれば妻のグレイフィアに何をされるか……考えただけでも恐ろしいよ」

ああ、いくら魔王でも奥さんの前では尻に敷かれてるのか……。何と言いますか、聞いているだけで無性に悲しくなってくるというか、同情したくなる感じがするんだよね。

『(お前も将来尻に敷かれるだろうなあ……)』

ん？　今、ドライグ達に哀れみの視線を向けられたような………：  
気のせいかな？

「それでだね、今日来たのは君をとある人物に紹介してみようかと思ってる。構わないかい？」

「えーつと、その人がどなたかをまず教えていただきたいんですが……」

「今からここに呼ぶよ。先に家の人には許可は貰ってるから安心してくれ」

サーゼクスさんが連絡用の魔方陣を耳元に展開すると、誰かと連絡し始める。

連絡が終わるとリビングに転移用の魔方陣が出来る。その魔方陣からは一人の少女が現れた。

少女は艶やかな黒髪をツインテールにし、魔法少女のような――  
―否、魔法少女の服装をしている。

サーゼクスさんと同じ魔王の一人――セラフォル・レヴィア  
タンだった。

ま、マジか……。とうとうこの人に出会っちゃったか……。

「じゃっじゃーん☆　セラフォル・レヴィアタン！　ここに参上

です☆ あ、初めまして！ あなたが龍神空君ね？」

「ア、ハイ……そうです。俺が龍神空です」

魔法少女——ではなく！ 魔王少女 ことセラフオルーさんが横チエキしながら尋ねてきた。

今明かされる衝撃の事実はないけど、あまりの軽い挨拶をして登場した魔王に頬が引き攣る。

「ふむふむ、うんうん、なるほどなるほど！」

自己紹介が済んだと思ったら、今度は俺の周囲をぐるぐるしたり、ジロジロ眺めてきた。

「あ、あのー……何か？」

「決めたわ！ 龍神空君！ あなた、私の使い魔にならない!？」

「嫌です」

「ええッ!? どうしてッ!？」

いや、こつちの方がええッ!? っていいたいんですけど……。

「ごらごら、セラフオルー、重要どころが抜けている。ちゃんと説明してあげなくては伝わらないだろう?」

「そうだったわ! ごめんね、空君。あなたに使い魔になって欲しいっていうのは、そのままの意味じゃないの。私が今撮影してる特撮に、使い魔役として出演してほしいっていう意味なのよ!」

「えーっと、つまり……役者になれと?」

簡単に言うとななるだろう。

「うんうん! もちろん、ちゃんとお給料も出すし、演技が評価されれば他の撮影にも呼ばれるようになるかもしれないわ!」

評価はどうでもいいけど、お給料が出る。しかも、そうそう体験できそうにない演技の仕事だ。少し興味がある。

「わかりました。やれるだけやってみます。……でも、こういうことは初めてなので期待しないで下さいね?」

「いいえ! 私は期待するわ!」

「どうしてですか?」

「だって、私が認められた子なんだもの。絶対大丈夫に決まってるわ!」

セラフオルーさんが曇りの無い輝いた瞳で即答した。

こういうのってズルいよなあ……。

「魔王の一人にそこまで言われたら、精一杯期待に応えてみます」

「ありがと！　じゃあ、早速今から撮影現場に行くわね！」

「えっ、ま——」

俺が何か言うよりも早くに魔方陣が展開され、転移した。転移する間に、サーゼクスさんが両手を合わせて申し訳なさそうな顔をしていたのが記憶に残った。

で、今に至るわけ。しかも昨日突然連れられてからすぐに撮影が始まったため、昨日はそのままセラフオルーさんが所有するホテルに泊まることになった。龍神家に連絡したら、サーゼクスさんがあらかじめ説明していたのか、皆からの文句はなかった。

閑話休題。

最初は初めての試みでNGを出しまくって迷惑をかけたが、監督や他の役者さんにアドバイスを貰ったり、何度もこなしていくうちに少しずつNGの回数も減っていった。

「それにしても、空君の演技はすごいって思うわ！　演劇経験が無かったのに、あそこまでの演技が出来ちゃうなんて、私驚いちゃったもの！」

「それは周りの人にアドバイスを貰ったからです。皆さんは嫌な顔せずの一つ一つ丁寧に教えてくれましたからね」

セラフオルーさんの紹介という形で来たというのも理由の一つなんだらうけど、魔族の方が人間の俺に教えてくれるとは思わなかった。

あ、俺って人間じゃなかった。

「……………」

演技が上達した理由を伝えると、何故か俯いて黙り込んでしまった。

「あ、あの……セラ——」

「偉い！ 偉いわ！」

心配になって声を掛けてみたら、突如顔を上げて俺を褒めてきた。

「は、はあ……どうも」

俺が曖昧に返すと、セラフォールさんは立ち上がった。

「さ！ この調子で今日の撮影を終わらせちやおつか！」

「はい！」

時計を見ると休憩時間がそろそろ終わりそうだったのが確認できたので、次の撮影シーンの準備に入る。撮るシーンはさっきの続きでクライマックスシーンだ。

セラフォールさん演じるレヴィアたんが魔獣を倒す。俺が演じるランが使い魔にしてくれとお願いする。それをレヴィアたんが了承し、撮影は終わる。

ちなみに監督の考える設定では、俺の正体はドラゴン……なのだが、自分自身では人間と誤って知らない。物語を進めていくうちに正体が解明されるとかなんとか。

さて、もうひと頑張りしますかね！

「レヴィアたん、待って！」

俺ことランが。魔獣から助けてくれたレヴィアたんを呼び止める。

「ん？ 何かしら？」

「あ、あの……俺をあなたの使い魔にしてください！」

「……それはどうして？」

「俺は……守れる力が欲しいんです」

「……………」

レヴィアたんは何も言わずに聞いてくれる。

「俺は母親と共に小さな村で平凡に暮らしてました。でも、そんなある日、事件は起こった。朝、俺が起きると村は跡形も無くなっていました……」

「ッ!？」

そのことを思い出す度に悲しみや後悔から涙が零れる。

——最初は何があったのか分からずに混乱していたけど、近くのがれきに埋もれていた母親の呻き声が聴こえて我に返った。

『母さん！ 今助け出すから待ってて！』

その時、もちろん俺は助け出そうとした。でも、自分が助からないと分かったのか、母親は首を横に振った。

『……ラン、よく聞きなさい。——あなたは私の本当の息子ではないの』

伝えられたのは衝撃の事実だった。

『な、何言ってるの……母さん？ 冗談にしたって度が過ぎて——』

『いいから聞きなさい』

動揺する俺を強かに遮った。

『それでもね、ラン。私はあなたを息子としてちゃんと愛してた。この言葉に嘘偽りはないわ。信じてちょうだい』

『し、信じるよ！ 誰が疑うもんか！』

『……そう……それが聞いて安心したわ。これで心置きなく——』

母さんは最期に小さく笑った。そして静かに眼を閉じた。

『母さん……う？ ねえ、やだよ……逝かないでッ！ 母さん！』

母親は二度と目覚めることのない眠りについた。

そこから俺は、行く当てもなく彷徨っていたところをあゝ魔獣と出くわし、レヴィアさんに助けってもらった。

「……他に生きていた人は？」

レヴィアさんの質問に首を横に振って否定する。

「……そう」

短く返すと、顔に柔らかいものが当たる。

「辛かったよね？ 悲しかったんだよね？ 泣いていいよ。私が君の悲しみを全部受け止めてあげるから」

——もう我慢しなくていいよ。あなたの怒りや憎しみ、悲しみ全部受け止めてあげる。

——え？

気が付くと、俺はレヴィアたん——セラフオールさんに抱きしめられていた。

これは台本には書かれてないことだ。本来なら、俺が悔しきで涙するのをレヴィアたんが励ます、というシナリオ。だというのに、彼女は俺を抱きしめていた。

でも、彼女の温もりが何かを思い出させる。

知ってるようで知らない、かなり曖昧なものだけど、それはとても大切な「何か」だった。

気が付けば、俺の涙腺は演技とは関係なしに崩壊していた。

「も、もう大丈夫です……！」

ひとしきり泣いたあと、自分が泣いたことに驚いて慌ててセラフオールさん——レヴィアたんから離れる。今は撮影中だ。次の演技をしなければならぬ。

「私、決めたわ！」

「……何をですか？」

「あなたを使い魔することよ！」

「いいんですか!？」

「ええ、放っておけないもの！ さあ、一緒に行きましょう！」  
レヴィアさんに手を引かれて俺も進みだす。

——俺の新しい冒険が始まったのだった。

「はい、カットー！ ラストシーンOK！ 途中、台本とは違ったけどとつてもいいモノだった！ 今のを使わせてもらおうよ！」

監督や周りからしたらすごい演技に見えたのだろうけど、俺が流した涙は演技ではなかった。

……あの感覚はなんなんだろう？

十香に好きって言われた時にも似たような感覚があった。もう一度おんなじことをやっても何も変わらないと、確証はないが思うう。

……まさかね。

とある考えが頭をよぎったが、頭を振って思考を中断した。

「空君、お疲れ様ー！ さっきの涙する演技は私も驚いちゃったわ！」

「お疲れ様です、セラフオルーさん。あの演技はランに感情移入し過ぎたからああなっただけですよ」

「ええッ!? そんなに感情移入できちゃうの!? ……これは強敵出現、かしら？」

驚いた顔から一転、セラフオルーさんは険しい顔で何かをブツブツ呟いていた。

「あの……どうかしました？」

「な、なんでもないわ！ そ、それよりも突然抱きしめちゃってごめんね？ あの時の空君を見てたら撮影とか演技だつてこと忘れてあんなことしちゃったの！」

「へ……う？ ……あ、いえ！ 大丈夫です！ 監督もあのシーンOKって言ってくれましたからね」

セラフオルーさんが本能的に動くほどに涙してたんだ……。

「あ、あのね？ ぶしつけなお願いなんだけど……言つてもいいかな？」

急にしおらしくなったセラフオルーさんが俺にお願いしたいことがあるらしい。

「内容にもよりますけど……」

「も、もう一度だけ、空君を抱きしめさせてくれない？」

「ごめんなさいお断りしますそれだけは勘弁してください。あ、撮影これで全部終わったんで帰りますね？」

「お願い！　ちよつと……ほんのちよつとだけでいいから！　ね？　ね？」

「嫌です！　　どうか放して下さい！」

荷物を纏めてさっさと帰ろうとしたら服の裾を掴まれて逃げられなかった。

「ダメー！　　いいつて言うまで放さないわ！　　こうなったら本気を出して無理やり……！」

それはシャレになつてないから！　　魔王に本気出されたら勝てるはずがないでしょ！

「り、理由は？」

「え？」

「俺を抱きしめたい理由は何ですか！」

これでまともな言い分が出たなら考えようと思う。……この魔王に限つてそれは無いと思うけどね！

セラフオルーさんは一度俯いてから顔を上げ、固い決意を宿した眼で告げた。

……もしかして意外とまともだったりする？

「——最近、ソーたんが抱きしめさせてくれないから！」

「お疲れ様でしたー」

うん、分かつてたけどここまでハッキリ言ってくれるとある意味尊敬に値するね。

「ま、待ってー!?　　じよ、ジョーク！　　今のはジョーク！　　だから無し！　　ノーカン！　　あ、ちなみにソーたんっていうのはね、私の妹のソーナちゃんのことだね！　　それはそれは目に入れても痛くないく

らいとびつきりに世界で一番可愛いのよ！」

「ア、ハイ……」

急に妹について語りだした。

妹があれをして可愛かっただの、なんだのと小一時間程聞かされたところで――

「お姉さまー！」

黒髪ショートカットの少女がリアス、シア、ネリネ、リコリスと共に俺達のそばにやって来た。

「あ、ソーナちゃん！ どうしてここに？ ハッ、もしかして久々に抱きしめさせてくれる――」

「そんなわけがあるはずがないじゃないですか！」

「が、ガン……！ うわーん！ ソーたんが反抗期だー！」

ガンって擬音を自分の口で言うヒト初めて見た。っていうか――

「どさくさに紛れて引っ付かないで下さい！」

セラフォルーさんが俺の腰に抱き着いて離れてくれない。

「だってソーたんが反抗期で私の心はひどく酷く傷付いたんだもの！」

だから、空君に抱き着いて癒すのー！」

「お、お姉さま！ 他人に迷惑を掛けないで下さい！ それとソーたんと呼ばないで下さいとあれほど言ったのに！」

「だったらソーナちゃんを抱きしめさせて！ それなら空君から離れるわー！」

「仕方ありませんね、多少のことには目を瞑ります」

「随分あっさりと俺のこと見捨てたね!？」

まさかの掌返しだった。しかも迷いのない即答。

「リ、リアス達も見えてないで助けてよ！」

『アハハ……ごめんなさい無理（です／つす）』

シア達に苦笑いで断られる。

「無理よ。あ、空が私の眷属になってくれると約束するなら考えてあげるわ♪」

愉しそうに笑いやがって！

「……このツ、悪魔め！」

「私は悪魔よ」

皮肉が皮肉にならなかつた!? ええい、こうなつたら!

「セラフオルーさん！」

「んー? どうしたのー?」

未だに俺に抱き着いてるセラフオルーさんが呑気な声で返す。

「俺を抱きしめることを許します」

「え、本当に!？」

既に抱き着いてるけど、今は何を言つても意味をなさないから諦めた。

「ええ。ですが!」

ビシツと指を突き付けてから言う。

「あなたの妹よりも俺の方が大切だと思ふなら好きにどうぞ。でも、妹が大切だというなら俺ではなく妹にお好きだけ抱き着いてください」

「んなツ!？」

案の定、ソーナは口をあんどりと開けていた。

さつきのお返しだよ!。そしてこの条件なら確実にセラフオルーさんは——

「ソーナちゃーん!」

妹を選ぶ。

セラフオルーさんは俺から高速で離れ、ソーナに抱き着く。

「あ、あなたは悪魔ですか!？」

「それ、ブーメランだからね」

そもそも君が悪魔でしょうに。

今が好機と思ひ、監督やADさんに別れの挨拶をした。

一番お世話になつたセラフオルーさんは妹と家族愛を確かめ合つてるので、俺は目が合ったソーナに向けてサムズアップしてから転移した。

ついでにシア達が龍神家で遊ぶ気満々でついてきた。

ソーナを見捨てたことを多少薄情だと思つたが、——

『家族の時間を邪魔するのはダメよ（だよ／っす／です）』

———とのことだ。

まあ、家族の時間に口を出すのは野暮ってもんだしね。いい感じに纏めたその後はシア達と遊ぶことにした。

後日、完成したDVDが届いたので龍神家の皆やなのは達と（俺は強制的に）観ることになったのだが、セラフオールさんに抱きしめられたシーンで皆からの視線が痛かった。

「え、演技！ あれは演技だからー！」

必死に異議を唱えるが、皆の視線は変わらない。

「質問。胸の感触はどうでした？」

「え、それはその……や、柔らかかつ———あ」

謀ったな、夕弦！

『ギルティ』

その日、滅茶苦茶特訓で扱かれた。

シヤマルさんのお料理（地獄）です！

シヤマルさんのお料理（地獄）です！

Side空

「ねえ、空ー。この問題ってどうやって解くの？」

アリシアが俺に問題の書いてあるページを見せながら尋ねてくる。内容は国語でよくある登場人物の心情を答えなさいという問題だ。

「んーとね、これは傍線部の近くにあるはずだから探してみて」

「わかった！ ありがとね！」

アリシアは自分の机に戻り、再び問題と格闘する。

その近くでは、すらすら解いていくアリサ、すずか、あかり、愛衣、明日奈、ヴァーリ。悪戦苦闘するフェイトやはやて、なのはがいた。

アリサ、すずか、明日奈はかなり成績優秀。お嬢様だからその辺は抜かりが無いというか何と言うか。

あかり、愛衣、雄人は転生者。二度目の人生で聖祥のレベルが高くても小学生程度の問題なら三人なら簡単に解ける。

ヴァーリは正直に言うところアリサ達以上の天才。

フェイトとアリシアはこの世界の言語——特に国語に慣れないため苦戦。仕方がないといえば仕方がない。

なのはは、理系はアリサ以上だが文系科目が壊滅的。アリサに教えているようだがよく怒られてる。

はやては休学中も勉強をしていたみたいで、今は何とか付いて行けるといった感じだ。

そんなわけでただいま絶賛、龍神家の俺の部屋ではいつもの小学生組が学生の敵こと夏休みの宿題をやっています！

はやてに関しては夏休み明けから復学するので、今まで遅れていた分を取り戻すために折紙が作った課題をこなしてる。

え、俺？ 俺は影分身でちよちよいのちよいでした。

『能力の無駄遣いとはこのことだな』

九喇嘛からそんなこと言われるけど、時間を有効活用するためだから是非もないよネ！

皆が宿題をする中で暇な俺は、ユーノからミッドチルダで使われる言語を教わっていた。時々俺が質問をするとユーノの話が脱線して歴史の話になるのだが、地球には存在しない文化や文明の話はかなりの興味が湧く。特にベルカ時代の話が個人的に一番面白かった。

聖王——オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。霸王——クラウス・G・S・イングヴァルト。エレミアの一族——ヴィルフリッド・エレミア。冥府の炎王——イクスヴェリア。

その人達の強さが是非とも知りたいが、今の時代にいないのが非常に残念で仕方がない。ユーノ曰く、子孫は聖王以外はいるらしい。でも、先祖と子孫では長い歴史の中で戦い方が変わってくる可能性がある。だからこそ余計に残念だ。

「——で、その文明は………ってどうかしたの、空？」  
「ううん、何でもない」

……あ、そうだ。良いこと思いついた。

「ねえ、ユーノ。今度さ、遺跡発掘に連れてってよ」

「突然どうしたの？ それは別に構わないんだけど……」

「ユーノが随分楽しそうに歴史の話をするから、大分興味が出たんだよ」

「え、僕そんなに楽しそうに話してた？」

「自覚が無いのか、俺に言われてキョトンとしていた。」

「うん、あんなに生き生きとしたユーノは初めて見た」

「そ、そうかな？ アハハ……」

「それで、行くとなると準備とか必要だと思っただけどどれくらいで出来そう？」

「うーん、そうだね………大体、三日ぐらいで済むと思うよ。メンバーはここにいる全員？」

「あ、それなんだけどね、俺、ユーノ、ヴァーリ、雄人、ザフィーラさん。それにクロノを加えた六人でどうかな？」

「なのは達は誘わないの？」

『そうだそうだー！ 誘えー！』

ちやつかり聞いていた勉強中のなのは達が文句を言ってくるのを

無視して会話を続ける。

「偶には男子だけっていうのもいいんじゃないかなって思ったんだ」  
「なるほど、そういうのも良いかもしれないね。いいよ。出来るだけ  
早めに準備するよ」

「ありがと」

スクライア一族は遺跡の発掘とか調査が得意な部族だからこれくらいのことならお手の物と言っていいだろう。

ユーノに教わるのを一時中断して、時計を見る。

もうお昼近くか。

そう思うと、急にお腹が減ってきた気がする。

「そろそろお昼にしようと思うんだけど、要望があればどうぞ」

「焼きそば！」

「スパゲッティ！」

「ピザ！」

「ラーメン！」

「つけ麺！」

「俺イケメン！」

「ハンバーガー！」

「冷やし中華！」

全員が言ったわけではないが、なのは達から一気に言われた要望は  
見事にバラバラ。

雄人の「俺イケメン」はどう考えても食べる物じゃないので却下。

「じゃあ、麺類に偏ってるみたいだから冷たいそうめんにしようと思  
うんだけど、いい？」

具材やつゆが色々あれば楽しめるだろうからいくつか作ってみよ  
うかな。

キッチンに向かいながらそんなことを考えていたら、キッチンの方  
から異臭漂ってきた。

「な、なんの匂い？」

キッチンを覗いてみるとそこには――

「あ、これを入れたらもつと美味しくなるわね♪」

鼻歌交じりに料理をするシヤマルさんがいた。シヤマルさんの前にある鍋からは異臭と紫の煙が出てるのだが、本人は全く気にしてないようだった。

聞くのは怖いが一応聞いてみた。

「えーつと、シヤマルさん、何をされてるんでしようか？」

「それはもちろん勉強を頑張ってる皆にお昼ご飯を振舞おうとするのよ♪ もうじきできるから皆も呼んでくれないかしら？」

「あ、はい……」

シヤマルさんに言われた通り、家にいる十香達やなのは達、トレーニングルームにいる守護騎士達を呼んだ。

「シヤマル、一応聞くがこれは何という料理だ？」

烈火の将、シグナムさんが皿に盛られた紫の何かを指差して尋ねる。その顔はどこか強張っている……というかシヤマルさん以外全員が強張ってる。

「何って、カレーに決まってるでしょ？」

『（これがカレー!? どう見ても危険物にしか見えないんだけど!）』

「さあ、皆。遠慮せずに食べて食べて」

『（いやいやいやいや! こんな食ったら絶対ただじゃ済まないって!）』

「ちなみにシヤマルさんは料理経験つてあるんですか？」

「ないわ! でも、毎日はやめちゃんやあかりちゃんや料理してるの見てるし、美味しいものをたくさん入れたから美味しいに決まってるわ!」

その理屈はおかしいから!

「へこれ……どうする?」

「へ試しに食べてみるか? 見た目はアレだが、味はいけるかもしれない」

『へヴァーリ（君）、早まるな!』

自ら死地に赴こうとするヴァーリを全員で止める。

「皆、食べないの? 早く食べないと冷めちゃうわよ?」

相も変わらずシヤマルさんはこちらが食べるのを待っている。

これは逃げられそうにないな……。

「へ……俺、逝ってくる」

『ッ!』

シヤマルさんの前だということも忘れて皆が驚く。

「誰かがやらなきや解決しない。だったら俺が……!」

「へなら、俺も一緒に逝くさ。親友一人に任せっきりは嫌だからな」

「へヴァーリ……!」

ヴァーリからの申し出に目頭が熱くなる。周りの皆は止めて来るがそうも言つてられない。

「この世の全てに感謝を込めて……いただきます」

両手を合わせて合唱。

スプーンでカレー(?)をよそい、自らの口へと運ぶ。

カレー(?)が舌に触れた瞬間――

『ゴホッ!』

俺とヴァーリは吐血した。

マ、マズいッ!! これは美由希さん並みだわ!

「お、おい! 大丈夫なのかよ!」

「傷は浅い! しっかりするのだ、二人共!」

『大丈夫だ、問題ない』

マズい、物凄くマズい……だけど食べる!

ヴィータと十香が心配そうに聞いたが、一度口にしたなら最後まで食う。だから俺は、俺達は止まらない。甘くて、辛くて、苦くて、しょっぱい味がするが、死に物狂いでカレーを口の中に突っ込む。

『完食……したぞ!』

二人そろつて空になった皿を置く。すでに腹の仲がカオスだが、口には出さない。

『(すごい……! アレを食べ切るなんて……!』

「あら、そんなに美味しかったの? 良かったわ、念のためおかわりを作っておいて」

——突き付けられたのは絶望だった。

『ハ、ハハハ……フハハハハハ！』

だったら、その絶望も喰らうまでのことだ！

「どうした!? シヤマルの料理で頭がイカれたか!？」

「シグナム、それはどういう意味かしら?」

『俺達を倒したくば、この三倍——いや、十倍はもつてこい!』

二人の会話を吹き飛ばすかのように俺とヴァーリが高らかに宣言する。……色々と論点がズレているが。

「まあ、本当に? それだったらすぐにおかわりよそつてくるわね!」

シヤマルさんがよそつてきたおかわりを死ぬ気でガツガツ食べる。

そしておかわりをしてまた食べる。時々吐血。それを幾度となく繰り返すことで——

『これでツ! 完全にツ! 完食だあああああツ!』

ついに、おかわりすらも食べ切った。

「……さてと、食後のデザートでも買ってきますかね」

「……そうだな。ついでに飲み物も買うとするか」

俺達は席を立ち、リビングをでて玄関に向かう。

「……ねえ、ヴァーリ。俺達頑張ったよね?」

「……ああ、そうだな。もういいんじゃないか?」

「そっか……」

俺達は互いに微笑合々と——

『……………限……………界……………』

リビングを出てすぐのところで意識を手放し、ぶっ倒れる。

S i d e o u t

S i d e なのは

空君とヴァーリ君がシヤマルさんの作った<sup>危険</sup>カレーをたくさん食べて倒れた。

いくら空君達でもあの料理には勝てない。それが分かっている。食べ続ける二人はすごかった。おかわりどころか私達の分まで食べるとはだれも予想してなかったことだ。

何と言うか……空君はやっぱりかっこいい！ って違う違う、そうじゃない。あ、いや実際すごくかっこいいし、優しくて、す、好き……いや、大好きなんだけど今は置いといて！

今は、倒れた二人が意識を失った状態で寝てるのを私達が看病してる。

ちなみにシャマルさんははやてちゃんやシグナムさんに説教されてる最中だ。

「……………ん？」

眠っていた空君が目を開けて上半身だけ体を起こした。

「空君！ 気が付いた？」

「……………」

しかし、空君は私の方を見向きもせず周りを見回していた。

「あ、あの空……？ 体は平気そう？」

「……………」

フエイトちゃんが声を掛けるもこっちを見ない。

「おーい！ 空ー！」

「……………」

今度はアリシアちゃんが肩を叩いて声を掛けるところこっちを見た。でも、その顔は私達を観察するような視線に思えた。

「あ、やっと反応した。シャマルさんの料理が余程体に影響を及ぼしたのかな？」

「ま、それは自分の能力で治せば問題ないでしょ？」

「それかシャマルさんにな」

「自分でおかしなところはわかるかしら？」

「……………」

愛衣ちゃんが聞くと、口元に手を当てて何かを考えていて全く耳に入っていないようだった。

「空君？ 聞こえ——」

「あのさ、もしかしてソラって俺のこと？」

「……………え？」

空君の口から出た言葉に固まる。

「な、なに馬鹿なことやってんのよ!? あんたの名前は龍神空でしようが!」

「……………タツガミソラ? ……………あー、そういうことか……………。ふーん、そっかそっか、それなら納得いくな」

私達はこういうことなのかさっぱりわからないが彼は一人で納得していたようだ。

「あなたは……………空君だよな?」

私が恐る恐る尋ねるとゆっくりこちらを向いて答えた。

「違うぞ。あ、でも違くもないか。今はその名前なんだからな」

「……………今は?」

違うけど違くない。これが意味することは何なのだろうか?

「へそ言えば、空君って前世があっただよな?」

「へええ、でもほとんど記憶がないって言ってたわ」

愛衣ちゃんが否定しなかったということは嘘ではないということだ。

「じゃあ、あなたの名前……………空以外の名前って?」

「ん? ああ、俺の名前か」

彼が息を吐き出すと髪の色が黒から淡い金色に変わる。窓から差し込む日の光に当たって虹色のようにも見える。さらに頭からは龍精霊化したときとは別だが、水晶のように透き通った蒼い角が生えてきた。

彼の姿は幻想的で綺麗だった。それと同時に私達とは住む世界が違う存在に思えた。

そして、彼は自身の名を告げた。

「俺の名前は遥はるか。桜木遥さくらぎはるかだ。よろしくな」

桜木遙は謎多き少年です！

桜木遙は謎多き少年です！

S i d e 雄 人

あ、ありのまま起こったことを話すぜ！

シヤマルの料理を食べた空がぶっ倒れて起き上がったと思ったら、自分のことを「桜木遙」って名乗ったんだ！

しかも髪は金色になるし、頭からは角が生えてやがった！

な、何を言ってるのかわからねえと思うが俺にもさっぱりだぜ！

「へえ……ここがタツガミソラの住む家、か」

で、現在は桜木遙とかいう奴が龍神家のリビングをキョロキョロと見てる。それを俺達は若干警戒しながら見ている、と言った感じだ。

「へなあ、マジでアイツ、空じゃないのか？」

「間違いないわ。私の？を見抜く力が発動しなかったんだもの」

愛衣に確認を取ったが、今のアイツは桜木遙という人物で本当らしい。

「ねえねえ、聞いてもいい？」

「ん？ えっと、アリシア・テスタロッサだったな。いいぞ。何が聞きたいんだ？」

「遙は空とどういう関係？」

「簡単に言うと、俺がタツガミソラの前世の存在。過去の記憶は全部俺が持つてる。死んで転生した時点で俺は眠って、代わりにタツガミソラという人格が出来たって感じか」

俺達転生者の中で空だけは前世の記憶を持ってない。最初は単なる記憶喪失かと思っていたが、前世の記憶は全部遙が持っていたというのなら空が記憶を持ってないのも頷ける。

「じゃあ、次は私からいいかな？」

「どうぞ。月村すずか」

「あなたは何者？」

「龍の神様」

「そうなんだ。……………え？」

『え?』

遥は即答したが、あまりにも斜め上過ぎる答えに固まる。

「……と言つても、この体は弱くて力のほとんどが使えない。困つたもんだな。で、他に質問は?」

神様のことについてはあまり触れて欲しくないのか、他に質問がな  
いか聞いてくる。

「前いた世界ではどのくらいの強さなのだ?」

「夜刀神十香か。どのくらいの強さ、ねえ……。知らないけど結構強  
いんじゃないか? はい、次」

「いまいち要領を得ない回答だな……。でも、神様っていうくらいな  
ら滅茶苦茶強いんじゃないのか?」

「あなたが死んだ理由は?」

「それ聞いちやうのか!」

「五河琴里か。俺が死んだ理由は……。選べなかつたんだよ」

『……。?』

「どういうこつた?」

俺達の頭に疑問符が浮かぶ。詳しく聞こうとしたが遥が再び次の  
質問を促した。

「話してて気持ちのいいものじゃないからここまでだな。次」

確かに自分が死んだ理由を話すなんていいもんじゃないよな。

「君の意識が目覚めたのはいつかな?」

「本条二重か。悪いが、俺がいつ目を覚ましたのはよくわからない。  
次」

『前いた世界でモテモテだったの?』

「おおー! ぶっこむな!」

「よしのん、失礼だよ……ッ!」

「よしのんに四糸乃か。モテ……てはないな。仲のいい女子はいたけ  
ど全員大切な友達で仲間だったしな。次」

「………こいつが言うと、そんな感じがしないな。ぜってえモテて  
んだろ。」

「なら、私から」

「何だ？」

「空……ではなく桜木遙と言ったな？ 私と手合わせをしてくれないか？」

「手合わせ？ ……あー、うん、まあいいか。ちよつと久しぶりだから相手になるか分からないけど」

シグナムが遙に試合を申し込んだ！ 流石戦闘狂だぜ！

桜木遙という奴がどんな戦いをするのか気になった俺達はトレーニンブルームで観戦することにした。

「さあ、お前もバリアジャケットを展開しろ」

「……バリアジャケット？」

準備を終えたシグナムが遙に促すが何のことだか分からないみたいで首を傾げていた。

「………あー、うん、OK。ソラが着てた奴だな」

『ッ!?!』

あいつはドライブ達のように空の中で見てたってことか!?

「なあ、ドライブ達、あいつは空の中にいたのか？」

遙が自己紹介してすぐに体から出されたドライブ達に尋ねるが首を横に振られる。

『わからん。……もしかすると、心の中にあつた扉の奥にいたのかもしれない』

心の中に扉？ よくわからないがそつから遙は見てたってことになるのか？

「空が意識を失うまでのことは覚えてるか？」

『……すまん。空がああの料理の一口目を食べた時点で俺達の記憶は無い。目覚めた時にはすでに空の体から出ていた状態だった』

それは仕方がないな！ ってか、あの料理中にあるドライブ達にまで効くのかよ！ 逆にスゲーよ！

「——で、えーつと、確か……セットアップ……だっけ？」

《set up》

「うわっ！ 出来た！」

俺達が話している内に遙は初めてバリアジャケットを展開して驚いていた。

「……これで準備OKってことでいいのか？」

「そうだ、それでいい。リインフォース、頼む」

「ああ。——試合開始！」

リインフォースが試合開始の合図を出すと、先に動いたシグナムが遙に向かって一閃。

それに対し、構えてなかった遙は躲す——のではなく、真正面から受けた。

だが驚くことに、レヴァンティンの刃が遙の肩で止まっていた。

………は？

『………は？』

俺だけでなく他の皆も間の抜けた声を出していた。

《遙と言ったな。アイツは魔力を一切使わずに防いでいたぞ》

俺のデバイス、レオンが驚愕の事実を教えてくる。

いや、おかしいだろ！ シグナムの攻撃力は俺の知ってるなかでも相当なもんだぞ!? それを防御魔法も使わずに防ぐなんて出来るのか!?

「……おい、どういうつもりだ。何故私の攻撃を躲さなつた？」

一旦距離を取ったシグナムが鋭い視線で問い掛ける。

「とりあえず、自分の状態確認。それからシグナム……だっけ？ 君の攻撃力を知るため」

「……随分と舐めた真似をしてくれるな。私がお前よりも強い場合は取り返しのつかないことになっていたぞ」

「場合だろ？ ……それにこれは殺し合いじゃないから」

殺し合い。その部分がアイツにとつてとても悲しくて、辛いように思えた。

「……少し気に食わん。だが今はいい。まだまだ行くぞー！」

シグナムが本気で攻める。

「……ふーん、こんなもんか」

遥は攻撃を躲しながら小さく呟くとレヴァンティンを左手で掴んだ。

「何ッ!? ——ガハッ!」

そして、シグナムからレヴァンティンを奪い、そのままレヴァンティンの柄部分で突いて吹き飛ばした。倒れているシグナムの首元にレヴァンティンを突き付ける。

「降参するか?」

「……ああ、降参だ」

「何だ、この剣が無ければ戦えないのか。それだったら剣以外の戦う手段もあつた方がいいぞ」

「……そのようだな。参考にさせてもらう」

遥の言う通りで俺達はデバイスが無くなると戦うのがキツイ。それならそれが無い時の戦い方も習得しておくべきだな。

「覇気があるから六式でも覚えてみるか?」

「……うん、あれだな、物足りないな。他に誰か相手してくれないか?」

「複数人でもいい」

「それなら私が相手になろう」

俺達の中から進み出たのは十香だった。

「へえ……今度は精霊か。いいね。燃えてきた」

不敵に笑って十香の正面に立つ。

十香は霊装を纏い、〈サンダルフォン塵殺公〉を構えるが、遥はシグナムの時と同じで武器を出さず、構えも取らない。

「いつでも来いよ」

先攻を譲つたのはシグナムの時のように攻撃力を知るためか、単なる余裕の表れなのか。それともその両方ということも考えられる。

「では遠慮なく行かせてもらう」

十香が腕を薙ぐと紫色の斬撃が遥を襲う。遥はそれをデコピンで何かを弾いて相殺した。

「……あいつ、今何した?」

《魔力の反応はない。恐らく、空気を弾いて弾丸並の威力を出して相殺したと考えられる》

空気を弾丸にするって、今まで以上に無茶苦茶じゃねえか！

「……………ッ……………」

だが、弾丸を撃った後の遥の顔が少しだけ歪んでいた。前に未来さんと戦った時にも似たようなことがあったのを覚えている。あの時も、未来さんを吹き飛ばしたら脚を痛めていたようだった。

「はあ……体が弱くなってんな。いや、体が小さくて力に耐えきれないってことか？」

「はああああああッ！」

遥が独り言を呟く間に距離を詰めて、少女が持つには似つかわしくない大剣——〈塵殺公〉を振りかぶる。

「そう簡単には当たらないぞ」

『なッ?!』

当たると思っていた攻撃は外れ、遥はいつの間にか十香の後で腕を組んで佇んでいた。攻撃を避けられた十香は無理やり体をねじって後ろを切り裂く。

しかし、当たらない。またもや十香の前に遥はいなかったのだ。

「どこに消えた！」

十香が周りを見るが、遥の姿はない。

「……だ」

「ッ!?!」

声が出た方を向けば、遥は〈塵殺公〉の腹の部分に乗っていた。あまりに鮮やかな動きは牛若丸を思わせるほどだった。

〈塵殺公〉から飛び降りると、遥が初めて攻撃の構えをとった。

「今はこの体が弱いから威力はそんなにないだろうけど、それでも結構痛いから覚悟しろよ」

右の掌に集まりだした光が、徐々に長い棒状の何かを形成していく。

時間にして数秒ほどして集まった光が弾けて完成したものがついに姿を現す。

それは精緻な装飾が施された一本の黄金の槍だった。

トゥルー・ロンギヌス 黄昏の聖槍かと一瞬思ったが、それはないとすぐに否定した。

そもそも俺の見たものと違うし、今聖槍を持っているのはヤハウエだからだ。

ならアレは一体……。

「行く————ッ！……あーあ、時間切れか。悪い、勝負はここまでにさせてもらおうわ。また会えたらそんな時はよろしく」

『え？』

遙がいきなり構えを解いて槍を消すと、別れの挨拶をしてくる。時間切れって……何だそりゃ？

遙がその場で倒れたかと思うと髪の色が元に戻り、角も消える。

「……………ん？あれ……………どうしてトレーニングルームにいるんだ？って皆もいる？」

倒れていた少年はすぐに起き上がり、周りを見回すとキョトンとしていた。自分が何故ここにいるのかを疑問に思うのも無理はないだろう。さつきまで別人だったのだから。

「あなた、空君……………でいいのよね？」

「何言ってるの、愛衣？俺は龍神空だよ。それ以外誰がいるの？」

『ほっ……………』

空が戻ってきたことに皆が一斉に安堵の息を吐く。

「え？何？なんかあったの？」

『な、何でもない！』

皆揃って誤魔化した。

何となくではあるが、今日あったことは空に言い辛い。

「……………変な皆……………それよりも何だかお腹空いちゃった。ご飯にしようか」

そう言えば俺達ってまともに昼めし食ってなかったな。

「それだったら私が———」

『シャルル（さん）は何もするな（しないで）！』

「ひ、酷いわ！」

皆に揃って拒否されて落ち込むシャルルだが、ことがことだけに誰も慰めようとしない。

あんな料理をまた作られたらこっちの身が持たないんだよ！

「ご飯作ってくるから、その間好きに寛いでいいよ」

俺達は空がちよつと早めの夕飯を作るまで特訓をすることにしたのだった。

Side out

Side 空

「さてと、今晚は何にしよう？ ……あ、今日は洋食にしてみよつかな」

「あの一、空君、私に手伝えることってないかな？」

必要な材料を準備して、影分身を出そうとしたところでキッチンに明日奈が入って来た。

「うーんと、じゃあ……ニンジンとジャガイモの皮を剥いて、一口サイズに切ってくれる？」

普段なら影分身でやるところだが、折角の申し出を無碍にするわけにもいかないので簡単なことを頼んでみた。

「わかった！ 頑張るね！」

エプロンを着た明日奈が両手に小さな握り拳を作ってから意気込む。包丁を手にする様はどこか不慣れに思える。

「明日奈って包丁握ったことない？」

「……う、うん」

明日奈は生粋のお嬢様だ。毎日食べてるご飯はお手伝いさんがやってることは知っているし、この歳で台所に立つという子供はそうはいないだろう。だから、明日奈が包丁を持ったことが無い、というのは別段おかしいことでもないのだ。

「なら俺が教えるよ。ちよつと失礼するね」

料理は初めてか？ だったら俺が教えてやるよ。

……ッ!

「えッ!? (後ろから抱きしめられるってこと!?)」

明日奈の背後に立って、明日奈の両手を握る。教えてる間に影分身に作り始めてもらう。

「まずは、左手を猫の手みたいにしてね。包丁で切らないようにするために」

「う、うん……。 (そ、空君の温もりが私の体を包み込んでくる……。悪くない! それどころか最高だよ!)」

「次は包丁の持ち方。親指、人さし指、中指で包丁の柄の付け根部分をしっかりと持つ。他の二本はそんなに力入れなくていいから」

「こ、こっかな? (空君が耳元で話すから吐息が耳に当たってくすぐったい……!)」

明日奈は物覚えがいいので俺が教えてことがすぐに出来ていた。ただ、この恰好が恥ずかしいのか耳が真っ赤になっていたので、出来るだけ早めに終わらせることにした。

「そうそう。じゃあ、そのままニンジンの端二つを切るよ」

そのまま後ろから明日奈の手を動かしてニンジンの端二つを切り落とす。

「で、出来た……!」

「はい、上手に出来ました。次は皮むきだね。ピーラーを使って剥くと楽でいいよ。あ、それからジャガイモの凹んだところにある芽はピーラーの横にある突起で抉ってね」

「確か、毒があるんだよね?」

「その通り。流石明日奈だね」

明日奈にピーラーを渡して一緒にやる。

「うんうん、上手い上手い。?き終わったら、もう一度包丁を持って」「うん!」

今度は明日奈一人でやらせる。慣れてきたようで切るスピードが徐々に上がっていき、あつという間に野菜を切り終えた。

「大変よく出来ました。なんだか、明日奈と二人での料理でちよつぴりだけ新婚生活気分を味わえたかも」

『俺達からすればただのいちやつきだったかな』

はやてやあかりが手伝う場合は二人きりじゃないからそういうのがないんだよね。料理を教えたのだって明日奈が初めてだったから、余計にそう思わせたのかな？

「ええッ!? 新婚……そつかあ、新婚かあ……。えへへ……」

「おーい、明日奈ー？ 明日奈さーん？」

話しかけるも反応が無い。明日奈は新婚という単語をニヤついた顔つきでやたらと繰り返して、自分だけの世界に入ってしまったようだ。

……まあ、明日奈も女の子だもんね？ 将来、素敵な誰かと結婚する日が来るといいね。

未だに自分の世界に入り込んでいる明日奈を放っておいて、料理を続ける。

「出来上がりっつと」

それから一時間ほどして、本日の晩御飯であるシチューとカルパッチョ、焼きあがったばかりのパンが完成した。

家にいる全員を呼んで、テーブルを囲う。

「うむ！ 空の料理は相変わらず美味しそうだな！」

「ありがと。でも、今日は明日奈にも手伝ってもらったんだ」

「ぬ？ そうであった——……それは二人で作ったのか？」

「そうだよ。ちよっぴり新婚さんみたいな感じで楽しかったね、明日奈」

「うん、えへへ♪」

『新婚ッ!』

何人かが凄い勢いで立ち上がる。

『(なんて羨ま……羨ましいことを!)』

「今日は簡単なことだけだったけど、次は料理を教えてください？」  
「もちろん喜んで教えるよ」

晩御飯が終わると、泊まる気満々の皆と遊んでから就寝した。

S i d e o u t

S i d e 遥

料理を教える、か。懐かしいな。俺もアイツに教えたっけ。ソラを見ていると懐かしい思い出が蘇る。

「あー、何だかあいつ等に会いたくなってきたなー」  
だが、それは叶わぬ願いだろう。

俺は死んだ身。過去の存在だ。ならば何もせずに黙っているのがいいに決まっている。

今日は偶々だからノーカン……でいいよな？

「――頑張れよ、ソラ。いつか決断しなければならぬ時が来る。お前がどういふ答えを出すのか楽しみにしてるぞ」  
俺の呟きは俺以外いない静かな部屋に響いた。

## 伝説の三提督と会談です！

伝説の三提督と会談です！

Side空

シヤマルさんのお料理地獄事件の翌日、クロノから連絡があった。

『空、会談の日取りが決まった』

あー、以前に言ってたやつだ。

「ほうほう、いつになったの？」

『明後日だ』

よし、こいつを一発殴ろう。そう思った俺を誰が責められようか、いや誰にも責めることは出来ない（反語）。

『というわけで今から迎えに行く。準備しておいてくれ』

「……わかったよ。ん？ 今から？」

——ピンポン。

返事をして通信を切った瞬間に家のインターホンが鳴った。急いで玄関の扉を開けるとクロノとエイミイさんがいた。俺への連絡が終わったと同時に二人は転移してきたのだろう。

「……何？ 何なの？ 俺に対する嫌がらせ？ そんなに嫌われるよ  
うなことしたっけ？」

「軽い遊びだ。気にするな」

悪びれもなく、前よりも若干生き生きとした表情でクロノは言った。

魔導書の事件がひと段落して、父親が帰ってきた嬉しさからタガが外れたのだと思い、何も言わないでおくことにした。

「事件が終わってから母さんと父さんが毎日新婚のようにイチャイチャしてるのが軽いストレスになってついやった。反省も後悔もしてない」

前言撤回。やっぱり殴ろう。さっきの連絡との分も込めて二回殴ろう。それから、二人は十年間一緒にいられなかったんだからそのくらい許してあげなさい。

「クロノ」

「何——ガッ!? い、いきなりな、何をする!？」

「今からお前を殴るから。二回ほど」

「宣言する前に殴ってるよね!? しかも割と本気で!」

エイミイさんが倒れたクロノを抱き起しながら叫んでいるが無視だ。むしろ、魔力強化されてないだけありがたいと思ってもらってもいいくらいだと思う。

「連絡が来たと思えば、会談は明日と言われるわ、通信が終わった同時に家に来るわって……お前はアホか! ……まあ、いいや。今から準備するから五分ほど家の中で待ってて」

二人を家の中に招き入れてから自分の部屋に戻り準備した。皆にミッドチルダに行くことを伝え、クロノに確認したら、シエラとティアを連れて行っても構わないそうなので、連れて行くことにした。

「お待たせ。そんじゃ、行きますか」

「ああ」

クロノの後を付いて行き、アースラへと転移する。そこから時空管理局の本部がある次元世界——ミッドチルダに向かうのだ。

「ねえ、空。ミッドチルダとやらに何しに行くのかしら?」

訳も分らず連れて行かれることになったティアが聞いてきた。

「管理局で有名な伝説の三提督に会うらしいよ」

「へえ……空を管理局に入れる気なの?」

「さあね。それは会ってみないと分かんない。でも、もしそうなら俺は断るけどね」

「前から思っていたんだが、何故そこまで管理局を毛嫌いする?」

アースラの部屋での俺達の話が聞こえていたのか、部屋に入ってきたクロノが会話に交じってきた。

「別に毛嫌いしてるわけじゃないよ。クロノやリンディさんのことは信用してる。……でもさ、それが管理局っていう組織となると別問題。黒い部分が多過ぎるよ。それに前にも言ったけど、俺は囑託魔導師になって時間が潰れるのは嫌だからね。あと、俺がなのは達ほど魔導師に向いてないからかな」

「……そうか。しかし、君がなのは達程魔導師に向いてないとはどう

いうことだ？ 僕からすれば君の方が魔導師として随分と優秀に見えるぞ」

クロノの疑問は最もだ。現段階では俺の方がいくらかは優秀ではある。しかし、それは今だけの話だ。実際、なのはに負けることもあるし、シグナムさんやヴィータ達にはブレイブだけで勝つことは滅多にない。

「それはね、俺が魔法の練習あんましてないからだよ。別の力を使った方が強いってのもあるんだけどね。それになのは達の方が魔法の才能があるよ。今はまだ負け越さないだろうけどその内……あと三年したら勝てなくなるんじゃないかな？ いや、もしかしたらもっと早いかも。ブレイブには悪いけど、使うのはバリアジャケットと非殺傷ぐらいだと思うよ」

《マスター酷いです！ 私がありながら他の力ばかり！ ぐれてやります！》

「そうなるよ……シエラが俺のデバイスかな？」

この間の王様との戦闘でシエラとのユニゾンは十分に出来ることが分かったから問題ない。

「それはいい考えですね。中古品のデバイスは捨てて私に乗り換えてみませんか？」

《ガーン！ やっぱり今の無しです！ その女にマスターのデバイスの座は渡しません！》

「アハハ、冗談だって。そんなことしないよ。まあ、出来るだけ魔法でも負けないように頑張る」

なのは達に抜かされるのはまだまだあとでいいかな。もうちょっとは魔法少年を頑張らないとブレイブに申し訳ない。

《よ、良かったです……》

「君がそう言うとは思わなかったが、話を聞いてみるとそうかもしれないな。ああ、そう言えば、君の神セイクリッド・ギアの力は本部にはバレないように隠している。知っているのはアースラにいる人間だけだ。本部には何とか誤魔化して報告してるから安心……とまでは行かなくても楽にして欲しい」

クロノ達にも事件が終わってから神器のことは話した。

ジュエルシードの時みたいに誤魔化しは効かなさそうだったのもあって伝えることにしたのだ。アリサ達の神器はギリギリレアスキルという形で通せた。

リンディさんはロストログア並みの危険な力と考えたが、無理に俺を入れて管理局を壊されかねないと思ったのか、何も見なかったことにしたらしい。

しかし、ナハトヴァールを消し去った砲撃だけは隠すことが出来ず、管理局に伝わってしまった、とのことだ。

精霊の力は隠せてるし、神器についても知られたのは一部だけなら問題ないか。そこはクロノ達に感謝だな。脅しはしたから管理局の上層部もおいそれと手は出してこないだろうし、なのは達を人質にとるんだったら自分の命が無くなることを覚悟してもらわないとね。

「そっか。あ、そうだ。はやて達ってどういう処分が下されるの？」

命令とは言え、過去に守護騎士達は問題を起こしたわけでしょ？ 恨んでる人だつて決して少なくないだろうから無罪ではないよね？」

「それは……まあ、そうなんだが……」

クロノはシエラを気遣っているのか言い難そうにしていた。

「私のことは気にしないでいい」

「わかった。遠慮なく言わせてもらう。本来であれば、夜天の魔導書の主、八神はやて及び守護騎士達は管理局で拘束する……はずだったが、事件の解決に尽力とギル・グレアム提督や母さんの口添え、それから君の渡してくれたデータのおかげでどうにかそれは免れた」

ほっ……はやて達が何かされるんじゃないかとヒヤヒヤしてたけど杞憂に終わってよかった。

「ただ、管理局に入ることでだけはどうしても変えられなかった……」

「でも、はやては自分から入りたいてい言って言つてたでしょ？」

なのはやフェイト達と一緒に問題なさそうだし、アリサやすすか、明日奈も囑託魔導師になることを決めたらしい。

「……よくわかったな。過去に守護騎士達が迷惑を掛けた人達に謝つたのち、足が完全に治つたら入ることになった。今はなのは達とア―

スラのトレーニングルームにいるだろうからあとで行ってみるといい」

はやての足は事件が解決してから聖杯の力でほとんど治っていて、今はゆっくり歩ける程度にまで回復している。完治する日は夏休み明けぐらいになる、とシヤマルさんが言っていた。

それからクロノクロノの両親の愚痴を聞かされてと他愛無い話をしてからシエラとティアを連れて、なのは達に会いに行くことにした。

「お、いたいた。やつほー、皆」

『空（君）！』

アースラの一室になのは達がいた。何人か汗を掻いていたので練習でもしていたようだ。

「どうして空達がここにいる？」

一番近くにいたシグナムさんが尋ねてきた。

「これから伝説の三提督と会談するんです」

『伝説の三提督?! ……って何?..』

ほとんどもが知らないのか首を傾げていた。俺も初めて会うから知っているわけじゃないけど、軽く説明した。

「——で会談するわけ。はやて達はミッドチルダに着いたら過去に迷惑かけた人に謝りに行くんだよね？」

「……うん。いくら命令されてやったとはいえ、今代の夜天の魔導書の主である私がやらなあかんのや」

……まだ小学生だというのに大した娘だよ。なのは達も含めてももう少し子供らしいところがあったてもいいのにな。

「それ、俺も一緒に行くことにしたから」

「……?.. どないしてや?..」

はやては俺が同行する理由が思い当たらず首を傾げていた。

「今の主は俺だけど、シエラだって夜天の魔導書のプログラムだったことに変わりはないから。それにもし治せる怪我なら治すつもり」

「あ、それってセフィロト・グラール幽世の聖杯だよね？」

アリシアが思いあたったことを口に出した。

「うん、それなら大抵のものは治せるから」

死者すら甦らせることも可能だが、赤の他人にそこまでする義理は無い。それに死者蘇生をして、能力が管理局にバレたら余計に面倒になるというのもある。

「空のそのセフィロトなんとかってシャルルの治癒魔法よりもスゲーのか？」

「うん、すごいよ。シャルルさんの存在が霞んじやうくらい」

シャルルさんには申し訳ないが魔法じゃ治せないことも聖杯なら出来る。

「となると、ただでさえ湖の騎士は存在感が薄いのに聖杯によって完全に無くなったな」

「ううツ……………空君のバカアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

リインフォースさんに止めを刺されてシャルルさんが泣きながら部屋を飛び出していった。

悪いことしたなあ……………あとで慰めに行かないといけないか。リインフォースさんにも原因あるけど……………あ、戻ってきた。

謝りに行こうと思ったらシャルルさんはすぐに戻ってきた。

「私、参謀役としてはまだまだいけますからね！」

俺の方を睨みながら言った。余程大泣きしたのか目元が赤くなっていた。

「そうですね。参謀役としてはシャルルさんの方が断然上ですよ」  
「そうよ！ 空君は少ししか生きてないけど私は何百年も生きて……………

生きて……………私はババアなんかじゃないわよオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！」

『（自分で言って自滅したー！）』

多分シャルルさん以外の皆の考えと完璧に一致してると思う。

シャルルさんは再び大号泣して部屋を飛び出して行った。

「……………今のは俺悪くないよね？」

『流石にあれはどうしようもないですね……』

中にいるヤハウエも呆れていた。

皆で何とか落ち込んだシャマルさんを慰めたことで機嫌は直った。

その後はアースラ内で夕飯を食べた。

「そういえば会談が明後日ってことは、俺ってどこかで寝泊まりするってこと?」

食事の最中に気になったことをクロノに聞いてみた。

「ミッドチルダに着くまではここで寝泊まり……と言っても一日だけだ。……着替えを持ってくるの忘れたのか?」

「一言も言われてないけど!」

周りを見ると、皆は着替えを持ってきていたようで驚いていなかった。

「すまない。僕の服で良ければ貸そう」

「それをお願いするよ」

事件が終わって気が緩むのも分かるけど、そういう大事なことは言って欲しいよ……。

軽くクロノを恨みがましく思っていると、リンディさんとクライドさんの二人が目に入った。

「もうっ、クライドさんったら」

「リンディこそ……いいのか? 子供達が見てる前だぞ?」

「あ、あらやだ……私ったらっ……」

クライドさんに指摘されて俺達がいることによく気が付き、二人だけの桃色空間から出て来た。免疫のないなのは達は終始二人の様子に赤面していた。

「あ、そうだ、リンフォースさん。クライドさんって十年前に夜天の魔導書内に吸収されたわけですけど、十年前と同じ姿のままですか?」

「そうだな」

「だとすると……リンディさんとクライドさんって十歳差があるわけですね」

実年齢を知ってるわけじゃないから何歳差なのかは知らないけど、

もしも二人が同い年であればそういう計算になる。少なくともリンデイの方が年上なのは間違いないと思う。

——ピシッ!

あ、リンデイさんが石になった。ついでに部屋の空気も固まった。

「……ねえ、クライドさん……」

「な、なんだい、リンデイ?」

リンデイさんが俯くと前髪が顔を隠しているので表情は読み取れない。

「……………私がクライドさんよりも若くなくても……………愛してくれるわよね?」

「も、もちろんだ! 僕はこれからも君を愛する! それに、君は十年前と何も変わってないから今でも十分輝いているよ!」

クライドさんは必死になつてリンデイさんをおだてていた。実際、クライドさんの言う通りで、リンデイさんはどう見ても子持ちとは思えないほど若々しい。二十代前半……………下手したら二十歳でも十分通じる。

「そうよね! クライドさんと年齢が離れようと私を捨てるなんてありえないわ!」

クライドさんの言葉にリンデイさんは顔を上げてすごく嬉しそうにしていた。

「空はどうしてあんなことを言ったんだ?」

「歳の差が離れてリンデイさんが落ち込んでいたなら俺が若返らせようかなと思っただんです。でも、必要——」

「今の話はホントなの!?!」

リンデイさんが血走った目で俺に詰め寄って来た。

「え、あ、はい……………出来ます。でも、いらないんじゃないんですか?」  
「それとこれとは別よ! 出来るならば是非ともお願い!」

若返ることが出来るならしたいのは当然なことだ。

「わ、わかりました。——幽世の聖杯」

聖杯を取り出して、中にある水をリンデイさんに降り掛けた。リンデイさんは光に包まれて数秒後に光が無くなると、特に変わった様子

はなかった。

「……？　今ので本当に若返ったの？　あ、でも肩こりや溜まっていった疲労は無くなってるし、体から元気が溢れて来る気がするわ……若返ったのかしら……」

「……外見にそんなに変化はないですね」

『相変わらず、この世界の人間は年齢と外見が一致しなさすぎるだろ……』

悪魔や天使、堕天使は魔力や、光力を使えば年齢は変えられることは知っている。でも、その力を全くと言っていいほど持つていない人間があそこまで変わらないのは最早、魔法と言っても過言ではない。

「ありがとね、空君！」

「どういたしました。分かっていると申しますけどこのことは内緒にして下さいね？　信用出来るリンデイさんだから使ったんですから」

「ええ、もちろんよー！」

本当に若返ったのか疑わしいほど変わらないリンデイさんが、クライドさんのそばに戻り、再びイチャつきだす。

これ以上あの二人のイチャつきを見ていると口から何か出そうだと思った俺達は、向こうに目がいかないように面白い話題が無いかと探す。

「と、ところでクロノは暇な日ある？」

「あるにはあるぞ。明後日の会談が終われば溜まっていた有給休暇を取るつもりだ」

「お、ちようどいい」

「……？」

「今度さ、俺、ヴァーリ、ユーノ、雄人、ザフィーラさん、それからクロノを誘って遺跡発掘に行こうって計画中なんだけど、どうかな？」

「……よくよく考えてみれば、僕はそういう息抜きを管理局に入ると決めてから全くしてなかったな。偶にはいいかもな、友人と過ごす休暇というもの」

クライドさんがいなくなってから管理局に入り、執務官を目指すために人一倍血の滲むように頑張つて来たのだろう。自分の青春を犠

牲にしても。

「これで決まりだね！」

「僕は着いたらすぐに準備に取り掛かるよ」

「頼んだよ、ユーノ」

「任せておいて！」

それから六人で話し合った結果、俺の会談が終わってから行くことになった。

ミッドチルダに到着してから皆と別れ、俺達は車に乗せられて、見ただけでも高級とわかるホテルに入れられた。

「ここに伝説の提督がいるの？」

「そうだ」

クロノの案内について行き、最上階の部屋で立ち止まる。この部屋に伝説の三人がいるのようだ。

「クロノ・ハラオウン執務官です。龍神空を連れてまいりました」

『入ってちょうだい』

「失礼します」

「失礼します」

クロノに続いて俺達も一言断ってから入室する。

「いらっしやい。さあ、席に座ってちょうだい」

「ありがとうございます」

三人の老人と向かい合うようにクロノ、俺、ティア、シエラの順に並んで座る。目の前の三人は全員初老の人達だった。

「さてと、まずは自己紹介からしましょうか。初めまして、ミゼット・クローベルよ」

「レオーネ・フィルスじゃ」

「ラルゴ・キールだ」

「初めまして、龍神空です」

「使い魔のティアマットよ」

「シエラです」

「空君ね？　話は聞いているわ。何でも闇の書の防衛プログラムを跡形もなく消し飛ばしたそうね？」

俺も跡形もなく吹き飛ばしたつもりだったけど、この間再生しようとしてましたけどね！

「フン……どうだか。お前は中々の魔力を持っているようだが、次元震を起こすほどの威力は出せるとは到底考えられん。別の者がやったのではないか？」

ラルゴ・キールさんは俺がナハトヴァールを吹き飛ばしたことを信じてないらしい。

あらら……信じられてないね。まあ、俺としてはそっちの方が助かるかな。

「いえ、間違いなく彼が防衛プログラムを消し飛ばしました。それはアースラ全員で確認しています」

「……そうか。クロノ執務官がそう言うのであれば信じるとしよう」

あつさり信じたことから、クロノの執務官としての信用度がいかに高いかが分かる。

「それで、お主に提案なのじゃが――」

「お断りします」

「……まだ、何も言うておらんのじゃが……」

「いえ、質問の内容に予想が付くので。……俺が撃った砲撃魔法をもう一度見せろって提案するつもりだったんじゃないですか？」

「……その通りじゃ。それと、お主がどれほど危険な存在か見極めるためにも、だったのじゃがな」

次元世界を守る組織としては、危険なものや人物を見過ごせない。だから、俺にもう一度撃てと提案しようとしていたのだ。

次元世界を守る……か。下手したら、いや、ほとんど侵略行為として捉えられてもおかしくないよね。

管理局の目的に不安を感じるが、自分はこの組織の人間じゃないから何も言わない。でも、もし仮に俺の住む世界を侵略するというのなら当然黙ってはられない。もつとも三大勢力や神話の存在に管理局如きが勝てるはずもないが。

「少し残念だけど、無理強いは出来ないわ。でも、せめてあなたの實力だけでも見せてくれないかしら？ クロノ執務官の報告書にあなたの實力は他の子達の中でも群を抜いていると書いてあったのよ」

「へそんなこと書いてたの？」

「へああ。だが、事実だろ？」

それは神器や九喇嘛の力を使った場合の話だ。さっきも言ったが、俺に魔導師としての力はそこまでない。

「わかりました」

「至急人を集めろ。クロノ執務官を含めて五人ほどのチームで龍神空と戦ってもらおう」

五対一とか大人気ない……。

そう思っても口には出さない。向こうなりの妥協点だろうし、何より管理局の人相手にどれくらい通じるのか知っておくのも悪くないからだ。

「クロノ執務官、今から一時間後に地上部隊の訓練場に龍神空を連れて来い」

「ハッ！」

ラルゴ・キールさんの命令にクロノは綺麗な敬礼を返す。

「三人共こつちだ」

クロノに再び案内され、指定された目的地へと向かう。

本気は出しません！ ええ、きつとです！

本気は出しません！ ええ、きつとです！

Side空

管理局の地上部隊の訓練場に、俺とクロノを含めた管理局の人達五人が向かい合って並び立っている。観客席には三提督とティア、シエラがいて、少し離れた所にはいつの間にかなのは達がいた。

「えつと……君が私達五人と戦うのかな？ 大丈夫？」

遠慮がちに青紫の長髪を緑色のリボンでまとめた女性が心配そうに尋ねてきた。

……普通はそう思うよね……。傍から見ると子供一人を寄つてたかつていじめてるみたいだもんな。

「クイントさん、問題ないですよ。彼は強い」

クロノがクイントさんと呼ばれた人の質問に答えた。

強いって言われても、セイクリッド・ギア神器や精霊の力を使わないから本気つてわけじゃないし、魔法だけの全力つてそうでもないんだよね。

「……あの歳でそこまで言われるのね。うちの子供とそんなに変わらないのにすごいわ……」

ん？ 今聞き捨てならないことを聞いたぞ。

「一つ良いですか？ えつとクイントさんでしたっけ？」

「ええ、そうよ。あ、私はクイント・ナカジマっていうの。よろしくね。それで聞きたいことはなにかしら？」

「クイントさんって子持ちなんですか？」

「ええ、娘が二人いるわ」

マジか……マジなのか……。この世界の大人ってやっぱおかしくない？ 桃子さんといい、プレシアさんといい、リンデイさんといい、年齢と見た目が合致しなさすぎ！

「あ、自己紹介が遅れました。俺は龍神空といいます。この度はお忙しい中、自分と戦って下さることに感謝します」

「私はメガ・ヌ・アル・ピーノよ。よろしくね。クイントとは同僚よ」

薄紫色の長髪の女性が俺に続いて、柔和な笑顔で自己紹介してくれ

た。

「俺はティード・ランスターだ。子供だからって容赦はしないぜ」

次は爽やか茶髪イケメンのお兄さんが自己紹介。デバイスを構えている姿がとても画になっていた。

「ゼスト・グランガイツ。クイントとメガーヌの上司だ」

槍を携えた体の敵つい男性が短く自己紹介。

……この中で一番強いね。

「ここは流れに乗って、僕も一応自己紹介を——」

「あ、結構です。とつとと始めましょうか！」

「昨日のことをそんなに根に持っているのか!？」

「さー、なんのことだかさっぱりです」

クロノを適当に流して、バリアジャケットを展開する。

『六人とも用意はいいですか?』

『はい（ええ／ああ／うむ）!』

今回の審判役を務めるエイミイさんの声が訓練場に響く。

『それでは、試合開始!』

開始の合図が出ると、六人全員が一斉に動き出す。

最初に狙うなら——

「俺の戦い方を知ってるクロノからだよね!」

クロノも俺が真っ先に向かってくるのが分かっていたのか、大量の魔力刃——ステインガーブレイドを俺に向けて一気に放つ。

俺はブレイブを鍵の形をした双剣に変形させ、見聞色の覇気と武装色の覇気を使って躲し、受け流し、弾く。

徐々にクロノに近づいていき、剣が届く範囲に入った——

「私を忘れないでくれないかしら?」

——ところでクイントさんの邪魔が入る。

「忘れてませんよ。——他の三人も」

後ろから来る橙色の魔力弾を回し蹴りで蹴り返し、その回った勢いを利用してメガーヌさんの脇腹に剣を薙ぎ払う。

あとは……上か!

——エリック! 上だ!

……………？ 何だ今の？ 変な電波を受信したぞ……………。

「フンッ！」

って！ そんなことよりあの巨体からは想像できないほどの速さだ！ これが直撃すればただじゃ済まない！ ——ま、直撃すればのはなしだけどね。

槍を真正面からではなく、少しずらして受け流す。

「受け流したか……………」

「地球には、柔よく剛を制す」ってことわざがあるんですよ

「なるほどな。ならば——」

槍型デバイスに魔力を込めて力任せに横薙ぎに振るう。

「——剛よく柔を断つ、ただそれだけのことだ」

ッ！

たったの一振りでも風が吹き荒れ、暴風が体重の軽い俺の体勢を意図も容易く崩す。

「四人とも、今だ！——」

『了解！』

ゼストさんが作り出したチャンスに四人が動き出し、各々が高密度の魔力を集め始めた。恐らく次の攻撃で終わらせようとしているのだろう。

そう簡単には負けるつもりはないよ。

「へっ、レイブ、全力で防御魔法展開。俺の魔力をあるだけ使って」

《了解です、マスター》

特大の蒼い防御魔法が俺の四方八方に展開される。更にスファイアプロテクションという球状の防御魔法も発動させる。

スファイアプロテクションは空間攻撃や全包围攻撃に対するための魔法だ。今回は複数からの砲撃だから丁度いい。

防御魔法と大量の魔力弾や砲撃魔法がぶつかり激しい煙と轟音を生み出す。

耐えるのシンドツ！ しかも何もわからない！

俺の視界が煙で遮られ、耳が轟音で塞がれ、周囲の確認が目と耳では確認できない。

右から誰か来る……!!

見聞色の覇気を全開で使い、感じた反応は一つ。煙に紛れて何者かが攻めてきた。

「はあああああああッ!」

攻撃してきたのはゼストさんだった。返り討ちにしようとしてブレイブを銃にして魔力弾を撃ち放つ。

「えッ!」

しかし、撃った弾丸はそのままゼストさんの体を貫通したが、元からそこにいなかったかのように消えた。

なにあれ!?

そして、驚いている間に背中に攻撃を受けて地面に叩きつけられた。

倒れた瞬間、目に映った青紫の髪で理解した。

近づいてたのはゼストさんじゃなくてクイントさんの方だったのか!

見聞色の覇気ではしつかり反応できていた。でも、それがゼストさんではなくクイントさんだった。俺がゼストさんの幻影(?)に目を奪われているうちに背後に回り、攻撃。この煙の中じゃ近くにいるもわからないのは当然だ。

管理局にもなかなか強い人いるもんだね!

いつまでも寝転んでいてもただの的ではない。すぐに起き上がり、体勢を立て直す。

煙が晴れて、俺の数mさきに五人が揃っていた。

どうやって攻めるかな? さっきの幻影みたいなやつはクロノ以外の魔法のほず。でも、影分身とは違って、見聞色の覇気で偽物かどうかは見破れるから二度と騙されない自信はある!

「その顔つきからすると降参はしないようだな」

「たかが一撃もらっただけですからね。まだまだ余裕ですよ。二度とさっきの幻影みたいなのに騙されないでしょうし」

「へえ、言うじゃんか。だったらさっきよりもスゲー幻術魔法を見せてやる」

過剰に反応したティードさんがあの幻影を作った犯人のようだ。

さてさてさーで、これは早めに決着をつけるべきかな。ただでさえ人数で不利なんだから、長期戦は厳しいことになるからね。

「(九喇嘛、力使うね)」

『……構わんが、いいのか?』

「(眼の色が変わる程度なら誤魔化せるから大丈夫)」

『お前がそう言うなら任せる。存分にやれ』

「(ありがとう)」

九喇嘛の魔力を引き出すと、体から力が溢れる。

よし、いける!

目標——クロノに向かって直進。

「クツ……!」

側頭部めがけて蹴りを入れるがギリギリで防がれた。しかし、衝撃を受け止めきれず横に吹き飛んだ。

「次!」

防御魔法を踏み台にして高く跳躍。落下しながら回転して勢いをつけてティードさんの頭に踵落とし。ティードさんが展開した防御魔法を壊して地面に叩きつける。

やられたのはクイントさんだったが、一応幻術のお返しってことで。

殴りかかってくるクイントさんの拳を避け、その勢いを利用してメガーヌさん目掛けて一本背負いで投げ飛ばす。

『キャアッ!?!』

投げ飛ばされたクイントさんとメガーヌさんがぶつかって二人そろって倒れる。

残るはゼストさん!

縦に振るってくる槍を半歩横にずれることで躲し、槍の上を伝って蹴りを入れる。

「甘い!」

そう簡単にはいかず、片腕で防がれる。

一度距離をとってから再度接近。ゼストさんの足にローキック。

硬ッ！

まるで岩盤を蹴っているような感じがする。……実際蹴ったことないから知らないが。

防いだ腕とは反対の方の手で俺の足を掴んで来ようとしてきたのを魔力弾をその手に撃つて逃げる。

ゼストさんを倒すなら……螺旋丸がいいかな？

螺旋丸は乱回転させた魔力。それだけなら管理局に知られても問題なさそうだし、知ったところで習得は困難を極める。俺の場合は九喇嘛がいてくれたからすんなり覚えることが出来たのだ。

「行きま——」

『はい！ 試合はそこまで！』

「……え？」

突然ストツプがかかって、地面をズザザツ、と音を立ててから止まる。

「時間切れか……」

ゼストさんはどこか名残惜しそうに呟いていた。

「ど、どういうことですか、エイミイさん！」

『どういうことって……この試合は時間制限付きの試合でしょ？ 聞いてないの？』

「聞いてません！」

初耳なんですけど！

『ごめんなさいね。あなただけには敢えて言わなかったの』

なぜに俺だけ？

「君に時間制限付きだと言えば、逃げ続けるだけで実力を隠すかもしれないと思われたそうだ。……一応、僕はそんなことしなくても君が全力を出すと言ったんだがな」

クロノの言う通り、確かに時間制限付きなら俺が実力を隠さないと限らない。実力を見定めるためにも俺に伝えなかったのなら納得がいく。

しかし、これでは——

「不完全燃焼だよお……」

『ワシも同じだ。随分と舐めた真似してくれるじゃねえか』

決着がつかなかったことに俺と九喇嘛の口から不満が零れる。

あとで誰かに相手してもらおうと。

「それで、今の試合で十分ですか？」

五人が治癒魔法を使っているのを横目に三提督と話す。

『ああ、よくやってくれた。お主の実力大したものじゃ』

「そうですか。あ、先に言っておきますけど管理局には入らないですからね？」

『わかっている。わざわざこちらの世界に足を運んでくれたのだからな、それ以上のことは要求するつもりはない。だが、今の試合の労いぐらいは構わんな？』

「はい、それぐらいなら」

『では、今から先ほどいた場所に戻ってきてくれ。ゼスト・グランガイツ達五人もだ』

『ハッ！』

五人が三提督に向かって揃って敬礼をする。

俺はティアとシエラと合流してクロノの後を追う。

高級なホテルの一室に戻るとテーブルの上には大量の料理が置かれていた。

「あのーこれは……？」

「労いだ。先ほどの試合のな。好きなだけ食べるといい」

「でも、試合しただけですよ？」

「君は自分がどれほどすごいかわかってないようだな」

クロノが呆れてため息交じりに説明してくれる。

「僕たち五人に対して攻撃を一撃しか受けずにいた。それどころかこちらが君に攻撃を受けた。その上、10分間も戦い続けたんだぞ。これをやってのけた君のことをすごいと言わず何と言う？」

「えーっと、そっちが弱い……とか？」

「これでも魔導師ランクがA以上の人ばかりなんだが」

「その基準変えたら?」

「できるか!」

「冗談だよ。ま、あのまま続けて勝てたかどうかはわからないけどね。ゼストさん強いし、他の四人も相当な実力持つてるから」

長期戦だったら絶対に負けてるね。

「試合の話はそこまでにしてね? 美味しい料理が冷めちゃうわ」

ミゼットさんからストップがかかり、話をやめて料理を食べることにした。

「なあ、空」

「何ですか、ティーダさん?」

料理に舌鼓を打っていると、ティーダさんが傍にやってきた。

「無理を承知で頼む! 俺のことを鍛えてくれないか!」

「いいですよ」

「そこをなんと……え、いいのか?」

「はい、俺でよければ」

「あ、ありがとう!」

「じゃあ、早速修行開始です」

「いきなりか!? い、いや、なんでもバッチコイだ!」

「焼きそばパン買ってきてください」

「……は? や、焼きそばパン? なんだそりや? ——つてか

それってパシリじゃねえか!」

焼きそばパンがわからなくても買ってこいというのでパシリと理

解したのでらう。

「ナイスツツコミです」

「意味が分からんわ! 修行はどうした!」

サムズアップをすると肩をグワングワン揺らされる。

「これだから最近の若者は……」

「ホントね……。ティーダ君は違うと思ってたのに残念ね」

「ティーダ、お前はその程度か?」

「ゼストさん達何言ってるんですか!? お、おいクロノ! 助けてくれ!」

ゼストさん、クイントさん、メガーヌさんに見捨てられ、クロノに助けを求める。

「空はきちんと指示を出したのに、それを断った君がどう考えても悪い」

「嘘だろおい!? 俺に味方はいないのか!?!」

クロノにバツサリ切り捨てられ、頭を抱えて床に膝をつくティーダさん。三提督も少しだけ苦笑いしてた。

そろそろ可哀そうになってきたからやめようか。

「俺がここに居るのはあと二日かそこらなんで、その間だけ付きつきりで教えます。そのあとは、ティーダさんが忙しいと思うんで、一週間に一回アースラに来てもらえば教えます。それでも構いませんか?」

はやてと一緒に謝りに行くから教えるのは影分身だけど。

「あ、ああ! 全然いいぞ!」

ティーダさんと連絡先を交換してから三提督やクロノ達としばらく雑談したのち解散した。

ホテルを出てクロノの案内の元、とある場所に向かっている。

「空、ティーダには何を教えるつもりなんだ?」

「戦闘面に関してはそこまで教える必要はないかな。だから、覇気とかでいいんじゃないかな?」

ティーダさんの射撃魔法と幻術魔法のレベルは相当なものだ。それなら別の部分を鍛えてあげればいい。

「なるほどな。それなら僕も少しだけ教わってもいいか? 武装色の覇気はある程度まで出来るようにはなったんだが、見聞色の覇気がまだいまいちでな」

実を言うと、なのは達のついでにクロノにもジュエルシード事件の時に教えてる。

「うん、了解」

「ありがとう。おっと、話しているうちに目的地に着いたぞ。ここが

無限書庫だ」

「ほうほう、これが以前言っていた例のあれですか！」

俺達の前にある大きな建物——無限書庫。俺がクロノから聞かされた時から行きたかった場所だ。

今回ミッドチルダに行くついでに来ようとしていたのだ。

以前までは局員しか入れなかったが、今では一般開放されている。クロノに引き続いて中に入る。カウンターの近くにはヴァーリ、雄人、ユーノ、ザフィーラさんがいた。

「あれ？ 四人ともどうしてここに？」

「ヴァーリ達がいてくれたから思ったよりも準備が早く終わったんだよ。で、時間つぶしのためにここに来てみたんだ。なのは達は本局の方で手続きをするってき。もう少ししたらこっちと合流するって言ってたよ」

「教えてくれてありがと。さき、早く中に入ろうよ！」

「急かさなくても書庫は逃げないぞ」

「時間は逃げるんですー！」

「はあ……わかったわかった。おい、フェレットもどき、案内を頼む」

「だからフェレットもどき言うなって言ってるだろ!？」

「お、おいおい、喧嘩すんなって。ここには他にも人がいるんだぜ？」

雄人が二人を窘めようとするも口論は白熱していく。

「雄人の言う通り、マナーは守るべきものだ。こういう公共の場ではなおさらのことだ」

「盾の守護獣だけに、か？」

「お、ヴァーリ上手い！ 座布団一枚！」

「……ノーコメントだ」

たまたま口に出したことがそうなるとは思ってなかったのか、ザフィーラさんは恥ずかしさからそっぽを向いた。

結局、二人の喧嘩は司書さんらしき人に止められるまで続いた。

俺達は無限書庫の一般区画の奥にある未整理区画の一部——

古代ベルカ区画に足を運んだ。

聖王や霸王について書かれた本を探すためだ。

あわよくば、新しい技を作ってみたい、なんてことも考えてたりする。

しかし、ここで大きな問題が発生した。

先ほど言ったが、ここは未整理区画。つまり本の完全には整理がされてないわけだ。

となると、ただでさえ広く、本の数が多いここで目的の本を探すのは至難の業になる。

「いきなり心が折れそう……」

「アハハ……頑張れ。僕も手伝うからさ」

ユーノから励まされ、頑張って探すことにした。

というか探すのが途中から面倒になってきて、ユーノから教わった複数の本を同時に読む魔法で片っ端から読んでいく。

ベルカ文字を習って日が浅いので、知ってる単語から大雑把にその本の情報を読み取り、すぐに別の本をとる。

そして、約一時間後。

「———お、これか？」

ついに聖王———オリヴィエについて関りがあるらしき本が見つかった。

……戦争……聖王の、ゆりかご？

ページをめくるとオリヴィエ・ゼーゲブレヒトが生を終えるまでの話だった。

どうやら、彼女は戦争を止めるために聖王のゆりかごと呼ばれる巨大兵器に乗った。結果的に戦争は終わったが、彼女は代償として若くしてその命を散らした。

「……昔は戦争なんて当たり前か。地球でも多くの戦争があつたんだから」

読み終えた本を閉じてから呟く。

「この人は……所謂、英雄ってやつだよな」

『私が英雄ですか……。自分ではそうは思いませんがね』

「自分で英雄だつて言ったところでただのアホ。偉業を成して、周りから英雄つて言われてこそ、その人は英雄なんだよ」

『……確かにそうですね。周りから認められてなければ意味をなさない』

「だから、戦争を止めたこの人は英雄だと思う。多くの命がなくなつたけど、それ以上に多くの未来の命を守つた。……誰にでもできることじゃない。それはきつとすごいことなんだよ」

『ありがとうございます。あなたのおかげで私がしたことは間違いではないとわかつて良かったです』

「それはよかつ——ん？」

ちよつと待つて。俺はきつきから誰と話してたんだ？

本の内容を整理してたから一切相手に顔を向けなかつた。そもそも相手はユーノだと思つていたが、よくよく考えると全く知らない声だ。

『どうかしましたか？』

俺は声のした方に振り向き、話していた相手の顔を初めて見る。

頭の後ろでお団子にされた金髪。右眼が緑、左眼が赤のオツドアイ。両腕には銀色の籠手があった。

えつと……この人、どつかで……あつ。

手にしていた本を開き、とあるページを見る。そこには一枚の写真があった。

その写真と俺が会話していた相手を見比べる。何度も見比べてから問いかける。

「つ、つかぬ事をお聞きしますが……あなた様はオリヴィエ・ゼーゲブレヒトさんでございませうでしょうか？」

彼女は微笑みながら教えてくれた。

『はい、私が——オリヴィエ・ゼーゲブレヒトです』

遺跡発掘は危険でいっぱいです！

遺跡発掘は危険でいっぱいです！

Side空

突如、俺の目の前に現れた金髪さんは自分をオリヴィエ・ゼーゲブレヒトと名乗った。

「……………いやいや、普通に考えておかしくない!？」

聖王は死んだ、と俺の持つ本には書いてある。となると、ここにいるのは一体誰なのだろうか？

女性をもう一度足から頭の天辺まで見るとあることに気が付いた。

この人……………透けてる!」

「あ、あの……………オリヴィエ・ゼーゲブレヒトなんですすよね?」

『ええ、そうですよ』

二度目の同じ質問にも嫌な顔一つせず answered くれた。

つまり、そういうことなの? この人って——

「……………幽霊なんですか?」

『世間一般的に言えば、今の私はそういう存在なんでしょうね』

オリヴィエさんの話を聞くと、あの時の戦争で自分の命が尽きたことを覚えてるそうだ。しかし、気が付くと幽霊となり、とてつもなく長い時間が移り変わっていく中を彷徨っていた、とのことだ。

「成仏する気とかないんですか? 暇なんですか?」

『それが出来たら苦労しませんよ! 幽霊だから暇です! 悪いですか!?!』

別に悪いとは言っていないんだけど。

「じゃあ、頑張つてとつと成仏してください。さよなら」

『え、ちょッ!? 薄情すぎません!?! 折角私が見えるんですからもつと話しましょうよ!?! 聖王ですよ!?! ゲームでいう最強のバグキャラ的存在なんですよ!?! ガチャなら出てくる確率0,01%ぐらいですよ!?!』

自分でそういうこと言っちゃうのかあ。なんか俺の中の聖王のイメージがドンドン壊れてく気がする。それにゲームやガチャを知っ

てることに驚きがあるんだけど。幽霊ってそんなに暇なんだね。

『あッ！ 今、私のイメージが崩れたとか思いましたね!? 私だって人間なんです！ そういう部分だってあるに決まってるじゃないですか！』

顔を真っ赤にして不満の声を上げる（自称）聖王様。

「ソツスネー」

『軽い！ ってどこに行くんですか!?!』

俺が立ち去ろうとしたら呼び止めてくる。

「どこって、友達と合流するだけです。……ホントは五月蠅い幽霊から逃げるためだけだ」

『最後の方まで全部聞こえてますからね!?!』

チツ……耳のいい人だな。

「はあ……それでは少しだけお話しさせてもらいます。まずは自己紹介から。俺は龍神空です。空で構いません」

『最初からそうすればいいんですよ！ まったく、ソラさんは素直じゃないですねー!』

「(なんか無性にこの人殴りたいって感情が芽生えたんだけど)」

『幽霊だから攻撃当たらんのだろ』

聖槍ならいけるんじゃない？ あ、いつそのこと成仏させるか？

「聖王様はいくつですか？」

『女性に年齢のことを聞くのはどうかと思います。私が死んだのは16でしたけどね』

結局、答えてくれるんだね。……それにしても若くして亡くなったのは、ちよつと可哀相に思えるよ。

「生前ではどのくらいの強さなんですか？」

『最強ですね！ 私に敵う人なんていません!』

へえ、自分が最強だっていう自覚はあるんだ。

「はい、これにて会話しゅーりよー。失礼しまーす」

『え、スリーサイズですか？ もう、エッチですねっ』

「どうしよう、会話を終わらせたのに無理やり伸ばしてきた……!」

……見た感じAとBの間かな？ どうでもいいけど、どうでもいい

けどっ……これ以上はマジで勘弁してください……。『ふう……会話はここまでにしておきましょう。これからも時間はたっぷりとありますからね』

しばらく一方的にマシンガントークで話かけられ、受け答えするだけで精神的にヘトヘトになった。

……どうということ？ ……なんか、嫌な予感がするなあ……。

オリヴィエさんが不穏なことを言い残したのを聞いた後、ユーノ達と合流する。

入り口付近に全員集まっていて、俺が最後だった。

「あ、空。随分遅かったね」

「探すのが大変だったんだよ。ユーノも手伝ってくれてありがとう」

「このぐらい平気さ。それよりも探してた本は見つかったのかい？」

「ある程度つて感じだよ」

実際は幽霊のせいで一冊しか読めなかったけどね！

「それなら行こうか。なのは達からさつき連絡があつて、ここに着いたみたいだよ」

俺は領いて無限書庫のロビーに向かう。ロビーには用事を済ませたなのは達が座って待っていた。

「さて、全員そろつたことだ、晩御飯食べに行こう」

クロノの提案に皆は喜んだが、この人数でお店に入れるのか心配になった。

「安心しろ。すでに予約してある」

おお！ 流石クロノ！

『なかなか気が利きますね、彼』

『そうだね。普段は——はあッ!? なんでいるの!?!』

『ッ!?!』

俺が叫び声をあげると、皆が一斉にこちらを向く。

「ど、どうしたの、空?」

「いきなり変な声上げんじゃないわよ! びっくりするじゃない!」

「……へ?」

フエイトに心配され、アリサに怒鳴られる。

……あ、あれ？　もしかして……俺以外に見えてない？

見えているなら誰かしら何らかの反応をするはずなのにそれがない。ということには皆には聖王様が認識できていないことになる。

「ご、ごめんっ、なんでもないっ。ア、アハハハハ……」

笑って適当に誤魔化してから聖王様がいる方向を睨む。

「……なんでいるんですか？」

そつと近づいて、小声で尋ねる。

『折角私が見える人がいるのに、いなくなったら私が退屈で死んでしまっじゃないですか！』

もう死んでる人が死ぬるわけじゃないじゃん！

「俺以外に見える人を探してください」

『嫌です！　聖王があなたの守護霊になるようなものですからご利益ありまくりですよ、きつと！』

聖王の幽霊が傍にいるっていうのはすごいんだらうけど、なんか嫌だ。うん、すごく嫌だ。でも、この様子だどついてくる気満々だろう。

これ以上何を言っても無理そうなので、俺は聖王様を止めることを諦めることにした。

「……もういいです。勝手にしてください」

『言質は取りましたよ！　あとでやっぱ無理とか言っても遅いですからね！』

子供かッ！　……言ったところで無視するに決まってるだろうしね。

はあ……つと何度目かのため息を吐きながら、皆の後ろをついていく。

晩御飯を皆と食べ終えたあと、男子組以外（オリヴィエさんは別）は地球に戻った。俺達はクロノの家に二日泊まってから、遺跡発掘に行く予定だ。

で、二日間をティーダさんの特訓に費やす。

ティーダさんの仕事の合間を縫って短い時間の中で教えた。

修行シーンは割愛。ティーダさんが強くなったことだけは言っておこう。

……あと、オリヴィエさんに覇気について滅茶苦茶聞かれた。オリヴィエさんの話し相手がすごく疲れたんだけど！

ティーダさんの特訓が終わったのと同時に次元旅行船に乗り、別の次元世界に向かう。なお、オリヴィエさんも当然のごとくついでくる。

「ここが目的地の遺跡か？」

深いジャングルを歩き続け、苔や植物で覆われかけている遺跡を見つけた。

「うん、まだ誰も深くは調べてないから危険もあるかもしれないけど、皆なら大丈夫だろうと思ってここにしたんだ。それに誰も手を付けてない遺跡ってワクワクするからねっ」

ヴァーリの質問にユーノがきはきと答える。

前人未到の遺跡を調査することもそうだが、誰かと一緒に遺跡発掘に行くことが初めてで新鮮というのもあって、ユーノは楽しそうに理由を語ってくれた。

「準備は念入りにしたから大丈夫だよ。さあ、行こうか」

ユーノが率先して俺達を引っ張ってくれる。専門知識がある人が一人いるだけで大分心強い。

「あ、やっぱり暗いか」

当然のことながら遺跡の中は明かりがなく暗い。魔力光ではなく、懐中電灯で照らしながら進む。魔力を使わないのはいざというときのために温存しておいたほうがいいとユーノから言われたからだ。

「お、早速分かれ道か。どうする？ 二手に分かれる？」

「この人数ならそうしようか」

グッパで六人を三人ずつの二班に分けた。

チームAがヴァーリ、ザフィーラさん、俺（+オリヴィエさん）。

チームBクロノ、ユーノ、雄人。

「分かれる前に行っておくけど、危ないと思ったら逃げることにしようもないなら念話で読んでくれるかい？」

俺達は領いてそれぞれ別々の道へと進みます。

「……異世界の遺跡って変わってるね」

『私のいた世界にあった遺跡とは違いますね』

「冥界にも遺跡はあるが作りが随分違うな」

「次元世界にはそれぞれ違った文化や文明があるのだ、冥界のものは違った遺跡があってもおかしくはあるまい」

それもそうか。星の数だけ文明がある……みたいな？

ユーノ達と別れてから数分後、想像をはるかに超える遺跡に感嘆の声を漏らす。

『——途轍もなくつまらないですね！』

更に進むこと数分後、オリヴィエさんが退屈だと言いだした。

「帰っていいですよ」

むしろ、喜んで勧めるまでである。

『あ、私知ってますよ。今みたいな反応を“ツンデレ”というんですよね？ 私がここで帰ろうとすれば、「か、勝手にどっか行かないでっ！」っていうんですよ、わかります』

全然違います。本当に帰ってほしいんです。

『空さんは仕方がない方ですね。——私は成仏するまで一緒にいるから安心してくださいね♪』

「あなたのどこに安心しろと？ というか成仏するまでいるとか当然？……ですよね？ 嘘って言うってくださいよ！」

『フッフ、さすがにそれは嘘ですよ♪』

ほっ……それはよか——

『とても言うと思ってるんですかあ？』

うわー、すげームカつく顔。そして、今の俺の表情はきつと死んでるに違いない！

——カチッ。

「ん？」

『あらっ？』

オリヴィエさんとの会話に気を取られていたせいで、周りへの注意が散漫になっていた。

聞こえてきた音の方に目を向けてみれば、片方の足が踏んでいる地面が沈んでいた。どうやら、この遺跡の何かのスイッチを押してしまったようだ。

『これは面し——じゃないじゃない。嫌な予感がしますね!』  
言い直せてないから! しかも声はかなり楽しそうだね!

「おーい、ヴァー……あり? 二人がいない?」

二人に一応危険があるかもしれないので二人にも伝えようとしたら、いつの間にか俺の近くからいなくなっていた。

『ああ、あの二人なら先に進んでましたよ。私達が会話してる間に』  
「……なんてこった」

でも一番に驚くべきことは、俺と会話してるにもかかわらず周りが見えている聖王様には流石としか言いようがない。

……性格こんなんだけど。

「まずは二人と合流、か。ブレイブ、二人の魔力反応はある?」

《申し訳ございません。この遺跡内ではわかり辛いです。ですが二人との距離が縮まればわかるかと》

「わかった。とりあえず——ッ!」

一歩進み出た瞬間、踏み出した足が空を切る。どうやら、俺が踏んだスイッチはトラップを作動させるのためのもので、足が触れたら消える仕組みのようだ。

『落とし穴! 定番ですね!』

「なんでそんなに嬉しそうなんですかあああああああああッ!」

バランスを崩して前のめりに倒れ、暗い穴の中へと叫びながら落ちていく。

「ブレイブ、飛行魔法発動!」

『そんなのいけません! ここは冒険しましょうよ!』

「あなたがただ楽しみたいだけですよね!」

『そうですが何か問題でも?』

オリヴィエさんは包み隠すことなくはっきりと答えた。

《おかけになった電話番号は現在使われておりません》

「んなツ!? なんや! なんで見捨てるんや!」

しかもなぜ電話で使われる返事の仕方を使うのかな!?

ブレイブにはオリヴィエさんのことが見えてないはずなのに、一人と一機が都合良く合わさった。

《面し——冒険の醍醐味じゃないですか。それとも何ですか?

マスターはチート無双の冒険して楽しいのですか?》

「今は命が大事なの!」

お前も面白がってるだけじゃん!

ブレイブは力を貸してくれないので、自分で何とかすることにしました。

手と足に魔力を込めて壁に張り付く。しかし、落下して生まれたスピードは相当なもので、簡単に止まる気配がなく、蒼い魔力光を撒き散らしながら滑り落ちていく。

何m落ちたかはわからないがようやく止まった。

滑り落ちる間、摩擦が起きてるはずなのに全く熱くないのはブレイブがサポートをしてくれていたおかげだ。

手や足の保護するくらいなら飛行魔法使ってほしかったんだけど……。

そんなことを言いたくなかったが、多少なりとも助けてもらったのでお礼だけを言うことにした。

「ありがとう、ブレイブ」

《いえいえ、これくらい当然です》

『情けないですね。私ならあれくらいのこと魔力なしでも出来ますよ。筋肉足りてないんじゃないですか?』

今の発言から分かったこと。聖王様は脳筋。

「あなた脳筋と一緒にしないでください」

『おっと、今「あなた」の部分に悪意を感じましたよ』

「そりゃ悪意込めて言ったんですから、悪意がないわけじゃないじゃないですか」

『ソラさんが反抗期です!』

オリヴィエさんを適当に無視して、壁に張り付きながら下に向けて

懐中電灯の電源を入れる。光が反射してキラキラしていた。

「下は……水？」

『地下水道では?』

「ブレイブはどう思う?」

《川か地下水路ではないかと思われます》

ブレイブも同じ考えか。

俺はゆっくり滑り落ちながら一番下に辿り着く。下にあつたのは地下水路で間違いなさそうだ。

《マスター、この地下水路に生体反応を探知しました》

「ヴァーリ達の誰か?」

流石に水の中にいるとは思わないけど。

《いえ、この反応は………マスター、逃げてください!》

「ッ!」

ブレイブの忠告空しく、水の中から巨大な蛇が俺を食い殺さんとはかりに大きな口をあげながら現す。

「―――【止まれ】」

『シャツ!』

覇王色の覇気を使ってたった一言。上手く効いたみたいで蛇はピタリと止まる。

「ごめんね。さ、自分の住処にお帰り」

頭に手を乗せながらそう言うと、蛇は大人しく水の中に戻っていった。

『……どうして攻撃をしなかったのですか?』

「その必要がないからです」

『相手はあなたを食べようとしていたのにも拘らずですか?』

「はい、そうですよ」

『あなたは……いえ、なんでもありません。ここには何もありませんし、上に戻りましょう』

……?

オリヴィエさんは何かを言いかけていたのが気になったが、上に戻るという提案に頷いて壁に張り付きながら登る。

「やつとツ、辿りツ、着いたーッ！」

数分かけて自分が落ちた場所に戻ることが出来た。

『次はどんなトラップがあるんですかね？ 楽し———気をつけましょうね！』

おい、今楽しみみて言おうとしたぞ、この聖王様は！

軽く睨むもどこ吹く風のオリヴィエさんに背中を向け歩き出す。

『あ、置いてかないてくださいいよー！』

「ヴァーリ！ ザファイラさん！」

「空、どこに行っていたんだ？」

「そんなにお前のことを心配はしていなかったがな」

しばらく歩くこと一時間ほどして、ようやくヴァーリとザファイラさんに合流できた。

合流するまでに、壁から槍が突き出してきたり、猪みたいな猛獣と戦ったり、大量のゴキブリを駆除したり、骸骨兵と戦ったりしたから少しは心配してくれてもいいと思う。

ちなみにオリヴィエさんは俺が畏にかかるたびに笑いそうになるのをこらえていたが、ついさつき崩壊して笑い転げている。

「そつちはどうだった？ なにか発見とかあった？」

「今しがた見つけたところだ」

ザファイラさんが指で指し示した方向には石造りの頑丈そうな扉があった。

「押したり引いたりしたんだがびくともしない。なにか魔術的要素が絡んでるかもしれない」

「なるほど……謎だね！」

こういう謎こそが遺跡の醍醐味でしょ！ 俺は畏なんか知らない。何も見てないし、起こってもない。いいね？ (迫真)

「こうなったら力づく……ってわけにはいかないんだよね」

「うむ。罪に問われてしまうからな」

遺跡の破壊はこの世界でも犯罪に値する。

『ソラさんソラさん。私の国にはこういう言葉があります』  
「? どんな言葉ですか?」

『——バレなきや犯罪じゃないんですよ』

「はい、アウトー!」

碌なもんじゃなかった! この人ホントに聖王様なの!? 嘘でしよ絶対! 俺の傍にいる幽霊が聖王様のわけがない! 略して、おゆがない”。……あ、なんだか売れそうなタイトルかも。ってそんなことはどうでもよくて!

「でも、こういうのって案外横にずらし——うそん……」

扉の前に行って掴める部分を横にずらしたら扉が開いた。あまりの呆気なさに作った人にツッコミたくなった。

「こういうこともあるんだな」

「納得し難いが、まあ開いたのならよかろう」

『今のは私もビックリです……』

先ほどまでふざけていたオリヴィエさんがかなり驚いくぐらいに呆気ないものだった。

「あー、うん、まあ……言いたいことはあるだろうけど、開いたことだし先に進もうか」

二人に促すと、小さく頷き返して中に扉の向こう側へと進んでいく。

扉の向こう側は通路になっていて、一番奥まで行くと部屋があった。

部屋の中を懐中電灯で照らすと、部屋全体の様子がわかる。

大きさは学校の教室ほどってところか。

「ん? あそこになにかあるぞ」

ヴァーリが何かを見つけたらしく、俺達はヴァーリの傍に近寄る。「これは箱……でいいのかな?」

見たところ年月が経ち、かなり錆びれた金属に鍵穴のついた箱がポツンと置かれていた。

……この箱……。

「ブレイブ、危険性はある？」

《いえ、中に何か入っているようですが危険物の反応はありません》

「そうとわかれば開けてみるか。ザフィーラさん、お願いします」

「任せろ」

俺達の中で一番力のあるザフィーラさんに開けてもらうことにした。

「ぬ……？ ビクともしないな……」

しかし、ザフィーラさんの力をもつてしても金属の箱は開かなかつた。さっきの扉のこともあったので、ズラしたり、引いてみたり、といろいろなことを試したのだが変わらなかった。

ヴァーリが神器を使って開けようとしたが結界のようなものによつて弾かれた。

「白龍皇の力でもダメか」

「んー、んー？ んんー？」

『どうかしたんですか？ さっきから唸ってばかりですが……』

「あ、えつと、上手く言えないんだけど……なんとなくこの箱の開け方わかる気がする」

『なッ!？』

三人の視線が集まる。

俺はその視線を気にすることなく箱に近づき触れる。すると――

「開いた」

箱は俺が触れると輝きだし、錆はなくなり綺麗な箱に変わった。

そして、自動的に箱の蓋が持ち上がった。

箱の中身は――白い龍が描かれた宝玉だった。

Side out

Side 遙

ッ!?

「何でアレがここにある!？」

空が遺跡で見つけ出したものを見て、俺は驚愕で目を見開く。

「……いや、そういうことか……。だとしたら俺は——」

驚きはしたものの、すぐに切り替えて考える。

あの宝玉は俺の知るもので間違いはない。世界で誰よりも知っているもの。だから見間違えるはずがないのだ。

「——もう一度、あの場所に戻る」

海へ行きます！

海へ行きます！

Side空

遺跡発掘から早数日、ついに皆で海に行く日が来た。

え、水着選び？ 全員選ぶのに半日以上掛かった！ ……わけではなく、俺の独断と偏見で似合いそうなのをパパッと選んでみたら、皆喜んで即購入していた。それでいいのかな？ とも思ったが不満そうな顔はしてなかったのでもいいと思う。

そして現在、朝の6時前。皆の朝ご飯作りをしている最中だ。

「よし、完成——お、ちょうどいいタイミング」

俺が朝ご飯を作り終わると同時にインターホンが鳴る。

「はい、今行きますよーっと」

玄関に向かい、扉を開ける。

「やあ、空君。今日は絶好の海日和だね」

扉を開けて真つ先に目に入ったのがアロハシャツを着た紅髪の男性——サーゼクスさんだった。

「おはようございます、サーゼクスさん。リアス達もおはよう」

『おはよう（つす！／＼ございます）』

サーゼクスさんの後ろにいたリアス、シア、ネリネ、リコリスにも挨拶を済ませ中に入れる。グレイフィアさんやフオーベシイさん、ユーストマさんは先に現地に行つて準備をしているそうだ。

「いただきます」

『いただきます』

家にいる皆も呼んで、いつもより多い人数でご飯を食べ始める。

「空君の料理、美味しいつす！」

一口目を食べたシアが目を大きく開いて感想を口にする。

「口に合つてよかったよ」

「眷属になったら毎日美味しいご飯を作ってもらうのも悪くないわね」

「ならないから。というか、今のプロポーズ？」

味噌汁毎日作ってくれー、みたいなやつに聞こえたんだけど。

「ある意味プロポーズね。あなたを眷属にするための」

あー、なるほど。そういうことね。

「じゃあ、そのプロポーズはお断りだね。やーい、フラれてやんのー」  
「なら、あなたが yes と答えるまで続けるだけよ」

……諦めてはくれないのね。

眷属云々の話は終わり、色々な話を交えていると出発の時刻になった。その頃にはなのは達も俺の家に集合していた。

「さ、時間だ。準備はいいかい？」

「はい、皆バッチシですー！」

宿泊用のバッグを持って、地下のトレーニングルームに集まる。

外に行かないのはここから転移するためだ。

全員異能の存在については知っているので、問題なく転移魔法を使うことが出来る。

しかし、クロノ達はアースラで直接転移することになってる。イリヤ達4人に至っては家が離れているし、異能については知らないの  
で、鮫島さんがバニングス家の家用ジェット機で直接送り届けることになった。

家用ジェット機持つてるほど金持ちとかハンパないな！

初めて聞いたときは、アリサに逆らったらヤバいんじゃないのかと思っただけもあったぐらいだ。

「それでは転移するよ」

紅い魔法陣が足元に広がり、俺達全員が入るほどに大きくなると視界が真っ白に染まる。

あまりの眩しさに目を瞑ってしまい、次に目を開けた時には――  
――青い海と雲一つない青空が広がっていた。

『……………』

誰もがその景色に目を奪われた。

毎年海に行ってるが、ここまで綺麗な海は初めてだった。

お嬢様のアリサや明日奈でさえ何も言えないのだから相当なものなのだろう。

「どうだい？ 綺麗だろ？」

「……は、はい！ とつても綺麗です！」

サーゼクスさんに話しかけられてようやく我に返り、俺に続いて皆も口々に「綺麗」、「すごい」と叫びだす。

「気に入ってもらえたようで何よりだよ。それじゃあ、着替えてから存分に楽しむといい」

待ちきれない俺を含めた子供達はイリヤやクロノ達を待つことなく、着替えはじめる。

男性組はすぐに着替え終わったが、女性組はまだ来ない。

待っている間に兄さんやクロノ達が無事到着した。

女は準備に時間がかかるんだっけ？ 琴里がそんなこと言ってた気がする。

「お待たせー！ どうか、空？ 似合ってる？」

「とびつきりに似合ってる！」

一番早く来たアリシアに感想を尋ねられたので、思ったことを口に出す。

その後にそろそろとやって来たのは達や十香達にも聞かれたので似合っていると返す。

《マスター、同じ感想しか言っていないです》

そんなこと言われてもなー……。

「ええー？ ダメー？」

《ダメです。……いいことを思いつきました。この中で一番可愛いと思ったのは誰ですか？》

『ッ!』

「一番可愛いのは……？」

え、なんで皆身構えてるの？

「——皆可愛いから選べないよ」

《理由はありますか？》

「だって皆それぞれ違った魅力があるんだから誰が一番だなんて選べないよ。納得した？」

色とりどりの少女たちに海を見た時以上に視線を奪われた。それ

を見ただけでもここに来た甲斐があつたとさえ思う。

《はい。これでもしも下らない理由ならマスターの恥ずかしい写真集をここで公開しているところでした》

「おい、ちよつと待て！ いつの間にそんなの撮ったんだよ!」

《マスターは誰にも見られてないと思つて隙だらけですので私は撮り放題でしたよ》

こいつ……ツ！ なんて恐ろしいことをしてくれたんだツ！

ブレイブをきつく睨むが当の本人はどこ吹く風だった。だが、俺も俺で睨んだ後は苦笑いしてそれ以上は何も言わないことにした。

折角の楽しい時間をつまらない事で潰したつてしようがないからね！

ふと周りを見ると、色々起こつていた。

「く、クロノ君、私どうかな？ 変じゃない?」

「あ、ああ、いいんじゃないか?」

何というか初々しい? リア充爆発しろ? ……つて感じ。

『ヴァーリ（君／兄様）、この娘誰（ですか）?』

……あかり達の間には火花が散つてるのは気のせいだろう。

ヴァーリ達は修羅場? 頑張れ、親友。

「<sup>かずは</sup>一葉、世界一可愛いぜツ!」

「……………」

雄人は妹をべた褒めしていたが、ガン無視されていた。

「あ、あんたどこ触つてんのよツ!」

「ご、ごめん! わざとじゃない——グヘツ!」

あ、兄さんが愛衣のお姉さん——舞衣<sup>まい</sup>さんに殴られた。

舞衣さんが顔を真っ赤にして胸を手で覆い隠してることから、兄さんは何かの拍子に胸を触ってしまったのだろう。

兄さん、初対面の相手にラッキースケベ発動? 漫画やアニメだけ

かと思つてたけど実際にあるんだね、ああいうこと。

「おうおう、墮天使の長のアザゼルに幹部のバラキエルじゃねえか。仕事はいいのか?」

「そういうテーマは神王か。んなもん今日のために必死で終わらせた

に決まってるだろうが」

「同じく」

「おや、そつちもかい？」

「あたりめえだろ。なんせ——」

「ああ、そうだな。なぜなら——」

『娘（息子）を楽しませるためだからな！』

どうやら三大勢力は親バカで共通しているせいか険悪な雰囲気など一切なく、互いに共感するところがあるのかがっしりと握手すらしていた。

ほっ……さすがに休みの日ぐらいは喧嘩はしないみたいで安心だよ……。

それから親バカ談義が皆の保護者達と始まった。

俺達は俺達で楽しまないとね！

「全力で楽しもー！」

『おー！』

子供組が一齐に手を上に向かって掲げ、大声で返してくる。

とは言ったものの、初対面の人何人かいるので先に自己紹介をすることにした。

「龍神空だよ。よろしくー！」

俺が先陣を切って自己紹介をする。

「ヴァーリだ。よろしく」

ヴァーリがルシファーと言わなかったのは、悪魔——ましてや魔王がいるのにそれを言えば問題になるからだ。首にはアザゼルさんが作った能力を隠すネットワークスのおかげで簡単にはバレはしないだろう。

「高町なのはです！　なのはって呼んでね！」

「フェ、フェイト・テストロッサです……」

「アリシア・テストロッサだよー！　フェイトとは姉妹で私がお姉ちゃんだからね！」

「アリサ・バニングスよ。アリサでいいわ」

「月村すずかです。よろしくね」

「八神はやてや。はやてって呼んでくれると嬉しいで」

「八神あかりです。はやての双子の姉です」

「王城雄人だ！ よろしくな！ で、こつちが——」

「自分でできるから……バカ兄貴。王城一葉です。年下ですがよろしくお願いします」

「結城明日奈です。これからよろしくね」

「天河愛衣よ」

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンだよ！ 長いからイリヤって呼んでね！」

「イリヤの兄の衛宮士郎です。本日は誘っていただきありがとうございます  
ございます」

「ユーノ・スクライアです。よろしく」

「リアス・グレモリーよ」

「リシアンサスっす！ 長いからイリヤちゃんみたく、略してシアでいいっすー！」

「ネ、ネリネです。リンと呼んでも構いません。よろしくお願ひします」

「私はリコリスだよ。リンちゃん——ネリネちゃんとは双子の姉妹なんだ」

「私は姫島朱乃っていうの。よろしくね！」

「黒歌にや」

「……その妹の白音です」

「愛衣の姉の舞衣よ。妹共々よろしくね。……そこの変態以外は」

舞衣さんが冷たい視線を向けた先には兄さんだった。

「誰が変態だよ！ さっきのことは謝ったし、あれは事故だって言うてるだろ!?!」

「こつちはセクハラされたのよ。裁判なら私が確実に勝てるわ」  
「うぐっ……」

反論しようにもいくら事故とはいえ、セクハラに変わりはないので何も言い返せない兄さん。女性陣からの視線はかなり冷ややかなものだった。

あれはどうしようもないよね。ドンマイ、兄さん。

「ゴホン……高町恭也だ。なのはの兄だ。よろしく」

恭也さんが咳払いをして、兄さんに集まっていた視線が恭也さんに集まる。

「なのはのお姉ちゃんで恭ちゃんの妹の高町美由希です！」

「月村忍。すずかの姉よ。よろしくね」

「結城浩一郎だ。明日奈の兄で恭也と忍の二人とは同じ大学の同級生だ」

へえ、三人は知り合いだったのか。

新事実発覚に少しだけ驚く。

「クロノ・ハラオウンだ」

「エイミー・リミエツタです！」

全員の自己紹介が済んだので、次は質問タイムになった。

「はいはい！ ヴァーリと朱乃は仲が良いみたいだけどどういう関係なの？」

「将来を誓い合った仲！」

アリスアの質問に朱乃が自信満々に答えた。

『……………えッ!?!』

そのことを知ってる俺、黒歌、白音。当の本人のヴァーリと朱乃以外が遅れて反応を返してきた。

「ヴァ、ヴァーリ君今の本当なの…………?」

「ああ」

あかりが信じられないものを見るかのような目でヴァーリに尋ねるとヴァーリは肯定した。

「そ、そっか…………」

『…………お姉ちゃん（あかり／あかりちゃん）…………』

それを聞いてから、あかりは誰から見ても落ち込んでいる。

「あ、朱乃だけじゃなくてウチらもヴァーリと結婚するにゃ」

『はああッ!?!』

「…………え…………? ……え!?!」

落ち込んでいたあかりも皆から少し遅れて反応する。

「は、はい！ この話はややこしくなるのでそこまで！」  
いきなり変な空気になりだしたので、話を切り上げる。

「次は誰かある？」

「はい！」

手を挙げたのはイリヤだった。

「空君はシア達と知り合いなの？」

「うん。知り合い……というかなんというか……」

「むっ……なんでそんなに曖昧なのかな？」

当然と言えば当然なのだが、俺の答えに不満だったようで、訝しむ視線をイリヤは向けてくる。

「い、一応婚約者候補……ってところ」

「いいえ、違うわよ」

「え？ リアスどういうこと？ もしかして候補から外れたの？」

「むしろその逆。——あなたでほぼ決定だそうよ」

……………

え？

「ま、マジ……？」

「マジよ」

リアスの顔はいたって真面目で冗談ではないようだ。……それはそれで困るのだが。

「シア達は？」

「空君なら………い、嫌じゃないっす……」

「私も空様となら……」

「ま、空君以外の男の子を知らないっていうのもあるけどね」

俺もシア達なら嫌じゃないけど……。

「その決定は覆らないの？」

「あとは本人達次第だそうよ。あなた達の誰かが断れば破談にはなるでしょうね」

「そ、そっか……。俺とシア達は婚約者(仮)になりました！ はい！  
次！」

『(あ、逃げた)』『逃げたな』『逃げましたね』  
またまた無理やり会話を終わらせ、次の質問に移らせる。

やがて質問タイムが終わり、早速各々で遊び始める。

ビーチバレーをするものもいれば、砂で建物を作ったり、海を泳いだり、日陰でビーチチェアに座って寛いだりと様々だった。

そんな中、俺は――

「空、私の背中に日焼け止めを塗ってほしい」

シートの上で黒いビキニのトップスを外して、うつ伏せに倒れている折紙に日焼け止めを塗るのを頼まれたいた。

「はいはい」

日焼け止めの液を掌に出し、折紙の背中に触れる。

「……………んっ……………」

俺が背中で手を動かすたびに折紙の息遣いが聞こえてくる。

「大丈夫？ くすぐりたい？」

「……………問題ない。むしろもっと激しくても構わない」

「でも、もう終わっちゃったけど」

「それなら前を――」

「それ以上は言わせないぞ折紙！」

「あ、十香」

髪の色よりも少し明るめのビキニを着た十香が折紙を遮った。

「塗ってもらおうのは背中だけというルールであろう！」

「そうね。次は四糸乃の番よ」

十香の後ろか他の精霊達が現れる。

「……………わかった」

トップスを着けなおし、少しだけふてくれされたように折紙が四糸乃と交替する。

「ねえ、もしかしてだけど全員分俺がやるの？」

「ええ、そうよ」

むむむ……………十人以上を塗るのか……………。影分身でまとめてやりたい

けど、イリヤ達がいるから使えないか。

「頑張らせていただきます……」

どうして俺以外の人に頼まないのだろうか、と疑問に思いながらも全員日焼け止めを塗ることにした。

美九なら喜んで……あ、それは無理か。

「空は私が塗ってあげるからね♪」

「ありがと、凛祢」

俺の背中に日焼け止めを塗るので小さな戦争が勃発したとかなんとか。本当のことは精霊達のみが知ってる。

全員分塗り終わった後でビーチバレーをすることにした。

三人一組のチームに分け、合計八チームが参加するトーナメント方式だ。

チーム分けは――

- 1、なのは、フェイト、愛衣の魔法少女組。
- 2、クロノ、士郎<sup>兄</sup>さん、舞衣さんの同世代組。
- 3、雄人、恭也さん、浩一郎さんのお兄さん組。
- 4、白音、ヴィータ、一葉の（身長的に）小っちゃい組。
- 5、アリサ、アリシア、ユーノの金髪組。
- 6、黒歌、美由希さん、忍さんのお姉さん組。
- 7、ザフィーラさん、シグナムさん、リインフォースさんの八神家組。
- 8、俺、ヴァーリ、イリヤの余りもの組。

――という結果になった。

参加しない人たちは審判や応援に回っているか仲良く雑談している。

「普通にやっても面白くないから優勝チームは景品でもあげましょうか！」

『おおっ！』

忍さんの提案に俺達のモチベーションが一層上がる。

「これは益々やる気が出てくるね！」

「うんっ！ 勝とうね、二人とも！」

「ああ」

第一試合——魔法少女組 vs 金髪組。

「フェイト、妹だからって手加減しないからね！」

「私だって同じだよ、姉さん！」

テストタロツサ姉妹が火花を散らしてる……っ！

アリシアはともかく普段大人しいフェイトがあそこまで燃えてるのは珍しいことだ。

「準備運動程度に済ませるわよ」

「あら、随分と余裕そうね？」

アリサと愛衣も視線をぶつけ合い火花を散らしていた。

「にやはは、皆すごい気迫だね。ユーノ君お手柔らかに」

「うん、こちらこそ」

その一方で、四人を見ていたなのはとユーノは苦笑いしていた。

「それでは試合開始です！」

審判のリニスが笛を吹いてゲームが始まる。

「行くわよー！」

アリサがボールを高く上げてステップを踏んでから飛び、最高打点でボールを打つ。

ボールはドライブ回転をしながら、魔法少女組のコートに進む。

あれ？ アリサってあんなに身体能力高かった？

アリサの動きに違和感を覚える。

確かにアリサは勉強だけじゃなく、運動も得意だ。だが、あそこまで高くは飛べないはずだ。

「なのはー！」

「うんっ！」

愛衣に呼ばれたなのはが、ボールの落下点に入ってレシーブをする。

ボールはネットよりも少し離れる程度の位置に上がり、セッターの位置にいる愛衣がトスを上げる。

ううん？　なのはの動きが早い……？

またまた違和感。

最後のスリータッチでフェイトが勢いよく跳び上がり、強烈なスパイクを打ち込む。

そして、試合が進んでいくうちにようやく違和感の正体に気付く。

あいつら——魔力強化使ってる！

六人は跳ぶ瞬間とボールに触れる瞬間にだけ魔力強化を使ってバレーをしていた。

それによつて試合は大接戦で、子供がするようなバレーではなかった。

大接戦の末、魔法少女組が勝利。

決め手はなのはのスパイクだった。

魔力強化のし過ぎで、ボールが桜色になっていた。

流星にあればやりすぎだろ！　デイバインバスターでも打つ気が

！

とツツコミたかったが、誰も気にせずにとどろか夢中になっていたので何も言えなかった。

第二試合——余りもの組 vs 同世代組。

「ハンデを要求します！」

「空とヴァーリ君達二人がいるんだからむしろこつちが要求するぞ」

「おいおいおい、クロノ君は年下にハンデもらって恥ずかしくないのかい？　んん？！」

「僕は勝負事にはいつだって全力だ。このクロノ・ハラオウン、容赦せん！　たとえ年下だろうとな！」

おお……大人気なさがここまでくるといつそ清々しく思える！  
しかもジョジョネタ挟むのか！

いつの間にジョジョを読んだのか知らないが、クロノは大分地球の文化に興味があるようだ。

「ま、いつか。二人とも頑張ろうか」

「ああ。魔力強化を使うのか？」

「うん！　お兄ちゃんなんかボツコボコにしてやるんだから！」

「その意気だよ、イリヤ。へクロノに対してだけ使うよ」

「さあ、俺達の遊ビッチャプレーびを全力で楽しもうか！」

俺達のサーブから始まり、ヴァーリの強烈なジャンプサーブでいきなり先制点を奪う。

「……やはり君等にハンデがあるべきだと思う」

クロノの呟きは無視して試合続行。

「よし！ 任せろー！」 「任せなさい！」

『——え？』

二度目のサーブが兄さんと舞衣さんの間に行くと、二人とも取りに行こうとしようとしてぶつかる。

あちやー……。

ぶつかった結果、兄さんが舞衣さんを押し倒す格好になってる。しかも、あと数cm頭を動かせば互いの唇が触れるくらいの距離だ。

『……………』

二人は見つめ合ったまま動かない。

「おい、二人とも早く起きろ」

『——ッ!』

クロノの声で二人は急いで起き上がり、気まずい空気が二人の間に漂い始める。

「さつきは悪かった……」

「い、いいわよあれくらい……」

二人の空気を見て周囲ではニヤついてる人がチラホラいた。他の人と違い、セラさんの視線はかなり怒気を含んでいたことだけは分かった。

はて……？ 何か面白い事でもあったのかな？

「試合を再開します！」

三度目のサーブをレシーブされ、舞衣さんがイリヤ目掛けてスパイクを打つ。

「ぎゃっ！」

イリヤの細腕にボールは当たったものの、あらぬ方向に行ってしまった。

「俺が行く！」

ボールに向かって走り、ちょうど目の前にあったヤシの木を利用して跳び、ボールをコートまで蹴り返す。

バレーは足が使えるから助かった！

「ヴァーリ頼んだ！」

「任せろ！」

コートに戻るボールを、最後にヴァーリがタイミングを上手く合わせ、相手コートに叩き込む。

「嘘だろ……あれを取りに行くなんて……」

「小学生だと思って舐めていたわ……」

「やっぱりあいつらにはハンデいるだろ」

「二人共すごい！」

相手チームは苦虫を噛み潰したような表情で、イリヤはその場でピョンピョン飛び跳ねながら俺達二人を褒めていた。

そこから先はほとんど一方的なゲームとなり、余りもの組が勝った。

そして、トーナメントを勝ち進んでいき、あつという間に決勝戦となった。

決勝戦の対戦カードは——余りもの組 vs 八神家組だ。

「やはりお前達が来るか」

ピンクのビキニを着たシグナムさんが獰猛な視線を俺達に浴びせる。

「お前達が相手なら手加減の必要はないな」

獣耳を魔法で隠すザフィーラさんが静かに大人気ないことを言うてくる。

「遊びとわかっていても負けるつもりはないぞ」

一番強敵だと思われるリインフォースさんがやる気に満ちた瞳でいた。

これは勝つのは厳しそうだな……。

「さあ、行くぞー！」

相手チームのサブから始まり、シグナムさんにいきなり魔力強化されたボールが打たれる。

容赦の「よ」の字もないな！

だからと言って諦める理由にはならない。

足を動かし、ボールの真下に入る——

「……半減」

——ことが出来ず、ボールは地面に落ちた。

俺がボールに間に合わなかったのは、ラインフォースさんが半減の力を使って遅くしたからだ。

俺達にだけ聞こえるような小声で半減と言っていたのが聞こえた。

汚いさすが大人汚い！ 魔力強化ならまだしもそこまでやるか普通!?

ラインフォースさんを睨みつけるも不敵に微笑むだけだった。

……完全にプツツンした……。この勝負、何をしてでも勝ってやる

！

決意を新たに、試合再開。

イリヤや兄さん達にバレないよう認識阻害魔法を使い、バランス・プレイヤー 禁手

や影分身で容赦なくぶつかり合った。

途中ボールが破裂することがあり、魔法を知らない人達が不思議そうにしていたが適当に誤魔化し試合続行。

もはや遊びじゃなくて超次元スポーツと化した。

最終的には——

「——か、勝った……ッ！」

ものすごい集中力と体力を消費してついに八神家チームに勝った。

「お疲れ二人とも〜！」

色んな人が寄ってきて俺達を労ってくれる。

「それにしてもすごい揺れてたなあ……」

試合中は試合に夢中になってたからそんなに目がいかなかったが、

思い返すとシグナムさんとリインフォースさんの大きい胸が動くたびに揺れていた。

「……なにがすごい揺れてたのか説明しろ」

……おっと、今俺が後ろを振り向いたら命はないようだ。

「十香、そろそろお昼だから——」

「他の女の胸がそんなにいいか！　このお……バカ空——」

「ブゲラッ!？」

不機嫌な十香をご飯に誘えば逃げ切れるかと思ったけど全然無理でした。

その日の午前中は十香の鉄拳制裁を最後に終えたのだった。

妻は夫よりも強いです！

妻は夫よりも強いです！

Side空

十香の鉄拳制裁を喰らってからお昼ご飯を食べた後、夕飯まで自由行動となった。

その時間を利用して、俺は恭也さん、士郎さん、ヴァーリ、シグナムさん、美由希さん、ザフィーラさん、バラキエルさん、クロノ、サーゼクスさん達と共に山の中を歩いていった。

実は俺達が転移した場所は一つの島らしく、海だけでなく山や川などの自然がいっぱいだ。

それを聞いた俺達は山の中で修行をする、という話になった。

「ここら辺がいいだろう」

山の中を歩くこと数十分、開けた場所を見つけた。

「各自準備体操や柔軟をしてから組み手を最初にやろう」

士郎さんの指示に従い、準備体操と柔軟をしつかりとやってから各々が木製の武器を持って立ち会う。

「よし、いきなり飛ばすのもなんだから軽めでやろうか」

「はいー」

俺の相手をしてくれるのは士郎さんだ。その実力は、未だに俺が魔法と剣の両方を使っても勝てないほど強い。そもそも二刀流の使い方を士郎さんや恭也さんに教わったのだから勝てないのも最もなことなのだが。

「先攻は譲るよ」

「はいっ、行きますー！」

互いに木刀を二本構えて、俺から先に動く。

右手に持つ木刀で上から下への袈裟斬り。一步後ろに下がることで容易に躲されるが、木刀を返して逆袈裟斬りで追撃。その攻撃は二本の木刀で防がれる。最後に左手に持つ木刀で突く。だが、士郎さんにその程度が効くはずがない。

子供の体格でのリーチは短い。それは戦闘においてかなりの不利

になる。

「届かない、か……」

よって、俺の突きはバックステップで躲され、空を切る。

「今度はこちらからだ」

士郎さんは俺がした動きをそのままコピーして攻撃する。

その時に俺と士郎さんの差が出る。

さっき言ったりリーチがその一つだが、もう二つある。――

筋

力と剣術だ。

「……ッ」

俺よりも力強く、それでいて俺よりも洗練された剣術。

士郎さんと同じように防ぐが、防いだ両手がジンジンと痺れる。

最後の突きは士郎さんが上手く木刀に当ててくれたおかげで軽く吹き飛ばすだけに留まった。

「うん、ここまででしておこうか」

「はい」

それから俺が攻撃しては士郎さんが真似をして攻撃し、俺が吹き飛ばすのを数十回繰り返して一時間ほどでストップする。

「やっぱまだまだ師匠には敵わないってことか」

「ハハハ、簡単に抜かれたら私の面目丸潰れだからね。まだまだ空君には負けていられないさ。まあ、流石に神セイクリッド・ギア器を使われたら勝てないだろうけどね」

……それでも勝てないイメージが浮かぶのは俺だけなんだろうか？

「ときに空君」

「何ですか？」

「これは僕の勝手な想像なんだが、君は前世で剣術はやっていたんじゃないかい？」

俺が剣術？ うーん、どうなんだろう？

「どうしてそう思うんですか？」

「君の扱う剣の中には時々独特の癖、とでも言えばいいのかな？ とにかくそんなものがある」

癖……俺自身は特に何も感じてないから体が剣を覚えてるってことか。

「ああ、勘違いしないでほしい。決して悪い癖ではないよ」

士郎さんからの評価を聞き、皆と合流。

「次は『ドロケイ』をしようか」

士郎さんの口から出たのは子供がよくやる遊びだった。

ちなみに提案したのは俺とヴァーリ。

『空さん空さん。ドロケイってなんですか？』

「泥棒と警察の二チームに分かれてやるんですけど、警察が泥棒を全員捕まえたら警察の勝ち。制限時間まで逃げ切ったら泥棒の勝ちっていうルールの子供が外でやる遊びの一つですよ」

オリヴィエさんに説明を求められたので小声で短く説明する。

「士郎殿、それは子供がやる遊びなのでは？」

「ああ、そうだよ」

バラキエルさんの意見もわかる。でも、これは普通のドロケイではないのだ。

士郎さんがどこからともなく取り出した布を目を覆うようにつける。所謂、目隠し状態。

「この状態でドロケイをする。相手の気配を察知する修行になるんだ」

「……なるほどな。これはいいかもしれん」

説明された内容にバラキエルさんは納得したように頷いていた。

「最初は慣れるのに時間が掛かるだろうから歩きのみだ。……空君とヴァーリ君も当然守ってくれよ？」

「はい」「ああ」

俺達二人に釘を刺してきたのは、俺達が見聞色の覇気の修行のために目隠しして鬼ごっこやかくれんぼをして鍛えることがあるからだ。これに関しては士郎さんや恭也さんにだって負けない……と思っていたい。

「制限時間は五分だ。よーい、スタート」

警察側が俺、恭也さん、シグナムさん、ザフィーラさん、サーゼク

スさん。泥棒側がヴァーリ、土郎さん、美由希さん、バラキエルさん、クロノ。

泥棒が先に逃げ、三十秒数えてから警察側が動き出す。

「むっ……これは難しい……」

「そうだな。視覚が使えないのは厳しい」

「空、コツはあるのか？」

「ありますよ。心を静めて周りの音に耳を傾けるんです」

『……………』

四人は集中してるがイマイチらしい。

「ゆっくりでいいです。俺は先に行ってますね」

その場で立ち尽くす四人を置いて歩き出す。

さてさて、誰からがいいかな？ ……おっ、まずは――

土郎さんから行こうか。

見聞色の覇気で土郎さんの気配を感じ取った。

あ、こつちに気付いた。

土郎さんなら覇気を使わずとも剣士としての長年の経験で気配程度ならわかるのだろう。

しかし、ここは山の中。規則性のなく生えてる木や地面から突き出した根っこがあつて複雑な地形となつてる。

そんな中でどこに障害物があるかまでは土郎さんでは無理だろう。

「泥棒つーかまえたーっ♪」

逃げてる最中に時々障害物にぶつかる土郎さんとの距離を縮め、お腹にかかるくタツチ。

「むむっ……空君の方が上手だね」

「伊達に四年間使つてませんよ」

土郎さんを連れて、捕まえた泥棒を入れておく刑務所になつてる場所に土郎さんを入れる。

それからバラキエルさんや美由希さん、クロノも順調に捕まえた。

だが、最後の一人――俺の親友は簡単には捕まえられない。

結局時間切れで警察側の負けだ。

「皆さん、ある程度は見聞色の覇気出来るようになりました？」

反応はまばらで首を傾げるものやそこそこといった風に頷くものだったりだ。それに比例して服や顔が汚れてるものが何人かいた。次は警察側と泥棒側が入れ替わり、走りもありでやることになった。

走ることが出来るようになったことでヴァーリが数分も経たずに俺以外の三人を捕まえる。

俺は何とか逃げ切って泥棒側が勝った。

それから何度か繰り返し返していくうちに他の六人も慣れてきたのか、ようやくまともな勝負が出来るようになった。

「で、土郎さん。何か言うことは？」

「私が納得するような言い分はあるのかしら、あなた？」

「魔王の自覚をお持ちですか、サーゼクス？」

『ハハハ、年甲斐もなく夢中になってはしゃいでしまったよ……ごめんなさい反省してますのでどうか許してください』

いくら剣術が強い土郎さんや墮天使の幹部のバラキエルさん、ましてや魔王であるサーゼクスさんでも自分の妻には勝てないってことか……。

現在、土郎さん含め山で修行していた俺達は正座中だ。

何故かこうなったのかというと、あまりにドロケイに夢中になりすぎて夕飯の時間に遅れてしまったからだ。

そしてホテルに戻ればロビーには桃子さんと朱璃さんとグレイファイアさんがいた。

それを見た俺達は反射的に正座してしまい、今に至るわけだ。

『他の人達はいいわ。先に食堂に行きなさい。土郎さん（バラキエルさん／サーゼクス）はちよっとお話ししましょうか』

あ、これ絶対詰んだやつだ。

残された三人に向かって心の中で合掌して食堂に向かうことにした。

『で、何か言うことはある?』

あらやだ。わたくしこのセリフに既視感があるでございますよ。

俺達六人を待ち構えていたのは男性陣以外のほとんどの女性陣だった。

それに対し俺達は――

『ごめんなさい』

即座に頭を下げるだけだった。

「顔を上げなさい」

忍さんから声がかかり、言われた通りに頭を上げる。

「時間を守れなかった罰として帰るまで修行禁止ね」

『鬼だ! 鬼がここにいます!』

「あら、これでも優しい方なのよ? それが嫌なら帰るまで皆のどんな頼みでも聞き続け――」

『天使――いや、女神がここにいます!』

うん、忍さんはマジ優しいです! 最高です!

「……現金な人だね。まあ、いいわ。一応反省してるみたいだから許してあげる。――私はね」

最後の方に何か言ってみたんだけどよく聞き取れず、俺達は特に気にしないまま晩御飯を食べ始めるのだった。

晩御飯のあとはホテルの温泉に入ることにした。

“男”と書かれた青い暖簾と“女”と書かれた赤い暖簾の前で、俺は男なので当然青い暖簾をくぐろうとしたが、服を誰かにつかまれてくぐれない。

「……俺、風呂に入りたいんだけど」

『空(さん/だーりん/少年)はこっち(です/よ/だよ/なのじゃ)』  
後ろにいた十香達精霊にジト目を向けるが、全く聞いてないみたいで無理矢理女湯の方に入れられた。

精霊一人ぐらいなら何とかなるかもしれないが、この人数に抵抗し

でも無駄でしかないことは一目瞭然だ。

「い、嫌だ！ 俺は男湯に入るの！」

「大人しくしなさい」

無駄な足掻きとわかっていても抵抗したものの、あつという間に服を脱がされ、温泉へと続く扉が開く。

「さ、体を洗いましうねー」

「じ、自分でやるから！ 胸押し付けしないで美九！」

風呂椅子に座らせられて、一糸まとわぬ美九の柔らかい体が俺の背中に直に当たる。

美九のスベスベした手が背中をこするとくすぐりたい……！

「前はむくが洗うのじゃ」

「はッ!? ちょ、六喰!?!」

今度は前から、美九と同じように一糸まとわぬ六喰に洗われる。なんかコリコリしたのが当たってる！

体の隅々——大事なところ——まで六喰に洗われて、前以上にもうお媚に行けないとすら思った。

「……………ひゃ……………！ ふ、二人ともくすぐりたいよ！」

「我慢してくださいねー」 「我慢するのじゃ」

どうやら、俺が何を言っても二人は止まる気はないらしい。

「……………ぜえ……………ぜえ……………ぜえ……………！ た、耐え、きつた……………！」

数分して洗い終わったころには俺の呼吸は荒かった。

二人に洗われている間、俺の中の何かが弾けそうだったが、何とか耐えた。

耐えきった自分を褒めてやりたいときえ思える。

「お、俺、もう……………あが——」

「まだ湯船に浸かってないわよ」

「……………はい」

齢九で姉には逆らえないと悟った。

「七罪」

「……………わかった。空、悪く思わないでね」

琴里が七罪の名前だけを呼ぶと、七罪が頷いて〈贗造魔女〉を出し

て振るう。

すると俺の視界が眩い光に包まれる。

目が開けられるようになってから目を開けると、皆の身長が縮んでいた。

……違う……俺が大きくなってるんだ！

胸のサイズが大きい彼女達の変化がないことを知って気が付く。

「……今、私達のどこ見て判断したのか問い詰めたところだけど、時間が無くなるから早く入るわよ」

もはや抵抗する気力など微塵もない俺は大人しく湯船に浸かった。

だが、精霊達の攻撃はまだ終わってなどいかなかった。

「あ、あのさ、もうちょい離れてくれると嬉しいかな……なんて……」

『無理（だ／です／よ／じゃ／だよ）』

「ですよー」

はあ……結局前と同じでこうなるのか……。決して嫌じゃない、というか男なら誰しも好きであろうシチュエーションなんだろうけど、こう……色々ヤバいんです！ 今だって狂三や折紙に首筋にキスされ、両腕を八舞姉妹に抱きしめられ、前後を七罪、四糸乃、琴里、六喰に囲まれて皆の柔らかい体が密着してきて鼻血が出そうなんです！

「皆がどうしてこんなことするか空は分かってる？」

「それは………家族だから？」

いや、家族にしたって行き過ぎなスキンシップだよね……。

「ハズレ〜。全然違うよ」

凜祢の質問に俺の答えは不正解だった。

「正解は？」

「うーん、この際だから教えてもいっつか。ね？ 皆？」

凜祢が見回すと十香以外の精霊が頷いて俺の体から離れる。十香は十香で唇を尖らせていた。

『——私は空（さん／だーりん／少年）が好き（だ／です／ですわ／だよ／なのじゃ）』

「……………そっか。そういうことか。それならこんなことする……………のか？」

しばらく固まってから、言われた言葉の意味に気が付く。

好きだと言われて冷静でいられたのは十香に好きだと言われたからなのか、心のどこかで薄々気が付いていたのかはよくわからない。でも――

え、今告白されたの!? え、ウソツ!? マジですかあああああああああッ!?

訂正。頭の中は全然冷静じゃなかった。

ど、どうすればいいの!? ただでさえ十香に告白されて返答を待つてとお願いしてるのにこれ以上は……………! ハーレムなんて絶対ダメ……………でも、ハーレム作れば皆の想いに応えられる……………で、でもでも……………! ああ――ッ!

「む、無理!」

皆に抱き着かれてことで頭に限界がきて、まともに考えられなくなつて温泉から逃げ出す。

脱衣所の扉を開けて閉めたところで、意識が遠のく。

「……………あ、あれ……………ここは……………?」

「あ、空君! 目覚めたんだね!」

目を開けるとイリヤの顔が視界を覆った。

「……………俺、どうしてこんなところに?」

「脱衣所で倒れてたつて聞いたよ」

脱衣所、と言われて何があったかおおよその検討が付いた。

あの後、のぼせて倒れたのか……………。

温泉の熱さだけじゃなく、精霊達のスキンシップも相まって気絶したんだろう。

「イリヤが看病してくれたの？」

「肝心なところは他の人がやってくれて私はただ見てただけなんだけどね」

「そっか。でも、ありがと。見るだけでも大事な役目だから」

「ど、どういたしまして」

こそばゆいのか頬を掻きながらイリヤははにかむ。

「あ、皆は部屋に集まって色々ゲームやってるよ！ 空君も一緒に――」

「ごめん、ちよつと外の風に当たってくる」

「……わかった。一人で大丈夫？」

「うん、大丈夫だと思う」

イリヤにもう一度謝ってから外へと出る。

「……好き、か……」

夜空に浮かぶ月とそれを鏡のように映す黒い海を見ながら呟く。

いつまでも姉でいてくれない理由はそういうことだったのか……。

あの時のことを思い出してようやく合点がいった。

十香達は俺のことが異性として好き。でも、俺はなんて答えたらいいかわからない。

「……これって贅沢な悩み……なのかな？」

「――そうね、相当贅沢な悩みね」

「……え？」

後ろから聞き覚えのない声がして振り返ると、薄い金色の長髪の一部を白いリボンでサイドテールに結び、白いセーラー服、黒いニーハイを着た少女――万由里がいた。

人生は何があるかわかりません！

人生は何があるかわかりません！

S i d e 空

風に当たるために外に出て、夜の浜辺に座っていると万由里が現れた。

「……………初めまして」

「ええ、初めまして」

少女の髪色は夜空に浮かぶ月や星に劣らず輝いていた。

「長袖で暑くないの？」

何気なく最初に疑問に思ったことを聞いてみた。

「霊力を使えば周囲の気温ぐらいどうとでもなるわ」

うん、今のを聞いて改めて精霊は規格外だと思った。

「隣、いい？」

「どうぞ」

万由里が俺の隣に腰を下ろし体育座りをする。二人の肩が触れ合いそうなほど近いが何も言わない。

「私があんたの前に現れるのには条件があるの」

条件？

赤い眼が俺を真つすぐに見据える。

「全部で三つあって、一つ目が園神凜祢があんたと接触してること。二つ目があんたが前世の記憶をほんの少しでも思い出すこと。そして、三つ目は精霊達があんたに想いを告げること。……三つ目に関してはないと思ってたから絶対に会えないと思ってたんだけど、そうでもなかったみたいね」

万由里の言う条件三つは今日をもってすべて果たされたわけだ。

「万由里の役目は？」

「龍神空の観察及びその様子を天照に報告すること」

「条件付ける意味ってある？」

そもそもその三つの条件の内容の意味も分からない。万由里にそんな条件を付けてまで俺の監視をさせる必要があるのだろうか？

「あるわ。だって、その条件がなかったら私、役目を果たさずあんたに会いに行つてたから」

「……………」

万由里の答えに何と答えたらいいかわからず、何も言えない。

「要するに、私はあんたが好きってこと」

「……………今日初めて会つたの？」

何だろう……………好きって言われると心臓がドキドキするし、体が熱い……………それにフワフワした感じもする……………。

「あんたは気付いてないでしょうけど、ずっとあんたのこと見てきたから。それで気が付けば役目なんか関係なく見てた。……………好きになつてたんだと思う」

それって自分がストーカーだって認めちゃうってことだよな？

まあ、人にはそれぞれの恋愛の形があるらしいから俺には否定することなんてできないんだけど。

「……………近くに居られる皆が羨ましくて仕方がなかった。どうして私はあそこにはいないのか、私だけどうして離れた場所にいなきやいけないのか、私を創つた天照や他の精霊達を恨むときや妬ましいときだってあつたわ」

万由里は自分の役目に不満があつたようだ。

「そ、そっか……………」

「でも、今日ようやく会えた。四年間待ち続けた甲斐があつた」

万由里の白い手が俺の顔を掴み、万由里が自身の顔へと引き付け、万由里自身も近づけてくる。

そして、二人の唇が重なり合う。

「…………………………ツ!?!」

自分が何をしているのか気が付くと慌てて離れる。

万由里の動きがあまりに自然な流れすぎて数秒フリーズしていた。

万由里はどこか名残惜しそうに自分の唇を人差し指でなぞっていた。

「い、いきなりなにすんの!？」

今にも火を噴きそうなくらいに顔が熱い。

「キスよ」

んなもんわかってるわ!

「そうじゃなくて!」

「したかったからしただけ。四年間も待ったんだからこれくらい許しなさいよ」

うつ……それを言われると申し訳なく思う……。四年間も恋焦がれていたんだもんね……。俺に……。俺に？

……うわあああああああああああああああああああああああああああああああッ!?

服や髪が砂まみれになるのも気にせずその場で悶える。

万由里は突然の俺の奇行にドン引きしてるがそんなのを気にする余裕はない。

「——喧しい!」

「ウギヤツ!？」

万由里に蹴られ、俺の動きが止まる。

「動揺しすぎ」

「これが動揺せずにはいられると思う!?! いや、いられないね!」

「逆切れしないで頂戴……」

「ご、ごめん……」

「……私もいきなりキスは悪いと思ってるわ」

何ともいたたまれない空気が二人の間にできる、そのせいで会話がしばらくないまま時間だけが経っていく。

ようやく口から言葉が出る。

「万由里はさつき、俺の悩みは贅沢な悩みって言ったよね?」

「言ったわ」

「俺、どうしたらいいのかな?」

十香に続き他の精霊達にまで告白されるとは思わなかった。

「知らないわ。私にわかるわけないじゃない」

だよね……。皆には悪いけど十香のときと同じように高校までは

待ってもらいたい。

「万由里にも悪いけど当分答えは出せそうにないや」

「わかってる」

それにしたって——

「皆は俺のなにかいいんだかね？」

愚痴……というわけじゃないが、疑問に思ったことを不意に口に出していた。

「最初は俺は皆の弟みたいな存在だと思ってただけど、いつ変わったんだらう？」

「理由はいくつかわかるわ」

「え、ホントに？」

「二つ目は近くに空以外の異性が少なかったこと」

あ、確かにそんなにいない。恭也さんは忍さんっていう恋人がいるし、士郎さんは既婚者。アザゼルさんは……うん、まあ、仕方ないよね。

「二つ目は時間」

結局のところ一緒に過ごした時間から自然となったのか。

「最後は……あんだがそれだけ魅力的な性格してるってこと。だから皆惹かれたんじゃない？」

魅力的、か……。そんなこと言われたの初めてかも。

常日頃皆から変人だのなんだの言われることが多かったからこそばゆく感じる。

「でも、俺、年下なんだけど……皆シヨタコン？」

「あんたは元の体が縮んで子供だけでしょ？　なら、合法シヨタ……とも言えないわね」

前世の記憶がまったくないから体が縮んでいるとしても、精神年齢はなのは達と変わらない子供だ。

だから、見た目は子供だけど頭脳は大人な名探偵と似てるようどこか違う。

「それに恋愛に歳が少し離れてようが関係ないわ。私達はあんだが好き。ただ、それだけのこと」

男前ですね、万由里さん。俺が女だったら惚れてる……かはわからないけど、トキメキぐらいは感じるかもしれない。

「……今日はここまでしておくわ。それからその幽霊さん」

立ち上がった万由里が他の人からすれば何も無い空間に向かって話しかける。そこには俺だけに見えるオリヴィエさんがいる。

『私が見えるんですか!?!』

ウソツ!? 万由里にはオリヴィエさんが見えるの!?

「空の傍にるのはいいけど、空の風呂とか寝顔覗いたら——  
覚悟しておいて」

『は、はいッ! (言えない! もう覗いたことがあるなんて口が裂けても言えない!)]』

「じゃあね、また会いに来るわ」

オリヴィエさんが万由里に敬礼すると、万由里は景色に溶けるように消えていった。

『こ、怖かった……!』

万由里がいなくなつたあとで、オリヴィエさんがそう言う。

あれは万由里なりの嫉妬……ってことでもいいのかな?

表情の変化があまり見られない万由里だったが、今のやり取りで少しだけ印象が変わつた。

「恋つて難しいんだね……」

そう呟いてからドライブ達を呼び出して、もう少しだけ星が煌く夜空を眺めることにしたのだった。

S i d e o u t

S i d e クロノ

突然だが、空とリアスは結婚した。

二人が大学を出て式は今から行われ、入籍はすでに済ませているとのことだった。

周りの友人、知人は皆一緒に二人の新たな門出を祝ってくれたが、その半数近くが複雑そうな顔つきをしていた。

空の親友であるヴァーリや友人であるあかりは当然心の底から祝ってくれたが——お金持ちのお嬢様である明日奈や、運が滅茶苦茶良いイリヤはお金には困ってはいなかったものの、二人の共通の想い人である空の結婚に、かなり不満そうにしていた。

「リアスと結婚って意外だったかも」

「私もよ。まさか空とだなんてね。人生何があるかわかったもんじやないわね？」

結婚した当の本人達は周りのジトーツとした視線に気が付かないのか、至って平然とした反応だった。

そんな二人の結婚式は冥界の大きな屋敷の中でも、人間界の式場のなかでもない。

——魔王フォーベシイの所有するホテルの一室であった。

『……………』

何人かお通夜ムードでテーブルを囲む六人の少年少女。更にその周りには僕達見学者がいる。そんな僕らの中心にあるのが——人生シミュレーション型ボードゲームだ。

時刻は夜の八時頃。

目の前にあつたお茶の入ったペットボトルを開け、自分のコップに注ぐ。注ぎ終わったところで、チラツと現在の状況を窺う。

席順はリアス、空、ヴァーリ。その対面にイリヤ、明日奈、あかりと並んでいる。

イリヤと明日奈が空の隣に座ろうとしていたが、ヴァーリが空の隣に座り一つなくなる。

この場合どちらが座るのか視線をぶつけ合った二人だが、無関係なリアスがさらりと隣に座ったところで二人は意気消沈。

「お通夜ムードの空気がいきなり生まれたのだった。」

空はそんな空気を知らずに、言い放った。

「さあ、続けよう、この——《ラブラブ半生ゲーム》を！」

「じゃあ、次は私の番ね。回すわよ」

リアスが勢いよくルーレットを回すと、その行く末を誰もが見守る。これまでの流れを思い出し、また何か起こるのではないかと思いい、内心で溜息を吐く。

ルーレットが3のところまで止まる。リアスの駒である紅い駒が三マス進むと、止まったマスのイベントは――

〈新生活はラブラブで絶好調！ 新婚旅行でハワイに行って子宝を授かる！ 夫婦ともに、皆からお祝い金三千元を貰う〉

『(やっつけられるかあああああああああああああああああああッ！)』

『(見てられるかあああああああああああああああああああッ！)』

少女達の心の声が聞こえてくる。

ヴァーリとあかりはすぐに渡すが、明日奈とイリヤは二人を恨みがましく睨みながらお金を渡す。

「あ、子宝ってことは赤ちゃんが産まれたのか！」

「そういうことね。……もしも空との間にできたら……どんなかんじなのかしら？」

「うーん、女の子だったら髪は紅くて、蒼眼で……リアスそっくり？」

「じゃあ、男の子だったら髪は黒くて、緑かった眼で空にそっくりというわけね」

もしも結婚して産まれてくる子供のことについて話す二人からは新婚感が出ている。

それを見ているなのは達は殺気の籠った視線を二人に向けたり、噛み締めた唇から血が滲み出していた。

二人が狙ってやっているならまだしも、素でやっているのだから余計に質が悪い。

この《ラブラブ半生ゲーム》には問題が在り過ぎだ……！

「つ、次は私の番だね」

イリヤがルーレットを回す。参加者の中で一番駒を進めているのはイリヤだ。彼女はかなりの幸運の持ち主なのだが、なぜか結婚できずにお金だけが増えていくという不思議な現象が起きている。

ルーレットが10のところで止まる。ルーレットで一番大きな数字だ。イリヤは参加者の中で一番この数字を出している。

「イベントは……〈片想いの異性の相手が結婚。その知らせを聞いたときにたまたま買った宝くじが一等。十万円プラス〉……。あはは……私ってばすごく運いいな……」

「イリヤってばすごい運いいね!」

「私もあんなマスに止まりたいわ」

光を失いつつある瞳で笑う彼女に誰も目を逸らす中、あの二人だけは変わらない。

「次は私の番だね」

続いて明日奈がルーレットを回す。明日奈は5を出して駒を進める。

「あ、結婚マスだ!」

二つ進めたところで止まる。ラブラブ半生ゲームにおいて結婚マスは全員が止まるマスで、どんな数字が出ようとも止まらなくてはいけない。

ルーレットの内容によって変わるが、他のプレイヤーと結婚するか、NPC枠と結婚するか、イリヤのようにひとり身になるかの三つに分かれているのだ。

ルーレットは1〜10まであって、1・2・3が空と結婚。4・5・6がヴァーリと結婚。7・8・9でNPCと結婚。10で……独り身だ。

ちなみにこのラブラブ半生ゲームは特殊なルールを持っていて、既婚者の数字が出た場合その相手を奪えるのだ。つまり、1〜3の空の番号が出れば、明日奈は空と結婚。リアスは独り身となるわけだ。

ドロドロし過ぎじゃないか? このゲーム……。

執念すら感じる勢いでルーレットを回す。待つてる間は両手を組んで祈ってすらいいた。

長い開店時間が終わり結果が出る。

「……………10。私、独り身……」

「アハハハハ! 明日奈、結婚出来ないのか!」

空気が一層どんよりするのに対し、空だけは全く気にせず面白がって笑っていた。隣のリアスも少しだけ笑っているのが分かった。「わ、私回すね!」

暴れそうになる一歩手前の明日奈を押さえつけ、どんよりとした空気を吹き飛ばそうと、あかりがテンション高めに声を上げてルーレットを回す。

実のところ、この中で一番の幸せ者はあかりだ。彼女が好意を寄せてる相手——ヴァーリと結婚出来ているのだから。

その分、黒歌や朱乃からの視線は痛いが……。ルーレットが4のところで止まる。

「イベントは……へパートナーにまさかの愛人発覚。慰謝料として夫婦共に五千円マイナス……って何これ!」

幸せだったはずなのに、いきなり落とすなこのゲーム!

このゲームを作った人物は絶対ロクでもない人間であると確定した。

『フツ、いい気味……』

朱乃、黒歌、白音の三人がそれを見てほくそ笑む。

あかりは悔しそうにしながら銀行にお金を渡し、軽くヴァーリを睨む。ゲームとわかっていても睨まずにはいられないのだろう。

「次は俺の番だな」

しばらく回ってからルーレットが止まる。

「……へ自分の浮気がバレて、浮気相手に慰謝料を支払う。夫婦共に五千円マイナス……か。まあ、いい」

特に気にした様子もなく、ヴァーリはお金を支払う。

「そ、そんな……! ヴァーリ君が一度ならず、二度までも浮気だなんて……!」

うん、まあ、そつとしておこう。

さらに激しく落ち込むあかりから誰もが目を逸らす。

「俺のターン! 運命のルーレット、スタート!」

無駄に元気よく、無駄にかっこつけ、無駄に勢い良くルーレットを回す。そして、その分だけ無駄にルーレットも回り続ける。

「止まったマスは……5！ よって俺はイベント発動！」

どのマスにもイベントはあるだろう！

当たり前前のことを大げさに言うものだから、軽く頭が痛くなってくる。きつと空としてはこの時間が楽しくて仕方がないのだろうか、周りからすればカオス過ぎる時間でしかない。

少しでもいいから空気を読んでもらいたいが、あの鈍感少年には到底無理な話だろう。

「イベントは……へ異性と二人でいるところをパートナーに見られる！ 浮気かと疑われるが、パートナーへの誕生日プレゼントをかうために相談していただけだった！ 誤解が解けたのとプレゼントのおかげで夫婦仲はさらに絶好調！ なんだかんだで子供がもう一人産まれる！>……。おお、誤解が解けて良かったあ」

「もうっ、勘違いさせないでよ！」

「ごめんごめん。でも、リアスのためのプレゼント選びだったんだから許してよ」

「それを言われたら私が悪者みたいじゃない……」

「いや、そもそも俺が紛らわしいことさせたのがいけないんだよ。リアスは何も悪くないって」

「でも、私はあなたのこと疑ってしまったわ。……こんなんじゃ(ゲームの)パートナー失格よ」

「そんなことないって！ リアスには(ゲームで)支えてもらってばかりだよ！」

「私も同じよ。あなたがいてくれたからこそここまでこれたんだもの」

「リアス……」

「空……」

『おい、いつまでイチャつく気だ？』

ゲームを忘れて二人だけの空間を作り出し始めたので僕は止める。

『え？』

案の定、二人は自分たちが何をしているか全く分かってない様子だった。

「リアスちゃんはさつきと回そうか」

「え、ええ……」

そう言った明日奈の笑顔は引き攣っており、こめかみには血管が浮き上がっていた。二人の狙ってやってるわけじゃない（と信じたい）イチャイチャに我慢の限界が来ているのだろう。

誰でもいいからこのゲームを終わらせてくれ……！

「えっと……へパートナーに知らない元恋人迫る……あら大変ね……」

お、これは……！

「へが、パートナーの自分への愛は微塵も揺るがない！ 元恋人の誘惑を断ち切り、二人の仲はさらに深まる！ なんだかんだで子供が増える！……良かったわ」

「安心してよ。俺はリアス以外の人と結婚しないから」

「ありがと……私も同じよ」

「リアス……」

「空……」

『ゴホン！』

二人とヴァーリ以外の咳払いが重なる。

『あ』

君達本当にわざとじゃないんだろうな!?

一言でもいいから不満を言ってやりたいのを我慢する。

イリヤが回し、8マス進む。内容はへ意中の相手と街で出くわすが、既婚者だった。その日に買っていた宝くじが一等。二十万円プラス。』

「……やっぱり私って運がいいな……わーい……」

「相変わらず凄い強運！」

『もうやめて！ それ以上イリヤの心を抉らないで！ このままだと精神攻撃で彼女が死ぬから！』

イリヤの次は明日奈。ルーレットの結果は6。内容はへ付き合いだした人を実家に連れていくが、両親に認められず破局。仕事に打ち込むようになり、五千円プラスだ。

「認めてもらえず、は、破局……………」

「なるほど、明日奈の両親は厳しいのか。付き合う人は大変だね」

『(だから、お前は黙ってる!)』

それからもゲームは着々と(イリヤと明日奈とあかりの心を抉りながら)進んでいった。

結果としてイリヤが一位でゴールしたが、表情は死んでいて、そこに喜びは一切なかった。

最後まで楽しめたのは空とリアスくらいだろう。

———こんなゲームは二度とやりたくも見たくもない!

固く決意して、僕達はそれ以外の遊びを楽しむのであった。

海の神様です！

海の神様です！

S i d e 空

色んなゲームを皆と満喫して、時刻は十時過ぎ。

欠伸をするものやほとんど意識を落としているものがチラホラいる。悪魔であるリアス達でさえも海ではしやぎ過ぎたのか眠そうだ。白音や一葉に至っては部屋のベッドで二人仲良く眠っている。

「そろそろ寝よつと。でもな……」

俺が寝る部屋は行く前に決めてあったのだが、今現在、白音と一葉が使ってしまっているので出ていかざるを得ない。

「ヴァーリはどこで寝る？」

「朱乃の部屋に行くつもりだ」

あら？ いつの間に……。朱乃はこうなることを見越して声かけしてたのかね？

「年頃の男女が同じ部屋ってどうかと思うんだけど？」

「将来を誓い合った仲だもの、これくらい普通よ」

「あと数年もすれば口約束なんて忘れると思うな」

「そんな関係にすらなれてないあなたが言うって負け惜しみにしか聞こえないわね」

ワケは分からないがあかりと朱乃の間に火花が散っている！ 二人の笑顔がとても怖いです！

二人はいがみ合いを続け、ヴァーリが仲裁に入った結果、ヴァーリ、朱乃、黒歌、あかりの四人が同じ部屋で寝ることになったらしい。

俺は十香達のところに……。いや、やめどこ。今は……。恥ずかしい。なんか顔を合わせ辛い……。

「空は私達と一緒にの部屋で寝ようよ！」

「アリシアってことは……フェイトやアルフと一緒にか」

まあ、それが無難なところか。

俺がアリシアの提案に賛成する――

『ちよつと待った！』

——前になのは達が遮ってきた。

「……何か用？ できれば手短かにね？ 俺、もう寝たいからさ」  
欠伸を掻いてなのは達に言う。

「空君、私の部屋に来ない？」

なのはは確か……愛衣と一緒にだったけ？

「今なら私が添い寝してあげるわ。どう？」

「そ、そんなら私だって空君に添い寝したる！」

愛衣だけじゃなくてはやてもー？

更にははやてに続いて他の少女達も私も私も！ と言ってきた。

寝られる場所の候補が増えるのはいいことなんだけど、多すぎると  
選びにくいなあ……。

「うーん、そんなに言われてもなあ……あ。俺、リアスと同じ部屋  
で寝る」

『ツ!』

「あら、私の部屋？ 別にいいわよ。でも、どうして？」

「パートナーだから……いや、この場合はパートナーだったからかな  
？ ともかくリアスがいいかなって思ったんだ」

「パートナー……あ、さっきのゲームでの話ね」

俺の理由にリアスはラブラブ半生ゲームのことを思い出し納得し  
た。選んだ理由は簡単なものだが、今はそれぐらいがちょうどよかつ  
たと思う。

「んじや、部屋に案内してね。もう限界で早く寝たいんだ」

「私も今日は疲れたわ。早く寝ましようか。フフ……なのは達がした  
がっていた添い寝でもしようかしら」

「お好きにどうぞ。皆お休みー」

皆に背を向けながら手だけを振り、リアスの案内のもと、部屋に向  
かう。

……あり？ よくよく考えると、こういう場面では達が黙って  
たかな？

部屋を出る直前になのは達の方をちらりと窺うと——な  
のは達が真後ろにいた。

「うわッ!? ビックリした……」

音も気配も感じなかったので、接近していたことに驚いた。

『私も空（君）と同じ部屋で寝る!』

「え、あ、うん。俺はいいけど……」

「私は構わないわよ」

リアスの様子を見ても問題はないようだ。

「でも、この人数ベッドに入るの?」

リアスの部屋は一人用の部屋だから、当然ベッドは一つしかない。

「それはちよつと難しいわね……。私達二人を入れてせいぜい三人がいいところよ」

「だつてさ。だからあと一人だけしか無理みたい」

『せーのっ! 勝つても負けても恨みっこなし! ジャンケン——』

ピツタリ息を揃えて少女達が己の拳を繰り出す。

激しい戦鬪ジャンケンの行く末、リアスの部屋に行くのは俺と——なの  
はだ。

「えへへ♪ 空君と寝るのつてなんだか久しぶりかも」

ベッドにリアス、俺、なのはの順で並んで横になっている。

そう言われるとそうかもしれないな。三年生になってからジュエルシードに始まり、色んな事件があったせいか誰かと触れ合う時間は……全く変わらないな。普段から誰かと寝てたな、うん。でも、なのはと一緒に寝るのは久々だ。

フェイトやアリシア、十香達と違って一緒に暮らしてるわけじゃないので、昔ほど一緒に寝る頻度は減っているのは確かだ。

「ねえ、空君。初めて一緒に寝た時みたいに手を握ってくれる?」  
「りよーかい」

なのはの手を握りしめると、なのはの右手は俺の左手に絡ませる、所謂恋人繋ぎをして、左手はそのまま俺の左腕に抱き着いてくる。

数分もすればなのはの小さな寝息が聞こえてくる。

ただでさえ寝付きのいいなのはがあれだけはしゃいだのだから、ベッドに入ってすぐに寝るのも当たり前か……。

「……………空……………く、ん……………どこにもいかないで……………。ずっと……………。ずっと私と……………なのはと……………。一緒に、いてね……………」

え？

不意になのはの口から出た言葉に驚く。

なのはの様子を見てみれば静かに眠っている。今のはただの寝言だったようだ。

……………ずっと一緒か……………そうだといいな、そうなるといいな。

なのはの頭を撫でていると、やがて俺も微睡に包まれ――

「……………んっ……………」

――することはなかった。

右手にスベスベした何かが触れる。

その正体はすぐに分かった。

なのはが俺の左にいるなら、反対にはリアスしかない。

恐る恐る右を見てみれば、裸のリアスが俺の右腕に抱き着いていた。

な、な、なんで……………なにも着てないんだよ!?

「お、おい、リアス……………! 何で裸なの……………!?!」

なのはを起こさないように出来るだけ声を抑えて聞く。一応、リアスは夜に強い体質だが、疲れているので眠そうに眼をこすりながら答えてくれる。

「なんでって……………私、裸じゃないと眠れないもの。前に言わなかったかしら?」

言っつてねえよッ!

しかし、それを今更知ったところでどうしようもない。誰がどんな格好で寝ようが本人の自由だし、折角泊めてくれているリアスの厚意

を無下にして出ていくのも憚られる。

ここは俺が我慢するしかないのだ。

「……起こしてごめん。俺も寝るよ」

若干目が冴えてしまったが、この程度ならすぐに眠ることが出来るだろう。

再び目を瞑って眠ろうとすると、リアスが右腕に抱き着いてきてリアスの肌が俺の腕と触れ合う。

「……………ッ！」

文句の一つでも言ってやりたいけど、ここにはなのはもいる。我慢、ガマン――

「たまには誰かと寝るのも悪くないわね」

「……起きてたの？」

「同世代の異性と初めて寝て、少し緊張してるせいかも。……あなたの方はそうでもないみたいだけど？」

「そ、そんなことないよ……？ 結構、ドキドキしてる」

「ホントかしら？」

そう言うと、リアスは確かめるために俺の胸に頭を置く。紅い髪が俺の視界いっぱい広がる。思わず撫でたくなる気がする。

「……………あら、ホントね。心臓がバクバク鳴ってるわ」

「できればもう離れてほしいな」

「もう少しだけ……」

リアスは気持ちよさそうにして俺の胸に顔をうずめたままだ。

しばらくするとリアスから寝息が聞こえてきた。

え、嘘でしょ!?! この体勢で眠ったの!?!

これでは眠れないと思ったがそうでもなかった。よほど疲れていたのか俺の意識はすんなりと落ちていった。

『これはどういうことかな？』

はい、朝一で説教されています。

リアスが裸で俺に抱き着いたまま眠ったので、起こしに来た皆に変

な誤解されたらしいです。

自分で言うのもあれだけど、今日は誰よりも遅く起きたのは珍しい事だった。

「えーっと、これは……そう！ 暑かったから！」

「この部屋の冷房はつけてたわよ？」

折角の言い訳をリアスに台無しにされた。……そもそも皆に俺の言い訳が通じるかどうかはわからないが。

「リアスは裸じゃないと眠れないらしいんだ。昨日知って驚いてるよ」

『ふーん……』

うわっ、どっからどう見ても絶対に信じてない反応だ。

「じ、実は昨日、空に無理矢理……」

「アハハ、ふざけたこと言うのはこの口かなー？ んー？」

「い、痛い！ 痛いわ、空ー！」

冗談を言うリアスの頬っぺたをこねくり回す。リアスが涙目になつてきたので、流石に止めた。

「反省した？」

「したわよ……十分過ぎるくらいにね」

「ならいいさ。じゃ、朝ご飯を食べに行こー」

『まだ話は終わってないからね？』

………チツ………逃げられなかったか！

さりげなく話題を逸らしたはずだったが皆には通用しなかった。

結局、こつてりO☆H A☆N A☆S Iをされてからの朝食となったのだった。

「今日のお昼は自分達で食材を集めてもらうよ」

旅行二日目のお昼前に、いきなりフォーベシイさんからそう告げられた。

「この島は自然が豊かだから美味しい魚や野菜、果実などがあるんだ。さあ、いくつかのグループに分かれたら食材集め開始だよ」

昨日、山の中に入ったが、確かに食べられそうな植物はあったし、綺麗な海の中には魚がたくさんいた。この人数で協力すればお昼分の食材ぐらいなら集められるだろう。

グループ分けはくじ引きで行い、俺は海側担当のチームの一つに入った。

「よろしくつす!」

「共に頑張ろう」

「よろしく、お願いします……!」

『三人ともよろしくねー』

俺と一緒に食材集めをするのはシア、リインフォースさん、四系乃、よしのんだ。

昨日のことがあったから四系乃と少しだけ顔を合わせ辛い……。一応、謝って許してもらったんだけど、胸の中のモヤモヤ(?) みたいなのが消えないままなんだよね。

心の中に形容し難いものを抱えながらも、今やるべきことに専念する。

異能を知らない人達に見られないようにして浜辺から少し離れた海の上に魔力を足に回すことで立つ。そして、そこから釣竿を海面に向かって振り下ろす。

「きた!」

すると、一分もしないうちに浮きに反応が出る。

釣り糸に魔力を通すことで強化しているのでそう簡単には切れないようになっていいる。

「まずは一匹目ゲツ————布ツ!」

それは白い布だった。

海水を吸って重くなっていたせいで、てっきり巨大な魚が釣れたのかと勘違いしてしまった自分が恥ずかしい。

これはどう考えても食えそうにないよね……。

捨てようと思ったが海の中に戻すのもどうかと思い、一旦浜辺に戻って捨てることにした。

気を取り直して釣りを再開。

「お、今度も早い！」

二度目も一分経たないうちに反応が出た。

しかも、先ほどよりも竿から感じる重さが段違いであった。

「今度こそ……………え、人？」

そっかあ、海で人が釣れるのかあ。海つて不思議だね！

——んなわけあるか！

短い現実逃避に自分でツツコミを入れ、釣った人を絡まった釣り糸から急いで解放し、平らな場所に連れていき寝かせる。連れていくまでの間に三人に連絡をして、呼び集める。

「ブレイブ、この人の状態は？」

《解析不可能です。この老人は人間ではありません。……………そもそも生物と判断していいのかすら微妙なところですよ》

「は？」

ブレイブの説明に首を傾げていると、老人が呻き声をあげながらゆっくりと目を開ける。

「……………んお？　なんだ、お主達は……………」

「えつと……………」

「ふむふむ……………お主達、面白い。特に黒髪の少年」

俺が面白い？　このおじいさんは見ただけで俺のなにか分かったのかな？

「……………まあ良いわい。それよりもお主達に聞きたいことがある」

「何ですか？」

「我のふんどしを知らんか？　白い布なんだが……………」

ふんどし……………白い……………あ！

「あります！　ありますよ！　あなたを釣る前に釣り上げたんです！

捨てようと思っていた白い布はこのおじいさんのふんどしだったようだ。俺は布を返す。

「おお……………これはまさしく我のふんどし！」

事情を聴くと、このおじいさんは洗濯して干していたふんどしが無くなってしまう探していたのだが、岩に頭をぶつけて気絶してしまっ

たらしい。

「貴様は何者だ？ 海の中で生活しているなど普通ではあるまい？」

リインフォースさんが尋ねると、豪快に笑いながら名乗った。

「フハハハハハハハハハハハッ！ 天にゼウス、冥府にハーデス！

誰が呼んだか、海の帝王！ 我こそは海の守り神ポセイドオオオオオオンツ！」

『ポセイドン!?!』

ポセイドンって言ったら海の神様じゃんか！

神様ならブレイブが解析ができないと言ったことに理解できた。

「フハハハハハ！ 驚くのも無理はなからう！ だが、それはまた後にしてくれ。今はふんどしのお礼をしなければな！」

そこまであのふんどしが大切なのかな？

「さあ、なんでも言うがいい！ 我にできることなら何でもするぞ！」

なんでも……。

「はい、三人とも集合」

三人を呼び寄せて、円陣を作って緊急会議を開く。

「どうする？」

『なんでもって言ってるんだし、空君の欲しいものでも頼んじやえばー?』

「空さんの意見なら、なんでもいいです……」

「そうだな、元々空が助けたのだ。決める権利は空にある」

「あ、海の幸を貰うっていうのはどうすつか？ 海の神様であるポセイドン様ならすぐにくれると思うっす」

「お、それいい！ ありがと、シア！」

シアの名案に賛成し、ポセイドン様に伝える。

「ふむ、海の幸をたくさんか……よし、わかった！ ポセイドンの名に懸けてその願いを絶対に叶えてみせよう！」

声高々に宣言してから、海の中に飛び込む。飛び込んで発生した水柱が体にかかり、気持ちよかった。

数十分後、ポセイドンさんに予め指定しておいた場所——俺達  
がもといた浜辺に大量の海の幸が山積みになって置かれていた。

「これくらいでいいか？」

「はい！　ありがとうございます！」

「うむ！　では、これで我は帰るとする！」

ポセイドンさんが再び海に帰るのを見送った後、皆に協力してもら  
いながら大量の食材を運ぶ。

「こ、ここまで食材が集まるとは思ってたよ……。一体どう  
やって集めたんだい？」

頬を引き攣らせたフォーベシイさんに尋ねられる。

「ポセイドンさんがくれたんです」

「ポセイドン!?　四人は海の神ポセイドンに出会ったってのか!?!」

驚くユーストマさんに俺達は揃って頷く。

『これも空の傍に俺達二天龍や九喇嘛、聖書の神いることで起きた現象だな』

『何時の時代も力は力を引き寄せるからな。当然のことだ』

『その分だけ異性も引き寄せるがな』

『この先心配です……。手遅れな気がしなくてもないですが……。』

『空さんの近くに居ると退屈しませんね!』

次第に山の方に行っていたメンバーとも合流し、その度に大量の食  
材に驚くの皆にも慣れていったところで、何人かで昼食を作り始め  
る。

『いただきます!』

百人近い人数の食前の挨拶が一人ひとりが結構出しているので重  
なることでもかなりの大音量だ。でも、それだけお腹を空かせていた  
し、目の前にある絶対に美味しいであろう料理に早く手を付けたいの  
だろう。

俺も目の前にある料理に手を伸ばし、食べ始めた。

「みなさーん！　用意はいいですかー!?!」

『イエーイ!』

「それでは、ミュージック……スタート！」

食後の片づけをしたあと、いつの間にか美九のライブが始まろうとしていた。

ステージや衣装はどうやって用意したのか気になるところだが、それを今聞くのは野暮というものだ。

ノリノリの皆に混ざり、俺も全力で美九に声援を送った。

『Go☆サマーガール』

歌い終わった美九と目が合って美九はニヤリとほくそ笑んだ……気がした。

「続いて、だーりんが歌ってくれまーす！」

「んなツ!」

『おおーッ!』

周りの視線は俺に集まる。誰もが俺が歌うことを待ってる視線だ。この空気で断れるわけないじゃんか! ……というかだーりんって呼んだだけなのに俺だつてことよくわかるね。

「そんなじゃ、いっちょ歌いますか! 曲は『SUMMER GATE』! いっくよー!」

音響がどうなってるのか知らないが、俺が言った曲名の音源がキチンと流れてくる。それに合わせて俺は歌う。

『SUMMER GATE』

「続いて……クロノにでも歌ってもらおうかなー。管理局の皆さんもクロノの歌聴きたくありませんかー?」

歌い終わって、たまたま目に入ったクロノを指名する。

『イエーイー! クロノ執務官の歌聴きたーい!』

「……この空気の中で断るほど僕は石頭じゃないさ。全力で歌わせてもらう——空と共にな!」

「え、ちよ! 俺、今歌い終わったばっか! やるならユーノとやって

よ！」

「仕方がないな……ついでのフェレットもど……ユーノ。あとヴァーリと雄人もだ。歌うぞ」

名指しされた三人は前に出てきてマイクを手を持つ。

結局俺は歌わされるのね……。

「何歌うの？」

『Summer Splash!』だ。君達は知ってるだろう？」

「お、知ってる曲だよ」

「ああ、知ってる」

「俺も知ってるぜ！」

「僕も何回か聴いたことあるから大丈夫だと思う」

全員知ってる曲だったので、そのまま決定。曲が流れてきて俺達は歌い始める。

ラップは念話で雄人に押し付けたら、意外にも雄人のラップが上手かったことに場の雰囲気はさらに盛り上がった。

「続いて——」

俺達五人に引き続き、なのは達や十香達、シア達、皆の親兄弟、ほとんどの人が代わる代わる楽しんで歌った。

皆の盛り上がりも凄く、途中から漫才や手品、特技披露もやっていった。

「——次で最後にしようか」

景色は夕暮れになり、ライブの終わり間近だ。

「最後は空君、君に閉めてもらおうか。ここにいる人達が共通で知ってるのは君だからね。君が相応しい」

そういえば、俺がこの中一番顔を知られてるのか。

「はい！ 最後に一曲、全力で歌わせていただきます！」

『STAY』

「いやー、楽しかった、楽しかったー」

風呂上がり以外に出て、昨日と同じく浜辺に座る。ライブのことを思い出すと胸が熱くなってくる。

「いい歌声だったわ」

後ろに振り向けば、万由里がいた。

「あ、万由里！ 俺の歌聴いてたんだね……って俺のこと見てるんだから当たり前か」

万由里も昨日と同じく俺の隣に座る。互いの肩が触れそうな距離も同じだ。

「今日も星が綺麗ね……」

「そうだね……」

「……そこは 万由里の方が綺麗だよ」って言って欲しかったわ」

「え、万由里が星よりも綺麗なのは当たり前じゃんか」

「………そ、そう。ありがとう……」

顔を赤くした万由里はそっぽを向いてしまった。そのせいで何故だか気まずい空気が俺達の間生まれれる。

あ、そうだ！

「万由里、見てて！ 今から面白いものを見せてあげる！」

「？」

「(ドライグ、アルビオン、九喇嘛、ヤハウエ、ブレイブ手伝ってね！)」

影分身を五人だして、それぞれに禁手フランス・ブレイク化させる。

赤、白、橙、黄金、蒼。

五人の俺が空に浮かび、魔力を天に向かって放出。そして――

―弾けて花のように広がる。

「どう？ 花火の魔力版」

「綺麗ね……とつても」

感想を聞くと、万由里の視線は完全に花火に釘付けだった。

時折、二つ以上の色が混ざり合って別の色になる。

十分ほどすると、皆も花火に気が付いたのか外に出てきたり、ベランダから眺めていた。

「私は遠くで見てるわ。じゃあね、空」

昨日は唇だったが、今日は頬にキスをしてから万由里はその場から

いなくなった。

~~~~~ツ！ ……また心臓がバクバク鳴ってる……。  
バクバク鳴るのが収まるころには皆に囲まれていた。

「綺麗だね」

「そうだね」

「でも、誰が……？」

「さあね。もしかしたらポセイドンさんがやってくれてるのかもよ  
？」

「ごめん、イリヤ。ホントは俺なんです。」

心の中で謝りながら花火を記憶に焼き付ける。

それから五分間、魔力を出し続けた影分身は自然と消えて花火は終  
わった。

「……あ」

名残惜しそうな声を誰かが出していた。

「また来ればいいさ。来年も再来年も……その次も……ね？」

『うん（ああ／はい）！』

皆笑って頷く。

こうして旅行二日目の夜は終わ

「空は今日も私の部屋で寝るの？」

———「らなかった。」

リアスの爆弾投下で少女達の戦争が再び勃発したのだった。

「お、俺達の夏はこれからだ！」  
《マスター、声が震えていますよ》

## 真夏の夜の悪夢です！

真夏の夜の悪夢です！

S i d e 空

旅行三日目の朝、起きると右に耶俱矢、左に夕弦がいて、俺は二人に抱き枕代わりにされていた。

昨晚、なのは達相手に大人気なく勝った二人であった。

二人の拘束から逃げ出すと、ホテルを出て森の中を散歩する。

日が出てから時間はそんなに経っていないので、少しだけ冷える空気が今が夏だということを忘れさせてくれる。

「こらでいいかな」

森の中の開けた場所に出ると、座禅を組む。ドライグ達も肩や足、頭に乗りにながら目を瞑る。

眼を閉じて、周りの音に耳を澄ます。

これは見聞色の覇気を鍛える軽い修行だ。

鳥の鳴き声、木々が風に揺れる音、川の流れる音……うん、いいね。

え？ 修行禁止？ バレなきやいいんです。

十分程して座禅をやめて、皆が起きる前にホテルに戻る。

「シグナム、もうちょい左や！」

「はい、主！」

はやての指示通りにシグナムさんが動くが、行き過ぎてしまう。

「バカッ、行き過ぎだ！ 右に戻れ！」

「む？」

すかさずヴィータがフォローに入るが、またもや行き過ぎてしてしまう。

そこから指示を何度も飛ばしていき、ようやく――

「シグナム、そこや！」

「はい、主！ せいッ！」

気合を入れて木刀で一閃。

『おおー!』

その光景に周りで見ていた皆が盛り上がる。

「将、お疲れ様。良い剣だった」

「ありがとう。ふう……しかし、目隠しをしながら斬る、とうのは中々難しいものだな」

リインフォースさんがタオルと水をシグナムさんに渡して労っていた。

「この世界の住人の発想は豊かなものだ。確か……スイカ割りだったか?」

「そうだな。ただの遊びと思っていたが、侮れん。もっと精進せねば」  
ホントはただの遊びなんです。侮っていいんです。精進なんかしなくていいんです。

真面目過ぎるシグナムさんに内心でツツコミを入れながら、他の人がスイカ割りをするとところを見学する。

イリヤやなのはが空振りしたのを見て笑い、土郎さんや恭也さんが綺麗に斬ったのを見て驚嘆し、色んな人が挑戦していくのを見るだけでも大いに楽しめた。

もちろん俺もやった。綺麗に……とまではいかなくともそこそこ上手く斬れたと思う。

スイカを皆で食べてから小休止を挟んでから、子供組は元気いっぱい海で遊ぶ。

「ほらー。空も見えてないで来なよー!」

俺を呼んだアリシアだけじゃなく、他の皆もそんなことを言いたそうな眼だった。

「はいはい。今行き——うわっ!」

ノロノロと歩き出すと、顔に突然水がかけられた。

犯人は……わからないから全員でいいや。

「……………ハ、ハハハ、アハハハハハハハハハハ! —— 覚悟はいい?」

どこからともなく水鉄砲を取り出し、皆に向けて放つ。水鉄砲からすごい勢いで水が出て、なのは達を容赦なく襲う。

『キャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

実はこれ、アザゼルさん特製の水鉄砲だ。この時点気が付いた方もいるかもしれないが、アザゼルさんが作ったものがただの遊び道具で終わるはずがないのだ。

しかし、仕組みは思いの外単純にできていて、俺の魔力を送り込むと威力が上がるだけだ。

「さあ、俺達の戦争水遊びを始めようか」

『す、スト————キャアアアアアアアアアッ!』

んなもん知らん! とばかりに再び放つ。今度は込め過ぎたせいか吹き飛んでる人までいた。

「どうしたどうした!? もう終わりか!? 貴様らの力はその程度か!?!」

『お前はどこの魔王だ……?』

「フハハハハハ! これで俺の勝————あり? バインド?」

ノリに乗っていると足にバインドがかけられていた。解除する度に新しいバインドがかけられて逃げられない。その間にもものは達が幽鬼の如くユラユラと迫ってくる。

え、ちょッ!? なんか皆さんシャレになんない雰囲気なんですけどオッ!? というかイリヤの前で魔法使うな!

「ま、負けん! 俺は負けられんだ! 貴様らのような魔王になどな!」

『立場がいつの間にか変わってないか!?!』

『……そう。だったら……少し……頭冷やそうか……?』

————ッ!? 怖ッ! 皆怖すぎるんだけど!

「せ、世界の半分を貴様らにくれてやる! それで痛み分けにしようじゃないか!」

『だからお前はどっちなんだ!? 勇者なのか魔王のかはつきりしろ!』

『他に言うことは?』

「ごめんなさい」

『謝るの早いな!?!』

も、もう無理！ これ以上なのは達の威圧に耐えられない！

「ハハハ……許すとても？ デイバイン……バスターツ！」

「それはシャレにな——ウギヤアアアアアアアアアアツ！」

水鉄砲をなのはに奪われ、その銃口を俺に向けてくる。そして何の躊躇いもなく引き金は引かれ、激しい水飛沫に当たって吹き飛ばされたのだった。

「今夜は肝試しだぜ！」

ユーストマさんがホテルの入り口前に集まった俺達を見て言う。

今回の旅行はイベント盛りだくさんだなあ……もちろん俺としてはどれも楽しいからいいんだけどね！

「ルールは簡単！ 二人一組のペアになって山の中にある廃屋からカードの入った封筒を持ってきてもらう！ ……もちろん道中には用意された仕掛けが色々あるからな。気を付けてくれよう！」

見本のカードと封筒を見せながら説明を始めた。カードに書かれた内容はゴールするまでのお楽しみというわけだ。

「カードには景品が書かれていて、リタイアせずに持って帰ってこれればその景品をプレゼントするぜ！ 中にはかなーり豪華な物あるから皆頑張ってくれよ！」

ふーん。景品付きか。これは面白そうだね。

参加するのは肝試しをしたい子供組だけで、残りは保護者組と共に山の中に設置されたカメラ映像をバカでかいテレビで見てるそうさ。保護者組、楽しみながら絶対に酒飲むだろ……。

「さあ、ペアを作ってくれ！」

真つ先に決まったペアは恭也さん&忍さん、クロノ&エイミイさん。

「そ、その……もし良かったら……なんだけど……わ、私と組まない？」

「え、俺か？ ああ、いいぞ。よろしくな、舞衣」

意外にも舞衣さんが兄さんを誘っていた。初日の陰悪な雰囲気は

どこに行つたのやらで周りはそれを見て微笑ましそうだったり、ニヤニヤしていた。

よくわからないけど、仲良きことは美しきかな、ってね!

「ヴァーリ君、私と組みましょ?」

「私と組むにゃん」

「……私と組んでください」

「わ、私と組んで……くれると嬉しいかな」

朱乃、黒歌、白音、あかりの四人がヴァーリを誘っていた。

「あつちは大変そうだね」

「それ、あなたが言えたセリフじゃないと思うのだけど?」

他人事のようにヴァーリ達を眺めていたら、琴里が近くに居た。その後ろには十香達やなのは達が今から戦場にでも赴くかのようなオーラを放っていた。

「俺も? うーん、俺としては誰でもいいんだけど……」

《マスター、今回ぐらい自分で決めてみてはいかがですか?》

「へ……わかった、そうしてみる。ちよつと考えさせて」

うーん、誰がいいかな? あ、そうだ! あの娘にしよう!

「俺のペアは……君に決めた!」

S i d e o u t

S i d e ヴァーリ

暗い森の中、肝試しのパートナーとなった相手と空が二人で歩いている。その光景を俺はホテルのテレビで見ている。

俺と白音の番はまだ先なので、他の人の様子を見ることが出来る。

修行するために入った時とは雰囲気はまだ違ってくるせいで、全く知らない世界が広がっている。

悪魔の俺からすればあの程度の暗さはなんていうことはないが、二人にとって頼りになるのは空の手にある懐中電灯のみだろう。

『こりゃ出てもおかしくないかもね』

『な、なにが……?』

『なにが……つて、そりゃ、オバ——』

『あー！ あー！ 聞こえない！ 何にも聞こえない！』

空のパートナーはそれ以上聞きたくないらしくて大声を出して空の声を遮ってきた。

『アハハ、やっぱ苦手なのか』

『意地悪しないでよ！』

『ごめんごめん。でも、だからこそ、君が怖くないようにこうして手を繋いでるんじゃないの？』

『そ、それは……』

『大丈夫。何があっても俺が君を護るよ——明日奈』

『うんっ！』

空のパートナーこと明日奈は怖がりながらも精一杯返事を返した。

『……ところでどうして私にしたの？ (空君がまさか私のこと……！)』

確かに、どうして空は明日奈を選んだんだ？

『ん？ ああ、明日奈を選んだ理由ね。明日奈がオバケ怖いって言うてたからだよ』

『え、それだけ……？』

『うん、それだけ』

『そ、そう……。 (だよねだよね!! 空君がまさか私のこと……！ なんて思った私を殴ってやりたい!)』

理由を述べたら明日奈は目に見えて落ち込んでしまった。

ふむ……俺にもわからん。まあいい。空だしな。

——キャアアアアアッ!

二人が歩いていると、突如叫び声が山の中から聞こえてきた。

『え……今のつて……？』

『なんかあつたんじゃない？』

あの声は……多分フェイトとアルフかな？

『いやいや、そんな呑気なこと言ってる場合じゃないよ!』

『大丈夫だって。フェイトやアルフなら平気だよ。明日奈みたいにオバケ嫌いなわけじゃないんだから』

空の言う通り、テレビにはフェイトとアルフが現れたのっぺらぼうに驚いて叫んでいるのが映っていた。アルフは驚きすぎてのっぺらぼうを殴っていたが。

魔王と神王が所々に仕掛けがあると云っていたが、こういうことだったか。

だが、空ならこの程度――

『キヤアアアアアアッ!』

『あ、ちよ、明日奈ッ!? どこ行くの!?!』

――意外と苦労するかもしれんな。

二人が首長のオバケと遭遇すると、明日奈は空を置いて道から外れた方向に走ってしまった。そして、空が慌てて明日奈を追いかけて始めた。

「明日奈ったら困った子ね……。パートナーを置いていくなんて……」

自分の娘が酷い目にあっているのに呑気だな……。

明日奈の母親が酒を飲みながら呟いていた。呑気なのは酒が入っているのと、空がいれば問題ないという信頼の表われなんだろう。

二人がテレビに映らないところに行っただので、他の人を見ることにした。

アースラの組はクロノとエイミイのペア以外が途中リタイアしている。

恭也と忍のペアはオバケが現れても声一つ上げずに世間話をしながら進んでいく。

士郎と舞衣は……不思議な雰囲気を出していた。女子がキヤーカー言っていたから恋愛絡みだと思う。

シグナム達ヴォルケンリッターもヴィータを除いて怖がる素振りはない。

他にも絶叫したり、途中リタイアするペアが続出している。それを見ている保護者達は随分楽しそうにしているが。

……空は無事に帰ってくるだろうか?

Side out

S i d e 明日奈

立ち止まって気が付いた。空君を置いてきてしまったことに。今現在暗い森の中に一人でいることに。

さ、最悪……！ どうしよう……？

恐怖心を紛らわそうとするけど、先ほどのオバケがフラッシュユバツクして足がすくむ。

「お願い、空君……助けに来て……！」

その場にへたり込みながら助けを願うしか、今の私には出来なかった。

S i d e o u t

S i d e 空

「捕まえたっ」

逃げ出した明日奈にようやく追いついた。

座り込んで頭を抱えている明日奈の肩を軽く叩くと飛び上がった。

「キヤツ!？」

「うわ、そんな反応されると傷つくなあ……」

「えっ？ あ、空君！」

相手が誰だかわかると明日奈は安堵の息をそつと吐いた。

「や、迎えに来たよ」

「あ、ありがと……。なんだか……誘拐されたときのこと思い出しちゃった……」

「え？」

「私が助けて欲しいときに、願ったときに空君は来てくれた。あの時も今も」

「……そっか」

そう言えば、あの時も明日奈は俺の名前を呼んでたね。

「………来てくれる？」

「ん？」

「これから先、もしも私の身に危険が迫ったら……空君は助けに来てくれる？」

なんだ、そんなことか。

「うん！ 明日奈に……うん、明日奈だけじゃなくて、俺の友達や家族に危険が迫ってるなら俺は絶対に助けに行くよ！」

「（そこは『私だけ』……って言って欲しかったと思うのは欲張りかな？）……ありがとう」

「どういたしまして！ さ、早く行こうか！ 今更リタイヤなんてする気ないでしょ？」

「もちろん！」

手を差し出すと、明日奈は力強く握って立ち上がった。

「明日奈。怖いんだったら目を瞑ればいいんだよ」

「でも、それだと前が見えなくて歩けないよ？」

「そこは任せて！」

「キヤ！」

明日奈の膝裏と背中に腕を回して持ち上げる。所謂お姫様抱っこだ。

「飛ばすからちゃんと捕まってる！」

魔力強化を使って森の中を駆け巡った。

道中には当然だが仕掛けがたくさんある。しかし、それら全てをスルーして廃屋目指して走ったのだった。

「おかえり、空ちゃん、明日奈ちゃん」

明日奈と二人で廃屋まで辿り着き、封筒を一枚手に入れてホテルに戻ってきた。どうやら、俺達が一番最後のペアだったらしい。

「さあ、封筒を手に入れたペアは開封してくれ！」

生き残ったペア、総勢10組が一斉に中身のカードを取り出す。

「ハワイのペア旅行券だ」

『すごっ！』

クロノとエイミイさんペアはまさかのハワイ旅行券!?

「私達は……デイスティニーランドの年間パスポートね」

『マジかつー!』

恭也さんと忍さんペアは年間パスポート!?

他にもアミューズメント施設の無料券や最新の家電製品セット、高級陶器のセットなどが出てきた。一番安そうなのでも最新のゲーム機だったから、総額は……考えるのは止めておくことにした。

魔王と神王気前良すぎじゃないですかねえ!? 限度を考えて欲しいんですけど!

そして最後に俺達のカードだ。書かれていることは――

「家……う？ ふーん、家かあ………家ツ!」

何かの見間違いないじゃないのかと何度も目を擦って確認するが書かれていることは「家」だ。

『魔王、神王マジか!』

中のドライグ達も驚きの声を上げていた。

「お、それが一番の当たりだよ」

まさか家を景品に入れてるとは誰も予想だにできなかった。というか予想できるはずがない。

「いやいやいやいや! 流星にこんな高価なものもらえませんかから!」

「ハツハツハツ! たかが家の一つや二つ気にしないでいいからね?」

「あなたが気にしなくても常識を気にしてください!」

「これくらい普通じゃないのかい?」

何が不満なのか聞きたいばかりの表情でフォーベシイさんが尋ねてくる。

「それは冥界そっちだけや天界です!」

人間界での常識を考えて欲しかった……!

幸い、保護者の人達のほとんどが酔っていたおかげで特に何も言われなかった。

「空ちゃんも明日奈ちゃんが欲しいときにそれぞれに家を作ってあげ

るよ。それにしても……やったね、空ちゃん！ 将来、ネリネちゃん  
とリコリスちゃんと結婚してから暮らす家が手に入ったね！」

「へ？」

「おいおい、マー坊。それを言ったらシアだって一緒に暮らしてもら  
わなきゃ困るぜ！」

「い、いや、あの……」

また話が勝手に進んでいく。孫が早く見たいだの、どんな家にする  
かなどなど。正直ついていけない内容になっていくにつれて、俺の眼  
が死んでいく。

「ご、ごめんなさいっす、空君」

「あの二人はこうなるとしばらく止まらないからね」

「流すのが一番ですよ」

シア、ネリネ、リコリスに助けてもらい、一旦、自室に戻ることに  
した。

その後は皆で花火をして旅行最後の夜を楽しんだのだった。

『ただいまー！』

三日ぶりに我が家に帰って来た。午前中に海で遊び倒したのでク  
タクタだ。

早くベッドに入りたい。

「おかえり」

え？

家には誰もいないはずなのに返事が返ってきた。

「万由里!? なんでここに!？」

「今日からここに住むからよ」

俺が聞きたいのは万由里がどうやってこの家に入ったかなんだけ  
ど……。天照さんが合鍵でも渡したのかなあ？ というか住むの決  
定なんですね。

ツツコミたいところが色々あるが、いつまでも玄関にいても仕方が  
ないので荷物を置いて万由里のところに行く。

リビングに全員集合すると皆に万由里のことを説明した。精霊達は知っていたのか驚く素振りはなかった。

「ま、いいか。歓迎するよ、万由里」

なんとなくだけどころなるような気がしてたしね。

万由里に手を差し出す。

「ええ、これからよろしく」

微笑みながら万由里は俺の手を握って握手を交わした。

「というわけで明日は夏祭りデートしましょう?」

「どういうわけ? 文脈おかしくない? ……まあ、そのお誘いは受けるけど」

断る理由はないので、皆からの突き刺さるような視線を受け流しながら万由里からのお誘いにOKをしたのだった。

夏祭りでは万由里とデートです！

夏祭りでは万由里とデートです！

Side空

神社へと続く道の途中、これから始まるイベントを楽しむであろう人達で賑わっていた。

赤い鳥居を潜れば色とりどりの浴衣着た人々。夜に輝く提灯。屋台で売られている焼きそばやたこ焼きなどの香ばしい匂い。金魚掬い、射的、輪投げ、他にも多くの娯楽が立ち並んでいた。

「待ち合わせはここでいいんだよね？　時間は………まだ余裕はあるか」

かくいう俺も今日のイベント——夏祭りを楽しみにしていた。集合時間の三十分前に来るぐらいには。

早く来すぎちゃったか……。

万由里とのデートをするので、高校生ぐらいの姿になって黒い布地に青い縦模様が入った浴衣を着ている。

浴衣を着ているのは万由里が着てほしいと頼んできたからだのだが、たまにはこういうのを切るのも悪くないと感じた。

万由里はどんな浴衣姿なのかな？

今日のデート相手の浴衣姿を想像しながら時間でも潰そうかと考え始めた時——

「あ、あの……今、お一人ですか？」

「え、はい。そうですけど」

浴衣姿の茶髪の女子高生二人組が俺に声をかけてきた。

俺の記憶の中にはない人達、つまり、知らない人だ。

まさか、初対面の人に話しかけられるとは思ってもみなかった。

「も、もしよかったら……私達と一緒にお祭りを回りますか？」

「一人でいるよりは楽しいと思いますよ！」

……？　あ、そういうことか。

「ごめんなさい。俺、待ち合わせしてるんだ。——女の子をね」

『女の子』の部分の強調して断ると相手は気まずそうな顔になった。

『ご、ごめんなさい！ 失礼しました！』

二人は謝るなり、そそくさとその場から離れていった。

「こういうこともあるんだね」

去年と一昨年は小学生の姿だったので今のようなことはなかった。さっきの対応が出来たのも琴里に耳にタコができるほど教えられたからだ。

それから万由里が来るまで待つことにした。

「お待たせ。……なんかやけに疲れてない？」

「アハハ……万由里が来るまでに結構な人数に声かけられちゃって……」

《万由里さんが来るまでの三十分間で合計十五人に話しかけられてましたね。単純計算で二分毎に話しかけられています》

うへー、そんなにいたんだね……。そりゃ疲れるのも頷ける。

「……相手は全員女の子？」

《はい》

「高校生の姿でいさせるのは間違いだっただかしら？ いや、それだと姉弟にしか見えないし……どうせだったら最初から一緒に行けば……でも、待ち合わせした方がデートっぽいし……」

万由里はブレイブに問い詰めるや否や、ぶつぶつとつぶやきだした。

「でも、万由里の浴衣姿見れたんだから、疲れたのもある意味良かったかもね」

「……………ツ……………相変わらずズルいわ」

若干頬を赤く染めたと思ったら、そっぽを向いてしまった。

「ズルい？ 何が？ 本当のこと言っただけだけど？」

万由里の浴衣は白い布地に赤、桃、黄の三色の花が彩っていた。頭にはいつもの白いリボンではなく、花飾りのついた髪留めで一つにまとめられているサイドポニーだ。

ただでさえ十人中十人が振り向くような美少女が浴衣を着たのな

ら、見惚れない人なんていないだろう。

「……………まあ、いいわ。さあ、行きましよう」

万由里が俺の腕に抱き着いてきて歩き出す。

互いの体が密着して、万由里の体の感触や匂いが十分に伝わる。

そして、自分の顔が次第に熱くなってきたのがわかった。

「さっきのお返し♪」

対する万由里は、いたずらが成功した子供のように笑っていた。

……万由里の方がズルくないか？

先ほども言ったが、万由里は美少女だ。そんな相手に抱き着かれれば男なら誰だって赤面するに決まっている。それで赤面しない奴はホモかB専だけだ。

「最初は何にする？」

「空に任せるわ」

色んな露店があるから悩むなあ。

「すっごーい！これが人間界の魔法少女ミルクキーなのね！」

「お、嬢ちゃんこれの良さがわかるのかい？（人間界？）」

「ええ！だって私、魔法少女なもの！先輩として尊敬しちゃうわ！」

「そ、そうかい……。まあ、こういう娘もいるよな……。」

うん、魔王少女がこんなところで魔法少女グッズを買っているはずがない。ないっつたらない。

聞き覚えのある声だったが、気のせいだと自分に言い聞かせてその近くから離れた。

「む、この『射的』というゲーム……面白い！」

「お兄様！私、あの熊のぬいぐるみが欲しいです！」

「任せたまえ、リーアたん！」

「サーゼクス、はしやぎ過ぎで悪目立ちしているわ」

うん、紅髪の兄妹に銀髪メイドがいるはずがないんだよ。たまたま似たような人がいるだけなんだ、きつと。

再び聞き覚えのある声だったが、こちらも気のせいだと思い、静かに離れた。

「あ、空だ！」

「え、空君？ どこどこ？ あ、いた！」

名前を呼ばれた方を向くと、浴衣姿のなのは達小学生組がいた。それぞれに合った浴衣が彼女達の可憐さをより引き立てていた。

「よっ。皆浴衣似合ってるて可愛いぞ……………」

可愛いと褒めたら足を誰かに踏まれた。足から辿ると万由里が踏んでいたのがわかった。

「いきなりなにすんだよ……………!?!)」

「(あんたが他の女に鼻の下伸ばしてるからよ)」

「(伸ばしてない!)」

アイコンタクトでそんな会話をしていると、リインフォースさんやシグナムさん、シャマルさんなどの大人組も浴衣姿でやってきた。

「ど、どうだろうか？ 私の浴衣は変じゃないか？」

やや緊張気味にリインフォースさんが感想を聞いてきた。

リインフォースさんの浴衣は薄い水色の布地に薄紫のアサガオが描かれていた。長い銀髪は後頭部で一纏めにしている、普段は隠れているうなじ部分が露わになっていた。

「おう、最高だ！……………」

素直に感想を述べたら、またしても足を踏まれた。犯人は同じく万由里だ。しかもさつきより地味に痛かった。

「(また鼻の下伸ばしてる……………」

「(グヌヌ……………」

こればかりは否定できない。リインフォースさんの浴衣姿は万由里やなのは達にない大人の色香が感じられる。

もちろん、万由里やなのは達もそれぞれ違った良さがある。

「ところで……………空の腕に抱き着いてる女、貴様誰だ？」

リインフォースさんが万由里に鋭い視線を向けながら問いかける。

「空のデート相手だけど何か文句でも？」

万由里は見せつけるかのようにさらに密着してくる。それを見せつけられたリインフォースさんの眉尻が吊り上がったのが分かった。

そう言えば、龍神家に住む人達以外には万由里の紹介をまだしてな

かったな。

「そうか、ならば今すぐ私が空のデート相手になろう」

「……は？」

リインフォースさんの提案に万由里のこめかみに血管が浮き上がる。

あのー、お二人さーん？ 雰囲気怖すぎやしませんかねえ？ 周りの視線が痛いんですけど！ 主に俺へのが！

傍から見ると、俺が美女美少女を二股してるようにしか見えないのだろう。

「空は私を幸せにすると言った。だから空がデートの相手をするのは当然だろう？」

「本人はそんな気持ちこれっぽちもなかったみたいだけどね」

「それは今だけだ。何れ変わる」

「変わるのに何年かかるかしらね？ だいたい——」

二人の口論は白熱——それに連れて俺への周囲の視線はさらに痛くなつたが————していき、いつの間にやら俺のダメ出しになつていた。俺が優柔不断だの、女誑しだのなんだのボロクソに言われた。

あれれえッ!? どうしてこうなつた!? 俺なんか悪いことした!?

「二人共ストップ!」

「……わかつたわ」

「空が言うなら……」

ほっ……二人が落ち着いてくれて良かった。

「リインフォースには悪いけど今回は万由里がデートの相手だから……ね？」

「…………悔しいがここは引くとしよう」

「そうね、あんたは一生引いてるのがいいと思うわ」

「前言撤回だ。意地でも二人についていく」

ちよ、万由里さん! 何で折角鎮火したところを再燃焼させるんですか!?

万由里の勝ち誇つたような物言いに、なんでかはわからないがリイ

ンフォースさんのついてくると言い出して俺の空いてる腕に抱き着いてきた。

「だ、だから二人共落ち着けて！ 万由里はわざわざ相手を煽るな！」

「知らないわ。この女が勝手に突っかかってくるんじゃない」

「白々しい……！ 貴様が私を挑発してきたからだろう!!」

「あんなので乗る方がどうかと思うけど？ それと空から離れなさい。嫌がつてるのが分からないわけ？」

「むしろ貴様が嫌がられているに決まってるだろう？ それに気付けないほど貴様は愚かなのだな」

「やめて！ 俺を間に挟んでギスギスしないで！ だ、誰か助けてえ！」

すると、俺の願いが届いたのか救世主が現れた。

「ちよつとそこのお嬢さん達、お兄さんが困ってるからその辺にしときなさい」

「あ、ありがとうござ……え？」

助けに入ってくれたお礼を言おうとしたら、そこにいたのは浴衣を着た蒼髪の女性——使い魔のティアだった。

「ティ、ティア!? どうしてここに!」

「魔王サーゼクスから聞いたのよ。それで、どうかしら？ 私の浴衣姿は。初めて着てみたのだけれどこういう服も悪くないわね」

藍色一色に黄色帯を巻いた浴衣だったが、それがティアの蒼い髪をより際立たせていた。

「うん、とつても似合ってる。ありふれた答えしかできないけど」

「それでも十分よ。ありがと。……で？ あなた達二人はいつまでレベルの低い争いをしてるつもりなのかしら？」

『はっ。』

ティア!? 今のセリフ、明らかに喧嘩売ってるよね!?

「そうね……なら、間を取って私が空とデートするわ。それで万事解決ね」

「寝言は寝てから言え」

「使い魔の分際で……」

「ごめん、流星に俺もどこが万事解決なのかはわからないんだけど……。」

「あら、二人とも私と戦う気？ 仮にも龍王最強と言われてるこの私に勝てるつもりでいるの？」

「それはシャレにならんから！ というかそれ以上は俺が許さないぞ！」

『……………』

少しだけ声を張り上げると、三人は押し黙る。

「いいか？ 俺は今日、万由里とデートする約束をしてたんだ。だからデートの相手は変えられない。……つまらないことで楽しいことを潰さないでくれよ」

「……挑発したりして悪かったわ」

「いや、こちらこそ大人気なかった。すまない」

「私も浮かれすぎてたわ。ごめんなさい」

俺の想いが通じたのか、三人は互いに謝っていた。

「はあ……無駄に時間使ったけど、これでデートが出来る……。万由里、行こう」

「ええ、そうね」

「今回は仕方がなく……あくまで仕方がなく貴様に譲るが、次は絶対に譲らないからな」

「私も一度でいいから空とデートしてみたいわね」

「そう、頑張れば？」

険悪な雰囲気は三人の間に皆無……とまではいかなくともそこそこ緩和された様子だ。一時はどうなるのかとハラハラしたが問題なさそうであった。

「空、私アレが食べたいわ」

「アレ……ってたこ焼き？ わかった」

万由里が指をさした方向にあったのはたこ焼きの屋台だった。

二人で屋台に向かうとおじさんがたこ焼きを作っていた。

「おじさん、たこ焼き六個入り一つちようだい」

「三百円だ！」

丁度の金額をおじさんの手に渡して、出来上がりを待つ。

「出来上がったぜ！ ほら、持ってきてな！」

「ありがとう、おじさん」

「おう！ あんちゃん！ こんなに可愛い彼女手放すんじゃないぞ  
！」

「言われなくても」

「ツ！」

たこ焼きを受け取り、座れる場所に腰を下ろす。

「いただきます……しまった。箸が一膳しかないや」

「問題ないわ。私があんたに食べさせて、あんたが私に食べさせれば  
いいだけよ」

「食べさせ合う——熱っ！」

俺が何か言うより先に割り箸を万由里に奪われて、熱々のたこ焼き  
を口に突っ込まれた。

火傷に注意しながら何度か口の中で転がしてから咀嚼した。その  
あとで万由里をジト目で睨む。

「まーゆーりー？」

「ほら、次はあんたがする番」

しかし、俺の訴えかける視線を流し、割り箸を押し付けてくる。万  
由里が俺にしたことを今度は俺がしろ、という意味だろう。

「はいはい……ほら、口開けて」

「……あ、あーん」

万由里は少しだけ恥ずかしそうに口を開けた。その口の中にまだ  
まだ熱を持ったたこ焼きを放り込む。

「~~~~~っ!?!」

いきなり熱い物が口に入ったのでハフハフと頬張りながら食べた。

「あ、あんたねえ、少しは冷ますとかしなさいよ！ おかげで火傷しそ  
うになったじゃない！」

「俺もついさつき万由里に同じことされたんだけどなー?」

「うっ……………」

「アハハ、悪い悪い。次はちゃんとフーフーしてから食べさせるよ」  
宣言した通りにたこ焼きを少し冷ましてから、万由里の口に入れた。

「んっ……美味しいわ」

たこ焼きを全部飲み込んだあとで万由里が感想を口から漏らす。

「じゃあ、俺も——」

「私が食べさせるから」

「あ、はい……」

自分で食べようとしたらまたもや割り箸を奪われ、万由里に食べさせてもらう羽目になった。

「空、口にソースがついてるわよ」

「え、どこ?」

たこ焼きのソースが顔についてしまったらしい。顔を触ってみるがソースがどこにあるかわからない。

「あー、もうっ、じっとしてなさい!」

痺れを切らした万由里が両手で俺の顔を抑えて、頬に柔らかい唇を押し付けてきた。

「ッ! ま、ままま万由里!? ソース取るのになんで口でするんだよ!?!」

「ホントはソースなんてついてないわ。フフ、あんたって戦闘においてはすごいけど、日常だと隙だらけよね。悪い女に騙されそうで少し不安にもなるけど……」

ソースのこと嘘だったの!?

またしてもいたずらが成功したような顔つきで万由里は笑っていた。

一方、俺の顔は火を噴きそうなくらいにもものすごく熱い。抱き着かれた時の比じゃない。……口にキスされた時よりは熱くないけど。

「あ、ああいうことは好きな人にしなさい!」

「私、あんたのことが好き」って言ったけど?」

「そうだったー！」

「た、例えそうだとしても軽々しくはダメだと思いますー！」

「軽々しくとは失礼ね。これでも結構勇気がいるのよ？」

万由里の顔を見れば、ほんのりと朱に染まっていたので嘘ではないようだ。

「……………」

「どうかしたの？」

「万由里に……いや、十香達にも一生敵いそうにないなーって思っただけ」

「そうね、あんたが結婚したら絶対に尻に敷かれるでしょうしね」

「えー、嫌だなー」

取り留めのない会話をしばらく続けてほとぼりが冷めるのを待つ。

「さてと、お次は……勝負でもするか？」

ほとぼりがある程度冷めたあとで、不意に思いついたことを提案してみる。

「勝負？」

「そ。射的、金魚掬い、型抜きの本勝負でどう？」

「面白そうね。いいわよ。でも、勝負だから勝った方には景品が必要ね」

それは一理ある。景品があつた方がやる気も上がるしね！

「いいよ。じゃあ、景品は——」

「〃勝った方は負けた方に何でも一つ命令できる〃でどう？」

「……互いに可能な範囲でならね」

釘を刺しておかないとどんな理不尽な命令をさせられるかたまつたもんじゃない。

「交渉成立ね。早速一本目の勝負と行きましょう」

射的での勝敗の決め方は、五発のうちに相手よりも大きなものを手に入れた方が勝ち、となった。

先攻は俺からだ。

「狙い撃つぜ！」

倒しやすそうな写真立てを狙って撃ってみた。

一発目、二発目、三発目で下の方を狙って撃ち続け、徐々に後ろに下げていき、四発目で落とすことができた。

「おめでとさん。景品の写真立てだ」

射的屋のおじさんから景品を貰い、最後の一発を使い切る。流石に一発で倒れるものは少ないようで、景品は手に入らなかった。

「次は私ね」

俺と交代し、万由里が銃を持つ。

「私は一発の銃弾。銃弾は心を持たない。故に、何も考えない。ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

万由里が引き金を引くと、コルク弾が招き猫を吹き飛ばした。

「……………は？」

「……………おい！今の霊力使ってただろ！」

「ルールで禁止にしてないから使ったまだよ」

ハッ、となつて万由里に文句を言うが、当の本人は素知らぬ顔。

「常識的に考えろよ！」

「常識……………？」

「なんで今初めて聞きました、みたいな顔してんの!？」

「それよりも屋台の前で騒ぐ方が常識的にどうなのかしらね？」

「ぐっ……………」

「正論かよ……………！」

「ともかく私の勝利ね。次の戦いをしましょ」

続いて、金魚掬いだ。今度は霊力や魔力などの力は一切禁止を付け加えた。

「といつても勝負は一瞬で着いてしまった。」

「あんたの体質のこと忘れてたわ……………」

万由里が頭を押さえながら呟く。

俺の体質、それは動物に好かれやすいことだ。それは魚にも効く。

その結果、ポイを使わずとも魚がプラスチック製のカップに飛び跳ねて入って来たのだ。

「これで一勝一敗だ。次の勝負で嫌でも決着が着くな」

「最後は型抜きね」

型抜きをやってる屋台に向かった。

勝敗の決め方は、二人共同型を抜いていき、相手より早く、そして綺麗に抜けた方が勝ち。

「型は……これでいいか？」

「いいわ」

俺が選んだのは、難易度が最上級であろう『祭』と書かれた型だった。

屋台の人にスタートの合図を出してもらい、二人揃って神経を限界まで研ぎ澄ませる。

ムツズいッ！

開始から僅か十秒で難しいと感じた。少しでも力んでしまえば、壊してしまう。返って力を抜きすぎてしまっても壊せない。

隣を盗み見たら、万由里も苦戦しているのか、その表情は硬い。

………よし！

一度、深呼吸をしてから型を抜いていく。

最初は周りを抜いていき、最後に文字の中の方を抜いていこうと決めた。

始めてからどのくらい経ったのかはわからないが、決着が着いた。

『あ』

俺と万由里が揃って気の抜けた声を発した。

型が壊れてしまった。隣を見れば、万由里の型が壊れていた。

「あちゃー、残念だったな。あとちよつとで終わるところだったのに」  
見ていた屋台のおじさんも気まずそうに俺達を見ていた。

「まあ、今のは仕方がねえよ。なんせ———「花火」が始まっちゃまったんだからな」

そう、俺達が型を壊してしまった原因は花火が打ち上がり始めたからだ。

周囲の音は集中してる間は気にならなかったが、花火の轟音には驚いてしまい、力加減を誤り、粉々に壊すという結果になった。

「この場合は引き分けでいいんじゃないやねえか？」

おじさんの意見が的を射ているものだったので、この勝負は引き分けとなった。

「花火、見に行くか」

「そうね。型抜きに集中しすぎて代わりの勝負なんて到底できないだろうから」

人気の少ないところにあつたベンチに座り、夜空に浮かぶ〃火の花〃を観る。

海で俺が打ち上げた花火よりも多色で綺麗だ。

「……ねえ」

「ん？」

花火が終わり、万由里が口を開けた。

「勝負はつかなかつたけど、私のお願ひ聞いてくれない？」

「内容次第では断るからな」

「そこまでの願ひじゃないわよ」

人を何だと思ってるの？ と心外だと言わんばかりに口を尖らせていた。

「で、万由里の願ひは何？」

「キスよ。私からじゃなくてあんたから」

「……わかった」

一泊置いてから応じる。

「目、閉じてて」

「うん」

目を閉じたのを確認すると、万由里の口——ではなくおでこに口づけをした。

「はい、キスしたよ」

「……卑怯ね。確かに私はどこにしろって指定はしなかったけど、今のは卑怯だわ」

誰が見ても不満だとわかるぐらいの表情で訴えてきた。

「口にするのは恋人になつた人にだけだよ」

「はあ……そんな気がしないでもなかったけど……」

万由里もなんとなくわかっていたのか表情を元に戻した。

「……………いつか絶対に振り向かせてやるんだから」

「ん？ 今何か言った？」

万由里が何か呟いたようだったが上手く聞き取れなかった。人気がない静かな場所なのに聞こえなかったということは、かなり小さい声だったということだ。

「何でもないわ」

「そう？ まあ、万由里がそう言うならいいさ。帰ろっか」

自然な流れで万由里と手を繋ぎながら龍神家へと向けて歩き出した。

## 閑話 親友と動き出す者達

閑話 親友と動き出す者達

8月31日、深夜の零時。

たった今、夏休み最後の日が始まった。

そんな真夜中だというのに、二人の少年が海鳴の街が一望できる小高い丘の上にあるベンチに並んで座っていた。

「話ってなんだ？」

最初に会話を切り出したのは銀髪の少年だ。

「頼みたいことがあるんだ」

「頼みたいこと？」

「うん、親友の君にしか頼めないこと」

「……わかった。引き受けよう」

「まだ内容も言っていないのに引き受けちゃうのか？」

あつさりと承諾した銀髪の少年に、もう一人いる黒髪の少年が項垂れる。

「お前の頼みなら断る理由がない。お前が俺の立場ならそうするだろうしな」

「そっか。そう言われるとちよつと照れるなあ……」

銀髪の少年に真顔でそんなことを言われたが、黒髪の少年はまんざらでもないようで気恥ずかしそうに頭を掻いていた。

「それで？」

「あ、ああ、そうだった。頼みたいことっていうのはさ……」

黒髪の少年は言うのを躊躇った。

しかし、今更「やっぱなし」なんてことは少年の性格からしてほぼほぼ無理なことだ。

「……もしも……そう、これはもしもの話なんだけど………俺がこの世界から居なくなったら、皆のこと頼んでもいい？」

「……………それは何れ俺達の前から居なくなる、そういうことなのか？」

「それは……わからない。でも、もしかしたらそうなるかもしれない。」

だから今のうちに頼んでるんだ」

いつも明るく活発な少年の瞳は普段からは考えられないほど弱々しく見えた。

彼がいたから自分は変わった。

黒髪の少年に言えば否定されるかもしれないけど、銀髪の少年にとって、彼は闇の中に光を灯してくれた恩人だ。

だから、そんな彼の力になれるのなら喜んでなんでもするぐらいの気持ちだ。

「そうか。もしも居なくなつたとしてお前は帰ってくるのか？」

頼みを聞くことも大事だが、そちらも重要なことだ。

「ごめん、それもわからない。この先どうなるかはわからないから」

本条二亜の天使——〈<sup>ラジエ</sup>囁告篇帙〉の能力は全知。しかし、未来に起こることだけは何もわからない。

「そうか。お前の頼みは引き受けた」

銀髪の少年はあやふやで曖昧でしかない黒髪の少年の頼みに反論することなく引き受けた。

「ありがと。わからないってばかり答えてたけど」

「構わない。言いたいことは伝わったからな。それと明日の始業式が終わったらラーメンを作ってくれないか？」

「お安い御用さ。任せてよ」

二人は他愛もない会話をしながら丘を降りて自宅に帰っていった。

とある世界の一軒家で桜色の長髪の女性が料理をしていた。  
その手つきはとても手慣れていて、プロ顔負けの腕だと誰もが評価するだろう。

——ピンポン。

彼女が料理をしている最中に玄関のチャイムがなった。

料理する手を一旦止めて、玄関の扉を開く。そこには銀髪金眼でスタイルの良い女性が立っていた。

桜色の長髪の女性のスタイルもかなり良いのだが、銀髪の女性と比べてしまうと少しだけ霞んでしまう。

「お久しぶりです」

「ええ、久しぶりね——天照」

訪ねてきた銀髪の女性の正体は天照だった。

「今日は何か用？」

「はい、とても重要なお話があります」

「重要なお話」。その単語を聞いた瞬間、桜色の髪をした女性は表情を真剣なものに変えた。

「ここで話すのもなんだから、家の中に入って」  
「わかりました」

天照は「お邪魔します」と一言断ってから家の中に入り、リビングのソファアーに腰を下ろす。

「内容は彼のことであつてる？」

「ええ、合っていますよ——美桜様」

桜色の長髪の女性——美桜は自分の知りたいことだとわかると、真剣だった表情を少しだけ緩めた。

「もうじき彼を迎えに行く機会が訪れます。その時に美桜様を彼のいるところへと送ります。本日の要件はそれだけです」

「わかった。……彼の様子は怎なの？」

「申し訳ございませんがそれは教えられません」

まただ。美桜が天照に彼のことを聞く度に同じ答えが返ってくる。美桜が知っていることは彼が生きていること、異世界にいることの二つだけだ。

生きていると知っているだけマシなのだが、やはり不満がないわけではなし、それ以上のことを知りたいと思ってしまう。

だが、天照は頑なに拒み続けるのだ。

美桜は天照に聞かれないように小さくため息を吐いて、天照を玄関まで送る。

「次にここに来るときは彼を迎えに行くときです」

「わかったわ。あ、一応聞いておくけど私だけが迎えに行っているの？」

「人数については四、五人までなら問題ありません。それでは失礼します」

「ええ」

美桜は短く答えて、料理を再開する。

「あれからもう四年……。時間が過ぎるのは早いなあ……」

料理をしながら一人呟く。

彼が自分の前から居なくなってから四年の歳月が経った。

「最初の頃は相当荒れたっけ」

最初はいないことに違和感が拭い切れなかった。

何時しかその違和感に慣れていき、彼はもういないと認めた。

「でも、生きてるって聞いてまた会えるって希望が持てた」

天照から聞かされて自分や彼の知り合いは皆、歓喜に震えた。その時の喜びようと言ったら、それはもう凄まじかったものだ。

「ようやく……。ようやくあなたに会える……」

そして、その時は近い。

「待っててね、ハル君」

THE GEARS OF DESTINY編  
GODは神じゃないらしいです！

GODは神じゃないらしいです！

Side空

夏休みから早二か月と少しが経ち、日付は十月に入り、季節は秋に移り変わっていた。その間、毎日のように変な夢を見ては内容をすぐに忘れる日々が続いた。体に異常はないから然程気にしてないが。

それと、夏休み明けから朱乃が一つ上の学年に転入してきた。俺達のクラスでもその話題で持ちきりで、朱乃がヴァーリと結婚すると言ったときは男子の視線がものすごく殺意に満ちていたのは今でも覚えてる。

そう言えば、今日の放課後は愛衣に呼ばれてたっけ。

呼ばれたのは俺だけじゃなくて、あかりや雄人を含めた転生者が集まるらしい。

「フェイト、アリシア、今日は先に帰ってて。あと十香達に帰るの少し遅くなるかもって伝えておいて」

『うん、わかった』

「はやてもそうしてくれる？」

「ん、了解や」

二人は揃って返事をしてなのは達と教室を後にした。

残ったのは俺、愛衣、あかり、雄人だ。

「ここだと誰かに聞かれそうだから屋上に行こうぜ」

「そうだね」

雄人の意見に賛成し、四人で屋上に上がる。

「それで今日転生者を集めた理由は？」

「これから起きるイベントのことよ」

「何？ まさか、またなのは達が巻き込まれるの？」

「そのまさかだよ」

まあ、主人公のいないところに事件は起きないよね……。

「次に起こるのは、GODっていうゲームの話だ」

GOD?・

「神——」

「じゃないから安心してね」

あ、違うんですね。紛らわしいタイトルだなあ。

「正式名称は“THE GEARS OF DESTINY”。空君が前に戦った闇の書の闇——マテリアルズの事件から三か月後の話で、マテリアルズが関わってくるんだよ」

「え、ってことは……あの子たちのまた会えるの!?!」

あかりの話し方だとそういう風に聞こえる。

勿論、思い出すのはなのは、フェイト、はやてに似た女の子達三人だ。

「名前、ちゃんと考えてくれたかなあ?」

『(三人の名前知ってるけど言わない方がいいか……)』

「それで……あー、いや、今回はいいや。ネタバレは面白くないから聞かないことにするよ」

無印、A'sはあらすじを聞いたが、今回は聞かないことにした。

三人共疑問に思ったようで、不思議そうな顔で俺を見ていた。

「んー多分原作知識が中途半端にあると、予想外の時に対処できないかもしれないのは嫌だから」

琴里が以前に行っていたが、この世界は色々混ざっているそうだな。そんな世界で原作通りに行くとは思えない。というか、実際にこれまで原作通りに行っていないのも証明されているのだから。

「確かにそうだな。じゃあ、今日はここまでにしておくか」

流れるに今ので解散となったように愛衣と共に帰宅した。

Side out

天照が美桜の家に来た。つまり、その時が来たということだ。  
「準備はいいですか？」

「勿論よ。この日をずっと待っていたんだからね」

美桜を含めて四人が彼を迎えに行くことになった。

「天照様、私達が行くところはあいつが—— “遙” がいる場所の  
近くなのですか？」

メンバーの一人、長い黒髪をポニーテールにした女性——黒曜こくよう  
朔夜さくやが天照に敬語で問いかける。

「そのはずです」

「容姿は変わっていませんか？」

次に話しかけたのは、朔夜と同じくらい長い黒髪の後ろに花飾りを  
つけている女性——朝馬香澄あさまかすみ。朔夜とは従姉妹の関係で容姿は似  
ている部分が少しある。

「体が小さくなっていますが、見ればすぐにわかるかと」

「向こうでフラグを建てていなければよいのですが……」

「無理ね」「無理だな」「無理よ」

「ですよね……」

そして最後のメンバー、メイド服を着た白金髪プラチナブロンドの女性——リ  
サ・アトラ・ヴェルが美桜達の即答に力なく項垂れる。

その光景には天照も苦笑いだ。

「そろそろ行きましょ」

美桜がそう言うと、皆は揃って頷いた。

「頼むわよ、天照」

「はい」

天照が手を振りかざすと、空間が歪み、異世界へと繋ぐゲートが開く。

「それではお願いします」

天照の声を背中で受け、四人はゲートの中を歩き出した。

### Side空

「おい、龍神！ どういうことだ！」

「どうということって言われても……」

はい、ただいま絶賛屋上で絡まれています。相手は………ま、マサオ君だっけ？ なんか六月から休学していたらしくて転生者の集まりの翌日に学校に復学してきた。

どこかで見たような覚えがあるが名前が思い出せない。

「とぼけるな！ お前が何かしたんだろ!？」

がなり立てる赤髪の少年を宥めるが、治まる様子がない。

「一旦、落ち着こうよ……マサオ君？」

「誰がマサオだ！ 僕は正田！ 正田輝義だ！」

あ、そうだったそうだった。

「ごめんごめん。マサル君」

「だから違うと言ってるだろうが！　ワザとか!?　ワザとなんだな!?!」

「人聞きの悪いこと言わないでくれるかな？」

「ご、ごめん……って、どうして僕が謝らなくちゃならないんだ！」

「そんなの俺に言われても」

「お前の所為だろうが！」

「で、どういうことってどういうこと？」

「いきなり真面目になるな！　いや、もういい……。僕が言いたいのはどうして“八神はやて”が学校に来ているのか聞いてるんだ」

頭を掻きむしりながらマサアキ君は再度尋ねてきた。

「はやてが学校にいちや悪いの？」

「そういうことじゃない。だが、彼女は車椅子だったはずだぞ。なぜ自分の足で立っている？」

「そんなの足が治ったからだけど？　それ以外にある？」

あれ？　はやてと面識あったけ？

ふと疑問に思ったが、すぐに答えが出た。

「な、治っただど!?!　じゃあ、A、S編はどうなった!?!」

彼も原作知識を持つ転生者の一人だからだ。

「あ、それなら夏休み前半で終わったよ」

「なツ!?!」

あらら、マサミ君がすごく驚いた顔しちやってるよ。

「そ、そんな……僕の活躍が……」

急に俯いてぶつぶつと何かを呟きだした。

理由はちゃんと話したからもういいかな。かーえろつと。

未だにぶつぶつと言ってるマサト君に何も告げずに屋上から出ていった。

教室に戻ると、皆がいた。

「あれ？　皆帰ってなかったの？」

「空君が心配で……」

なのは達が心配そうに駆け寄って来た。

「大丈夫だよ。えーつと……マサオミ君だっけ？ 彼にはなにもされてないよ」

『（……マサオミ君って誰？ ……あ、正田（君）のことか）』

「？ どうかした？」

皆の反応が変だったので聞いてみたが「なんでもない」、と揃って首を横に振られた。

「さ、帰ろっか」

俺達は朱乃を新たに加えてたメンバーで帰宅したのだった。

「朱乃ちゃん、ヴァーリ君と近すぎるんじゃない？」

「別にこれが普通よ。だって婚約者フィアンセだもの♪」

付け加えると、若干ギスギスしながらの帰宅がここ最近多くなっ  
た。

姉妹喧嘩はほどほどにしましょう！

姉妹喧嘩はほどほどにしましょう！

Side空

ある日の休日。

七罪と互いに背中を預けながら本を読んでいた時に、クロノから連絡が入った。

『空、緊急事態だ。地球に未知の魔力運用技術の反応をキャッチした。急いで調査に向かってくれないか？』

「りょーかい。他の皆は？」

『僕は別の仕事が入っていて当分は行けそうにない。その他も管理局で仕事をしているものがほとんどだ。すまないが、現状は君達でどうにかしてくれないか？』

「わかった」

クロノとの通信を終え、出かける準備をする。

「……あまり無理すんじゃないわよ。空がケガするとわた……四糸乃が悲しむから」

素直じゃないなあ……と思いつつも七罪なりの優しさに思わず笑みが零れる。

「うん、行ってくる！」

その場でセットアップして、転移魔法陣を展開した。

転移した先で近くに魔力反応を探知したので、そこに向かってみると二人の少女が言い争っていた。

片方はえんじ色の髪を三つ編みにしていて青い服を、濃いピンク色の髪の方は緩いウェーブがかかっていて赤い服を着ていた。

二人の話を遠くから倍加をした視力と聴力でこっそり聞いてみると、えんじ色の髪の少女は「アミタ」という名前で、ピンク色の髪の少女はアミタの妹で「キリエ」という名前だと分かった。

「なるほど、妹の非行を姉が説得しようとしてるってことか」

きつと、妹さんは盗んだバイクで走りたい年頃なんだろうね。

《簡単に言うそう見えますが、実際もつと根深いものだと思います》  
「んー、もう少し様子を……っておい！いきなり戦闘始めちゃうんですか!？」

様子を窺おうとしたら、二人は戦い始めてしまった。

アミタさんの方が押してると思いきや、いきなり動きが遅くなつた。

「ブレイブ、今のは……?」

《恐らく、攻撃の中に動きを妨害するものがあつたんだと思います》

そのまま、動けないアミタさんの隙について、キリエさんはどこかに転移してしまった。

とりあえず、アミタさんの状態を確認しないと。

「すみませーん」

「は、はい！」

「ケガ、大丈夫ですか？」

「え、もしかして今の戦闘見ていたんですか？」

「はい、流石に家族のことに踏み込むわけにはいかないので様子を見させてもらいました。……いきなり戦いになったときは驚きましたけどね」

本来ならば止めるべきだったのだろうが、事情を聴かずに止めて「ただの喧嘩でした」なんて言われたら恥ずかしい思いをするだけだ。「す、すみません……」

怒っているわけじゃないが、さっきの会話から考えると真面目な性格であろうアミタさんはシュンと縮こまってしまった。

「それで一応事情聴いてもいいですか？ 踏み込むつもりはなかったんですけどただの姉妹喧嘩には見えなかつたもので」

「すみません！ 事情を説明したいのですが、当方時間がありません！ 私は妹を——キリエを止めないといけないのでこれで失礼します！」

え？

事情を聴こうとしたら逃げられ————することはなかった。  
何かに阻害されるように彼女の動きが止められた。

この人、妹さんに動きを阻害される弾を当てられてなかったっけ？  
「えーっと、もし良かったら治しましょうか？」

「出来るんですか!？」 それでしたらぜひお願いします！ あ、でも  
……治療術かAC93系の抗ウイルス剤が必要なんです」

ウイルス剤……？ そんな薬知らないんだけど……まあ、とりあえ  
ず聖槍を使えば治せるはず。

トウル・ロンギヌス バランス・フレイク  
「黄昏の聖槍、禁手化！」

「眩しい……！ って、え!？ なんですかその姿!？」

眼を開けた先にいた俺の姿が変わっていたことにアマタさんはひ  
どく驚いていた。

「詳しいことは言えません。でも、これならあなたを治せます。——

ヘブンズ・ミラクル  
「聖槍龍の奇跡!」

六対十二枚の黄金の翼が少女を包み込み、十秒ほどで解放した。

「体調はどうですか？」

「……う、ウソ……治ってる……？ 一体……」

「そんなことよりも妹さん追わなくていいんですか？」

「ハッ、そうでした！ ありがとうございます！ このご恩は一生  
忘れません！ ——天使様!」

元気になると、アマタさんはもの凄い勢いでキリエさんが去って  
いった方向に飛んで行った。

「て、天使?」

『いや、その姿はどう考えても天使だろ』

それもそうか。

ドライグ達の呆れながらツッコまれて納得した。

《マスター、追わなくていいのですか?》

「追うよ」

アマタさんを追いかけかけた。戦闘を考慮して倍加は使わずに追  
いかけた。

俺がアマタさんに追いついたのは、アマタさんがキリエさんに追いついたのよりも数秒遅れだった。

キリエさんははやてとリインフォースさんと話していたようだ。

「アマタ!? どうして動けるのよ!?」

「その天使様に治してもらいました!」

アマタさんが俺を指差す。

「なに余計なことしてくれてんの!?!」

キリエさんが俺に憤慨するがさりと受け流す。

だって、助けてって言われたから助けただけだから俺は悪くないよね。

《マスター、空の様子がおかしいです》

ブレイブに言われて上を見上げれば、天候が不安定だった。

あれは、まさか……!?!

そして、ついに姿を現した。

「ふふふ……ははは……はーっはっはっはッ! 黒天に座す閻統べる

王! 復ッ! 活ッッッ!」

銀色の髪に緑色の瞳に黒いバリアジャケットを纏った少女。

「漲るぞパワー! 溢れるぞ魔力ッ! 震えるほど暗黒ウウツッ

!」

その少女とは三か月前に出会い、戦った。

「久しぶり、王様!」

はやて似の少女に手を振りながら近づくと、向こうは気が付いてくれた。

「む? 我を呼ぶその声は……空、貴様か。それに我のオリジナルに融合騎と……あとはなんだ、その頭の悪そうなのと頭の固そうなのは何?」

「空君の言った通り、ホンマに私そっくりやなあ……」

「ですね。双子と言われても信じてしまいそうです」

「ちよっと! 頭の悪そうなのって私のこと!?! 確かにアマタは超が

「十個着くくらい頭が固いけども！」

「ギリエ!? あなたなに言ってるんですか!?!」

姉妹喧嘩を始めた二人をよそに王様に話しかける。

「三か月前の宿題覚えてる?」

「もちろんだ。ちゃんと考えてきたぞ」

「おおっ、そっかそっか! じゃあ、聞か——」

「その前に我と戦え。生まれ変わって手に入れた、王たるこの身の無敵の力! 貴様に見せてやる!」

瞬間、王様から黒い魔力が溢れ出す。それだけで以前よりも強くなったことがわかったことが嬉しくなり、思わず笑みが零れる。

「いいよ、その挑戦受ける。言っとくけど、俺も三か月前よりも強くなってるから」

「ふん、ならば我がそれを超えるだけのことだ! 跪けツ!」

バインド!?

王様が手を翳すと黒いリングが俺の体を拘束した。

「驚いておるな? だが、先ほど言ったであろう? 生まれ変わったとな!」

「でも、これくらいなんともないさ」

「何ッ!?!」

「——煌天雷獄、禁手化!」

三か月の間に禁手に至った神器——煌天雷獄。

禁手の名前は「天獄龍の煌雷星」。

髪と瞳が薄い金色に染まり、背中からは六対十二枚の黄金の翼、頭の上には三つの光輪。バリアジャケットもそれに合わせて黄色に変わる。

「よいしょ」

バインドを凍らせた後、軽く力を込めて壊す。

「雷よ、落ちろ」

突如、王様の頭上に雷の球体が出来て、そこから雷が落ちてきた。

「甘いわ!」

だが、強くなっている発言は伊達じゃないようで、王様は防御魔法

で防ぎきった。

「それならこれはどうかかな？」

「ツ!？」

次は雷に加え、下から氷の刃を大量に召喚し、王様に向けて発射。

これは防ぎきれないと確信したとき――

「待てえーいっ!」

「王はやらせません」

青い雷が俺の雷を相殺し、赤い炎が氷の刃を溶かした。

アハハ、あの二人も登場か。

片方は元氣一杯で姿はフェイト似で、もう片方はお淑やかでなのは似の少女達だ。

「あーっはっはっはっ! 王様だけ蘇って、僕らが蘇らない道理はないッ!」

「この姿でお目にかかるのはお初になりますね、王」

「貴様ら、まさか……「理」<sup>シユテル</sup>と「力」<sup>レヴィ</sup>か!」

「……? ああ、そう言えば、私達はそんな名前でしたね」

「そうだっけ? 僕はあんまり覚えてないや。でも、今は自分で考えた名前があるからね!」

「私もです。彼に、龍神空に宿題を出されましたからね」

俺の方に視線を移しながらなのは似の少女が言う。

「王様、リベンジはまた後でいい?」

「ああ、この空気では仕方あるまい。……ところで、貴様らが実体化するにあたって、ここらの魔力システムの共有リソースをかなり食い荒らしたのか?」

「うん!」

「美味しく頂きました」

二人は自信満々に答えた。

「そのせいで空に負けてるところだったわ!」

しかし、その返答が王様にはお気に召さなかったらしい。

「でも、僕らが助けたからいいじゃんか」

「そうです。感謝こそされども、非難されるいわれはないです」

「阿呆か貴様らッ！ 復活するなら時と場所を選ばんか！ おかげで  
我のリベンジが出来なくなつたわアッ！」

「知らないよ！ というかりベンジなら僕だつてしたいよ！」

「私もです」

『二人ともリベンジに燃えてますね。モテモテじゃないですか、空さ  
ん』

それって喜んでいいモテ方なのかな？

「ですが、我々も好きでこのタイミングで復活したではありません  
「どういうことだ？」

「何かに呼ばれた気がしたんです。まるで無理矢理に時を動かされた  
ような」

無理矢理……？ どういうことなんだろう？

事情を知りたいのだが、本人達が知らないのではどうしようもな  
い。

『あッ!?!』

はやて、リインフォースさん、アミタさんの悲鳴が上がった。

「キリエ、あなた……!」

キリエさんが持っている剣で三人を斬つたのだろう。

「ごめんなさいねー。ホントはその天使君も斬ろうとしたんだけ  
ど、厳しそうだからやめたの。で、あのね、王様？ ちよつとだけ、私  
の話を聞いてくれない？」

「聞かぬ。失せよ。下郎と話す口は持たぬのだ」

「それがシステムU—D—— 「砕け得ぬ闇」の話だとしても？」

砕け得ぬ闇？ ダイヤモンドは砕けない的な？ ドラララッ！

とか言いそうなクレイジーなキャラでも出てきたりして。

「……砕け得ぬ闇……」

「それって僕らがずっと探してた大いなる力……」

「そう♥ やっぱりあなた達もまだ見つけてないのね？」

「え、君知ってるの？ 砕け得ぬ闇の目覚めさせ方！」

最早、砕け得ぬ闇というのが何なのかすら知らない俺達はすでに蚊  
帳の外だ。

前にそんな単語が出てきたような……気がする。

「よせレヴィー！ こ奴は得体が知れぬ」

王様の言う通りだ。三人が知り得ないことをどうしてキリエさんが知っている？

「あらーん、そんなこと言わないで♪」

「話を聞いただけでもいいのでは？」

「そうだよ、聞いただけでもしようよ」

「フン、臣下の声を聞くのも王の務めか。よかろう、話せ」

「いいわよ。あ、でも、ここじゃ邪魔が多いわ」

「では、場所を移しましょう。活動の拠点に目星をつけてあります」

「シユテるん、さっすがー♪」

うん、流石「理」のマテリアルだよね。

フェイト似の少女——レヴィの発言に心の中で賛同する。

「だが、その前に……」

キリエさんの方を向いていた王様が俺の方に視線を向けなおす。

「我が名はディアーチェ。この名をしかと覚えておくがいい、空」

「あ、じゃあ、僕もー！ 僕は……なんて名前にしたっけ？」

この前会ったときは殺意ばかりだったのに、今はその……アホの子になつてない？

「いや、知らないけど……」

「あれー？ おつかしいなー？ まあいいや。カッコいい名前だから、とりあえず、今はレヴィにしとくよー！」

それでいいの？ まあ、本人がいいならそれでいいんだけど……。

「私もレヴィが言わないならシユテルでいいです。一応、以後お見知りおきを」

「うん、三人ともよろしくー！」

「ああ、こちらこそ——ではない！ 誰が貴様と慣れ合うと言った？ 我々は元より敵だ！ 我々が復活したからには、貴様はもう終わりよー！」

「そうだぞー！ 終わりだぞー！」

「皆様に近い内改めてご挨拶に上がります」

「待つてろよー！」

「空……とついでに子鴉も守護騎士どもも、一人残らず喰らい尽くしてくれるわー！」

「アミタもバイバーイ」

「キリエ……ッ！」

アミタさんが止めようとするも届かず、四人はどこかに転移してしまっただ。

そして、彼女達を追いかけてアミタさんも転移した。

「行っちゃったね」

「空君はどうして止めなかったんや？」

「あの子たちよりもはやとリインフォースさんの方が大事だから

さ」

トワイライト・ヒーリング  
聖母の微笑みを出して、二人のケガを癒す。

「そ、そうかいな……」

はやてはなぜか頬を赤らめてそっぽを向いてしまった。

「ありがとう。君らしいな」

リインフォースさんは嬉しそうに、それでいてどこか誇らしげにお礼を言ってきた。

「さて、これからどうしたもんか……」

あの子たちを探そうにも手掛かりが何一つない。しかし、シユテルは挨拶に来ると言っていた。待つていれば向こうが勝手にやってくるということなら、こちらは待つていれればいいだけだ。

「一度、地球にいる魔導師と合流しよつか」

「賛成や」

「私もそれが最善だと思う。情報を伝えねばな」

俺達は頷きあうと、皆と合流することになった学校の屋上に移動を始めた。

「————つて感じ」

皆と合流し、事の詳細を伝えた。

「探すの大変そうだな」

「確かにね……そんじゃ、皆頼んだよ！俺は昼寝するから！」

『うん（おう／ええ）！……………ん？』

皆が一斉に首を傾げる。

「あんた一人だけさぼろうとしてるわけ!？」

やはりというかなんというか、当然の如くアリサがツツコンでできた。

「今、眠いんだよ！ 悪いか!？」

「開き直ってんじやないわよ！ 悪いに決まってるでしょうが！ どうしても寝たいんだったら私もあんたと一緒に寝るわ！」

「お、おう……………へ？」

アリサさん、いきなり何言ってるんだ？

『んなツ!？』

「（よし、勢い任せに言ってみただけど上手くいったわ!）皆、あとは頼んだわ。空、行くわよ」

『させるかあッ!』

なのは達が帰ろうとする俺とアリサを引き留めてきた。

「もしかして皆も寝たいの?」

『えッ!? あ……………えつと……………』

「全くしようがないなー」

『いいのッ!』

「いいよ。俺はもう少し探索するから」

『え……………?』

「あ、俺のことは気にせず寝てくるといいよ。無理は良くないからね」

飛行魔法を発動して、屋上から離れていった。

しばらくして、なのは達の叫ぶような声があったが、小さ過ぎて良く聞こえなかった。

「さてと、おかしい反応は……………あっちか」

先ほどと同じような反応があったので、そこに急いで向かうことにした。

未来からの来訪者です！

未来からの来訪者です！

Side空

皆、真面目に聞いてほしいことがあるんだ。

——突然、空から女の子が降って来た。

って言ったら信じる？ ……おい、今誰だ笑ったの。嘘じゃないから！ ホントのことだから！ しかも二人だから！ 妄想乙とか言うな！ ありのまま起こったこと話してるだけだから！ ……何が起こっているのかはさっぱりなんだけど。

「あ、あのー……大丈夫ですか……？ なんだか、すごい表情してますけど。（あれ？ この顔、誰かに似てる……）」

金髪オッドアイの少女に心配される。歳は同じくらいだろう。傍にはウサギが浮いている。

この子、オリヴィエさんに似てるな……。

その本人は家で万由里と一緒にいて、珍しいことに俺と共にいない。

「もしかして、現地の方でしょうか？ （この方……誰かに似ているような……?）」

もう一人は碧銀の髪でオッドアイの少女だ。歳は俺よりも年上に見える。彼女の傍にも猫？ 虎？ みたいなのが肩に乗っかっていた。

「だ、大丈夫です。それから、俺はこの街の住人です。名前は空。龍神空っていいいます」

『え……!?! パパ（空さん）!?!』

「……………は？ パパ？」

『パパアッ!?!』

ドライブ達も驚きの声を上げる。

……物凄く聞き捨てならないことを聞いてしまったんだけど。

ともかく、今はそれよりも先に彼女達の事情を優先して聴くことにした。

「えーつと……つまり、君達は未来から来たってことでオーケー？」

「はい、私達の話の合わせるとそうなるかと……」

頭の痛い話だ。

彼女達がいた時代は新暦79年。俺のいる時代は（ブレイブ調べで）新暦66年。

要するに、彼女達が未来から転移したのは間違いないらしい。

異世界じゃなくて、異世界の未来からか……。

彼女達は学校の帰りでいきなり頭上が光ったと思ったら、海鳴市の上空に転移していたそうだ。

二人はこの世界の住人ではないらしく、ミッドチルダの学校に通う生徒。

碧銀オッドアイ——右眼が紫で左眼が青——の

少女の名前は——アインハルト・ストラトス。

そこまではまだ許容できる。それよりも……もう一人の子だ。

そして、それ以上に頭が痛いのは金髪オッドアイ——右眼が

緑で左眼が赤——の少女だ。

彼女の名前は——龍神ヴィヴィオ。

未来の俺の娘……らしい。

「パパの九歳の頃ってこんな感じだったんだ。私よりも年下なのに頼りになりそう！」

「そうですね。それに、未来の空さんはカッコいいですが、こちらは可愛い、と言った方がしっくりきます」

そんなこと言われて、どう反応しろと？

『未来から来た人と関わると未来が変わる可能性もありますが、最悪六喰さんの能力で記憶を封じてしまえば問題なさそうですね』

「（あー、なんかの本にそういうの書いてあったっけ……）」

ヤハウエが言った通り、最悪の場合記憶を封印してしまえば大丈夫

だろう。

さてと、先ずはこの二人をどうするか……なんだけど。

「俺と一緒に――！」

一緒に来てもらおうとしたら、先程と同じような魔力反応をここからそう離れてはいない地点から感じた。

「また、私達と同じように誰か来るのかな……？」

「それはわかりませんね。ですが……」

アインハルトさんが俺の方を窺ってくる。

「一応、確認しないとね。悪いけど二人も来てくれる？」

『うん（はい）！』

二人は元気よく返事を返してくれた。

「九喇嘛、行くよ！」

『応ッ！』

両手を合わせて九喇嘛の魔力を引き出す。すると、体が橙色の魔力に包まれ、黒いラインや勾玉が刻まれる。

「うわっ、九喇嘛モード!？」

「いつ見ても綺麗で明るいですね」

二人は未来で知ってるのか。

「飛ばして行くよ！」

二人のそれぞれ違った感想を聞きつつ、魔力の腕を作って二人を優しく包み込み、走り出す。

反応があつてから一分もしないで目的地に到着した。九喇嘛の力を解除して、二人を地面に離す。

「は、早い……！」

「俺の中で最速だからね」

「それなのに、全く酔いませんでした。流石は空さんです」

「そう？ 気を遣うのは当然でしょ？ それが女の子なら尚更じゃない？」

『(そういう気遣いがフラグ建てるんだらうな……)』  
ん？　なんか二人が一瞬遠い目をしたような……。

「あ、パパ、あそこに誰がいるよ！」

ヴィヴィオが指で指示した方向に少年と少女がいた。

「うん、わかった。わかったからパパは止めてね」

「え、なんで？　パパはパパでしょ？」

「いや、俺はまだ子供だから。パパって言われるような歳じゃないから」

未来から来たヴィヴィオからすれば俺はパパなんだろうけど、今の俺は子供。

「じゃあ、なんて呼べばいいの？　空？　空君？　空さん？　うーん、

どれもイマイチだからパパがいい！」

これは何を言っても無理そうだ。出会って間もないけどそう悟った。

「でしたらヴィヴィオさん、私のことはママと呼んでもいいですよ」

真顔でサラリとすごいこと言い出すアインハルト。

「アハハ、ちよつと何言ってるのかわからないですね、アインハルトさん。良い病院紹介するんで行ってきたらどうです？」

ヴィヴィオは誰もが可愛いと思える笑顔で話しているが、その目は全然笑っていないかった。

「ヴィヴィオさんは相変わらず恥ずかしがり屋さんですね。私はいつまでも待ってますよ？」

「ありがとうございます。そのまま墓に入るまでずっと待ってください」

「冗談がお上手ですね、ヴィヴィオさん」

「アインハルトさんこそ」

『アハハハ』

この雰囲気、なんか触れない方がいいな……。うん、シカトしよ。未だにおかしな空気を醸し出す二人を置いて、新たにやって来た二人に近寄る。

少年は茶髪。少女は長い銀髪だ。背丈からして歳は俺達よりもい

くつか離れているだろう。

「すいませーん！」

声をかけると、二人はこつちを向いて目を大きく見開いていた。

「え、子供……って、え!?!」

「トーマー！ あの人がってまさか!」

「多分間違いないよ、リリイ！ あの人は間違いなく——」

二人は互いに顔を見合わせてから俺の方に視線を戻し、口を揃えて言った。

『空さんだ!』

どうやらこの二人もヴィヴィオとアインハルトと同じく、未来からやって来た人達のようなのだ。

「——というわけ」

現時点で分かっていることを二人——トーマ・アヴェニールとリリイ・シュトロゼックに説明した。

トーマって名前、なんだか幻想ぶち壊しそうだね。それにリリイさんの声、明日奈と似てる気がする。

「となると、俺とリリイはヴィヴィオ達よりも更に先の時代から来たということか」

「どうやったら戻れるのかな?」

「……やけに落ち着いてますね」

普通なら混乱するようなことを言ったのに、この二人があつさり受け入れたことに少々驚いている。

「え? だって空さんに、『どんなときでも冷静でいるというのは無理だ。でも、諦めるな、考えることを止めるな』って言われたことですよ? ……ってまだ出会ってない空さんなら知らないのも無理ないですね」

「俺、あなた達とどんな関係なんですか?」

「お、俺なんか敬語は止めてくださいよ！ 空さんに敬語を使われると違和感があるんで!」

トーマに恐れ多いと言わんばかりに両手を大袈裟に振られた。

「まあ、そういうことなら……。それで関係はどうなの？」

「俺の恩人で師匠です！」

恩人で師匠？ 未来の俺は戦い方でも教えたのかな？

「私にとつても恩人で師匠……というよりは学校の先生みたいなのかなあ？」

「学校の先生？」

「あ、リリイは普通の人間じゃなくて生命体型リアクトプラグと呼ばれるものなんです。この時代で言えば……ユニゾンデバイスが近いですかね」

「ふーん、そっか。未来だとそこまで進んでるんだね」

簡単に言えば、ユニゾンデバイスの未来版。

それ以上のことを知ってしまうと、未来に影響を及ぼしそうなので、二人について聞くのはそこでやめにした。

「ねえねえ、パパは未来のこともつと知りたいとか思わないの？」

ヴィヴィオが不意にそんなことを聞いてきた。

確かに知りたくないと言ったらウソにはなるが、下手に聞いて未来に影響が出るのは避けたい。

それに――

「未来のことを先に知ったって面白くないじゃんか。わからない今を精一杯生きるからこそ、人生は楽しいんだと思うな」

「……パパらしいや」

ヴィヴィオの声は呆れが混じっていたが嬉しそうだった。

「ですね」

アインハルトはそれに同意していた。

「流石です！」

「やっぱり空さんはすごい！」

トーマとリリイに関しては尊敬の眼差しを向けていた。

「未来でどうだかは置いておこうか。今は四人が帰る方法を探さないとけない」

これは俺の勝手な想像だが、キリエさん、アミタさんの二人が今回

の鍵を握ってる気がする。

「それとこれは強制じゃないんだけど、君達の存在を他の人にバレたくない。だから、俺の家にしばらく泊まってくれる？」

『うん（はい）！』

四人は俺の提案に即賛成してくれた。

今、龍神家にいるのは精霊とオリヴィエさん、シエラぐらいだろう。そう考えて移動を開始したとき、目の前から二人近づいてきた。

「……ヴィヴィオとアインハルト？」

にしては服装と体格が違う気がする。

「パパ、あれは私達が変わった状態だよ」

変身？ 仮面ライダーや戦隊ヒーローみたいなこと出来るんだね。

「それにしても、同一人物が二人……？ あ！ 皆、聞こえる！？」

『へどうかしたか？』

皆、と言っても、反応したのは雄人とヴァーリ、あかりだけだ。

他にもいるはずなのは、フェイト、アリシア、はやて、アリサ、すずか、愛衣、明日奈はまだ寝ているみたいだ。

「へ今回も前回のときのように偽物って出会ってる！？」

『ああ、会ってる。出会ったのはシグナムと雄人の偽物だった。雄人の偽物は頑丈じゃなかったな』

ヴァーリはすでに遭遇したようだ。

「へそっか。ありがと」

聞きたいことが知ることが出来たので、通信を終える。

「今回はどうやら俺達の偽物がいるみたい」

「俺達の偽物ですか？」

「うん。だから、むこうにいるヴィヴィオとアインハルトも偽物で間違いないよ。二人はここにいてるわけなんだから」

「それならとつと偽物倒しちゃおう！ セイクリッド・ハート！」

「アステイオン！」

「リリイ！」

「うん！」

『セーリット！ アーリット！』

ヴィヴィオとアインハルトのが眩い光に包まれる。

「リアクトツ！」

「オンツ！」

トーマの体にリリイが光の粒子となり、入っていく。

「モード黒騎士！」

『デイバイダー、セツト！』

数秒して光が収まると、身長伸びたヴィヴィオとアインハルト、トーマは銀髪になり、赤い痣が体に浮かんでいた。さらに三人共服装が変わっていた。

ヴィヴィオとアインハルトは拳、トーマはメカメカしい黒い大剣が武器か。

「んじや、俺も変身しよーつと。——ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手、バランス・ブレイク禁手化！」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!》

いつも通り、髪やバリアジャケットが赤く染まる。

「九喇嘛モードに続いて、バランス・ブレイカードライグの禁手だ！」

『空の娘は俺のことも知ってるのか』

そりや、九喇嘛を知ってるんだから、ドライグも知ってるだろうよ。

「娘はやめてくれよ。……確かに娘なんだろうけど」

自分の娘と言われても違和感しかない。

「さあ——」

『俺達私の戦争デートを始めよう！』

いつもの戦闘前の台詞を他の誰かと一緒に言うことは今までなかったもので、ちよつと驚いた。それと同時に新鮮でいいな、とも思った。

偽物との戦闘はあっさり終わった。そもそも戦力が五対二という時点ではほぼ決まったも同然だ。

それに加え、今回の相手はヴィヴィオとアインハルトの偽物。（本人達の希望で）本人同士でやらせ、隙を見て俺が倍加した力を譲渡、トーマが援護。それだけで決着がついた。

「霸王・断空拳、か……」

霸王イングヴァルトの技。アインハルトは戦闘中にその技を使った。とどのつまり、彼女は霸王の――

「ファンだったのか」

「違います」

ノータイムで否定された。

「パパ、アインハルトさんは霸王イングヴァルトの末裔なんだよ。先祖返りとして眼の色や身体能力が受け継がれることがあるらしいんだ。しかもその時の記憶を少し持っていてね、その記憶の中から技を習得したんだって」

先祖返り。そう言えば、オリヴィエさんの写真は見たけど、霸王の写真は見なかったな。

「へえー、じゃあ、ヴィヴィオもオリヴィエさんと関りがあるわけだ」

『……………』

あ、あれ？ 皆、急に黙ってどうしたんだ？ 俺、地雷でも踏んだ？

「詳しくは言えないけど、私はアインハルトさんとはちよつと違うんだ……」

むむむ、これはかなり複雑な事情があるみたいだね。

「無神経なこと聞いてごめんね。さ、ここが俺の住む家だよ」

『でかッ！』

ヴィヴィオを除く三人が驚愕していた。ヴィヴィオが驚かなかつたのはここに来たことがあるからだそうだ。

四人を中に入れて、リビングに案内した。

「む、空。帰ったのだな！」

リビングでは精霊達が全員いた。夕飯前だったようだ。

「ただいま、十香」

「うむ！ おかえりなさいなのだ！ む？ 後ろにいるのは誰だ？」

「アインハルト・ストラトスです。お邪魔します」

「トーマ・アヴェニールです！」

「リリイ・シュトロゼックです」

「龍神ヴィヴィオです！」

「龍神……？ もしや空と関係してるのか？」

「はい！ 私はパパの娘です！」

あ、バカ。

しかし、もう遅い。

『……は？ はあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああツツツ!?!』

夜中の街に少女達の声が木霊したのだった。

求婚されました！

求婚されました！

Side 空

前回までのあらすじ。

未来からやってき少年少女達を家に連れてきた。

十香達に自己紹介をしたのだが、俺の娘を名乗る少女——ヴィ  
ヴィオが核爆弾を落とした。

——私はパパの娘です！

その一言に精霊達は大絶叫。

おかげで（なぜか龍神家で）寝ていたなのは達も起きてしまった。

……なのは達、寝過ぎじゃないか？

それはともかく  
閑話休題

今現在、ヴィヴィオは十香達やなのは達に囲まれ尋問されている。  
皆を代表して琴里が質問していた。

「ヴィヴィオ、とか言ったわね？　あなたが未来で空の娘というのは  
間違いない？」

「は、はい」

威圧してるように見えるのか、ヴィヴィオは委縮していた。

「そう。じゃあ、次の質問。空は誰かと結婚してるのかしら？」

「そ、それは……」

「もしかして……この中にはいない？」

「えーつと……」。へパパ、助けて！

ヴィヴィオが念話で助けを求めてきた。

ここで助けを求めるの!?

「あー、その……あんましいじめないでくれない？　一応、未来での俺  
の娘らしいから。それに未来のことを聞いて、未来に影響があったら

「どうするのさ?」

『うツ……』

「パパ〜!」

涙目のヴィヴィオが抱き着いてきた。一応未来の娘だから無下に扱うこともできないので頭を撫でた。

「ごめんね、皆が迷惑かけて」

「大丈夫だよ!　パパがこうして頭撫でてくれるだけでも十分だもん!」

「そつかそつか。ヴィヴィオはいい子だね」

「えへへ〜♪」

『(こいつ……いくら娘だからってなんて羨ましいことを!)』

「空は気にならないわけ?　その子の母親が誰なのか」

耶具矢の質問はこの場にいる皆の気持ちを代弁してるものだった。

「そりや気になるさ。でも、ヴィヴィオのママなら………いや、これはいいか」

『何今の!?　ものすごく気になるんだけど!』

「これ以上は教えませーん。四人の分のご飯はすぐ作るから待っててね」

皆から逃げるようにキッチンに入り、料理を作り始めた。

『……ヴィヴィオさんはもしかして……』

オリヴィエさんが珍しく神妙そうな顔つきで聞いてきた。

「見た目で分かると思うけど、オリヴィエさんの血筋なのは間違いない。でも、聖王の血筋はオリヴィエさんで途絶えてる。となるとあの子は……」

——クローン。

それが妥当な答えだろう。しかも恐らくはオリヴィエさんのクローンだと思う。

さつき気まずそうにしていたのもそれが理由だろう。

「ま、なんでもいいさ。あの子も一人の人間として生きていることに

変わりはないんだから」

『そうですね。生まれがどうであれ、彼女は私にとって家族に違いありませんから』

「俺が『パパ』ならオリヴィエさんが『ママ』ってこと？」

『！空さんが旦那様……悪くないですね。ウフフ♪』

オリヴィエさんは眼をパチリとさせてから、途端に優しい顔つきになった。

「この際だから生き返ってみる？」

『え……？』

「俺はオリヴィエさんのことはもう家族だと思ってる。でも、いつまでも他の人に紹介できないんじゃないや寂しいから。だから……生き返ってさ、正式にこの家の家族になつてくれない？」

三か月前、俺は敬語を使っていたが、それが一切なくなった。

『……そうですね。幽霊でいるのにも相当退屈していたところですからねー。いつその事生き返って新たな人生を謳歌してみようかと！』  
オリヴィエさんが宣言したと同時に、料理が完成した。それを持つていき四人には先に食べてもらった。

「ヴィヴィオ、ちよつといい？」

「うん、いいよ」

オリヴィエさん復活のためにヴィヴィオには手伝ってもらうことにした。

「ヴィヴィオの髪の毛一本でもいいからくれない？」

「え、っ……パパってそんな趣味あつたの？」

うわっ、ガチ引きされてる！

「そんな趣味ないから！……後で説明するけど必要なんだ」

「わかった。パパがそういうなら本当だろうし、髪の毛ぐらい全然いいよ」

「ありがと、ヴィヴィオ」

本人の了承も得られたので髪の毛を一本貰い、自分の部屋でセライト・グラール幽世の聖杯を使って体を作る。

聖杯の中にある液体を髪の毛にかけると、髪の毛が光り輝き、徐々

にオリヴィエさんの体が出来上がっていった。出来上がった体は裸だった。慌ててバスタオルを巻いて見えないようにした。ヤハウエにも手伝わってもらったので出来上がった体に異常はないはずだ。

そして最後にオリヴィエさんの魂を体に入れる。

「オリヴィエさん、行きますよ」

『はい』

覚悟を決めた顔を確認すると、聖杯を使って魂を体に入れる。

上手くいったかな？

確かめるために胸に耳を置いて、心臓の音を聴く。

問題なく動いてるっ。あとは――

「オリヴィエさん、聞こえてるー?」

「……………ん……………あ、空さん。はい、ちゃんと聞こえますよ」

よし、成功だ!

『体に異常はありませんか?』

「その声……………あ、ヤハウエさんですね。ええ、大丈夫です」

オリヴィエさんは自分の力だけで起き上がった。しかし、ここで問題が発生した。

オリヴィエさんが身に纏っているのはバスタオルのみ。軽く巻いただけなので、立ち上がってしまうと簡単に落ちてしまう。

「あ」

で、立ち上がった結果としてハラリとバスタオルが落ち、オリヴィエさんの体が全部見えてしまったのだ。

「……………あ」

俺よりも遅れて反応したオリヴィエさん。

「腕が……………治ってる」

「そっち!? 今自分が裸なの気付いてる!?!」

「ありがとうございます! 空さん!」

「ちよ、全裸で抱き着かないで!」

裸でいることよりも腕が治っていることの喜びが勝ったのか、全く気にすることなく俺に抱き着いてきた。あまりに勢いがついていた



それとオリヴィエさんがヴィヴィオと似ているというのも少なからず原因となっていると思う。

アインハルトなんかは一番複雑そうな顔していた。なんだか問題しか起きていない気がする……。

変な姉妹が現れて、三人が復活して、未来から娘がやって来た。これだけでもお腹いっぱいだというのに、新しい家族が増えた（最後に関しては自分に責任があるが）。

「ヴィヴィオちゃん、私のことはママでもいいからね？　もしくはお姉ちゃんでも構わないから」

「あー……アハハ、考えておきますね……」

オリヴィエさん、何を言い出してるんですか？　確かにあなたが一番母親的な存在なんですよけど。

ヴィヴィオは困ったように苦笑いしながら誤魔化した。

「俺、お風呂入ってくるね」

その場の空気に耐えきれなくなり、逃げ出す。

「あ、私もパパと一緒に入るー！」

『却下！』

ヴィヴィオが付いて来ようとしたが、女性陣に止められる。

「えー!?　どうしてですか!?　親子なら問題ないはずですよ！」

『それは未来の話であって、今は違う！　だからダメ！』

「それだったら俺がお供します！　空さんの背中流させてくださいー！」

次に言い出したのはトーマだった。流石に男と一緒になら誰にも反対されることはなかった。

「ありがと、トーマ。案内するからついてきてよ」

「はいー」

トーマと、あとからやって来たヴァーリと雄人と入り、男だけという貴重な時間を過ごせた。

全員が風呂から上がると事件はさらに起きた。

「パパ、一緒に寝よ！」

『それも却下！』

「これも!? ……私、週六でパパと一緒に寝てるんだけどなー? 一緒に寝ないとぐっすり眠れないと思うなー?」

「寝るくらいだったらいいけど……」

いかにも嘘くさい演技だが受け入れることにした。

俺って案外親バカなのかな? パパは止めてとか言ってたくせにね。

一緒に風呂に入るよりはマシなはずだ。……週六で一緒に寝るのはどうかと思うけど。

「ホント!?!」

『なツ!?!』

「今日はもう寝るね。皆、お休み。あ、トーマ達は四階より上の階使ってたね。ヴィヴィオはついてきて」

「うん！」

俺の自室に案内して、二人揃ってベッドの上で横になる。

「……パパってさ、今好きな人いないの?」

唐突にそんな質問をヴィヴィオからされた。

「好きな人? そりゃ、もちろんいるさ。俺は皆のこと好きだよ。そういうヴィヴィオはどうなの? 未来の世界で好きな人はいるの?」

「(そういうことじゃないんだけどなー。この頃から皆苦労してたのか……) 私の好きな人はパパだよ。もちろん他にもいるけどパパが一番好き」

「アハハ、だとしたら未来の俺はこんな可愛い娘に愛されて幸せ者だな」

「(やっぱり伝わんないか……) 私もパパに愛されて幸せ者だよ」

「友達はいる?」

「うん、いるよ。アインハルトさんも友達の一人。……最初はそんなに仲良くなかったんだけどね」

最後に苦笑いが含まれる物言い。

二人の間に何があったのかは知らないが、色々と大変だったのだろう。

「勉強は頑張ってる?」

「もちろんだよ。わからないことはパパが教えてくれるもん」

「魔法は?」

「覚えるの楽しいよ。最近だと覇気も使えるようになってきてるんだ」

覇気を教えてるのか……。ま、教えてと言われれば教えないこともないかな。

「俺は………。ヴィヴィオにとって俺は胸を張ってパパと言える人?」

「うんっ、間違いなく、”世界で一番優しくて素敵で自慢の最強のパパ”って言えるよっ」

よかった。未来の俺はちゃんとパパ出来てるんだね。

「そっか………。あ、しまった」

「どうかしたの?」

「未来のこと聞かないつもりだったのに、いつの間にかたくさん質問しちゃったなあって」

自分でも気が付かないほど気になっていたようだ。あんな言葉を皆に言った手前、恥ずかしいことこの上ない。

「これくらいなら影響は出ないと思うよ?」

それもそうか。

「もう寝ようか。明日も四人を探したり、偽物倒さないといけないからね」

明日、二亜の力で調べることにした。あまり長引くと、未来が変わってしまうかもしれないからだ。

「お休み、パパ」

「お休み、ヴィヴィオ」

互いの温もりを感じながら眠りについたのだった。

翌日。

「空さん、私と戦ってください」

朝食を終えてから食器を片付けていると、アインハルトに勝負を挑まれた。

「うん、いいよ。実は君の実力、結構気になってたんだよね」

偽物相手のときは本気でもなかったみたいだし。

「ありがとうございます。それと私が勝ったら……」

「君が勝ったら？」

「私と結婚を前提にお付き合いしてください」

「………………。えーつと、それは……無理なんじゃないかな？」

「……私では相手にならないからですか？」

アインハルトの目付きが険しいものになる。俺が勘違いさせて、彼女に勝ち目がないと思わせてしまったようだ。

「いや、そうじゃないよ。君は未来から来た人でしょ？ 仮に君が勝ったとしてだ、未来に帰らずここにいるつもり？ それでもいいの？ それとも、そのプロポーズは未来の俺に言ってるのかな？」

多分未来に戻す前に六喰の力で記憶は封印するだろうから、彼女は勝負をしたことすら覚えていない。

「うツ……それは……」

理由を説明すると、アインハルトは言葉に詰まってしまった。

「ま、プロポーズはともかく勝負は受けるよ。——本気でやるから覚悟しとけよ？」

「はう……っ！」

指で鉄砲を撃つ仕草とウインクをしたら、アインハルトの顔が赤く染まり、胸の前を両手で抑える仕草をした。

「顔赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫です！ 失礼します！」

すぐさまキッチンから早足で出て行ってしまった。

……我ながらかつこつけすぎたかな？

自分のやったことに恥ずかしくなってきた。こういうのをブレイ

ブに撮られてしまうのだろう。

すぐさま食器を片付け、地下のトレーニングルームに降りた。

「ブレイブハート！」

「アステイオン！」

『セットアップ！』

二人同時にバリアジャケットを纏う。アインハルトは変身もして身長が伸びている。

「試合開始！」

審判のリニスが互いに戦闘準備が整ったのを確認すると、試合開始の合図を出した。

互いに接近し、拳をぶつける。蒼い魔力と碧銀の魔力がトレーニングルーム内に吹き荒れる。

「小さくてもいい拳です、ねッ」

「そりやどう、もッ」

続いて蹴りがぶつかる。拳がぶつかった時以上に魔力が吹き荒れた。

アインハルトも俺と同じく覇気を使えるのか、殴っては防がれ、殴られては防ぐという状態が続いた。

「でも、俺の武器は他にもあるんだよ？」

「ッ!？」

ブレイブの銃形態をチラつかせると隙が生まれた。

「残念♪ 銃じゃなくて剣でした♪」

銃をフェイクにして、ソード・ベース 魔剣創造とブレード・ブラックスマイス 聖剣創造で何も無い空間から剣を俺の背後に創り出し、アインハルトの足を狙って射出。

アインハルトは防ぎきれないと判断し、バックステップで回避した。

「霸王！ 空破断！」

しかし彼女は態勢を立て直すとすかさず反撃に出た。髪の色と同じ碧銀の衝撃波を放ってきた。

「ブレイブ！」

《了解です》

ブレイブに頼んで防御魔法を俺の右隣りに展開してもらおう。それを壁代わりにして蹴る。その勢いを利用して衝撃波を躲した。

「そこです！ 霸王！ 破城槌！」

アインハルトが地面を叩きつけると大きな揺れが襲ってきた。軽く酔い、足が動かなくなる。

地震発生装置かつての！

俺が怯んだ隙を逃さず、アインハルトは眼前にまで迫って来た。

「はぁぁぁぁぁッ！」

「くッ………」

アインハルトの一撃は魔力強化をした腕を交差して防ごうとしたが、それすら突き抜けて大きなダメージが入る。

この試合において初めて決まった一撃とも言える。

凄く重い拳だ………！

十香達程じゃないにしろ、あそこまでのダメージを出せる人は中々ない。

このままでは勝てないかもしれないと危機感を覚え始めた。

バランス・ブレイカー  
「禁 手を使わないのですか？」

どうやら相手はそれがご所望のようだ。これで使わなければ失礼というものだ。

「使うよ。本気でやるって言ったからね。ブーステッド・ギア 赤龍帝の籠手、バランス・ブレイク 禁手化」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!》

髪は赤く染まり、若干逆立つ。瞳は宝玉と同じ鮮やかな緑。両手には宝玉の埋まった赤いグローブで両足にも宝玉が埋まっている赤い靴になった。服はバリアジャケットのまま、グローブや靴と同じように赤く染まっていた。

《Boost Boost Boost!!!!!!!!》

「空破断ならぬ……紅天！ 龍破断！」

アインハルトの使った技——空破断を真似て赤い衝撃波を放

つ。真似と言っても、動きも構えも滅茶苦茶でアインハルトとは全く違う。ただ単に倍加した魔力の衝撃波を放っただけだ。

「霸王！ 空破断！」

碧銀と赤がぶつかる。

衝撃波が相殺されるよりも先に動き、横から回ってアインハルトに接近。

《BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!!!!!!!!!》

アインハルトも俺が来ることが分かっていたのか拳を構えていた。

「霸王——」「紅天——」

二人が技名を口に出したのはほぼ同時。

「天龍拳！」「龍撃拳！」

アインハルトの碧銀の魔力が風の龍に、俺の赤い魔力が炎の龍へとなる。

二匹の龍がぶつかり、眩い閃光と爆風を発生させた。

「……やはり敵いませんでしたか」

「そう？ 結構俺もギリギリだったよ？」

「……余裕で立っている人の言葉じゃないと思います」

「ア、アハハ……」

アインハルトからジト目を向けられ、明後日の方向を向いた。

結局、二人の技が衝突したあと軽く引き飛ばされたものの俺は立っていた。しかし、アインハルトは変身も解けた状態で床に倒れていたというわけだ。

「一人で立てる？」

「……無理そうです……。手を貸していただけませんか？」

アインハルトは自力で立とうとしたが力が上手く入らず、すぐに倒れてしまった。この試合で限界まで魔力も体力も使い果たしてしまったようだ。

「りよーかい」

俺よりもアインハルトの方が身長が高いので、普通に手を引いても起き上がらせることはできないと判断して、膝裏と肩に腕を回し持ち上げた。俗に言う、お姫様だっこだ。

「へ？ あ、あの……これは……一体……？」

「言いたいことはわかるんだけど……ほら、俺の身長じゃ起き上がらせそうにないなーって思ってた。ごめんね」

「い、いえ……大丈夫です！ むしろ役得です！」

役得？ なんのことだろう？

よくわからないけど、問題はないということでもいいのだろう。

「ところで、アインハルトの最後に使った技だけど、霸王流にあんな技あったんだね。俺のと似ててびっくりしちゃった」

「いえ、違います。あれは——霸王・天龍拳は空さんの紅天龍撃拳を私が真似して作った技です。……それに空さんだつて霸王流の空破断を真似してましたよね？」

自分の技を盗まれたのが不満のようで、少しだけ唇を尖らせていた。

表情をあまり変えないアインハルトがこんな表情もできるのかと内心驚き、ギャップの差から可愛く思えた。

「んー、なんかこう……使えそうだーって感じでビビッと来たんだよね。でも、動きも構えも適当だから技名と衝撃波だけ真似ただけだよ？」

「それでもです」

あらら、拗ねちゃった。

それから若干拗ねたご様子のアインハルトと試合の評価をしながらベッドまで運ぶ。

トワイライト・ヒーリング 聖母の微笑みで治療を始めると、クロノから連絡が入った。

『空、事件を起こしたと思われる人物の居場所を突き止めた。座標を送るから至急向かってくれ。僕達ももう少しで着く。今のことを他の皆にも伝えておいてくれ』

「わかった」

ディスプレイを消し、なのは達にも連絡を済ませた。

そう言えば、キリエさんの目的って何だろ？ アミタさんから聞けなかったし、今度はちゃんと聞かなきゃいけないや。  
今更ながらに何も知らないことを思い出したのだった。

砕けないのはダイヤモンドじゃなくて闇です！

砕けないのはダイヤモンドじゃなくて闇です！

S i d e 空

クロノから送られた座標は地球ではなく、以前ナハトヴァールを倒した次元世界だった。

全員送ると、地球にいる闇の書の欠片を倒す人が居なくなってしまうのでメンバーを分けた。

俺達が目的地に転移すると、巨大な魔力が一か所に集まり黒い球体となっていた。

そして、そのすぐ傍には、探していた四人がいた。

アミタさんはここにはいないか……。

「来たか、空」

俺達が近づいたことに気が付いた四人の内の一人、ディアーチェが口を開いた。

「来たよ。……今更なんだけどさ、目的は何？」

「フン。貴様に答える義理はないな」

「あ、悪いけど王様のじゃないよ」

砕け得ぬ闇を手に入れることしかしならないけど、それ以上に気になっただけのことがある。

「んなッ!? では誰に聞いておるのだ!？」

「俺が聞きたいのは、キリエさんの目的だよ」

この人は何のために砕け得ぬ闇を求めているのか、そもそも何者なのかすらわからない。……二亜の天使使えば一発なんだけど。

「あらー？ 私？ ダーメ♪ 女の子には秘密が多いのよ？ 覚えておくといいわ、天使君♪」

わかってはいたが、キリエさんのような掴みどころのない性格からすると絶対に教えないだろう。

「……ま、いつか。君たちが悪いことをしてるって決めつけるのはまだ早いけど、君達を止める。……ついでにリベンジマッチでもしとく？」

「よかろう。昨日は中断せざるを得なかったからな」

「あーッ！ ずるいよ王様！ 僕だって空にリベンジしたいよ！」

「王よ、ここは臣下に譲るべきです」

「ええいッ！ 黙らぬかッ！ 誰が何と言おうと貴様らは私の次だ！」

「そんなの横暴です」

「そーだそーだ！」

誰が俺と戦うかで三人は喧嘩になってしまった。

「王様ー、こつちは準備が出来ただけど……」

三人が言い争っている間に碎け得ぬ闇と思わしき黒い球体が完成したらしい。

「何ッ!? それは真か!?!」

「え、ええ……」

「それならすぐに蘇らせろ！ 桃色！」

「はあーい♪ 強制起動システム正常、リンクユニットフル稼働」

キリエさんがディスプレイを弄ると、黒い球体に変化が訪れる。

「さあ蘇るぞ！ 無限の力『碎け得ぬ闇』!! 我の記憶が確かなら、その姿は『大いなる翼』！ 名前からして戦船か、あるいは体外強化装備か——」

「んー、こんな感じかしらー?」

ディスプレイを操作して空中にメカメカしいロボットのホログラムを映す。

「おお！ なかなかカッコイイではないか」

どうやら王様には好評らしい。

「え……あれ、カッコイイ?」

「うーん、あれはちよつとないかなー」

「私にはさっぱりです」

王様と違い、俺、レヴィ、シユテルには不評だった。

一緒に来たヴァーリ達も首を傾げていたことからイマイチらしい。

「というか王様を止めないの？ 僕ら一応敵なのに」

「そんなこと言いながらいつでも戦える準備してるくせに」

「バレていましたか」

「バレバレだよ」

俺がキリエさんか王様を狙えば、二人は必ず止めに来る。――  
俺を殺すつもりで。

「ともあれ、この偉大な力を手にする我らに負けはない！ 残念だったな空とその愉快なお供たち。フハハハハ！ さあ蘇れ、そしてわが手に収まれッ！ 忌まわしき無限連環機構、システムU―D――  
砕け得ぬ闇よッ！」

「――でもさ、何もしてないわけじゃないよ」

『え？――ツ!?!』

二人が気付くが、もう遅い。

『ウエルシュ・メギド【赤龍砲】ツ!』

ここよりずっと遠くからやって来た赤い光線が黒い球体を呑み込  
んだ。

「……今のは……闇の書の闇を消し去った一撃……？ ツ！ 空！  
貴様かッ！」

犯人は俺だとすぐにわかり、王様が睨んできた。正確に言えば、俺  
ではなく琴里が龍精霊化して撃つたものだ。今はドライグと別れ、六  
喰の天使の力で家に戻っているだろう。

「まあね。これで――は？」

煙が晴れた先で見たものに自分の目を疑った。

黒い球体は何もなかったかのようにその場にあった。そして、二つ  
に割れた。

その中から――一人の少女が現れた。

「ユニット起動――無限連環機構動作開始。システム「アンブレ  
イカブル・ダーク」正常作動」

なるほどね、U―Dってアンブレイカブル・ダークの略したものだ  
だったんだ。和訳すると『砕け得ぬ闇』になるわけね。

「ぶ、無事……おっ？ おおおっ？」

「はいっ?」

『え……う?』

誰もが目を見開いた。琴里の一撃が防がれたのもあるが、碎け得ぬ闇の正体が少女だったからだ。

「ちよつと王様? システムU—Dが人型してるなんて、聞いてないんですけどツ!」

「むう、おかしい。私の記憶でも、人の姿をとっているなどとは……記憶が曖昧なものも空が我々を吹き飛ばしたせいだ!」

あれツ!? なんか俺のせいにされた!?

「あ……とりあえず、『碎け得ぬ闇』やから……ヤミちゃん?」

何故かはやては早速名前を付け始めた。

「いや、もつとクレイジーな名前の方がいいんじゃないかな?」

「例えばどんなのや?」

「クレイジーダイヤモンド」

「まんまスタンドだよね!」

「東方仗助は?」

「それはスタンド本体の名前! しかも性別違うから!」

はやて、なのは、フェイト、愛衣、あかりが名前であれこれ言っている間にもシステムU—Dは作動していた。

「視界内に夜天の書を確認——防衛プログラム破損、保有者確認、困難……」

「へ夜天の書ってことははやての出番じゃない? 声でもかけてみれば?」

「へせやな。ちよつと挨拶してみる? あ……あの、こんにちは、現在の夜天の主、八神はやてです!」

「待てエー! うぬら、何たる横入りツ! 起動させたのは我ぞ!」

「起動方法伝授したのは私です!」

「でも、夜天の書の主は私やし……」

「黙れ黙れツ! これは我のものだ! 誰にも渡さんぞツ!」

「あーん、王様、話が違います!」

またしても（今度は違うメンバーでだが）言い争いが始まった。  
その光景に誰もが気を緩めかけた時——少女が動き出した。

膨大な魔力が少女の下に集まり、赤黒い魔力の翼が出来上がる。

「状況不安定……駆体の安全確保のため、周辺の危険因子を……」

あ、これはヤバイ。頭ではなく本能で理解した。

「ヴァーリ！」

「わかつてる！ フランス・ブレイク 禁手化ッ！」

《Vanishing Dragon Balance Breaker!!》

俺もヴァーリの続いて白龍皇の禁 フランスブレイカー 手を纏う。

《Half Dimension!!》

二人で半減する空間を広げ、皆と少女の間に割り込む。

「排除します」

少女が赤黒い魔力の巨大な手を振り下ろす。

半減の力が効いて少女の攻撃は遅くなった。しかしそれもすぐのことで、魔力が加わると元の速さに戻り、俺とヴァーリを叩き潰した。

ギリギリで防御魔法を展開できたのでダメージは最小限に抑えられた。

「ヴァーリ、これはちよつとまずいかもね」

体の上にある瓦礫を吹き飛ばしながら、ヴァーリと這い上がる。

「ここは引くべきだな」

「でも、俺達じゃできないな」

「なら、答えは一つだ。俺達じゃない奴がやればいい」

「つてことは……あれか」

「あれしかない」

バリアジャケットについた汚れを払い、二人で横に並び立った。

Side out

Sideなのは

空君とヴァーリ君の二人がたったの一撃でやられた。それも私達  
が知る中で強いともいえる二人があつさりとだ。

私は……私達はその事実が受け入れられないのか、動けないでい  
た。

「空中打撃戦システムロード。出力上限、5%」

——勝てない。

その一言が頭をよぎる。

魔力が私達とは次元が違う。

あまりにも強大過ぎる力の前では逃げることもすらできないと思い  
知らされているようだ。

「墜滅、開始」

「させるか！ 九喇嘛！」

『応ッ！』

地面から出てきた橙色の狐が、少女をその大きな口で喰らおうとす  
る。それを少女は魔力で作った刃で切り裂き、狐を消し去った。

「フハハ、よくやったぞU—D！ 空と白龍皇の退治、大義であった  
！」

私達とは違い、動揺がなかったはやてちゃんに似た女の子——  
ディアーチエちゃんが少女を褒め称えていた。

「闇の書の構築体、ユニットD—— 駆体起動を認証」

「うむ。貴様も含めて、闇の書が闇の書たる万象すべてを統べる王。  
それが我よ」

「——ディアーチエ……ディアーチエですか？」

途端に少女の様子が変わった。機械的な言葉じゃなくて、人間的な  
言葉をようやく発したのだ。

「そうとも我が名は闇<sup>ディアーチエ</sup>王ぞ。いやはや、ようやく巡り会えたわ。我ら  
三基はずつとうぬを捜しておったのよ」

「シユテルや、レヴィも……？」

「……」

「僕もいるよー！」

三人が少女の近くに寄っていく。

「会えて嬉しい—— 本当は、そう言いたいです」

「……なんと……」

「だけど、駄目なんです……私を起動させては。皆私を制御しよう  
としました。でも、誰もできませんでした。だから必死で沈めまし  
た。私に繋がるシステムを破断して、別のシステムで上書きして、闇  
の書に関わる全ての情報から私のデータを抹消して……夜天の主も  
管制融合騎も知り得ない、闇の書が抱える本当の闇——それが

——」

『テメエか』

「！」

少女が三人を赤黒い魔力で貫こうとしていた。でも、その攻撃は空  
を切った。

三人が貫かれなかったのは、どこからともなく現れた少年が三人を  
抱きかかえていたからだ。

「あなたは……」

皆の視線が少年へと集まる。

「おい、貴様！ 我に気安く触れる出ない！」

「ですが、レヴィとディアーチェの温もりが感じられるので悪くない  
です」

「僕もー！」

「ぬ……うぬらがそういうのであれば我も………ってそんなことを  
言っている場合ではない！ さっさと放さんか！」

少年にまとめて抱きかかえられていたディアーチェちゃんが騒ぎ  
出す。

『わかってるっての。そんな大声で騒ぐんじゃねえよ、ガキじゃある  
まいし……』

少年はやや気だるげに三人を放した。あれだけ耳元で騒がれれば  
五月蠅いのは間違いなしだ。

「貴様……！ 今、我を侮辱したな!? いいだろう！ 今すぐ消し炭  
にしてくれるー！」

『無理。お前なら足でも十分だぜ。それよりも——』

「貴様——ッ！」

『ここは逃げた方がいいぞ』

少女が放つ魔力弾を拳と脚で三人に当たらないように防ぎながら撤退を提案する。

「そんなこと出来るわけがなからうッ！」

『……メンドクせえな。碎け得ぬ闇なら俺が捕まえてやる。だから、他の奴と一緒にアースラに逃げてろ。——いいな?』

『ッ!』

最後の言葉にはかなりの威圧が含まれていた。

自分に向けられていないと分かっているけど怖いと感じてしまった。

「……いいだろう。貴様の実力がどれ程か見せてもらおうぞ！」

『ああ、好きだけ見とけ。おい、お前ら、こいつら頼んだ』

少年——ヴァーラ君はそれを言い終わると、少女と戦い始めたのだった。

S i d e o u t

S i d e ヴァーラ

「あなたは何者ですか？」

なのは達が退避した後、碎け得ぬ闇が話しかけてきた。

『俺か? 俺はお前を救う者だ』

「無理です。私は……沈む事なき黒い太陽——影落とす月——

——ゆえに、決して碎かれぬ闇。私が目覚めたら——あとには破壊の爪痕しか残らない。だから、あなたが何者であろうと無理なんです。まして……救うなど」

『まあ、そうだな。確かに救えねえな。何をどうやったらお前が救われるかなんてさっぱりな状態だ』

彼女の言い分は正しい。だが、そんなことはわかりきっていたことだ。

『それに——本気じゃないお前と戦っても面白くないからな。だから、今は戦わねえ』

彼女と戦うのはまだだ。まだその時ではない。

「そうですか……それでは」

別れを告げた彼女は、虚空に消えるようにどこかへと行ってしまった。

「待ちなさいッ！ 私はあなたに用が——」

キリエが碎け得ぬ闇を追いかけようとするが、俺が通せんぼした。

『お前は行かせねえよ』

「ッ！ 誰だか知らないけど邪魔をしないでッ！」

頭を狙って銃を撃ってきたが腕を薙いで弾いた。

『お前が何するつもりかは知らねえけどよ、このまま追いかけたらお前は確実に死ぬぞ』

「私が死のうがあなたには関係ないでしょ！」

今度は銃を大剣に変えて斬りかかる。それらすべてを見聞色の覇気を使った体捌きで躲す。

『ああ、俺には関係ない』

「なら——」

『お前が傷つけば、死ぬようなことがあれば、お前の姉はどうなる？』  
「ッ!？」

大剣指で挟んで押さえつける。キリエは引き抜こうとするが、ビクともしない。

説教臭いことは嫌いだけど、これは見過ごせねえな。

『失ってからじゃ遅いんだよッ！ 気づけよッ、この……バカ野郎がッ！』

武器を奪い、剣を持っていない方の腕でキリエの鳩尾を目掛けて殴る。

キリエは「かはッ……」と肺から空気の抜ける声を出すと、前のめに倒れた。彼女を受け止め、アースラへと転移した。

Side out

美桜、朔夜、香澄、リサが天照の作ったゲートの出口に辿り着くと、着いた先は街が一望できる小高い丘の上だった。

「異世界って聞いて結構身構えてたけど……普通ね」

「私達の世界と代り映えしない世界だ」

「異世界に来た感じはしませんね」

「——そんなことはどうでもいいわ」

三人が感想を漏らすのを一蹴し、歩き出す美桜。それに三人はついていく。

目的は一つ——桜木遥と再会することだけだ。

「お前達は何者だ？」

濃いピンク色の髪をポニーテールにした女性が四人の前に現れた。持っていたものは剣だが、機械と混ざった形をしていた。

「……………」

「答えないか。まあ、いい。お前達がどこの誰かは知らんが魔力をいただくぞ」

「——邪魔」

美桜がそう呟いたあとにはポニーテールの女性は上下が二つに分かれていた。

「……今のはなんだったのだ？」

「生物……ではないみたいね」

他の三人は今の光景を見ても特に驚くこともなく、消えていく女性の方に目を向けていた。

「さあ？」

美桜からすれば興味が湧かない存在だったようだ。

「敵意があった。それだけで十分敵よ」

「美桜様がそう感じたのであれば、きっとそうなのでしょう」

四人は手始めに街で情報収集をすることにしたのだった。

キリエさんの想いです！

キリエさんの想いです！

四人は小高い丘を降りて、街の中に入った。

「妙だな……」

朔夜の眩きに他の三人も揃って頷いていた。朔夜が妙だと言ったのは、街の様子がおかしかつたからだ。

「人が少なすぎる。それに誰かが戦っているみたいだな」

丘から見た時はそこそこ大きな街で人も多い、と思っていたが、四人が今いる場所には人が一人もいない。自動車の走る音もしない。

「魔術か霊術の人払いの類と考えるべきね」

事実、香澄の判断は正しかった。

今現在、この海鳴の街では町全体を覆う結界が展開されている。出現する闇の書の欠片との戦闘で住民に被害を出さないたためだ。

「困りましたね……。これでは情報が集めにくいです」

「人を見つけてみましょう」

美桜の提案に三人も肯定し、再び歩き出した。

そして、しばらく歩き続けたところで――

「あの、ちょっといいですか？（綺麗な人達……）」

栗色の髪をした少女と遭遇した。

「何か用？（……この子に害意はなさそうね）」

先程のポニーテールの女性とは違い、この子は敵じゃないと美桜は判断した。

「私は囑託魔導師の結城明日奈と言います。あなた達四人はこの世界の方ではありませんよね？」

「ええ、そうよ。ちょっとした野暮用があるの。それが終わったらすぐに帰るわ」

「そうですか。差し支えなければ、聞いてもいいですか？ 手伝えることもあるかもしれませんから」

「（折角出会えた人だし、話してもいいか）……人を捜してるの」

まともに話が出来そうな相手——明日奈に目的を話すことにした。

「……人捜し？ お名前は何という方ですか？」

「ハル君……じゃなかった。桜木遙っていう名前なんだけど知らない？」

名前は教えたものの、最初から目的の人物を知っている人はいないだろう、と思っていた美桜達だった。

「えっ……遙君？」

が、明日奈は予想外の反応をした。

「あなた知っているの!？」

途端に四人の雰囲気が変わり、ものすごい勢いで明日奈に詰め寄った。四人に詰め寄られて明日奈は逃げたくなかったが、この四人は明日奈を逃がさないだろう。

「この写真の男で間違いない!？」

明日奈が美桜から見せられた写真は二枚だった。一枚は高校生ぐらいの黒髪の男、もう一枚は金髪で水晶のように透き通った蒼い角が二本生えた高校生ぐらいの男。どちらも同じ顔だ。

「ま、間違いありません……」

明日奈はしどろもどろになりながらも答えた。

「そ、そっか……。うん、よかった。ありがとね、明日奈ちゃん……って呼んでもでもいいかな？」

目的の人物がいるとわかると、四人は緊張がほぐれて安堵の笑みを浮かべていた。

「ありがとう、君のおかげで助かった」

「何かお礼した方がいいわね。何がいいかしら？」

「お、お礼なんていいですよ！ 私は別に大したことしてませんから！」

「いいえ！ 明日奈様に私達は助けられたのです！ ですからお礼はさせていただきます！」

明日奈が断ろうにもこの四人が無理矢理にでもお礼をする気だ。それがわかった明日奈は小さい溜息を吐きながら了承した。「このまま私についてきてくれませんか？ 多分そこに彼もいるはずなので」

『行く（行くわ／行きます）！』

明日奈はアースラに連絡して、四人と共に転移した。

だが、明日奈は重要なことを言い忘れていた。

美桜達が捜している人物——桜木遥はいない、ということ  
を。

## Side空

「貴様！ 捕まえるとか言って捕まえてはないではないか！」

「そんなこと言われてもなあ……あれは俺じゃなくてヴァーアなわけだし……」

アースラ内で王様に怒鳴られ、困ったように頬を搔く。

最初はヴァーラの状態で怒られていたのだが、分裂するとその矛先は俺とヴァーリに向けられた。

「言い訳するでないわ！ 何がどうであれ約束を破ったことに違いのないのだからな！」

「だが、ヴァーラは今すぐ捕まえるとは一言も言っていないぞ」

「ぬ……確かに……」

ヴァーリの意見が王様をの怒りを収めるきっかけとなったのか、次こそは約束を破るな、と言い残してシユテルとレヴィの下に行った。

「やっとな終わったか……」

「長かった……」

王様から見えない位置で溜息を吐く。

「さてと、あの子を倒すのは俺とヴァーリ……というかヴァーラに任せてもらおうとして。どうやって止めるかなんだよね」

倒すだけならヴァーラが本気を出せば楽勝だ。だが、暴走を止めるとなると話は別だ。

「それでしたら私に考えがあります」

どうしようかと悩んでいたら、シユテルが近くにやって来た。

「え、シユテルが？」

シユテルは「理」のマテリアルと呼ばれる存在。簡単に言えば策士だ。そのシユテルが考えがあると云ったのだ。これは期待できそう。

「聞いてもいいかな？」

「はい。どうせなら全員にも聞いてもらいましょう」

「わかった」

クロノに頼んで、皆を一か所に集めてもらった。

皆が集まった部屋には地球で闇の書の欠片を倒していたメンバーもいた。

「作戦としては制御プログラムの入ったこのカートリッジを使い、彼女に打ち込みます」

シユテルがカートリッジを一つ見せる。ベルカ術式とミッド術式の二種類があるらしい。

言ってることは至ってシンプルだ。しかし、それをこなすには命が  
けでやらなければならぬ。

ヴァーラはデバイスを使っているけど、バリアジャケットと非殺傷  
設定のためだけだしな……。

要するに誰が制御プログラムを打ち込むのが問題となっている  
のだ。

「カートリッジをロードしている間だけ碎け得ぬ闇を砕くことが出来  
ます」

「じゃあ、その間は俺とヴァーリに任せといて」

今度はスペシャルな技があるから負けることはないはず。

「そうだな。あとは誰が打ち込むかだが、一応、何人かにカートリッジ  
を渡してくれないだろうか？」

「構いません」

シユテルはクロノの頼みを聞き入れ、カートリッジをいくつか渡し  
た。

とりあえず、会議は一旦終了。碎け得ぬ闇とアマタさんが見つかる  
までは各自待機となった。

キリエさんの様子でも見に行くか。

医務室に入り、キリエさんが眠るベッド付近の椅子に腰を下ろす。

「……作戦でも決めてたの？」

「あ、起きてたんですね。そうですよ。碎け得ぬ闇を止める作戦を考  
えてました」

キリエさんは上半身だけ起き上がらせ、俺の方に顔を向けた。

「キリエさん、話してもらっていいですか？ あなたが碎け得ぬ闇に  
拘る理由」

「……私のいる星——エルトリアっていう惑星から来たの。し  
かもこの時代よりも先の未来から」

未来から……？ つまりタイムマシンでも使ったってこと？

「それと碎け得ぬ闇がどう関係してるんですか？」

しかし、二つがどうやって結び着くのかはわからない。

「それもちゃんと説明するわ。——私達の故郷は……今、ゆつくり死んで行っているの」

「エルトリアがですか？」

「ええ。エルトリアはもう何百年も前から世界そのものが死んで行っているの。「死蝕」って呼ばれる、水と大地の腐敗——飛び石みたいに自然発生して、草木も動物も生きられない場所になっていく」

聞いたことのない現象だ。未来では流行り病みたいなものなのだろうか？

「人々は他の惑星に移住して、二世代以内には、エルトリアから人も居なくなる試算になっているの。そんな中で、私達のお父さん——フローリアン博士は、死蝕の対策をずっと続けてきた。綺麗なエルトリアに戻すためにね。私達はその実験過程で生まれた「死蝕地帯の復旧機材」——自動作業機械「ギアーズ」

「え、じゃあ、キリエさん達は……」

「人間じゃないわ。でも、博士は昔からおちよこちよいでね、私達の人格形成システムを作り過ぎてしまったらしくてね、機械として扱うことはできないと判断して人間と同じように育てられたわ」

「エルトリアのギアーズは他にも？」

「いるわ。私達のように心や体を持っているわけじゃないけど、今もエルトリアのために頑張ってくれている。お姉ちゃんと私の計算ではあと数年で成果が出るのよ」

……？ だったら、尚更碎け得ぬ闇を求める理由がわからない。

「でもね、博士の命はそれまで持たない。だから……だからッ、私には碎け得ぬ闇が必要なの！ 博士にどうしても綺麗に戻ったエルトリアを見せてあげたいのッ！」

心からの叫びだった。間違いなくキリエさんの本心からの声だった。

「……時間遡行や異世界渡航のシステムを見つけた博士はそれを解析して封印した。これは使っていないものじゃない、今を生きていることを放棄するようなものだ、って言ってね」

「でも、キリエさんは諦められなかったんですね？ エルトリアと博士を救うことを」

「そうよ。何度も何度もシミュレーションして、ようやくたつた一つの可能性を見つけた。無限連環システムの核——エグザミア。それを碎け得ぬ闇が持っているの」

これで繋がった。碎け得ぬ闇が持つエグザミアで、エルトリアの死蝕を止めようとしているというわけだ。

「そうですか。……ん？ あれ、じゃあ、他の未来から来た人達は？」「私達の他にもいたのね……。多分、私達の時間転移に巻き込まれたんだと思うわ」

「未来には戻せますか？」

「努力するわ」

「お願いします。……代わりに言うてはなんですが、俺もキリエさん達を手伝います」

「……あなたに何ができるの？」

「俺、こう見えて天使ですから、世界の二つや二つ救って見せますよ。あ、当然博士のこともです」

「……………」

半信半疑の視線で、表情もどうしたらいいのかわからないといった様子だ。

「それじゃあ、ここで待っててください」

それだけ言い残して医務室をあとにした。

「空君、今いいかな？」

皆と合流すると、明日奈が話しかけてきた。

「いいよ」

「じゃあ、今からこの部屋に行つて来て欲しいの。人を待たせてるから」

「わかった」

明日奈に教えられた番号の書かれた部屋に着いた。その部屋の扉

が開くと、四人の女性がいた。四人が俺に気が付くと、桜色の髪をした女性が無言で抱きしめきた。

「会いたかった……すつごく会いたかったよ……!」

どう考えても俺とこの女性は初対面だ。俺は記憶力はいい方だし、こんな綺麗な人なら忘れるはずもない。

だが、初対面のはずなのに不思議と懐かしいと感じてしまう。

抵抗すれば抜け出せそうなのに、そうしようと思わない。

桜色の髪の女性がしばらくして離れると、次は黒髪の女性にも抱きしめしめられた。

「あの……そろそろ放していただけませんか?」

「ご、ごめんなさい!」

ブラチナフロード

最後に抱き着いてきた白金髪の女性が慌てて離れた。

この人達を見てると、心がよくわからなくなる……。嬉しいような、寂しいような……。初対面なのにどうして?

「ぎ、帰ろっかハル君!」

「?」

『(こいつら、まさか……!)』

ハル君? 誰のこと?

後ろを向いても誰もいない。俺には見えない何かでも見えてるのだろうか。

「お、おい、遥。お前のことだぞ?」

おーい、遥とか言う人ー、呼ばれてますよー。早く出てきてあげなさいな。こんな美人の人達が迎えに来てるんだぞー。

呼べども呼べども遥という人は来ない。

「あんたのことよー!」

痺れを切らしたのか黒髪の女性の一人が指を突き付けてきた。

「あ、もしかして俺ですか?」

「もしかしなくてもそうよ!」

「えー? でも俺、遥って名前じゃないですよ?」

『えッ!?!』

名前が違うことを告げると、四人は驚いていた。

なんだ、ただの人違いか。

「もう行ってもいいですか？」

「ま、待って！ あなた、ハル君でしょ!？」

部屋を出ようとしたら、桜色の髪の女性が肩を掴んできた。

「だから違いますって。俺は遙じゃなくて龍神空って名前です」

そんなに遥って言う人と俺は似てるのかな？

名前を伝えると、桜色の髪の女性が頭を掻きむしった。

「もうっ、結局振出しに戻ったじゃない！ 全部天照のせいね！ 大

体情報が少なすぎなのよ！」

「え、天照様を知ってるんですか？」

意外や意外、ここで神様の名前を聞けるとは思わなかった。

「ええ、知ってるわ！ それも嫌というほどにね！ ってその名前

知ってるならやっぱりあなたがハル君じゃないわよ！」

「な、なんだって……」

「変な力があるせいでほとんどわからなかったが、僅かに遥と同じ力を感じる」

「う、右眼が疼く……」

変な力ってドライグ達のことかな？

「じゃあ、この男の子はやっぱり……」

「遥様で間違いないということですね」

「今明かされる衝撃の真実」

人違いだと思っただらやっぱり人違いじゃなかったらしい。

「ん？ 結局……どういふことだっばよっ！」

『さつきから五月蠅い！』

あらら、ふざけてたら怒られてしまった。

「おっと、これ以上は時間がないな。さよなら、皆さん」

本当は時間なんてないけどね。

『あー！』

部屋を出て、皆のいるところに戻った。

「四人には会えた？」

「うん、会った。遥って言う人捜してたみたいだけど、人違い(?)だった

「たみたいだよ」

「え……う？（あ、そっか……空君は遙君のこと知らないんだっけ？）」

「どうかした、明日奈？」

「ううん、大丈夫！ それよりも頑張ろうね！」

「うん！」

いつでも出撃できる準備をして、皆と談笑してその時が来るのを待ち続けた。

やはり聖王様が無双するのは間違っていないです！

やはり聖王様が無双するのは間違っていないです！

Side 遥

「あーあ、もう来たか……」

いつかこの世界に来るんじゃないのかとなんとなく予想がついていた。

「四年経ってるから二十歳くらいか。全員綺麗になったな……」

久々に四人を見たら、一番最初に出てきた感想がそれだった。

「つつても当然か」

元々、あの四人は可愛い部類に入る容姿をしていた。それが四年も経てば綺麗な大人へと変わるの当たり前だ。

「ごめんな……そこにいるのは俺じゃないんだ」

空を俺だと勘違いする四人に思わず苦笑いした。——— 久々

に見ることが出来た嬉しさと、近くに居るのに会えない寂しさを誤魔化すように。

Side out

Side 空

四人の女性の人違い(?)騒動を終え、皆とつかの間の休息をとっている。——— オリヴィエさんの膝の上で。

いきなり、俺を抱きかかえたと思ったら膝の上に座らせられたのだ。

もちろん抵抗はした。したけど、聖王様の馬鹿力には勝てませんでしたよ。

「えへへ、空さんは可愛いですね。……一度でいいので、お姉ちゃん”って呼んでくれませんか?」

頭を撫でまわされ、もう片方の腕でギュッと抱きしめて、俺の肩に顎をちよこんと乗せてくる。オリヴィエさんの良い匂いが鼻腔を擦る。

「嫌だよ……。それと放して。さつきから周りの目が痛いから」

特になのは達からの視線が痛い。別に俺もオリヴィエさんも悪いことしてるわけじゃないのに。

「えー!? どうしてですか!? 家族のスキンシップですよ! そう! か・ぞ・くのスキンシップです! あ、今の大事なことなので二回言いました」

「こういうことは家でなら……。いや、家でもよくないんだけど、人前は恥ずかしいから……」

「空さんは照れ屋さんなんです。いいでしょう! 今日のところはここままで我慢します!」

オリヴィエさんが回していた腕を解いてくれたので、膝から降りる。

「ありがと……。お姉ちゃん」

「あ、今デレました!? デレましたよね! いや、空さんがとうとうデレ期に突入ですかあ!」

「で、デレてない!」

こうなるんだつたら言わなきやよかった! というか耳良過ぎ!

「くう〜! やっぱり可愛いですね! もう一度抱きしめます!」

「二度も同じ手は喰らわれないから! 必殺! ヴィヴィオガード!」

説明しよう。ヴィヴィオガードとはオリヴィエさんの隣に座っていたヴィヴィオを犠牲盾にして攻撃を防ぐ技だ。

「え、私!？」

技は上手く決まり、俺の代わりにヴィヴィオが捕まった。

「空さんじゃないですがこれはこれでアリですね。さ、ヴィヴィオちゃんも私のことを『お姉ちゃん』って呼んでください!」

「た、助けて、パパ!」

抵抗するヴィヴィオだが、オリヴィエさんからは逃げられない。

「ごめん、ヴィヴィオ。世界には俺じゃ敵わない相手がいるんだ。

……無力なパパを許してくれ」

「そもそもパパが私を犠牲にしたよね!？」

「この事件が解決したらヴィヴィオの食べたいもの作ってあげるか

ら、それで我慢してくれない?」

「一緒のお風呂とベッド付きなら許す! それとハンバーグを食べたい!」

「わ、わかった……」

一応、今の条件で許してくれたらしい。

出来の良い娘で俺は助かったよ。未来の俺の教育に感謝だね。

それから数十分間抱きしめられたヴィヴィオがようやく解放されたが、その顔はやつれ気味だった。

「皆、よく聞いてくれ。砕け得ぬ闇の居場所を突き止めた」

クロノからの報告に俺達の間には緊張感が生まれる。

「戦闘は空とヴァーリもといヴァーラとオリヴィエに任せる。カートリッジを打ち込むのは持っているメンバー全員でだ。何か意見はあるか?」

「あ、俺ある」

「何だ、空?」

「キリエさんのお姉さん——アミタさんは見つかった?」

「ああ、彼女も見つけた。もうじきここにやってくるはずだ」

詳しいことを聞くと、キリエさんが持っていた通信機でアミタさんに自分の居場所を知らせたとのことだ。

「他にはあるか?」

『……………』

「ないみたいだな。それでは作戦を十分後に開始する!」

「小さかったはずのクロノがあんなに成長したんだな……」

「そうよ、クライドさん! クロノ、すっごく頑張ったんだから!」

……おかげで甘えられることが少なかったけどね……」

ハラオウン夫婦がクロノの指揮を見て、嬉しそうに話していた。そのせいで張りつめていた空気が緩み、次第に皆に笑顔が生まれてきた。クロノの顔は羞恥で真っ赤になっていたが。

「母さん、父さん! 真面目な雰囲気壊さないでくれ!」

「あら、ごめんなさいね」

「頑張れよ、クロノ」

リンディさんは反省した様子もなく、クライドさんとその場をあとにした。

「まったく……あの二人は何考えて……」

「まあまあ、いいじゃんか。クロノことを想ってるわけだし、良い両親だと思うよ?」

「……そんなことは言われなくてもわかってる。君のおかげで失ったはずの家族を取り戻せたんだからな。でも、今は任務中だから、それとこれとは話が違う」

流石はクロノだ。締めるときと緩めるときのけじめをきちんとしてけている。

「……………ちよつとだけ……………羨ましい、のかな?」

クロノ達を見ていたら、不意にそんな言葉が出た。

俺には血の繋がった存在がない。四年前にフェイトに言ったときのことを少しだけ思い出してしまった。

「大丈夫よ、あなたには皆がいるじゃない」

「プレシアさん……………」

俺の呟きを聞いていたのか、プレシアさんが励ましてくれた。

「血の繋がりは大きいのは確かよ。でも、それ以上に大切なことをあなたはわかっているはずでしょ?」

大切なこと……………

思い浮かべるのは一緒に暮らす家族一人一人の顔だ。

「そうですね——母さん……………あつ」

思わずプレシアさんを母さんと呼んでしまった。でも、不思議なことに違和感はなかった。

「ようやく呼んでくれたわね」

「え、ずっと待ってたんですか?」

「当たり前じゃない。これでもアリシアやフェイトと同じように自分の子供だと思って接してきたのよ?」

いつからだったかは忘れたが、運動会の競争で勝ったことやテスト

の成績が良かったことを報告したら、プレシアさんは自分のことのように喜んで褒めてくれていた。

「それに、今のでフェイトとアリシアと結婚しやすくなったでしょ？」

「はあッ!? いきなりなに言ってる——」

《母さん》

プレシアさんのデバイスから俺の声が聞こえてきた。

「ッ!？」

まさか今の録音してたの!?

「良かったわね、二人共。私を義母と呼んだということは、二人を貰ってくれるそうよ」

今の母の部分の漢字が違う気がする……。

「ホントに!? やったーッ!」

「今の嘘じゃないよね!? 貰ってくれなかったら空にフアランクスシフトからのプラズマザンバーだからね!」

「いゝいゝッ!？」

脅し!? フェイトが物騒過ぎるんだけど!? いつからこんなこと言う性格になった!?

まさか、龍神家での生活がフェイトをここまで変えることになっていたとは思いにもよらなかった。

「プレシアさん! 勝手なこと言わない——」

「早く孫の顔が見たいわ……。最低でも男の子と女の子一人ずつがいわね」

ダメだ! 全く聞いてない!

「イテッ!」

「むう〜!」

俺の右足の小指を的確に蹴って来たのはなのはだった。相当むくれていた。

「な、なんでなのはが怒ってるの?」

「別に怒ってない」

なのははつまらなさそうにそっぽを向いた。どう考えても怒っている。

どうしたものかと考えていたら、他にも脇腹や手の甲を抓られたり、脛を蹴られたり、足を踏まれたりした。地味に痛いところばかりを執拗に狙ってきていた。

「え、何？ 皆も怒ってるの？」

『怒ってない』

「絶対怒ってるよね?! 怒ってなかったら何もしないでしょ!？」

しかし、皆はどこ吹く風で素知らぬふり。

「見てください、デИАーチエ。あれが修羅場というものですよ」

「う、うむ……絶対に関わりたくないな……」

「僕もあれは嫌だなー」

三人に、そんなこと言っていないで助ける、と文句の一つでも言ってみよう、と生憎そんな暇はない。

『闇の書の欠片が大量に発生しています！ 至急対応をお願いします！』

エイミーさんの声が騒がしい部屋全体に響き渡った。

「クロノ、どうする？ そつちに人員を割くわけにもいかないでしょ？」

「ああ。ここは――」

「私の出番ですね」

そう言い出したのはオリヴィエさんだった。先程までヴィヴィオと戯れていた時の気の抜けた雰囲気ではなく、真剣で優雅。その佇まいは正しく聖王と呼ぶに相応しかった。

「ダメだ。あなたにはデバイスが無い。危険すぎる」

クロノに断られるのは目に見えてわかっていたことだ。しかし、オリヴィエさんは食い下がる。

「問題ありませんよ。だって、私のいた時代に魔法はあっても、デバイスとか言う機械なんてありませんでしたからね。それに――私、最強ですから」

今のオリヴィエさんは頼もしいとしか言いようがない。実際に戦闘を見たわけではないが、そう思ってしまう。

「俺からもお願いしていい？ 一応、俺の影分身も一人つけておくか

らさ」

「……わかった」

クロノは了承してくれた。

俺の影分身とオリヴィエさんは闇の書の欠片のいる世界に転移した。

Side out

Side 空（影分身）

上が長袖の青いジャージ、下が黒いハーフパンツ、白い運動靴、髪は生前と同じ髪型でお団子。それが今のオリヴィエさんの格好だ。

「久々の戦場ですね。腕が鈍っていないといいんですが……」

周りが岩で囲まれた場所で、体を解しながら不安になるようなことを言い出してきた。

オリヴィエさんは生前よりも幽霊でいる期間の方が長かったため、仕方のないことだが。

だが、ヤハウエ曰く、体は生前と変わらない状態らしい。となると、問題はオリヴィエさんの腕次第だ。

「はあッ！」

杞憂に終わった。

オリヴィエさんが腰を深く落とし、正拳突きをした。音を置き去りにしたわけじゃないが、もう少して置き去りにしそうなくらいには速かった。

「うーん……生前よりも少し遅いですね。まあ、いいでしょう」

ウソ!? オリヴィエさんの拳は今のよりもっと速くなるの！

驚愕の事実にも何も言えなくなる。

「さて、早速倒しに行きましょうか。あ、空さんは手出し無用ですからね」

「そんなにもイキイキしてるのに邪魔するわけないじゃないですか」  
いつもより声が弾んでいた。

「わかっているならいいです」

俺の方を向かずに答えて、すぐにオリヴィエさんは駆け出した。こつちにやって来た愛衣の偽物を容赦なく殴り飛ばした。たったの一発で愛衣の偽物は消えた。

「本人だと本気では殴れませんが、偽物だと加減しないでいいのは助かりますね。……戦争とも違いますから」

オリヴィエさんの小さな呟きははつきり聞こえたが、聞かなかったことにした。

それからオリヴィエさんは偽物をどんどん倒しまくった。

「めりこみ……パーンチ！」

ヴァーリの偽物を一撃で岩にめり込ませた。

「ジャンツ……拳ツ……グー！」

アルフの偽物を1km以上吹き飛ばした。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ！」

リニスの偽物に数秒の間に高速のラツシュを叩き込んだ。

「私のこの手が光って唸る！ あなたを倒せと輝き叫ぶ！ シヤイニングフィンガー！」

虹色に輝く手をあかりの偽物に叩き込み、爆発させた。

「とどめの……か——」

腰だめに両手を構える。

「め——」

手に虹色の魔力が集まりだす。

「は——」

魔力の集束が終わる。

「め——……波——」

それをシャマルさんの偽物に向けて放つ。巻き起こる爆発で他の欠片達もまとめて消し飛ばした。

「……頭痛い……」

確かにオリヴィエさんは強い。強いのだが、今の戦い方を見ていて、聖王ってこんなのでいいのか？ と思わせるような戦い方だ。

「オリヴィエさん……」

一段落したところで声をかけた。

「何ですか？」

「ふざけてます？」

「失礼ですね！ 私は至って真面目に戦ってますよ！」

心外だと言わんばかりに声を荒げていた。実際、真面目なのはわかるし、今のところ無傷だ。だが、あんな戦い方を見てしまっただけでもそう思えないのだ。

やはり聖王様が無双するのは間違っていない……が、必殺技を連発するのはどうかと思う。

「だったら、あの必殺技の連発はなんですか？」

「私が地球にやってきてから覚えた必殺技です！ どれも素晴らしい技なんですよ！」

まるでワクワクを抑えきれない少年のようなキラキラした瞳で力強く言ってきた。

『空君、オリヴィエさん！ もう十分です！ アースラに戻ってきてください！』

エイミーさんから通信が入ったのでオリヴィエさんをアースラに転移させ、俺はその場で消えた。

S i d e o u t

S i d e ヴァーラ

『よ、碎け得ぬ闇。元気してたか？』

フュージョンした状態で碎け得ぬ闇のいる場所に転移した。

碎け得ぬ闇を見つけたので、気軽に声をかけてみた。

「変わりはありません」

『それならいい。これで心置きなく全力で戦える』

万全の相手だからこそ張り合いがある。

『——今からテメエに見せてやるよ。完全無欠の戦いってやつをな』  
パーフェクトゲーム

完全無欠の戦いです！

完全無欠の戦いです！

Sideヴァーラ

『さーと、早速勝負といこうぜ』

左手の人差し指を動かして砕け得ぬ闇を挑発する。

「勝算はあるのですか？」

『当然だ。……ああ、そうだ。一つ聞いてもいいか？』

「なんですか？」

『お前の持つてるエグザミアってのは、お前の魔力の源か？』

「大切な物です。それが無くなれば……私は体が保てなくなってしまう」

アレだけ膨大な魔力を持つのなら、必ず何かあると考えた。そして、それはキリエが言っていたエグザミアで間違いないようだ。

無くなると体が消える。つまり、砕け得ぬ闇は死ぬ、ということだ。だが、最初から奪うつもりはないのでそのあたりのことは問題ない。『お前を消すつもりなんてねえから安心しとけ。むしろ生きてもらわないと、あとで色々言われるに決まってるっての……』

「ディアーチエ……ですか？」

『ああ、お前の考えてる通りだよ——つていつまでも話してる時間はねえなんだ。悪いが最初から飛ばしてくぜ』

「私はあなたを殺したくありません。だから死なないでください。……今の私にはこのシステムのほとんどが制御できませんから。——

——白兵戦システム起動……出力、35%」

白かった服が血のように赤く染まり、顔には赤い痣ができた。魔力量も先ほどよりも更に膨れ上がる。

こりやいいな……！ 益々燃えてきた！

『ドライブ、アルビオン！ 行くぞ！ 超<sup>スーパ</sup>天龍ッ！』

《Emperor Dragon Balance Breaker

!!

自分で名付けた超<sup>スーパ</sup>天龍モード。

ブーステッド・ギア デイバイン・デイバイディング  
赤龍帝の籠手と白龍皇の光翼を出して禁手化する。髪は金色に近い  
橙色。両手首に緑色の宝玉が埋まった赤い腕輪、両足に踵部分に青  
く透き通った小さな羽根がついた白いシューズ。

本来、二つの神 器は相反するものだが、ヤハウエの神様パワーで  
上手い事混ざってるらしい。

神様はすごい。それ以上は考えないことにしている。

『オラッ！』

開始の合図など存在しない戦い。先に動いたのは俺の方だった。  
砕け得ぬ闇に接近し、右ストレートをお腹に一発を入れる。

『チツ……』

小さな舌打ちをする。

俺の攻撃は彼女にギリギリのところまで防御魔法で防がれ、俺の背後  
から赤黒い巨大な手が迫って来た。

『フンッ！』

武装色の覇気を脚に纏い、その場で独楽のように一回転して弾い  
た。

「消えろ」

口調が若干変化した砕け得ぬ闇が、小さな体には不釣り合いな巨大  
な剣を両手に作り出して斬りつけてくる。

『消えねえよ』

左右から迫ってくる剣をそれぞれの手で掴む。

魔力なしでなら単純な力は俺の方が強い。

相手が自分の力を強化するよりも先に半減の力を使って耐久力を  
減らし、倍加の力で自分の力を増やす。すると、簡単に剣は砕け散つ  
た。

「まだだ。貫け」

攻撃を防がれたことに眉一つ動かさず、数本の槍を投擲。数は多い  
とは言えないが、一本一本が大きい。即座に破壊するのは難しいと判  
断した。

《Half Dimension!!》

白い靴の青い宝玉からアルビオンの声が響く。



S i d e 美桜

「へえ……そういうことなんだね」

クロノとかいう少年に頼み、ヴァーラと砕け得ぬ闇？ とかいう子の戦闘を見せてもらっていた。

そして、ヴァーラという少年は空君とヴァーリ君の二人が合体して生まれた存在だと知って、より強い確信に至った。  
フュージョン

空君は間違いなくハル君だ。

先程会ったときは否定されてしまったが、それは記憶が無くなって  
いるか封印でもされているせいで分からないだけだろう。

でも、困ったなあ……。

ハル君もとい空君はこの世界の人達と仲が良い。決して断ち切れない絆がある。確かに彼には帰ってきてほしい。その想いが一番にある。だけど、彼らを無理矢理引き裂くわけにはいかないのだ。

「話だけでも聞いてもらえないかな？」

S i d e o u t

S i d e ユーノ

姿が変わったヴァーラが不敵に笑った。

凄いや魔力だ……！

モニター越しで二人の戦闘を見守っている。僕がここにいるのは皆のようにデバイスが無いからだ。

バリアジャケットのない僕らは、下手をすれば命を落とす。それをクロノに危惧されて、アルフやリニスさんなども外に出していない。

「頑張つて、空、ヴァーリ」

安全な場所から応援することしかできない自分に悔しさを感じながらも、モニターから一時も目を離さずにいた。

S i d e o u t

S i d e ヴァーラ

『宣言しといてやる——お前は、今から俺に指一本触れることさえ出来ずに負ける』

「愚かな——ッ!？」

砕け得ぬ闇が何かを言っている最中に接近して蹴り飛ばした。小さな体は地面に墜ち、巻き起こった砂埃によって姿が確認できない。『時間がねえんだ。さっさとやられる。へいつでも使える準備しとけよ』

『へうん!』『へええ!』『へああ!』『へはい!』

砕け得ぬ闇を砕くために、なのは達の誰かにカートリッジを打ち込んでもらわなければならぬ。

『——ビッグバンかめはめ波!』

ほぼノーチャージでさらなる追撃。だが、手応えがない。防がれたようだ。

砂埃が晴れると、先程とは比べ物にならない数の巨大な槍が迫って来た。

『だから、言っただろ。お前は指一本触れることさえ出来なかつて』

《DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide

DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide

!!!!!!!!》

《DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide

DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide

!!!!!!!!》

一度でも相手に触れればアルビオンの力は効く。半減の力が発動し、槍が小さくなり、迫ってくる速度も落ちる。

さらには砕け得ぬ闇の力を半減し、その分を吸収して自分の力にしている。

自分に当たりそうな攻撃だけを避けた。

『攻撃が随分お粗末だな』

これはカートリッジを使うチャンスが近いかもしれない。

再び、砕け得ぬ闇に接近。

向こうも二度も同じ手は効かないと言わんばかりに、巨大な手で掴

みかかって来た。

だが、何も掴めなかった。

『こつちだウスノロ』

「ツ!? ……今のはなんだ?」

『ま、所謂残像拳ってやつだ』

高速で移動して、相手に残像を認識させて攻撃を躲す。

フェイトやアリシア、明日奈も似たようなことが出来る技だ。

『多重影分身の術』

印を素早く結び、忍術を発動。大量の分身を一気に作り出した。その数——約二千。本来、ものすごい膨大な魔力を使うのだが、元々の魔力と碎け得ぬ闇から奪った魔力も相まって、これだけの人数に分身してもまだ余裕がある。

『死ぬなよ、碎け得ぬ闇』

二千人の分身が一斉に迫る。それぞれが倍加をして加速しながら。

防ごうとして周囲に魔力弾や剣、拳、槍を作り出すが、半減の力で速度は落ち、小さくなり一つも当たらない。

『て!』

最初の十人が上に蹴り上げる。

『ん!』

次の二十人が殴り、蹴り、更に上に押し上げる。

『りゅ!』

次の三十人が同じように繰り返し、より高く天に押し上げる。

『う!』

そこから四十人が地面に向かって叩き落としていく。

『二千!』

砲撃、頭、拳、脚。様々な攻撃が残りの分身から放たれ、地面に打ち付ける。

『魔龍連——ん?』

魔力を右手に集めてとどめの一撃を入れる————ことはなかった。

『……気絶してんのか。やり過ぎたな』

地面に横たわる少女を見て、これ以上は不要だと判断し、拳を止めたのだ。

『砕けないから砕け得ぬ闇なのに、砕けちまったな。ま、結果オーライだからいいか』

なのは達を呼び寄せ、カートリッジを打ち込む。制御プログラムは無事に起動し、これ以上の暴走の心配は必要ないようだ。

『俺も限界か……』

フュージョンの限界が来た。意識が徐々に途切れていき、二つに割れるような感覚と共に完全に意識をなくした。

Side out

Side 空

砕け得ぬ闇を倒したが、ケガが酷かった。ヴァーラ（実質、俺とヴァーリ）が相当やり過ぎたせいだ。

そして、今はアースラ内の医務室にて気絶中の少女の治療をしている。

ちなみにアミタさんは俺達の戦闘中にアースラに到着していたらしく、キリエさんと話し合ってるそうだ。

「おい、空！　いくらなんでもあれはやり過ぎではないか！」

加えて王様からの説教も受けている。

「いやー、強い相手だったからつい燃えちやつて……」

王様に顔だけ向けながら、トワイライト・ヒーリング聖母の微笑みで治療を続ける。

砕け得ぬ闇——本来の名前はユーリ・エーベルヴァインだということをシユテルが教えてくれた。

「……よし、これでもう平気かな」

完全にとまではないかないが、目立つようなケガはほとんど治せたはずだ。あとは本人が目覚めるのを待つだけだ。

「俺、お昼の準備してくるからユーリのこと頼むね」

「言われなくともわかっておる！」

部屋を出てアースラのキッチンに入り、気合を入れて料理作りを開

始した。

「良い匂いね。これはあなたが？」

「はい、そうですよ」

キッチンでカレーとヴィヴィオの要望でハンバーグを作っていると、黒髪の女性が声をかけてきた。遥とかいう人と俺を勘違いしていた人達の一人だ。

「あの、えつと……」

「……？ ああ、もしかして私の名前？ 私は朝馬香澄よ。香澄でいいわ（……記憶がない、か。ちよつと辛いわね）」

俺がゴマついていると名前を教えてくれた。名前を言った後で、少しだけ悲しそうな顔していたことに気が付いた。

「俺は龍神空って言います。香澄さんは——」

「さんはいらわないわ。敬語も禁止よ」

「年上の人にそれは……」

「それもそつか。じゃあ……お姉ちゃんでもいいわ。それなら敬語なんて使わないでも平気でしょ？」

そういう問題ではないと思うのだが、呼び捨てにするよりは幾分かマシだろう。

「香澄お姉ちゃん……これでいい？」

「上出来よ（……か、可愛いわね）」

「それで香澄お姉ちゃんはどうしてここに？」

「誰が料理をしているのかが気になって来ただけ。私達の分もあるの？」

「うん、もちろんだよ！」

「ありがとね。……久々にあなたの料理が食べられるんだ……」

その答えに満足したのか、キッチンから出ていった。最後の方に何か言っていたようだが、小さすぎて聞き取れなかった。

「お腹空いたよ……」

香澄お姉ちゃんと入れ替わるように、いかにもお腹が空いてそうな

様子のレヴィが入って来た。

「もうじきできるから待ってて」

「もうじきってどのくらい?」

「五分くらい……かな?」

「ええッ!? あと五分も!? 僕そんなに我慢できないよ!」

余程お腹が空いてるらしくて、たったの五分も待てないそうだ。

これはどうしたものか悩んでいたら、とりあえず冷蔵庫をあさってみることにした。

「あ、チョコがある」

食事前にお菓子を渡すのはどうかと思うが、これで多少の空腹は抑えられるだろう。

「レヴィ、これで我慢してね」

「なにこれ?」

「チョコ。甘くて美味しいよ」

「スンスン……甘い匂いだ」

警戒するようにチョコを見てから、安全と判断してから板チョコを受け取り、包装紙を乱雑に破り捨て、口に入れた。

「! 甘い!」

口に入れると眼を大きく開け、美味しいものとわかると、すごい勢いで食べきってしまった。

「おかわりなの?」

「これ以上はダメ」

両手でバツ印を作り却下した。

「えー!? もっと食べたいよー!」

「ご飯の後でもっと美味しいデザート出すから我慢してくれない? それにちようどご飯も出来上がったから」

「もつと美味しいの!? わかった、我慢する!」

機嫌が直って目を輝かせていた。

「それからこれ運ぶの手伝ってくれない?」

「全然いいよ! 美味しいデザートのためだからね!」

「アハハ、ありがと、レヴィ」

他の人にも運ぶのを手伝ってもらい、食堂で皆にカレーとハンバーグを配る。

デザートは影分身を出して作り始めた。

『いただきます！』

皆揃ったのを確認して、一斉に食前の挨拶をする。  
食べていると所々で美味しいという感想が聞こえる。

「ユーリ、美味しい？」

「はい……とっても美味しいです」

俺の隣に座るユーリに味の感想を聞いてみたら彼女から好評を得られた。ケガは治療が効いているのか、大丈夫そうだ。

「そっかそっか。そう言ってもらえると作った甲斐があるよ」

「これ、あなたが作ったんですか？」

「うん、そうだよ。……意外だった？」

「いえ。むしろ、あなたらしい味だと思います」

俺らしい味？ そんなこと初めていわれたなあ……。ま、悪いこと言われてるわけじゃないからいいか。

「王様は？」

続いてユーリの向かい側に座る王様に聞いてみた。

「フン、まあまあだな」

「嘘は良くありませんよ、ディアーチェ。先程まで美味しそうに食べていたではありませんか。私はとても美味しいと思いますよ」

王様の隣（俺からすれば対面）に座るシュテルが王様の感想を否定してきた。

「う、うるさい！ 余計なことは言わなくていい！」

シュテルの言い方から考えると、王様の口には合っているらしい。

「レヴィは……聞くまでもなかったね」

王様のもう片方の隣の席に座るレヴィは誰よりも早くにカレーとハンバーグを平らげていた。

「おかわりいる？」

「いるー!」

レヴィの皿を預かり、おかわり分のカレーを盛る。皿が目の前に置かれると、ものすごい勢いで食べ始めた。その光景を微笑ましく見ていると、ユーリの手が止まっていることに気が付いた。

「もうお腹いっぱい?」

「いえ、そうじゃないんです。……私が……私みたいな兵器がこんな美味しいものを食べていていいんでしょうか?」

兵器、ねえ……。

「ユーリが兵器だとしたら、その兵器を倒したヴァーラ……というか俺とヴァーリは一体何なんだろうね?」

俺は人間じゃない「ナニカ」、ヴァーリは半分魔王の血を引く悪魔。世間一般からすれば化け物と言ったところだろう。

「それは……」

「あ、別に意地悪してるわけじゃないんだよ。ただ、今のユーリが深く考えなくてもいいことじゃないかな? って思ったんだ」

制御プログラムが打ち込まれた状態の彼女は王様が近くにいることで暴れる心配はない。これ以上何かを壊すことはないのだ。念のために六喰の力も使うつもりだ。

「……では、私はこれからどうすれば?」

そっちの方が重要な問題だろう。

「当面は家に来なよ。それから先のことはこれからゆっくり考えればいいよ」

「……そんなに楽観的でもいいのでしょうか?」

ユーリが心配するのも無理はない。

「んー……大丈夫じゃない? 王様がいれば君が暴走することはないんだし、もしも誰かが君を狙ってるなら、俺が……ううん、俺だけじゃなくて皆が絶対に護るから」

「……………はいっ」

儂い微笑みを浮かべて返事を返してくれた。

「というわけで、今日からユーリは龍神家の一員になりました。王様達も来るよね?」

「我を差し置いて勝手に決めるでない！」

「僕は空の家に住むのに賛成。毎日美味しいご飯が食べられるからね」

「私も賛成です。一文無しの今の私達からすれば、衣食住を約束されているというこれほど素晴らしい提案を断る理由がありません」

レヴィとシユテルは賛成の意を示した。

「って二人は言ってるけど？」

「ディアーチエ……」

ユーリが涙目で王様に訴えかけていた。

「ぐぬぬ……ッ！ ええいッ！ 貴様がそこまで言うのなら住んでやろうではないか！」

「ありがと。四人を歓迎するね」

「フン！」

周りの空気に流されたのが気に食わない王様は不機嫌そうにそっぽを向いてしまった。

デザートでも出せば機嫌が直るだろうという安直な考えで、皆にデザートを配り出した。

「あ、そうそう。今日からユーリは——俺の妹ね」

更に家族が増えちゃいました！

更に家族が増えちゃいました！

S i d e 空

「妹……ですか？」

突然な俺の妹発言に、ユーリは可愛らしく首を傾げながら聞いてきた。

「うん、妹」

「えっと……何がどうなったらそうなるんですか？」

「ユーリは見た感じ、俺よりも年下そうだからさ、家族になるなら妹って感じがしたんだ」

「ディアーチエ達はどのようなのですか？」

「三人の場合は、なのは達にそっくりでしょ？ だから妹ってよりかは友達の方がしっくりくるんだ。もちろん、これから一緒に住むから家族であることに違いないんだけどね」

レヴィも精神年齢的には妹と言えないこともない。けど、フェイトそっくりの見た目がやはりと言ってもいいくらいに彼女を妹扱いできなくさせるのだ。

「なるほど……」

「あとは、周りにお姉ちゃんが多くて妹か弟が欲しかったんだよねー」理由の半分くらいはこれが占めている。

基本的には、俺が（九割方無理矢理）甘えさせられている。だから甘えてくれる存在を心のどこかで欲していたのかもしれない。

「あ、別にお兄ちゃんって呼ばなくてもいいからね。仲の良い兄妹みたいになれたらいいなー、ってぐらいだから」

「フフフ、わかりました。これからよろしくお願いします、空」

「応ともさ！ もちろん王様達もね」

「よろしくー！」

「お世話になります」

「……………」

「あら？ 王様、どうかした？」

他の二人と違い、王様だけは不機嫌そうな顔だった。

「貴様……我の名前を聞いておいて、ずっと我のことを“王様”呼びではないか！なぜ、名前で呼ばぬ!？」

「ディアーチエよりも王様の方が呼びやすく、つい。ディアーチエがいいならそう呼ぶよ」

「うむ！名前で呼ぶがよい！」

「はーい、ディアーチエ。……あ」

今王様とのやり取りであるとあることを思い出した。

「レヴィって新しい名前、忘れてたらしいけど思い出したの？」

「えーっとね……忘れちゃった！」

「そ、そうなんだ……」

レヴィのさっぱりした性格に思わず苦笑いになる。

「シユテルは？」

一方、シユテルの方はレヴィが言わなかったので、自分も言わなかったのだ。

「実は……考えてませんでした」

これは意外だ。シユテルならすぐにでも考えてきそうなイメージがあっただけに、かなり驚きがある。

頭が良くても、自分の名前を考えることは別の難しさがあるようだ。

「なので、あなたが付けてくれませんか？」

「俺が？」

「はい、空が、です。この際だからレヴィも付けていただいてはどうですか？」

「それいいね！空、カツコイイ名前よろしくね！」

シユテルの提案に頷いたレヴィが期待した眼差しを向けてきた。

「……わかった。あんまり期待はしないでね。えーっと、シユテルは星光だから……星奈<sup>せな</sup>。で、レヴィは雷刃だから……美雷<sup>みらい</sup>。それぞれのイメージに合ったもの入れてみたんだけど、どうかな？」

「星奈……気に入りました」

「美雷って名前カツコイイね！」

二人共お気に召してくれたので何よりだ。

「気に入ってもらえてよかったよ。改めてよろしくね、星奈、美雷」  
「……………」

新しい名前に嬉しそうにしている二人を羨ましそうにチラチラと視線を向けている王様が目に映った。

「ディアーチエ、どうかした？」

「べ、別に二人が新しい名前を貰えて羨ましいなどと微塵たりとも考えてはおらんからな！」

「ディアーチエも新しい名前を付けて欲しいそうです」

「シユテル、勝手なことを抜かすな！ た、ただ我だけ自分で考えた名前だと空気が読めぬ奴みたいではないか。だ、だから、その……………だな、特別に貴様に我の名前を付けるチャンスを与えてやろう！ 感謝するがいい！」

折角考えてきた名前を変えてもいいのだろうか。一応、本人からの了承というか命令はされたからいいみたいだが。

「うーん、ディアーチエは……………夜空よぞらでどう？」

「我の名は、夜空……………か。いい……………ま、まあまあだな」

気になったのかは定かではないが、嫌そうなそぶりはないので大丈夫そうだ。

「あ、ついでにユーリも付けてみる？ それとも、元からちゃんとした名前があるから、やっぱいいらない？」

ユーリ・エーベルヴァイン。この名前は誰かが名付けた名前だろう。

「エーベルヴァインはともかく、ユーリの名前はそのままがいいです」  
本人が必要ないと希望するなら変えることは出来ない。

「りよーかい。なら、龍神ユーリ・エーベルヴァイン……………いや、ユーリ・エーベルヴァイン

E ・タツガミかな？」

「ユーリがそうなるんだったら私もアリシア・テスタロッサT ・タツガミがいい！」

聞き耳を立てていたらしいアリシアが俺に抱き着きながら言ってきた。あとからなのは達はどこか不機嫌そうな顔つきでそろそろと

集まって来た。

「アリシアの場合は俺と結婚したらじゃない？」

結婚などしなくとも、一緒に住む家族なのだからアリシアも龍神つて名乗ってもいいのかもしれない。

「じゃあ、結婚して！」

「結婚出来る歳じゃないから無理」

「結婚出来る歳になったら結婚してくれるの!？」

「えっ、嫌だけど」

「ガーン！ 振られたー！ 空は私のこと嫌いななの!？」

「ううん、大好き」

「……………え!? あ、アハハ、そっかそっかー。(ず、ズルい！ そういう意味じゃないって分かってるけど、面と向かって「大好き」って言われたら照れるに決まってるじゃん!）」

顔どころか耳まで真っ赤になったアリシアが何かを誤魔化すように頭を掻きながら離れていった。

「空は、その……………色々とすごいですね」

「？」

ユーリの呆れ混じりのセリフに首を傾げることしかできなかった。

「ご飯を片付け終えて、アミタさんとキリエさんのいる席に向かった。」

「エルトリアに行きましょう。今すぐ行きましょう。思い立ったが吉日、その日以降全て凶日です。今行かないとエルトリアの再興はきつと無理ですね」

「縁起でもないこと言わないでくれないかしら!？」

「冗談に決まってるじゃないですか!」

「冗談にしたって質たちが悪過ぎますよ！ しかもなんか逆ギレしてません!？」

「アミタさん、五月蠅いです」

「私が悪いのですか!？」

「そうよ、相変わらず真面目ちゃんなんだから。ほら、謝ってあげなきゃ可哀そうよ」

「キリエまで!? ……も、申し訳ございませんでした」

『全部冗談に決まってるじゃない(ですか)』

「はあ!?!」

驚くアミタさんを余所に俺達はハイタッチをする。

「あなた達、いつの間にそんなに仲良くなったんですか!?!」

「前前前世で俺の恋人の友人の妹でした」

「それって全くの赤の他人ですよね!?!」

「そうとも言いますね」

「それに私この時代よりも何百年後の存在よ。しかも人間じゃないから前世なんてないわ」

お、そうだった。

二人があまりに人間らしい表情や仕草をするから、人間じゃないいうことをすっかり失念していた。

しかも俺も人間じゃない。

おふぎはそこまでにして真面目に話題に入る。

「それで、エルトリアにはいつ行きますか? 俺の方は準備はすぐに終わると思います」

「今すぐにでも行くことはできません。ただ……」

アミタさんが言うのを躊躇い、キリエさんが続いた。

「時間の移動はあと一度だけ。この意味はわかるわよね?」

キリエさんが言いたいことは、時間転移をもう一度行えば、俺はこの時代に二度と戻ることはできないということだ。

「その辺は問題ないですよ」

二人の心配とは裏腹に、俺は戻れるという確信を持っていた。

「どうしてそう言い切れるのかしら?」

「未来から来た人達が俺のこと知ってということとは、俺はこの世界に何かしらの方法で戻っているということですよ」

少しばかりドヤ顔で二人に理由を話した。戻る方法は家に帰って二亜を連れて行くだけで十分だ。

「……なるほどね。それなら確かに問題はないわ。アミタも文句はないでしょ?」

「はい。それに私達の時間移動に巻き込まれた人達も元居た時代に戻さなければなりません」

「未来から来た人達には俺から伝えておきますね。伝え終わり次第、報告に来るのでそれまでゆっくりして下さい」

二人の下を離れ、今度はヴィヴィオ達のいる席に近づく。ヴィヴィオの隣に腰を下ろすと、先程の話を始めた。

香澄お姉ちゃん達は聞くところによると、未来からではなく、同じ時代の異世界から来ただけらしい。ヴィヴィオ達に比べて簡単に解決できる問題なのでそこまで心配はしてない。

「ヴィヴィオ、アインハルト、トーマ、リリイ、未来にすぐ帰ることが出来るみたいだよ」

「ホントに!? あ、でもすぐじゃなくもいいや」

ヴィヴィオは喜んだと思ったら、今すぐじゃなくてもいいと言い出した。

「なんで?」

「もうちょっとだけ小さい頃のパパを知っておきたいんだ」

ヴィヴィオの話し方からすると、俺は昔のことをあまり話していないのかもしれない。

未来に戻るころには忘れているだろうけど、言わぬが花というやつだ。

「他はどう?」

「私もヴィヴィオさんに賛成です。空さんだけでなくヴァーリさんや他の方も戦ってみたいので」

アインハルトは戦闘狂確定。その気持ちがわからないでもないけど。

「俺もこの時代の空さんと戦ってみたいです! ぜひ手合わせお願いしますー!」

トーマも元気よく拳手しながら、戦いたいと言い出してきた。

「トーマ、小さくても空さんなんだよ? 勝てるとは到底思えないん

「だけど……」

「そんなのやってみなくちゃわからないだろ！ それに学べることもあるかもしれないから、無駄にはならないはずさ」

「おお、カッコイイ。」

「トーマもヴィヴィオと同じでこの時代で何かを学べたとしても、忘れてしまうだろう。でも、俺もトーマと戦ってみたいという思いはある。たとえ記憶に残らないことがわかっていたとしてもだ。」

「わかった。未来に戻るのはいさ少し先延ばしにしようか。それじゃあ、トーマ、試合を——」

「ちよーつと待ったー！ーッ！」

「ぐえッ！」

「トーマを試合に誘おうとしたら、美雷がものすごい勢いで激突してきた。あまりに強い激突だったので、椅子から転げ落ちた。」

「み、美雷？！」

「僕だって空と戦いたいよ！」

「美雷に続いてシユテルやディアーチエ、ユーリがやって来た。」

「私もです」

「我もだ！ 負けたままでは王としての示しがつかぬ！」

「三人共リベンジに燃えていますね」

「どうしてこうなったんだか……」

「三人のリベンジに燃える様子に思わず溜息が出る。」

「面倒なことになったと頭を抱えている間に、誰が一番最初に戦うのか、トーマも含めていがみ合っていた。」

『ドラゴンは力を惹き付ける。前から言っていただろう？』

「ドライグから改めて言われて、ドラゴンの凄さを思い知らされる。」

「俺にリベンジする前になのは、フェイト、はやと戦ってみたら？」

「君等のそれぞれの元となった人がどれくらい強いかわかっているのもいいと思うよ」

『！』

「トーマ以外の三人の動きが止まった。」

「ナノハと……いいでしょう。彼女を倒してからあなたに挑みます」

勝つ気満々の意志がシュテルの瞳から伝わる。

「僕もー！　ヘイトと戦う！」

……ヘイト？　あー、フェイトのこと。上手く発音できないのかね？

「フン。子鴉なんぞ我の敵ではない。が、ここで実力差を覚えておくのも、また一興というものだな」

返り討ちにあつて拗ねたりしないといいけど。

「シュテルちゃん！　私はそう簡単には負けないよ！」

シュテルの視線に気が付いたなのはの方も、その瞳に強い闘志を秘めていた。

「私の名前はフェ・イ・ト！　これから一緒に住むんだからちゃんと叫ぶようにしてね」

フェイトは自分の名前を強調して言った。家族になるのだから、名前をきちんと呼んで欲しいのは当たり前だろう。

「あとで泣いても知らんでー、王様」

はやてはいたずらっ子のような顔つきでディアーチエと視線をぶつけ合っていた。

「ヴァーリはアインハルトと戦う？」

「そうさせてもらう。霸王流をぜひ見てみたい」

「まだまだ未熟ですがよろしくお願いします、ヴァーリさん」

ヴァーリとアインハルトは互いに戦う気満々のようだ。

「トーマとリリイは俺で——」

「私が相手になろう、アヴェニール」

俺が再度誘おうとしたら、シグナムさんに遮られた。

「ウゲッ！　シグナムさんはちよつと……」

「なに、遠慮はいらん。全力で戦おうじゃないか」

心底嫌そうな顔をしたトーマは、その誘いを断ろうとしたが逃げられなかった。

「空さ〜ん！」

情けない声で年下の俺に助けを求めてきたトーマ。

「シグナ——」

「譲らんど。今の私は歯応えのない偽物相手ばかりで不完全燃焼だからな。それとも空が私の相手になるか？」

「ごめんね、トーマ。俺にはシグナムさんを止められないや」  
「そ、そんな〜ッ！」

申し訳なさを少し入れて謝ると、トーマは絶望していた。未来でトーマとシグナムさんの関係が気になるところだ。この様子からして苦手意識を持っていることは間違いない。

ズルズルと引きずられていくトーマと重い足取りで歩くりリイを見送りながら、ヴィヴィオの隣に座った。

俺が座ると同時に、ヴィヴィオのデバイス——セイクリッド・ハートことクリスが俺の頭に乗っかって来た。

「パパ、暇になったの？」

「まあね。ヴィヴィオは？」

「オリヴィエさんとか明日奈さんとかに誘われたけど断ったんだ」

「お互い暇な者同士で何かする？」

「うーん、それだったら………あ！」

「何か思いついた？」

ヴィヴィオが何かを閃いたようだ。しかし、その内容は俺の斜め上に行く発想だった。

「私、パパとデートしたい！」

ガチンコ対決です！

ガチンコ対決です！

Side空

アースラのトレーニングルームの真ん中でヴァーリとアインハルトが向かい合って立っていた。

俺達は二人の邪魔にならないように上から眺めている。

『よろしくお願いします』

『こちらこそ』

『二人共準備は良いみたいだね。それじゃあ、戦闘始め！』

二人が挨拶を交わして、エイミーさんが戦闘開始のブザーを鳴らした。

ヴァーリはすぐさま上昇し、フランス・ブレイカー禁手を使う。その間、アインハルトは何もせずに眺めているだけだった。恐らく、ヴァーリの本気が見たいがために敢えて何もしなかったのだろう。

「パパはこの勝負どっちが勝つと思う？」

「ヴァーリ」

ヴィヴィオの質問に自信をもって答えた。

『(……即答とか、ただだけヴァーリ大好きなんだ……)』

皆から変なものを見るような視線を向けられた気がした。

「どうしてそう思うの？」

「白龍皇の半減の力はアインハルトじゃ、相性最悪……というか、誰に対してもチートを発揮できるからね」

能力の効果がないのは神格を持つものくらいだ。効いたとしても魔王や神王にはまだまだ勝てないだろうけど。

《Half Dimension!!》

ヴァーリが半減する空間を展開するとアインハルトの速度が下がる。しかし、魔力強化を使い、一気に速度を上げてきた。予め、魔力強化を抑えることで半減されたときにすぐに対応できるようにしていたのかもしれない。

『考えは悪くない。だが、甘いな』

この三か月、ヴァーリは強くなっている。今のアインハルトのような手段をする相手のことを考えないはずがない。

大量の魔力弾を生成し、放つ。

最初の内はステップを踏んで躲したり、拳や脚で撃ち落としていたが、徐々に対応しきれなくなり直撃した。

《Divide!!》

そして、半減の能力が発動。

『ッ!?!』

皆が驚いてるのも無理はない。白龍皇の力は普通なら相手に直接触れなければならぬのに、能力が発動したからだ。

この技は未完成もいいところで、欠点は当然存在する。通常的能力とは違って、一回の攻撃に付き一度しか半減出来ない。でも、そのところは物量でカバーしているので、魔力量の多いヴァーリにとつては欠点になっていない。

「空さん、今のはどういうことなんですか?」

質問してきたトーマ以外のメンバーも聞きたそうにしていた。

「種明かしをするとね、ヴァーリは魔力に上乘せして半減の能力を発動させたんだ」

一見、簡単そうに聞こえるが、能力を飛ばすということは実際にやってみるととても難しい。

ちなみに、俺の場合は元からそういう仕組みで作られている禁手なので、ドラグーンから出る射撃が当たれば発動できるようになっている。

『霸王!・空破断!』

アインハルトが碧銀の衝撃波を放つが、半減された状態ではヴァーリに届くころにはそよ風となっていた。

接近して攻撃するも、遅すぎて簡単に躲される。

ヴァーリのパンチがアインハルトの腹に入り、吹き飛ばされた。

『降参するか?!』

『いいえッ、まだです……!』

床から立ち上がり、構えなおした。

その眼は死んでいなかった。それどころか、より強い輝きをオツドアイの瞳は持っていた。

「頑張れ、アインハルトー！」

そんな姿に心を動かされて、つい大声で応援してしまった。

俺の声が聞こえたらしいアインハルトは、(恐らく俺に向けて)小さく笑ってから、再びヴァーリに視線を向けた。

『……空さんに応援されたのであつては、そう簡単には負けられませんね』

『勝てると思ってるのか?』

『勝てるかどうかじゃありません……』——勝ちます!』

アインハルトが気合を入れて発すると共に彼女を中心として碧銀の魔力の暴風が吹き荒れる。

やがて風が集まりだし、アインハルトの両手に巨大な龍の顎、背中に二対四枚の翼を形成した。

「あれはアインハルトさんの奥の手——霸王・天龍嵐舞。……

パパの技を真似ただけだね」

元になったのは、ブラステッド・ギア赤龍帝の籠手を纏った時に使う技、紅天龍撃拳を

放つときに出る炎の翼だろう。

俺と戦ったときにも出して欲しかったよ。

『行きますー!』

半減されてまともな速さが出ない自らの足ではなく、背中の翼を羽ばたかせて発生した風を蹴ることによって体を移動させた。

接近を許すまいとヴァーリが魔力弾の雨を降らす、アインハルトの周りで吹き荒れる風が弾き飛ばす。

そして、ついに攻撃の届く範囲までの接近を許してしまった。

『せいっ!』

アインハルトが右ストレートを打ち込む。ヴァーリは左に躲したが鎧の至る所に亀裂が入った。完全に躲したと思っても、高圧縮された風が鎌鼬となり、攻撃になったようだ。

攻撃を完全に躲しきるには、かなりの距離をとらないといけないだろう。

『まだですー!』

風を蹴つての移動方法は魔力強化しているときよりもずっと速い。またしてもヴァーリは接近を許し、怒涛の連撃がアインハルトの拳から繰り出される。直撃は避けているが、拳が振るわれる度にヴァーリの鎧の亀裂が広がり、ついに――

『はあッ!』

粉々に砕け散った。しかも、鎧に一度も触れることなくだ。逆に言えば、ヴァーリに一度も致命傷を与えられていないことにもなるが。鎧を砕かれたことよってヴァーリの素顔が露わになった。だが、その表情は鎧を壊されたことを気にした様子が感じられない、いつも通りのものだった。

『鎧なら空に何度も壊されてる。今更驚くことじゃない』

特にこの三か月の間は俺の龍精霊化の特訓もあつたので、一日に十回以上は壊れていたと思う。

『それに鎧だけが俺の使うことのできる技じゃない』

左手に赤い籠手を出して右腕で刀を抜くように引き抜くと、刀身に緑色の宝玉が埋まった赤い大剣になった。

『……そちらも使っていただけとは光栄ですね』

赤龍帝の力を見て、畏怖どころか歓喜に満ち溢れていた表情だった。

『はあああああああああッ!』

二人同時に駆け出し、二人の叫び声と大剣と拳が衝突。決着が着いた。

「チート過ぎですよ……倍加。半減もですけど……」

俺の背中に背負われているアインハルトが愚痴を漏らした。

それに賛同するかのように、周りの皆も頷いていた。

「ま、二天龍は強いから、落ち込む必要なんてないさ。アインハルトはまだまだ若いんだからこれからだよ」

軽く励ましてからアインハルトを長椅子に寝かせる。

「次は誰が戦うの?」

「トーマ君とシグナムさんだって」

俺の質問になのはが答えてくれた。

当の本人達はすでにトレニングルームに立っていた。

トーマはすでにリアクトをしてる状態でシグナムさんもレヴァンティンを構えている。

「トーマのあの格好ってヤンキーみたいだから、見た目だけで言ったら完全に悪役だよね」

銀髪に黒い服。赤い痣が肌全体に出ている。

「パパ、それ本人も気にしてると思うから言わないであげてね」

ヴィヴィオのお願いに素直に頷き返し、始まった試合を見ることにした。

『行くぞ! アヴェニール!』

シグナムさんが先手を取り、魔力の斬撃を連続で四つ放つ。

『危ないかもだよ、トーマ!』

『任せろリリイ! その幻想ぶつた切る!』

色々ツツコミたいセリフを叫びながら大剣を四回振るう。

ガラスが割れるような甲高い音はせず、大剣に触れた斬撃は静かに消えていった。

『私の攻撃を消し去った……? フツ、面白い……面白いぞ、アヴェニール!』

『(リリイ、やべーよ。シグナムさんがめっちゃ喜んでるよ……)』

『(勝負が着くまで止まるわけがないよね……。とりあえず、頑張ろ?)』

楽しそうに笑いながら攻撃するシグナムさんに対し、それを防いでいるトーマの表情はどんどん青褪めていく。

『飛竜一閃!』

素早くカートリッジをロードして、剣から連結刃に変わったレヴァンティンを技名通りに一閃。

『銀十字!』

銀色の十字架の付いた本が開かれ、大量の紙がトーマの周囲にばら

撒かれる。

「あれで防げるのか？」と誰もが思った。そして、その結果はすぐにはなかった。ばら撒かれた紙の一枚一枚が小さな爆発を起こし、連結刃の軌道をずらしたのだ。

ああいう防ぎ方もあるのか。

連結刃の攻撃は不規則で動きが読み辛い。トーマはそれを下手な鉄砲も数撃ちや当たる作戦で防いだというわけだ。

「流石は未来の俺の弟子。ドヤア……」

『ハーレム王に、俺はなる！』

『トーマ、あとでちょーっとお話ししようか』

『え、っ？ ってグアアアアアアアアッ！』

独り言をつぶやいてドヤ顔でいると、決着が着いた。――

トーマの負けという形で。

あ、あれえく？ 結構善戦してたと思うんだけどなあ……。まあ、最後の方にハーレム王になるとかなんとか言ってたけど、戦闘中にそんなこと言ったらそら負けるよね。

「流石は未来の俺の弟子とか言ってるドヤ顔かましてたけど、その弟子負けてるよね。今どんな気持ち？ ねえ、どんな気持ちなのかな？

教えてよ、パパ」

「……相手が戦闘<sup>シグナムさん</sup>狂だから仕方がないんだよ。それに育てたとはいっても勝てるとは言っていないし」

完全な負け惜しみとわかっていながら、ヴィヴィオは生温かい視線で受け止めていた。

そもそも最後はトーマが悪い！

「パパがそう言うならそういうことにしといてあげるよ」

グヌヌ……ッ！ 娘に上手を取られるとは……何たる不覚！

『星奈ちゃん！ 次は私達の番だよ！』

『はい、ナノハ。あなたに勝ってヒロインの座でもいただくとしましよう』

『絶対に上げないよ！ 空君のヒロインは私だもん！』

『べつに私は“空”のヒロインとは一言も言ってませんよ』

『~~~~~ッ!』

『まあ、そんな座はいりませんが』

ん? 俺が唸ってるうちに話が進んでた?

いつの間にかなのはと星奈がトレーニングルームに立っていた。シグナムさんは椅子に座って休憩していた。トーマはリリイにどこかに引きずられていった。悲鳴っぽいのが聞こえたけど、多分違うだろうと思いい気にしないことにした。

「この試合はどっちが勝つと思う?」

「うーん、ギリギリ……なのはかな」

「理由は?」

「互いに使えるものは同じ魔法。だけど、なのはには加えて覇気がある。そこが分かれ目かな。ギリギリって言ったのは星奈は頭の回転が速いから、そこに苦戦するんじゃない?」

試合は二人の魔力弾のぶつけ合いから始まった。

なのはのアクセルシューターと星奈のパイロシューターは同じ魔法のようだ。厳密に言うとなのは魔法を星奈がコピーしてるようなもの。

「これは……星奈の魔法には炎熱変換が入ってるのか!」

ユーノが驚きの声を上げた。

俺が前に戦ったときには、炎熱変換が使う素振りはなかった。この三か月の間に覚えたのだろう。

星奈が変わってるなら他の二人もかな?

あとに戦う二人をチラリと見てから、試合に視線を戻した。

なのはが星奈にデイベインバスターを撃ったが、星奈が撃ったブラストファイアーで相殺。しかし、その後次に次なる砲撃が星奈から放たれた。

慌てて回避したなのはに更に砲撃が飛んできた。

ブラストファイアーの三連射目だ。

二連……いや、三連射!?

星奈の成長は俺の予想を遥かに上回っていた。

回避が間に合わないとなのはは判断し、プロテクションで防いだ。

『すごいね、星奈ちゃん。今のは危なかったよ』

『ありがとうございます。今ので落とす気でいたので、耐えられたのは少し残念です』

『にやははは。悪いけどそう簡単には落とされないよ!』

そこから二人は互いに砲撃や射撃をしては相手にされてを繰り返す、最大の一撃で決着をつけることにした。

『全力全開!』

『疾れ、明星。<sup>あかほし</sup>すべてを焼き消す炎と変われ』

『スターライトオツ! ブレイカーアツ!!』

『真・ルシフェリオン……ブレイカーツ!』

桜色と赤色の砲撃がぶつかり合った。あまりの眩しさに直視できなくなり、両手で顔を覆った。

「ホントにパパの予想通りになったね!」

「星奈の成長に驚かされたから、途中から外れるかもって思ってたけどね」

勝者はなのはだった。俺の予想通りギリギリ、という形でだ。

『空に続いて、オリジナルのナノハにも負けてしまいましたか……』

『今回は運が良かっただけ。次やったらどうなるかわからないよ』

『言われなくとも次は勝ちます』

倒れていた星奈が立ち上がり、なのはが近づいて手を差し出した。

なのはの意図をすぐさま理解した星奈は自らも手を差し出して固い握手を交わしたのだった。

『さあ、僕と勝負だ! ヘイト!』

『もうっ、私はヘイトじゃなくてフェイトだってば!』

『そんなことよりも勝負だ!』

『ううっ……名前……』

元氣一杯な美雷に対し、フェイトは名前を呼んでもらえなくて落ち

込んでしまった。

本日四度目のエイミイさんの開始の合図で、二人は電光石火の動きで戦いだした。

フェイトのはソニックフォーム。美雷のはスプライトフォーム。どちらも速さに重点を置いていけるせいで防御が脆い。一撃でも喰らえばひとたまりもないだろう。

「すごく速い！ 目で追えないよー！」

その速さに驚いているのは未来組だけで、毎日のように見ていた現代組に反応はなかった。

『僕の方が強いぞッ！』

『力は……ねッ！』

腕力では美雷がフェイトよりもやや上回っているらしく、フェイトが押され気味だった。

でも、フェイトは負けている部分を技で補うことで攻撃を防いでいた。

『むむッ！ なかなか攻撃が決まらないな……』

『ゴリ押しで勝てるほど私は甘くないよ』

『ふふん！ そんなこととつくに知ってるさ！ 空と戦って嫌というほど思い知らされたからね！』

途端に美雷の攻撃に変化が起こる。

三か月前とは違い、速さと力任せの戦法ではなくなり、フェイントや魔力を巧みに使い、フェイトを翻弄する。

頭で考えるよりも、本能で戦ってる方が近いのかな？

『うん、良い攻撃だね。——でも、私には通じない』

美雷の攻撃はフェイトには届かなかった。美雷のデバイス——バルニフィカスを上に弾き、バインドで拘束。

『まだ終わってない！』

フェイトの勝ちが決まったと思いきや、カづくでバインドを壊した。

うわーお。なんちゅーバカ力。

美雷は手からなくなつたデバイスに目もくれず、素手でフェイトに

飛び掛かる。

『ひっさーっツ！ エターナルサンダーパンチ！ 相手は死ぬ！』

雑ツ！

必殺名を叫びながら電気を纏った拳をフェイトに振るう。フェイトはそれを——正面から受け止めた。美雷と同じく電気を、それと武装色の覇気を纏って。

『なん……だって……!?!』

『これで終わりだよ』

バルディッシュを振り下ろしたことで試合の勝敗が着いた。

「負けたー！」

皆のところに戻って来た美雷がフェイトに負けて余程悔しかったのか、声を上げた。未来に勝ったフェイトは隣で微笑ましそうにする。

「ヘイトは強いなー」

「そんな変な名前の人知らない！」

『へなあなあ、空君は私と王様どっちが勝つと思ってるのや?』

トレーニングルームに入ったはやてが念話で聞いてきた。リインフォースさんとはすでにユニゾンをしてる状態だ。

「へごめんね、ここははやてって言いたいんだけど、ちよつと不利かな」

正直に言うと、はやてにとって夜空は強敵だ。魔法も戦闘センスもほとんどが上回っていると思う。

『へやっぱしか……魔法は皆ほど覇気もまだ教わったばっかやし、そら仕方ないわ』

「へはやて……でも——」

『へせやけど！ 負けていい理由にはならんや！ 私は自分に出来る精一杯で勝利をもぎ取ったる！』

「へ……そつか。じゃあ、勝ったら……ご褒美あげよつか？ なーんて——」

『へよっしやッ！ 絶対に勝って見せるで！』

ありや？ やる気がすごいや。今更冗談でしたー、なんて言ったら……うん、やめておこう。はやてのやる気が無くなっちゃうかもしれないからね。……終わった後に言ってもダメな気がするのはどうしてだろう？

不思議な問いかけを考えることを中断し、二人の試合を観戦する。

「お？ 意外と押ししてる……？」

「パパ、さっき念話で何か言ったの？」

俺が黙っていたから念話をしていたのか分かったのだろう。

「え？ あ、うん。勝つのは厳しいだろうけど勝ったらご褒美上げるよーって軽く言ったんだ」

「（あー、それが理由か……）パパ、頑張ってるね」

何を頑張ればいいのかさっぱりなので、とりあえずはやてと夜空のどちらも応援することにした。

『ブリューナクー』『エルシニアダガー！』

二人の魔法は同時に発動された。

魔力弾がぶつかり相殺。

『墜ちるがいい、子鴉！』

はやてが接近戦を苦手なことを知っているのか、夜空ははやてに接近してデバイスのエルシニアクロイツをはやての頭目掛けて振り下ろした。

『そう来ると読めてたでー！』

待ってましたと言わんばかりに、自身のデバイスで攻撃を防いだ。

そして、杖を持つ手を片手に持ち替え、空いてる手に青い球体を作り出した。

『螺旋丸！』

腹部に螺旋丸を当て、吹き飛ばした。

『グアッ！』

はやては自分でも理解してる弱点を利用して、逆に相手に大きなダメージを与えた。

螺旋丸を使うことが出来たのは、俺から魔力蒐集したからだ。リインフォースさんがいるのも大きいだろう。

『今のは空の技か。ならばこちらは……倍加だ!』

夜空の魔力が一気に膨れ上がる。

『なッ!? その技がどうして使えるん!?!』

『フン。我は貴様を素体として生まれたマテリアルだぞ? 貴様をコピーしているのだから、我が貴様と同じ魔法を使えることは何ら不思議でもあるまい。現に、シユテ……星奈や美雷もオリジナルと同じ魔法を使っておったではないか』

三人の技名はオリジナルであるなのは達と違っているが、魔法自体は同じだ。

夜空の場合、はやてを基にしているマテリアル。夜天の書に記録されている膨大な魔法データを夜空が持っていてもおかしくはない。

『使える魔法は互いに同じ。勝敗を決めるのは使い手の腕次第ということです、主』

『せやな! 私ひとりじゃ無理でも、リインフォースと一緒にならきつと勝てる! へてなわけで、空君の応援があると嬉しいなあ……なんて』

応援すればいいの?

『頑張れ、はやて、リインフォースさん! 夜空も負けるな!』

『……え?』

三人の動きが固まった。(リインフォースさんはユニゾンしているから、多分というのが前に付く)

『ちよ、空君!? なんで向こうも応援してんのや!?!』

『え、だって、どっちにも頑張ってもらいたいから』

ダメだったのかな?

『貴様に応援されなくとも我が勝つに決まってる! ……だ、だが、まあ……その……応援は嬉しかったぞ』

『何を急にヒロインぶってんのや! それにツンデレはアリサちゃん

だけで十分や!』

『どういう意味よ、はやて! 私はツンデレなんかじゃないわよ!』

『わ、我はべつにヒロインぶってはおらんしツンデレでもない!』

『ツンデレの人は皆そう言うんや!』

『ええいッ、喧しいぞ子鴉! 紫天に吼えよ、我が鼓動! 出よ巨獣!

ジャガーノート!』

『倍加! からの、響け! 終焉の笛! ラグナロク!』

白と黒の砲撃がぶつかる。ただでさえ威力が高い砲撃魔法なのに、そこに倍加が加わっている。ここが頑丈なトレーニングルームではなく、どこかの次元世界だったなら、周囲は跡形もなく吹き飛んでいただろう。

「どれも凄い戦いだったね〜」

はやてと夜空の試合は引き分けという形で終わった。

試合に勝てなかったのでご褒美は無しになり、はやては美雷以上に悔しそうな顔をしていた。

試合後は夜空、星奈、美雷、ユーリ、未来組の三人を連れて龍神家に帰ってきた。今はヴィヴィオと二人で俺の自室で話しているところだ。

「そうだね。今日はもう休んで、デートは明日でいい? それでその次の日が元居た時代に帰るってことで」

「うくん、ホントはもうちよつとここにいたいけど、そうも言ってもらえないもんね」

未来から来た人が過去に関わり過ぎると、未来が変わってしまうかもしれない。それを理解してるヴィヴィオは残念そうにしながら納得してくれた。

「明日のデート楽しみにしてるからね!」

ヴィヴィオが俺の部屋を出ていった。

そのままベッドに横になると、余程疲れていたのか睡魔が一気にやってきてすぐに意識を手放した。

星、救っちゃいます！

星、救っちゃいます！

『起きて。ねえ、起きてってば！』

——誰……？

誰かが俺の体を揺すって起こそうとしている。

『あ、やっと起きた！ もうっ、起きるの遅いよ！ 普段は私よりも早起きなのに……』

寝ぼけ眼を擦ってから目を開けると、桜色の髪が視界に映った。そして、呆れとほんの少しの怒りが混ざった顔が眼前に迫っていた。

『早く着替えて。このままじゃ遅刻しちゃうよ』

——わかった。

簡単に返事を返して、桜色の髪をした少女が部屋を出た後に、部屋を見回した。

——制服は……あれか。

ハンガーに掛けてあった制服を見つけて、すぐに着替えて階段を降りる。

四人用のテーブルの上にはすでに食パンと目玉焼き、野菜、焼けたベーコン、牛乳が置かれていた。

『さ、早く食べよう？』

——ああ。

少女に促されるまま席に着き、食膳の合掌をしてから朝食を口に入れ始める。

——……美味しい。

『ホント!?! ——君ほどじゃないけど、私も料理上手くなってるんだから!』

——……??

一瞬、彼女のセリフの途中にノイズが走った。文脈的に考えると、誰かの料理の腕と比べていたのだろう。

『あ、いけない！ もうこんな時間!』

朝食をのんびりと摂っていると、いきなり少女が慌ただしく席を立ち上がり、食器を片付け始めた。

それに続くようにして俺も片付け、通学カバンを持って少女が先に出ていった方向にある玄関に向かう。

スニーカーの靴紐を結び、立ち上がる――

――あ……。

と何故か勢い良く転んだ。しかも顔面から盛大にだ。起き上がった転んだ理由を調べる前に意識が遠退いていった。

Side空

「イツ……たあ……ツッ！」

自室の床に頭を強く打ち付けることから俺の朝が始まった。

「……俺って寝相悪かったっけ？」

打ち付けた部分を擦りながら呟く。

ベッドから落ちることは初めてだった。

十香達と一緒にだと抱き締められることが多いから落ちることはないだろう。

「今日は一人で寝てたから……なのかな？」

枕元に置いてあるブレイブを身に着け――ようとしたところで、あることに気が付いた。それは恐らく、いや、多分これが原因だと思われることだった。

「何してんだか……」

一人しかいないと思っていたはずの俺のベッドの上に、美雷が幸せそうに大の字で寝ていた。

俺が落ちたの原因は、今の彼女の体位を考えるに、彼女に蹴り飛ばされたからだろう。

「こんなになんか幸せそうに眠っているのを邪魔するわけにもいかないよ

ね」

そう自分に言い聞かせて、顔を洗いに洗面所に向かった。

「パパ！ 早くデート行こつ！」

「はいはい、わかったから一旦落ち着こうね」

朝食後、興奮気味に寄って来たヴィヴィオを宥めながら出かける準備をする。

そのすぐそばでは、美雷が俺の部屋に寝ぼけて入ったことで夜空や星奈に軽い説教をされていた。

「今日は他にも用事があるから夕方前には家に帰るね。お昼は影分身が作るよ」

「わかったわ。へ一応モニタリングはしておくわ。……未来の娘にデレデレすんじゃないわよ？」

「じゃあ、行ってくる。へしないから！」

琴里は俺を何だと思っているんだろうか。

「行つてらっしゃい」

皆に見送られて家を出た。

S i d e o u t

S i d e 琴里

空は一人で家を出た。ヴィヴィオと一緒にではなく、だ。

理由はヴィヴィオが言うには待ち合わせをした方がデートらしいから、だそうだ。

同じ女としてはわからないこともないわね。

私達がフラクシナスの指令室でモニタリングの準備をしていると、空がヴィヴィオに指定された待ち合わせ場所の駅前に着いた。

『それにしても、どうして“大人モード”なんだろう？』

今の空は大人になった状態だ。これもヴィヴィオの要望でなっている。

『お待たせー!』

疑問に思いながら待っているとヴィヴィオがやってきた。

服装は青い上着の中にクリーム色のセーター、チエック柄のスカート、膝下までを覆うブラウンのロングブーツを履いていた。着ている服は狂三や夕弦が貸した。

『べつに待ってないけど』

空がここに着いてから五分もしないでヴィヴィオが着いたのだから、待ってないと言っても充分だろう。

『で、どうして俺もヴィヴィオも大人モードなわけ?』

『子供の状態だとデートっぽくないからに決まってるでしょ』

あなたはホントに鈍いわね……。

十香達の場合は大きくならないとデートには見えない。でも、ヴィオと空の身長差はそこまでないから子供のままでも良かったと思う。結局、姿を変えてヴィヴィオの機嫌を損ねるのは良くないと考えて、このままにいるようにさせたのだが。

『ヴィヴィオはどこか行きたいところはある?』

誘ってきたのは相手側だから、もしかしたら行きたい場所があるのではないかと思って聞くことにしたのだろう。空にしては良い判断だと思う。

『うーん……出来れば、知ってる人がいない街に行きたいな』

「記憶を封じるにしても、なるべく未来に影響を及ぼす可能性を少なくしたいのは賛成ね。……元からデートなんか言い出すんじゃないわよ、って思うけど……。隣町に行くのがいいと思うわ」

間にあつた私の零した愚痴(?)を空は受け流し、提案されたことをヴィヴィオに伝えた。

『(りよーかい) ヴィヴィオ、隣町に行こう』

二人の眼前にはちょうど駅がある。隣町に行くのならばそれを使わない手はない。二人分の切符を購入し、ホームにやって来た電車に乗り込む。

今日は休日で出かける人が多いのか、電車内はやや混みあつていた。

『一駅だからちよつと我慢してね』

『う、うん……』

空はヴィヴィオとはぐれないように背中に腕を回し、自分の方に引き寄せる。

見た感じ、ヴィヴィオの大人モードの身長は160cmぐらいで、170を少し超えた程度の空との身長差は頭一つ分もない。その為、互いの顔がキスが出来そうなほど近くにある。

近すぎよ、アホ！

『顔真つ赤だけど大丈夫？』

心配そうに空がヴィヴィオの顔を覗き込むと、ヴィヴィオは目を逸らした。

『だ、大丈夫だよ。(ちよつと恥ずかしいけど得した気分！)』

二、三分の間、会話が一切ない状態でヴィヴィオを抱き締めたまま、電車内で過ごす羽目になった。

それを見ていた私達がイライラモヤモヤしたのは言わずもがな。

これで心拍数が上がっていたら、帰って来た時にお話が必要になっただろう。

二人が隣町に着いてから、空からどうすればいいのか助けを求められた。

「鞠亜」

『はい、今出しますね』

名前を呼ぶだけで彼女は理解して、選択肢を即座に出してきた。

?カフェで少し休憩しながら、これからの予定を組み立てる。

?カラオケで日頃のストレス発散。

?大人の休憩所に行く。

『大人の休憩所って何?』

『?は絶対に却下ツ!! 意味は知らなくていいツ!!』

当然の如く満場一致で?が消えた。

「鞠亜! なんてもん出してくれんのよ!」

『私だって嫌ですよ！ でも、結果でこうなってしまったんですから仕方ないじゃないですか！』

鞠亜は自分の意思ではなく、モニタリングしている人の状態や世間一般のデータのデータから選択肢を出している。それ故、彼女が望まない選択肢も出てくることもたまにあるのだ。

「はあ……とりあえず、二択で五秒以内！」

深い溜息を吐いてから気を引き締め直し、指示を出す。

結果は？に三票、？に三票と別れた。

『琴里はどれにしますか？』

「私は？ね。ヴィヴィオが空に向ける視線は恋する乙女のようなものに近いわ。カラオケの室内で二人つきりなんてしたら何するかかわらないもの」

『その発想が出てくる琴里って……もしも琴里がヴィヴィオちゃんの立場だったら——』

「う、五月蠅いわね！ 襲うわよ！ 悪いかしら!？」

そもそも空にアタックする機会は滅多にないのだから、ここぞとばかりに何かしようとするのは当たり前でしょ！ そうでもないかと……そうでもないかと誰かに奪われちゃいそうで嫌だから……。

醜い嫉妬だと自分でもわかってる。でも、それだけあの少年のことが好きなのだ。家族としてではなく、異性として。

想いは夏休みに伝えた。応えは十香の時と同様にわかりきっているから聞いていないが、その時が来たら彼自身が言ってくれるだろう。

「……話が逸れたわね」

コホン、とワザとらしく咳払いをして、二人のデートのモニタリングを続ける。

S i d e o u t

S i d e 空

選択肢は？だったので、携帯で調べてここら辺で人気のあるカフェ

に向かった。

「初めてきたけど、評判通りのお店かもね」

ウェイターに案内され、二人席に向かい合って座る。

「ヴィヴィオは何にする？」

「私は……うん、これにする。パパ……じゃないや。空君は何にするの？」

ヴィヴィオが指差したのはサンドイッチとオレンジジュースだった。

周りに俺達が変な関係だと思われたくないので、言い直してくれて助かった。慌てていたから何人かには怪しまれたかもしれないが、その時はその時だ。

「俺はこれにする」

「ココア……それだけ？」

「朝食食べてからそこまで時間経ってないからね。逆に聞くけど、食べられるの？」

「デートのこと考えてたらお腹空いちやっみたい……アハハ……」  
恥ずかしさを紛らわすために薄っすら赤く染まった頬を掻きながら苦笑いしていた。俺も思わぬ答えに苦笑いを浮かべるだけだった。

カフェで一休みをした俺達はお店を出て、ウィンドウショッピングをしたり、ドライグ達がいないのでペットショップで犬や猫と戯れた。

「ん〜！楽しかった〜！」

雑貨屋を出たヴィヴィオが大きな伸びをした。

今はお昼過ぎくらいで、外食に行く家族やカップルが多い時間帯だ。

「時間はまだある……と思ったけど、デートはここまでにしとくか」「え？でも、まだ——」

「ごめん、先に帰ってきてくれる？ちょっと野暮用が出来ちゃってさ」

「……わかった。今日のデートすっごく楽しかった。また後でね」

予定していたよりも一時間以上も早くデートが終わったせいで、納得いかない顔をしているのは手に取るようにわかる。

ヴィヴィオに申し訳ないと思いつながら、人払いの結界を展開する。途端に人がいなくなり、俺と四人の女性だけが結界の中に取り残された。人目が無くなったので変身も解いた。

「もしかして、お邪魔……だった？」

桜色の髪の女性が気まずそうに尋ねてきた。

この人……今朝の夢に……。

「俺はともかく、ヴィヴィオはそう思ってるかもしれないですね。デートが終わった理由がわからないでしょうからどうなのかは知らないですけど……俺に何か用があるんですよ？」

「うん、大事な話。どうしても聞いて欲しいことがあるの」

なんとなくだが薄々と気が付いていた。俺を「空」ではなく「遥」と呼んだこの人達は、記憶のない前世の関係者なのだろうと、遥という名前は多分、俺の前世の名前なのだろうと。

初めて会ったときは普通に天然かましましたが今の状況では間違えようもない。

「私達の世界に帰って来て」

「準備はいいかしら？」

『はい！』

キリエさんが未来から来た人達と俺に向かって尋ねる。

今からヴィヴィオ達をそれぞれの時代に帰し、俺はキリエさんとアミタさんと共にエルトリアに行き、死蝕を治す。

「(ドライグ達も十香達もOK?)」

『ああ！』『うむ！』『ええ！』『はい！』

中にいる皆から返事が返って来たのを確認すると俺も遅れて返事

をする。

「未来組は私のところに来てねー。記憶封鎖をするわ」

「現代組はこちらへお願いします」

全員分の記憶封鎖を終え、未来組と俺がキリエさんとアマタさんの傍に集まる。

「それでは時間移動のゲートを開きます！」

アマタさんが手にすっぽりと収まるサイズの機械を弄ると、上空にゲートが出来上がった。

「皆さん！ お世話になりました！ そして、ありがとうございます！ た！」

「色々迷惑かけてごめんなさい。でも、ありがとねー！ お邪魔しましたー！」

ホント迷惑かけられたなあ……。つまみ食いするわ、ゴミを散らかすわ、まるで我が家のように寛いでくれちゃって。

「事件に巻き込まれましたけど結果的には勉強になったので過去に来て良かったです！ ハーレム王に、俺はなるので見届けてください、空さん！」

「トーマ、いい加減にしようね？ 皆さん、ありがとうございました！」

うん、トーマは知らん。勝手に頑張って。

「皆さんのおかげでまた一歩進めた気がします。未来でもぜひ手合わせをお願いします」

それは未来の俺達に言ってくれ。

「記憶が封印されちゃうのは残念ですけど、楽しかったです！ バイバイ！ パパ！ ママ！」

……………ママ!?

『ママアツ!? 誰が——あ!』

誰もが気になることを言い残してヴィヴィオ達はゲートの中にくぐってしまった。

「はあ……問題ばかり残すなあ……。まあ、いいか。俺達も行きましようー！」

「はい!」「ええ!」

「皆、またね!」

俺達もゲートをくぐり時間移動をした。

死蝕の進む星——エルトリアに着いた。荒れ果てた土地だけが一面に広がっていた。

「時間移動に博士を連れてこなかった理由が今わかったよ……」

ゲートに入った瞬間、激痛が体中に走った。

病気で体の弱い博士がここを通ろうとすれば、痛みに耐えきれないからだ。

「あ、あれ? 言ってなかったかしら?」

「私達は頑丈で問題ないですけど、天使様にはダメージが行くとは思いいにもありませんでした……」

キリエさんが目を逸らし、アマタさんが申し訳なきように謝ってきた。

「いえ、今更いいです。帰るときは問題ないでしょうから。それよりも博士のところ案内お願いします」

「はい! 直ちに!」

キリエさんとアマタさんが全速力で飛んでいくのについていくと、一軒家に着いた。そこに博士がいるようだ。

中に入り、色んな機械に繋がれた痩せ細った男性がベッドに横たわっていた。

俺は医者じゃないけど、この人はもう長くないことが分かった。

「セフィロト・グラール幽世の聖杯、この人を元気にして」

聖杯から湧き上がる液体を男性に振りかけると徐々に若返り、健康に見える体付きになった。

「……………私は……………ああ、アマタ、キリエ、お帰り。なんだか、体がいつもより軽い気がするよ」

『博士……………!』

ゆっくり目を覚ました博士が体を一人で起こしたのを見て、二人が

嗚咽を漏らした。

しばらくは三人だけにしておこうと思い、先に外に出て——この星を救う準備を始める。方法は二亜に調べてもらってある。

「多重影分身の術！」

印を結んで分身を千人出す。そこから更に分身も一緒になって多重影分身をする。10000×10000で合計100000000の分身が出来上がった。

『黄昏の聖槍、トウル・ロンギヌス 禁手化バランス・ブレイクツ！』

そして100000000の分身一人ひとりが禁手化する。

「頼んだよ、俺！」

『任せて！』

金色の翼を広げて、エルトリアの龍脈と呼ばれる、星の生命線ともいえる場所に向かって散らばる。

二亜が調べた方法では、龍脈に聖槍を突き刺して龍脈を復活させれば治ると言っていた。

「行くよ！ セーのツ！」

全員が配置に着いたのを確認して、聖槍を一斉に地面に突き刺す。

『ヘブンズ・ミラクル 聖槍龍の奇跡ツ！』

突き刺した地面から黄金の魔法陣が展開され、槍の輝きが地中の奥深くの龍脈に伸びていく。

……ッ！ 体力がごっそり奪われる……！

影分身をした上にさらに影分身をして全員が禁手化。これだけのことをして疲れないわけがない。

でも、諦めるわけにはいかない！

口の中に血の味がしようとも、体が軋む音がしようとも耐える。耐えて、耐えて、この星が治るまで耐えぬく。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ！！』

叫び声を上げて一気に聖槍の力を流し込む。最後の一滴まで搾り取るように。

『空、もう限界だ！ これ以上は空に命に関わる！ やめろ！』

十香達が止めてくる。しかしやめない。ここでやめたらこの星は

完全には治らない。中断すれば、また最初からやり直しになり、心は折れるだろう。

だが、俺の意思に反して体は正直だった。聖槍を持つ手に力が入らなくなり、膝が地面に着く。

魔法陣が縮まっていき消えそうになる。

「ダ、メ……ッ！ このまま、じゃ……ッ！」

意識を失いそうになった時――

『俺の力、貸してやるよ』

頭の中に声が響いた。

その瞬間、感じたことのない力が溢れ出してきた。

これは……？ ううん、今はこの星が優先！

聖槍を握り締め、大地に足をしっかりと立てる。

『イッツツケエエエエエエエエエエエエエエエエエツツツ!!!』

眩い光が視界一杯に、世界一杯に溢れるのがわかると、意識を失った。

S i d e o u t

S i d e アミタ

博士とキリエと共にいたら、とてつもなく巨大な力を感じ、眩い光が視界を覆った。

そして、目を開けられるようになってからキリエと目を合わせるなり、慌てて家を飛び出した。

一体誰が今のを起こしたのか心当たりが在り過ぎるからだ。

「これは……！」

玄関の扉を開けて目の前の光景に私達は絶句した。あとからやって来た博士も口をポカンと開けて固まっていた。

死蝕によって死んでいく星が見る影もなく、頬を撫でる柔らかな風に揺れる草木、動物が住まう森、綺麗に澄み渡った川や湖。自然溢れ

るかつてのエルトリアに戻っていたのだ。

「て、天使君は………いた！ アミター！」

「わかっています！」

地面で倒れている少年を抱き起こし、まずは呼吸を確認する。

「死んで、ないわよね……？」

「大丈夫です！ 小さいですがちゃんと呼吸をしています！」

不安そうに尋ねるキリエの心配を吹き飛ばすように大きな声で答える。

「家に運びましょう！」

「ええ！」

天使様を丁寧に運び、開いてるベッドに寝かせる。

「何をしたかわからないけど、途轍もない無茶をしたことだけはわかるわ」

「……彼には返しきれない恩が出来てしまいましたね」

「えーつと、二人共、さつきから私だけ付いていけないんだが……その少年は誰なんだい？ 一体何をして眠っているんだい？」

「もちろん説明します。私達は——」

時間移動を行って過去に行ったことを、様々な出会いがあったことを、彼にこの星を救ってもらったことを包み隠さずにすべて伝えた。

キリエが単独で時間移動をしたことだけは二人で時間移動したことにした。

「そうか………結果的に良かったが、私の言いつけは破ってしまったみたいだね」

『………はい』

「過ぎたことを責めることは出来ない。私やこの星のためなら尚更ね。………だからってお咎めなし、というわけにもいかない。彼を絶対に元の時代に戻す。それが私達の彼にできる精一杯の恩返しだ」

「わかっています！ 絶対に天使様を元居た時代に戻します！」

「ええ、迷惑かけっぱなしなんて絶対に嫌なもの！」

エルトリアが完全に治ったかの調査、天使様の健康チェック、天使様を元の時代に戻すことを同時に進行することになった。

元の時代に戻ります！

元の時代に戻ります！

Side ヴィヴィオ

アインハルトさんと二人でランニング中に他愛もない会話をしていた。

「二人して同じ夢を見るだなんて不思議ですよ〜」

「はい、それに内容も不思議でしたね」

「私達が過去に行つて小さいころのパパ達に会つた。うろ覚えですけど、そんな夢でしたね」

「空さんやヴァーリさんと真剣勝負をして負けたのも夢……というよりは実際に体験したようにリアルでしたけど」

それは私も同じ。夢の中でパパとデートをしたことが本当にあれは夢なのか？ というほどだった。

「おーい、二人共ー！ そろそろ休憩！」

もうすぐゴールに差し掛かるところで、一人の男性が手を振っていた。

「あ、パパ！ うん、今行く！」

待っていたのは私のパパこと龍神空だ。

走る速度を一気に上げ、パパに抱き着く。

「おっと、ヴィヴィオは甘えん坊だなあ……」

「えへへ〜♪ だってパパが大好きなんだもん！」

「ありがと。俺もヴィヴィオが大好きだよ」

「ヴィヴィオさん、汗をかいたのに抱き着くのはうらや……失礼ですよ」

「うわ！」

アインハルトさんに引き剥がされ、地面に尻もちをつく。

私が離れた隙に、アインハルトさんはパパとの距離を詰めていた。

「これからリオさんとコロナさん、ノーヴェさんも来るそうです」

「そうだろうと思つて人数分のお昼ご飯あるからあとで食べて」

「はい、是非いただきます。それと……」

「ん？ ああ、わかってる。時間があつたら相手になるよ」

「ありがとうござ——キヤア！」

アインハルトさんを突き飛ばし、パパの腕を取って歩き出す。

「パパ！ 早く休憩しようよ！」

「お、おう……」

私達のいつものやり取りに段々耐性が出来てきたのか、顔を引きつらせていた。

アインハルトさんもすぐに立ち上がり、私とは反対の方に並んで歩いていた。

「パパ！」

「どうかした？ ヴイヴィオ」

「私、パパの娘になれて幸せだよ！」

S i d e o u t

S i d e トーマ

空さんのようにハーレム王になるにはどうしたらいいのだろうか……？

そのことで頭が埋め尽くされている。そもそも俺がハーレム王を目指すようになったのは、空さんへの憧れが一番だ。

不思議な夢を見て、(本人は間違いなく気が付いてないが)小さい頃の空さんはすでにハーレムを築いていたような気もする。

「おい、トーマー！ 聞いてんのか!？」

身長が低いが俺の上司にあたるヴィータさんが、どこか上の空で聞いている俺に怒鳴り散らす。司令室に呼び出され、何かの話をしていたようだがさっぱり聞いてなかった。

「聞いてません！ それよりも空さんのようはハーレム王になるにはどうしたらいいですか!？」

「んなの知るか！ アイツを真似るな！ ……というかアタシの話を

聞いてなかったとはいいい度胸してるじゃねえか……！」

「せやな、私もそれにはあんまり賛成は出来ないで……」

ヴィータさんだけでなく、その隣に座っていた八神司令にも反対されてしまった。

「なぜですか!? ハーレムは男のロマンだと思います!」

「いや、私は女だから知らんて……。そもそも、ハーレムを作るには条件みたいのがあるんや」

条件……だと……!?

「二つ目、複数人を養えるだけの財力が必要や」

た、確かにそうだ! お金がなければ食っていけないではないか!

今の俺は訓練生で稼ぎはまだまだ少ない! 階級を上げてがっほり稼がねば!

「二つ目、ハーレムメンバー同士の関係を仲良く保つことや」

なるほど! 関係が悪いとハーレムどころではないということか!

「三つ目、その……こういう言い方はあれ何やけど……夜の営み。これ以上は何も言わないから」

その瞬間、体に雷が落ちたような衝撃が走った! そ、そうだ……! 肝心なことを忘れていた! ハーレムとはそういう関係になるということ! つまり、相手を満足させられないようではダメなのだ! こうなったらスタミナも付けないと……!

「あ、最後にこれだけは言っとくで——空君はモテようとしてモテたんじゃない。空君だからモテたんや」

「え? よくわからないんで——」

詳しく聞こうとしたら八神司令の携帯端末に連絡が入った。

『はやて、今いい?』

「え、空君! う、うん、大丈夫やで!」

なんと相手は空さんだった!

急に乙女の顔つきになった八神司令にヴィータさんは頭を抱え出し、両隣にいたアイシスとリレイがひそひそ話をしていた。

「要件は?」

『デートのお誘いだよ。もうじきはやての誕生日だからね』

「そのデート、絶対に行く！ もし仕事があってもヴィータに押し付けるー！」

「アタシかよ!?!」

『あ、アハハ……別にそこまでしなくてもいいんだけど。じゃあ、デートの日取りはそっちが好きにしていいいから。はやての方に合わせる方が楽だからね。じゃあ、またね』

「うん、またね。……………ハッ！」

連絡を終えた後で俺達の存在を思い出し、顔を真っ赤にしていた。

「ゴホン……あー、なんか気分が上がって来たわー。誰かちよどいい相手が……お、そう言えばこのあと高町隊長が来るんやっただなあ……。よし、上官のプライベートを覗いた三人への罰として私と高町隊長を相手に戦ってもらおうか」

『なんて理不尽な理由だ！』

このあとの確定した絶望に白目になりながら、司令室を出ていく。

あれ？ 結局、何の話で呼ばれたんだっけ？

ふと思いついたが、そこまで大事な話じゃなかったのだろうと思いい、戦闘準備を始めるのだった。

「ハーレム王に、俺はなる！」

『トーマ、ちよつと訓練前の運動に付き合ってくれる？ あ、拒否権なんてないから安心してね』

あれ？ これ、戦闘前に死ぬパターン？

Side out

Side 空

「……………あれ？ ここは……あ、エルトリア——」

目が覚めると知らない部屋のベッドで寝ていた。

「——のアミタとキリエ達の家だ」

小さなドライブグが枕元で俺に続くようにして教えてくれた。

「この星は元通りになった？」

「ああ、お前によってこの星は救われた。……無茶したおかげで一週間も寝ていたがな」

「そつかあ。うん、良かった良かった。——え？ 一週間!？」

腕に付けられていた点滴を抜いている最中に告げられたことに驚きの声を上げた。

「星一つを救うということは、龍精靈化以上に力の消費が激しいに決まっているじゃないですか！ それなのに……!」

「わ、悪かったよ。でも、治せたんだから——」

「そういう問題じゃありません!」

「……はい、ごめんなさい」

ヤハウエに珍しく怒られた。無茶をしたことが相当許せないようだ。

これは反省しないと後が怖いな……。

「ところで、話は変わるけど十香達は？」

「あいつらならエルトリアの復興を手伝っている」

死蝕を治したと言っても、死蝕によって生まれた魔獣が消えるわけではないし、壊れたものが戻るわけではない。そう言ったことで十香達が力を貸しているのだろうと結論付けた。

「俺も手伝う——おろ?」

俺のお腹が鳴った。

「はあ……一週間何も口にしていなんだから腹が空いてるに決まっているだろ」

やれやれ、と言わんばかりにアルビオンが呆れていた。

「腹が空くのは元気な証拠だ。これでも食っておけ」

九喇嘛の隣には小型の冷蔵庫みたいなものがあり、中にはおにぎりがいくつか入っていた。形が一個一個不規則なのからすると複数人で作ったのだろう。

「お前がいつ目覚めてもいいように十香達が用意していたもんだ」

九喇嘛に教えてもらい、電子レンジを使ってホカホカのおにぎりを

食べ始めた。

おにぎりの具が一つ一つ違ったので、一週間ぶりの食事はそこそこ楽しめた。

「うちそうさまでした」

気が付けばあつという間に食べ終わっていた。

「さーと、腹ごしらえも終わったことだし、外に出よっか」

ドライグ達を連れて部屋を出て、出口までの案内をしてもらって家の玄関の扉を開けた。

「おおっ！」

視界に一杯に映ったのは、自然豊かな世界だった。一週間前まで荒れ果てていたのが嘘のようだ。

「なんか……こんな景色を見ると、死蝕なんて無くて元からこうだったんだぞー、俺がしたことはただの夢なんだぞー、って思っちゃおうよ……」

「それはわからんでもない。だが、お前がやったことは紛れもない現実だ。誇りに持て、とは言わんが、お前が救った世界をその眼に焼き付けておくといい」

実際、俺一人では無理だった。聖槍の力はヤハウエのものだし、何故かはわからないが、最後に俺が力尽きかけた時に力が溢れてきた。

あの声、誰だったんだろう……。誰かは知らないけど、助けてくれてありがとうございます。

力を貸してくれた謎の声に心の中で感謝をして、ふと目に入った川に向けて歩き出した。

「天使様?! 目が覚めたのですね?! 良かったです!」

歩いてる途中で後ろからやって来たアマタさんが、俺の顔を見るなり、両手を上げて喜んでいた。

「あ、皆さんにも連絡しないと! 博士! キリエ! 天使様が目覚めました!」

連絡を終えるなり、アマタさんは俺を抱きかかえて先ほどいた部屋に入った。折角外に出たのに戻されてしまったことに多少不満があったが、心配をかけたのだから仕方がないと思い、何も言わないこ

とにした。

「天使君が目が覚めたってホントなの!？」

「あ、キリエさん。おはようございます」

「よ、良かった〜! 天使君が目を覚ました!」

部屋の扉を力強く開けて入って来たキリエさんは、目を覚ましている俺を見て余程安心したのか、その場で座り込んで泣き出してしまった。

『空(さん)／だーりん／少年)！』

キリエさんに続いて十香達が雪崩れ込むように入って来た。

機械の体のキリエさんとは違い、人間の体の十香達は大粒の汗を額に浮かべていた。

知らせを聞いてから、それだけ急いで戻って来たのだろう。

「おはよう、みんな——どわっ!」

十香達にタツクル……ではなく、抱き締められた(抱き締められるというよりはもみくちゃにされるの方が合っているだろう)。

前にも無茶して目が覚めたらこんな感じだったっけ……。

皆の輪から何とか抜け出したら、扉の付近に白衣を着た男性がいた。ここに来た時に見た男性——グランツ・フロリアン博士だ。

「君が私を若返らせ、この星を救ってくれた人でいいのかな?」

「らしいです」

未だに実感が湧かないので他人事のように答えた。

「ありがとう。無茶をした娘を助けてくれて、死ぬはずだった私を救ってくれて、そして、この星を——エルトリアを救ってくれて、本当にありがとう!」

それなのに、博士は白衣が汚れるのも気にせず土下座をした。

どうして日本の独特の謝り方を知っているのか問いただしたいところだが、今はそれどころじゃない。

「あ、頭を上げてください!」

男性の頭を無理矢理持ち上げて立たせる。

「だが、君には……」

「えっと、俺は人として当然のことを……」

この言葉はおかしいな。俺、人間じゃないし、星を救うのは当然と  
いうか滅多にないからね。

「たまたま……」

たまたまで星一つが救えるとかギャグ漫画かよ。

「キリエさんとアミタさんの故郷を救いたいという想いに感銘を受け  
まして……」

これだ！ と思ったが、なんか嘘くさいな……。

「俺、天使なんで！」

うん、これだね！

「『これだね！』 じゃないわよ、アホ！」

ようやくまともな(?)セリフが思いついたので言ってみたら琴里  
に頭をはたかれた。

「……もういいじゃないですか。この星は救われた。博士も元気に  
なった。めでたしめでたしのハッピーエンドなんですから」

「それではダメだ！ 君には返しきれない恩が出来てしまったんだ！

私に出来ることなら何でも言ってくれ！」

「私も博士と同じです！」

「私もよ」

「元居た時代に帰していただければ十分です」

「その準備なら一日で終わった！ いつでも君達を帰すことが出来る  
！ だが、それだけでは足りない！」

早ッ！ しかも足りないって……。

困ったことになってしまった。どうやったらこの三人が納得いく  
のだろうか。

「あー……じゃあ、作って欲しいものがあるんですけどいいですか？」

「何だい!? なんでも作ってみせよう！ 超絶美少女(ロボット)のお  
嫁さんだって問題ない！」

『それはいらぬ。作ったらソレぶっ壊すから』

軽く暴走しかけてる博士を十香達が冷たい声音で物騒なことを  
言って止めた。

キチンと俺の要望を伝え、完成するまでの間はしばらくこの家に滞在することになった。

エルトリアが元に戻ってから二週間ほどが過ぎた頃、博士に頼んで作ってもらったものが完成した。

時々手伝いもしたが、高度な技術過ぎてついていけないことがほとんどだったので、キリエさんやアマタさんに勉強を教えてもらいました。

時折、魔獣の討伐や復興の手伝いもした——のだが、この星に残っていた人々に俺のしたことが知れ渡っていたらしく、崇められたり、供え物を渡されたり、挙句の果てには銅像まで建てられそうだった。

「これが君に頼まれていたものだ」

「ありがとうございます—」

博士から完成されたものを受け取り、帰り支度を済ませる。

「よし、帰ろっか！」

ドライグ達や十香達を俺の中に入れて、草原に立つ。

キリエさんとアマタさん、博士だけにしか伝えて無かったのだが、知らぬ間に残っていた全員が俺の見送りに来ていた。

ゲートを上空に開いているので、あとは通るだけだ。

「行ってしまうんですね……」

後ろには悲しそうな顔をするアマタさんとその隣にはキリエさんと博士がいた。

「いつまでもここにいるわけにはいかないですから」

帰る場所があるんだから、帰らないと皆に怒られちゃうよ。

「寂しくなるわね」

アマタさんを茶化すのかと思っていたが、キリエさんも同じように別れを惜しむ表情をしていた。

「だったら、また来ればいいじゃないですか」

「ですが、時間移動は……」

「遊びに来る程度なら大丈夫ですよ」

「フフフ、そうね。その時はまたあなたのお家に泊めさせてもらうわね♪」

「ぜひ歓迎します。だから、さよなら、じゃなくて———」

「またね♪」

飛行魔法で浮かび上がり、ゲートに向けて加速していく。

「天使様！」

「天使君！」

「はい———ッ!？」

あと数mのところまで二人に呼び止められた。

忘れ物でもしたのかと思って後ろを振り向いた瞬間に両頬に温かいものが触れた。

『んなッ!？』

「あ？ え？ へ？ い、今の……」

「またお会いしましょう！」

「またね〜！」

トン、と軽く押され、何か言おうとする前に二人はそそくさと俺の傍を離れていき、俺は二人にされたことに呆けたままゲートに吸い込まれていった。

通るときに発生する痛みで我に返ったのは言うまでもないが。

S i d e o u t

S i d e アミタ

「あああああああああああッ！」

天使様が居なくなっただけのこと。とあることに気が付いた。

「ど、どうしたの、アミタ!？」

「大変ですよ、キリエ！」

「一体なにが大変なの？」

絶対にしてはいけないことを私達はしてしまったのだ。

「天使様を送った時代の座標を間違えていたんです……!？」

「な、何ですって……!？」

流石のアミタも内容が内容だけに焦りを隠せないでいた。それも

当然のことだ。なにせ恩人を元の時代に帰すのではなく、  
別の世界の違う時代に送ってしまったのだから。

恩を仇で返すような真似をして申し訳ありません、天使様！ この  
命に代えてもあなた様を絶対に助けに行きます！

決意を胸に、彼を助ける方法を探し始めたのだった。

## 衛宮ヒーローズ編

未来感ハンパないです！

未来感ハンパないです！

S i d e 空

.....ここ、どこ？

ゲートを潜り抜けた先は空の上だった。

降下していき、どこかのビルの上に降り立つ。

眼下に広がる道路に置かれている看板や標識からして、今いるのは日本……だとは思うのだが、違和感がある。

「これだけ発展していて過去とは考えにくいかな。だから未来の世界。または——異世界、かなあ……」

少なくともこの世界は俺の世界の未来ではない。この世界の人々からは魔力があるとある場所を除いて一切感じられないからだ。

何かしらの理由で魔力が世界から無くなっていったとしたら話は変わってくるのだが、そんな大事は滅多にないだろう。

「皆はどう思う？」

『私も異世界に賛成。しかも私達のいた時代よりも時間が進んだ世界で間違いないわ。下にある時計見てみなさい』

琴里に言われた通りに、下の方にあつた大きなデジタル時計に目を向けると、そこには今日の日付と西暦が表示されていた。

「.....2253年.....」

思わず現実逃避をしたくなった。

付きつけられた衝撃の事実からなんとか立ち直り、これからの行動を考え始めた。

まずはこの世界がどんな世界なのかを調べる。もしかしたらの場

合も考えて、俺達のいた世界の未来なのかも調べることにした。

「二亜、お願い」

『任せてー。……………はい、終わり』

軽く返事をしてから数秒ほどで調べ終えた。

『ここは私達のいた世界の未来じゃないね。完全に異世界だよ。この世界では男女の立場が一変して、女尊男卑が当り前みたいだから男である少年も気を付けてね』

「そっか。ありがとう」

この世界は俺達と関わりがないのなら過去への影響は考えなくても大丈夫そうだ。

女尊男卑の風潮になったのは、女性にしか動かせない世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」、通称「IS」の出現によってからだそうだ。

しかし、女性にしか動かせないはずのISを二人の男（どちらも日本人）が動かしたという話題が世界を震撼させた。

「んで、次はどうしよっか」

所持品を確認すると、（この世界では意味のない）スマートフォン、千円札が数枚と小銭がいくらか入っている財布、俺の替えの服一着、デバイスのブレイブ、アザゼルさんに貰った能力を隠すペンダント、博士に作ってもらったものぐらいだ。

この世界にどれくらい滞在するかわからない以上は寝泊まりする場所と生活していくためのお金が必要になってくる。

「なんにしてもお金が必要か……」

『じゃあ、〈囁告<sup>ラジエ</sup>篇<sup>エル</sup>帙〉で宝くじで一等が当たるようにする？』

「うーん、それしかないのかなあ……………」

犯罪をしているわけではないから問題はないんだろうけど、こんなことに天使を使うのは気が進まない。だが、実際問題、そんな綺麗事を言っている場合ではないことも確かなのだ。

「大きな魔力があるところに行ってみよっか」

『飛ぶのは目立つから歩きだな』

「それくらいならなんともないさ」

高層ビルから見える離れ小島に向けて歩き出した。

「ほえ〜〜〜！ デッカイな〜！」

日本列島と離れ小島を繋ぐモノレールに乗って辿り着いた場所には大きな建造物があった。

『これは学校……でいいのか？』

建物の形状が俺のいた時代ものと異なっているので、十香のセリフの最後に疑問符が付いてしまうのも仕方ないことだ。

「魔力はこの島の中か。でも、俺はこの学校(?)の生徒じゃないから入れないよね……」

ここまで来て、どうすればよいか途方に暮れてしまい地面に座り込む——と頭の上を銀閃が通り抜けた。

「……アサシンクラスの私の気配に気が付くとは……少年、ただものではないな。何が目的だ？」

後ろに慌てて振り返ると、目の前にいたのは髑髏の仮面をつけた全身真っ黒の男だ。右手に持つナイフで俺を斬りつけたのだろう。

あと一秒遅く座っていたら頭と体がさよならしてた!?

男の気配は全くしてなかった。油断していたというのもあるが、これほど近くに接近を許すとは思いもしなかった。当たらなかつたのは本当にたまたまだ。

「目的はこの学校(?)に大きな魔力を感じたから気になって来ただけなんですけど……」

「魔力……そういうことか！ 貴様を危険人物だと判断し、この場で抹殺する！」

ええッ!? いきなり抹殺宣言!?

「ちよッ、待って！」

有無を言わずに男が襲い掛かって来た。見聞色の覇気を使って攻撃をいなし、躲して凌ぐ。

「なぜ死なない!? なぜ、たった一人の子供に私の攻撃を一撃も与えられない!?!」

そりや、命狙われてるんだから必死になって防ぐよ！

「ハサン達よ、集まれ！」

男が虚空に向かって命令すると、音もなく黒い服を着た人達が18人集まった。

《マスター、この状況は最悪です。逃げることを推奨します》

言われなくてもわかっている。一人や二人ぐらいなら倒せるだろうけど、二桁はキツイ。

「九喇嘛！」

『応ッ！』

両手を合わせて橙色の魔力に全身が包まれて黒い勾玉や線が浮き上がる。

「螺旋丸！」

掌に青い球体を作り出して地面に叩きつける。激しい土煙が起こり、俺の姿を相手の視界から消した。

今のうちに逃げる！

学校(?)の校舎を目指して走り出し、隠れられそうな場所を探す。

「死ぬかと思った……」

走り回った結果、誰もいない空き教室に逃げ込んだ。椅子に座って机に突っ伏し、先程の男を思い返す。

男は自分をアサシンと言っていた。つまり暗殺者だ。それならば、気配を消すのは得意分野で接近を許したのも当然だろう。

だが、暗殺者とは基本的には戦闘向きではなく、暗殺向き。戦って分かったが、あの男性もそれに漏れることなく暗殺向きで、相手に気が付かれてからの戦闘はそこまでではない。もちろん、動きは人間離れしているし、彼が一般人と戦って勝つのは目に見えてわかっていることだ。

「二亜」

『もう調べてる。ここはIS学園って言って、IS操縦者の育成機関だよ。それからここには転生者が二人。さっきの暗殺集団は転生者の特典の能力だつてさ。その子が魔力反応の正体でもあるよ』

「暗殺集団の特典を持つてる転生者はどこにいるの？」

『この学園の校庭で訓練中みたい。窓から見える場所に人がいっぱいいるでしょ？。そこが校庭』

そうと分かれば、早速向かってみよう。

「うわっ！ ロボットだ！」

こっさり校庭に入ると多くのロボットが空を舞ったり、素振りの練習をしていた。

「あれがISか……」

『それで？ どうやって接触する気だ？』

「あそこの偉そうにしてる人に聞いてみる」

上下白いジャージを着ている黒髪の女性を指差しす。ISを操縦していない、指示を出しているという二つの点からこの中で一番上の存在だろう。緑髪の女性も一緒にいたが、雰囲気が必要な感じなかったから候補から除外した。

「すみませーん！」

「子供……？」

「……子供がなぜこのような場所にいる？」

訝しむ視線を向けられるのは予想していたことだ。

「迷子です！」

『クハハハハ、確かに次元レベルでの迷子だな！』

「(迷子？。今時の小学生ならIS学園を知っているはずだが……)名前は？」

一瞬、何かを考え込んだ女性は質問をしてきた。

「龍神空です」

「親とはぐれたのか？」

「違います。そもそも親は元から居ませんのではぐれるとかないです」

「……兄弟は？」

「血縁者は一人も居ません」

「……そうか。辛いことを聞いてしまつて悪かったな」

親のことを訊いたときよりも兄弟がいないと訊いたときの女性の顔が少しだけ悲しそうだった。

「どこから来たか憶えているか？」

「異世界です」

「……大人をからかっているのか？」

今度は鋭い視線になった。

「ホントですよ。でも証明しろって言われてもできません」

戸籍を調べたとしても世界には戸籍を持っていない人もいるから無理。

パスポートや保険証だって偽物だと思われたらそこまで。

「わかった。なら別の奴に本当かどうか調べさせてもらう。清浄、こつちに来い！」

女性がIS操縦者の一人を呼び、呼ばれた生徒が女性の傍にやってきた。

「何ですか、織斑先生？」

「この子供が異世界から来たと言っている。お前の能力で調べてくれ」

愛衣のように嘘を見抜く力でもあるのだろうか？

「わかりました。君に質問する。君は異世界から来た、それで合っているかい？」

「はい、そうです」

「……先生、彼は嘘は言ってません。——アトウム神で調べましたから」

ホントか嘘を見抜く力、アトウム神。この二つの情報から出る答えは、ジョジョのスタンド能力だ。

もう一人の転生者ってことか。

「助かった。訓練中に邪魔して悪かったな。戻ってくれ」

女性はお礼を言って清浄と呼ばれた生徒を訓練に戻した。

「疑ってすまなかった。つい最近この学園が襲撃にあったから部外者に警戒してしまっただ」

襲撃？ この学園は結構危ないところなのかな？

「いえいえ、それなら仕方がないです。さつき殺されそうな目にあつたのはそういう理由があつたんですね」

学園の周辺をあの人達が見張っていたのはそれを防ぐためだったのだろう。

あれ？ 俺って今、学園内にいるから、あの人達に見つかったら……殺される!?

「……殺されそうになった？ それはこの学園の中ですか？」

「え、まあ、そう——あ」

「藍様！ この学園に侵入者が——あ」

先程の男性が休憩中の生徒に報告をしているところで、俺と目が合った。

「貴様、さつきの！ ここであつたが百年目！ 生かして帰さん！」

数秒ほど目を合わせて逃げようとしたら、ナイフを投げてきた。それをブレイブを銃形態にして放った魔力弾で撃ち落とした。

もう、しつこいな！

「九喇嘛！」

『今度は叩き潰すぞ！』

二度目の九喇嘛モードで男性が続けて投擲するナイフを魔力の手で弾き落としつつ接近する。

相手との距離は目測で20m程。それを高速の3歩で縮める。

「速い……ッ！」

躲せないと判断した男性は顔の前で腕を交差して防御の姿勢に入った。

「螺旋丸！」

螺旋丸を男の防御している腕にワザと当てた。ただの防御なら関係ない螺旋丸によって男性が校庭の端に乱回転しながら吹き飛ばされていった。

それを見送りながら九喇嘛モードを解除した。

「あの人に襲われたんです」

吹き飛んでいった男性のいる方向を指差すと、女性はそれだけで理解したのか頭を抱えていた。

「はあ、そういうことか……。おい、衛宮」

衛宮と呼ばれた赤髪のショートヘアの女子生徒がやって来た。

「事情は他のハサンから聞いてます。彼の動きがあまりに子供とは思えないもので、侵入者と判断して排除しようとしたそうです。……結果、負けてしまいましたけど。（英霊に勝てるこの子は一体……）」

異世界に来て早々酷い目にあつた。事情を聞いたら仕方がないといしか言えないけど。

「重ね重ねすまない、龍神。確認が取れたことだ、お前はこれからこの学園で保護しよう。それでいいか？」

「そうしていただけるは大変助かります。帰る方法を探すまでの間、退屈しなさそうですしね」

ちよつとくらい寄り道しても大丈夫だよな？

「山田先生、彼を空き部屋に案内してくれ。学校側には私から伝えておく」

「はいっ。龍神君、私に付いてきてくださいいね」

「はい」

緑色の髪の女性、山田先生に連れられて、学生寮にしばらく泊めてもらうことになった。

「あの一、山田先生は女尊男卑についてどう思っているんですか？」

ただ歩くだけだと暇だったので、隣を歩く山田先生に質問をした。

「いきなりな質問ですね!？」

「何分、異世界から来たもので気になっちゃうんですよ」

「それなら仕方がない……。のでしょうか？ それで女尊男卑についてですか……。私はそこまで考えたことなかったですね。その風潮が広まってからも私の知り合いの男性との関係は変わりませんでした。……元々、交友関係が広くないというのもありますけどね」

「ふーん、でも、たかがISっていうロボットが女性にしか動かさせないってだけで、その風潮が広がるのはおかしいと思うんです」

ISは人の力で出来ないことをISの力を使ってこなす。それが女性にしか出来ないというだけだ。俺はべつに女性の社会的地位が

低い方が良いと言っているわけではない。だが、たつたそれだけのことで男女の立場が逆転したことが、どうしても納得がいかない。

「そう言われると確かにそうですね……。ISが女性にしか動かせないだけでそこまでの風潮は妙です」

「です。ま、異世界から来た俺には関係ないですけどね」

部屋に着くまでに山田先生と会話をし、この学園がどんななのか、先程の黒髪の女性、織斑先生について教えてもらった。

授業中は暇だから、あのハサンとか言う人と鬼ごっこでも……。命懸けになりそうだから遠慮しよ。

LBX、発進します！

LBX、発進します！

Side空

6時に起床し、バリアジャケットに着替えてから朝の特訓を始める。

以前は1週間に2、3回のペースで行ってきたことを、最近では毎日のようにしている。

いつもなら神セイクリッド：ギア器や霊装の練習だが、今日は目的が少し違う。

ここが知らない土地であるので、軽くジョギングをしながら今いる場所——IS学園の敷地内を見学する。そして、ここが異世界——しかも異能がほとんど無い世界——だから、なるべく力の使用は控えることにしているから練習をしない、というのも理由としてある。

昨日起こった事件(?)でハサンという暗殺者に使った異能は、六喰の能力で英霊以外は封じさせてもらった。

九喇嘛の力を使ったものの、すぐに誰かが叫んだりしなかったのは転生者の能力を見て慣れているからかもしれないが。

「ここが校舎で……あつちがアリーナ。それからあれは……柔剣道場、かな？」

気になったので近づいていくと、中から気合の入った声や足が床に踏み込む音が聞こえてくる。

格子状の木製の窓の隙間から中を覗いてみたら、中では女子数人が剣道をしていた。朝練の時間のようなだ。

「剣術は土郎さんや恭也さんで見たことあるけど、剣道は初めてだよ」「ならばやってみるか？」

「へ？」

覗いていた窓に、いきなり一人の少女が現れた。窓の下に座っていて俺の眩きが聞こえたのだろう。

「それで？ 剣道をするか？」

「……お邪魔でなければ」

「そうか。そこで少し待っていてくれ。私が今からそこに行く」

少女は道がわからない俺を気遣って、わざわざ俺のいるところに来てやってきて、中に入れてくれた。

部員の人にも話を通してきているのか、俺が入って来たことに何かを言う人はいなかった。ただし、好奇の視線は多かった。

竹刀を受け取り、案内してくれた少女が対面に構える。構え方は剣道の知識がないので相手のを見様見真似だ。

流石に小学生サイズの防具はここには置いてないからバリアジャケットのまま剣道をする事になった。

「さあ、どこからでも打ち込んで来い」

先手を譲ってくれたので、頷き返して遠慮なく打ち込みに行く。

タンツ、と床を軽やかに踏みつけ距離を縮める。そして、下からの逆袈裟斬り。狙うのは胴。頭は身長差で届かない。

「ッ！」

少女は竹刀を逆さにして俺の攻撃を防いだ。

「お姉さん、上手いですね」

「これでも全国大会優勝の実績があるからな。そう簡単に一本取られたりしない」

全国大会優勝!? そりゃ、取れないよ……。

「ここからは私のターンだな。出来るだけ痛くしないようにしてやる。めーんっ！」

あ、剣道って声も出さないと一本とれないんだっけ? それに判定の範囲は面、胴、籠手だから脚は狙えないか。

頭の中で剣道のルールを考えながら少女の竹刀を自分の竹刀をぶつけて逸らす。気合の入った掛け声とは裏腹に、初心者俺に手を抜いてくれてるので、体重が乗っていない竹刀は簡単に防ぐことが出来た。

「そいやっ」

少女の竹刀をいなし、そのまま胴目掛けて竹刀を振り抜いた。

知らぬ間に他の女子が審判をしていたらしく、判定は一本だった。俺の勝ちだ。

「なかなか筋がいいな……!」

少女は嬉しそうに駆け寄って来た。

「手加減されてたらあれぐらいは出来ます」

「そう謙遜をするな。確かに私は手加減をしていた。しかし、お前が将来有望であることは間違いない。ぜひ剣道を始めるといいぞ」  
「……………考えておきますね」

人間じゃない俺が普通の人とやったところで勝負にならないだろう。実際、今の試合だって相手だけではなく、俺の方も手加減をした。あー、なんか卑屈な考えが最近多くなってきたかも……。うん、こういうのは考えないようにしとこ。

適当に返事を返し、剣道部の人にお礼を言ってから道場を出ていった。

借りている部屋に戻ってシャワーを浴びて休憩していると、部屋の扉からノックの音が聞こえた。

「はい」

扉を開けるとこの学園の制服を着た男子生徒が立っていた。

「朝飯食いにいこうぜ。あ、それから俺は織斑一夏だ。気軽に一夏でいいからな」

内容は朝ご飯のお誘いだった。多分この学園のことをわかっていない俺のことを気遣ってくれたのだろう。

織斑？ 織斑先生と関係のある人かな？

「龍神空です。空って呼んでください。どこでご飯を食べたらいいのかわからなかったので助かりました」

「そいつは良かった。じゃあ、俺についてきてくれ」

一夏さんについていき、食堂に向かった。

「え、箸に勝ったのか!？」

朝ご飯を食べながら今朝の剣道部での出来事を一夏さんに話したら相当驚かれた。

「手加減してもらってましたけど。ね？ 箒さん」

最初は二人だけだったが、食べているとドンドン人が集まって来た。その全員に名前呼びで構わないと言われたので、剣道の試合をしてもらった相手——篠ノ之箒さんも箒さんと呼んでいる。

「まあな。だが、初めてとは思えない動きだ。運動神経も反射神経も動体視力もどれも凄い奴だぞ」

精霊や御神の剣士と戦ってたら嫌でも鍛えられるので……。

なんてことは言えないので、その場は愛想笑いで誤魔化しておいた。

「——違う。そこは強くだ」

指摘されて、一度演奏を止める。

「あ、ホントだ。ごめんごめん。もっかいやり——なんで俺バイオリン弾いてんの？」

バイオリンを構えなおそうとして気が付いた。

「知るか」

目の前にいる俺よりも少し背の高い青髪の少年に問いかけたら一蹴された。

えーっと、確か……。

どうしてこうなったかの経緯を思い出す。

朝食が終わると学生達は授業がある。それ故、この学園の生徒ではない俺は暇を持て余していた。

「おい、お前。暇そうだな。少し付き合え」

「え？ ちよっ！」

退屈しのぎにまだ見終わっていない校舎内を回っていたら声の渋い青髪の少年と出会ったのだ。この少年からもあのハサンと呼ばれた人と同じように魔力があった。

「(ハハ)は……？」

俺の返事も聞かずにスタスタと前を歩き出した少年を追いかけて着いたのは音楽室だった。

中に入ると他にも男性が数人いた。

「これを持って」

少年から手渡されたのはバイオリンだ。反射的にそれを受け取ったものの、ただただ困惑するだけだ。

「楽譜は読めるか？」

「そこそこは出来るはずだよ」

アリサや明日奈の家に遊びに行ったときにちよいちよいピアノの弾き方を教わっていたので、楽譜をある程度分かるようになっていた。

「よろしい。バイオリンは弾いたことはあるか？」

「ないけど……」

俺が弾ける楽器はピアノぐらいだ。

「ならば教えてやる。説明するから聞いておけ」

「う、うん、わかった」

うへー、これから憶えて弾けっこと？ 退屈のぎにはなりそうだからいいけど。

そうして一時間程教え込まれて今に至るわけだ。

知るか、って言っただけこの少年の所為じゃん！

文句を言いたくなかったが、暇を潰す手助けをしてくれた彼に感謝をしているので言わないでおくことにした。

ちなみに彼の教え方はかなり上手いがとてもスパルタで、鮫島さんに執事のイロハを叩き込まれたときを思い出した。

短い回想をしているとチャイムが鳴った。先程にも同じのを聞いたので授業の終わりを告げるもので合っているはずだ。

「ちようどいい。ここで一旦休憩にする。次のチャイムが鳴ったら再開するから、それまで自由にしている」

少年は傍にあった椅子に腰を掛け読書を始めた。

「あのさ、君は誰？」

「む？ ……ああ、そう言えば、自己紹介せずに連れてきてしまった

な」

少年は本を閉じてからこちらを向いた。

「俺は——ハンス・クリスチャン・アンデルセンだ。アンデルセンで構わん」

ハンス・クリスチャン・アンデルセン……………え!?

「それってあの有名な童話作家の!？」

少年の名は、誰もが知っている童話の親指姫やマツチ売りの少女の作家であった。

故人のはずじゃ……? と疑問に思ったが、この少年は英霊と呼ばれる存在。転生者の一人——衛宮藍の特典によって存在しているので、俺の目の前にいるのはおかしくないことだということに気が付いた。

「アンデルセンの他にもいろんな英霊がいるんだよね? あそこにいる人達は?」

(おそらく英霊) 男性三人のことをアンデルセンに尋ねる。

「あいつらも俺と同じ英霊だ。緑色のコートを着ているのがシエイクスピア。黒いコートに紫色の布を腰に巻いているのはモーツァルト。もう一人の黒いコートを着ているのはファントム——わかりやすく言うとオペラ座の怪人に登場した怪人のモデルになった男だ」  
アンデルセンの口から出たのはどれも有名な人達の名前だ。

「英霊ってヘラクレスとかアーサー王みたいな人かと思ってたけど、案外、音楽家みたいな人でもなるんだね。ひよつとすると、科学者とか芸術家の人とかもなってるの? エジソンとかレオナルド・ダ・ヴィンチとか」

「普通はお前の考えで間違いないだろうな。俺自身、どうして英霊になったのか不思議でならん。それからお前の質問に対する答えは——自分の目で確かめるんだな。さあ、休憩はここまでだ。続きを始めるぞ」

再びスパルタ指導が始まり、最後には他の英霊達の前でアンデルセン達と俺、(俺の体から出てきた)美九の六人で演奏した。

演奏会が無事に終わり、学生からすれば放課後の時間帯に一夏さんがアリーナで練習すると聞いたので、向かってみることにした。

「お、空じゃんか。こっち来いよ」

ISを操縦中に、俺に気が付いた一夏さんが機械の腕で手招きをしていた。

「一人で練習ですか？」

「ああ。箒達は部活があるから後から来るはずだぜ。俺も生徒会に入ってるけど今日は特に仕事がないから一人で先に始めてたんだ」

「……ふーん。それなら皆が来るまで相手でもしましょうか？」

「え？ 空はIS持つてないだろ？」

「ISは持つてないですけど似たようなのならあるんで、それで戦えると思います」

『ほう、アレを使うのか』

ドライブ達は俺が何をしようとしているのかすぐにわかったようだ。

「だけど……いや、折角の申し出だ。危険だと判断したらすぐに止める。それでいいか？」

「はい。お願いします」

一夏さんから離れ、軽く準備運動をする。

「へっ、いつでもも行ける？」

《もちろんです》

ブレイブが付いている左腕を前にかざし、起動させる。

「——ブレイブハート、モード・LBX！」

《Mode・LBX起動》

俺の掛け声に合わせてブレイブから白い光の粒子が溢れ出し、俺の体を包み込んでいく。

《機体形成完了。確認開始。機体状態——オールクリア。操縦者との同調率——オールクリア。最終調整箇所——オールクリア。》

全項目——オールクリア》

粒子が機体を形成し終わると、ブレイブが状態を確認する。

目に映ったのは自分の腕を覆う蒼い金属の腕。腕だけでなく、体全体が金属で覆われている。

この機体はエルトリアで博士に作ってもらったものだ。

エルトリアにいた魔獣相手にも実践済みなので問題はないはずだ。

「それがISに似たようなのってわけか……。へへっ、なんだか強そうな機体だな！ さあ、やろうぜ！」

一夏さんは、童心に返るような笑い方をしてから左腕に付いた砲身で攻撃してきた。

牽制……ってところかな。

距離が大分開いているので躲すのは簡単だ。

地面を滑るように移動しながら、ブレイブに登録してある量子化された銃を左手に出し、連射する。

「おっとアブねっ」

一夏さんが左手を前に翳すと、シールドのようなものが展開され、銃弾はすべて防がれてしまった。

俺の攻撃を防ぎきったら即座に攻めてきた。

イグニッション・ブースト  
「瞬時加速！」

昨日調べた限りでは、瞬時加速とはISの加速技術の一つであると知った。

背中のスラスタから勢いよくエネルギーを噴出し、取り込み、また噴出。簡単に言えば「溜めダッシュ」。

でも、この技には欠点がある。それは——直線でしか加速移動できないということだ。

無理をすれば曲がれないこともないらしいが、操縦者に相当な負担が掛かるので実行する人は滅多にいないだろう。

「はあああああッ！」

加速しながら刀で斬りかかって来た。

「ブレイブ、タイミングは頼んだよ」

《へはい。……カウントダウン開始3秒前……2……1……今

です」

ギリギリまでひきつけ、上に高く飛び跳ねる。

「なッ!」

上から銃を連射する。

命中したが、不可視のシールド(?)に守られて一夏さんの体に傷が出来ることはなかった。

これはISに備わる操縦者を守るためのシールドバリアーというものだ。

「これでおしまい……!」

銃を量子化してブレイブの中に戻し、今度は量子化されている蒼い戦斧を両手で握りしめ、振り下ろす。

シールドエネルギーが無くなったのか、一夏さんのISが動かなくなった。

「くっそー! スッゲー悔しい!」

「はっはっは。あの戦い方だと俺に勝つのは何十年先の話になるんでしようね?」

「見てろ、明日また試合しようぜ! 次は勝つ!」

「俺はあと変身を3つ残してるんでそう簡単には勝てませんよ」

「どこのフリーザ様だよ!」

そこから一夏さんの戦い方にアドバイスをしている内に、他のメンバ―もやって来たので一人一回ずつ試合することになった。

S i d e o u t

S i d e ???

アリーナの屋根の上で織斑一夏と異世界から来たという少年――

――龍神空の試合を見ていた。

「ふむ。彼はハサンの言う通り、ただ者ではないようですね」

ISとはまた違ったメカに乗っていたが、アレは本来の力を隠すためでしょう。

もしも……もしも彼がセイバーのクラスに成り得る資格を持って

いるのなら……早めにその芽を摘まなければなりませんね。

大変心苦しいですが、セイバーがこれ以上増えるのは見過ごせません。

ですから、龍神空、君には何の恨みもありませんが、私は君を倒します。

————このセイバーの決定版である私が。そう！セイバーの決定版で最強で最良でセイバーの中のセイバーである私が！

相性最悪です！

相性最悪です！

Side空

一夏さんの試合を終えて、部活をしていた他の人達も合流した。

「藍さん、英霊と勝負させてもらえませんか？」

「うーん、ちよつと待っててくれるかな？ ……………。うん、いいよ。

彼らも君と戦いたいって言ってる」

俺の唐突な頼みを藍さんは快く承諾してくれた。

数秒程黙り込んだのは、英霊達と念話でもしたからだろう。

「ありがとうございます」

お礼を言いつつ、周りに被害が出ないように結界を張った。

「どういたしました。それじゃ、ジークフリート。まずはあなたからね」

「了解した」

藍さんの背後にヴァーリのようにダークカラーの強い銀色の髪をした長身の男性が現れた。彼を見た瞬間、背筋に悪寒が走り、全身に鳥肌が立った。

ジークフリートと言えば……………竜殺しの英霊！

中世の叙事詩「ニーベルンゲンの歌」に登場する大英雄。邪竜ファヴニールを倒した人でもある。

そして厄介なのは、彼が竜殺しであるということ。ドライグやアルビオンの力がある俺との相性は最悪と言っている。

『一撃でも喰らったらヤバいぞ』

「わかってる」

竜殺しがドラゴンにとって危険な存在とわかってはいるが、相手は伝説の英霊。攻撃すべてを躲すのは不可能だ。

「どうやら君は竜の特性を持っているようだな。……………今回は見送るか？」

あれ？ この声……………サーゼクスさんと似てる……………？ いや、そんなことはないか。



さつきよりも多くの倍加をして蹴りを入れる。

この攻撃は不可視の鎧では防げないと考えたのか、バルムンクの腹で受け止めた。

2、3m後ずさるも、ダメージを与えられた気が全然しない。

それどころか、バルムンクに触れた足部分に纏っていたシューズが壊れていた。

魔力を使つてすぐにシューズを修復した。

あの鎧を破るなら『透過』を使うのが一番かな。それが……………いや、あの技はダメだ。

透過以外のもう一つの案が浮かんだが、選択肢から外した。

当てること出来れば確実にあの鎧を破壊して勝てる技。だが、あまりにも危険すぎるのだ。あらゆるものを焼き尽くす絶技——

——？焔いつえきのえんかの炎火は。

はあ…………これは相当厳しい戦いだなあ…………。

《Boost Boost Boost》

倍加をしてから拳に炎の龍を纏わせながら突っ込んでいく。

「何度も突っ込んでくるだけの手は通じないぞ」

俺の頭目掛けてバルムンクを振り下ろしてきた。

「わかってますよ。ドライブグ！」

《Penetrate！！》

宝玉からドライブグの音が響き渡り、バルムンクの斬撃を通り抜ける。

「ッ！」

《Penetrate！！》

「紅天龍撃拳！」

二度目の透過は鎧を貫くために発動。炎の龍はジークフリートさんの腹に喰らいついた。

「グッ……………」

追撃はせずに距離を取って相手の様子を窺う。

苦悶の音が口から漏れ出たことから、今の一撃は効いたようだ。

「……ここまでにしておこう。これ以上君と戦えば、戦いたがっている他の英霊達に文句を言われそうだ」

「え!? ジークフリートさん、全然攻撃してないじゃないですか!」  
「すまない。俺が君を剣でなく拳で攻撃したとしても、それは大ダメージになるだろう。それに子供だと侮っていたが、今の戦いを見て、君相手に手加減せずに戦うのは難しいとわかった。中途半端で本当にすまない」

「……わかりました」

納得いかないと、ころも少々あるが、渋々頷いた。

「すまない。……だが、もしも次の機会があれば、本気の君と戦いたいものだ」

！ あらら、流石は英霊。見抜かれてるか……。

ジークフリートさんはその場で虚空に溶けるように消えていき、入れ替わるようにして紫色の髪の女性が現れた。

「ジークフリートの次はこのスカサハが相手をしよう」

スカサハ……? 聞いたことのない名前かも。

「(ドライブ達は知ってる?)」

『ケルト・アルスターの戦士であり、女王でもある奴だ。確か……あの槍は愛弟子のクー・フリーンに渡した槍——ゲイ・ボルクのはずだ。だが、形が少し違う気もするな……。 (竜殺しの次は神殺しだ?!)』  
クー・フリーンとゲイ・ボルクならケルト神話の戦士であることを知っている。その人物の師匠ということは相当な強さのはずだ。

この人も怖いな……。

ジークフリートさんと対峙した時とは、また違った怖さをスカサハと名乗った女性から感じる。

「言っておくが——」

朱い閃光が頬をかすめる。

一拍置いてアリーナの壁に何かが衝突する音が響いた。スカサハさんが槍を投擲したのだ。

「スカサハ!? 試合はまだ始まってないんだよ!」

「私はジークフリートのように手加減をするつもりは一切ない。本気

で来なければ死ぬと思え」

藍さんが咎めるのを無視して俺に語りかける。

目が本気だ。この人は容赦なく俺を殺しに来る気だ。

「さあ、力を見せるがいい」

「はい！（十香、行くよー）」

『うむ！ あの女に私達の絆を見せてやろうではないか！』

「——我、目覚めるは」

深呼吸をして、呪文うたを紡ぐ。

「——劍姫の精霊と共に歩むものなり」

周囲の空間が歪み出す。

「——聖と魔を今こそ合わせ、星の剣をこの手に取ろう」

足元に無数の聖剣と魔剣が突き刺さり、それらすべてが白と黒の光の粒子になり混ざっていく。

「——我、全てを切り裂く星剣の龍精霊と成りて」

紫色の光が俺の体を覆っていき、霊装を形成する。

「——汝の絶望を、宵闇の世界へと葬り去ろう」

《Sword Brave Dragon Elemental  
ver Drive!!!》

光が収まると右手に十香の天使——サンダルフォン〈塵殺公〉。

左手には黒い柄、夜色の宝玉がはめ込まれている紫の刀身、蒼い刃

の剣——〈龍星劍・夜刀〉が握られていた。

髪は夜色に変わる。

霊装は紫色の鎧に黒と白のラインや宝玉が足や腕部分に新たに加わった。

側頭部には紫水晶の角、腰あたりから紫色の尻尾、背中からは淡く虹色に光り輝く翼が生えていた。

そして、頭の上には金色の宝冠が煌いていた。

「……その力……！　ハ……ハハハ、フハハハハハ！　そうかそうか、お主はただのドラゴンではないということか！　随分長いこと生きていたが、これほど珍しい存在は初めて見たぞ」

転生者だから特典次第では珍しくもなるだろう。だが、彼女の言っていることは俺の思っていることとは違う気がする。

「マスター、試合開始の合図を！」

「うん。試合、開始！」

先程と同じように朱い槍を投擲してきた。しかし数は一本ではなく六本だ。

「それっ！」

「剣よー！」

俺も同じ数の剣を作り出し、飛来する朱い槍を迎え撃つ。

「ほう、エミヤのようなことが出来るのか」

エミヤ？　藍さんのこと……？　でも、藍さんのことはマスターと呼んでたから別の人かな？

スカサハさんとの距離を詰めて、剣と槍がぶつかる。

膨大な霊力と魔力にものを言わせて、力づくで押し始めた。

「でやああああッ！」

剣を振るう最中、空中に大量の剣を作り出して射出。そこに霊力による斬撃を加える。

亜空間から取り出した槍で射出した剣すべてを相殺、斬撃は二本の槍によって薙ぎ払われた。

その間に地面を蹴りつけ、上から剣を叩きつける。槍で受け止められるが衝撃が地面に伝い、ひび割れた。

もつとだ……！ もつと速く！

幾度も幾度も剣と槍がぶつかり合う。その度に火花が散り、互にかすり傷が生まれていく。堅牢な防御力を誇るはずの霊装も朱い槍の前では形無しだ。

「（こやつ、剣を振るう度に太刀筋が速く、綺麗になっていく……。まるで剣舞だな。それにこの力、間違いなく……）」

俺の中の何かに反応するように剣の宝玉が輝きを増し、より速く、力強くなっていく。

「お前の力をもつと見せてみる！」

攻撃が速くなっても、それでもまだ彼女には届かない。笑いながら防がれている。

「はあああああッ！」

霊力と魔力を放出して、相手を吹き飛ばす。もちろんこの程度が英霊相手にダメージになるはずもない。

「剣よ、集えー！」

大量に創り出した剣が一か所に集まっていき、刃が天に向く巨大な剣となる。

「落ちろー！」

グルン、と180度回転して、重力に従って落下する。

「刺し穿ち……突き穿つ！ 『貫き穿つ死翔の槍！』」

巨大な剣に対してスカサハさんは朱い槍を投擲した。朱い閃光は剣の中心を貫き、真つ二つに分断した。

「フツ、呆気な——」

「終わってないですよ。剣の雨よー！」

巨大な剣は確かに貫かれた。だが、それは集合した剣の一部に過ぎない。分離すれば集まる前の剣に戻るだけだ。

剣を指揮棒に見立てて振り下ろすと、剣は分解され、雨となって降り注いだ。

「……深淵の叡智」

ボソツ、と呟いていたので良く聞き取れなかったが、次の瞬間、驚

くべきことが起こった。棒立ちのスカサハさんに、数えるのも億劫になりそうな量の剣の雨は一本も当たらなかつたのだ。まるで剣の方から彼女を避けていくようだった。

「いやはや、今のは驚かされた。束ねて一つに、壊されれば残りで。うむ、実に見事だ。もうネタ切れか？」

「……あるにはありますけど、ここでは使えません」

結界は張ってあるが、恐らく壊れてこの学園に被害が出てしまう。

「そうか。ならばここままでだな」

終わりを告げられると力が一気に抜けた。

「久々にいい汗を掻いた。シャワーでも浴びるとするか。……どうだ？ お主も一緒に浴びるか？」

悪戯な笑みで俺を誘ってきた。

「え、俺は——」

『あの女殺す』

「大丈夫です！（冗談に決まってるでしょ!? 落ち着いて!）」

十香達が物騒なこと言い出したので、全力で遠慮した。言い出さなくとも遠慮するのだが。

「ではな」

スカサハさんはジークフリートさんと同じようにその場から消えていった。

「流石に、もうキツイかな……。藍さん、ありがとうございます」

龍精靈化を解くと疲れが一気にやって来た。

「ううん、こちらこそすごい試合を見せてもらったよ。まだ他の英霊とも試合する？」

「今日はここまでに——」

「セイバアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

帰ろうとしたら、突如青い何かが叫びながら俺の目の前に飛来してきた。

「その君」

「あ、はい」

青いジャージを来た十香と同じ年頃ぐらいの少女に鋭い目つきで

話しかけられて思わずたじろぐ。

アホ毛が帽子から突き出てるのはツツコまない方がいいのかな？

「君はセイバーのクラスに成り得る素質があるようだ」  
「？」

セイバー？ 素質？ よくわからないけどお礼でも言っておけばいいのかな？

「えっと、ありがとうござ——」  
「だからこの場で殺す」

……………ん？

「え、あの、どういう——」

「問答無用！ 私以外のセイバー死ね！」

ヤバい。どうしよう。話が通じない。というか聞いてもらえないんだけど。

いきなり現れてまさかの殺害宣言。

手に持っている黄金の剣と漆黒の剣で襲い掛かって来た。

先程の試合でほとんど力を使ってしまったので、これ以上の戦闘は無理に等しい。

こうなったら……。

精一杯力を振り絞り、体を動かす。剣を振り上げた瞬間を狙って抱き着く。

「お姉ちゃん、大好きー！」

甘えるような声を出すと少女の動きが止まった。

『ブフォツ!?!』

中にいるドライグ達や試合を見ていた一夏さん達が噴き出した。

チラリと様子を窺ってみたら微かに震えていた。

し、失敗したかな？

「か、可愛い……………」

不安に駆られたが杞憂に終わった。

少女に突き放されることなく、逆に痛いくらい強烈に抱き締められ

た。

「……………そうですね。彼が素質があるからと言つて実際英霊ではないのですし、今回は見送つても大丈夫でしょう。それに『赤ウエルシユ・ドラゴンい龍』の力は私と関係がないわけでもありませんから、私が『姉』というのもあながち間違いでもないかもしれないかもしれませんね」

『ん？ 俺と関係のある……………いや、歴代の赤龍帝にあんな可笑しな奴はいなかった。それ以外だとアーサー王ぐらいだが、あいつは男だしな……………』

どうやらドライグにはこの少女に心当たりはないようだ。

「ゴホン……………ともかく、これから私のことは姉と思つて接しなさい。いいですね?」

「あ、はい」

自分でやつておいてあれなんだけど、途轍もなく面倒なことになつてしまった気がする。

「さあ、私と一緒にセイバーを消しに行きますよ!」

## ルーン魔術学びます！

ルーン魔術学びます！

Side空

困ったことになったなあ。

原因の半分は自分にあるのだが、今現在非常に困っている。

謎の少女の襲撃を避けるために『お姉ちゃん、大好きー！』という甘える行動をとったのはいいが（実際のところ、精神的なダメージが大きかったがこの際気にしない）、ドライグと関係があるらしい少女に弟認定されてしまった。

「年貢の納め時です、赤セイバー！」

謎の少女は赤いドレスを着た少女を見つけるなり斬りかかった。

「ぬ!? そなたはアー——」

少女は何かを言いかけていたが、謎の少女が物理的に遮った。

「私以外のセイバー死ねっ!」

「ローマアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

よくわからん叫び声を上げながら星になった。

「うげッ、父——」

「くたばりなさい、ドラ息子!」

父? この人、女の人なのにあの金髪の娘の父親?

きつと複雑な事情があるんだろうと察して流すことにした。

「土方さん、土方さん。久しぶりに稽古でもしましょうよー」

「断る」

「えー!? どうしてですかー!? あ、もしかしてこの幕末最強の天才

剣士の私に負けるのが怖いんですかー? フフン、それなら仕方ない

——」

「何が幕末最強ですか! 真の幕末最強の剣士は人斬り抜刀齋に決まっています!」

話し声の聞こえた道場の扉を蹴り破り、淡い金色の髪を黒いリボンで纏めている少女に突っ込んでいった。

うんうん。抜刀齋は最強だよね。

目の前で起きていることから目を逸らし、現実逃避する。

「のわっ!?! あ、あなたはアル——」

「九頭龍閃（聖剣二本バージョン）！」

「なんで使えるんですかあああああああああああああああああああッ!?!」

刹那の九連撃を喰らった少女は道場の壁を突き破り、どこかへと行ってしまった。

「真のセイバーに不可能無し！」

自分で無茶苦茶なことを言ってる自覚はあるのかな？

謎の少女はそれから止まることを知らず、順調にセイバーのクラスのエリート達を倒していった。途中から顔が似ているという理由でセイバー以外の英霊も倒していったらしいが、英霊についての知識が少ない俺では誰がどのクラスなのかは判断が付かない。

「残すはあと一人……」

え、もう最後!?!

「いつか決着を付けなければならないのはわかっていましたが、こんなに早く来るとは」

「その人強いのか？」

あんなことをしておいて今更敬語を使うのも変なのでタメ口になっている。

「ええ、彼女と私の実力はほぼ同じですからね。ですが、今日はあなたがいます。私と共に戦ってくださいませんか？」

「えーっと、そういうのは自分一人でやるものじゃ……?！」

「勝てばいいのです」

真のセイバー（自称）が正々堂々と戦わずにいいのだろうか？

と思っただが、当の本人は全く気にしてない様子だった。

少女に連れられて着いた場所は、一夏さん達がいた場所とはまた別のアリーナだった。

「……来ましたか、ヒロインX」

あ、この人の名前ってヒロインXなんだね。今更だけど初めて知ったよ。

俺達を待っていたのは西洋風のドレスの上に胸当てや籠手を着けた人だった。

声や容姿だけでなく、どこことなくヒロインXさんと雰囲気似ている。まるでなのはと星奈、フェイトと美雷、はやと夜空のようだ。「青セイバー、あなたを倒してようやく私は真のセイバーになることが出来る……!」

相手の名前は青セイバーというそうだ。本名……ではないと思う。「型月のドル箱と言われるこの私が、ギャグ時空から来たあなたに後れを取るとでも?」

型月のドル箱? なんかすごい人なのかな?

「でしょうね。ですから今回は助っ人を呼びました。卑怯だと罵っても構いませんよ。私はあなたに勝てればそれでいいのですから」  
「……いいでしょう。かかってきなさい」

二人は全く同じ黄金の剣を構えた。

『束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。受けるがいい! 約束された』

光が剣へと集まっていく。それが二つ。幻想的な光景だ。

『勝利の剣!』

振り下ろされた黄金の剣から極光の奔流が迸った。

二つの光は激突し、拮抗する。

「さあ、今です! ドライグの力を私に貸してください!」

ヒロインXさんに必死な顔つきで懇願された。理由はアレだが、余程勝ちたいことは伝わった。

「赤龍帝からの贈り物」

《Transfer!!》

赤いオーラがヒロインXさんの体に送られると、極光に赤が混じり、相手の極光を押し始めた。

「これで……私の勝ちですッ!」

ヒロインXさんの極光が青セイバーさんの極光を打ち破り、決着が着いた。

「……やりました……やりましたよ! ついに私はセイバーの頂点に

辿り着きました！」

勝利のガッツポーズと共に歓喜の声を上げる。

「うわー！… すごいね、お姉ちゃん！」

うわー、なのは今の自分の演技に言いたい。まさかセラフオールさんの映画での演技がここで役に立つとは思いにもよらなかった。「ねえねえ、そろそろ部屋に戻らない？ いっぱい戦って眠くなっちゃった」

「私もいつになくはしゃいでしまったので今日は寝ることにします」  
「うん、お休み、お姉ちゃん♪」

二度目の甘えるような声で別れを告げて、部屋に戻った。

今日はLBXの起動、英霊と二試合、可笑しな茶番に付き合わされてかなりヘトヘトになった俺の意識はすぐに眠りに落ちていった。

「おはようございます、空。それでは朝の鍛錬といきましょうか」

朝、誰かに起こされて目を開けるとヒロインXさんの顔が眼前にあった。

俺の部屋にいることに驚きだが、それ以上に眠い。部屋にあるデジタル時計を見ればまだ朝の五時前だった。

「……あと、五分……」

「仕方のない弟ですね……。私が添い寝をして——」  
「よーし！ 鍛錬頑張るぞー！」

普通、そこは叩き起こすところじゃないのだろうか？ とまあ、今ので眠気は覚めた。

準備をなるたけ早く済ませて部屋を出た。

「さあ、構えなさい」  
「うん」

ヒロインXさんが聖剣二本なのに対し、俺も魔剣と聖剣を構える。「ほほう、私と同じ二刀流ですか。X的にポイント高いですよ」

貯まっても何にも使えなさそうなポイントが貯まった。

それについては聞き流し、早速鍛錬を始めた。

「今日は私が暇潰しの相手になってやろう。よろしく頼むぞ、空」

昨日の全身タイツとは違い、女性用の黒いスーツを着て、伊達眼鏡を付けている女性が教室の教壇に立っていた。

「こちらこそお願いします、スカサハ……先生？」

「先生……か。ふむ、昔から師匠とは呼ばれてきたが先生は初めてだ。だが、新鮮で悪くない。今日は師匠と弟子ではなく、先生と生徒という関係性なのだ。ん？ どちらも同じ意味か。……まあ、それはともかく、授業を始めるとしよう」

「はいはい、質問でーす。授業はどんな内容ですかー？」

「今日の授業ではルーン魔術を取り扱う。あとで実践もしてもらおうからな」

ルーン魔術とは「ルーン文字」を刻むことで魔術的神秘を発現させる北欧由来の魔術だ。そして、そのルーン文字一つ一つに意味があり、強化、探索などの効果を発揮する———というのをスカサハ先生から教わった。

「ふむふむ、なるほどなるほど」

電子黒板を使うことのできないスカサハ先生の口頭での説明を生懸命にノートにまとめた。

ある程度学んだ中で俺が主に使いそうなルーン魔術は、強化や治療くらいだろう。

「私の説明は理解できたか？」

「バッチリです！」

「では、早速実践といこうではないか」

ついてこいと言われ、野外での実践をすることになった。その場所は———影の国にある森の中だ。先生の宝具の一つ———ゲート・オブ・スカイ死溢るる魔境への門によって異世界に来たのだ。

「この森で一週間過ごせ」

森の中から獣の咆哮が聞こえる。しかし、スカサハ先生やジークフリートさんと比べれば、怖いというほどでもない。それに精霊や

「それから、使つていいのはルーン魔術と槍一本と体術のみだ」

使わずに生き残れるだろうか？

精霊や神器はともかく、せめて覇気だけは、と先生に説得を試みた。

「よからう。では、一週間後に迎えに来る」

説得の末、覇気は何とか使うことを許可された。

「……はい」

先生は木製の槍を手渡すなり、どこかに消えてしまった。それと同じ時に獣が近づいてくる気配がする。絶対的強者がいなくなったことで、俺に襲い掛かりやすくなったからだろう。

木製の槍に素早く強化のルーンを刻み、硬度を上げる。

「さあ、俺達の授業を始めようか」

S i d e o u t

S i d e スカサハ

遠くから空のサバイバルを見ていた。

すぐに音を上げる、なんてことはしないだろうと一目見た時から分かっていた。

実際、彼は精霊や神器という私の知り得ない力を持っていたし、この程度の課題は難無く達成するに違いない。だから、制限を設けて課題に取り組ませた。

そう思っていたはずなのに、空は私の想像の遥か斜め上を行った。ルーンの扱いはまだ不安定なところもあるが、教えたのはたったの一時間ほどなのだから仕方ない。それでもそこそこ使いこなしている、と評価していいだろう。

だが、問題は次だ。

この森に来れば、危険な魔獣と戦うのは必須。

空も最初は襲い来る魔獣達と戦っていた。私の教えたルーンや覇気とかいうこれまた私の知らない力を使つてだ。

初見の相手だろうと気後れせず立ち向かい、今の自分の最善の手を

用いて攻略した。

しかし、止めを刺すかと思えば、ルーンによる治療を施し、手厚く看病をしていたのだ。

……魔獣達と仲良くなるとは予想外だったぞ。

その上、魔獣の言葉が理解できるのか食べられそうな果実を聞いたり、楽しそうに戯れていた。

これでは修行にならないと考え、一週間経たずに連れ戻すことにした。

Side out

Side 空

「課題はそこまでだ」

いきなり背後に現れたスカサハ先生に野外授業は終わりだと告げられた。

「でも、まだ一週間経ってないですよね？」

「ああ。だが、この魔獣達ではもう相手にならない。いや、元々か」スカサハ先生は呆れ混じりに笑っていた。

「ところでどうしてほとんどの魔獣を殺さなかった？」

俺が殺したのはこの五日間で五匹の猪の魔獣だ。一日一匹あれば事足りた。

「悪い子じゃないから殺す必要がなかったから、食べられそうなのが猪の魔獣だけだったから、仲良くなれたら最高だなんて思ったからの三つです！」

「……………そうか」

俺の述べた理由に何とも言えない顔をしていた。甘い奴だと思われたことだろう。

「帰るぞ」

「はい」

名残惜しいが魔獣達に別れを告げて、再びスカサハ先生の宝具で学園に戻った。

「おかえりなさい、空」

「あ、お姉ちゃん！ ただいま！」

寮の前に到着すると、ヒロインXさんが出迎えてくれた。

俺の顔を見るなり抱き着こうとしてきたので受け入れようかと思っただが、五日もまともに体を洗っていない。そうなれば避けるのは必然だった。

「どうして躲すのですか!?!」

「だって今の俺、臭いし汚いんだもん。そんな状態で抱き着いたらお姉ちゃんまで汚くなっちゃうよ」

「それは確かに……」

わかってくれて何よりだ。

「早くシャワー浴びてこないかね」

「それよりも大浴場を使えばいいのではないか？」

スカサハ先生がこの学園には生徒のための大浴場を薦めてきた。

この時間帯なら女子生徒は使っていないそうだ。

のんびりお風呂に入れるならそれに越したことはない。着替えを持ってお風呂場に向かった。

「はふうく、極楽極楽く」

体を隅々まで綺麗にしてから湯船に浸かった。久々のお風呂は格別に感じた。

『だーりん、私も——』

「ダメっ。皆が入るのは俺が出てからね」

『そんなあくー!』

美九の泣き崩れる姿が思い浮かぶが、もしも美九と一緒に入るとなったらゆつくり湯船に浸かるどころではなくなってしまう。

『空、湯加減はどうですか?』

大浴場と脱衣所を隔てる扉の向こうからヒロインXさんの声が聞こえた。

「うん、ちょうどいいよ」

『そうですか。では私も』

へ？

扉が開き、ヒロインXさんが一糸まとわぬ姿で入って来た。

「お、お姉ちゃん……ってお姉ちゃんじゃない。青セイバーさんでしたっけ？」

お姉ちゃんがこの間倒した人だ。

「……え？ あー！ はい、そうです。セイバークラスのサーヴァント、真名はアルトリア・ペンドラゴン。わかりやすく言うと、アーサー王ですね」

「アーサー……王？ ……え？ え!? アーサー王って男じゃないの!?!」

『あの女がアーサー王だと?!』

不思議な間があったが、それよりも驚くべきことを聞いてしまった。関係のあるドライグもビックリ仰天の事実だ。

アーサー王って女性だったのか。いや、多分そういう世界のアーサー王ってことなんじゃないかな？

「歴史ではそうなっていますが……まあ、色々と事情があるのです」

「そっか……って納得してる場合じゃないよ！ なんで俺が入ってるのに入ってくるんですか!?!」

今更ながら裸の相手と話していたことに気が付き、慌てて背を向けた。

「まだお風呂に入っていないからですが？」

俺との応答をしながら体を洗い始める。背いていてもわかったのはお湯を流す音が聞こえたからだ。

「そうじゃなくて！ 男が入ってるんですよ!?!」

「私は気にしません」

「俺が気にします!」

「お湯を浴びた女性に今更出て行けというのですか？ あなたは酷い人ですね」

お湯を浴びる前から俺は言っていましたけどね！

結局、アルトリアさんを止められずに一緒に湯船に浸かることに

なった。

俺が湯船を先に出る選択肢もあつたのだが、それは阻まれた。

「私も入るぞ」

アルトリアさんではなく、スカサハさんにだ。

スカサハさんは俺の様子を確認し続けていたので、俺と同じくお風呂に入っていないというのはわかる。だが、それと一緒に入ることは別問題だ。

「生徒と親睦を深めるのも教師の仕事だと織斑千冬が言っていたな。そういうわけで、空、私の背中を流せ」

「嫌——」

首元に槍を突き付けられた。俗にいう脅しである。しかも相当質の悪いやり方だ。

「もう一度言うぞ。私の背中を流せ」

「お、仰せのままに……」

アルトリアさんの隣に腰かけたスカサハさんの後ろにやって来た。後ろ姿だけなので赤面したりしない。臀部の方に視線は向けてない。ないつたららない。

スポンジにボディシャンプーを付けて、泡立てる。それをスカサハさんの綺麗な背中に擦る。

「んっ……良いぞ。気持ちいい」

丁寧に汚れを洗い落としている内に気が付いたことがあつた。

「スカサハさん、そんなに汚れてないですね」

俺と別行動はしていたが、影の国に一緒にいたのは間違いない。

「……………お前と違ってそんなに動いていないからな」

「今の間はなんですか？」

背中越しにジト目を向けるも素知らぬ振りで答えは得られなかった。

「知らん。お前の気のせいだ。(浄化のルーンはまだ教えてなかったな)」

「……まあ、いいですけど……。はい、洗い終わりました。それじゃ、俺は先に上がりますね」

「何を言っているのです？ まだ入って五分も経ってませんよ」

さり気無く逃げる作戦はアルトリアさんによって失敗に終わった。

「俺、実は熱いお風呂が苦手なんです。このお風呂も熱くてちよつと……」

「さつきはいい湯加減って言ってましたね」

「……女性と一緒に入ると蕁麻疹が」

「なら確かめてみるとするか」

「……………」

適当に誤魔化して逃げる作戦もすべて潰されてしまった。

流石は英霊！ 嘘は通用しないというわけか！

『（お前の嘘のレベルが酷過ぎるだけだ）』

「さ、入るぞ」

スカサハさんに引きずられ湯船に戻され、俺を逃がすまいと言わんばかりに、二人に左右をがっちり挟まれた。

おまけに我慢の限界が来たらしい十香達が体から出てきて、余計に面倒なことになった。

……明日はどんな英霊に会えるかなー？

こういう場面ではルーン魔術よりも現実逃避は便利だった。

オカルト研究部にお邪魔します！

オカルト研究部にお邪魔します！

Side空

スカサハ先生の課外授業の翌日、その日も早朝からヒロインXさんに鍛錬の相手になってもらった。

もちろん、試合を十回やって十回負けてもおかしくない英霊が相手になっていくのだから、相当疲れる。

でも、その分やりがいがあるし、勉強になるとさえ思えた。そして何よりも英霊と戦えることが楽しくて嬉しくて仕方がない。

朝食を食べ終えた後は英霊達が暇潰しの相手になってくれることにも感謝だ。

藍さん曰く、「英霊達も私が授業の間は暇で仕方がないんだよね。空君がこの世界に来てからは、ほとんどの英霊があなたとの交流を楽しんでいるから、こつちとしても助かってる」だそうだ。

お互い暇な者同士で楽しく時間が潰せるのなら幸いだ。

「——集中しろ」

後ろから叱咤の声上がる。余計なことを考えていたことがバレバレのようだ。

一度、持っている弓と矢を下ろし、目を閉じたまま深呼吸。そこからまた構える。

俺にとつての気を引き締め治すには一番の方法だ。

「……………」

目をカッと開き、的に狙いを定めて番えた矢を放つ。

俺が放った矢は的を——射ることはなかった。

「ぐぬぬ……………」

「フッフ、外したか。まあ、余程の才能か強運の持ち主でなければ初心者には当たらないだろうな。この私だって最初は上手くいかなかったさ」

後ろを振り返れば、先程俺に叱咤を飛ばした女性——アタラシテさんが小さく笑っていた。

彼女はギリシャ神話で有名な女狩人の英霊だ。

そんなわけで今日は弓道場でアタランテさんから弓術を習っていた。

「貸してみろ」

弓を彼女に渡すと、彼女自身の魔力で矢を作りだして番える。

迷いなく一瞬で狙いを定めて矢を放った。見事に的の中心を射ていた。

「ぐぬぬ……い！」

彼女の腕に尊敬する。それどころか尊敬せざるを得ないほどだ。

「さつきからそれしか言っていないぞ？」

「もう一回やります！」

「ホレ」

弓を受け取り、今度は俺もアタランテさんを真似て、自身の魔力で矢を作り出し番える。

そこに集中力向上のルーン文字を刻んで放つ。

的の中心には当たらなかったが的にはどうにか当たることが出来た。

「ルーンか……」

「ズルいですか？」

「いいや。自身の力を使ったのだから文句は言わん。むしろ上出来だ」

アタランテさんは褒めながら俺の頭を優しく撫でてきた。

頭を撫でられることはあまりない事だったので、恥ずかしさで顔が熱くなる。

「照れているのか？」

「……こ、ことういうことあまりされたことなかったの」

十香達だと抱き締められたり、膝枕が多い。今更だがスキンシップが激しすぎると思う。

「……そう言えば、家族がいなかったな。……ああ、そうだな、そうしよう」

アタランテさんがブツブツと一人で呟き始めた。

「私は汝を立派な狩人にする」

「……………はい？」

「実はな……私は私を産んだ両親に捨てられたんだ」

「王族……でしたよね？」

「ああ」

捨てられた理由は王が男の子を望んでいたからだそうだ。

「だから私は子供が辛い目にあうのはどうしても放っておけない」

自分の境遇故に同じ目にあって欲しくないからだろう。

「汝も例外じゃない」

「えーっと、アタランテさんは一つ勘違いしているみたいなので言わせてください」

「なに？」

「俺、血縁者はいないですけど家族はいます」

「強がらなくても良いんだぞ？」

「いやいや強がってないですから」

証拠として十香達を呼び出した。

「この人達が俺の家族です。ね？」

十香達に尋ねると揃って頷いてくれた。

「将来的には結婚する予定」

「折紙さん、そんな予定はありませんよー」

「私達は告白した。空は結婚したいと言った。つまり両思い。結婚しても問題ない」

「いやっ、だから、その……えっと……それについては保留で！」

不満たらたら十香達を自分の体の中に無理矢理入れ戻した。

「ふう……と、まあ色々ありましたけど証拠になりましたよね？」

「あ、ああ。汝も大変なんだな」

あれ、なんか同情された!? あ、確か多くの男性に求婚されたんだっけ？

「私とは違って彼女達の好意が嫌そうではないな。彼女達の満足のため、自分の納得がいく答えを見つけ出すといい」

それはいつか答えるつもりだ。いつになるかはわからないけど。

結婚云々は頭の隅に追いやり、引き続きアタランテさんから弓術を

習うことにした。

「ようこそ、オカルト研究部へ」

放課後、清浄星花という転生者に呼び出され、オカルト研究部の見学に誘われた。

暇である俺の答えは当然肯定だ。

そして、今はオカルト研究部の部室に案内されたところだ。

部室の中には見知った顔もいたが、一言で言えば第一印象でキャラが濃そうな人ばかりだった。

「知ってる人も知らない人もいるだろうから紹介しておくよ。彼はつい先日異世界からやって来た龍神空君だ。皆仲良くしてあげてね」

「はじめまして、龍神空です。今日はよろしくお願いします」

「ねえねえ、あなたに渾名付けてもいいい〜?」

俺の自己紹介が終わると、制服の袖を余らせているのほほんとした女子生徒が話しかけてきた。

渾名……そういうの無かったなあ。

皆から名前で呼ばれることが多いので渾名は新鮮だ。

快く承諾して渾名を付けてもらうことにした。

「じゃ〜ねえ、龍神だから……タツツ、でど〜かな〜?」

「良いと思います」

「そっかそっか。ありがとね。あ、私は布のほとけほんね仏本音っていうんだよ。皆からは本音とかのほほんって呼ばれてるんだ」

のほほんという渾名は名前を省略しただけでなく、本人の性格からも来ているのだろう。

「私はオカルト研究部の顧問を務めているアイリスフィール・フォン・アインツベルンよ。皆からはアイリ先生って呼ばれてるわ」

次に話しかけてきたのは銀髪の女性だ。どことなくイリヤと似ている気がする。

アイリスフィール……フォン・アインツベルン?

驚くことにまさかのイリヤと全く同じ苗字だ。

「あの、失礼かもしれませんが聞いてもいいですか？」  
「なにかしら？」

「アイリさんはお子さんいらっしやいますか？」

「いないわよ。私、子供どころか結婚もしてないもの」

「どうやら俺の思い違いらしい。」

イリヤと兄さんのお母さんがどこかにいるということは知っているが、流石に異世界ではないだろう。

「そうですか。変なこと聞いてごめんなさい」

「いいのよ。気にしてないから大丈夫よ」

そこから他の部員達の自己紹介をしてもらい、普段の活動内容を教えてもらった。

なんでも世界各地の事件や謎を解明する部活だそうだ。

「それで今日は空君との顔合わせと、明日調査に行く『不帰の館』の会議をするつもりさ」

ほほう、早速明日には調査開始ですか。

「その不帰の館っていうのはどんな場所なの？」

水色の髪に眼鏡をかけた女子生徒——更識簪さんが星花に尋ねた。

「ネットの情報だともう誰も住んでいない古い屋敷だったよ。ただ、奇妙なことに入っても普通に帰ってこられるらしいんだ」

『？』

全員の頭に疑問符が浮かぶ。

帰ることが出来るのなら不帰とは言わないはずだ。

「しかも帰ってきた人のほとんどが無事」

全員じゃないところに何かあるのだろう。

「ほとんど、ということは何人かは……」

「そうだね。空君が気が付いた通り、何人かは……性格が変化したら  
し」

元の性格が変化帰らないするから不帰、ということから不帰の館となったの  
かもしれない。

「中で起きたことは載ってなかったの？」

「ああ。念写を使ったけどわからない。直接性格の変わった本人に聞くのがいいかもしれない」

会議は進み、明日はグループごとに分かれて調査をすることになった。

俺、星花さん、簪さんが不帰の館の現場調査。

藍さん、のほほんさん、アイリ先生が聞き込み調査。

その他の詳細なことも決めて、本日の部活動は終了となった。

翌日、星花さんと簪さんと共に現地に到着した。

「ここが不帰の館……」

何十年もの間放置されてきたのか、庭の植物は錆び付いた柵からはみ出し、庭は小さなジャングルと化していた。

鍵の掛かっている門を潜り抜けてかろうじて通ることのできた道を辿っていくと、古びた館の前に出た。

ボロボロの玄関扉にが警察が使う黄色いテープが巻かれていたが、無造作に破られた跡があり、もうすでにその役目をはたしていなかった。

ここにやって来た人達が邪魔だと感じて破ったのだろう。

上を見上げれば、館の窓は打ち付けられた木の板で開かないように塞がれていて、日の光がほとんど差し込まれないようになっていた。

「それじゃ、お邪魔——」

「オラアッ！」

扉を開けようと手をかけた瞬間に扉は館の中に吹き飛んでいった。

「おっと、僕は扉があったから普通にノックしただけだぜ。悪いのは僕じゃなくてノック程度で吹き飛ぶ弱っちい扉の方だ」

男前なセリフを吐きながらやれやれといった感じに立っている星花さんの傍にはスタープラチナが存在していた。

その隣では簪さんが呆れていたが。

「さあ、とつと中に入ろうぜ」

星花さんを先頭に館の中に入っていた。

S i d e o u t

S i d e 藍

私達三人は再度集まる時間と場所を決めて、各自で館付近の近所に住む人に質問して回っていた。

今は時間になったので二人と合流したところだ。

「そっちはどうだった？」

先生が最初に切り出してきた。

「うくん、私はどれも微妙かな」

「私もです」

しかし、私達二人の応えは成果の得られないものだった。

「私もよ」

それはアイリ先生も同様だ。

館付近を中心に近所の人に質問していったものの、大昔はお金持ちが住んでいた、人が住まなくなつてからは不良達のたまり場や肝試しの場所になつていたそうだ。

私達が得られた情報はそこまでだ。

もちろん性格の変化したという当事者の下にも訪れた。

だが、不帰の館についての記憶が一切なかったのだ。

「あとはジョジョ達を待つしかないわね」

ジョジョがいるなら心配はいらないだろうけど、嫌な予感がする……。

S i d e o u t

S i d e 空

調査開始から数分が経った。

誰も手を付けていないことはわかっていたので家中が埃まみれだった。

今はお昼頃だが、電気は付かず、日の光が入らないので館内はかな

り暗い。

しかし、それだけで一向に謎らしきものはないし、不思議な現象も起こっていない。

……………見つけた。

「ん？ 今誰かしゃべりました？」

「いや」

「何も言っていないよ」

『俺達も何も言っていないぞ』

星花さんも簪さんのどちらも、ましてやドライグ達でさえも何も言っていないようだ。

ただの空耳だと思い、館内の探索を続けた。

「……………何もありませんね」

一時間程調査したが館内には何もなかった。

「うん。ジョジョ、今回は引き上げる？」

「悔しいけど時間も遅いから今回はここまでにしよう」

入った時と同じく、星花さんを先頭にして館から出るために玄関に向かった。

植物が好き放題に伸びる庭を通り、門をくぐる——直前に、俺の体は後ろから“何か”に引きずられていった。

「ッ!? 空君！」

「追いかけるぞ、簪！」

二人が気が付いて追いかけてくるが、すでに門をくぐった二人の前に不可視の壁があるのか、門をくぐる事ができないでいた。

そして、引きずられた俺は館内に連れ戻された。

Side out

Side 星花

「クソッ！」

何もないと油断していた自分に腹が立って仕方がない。

苛立ちの余り、館全体に張られている不可視の壁をスタープラチナで殴りつけるがビクともしなかった。

「ジョジョ、先生達と合流しよ?。」

「だが!。」

「スタープラチナの力が通用しないのなら今の私達には無理だよ」

「……………わかった」

簪の提案に頷き、アイリ先生と連絡を取って合流することにした。

『空君が館内に閉じ込められた!?!』

三人と合流して起きたことを説明すると三人が驚きの声を上げた。

「しかもジョジョの力が通用しないだなんて…………」

藍が険しい顔つきで呟いた。

その言葉がその場にいる全員を俯かせた。

『おい雑種』

「…………何? ギルガメツシュ」

若干苛立たし気にギルガメツシュに返事を返した。

空君が館内に閉じ込められたという非常事態に焦っている所為でそういった反応になってしまったようだ。

こんな非常事態になんのようにだろうか? いや、英雄王の宝具なら

!

「藍、ギルガメツシュに頼んで————」

『あの者を心配するだけ無駄だと思うぞ。そもそもこの我の宝具を使うなどと万死に値する』

僕の言おうとしたことは頼もうとした本人に遮られた。

「…………無駄ってどういう意味?。」

『あやつは英霊達に近い存在だ。この程度のこと苦にもならんだらうよ』

『英雄王と同じ意見なのは気に入りませんが、私もそう思います』

ギルガメツシュだけでなくアーサー王まで心配は必要ないと言っ

てきた。

『とういかアイツ、アルテミスやゴルゴン三姉妹と同じ——神  
だぜ?』

『……………は? はあああああああッ!』

オリオンのセリフに英霊以外の僕達は度肝を抜かれた。

S i d e o u t

S i d e 空

“何か”に引きずられて館内に連れ戻されてしまった。

無理矢理解こうと思えば出来た。だが、——

謎が解明出来るチャンス! だったらこれはもう解くしかないで  
しょ! じっちゃんの名に懸けて! あ、俺じっちゃんいないや。う  
ん、ここはゼルレツチおじさんの名に懸けてにしておこう。

おふぎけはそこまですてして周りを見回す。しかし、星花さんが吹き  
飛ばした扉が元に戻ったくらいで、それ以外は最初に来た時と何ら変  
わりはない。

——……………ようやく二人きりになれた。

「声?」

館内に不気味な声が木霊した。声の主を探すが見当たらない。

……………あなたを待っていたの。

「俺を……………」

……………あなたの心、とても素敵よ。

良くわからないが褒められたようだ。

……………だから——

後ろにあった扉が開き、部屋から少女が姿を出した。

「——あなたの心を壊させて！」

謎解きは朝飯前です！

謎解きは朝飯前です！

S i d e 空

「君は誰？」

「さあ？」

目の前に現れた、濃い黄色の髪をサイドテールにして、白いナイトキャップを被っている同い年ぐらいの少女に名前を聞いてみるが教えてくれなかった。

しかし、名前がわからなくてもこの子がこの館の謎にかかわっているのは間違いないと思う。

「じゃあ、勝手に名前つけて呼ぶね。……………。寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バブルムンクフエザリオンアイザックシユナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしているようではないのを僕はしっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか…………このめだかはさつきと違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペペペペペビチグソ丸」

「アハハハハ、面白い！——心だけじゃなくて体も壊されたいみたいだね」

口元は笑っているが目はハイライトが働いておらず、こめかみに血管がビキビキと浮かび上がっていた。

はい、どつからどう見ても明らかかなほどに激おこ状態です。

「ごめんなさい、今のは無し。…………というかそれが嫌なら名前教えてよ」

「…………わかったわ。私はフランドール・スカーレット」

怒りは治まったようで、仕方ないわね、と肩をすくめながら名前を教えてくれた。

「で、君は何者なの？ ……少なくとも人間じゃないみたいだけど」

少女の背中には一對の枝に七色の宝石がぶら下がっている翼のよ

うなものが生えていて、右手には先端がスペードの形をした黒い棒を持っていた。

「吸血鬼よ」

今度はすんなりと答えてくれた。

「すずかや忍さんと違い、純血の吸血鬼かどうかまでは俺には判断できないうが嘘ではなさそうだ。」

「そっか。じゃあ、もうじき夕飯だから俺帰るね」

「私がそう簡単に帰すとでも？」

まあ、そう言うだろうとは思ってたけどね。一応言ってみただけ。

「私は名前を教えた。正体もね。今度はあなたのことを教えて」

相手が名乗ってくれたのだからこちらも自己紹介するのが当然だろう。

「名前はカカロット。地球育ちのサイヤ人だよ。特技はかめはめ波」

『オイ』

ドライグ達から一斉に突っ込まれる。

誰もキチンと自己紹介するとは言っていない。流石にこの嘘はすぐにバレると思っているからあとでキチンと自己紹介をするつもりだ。

「カカロット……？ 変わった名前ね。それにさいやじん？ というのは初めて聞く種族だわ」

だが、下手糞な嘘に彼女は思いつきり騙されていた。

「……ごめん、今言ったこと嘘なんだ。ホントの名前は龍神空っていうんだよ」

純粋な子を騙すことに気が引けて、嘘をついたことを謝った。

「じゃあ、サイヤ人って言うのも？」

俺が肯定の意味で頷き返すと少女は不機嫌そうに頬を膨らませた。

「へえ、騙すとはいい度胸ね……。今度は許さないわ。壊れなさい！」  
少女が右手を前に突き出し、強く握りしめる。何かが起こると感じ

て咄嗟に身構えた。

「……………？」

しかし、一向に何も起こらないし起こる気配もない。

沈黙だけが俺達の間を支配する。

「えつと……」

「待つて！ それ以上は何も言わないで！ 言いたいことはわかるから！」

沈黙が耐えきれなくなつて声をかけようとしたら遮られた。

「おかしいわ……！ どうして!?!」

彼女は自分の能力が使用できないことに驚いていた。

こちらとしては何が何だかさっぱりなのだがおかげで助かつている。

破壊つて言つていたつけ。……ん？ 破壊？

ふと違和感を覚えた。

この館は不帰かえらずの館と言われている。

入った人の性格が変化していることからそう言われるようになったそうだ。

もし仮に、この娘が謎の真相だとしたら何かしらを破壊する能力では辻褃が合わない気がする。とは言え、俺は彼女のことを何もかもすべて知っているわけじゃないので、もしかしたらそういう能力も持っている可能性も否めない。

「ねえ、君は人の性格を変化させる力つて持つてる?」

「はあ? そんなのあるわけないじゃない」

どうやら彼女は今回の謎とは無関係のようだ。

もちろん嘘という可能性はあるだろうけど、この短い時間で見てきた限りでは、フランドールはそういう娘じゃないと思う。

しかし、困つたことに振出しに戻つてしまった。

彼女が原因ではないことはわかったが、この館にはまだ解明すべき謎があることが発覚した。

「(二亜)」

『任せてー。………あ、あれ? わからない……』  
は?

二亜の口から信じられない言葉が出た。

「(………どうということ?)」

『いや、正確に言つて天使が使えないんだ』

そんな馬鹿な、と思い、俺も魔剣の創造を——できなかつた。  
バリアジャケットの展開さえできない。

フランドールだけじゃなく、精霊も俺も能力が使えなくなっている。

これはマズい……。

「フランドール、俺も能力がなんも使えないみたい」

「フフン、いい気味ね♪」

同じ境遇の相手がいるとわかった途端になぜか彼女はドヤ顔になつていた。

「協力してここから脱出する方法を探してくれないかな？」

「嫌よ」

すぐに断られた。

「……どうして？」

「自分がなんでこんなところにいるのかわからないけど、目の前にあなたという玩具おもちゃがある。これで遊ばない手はないでしょ？」

「それはあとでにしてくれない？　ここから出られたらいくらでも相手するから」

「………わかったわ。だけど約束破ったらただじゃおかないから」

「ありがとう」

これは約束破った時を想像するだけでも怖いな。

再びこの館の調査開始した。今度はフランドールを連れてだが。

調査の前にフランドールと情報を交換した。

フランドールの情報では彼女は俺と同じくこの世界の住人ではないとのこと、屋敷にいたのに気が付いたらこの館の部屋の一室で寝ていた、ということだ。目が覚めたのは俺達がやって来た時だ。

「扉や窓は開かない。これは想定内ね」

フランドールが開かない扉に触れながら呟いた。わかりきっていたことなので大した気落ちはなかった。

「うーん、この館内は粗方調べたんだけど……」

「そうなると残りは……」

『隠し部屋！』

二人に声が見事に重なった。

閉じ込められているという状況だというのに、それが少しだけ可笑しくて顔を見合わせては笑いあってしまった。

「テンプレとしてはこういう書齋の本棚に——ビンゴね」

書齋に入るとフランドールが本棚に真つすぐ向かい、一冊の本を押し込むとカチツという音がした。

続いて何かが動き出す音が館内から響いた。

「どうしてそこだってわかったの？」

「テンプレっていうのもあるけど、不自然な空気の流れがここからしたし、何よりもこの本だけ誰かが触った形跡があったからよ」

「なるほど……フランドールは凄いな！」

彼女に対して出てくるのは凄いの一言だ。近づけば俺にもわかったかもしれないが、彼女はこの部屋に入った瞬間にわかっていただ。

「そ、そう？」

素直に褒めると照れたのかそっぽを向いてしまった。

音が止まり、本棚がずれた場所の壁には鍵穴があった。

「今度は鍵か……」

「みたいね」

「でも、書齋の机の引き出しにでもあるんじゃない？」

机の引き出しを確認してみたら、錆び付いている鍵らしきものが見つかった。

それを鍵穴に差し込み、回す。また何かが動き出す音が響いた。

壁の一部が沈み込み、下へと降りる階段が出現した。

「さあ、降り……——ッ！」

形容し難い酷い匂いが階段の先からした。フランドールも同じように顔をしかめていた。

「……この先ヤバいかもよ？」

「言われなくても……」

覚悟を決めて先の見えない真つ暗な階段を降り始めた。  
一歩足を進めるごとに匂いはさらに酷くなっていく。  
そして一番下に辿り着いた。

「ここが一番下？」

館にあつた懐中電灯を点けていたことに後悔した。

懐中電灯が照らしたのは――それが何だったかはもうわからないほど腐った肉塊と骨だった。

「……………ツ……………おゝえゝツ……………」

《マスター！》

急激に吐き気が込み上げ、耐えられずにその場で吐いた。

精霊達の中でもあまりのグロテスクな光景に泣いてる者までいた。

「フランドールは……………大丈夫？」

「なわけないでしょ……………!?!」

「だよね……………」

その声は今にも泣きだしそうなくらい震えていた。

吸血鬼である彼女でもここまで酷いものは見慣れていないようだ。

「ここから……………出ないと……………」

「そうね……………」

震える体を無理矢理動かし、元の書齋にまで戻る。

僅かに差し込む朝日を見た途端にお互いに体を抱き締めていた。

『こゝ、怖かった……………ッ』

フランドールの温もりが、心臓の音が伝わる。それが少しだけ和らげてくれる。

……………大丈夫、大丈夫だ。俺は生きてる。

深呼吸を繰り返し、吐き気が込み上げてくるのを何とか抑える。

そして、抱き締め合った状態で幾分か過ぎた頃、ようやく体の震えが止まった。

ここは一体何なんだ……………？

隠し階段を元々の隠れていた状態に戻して書齋を出る。たったそれだけのことなのにものすごく気力を使った気がした。

「ちよつと休憩しよう」

俺が提案すると、フランドールは素直に頷いてくれた。

玄関からすぐのところにあるリビングらしき部屋のソファに腰を掛けた。

俺とフランドールの互いの肩が触れ合うほど近い。それどころか書斎からソファに座るところまで手を繋いだままだ。

だが、全く気にならない。それどころか今は誰かが隣にいることに安心感を覚える。

フランドールにとっても同じようで、俺の手を握る力が一向に弱まる気配がない。

「……これからどうするっ？」

「……わからないわ。どうしたらいいのかしら？」

完全にお手上げ状態だ。

だからと言って、いつまでもこんな不気味な館に居続けるなどごめん被る。

次にどうするかを考えていたら音が聞こえてきた。

『……………っ？』

コツコツ、と廊下を歩くような音だ。

「俺達以外にも誰かいるってこと……………？」

「わからない。けど、私がここに來てからあなた以外の人には一度も会っていないわ」

音が聞こえるように小声で会話する。

「こっちに來てるわ」

フランの言う通り、俺達の会話の最中にも徐々に音は近づいてくる。

足音は二つか。もしも戦闘になったら能力の使えない子供二人で勝てるとは思えないな……………。

相手が一般人程度の大人なら倒せるかもしれないが、今のこの状況で一般人が出てくる可能性はかなり低い。

『……………』

息を潜めて戦闘がいつでもできる構えを取りながら、扉が開かれるのを待つ。

やがて、扉は静かに開いた。入って来たのは——黒い靄に覆われた「ナニカ」だった。

『……才前達ヲヨコセ』

目の前にいる「ナニカ」はかなり低い声でそう呟くと姿を変えていった。俺とフランドールと全くの同じ姿にだ。

俺達の偽者……まさか……。

『ヨコセエエエエエエエエエエエエツ！』

俺達の偽者は獣のような目つきで俺達に襲い掛かって来た。

「来るわよっ」

「わかってるー！」

フランドールと未だに手を繋いだまま、——

『せいっ！』

——俺は俺の、フランドールはフランドールの偽物をそれぞれ蹴り飛ばした。

扉の方向に吹き飛ばされ、廊下の壁に激突した偽者達は次第に動くなり、黒い靄に戻って消えていった。

俺の素の状態の力で一撃なら、そこまでの強さはないようだ。

「フンツ、雑魚じゃない」

「これで終わりじゃないけどね」

「え？——ツ！」

フランドールが俺が指差した方、廊下の先を見ると驚きで目を見開いた。そこには大量の「ナニカ」がいたからだ。

「さあ、俺達の戦争を始めようか」

「あら、一緒に遊んでくれるのかしら？」

「(このデートに)いくら出す？」

「コインいっこ」

「一個じゃ、何も買えないよ。ましてや俺達の命もね」

「問題ないわ。私達は死なないし、——あいつらが、コンティニュー出来ないのさー！」

次々と俺達の姿が変わっていくナニカの群れに向けて走り出し、空いている拳を振るい、バランスを崩さないようにフランドールと息を

合わせて蹴りを入れる。さながらダンスでもしているような感覚だ。

「空！」

「任せて！」

名前を呼ばれたただだが彼女が次にやろうとしている行動が伝わった。

両手で彼女の両手を掴み、その場で独楽のように一回転。彼女の足が周囲にいた偽物を一掃する。

まるでヴァーリと一緒に戦ってるみたい！

彼女と出会って間もないはずなのに、ここまで息の合った連携をこなしていくうちにそう思えてきた。

「あいつらが出てくるところに行くよー！」

“ナニカ”は一定の方向からしか現れないことが戦闘の内にわかった。

そこへ辿っていけば何かがあるはずだ。

無限に湧き出る黒い霧を二人で吹き飛ばしながら前進し、館内で一番大きいであろう部屋の扉の前に着いた。ここから黒い霧が湧き出ているようだ。

こんな部屋……あつた？

最初に来た時には全部の部屋を見回ったはずだが、こんなに大きな部屋は見覚えがない。

魔術か何かで隠されていた？ でも……いや、だからか。

俺達の能力が封じられたのはこの屋敷内に閉じ込められてからだ。星花さんがスタープラチナを使った時、それと調査時はまだ能力が封じられていない状態で、大部屋の扉も何かしらによって隠されていた状態だったと考えられる。使えなくなったのはフランドールが俺の前に現れてからだと思う。

能力封じは強力な分、自分も使えなくなるデメリットは………ん？ だとしたらあの黒いのはどうして……それだけは使えるようにしてるとか、かな？

「空、よそ見しない！」

辻褄が合わない点が出てきたが、フランドールの声によって今が戦

闘中だということを読み出し、黒い靄を撃退する。

部屋の中に入ると、奥の方にいる巨大な骸骨が黒い靄を次々と作り出していた。

『行ケー・アヤツラノ姿ヲ奪エー!』

指示もその骸骨が行っていた。

今度という今度はアイツがこの館の謎の原因で間違いないだろう。

骸骨に向けて一直線に走りだし、黒い靄を踏み台にしながら接近していく。

『せいッ!』

フランドールと同時に骸骨を殴る。

『トロイ!』

骨の腕に横薙ぎにされ吹き飛ばされた。

『カハッ……………!』

壁に激突し、肺から空気が抜け、呼吸の仕方を一瞬だけ忘れる。

骸骨の容赦ない追撃に何とか反応し、無様に床を転がりながら躲けた。

『空、今のお前さんじゃあの骨野郎との戦闘は厳しいだろう。だからワシを出せ』

『……………ありがと……………出てきて、九喇嘛!』

『き、狐?! デカツ!』

俺の体から九喇嘛を元のサイズで出し、骸骨との戦闘を任せた。

どうやら出すだけなら問題はないようだ。

『碎け散れ、骨野郎!』

『グアアアアアアアアアアッ!』

九喇嘛の巨体が動くだけで黒い靄を押しつぶし、振るった拳が骸骨の腕を粉々にした。

俺達同様、九喇嘛も能力が使えないことに変わりはないが、素の力でも十分に強い。

九喇嘛に押しつぶされないように出来るだけ離れ、九喇嘛の戦闘を見守る。

骸骨は黒い靄を出しては九喇嘛に即座に潰され、防御の構えをとつ

てもそれを上回る攻撃によって為す術が無かった。

『オラアッ！』

止めに頭蓋骨目掛けてアームハンマーを振り下ろし、骸骨は完全に碎け散った。

骸骨の消滅に伴い、<sup>〃</sup>ナニカ<sup>〃</sup>も自然消滅していった。

「(二亜、能力は使えるようになった?)」

『えーっと……うん、いつも通り使える』

俺も自分で能力が使えるか確認してみる。

……うん、もう大丈夫！

骸骨の消滅によって俺達の封じられていた能力も元通り使えるようになった。

この流れからして、館から脱出することも可能だろう。

「フランドール、外に行こう」

「ええ、そうね。こんな場所から一刻も早く出たいもの」

最初は俺をこの館に閉じ込めたままにしようとしていた彼女もあの光景を見て、考えが変わったようだ。

九喇嘛を体の中に戻し、館の玄関に向かった。

『<sup>タツ</sup>空君！』

玄関には星花さん達がいた。俺達が閉じ込められている間は館内に入る事が出来なかったのだろう。

「良かった、無事だったのね……。……あら？ そちらの子はどなたかしら？」

フランドールに気が付いたアイリさんが尋ねてきた。

「この館内で出会った女の子——フランドール・スカーレットです。彼女は気が付いたらここにいただけで今回の謎とは関係ありません」

多分、彼女がここにいるのは俺が異世界から時間移動してきた影響を受けたからだ。霧に覆われたように思い出せないが、キリエさんとアミタさんがやって来たことで誰かが別の時間から来たことをなんとなく覚えてる。

「館の中で何かあった？」

「……まあ、色々」

適当に言葉を濁して、帰宅することになった。フランドールも連れてだ。

アイリ先生がIS学園に電話一本で話を付けてくれたらしい。

館についてはスピードワゴン財団が土地を買収して、調査すること。

———昔のこと。

とある大きな館に住む夫婦の間に息子が産まれた。

両親は初めての子供に大喜び。夫はそこそこ有名な会社の経営をしていたので、その後継ぎが産まれたとなるとその喜びは余計に大きかった。

子供は周囲と比べて醜い容姿をしていたが、それでも初めての子供ということでも両親の愛情を受けながら健やかに育っていった。

だが、成長するにつれて色々なものが変わり始めた。

彼が産まれてから一年後、彼には一つ下の次男が産まれ、次男が次第に親の愛情を独占していった。

妬んだ。だが、多少だ。ちよつとだけ羨ましいと思うくらいだ。

数年後、彼が苦手とする運動も得意とする勉強もあっさりと追い抜いていく程に弟は天才だった。

以前よりもさらに妬んだ。弟は天才で自分は凡人だと気が付き始めた。どうして自分は天才の兄なのにこんなにも劣っているのかと。

———あなたは弟と比べてホントに出来損ないね。

学校の成績を弟と比べられ、その度に母親に怒鳴られた。

———もう話しかけてこないで。

幼馴染で許婚の少女は自分から離れていった。

———兄さんがあまりに醜くい上に才能がなさ過ぎて、俺の評価まで下がるんだけど。

天才の弟に見下され、同じ血を分けた兄弟とは思わないような視線

と口調を向けられるようになった。

彼が二十歳になるころには、

——お前なんか私達の子供じゃない！

父親から拒絶された。

その一言が、彼を狂わせるきっかけになった。

自分を蔑む奴らが憎くて憎くてたまらない。

——…ああ、そうだ。無いなら、持っていないのなら奪ってしまえばいいんだ。

そう考えた時、彼に不思議な力が発現した。

自分にはないものを持つている奴から何もかも奪うことにした。

だが、彼の能力は黒い霧が奪うだけで自分のものにできるものではなかった。

その時も自分の才能の無さに絶望したが、それはそれでいいと開き直った。

手始めに弟に化けた偽者が本物の弟を殺し、入れ替わった。

その偽者は本物とは多少の差異があるが、周りは誰も気が付いていない。

弟の死体は父親くらいしか知らないであろう地下室に置いといた。

もちろん、そこから彼はどんどん殺した。弟から始まり、使用人、母、父、幼馴染の少女、学校のムカつく奴ら。

自分の命令に背くことのない偽者が彼の周囲を埋め尽くしていった。

彼は満足した。誰も自分を見下さない、蔑まない、自分が支配者である世界を創り出したのだから。

しかし、それは長くは続かなかった。

周囲の性格の変化に怪しんだ一人の人間に自分のしたことがバレた。

最初、彼は周りを恨む人間だったが、いつの間にか恨まれる側の人間になっていたのだ。

やがて警察が動き出し、館の一番大きな部屋に追い込まれた。

偽者達を戦わせるが、所詮元が一般の人間では武器を持った警察

の相手にならなかった。  
結果、彼はその場で射殺された。

「——で、殺されたけど、自分がないものを持つている人を妬んだまま死んだせいで、あの部屋に怨念として残った、というわけです」  
〈囁告<sup>ラジ</sup>篇<sup>エル</sup>帙〉で調べたことを星花さん達に伝えた。

「じ、じゃあ！ 館から出て来た人達全員は……!?!」

「……残念ながら、もう……」

多分、入った人全員が死んでいる。

恐らくだが、偽者一体一体にも本物との性格の差があるのだろう。わかりやすい変化とわかりにくい変化が。

「そこまではわかったけど、能力が使えなくなった理由は？」

「彼の恨みが創り出した結界、と言ったところですよ」

つまるところ英霊で言う、固有結界に近いものらしい。

『……………』

「ところで、どうしてタツツとフラランはずっと手を繋いだままなの〜？」

誰もが黙り込む中、のほほんさんからそんなことを聞かれた。

目を何度かパチリとささせてからフランドールと繋いでいる手を見た。

ちなみにフラランとはフランドールの渾名だ。

「おいおい、それを聞くのは野暮ってもんだろ？」

「本音、空気読もうよ……」

「あらあら、若いっていいわね〜」

「先生も十分若いですよ。でも、青春してるね！」

星花さんと簪さんはのほほんさんに非難の視線を向け、アイリさんと藍さんは微笑ましそうに俺達を見ていた。

『……………』

俺達はどうしてそんな視線を向けられるのかわからず、互いに顔を  
見合わせては首を傾げることしかできなかつた。

一日生徒会長です！

一日生徒会長です！

S i d e 空

「人は出会いと別れを繰り返して成長してゆく生き物です！」

不帰の館の事件から三日が経った日の放課後、俺は座っていた椅子から立ち上がって、とある漫画の名台詞を模倣して語った。

『おお〜！』

周りにいる四人の少女達から声上がる。

「そんなわけで今から生徒会の仕事を始めます」

『はい』

「……ところで君ら誰？」

メンバーの顔を見渡してから思ったことを口にした。

四人の少女の内一人はフランなので知っているのだが残りの三人は初めて見る顔だ。

「わたしたちはジャックだよ。よろしくね」

銀色のショートカットの少女はジャック。

彼女の正体は日本では「切り裂きジャック」として知られているジャック・ザ・リップだ。

だが、切り裂きジャックの正体は不明な為、彼女の場合は生まれることを許されなかった子供達の集合体がアサシンクラスとなって現れたそうだ。

一人称が「わたし」ではなく、「わたしたち」なのも集合体であるからだろう。

「ワタシはナーサリー・ライムよ」

ジャックと同じ色の長髪を三つ編みおさげのツインテールにしている少女がナーサリー・ライム。

彼女もジャックと似ていて、実在する本が多くの子供に愛され、夢を受け止めてきたことによって一つ概念として成立し、子供達の英

雄として英霊となったのだ。

「ジャンヌです！」

最後に、淡い金色の長髪をひとまとめにしている少女がジャンヌ。伝承にあったジャンヌ・ダルクの人物像よりも大分幼いのは、成長した彼女が若返りの薬を飲んだことによつて今の姿になったのだそうだ。

本来であれば英雄になつていない年頃のジャンヌなので彼女も実在しない英雄だ。

正式名称（？）はジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイというらしい。

「フランドール・スカーレットよ」

フランも自己紹介を済ませ、残るは俺だけとなった。

「龍神空だよ。よろしく。……………生徒会つて何するんだろ？」

『さあ？』

互いの名前を教え合つたところで新たな疑問が生まれた。

少女達の頭の上にも疑問符が浮かんでいるように見えたので誰もわからないみたいだ。

そもそも俺達はある人に頼まれてここにいるだけなので無理もない。

「ふっふっふっ。それは私が答えてあげるわ！」

会議室の外から不敵な声上がり、扉が勢いよく開かれた。

そこにいたのはIS学園の制服を着ている水色のショートカットの少女だ。

彼女の右手に持った開かれた扇子には「生徒会長」と書かれていた。

つまり、彼女が俺達をここに呼んだ人物であり、この学園の生徒会長——更識楯無だ。

「それで生徒会長さん、俺達は何をしたらいんですか？」

「違うわ、空君」

「えつと……………何がですか？」

「今の生徒会長は私ではなくあなたなの！ 何をやるかは自分で決め

なさい！」

更識さんの言う通り、俺は一日だけ生徒会長を任された。

ちなみに、副会長がジャンヌ。会計がフラン。書記がナーサリー・ライム。庶務がジャック。

ただ、あえて言わせてもらおうと、小学生三年生に生徒会長なんて荷が重い。いや、それ以前にわからないことが多過ぎるのだ。

唯一の救いは、この学園の行事が近くはないので、大きな仕事はないことだ。そんな余裕がある日だからこそ、生徒会長という仕事を任せてきたのかもしれないが。

自分で決めろ、か……。

「それでは改めて、これより会議を始めます。まず一つ目の議題です。

——兄弟についてです」

『それ生徒会関係ないよね!?!』

「ええいつ、五月蠅い！ 生徒会長の出した議題に文句あるのか!?!」

『逆ギレっ!?!』

皆からの非難の視線を無視し、話を進める。

「皆には兄や弟、姉、または妹がいる?」

「私は姉がいるわ」

「わたしたちはいないよ」

「ワタシもよ」

「私には兄が三人、妹が一人います!」

フランとジャンヌには姉や兄弟がいて、ジャックとナーサリー・ライムにはいないそうさ。

二人は例外的な存在なので当たり前のことなのだが。

「俺も兄弟はいないよ。でも最近、可愛い妹ができたんだ。あと、兄さんって呼べる人もいるんだ」

妹とはユーリのこと、兄は土郎さんだ。……一応、恭也さんも兄ってことでいいか。

「で、この議題は終わりね」

『それだけ!?! 短っ!』

「いや、ただ聞いてみたかっただけでオチとかなんもないし……あ、そ

う言えば、更識さんも妹がいましたね」

「ええ、いるわよ。とつてもかわ——」

「事情は分からないけど仲が悪いみたいだけどね」

「グハッ！」

更識さんが独りでに吐血した。

「なんでも言葉が足りなかった所為で酷く落ち込ませたと聞いたわ」

「そ、それは……」

「しかもIS一人で作ったことで余計に拗れたらしいですよ」

「でも、私だって無理なところは誰かに協力してもらって……！」

「その上、生徒会長で学園最強………じゃないけど、仲が悪くなるには十分だよな」

俺がここに来る前に星花さんや藍さんに負けたそうだ。

ま、二人共転生者だから、是非もないよネ！

「……………」

うんうん頷いていたらしいの間にか更識さんが倒れていた。

「キヤー！ 生徒会長が倒れているわ！」

ナーサリー・ライムがわざとらしく叫んだことに俺も便乗することにした。

「な、なんだってー!? 一体誰が……」

「これは……事件ね」

「解決するのは難しいと思います……」

フランやジャンヌも乗ってきて妙に真剣な顔つきで呟く。

「犯人は誰かなー?」

ジャックはわかっていているのかわかっていないのか定かではないが、場の流れに沿っていることに違いはない。

「こうなったら私達生徒会で犯人を捜すしかありませんね！」

『おー!』

ジャンヌの提案に俺達は拳を掲げ、状況整理から——

「犯人も何も全部あなた達の所為じゃない！」

倒れていた更識さんがガバツと立ち上がり、声を張り上げた。

『……………え?』

「なぜそこで首を傾げるの!？」

はて、俺達は何かしただろうか？

「俺達は普通に兄弟について話してただけですよ」

「あなた達姉妹の話はたまたまよ」

『うん、たまたまだよね』

「あなた達随分と仲が良いわね!」

「さて、次の話題にでも行こう。何かある?」

「ワタシ、お茶会がしたいわ」

『さんせーい』

ナーサリー・ライムの提案は話題、というほどでもないがお茶会で談笑するのもいいと思う。

「え!?! 犯人捜しは!？」

『犯人は……口下手で不器用な姉です。……実に悲しい事件でした』  
「グハッ!」

またしても吐血して倒れた。

心なしか更識さんの胸のあたりに『真犯人』と書かれた巨大な矢印が刺さったように見えた。

「さ、お茶会と言ったらお茶菓子と飲み物が必要だわ。用意しましょう!」

更識さんを見無視し、食堂からお菓子を貰いに行くことになった。

『おばさーん、お菓子をくださいなー』

食堂のおばちゃんにお菓子を子供らしく強請<sup>ねだ</sup>った。

『ククッ……こんな子供っぽい空は中々見られんから実に面白いな!』

グハハハハ!』

『ちよ、ちよつとドライグ、あんまり笑うんじゃ………プツ、ご、ごめん空……流石に私も……フフッ』

中にいるドライグをはじめとして十香達精霊にまでも笑われた。

……べ、別にみんなと一緒にだから恥ずかしくなんかないしつ。

「おやまあ、可愛い子供達ね。……ああ、でもごめんなさいね。お菓子

を上げたいんだけど、材料があるだけで何にもないんだよ……」  
「そ、そんな……」

一番楽しみにしていたナーサリー・ライムは今にも泣きそうになり、ジャックやジャンヌもかなり落ち込んでしまった。フランも少しだけ残念そうにしていた。

「あ、材料さえあれば問題ないよ」

「！ 空はお菓子を作れるの!?!」

「そこそただけだね。それに自分の手で作ってみるのも面白いと思わない？ ナーサリー・ライム」

「盲点だったわ！ 無いなら作ってしまえばいいのよ！」

悲しい表情から一転し、嬉しそうにはしゃぎだした。

「そんじゃ、皆でお菓子作ろっか！」

『おー！』

おばちゃんが微笑ましそうに見守る中、俺達五人はお菓子作りを開始した。

一時間程でお菓子作りを終えて、生徒会室に作ったお菓子を持ち運んだ。その後には紅茶を淹れてお茶会の準備は万端となった。

「楽しいお茶会の始まりよ！」

ナーサリー・ライムの号令でお茶会が始まった。

今回、俺達で作ったのはクッキーとショートケーキだ。

彼女達のお菓子作りには危なっかしい場面がいくつかあったが、そこは俺の腕でカバーした。

「ご自分で作ったお菓子はとうですか？ お嬢様方」

『最高に美味しい！』

感想を聞くと、まったく同じセリフが満面の笑みと共に返ってきた。  
た。

「あら？ 美味しそうな匂い……っってお菓子じゃない」

「更識さんも食べます？」

俺達がお茶会を始めるまで更識さんはずっと倒れていたようだ。

「ええ、折角だからいただくわ」

更識さんも交えての楽しいお茶会となった。

お茶会後も生徒会の仕事は続いた。

「まだ何かしなきゃだめですか？」

「まだお茶会しただけよね!? ま、どうせあなた達は暇なんだからいいじゃない」

さつきのことをまだ根に持っているのか、ちよつとだけ拗ねた口調で更識さんは答えてきた。

「今度は何するのー?」

「誰かあるー?」

「うーん……あ、私、 “ラジオ” というのをやってみたいです!」

突然閃いたジャンヌが意見を出してきた。

「じゃあ、それやろつか。次の生徒会活動は学内ラジオで決定!」

「いや、明らかに生徒会の仕事じゃ——」

「今の生徒会長は更識さんじゃなくて俺ですう〜! 決定権は俺にありますう〜!」

止めに入る更識さんを遮って、生徒会長の権限を使って強引にラジオの準備を進める。

実際、子供五人が上目遣いで “お願い” しただけで放送部は快く承諾してくれた。

「うちの放送部使って準備させるって……私でもしたことないわよ……。しかも、結構本格的だし……」

準備が済んだ状況では更識さんは呆れるだけで止めようとはしてこなかった。

「ではでは、本番入りま〜す。さあ〜ん……にい〜……いい〜ち……すたあ〜と〜」

本来の生徒会書記ののほほんさんの合図でラジオが開始した。

「IS学園生徒会のラジオ! 始まりま〜す! 生徒、職員の皆さんこんにちば!」

『こんにちは!』

「今日は生徒会ラジオ、記念すべき第一回目です。パーソナリティは臨時生徒会長の龍神空がやらせていただきます」

「これ以降があるの?」

「多分ないよ。更識さんじゃやらないでしょ」

ポンコツ部分もあるが、基本的に真面目な性格な更識さんがこんなおふぎけはしないと思う。

「あ、そうそう。この番組、人気次第ではお小遣いギャラも出るって」

『どっから!?!』

「スピードワゴン財団」

その名前を出すだけで「あー……なるほど」と納得していた。

「ワタシ達が子供っぽくワイワイするか、媚びていればリスナーなんて釣り放題だわ」

「ナーサリー・ライムさん、リスナーを見下げた発言は控えましょうね!」

「あ、空君以外まだ自己紹介してません!」

「むっ、それは大事なことだね。じゃあ、フランからどうぞ。なにか一言あると聞いて更識さんから指示が出るよ」

「(そういうのは言わなくていいのよ、空君!)」

なんだかんだ乗り気な更識さんに咎められるような視線を向けられるが、無視してフランに自己紹介を促す。

「会計のフランドール・スカーレットよ。一言……そうね、私の年齢って495歳なの」

「ロリババアって奴?」

「ぶっ〇すわよ」

「放送コードに引つかかる発言もやめてましようね! 今のは俺が悪かったけども! はい次の人!」

「生徒会副会長のジャンヌ・ダルク・オルタ・シヤ、サンタ・リリイです! トナカイになってくれる人を募集しています! あう……噛んじやいました」

『(うん、噛んでたね……)』

当の本人は顔を恥ずかしさの余り真つ赤にして俯いてしまった。

「えーつと……うん、まあ、そういうこともあるよね。はい、次の人！」  
何を言ってもフォローにならなさそうだったので次に進めた。

「書記のナーサリー・ライムよ。本は良いものだから、たくさん読むと  
いいわ」

「はい、最後！」

「庶務のジャックだよ。えつとね、好きなことは人間の解た——」

「ジャックさん、それ以上は止めましょうね！」

「えー？ どうしてー？」

「どう考えても放送コードに引っかかるから！」

「これで自己紹介は終わったわね。次は定番とも言える相談コーナー  
から行くのがいいのかしら？」

「そうだね。じゃあ、皆で順番にお便りを読んでいこう。最初は俺か  
らやるね」

どこから用意したのかわからないお便りを更識さんから受け取り、  
読み始める。

「えー、ラジオネーム《ワンサマー》さんからのお便りです。『生徒会  
の皆さんこんにちは。実は相談したい悩みがあるんです。』ほうほう  
お悩みとな」

「悩み相談ってラジオつぽくていいわ！」

『俺には彼女がいるんですけど、俺よりも料理が下手なのを気にして  
いるみたいなんです。なんて言ったらいいかわかりません。どうし  
たらいいですか？』だって」

「練習あるのみじゃない？ 私は料理なんてしたことないからその辺  
のことは知らないけど」

確かにフランの意見が一番だと思う。それとワンサマーさんとそ  
の彼女のさんの料理の腕の差にもよるんだが。

「女尊男卑の時代でも料理ができる男の人はモテますからね。彼女さ  
んはそこを気にしているのではないかと」

「なるほどね。他の人に取りられるんじゃないかって心配してるんだ」  
「それだったら、彼女に向かって『料理が出来なくなったらお前を愛して

る！』って言えば解決じゃないかな？」

「それがいいかな。皆は今のジャックの意見でいい？」

『問題なし！』

他の三人の賛成を得られたので悩みへの回答を伝えた。

「ワンサマーさんは彼女さんに『料理が出来なくてもお前を愛してる！』と言ってみてください。それと二人で一緒に料理してみるといいかもしれません。次のお便り行きまーす。フラン、お願い」

視界の片隅で更識さんがサムズアップしていたので十分な回答だったということだろう。

「ええ、任せて。ラジオネーム《ジョジョる男の娘》さんからのお便りよ。『男の娘であるせいで女性ものの服しか似合いません。でも、たまには男性の服も着てみたいです。男性の服が似合うにはどうしたらいいでしょうか？』というか誰も着させてくれません』ね」

『そういう星の下に生まれたから諦めてください』

スタッフも含めての満場一致の即刻解決だった。

「次ね。ジャンヌ、お願い」

「はい！ ラジオネーム《嘔吐き焼き殺すガール》さんからです。

………。……これはちよつと読むの遠慮したいです」

手紙を読み込むジャンヌの顔がみるみる青ざめていく。

どんな内容が書かれていたのか気になったので俺達も見ることした。

『うん、これは止めよう』

《嘔吐き焼き殺すガール》さんのお便りは見なかったことにして、別のお便りをジャンヌに呼んでもらうことにした。

「ラジオネーム《叛逆の騎士》さんからです。『父上と仲良くな——りたくは別にないけないけどよ、少しはコミュニケーションを取りたいっていうか……別に仲良くなりたいわけじゃねえから！ そこんとこ忘れんなよ！』だそうです」

『(うわー、めんどくさい人だなー)』

俺達の顔がげんなりとしたものになった。

ラジオ放送だから顔を見られる心配がないことが幸いだった。《叛

逆の騎士』さんが目の前にいたら怒られるか、気分を悪くさせてしま  
うだろう。

「……とりあえず毎日挨拶するのがいいんじゃない?」

「そうね。小さなことからコツコツとやっていけば、そのうち会話も  
増えていくはずよ」

「はい、回答は毎日挨拶していくといいかもしれません。《叛逆の騎  
士》さん、頑張ってください」

次はナーサリー・ライムの番だ。

「ラジオネーム《竜殺し》さんからだわ。『すまない。とある英霊にシ  
グルドという人物と似ている所為で殺されそうなんだ。こんな便り  
を送るのは迷惑だとわかっているが助けて欲しい。本当にすまない』  
ですって」

「一大事じゃん!」

「あ、まだ続きがあつたわ。『お前達のラジオ放送、期待してる』って  
『命狙われてるのに随分余裕だね!』』

「それで俺達はどうすれば……?」

「大丈夫。いつものことだから気にしなくていいわ」

『いつも命狙われてるの!』』

ナーサリー・ライムの口から零れた事実には驚きを隠せない。

つまり、顔を合わせるたびにその英霊に殺されそうになっているの  
を放置しているというわけだ。

「(その便りはもういいから、次行って)」

カンペで更識さんからの指示が伝えられた。

こくり、と頷いて受け取った次のお便りをジャックに渡した。

「ラジオネーム《ドイツの黒鬼》さんからだよ。『恋愛相談を自分の隊  
の副官にしているのだが、今一効果が得られない。例えば、裸で私の  
嫁のベッドに潜り込んだり、スクール水着で迫ったりしている。間違  
いなのか?』だつてさ」

『とりあえず、その副官は首にしましょう』

全員分回つたので相談コーナーはここまでとなった。

「続きましてお電話のコーナーです。だれに繋がるかは生徒会にもわ

かりません。その相手と生徒会でトークをしていきたいと思います」  
更識さんからすでに誰かと通話中となっている電話を受け取る。

「もしもーし、IS学園の生徒会長です。こんにちはー」

『ハロハロー。初めましてだね、龍神空君。君たちのラジオは今聞いているところだよ』

「ありがとうございます。お名前を窺ってもいいですか？」

『そうだね……《通りすがりの天災兎》とでも名乗らせてもらおうよ』

「わかりました。《通りすがりの天災兎》さんは何か話したいことでもありますか？」

『君の持つてるデバイスとLBXとかいうものをたば——この天災兎さんに見せてくれないかなー？』

LBXはともかくデバイスのことを誰かに説明したっけ？

LBXは一夏さん達との試合で使った後で説明もしたから誰かに知られても可笑しくはない。だが、デバイスに関しては誰にも教えた覚えはない。

『おー、驚いてるねー。フフン、天災兎さんは何でも知ってるんだよ。君の隣にいるフランドール・スカーレットが吸血鬼であることなんかもね』

声は出していないのに俺が驚いていることがわかっていらしい天災兎さんは、生徒会のラジオ放送をまるで見ているかのような口ぶりだ。

『それで？ 君は私に協力してくれるかい？』

「いいですよ。でもデバイスはこの世界の人には役に立たないので見せるのはLBXだけです」

LBXも魔力が無いと使うことはできないが、仕組みだけなら教えても問題はなさそうだ。

『……わかったよ。じゃあ、今から行くね』

『え、今から？』

誰もが驚く中、通話が向こうから切られてしまった。

そして、五秒後には——

「どどーん！ 束さん到着ー！ あ、実名言っちゃった。ま、いつか」

生徒会室の窓を何者かが蹴破って入って来た。

不思議の国のアリスのような服装に頭にはうさ耳のカチューシャが付けられていた。

「さあ、LBXをお姉さんに見せてみなさいな。大丈夫ダイジョーブ、怖い事なんてないからね」

「その言い方で信用度が一気に下がったんですが……」

「ちえー、なんだよ。折角この束さんが優しい大人のお姉さんを演じてやったのにさあ。原作では書かれないような描写が台無しじゃん」  
俺の反応が気に入らなかつただめにいじけた天災兎さんもと束さん。彼女はISの生みの親であり、篝さんの姉だ。

本来は宇宙開発用のために発表したISだったが、当時は誰も本気にしなかつた。

そこで『白騎士事件』でISの有用性を示したところ、多くの国に評価された。

——兵器としての価値を。

これによって本来の目的から遠く離れた軍事兵器となってしまうた。

条約で軍事利用の禁止とされているが軍が所持しているは条約なんてすでに意味を成していないだろう。

しかもその上、理由は一切判明していないが、ISは女性にしか動かせない。その影響によって女尊男卑が広まっていったようだ。

「束さんは……世界がこうなることを望んでいたんですか？」

「……ッ！……お前みたいな勘の良いガキは嫌いだよ……」

細めていた目を少しだけ開け、眉間にしわを寄せさせていた。

「……あー、なんか今ので興奮ぎめしちゃったな。かーえろつと」

踵を返し、入って来た窓から学園を去っていった。

「思いのほか時間が経ったからラジオ放送はここまでにしませう。こ

清聴ありがとうございますー！」

『ありがとうございますー！』

途中でハプニングはあったものの、何とか無事にラジオ放送を終えた。

「ふう〜、疲れた〜」

「お疲れ様、皆。初めてのことだったけどかなり楽しかったわ」

疲れて椅子にもたれかかる俺達を更識さんが労ってくれた。

「今度はゲストでも呼んでやってみない？」

『やりませんッ！』

魔法少女、育成します！

魔法少女、育成します！

Side空

「すごい寝癖だね」

「うるさい。ほら、ちゃっちゃといつもの髪にして」

鏡の前に立ってフランの髪を櫛で梳き、慣れない手つきでサイドテールの髪型にしていく。

フランから聞いた話ではフランはお嬢様なのだそうだ。髪の手入れもメイドの人に任せっきりで自分ではできないと何故か威張って言っていた。

「よし、出来た。こんなんでいいでしょ？」

「まあまあね」

「それはどうも。さ、朝ご飯食べよう」

及第点をお嬢様からもらい、食堂に向かった。

「そう言えば、いつから空はフランドールのことをフランって呼ぶようになったのだ？」

フランに加えて一夏さん達と共にご飯を食べていると、箒さんから尋ねられた。

「あ、確かにな。昨日のラジオ放送でもフランって呼んでたもんな」

皆も思い出したかのように気になりだしていた。

「別に大したことじゃないです」

簡単に説明すると、フランが学園に来た翌日にはフランとの約束通り遊び相手になった。——弾幕ごっこという命がけの遊びにだ。

破壊する程度の能力は使わないルールだから大丈夫だろうと思っていたが、そんなことは全くなかった。

全力を出さなければ多分死んでいたからかもしれないというほどフランは強い相手だったのだ。

ちなみに誰も弾幕ごっこに気が付かなかったのは結界を張って

あつたからだ。かといつて英霊達が気が付かないわけもないので、観戦しているのも何人かいた。

そして、アイリ先生の指示によってフランと一緒に部屋を借りることになったことも相まって、「フランドールじゃ一々長いから『フラン』と呼びなさい」と言われた。

うーん、友達になってくれた……でいいのかな？

本人に直接言われたわけじゃないから何とも言えないが、そうだと思いたい。

その後もラジオ放送の感想を聞きながら食事を進めていった。

「ねえ、あなた達が異世界から来た子……でいいんだよね？」

食事が食べ終わる直前に一人の女子に話しかけられた。

どうやら、俺達が異世界から来たことは初対面の人ですら知っている程にこの学園中に知れ渡っているみたいだ。

「はい、そうですよ」

金色の瞳にピンク色のショートカットの少女だ。

何か用だろ？ それよりもIS学園とは別の制服を着ているのはどうしてかな？

「私はスノーホワイトって言うんだ」

「龍神空です」

「フランドール・スカーレットよ」

スノーホワイトって偽名……かな？

人に付けるような名前じゃないと思う。まるでゲームやアニメのキャラでありそうな名前だ。

というか童話のヒロインの名前じゃなかったらどうか？

これで本名だったら彼女に謝らないといけなくなるけど聞いてみることにした。

「スノーホワイトってお名前は本名なんですか？」

「ううん、ホントの名前はひめかわこゆき姫河小雪だよ」

「……どうして最初からその名前を教えなかったのよ」

フランが軽く睨みつけると彼女はきまり悪そうに小さく謝って来た。

「ごめんね、魔法少女の姿でいるときは本名を名乗らないのが私達の世界じゃ暗黙のルール……みたいなものなの」

スーパー戦隊や仮面ライダーでたまにあるような、普段は正体を隠して日常に支障をきたすことを防ぐためなのだろう。

フランはそのところがわからなかったから不満を口にしたのだ。

「それで何か用ですか？」

「実はね、私もあなた達と同じく異世界から来たの」

俺達以外にも異世界から来た人がこんなにも身近なところにいるとは驚きだ。

話を詳しく聞くと、俺達よりも前にこの世界に来ていたらしいので、フランのように俺の時間移動に巻き込まれたわけではないそうだ。

「えっと、スノーホワイトさんは元居た世界に帰りたいうことでいいか？」

「その気持ちはあるけど、要件は別なんだ。私を……私達を鍛えて欲しいの！」

頭を下げたのはスノーホワイトさん一人じゃなかった。彼女の後ろや横には同世代ぐらいの女の子達が並んでいた。

「いいですよ」

「お願い！ どうしても——へ？ い、いいの!? そんなあつさり認めちゃって！」

「この世界では基本的に暇なので。フランも協力してね」

「……まあ、いいわよ。私も暇なわけだし」

「二人共ありがと！ これからよろしくね！」

そうと決まれば話は早い。早速アリーナで練習をすることになった。

「まずは皆さんの魔法を教えてください。もちろん強制じゃないですし、教えてくれなくても戦闘の相手はきっちりします」

だが、俺の予想に反して全員が教えてくれるとは思いにもよらなかった。

彼女達の魔法をノートに書き留め、一人ひとりにアドバイスしてか

らの戦闘訓練となった。

「最初はスノーホワイトさんからです」

「う、うん！ 私頑張るね！」

どこか緊張気味に返事を返してきた。

彼女の魔法は「困っている人の心の声が聞こえるよ」だ。

一見戦闘には不向きかもしれない能力だが、使い方を変えればかなり有利に戦闘できる。

「スノーホワイトさんは困っている声が聞こえるから、相手がされて困ることを聞き出せばいいんじゃないでしょうか」

「そっか！ それで相手の弱みを握って脅せばいいんだね！」

『腹黒い戦い方！』

スノーホワイトさん以外の人が一斉にツツコむ。

「え、違うの？」

可愛らしく首を傾げる彼女を見て、あまりにも純粹なんだなと思わされた。

「そういう戦い方もあると思いますが、聞き出した弱点を仲間に伝えればいいんです。……はつきり言うと、あなたの能力は戦闘向きじゃなくサポート向きですから」

能力だけじゃなくて性格的にも向いていないかもしれない。

「そっかあ……。うん、私頑張る！」

一応自衛のための軽い体術ぐらいは憶えてもらおう。

「次はラ・ピュセルさんです」

「僕か」

女騎士の格好をしていて、ドラゴンの角や尻尾らしきものが付いていた。

一人称が「僕」なのは彼女の変身する前の姿が男だからだ。

「剣の大きさ自在に変えらえる……。これはもうアレじゃないですね」

「お、秘策でもあるのかい？」

期待を込めた眼差しを向けてきたラ・ピュセルさんにしっかりと応える。

「ええ、それはもちろん——13km<sup>キ</sup>や」

『おおー………はい?』

「実際にやった方がいいかもしれませんね」

魔劍創造で一本の魔劍を作り出し、大きさを自在に変えることができる能力を付与した。

形状は剣というよりも刀で長さは脇差だ。

刀を天に向ける。

「死せ、神殺鎗」

別にいう必要はないが、気分的に言ってみた。

刀がそこそこの速さでぐんぐんと天へと向かって伸びていく。

うわっ、おっそ……。

本物はどれくらい速いかわからないけど、今俺がやったのは全然遅い。フェイトや美雷に当てることなんて到底無理そうだ。

それに威力もない。相手の隙を突くだけなら使えるかもしれないが通常の攻撃としては使い物にならないと思う。

くっ、流星は旧護廷十三隊三番隊元隊長や……!

「とまあ、これを出来るだけ速く、長く出来るようにしてみてください」

「あ、ああ、頑張ってみるよ……。 (いやいやいやいや、あんな長くとか無理でしょ!?)」

「じゃあ、次ですね」

次々と彼女達にアドバイスを繰り返し、フランや暇そうにしていた英霊を誘って訓練を続けた。

「今日はここまでにします。お疲れさまでした」

『お疲れさまでした!』

訓練で砂埃にまみれた俺達はすぐさまお風呂場へ直行。皆から一緒に入ろうと誘われたが、全力全開でお断りさせていただいた。

その日の夜、隣で眠るフランを起こさないように部屋を出て、一人アリーナに立つ。

「そろそろ戻りたいなあ……」

元居た世界を離れてひと月以上過ぎて我が家が恋しくなってきた。だけど肝心の戻る術がないんだよなあ……。

帰る手段に悩んでいたら、突然アリーナの上空に魔力反応が出た。

《マスター！ この反応はあの二人のものかもしれない！》

空間が歪んでゲートが出来ると、中からブレイブの予想通りにフロリアン姉妹が現れた。

「アミタさん、キリエさん!？」

『え、この声……天使様!？』

その呼び方をするのは間違いなくあの二人だ。

「(二亜、どう?)」

『間違いなく本物だね』

二亜が調べた限りではこの二人が偽物というわけではなさそうだ。

二人の傍に駆け寄り、二人との再会を喜ぶことにした。

「や、やっと天使君が見つかった〜!」

「うう〜、良かったです!」

俺を本来の世界とは間違えた世界に送ったことに罪悪感を感じているのか、申し訳なさそうに何度も謝って来た。

「それじゃあ、今すぐに——」

「あー、それはちよつと待ってくれませんか?」

元居た世界からエルトリアに出發して時間がさほど経っていない時間軸に戻るのなら、挨拶を済ませてからでも問題ないはずだ。

「わかりました。また明日、ここで落ち合いましょう」

理由を説明すると二人は快諾してくれた。

「バイバーイ、天使君」

二人はどこかに飛び去って行ってしまった。

彼女達が一晩泊まる場所を心配したが、本人たちが大丈夫だと言っていたので気にする必要はなさそうだ。

「フラン、元の世界に帰ろっか」

「と、突然何!? いきなり過ぎない!」

翌朝、フランに元の世界に帰ることを伝えた。

「はあ……まあ、事情はどうでもいいわ。そうね。帰ることが出来るならそれに越したことはないわけだし、さっさと帰るわ」

「その前にお世話になった皆にお別れの挨拶しないと」

「……わかったわ」

面倒臭そうな顔をしながらも準備を素早く済ませ、皆に別れの挨拶をして回ることにした。

最初は生徒会室に行つて、更識さんに別れの挨拶をした。

「随分急ね……」

「帰り方が見つかりましたからね、これ以上の長居は出来ませんよ」

「あなた達は元々この世界の人じゃないのよね……。仕方がないと言えば仕方ないけど、お姉さん寂しいわ、しくしく」

「わざとらしい寂しがり方ありがとうございます」

更識さんらしい別れの挨拶だと思つてしまい、つい口元が緩んでしまふ。

「元の時代に帰んのか!? クツソー! 一勝もできてないのにマジ悔しいぜー!」

アリーナにいた一夏さんや箒さん達に別れを告げると、一夏さんが一番残念がつっていた。

「時間的には余裕あるんで、最後に試合でもやります?」

「もちろんだ! 絶対勝つてやる!」

『男つてホント子供ね……』

周りにいた女性陣に呆れられていたが、試合に夢中で気にならなかつた。

「織斑先生、アイリ先生、お世話になりました」

「向こうでも元気だな」

「たまに遊びに来てくれると……あ、世界が違うから無理かしら?」

「当たり前だ、バカ者!」

「アハハ……」

俺やフランのために部屋を貸してくれた二人には本当に感謝して

いる。

「え〜!? タツツとフラン帰っちゃうの〜!?」

「本音、驚きすぎ。空君達は異世界の人なんだから当たり前でしょ?」

「で、でもでも〜!」

「急なことに驚いてるんだよ。でも、僕としても寂しいことに変わりはないね」

「それはもちろん私もだよ」

「オカルト研究部の活動、楽しかったですよ」

怖い思いもしたが、楽しかったこともそれ以上にあった。

「行っちゃうのね、二人共」

「寂しいね……」

「はい、クリスマスも一緒に出来たらと思ってましたが、残念です……」

最後は英霊達だ。その中でも俺とフランと仲が良かったナーサリー・ライム、ジャック、ジャンヌの三人が泣きそうだった。

「俺も寂しいよ」

「私も寂しいわ。引きこもっていたのがもったいないって思うくらいにあなた達と過ごした時間は楽しかったもの」

俺、フラン、フローリアン姉妹、数人の英霊がいるアリーナで俺達五人は抱き締め合っていた。

やがて、名残惜しそうに三人から離れると、今度はスカサハ先生がやって来た。

「……ケルト戦士としては半人前もいいところだが、お前には戦闘の才能がある」

誰もケルトの戦士になるつもりなんてないんですけどね!

「これは餞別だ。弟子としての期間は短かったが、お前が弟子であったことに変わりはない。受け取るがいい」

スカサハ先生から渡されたのは一本の朱槍だった。

そして、それは見間違えるはずもない彼女の宝具だった。

「いいんですか……?」

「私はその槍を大量に持っているのでな、一本くらい構わんさ」

恐る恐る受け取り、刃先から石突きまでを眺める。スカサハ先生の使っていたものと何ら変わりはない槍だ。

「ありがとうございますー！」

お礼を言つて朱槍をブレイブの圧縮空間にしまう。

「最後は私ですか」

「お姉ちゃん……」

スカサハ先生と入れ替わるようにして、俺の目の前に立ったのはヒロインXさんだった。

なんだかんだ言つて、この学園で一番お世話になったのが彼女だ。鍛錬の相手になつてもらつて、一緒にご飯を食べて、一緒に色々楽しんだ。

まるで本物の姉のようだった。

「私もあなたに何か……ああ、これがいいですね。少し下を向いててください」

「うん」

言われた通りに下を見る。すると、頭に何かを被せられた。

黒い睡が視界の半分以上を覆っていたので、多分帽子だろう。

「？」

「まだ頭を上げないでくださいね。とある事情により、私の素顔を見られるわけにはいきませんから」

上げるも何も、かなり目部下に何かを被せられたので、普段以上に頭を上げないと目の前を見ることが出来ない。

「そういや、お姉ちゃんの素顔見たことなかったな……」

「この先、あなたに辛いことや悲しいことがあつて挫折そうになった時にこの帽子を見て、私達のことを思い出してください。些細な……ホントに些細なものですが、君に勇気を分け与えてくれるはずですよ」

「……うん」

「体調管理には気を付けてくださいね。何事も体が資本ですから」

「……うん」

「あなたの作ってくれた料理、美味しかったです」

「……うん」

「それから……いや、これ以上は止めておきましょう。別れが余計に辛くなりますから」

そんなのこっちのセリフだ。

「さよなら、空。またどこかでお会いしましょう」

お姉ちゃんが背を向けたのを見て、俺も下を向いたままお姉ちゃんから背を向ける。

「あなたともここでお別れね、空」

あ、そっか。フランもここでお別れか。

隣に立っていたからこのまま一緒に行くのかと勘違いしかけていた。

「いつか……いつの日かでいいの」

「？」

「幻想郷の紅魔館って言う場所に来てくれない？」

それは再会の約束だった。

「うん、絶対に行く」

その時はなのは達のこととも紹介してあげたい。

「別れの挨拶は済みましたか？」

「はい」

「オツケー。じゃあ、今からあなた達を元の世界に戻してあげるわ」

目の前に前回と同じくゲートが開かれる。そこを潜ると——龍神家の前だった。

「……………あ」

隣にフランはいない。フローリアン姉妹もエルトリアに戻ったようだ。

「これ、お姉ちゃんの……」

頭にあった帽子を外して見てみると、お姉ちゃんが被っていた帽子だった。

「セイバー、目指してみようかな……なーんてね」

## 空ハッピーデイリー編 2

彼女が出来ました！

彼女が出来ました！

——誰かに対して殺意が湧いたのは、その時が初めてだった。

### Side空

異世界から帰ってきてから一日が経った朝。

一か月以上も龍神家から離れていたので、久々の自分のベッドは懐かしく思えてしまった。

「でも、こっちの世界の人からすれば一時間も経ってなかったんだよね……」

皆に聞いてみたが、俺が居なくなったのはたったの数分だったそう  
だ。

「……何しようかなー」

今日はこれと言った用事が無い休日だった。

特訓なら向こうで一杯したから今日一日くらいは休みにしてもいいだろう。出かけるのも特に行く当てもないからするつもりはない。  
《マスター、博士に作ってもらったものを渡すべきではありませんか？》

「作ってもらったもの………あ」

ブレイブに言われたことで大事なことを思い出した。

「鞠亜、これあげる」

『えーっと……一体どういうことなのか説明を求めてもいいですか？』

ホログラム体の鞠亜は、今自分の目の前にあるものに困惑してい

た。

「エルトリアのグランツ博士に頼んで作ってもらったんだ。あとは鞠亜のデータを入れさえすれば完成するよ」

博士にはLBXとは別にもう一つ作ってもらったものがあつた。

それは——鞠亜の体だ。

フローリアン姉妹を基にしているので、あの二人同様、人間と見間違ふほどに精緻な作りになっている。

……実のところ、LBXは単なる興味本位と面白半分の頼みで作ってもらつたものであつて、本命はこちらだ。

「皆のように動かせるからだが欲しいって言つてたから、その願いやつと叶えてあげられた」

『……ありがとうございます。私、嬉しいですっ』

「うん、どういたしまして。……頑張つたのは博士であつて、俺は大したこととはしてないんだけどね」

ブレイブ、リニス、プレシアさんに手伝ってもらいながら鞠亜のデータ移植の準備に取り掛かつた。

「データ移植、完全に終わりました」

リニスから告げられて、駆け足で鞠亜の下に行く。

「鞠亜、どう?」

「……………」

鞠亜の顔がゆつくり持ち上がった。

「おはようございます、空。それにリニスにプレシアも」

「…………… うん、おはよう! 鞠亜!」

鞠亜のデータ移植が成功した嬉しさのあまりに抱き着いてしまつた。

「きやつ」

「こら、空君。まだやらなければならぬことがあるでしょ?」

「あ、そうですね。ごめん、鞠亜」

プレシアさんに引き剥がされた。

そこから細かい修正を繰り返した後、皆をリビングに集めて鞠亜の紹介をした。

互いに顔は知ってるから紹介も何もないか。

なので鞠亜に体が出来ました、とだけ伝えてその場はすぐに解散。精霊達は作ったことを知っていたから特に驚いている様子はない。その一方で、フェイトやアリシア達は新しい家族が増えたことに喜び、鞠亜の体に触ったり、質問をしていた。

さてと、暇潰しにゲームでもしますかっ。

いつまでも見ていたいような光景に微笑みを浮かべて、自室に戻った。

「よ、よし、ギャルゲー、やるぞ」

《(また即刻バッドエンドなんでしょうけど……)》

パソコンを起動し、誕生日に貰ったときから全くやっていない『恋してマイ・リトル・ソラ』のスタートボタンを押す。

このゲームの主人公は、神様のミスで死ぬというテンプレで異世界に転生。女の子との出会いと家事スキルを特典としてもらい、新たな人生を踏み出す——のだが、前回はいきなり妹のリコに殺されてしまった。

あの時のシーン、軽くトラウマになってるんだよね……。

ちなみにあの時の正しい答えは①。正解すると——

リコ『もうっ、冗談に決まってるでしょ？ ほら、早く顔洗ってきて。ご飯冷めちゃうから』

というセリフが返ってくるのだ。

一人でも、せめて一人でも攻略してやる！

何故か、戦うときに似たような気持ちでゲームを進めていくのだった。

鞠亜誕生(?)から一週間後の休日に、いつものごとく我が家には代り映えのしないいつものメンバーが揃っていた。

「あら、今日は随分お寝坊さんね、空君」

「うん……ちよつと夜更かししちゃって」

皆が来たお昼頃に琴里に叩き起こされ、寝癖も直さずに降りてき

た。

「こつち来て。寝癖直してあげるわ」

「ありがとう」

愛衣の手招きに誘われて、愛衣が座るソファの前に座る。愛衣の方に背中を預けて頭を櫛で梳いてもらった。

これじゃ、フランに人のこと言えないな……。

「異世界に一月以上いたから髪が伸びてるわね」

前髪を触ってみたら意外と伸びていたことに気が付いた。英霊達から学ぶことに夢中でそこまで気が回らなかったみたいだ。

「ところで夜更かしてどうしたの？」

愛衣の隣にいたなのはから珍しいものでも見るかのような目で夜更かしの理由を聞かれた。周りの皆もなのはと同じ様子だった。

「んー？ ゲームしてただけ」

「ゲームのやり過ぎはよくないよ」

すずかに軽く注意され、気の抜けた返事を返した。

「へーい。……………あ、そうそう、聞いて聞いて」

『？』

「――俺、彼女が出来たんだ」

S i d e o u t

S i d e 雄 人

こんなにも何故か居た堪れない空間はいつ振りだろうか。

「あ、あれ？ なんで皆静かになるの？」

空の何気ない一言が場の空気を重くしていることに本人は気付いていない。

ほとんどの奴らが俯いていてその表情は窺えず、シグナム達なんか

は顎が外れるんじゃないかと思うくらいにただただ驚愕していた。

「な、なあ、空。いくつか聞いてもいいか?」

俺は本当かどうかを確認するために空に質問をすることにした。もしかしたら冗談の可能性もあり得る。

「なんでそんなに改まっているのか気になるけどいいよ」

「彼女ってのは『恋人』ってことでいいのか?」

「うん」

空が肯定した瞬間、なのは達の表情は絶望に染まった。

マジか……。

「相手の名前は?」

「フユカっていう名前だよ」

フユカという名前を少なくとも俺は聞いたことが無い。

皆の中でも知っている人は一人も居ないみたいだ。

となると目立たない子か、他クラス、他学年、もしくは他校の生徒の可能性も出てきた。

「……いつからだ?」

「いつから? って何が?」

「交際を始めたのがだよ!」

「あー、そういうこと。それは昨日から」

少しだけなのは達の表情が見えたが、その目は死んでいた。

「ど、どっちから告白した……いや、お前がするわけ——」

「俺から告白したよ」

「んなツ!? マジか!」

更なる衝撃的事実が空の口から出てきた。

「嘘言っただってしょうがないでしょ」

なのは達は下を向くだけだった。

「そう言えば……昨日は空だけ俺達とは帰らなかつたな」

ヴァーリが思い出したように呟いた。

もしかするとその時に呼び出して告白したのかもしれない。

「昨日の放課後にお前が相手呼び出したのか!」

「うん、手紙で屋上に呼んだんだ」

「じゃあ、そいつのこと……………」

「雄人、もうやめて」

好きなのかを尋ねようとしたら、アリサに止められた。

他の奴も俯いて涙を堪えるのに必死そうだったし、シグナム達はどう反応したらいいか困惑していた。

……これ以上は聞けないか。

恋する乙女達が自分の好きな人が別の人と付き合う話など聞きたくないわけがない。

「空が幸せになるなら、私はそれでいいかな……………」

ホントは声に出して泣きたいはずなのに、それを我慢して笑顔を浮かべるフェイトを見るのが辛かった。

こんなのって可哀相過ぎるだろ……………!

「ごめん、皆には悪いけどやっぱ聞く。——空はそいつのこと好きなのか?」

彼女達の前で聞くことではないことはわかっているが、やはり聞かずにはいられなかった。その後で女を泣かせた空のことを一発くらい殴っても許されるはずだ。

俺は拳を握り締め、空が答えるのを待つ。

「いや、別に好きではないかな」

「……………」  
「ん? んん?」

予想していなかった回答に、握りしめていた拳から力が一気に抜けた。

どういうことだ? 好きだから告白したんじゃないのか? ……

いや、もしかしたら俺の聞き間違いかもしれない。よし、もう一度聞いてみるか!

「えっと、悪いんだけど、もう一回聞いてもいいか?」

「どうぞ」

「フユカって子がお前の恋人なんだよな?」

「うん」

「交際は昨日から始まったんだよな？」

「うん」

「お前から告白したんだよな？」

「うん」

「じゃあ、その子のことが好きなんだよな？」

「ううん」

『……………はいい？』

「どういうことだ!？」

「だったらなんで好きでもないのに告白した!？」

「流れ、かな…………？」

空自身にもわかっていないのか、首を傾げていた。

「どういう流れで告白するんだよ!？」

「俺にはそうするしかなかったんだよ」

そうするしかなかったって、まさか脅迫…………の線は薄いな。空ならなんとかできるはずだろ。

「ってか、高校までは恋人作らないって約束はどうした!？」

よくよく考えれば、空の行動は十香との約束を反故にしたことになる。俺の知っている空の性格だとそんなことはしないはずなのだが、心変わりでもしたのかもしれない。

「へ？ 別に破ってないけど」

「んん!? さっきから意味が解らん!」

「ご、ごめん。俺の頭が悪いみたいだからわかりやすく説明してくれないか？」

恋人を作らないと言っておいて作っているこいつが可笑しいのか？ それとも俺が可笑しいのか？



話もうちよつとキチンと聞いていればギャルゲーだってすぐわかっただろうけど、俺達の誤解を招いたのは空の言葉が足りなかった所為だ。

うん、あそこまで誰かに殺意を抱いたのは今日が初めてだわ。

ちなみに空がボロボロになっているのは、俺は（誤解だったが）女を泣かせた怒り、他は勘違いさせられた怒りをぶつけた。特になのは達は人類史上で最も綺麗な笑顔——ただし目は笑っていない——で空を一方的にボコボコにしていた。

「でも、良かったあ。空に本当に恋人ができたわけじゃなくて」

アリシアが安堵のため息を吐いた。

「ま、まあ、私は最初からわかってたけどねっ」

「一番動揺してたのアリサちゃんだよね」

「ッ!? な、なら、はやてだつて耳塞いであかりに慰めてもらってたじゃない!」

「私!? そ、それを言うならすずかちゃんだつて机の脚軋ませるほど強く握つてたやん!」

「で、でもあれは……!」

なのは達があーだこーだ言い合い始めた。最終的には「空が悪い」という結論に落ち着いたので、それに関しては激しく同意だ。

「誤解があったのはわかったが、昨日一緒に帰らなかったのはどうしてだ?」

『あ』

誰もが忘れていたことをヴァーリが口にした。

ま、これもどうせ先生の頼みごとでも——

「ん? ああ、それは校舎裏に呼び出されて、あなたのことが好きです、って言われたんだ」

まさかのマジだったーッ!

再び俺達の間で動揺が起こる。ヴァーリただ一人は何もないかのように聞き続ける。

「そうか。返答はしたのか？」

「ううん、してない。というか出来なかったんだよね」

告白されたと理解していたことに空の成長を感じる。

「？ どういうことだ？」

『無理だつてわかってるから答えは聞かない』って。なんか、なのはやフェイト達がいるからどうのこうの言っただけで帰っちゃった。どういう意味だろうね？」

「さあな。俺にはわからない」

そりゃ、お前ら鈍感野郎どもにはわからないだろうな！

これは俺の勝手な予想でしかないが、その告白した女の子が最初から諦めていたのは、空がなのは達の中の誰かと付き合っているとかかっているが——実際のところ、空は誰とも付き合っていないのだが——どうしても気持ちだけは伝えておきたかった。大体こんなところだろう。

うーむ、気の毒なのはなのは達だけじゃなくて他の人もだったか……。

俺と同じ考えに至ったのか、なのは達は空が付き合わなかったことを喜ぶ半面、名前どころか顔も知らない子に申し訳なさそうにしていた。

「まあ、私という『婚約者』がいるわけだし、その告白した子は私と空の関係がよくわかってるわね」

「違うよ、アリサちゃん。『一番仲の良い』幼馴染の私がいるからだよ」

「なのは、一緒に住んでる。私と姉さんがいるからだよ」

なのは達が所々を強調しながら目だけが笑っていない顔で笑いあっていた。

『アハハハハ……戦争だッ！』

はあ……今日は一段と頭の痛い一日だった……。

彼女達の争いが最終的に「空が悪い」となったのは最早お約束だつ

た。

アザゼルの実験です！

アザゼルの実験です！

Side空

今日はヴァーリ、朱乃、黒歌、白音、凜祢、ティアと共に冥界の墮天使領に来ていた。

「良く来たな、お前ら。今日は俺の実験に付き合ってもらうぜ」

俺達を呼び出したのは墮天使の総督——アザゼルだ。

見た目はちよい悪イケメンオヤジ。性格は女好きでヴァーリのためなら仕事をさぼりまくる親バカだ。あと厨二病。

「……おい、今俺のことをそこはかとなくバカにしなかつたか？」

「してませんよー」

鋭いつ！ 見た目と性格はともかく墮天使の長は伊達じゃないな！

「また馬鹿にされた気がするんだが……まあいい。こつちに来い」

アザゼルさんに付いて行き、研究室に入った。そこにはガラクタにしか見えないようなものばかりが部屋のあちこちに転がっていた。

「さつきまで実験してたから片付けしてねえんだ。ま、適当に寛いでくれ」

『(この汚い部屋でどう寛げと?)』

寛げと言われても座るための椅子にすら変な道具が置いてある始末だ。

勝手に触って壊したら怒られるだろうし、下手すると爆発するかもしれないから片付けが出来ない。

「さてと、早速実験といこうぜ。最初はこれだ！」

そう言っアザゼルさんが懐から取り出したのは黒い宝石が埋まった指輪だった。

指輪を取り出すときに、何故か青い猫型ロボットが秘密道具を取り出すときに流れるBGMが脳内に流れた。

「こいつはとある精霊の力が封じてあるんだ。……一応誤解が生まれる前に言っておくが、合意の上で精霊に力を貸してもらったんだから

な」

「それで、そいつはどんな効果があるんだ？」

「ヴァーリが作成過程云々はいつでもいいらしいのか先を促した。

「龍神家に住む精霊の力——霊装が纏えるようになる力がある」

『!?!』

人工的に精霊の力の一部を再現するとは途轍もなくすごい事だろう。

俺達の中でも凜祢が特にその道具に驚いていた。

「つつても夜刀神達の力とは別の精霊の力であくまで似せたもんだ。その上、纏ったら五秒で自動的に消える。俺自身が試したからな。おかげで全身にダメージが入ったぜ。これでもし人間か下級墮天使が纏ったら確実に死ぬな。ハハハハハ！」

『ダメダメじゃん！』

アザゼルさんは豪快に笑っているが五秒しか纏えないのなら失敗でしかない。いや、この場合は未完成と言うべきか。

「そこでだ。空、お前さんが使ってみてくれ」

「絶対に嫌ですよ！」

「なんでだよ!?!」

「逆にこっちがなんでだよなんですけど！ 大体、そんな危険なものを俺が使うと思ってる方が不思議なんですが！」

「いいじゃねえかよ。死ぬわけじゃあるまいし」

「さつき、人間なら死ぬって言ってましたよね!?!」

「お前は人間じゃないだろうが。だから多分大丈夫！」

「その自信はどこから来た!?!」

「最悪死ぬが、運が良ければ全身骨折程度で済むだろ」

運が良くても最悪な結果でしかない！

俺は人間じゃないが、強さで言ったらアザゼルさんの方がまだまだ上だ。そのアザゼルさんが無理だったなら俺には到底無理なはずだ。

「頼むツ！ やってくれたらなんかやるからよ！」

「結果次第ではそれを受け取ることなく終えるんですが！」

「そこをなんとか！」

アザゼルさんは両手を合わせて拝み倒してきた。

俺に頼んできたのは、俺が精霊の力を使うことを知っていることから、アザゼルさんに使えなくても俺にはもしかしたら使えるのではないかと考えたからだろう。

セライト・グラール  
幽世の聖杯があるから最悪の場合は何とかなる……かな？

不安な要素が多くてたとえ聖杯があっても安心はできない。それならば普通は断るのだが、ちよつとした好奇心が俺の判断を鈍らせている。

『興味が少しでもあるのならやってみたらどうだ？ 案外イケるかもしれないぞ？』

ドライブが迷っている俺の背中を押してくる。

………ま、何とかなるか。

指輪を受け取り、左手の中指に嵌めた。

「それで、次に『闇の精霊よ、我は力を求める。汝の力を霊装と化し、我が力と成れ』だ」

この指輪を使うには中二病っぽいセリフを言わなくてはいけないらしい。まあ龍精霊化の時の呪文うたも同じようなものなのだが。

『闇の精霊よ、我は力を求める。汝の力を霊装と化し、我が力と成れ』

呪文を紡ぎ終わると指輪の宝石から黒い靄が吹き出し、俺の体にまとわりついた。何かを形成していくのだが、結局何にもならずすぐに霧散してしまった。

「……失敗でしょうか？」

白音が小さく首を傾げながら呟いた。

「俺の時とは随分結果が違うが……まあ、こいつは失敗だな」

アザゼルさんも諦めがついたのか、俺から指輪を受け取ると机の中にしまった。

「よし、次だ」

気を取り直して、次の実験に移った。

アザゼルさんが取り出したのは掌にすっぽりと収まる大きさの少し分厚い円盤、いわゆるヨーヨーだった。

「名前はまだないが、このヨーヨーは魔力を流し込めば鋼鉄すらも砕く威力が出せるぜ」

恐ろしいな！

「魔力での実験は成功済みだ。今回試して欲しいことは黒歌の仙術を流し込む実験だ」

「私の仙術？ ふうん、面白そうだし、やってみよつと♪」

黒歌がヨーヨーを受け取ると、ヨーヨーで遊びだす。

「相手の体に流し込む感覚でやれば楽に行けると思うぜ」

黒歌がアザゼルさんのアドバイス通りに仙術の気を流し始めたのか、ヨーヨーの動きが不規則なものに変わっていった。

「ハハハ♪ 楽しくなってきたにゃん♪」

調子に乗って来た黒歌はヨーヨーの動きを加速させ、俺達に当たるか当たらないかのギリギリのところにヨーヨーを飛ばし始めた。

「黒歌ちゃん、危ないわよ！」

「ダイジョーブだって——あ」

『ッ!?!』

朱乃の忠告空しく、黒歌の手からヨーヨーがすっぽ抜け、白音目掛けて飛んでいった。

やばッ！

すぐに反応したが、気を流されていたヨーヨーは凄まじいスピードで飛んでいく。

間に合わ——

「……気を付けなさい。下手をするとあなたの妹を殺すところだったのよ?」

白音に当たることはなく、ティアが片手でヨーヨーを掴み取っていた。

「ご、ごめんなさい……」

「謝るのは私にじゃないでしょ?」

「うん……。白音、ごめんなさい。朱乃も無視してごめん」

「……私はケガをしませんから大丈夫です。ただし、あんな無茶はもうダメですからね」

「そうだよっ、黒歌ちゃん。今度は周りに気を付けてね？」  
「うんっ」

「謝ることが出来たならよろしい。こんなものはもういらないわね」  
「あっ、ティアマツトてめえ！」

ティアアが掴んだままのヨーヨーを粉々に砕いてしまった。

「ちくしょう！ シェムハザに隠れてこっそり作ったのによお……  
！」

『いや、仕事しろよ』

俺達全員から突っ込まれる。凶星を突かれて何も言い返せないのか、「うぐっ……」と言葉を詰まらせるだけだった。

「う、うるせえ！ 次だ、次！」

開き直ったアザゼルさんがまたまた何かを取り出した。それは一本の刀だった。

「こいつは逆刃刀だ。本来なら人が斬れないと言われてるが、こいつは人を斬ることが出来る」

『（それって普通の刀と同じじゃない？）』

「人斬り抜刀齋とか飛天御剣流ってカッコイイよな。……何故漫画の世界だけで現実の世界にはないんだ！」

『知らないよ！』

どうやら人間界の漫画の読み過ぎなだけだった。

この厨二病総督は……！

見せびらかすためだけに出したのか、説明が終わるなりすぐに刀をしまった。

それからどんどんアザゼルさんの発明品を紹介された。

「魔王の攻撃に耐えるフライパン！」

『フライパンを料理以外の何に使うの!?!』

実際に魔王の攻撃を試したのか!?

「嫌いな奴の名前を書き込むだけで簡単に呪いをかけられるノート  
！」

『デスノートのパクリじゃん!』

ある意味凄いです！

「遠距離からの攻撃可能な小型衛星！ 狙いが雑で使用者に当たる確率8割！」

『それはいくらなんでも雑過ぎるでしょ!?!』

その大きさはなんとアザゼルさんの手のひらサイズ！

「これを食べれば今日から君も能力者！ その名も悪魔の実！ ……  
デメリットで一生泳げなくなるがな」

『そこまで忠実に再現したの!?!』

このヒト、マジ凄いな！

「直接相手の脳内に語り掛けられるイヤホンマイク！ ただし届く距離は半径1mにいる相手にだけ！」

『だったら普通に話せばよくない!?!』

しかも念話があるからあまり欲しいとは思わないね！

「次で最後になっちまうが、こいつは期待していいぜ」

ツツコミの連続で息を切らす俺達の前に、アザゼルさんが自信たっぷりに懐から取り出したのは一丁の銃(?)だった。見た目はSF漫画に出てくるような形の銃だ。

「これはな……若返りの光線銃だ！ こんなの作れちまう自分の才能が恐ろしいぜ……」

『ふーん』

「反応薄ッ！」

「だって俺達子供ですから」

「私、年齢とか気にしないし、その気になれば姿変えられるわ」

「私も霊力である程度は老化を抑えられるからあんまり興味はないかな……」

「お前らなあ……！ いいぜ、だったら今から試してやる。腰ぬかすなよ?。」

銃の横にある部分を弄って銃口を俺に向けた。

「とりあえず五年分な」

五年分ねえ……その頃の俺ってどんな——あ、五年前って……！

「ちよ、ま——」

慌てて気付くもアザゼルさんが引き金を引いて光線を浴びる方が

速かった。

視界が白く染まり、意識が徐々に薄れていった。

Side out

Side 凜柊

え……？ え!!? ええッ!?

目の前の出来事に頭の整理が追い付かない。

視界に入るヴァーリ君達もかなり驚いていて、私と同じく困惑している。

こ、これはどうすればいいのかな!?

空のいた場所には一人の空とそっくりの高校生ぐらいの少年がいた。

前とは違い、金髪ではなく黒髪のままだ。

アザゼルさんは五年分戻したと言っていた。それはつまり、空がこの世界に来たのは四年前。それより前は——空がこの世界にやってくる前の姿だ。

「空が大きくなってる、だと?」

事情を知らないアザゼルさん達は成長したと勘違いしてるみたいだ。

「……………」

空の五年前の姿——桜木遙も私達と同じく困惑していた。

「えつと……初めまして。桜木遙です」

とりあえず自己紹介するんだね!!? とうかこっちは君の名前知ってるけどね!

自己紹介をされたのでこちらも一応自己紹介をしておいた。

ただ、一人一人の名前を聞く度に驚愕の表情を浮かべていた。それもそのはず。遙君の世界では私達は創作上の人物でしかない。そんな人物達が目の前にいたら驚くのも無理はないだろう。

「これは夢か? それともなんらかの理由でそういう世界に来た? でも原作の世界がそれぞれ……」

私達に聞こえない程度にブツブツ一人で呟き始めた。といつても隣にいた私にはほとんど聞こえてる。

「ってこんな悠長なことをしてる場合じゃないよ！」

「アザゼルさん、どうやってたら元に戻るの!?!」

「じ、時間が経てば元に戻るはずだ」

「どれくらい!?!」

「それは俺にもわからねえ。個人差があるんだ。最長で一か月戻らない奴もいたしな」

「一か月!?!」

「……アイツは何もんだ？ 絶対俺より強いぞ。そういや、空は前世があるって言ってたか？ となると、成長したんじゃないかって……前世の姿、か？ おい、園神凜祢、その辺どうなんだ？」

う、やっぱり私に聞いてくるよね……。

「凄いな、ほとんどあつてるよ。彼は空の前世の姿——たったの四年前の姿なんだけどね」

「なるほどな……」

「前世？ ……つまり、俺はこの先、何かしらの理由で死ぬってことですか?」

しまった！ 本人の前で話すことじゃなかった！

あまりに唐突な出来事に注意力が緩んでいた。

「ああ、そうだ。そしてこの世界に龍神空としてやって来る……らしい。俺はその辺の詳しいことはよく知らん」

隠し通すことが出来ないと思ったアザゼルさんは正直に伝えた。

「そうですか」

だが、彼は自分が死ぬということに興味がないのか素っ気無い返答をしてきた。

「君は……死ぬことが怖くないの?」

「ううん、怖い。すごく怖い」

「じゃあ、どうして自分の未来が分かっているのに平然としていられるのかな?」

「だって、龍神空として生きるんだろ? ……この場合は生まれ変わ

る？　ともかく、それだけでも十分じゃんか。そしたらきつとアイツらのところにまた戻れる。美桜達との約束を守るから」

ああ、そうだ。彼は空の前世なんだ。こんな答え方をするに決まってるじゃないか。

「やっぱり君は凄いな」

「そう？　まあ、これでも一応神様だから」

「おいおい、笑えない冗談だな……」

アザゼルは遥君の神様発言に頬を引きつらせていた。

「うーん、しばらくどうしよっかなー。戻るのにも時間が掛かるみたいだし、ここ最近は何も戦ってばっかだからたまにはゆっくりしますかね」

「こういうのんびりしたところも空と同じだ。」

「時間があるなら俺と戦ってくれ」

「ん？　アハハ、いいよ。やろっか」

ヴァーリ君の頼みを笑いながら快く引き受け、墮天使領の誰も使っていない土地で戦うことになった。

「二人共準備はいいか？」

「ああ」「はい」

軽い準備運動を済ませた二人が向かい合っている。

ヴァーリ君はすでにバランス・ブレイカー禁手の状態だ。

一方の遥君は素手だ。

『以前の遥は空の体が弱かったせいで本気ではなかったが、今のアイツは体も本人だ。今回は本気を出せるだろうな』

ヴァーリ君のアルビオンが遥君の状態について述べた。

「さ、やろうか。白龍皇の力を見せてくれ」

「ああ、存分に見せてやるさ」

アザゼルさんが開始の合図を出すと、ヴァーリ君が高速で突っ込んで殴りかかる——がそこに遥君はいなかった。そして、ひとりでヴァーリ君の鎧が完全に砕けた。

『ッ!?!』

ヴァーリ君の背後に彼はいた。

いつの間に……！

誰もが目を見開いた。彼の動きが全く見えなかったからだ。あの墮天使の総督や龍王の一角でさえもだ。

「子供にしては速い方だろうな。でも、まだまだ」

圧倒的な力量の差が二人の間には存在した。

ヴァーリ君は自身の持つ膨大な魔力を使って鎧を修復し、再び攻めた。今度は魔力による遠距離攻撃だ。

「……そういうことだったのね」

「ティアマツトさん？」

隣にいたティアマツトさんの眩きが気になった。

「私が空に惹かれた理由がようやくわかったわ。さっき自分が神だと言ったけど、恐らく龍に関する神。私達龍種からすれば絶対的な存在になるわ。だから空に——いいえ、桜木遥に惹かれたのね」

私達精霊は天照にそのことを予め聞かされていたから驚くことはない。

「それに白龍皇の彼、強い神格を持つ相手だと能力が発動しないのでしょ？ 効く効かないの前に触れられるかどうかも怪しいところなのだけどね」

ヴァーリ君が遥君を攻め続けるが一度も攻撃を当てることが出来ていない。

空が上げた赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手も使い始めているが、遥君は涼しい顔で躲し、かすりもしない。

「倍加してもその程度か……」

期待外れとでも言いたそうな言い方だった。

「お前、ジャガーノート・ドライブ 龍は使えるのか？」

「いいや、使えない」

「そつか。じゃあ、ここまでだな」

遥君の右手に光が集まりだし、一瞬だけ右手がブレた。あまりに速過ぎてブレたようにしか見えなかっただけだろう。

何かが割れるような音に気が付けば、ヴァーリ君の鎧が綺麗に真っ二つにされていた。

「……今、アイツはなにをしたんだ？」

「アザゼルさんの疑問に答えられるのはこの場では彼だけだ。」

S i d e o u t

S i d e  
???

——感じる。初めて感じる力だ。

——知りたい。長い時の中で初めて何かに興味を持ったかもしれない。

——会いに行こう。その者の力を借りれば、私の悲願は確実に叶うだろう。

空間に裂け目を作り出し、力の感じる場所へと向かった。

無限と夢幻です！

無限と夢幻です！

Side 遙

ヴァーリとの戦いを終えてすぐのことだった。

「お前、何者？」

黒いワンピースを着て、腰まである黒い髪の少女が先程まで戦っていた場所に現れた。

あー、この子は確か……。

頭から足の先まで見る必要もなく相手が誰だかを理解した。

ウロボロス・ドラゴン

『無限の龍神』——オーフィス。

アボカリユプス・ドラゴン

ハイスクールD×Dの世界では『真なる赤龍神帝』——グレートレッドと並ぶ最強のドラゴンであり、混沌・無限・虚無を象徴する「無限」の体現者。

カオス・ブリゲード

原作だとグレートレッドを倒すために禍の団のトップにいたけど、もうすでになつていいのか？

「桜木遙。それ以下でもそれ以上でもないただの人間」

「嘘。お前、我と同じドラゴン。……だけど、どこか違う。何故？」

人間が嘘だと一瞬でバレていた。しかも同じドラゴンであることまで。

「アハハ、バレバレか。うん、俺はドラゴン。そんでもって……ちよつと訳あり」

「我より強い？」

「うーん、どうだろ？ 無限と言われる存在に勝てるか？ あー、でも多分負けないかな」

勝つことは出来ないが、多分負けることもないだろう。

「なら、我と共にグレートレッド倒す」

やっぱりそう来たか……。

「世界最強への挑戦も悪くない、かな。力になれるかはわからないけど行くだけ行ってみる」

「ん。我に付いてこい」

彼女が腕を軽く振るうと次元に裂け目が出来た。ここからグレートレッドのところにもむかうようだ。

「今からこの子と一緒にグレートレッドに会いに行くから。じゃあね」

『コンビニ感覚か！』

皆のツツコミを受けながら、次元の裂け目に入り込んだ。

「ここが次元の狭間……」

見渡す限りどこもかしこも万華鏡の中を覗いているのような場所だ。足場はないがきちんと空気はある。

「それで、グレートレッドはどこに？」

「もうじき来る」

彼女が人差し指を向けた先から強大な力を感じた。あの向こうからグレートレッドがやってくるようだ。

「ところでさ、オーフィスはどうしてグレートレッドと戦ったの？」

「我は静寂が欲しい。その為にはグレートレッド、邪魔。だけど、負けて追い出された」

「そっか」

理由を聞いて内心呆れてしまった。

しばらくすれば、巨大な赤いドラゴンが俺達二人の前に現れた。そのドラゴンこそがグレートレッドだ。

すっげー威圧感……！

俺達二人を視界に収めたドラゴンは動きを止めた。

「グレートレッド、久しい」

『……ああ、久しいな。また戦いに来たのか？』

「今回はこいつと共に倒す」

『いいだろう。どんな力が来ようとも無駄だということを思い知らせてやる』

オーフィスとグレートレッドがドラゴンのオーラを体中から溢れ出していた。

この二体が人間界や冥界にいたらあつという間に吹き飛びそうだ。  
「あー、待って待って。戦うのは良いんだけど、その前にお話しさせてくれるか?」

「何故?」

「お前らは仲良く一緒に過ごすって出来ないのか? 見た感じ、オーフィスがこの空間を独り占めにしたいようにしか思えないんだけど、グレートレッドもこの空間を独り占めしたいわけ?」

『そんなことはない。そいつの方は最初から私のことを追い出し、独り占めする気のようながな』

こう言うのはアレなのだが言わせてもらおう。

「お前ら最強のくせに随分くだらないよな」

『!?!』

二体の目が見開かれた。

「こんな何もない場所において何が楽しいのか、俺にはさっぱりだね。お前らはもっと世界を知るべきだろ」

『ふん、人間、悪魔、天使、堕天使、神がいる世界などつまらん』

「我も同じ。ここが一番」

「じゃあ、お前らは世界の全部を知ってるのか? 遊びつくしたのか? 青春したのか?」

ドラゴンに青春ってどうなんだろうと言って思った。だが、俺の経験上こんな場所を巡って戦うよりも数億倍マシだ。

『……………』

二人は黙っていた。

「世界は楽しい事や面白い事で溢れてるんだぜ。だったら知つとかないと損だろ?」

『楽しい事……………』

「面白い事……………」

もう一押しかな?

「たまにでいいから俺の家に来なよ。美味しい飯作ってやる。温かい風呂に入れてやる。その他にも知らないことをたくさん教えてやる」  
『……………』

「てか、そもそもこんな広い場所なんだから独り占めはダメだろ。誰のものでもないんだから子供みたいに意地張ってないで仲良く使えばいいだけじゃないか」

「何が時間を生きてきたこいつらは楽しむことを知らないだけだ。戦う気分じゃないな。」

「……なんか説教してみたいでごめんな。とりあえず戦いはいいや。俺は帰る。気が向いたらいつでもいいからな」

先程のオーフィスの真似をして元の場所に戻った。

「ただいま」

「戻ったか。で、お前さんはグレートレッドと戦ったのか？」

アザゼルさんの質問に首を横に振った。

「会いましたけど、戦ってません」

「だろうな。無傷で勝てるような相手じゃねえからな」

俺の様子を見てアザゼルさんは判断していたようだ。

あのサイズと実際に戦うとなると、俺も姿変えないといけなくなるだろう。

「さーてと、今日はもう帰るか。美桜達が………ってここ異世界だったか。どうしよ？」

グレートレッドやオーフィスに家に来てって言ったが、自分の家に帰ることが出来そうにない。

「それなら龍神空が住む家に来ない？」

帰る場所のない俺に凜祢が手を差し伸べてくれた。

「あー、そっかそっか。未来の俺が住んでる家かあ……。じゃあ、しばらく厄介になる」

周りの人達からすれば龍神空の家に泊まることに決まった。

いつ元に戻るかはわからないが、これで寝るところには困らなくなった。

龍神空の使い魔であるティアマットことティアの転移魔法で冥界から人間界に戻った。

「——というわけで、しばらくここにいさせてもらおうから。よろしく」

龍神家に着いてから、この家に住む人達に挨拶をした。

事情を説明したら予想するまでもなく全員が驚きの声を上げた。俺は俺でこの家に住む顔ぶれに驚いていたが。

精霊達がほぼ全員いるのか……。それに「魔法少女リリカルなのは」だったけ……？

俺は原作を詳しくは知らないが、その中の何人かはこの場にはいないはずだったと思う。

この世界は俺の知ってる者と違って色々混ざって変になつてるみたいだし、そういう結末になったか元からそうだった、ということなのだろう。

「あの……空さんには戻れないんでしょうか……？」

「時間が経てば自然と戻るってさ」

「あんた曲がりなりに神様なんですよ？　どうにかならないわけ？」

うわー、結構痛いこと言われたなあ……。

言ってきた琴里だけでなく、周りにいた少女達も同じような視線を向けていた。

「姿を変えるくらいなら出来るけど結局中身は俺だし、この姿はある意味正常だから能力で打ち消すことも出来ない。……うん、完全に仕上げ状態だ。アハハ、悪いな」

ゼウスとか他の神なら出来るかもしれないけど、残念なことに俺はそういうのは得意じゃない。

「ま、気楽に気長に頼むよ」

「はあ……わかったわ。……今度アザゼルに会ったら【砲】<sup>メギド</sup>撃つてやる」

諦め交じりの長い溜息を吐いた琴里はリビングを出てどこかへ行ってしまった。

「そろそろ晩御飯にしましょう」

「でも、母さん。空が……」

「そうなのよねえ……」

プレシアさんとその娘のフェイトが困った様子だ。聞いたところ、この家の料理は基本的には空が作っているとのことだ。

「だったら俺が作らないわけにはいかないでしょ」

「遥は料理できるの!？」

「もちろん。これでも長生きしてるからな。料理くらいできるぞ」

「長生き……? それってどれくらい長いの?」

「一億と二千年くらいは越えてるな」

『絶対に嘘だ!』

全員から突っ込まれた。

「いやいやホントだって。むしろ数えるのが面倒でそれ以上生きてると思う」

俺は人間じゃなくてドラゴンだからそれくらい長生きしても可笑しくはないんじゃないか? まあ、そのドラゴンの中でもかなり異常な存在ではあるけど……。

「俺の年齢云々はともかく、料理は任せて。一時間もすれば完成するから」

「ほい、出来上がりっつと」

大人数が使うための大きなテーブルの上にはたくさん料理が並べられていた。

「全員揃ったわね。……あら? 椅子が多くないかしら?」

琴里がこの家の人数よりも多く椅子があることに気が付いた。

これは俺が用意した。

「食べるのもうちよつと待ってて。もうじき来るから」

十香と美雷というフェイトにそっくりな子が我慢できないという顔をしながら訴えてきたが何とか抑えた。

「——来た! 迎えに行ってくる」

思ったよりも早く来た人物を迎えに席を立ち、玄関に向かう。

「来てくれて嬉しいよ。流石に別れてすぐに来るとは思わなかったけど」

俺が待っていたのはグレートレッドとオーフィスだ。

料理を作っている最中に彼女達が来るのを感じた。

グレートレッドは先程のドラゴンの状態ではなく、真紅の長髪に金色の瞳、男性の誰もが見とれる体型をした女性の姿だ。

「ご飯食べに来た」

「私もだ。ついでに風呂とやらもな」

「うん、わかってる。準備は出来てるから上がって上がって」

二人を食堂に案内し、席に座らせる。

いきなりの来客に皆は「誰?」となっていたので、軽く紹介した。

「黒髪の女の子がオーフィス。紅い髪の女性がグレートレッド。今日は俺が誘ったんだ」

「ナンパしたの?」

「してないから!」

話を逸らすためにゴホンとわざとらしく咳ばらいをして食前の挨拶を促した。

するとこれも未来の俺がやっていたらしく、俺がやることになった。

「いただきます」

『いただきます』

グレートレッドとオーフィスも見様見真似で合掌していた。

それから使い慣れていない箸を使って料理を口に運ぶ。

『!』

二人の目が大きく見開かれた。

「美味しいか?」

二人は咀嚼しながら頷き返した。どうやら伝説のドラゴンにも俺の料理は好評のようだ。

「お前の言う通り、私達は何も知らなかったのだな……」

「我、初めてこんなに美味しいもの食べた」

「だろ？ さ、まだまだ美味しいものはたくさんあるから食べてみて」  
二人の食べるペースは段々早くなつていき、あっという間に完食してしまった。

顔を見れば二人が満足していることは明らかだった。

「デザートにアイスもあるけど食べる？」

『食べる！』

伝説のドラゴンがたかがアイスに即座に反応する光景は誰が信じられるだろうか。アザゼルさんや魔王、他勢力の神々が見れば頬引き攣らせるか、顎を外すほどビツクリすんじゃないかと想像してしまつた。

「続いてお風呂だな。俺は一緒に入ることが出来ないから他の人と入ってくれ」

「なぜだ？」

「いや、そりゃ男女が一緒はダメだろ？」

「我、性別関係ない」

「私もだ」

「そういう問題じゃないんだよ！」

箱入り娘でも男女一緒はおかしいと気が付くレベルのことすらドラゴンたちは知らない。というよりも気にならないのかもしれない。

周りに目を向けるが、お前が連れてきたんだからお前が責任取れと言わんばかりの目をしていた。

そこは助けてくれてもいいんじゃないかな!?

「さあ、早く風呂とやらに連れていけ」

腕を掴まれて逃げられない。肩にはオーフィスが乗っかっていて意地でも離れない気だ。

観念した俺はお風呂場に連れていった。

彼女達が服を脱ぐのを見ないようにながら俺も服を脱ぐ。

「服脱いだ。これからどうすればいい？」

二人の着替えが早いのは、服を魔力で作ったからだろう。

「せめてタオルくらいは巻いてくれよ？」

「お風呂でタオルを湯船に付けるのはマナー違反」

「む、そうなのか？」

グレートレッドとオフィスは巻こうとしていたバスタオルを着替えを入れるかごに放ってしまった。

折紙エ……！

余計なことをよくも言ってくれた折紙を睨むがすぐにどこかへ逃げた。

「まったく……まあ、いいや。そこで体を洗うんだ」  
『？』

シャワーを指差すが、二人は首を傾げるだけだった。

こいつらは体を洗うことも知らんのか！ ……もしかして、そこも俺がやらないといけないのか？

この場に頼れる人は誰も居ない。というか皆俺を見捨てたのだから助けなどあるはずがないのだ。

美桜達がいたならばこういう場面は必ず代わってくれるのだが、今いない人を求めても仕方がない。腹を決めて体を洗う見本を見せることにした。

そこから二人の洗うところを見るわけにはいかないので、湯船に先に浸かった。

しかし、オフィスが髪を洗うことに手間取っていたことをグレートレッドから聞かされて、助けに行かざるを得なかった。

「泡が入らないように目瞑ってるよ」  
「ん」

長い黒髪を丁寧に洗った。体を洗ったことが無いはずなのに触り心地が良かったのは、魔力で保っていたのだろう。今更ながらに魔力が便利過ぎると感じた。

魔力の使い方は向こうと似たようなもんか……。

「ほい、終わり。湯船に浸かれ」

二人を湯船に浸からせ、彼女達を見ないように再び俺も湯船に浸かる。

「温かい」

「風呂というのは気持ちのいいものだな」

無表情のオフィスの頬が緩んでいた。

「日本には温泉っていうのがあってな、お風呂よりももつと気持ちいいぞ」

温泉という単語に二人の目が輝いた気がした。

本当に何にも知らない二人に苦笑いするも、これは教え甲斐がありそうだ。

温泉以外にも二人が興味を示しそうなことを教え、風呂上りにはゲームをすることになった。

「——こつちだ！」

「ざんねーん！ そいつはジョーカーだよ！」

グレートレッドがアルフからカードを取るが、ハズレだ。

「これでアタシの勝ちだね！」

アルフが絵札を揃えてババ抜きが終わった。

「あつれ〜？ 世界最強とか不動って言われてるのにカードゲームじゃ、たかが9歳の子供やその使い魔に負けちゃうんだ〜。しかも最初に絶対負けなとか宣言してたけど全敗してるよね〜？ ねえねえ、今どんな気持ち？ どんな気持ち？」

『……………』

風呂上がりにランプを教えたのだが、最強二人は見事に全敗。

自分でもうぎつたいと思う煽りに悔しそうにしているが、事実だけに何も言い返せないでいた。特にグレートレッドは開始前に「最強の私が負けるはずもない」と言っていたので余計に恥ずかしいはずだ。「……悔しいか？」

煽りは止めてちよつとだけ真面目になる。

「これが『負ける』ってことだ。世界にはお前らが得意な力比べ以外にも勝敗を付ける方法はいくらでもある」

「私知知っているよりも世界は広いな。いや、私達が知らなさ過ぎただけか……」

「そういうこつた。さあ、時間はまだまだある。お前ら『最強』を今

日は「最弱」だつてことをとことん教えてやる！」  
トランプでババ抜き、ジジ抜き、七並べ、神経衰弱、ポーカー。他にはUNO、ボードゲームなどをやった。全員では出来ないのので、皆で代わる代わる二人と遊んだのだった。

「ふう、楽しかったあ〜」

皆から離れ、龍神家の屋上で風に当たっていた。

「俺の未来は悲しい結末、か……」

冷たい夜風が現実を思い出させる。

恐らく、俺が死ぬことはどうにもならない確定した未来だろう。仮にそうでなくとも、こんなにも幸せな未来が変わる選択はしたくない。ならば、このままがいい。

「俺が死ぬことは悪くないのか」

そして、美桜達と交わした約束を龍神空が叶えてくれるならそれがいい。

だが、問題は向こうの世界だ。無駄死にだけは笑えない。  
空自分のためにやれることをしよう。

「……でも、やっぱり死ぬのは嫌だなあ……」

それは俺の口から漏れた、誰にも聞かれたくない弱音だった。

ランスター兄妹です！

ランスター兄妹です！

S i d e 空

——なあにこれえ？

それが今一番言いたいことだ。

気が付くと俺はトレーニングルームにいた。

そして、桜色、黄色、白色の砲撃が俺に向かって真つすぐに飛んできていた状況だ。

避けようにも今からでは九喇嘛モードでも間に合わない。防ごうにもこの砲撃の威力は抑えきれずに当たる。この場合、やられる覚悟で受けるしかないだろう。

そんな状況下でもう一度言わせてもらいたい。

——なあにこれえ？

無駄な足掻きとわかっていながら防御魔法を展開し、瞬時に壊され、意識は飛んでいった。

「そんなことになってたんだ」

アザゼルさんの実験によって、俺が前世の姿に戻されてから何があったかを起きてから聞かされた。

——桜木遥。

それが俺の本来の名前。

ヴァーリや十香達が俺が遥に戻っている間に戦ったらしいが、誰も手も足も出なかったそうだ。あのオリヴィエさんでさえもだ。負けたのがショックでかなり拗ねていたらしい。

しかし、遥がやったことはそれだけでなかった。

「世界最強を家に招いたって嘘だよな？」

「嘘じゃないわよ。……いや、嘘であってほしいんだけど。ほら、あそこ見てみなさい」

琴里が指差した方向を見れば、紅い髪の女性と黒い髪の少女がカー

ドゲームに熱中していた。

彼女達から感じる力は今までにないくらい絶大なものだ。

本当かどうかは今一ピンとこないが、琴里がわざわざ嘘を吐く理由が見当たらない。未だに信じられないが彼女達は本当にこの世界の最強の存在なのだろう。

最強の存在がカードゲームってシユール過ぎる……。

「何やってんだ、遥は……」

「ホント呆れるわ。やっぱり前世が前世なら記憶が無くても変なところは変わらないってことかしら？」

変なところと言われて心当たりが在り過ぎて、琴里から目を逸らすことしかできなかつた。

「こんにちは、ティーダさん」

「おう、空。今日もよろしく頼むな」

アースラでティーダさんと出会った。今日は以前から約束していた、ティーダさんとの定期的な練習の日だ。

「今日もいつも通りのメニューか？」

ティーダさんの言ういつも通りのメニューとは、目隠しを付けながら魔力弾の回避、またはそれを撃ち返すこと。それから、ゆつくり攻撃の組み手だ。

「いえ、今日はメニューを変え……ん？ 君は誰？」

「――！」

ティーダさんの後ろにいた女の子に声を掛けたら、ティーダさんの背中に隠れてしまった。

どういふことかティーダさんに目線だけで尋ねると頬を掻きながら答えてくれた。

「俺の妹だ。名前はティアナって言うんだけど、人見知りが激しくてな……。ティアナ、自己紹介してくれ」

「……ティアナ、です」

ティーダさんの制服のズボンをギュツと握りしめ、目線は俺と全く

合わせずに名前を名乗った。

「龍神空です。よろしくね」

握手を求めたが、ティーダさんの背中の方に引っ込んでしまった。

「……悪いな」

「いえ、大丈夫です」

ティアナのことは一旦おいて置き、ティーダさんの練習メニューの説明に入る。

「今日は俺以外の人と戦ってもらいます。場所もアースラじゃなくて地球です」

いつもは俺が相手になっているのだが、たまには別の人とも戦うのも勉強になるはずだ。

「了解。……ティアナも地球にいいか？」

「もちろんです」

知らない人ばかりの場所に一人でいさせるのは可愛そうだ。

リンディさんから許可をもらい、ティーダさんとティアナと共に地球に転移した。

「本日、ティーダさんの練習相手になってもらう高町恭也さんです」

高町家の道場に連れていき、ティーダさんの相手を紹介する。

「よろしく頼む」

「こちらこそよろしくお願いします」

軽い自己紹介をしてから、早速練習に入る。

「今回は目隠しはないですし、速度はゆっくりでもない戦闘訓練です。

……本気でやらないと痛い目見ますからね？」

最後にティーダさんに忠告をしてから道場を後にする。

後のことは恭也さんがどうにかしてくれるだろう。

「俺は俺で頑張らないとー」

誰もいない山奥に転移し、人払いの結界を張りめぐらせてから修行に入る。

S i d e o u t

S i d e 恭也

「——ここで一旦休憩に入ろう」

「は、はいッ!」

ティードとの組手を中断して休憩をすることにした。

覇気を使つての組手は、空に教わつてから日々の鍛錬にも入れているが、まだまだ空達のように自然体でやるのは難しい。それに集中力を普段の組手よりも使うから、身体的な疲労よりも精神的な疲労が大きい。

……覚えてたのティードはもつと疲れてるだろうな。

道場の床に座り込み、息を荒くするティードを見て、少し長めに休憩にすることにした。

「美由希、彼に水を渡してくれ。それから妹にも……おい、ティード。お前の妹はどこだ?」

「へ? ティアナならそこに——いない!?!」

組手を見学していたはずのティードの妹の姿がなかった。

S i d e o u t

S i d e 空

《マスター、ティード様からの連絡が入っております》

思いの外、修行に難航しているところにブレイブが話しかけてきた。

「繋いで」

《かしこまりました》

ブレイブが空間ディスプレイを投影するとエイミイさんの顔が映った。

『空! ティアナがどっかに行つちまった! 探すのを手伝つてくれないか!』

詳しい事情を聞くと、練習が一段落したところでティアナがいないことに気が付いたらしい。

「わかりました! ティードさんはそのままそこにいてください。俺

が探してきます！」

『ハッ!? いや、俺も——』

土地勘のないティードさんが動き回るよりは二亜に手伝わってもら方が断然速い。

「ブレイブ！」

《はい》

ティードさんの返事を聞かずに通話を終えるなり、龍神家に轉移した。

「二亜、ティアナの場所はどこ!?!」

漫画を描いている二亜の部屋に勢いよく入り込んだ。

二亜や手伝っている七罪がビクビクしているが気にしている暇はない。

「へ? ど、どういうこと?」

「いいから! ティアナの居場所を調べて! 名前はティアナ・ランスター!」

「わ、わかった!」

俺の切羽詰まった様子に気圧されたのか慌てて〈囁告<sup>ラ</sup>篇<sup>ヅ</sup>帙<sup>エ</sup>〉を出して調べ始めた。

「海鳴市の港近くの公園! そこにいるよ!」

「ありがと! お礼に今日は二亜の好きな料理作るから!」

魔力で身体能力を強化しながら二亜の部屋の窓から他の家の屋根に飛び移った。公道を使うよりも屋根伝いに公園に向かった方が断然早い。

見つけたっ!

公園に入ると特徴的な橙色の髪を持つ少女が目に入った。間違いない。間違いなくティアナだ。

ベンチに座り込み、俯いていた。

近寄ってみたらすすり泣く声がティアナから聞こえた。

「迎えに来たよ」

「……………」

反応はない。

「迎えに来たのが君のお兄さんじゃなくてごめんね」

ティードさんにティアナの居場所の座標を送ったので、時期に来るはずだ。

「……………」

「どうしてどこかに行ったの?」

「……わかんない」

やっと反応が返って来た。

「そっか」

「普段忙しい兄さんが久々に一緒にいてくれたから嬉しかった。けど、兄さんは私を見てなかった。ちよつとくらいは気にして欲しかったのに、兄さんは練習に夢中で、それが何だか悲しくて……苦しくて……気が付いたらここにいた」

きつと大切なお兄さんが誰かに取られた気がして嫌だったのだろう。

「前はこの嫌な感じは大丈夫だったのに、今日はなんでなのかな?」

ああ、この子は昔のなのはにそっくりだ。本当は寂しいのに迷惑を掛けないために「良い子」であろうとした頃のなのはに。

「それは寂しいってことなんだよ」

「……寂しい?」

「うん、ティアナは本当はお兄さんと一緒にいたいのに無理してるだけ」

ティードさんがあまりティアナにかまってあげられないのは、何か事情があるのだろう。

「ティアナ!」

「兄さん……」

汗だくのティードさんが俺達のいる場所に転移してきた。

道場で練習したのなら汗を掻くのは当たり前だが、ここまで汗だくということも自分でも必死に探し回ったんだろう。

「ごめんな、ティアナ! 俺が全然構ってあげられなくて!」

「な、なんで、兄さんが謝るの? 勝負いなくなったのはわたしなのに」

いきなり抱き締めて謝るティードさんに、ティアナは困惑していた。

ただひたすらに謝り倒されて、しまいには感情の整理ができなくなり、ティアナは大声を上げて泣き出してしまった。

「実はさ、俺とこいつ——妹のティアナには両親がいないんだ。数年前に他界したんだよ」

公園のベンチで、ティードさんが泣きつかれて眠ってしまったティアナに膝枕をしながらぼつぼつと話し出す。

「親の遺産だつて使つていけばそのうち底を尽きる、頼れる親戚や知人がいるわけでもなかったし、いたとしても迷惑掛けるのが申し訳なくてな……。だから管理局に入って生活費を、つて感じで働き始めたんだ。知ってるか？ 管理局つて結構稼げるんだぜ？」

先程の暗い話を無かったことにするかのよう<sup>に</sup>管理局の話を付け加えてきた。

「でもさ、働いてるとティアナを一人にさせちゃう時間が多くて困つてたんだ。本人は強がつて大丈夫そうに見せるけど、やっぱり兄貴としては心配で心配でたまらなくて……。結局、今日の出来事が起こつちまった。なあ、空、俺はどうしたらよかつたのかな？ これからどうすればいいのかな？」

「それは——」

「だったらそんな仕事辞めてしまえ」

「恭也さん」

俺を遮つて恭也さんが答えてくれた。

「高々十七歳の奴が妹と二人で生きていくのは到底難しいだろうな。それを熟<sup>こな</sup>しているお前は素直にすごいと思う。だがな——お前は馬鹿だ」

恭也さん、馬鹿は言い過ぎでしょ……。

「家族との時間を蔑ろにするのだけは絶対にダメだ。特に小さい子にとって<sup>は</sup>な」

似たような境遇にあった——いや、なのはをそういう境遇にあわせてしまった恭也さんだからこそ言えることだ。

「でも、俺には頼れる人が……」

「空がいる」

「え？ 俺ですか？」「空が？」

突然名前を出されてティーダさんと言葉が被る。

「空は中々に頼れる男だぞ。こいつのおかげで俺達一家も救われたからな」

頭に手を置かれて軽く撫でられる。

あの時は流れというかなんというか、思ったことを口にしたただけなんだけどなあ。

「空、あとは任せた」

そう言い残して恭也さんは公園から立ち去った。

ええー……？ ここにきて俺任せなんですかー？ ティーダさんもなんだか期待してる目をしてるし、これはやらないといけないか……。荷が重いな。

こういう金銭関係は大人に相談して頼むのが最善に違いない。俺の周りには優しい人達ばかりだからきつと何とかなるに違いない。

その為には手始めに本人達との相談が必要と考え、ティアナを起こして二人と話し始めた。

「まずは二人のこれだけは譲れない要望をお聞きします」

「ティアナの傍にいられる時間を増やしたい」

「兄さんと出来るだけ一緒にいたい」

ティーダさんはシスコンでティアナはブラコンというやつだな。

「妹離れ出来ます？」

「うるせえ！ 絶対嫁には出さねえからな！」

うわっ……恭也さんや雄人と同じくらいのシスコンだ。

「ティアナ、友達は欲しくないの？」

「欲しい……けど、仲良くできるかな？ 私と仲良くなってくれるかな？」

「それはティアナ次第。全員が全員と仲良くできるわけじゃないか

ら。でも、俺の友達はいいい人だからきつと仲良くなれるよ」

幸い、俺達と歳が近い。遊び相手や話し相手には困らないはずだ。

「……あなたとも?」

不安そうな目で聞いてきた。そんなときはこっちが自信を持って答えてあげればいいだけだ。

「もちろん!」

自己紹介した時と同じくティアナに手を差し出す。すると、ティアナは恐る恐る手を伸ばす。そんなティアナの隣では微笑ましそうにティーダさんが見守っていた。

久々にやってみよっか。

「俺は空。改めてよろしくね。君の名前は?」

「ティアナ……ティアナ・ランスター!」

「うん! よろしく、ティアナ!」

ティアナの手を掴み握手を交わした。その時のティアナはちよつとだけ嬉しそうに笑ってくれた。

後日、ティーダさんとティアナの要望に應えるためにリンデイさんや桃子さん、プレシアさんなどの大人達に相談しまくった。

その結果——ティーダさんとティアナは地球に住むことになった。

まずはティーダさんの仕事だが、地上部隊からリンデイさんの隊に転属することで、二人の暮らす場所はリンデイさん達が使うマンションの一部屋を使うことになったのだ。

今のところ、仕事のほとんどが事務作業メインらしいからそこまで苦労はないし、自由な時間が増えたらしい。

ちなみに二人の戸籍等はバニングス家をお願いしたら、すぐにやってくれた。その代わり、アリスのこと頼むよと念を押された。

迫力が在り過ぎて頷くことしかできませんでした。

それから、ティーダさんは十七歳ということなので、年明けには美由希さんと同じ高校に通う予定だ。ティアナも同様に聖祥の初等部

の一年生として編入予定となっている。

学校に通うまではティーダさんは翠屋で社会勉強を兼ねてバイト、ティアナは龍神家に住む精霊達が勉強を教える。

なのは曰く、桃子さんがティーダさんと美由希さんをくっつけようと画策してるとか言ってた。

金銭面についてはほとんどリンデイさんが負担してくれたが、ティーダさんが納得できないと言って、最終的に全額出世払いという方向になった。

「これで少しは兄妹の時間が増えるといいんだけど……」

「大丈夫ですよ」

ユーリが断言した。

「だって、空は私のお兄ちゃんですから」

「なんだそりゃ」

答えになっていない答えに苦笑いしか返すことが出来なかった。

「あ、ユーリも学校通う？ もちろん星奈、美雷、夜空も一緒に」

「それはいいかもしれませんがね」

さらに後日のこと。ユーリ達が学校に通うことが決まったのだった。

## VRゲーム体験します！

VRゲーム体験します！

Side空

「——せいッ！」

『グギャアアアアッ！』

両手で握りしめた黒い大鎌を横から振るった。俺の攻撃を受けた猿のような敵は胸のあたりがバツサリ切り裂かれ、体力が尽きてポリゴンとなって目の前から消えていった。

「……よくできてるなあ」

戦闘後に大鎌をバトンのように軽く振り回しながら感想を呟く。

「そろそろ皆と合流しようかな」

敵と戦っていた森を抜けて皆がいるであろう街に向かった。

「あ、空！ こつちこつち！」

街に入ると、俺を見つけた美雷がここにいるとわかりやすくするようにその場でピョンピョン跳ねていた。彼女からすれば楽しむことに一杯でそんな意図は全くなさそうだが。

「他は？」

「皆はお店の中だよ」

そう言って美雷が指差した方向にあるお店の中に皆はいるらしい。扉を開けてそこそこ広い店内を見回すと、割と目立つ髪色のメンバーだったことと人がそんなにいなかったことですぐに皆が見つかった。

「……遅いわよ、空」

「ごめんね、七罪、美九」

「私は全然大丈夫ですよ。好きな人を待つてる時間も悪くないですからー！」

メンバーの一人である七罪と美九に謝り、美九の隣に座る。美九が抱き着いてくるがいつものことだから気にしない。

俺が来たことよってメンバー全員が集まり、一度情報交換をする

ことにした。

そして、情報交換して改めてわかったことがあった。

「……ホントにこのゲーム——SAOはすごいね」

ティードさんとティアナが地球に来てから数日が経ち、季節は冬に変わった。ティアナはまだまだ人見知りか激しいようだが、歳の近い白音や一葉と会話がある程度はするようになったそうだ。

そして、今日は龍神家にいつもの仲良しメンバーが集まっていた。ただし、今回はアザゼルさんに召集されたのだ。

「今日はとあるゲームをお前らにやってもらう！」

『お疲れさまでしたー』

満場一致で俺達は碌な目に合わない悟った。

「しよっぱなから酷えなおい！」

「……この間、お前の実験に付き合っただろ？ しかも割と甚大な被害をもたらしたな」

実際に被害を被ったのは俺一人ぐらいだが、精神的に皆も被害を受けたのかもしれない。

「安心しろ！ 今回はそんなヘマはしねえ！」

『……どうだか』

これまでの行動を振り返るとアザゼルさんがすることの大半は碌なことじゃないと学んでいる。今回も何かしらハプニングが起こるに違いない。

「鞠亜にも協力して——」

『で、ゲームがなんでしたっけ？』

「掌返しが早いなおい!? そんなに俺の信用度は低いのか!？」

『え？ 逆に高いと思ってるんですか？』

「うぐっ……」

俺達の正論に言葉を詰まらせ唸ることしかできない墮天使総督。だが、それを一切合切跳ね除け、強引にゲームを紹介しだした。

「……とある人間が面白そうなもん作ってたから、俺が協力した。細

かいところは鞠亜にも手伝ってもらってる。だから問題はないはずだ。そして！　これがそのゲーム——Sword Art Online S A Oだ！」

アザゼルさんが展開した魔法陣から一人の男性とゲームの筐体と思われる機械が出てきた。

「この男がゲームを作った人間——茅場晶彦だ」

「初めまして、茅場だ。君達のことはある程度アザゼルから聞いているよ。異世界どころか悪魔や堕天使がいると聞いたときは思わず腰を抜かしそうになったよ」

表情がほとんどないと言ってもいいくらいの顔で饒舌に話し出す茅場さんに対して、初対面だが子供心を忘れていないという印象を持った。

……その隣には万年厨二病のヒトもいるからおかしくはないか。

「作ったと言ってもまだ試作品の段階だ。そこで君達にはテストプレイヤーをお願いしたい。もちろん、それなりの報酬は払う。アザゼルがな」

「俺かよ!？」

「契約では資金に関してすべてアザゼルが負担するとなっていたが？」

「あー、そーいやそーうだった……」

今回はその要件でここに来たというわけか。

誰よりも先に新作のゲームが体験できるのなら、その手の人は逆にお金を払ってでもやりたがるかもしれない。

「試運転で機体もそこまでない。四人程でいいだろうか？　時間制限付きで交代でやっていこう」

「そこらへんが妥当だろ。おい、お前ら、くじ引きで決めろ」

「あ、俺パスで」

『え!?!』

俺が手を上げて不参加を申し出ると皆が驚いていた。

「……君は興味がないということか?」

「そういうわけじゃないです。むしろすごくやりたいです。でも、ちよつとやりたいことがあるので」

「そうか。いきなり不評だったら作っている側としてはショックだったのだが、忙しいなら仕方がない」

ゲームをしない俺はその場から離れた。

S i d e o u t

S i d e 明日奈

「なーんか、最近の空って付き合い悪くないかい？」

アルフさんの言うことは最もだった。

最近の空君は私達と一緒にいることが少ない。十香さん達かドライグ達と一緒にと思えば、そうでもないらしい。それどころか家がないことも多くなったそう。しかも学校に影分身で来ることも増えていた。

「……女じゃねえのか？」

『それはない』

アザゼルさんの呟きに誰もが一斉に否定した。

空君が女の子と……？ ハッ、アザゼルさんの厨二病が治るレベルくらいで有り得ないことだよ！

(二次元の)彼女が出来ました事件があったけど、高校までは彼女を作らないという約束は守るはずだ。

「俺も俺だが、アイツもアイツで色々可哀相だな……」

……でも、空君が何だか遠くに行っちゃったみたいで嫌だな……。

「そろそろくじ引きをしないか？ 時間は有効に使うべきだと私は思う」

私達から生まれた寂しい空気を払い飛ばすかのように茅場さんがゲームを促してきた。くじ引きの結果、最初はあかりちゃん、星奈ちゃん、すずかちゃん、私が体験することになった。

S i d e o u t

S i d e 空

修行でクタクタになって家に帰ってくれば、皆が楽しそうにはしゃいでいた。

スキルやアイテム、敵という聞こえてきた単語から大方、茅場さんの作ったゲームのことだろうと連想した。

「茅場さんのゲームは楽しかった？」

と聞けば、皆は声を揃えて「楽しかった」と返してきた。

なんでも今までにない バーチャルリアリティ V R 型のゲームだそうだ。

「空も今度やってみてはどうだ？」

「機会があつたらね」

「……なあ、空」

「ん？ なに？」

「……いや、なんでもない。気にしないでくれ」

いつもは自分の意見ははつきりと言う十香だが、今日は変だった。

本人が気にするなどのことなので俺も気にしないことにして夕飯を作る事にした。

後日、強制的にゲームをやらされることになった。

流石に一度も体験しないのは茅場さんに申し訳ないし、十香達と一緒に遊びたいとお願いされたら断ることも憚られた結果、俺も S A O をやることにしたのだ。

根を詰め過ぎても修行は捗らないから息抜きもアリか……。

ベッドの上で頭全体を覆う灰色のナーヴギアを装着した。

フルダイブシステムがどうのこうのと茅場さんが俺の知らない日本語で言っていたが、安全面は鞆亜がいるので心配はないことだけはわかった。それだけでも十分だろう。

「えっと……始めるときは……——『リンクスタート』」

俺の初めてのフルダイブが始まった。

『待ってましたよ、空』

フルダイブして最初に出会ったのは鞠亜だった。

『ここではアバター作りとチュートリアルを行います。チュートリアルはスキップ出来ませんがどうしますか?』

「一応聞きたいな」

『わかりました。それではまずアバター作りから説明していきますね』

鞠亜に一から教わりながらアバター作りを始めた。

「ほえー！…これが仮想世界かー!」

この世界での自分となるのアバターを作って、鞠亜からチュートリアルを聞き終わると、噴水のある広場に転移させられた。

パツと見では現実世界と間違えても可笑しくなくらいに精緻に作られていた。

次に、気になって試しに自分の体をペタペタ触った。すると、現実世界での感触と違和感が全くなかった。ただ、体温は感じなかった。「うーん、体が重いな……」

他の皆もそう思ったことだろう。だが、それを差し引いても楽しかったと言えるのなら、このゲームはかなりの完成度に違いない。

「さて、そろそろ冒険でもしようか」

完成版では百層の浮遊城——アインクラッドを作る予定らしいが、この試作版では一層だけだ。

「……その前に武器やアイテムを揃えるのが良いんじゃない?」

「あ、七罪!」

俺よりも少し背の高い緑色の髪の少女がアドバイスをくれた。

「七罪のことだから姿変えるかと思ってたけど、自分そっくりにしたんだね」

「……その方が互いに分かりやすいから。これは皆で話し合っただけで決めたことよ」

アバター作りの際に現実の姿とそっくりにする選択肢もあった。俺もオリジナルを作ることを面倒臭がってそのままの姿にした。

「そっか。でも、いつもの七罪の方が断然いいよ」

「……………っ！ と、ともかく！ 他にも一緒にプレイしている人がいるから合流するわよ」

七罪に手を引かれて連れてかれた。

ゲーム内だとレベルが上がるごとにステータスも上がるというRPGにありがちな仕組みだ。だから、現在のレベルが1の俺では、先にプレイしていた七罪に太刀打ちできないということになる。

ましてや、――

「だーりんっ！ 待ってましたー！」

美九に抱き着かれても抵抗する術がないということだ。

本来ならハラスメント防止コードがあるはずと聞いているのだが、この程度では発動しないのか、もしくは鞠亜が意図的に切っているかのどっちかだ。

「筋力値が私より下だと分かってるから抵抗しないんですか？」

「まあ、そういうこと」

「じゃあ今日はだーりんにあんなことやこんなことをし放題ですね！」

「……………ほどほどにしなさいよ？ あんまりひどいと鞠亜が強制ログアウトさせるって言ってたわ」

七罪は美九の標的が自分から俺に変わったことに安心したのか、軽い忠告をして優雅に紅茶を飲んでいた。

「ログアウトさせられても現実で無防備なだーりんを抱き着きますから大丈夫です！」

「それは俺が全然大丈夫じゃないよ！」

見えないところで何かされるくらいなら目の届く場所においてもらった方が良いに決まっている。

「美九、俺の傍にずっといてね」

『……………』

あれ？ 二人が固まった。俺、可笑しなこと言ったかな？

「だーりん」

「なに？」

「結婚しましょう」

「なんで!？」

笑顔でいることが多い美九が珍しく真面目な表情だったが、いきなりの求婚でビックリだ。七罪は驚きすぎて紅茶を嘔き出ししていた。

「このゲームには異性との結婚が出来るシステムがあるんです。片方が申請して、もう片方が承諾すれば結婚成立となります」

「へえ、そんなのがあるんだ………じゃないよ! 俺が聞きたいのはいきなりプロポーズした理由!」

「そんなのだーりんがプロポーズしたからじゃないですか! そして、私はだーりんが好きです! つまり結婚しかありません!」

「あれはそういう意味で言ったんじゃないから! 俺がゲームをしてる間だけ傍にいてってこと!」

結婚申請のメッセージが美九から送られてきたが、即座に拒否した。

「それならこのゲーム内だけでも結婚しましょうよー!」

「俺の年齢知ってる!？」

「見た目は子供ですけど実年齢は問題ありません! それにこの仮想世界に現実世界の法律なんて存在しませんから!」

茅場さん、なんて世界作ってんの!？」

「さあさあ!」

再度、美九から結婚申請のメッセージが送られてきた。当然——拒否だ。

「なんでですか!？」

「軽々しく結婚は出来ません。たとえば仮想世界だろうと何だろうと、大事なことはキチンと決めるべきだよ」

「ぶうー! だーりんのイケズ……」

拗ねた美九は頬を膨らませて文句を垂れていた。

「……私も反対よ。それもルールでダメって決まりでしょ?」

「七罪ちゃんまで……。わかりました。ゲーム内での結婚は諦めませう」

七罪に諭され、美九は若干まだ不満そうにしながらも納得してくれ

た。ついでに腕の力が緩んだので抜け出した。美九が名残惜しそうな声を不意に漏らしたが、十分抱き締めただろうから気にせず七罪の隣に座った。

「で、そろそろゲームをしたいんだけどいい？」

「……そうね。まずは空の装備を整えましょうか」

七罪の案内の下、NPCが運営しているお店に入った。

お店の中には色々な武器や防具が置かれていて、いかにもRPGらしい特徴があった。

「……武器や防具に触れば、名称や能力値、値段とかが見えるから」「へえー」

説明を受けてから触ってみると、七罪に言われた通りにステータス画面が表示された。

しかし、如何せん数が多い。剣だけでも片手剣、両手剣、曲剣、細剣などに分類されているからどれが良いのかわからない。

武器と違って数がある程度に限られている防具は適当でいいとしても、武器はどうしても悩んでしまう。

「……良いのが無いならドロップアイテムでも渡そうか？」

「どんなの？」

「……この大鎌とかどう？ 結構レアで初心者でもすぐに使える強い武器なんだけど、誰も欲しくないみたいで売ろうかなって思ってたの。いる？」

「そうだね、折角だからもらおうよ」

七罪からプレゼントとして大鎌を送ってもらった。

開封すると大鎌のステータス画面が表示された。

名称は《ブラック・サイス黒龍鎌》。名称通りに石突から刃先に至るまでの全てが

真っ黒な鎌だった。

「結構気に入ったかも。名前にドラゴンがあるのもいいね」

「……それは良かった」

続いて防具も決めて、街の外でモンスターと戦うことになった。

「あれ？ あそこで戦ってるの……美雷？」

「みたいですわねー」

街を出てすぐの場所で、青髪の少女が大きな剣を豪快に振り回して猪型のモンスターを蹴散らしていた。

「アハハハハ！ 楽しいー！ やっぱり僕って最強！」

楽しんでいるところを邪魔するわけにはいかないので、戦闘が終わったのを見計らって美雷に近づいた。

「やつほー、美雷」

「空！ それに美九に七罪！」

声をかけるとこちらに気が付いて、ダッシュで近づいてきた。

俺達よりも先にプレイしていたらしく、誰かが来るまで街の周辺で戦っていたそうだ。結局、あまりに夢中になり過ぎて俺達が街にいたことに気が付かなかつたみたいだが。

「これで今日のメンバーが揃いましたね。初心者のだーりんのために簡単なクエストでも受けますか？」

「討伐系のがいいー」

美九の提案に美雷が真っ先に返した。

「……だそうよ？ 空は？」

「それでいいよ。慣れるなら実戦が一番だと思うから」

反対する理由は無かったので、一旦街に戻って討伐系のクエストを受けることにした。

依頼内容は《コボルド》五体の討伐だ。

敵の出現場所は洞窟のため徒歩で向かう。洞窟に着くまでに出現する敵を倒して、俺が少しでも戦闘に慣れておくように七罪達がサポートしてくれた。

『戦い方がエグイ……』

だが、俺の戦いを見ていた三人からドン引きされた。

例えば、猪型のモンスター《フレイジーボア》と戦う場合、真っすぐに突進してくるのをタイミングよく横に回避して、大鎌を縦に振り下ろして頭を斬り落とす。武器の性能が高いので一撃で相手を倒すことが出来る。

戦い方としては間違っていないんだけど、確かにエグイな……。

もしも現実世界でも同じ武器を使っていたなら相手を倒すために確実にこの戦い方をしていただろう。

今更武器を変更するのも億劫なので、そのままの戦闘スタイルで洞窟に乗り込んだ。

入ってから数分もすれば、コボルドと遭遇した。

「最初は空に譲ってあげるよ」

「ありがと」

俺が一番槍となつてコボルドに接近。コボルドがジャンプして両手に持った木槌を振り下ろしてきた。

覇気が使えなくてもこれまでの戦闘経験で攻撃の予測はなんとなくで出来る。

体を横にずらして回避、からのコボルドが着地した瞬間を狙って足払いをかけて転ばせた。さらにコボルドの木槌を蹴飛ばし、防ぐ術を完全に失ったところで頭を切り落とした。

『だから戦い方がエグイって！』

皆に二度目のドン引きを頂きました。

その後も皆のおかげでコボルドを順調に倒し、クエストクリアとなった。

ボス戦は皆でやれば楽勝です！

ボス戦は皆でやれば楽勝です！

Side空

俺の初フルダイブ体験から一週間もすれば、茅場さんが新しいナーヴギアを持ってきた。いつまでも四人だけでは出来ない人が多くてデータ収集も効率が悪く、見ているだけでは可哀そうだと思ったから増やしたのだそそうだ。

「今日はボスと戦うの？」

「うむ、その通りだ」

「肯定。普通の敵では飽きてきましたからね。そろそろ大型モンスターを倒したいと耶具矢と話していました」

「そっか、頑張れ」

「何を言っているのだ？ 空もやるんだぞ」

「俺も!?!」

聞いてないよそんなこと！

俺としては修行する気だったのだが、精霊達やなのは達が一緒にやりたそうにしているのではゲームをやらざるを得ないだろう。

「……わかった、俺もボス戦やるよ」

「ありがとうございます……ッ!」

『おおー、流石空君ー。話が分かるー』

参加するメンバーを決め、正午丁度からゲームをスタートした。

最初は噴水広場に集合。そこからボスのいる「迷宮区」という場所に向かい、ボスと対峙。その時は相手の行動パターンを観察するのが目的だが、あわよくば一回で仕留める気でもいるらしい。

「全員揃ったようだな」

リーダーである耶具矢が今回参加のメンバーを確認した。

今日のメンバーは耶具矢、夕弦、十香、明日奈、愛衣、ユーリ、雄人、俺の計八人だ。

そこで気が付いたことがあった。皆の格好を見たら、現実世界で使っている霊装やバリアジャケットとデザインが似通っていた。茅

場さんにデザインの提供をしたことで仮想世界の装備として出せたのだ。

その点、俺は皆からもらった装備品だ。黒いブーツ、黒いズボン、黒いシャツ、フードの付いた黒いコート。そして黒い大鎌。全身黒づくめだ。ちよつとしたオシヤレとしてはシルバーアクセサリーがコートについている。

何度かプレイしている皆と違って俺は今回が二度目になるので、装備に差があるのは当然のことだ。

「問題なさそうだな！　では、準備運動も兼ねて迷宮区に行くぞ！」

全員が頷くとそろそろと街の外に歩き出した。

なーんか、遠足みたいだなあ……。

等と考えながらも皆と和気あいあいとしながら、戦闘はきびきびとこなしていった。

ステータスが個人によって差があつて連携に不安もあつたが、普段からの修行のおかげで多少の誤差は簡単に修正され、その後は問題なくとれていった。

「——とところで、さつきから戦いの最中に皆の武器が光ってるけど、何それ？」

ふと疑問に思ったことを口にしたら皆がギョツとした。その反応に俺も思わずギョツとしてしまった。

「今までそれなしで戦ってきたのか？」

「うん」

即答すると、皆が頭を抱えていた。ナーヴギアに問題でも出たのかかと思つたがそうじゃないらしい。

「まあ、まだ一度しか空はやっていないのだから仕方ないことだな。武器が光るのはソードスキルと言われるものだぞ。必殺技……ではないが特技と言つたところだろうか？」

武器スキルを習得したプレイヤーが所定の準備動作を行うことによつて発動し、発動したあとは体が勝手に動いて攻撃動作を行う。その速度および威力は、普通に武器を振るつたときのものを上回るのだそうだ。ライトエフェクトやサウンドエフェクトはソードスキル発

動によるものだ。

現在はゲーム自体が未完成のため体を自分で動かさなければならぬが、完成すればあとはシステムが体を操縦してくれるため、自分では何もしなくても一連の動作を終わりまで行うことができるようになる予定らしい。

「ソードスキルの完成も私達の動きが参考になるらしいぞ」

「……………」

「む？ どうしたのだ、空？」

「……………十香が解説……………だと……………？」

これにはビックリ仰天。世間知らずだと思っていた十香が茅場さんの説明を受けて理解したということだ。四年間もあれば常識くらい覚えるのは驚くべきことでもないかもしれないが、やはり十香が理解していることに驚きを隠せない。

すぐあとで、あまりに俺に驚かれ過ぎて心外だと言わんばかりに右ストレートが飛んできた。

「こんな感じかな？ —— せいっ」

説明を聞き終えたら早速試しにそこらへんで出てきた敵にソードスキルを使ってみることにした。

特定の構えを取って蒼いライトエフェクトが黒鎌に発生すると、それをそのまま敵目掛けて振り抜く。敵の三割以上あったHPゲージを一気に減らし、敵はポリゴンとなって消えた。

通常の攻撃よりも早く、威力が高いというのも説明通りだ。

しかし、便利な分デメリットも存在していた。ソードスキルを使った直後は体が硬直するようだ。俺達も現実世界では技を使ったあとは大なり小なり隙が生じる。茅場さんはそれを考えて現実同様に忠実に再現しているのかもしれない。

「硬直で狙われるのを防ぐために “スイッチ” というのがあるのよ」

俺の様子に気が付いた愛衣がスイッチを教えてくれた。

ソードスキル後の硬直で回避も回復も出来ない。しかも敵からの

ヘイトも集まり、攻撃され放題だ。そこでスイッチが登場する。

他の人が敵からのヘイトを集めることで硬直した人が動けるようになるまでの時間を稼ぐということだ。

ただ、このシステムはパーティーを組むことで出来る行動であり、ソロプレイの場合はソードスキルの使用には気を付けなければならぬだろう。

「空のソードスキルは問題なさそうだし、アイテムも大量。このままボスまで行っちゃおう？」

「賛成。このまま行っちゃいましょう」

耶具矢の意見に反対するものはおらず、ボスのいる部屋まで一気に進むことになった。

「あそこに誰がいるね」

ボス部屋へと続くかなり大きめの頑丈そうな扉の前に一人の男性が立っていた。

銀髪の長髪を一つにまとめ、赤いコートに身を包んだ男性は俺達に気が付くと、少しだけ口角を上げながら手を振っていた。

「待っていたよ」

プレイヤーの名前は「ヒースクリフ」。誰も心当たりがないので男性にどう対応したらいいのか困っていた。

「……ああ、すまない。私だ。茅場晶彦だ」

「どうしてここに？ データの収集は良いんですか？」

「データ収集は鞠垂君に任せている。君達がこれからボスに挑むのを見に来たんだ。目の前で見た方がリアルで面白いからね」

茅場さんは戦闘には参加せず、ただの観戦者としてボス部屋に入るということだ。茅場さんには一切ヘイトは集まらないし、また茅場さんから攻撃も不可能。俺達としては特に気にするようなことでもないので、ボス部屋と一緒に入った。

ボス部屋に入ると、敵がポップした。

赤い巨体で鎧とバックラー、斧を装備したイルファング・ザ・コボルド・ロード。

そいつが咆哮を上げると周囲にルイン・コボルド・センチネルとい

う取り巻きが三体ポップした。

さしずめ、親玉と舎弟と言ったところだ。

「作戦は？」

「取り巻き一体につき一人！ 残りはボス！」

「詳細。雄人、愛衣、明日奈で取り巻きをお願いします」

『了解！』

耶具矢と夕弦の作戦に返事を返してボスに突っ込んでいく。

当然、ボスに行くまでの間に三体の取り巻きが俺達を狙ってくる。

だが、速度は緩めない。

「やらせない！」

明日奈が俺に襲い掛かって来たゴボルドの一体を細剣のソードス

キル——リニアで突き飛ばした。

「ありがと、明日奈」

「現実じゃ守られてばかりだけど、ゲームの中では背中では任せてっ」

頼もしい限りだ。

明日奈の方には振り返らず、軽く手を振って武器を構える。

十香、耶具矢、夕弦、ユーリもほぼ同時にボスに辿り着き、十香か

ら先制攻撃を仕掛けた。

〈サンダルフォン塵殺公〉に似た両手剣を豪快に振り回し、太もも辺りを切り裂いて

ダメージを与えた。通常の敵を違ってHPゲージが多いボスにとつ

ては微々たるダメージでしかない。それを示すかのようにボスは

噛っていた。

「俺達も！」

俺の掛け声に呼応して、他の三人も攻撃を開始する。

最初に攻撃した十香にヘイトが集まっている状態だが、俺が攻撃し

たことで俺の方にボスは振り向いた。

振り下ろされた片手斧を黒鎌を使っていない。

見た目に反して攻撃が速い……！

続いて横から水平に薙いできた。しゃがみこんで頭擦れ擦れだつ

たがなんとか回避成功。

そこからすぐに起き上がりながら武器を下から打ち上げる。

怯んだボスの懐ががら空きになったところをすかさず十香達がソードスキルを叩き込んでゆく。

今のでようやく一本目のゲージの一割に行くか行かないか、か……。クリアするには時間が掛かりそうだ。

怯みから立ち直ったボスのヘイトがソードスキルを使った影響で硬直状態のユーリへと集まる。

その隙に俺に背中を向けたボスの鎧のない部分を容赦なく切り裂く。

たった一度の攻撃では先程の武器を打ち上げた時のように動きが止まることはない。そして、ユーリから俺へとヘイトが集まり、片手斧が俺を吹き飛ばした。

「ぐッ……！」

『空ッ！』

咄嗟に大鎌でガードしたものの、与えられたダメージは俺のHPゲージの三割を超えていた。

「そーいや、武器とか防具って耐久値があるんだっけ？　今ので結構削れてそう……。」

ボス戦の途中で武器が無くなるのは避けたい。代わりの武器はあるにはあるのだが、大鎌は七罪に貰ったこの一本のみ。

「空はポーション使って回復！　夕弦、時間を稼ぐんだし！」

「守護。耶具矢に言われなくても空は守ります。てやー」

タンク役の大盾を持った夕弦が俺とボスの間に入り、防御の構えを取った。ボスの攻撃を悉く防いでいた。

夕弦が守ってくれている間、懐から赤い液体の入った小瓶を取り出し、蓋を開けて一気に飲み干す。

このポーションで面倒なことはHPが一気にではなく、徐々に回復するのだ。それまでは大人しく下がっているしかない。

聞いた情報では高価な結晶アイテムは一気に回復できるんだとか。とっても欲しい。

……ないもの強請りしても仕方ないけどね。

「空ばかり見ていては足元をすくわれますよ、猪さん！」

短剣を持つユーリが脚、腕、腹とボスの体のあちこちに傷をつけていく。

短剣は攻撃力が低いけど速さが売りだ。つまり、ヒット&ウェイを繰り返すことで地道にダメージを蓄積させていく。ボスに攻撃されそうになってもユーリは距離を十分な取って攻撃範囲からはすでに逃れているのだ。

『グオオオオオオオオオッ！』

当てられないことにイライラが募っているかのように喧しい咆哮を上げる。

「攻撃が当たらなくてイライラしますよね。ええ、ええ。私にもすぐわかります。どっかの超<sup>スーパー</sup>天龍さんに一度も攻撃当てられませんでしたからね。ホントにウザったいたらないです。ですので、あなたには私のイライラを味わってもらいます！」

ど、どっかの超天龍さん？　だ、誰のことかなー？　知らないなー。八つ当たりが出来る相手が見つかって嬉しいあまりにノリに乗ったユーリから視線を逸らし、内心ですつとぼける。

かと言っていつまでも戦闘に戻らないわけにはいかないので、回復がある程度住んだら夕弦と一緒にボスへと駆け出す。それと同時にボスの足元に何か転がって来た。取り巻きのコボルド達三体だ。

HPゲージがゼロになった三体はポリゴンとなって消えていった。「こっち終わったから加勢するなー！」

取り巻き担当三人がボスの戦闘に加わってくれた。

これにより戦闘がより一層順調に進み、時間が掛かったがボスのHPが最後のゲージの残り三割を切った。

そこで敵に変化が訪れた。

突然武器を捨てたかと思えば、どこからかタルワールを取り出した。さらに今回で三度目の咆哮を上げると、再びコボルドが三体现れた。

「二体、俺がやるー！」

たまたま俺から近いコボルドが一体いたので引き受けた。

ステータスが通常のよりも高そうだが、いつも通りにやれば勝てる

はずだ。

一步踏み込んで距離を詰め、横から大鎌を薙ぎ払う。跳んで躲されるが、掌で刃の向きを返して左下からの逆袈裟で斬り上げる。

墜ちて地面に倒れているところをさらに攻撃。

武器を蹴り飛ばしたので攻撃手段は素手のみとなったコボルドは、俺に殴りかかって来た。

「その意気や良し！・・・なーんてね」

いつの時代の人間だったの。

止めに首を刈り取って取り巻き一体との戦闘が終わった。

周りを見渡せば他の取り巻き達もほぼ同時に倒されていた。これで心置きなくボスの方に集中できる。

夕弦がボスのソードスキルを防ぎきった瞬間に駆け出し、その勢いに乗ったまま一振り。その場で横に一回転しながらさらにもう一振り。

硬直がなくなったボスが振り上げてきたところを大鎌をフックのように足に引っ掛けた。引っ張ると体重差でボスの方に引き寄せられるのを利用して持ち手を短くして距離を縮め、ボスの股下を前転して攻撃から逃れた。

俺に振り向いて追撃に入るボスの左右から四つのソードスキルが襲った。さらに背後から二つのソードスキルがリズムよくボスにダメージを与える。

「空君！　最後は一緒に！」

「ああ！　行くよ、明日奈！」

それぞれ違った特定の構えを取り、蒼と翡翠色のライトエフェクトが発生。

明日奈から繰り出される流星のような五連突き。俺から繰り出される死神の如く命を刈り取るかのような五連撃。今使える最大級のソードスキルをボスに叩き込んだ。

そして、決着が付いた。

《congratulation!》

ボスが倒されると、何もない空間にそう表示された。

勝ったことを知った俺達は一斉に脱力。

疲れて誰もが黙り込む中、拍手が部屋全体に響いた。

「クリアおめでとう。素晴らしい戦闘だった。伊達に現実で戦い慣れているいな」

茅場さんが満足顔で俺達を褒め称えてきた。

「君達ともっと話していたいがデータも十分収集できたことだ、整理をしないといけないから今日はここでお別れだ。では、また」

メニューを表示させた茅場さんがログアウトボタンを押して、ボス部屋から現実世界へと戻っていった。

「勝ったね」

「うん、勝ったね」

隣にいる明日奈とハイタッチを交わす――

「カツコ良かったわ、空君」

ことはなかった。愛衣が俺に抱き着いてきたことで阻まれたのだ。「うわっ、愛衣！ う、うん、ありがとう。愛衣もかなり良い動きしていた。って男に触って大丈夫なの？」

「不思議とこのゲームの世界でなら大丈夫みたい。本当の体じゃないからかしらね」

もしかするとこの世界をきっかけに愛衣の男性恐怖症は変えられるかもしれない。

茅場さんに心の中で感謝していると、システム上有り得ないのだが、黒いオーラを噴き出す明日奈が俯いていたのが視界に入った。

「あ、明日奈？ どうかしたの？」

恐る恐る尋ねるとキツと擬音が付きそうな勢いで睨みつけてきた。

「え、ちょ、なんでソードスキルの構え？」

さらにはソードスキルを使おうとしているのか武器を構えていた。

これは嫌な予感しかない。

「空君のバカーッ！」

明日奈が怒っている理由は一切わからないまま、ボスが一撃で倒せるんじゃないかと思うようになりニアを喰らったのだった。

クリスマスパーティーです！

クリスマスパーティーです！

Side空

暦は12月に入った頃、龍神家では大きめの炬燵を出して皆で寛いでいた。

「もうじきクリスマスだねえ……」

「そうだなあ……」

クリスマスと言えば、今年もバニングス家でクリスマスパーティーを開かれることをアリサから聞かされた。去年と違って今年の参加人数はかなり増えているから準備が大変そうだ。

「僕知ってる！ 美味しい食べ物がいっぱいなんだよね！」

炬燵に入らずゲームをしていた美雷がクリスマスという単語に反応した。言っていることは間違っていないが、ちよつとズレてる気がする。

「クリスマス……楽しみですね」

星奈は知識としては知っているが実際に体験するのは今年が初めてだ。もちろんユーリ達やオリヴィエさんもだ。出来るだけ楽しませられるようにしてあげよう。

プレゼント用意しないとね。皆にどんなのをプレゼントしようかな？

一昨年は桃子さんと特製のケーキを作った。去年はお手軽に出来るアクセサリーセットをアリサパパがその場用意してくれてその場で作った。

今年は……よし、マフラー編もう！

渡す対象はなのは達や十香達だけでなく大人も含めた全員だ。たまには大人にもクリスマスプレゼントがあつてもいいと思う。

作るものが決まれば、早速材料を集めることにした。それから皆の好きな色を事前に聞いておこう。インシヤルを入れておけば誰と誰かが被つても大丈夫だ。作製時間は影分身を使えばあつという間だから問題ない。

「え？ 一人一つプレゼントを用意？」

「そうよ。なんでか知らないけどパパが皆に頼めって」

場所は学校の教室。

いつもなら屋上で食べている昼食も、流石に冬だと寒いので温かい教室で食べている。

そんな最中、アリサからクリスマスパーティーのことを告げられた。

誰一人として理由はわからないが、とりあえずプレゼントを用意しておけばいいのだろう。

マフラーは一つじゃないから、また別のものを用意しないといけないのか。

放課後、ヴァーリ、雄人、ユーノ、クロノ、ザフィーラさんを誘ってプレゼント探しに行くことにした。

「どんなものが良いんだろうな？」

放課後に集合した俺達は駅前のショッピングモールに入った。

しかし、プレゼント選びに難航していた。

「アリサからは特に指定は無かったんでしょ？ だったら何でもいいんじゃない？」

「それだと余計に悩まないか？」

「うむ、確かにそうだな」

今日の晩御飯は何が良いと聞いて、なんでもいいと返されるのと同じだ。龍神家は人がたくさんいるから毎日のメニューには事欠かない。

「だったら自分の好きなものか、直感でいいと思ったものかな」

話し合いの結果、自分の琴線に触れたものをプレゼントにすることになった。

ちなみにアリサパパ曰く、プレゼントは当日までのお楽しみらしい

ので、ヴァーリ達が何を選んだのかは俺は知らない。

そして、時間は経ち、クリスマススイブ当日がやって来た。バニングス家に集まるのは夕方からなので時間には余裕があった。それまで修行をしようかと思っていた。

「私とデートしてくださいー!」

が、朝一でなのはからデートのお誘いを受けた。

最初は断ろうとしたのだが、なのはの不安そうな顔を見て嫌だとは言えなかった。

「わかった。すぐ準備するから待ってて」

「ありがとー!」

不安そうな顔から心から嬉しそうな笑顔になった。

いくら唐突なデートだからと言って、女の子を待たせるのはよろしくない。即座に着替えてなのはとのデートを始めた。

「ね、手をつなぐ?」

家を出てからなのはが手袋を付けた手を差し出してきた。

返事は言葉ではなく、彼女の手を取って示した。

「さあ、俺達のデートを始めようか」

「うん!」

手を繋ぎながら目的地もなく歩き出した。

なんとなく歩いて辿り着いたのは、どこにでもあるような公園だった。でも、俺からしたらこの場所はなのはと出会った思い出の場所だ。

なのはに確認を取る事もせずに公園に入り、冷たいベンチに並んで座った。

「なんか……なのはと二人つきりって久しぶりな気がするね」

「実際そうだよ。学校に入ってから空君ってばいつも誰かいるんだもん。特に女の子ばっか!」

ふと思ったことを口に出したら、なのはから返って来たのは棘のある言葉だ。

うぐつ……悪いことした気分になるのはなぜに？

「えつと、ごめんなさい……？」

「謝って済むなら警察入りません！……でもね、それは皆空君のことが大好きなんだよ。あっ、もちろん私も大好きだからね！——  
——つて、今の好きは変な意味とかじゃないからね!？」

？ 好きに変な意味があるの？

良くわからないがこのことを聞くのはやめておいた方がよさそう  
だ。無理に聞いて砲撃が来たらひとたまりもない。今日の作戦は、  
いのちをだいに”で行こう。

「ここで私と出会ったこと憶えてる？」

「もちろん。忘れないさ」

「あれからもう四年かあ……。時間が経つのは早いね」

「そうだね。気が付けば今年も終わりが近いから。……それにしても  
今のなのはのセリフ、ちよつと年寄りっぽい」

「もーっ！ 茶化さないで！」

両手を上げて怒るのを見て思わず笑ってしまう。本人も本気で怒ってないのが分かっていたからなのはも一緒になって笑い出した。

「最近、管理局の仕事はどう？」

ひとしきり笑った後、強引に話題を変えて当たり障りのないことを聞くことにした。

「まあまあ慣れたかな。まだ囑託魔導士で子供だからなのか、難しい  
仕事はやらされないみたい」

「訓練は？ なのはよりも強い人いる？」

「うん、いるよ。たくさんってほどでもないけどね……この間はフェ  
イトちゃんと組んだのに教官の人に負けちゃったんだ。魔力量では  
私達が完全に勝つてた。でもそれなのに負けたんだよ」

なのはの話に段々興味が湧いてきた。日頃の戦い方を見たいれば  
管理局の人には負けなれないと思っていた。フェイトと組んだのなら尚  
更に。

考えられるのはコンビネーションを上手く利用して、二人の動きを

封じたのではないだろうか。

「その教官がね、面白い事言ってたの」

「どんなこと？」

『自分より強い相手に勝つにはどうしたらいい？』だって」

「そりゃ、勝てる部分で勝負するしかないんじゃない？」

例えば、なのはだつたら守りの硬さと一撃必殺の砲撃がある。そんな彼女に勝つためには彼女に勝つためには砲撃を撃たせなければいい。

例えば、フェイトだつたら速さがある。そんな彼女に勝つためには攻撃を耐え抜いて、一瞬の隙を突くしかない。

現に、なのは達は自分の強みを知らず知らずの内に活かして俺に勝つこともあるのだ。

言い訳じゃないけど、負けるときはブレイブを使っているときであつて神セイクリッド・ギア器とか精霊の力使えば負けない。……大事なことだから二回言うけど言い訳じゃないから！

「アハハ、空君はやっぱすごいね。私達は何日もかけて出した答えを一瞬で出しちゃうんだから」

「そうでもないよ。ヴァーリだつてわかると思う」

「あー……確かにそうかも。でも、その答えがあつても空君達の本気モードには一回も勝ててないんだよね……」

「フフン！ あの力でそう簡単には負けるわけにはいかないから」

バランス・プレイヤー禁 手バランを使って負けたなんて笑えない冗談だ。ドライブやアルビオンが泣く。

「今度その教官の人と戦わせてよ」

「そう言うと思った……。空君みたいに戦うの大好きな人じゃないから向こうは遠慮するだろうけど、一応聞いてみる」

「そっか。ありがとう」

戦いたくないのであれば無理強いは出来ない。そもそも管理局に入っていない俺が戦えるとは思ってもいない。

「次、行こっか」

なのはの管理局での話を聞き終えて、別の場所に移動することにした。

すでにお昼近くになって来たのでチラホラお店が開き始め、雰囲気の良いような喫茶店に入った。

温かいココア二つと大きめのパンケーキを頼んで、静かな時間をまったり寛いだ。

「小学生なのに背伸びし過ぎかな？」

「アハハ、かもね。もうちよつと大人になってからまた来ようか」

「！ 今のはまたデートしてくれるってことで良いのかな!？」

「え？」

まさかの凄いいつきだった。

そんなにパンケーキが美味しかったのか、他のメニューも食べたいのかもしれない。

「いや、その時は皆も一緒——グフツ」

「そこは皆じゃなくて二人って言うてね？ はい、もう一度。今のはまたデートしてくれるってことで良いのかな？」

「う、うん。その時は二人で行こう」

暴力的な行為は良くないと思います。特に魔力強化しての腹パンは止めましょう。

「いのちをだいに」で行くはずだったのに、すでに魔王なのはの一撃で瀕死なんですけど……。

「ホント!?! すっごく嬉しい!」

なのに当の本人は腹パンしたことなんて毛ほども知らずと言った感じで喜んでいた。

時折女の子というのはずるいと思うときがある。幼馴染故の甘さもあるのかもしれないが、笑顔一つでこっちまでつい嬉しくなってしまう。

「そろそろ戻ろっか」

お店を後にしたら丁度いい時間帯だった。

一度家に戻ってからプレゼントを持って皆と一緒にバニングス家に向かった。

玄関ではズラリと左右にメイドと執事が並んでいたが、毎度のことなので俺達は軽く会釈するだけだ。

「な、なにこれ!? 全部アリサのお家の雇ってる人達!」  
「そうよ」

初めて見たイリヤと兄さんはこの光景に目玉が飛び出すんじゃないかというくらいに驚いていた。

鮫島さんの案内のもと大きな広間に入って他の人達が来るまでの間、待機となった。

「旦那様、本日参加する方が全員集まりました」  
十分後には全員集まったようだ。

「ご苦労。鮫島、始めてくれ」  
「かしこまりました」

大広間にある壇上にマイクを持った鮫島さんが立った。

「皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます。司会を務めさせていただきます、鮫島と申します。さて、皆様のお手にはお飲み物はございますでしょうか? ……はい、大丈夫のようですね。それでは、乾杯の音頭を龍神様をお願いします」

俺の名前が出た途端に一斉に視線が集まる。

この様子だと逃げ道はなさそうだ。

大人しく壇上に上がり、マイクを鮫島さんから受け取った。

なんて言ったらいいものか……。

「えー……本日はお日柄もよく……はないですね」

定番の挨拶から入ろうとしたのだが、なのはとのデート中から曇りだしたことを思い出した。

「今夜はクリスマスイブです。お父さんが奥さんのことを気にせずお酒を飲める日です。ええ、多少なら目を瞑ってくれることでしょう。ただし、他の人は一切の責任を取りませんので、問題を起こした場合は自己責任でお願いします」

『(き、気を付けよう……)』

なんとなくだが、釘を指したら皆のお父さん達の気が引き締まった感じがした。

「そして、今日は非リア充達にとって最悪な日と言っても過言じゃないでしょう。そんな非リア充達を代表して呪いを込めて乾杯を——」

『どちらかと言えばお前はリア充側だけだな！』

「まあ、冗談はこれくらいにしておいて。今夜はいっぱい食べて、いっぱい飲んで、いっぱい語り尽くしちゃいましょう！　メリークリスマス！」

『メリークリスマス！』

ジュースの入ったグラスを掲げると皆も同じように掲げた。

——楽しいクリスマスパーティーの始まりだ。

「皆様、壇上の方をご覧ください」

十香達と食事しながら話しているときに鮫島さんから声がかかった。

壇上には大きさに差はあるものの、包装されたものが山積みにな置かれていた。

「こちらは皆様が用意されたプレゼントでございます。それらを使ってプレゼント交換をさせていただきます。しかし、この人数でプレゼント交換するのは難しいです。そこで、今回はビンゴ形式での交換とさせていただきます」

自分で用意したプレゼントを取る人はいないだろうから、よっぽどのことがない限りは全員に誰かのプレゼントが渡るはずだ。

それにビンゴは早い者勝ち。普通にやるよりは一喜一憂する人達で溢れ、盛り上がる事だろう。

鮫島さんがビンゴカードを皆に渡していく。

「リーチになった方は手を上げて壇上に上がってきてください」

『ねえねえ。空君はどんなプレゼントに——』

「最後にですが、一つ注意点がございます。全員にプレゼントが渡されるまでプレゼントに関する詮索や教えることは無しでお願いしま

す」

「だつてさ、よしのん」

『ちえー。まあ、しょうがないよねー』

どれになるかわからないというのもこのプレゼント交換の面白いところだ。

鮫島さんが番号の書かれた玉が入っているスロットを回し、一玉飛び出した。

最初の番号は8だ。

その瞬間、当たって喜ぶ者、外れて残念にする者の二つに分かれた。俺は外れた側なのでちよつと残念。

「やった！ 私リーチ！」

『はやッ！』

四つ目の玉の番号が出た時、イリヤがリーチになった。もしかすると次の番号でビンゴしてしまうかもしれない。

「では、次の番号は……………」

もったいぶって番号を発表した。

「46でございます。イリヤ様、どうでしたか？」

「ビンゴ！」

『マジ!?!』

まさかの本当にビンゴになってしまうとは…………。

「おお！ それはおめでとうございます！ それではお好きなプレゼントをお選びください」

「どれにしようかなー？（空君のはどれなの!?!）」

必死になってプレゼントを選んでいるイリヤ。誰かのプレゼントを狙っているのかもしれない。

それはさておき、渡すなら今が丁度いいだろう。

鮫島さんに近寄り、事情を話すと二つ返事であっさり了承してくれた。

流石鮫島さん。話が分かる人。

「イリヤ、メリークリスマス」

紙袋からイリヤに渡すマフラーを取り出して、プレゼント選びに夢

中なイリヤの首に巻いた。

「わっ!? え? マ、マフラー? って空君!?!」

「プレゼント交換とは別のクリスマスプレゼントなんだ」

「これ……私のイニシャル? もしかして手編み……!?!」

「うん、そうだよ。どうかな?」

「すっごく嬉しい! ありがとう!」

そこまでして喜んでもらえると思った甲斐がある。

すると、背中に誰かの視線が痛いほど突き刺さった。

『むー……!』

振り返れば、睨んだり、膨れたり、そっぽを向いたりと様々な反応をする人達が見えた。

「えつと……全員分用意してるから、ビンゴしたら渡すね。もちろん大人にだってあります。(ドライグ達にもあとで渡すね)」

『!』

参加している全員と俺の中にいるドライグ達が驚いていた。

「お、おい、聞いたかマー坊?」

「あ、ああ。ぼっちり聞いたよ神ちゃん……。まさか僕らにまでマフラーを作ってくれるなんて……」

『なんて親想いの息子なんだ!』

「魔王と神王の息子になった覚えはありませんよ!?!」

「そうですね、ユーストマさん、フォーベシイさん。空君は私達の息子です」

「土郎さん、それも違いますから!」

そこから俺が誰と結婚するんだのなんだのとビンゴそっちのけで盛り上がった。盛り上がったのはお父さん方で、奥さんに止められるまで続いた。

きつと酔ってたんだな。うん、きつとそうに違うない。

「ちよつとしたハプニングもございましたが、気にせずにビンゴを続けましょう」

イリヤに始まり、次々とビンゴになった人達にマフラーを渡していく。

「主、あなたのデバイスとして家族としてこんなに嬉しいことはありません」

《マスターのデバイスは私です！ 勝手にマスターのデバイスを名乗るんじゃないよ！》

シエラとブレイブが喧嘩したり――

「君からのプレゼント、大事にするよ。……これは私からのクリスマスプレゼントだ。受け取ってくれ」

「へっ!？」

『んなッ!？』

リインフォースさんから頬にキスされて会場が騒然としたり――

「だーりんを抱きしめられてる気がします!」

「アハハ、大袈裟だって……」

美九の可笑しな喜び方に苦笑いしたり――

「クリスマス……私の時代にはない文化ですがこれほど素晴らしいとは……やっぱり生き返って良かったです!」

「私のお兄ちゃんはすごいですね!」

初めてのクリスマスをオリヴィエさんやユーリにも楽しんでもらえたり――

「男からプレゼント貰うのって変な感じがするけど、ありがとな!」

雄人が心から言ってくれるのが分かって嬉しくなったりして、皆からのお礼の言葉が聞けて作って良かったと思えた。

「それでは全員プレゼントはお持ちですね? 一斉に開けましょう」

鮫島さんの合図で皆が包装紙を取った。

俺の選んだプレゼントは手のひらサイズのものだ。

大きめを選んで持って帰るのが面倒だったのと、パツと目に入っただけだ。

中に入っていたのはドラゴンを模ったシルバーアクセサリーだった。

誰がこれを選んだのかすぐにわかってしまった。

「俺の選んだのは空か」

「やっぱりヴァーリのだったか」

「どこことなくアルビオンに似ていたから選んだのではないだろうか。」

「良い物くれてサンキュ」

「ああ」

さて、俺のが誰に渡ったのか探してみようか。

探す途中で誰がどんなプレゼントを貰ったのかが色々わかった。

「鉄アレイとか選んだの誰よ!」

「それは私が選んだプレゼントだな」

「シグナム!? あんたねえ! もうちよつとまともなもの選びなさいよ!」

「む、失礼な。その鉄アレイはだな、重さの調節が出来るのだ。子供の手に渡っても大丈夫なように考えた結果がこれなのだぞ」

アリサはシグナムさんから鉄アレイ貰ってかなり気に入らなかつたようだ。

よく考えられている理由ではあるが、クリスマスプレゼントで女の子が貰って嬉しいものではないだろう。

「私のはフライパンですか」

「あ、それは私が選んだ奴なんや」

「はやてちゃんがこれを?」

「せや、これ使って料理の練習してみ」

「はいっ、ありがとうございます」

ネリネははやてからフライパンを貰っていた。

後日、ネリネが料理を作ってキッチンが原因不明の爆発が起こったのはまた別の話だ。

「これ……誰のだろ?」

「わあ! 素敵な鍵っすね!」

「鍵、と言えば六喰さんでしょうか?」

「どうやら俺のプレゼントはリコリスの手に渡ったみたいだ。水色のガラス細工の鍵を見て、これだ!」と思わず衝動買いしてしまったのだ。

「リコリス、その鍵は六喰じゃなくて俺が選んだんだ」

『えッ!?!』

すると、驚いたのはリコリスだけでなく、会場にいた人のほとんどだった。

そんなに反応することでもないと思うんだけど……。

「そつか。これ空君のなんだ。……えへへ」

リコリスが大事そうに鍵を握り締めていた。喜んでもらえてこちらとしても嬉しい。

「羨ましいっす……」

「……うん、そうだね」

傍にいたシアとネリネが未だに鍵を見てはニヤついているリコリスを羨ましそうに見つめていた。

鍵のプレゼントがそんなに良かったとは思いにもよらなかった。

皆、鍵が欲しかったのかな？ 実際に使えるものってわけじゃないんだけどなあ。

プレゼント交換のほとぼりが冷めない内に、他の催しもたくさん行われた。

夏休みの時みたく歌を歌い、勢い任せにカミングアウトしたり、大食い対決をしたりと大いに盛り上がった。

「今年は一段と盛り上がったなあ……」

パーティーを途中で抜け出し、バニングス家の屋根の上で街を見下ろしていた。

色とりどりのイルミネーションが輝く街は幻想的だ。

恋人たちが寄り添いあい、幸せそうにしている光景に微笑ましく感じる。

寒い中、サンタの格好をした人達が一生懸命に働いているのを心の中で応援する。

「アハハ、今のはジジ臭いかな。——え？」

しばらく同じような光景を見つめていると、不意にベルがリンリンとなる音が聴こえ、突然空から箱が俺の下に降って来た。

上を見てもそこには何もなかったのだが、気が付くと雪が降り始めていた。

『この一年頑張ったお主にござ褒美だ。——サンタより』

箱にはそんな言葉が書かれていた。

誰が渡してきたのか気になり、箱を開けた。中には青いマフラーが入っていた。しかもござ丁寧に俺のイニシャルまで入れてある。

「サンタってホントにいたんだ……!」

温かいマフラーを首に巻き付けて、しばらくの間、雪の降り積もる街を眺めていた。

大晦日です！

大晦日です！

Side空

「~~~~~♪」

鼻歌交じりにテキパキと料理を作っていく。

今年はジュエルシードに始まり、夜天の書等の事件がたくさん起きた。それに加えて色んな人との出会いと別れもあった。

多忙な時期ではあったがそんな一年はあっという間で、気が付けばもう今年の終わりが近い。

「今頃、皆は何してるかな？」

いつもは騒がしいはずの龍神家には今は俺一人だけしかおらず、静かだ。

クリスマスが過ぎたものの、アリサパパの提案でほとんどの人が年越しまではバニングス家に泊まることになったためだ。

本来なら俺もバニングス家にいるはずなのだが、年明けに食べるおせちを作らなければならなかったため龍神家に残っているのだ。

「さーてと、あんまり待たせると皆に怒られそうだから、早く終わらせないと」

作るスピードを上げて完成まで一気に持っていった。

『遅ーい！』

おせちを作り終えて、バニングス家に行くと皆から一斉にバツシングを受けた。

「いやいやいやいや！ これでも早く来たんですけどー！」

おせちを作るのに時間が掛かってしまうのは仕方のないことだ。

「空君、時間は有限なんだよ。特に一年の終わりなら尚更に一緒にいたいと思うでしょ？ わかる？」

「わかりません！」

もちろん時間は有限だし、皆と一緒にいたいのはわかるが、それと

おせちを作るのは別問題だ。

「わ・か・る？ いや、わかれ」

「さすががまさかの命令口調!？」

大人しいさすがが乱暴な言葉を使ったことが今年で一番驚いたかもしれない。

それはともかく、時間はお昼過ぎ。

テレビでは特番が多くやっているが、俺達子供にとってはあまり興味が惹かれるものは少ない。

ゲームをするにしても大人数では出来ない人が出てきてしまうから却下。茅場さんがSAOを完成させていたならまだ話は変わっていたかもしれない。

かと言って、遊び盛りな時期の（はずだけどやけに精神年齢が高かったり、修行目的で遊んだり、最近忙しいこともあり、そういったことをあまり出来て無い）俺達子供が室内でジツとするのもどうかと思われる。

でもなあ、外に出ようにも雪が積もって……………雪？

「雪合戦……………しよっか」

『へ?』

唐突な提案に皆がキョトンとする。

「雪合戦! こんなに雪が積もったのにやらないなんてありえない!」

雪合戦なら大人数でも遊べるはずだ。

皆もずつと部屋に籠っているよりかはいいと感じたのか、外に出始めた。

「チーム分けはくじ引きね」

鮫島さんが急いで作ってくれたくじを順番に引いていく。

赤と青の2つのグループに分かれ、敵味方が分かりやすいようにそれぞれの色の付いたハチマキを各々体のわかりやすいところに巻き付ける。

「ルールは簡単。制限時間は10分。勝敗を決め方は試合終了時に残っていた人数の多さ、もしくは各チームで決めた大将が当てられた

時点で当てたチームの勝利。雪玉に当たった人は鮫島さんが立つて場所に行くこと。当たったのに残り続けた場合はお年玉が減ることを覚悟してね？ 〈それから一般人もいるから異能は禁止〉」

『はーいー！』

元気の良い返事が返って来たところで互いのチームが別々の場所に集まる。

円陣を組んで俺が入っている青チームのメンバーを見渡す。

ヴァーリ、なのは、アリシア、アリサ、愛衣、クロノ、士郎<sup>兄</sup>さん、舞衣さん、リアス、十香、夕弦、四糸乃（よしのん）、万由里、白音、テイアナ、一葉、リコリス、イリヤ、星奈、ユーリ、俺。

対する赤チームは雄人、フェイト、すずか、明日奈、舞衣さん、エイミイさん、美由希さん、ヴィータ、折紙、耶具矢、七罪、美九、黒歌、朱乃、ネリネ、シア、はやて、あかり、ユーノ、美雷、夜空。

「さてと、大将誰にしよっか？」

「空だとなとえ大将じゃなくても嫌でも狙われるだろうから、別の奴がいいだろう」

うん、決して嫌われてるからとかじゃないって信じてる。……違うよね？

折紙や夜空辺りは俺が大将にならないことは想定しているはずだ。

となると、大将に良さそうなのは……

「青チームの大将は君にお願いしてもいい？」

不意に目に入った人物に青チームの大将を任せた。

『試合、開始です』

拡声器越しに鮫島さんの声が届いた。それと同時に俺達は一斉に動きだした。

まずは雪玉の確保だ。

足元の雪をかき集めて両手で丸める。それを作って積んでいく。

「空、発見！」

「全員で狙い撃ちよ！」

「うげっ」

数十個程作り終えたところで赤チームに発見されて狙われた。

「赤チームは俺が大将だと思ってるの？」

「ううん！ 別に空が大将じゃなくてもいい！ とりあえずさっさと退場して！」

最初に俺を発見したフェイトが、傍にいる明日奈が作る雪玉をどんどん投げってくる。体を横に向けながら走り、時折雪玉を作っては投げつける。

逃げていたらフェイト達に俺が作った雪玉を取られてしまったが仕方がない。

「え〜？ 俺って嫌われ者？ ……というか気合入り過ぎじゃない？」

「空を当てれば…：な、なんでもない！ 気合が入ってる理由は…：えーっと…：…鈍感男への日頃の恨みだよ！」

「どんな理由!? 今の俺って八つ当たりの対象なの!？」

おのれ！ 鈍感男許すまじ！

フェイトに続き、俺を狙う赤チームのメンバーがそろそろ集まってきた。

ここまで集中砲火されるのは予想外。だが、好都合だ。

「皆ー！ 頼んだー！」

走りながら号令を飛ばす。

『うんっ！』『はいっ！』『ああっ！』

返事が返ってくるのと同時に俺を追いかけてくる赤チームの左右から青チームが現れ、雪玉を投げつける。

俺に夢中になっていた赤チームの数人が当てられて退場となった。難を逃れた人は俺を諦め、別の方向にばらけていった。

『赤チーム、3名退場です』

鮫島さんのアナウンスが入る。相手の大将は当たった人の中にはいなかったようだ。

「作戦成功！」

『イエーイ！』

青チームで集まりハイタッチを交わす。

理由はわからないが俺が狙われるのはなんとなく予想が付いた。そこで俺自身が囷となり、相手をおびき寄せることで残りのメンバーが横から狙う、というのが作戦——

『青チーム、5名退場です』

——なのだが、一気に青チームの戦力が減らされた。

どうやら囷だったのは俺だけでなく、フェイト達もだった。

この流れは折紙の作戦かな。

まだこちらの大将も倒されていない。逆転のチャンスはある。そのためにも狙うなら折紙や夜空といった参謀役だからだ。

「空、折紙と夜空を狙いましょう」

同じことを考えたらしい星奈が提案してきた。

星奈は三人一組を即興で5組作り上げ、そのうち4組を折紙と夜空を狙わせる。残りの1組は他のメンバーを狙うという作戦になった。

「問題点は——美雷です」

「フハハハハハ！ 僕が来たぞっ！ 勝負しろー！」

星奈が懸念していた人物、美雷は巨大な雪玉を抱えて俺達の前にやって来た。

美雷が問題点になる理由は、いい意味でも悪い意味でも彼女にとって作戦など無意味に等しいからだ。

お馬鹿さんだから作戦を立てたところでその通りに動いてはくれない。であるならば、彼女は放置させて好き勝手にさせて合わせた方が味方としては多少は楽になるし、敵のこちらとしては読めない動きで作戦を潰される可能性を秘めている。

「力だけで勝てるとは思わないことです、美雷」

投げつけてきた巨大な雪玉を回避し、星奈と俺は雪玉を投げ返す。

「当たらん！ 当たらんぞー！」

敵であっても思わず褒めたくなるような俊敏な動きで俺達の雪玉を躲す。

「あ、美雷！ あそこ見て！」

明後日の方向を指差して美雷の視線を誘導。もちろんその先には

何も無いが、疑うことを知らない単純な美雷はもの見事に引掛かり俺達から視線を外す。

「ん？ 向こうに何か——うわっ!? 冷たっ！」

気を取られた瞬間に横から白音が美雷に投げつけた雪玉が顔面にクリーンヒット。

「今のずるい！ 卑怯だぞ！」

「勝てばいいのです」

能力は使っていないからルール違反はしてない。

騒ぐ美雷を受け流し、他の人を狙いに行く。

夢中になって雪合戦をしていたら気が付けば、相手もこちらに残りは5名になっていた。

青チームは星奈、ヴァーリ、白音、ユリー、俺。赤チームは夜空、朱乃、黒歌、シア、雄人。

強敵のはずの折紙がいないのは、十香の捨て身攻撃で相打ちとなったようだ。

うーん、ただの雪合戦なのにガチになり過ぎかなあ。

とは言ったものの、今更考えても仕方がないことだ。

見る限りじゃ、皆楽しそうだし最後までやりきるのがベストだ。

「白音、覚悟するにや！」

「……姉さま、やはり私達は戦わなければならない運命さだめなのですね」

「そうよ。この世はいつだって弱肉強食。強い奴しか生き残れない。

それがたとえ肉親だとしても！」

「……わかりました。姉さまがその気なら私も全力で戦います」

「フン、知らないようだから言っておくけどね……この世に姉より優れた妹なんていないのよ！」

「……そんなことはありません。私がそれを証明してみせます！」

姉妹の激しい戦いが始まった！

『いや、このやり取りは一体なんなんだ？』

二人のやり取りを見て誰もがツツコミを入れる。そんな隙を突いてヴァーリが朱乃を退場させていた。わざと当たったような気はするが、それは朱乃にしかわからない。

「空君！ 覚悟！」

「必殺仕事人!？」

シアからの殺気が込められた雪玉が次々と俺に襲い掛かる。夜空と雄人も加わってきて逃げるだけだ。

なんか、今日は標的にされやすい日だなあ。

「夜空、私は今日下克上をします」

「ほう？ 我に向かつてか。面白い。出来るものならやってみよー！」

逃げ回っていると星奈が俺からひきつけた夜空と対峙していた。

さつきからクライマックスなやり取り多くないか？

「空、俺と勝負しろ！」

「お、おお。雄人。いつになく気合が入ってるね」

「ああ、俺には絶対に負けられない理由があるんだ！」

「あれ？ この雪合戦に何か賭けてたっけ？」

思い返してみるが心当たりは何もない。

「負けられないのはわかった。俺も全力で——!? あっ……」

横からシアが俺が話している隙を突いて雪玉を投げつけてきた。見聞色の覇気を使っていなかったため反応に遅れたが何とか躲けた。しかし、雄人からの追撃をかわすことは出来ず、肩に雪玉が当たった。残念ながらここで俺は退場だ。

「当たった！ よっしやー！」

「やったっすー！」

大将じゃない俺を当てたのにこの喜びよう、何かが引つかかる。聞きに行きたいがいつまでもここに居るわけにはいけないので、大人しく退場者たちが待つ場所へと向かう。

退場者たちのいる場所にはストーブを囲むようにしておかれた長椅子に皆が座っていた。

十香の隣に座って俺も温まることとした。

「空、赤チームに当てられたのか？」

「そういうこと。いやー、結構楽しかった」

「そうだな。私も楽しかった」

「でもなんか赤チームが可笑しいんだよね。やけに俺を当てることに

拘ってった感じがする」

赤チームだったメンバーを見渡すと露骨に目線を逸らした。

今の反応で確信したが、何かを隠してる。

「どうやら、決着がついたようですね」

双眼鏡で試合を見ていた鮫島さんが試合終了のホイッスルを吹いた。

ホイッスルの音に気が付いた残りのメンバーたちがこちらにやって来た。

「この度の雪合戦、勝者は——青チームです」

どうやら大将は最後まで残ってくれたようだ。良かった良かった。

「一応各チームの大将を言っておきましょう。赤は夜空様。青は白音様でした」

「えっ!?! 白音?!」

一番驚いていたのは戦っていた黒歌だった。

「はい。大将に指名されました。気負うことは何一つなかったの自由を楽しめました」

白音にした理由は俺達の中でも小さい体格で雪の上でもすばしっこいことから当てにくいと判断したからだ。結果として黒歌と戦っても当たらずにいた。見事作戦勝ちだ。

「さて、もう一戦する? それともかまくらでも作る?」

赤チームの疑いはまだ晴れていないが今は一旦おいておこう。

話し合いの結果、雪合戦の次は二人一組での雪を使った作品勝負となった。1位から3位のペアには賞品を用意すると鮫島さんが言っていた。

「愛衣とペアか。よろしく」

くじ引きの結果、愛衣と組むことになった。

「ええ、こちらこそ。お題は自由だけど何を作る?」

簡単なものだと勝負には勝てないだろう。でも、難しいのだと少なくともモデルとなる何かが無いと作れそうにない。

「アルビオンはどうかしら? 雪は白いから白い龍は表現しやすいと思うわ」

「それだとヴァーリと被るんじゃないかな？」

他のペアの作品は発表されるまでわからないが、俺の予想ではヴァーリはアルビオンを作ると思う。折角のいい案だったが申し訳ない。

「対抗するならもう片方の天龍にしてみるのが面白いかな。ねえ、ドライグ？」

『ハッ、そりゃいい！ 是非とも作ってくれ！』

「決まりね。(これ、初めての共同作業よね……？ また一步大人の階段を上ってしまったわ)」

急に浮かれ出した愛衣に困惑しながらもドライグの雪像を作り始めたのだった。

『できたー！』

小一時間かけてなんとかドライグの像が完成した。

「(赤じやないからドライグに見えないね)」

『構わん。良くできてる』

愛衣はこういう芸術の才能に長けていたおかげで俺が予想していたよりも大分早く作り終えることが出来た。

余程集中していたのか先に作り終わった皆が見に来てたことに気が付かなかった。

「これ、ドラゴンか!? すごい完成度じゃないか！」

兄さんが俺達の作品を褒めてくれた。

大人たちの投票の結果、俺と愛衣の作ったドライグが3位。星奈と夜空が作ったどこかの城が2位。そしてエイミイさんとクロノが作ったアースラが1位となった。入賞賞品は高級ダイナーへの招待券をもらった。

冬だから早々雪が溶けることはないだろうが、何かの拍子に壊れてしまうかもしれないので、その前に愛衣と二人で記念撮影をすることになった。

あとで永遠の氷姫で補強しておこつと。

アフソリユート・デイマイズ

「……どうしてあなた達までいるのかしら？」

『気にしないで！』

シャッターを切る直前なのは達が俺達を囲むようにして撮影に割り込んできた。

愛衣がなのは達を睨みつけるがどこ吹く風と言った様子だ。

「まあいいじゃんか。皆で撮った後に二人で撮ろうよ」

「空君がそう言うなら我慢するわ」

渋々愛衣を納得させ、雪のドライグと共に写真を撮った。

「もう少しで今年も終わりだね」

暖房の効いた部屋で紅白歌合戦を見ながら年越しそばを食べていた。

十香と美雷はわんこそばのペースでどんどん食べていくのに反比例して料理人さんの疲れがどんどん溜まっていく。毎年十香が良く食べるのはわかっていたようだが、今年は十香だけでなく美雷という新顔がいることを想定してなかったせいできつと今頃厨房は大変なことになっているに違いない。

紅白の結果発表が終わるとテレビの電源を落とした。

除夜の鐘、聞こえるかな？

耳を澄ましていると遠くの方でゴーン、ゴーンと音がする。

煩惱の数——108回叩くらしいが、美九や折紙の煩惱を消すには足りないと思う。

現に今も美九は七罪に抱き着いてるし、折紙も俺の太ももを触ってきてる。

直接頭叩いて煩惱消す方法って駄目かな？

除夜の鐘が鳴り止んだ。

『明けましておめでとございます！今年もよろしくお願いします！』

皆で向かい合って一斉に新年の挨拶を交わす。

そこまで子供達は大部屋でまとまって就寝。大人組は子供がいな

くなつたことで酒盛りだ。

明日からは皆、父親や母親の実家に行くのでしばしのお別れになる。次に会えるのは5日以降だ。

皆揃って寝始めてから一時間程経過した頃、俺とヴァーリがほぼ同時に起き上がった。

俺達は黙って頷き合うとこつそり音を立てないように外に出る。

大人たちがいる方をチラツと窺うとほとんどが酔いつぶれていた。

『寒ッ……！』

お昼の時よりもずっと気温が低かった。

僅かな抵抗として小高い丘まで走ることと体温を上げた。

「よし、新年最初の戦いやろつか！」

誰もいないのを確認して結界を張る。

互いに構える。

実はヴァーリと新年開始早々に戦うことを約束していたのだ。

多分、日が昇るくらいまではやるつもりだ。

「行くぞッ！」

ヴァーリが動き出すのを見て、こちらも動き出す。

拳と拳をぶつけ合う——刹那、ピンク色の砲撃が俺達の間を通り過ぎる。

条件反射で砲撃がやって来た方向を振りむく。

そこにはデバイスを構えて白いバリアジャケットを着たあく——  
—なのはがいた。他にもフェイトやはやて達も全員勢ぞろい。俺達が抜け出したことに気が付いてついてきたのだ。

「ちよつとちよつと」。邪魔するのはいかがなものかと思うんだけどー？」

「二人がこそこそしてたから気になって来てみれば、修行？ 呆れたわ……」

「なに、こういうのも面白いと思つてな。いつその事お前達も含めて全員でやるか？」

「つまり……最強決定戦ってわけか！ やろうやろう！」  
『やらんわ！』

悲しいかな。乗り気だったのは俺とヴァーリのみだ。

俺達は再び拳を構え、なのは達が呆れた視線を向けるのも気にせず  
に修行を再開した。

——今年も一年、良いことがありますように。

## 正月の遊びです！

正月の遊びです！

Side空

一月一日。新年が始まった。

年明け直後に勝負後、各家庭が用意したおせちをバニングス家で食べている。

正直に言うと、今すぐにも寝たい。

「……………ねえ、ずっと思ってること言っていない？」

アリサが箸を動かす手を止めて、対面に座っている俺に言ってきた。

「ん？　もしかして、俺の作ったおせち美味しくなかった？」

「そんなことないわ。今年も凄く美味しい。流石は未来の旦那様って、そうじゃないわよ！」

「じゃあなに？」

「これよ、これ！」

アリサが自身に向けて指で指し示していた。正確には着ている衣服についてだろう。アリサを含めた女性陣が着ているのは着物だ。全員分をバニングス家がわざわざ用意してくれたのだ。

着物を着ている彼女達の魅力を十二分に引き上げている。

「着物がどうかした？」

「どうかした……………ですって？　アンタはホントそういうところが鈍感ね。海に行ったときと同じで何か言うことはないわけ？　似合ってるとか世界で一番可愛いとか惚れたとか思わずプロポーズしたくなっただけ！」

『(ほとんどがアリサちゃんの願望だね？　確かに言われたいけど……………)』

「…………前から思うんだけどそれって一々言わなくちゃいけない？　アリサ達は鼻屑目に見なくても可愛い女の子でしょ。そんな子が着物を着たら可愛いのは当たり前じゃん」

現に親バカな皆の両親は子供達が呆れる程度に写真を撮りまくっ

てた。

「つまり言わなくていい！ Q・E・D！」証明終了

しかし、それでもなおアリサが食い下がる。

「それでも言って欲しいの！ そもそもアンタが言わないと伝わらないこともあるみたいなこと言っただんじやない！」

「……き、記憶にございませぬ」

「胡散臭い政治家か！」

この様子だとはつきり口にしない限りは治まりそうにない。

「はあ……わかったわかった。言いますよ。似合ってるし、世界で一番可愛いし、惚れ……てはないし、プロポーズしたいとは思われないけどね」

「最後の余計！ しかも全部棒読みじゃない！」

とか言いつつその顔は若干にやけていた。

どこかで聞いたことなのだが、女の子は褒められて悪い気はしないのだそうだ。

これからはなのは達が不機嫌そうにしてたら褒めて誤魔化す手段をとろう。

後日、その手段を使う機会があったのだが誤魔化しきれず、いつも通りに理不尽な目にあっただのはまた別の話。

正月と言えば、初詣、かるた、羽根突き、餅つき等々やれることはたくさんある。

おせちを食べ終わって最初にするようになったのは初詣だった。

近くにある神社に行こうとしたら思わぬお客様がバニングス家に来て来た。

「我、登場」

「今日は日本では正月という日らしいな。おせちなるものを食べに来た」

黒い龍神様と紅い真龍様だ。

この二人(?)の登場には魔王、神王、墮天使総督は頬を引きつら

せていた。

以前に出会ったことを伝えて無かつたら度肝を抜かして居かもしれない。

「ホントにあの二体が一緒にいるのかい？」

「これ、全部空……いや、遥の仕業だ。あいつマジで色々ぶつとんでやる」

「ハハハ、可笑しすぎて笑えてくるよ」

「空殿を敵に回すことはしないつもりだけどよ、もしそうになったら俺達に生き残る術あんのか？」

なんかごめんさい。

いくら前世の俺がやったこととはいえ、申し訳ない気持ちでいっばいだ。

結局彼女達も連れて神社へと向かうことになった。

「ここは三大勢力が特別に用意した神社さ。だけどまだ何も祀ってないんだ」

やって来たのは近所ではなく初めて来た神社だった。どこにもあるような普通の神社と言ったところだ。

ちなみにここに連れてこられたのは悪魔や他宗教の神王がいる為、下手をすると勢力間の問題になるかもしれないのを危惧したからだ。

完成は昨日一日使つてだそうさ。

「ここに龍神と真龍がいるのですから、今日だけはあの二人を祀ってはいかがでしょうか？ もちろん本人達次第ですが……」

「私は構わん。本格的な信仰の対象になるわけではあるまい」

「我も」

サーゼクスさんの提案は二人からは反対されることはなかった。

社と賽銭箱の間に二人に立つてもらい、二列になって次々とお金を投げ入れていく。

やがて俺の番が回って来た。

五円玉を投げ入れ、鈴を鳴らす。それから二回お辞儀、二回拍手。

最後に一回お辞儀。

龍神様と真龍様に——ではなく、自身の中にいる彼に向かって誓

いを立てた。

「空はどんなことをお願いしたのだ？」

全員のお参りが終わると十香が俺の願い事を聞いてきた。

「ごく当たり前のこと、かな。そういう十香は？」

「空を振り向かせる！ それだけだ！」

十香は満面の笑みで答えてくれた。

「そっか」

それ以上は何も言葉が出てこなかった。

素っ気無い反応であることは十分理解してる。ただ、頑張れという  
と他人事みたいだし、かと言って自分を振り向かせようとしてる相手  
を応援するのもなんだか可笑しい。

嬉しくないわけじゃないのだがとても反応に困る願い事だった。

バニングス家に戻ると耶具矢に誘われて外で遊ぶことにした。

「空！ 我と羽根突きで勝負せよ！ 我が勝ったら……デートしてっ  
！」

いつもの無駄にカツコイイポーズで厨二チックな口調かと思いき  
や、最後には素に戻って耶具矢はデートを要求してきた。

「うん、まあ、それは構わないんだけど。俺が勝ったら？」

「えーっと、……で、デートしてあげる」

勝っても負けてもデート。それだったら勝負する意味がないのと  
思うんだけど。

「不満。耶具矢が負けた場合でもデートとは耶具矢にとってご褒美で  
しかありません」

そして、当たり前のように夕弦が口を挟んできた。

「い、いいじゃん別に！ 空が良いって言ったんだから！」

「わかった。耶具矢が勝ったらデート。俺が勝ってもデートってこと  
ね」

「え、ホントにいいの!?!」

「いいもなにも断る理由がないから」

今の時期だとデートで行ける場所が少ない気がするが、まあ何とかなるだろう。

「質問。でしたら夕弦も同じ条件で空に勝負を挑みますが構いませんか？」

「全然いいよー」

「ちよ、夕弦!? 私の真似しないでよ!」

「反論。空が良いと言ったので問題ありません。耶具矢と同じです」「うぐっ……」

「お互いに合意したからいいじゃんか。さあ、やろつか」

着物の長い袖が邪魔になるので、短くまとめてから勝負をスタートした。

「行くよー」

左手に持った胡鬼子こきのこ(羽根突きで使う黒い玉と羽根がくつついたやつ)を軽く上に投げ、下から羽子板で耶具矢の方に打ち上げる。

「喰らえー! 我が奥義! 颯 風の槍!」  
テンペスタ、シヤヴェロソト

耶具矢が無駄にカツコイポーズを決めてから打ち返すと風を纏った胡鬼子が普通の羽根突きでは出ないようなスピードで迫ってくる。

対処する方法を考える間もなく、胡鬼子は俺の横を通り過ぎていった。

「汚っ!」

当然のように俺は耶具矢に抗議する。

正月の遊びに精霊の力を使うのはルール違反云々よりも常識を考えて欲しい。

「フッ、空は何もわかってないようだな。これは勝負。ならば本気で挑むのは当然の摂理であろう?」

「軽蔑。勝つても負けてもデートを要望した人が何を偉そうに……」

夕弦の冷たい視線に耐えきれずそっぽを向いた。

「と、ともかく! どんなことでも全力でやるのが私のやり方! 文句ある!?!」

「文句なら大いにあるわ! ……まあ、どんなことでも真剣に挑もう

とすることに関しては素直に凄いつて思うけど。そう言えば、羽根突きって落としたら墨汁で顔塗るんだっけ？」

「あ、確かにそうね！　夕弦、筆と墨汁を持ってきて！」

「承認。パシられることに不満はありますがわかりました。少し待っててください」

しばらくして夕弦が戻ってきた。彼女の手には筆と墨汁が入っているであろう小瓶があった。

「譲渡。耶具矢、これでいいですか？」

「サンキュー。フッフ、空、覚悟しなさい？」

筆と墨汁を受け取った耶具矢が不敵に笑いながら俺に近づいてくる。

常識外れな行動で胡鬼子を返せなかったが、所詮は遊びだ。潔く墨汁で塗りたいくらいだろう。

俺は目を瞑って落書きされるのを待つ。

「……………」

だが、待てども待てども顔に何かが塗られることはない。不思議に思っただけで恐る恐る目を開けると目の前に目を閉じた状態の耶具矢の顔が迫っていた。

「耶具——んっ!?!」

名前を呼ぼうとした瞬間、耶具矢の口が俺の口を塞いだことによつてそれ以上の言葉が出なかった。

「ぶはあ……………」

三秒程で唇が離れた。

い、今キスされた…………!?!

耶具矢にキスされたことによつてようやく理解すると、冬だというのに顔どころか体全体が急激に熱く感じる。

「目を瞑ってる空見てたら、その……………待ってるみたいなのがして……………ごめん」

朱に染まった頬を掻きながらバツの悪そうに俺から目を逸らす。

「戦慄。耶具矢が……………まで大胆なことをするとは思いませんでした」

「うっさい！ 後のこと頼んだから！」

耶具矢は羽子板を強引に夕弦に押し付け、どこかへと走り去ってしまった。

「あー、えっと……俺もちよつと歩いてくる」

「賛成。それがいいと思います。耶具矢のことは私に任せてゆっくりしてください。それと——」

夕弦が近寄ってきて視線を俺に合わせるためにしやがみ込む。

「謝罪。ごめんなさい。ちよつとだけ耶具矢が羨ましかったので私も」

先に謝罪してから唇を押し付けてきた。耶具矢よりかは短く、ほんの一瞬で離れていった。

「幸福。新年早々幸せな気分です。では、また後程お会いしましょう」

夕弦はいつもの無表情の顔を綻ばせ、頭がショートしてる俺の手からするりと羽子板を取って耶具矢を追いかけていった。

新年早々、嬉しいけど恥ずかしい思い出が出来てしまった。

ある程度時間が経てば、頭も体も冷めた。

でも、耶具矢か夕弦の顔を見るとさっきの出来事がフラッシュバックして、少しだけ顔が熱くなる。当分はこの状態が続きそうだ。

皆がいる大部屋に戻れば、大体の人が集まって机の上で何かを書いていた。

「リニス、皆は何してんの？」

たまたま近くに居たりニスに聞いてみた。

「あ、空。これはかるたを作っているんです」

「かるた？」

「かるたをやるとういうことになったのですが、この人数のためかるたの枚数が足りません。ならば、オリジナルのかるたを作ってしまうばいいんじゃないかってことになったんです。空も作ってください」  
はがきサイズの白紙を二枚渡された。

片方は文章だけを書いて、もう片方に絵と文章の最初の文字を入れ

る。

最初の文字は何でもいいらしい。

適当に思いついた単語から連想していくつか作ってみた。

一時間後には作っていたかかるたを回収し、皆でかるた勝負となった。

「皆様、準備はよろしいですか？」

『はい』

全員が準備万端だ。

鮫島さんが文章だけ書かれた紙を読んでもくれる。

「一枚目参ります。『ぎ』。さあ、私達のデートを始めましょう」

どっかで聞いたような文章！

『ぎ』の文字を探すがかかるたの枚数が多すぎて見つからない。

このオリジナルかるたが他のかるたと違うところは最初の文字を誰がやるか決めてないため、最初の文字が被る可能性がある。誰がやるのか決めなかったのは作った本人が獲りやすくなってしまっただ。

さらに違うところを上げるならば、このかるたは最初の文字が複数あるので絵と最初の文字からでしか判断するしかないのだ。

確認の際には、かるたの裏に番号が書かれているので両方の番号が一致すれば正解となっている。

「はー！」

アリシアが元気よくなるたを弾いた。

鮫島さんが確認したところ、アリシアは正しいかるたを獲った。

琴里が軍服を着て、椅子に座っているのがかるたのイラストだった。

「二枚目参ります。『そ』。それでも僕はやってない……と言いたいけど、実はやったような気がする」

なんか変な文章が出てきたな。書いた人が気になる。

「もらったぞー！」

今度は十香がかかるたを弾いた。

「残念ながら十香様の獲ったかるたは間違いです。ペナルティで一回

お手付きです」

「なに!？」

「あ、これっすか?」

「はい、そのようです」

シアが掲げたかるたが正解だった。

裁判の証言台で話す男性の絵。

「三枚目参ります。『そ』。そうかそうかつまり君はそういうやつなんだな。ああ、いいとも。君がそうするなら僕にも考えがある。宇宙の塵になれーッ!」

『なぜそこでベジータ!?!』

全員で作った人に対してツツコミを入れる。

恐らくだがベジータの絵がある奴が正しいかるたじゃないのだろうか。

「お、これだ!」

雄人が獲ったかるたにはベジータがギャリック砲を撃っているイラストが描かれていた。

どうやら正しいかるただったようだ。

「四枚目参ります——」

鮫島さんが次々と面白おかしい文章を読み上げていく。

「私のお兄ちゃん、気が付けば女の子を誑し込んで反吐がでます。本人に自覚がないのが余計に最悪です」

「オッス、おら小林。ズルズルボール見つけてグリリンを蘇よみがえらしてやりてえんだ」

「Q. 愛とはなんですか? A. 躊躇わないことさ」

「人という字は人と人が支え合ってるっていうけど、明らかに下にいる人が苦勞してるよね?」

「ねえねえ、君はクラブってる? え、クラブってないの? え、マジ? 遅れてる〜!」

「いいぜ、いくらでも俺のこと殴れよ。……でも、本当に一番殴ってやりたいのは——自分自身だろ?」

等々。

作ったの誰だ!?

ほとんどが頭の痛くなる文章ばかりだ。

きつと正月だからテンションが高くなつたに違いない。というか  
そうであつて欲しい。

かるたが全部なくなり、誰が一番多く獲つたのか鮫島さんから発表  
される。

「優勝は……折紙様です!」

彼女の枚数は二位の人と圧倒的な差をつけていた。

「優勝した私には空を一日好き放題にしている権利が——」

「んなもんあるか!」

折紙の戯言に即座にツツコミを入れて、かるた勝負はお終いとなつ  
た。

「うくん、そろそろ限界かな……?」

今はお昼過ぎあたりだが年越し前から起きていたせいで俺の眠気  
は限界に近い。

昼寝をしようと借りている部屋へと向かうその道中、踏み込んだ足  
が空を切つた。

「——へっ?」

気付いた時には首元まで——切れ目の両端がりボンで縛られて  
いる——穴に呑み込まれていた。

穴の中は多数の「目」がそこかしこにあつた。

しばらく不気味な異空間を漂っていると先程俺を呑み込んだのと  
同じ穴が目の前に現れた。

周囲を見渡しても他には目があるだけで穴はこれ一つ。

だつたら行くしかないな!

覚悟を決めて穴の中に入り込む。

抜けた先に広がっていた景色は——木々の生い茂る森の中だつ  
た。

「(っ)は……」

「ここは幻想郷。妖怪や神が住まう世界」

俺の疑問に答えたのはいつの間にか俺の背後に立っていた少女だった。

金色の長髪をいくつかに束ねてリボンで結んでいるのが特徴的だ。だが、そんなことよりも――

「今、幻想郷って言った？」

少女の口から聞き逃してはいけない単語が飛び出したのだった。

## 龍神ファンタジーワールド

時を止めます！

時を止めます！

Side ヴァーリ

かるたを片付けてから一時間程経過したが空がどこかに行つたきり戻つてこない。

周りの奴らの顔には戻つてこない空のことを心配しているのが見て取れた。

「空つてば新年早々どっか行つたの？」

「でも、何も言わずにどこか行くようなことはないと思うんだけど……」

最近の空は付き合いが悪いことがしばしばあったが、俺達の誰かしらに必ず出かけることを一言言っていた。今回のように何も言わないことは初めてのことだから皆は困惑しているのだろう。

しかも今の空にはデバイスのブレイブやドライグ達がない状態だ。

「……そのうちひよっこり戻ってくるわよ」

七罪の眩きは俺達の不安を少しだけ和らげる――

「……どっかでフラグ建てたりしてそうだけどね」

――ことはなく、不安がより募るだけだった。

お前は今どこで何をしてるんだ、空？

Side out

Side 空

不思議な穴に吸い込まれ、抜けた先には森林。そして金髪の少女。彼女が言うには、ここは幻想郷だそうだ。

ならば彼女に聞かなければならないことがある。

「紅魔館という場所を知ってますか？」

「知ってるわ」

「ホントですか!?!」

これは幸先が良さそうだ。

「ええ、嘘なんかじゃないわ。もしよかったら案内してあげるけどどうする?」

「ぜひお願いします!」

そんなのお願いするに決まっている。

即座に頭を下げて彼女と行動を共にすることになった。

「私は八雲紫。親しみを込めてゆかりんと呼んでくれて構わないわ」

「俺は龍神空です。よろしくお願いします、ゆかりん」

「……ごめんなさい。自分で言っておいてあれなのだけれどやっぱり

紫でいいわ」

「? はい、わかりました」

呼び方を訂正した理由は良くわからないまま森の中を歩き出した。

……………!

すると、どこからか声が聞こえた。

周りを見渡しても視界に映るのは隣にいる紫さんだけだ。

上手く聞き取れなかったのだが、助けを求める声ではなさそうだ。

……………ま………せ!

徐々に声が近くなり、聞き取りやすくなってくる。

「……あっちね」

紫さんにも声は聞こえているらしく、発信源と思われる方向に歩き出した。

人が通るために整備されてない森の道を俺は何も言わずに紫さんに付いて行く。

しばらく歩き続ければ森を抜けて広いところに出た。そこには一本の大木があった。

「これはなにかしら?」

大木の根本付近に寄ると四角い箱があり、中には丸いものがいくつか入っていた。

———そいつを回せ!

とうとう声はつきり聞こえた。

回せ、というのは四角い箱についてる取っ手のようなものことだろう。

くぼみがあることからここにはなにかを入れて回す仕組みのようだ。

「ガシャポン……？」

土や錆によって汚れていてわかりずらかったが、汚れを払ってからよく見ればデパートやゲームセンターに置いてあるガシャポンに似ている。

ということはくぼみに入れるのはお金ということになる。

お金がないかとポケットを探ってみたら五百円玉が一枚あった。十香から貰ったお年玉だ。

「ありや、入らない」

くぼみに五百円玉を入れようとしたが、入らなかった。

幻想郷の通貨が日本で使われるものと同じなのはわからないが、恐らく一般的なガシャポンと同じで百円玉入れなければならないのだろう。

……そもそも律義に払う必要もないか。

「あー、手が滑ったー」

わざとらしく棒読みでセリフを言いながら魔剣創造で魔剣を一本作ってガシャポンの上部を切り裂く。

——うおおおおおいつ!? お金はどうした!? 今持ってたよな!?! 何で入れなかった!?!

謎の声がツツコンでくるが無視してガシャポンの玉を取り出す。

※良い子は真似しちやだめだぞ。

全部取ろうかと思ったが、持ちきれそうにないので五百円分の五個だけ取ってお金をガシャポンの中に置いておいた。

——……へえ、最初はヤバイ奴かと思ったけど、案外欲がないんだな。

取り出した玉の一つが微かに震えていた。この中に先程から五月蠅い声の主がいるのだろう。

いい加減正体が見えないのに嫌気がさしてきたのでこの玉から先に開けることにした。

「ぐぐぐ……い！開かない！」

——おい待てよ！ 謎キャラっぽい俺が普通最後だろ!?

「回せとか言っておいて最後にしろとか我が儘か！」

本人にその気がない上にどうやっても開きそうにないから他の四つを先に開けた。

一つ目を開けると見たことのない青い文字列が螺旋状に飛び出した。その中心になにかがいた。

「これは……」

紫さんは何かを考える仕草をして出てきたものを観察していた。

時間が経って文字列が消え、そこにいたのは白くてニョロニョロしたやつだ。

「ういっす！ ワタクシは執事妖怪のウイスパーと申します。以後お見知りおき」

ウイスパーと名乗った執事妖怪(?)はうやうやしく一礼してきた。

「そっか。じゃあ、次ね」

「ええっ!? ワタクシ、スルーですか!？」

「ごめんね。先に他のも開けさせて」

「わ、わかりました……」

ウイスパーに待ってもらい、他の玉を開けていく。

「オレっちはジバニャンだニャン！ よろしくするニャン！」

二つ目からは尻尾が二つあり、腹巻きを巻いている赤い猫だ。すごく可愛いというのが第一印象。

「は、初めまして。オラはコマさんズラ」

三つ目からは風呂敷を持っていて、青い火が額から二つ出ている白い体毛の犬。(最初は羊かと思っていたが、本人から違うと言われた)。

ジバニャン同様に可愛い。

「封印を解いてくれたこと感謝する。さらばだ！」

四つ目からは筋肉隆々の赤い猫が出てきたのだが、名前も告げずに

ガシャポンの箱を持ってどこかへと走り去ってしまった。

「あ、行っちゃった」

引き留める理由はなかったのでもそのまま流した。

それよりも気になるのはあの赤い猫が言っていた「封印」という単語だ。

ウイスポー達はこの中で封印されていたってことか。悪さでもしたのかな？

それはあとで本人達に聞くとして、残るは最後の一つだ。

——おし！ ようやく俺の出番だな！ さ、いつでもいいぜ！

本来なら待ちわびた瞬間なのだろうけど、さっきから我が儘なことばかり言っているコイツに従うのは癪だ。

開けないまま黙ってポケットにしまった。

——嘘だろおい！

声が余計に騒がしくなる。

「これ以上五月蠅くしたら、手が滑って肥溜めにでも捨てちゃうかね」

.....

軽く脅してみれば静かになった。中に入った状態では抵抗は一切できないし、流石に肥溜めは嫌なのだろう。

「さて、色々あったけど今度はこっちの自己紹介するね。俺は空つていうんだ。よろしく、ウイスポー。ジバニヤン、コマさん」

「私は紫よ」

「紫？ もしや八雲紫……ですか？」

「そうよ」

『っ!』

三体の目が驚愕に染まった。幻想郷では彼女の名前は有名なのだろうか。

「紫さんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も彼女の名前を知らない妖怪はこの幻想郷にはいませんよ！ 神隠しの主犯だったり、スキマ妖怪の異名を持つ大妖怪です

！ ちなみに少女の姿をしていますけど年齢は——」

「ねえ、あなた達に聞きたいことがあるのだけれどいいかしら？」  
ニコニコ笑顔の紫さんがウイスポーを遮った。

自分に向けられていないのはわかってはいるけどとっても怖い。

「は、はいっ！　なんでございましょう!？」

「あなた達、かなり前に博麗の巫女に封印された妖怪よね？」

「そうだニヤン！」

「でも、オラ達はなにも悪いことしてないズラ……」

詳しい話を聞くと、その博麗の巫女は妖怪なら悪さをしてなくても問答無用で封印したのだそうだ。

妖怪はすべて悪だと決めつけているのは少し気に入らないな。友人に妖怪の黒歌や白音がいるから尚更にだ。

その人に文句の一つでも言つてやりたいところなのだが、紫さんが言うには当の本人はもう数百年も昔に亡くなっている故人だ。

「ま、特に仕返しがしたいわけじゃニヤいニヤン」

それに三体の妖怪はそれほど怒っているわけではなかった。

愛らしい見た目通り、誰かを憎んだり、恨んだりはしないのかもしれない。

「それでジバニヤン達はこれからどうする？」

ジバニヤンとコマさんを両手に抱えてこれからのことを聞いてみた。

「自由にのんびりと過ごしたいニヤン」

「いろんなもんげーものを見てみたいズラ」

コマさんが使う「もんげー」とは岡山弁で「すごい」という意味だ。

「ワタクシは封印を解いてくれた空君に仕えたいです」

仕えたいって言われてもなあ……。

俺は構わないんだけど龍神家の皆がなんて言うのか心配だ。

それにおぼけが苦手な明日奈がいる。可愛いジバニヤンやコマさんならともかく、ウイスポーはアウトだろう。

とりあえず返事は保留にして紅魔館に………それだ！

「ウイスポー、紅魔館に行こう！」

「紅魔館？ 聞いたことがない名前ですね」

ウィスパ―が紅魔館を知らないのは封印されている間に色々この幻想郷も変わってしまったからだと思う。

ともかくだ、そこに行けばウィスパ―への返事も何とかかなりそう  
だ。

三体を連れて紅魔館へと改めて向かい始めた。

「あそこが紅魔館よ」

紫さんが指差した方向には紅い煉瓦の建物があった。中世のイギリスにでもありそうな大きな時計がついた館だ。

「私の役目はここまで。あとはあなた次第よ」

別れを告げる間もなく、紫さんは俺がここに来るときに通った穴の中に消えてしまった。

彼女が俺をここに連れてきたのか。

理由は何であれ連れてきてもらったこと感謝だ。

ここまで来るのに時間はかかったがようやく彼女に会える。

紅魔館の門へと続く石橋を進んで行くと、華人服とチャイナドレスを足して二で割ったような緑色の服装の女性が門の前に立っていた。

佇まいだけでも彼女が強者であることがわかる。

「お待ちしておりました、龍神空君。私は紅魔館の門番をしている  
紅美鈴です」

俺の名前をすでに知っているのは、あの子が話したからだと思う。

「じゃあ、通してもらってもっ」

「ええ、いいですよ。ただし――」

紅さんが拳を構えた。

それが意味するのは、ここを通りたければ、私を倒せ”ということ  
だろう。

「はい、お願いします」

ジバニャン達を遠ざけてこちらも拳を構える。

友達に会うために戦うことに不満がないわけじゃないが、幻想郷と

いう未知の世界の人達の実力を知るいい機会だ。

「さあ、掛かってきなさい」

魔力を全身に巡らせ、軽い準備運動をするつもりで拳を一発叩き込む。

腕をクロスして防がれた。彼女からの反撃はない。

反撃が来ないことを疑問に思いながらも一度距離を取り、拳をまた構える。

「……良い拳です。では、今度は私から」

彼女が静かに一步踏み出す。

たった一步。それなのにあまりに綺麗に洗練された動作に目を奪われていたら相手は俺の目の前にいた。

「はあっ！」

彼女の美脚が側頭部を狙ってくる。

咄嗟に這いつくばるようにしゃがみ込んで回避。

空を切った蹴りはその衝撃だけで地面を抉っていた。

見聞色の覇気がなければ確実に今の一撃でやられていたことだろう。

こりや出し惜しみしてる場合じゃないな。

跳ねるように飛び上がり、右回し蹴り。

片手で防がれるがこれでいい。

ケイネス・リュカオン  
「黒刃の狗神！」

俺の影から黒い刃が彼女の脚目掛けて飛び出す。

「影から!?!」

突然の死角からの攻撃に驚きを禁じ得ない様子だ。

完全に不意を突いた一撃が決まる——

「効きませんよッ！」

——かと思いきや、刃は彼女の脚を掠めるだけで貫くことはなかった。

不可視の壁？ いや、何か膜のようなもので覆われてると言った方がしっくりくる。まあ、次は斬るけど。

刃を消して接近戦を続ける。

その中で黒刃の狗神を相手が嫌がるであろうタイミングで出し、彼女に攻撃の隙を与えさせない。

確かに俺の攻撃は膜を斬っている。それに彼女が防戦一方で間違いない。しかし、彼女の反射神経が鋭いのかまたは直感なのか、斬った瞬間に服や肌を掠める程度に終わる。どうにも決定打に欠けているのだ。

イチかバチかでやってみよう……!!

あまり黒刃の狗神は使い慣れて無いから不安はあるが、きっと俺の想いに応えてくれるはずだ。

彼女の蹴りを武装色の覇気を纏い両腕でガード。

両腕に奔る激痛に耐えながら距離を開け、体勢を立て直すと同時に駆け出した。

迎え撃つ構えを取る紅さん。

「黒刃の狗神!」

「ワン!」

「刃ではなく犬!?!」

名前を呼べば、影から今度は刃ではなく黒い毛並の子犬が俺と紅さんの間に飛び出す。

一瞬の躊躇を見せたのち、黒刃の狗神に向かって脚を振り上げた。

「ソードフォーム 剣刃形態!」

俺の声に呼応するように黒刃の狗神が細く長く姿を歪ませ、一本の黒い刀へと変形する。

形が細くなつた黒刃の狗神は脚を躲し、俺は柄を掴み取って喉元を狙って刀を突きつけた。

「……お見事です」

喉元に刀を突きつけられた紅さんが両手を上げた。

この勝負、俺の勝ちだ。

「進んでもっ!」

「ええ、どうぞ。あなたの實力十分にわかりました。あの方が認めるだけ……ガクッ……」

紅さんはわざとらしくその場に倒れた。

あれー？ 最後の攻撃って当たってないよね？

「ジバニヤン、コマさん、ウイスパー、行こう」

よくわからない行動に首を傾げながらもジバニヤン達を連れて紅魔館へと入った。

「ごめんくださいーいー！」

玄関の大きな扉を開けてみれば、館内を何本もの蝋燭が照らしていた。光源が小さいためか薄暗い。

返事がないので誰もいないかと思いきや、誰かが歩いてくる音が中央にある階段から聴こえた。

「……美鈴を倒してきましたか……」

姿を現したのはメイド服を着た銀髪の少女だ。十香ぐらいの年頃で懐中時計が腰についているのが特徴的。

さっきのジバニヤン達や紅さんとは違い、纏う雰囲気が人間のものだ。

どこことなくグレイフィアさんに似てる気がする。……まあ、血縁者ってわけでもなさそうだけど。

「ですが、美鈴は紅魔館四天王のなかでも最弱。彼女のように私を簡単に倒せるとは思わない方がいいですよ」

……なんか今のセリフで色々シリアスなはずの雰囲気がち壊しになった気がするんだけど……。ってか、四天王最弱なんて言葉を実際に使う人いたんだ。

「あなたも倒さないと通れないってことですか？」

「そうです」

当然そうなるか。でも、最低でもこの人を含めてあと三人倒せばいいことはわかった。

「逃げるなら今の内ですよ？」

「いや、逃げるなんて選択肢は俺の中にないんで」

魔剣と聖剣を両手に握りしめ突貫。

メイドさんはどこからともなくナイフを取り出し投擲。

ナイフを斬り払う——刹那、俺の動きが止まった。いや、時が止まったというべきだ。

蠟燭が溶けていないことやジバニャン達が動いていないことからそう考えた。

普通なら動けないどころか意識がないはずだ。そうじゃないのは神器のおかげだ。

「悪く思わないでください。私と勝負する時点で勝者は決まっていたのですから」

メイドさんがゆつたりとした足取りで近づいてくる。

俺に意識がある事には気が付いてないようだ。体が動かないのだから簡単にはバレないだろう。

大量のナイフすべてを俺に当たるように設置。

あとは彼女が時を動かすのを待つだけになる。

「これで終わり——」

「——なわけあるか。停止世界の邪眼」  
フォレヒトウン・パロール・レヒュー

解除する瞬間を狙って神器を発動。突き刺さるはずのナイフは止まったまま。

「な、何故……？ 何故あなたは動けるのです!? 時は止まったはずです! ……それに私の方が動けなくなってる?」

自分の置かれた状況を理解しようだ。

意識があるのは俺と同じ理由と考えてよさそうだ。

「単純なことですよ。——俺が時を止めただけですから」

空条承太郎がDIO相手にやってのけたことと同じことを再現したまでだ。

簡単に言ってるけどタイミングを見誤っていたら全身穴だらけになる、中々危険な賭けでもあった。

「ならッ、もう一度………できない……?」

「今は俺の時間です。そして、あなたの時間はもう来ない」

魔剣と聖剣を視界を覆い尽くす程の量を、彼女が動けばいつでも刺せる位置に創り出した。

「降参します?」

「……します。私ではあなたを止めることは出来ないでしょうから」  
敗北宣言を聞き入れ、剣を消す。

「行きなさい。たとえどんな結末になろうとも諦めることは決して……ガクツ……」

「だからなんなのさ、そのわざとらしい演技は！」

倒れたメイドさんは俺の叫びをただひたすらに無視し続ける。

これは何を言っても反応しなさいさそうだと思います、先に進むことにしたのだった。

## 紅魔館の再会です！

紅魔館の再会です！

幻想郷のとある森の奥地。そこには筋肉隆々の赤い猫がいた。先程空が開けたガシャポンに封印されていた一体だ。

赤い猫は抱えていたガシャポンの筐体を置くと、箱から玉を取り出しては次々に開けていった。

その数、およそ二十。

封印を解かれた妖怪達は喜びの雄叫びを上げた。

「封印を解いてくれたことを感謝しよう、レッドJ」

雄叫びを上げる妖怪の中でただ一人、落ち着いた青年がいた。

それに対してレッドJと呼ばれた赤い猫は跪き頭を垂れていた。彼の言葉を待っているのだ。

「……いかなさいますか、カイラ様」

「決まっている。この幻想郷の王になる。ただそれだけだ。……だが、いささか配下が少ないな。レッドJ、俺達のように封印されている妖怪を探し出せ。まずはそこからだ」

「はっー！」

レッドJは返事を返すと他の妖怪を連れて即座に行動に移ったのだった。

## Side空

メイドさんを倒して館内を進む。だが、途中でその歩みは止まった。

「どうかしたニヤン？」

「いや、この先をどう進んだらいいんだろー、って」

紅魔館の全体図を把握していないのでどこに何があるかさっぱり

わからない。

「……そこを左に曲がつてまつすぐ進むと大きな扉があります。そこで三人目の四天王が待ち構えています」

「やっぱ起きてんじゃんー！」

助言してきたのはまさかのメイドさんだ。

即座に振り返ったが1mmも動いたようには見られず倒れたまま。

三文芝居をここまで続けられると逆に凄いとさえ思えてくる。

「まあまあ、情報は手に入りましたし、先へと進みましょう！」

ウイスパーに促され歩き出す。

言われた通りに左へ曲がり真っ直ぐに進んだ先には大きな扉があった。

扉を開けた先には本、本、本本本本本本本本本本——。

見渡す限りに本が本棚に所せましと並べられていた。

下手をするとミッドチルダの無限書庫程の大きさがあるかもしれない。

「ふうーん、へえー、ほおー……！」

左右の本棚をざっと見まわしながら奥へと進む。

小説、地図、歴史書、図鑑、語学等々、ありとあらゆるジャンルの本が揃っていた。

中には魔法に関する本や見たことも聞いたこともないような言語で書かれた本も存在した。

……もしかしたら……。

少しだけ淡い希望が湧いたが今はそれを優先するべきではない。

本を見るのをやめて、図書館の奥へさらに入り込む。

「あら、もうあの二人をもう倒してきたのね。今読んでいる本がもう少しで読み終わるから待っていてくれないかしら？ あなたも連戦で疲れているでしょうから休んだら？」

椅子に座って本を読みふけている、紫色の髪に寝巻きのようなゆったりとした服を着用している少女がいた。

「はーん」

気を抜いたら忘れていた睡魔が襲ってきて、それに抗うことなくし

ばらく眠ることにした。

「待たせてしまつてごめんなさい。あまり運動するのは好きじゃないのだけれど、私とも勝負してもらいましょうか」

どれくらい眠っていたのかはわからないが、机に積んである本から考えて数時間と見ていいだろう。

となると待たせてしまったのはこちらになる。しかし、彼女はこれと言つて気にしている様子は微塵も感じられない。余程本を読むことが好きなのだろう。

「まずは自己紹介ね。私はパチュリー・ノーレッジ。あなたのことはあの子から聞いているから名乗らなくて結構よ」

紅さんの言つていたあの子と同一人物で俺がこれから会いに行く人物で間違いないだろう。

彼女が一体何を話したのかとても気になる。

「ちなみにあなたがさつき倒したメイドの名前は十六夜咲夜よ。時を止められるのが咲夜以外にもいたのね」

まるで俺が戦っていたのを見ていたような話し方だ。

「まるで自分が戦つていたのを見ていたとでも思つたでしょ？」  
「！」

考えていることを言い当てられてしまった。

「使い魔を通して見ていたの。もちろん美鈴との戦いも見させてもらったわ」

彼女に二人に使つた手は通用しないと考えてよさそうだ。

それに膨大な魔力を見て、魔法や魔術を使った戦いか嵌め手を用いる戦法を取るかもしれない。

ジバニャン達を安全そうな場所に置いてからいつも使っている魔剣と聖剣を創つて構えた。

「行くわよ」

彼女の背後に大量の魔法陣が展開されるのが戦闘開始の合図だった。

火球、水弾、風圧、雷撃、岩石。あらゆる属性の魔法をこちらに向けて撃ってくる。

見聞色の覇気を使って魔法と魔法の合間を縫って躲していく。さらには武装色の覇気で時折魔法を斬り裂く。

休憩したおかげで覇気に使う集中力は十分だ。

「躲すのはともかく魔法を斬るとか聞いてないわよ……!」

パチユリーさんは今ここにいない誰かに対して怨嗟の声を上げた。動揺してくれるのは俺からすれば好都合だ。

……もつと硬く、もつと切れ味を!

ドンドン放たれる魔法に耐えきれなくなった剣は何度も壊れるが、その度に創り直す。

斬って斬って斬りまくりながら彼女との距離を縮めてゆく。

背後からも魔法を放ってくるが、それらは黒刃の狗神に任せて、魔法陣ごと斬って発動を防ぐ。

「賢者の石!」

石?

彼女が五色の魔法陣を展開すると五つの色の異なる石が現れた。

石を出したことに何の意味があるのか疑問に思っていたら、その疑問はすぐに解消した。

属性魔法を放つたびに五つの石のどれかが反応して追加攻撃をしてきたのだ。

いきなり攻撃の数が増えたことよって縮めていた距離は中々縮まらず、それどころか逆に離され始めた。

俺が今使える力で切り抜けるには……。

マルチタスクを使い、戦いながら戦略を組み立てていく。

集中力と思考を別のことに割くため覇気が弱まるが少しの辛抱だ。

その分、武装色の覇気よりも見聞色の覇気を優先にして回避に専念。

あの石から壊さないと!

追加攻撃が実に厄介だ。彼女に近づくにはそれからだろう。

「煌天雷獄、ゼニス・テンペスト禁手化!バランス・ブレイク!」

禁手の天獄龍の煌雷星となり、姿が変わる。と言つても今

日は私服だから変わるの髪や瞳の色だ。

「ッ！」

禁手を使った瞬間に体中に激痛が走る。

……やっぱり相性が悪くなってるな。

「ソラの姿が金色にニヤツタ!？」

「金色になるなんてもんげーズラー！」

「空君は一体何者なんですかねえ……?？」

驚くジバニャン達にちよつと苦笑いしつつも、攻撃を放つ。

炎が、水が、風が、雷が、大地が意思を持ったかのように集まり、ドラゴンになる。

「さあ、あの石を喰らえ」

力を行使する毎に全身が痛むのを堪えて、ドラゴンに石を壊すことを命じる。

パチュリーさんが魔法で応戦してくるが生半可な攻撃では通じない。逆に同じ属性の魔法を喰らって力が増しているくらいだ。

だが、そこは彼女も気づいたようで相性の悪い属性をぶつけて完全に相殺した。結果としてドラゴン達は石を砕くことが出来なかった。

「今だ！・黒刃ケイネス・リュカオンの狗神！」

「!？」

本棚の上から現れた黒刃の狗神が一瞬の間に五つの石を斬り裂いた。

「やってくれたわね……」

ド派手なドラゴンの方に意識が集中していたせいで小さな黒刃の狗神にまで目がいかなかったのだ。

「はあああッ！」

禁手を解いてから魔剣と聖剣を創り直し、覇気と魔力を全開に使って突貫。

先程と同じく魔法を放ってくるが追加攻撃が無いのであれば問題なく躲せるし、斬ることが出来る。

「石が無ければ勝てると思ってるのでしょうけど……舐めすぎよ！」

これまでの倍以上の魔法陣が展開され放たれる。  
覇気だけで回避は無理だと判断し、剣を消す。

「諦めるような子じゃないってあの子は言ってた。何をするつもりなの？」

「——魔剣創造＋聖剣創造、融合手化ッ！」

クロス・ブレイク

二つの神器を合わせた禁手——融合手。クロス・ブレイカーアザゼルさんに名前を付けてもらった。

右手に黄金の剣。左手に漆黒の剣。

その剣はブリテンの騎士王が使っていたとされる聖剣とその反転した姿の聖剣——約束された勝利の剣。エックス・カマリパー

ただ、約束された勝利の剣は神造兵器と呼ばれる伝説の武器であるため、たとえ禁手を使って創ったとしても本家には遠く及ばない劣化版でしかない。

「また姿が変わったニヤ!？」

ついでに服装はとある人物を真似て黒い帽子に青いマフラー、青いジャージ、黒い短パンになってる。

変身が終わると同時に放たれる魔法に再び突っ込んでいく。

「危ないズラー！」

コマさんの心配する声が聞こえてくるが一向に足を止めない。

それどころか魔力を流し込むことで聖剣から溢れるエネルギーをジェットエンジン代わりにして加速。

「星光の剣よ……魔法全てを消し去るべし！ ミンナニハナイシヨダヨ?。」

さらに魔力を放出して加速し、魔法を滅多斬り。

あの人の動きはもつと速かった……。

一度聖剣を振るうごとに腕に痛みが走る。

神造兵器に少しでも近づけようとしているのだから当然の代償だ。

あの人の踏み込みはもつと力強かった……! !

歯を食いしばって痛みを耐える。

あの人の剣はもつと綺麗だった！

憧れた背中はまだまだ遠い。それでも、いや、だからこそ目標にして追いかける。

「蒼天えつくすかりバーファンタズムに輝く幻想の剣ツー！」

魔法の包囲網を斬って抜けた先にパチュリーさんがいた。

新たな魔法を発動させようとしてるがそう簡単にやらせるものか。

足元に防御魔法陣を展開して踏み込む。

俺の勢いが増したことで魔法の当たるタイミングがズレた。

パチュリーさんに二本の聖剣を突き付け、勝敗は決した。

「……私の負けよ。かなり本気出したんだけど、あなた強いよね」

「俺なんてまだまだですよ。俺の知り合いにもつと強いヒトいますから」

魔王とか神王とか真龍とか龍神とか。

「そう。まあ、そんなことに興味はないのだけれど。それよりも先に行かなくていいの？ 待ってるわよ、フラン」

「言われなくても会いに行きますって」

「それがいいわ。……あいつ、多分いるわね。魔理沙！ 彼をフランの下に連れてって！」

「うげッ、バレてんのか……」

突然声を張り上げて誰かの名前を呼んだかと思えば、上から箒に乗った少女が現れた。

見た目は琴里と同じ中学生くらい。金色の長髪の片方をおさげにしている、黒いとんがり帽子に白いエプロンの付いた黒い服を着ているいかにも魔女っ娘だ。

きつと魔女の宅急便に憧れたんだな。

「やっぱりいたのね。大方私が戦ってる間に本を盗もうとしたんでしょ」

「別のこんだけの本があるんだからいいじゃんかよ。けちけちし過ぎだぜ、パチュリー」

「人の物を盗むのは犯罪。……まあ、今回はフランのところへ連れて行ったら大目に見てあげる」

今回つてことはもしかして常習犯？

「マジか!? おっし！ お前、えーつと……」

聞きたいのは俺の名前か。

彼女もフランから聞いてると思っただけだが、この家とは関係ないのかな？

「空。龍神空です」

「オツケー。空だな。私は霧雨魔理沙だ。よろしくな！」

容姿は完全に美少女と言っただけで差し支えないのだが、口調が男っぽいのでなんとなく親しみやすそうだと感じた。

「魔理沙、あとのことは頼んだわ。私は本を読むから。……あ、そう言えば……ガクツ」

思い出したかのようにパチュリーさんが前の二人と同じようにわざとらしく倒れた。

「遅いし、ワザと過ぎるー！」

俺のツツコミが図書館内に空しく響くだけだった。

「空、フランの奴とどんな関係なんだ？」

「友達だよ」

魔理沙の箒は一人乗りなので、俺はジバニャン達と獅子王レグルス・ネメアの戦斧に跨って付いて行ってる。

そんな最中、魔理沙からフランのことを聞かれた。

ちなみに敬語じゃなくなってるのは魔理沙が敬語を使われるのがむず痒いらしい。

それから魔理沙も紅魔館四天王（に勝手にされた）らしいのだが、面倒くさいからサボったのだそうだ。

俺としても無駄に戦う必要がなくなるのでありがたい。

「友達か……。あいつも成長したもんだぜ」

しみじみと一人呟く魔理沙の姿は妹分の成長を喜ぶ姉御といった様子だ。

「これからも仲良くしてやってくれよ？」

「そりゃ、もちろん」

異世界の住人だから中々会いに行くことは出来ないが、行ける時には行くつもりだ。

「ここだぜ」

魔理沙が扉の前に止まった。

獅子王の戦斧から降りて、扉を開けると地下へと進む階段が現れた。

スマホのライトを点けてゆっくり降りていくと扉がまたあった。

「ここに空君の友達がいるんですか？」

「そうらしいよ」

この先にフランがいると思うと柄にもなく少しだけ緊張した。

一度深呼吸をしてから扉を開けた。

「会いたかったわ、空ー！」

突然誰かに抱き着かれたかと思えば、見覚えのあるナイトキャップに、枝に七色の宝石の付いた変わった翼、濃い黄色の髪をサイドテールにした俺と背丈の変わらない少女。

そして俺が会いに来た少女——フレンドール・スカーレットだった。

「あー、うん、俺も会いたかった……けど、……………」

基本的に仲良くなったヒトとは最低でも一週間に一回くらいの頻度で会ってる。

なのはやヴァーリと言ったいつもの顔ぶれは最早毎日。

長期的な別れの期間があったのはフランが初めてなのだ。

だから話したいことはたくさんあるが、最初に何を言ったらいいのか言葉に迷ってしまう。

「普通に『久しぶり』でいいと思うニヤン」

「そっか。久しぶり、フラン。俺も会いたかった。待たせてごめん」

「ホント待ったわ！ 三か月よ、三か月！」

おっと急に怒り出したぞ。いや、三か月も待たせたんだから当然と

言えば当然か。

「そう言われてもなー、幻想郷への行き方が無かったんだから仕方ないと思うんだけど」

「でも、現にここに来てるってことはわかったんでしょ？」

「ううん、違うよ」

当然、二亜に調べてもらったが行く方法がわからなかった。理由も今のところ不明。それでも紫さんは俺をここに連れてこれたということは、彼女のことを知れば何かわかるかもしれない。

「それじゃあどうやって来たの？」

「フランが紫さんに頼んだんじゃないの？」

「私、そんなこと頼んでないわ。そもそもほとんど外に出る気のない私と呼べると思うの？」

「それもそっか」

だとしたら一体誰が紫さんに頼んだんだ？ 初対面の紫さんなわけないだろうし……。

ちよつとした謎が出来たが、正直どうでもいい。今はフランとの再会を喜ぶことにしたのだった。

## 紅魔館の主です！

紅魔館の主です！

S i d e フ ェ イ ト

空がいなくなつてすでに半日が経過。

皆それぞれの親族の下に年始の挨拶に行くために解散した。親族と言つても龍神家の人達にはいないので、そのまま帰宅だ。

家に帰ってから空がない寂しさを紛らわすために外に出て遊ぶことにした。

「はあ……」

それなのに、結局いなくなつた空のことを考えると遊びに夢中になれず、何度目かわからない溜息が出る。

それと同時に自分がどのくらいあの少年のことを想っているのかもわかつてしまう。

ま、空は鈍いから気が付いてないだろうけど……。

自分は自他共に認める人見知りだし、姉のアリシアと違って積極的なわけじゃない。それでも頑張つて空に振り向いてもらえるように抱き着いたり、お風呂に突撃したり、ベッドに潜り込んだりしたが、どれも効果が見られない。ちよつと自分に自信が無くなつてくる。

いつその事十香のように告白でもしてみようか、なんて考えることもあるがそこまでの勇氣はまだない。

それもこれも全部空が鈍感なせいだよな。

そう思うとなんだか無性にムカムカしてきた。

誰か誘つてストレス発散のサンド——じゃないじゃない。新技開発のモルモ——でもない。まあ、なんでもいいや。とりあえずこの行き場のない憤りを今すぐにでもぶちまけるべきだ。

私は早速近くに居た美雷に声をかけたのだった。

もしも、女の子連れて帰ってきたら一発殴つても許されるよね？

S i d e o u t

## Side空

フランとの再会を喜んだすぐあとジバニャン達を紹介した。

「この赤い猫がジバニャン。白い犬がコマさん。ニヨロニヨロしてるのがウイスパー。で、この子はフランドール・スカーレット。俺の友達」

「よろしくニャン！」

「ええ、こちらこそ。ジバニャン、抱き締めてもいい？」

「構わないニャン！」

「ウフフ、可愛い♪」

ジバニャンを両手で抱きかかえたフランが柔和な笑みを浮かべた。

「オレっちの可愛さがわかるとは、フランは中々お目が高いニャン」

「女の子は可愛いものに目がないの」

俺もフランに倣ってコマさんを抱きかかえた。

「可愛さならコマさんも負けてないよー！」

「て、照れるすら……」

恥ずかしそうに頭を掻く仕草がより可愛さを引き立ててる。

「あ、あの、わたくしは……」

「お前は私が可愛がつてやんよ。のけ者同士仲良くやろうぜ」

「ありがとうございます、魔理沙様！」

べつにのけ者にしたくてしていたわけじゃないのだが、見た目的にウイスパーを可愛いとおもうのはちよつと抵抗がある。まあ、結果的に二人が仲良くなったのならいい事だ。

「さーと、ジバニャンの可愛さを堪能したから、空、この三か月であつたこと全部教えて」

フランがジバニャンを抱きかかえて数分。堪能したと言いながらも未だに離す様子はなく、天蓋付きで何故か棺桶のある大きなベッドの上で寝そべりながら話を振って来た。俺も隣で寝っ転がってる。魔理沙は箒の上だ。

ちなみにその棺桶でフランが寝ているのだと知ったのはもう少し時間が経ってからだ。

「あつたこと全部？」

そんなのを聞いて面白いのかわからない。かと言って聞かせられない話というわけじゃないので、包み隠さず話した。

(ギャルゲーで)彼女が出来たこと。過去の姿に戻ったこと。最強の存在に出会ったこと。最新のゲームで遊んだこと。兄妹と一緒にいられるようにしたこと。あとはクリスマスや正月を楽しんだこと。

「よくもまあそんな短い間に色々あるわね。あんたってやつぱり主人公体質ってやつ？ これからも災難とか続くんじゃない？ ここに来たのも何かに巻き込まれる前触れだったりして」

「縁起でもないこと言わないでくれないかなっ！」

フランの呆れた瞳の中には何かを悟った感じがしたのはきつと気のせいじゃないだろう。

……今のでフラグ建ったりしてないよね？ あー、でもあの筋肉猫、イヤーな予感がするかも。

「でも、聞いてて楽しかったわ。そのうち空の世界に行ってみたいかも」

「来ればいいじゃんか」

紫さんに頼みさえすれば今からでも行けないこともないだろう。

「……………そうね、考えておくわ」

返事をするのにやや間があつたことには気が付いたが、その理由はフランだけにしかわからない。

仲が良いとはいえ、無駄に詮索するのはガラじゃないので別の話に切り替えた。

「フランってお姉さんいるんだっけ？ ここにいる？」

「ええ、今頃書斎で仕事か庭でお茶でもしてるんじゃない？」

「なら会いに行きたいんだけどいいかな？」

そもそも紅魔館四天王とかいう人達と戦っていたのだから、彼女の姉とも会うべきなのではないかと今更ながらに思い至った。

「私が案内します」

行こうと思つた矢先、まるでタイミングを見計らつたようにさつき戦つたメイド——十六夜咲夜さんが現れた。

右も左もわからないこの広い紅魔館で案内の提案は願ってもないことだ。彼女の好意に甘えてついてゆくことにした。

「お嬢様、彼を連れてきました」

咲夜さんが止まったのは大きな扉の前。

ノックをしてから要件を伝えると扉越しに「入りなさい」という声が聞こえてきた。

声は若い少女のものだ。

咲夜さんがお嬢様と言っていたから、フランに似ていて少しばかり大人びた人物像を思い浮かべた。

扉が開けられ、大広間思わしき部屋に入る。

部屋の一番奥にある玉座に彼女は座っていた。その傍には彼女を左右から挟むように紅美鈴さんとパチュリーさんが立っていた。

彼女から溢れる吸血鬼独特のオーラというか雰囲気。

俺の想像通り、容姿はフランの姉ということもあつてそっくり。歳が近いのかフランとの身長差はあまりないようだ。

髪の色は青みがかった銀髪。瞳の色は鮮血を連想させる真紅だ。

服装は（俺の世界では）時代遅れの貴族が着るような服と言ったところか。

「ようこそ、紅魔館へ。私はこの主——レミリア・スカレットよ。龍神空君、あなたのごことは知ってるわ。四天王を倒すとは中々ね」

「……………」

視線は彼女に向けたままだが、内心では苦笑い。

中々だったのはそっちの三文芝居ですと言いたい。それに魔理沙約一名と戦ってません。

でも、相手は至ってシリアスな雰囲気なのでこちらからは何も言わずに沈黙を保つ。

「妹が随分お世話になったみたいね。そのことには礼を言うわ。……でもね——」

一度目を閉じてからまた開く。

「私の妹を……フランを誑かすとはいい度胸してるじゃないッ！ 今この場で血祭にしてやるわッ！」

レミリアの姿が玉座からブレた瞬間、紫色の槍で吹き飛ばされていった。咄嗟に魔力強化をした両手で交差してガード。だが、あの細腕からは考えられない威力に負けて壁を突き破り、外にはじき出された。

湖畔にある木にぶつかること数回。ようやく止まった。

「痛い……」

フランからレミリアの強さはある程度知っていたが見聞色の覇気でも見えないとかいくらなんでも強すぎやしないだろうか。

となると、戦ったあの三人も本来はもつと強いのではないかと思えて来る。

追撃を警戒したが、その様子はないようだ。

あの三人も動くかと考えたが主の戦いの邪魔はしない決まりなのか、俺に負けたから何もしないのかはわからないが、手練れの相手複数人に一人で戦えるか多少の不安はあったのでそこは助かった。

『このままだと勝てないぞ。どうする？』

レミリア相手にどう戦うか悩んでいると脳内に声が響く。

何度も会話したことのある相手だ。驚くことはこれといってない。

むしろ、これまで黙ってたことが不思議なくらいだとさえ思う。

『ロンギヌス神滅具は今のお前じゃ相性悪いからな。どうせなら修行の成果を実戦で見せてみろよ』

彼の言ったこと以外に思いつきそうもない。

特に禁バランス・ブレイカー手は長引けば長引くほど体を蝕んでゆく。

やってみる。

『そうか。俺が教えた通りに頑張れよ』

そこで彼との会話を終えた。

「頑張りますか！」

一度深呼吸をして体から力を抜く。

目を閉じて、心を静める。どこまでも澄み渡る蒼穹のように。

彼から教わったことを思い返す。

自身に流れる魔力とは別の力を感じ取り、全身に満遍なく巡らせる。  
力が十分に行き渡ってから目を開け、そっと呟くと木々がざわめきだす。

「――龍神化」

S i d e o u t

S i d e フラン

部屋にこもっていたら突然大きな爆発音が聞こえてきた。

私は魔理沙と顔を見合わせるなやいなや、速攻で部屋を飛び出した。

辿り着いた場所には美鈴、咲夜、パチュリー。そして槍を構えたお姉様がいた。

「お姉様？　これは一体……？」

壊された壁についても含めて尋ねたが、お姉様は何も答えてくれな  
いどころか目線は壊された壁に向けたままで合わせてくれない。

「お姉――ッ!？」

『ッ!？』

もう一度お姉様を呼ぼうとして誰もが息を呑んだ。

ほんの一瞬、圧倒的な力を肌で感じたからだ。

でも、怖いとは思議と思わなかった。なんとなくではあるが力の  
主は私の知る彼なのだと思う。

そして私の予想通り力の主が私達の前に正体を現した。

黒髪に蒼い水晶のような角が二本。蒼かったはずの瞳は青空を錯  
覚させる輝きを放っていた。

姿が変わってすることに驚きはあったが知り合ってから散々見てき  
たので今更だ。

「――空」

「ん？ フラン」

どこかの誰かさんと違って、空は名前を呼べばきちんと反応を返してくれた。

槍を持ったお姉様。壊された壁。その壁から戻って来た空。それから導き出される答えは一つ。二人の戦闘だ。

どんな経緯があつたかは知らないがそれはあとで聞くとしよう。

「空、お姉様なんかやつつけちゃいなさい！」

「フラン!? そこは姉である私を応援でしょ!?!」

「名前を呼んでも反応しないお姉様なんてしらなーい」

ようやく私の方に振り向いてくれたがもう遅い。今現在妹の心は姉よりも友人に向いてる。

「ねえ、さつさと続きやろうよ。あの一撃で終わりなわけないよね?」

「フン、次は確実に殺してやるわ」

槍を再び構えたお姉様。対する空は魔剣と聖剣を作り出した。

好戦的なセリフを吐いた割に雰囲気は柔らかすぎやしないかしら？

空の雰囲気違和感を覚えるがそんなことを聞く暇もなく、二人の戦いは再開した。

「さつき俺がフランを誑かしたとか言ってたけどフランとは友達だけど」

「そうね、今はまだねッ！ でも、あなたは近い将来あの子と今以上の関係になる！ 絶対にッ！」

二人が武器を交えながら会話をしていた。

内容からして私が空に墮とされるといふことか。大方たまたま能力で見たのだろう。

空と恋人関係、か……。

少しだけ想像してみた。

二人で色んな場所にデートして、手を繋いで、恋人や夫婦になった人達がするというキスをしたり。

他にも幻想郷では知ることのできないようなことを彼は教えてくれるに違いない。

そう考えると空と恋人関係になることは決して悪い事ではないと思う。

「へえー、そうなんだ」

でも、だからと言って今の私達には関係ない。

所詮はどこまでいっても未来のことだ。起こっていないことを言われたところで実感が湧かない。直面した時に悩めばいい。

……その時は未来の自分に全部任せよう。

「未来を見通す力でもあるの？」

「ええ、そんなところかしらねッ！」

口調には熱がこもっているが、お姉様の動きは至って冷静だ。

お姉様の能力は妹の私でもよく知らない。多分一番信頼されてる咲夜でさえも。これは私の推測なのだが、お姉様自身も使いこなせていない。もしくは意図的に発動できない能力なのではないかと考えてる。

「そいつは奇遇だね。実は、俺も少しだけ未来を見ることが出来るんだ」

空は手に握る剣を消して目を瞑る。

「——宣言する。お前の攻撃は当たらない」

お姉様が無防備な空に隙アリと言わんばかりに攻撃してくるが、空は身体を半歩ズラして躲す。

「こおんの——ッ！」

「左からの薙ぎ払い、顔目掛けての三連突き、足払い、縦に振り下ろしからの返し」

空の宣言通りにお姉様が攻撃してくる。そして、それら全てを体裁きのみで躲し続けた。一度もかすりもせずだ。

私の知る三か月前の空が挑んだのなら確実に負けると断言できたが、私が会えない間にお姉様と対等に戦えるほどに成長していた。

いや、対等どころかまだまだ余力を残してるようにも見える。

「ほらね。俺の言った通りになった」

「（これがフランの言ってた覇気とかいうやつ？ 厄介な能力ね……！）」

接近戦では分が悪いと判断したのか、一度距離を取ったお姉様は膨大な魔力による物量で押し潰す作戦に出た。

「いくら未来が見えてても、逃げられないんじゃ意味がないわよね！」  
流星に空でもこれだけ量は躲せないだろう。

なら、どう迎撃するのかと見ていたが突つ立ったまま動く素振りを全く見せない。

「空!？」

「大丈夫。いただきます」

限界まで開けた空の口に魔力弾がどんどん流れていく。

幻想郷でも中々お目にかかれないその光景に誰もが度肝を抜かれた。

「ごちそうさまでした」

見事に最後の一発まで食べ終えた。

吸い込んで自分の力にするのかと思ったが、私の予想は大きく外れた。

「お返し。——息吹」

空がビー玉サイズの小さな玉を掌に作り出して、それに目掛けてフウッと息を吐くと一条の蒼い閃光が館の壁を突き破った。

だが、閃光はお姉様には当たることなく——恐らく空がわざと当てなかったおかげで——傷一つない。

私が悲しむと思つてのことだろう。

優しいともいえるし、甘いともいえる。それが彼の良いところと言うべきか。

「まだやるっ」

「……負けでいいわ」

「そう」

敗北宣言を受け取った空はいつもの姿に戻っていた。

「じゃあ、改めて挨拶だね。俺は龍神空。フランの友達です」

さつきまで本気で殺されかかっていたはずの空が、何事もなかったようにしている様子にお姉様は完全に拍子抜けしていた。

「お姉様、空はそういうやつよ」

「……レミリア・スカーレット。フランの姉よ」

呆れを通り越して面白いと感じたようで小さく笑ったお姉様も自己紹介をした。

「よろしく、お・ね・え・さ・ま♪」

「やっぱり殺す！」

但し、二人の相性はそれほど良くなさそうだ。

妖怪と戦います！

妖怪と戦います！

Side 空

幻想郷に来てから一日が経過。

元いた世界に帰るまでは紅魔館にいてもいいと当主であるレミリアに許可を貰った。

今は借りてる部屋でフラン、ジバニャン、コマさん、ウイスパーと一緒に、龍神化の影響で疲れた体を癒すためにも寛いでいる。

「あ、そうそう。ウイスパーさ、フランに仕えてみない？」

「フラン様にですか？」

ウイスパーが俺に助けられて仕えたいと言っていたが、俺の世界だとジバニャンやコマさんはともかく、ウイスパーは明日奈がダメだ。もしかしたら他にもダメな子もいる可能性もある。

きつと俺の家に来るたびに閃光の突きが家に穴を開けていく。それを考えると、妖怪が普通にいる世界であるこの幻想郷でなら、問題なく受け入れてもらえるだろう。

「うーん、ですが……」

顎に手を当てて悩むそぶりを見せるウイスパー。

「もちろんウイスパーの意見は尊重する。俺でいいのなら、帰るときに連れてくさ」

「わかりました！」

もしも来ることになったら、明日奈の説得に骨が折れそうだ。

翌日、人間が住む里があると咲夜さんから聞いたので、散歩がてらに出かけてみることにした。

なんでも、「妖怪が人間を襲う」事が重要視されている幻想郷で、人間が命の危機をあまり感じずに生活できる数少ない地であるそうだ。

そう言った理由から妖怪であるフラン達は連れてきていない。

「ふーん、これが人里かあ……」

コンクリートで舗装されていない道。

俺の世界の家よりもかなり昔の和式住宅。

それに比べて思ったよりもハイカラな服装がちらほらと見かけられた。

「これだと目立つかな」

黒いパーカーにジーパン、アザゼルさんに貰った能力を隠すペンダント。

明らかにこの幻想郷では目立つ服装であろう。

現に周りの人々からチラチラと見られている。

散歩よりも服の調達を先にした方が良さそうだ。

「服屋は……どれだろ？」

幻想郷の文字が読めないわけじゃないのだが、ぱつと見で服屋とわかるものが無い。

「あんだ、どこから来たの？」

適当にぶらつきながら探そうとしたら、話しかけられた。

真つ直ぐな黒髪、茶色の瞳、肩と脇の露出をした巫女服姿の少女だ。

「この幻想郷とは別の場所です。異世界、とでも言えばいいですかね。いきなり連れてこられちゃって」

「外の世界……外来人ね。……いきなりってことはあいつの仕業か。

うん、事情はわかったわ。私に付いて来なさい」

「え？ どうして？」

「服、欲しいんでしょ？」

俺が服に困っていることを知って話しかけてきたわけか。

彼女と自己紹介をして森の入り口付近にあったお店に到着した。

瓦屋根の目立つ和風の一軒家だ。

「霖之助さんいる？」

「いるよ。今日は何の用だい？」

霊夢さんに名前を呼ばれた男性——霖之助さん。

銀髪のショートボブにアホ毛。金色の瞳、眼鏡。

黒と青の左右非対称の洋服と和服の特徴を合わせたような服装だ。

「この子供に服作ってあげてよ。外の世界から来た外来人らしくて」

「わかった」

霖之助さんと呼ばれた男性が随分あっさりと了承してくれた。

「お代は？ 俺お金持ってないですよ」

「大丈夫よ。ツケにしとくから」

あまり大丈夫な気はしないが、お金を持ってないのでここは彼女に感謝するべきか。

「完成したら呼ぶよ。それまで店の道具を見るなり、触るなりして時間を潰していてくれ」

「わかりました。お願いしますー！」

店に入った時に面白そうなものが色々店内にあることに気が付き、触りたくてうずうずしていた。それを分かった上で勧めてきたのだろう。

中にはガラクタにしか見えないものもあるが、興味をそそられる。

早速、俺の右側にあった棚に並べられた手鏡を手に取った。

「えっ？ 十香？」

『空!』

初めは自分の顔が鏡に映っていたはずなのに、キラリと光ると見慣れた十香の顔が映った。

『今どこで何をしているのだ!? 二亜の天使でもわからなくて皆心配しているんだぞ!』

「えっと、幻想郷っていう場所にいる。フランの住む世界なんだよ。それから……今は服を作ってもらってるところ」

『体は大事ないか!? 風邪とか病気になってないか!? 出会った女にフラグ建てたりしてないか!』

「最後のはちよつとよくわかんないけど、すこぶる元気。そっちは元気にしてる?」

『空がいなくて皆元気どころではない! 私なんか昨日のご飯を五杯しかおかわりできなかつたんだぞ!』

異常な量に聞こえるが十香にしては少ない方だ。

『……いつ戻ってくるのだ?』

「ごめん。わかんないや」

紫さんに会うことが出来ればいいのだが、どう探せばいいのかわからない。

『むう……。いや、唸っていても仕方がない。出来るだけ早く戻ってくるのだぞ！ いいな!? でないと私達から——』

「あれ？ と、十香!? ……消えちゃった」

十香に最後まで言わせることなく、俺の顔を映すだけのどこにもある普通の鏡に戻った。

どうやら時間制限のある道具みたいだ。

もう一度十香と会話したいのだが、この道具の発動条件がわからない。

持ち帰りたい気持ちが無いわけではないのだが、お店の商品であるものを持ち出すわけにはいかない。買うためのお金もないので潔く諦めるべきだ。

十香の顔が見られただけでも良しとしよう。

そう自分に言い聞かせて手鏡を元あった場所に戻した。

それから約一時間、色んな道具を見ていると霖之助さんが俺を呼んだ。服が完成したみたいだ。

「これが君の服さ」

手渡されたものを早速着てみた。

黒い長袖のシャツの上に、フードの付いた青と白のツートンカラーの武道着のようなもの。下は足首辺りまであり、上に合わせた色合いでゆったりとしたもの。動きやすそうな黒い靴となっていた。

とても一時間で作れるとは思えない出来栄だ。

「どうだい？」

「ピツタリです！」

最後に青いリストバンドと帯を締めるとなんだかいつにもまして気合が入った。

「へえー、まあまあ似合ってるんじゃない？」

「えへへっ、ありがとうございます」

服を作っている間どこかに行っていた霊夢さんがいつの間にか戻ってきていた。

褒められて悪い気はしないよね。あとでフランにも見せよつと。

「霖之助さん、ありがとうございます。それから霊夢さんもここまで案内してくれてありがとうございます」

「気に入ってもらえて何よりさ」

「今回はただの気まぐれよ」

これで問題なく歩けるようになった。

「服は手に入ったわけだけど、お次はどうするの？」

香霖堂で服を手に入れて出たが、霊夢さんはまだ行動を共にするみたいだ。

「これで目立つことはないみたいなので、里の散策か他の場所にも行こうかと。どこかい場所ありますか？」

「そうね、それなら神社に来る？ 博麗神社って行って、私そこで暮らしてるの」

博麗神社。名前を聞いただけでも霊夢さんに関りがあるのはわかる。

知らないところに一人で行くのと知ってる人が一緒にいるのでは大分違う。

彼女の提案に賛成して付いて行くことにした。

「距離があるから飛んでいくつもりだけど、空は飛べる？」

「飛べますよ」

「じゃあ、行くわよー！」

勢い良く飛び出した霊夢さんを追いかけるようにして、俺も黒い龍の翼を広げて飛びあがる。

霊夢さんの隣に並ぶと驚いた表情をしていた。

「——っ！ なるほどね……。あんたがああの力の正体ってわけね」

「あの力？」

「昨日、神様の力を感じたわ。この幻想郷では今までにないものよ」

龍神化の力が幻想郷中に伝わってしまったのか。

「このままだとヤバかったりします？」

「ううん、問題ないわ。幻想郷には神様はたくさんいるから今更知らない神様が増えたところで気になるわけがないもの。……あー、で

も、人間に知られると信仰の対象になるかもね」

それを聞いて少しだけ安心した。

要は顔を人に知られなければいいということだ。

目立っていたのはさっきのみだからこのまま大人しくしていよう。

「ここが博麗神社よ」

数分かけて神社に到着。

山の中にあるせいで妖怪の気配が多々ある上に、通りにくい道。人が参拝に来るには不向きな立地だと思う。

ただ境内は綺麗に掃除されていて、幻想郷が一望できるという点では概ね高評価を得られるのではないだろうか。

「ここはどんな神様が祀られるんですか？」

「さあ？」

いや、さあ……って。巫女だというのにそれでいいのかな。

「この神様の知名度が低すぎて誰もわからないの。………ねえ、空ってさ、神様なわけじゃない？」

「らしいですね」

自分でも今一よくわかっていないが、彼曰く神様で間違いないそう  
だ。

「この神社の神様にならない？」

「それはダメです」

「えー？ どうしてよー？ いいじゃん！」

「だってこの神社にはもう神様がいるじゃないですか。それなのによ  
そ者の俺が祀られたらその神様が可哀そうです。それに俺がいるべ  
き場所はここじゃないですから」

「うわー、真面目ー。まあ、いいわ。気が向いたらいつでも歓迎してあ  
げるわ」

「はい。あ、そうだ。霊夢さんよりも前の博麗の巫女で善悪関係な  
しに妖怪を片っ端から封印するような人いました？」

「片っ端から封印した？ ごめんなさい。先代の巫女については詳し  
くないの。神社が何回か焼けちゃって記録みたいなのは全くないか  
ら調べようもないわ」

元から望みは薄そうだったから落ち込んだりはしない。

知ったところでその先代の巫女に何かできるわけでも無い。

「今日はありがとうございました」

「ええ、精々感謝してこの神社の神様になってちょうだいね」

「それとこれとは話が別ですから！」

意外と俺を祀る気満々の霊夢さんとお別れする――

『！』

はずだったが、禍々しい力が発せられた方向に二人同時にバツと振り返った。

「あっちの山の方からです」

「みたいね」

分厚い雲が空を覆っていく。

――この感じ……間違いなくあいつだ！

出かける際に持ち歩いていた未開封のガシャポンの玉が妙に真剣な声音だ。

「……こつちに向かってきてる？」

「でも、その前に紅魔館や人里を通ります！ 急いでいかないと！」

「ええー！ かつ飛ばしていくわよ！」

龍の翼を広げて飛び立った。

S i d e o u t

S i d e フ ラ ン

な、なんなのこの力！

空に置いてかれたことを不満に思いながらふて寝をしていたら、紅魔館のどこかで爆砕音がした。

強力な力ではあるが空の龍神化したときとは正反対で禍々しくて気味が悪い。

「レミリア様のところに行きましょうー！」

パニックになりかけた私はウイスペアの提案に頷いて、ジバニャンとコマさんを抱えてお姉様のところに向かった。

「お姉様！ この力——え……？」

目の前の光景に自分の目を疑った。

恐らく幻想郷で五本の指に入る実力を持つであろうお姉様が、青髪の青年の足元に倒れていた。

周りには咲夜や美鈴、パチュリーと一緒に倒れていたのがすぐにはわかった。

怒りに任せて攻撃したところで私では敵わないとすぐに悟る。

「まだ他にもいたのか。なあ、そこのお前」

私に気が付いた青年がこちらに目を向けずに話しかけてきた。

「な、なによ」

「博麗の巫女がどこにいるか知っているか？」

博麗の巫女……霊夢のことね。こんなヤバそうなやつに教えてたまるもんですか。

「知らないわ」

「そうか。なら、お前も——」

「お待ちください、カイラ様」

カイラと呼ばれた青年がこちらに手を翳すと不気味な力が手に集まる。だが、魔女のような格好した女性が遮った。

理由はわからないがとりあえず助かったみたいだ。

「なんだ？」

「その者には心に闇があります。利用してもよろしいでしょうか？」

「はあ？ 私の心に闇、ですって？ 適当なこと抜かしてんじやないわよー！」

青年程の実力が見られない女性なら勝てると判断し、炎の剣——  
レーヴァテインで斬りかかる。

「ふふ、あなたは目を背けているだけ。——さあ、堕ちなさい」  
「うっさいー！」

「ごちゃごちゃ言っている間に女性を斬った。  
消えた!？」

しかし、斬った瞬間に靄のように消えてしまった。

「いちぢですよ」

いつの間に……！

女性が音もなく背後に現れた。

何かしてくるかと思構えたが何もしてこない。

疑問に思いながらも斬るがまたも消えてしまう。

「あなたはすでに私の術中ですよ。さあ、自分を解き放ってしまいなさい」

「わけのわかんない事ばっか言っつて——」

突如頭の中に流れ込んでくる声があった。

——壊シマシヨ。

——目ノ前ニアルモノ全テ。

——アナタハ忘レテイルダケ。

「ちがう……！ 違う違う！ 私はそんなことしない！ もうしな  
いって決めたの！」

——何モ違ワナイ。

——アナタハ何モ変ワツテナイ。

——サア、破壊シタイ衝動ニ身ヲ委ネテ。

——アナタノ大切ナ人ヲ傷ツケタ奴を壊シマシヨウ。

その言葉を最後に私の意識は途絶えたのだった。

S i d e o u t

S i d e 空

全速力で飛んで紅魔館に到着。

争った形跡があり、館の周囲にはたくさんの妖怪達がいた。

そこには門番である美鈴さんの姿はない。

「あんた達の目的はなに？」

「幻想郷の支配だ」

霊夢さんの質問にあの時の赤い猫が答えた。

「はあ……呆れた。いいわ、全員ぶっ飛ばしてあげる！」

霊夢さんの砲撃を合図に戦闘が始まった。

煌きの龍神です！

煌きの龍神です！

Side空

数えるのも億劫になる程の妖怪の群れに霊夢さんが砲撃を放って戦闘が始まった。

龍神化を使えばここに居る妖怪達を一気に片付けて、すぐにでもフランの下へと行きたいがまだその時ではない。

レミリアとの戦闘での疲労は完全には回復しておらず、それにこいつらの親玉がまだ姿を現していないからだ。

「獅子王の戦斧！ レグルス・ネメア 黒刃の狗神！」

体力の消耗を抑えるために考えた結果、独立具現型の神 せいせいクリッド・ギア 器を出して金の獅子に跨り、黒い犬を刀にして戦うことだった。

「ガオオオオオオッ！」

『ッ!』

いきなり現れた獅子王の戦斧の咆哮に一步後退る妖怪達。

「逃げたい奴は逃げて」

戦闘を避けるためでもあるが、妖怪だからと言ってむやみやたらに殺すつもりはない。中には戦いが嫌いな妖怪もいるだろうし、彼らもこの世界の住人であることに変わりはないのだから。

『う、うわあああああああッ!』

獅子の咆哮が余程効いたのか、大勢の妖怪が一斉に背を向けてあらゆる方向に散らばっていく。

残ったのは半分ほど。どれも強そうだ。

「……腰抜けどもめ。だが、カイラ様の見立て通りか」

先頭にいる赤い猫が逃げた妖怪達を見て呟いた。

カイラ？ 様をつけるといふことはそいつが親玉？

「ちよつと空！ いつまでも突っ立てないであんたも戦いなさいよ！」

霊夢さんの怒鳴り声上空から聞こえてきた。

俺が考えてる間にも砲撃を放ちながら他の妖怪を倒してくれてい

ただ。

「しつかり掴まってくさい、空」

「うん！ さっさと倒してフラン達に合流しよう！」

獅子王の戦斧が赤い猫に向けて駆け出した。

対する赤い猫は両手を広げ、腰を落として構える。

受け止める気か！

「フンッ！」

金の獅子と赤の猫が激突。

受け止めた方が勢いに押されて地面を抉りながら後退していく。しかし、徐々にその勢いが弱まり止まった。

「ウオオオオオオオオオオオオオッ！」

赤い猫が叫びながら獅子王の戦斧を持ち上げた。

体格差ではこちらが勝っているのにそれを跳ね除ける程の馬鹿力。

投げる気!?

「黒刃の狗神！」

投げられる前に手元の黒い刀の形状を赤い猫に向けて長く伸ばす。

——カキンッ！

まるで金属と金属がぶつかり合うような音を立てて黒い刀は弾かれた。

鋼鉄すら切断できる力を持つてる黒刃の狗神の刃が貫けない。そんな予想だにできなかったことに驚いてしまい、大きな隙を作ってしまった。

「フンッ！」

「うわわっ！」

攻撃が予期せぬ形で防がれたことで獅子王の戦斧とそれに跨る俺が宙に放り投げられた。

獅子王の戦斧が空中で無理矢理体を捻って体勢を立て直そうとするが、筋肉達磨の見た目に反しての素早い追撃。両手を組んでのアームハンマーで空中から一気に地面に叩きつけられた。

「……………どうしますか、空？」

よろよろと起き上がって赤い猫を見る。

鋼鉄をも超える硬さ。金の獅子を吹き飛ばす力。おまけに素早さもかなりある。

弱攻撃を繰り返しても蚊に刺される程度のダメージだろし、かと言って強大な攻撃を使っても避けられるのが目に見えてる。

そうなるなら倒すには負担の大きい禁バランスタンブレイカー手か龍神化以外に手はない。

……………。

「というかさ、一々神器名言うの面倒だから二人に愛称付けよつか」

「こ、この状況で、ですか…………？」

「むしろ、こういう状況だからだよ。戦闘中に噛みそうじゃん」

「…………空がそう言うなら私は反対しません」

「じゃあねー、レグルスと剣ケ！ それでどう？」

安直というかほぼそのままの愛称ではあるが、この方が呼びやすいと思うだ。

「ふむ、レグルスですか。神器の名前が短くなっただけですが悪くないです」

「ワン！」

人語を理解することは出来るが話すことが出来ない黒刃の狗神改め剣が嬉しそうに吼えた。

「よおーし！ いっちよあの赤猫ぶつ飛ばしてやりますか！ 剣、お願い！」

手始めに剣を単独で突撃させる。それに続いて俺も駆け出す。

剣の攻撃では斬れないとわかってる赤い猫は当然俺の方を警戒するだろう。

「剣刃形態！」  
ソードフォーム

剣が黒い刀と化して俺の手に収まる。

美鈴さんとの戦いでも使った相手の不意を突く戦法だ。

「せやあつー！」

高く掲げた刀を頭から振り下ろす。

「悪くない手段だが、最初に刀にしていたのを見せたのは間違いだな」  
しかし、鋼鉄をも超える肉体が刀を止めた。

素早く刀を引いて、再び切り付ける。

「無駄なことを……」

呆れ気味に呟く赤い猫を無視して何度も何度も斬る。

……このままだと体力を無駄に消費するだけか。

何度も斬つていれば敵の弱点でも見つかるかと思つたが、それは早計だった。

俺に振るつてきた拳をバックステップで躲し、高く跳びあがる。

「剣！」

俺の声に反応した剣が赤い猫の足元から黒い刃を何本も出す。

バックステップをした時に地面に投げ捨てていたのだ。

効かないのは百も承知。目的は相手を浮かせるため。

貫けない刃が赤い猫を上空に押し上げた。

「レグルス！」

「はい！」

今度はレグルスも跳びあがり、俺と赤い猫の間に入った。

そして、身体を丸めたレグルスが変形。巨大な獅子の足となった。

それを俺が上から踏みつけるようにして赤い猫へと落下。

……あ、ちよつとズレそう。

このままでは当たらずに終わってしまう。

そんな最中——

「マスタースパークツ！」

どこかで聞いた声とともに後方から虹色の砲撃が赤い猫に直撃。

威力調整がされていたのか、赤い猫の位置を当てられる範囲内にまでズラしてくれた。

これならいける！

「レグルス・インパクト獅子王の地砕きッ！」

「グ、オオオオオオッ！」

即興で考えた必殺技名を叫びながら赤い猫を踏みつける。

赤い猫が抵抗するが空中ではどうにもならないようだ。

そして、踏みつけたまま地面に落下。

あまりの威力に激しい砂埃と爆発が発生。俺達を中心に巨大なク

レーターが出来上がった。

レグルスから降りるとレグルスも元の姿に戻った。

そのすぐ傍には完全に意識を失った赤い猫の妖怪がいた。体がいくら頑丈でも脳はそうじゃない。

「なんつー、威力だよ。ビツクリだぜ……！」

先程聞いた声の主が俺の傍に来た。

「魔理沙、さっきの砲撃ありがとう」

「あんくらいいいってことだぜ！ それよりもこの状況は一体……」

「わからない。急に現れたんだ。つて、それよりもフラン達のところに行かないと！」

「なら、ここは任せて先に行くといいぜ」

「い、いいの？」

「ああ。この程度の数なら霊夢と速攻で片付けられる」

「……わかった。レグルス、魔理沙のことサポートしてあげて」

「かしこまりました」

念のためレグルスを残して紅魔館へと走り出した。

「ここは通さねえぜ！」

残っていた妖怪が立ちはだかる。

「おっと。そいつの邪魔はさせないんだぜッ！」

いくつもの流れ星が敵を撃ち抜いていく。

魔理沙の援護だ。

しかし、それでも敵の数が多い。

「——龍神化！」

一々相手にしていられない。一気に駆け抜けるために龍神化を使つて周りの敵を吹き飛ばしながら突き進んでゆく。

幸いなことに赤い猫のような硬さの妖怪の中にはいなかったおかげで紅魔館まで一気に行けた。

待つて、フラン！

S i d e o u t

S i d e ???

空と霊夢、妖怪達の戦いを遠くで見ているものがいた。

桃色の髪と藍色の浴衣。そして、特徴的なのが天に向かってピンと立つ獣耳と腰から生える大きな尻尾。年頃は空と同じくらいの幼い少女だ。

「あの殿方の魂は不思議ですね……」

彼女の基準からすれば彼の魂がイケメンなのは間違いない。間違いないのだが今までに見たことのないタイプの魂だったのだ。

戦闘前はまるで澄み渡る蒼天の如し綺麗さ。いざ戦い始めると黒と金の輝きを放ち始めた。

そして、その少年は今では戦闘を終えて走っているところなのだが、最初よりもより強くて鮮明な輝きになった。

「ウフフ、ご主人様候補見つけちゃいました♪」

少年——空を目だけで追いながらそんなことを呟いたのだった。

S i d e o u t

S i d e 空

紅魔館に入ってフランを探し始める。

フランの部屋、書庫、中庭。手当たり次第に探してみたが、どこにも見当たらない。

あと探していない場所はレミリアのいた場所くらいだ。

——恐らくここだ。すげー嫌な予感がする。気を付けろよ。

ガシャポンの中にいる奴の言葉に頷きながらゆっくり部屋の middle に入る。

「フランー！」

捜していた人物はレミリアがふんぞり返って座っていた玉座に座っていた。

「ようやく来たのね！」

彼女の方も俺に気が付くと笑顔で寄って来た。

「よかった。無事だ——え？」

彼女が抱き締めてと言わんばかりに抱き着いてきたので俺も抱き締め返そうとしたとき、鉄の味が口の中に広がった。

「ゴフツ」

口から出たものが床に飛び散った。それは赤い血だった。

何が起こったのか頭の整理が追い付き始めると同時に腹部が徐々に熱くなってくる。

視線を落とせば、お腹を炎の剣で貫かれていた。

「フ、フラン……？」

どういうこと？　なんでフランが俺を攻撃してるの？

「アハハハハ！　会いたかったわ！　——私の大切な人達を壊したお前を壊してあげる！」

ドス黒い魔力を纏いながら俺の腹の中で炎の剣をグリグリ弄り回す。

「グ、アツ……！」

炎の剣で抉られた痛みが考える暇を与えない。

「ほら、ほら！　壊れちゃえ！」

「それ以上はやめるニヤ！」

「キヤツ！」

どこかに隠れていたジバニヤン、コマさん、ウイスパーが体当たりして俺からフランを引き剥がした。

フランの手から炎の剣が消えたおかげで腹部への痛みが和らぐ。ただ完全に貫通しているので押さえていないと血が止まらない。

今は魔力で無理矢理止血しているがちよつとでも気を抜けばすぐにでも溢れるだろう。

「イタタ……ありがと……ジバニヤン達」

「そんなことよりも空君は大丈夫ですか!？」

「なんとか」

「ここは逃げましょう！」

「それは厳しいかな……」

ウイスパー目掛けて放たれた魔力弾を手で弾く。

「向こうは逃がすつもりないみたいだから」

「で、ですが……！」

「ダイジョーブ。すぐに終わらせる。安全な場所に隠れてて」

フランは『私の大切な人達を壊したお前を壊してあげる』と言った。どうやら、フランの中では俺がレミリア達を痛めつけたことになってるようだ。

こりや、しんどい……。

ジバニヤン達の様子から考えて目の前の人物がフランの偽物という線はないと思う。操られてると考えてよさそうだ。

これでフランの本心だったら泣きそうだなあ。うん、確実に凹みはする。

——俺が代わるか？

「ううん。自分でやる。友達のことだからね」

——そーかい。なら見守るさ。

「君の出番はカイラとか言うやつと会うときだ」

——！ お前気付いてたのか？ 俺とアイツの関係に。

「なんとなくだよ。カイラって名前が出た時動揺してたみたいだから、もしかしたらーって思ってる」

——……悪いな。

「お互い様だよ」

ガシャポンをジバニヤンに預けてから聖剣と魔剣を作り出して構える。

「フランの目、覚まさせないとね！」

時間的にも体調的にも余裕がない俺はフランに速攻を仕掛けた。

戦闘に思考が割かれるので止めていた血が少し出るがお構いなしだ。

「今度こそ壊してあげるー！」

もう一度炎の剣を作り出し、斬りかかって来る。

三か月前に何度も弾幕ごっこをしたのだからフランの戦い方くらい覚えてる。

それはもちろん向こうも同じだが、今の俺には龍神化がある。まだ不完全ではあるもののそれ以上の手も。

つつても、そんな余裕が、ないっ！

これは今までのような弾幕ごっこではなく殺し合い。俺にその気がなくとも向こうはやる気満々だ。

しかもさっきの不意打ちが結構きいてる。見聞色の覇気で何とかなっているが、痛みの所為で動きが鈍い。反応が少しずつ遅れて炎の剣で肌が焼かれていく。

「……壊れろ、壊れろッ、壊レロ！——禁忌『カゴメカゴメ』！」  
フランが魔法陣を展開すると手のひらサイズの魔力弾が俺の動きを阻害するように四方八方に綺麗に並べられる。

この技はその場を動かなければ当たることもないのだが、相手が動けないという隙を逃すはずがない。

手に大きな魔力弾を作って放り投げてきた。しかも連続でだ。

「うおおおおおおおっ！」

気合一閃。

腹部から奔る激痛を誤魔化すように叫びながら魔力弾を斬る。

「へえー、やつぱり全部斬るんだー。うん、私の予想通り♪」

魔力弾で包囲された隙間から見えたフランの顔は、狂気さえなければ俺の知る笑顔だった。

「今の体力じゃこれは躲せないよね？ 禁忌『フォービドウンフルーッ』！」

最悪……！！

内心で舌打ちする。

さっきの『カゴメカゴメ』は綺麗に配置されていて動く必要はそこまでなかったが、この技は回避するのも武器で捌ききるのも万全の状態であっても厳しい。ちなみに守るのは不可能。実際にやってみた経験はあるけど十秒もしないで突破された。数の暴力恐るべし。

『ほれ、さっさと使え。出し惜しみして後悔する羽目になるぞ』  
わかっている。

聖剣と魔剣を消して体から力を抜く。

「あら？ 諦めちゃった？」

「違う。舐めんな、龍神の力を！」

——煌——  
「龍神化！」

S i d e o u t

S i d e ???

「むっ！… また魂が……」

こっそりつけていた少女は少年と少女戦闘を見ていた。

少年が360度魔力弾で囲まれてピンチになったとき思わず助けに行こうかと考えたが、彼がご主人様に相応しいかどうか見極めるためにも見守ることにした。

それも理由だが、一番の理由は彼の魂が全く輝きを失っていないからだった。

「——煌龍神化！」

少年が叫んだ瞬間、蒼かったはずの魔力が赤く、朱く、紅く染まっ  
ていく。

そして、紅蓮の炎が身を包み龍へと姿を変える。

やがて炎が弾けるとかの少年は姿を現した。

黒かった髪は真紅に染まり、さつきまでは無かったはずの水晶のよ  
うに透き通った蒼い角が生えていた。

さらには背中には髪と同色の大きな二枚一对の翼と尻尾、黄金の光  
輪があった。

「あの姿、まさしく……」

まさしく——太陽そのものだった。

S i d e o u t

S i d e 空

変身を終わるとすぐに右腕を振るう。

それだけで周囲を囲っていたはずの魔力弾全てが燃え尽きた。

「な、なによ！… なんなのよ、その姿！」

「本来の力。全然使いこなせてないけどね」

今の状態だと一分も持たない。だが、ほんの数秒あれば十分だ。

右手に力を集めてフランに向けて伸ばすと巨大な炎の手をとって驚掴みにした。

俺の方に引き寄せて空いてる左手で握り拳を作る。

「や、やめ……！」

「いい加減、目え覚ませつての」

引き寄せた反動を利用して殴る——と見せかけて額にデコピンをしてやった。

デコピンをした箇所から橙色のオーラがフランの体を包み込み、ドス黒い色をした魔力が弾け飛んだ。

憑き物が落ちたかのようにすっきりした顔で倒れ込むフランを抱き締めて横たわらせた。

それと同時に龍神化が解け、一気に疲労感と刺されたダメージがやってくる。

ボロボロの床に大の字になって倒れる。完全にガス欠状態だ。

『よくやったな。偉いぞ』

うん。しんどかったけど頑張った。

「ゲホッ！ ゲホッ！」

口から大量の血が溢れる。立ち上がる力はもうないし、目が霞んで焦点が合わない。

「空！」

ジバニヤン達が慌てて駆け寄ってくる。

「……フランは？」

「寝てるズラ」

「……そっか」

フランが無事であることに安心したら眠くなってきた。

俺の能力が効いていれば恐らく無事助かるはずだ。

「空君、寝ちゃダメです！ このままだとあなたが！」

ウイスパー、言われなくともわかってる。でも、どうしようもなく眠いんだ。

——急いで助けを呼べ！ それかあの時を止めるメイドを叩き起こせ！

ガシャポンの中にいる奴が必死に叫ぶ。

咲夜さんだつてケガをしてるのだから無理に起こさなくてもいい。

「早くしないと空が、空が……！」

ジバニヤン、大丈夫だつて。俺はこんなところで死ねない。死ぬわけにはいかない。

そんな強がりの一つでも言いたいけど口は思ったように動かない。

ホントにヤバいな、これ。

彼が何も言わないことを不思議に思ったが、それを考える時間はない。

ゆつくりと瞼が落ち始める。

「その魂、ちよおくくくつと待った！ 暫く、暫くう！」

意識が無くなる直前、霞む視界で捉えたのは桃色だった。

フランと仲直りします！

フランと仲直りします！

S i d e フ ラ ン

私にとって龍神空という少年はとても大切な存在だ。

自分の口からはつきり友達だと胸を張って言える。

例えるならすべてを受け止めてくれる青空。

吸血鬼という体質上、あまり見たことはないがお日様というのも似合うと思う。

でも、

——そんな彼を私は手にかけて。

変な女の能力に掛かってから、私は激しい破壊衝動に駆られた。

目の前にあるものを全てを壊さなくちゃ気が済まないほどだ。大切な空でさえも壊したくて仕方がなかった。いや、あの時の私は空を見て、大切だと感じてはいなかった。ただ壊すべき対象としか思わなかったのだ。

あの女は私の心に闇があると聞いていた。

口では否定していたけれど、心当たりがないわけじゃなかった。情緒不安定。

昔から自分でも抑えようのないものだった。

だからお姉様達からは遠ざけられていたし、部屋に閉じ込められていた。自分から出ようなんて気も起らなかった。

異世界で彼と出会ったときにも、何でもないようなときに無性に何かを壊したいと思ったことがあった。

その時は体を張って空が止めてくれた。

正気に戻った時に傷付いた空を見て罪悪感に苛まれた。

体中傷だらけなのに「気にしないで」って無理して笑う彼を見て余計に胸が苦しくなる。

時間が経つにつれて少しずつ和らいでゆくが、完全には消え去らな

い。

心の奥で今もあり続けているのだ。

もう二度とあんなことはしたくない。大切な空を傷つけない。そう思う度に自分の心を強くしようとする。けど、その度に彼の優しさに甘えようとする醜い私があった。

空なら私を助けてくれる。空ならいくら傷ついても私を見捨てたりしない。

優しい彼のことだから、私が助けを求めれば、いや、求めなくともきつと助けてくれることだろう。

頭の中で同じことを何度も何度も繰り返して考える。そんな私の弱さが、また空を傷つけることになった。

「……空……ごめんなさい……ごめんなさい……っ！」

私の状態が元に戻ってから数時間後、布団に横たわる傷だらけの空を見て謝る。

「フラン様は何も悪くないですよ！」

「そ、そうズラ……」

「悪いのはあの変な女だニヤ！」

「……それでも、私が空を傷つけたことに変わりはないの……」

「ええ、そうですね。あなたが彼を傷つけたんです」

部屋に入って来たのは桃色の髪色の妖怪だ。

年齢はともかく見た目は私や空と同じくらい。

ジバニャン達から聞いたが、彼女が空を助けてくれたらしい。ついでに倒れていた私やお姉様もだ。

彼女が手に持っていたのは空の服だ。

戦闘の際に私がボロボロにしてみました。彼女が直してくれたよ。うだ。

自分でも理解しているが他人にこうもはっきり言われると心に来る。

「でも、フランだって空を傷つけたくて傷つけたわけじゃないのニヤ

！」

「私は事実を述べたまでです。それよりもそこをどいてください。看病の邪魔です」

「そ、そんな言い方しなくても——」

「ウイスポー！」

私が声を張るとウイスポーは体を震わせた。

「彼女の言う通り私達に出来ることはないの。行きましょ」

「っ！ わかりました……」

納得のいかない顔をしたジバニャン達を連れて部屋を出た。

「私のために怒ってくれてありがとう」

誰にも顔を合わせずそう呟いたのだった。

S i d e o u t

S i d e 空

「……………」

冷たい何かが額に触れて目が覚めた。

目を何度か擦り、周囲を見渡す。

ここは木造の家かな？ んー、全く知らない場所だ。

そしてすぐ傍に桃色の髪をした少女がいた。

狐耳に露出の多い藍色の巫女服。

他には誰もいないことから彼女が倒れた俺を看病してくれたと考

えてよさそうだ。

視界が霞んでたから朧気にしか覚えてないけど、気を失う前に見たのはこの女の子……だと思う。

「君が助けてくれたってことでいいのかな？」

「はい、そうですよ♪」

「そっか。ありがとう。おかげで助かったよ」

「いえいえ、これも良妻狐として当たり前のことですから」

良妻？ 誰かの奥さんってことか。俺と同い年位の見ただけで、人……というか妖怪は見かけによらないんだね。

「ところでお体の方はどうですか？」

そう言われて思い出した。

俺、腹刺されたんじゃない！

いつの間にか着替えさせられていた服を捲くり、傷口を確認する。包帯でぐるぐるに巻かれていたが触った感じほぼ塞がっていると見てよさそうだ。

「あれ？ 問題なさそう……。君、凄いな！ あんな傷だったのにもう塞がってる！」

「確かに私は治療を施しましたが、あの場では応急処置程度のものでした。その後は私が何もせずともものすごい回復力で勝手に癒えていったのです」

「ってことは俺の体は徐々にそういう体になって来てるわけだ。いや、戻ってるの方が正しいか。」

「あなたは一体何者ですか？」

似たような質問を何回もされた。

今までは転生したと答えればそれで良かったが、最近ではそれも変わり始めた。

「元人間の龍の神様ってとこかな」

三か月前のこと。

数日の間だけ俺が俺じゃなかった時間があった。

アザゼルさんの作った若返りの銃で俺は五年前の姿に戻されたのだが、俺が転生したのは四年前。それ以上前のことは何も覚えていない。

結果的に若返りの光線を浴びて現れたのは転生する前の俺だったのだ。

何故姿が戻っていたはずの俺がそんなことを知っているのか、その理由は実に単純。

桜木遥が俺宛に手紙を残していたのだ。

詳細は省くが、書かれていた内容は自分の素性と力、そしてとある

約束についてだった。

その手紙を読んだ日から俺は一度自分の精神世界に潜り、いるはずの彼を探した。

そして見つけた。

以前ドライグ達が現れたと言っていた扉の向こうに彼はいたのだ。

『一応、初めましてかな。自分に言うのもなんか変な気分だけど』

なんて前世の自分と話すという不思議な体験をした日から彼と日常的に会話が出来るようになった。

「っ!? フランス・ブレイカー 禁 手が……!」

とある日の修行の際に発覚したことがあった。

それは禁手を使った途端に体に激痛が走る現象が起きた。

『本来 セイクリッド・ギア 神 器 っつのは人間が使う力なんだろう？ だったら人間じゃないお前が使ってダメージが入るのも考えられないことじゃないと思うんだ』

そこで俺は全部の神器で同じなのか調べるために一通りの神器を使うことにしてみた。

調べた結果、大なり小なりではあったが痛みが発生したのは神滅具 ロンギヌス の禁手を使った時だった。

でも、ついこの間までは問題なく使うことが出来た。それなのに急にこんなことになるのかな？

『神滅具っつのは神を滅ぼす可能性を秘めた神器。つまり、神格のあるお前が使うっつことに神器のシステムが異常だと判断したから、と考えるべきじゃないか？』

ううん、それだったら最初から使えないはず。

あ、でも俺に最初から神格はなかったと考えれば遥の推理に筋は通る。

となると……自分が何なのか理解したからなのかな。

これまでも自分が人間じゃないと思うことはあったけど、心のことかでは自分は人間だって思ってたからさっきのような異常はなかった。

徐々に力が上がってる、というよりも桜木遥としての本来の力が戻

りつつある。

『神器がまともに使えないならお前<sup>俺</sup>本来の力を教えてやるさ』

そこから神器の修行よりも龍神の力を使いこなすための修行が始まったのだった。

「龍の神様……ですか。ということは、寿命は妖怪並みに長いはず。一緒にいられる時間は長い！」

少女は顎に手を当てて考え込む仕草をしながら呟いた。ついでに小声の部分もはつきり聞こえた。

この子、俺と一緒にいたいのか？ あ、友達になりたいのか。

「そう言えば自己紹介まだだったね。俺は龍神空。気軽に空って呼んで」

「ご挨拶が遅くなり申し訳ありません。私のことはタマモとお呼びくださいませ、ご主人様♪」

「ご、ご主人様？ そんな畏まらなくても空で全然——」

「いいえ、全然よくありません！ ご主人様に譲れない何かがあるように私にだってあるのです！ その一つがあなた様をご主人様とお呼びすることなのです！」

一つってことは他にも何かあるのね。

なーんかめんどくさそうな子に出会ったなあ……。

「うん、普通にごめん。そういうのは他のヒトに当たってください」「まあ！ なんてことでしょう！ 私は必死にご主人様をお助けしたというのに褒美ももらえないのですか？ ああ、強請っているつもりは全然なくてですね？ でもでもお、やっぱり頑張ってお助けした分なにかお情け的な何かを貰いたいなーって思う私もいますー」

なんだろう、この子が美少女じゃなかったら今の言い回しにイラつときて殴ってたかもしれない。

はあ……。確かに助けてもらったのは事実だし、お礼をしないのも失礼か。

「わかった。呼び方は任せるよ。……とところでフランやレミリアのこ

と知らない？ 俺のすぐそばに倒れてたと思うんだけど。つてか戦いは!? 今どんな状況!? 俺が倒れてからどのくらい時間が経った!？」

タマモとのんびり話している場合ではなかったことに気が付いた。妖怪の大群を霊夢さんや魔理沙に任せっきりで、俺はフランと戦って意識を失ってしまった。

ここが戦いの場から離れているのか、特殊な場所や結界でも張られているのかはわからないが、近くで戦闘している様子はない。

「わわわっ！ 一旦、落ち着いてくださいな。私の知る限りではあります。順を追って説明させていただきますから」

まくし立てて質問する俺を宥めながらタマモは語ってくれた。

「まず、フランさんと赤い猫さん達は近くに居ます。レミリアさんという方は存じ上げないですが、ご主人様のお傍にいらつしやった方々でしたら一緒にここに運んで休ませています。治療も済んでいますのでご安心を」

とりあえずフランやレミリア達が無事と聞いて一安心だ。

「戦いの方ですが、ご主人様が倒れてからおよそ二時間程です。私が見た限りではありますが、博麗の巫女とその仲間さんは大量の妖怪達相手に苦戦を強いられている様子はありませんでした。今頃妖怪達が野原の上で白目向いてるんじゃないですかね？」

うわーお……あの少人数で無双したのね。霊夢さん達強すぎでしょ。

「……敵の親玉も倒れた？」

「親玉、ですか？」

タマモには心当たりがないのか首をかしげる。

その様子だと霊夢さんに倒されたか、レミリア達と戦ってからはどこかに移動していたか。

「人里の方にも被害はなし。……カイラの目的は一体……」

ここで考えていても答えは出なさそうだ。

それなら、霊夢さん達と一刻も早く合流してもっと詳しい情報を手に入れないと。

「タマモ、俺——」

「わかっております。ご主人様はまた戦いに赴く気なのでしよう？  
本心で言えば行つて欲しくありませんが、どうせ止めたつて聞かないで  
しようから」

「あはは、ありがと。……あ、でも、その前にフランに声かけないと」  
「……あの吸血鬼はご主人様を傷つけたのですよ？　それでも会いた  
いと？　また襲い掛かつてこない保証はどこにもございせんよ？」  
「それでもいいさ」

「……何故、でしょうか？」

タマモが俺を見定めるようにジツと見つめてくる。

「——大切な友達だからさ、ちゃんと仲直りしたいんだよ」

「……………そう、ですか。そこまでのお覚悟があるなら私はこれ以上  
の口出しは致しません」

タマモが修繕してくれた服に着替えて、フランの気配を探る。この  
家の外にいるようだ。

襖を開けて外に出る。

竹林に囲まれた場所にこの家はある。

割と隠れ家的な場所？

部屋を出てしばらく歩くと、フランとジバニャン達が川の近くの大  
岩の日陰になつている部分の上に座つていた。

「おはよう、フラン、ジバニャン、コマさん、ウイスパー」

『空（君）!?!』

近づいて声をかけるとフラン達が一斉に振り返つた。フランだけ  
はすぐに目を逸らしてしまつたが。

「もう体は大丈夫なんですか!?!」

「そうみたい。ほら」

軽く体を動かしても痛みはほとんどない。

それを見たジバニャン達が一斉に安堵の息を吐く。

「フラン」

「っ！　な、なに?！」

出来るだけ優しい声音で話しかけたつもりだったが、フランは俺の

声にビクツと肩を震わせ、怯えたように返事をした。目も未だ合わせない。

うーんと、えーつと……こういう時は……。

どうするべきか考えて行動に移した。

「フラン」

もう一度名前を呼んで後ろから優しく抱きしめた。フランに抵抗はなく、ただ成されるがまま。

「フラン、俺はもう平気だよ。さっきのことは気にしてない」

「あなたが……空が良くてもっ、私が良くないっ！」

「フランは操られたくて操られたわけじゃないでしょ？」

「そんなの当たり前よ！ 誰が好き好んで友達を傷つけるのよ！ でもね、あれは紛れもない私の心の奥にあった闇なの！ それなのに私は……私は……っ！ 空なら傷ついても助けてくれるって最低な考えしてた！ しかもこれで二回目！ ……どう？ これでも私をまだ友達って言える？ 言えるわけないわ！」

全てを吐き出すようにフランが叫ぶ。

それに対して俺はフランを俺と向かい合わせになるように向きを変えて、真つすぐに言っつてやった。

「それでも友達さ」

「っ!? なんですよ！ なんでなのよ！ どうしてそこまでして私に拘るの!? 空なら引きこもりの私と違って友達なんてたくさんいるでしょ!? だったら私のことなんて忘れてよ！」

確かに友達はそれなりにいると思う。けど、フランを忘れるなんて無理な話だ。

中々強烈な出会いからのホラー体験。一か月という短い間とはいえ、同じ部屋で生活して、同じご飯を食べた。

それだけで十分にかげがえのない存在。

「フランは忘れられて嬉しいの？」

「嬉しいわけない！ もっと一緒にいたい！ たくさん遊びたい！

空の世界のこと知りたい！ だけど、私にはそんな資格はない！ 私がない方が空のためなの！ 私みたいな迷惑かけるだけの奴なん

かが空と一緒にいない方がいいの！」

「俺もフランと一緒にいたい。色んな事したい。でも、フランがそう言うならもういない方がいい、か……」

「……っ！」

フランの顔が絶望や後悔で歪む。

やっぱり自分で言っていて辛いわけがないか。

「なーんてね」

「え……？」

「友達の定義って人それぞれだと思っただけど、俺は迷惑掛けられたくらいじゃ友達を辞めるつもりはないよ。フランがまた暴走するな止めるだけだしね。というか友達を助けるのに理由があるかい？」

全快の状態の龍神化なら絶対に負けない！

「俺はフランドール・スカーレットの良いところも悪いところも変なところも全部受け入れます。だから、これからも傍にいてください」

「……一杯迷惑かけるかもしれないの？」

「暴走以外でだったらちゃんと叱る。甘やかすところは甘やかすけどね」

「私がどんなに酷いことしても見捨てたりしない？　ずっと一緒にいてくれる？」

「応ともさ」

「はあ……空ってずるい」

「どこが？」

「全部！　まるでダメ女製造機よ！」

ダメ女製造機とな。これは初めて言われた。

まあ、それはともかくフランの様子が大分マシになって来た。

「今更やっぱ無しなんて許さないから」

「もちろん」

「責任、取ってよね」

「出来る範囲でね」

「……ごめんなさい」

「うん、もう大丈夫。というか元々怒ってない。さ、タマモのここ戻ろ

う」

彼女の謝罪を受け入れ、立ち上がらせて手を引く。

ずっと見守ってくれたジバニャン達にも声をかけることを忘れずに。

蛇王カイラです！

蛇王カイラです！

S i d eカイラ

「……退屈だ」

封印されてから約三百年振りの幻想郷だ。

俺からすれば封印されていた間意識はなかったもので、寝て目が覚めたら三百年後の世界に飛ばされていたような気分だ。

レッドJも困惑しながらから俺に報告してきて、流星に年月が経ち過ぎていたので最初に情報集めをした。

近くにあった紅魔館とやらに行き、吸血鬼の女とやその従者たちと出会った。

準備運動程度に済まそうかと思っていたが、時を止めるメイドに割と手を焼かされた。

「三百年も経てば人間である博麗の巫女はすでに故人。当たり前か」  
次なる目的として博麗の巫女への復讐とでも考えたが、三百年経っていて彼女はもういない。

それを知ってついさっきまであったはずの復讐心が霞んでいった。ならば、昔死闘を何度も繰り広げた鬼のところに行くことにした。王になるためには鬼たちは障害と言つていい存在だからだ。

しかし、幻想郷のどこを探しても鬼がいない。  
不思議に思った俺はさらに情報を集めさせた。

わかったことは鬼どもは俺が封印されている間に別の場所に居座っているとのことだった。

「それがこの有様か……」

現在は旧地獄と呼ばれる場所で戦った結果が積まれた鬼達。  
対する自分は無傷。

三百年前に好敵手ともいえるような鬼がこんなにも腑抜けきつていたことに落胆した。

「うう……っ」

積まれた鬼達の中から時折呻き声が聞こえた。生命力はそこらの

妖怪と比べものにならないのは変わらずのようで、まだしぶとく生き  
ているみたいだ。

「……………にはもう用はない。……………俺が王になるのもあとわずかだ」

鬼達に目もくれず歩き出した。

残るは……………人間どもの蹂躪だ。

Side out

Side 空

……………じ……………い。

フランと仲直りして、タマモの家に戻った。

そして、今はタマモが用意してくれたご飯を食べているところ――  
」。

「……………(じ……………い)」

——のだが、誰かからの視線が痛い。いや、その主はわかって  
いるのだが、何故そんな目で見られるのか疑問な状態だ。

「むう……………食べにくい……………!」

とりあえず視線のことは一旦置いといて、使い慣れていない箸に悪  
戦苦闘するフランの手助けだ。さっきからご飯の量が減っていない  
と思っただら箸を上手く使うことが出来ないからだ。

異世界で出会ったときも食事はフォークとスプーンしか使って  
なかったっけ。この家にはそれらはなさそうだなあ。

「貸して」

「え、うん」

ボロボロと辺りに散らかすのが見ていられなくなった俺は、フラン  
から箸を貰い受けると食べようとしていた焼き魚を掴み、彼女の口へ  
運ぶ。

「ほい」

「あくん」

フランが魚を呑み込んだのを見計らって次にどれが食べたいのか  
尋ねた。

「次はどれにする?」

「じゃあね……お米!」

「りょーかい」

リクエストに応じてドンドン口に運んでいった。

「……………じー……じー……」

あらら、遂には擬音まで発するようになるとは……。

なのは達にも似たようなことがあったから正直なことを言うつもりはたたくないのだけど、治療してもらって、ご飯まで出してくれた相手をこれ以上無視するようなことはできない。

「なにか言いたいことでもある?」

「ええ、あります。ありますとも!」

「あ、もしかして食ったら出てけ的な? それだったらさすがにでも」

「そうじゃありません! ご主人様が望むならここに永住してもらって構いませんどころか永住して欲しいくらいです! って、私の願望は今は置いてですね……」

一度俯いてから再度顔を上げて、ビシッと指を突き付けた。

「先程から見ていればなんなのですか、お二人は!」

『?』

タマモに迷惑が掛かるようなことをした覚えは全くと言っていいほどになく、彼女が怒っている理由にさっぱりで二人揃って首を傾げた。

「お二人が仲直りしたのはいいことです。ですがッ! 私が料理を作っている間にイチヤイチャと……! 妬ましいっいたらありやしないですよッ! 挙句の果てにはご主人様からのあくんだなんて羨まし過ぎです!」

タマモが料理を作っている間にしていたことと言えば、フランに膝枕と耳かき、頭を撫でたくらいだ。

最近だと十香達にもするようになっていたから暇だったが故にフランにもついやってしまった。

「タマモがして欲しいならするよ?」

「えっ!? マジでございますか!?!」

「マジでござります」

「で、では……お言葉に甘えて」

いそいそと俺の隣までやって来ると「失礼しますっ！」と一言断つてから俺の膝に頭を乗せた。

「えへへ〜♪　ご主人様の膝枕〜♪」

タマモの顔を覗くと声だけでなく表情も完全に蕩けきっていた。腰から生える尻尾も嬉しそうに動いてそれを表していた。

「頭も撫でる？」

「是非！」

狐耳の間に手を入れて優しく撫でる。

時折「フニャ〜」とジバニャンみたいな声を出すものだから狐なのに猫みたいに思えてしまった。

フランが羨ましそうに見つめているがもう十分したからまた後ですることにしよう。

「そう言えば、タマモはどんな妖怪なの？　妖狐だつていうのはなんとなくわかるんだけど」

食休みのついでに出会ったときから思っていたことを尋ねてみた。妖怪だから魔力というよりかは妖力か、ともかく彼女から発せられるオーラの中に普通の妖怪とは思えないものを感じた。

確証はないけれど俺と同類なんだと思う。

「……質問に質問を返すようで悪いのですが、言わなければいけませんか？」

「ううん、どうしてもじゃないからいいよ。あ、でも流石に実は敵でしたー、ってなったら嫌だなー」

「それは絶対にありますませんのでご安心ください、ご主人様！」

「わ、わかった」

起き上がって全力否定するタマモに気圧されて、頷き返すことしかできなかった。

……そろそろカイラを探すべきかな。

ここが幻想郷のどのあたりかはわからないが、今のところあの禍々しい気配はどこかに行っているみたいで被害が出ている様子はない。

自分の状態を改めて確認。全快ではないにしろ龍神化するには問題なさそうだと判断した。

「よし、休憩おーわり！」

「これからどうするのですか？」

「ちよつくら妖怪探し」

「どうやって探すつもりニヤン？」

「まあ見てて。すぐにわかるから」

外に出て大きく息を吸う。そして、――

「ゆかりんタクシー、カモーンツ！」

大きな声で叫んだ。

「ヒトのことをタクシー呼ばわりしたのはあなたかしら？」

すると音もなく彼女――八雲紫は俺の前に現れた。

「紫さん、カイラって奴のところに行きたいんですけど案内してもらえませんか？」

空間を移動できる能力を持つ彼女ならカイラのところまで一気に行けるはずだ。

「嫌よ」

しかし彼女からは明確な拒絶をされた。

妖怪スキマ婆とでも呼べばよかったかな？ ……殺される未来しか見えないや。

「どうしてですか？」

「だってタクシー呼ばわりされたのよ？ お姉さんとっても悲しいわ

……。よよよ……」

わざとらしい泣き真似だ。

「どうか見た目が少女なだけで実年齢はバ――

「今、失礼なこと考えてない？」

「……そんなことないですよ」

ニツコリ笑顔の紫さんから目を逸らす。

どうして女性というのはこんなにも鋭いのだろう。

それにしてもこれは困ったことになった。彼女の力に頼ることが出来ないのではカイラのところに行こうにも行けない。

ちよつと恥ずかしいけど状況が状況だけに我慢しないね。

「お願いっ、紫お姉ちゃんっ！」

相手の手を握って涙目と上目遣い、甘えるような声音で懇願した。自分で言うのもアレだが中々上手い演技だと思う。

『うわぁ……』

後ろにいるフラン達がドン引きしてるのが見なくてもわかるが気にしない。

二亜が傍にいない以上は頼れるのは紫さんくらいだから。

さあ、どうだ？

「……………も、もう一度今をお願いしてもいいかしら？」

お？ この感じは…………。

「お願いっ、紫お姉ちゃんっ！ 大好きっ！」

「お姉ちゃんに任せなさい！」

セリフを追加してハグをすれば、あら不思議。大妖怪と言われたあの八雲紫がものすごいやる気を出してくれた。

我ながらなんてゲスイ。うん、正しくゲスの極み。

彼女の能力で開いてくれた穴に入り、カイラの下に向かった。

「これは…………」

穴を抜けた先にあったのは山積みになった妖怪だ。

助けるために山を少しずつ解体していく。

——— 多分、カイラの仕業だ。

例の如く、ガシャポンの中にいる奴が答えてくれる。

「でも、誰も死んでないみたい」

虫の息ともいえるようなヒトが多いが、誰一人死んでいない。

カイラはそこまで冷徹ではない、ということ…………？

——— 殺さなかったんじゃないやなくて殺せなかった、ってとこだな。こいつ等は妖怪の中でも相当な力を持つ鬼だからな。耐久力や生命力は他の妖怪と比べ物にならないぜ。放っておいても死にはしないはずだ。

疑問を口にしなかったが中にいる奴はそれを読み取ったのか説明してくれた。

「彼らが鬼……」

絵本に出てくるのとは少し違って変わった形の角をしたものが多い。

こんな状況でなければ出会えたことを喜んで戦いを挑んでいたに違いない。

「カイラは……あつちか」

博麗神社にいた時に感じた禍々しい気配は探しやすかった。

その方向に龍の翼を広げて飛び立つ。

「あのヒトか？」

ゆっくりとした足取りで進む青髪の青年がいた。

——ああ、あいつで間違いない。

青年の進む方向に先回りして降り立つ。

「……俺に何か用か？」

カイラと目が合った。

紺色の瞳はどこまでも暗く黒く濁っていた。

——あいつ、あんな目してたか？

カイラの姿に疑問に思ったようだが、初対面の俺には何ともいえない。

「あなたがカイラって妖怪？」

「ああ」

「なら用はある。レミリア達……って言ってもわかんないだろうけど、吸血鬼とかメイドさんを倒した？」

「ああ、そうだな」

「ここに来るまでに見たけど、鬼を倒したのも？」

「そうだな。全部俺だ」

「目的はなに？」

「……幻想郷の『王になる』ことだ」

「王になる」という部分だけやけに熱……いや、執念にも似た何かを感じる。

何が彼をそこまで王になりたいと駆り立てるのかはわからない。少なくとも彼のやり方が正しいとは思えないが。

「それがここでのやり方なの?」

「——いいや。ここにはそもそも王なんて概念が存在しない。……あるとすれば地獄の閻魔大王くらいだな。まあ、アレも死者を捌くだけの退屈な役職であって、幻想郷の王ってわけでもない。カイラは力のある奴らを倒して自分が上であると認めさせて、幻想郷を統治する気なんだろうな。だが……」

「ん?」

「——いや、何でもねえ。気にしないでくれ。それよりも今はアイツを止めるぞ。」

「うん」

駆け出しながら静かに龍神化と呟くと全身に力が溢れてくる。

力を集めた右拳をカイラの顔面に一発ぶち込んだ。

俺をただの子供と侮っていたのかカイラはガードすることはなく、数m吹き飛ばされて岩に衝突。

「……………」

カイラが何事もなかったかのように起き上がると手に青黒いオーラを出して刀を作り出した。

ついでに禍々しさが余計に膨れ上がるという嬉しくない状況にもなった。

アレに切られたら今の俺でも簡単に斬られる姿が容易に浮かぶな。

聖剣や魔剣も木の枝みたいに簡単に折れそうだしね。

襲い来る刃を紙一重で躲す。

レミリアよりもわずかに速い。

「——頃合いだな。俺を出せ！」

「お、自ら肉壁になってツ、くれツ、るなんてツ、良い奴だねツ」

「——おいこら! 俺を盾にする気満々か!」

「冗ツ、談ツ、だって! そんなじゃツ、行くツよツ!」

「——応ツ! 掛け声は打ち合わせ通りに頼むぞ!」

「掛け声!? そんなのツ、あつたツ、けツ!」

——さつきやったる!?

「戦いの最中に会話とは随分余裕だな」

いや、こつちとしてもキツイことしてるとは思うよ。でもね、悪いのは全部話しかけてくる中の奴だから。掛け声とかマジで知らないから。

——つたく、仕方ねえな。もう一回教えるからちやんと覚えろよ？

「この状況で教えッ、るかなッ、普通!？」  
「というか掛け声とかッ、いならなくないッ!？」

——バツカ、お前。わかってねえな。登場する瞬間つてのは大事なんだぜ？ 上手くいけば相手を怯ませることが出来る。逆に下手なら舐められて終わりだ。普通の登場なんて俺の美学に反するんだよ。

「あー、もうッ！ わかったッ、わかったから早く言ってくれ!」

コイツの美学など知ったこつちやない。でも、コイツが出てくれないと回避ばかりで攻撃に回れない。

必死こいてカイラの斬撃を躲し続けながら掛け声を頭の中に入れてゆく。

——さあ、今度こそ俺の出番だな！

見聞色の覇気で先読みして相手が刀を振るうよりも先に左手で手を突き出し、刀を持った腕を防ぐ。そして右手を鳩尾に叩き込む。怯んだ瞬間に回し蹴りを脇腹に放った。

「グッ」

カイラが呻き声を上げながら転がっていく。

出すなら今しかない！

「地獄の覇者よ！ 今こそ姿を現せ!」

開けたガシャポンから天に向かって炎が激しく噴き上がった。数秒程で炎が止まると今度は空から炎を纏った黒い球体が下りてくる。それと同時に地面から湧き上がる炎。それが球体に吸い込まれ真っ赤に染まり、やがて凄まじい熱気と爆風を放ちながら弾けた。

「へっ、ようやく出てくれたぜ」

中から現れたのは一人の青年だ。

逆立つ金髪、先の尖った耳、鋭い眼光を放つ金の瞳、褐色の肌、朱い漢服を纏っていた。

「なっ、貴様は……！」

声のする方に視線を向けてみればカイラが現れた彼を見て目を見開いていた。

「よう、カイラ。随分と暴れてるみたいだな？」

二人が向かい合うだけで空気がピリピリしてる。

龍神化しているとは言え、ここに俺も加わるとなると考えるだけでも気が重くなってくる。

「ふんっ、それがどうしたというのだ？　俺が王になるために必要なことだからやっているだけだ」

「必要なことだあ？　……まあ、今はいい。カイラ、オメエはやり過ぎだ」

「この俺を止める気か？　いや、このタイミングで出てきたお前のことだから聞くまでもないな。いいだろう。どの道お前を倒さなくては王になんぞなれるはずもないからな。この場で倒す！」

金髪の青年が手から赤いオーラを放つとカイラと同じように一本の剣を作り出した。

剣と刀が交わる度に甲高い金属音と衝撃波が辺りに響き渡る。

どちらかが攻撃をすればもう一人は防ぎ、相手の手を知り尽くしたかのように躲していく。

二人の実力は互角。

恐らく二人はただの知り合い程度の関係じゃなくて好敵手と言える関係なんだと思う。

ここに割って入るのは無粋な気がしてしばらくは見ているしかないようだ。

しかし、それもすぐに終わる。

「いつも、いつも俺の邪魔をしゃがって！」

何合目かの剣戟の最中にカイラが突然声を荒げたかと思いきや、ドス黒いオーラが背中から溢れ出したのだ。

「何だありや!？」

カイラと旧知の仲の金髪の青年からしても、カイラの様子がおかしかったようで急いで距離を取った。

アレは、フランの時にも感じた……。ずっと感じていた禍々しい気配もこの黒いオーラのせい？ もしも誰かの仕業だとしたら……。

金髪の青年が不利になる前に俺もカイラを止める戦いに戻ったのだった。

S i d e o u t

S i d e フラン

初めて来る場所で上下左右見渡しながら、空が探してるカイラとかいう妖怪とは別の人物を探していた。

「フラン様あく、こんな物騒なところから早く出ませんかあく？」

「じゃあ、あなた一人で出れば？」

私の後ろをトボトボ歩きながら弱音を吐くタマモに容赦なく言い放つ。

というか、帰ってくれた方が私としては嬉しい。

何故だか知らないけど、タマモを見ていると心がムカムカしてくるのだ。特に空に甘えてる時が一番ムカムカした。

……あ、そうか。私、この女が嫌いなんだ。

甘ったるい声音、一々あざとい仕草、良妻アピール。

彼女の一連の行動を振り返ってみて気が付いた。

「私、あなたのこと嫌いみたい」

「ご安心くださいいな。私もあなたのこと嫌いですから」

思い切って自分の思ってることを告げてみれば、彼女は笑顔で返答してきた。

「出来れば空の前から消えてくれると嬉しいんだけど」

「おや、これは奇遇ですね。私のご主人様の周りを飛ぶ目障りなハエは早いとご殺虫したいと思っただけですよ」

「誰があんたのご主人様よ。二次元のイケメンにでも言っただ方がお

似合いじゃないかしら。色んなのがいて選り取り見取りで、あなたの好きな相手に好きなだけ尽くすことだって出来るしね」

「いえいえ、私には三次元で十分ですからそちらにオススメしますよ？」

『……………』

「駄狐」

「似非お嬢様」

「ぶりっ子」

「ひきこもり」

……………。

『このッ——』

「二人共止めるニヤ！」

私達が互いの胸倉を掴もうとしたらジバニヤンが止めに入った。

「二人が喧嘩してケガしたら空はきつと悲しむニヤ！ だから仲良くするべきニヤン！」

ジバニヤンに叱られて少しだけ頭が冷えた。

そうだ。空は優しい。友達のことを大切に想ってるから私達が喧嘩したら悲しむに違いない。考えるのも嫌だけどコイツも空からすれば友達なもの。

「ジバニヤンの言う通り今は何もしないであげるわ」

「おかげで無駄な血を見ることにならなくて良かったです」

「ええ、非常に癪だけど同感だわ」

「ふふっ、泣く羽目にならなくて良かったですね」

……………。

『やっぱりころ——』

「二人共！」

互いの胸倉に手を伸ばしかけたら、またしてもジバニヤンに叱られるのだった。

異変解決です！

異変解決です！

Side空

『うぐっ……！』

カイラから発せられるオーラがより凶悪になった途端に戦況は変わり始めた。

二対一という有利な状況にもかかわらず、俺達は押され始めたのだ。

たった今も蛇を模ったような黒いオーラを鞭のようにしならせた攻撃に吹き飛ばされたところだ。

「あれなに？」

「こつちが聞きてえよ。俺の知るカイラはあんなドス黒い不気味な力なんて持ってないはずだ。……っつか、いくらなんでも強化され過ぎじゃねえか？」

体勢を整え、カイラに視線を向けたまま金髪の青年にあの力について問いかける。

カイラと知り合いの金髪の青年にもわからないらしい。

「博麗の巫女でもいれば少しは楽になると思うんだが……」

「霊夢さんなら休んでるんじゃないかな？ さつき結構な数と相手してもらってたから」

「マジかあ……。なら空の煌龍神化つてので一気に無理か？」

「無理。あの形態は一日一回しかできない」

今の俺では完全に使いこなせているわけじゃない。

そもそもアレは属性に特化しただけで、俺の能力値は龍神化の時と大して変わらないのだ。

例えば煌龍神化なら火と光の二つの属性と言った風にだ。

「となると厳しい戦いは避けられないわけだな」

「元からそうでしょ」

二人で一斉に駆けて、凶悪なオーラを纏うカイラを倒しにかかった。

S i d e o u t

S i d e フラン

ここからそう遠くない場所から爆発音が聴こえる。空が戦つてるに違いない。

「フランは誰を探してるニヤ?」

「あの女妖怪よ」

そう、探しているのは私に空を攻撃させたあの妖怪だ。

カイラを倒すのは空に任せておけば大丈夫だと思うけど、あいつだけは私自身でやらねば気が収まらない。

見つけ次第破壊し尽くしてやる!

「フ、フラン様、顔が怖いですよ?」

「…………ごめんなさい」

ウイスパーに怖いと言われて謝る。

落ち着け、落ち着け私。えーつと、こういう時は確か…………そう!

深呼吸よ! 空も気持ちを切り替えるときには良いって言つてたもの!

「スウ……………ハア……………」

…………うん、少しだけ心が軽くなつた気がする。

ここは旧地獄と呼ばれる場所で私が足を踏み入れたことのない地域だ。引きこもりだったから近くの人里にすら行ったことないけど。

土地勘のない場所で動き回っても体力と時間の無駄だから考えて探さないといけない。

今は空とカイラが戦つてる。

他には何も起こっていないということはあるの妖怪はどこかで戦いを見る、と考えるのが妥当か。

そうなると良く見える高い場所にいるのだろう。

周りをキョロキョロ見回していくつか眺めが良さそうな場所を見つけた。

「今から二手に分かれて行動よ。私とジバニャン、コマさんで東側。

タマモとウイスパーで西側の高い場所にそれぞれ行つて」

「えー!? タマモちゃんこれ以上はしんどくて無理ですー!」

「はいはい。そういうの良いから」

ムカつく返答だけど予想通りだ。……正直なところ殴ってやりた  
いけど我慢よ。タマモを動かすには……。

「私のお願いを聞いてくれたら空にタマモを労ってもらおうよう頼んで  
おくわ」

「ご主人様が私を労う……ですか?」

「ええ。例えば……一日中甘やかしてくれるんじゃないかしらね?」

タマモの耳がピコピコ動く。

よし、食いついた。

「膝枕やあーんはもちろん——」

「(……ゴクリ)」

「——添い寝だつてしてくれるんじゃないかなー?」

「やります! このタマモ、精一杯務めを果たさせていただきます!」

「そう、ありがと♪ じゃあ、そっちで見つけたら教えてね。妖怪は  
ウイスパーが知ってるから」

「はい! 行きますよ、ウイスパーさん! あ、フランさんにはこれ  
を。念じれば私が持っている札と通信が出来ます。では!」

私に一枚の札を渡すなり、ウイスパーのによろの部分を掴ん  
で走り去ってゆくのを笑顔で見送った。

「フフ、チョロい」

『(メチャクチャ悪そうな顔してる……)』

「さあ、私達も行くわよ!」

『こちらタマモです。一つ目の高いところは見つかりませんでした』

「ん。引き続きお願い」

『はい』

タマモから貰った札を使つての通信を切つて私達も搜索を続ける。

私達の方ももうすぐ一つ目に辿り着く。

「……いないわね」

森を抜けて一つ目の高い場所に辿り着いたが、誰もいなかった。いきなり見つかるなんて思ってたない。焦らずに探そう。幸いなことに空達が戦ってる影響なのか、妖怪や怨霊の姿は見当たらない。

「タマモ。こっちもダメだった。次行くわ」

『了解しました』

二度目の通信を切って、また探し始める。

数分後にタマモから通信が入ったが、そちらはまたもダメ。私の方も二つ目もダメだ。

魔力か妖力みたいなものすら感じられないのよね。

空から教わったことだけど、人間なら魔力とか霊力、妖怪なら妖力といった風に『力』は誰もが持つてるのだそうだ。もちろん個人差はあるから、それが弱ければ弱いほど探すことは困難になる。

「そう言えば……」

「どうかしたニヤ？」

「あの妖怪ってどんな雰囲気だった？」

「どんなって……どんなズラ？」

「コマさんがわからなくて首を傾げた。」

今思い出すとカイラがものすごい存在感を放っていたから、あいつには強そうという考えは浮かばなかったのよね。……で、私は斬りかかった。あいつはカイラより弱そうだから私でも勝てると思って。

会話もしたけどやはり強そうには思えなかった。なんとというかここにはいないような……。……ここにはいない？

「あ、そうか！」

「なにか分かったズラ？」

「ええ、あいつの居場所よ！ タマモ！ すぐに合流よ！」

タマモと落ち合う場所を素早く決めて、通信を切った。

十分程後、タマモ達と無事合流できた。

「それでお探しの妖怪はどこに？」

「それはね……カイラの中よ！」

「……フラン様？　嘘を吐くならもう少しまともな嘘を吐いていただけませんか？　呪いますよ？」

「私は大真面目よ！　いいから聞きなさい！　恐らくあいつは人の心に入る能力を持つてる。現に私はそれをやられたわ」

「確かにフランはあの妖怪と戦って変にニヤつたけど、いつ能力に掛かったニヤ？　俺たちは全然わかんニヤかったニヤ」

「それにフラン様が変になった途端に我々の前から姿を消していますたからね。むむつ？　だとすると……その妖怪はずっとフラン様の中にいた……？　そう考えればフラン様の考えに辻褄が合います！」

「でしょ!？」

「なるほどなるほど。相手の心に入る。この場合は憑りつくですかね。その能力で心にちよつかいを掛けて暴れさせるわけですか。……ん？　暴れ、させる？」

タマモの最後の言葉に誰もが「ん？」となった。そして、すぐにハツとなつて叫んだ。

『空（君／＼）主人様）が危ない（ズラ）！』

Side out

Side 空

『ぐあつー！』

カイラに攻撃を仕掛けようとしてまたしても鞭のようになる蛇に吹き飛ばされた。

今のもう何度目になるかもわからない。

「はあ……はあ……！　クソっ！　全然こつちの攻撃が通じねえ！」

「しかもこつちはやられてばっか……」

金髪の青年が凶悪なオーラを纏うカイラを睨みつけて言うが、カイラは顔色一つ変えないで立っているだけだ。

最初のうちは何とか対応できていたが、徐々に攻撃の威力とスピー

ドが上がってゆき、やられたい放題。こちらの攻撃がカイラに届いたのはもう数十分も前のことだった。

「剣、ごめんね」

身体を支えるための杖代わりにしていた刀状態の黒刃ケイネス・リュカオンの狗神こと剣ケンに謝る。

聖剣や魔剣ではまともに打ち合うことは難しかったので頼ったのだが、攻撃を防ぐたびに剣を傷つけてしまっていた。

「もうちよつとだけ付き合ってくれる？」

『もちろん。その代わりあとでいっぱい撫でて』——不思議と剣からそんな声が聞こえた気がした。

この状況を打開するにはどう考えても彼の力がある。

ねえ、君も少しは助けてくれてもいいんじゃない？

『お前が頼らないから黙ってたただけだ』

……本当はわかってるくせに。

『ああ、知ってる。なんせ自分のことだからな』

だったら最初から言つてよね。……どうせ、お前の修行だー、とでも言うんでしょ？

『その通り。でも流石にピンチだから助けるさ。でないと俺も死ぬからな』

知ってる。で？ 俺はどうしたらいいの？

『あいつに一撃入れろ。それだけだ』

……は？

『ただし、鍵を使つてだ』

鍵……？ つて、まさか。

『そのまさか』

でも、アレはまだ完全には習得出来てないよ。

『出すのは一瞬で良い』

一瞬。集中すればなんとかかなりそうだ。と思つたが今の状態でカイラの攻撃を避け続けられる自信はあまりない。

隣の金髪の青年を見やる。

俺の攻撃を届かせるためにカイラの攻撃を彼一人に防いでもらう

のは無理がある。人手がほしい。

「紫さーん！」

「はーい」

名前を天に向かって叫べば彼女はすぐ隣に現れた。

「霊夢さん呼んで！ いや、霊夢さんじゃなくてもいいや！ 誰か応援によこして！」

「そう言うと思って彼女達を呼んだわ」

紫さんが空間に裂け目を作ると中から次々に現れた。

フラン、ジバニャン、コマさん、ウイスパー、タマモ。そして霊夢さん達と一緒にいた獅子王レグルス・ネメアの戦斧だ。

無理矢理空間移動させられて困惑してる中、周囲をしばらく見まわして俺と目が合った。

『空（君／＼ご主人様）！』

「あとは頑張ってね」

ウインクをして紫さんはスキマの中に消えてしまった。

霊夢さんが来ないのは正直言って厳しいが、フラン達が来てくれるだけでも大分楽になったのは間違いない。

「応急処置程度ですが」

タマモがお札を使って癒してくれる。

痛みだけでなく魔力も少し回復してる気もする。

「皆にお願いがあるんだ」

「言ってみろ」

「カイラへ攻撃するための道を作って欲しい」

「空の願いが私の願いです」

「ワン！」

「あの蛇のオーラを引きつけろってわけね。いいわ。やっつてろうじやない」

「一撃でも喰らえば一溜りもありませんね……。ご主人様の頼みとあらば断る理由はございませんが」

「それしか方法はなさそうだな」

「オレっちもやるニヤン！」

「が、頑張るズラ！」

「わたくし非戦闘員なんですけど今回限定で頑張らせていただきますよ！」

仲間の全員が覚悟を決めてくれた。

これは一発で決めないといけないな。自分にそう言い聞かせて声を張り上げた。

「よし……行くぞっ！」

『おおっ!!』

「ジバニャンとコマさんはレグルスに乗って外からちよつかいかけて！ 接近戦するなら一撃離脱！」

「任せるニャー！」

俺の指示に従ってレグルスが二体を背中に乗せるとカイラの左側に回り込んでゆく。

「ウィスパー、フランは反対側から！ タマモは遠距離攻撃で二つのグループのサポート！ それから……」

名前を呼ぼうとして未だに彼から名前を聞いていないことに気が付いた。

それを察した青年が不敵な笑みを浮かべて答えた。

「俺の名は、炎惺<sup>エンセイ</sup>。地獄の最高裁判長——エンマ大王だ！」

『エンマ大王?!』

「驚くのも無理ねえけど、今は戦い優先だ」

「うん！ 炎惺は俺と一緒に正面から行くよ！」

「任せな！」

俺と炎惺以外が散ったところで俺達も動き出した。

カイラが先に目を付けたのはレグルス達だ。

「これでも喰らえニャー！」

「行くズラ〜！」

レグルスが蛇を巧みに躲し、ジバニャンとコマさんが青い火の玉で攻撃。

攻撃が効いてる様子は見受けられないがカイラの表情が鬱陶しそうな顔になっていた。

「こつちがガラ空きよ！」

反対側からはフランが魔力量にものを言わせて魔力弾を大量にぶつけていた。

レグルス達よりも厄介であると考え振り向くが、背後からレグルスの鋭い爪に引き裂かれる。

一撃離脱でカイラからの反撃が来る前には距離を損っていた。

「ちよこまかと……！」

「こちからも行っちゃいますよ〜♪」

タマモが両手から数枚のお札を投げて蛇に張り付けると炎や氷、雷が札のあった場所から発せられた。

札の使い方は治癒だけでなく攻撃にも使用できるわけか。

「くっ……！ まとめて——」

あちこちから攻撃をされてイラついたカイラが広範囲に攻撃を繰り広げる——よりも先に炎惺が割って入った。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ！」

赤の斬撃がカイラを切り裂いた。

凶悪なオーラが鎧替わりになっているようで与えられたダメージは僅か。

だが、それで十分。

炎惺の背後から飛び出した俺がオーラの薄い場所に向けて手を伸ばす。

鍵よ、来い……！

頭の中でそう念じると伸ばした手に光が集まり形を作っていく。

やがて光は鍵の軸と歯に当たる剣身と、両脇にナックルガードの付いた柄、柄頭に龍の頭を模したストラップのようなキーチェーンを付けている。

鍵を握り締めるとカイラの胸に鍵穴が浮かんだ。

鍵穴に鍵を差し込んで回せばカチリと音を立て、俺は光と化して鍵穴に吸い込まれていった。

そこは暗い場所だった。まさしく一寸先は闇と言ったところか。  
「あつちかな」

気配のある方へ歩いて行く。

道中、蛇と人間が合体したような兵士が道を阻むが大した力もなく、一撃で消えてゆく。

『お前、人間の血が混じってるんだって?』

突如、頭の中に流れ込む誰かの記憶。

その言葉を放った奴の目は完全に見下していた。

『人間と妖怪の共存? 出来るわけねえだろ!』

足を進めるとまた流れ込んできた。

今のは夢を否定された瞬間だろうか。

『妖怪が人間の村になんのようだ! 帰れ!』

今度は人間から石を投げられて逃げる場面だった。

『あなたも弱いよね。ええ、私も同じ。だったら——』

最後の記憶はそこで中途半端に途切れてしまった。

「ここか」

目の前に高さが10mはありそうな大きな扉があった。

人と異形の存在——恐らく妖怪——が手を繋いでいるのを青い蛇が輪となって囲んでいた。

大きな扉の見た目とは裏腹に押せば簡単に扉は開いた。

「……! カイラ!」

中には無数の蛇で雁字搦めに縛られたカイラがいた。

「お、前は……」

顔を上げたカイラは酷くやつれていた。声も覇気がない。

「大丈夫、ではなさそうだね」

「何しに、来た……?」

「助けに来た!」

彼の作戦だけだ。

「私をか……?」

私? 一人称俺じゃなかったけ?

まあ、些細なことは置いといて彼を助けないと。

鍵を振るって身体に絡みつく蛇を斬った。

「よっ」と

倒れ込むカイラを支える。

すぐにでもルーン魔術での治療をしたいところだが今の彼は現実の彼じゃないがために効くことはない。

それに――

「貴様……どうやってここに入って来た！　ここはカイラの心の中だぞ!?」

入り口付近にどこからともなく現れた蛇が集まって人の形になった。

色落ちしたような白髪、ところどころに蛇の鱗がある青白い肌、血のような真つ赤な眼。

彼女から発せられる雰囲気はさっきまで戦っていたカイラのものと類似していた。

あのヒト、最後の記憶にいた妖怪だ。

『元凶はあいつで間違いない。ここからたたき出せ』  
りよーかい。

「企業秘密なので質問には答えられない、ねッ！」

「は、放せッ！」

白髪の女性まで一気に詰め寄り、右手を龍の手に変化させて頭を鷲掴みした。

俺の手を外そうと必死にもがくがたとえ子供だとしても龍の握力を舐めてもらっては困る。

「こっから……出てけッ！」

入って来たところまで戻り、思いつきりぶん投げた。

後を追うようにして俺もカイラの世界から出ていった。

現実に戻るとカイラから先ほどもまでの凶悪なオーラが全くなく、地面にボロボロの状態でうつ伏せに倒れていた。

ボロボロなのは俺達の攻撃と無理矢理強化されていた所為だと思

う。決して責任を逃れようとしているわけではない。

「ご主人様〜！ お帰りなさいませ！ ご無事で何よりです！」

いの一番に駆けつけてきたタマモを抱き留めた。

「こらタマモ！ 空に馴れ馴れしく触ってんじやないわよ！」

続いてフランがプンプン怒りながら俺からタマモを引き剥がそうとする。

「これくらいいいじゃありませんか！ 私頑張ったんですから！」

駄々をこねるタマモが必死の抵抗で俺の身体により強くしがみつく。フランはその間に無理矢理割り込もうとするので腕やら足がガスガス当たる。

さつきまで戦闘していたばかりなので疲れた身体に着実にダメージが入っていく。

「あのお二人さん、君らが暴れると俺も巻き添え食らうんだけど……」

「そもそもフラン様がご主人様に甘えて良いつて言ったんじやありませんか！」

「誰も今すぐにとは言っていないわよ！ 場を弁えなさい！」

聞いちゃいねえ。

炎惶に助けてと視線で訴えかければやれやれと言いたげにこっちに来た。

「騒ぐのはその辺にしとけ。今は異変が完全に解決したのか——」

『五月蠅い！ 異変よりもこっち！』

「……すまん。俺には無理だ」

弱ッ！ ヒトのこと言えた立場じゃないけど弱すぎやしないかな  
エンマ大王!?

もうこの際どうにでもなれと諦めかけたとき、思い出した。

白髪の妖怪はどこに行った!?

慌ててその姿を探す。だがどこにもいない。

どんなに逃げ足が速くてもカイラの精神世界を追い出された直後にフラン達の目に入らないはずがない。

フラン達が倒されたならわかるが今現在も元気だ。

「フラン、タマモ！」

「な、なに?」「はい!」

「白髪の妖怪を見なかった!」

「それって私に空を襲わせた奴? 見てないわ」

「私もです」

二人も見えていないとなるとレグルス達に聞いても意味はなさそう  
だ。

魔力は……ダメだ。小さいのか隠すのが上手いのかわからないけ  
ど感知できない。

あれだけ不気味だったはずなのに……。

「ワン!」

「剣?」

足元まで寄って来た剣が何かを訴えかけるように吼えてまた離れ  
ていった。

フランとタマモに離れてもらい剣を追いかける。

剣が止まった場所には一匹の白蛇が苦しそうに動いていた。まる  
で何かから逃げるように。

僅かながらカイラから発せられた魔力と同じものを白蛇が出して  
いた。

剣がわかったのは臭いか……!

「お前、カイラの中にいた妖怪だよね?」

「私に触るな!」

逃げられないように掴もうとしたら威嚇されたがこいつの身体は  
見るからに限界だ。大した脅威はない。

ヒトの心——それも弱い部分がある奴に憑りついて好きなよう  
に利用する。大方、昔に弱い者いじめなり差別なりされてきたのだろ  
う。

カイラも記憶を見た限りじゃ、半人半妖であるがために人間にも妖  
怪にも受け入れられることはなかった。そこが二人の似通った部分  
で互いに共感した。全て俺の勝手な憶測だけだ。

カイラが白蛇を受け入れたのか、それとも白蛇にカイラが利用され  
たのかはわからないが、負の感情に押し負けた結果が幻想郷に攻め入

ることになったのは事実。

「二人の罪を裁くのは俺よりも適任者がいることだし休憩しよーつと。炎惺、あとは任せたよ」

蛇を鷲掴みして炎惺に向けて放った。

「ああ。しかるべき処罰をこいつらに下す。それから休憩に入る前に博麗の巫女のところに行つて、異変が解決したことを伝えておけ」  
「わかった」

フラン達を呼んで博麗神社に向かったのだった。

宴会です！

宴会です！

S i d e 空

「異変を解決した!？」

霊夢さんに異変解決を伝えたら胸倉を掴まれて問いただされた。

おおぅ……揺さぶられて吐きそう……。

「妖怪の大群倒して終わりだと思つてたけど黒幕いたのね……」

「ま、そういうこともあんじゃねえの？ 次の異変で頑張ろうぜ」

「そうそう異変なんか起こらないし、起こって欲しくもないわよ！

私は基本的に一日中ゴロゴロしていたいの！」

妖怪退治専門の巫女がニート発言これいかに？

「博麗の巫女が何言つてんだか……。そんなことすれば八雲紫に怒られるだけじゃすまないと思うぜ。それよりも異変解決したんだから宴会だぜ！」

『宴会?』

参加したことがあるフランや話だけ聞いたことはあるタマモは知ってるみたいだが、昨日来たばかりの俺や封印されていたジバニャン達は疑問にしながら繰り返す。

「そ！ 霊夢が巫女になつてからは異変解決時に宴会やつてるんだ」

つまり異変解決のお祝いというわけか。

「私の許可なくアンタたちが勝手にやりだしてるだけでしょ！ おかげで神社に妖怪はたくさん来るわ、参拝客はやつて来る妖怪を恐れて来なくなるわでいい事なんて何もないじゃないの！」

「とか何とか言つてお酒や料理たらふく食つてるじゃんか」

「うっさい、料理やお酒に罪はないの！ ……つたく、宴会やるなら勝手にすれば。ただし美味しい酒と料理用意しなさいよね！」

「へいへい、わかってるって。空はケガをしているから永遠亭行って治してこいよな。他はアタシを手伝ってくれ。やることは呼びかけや買い出し、調理に席の用意。色々あるからな」

べつにこのままでも放置していればそのうち治るから行かなくて

もいいけど、永遠亭というのが気になるから行ってみたいな。

「霊夢、連れてけよ？　ここに来たばかりの空が分かるわけもないからな」

「わかってるわよ。ほら、すぐ行くわよ」

「はい」

飛行する霊夢さんを追いかけるために翼を出す。が、上手く飛べず前のめりに倒れた。

身体が急に思い出したかのように疲労感を伝えてきた。

魔力は残り僅かで体力はどうに限界だった。空腹も重なって動けそうにない。

「まったく、すっかりしなさいよね」

俺が飛んでないことに気が付いた霊夢さんが一旦降りてから、俺を背中に担いで飛び上がった。

背の高い竹林のある方に行くと入り口辺りで降りた。

ここから先は徒歩で行くらしい。

筈いっぱいありそう。

霊夢さんにおんぶされたまま竹林を進んで行くとやがて日本屋敷が見つかった。

教科書や博物館で見たことある作りだ。

「お邪魔するわよ」

遠慮なんて言葉を知らないのか霊夢さんは他人の家にならずかと足を踏み入れる。

俺のためにやってくれているわけだから言えないけど。

屋敷内から銀髪を三つ編みにした女性が現れた。

服装は赤と青のツートンカラーだ。ナースキャップもあるが俺の世界で良く知られている白ではなく青だ。

「どうしたの霊夢？　お腹が空き過ぎて変なものでも食べたのかしら？」

今の発言で霊夢さんの生活事情をなんとなく察した。だから魔理沙が宴会でたらふく食うと言っていたわけだ。

あとで美味しい物作ってあげよう。

「そんなこと流石にしないわよ！ 今日来たのはこの子のため。ケガしてるから治してあげて」

「……大分酷い状態ね。居間に寝かせておいて。私は薬取って来るから」

中に通され布団の上に寝かされる。

「私は宴会の準備するから先に帰るわね。帰りは永遠亭の人と一緒に来なさい」

「ありがとう、霊夢さん」

「どういたしまして。またあとでね」

霊夢さんが部屋を出るのと同じタイミングで銀髪の女性が薬をもって入って来た。

簡単に自己紹介を済ませてから永琳さんに苦い薬を飲まされ、すぐに眠りについた。

日が落ち始めた頃に目が覚めた。

「おお！ 完全に治ってる！」

その場でピョンピョン跳ねてみたり、魔力を放出させても支障はなかった。痛みは少しもない。

永琳さんに治ったと報告すべきだろう。

「師匠が言っていたよりも大分早い回復ですね」

部屋を出ようとしたら兎が現れた。いや、正確には兎耳の生えた薄紫色の髪の少女なだけけれど。服装がどこかの学校にありそうな制服だ。

傍から見るとコスプレに見えなくもない。

「私は鈴仙・優曇華院・イナバ。八意永琳の弟子です。その様子を見る限りでは、もう動けるようなので博麗神社に行きましょうか」

「はい」

永琳さん、鈴仙さん。他には輝夜さんと因幡てるという永遠亭に住む人達と神社に戻った。

「酒だ酒だーッ！ もつと持つてこーいッ！」

手に持った焼き鳥をまとめて口に入れ、杯に入った酒を一気に飲み干しどんちゃん騒ぎする霊夢さん。

異変解決祝いの宴会が始まって十分かそこらでこれである。

魔理沙曰く、普段ならこんなには酔わないとのことだが、参加者のほとんどに今回の異変解決は博麗の巫女としての役目を果たしてないと言われまくった結果が自棄酒となった。

他にもお酒好きの妖怪達が霊夢さんと一緒になつて騒いでる。

ちなみにお酒を飲んでいる霊夢さんや魔理沙はどう見ても未成年の人間なのだが、この幻想郷には法律はないので問題ないらしい。

「ほくれ、空あ。私にお酒注ぎなさいな〜」

アルコールが回って頬が朱に染まった霊夢さんが空の杯を俺に突き出す。

士郎さんやユーストマさんもお酒をよく飲んでいるがここまで酷い絡みはされたことはない。うちのなのはとはどうなんだー、とかシアは可愛いだろーみたいなきらんだ。……変わんない気がする。

「はいはい。今すぐ注ぎますよ」

机に置いてある酒瓶を持ってお酒を注ぐ。

「うむ、苦しゅうない」

注がれた酒に満足すると俺の傍を離れていった。

「はあ……酔っぱらいの相手は面倒——」

「空、紫から聞いたよ。あんたが今回の異変解決の立役者なんでしょ？」

「ん？」

話しかけてきたのは薄い茶色のロングヘアを一つに先っぽでまとめている、頭の左右から捻じれた角が二本生やす、俺と同じ年位の少女だ。

特徴的なのが紫の瓢箪と三角錐、玉、立方体の分銅を腰から鎖で吊り下げていた。あと常に酔っぱらってるくせに会話が滞りなくできる。

宴会直後に紫さんから紹介された伊吹萃香という鬼だ。紫さんの古い友人なんだと。

今回の異変では旧地獄にはいなかったためカイラとは会ってないので被害には遭って無いそうだ。

「別に俺一人ってわけじゃないよ。炎惺やフラン達がいなかったら今頃蛇の腹の中で消化されてるね。霊夢さんや魔理沙には露払いしてもらったし、……結局俺一人じゃ無理だった」

「誰かを動かすのも力の一つだよ。誇っていい」

そういうものかと心で呟く。

いつも誰かと一緒に戦っていた。

なのは達や十香達、ドライグ達がいたから戦えた。

萃香の言葉で今までの戦いを軽く振り返ると少しだけ嬉しく思えた。

「……ときに空、あんたは勝負事は好き？」

「ものによるかなー。いずれにしたって負けるのだけは嫌だけど」

「それは私も同じ。どう？ 私と一勝負しない？」

「いいよ。内容は？」

「本気の喧嘩、と言いたいけど今日は宴会だからそれは無し。そうだねえ……私に“参った”と言わせる、っていうのはどう？」

“参った”と言わせる。

絶対にただの子供鬼ではない萃香に実力行使は不可能。

そもそも本人から戦闘系は避けてお題を出してきたわけだし。

「オツケー」

時間制限はこの宴会が終わるまで。

萃香は俺の目の届くところに常にいる。

俺が話しかけたら萃香は無視をしない。

俺は他のヒトに助言してもらうのはあり。

宴会の妨げになる迷惑行為をしない限りはなにをしてもいい。

以上が二人で決めたこの勝負のルールとなった。

「じゃあ、勝負開始！」

萃香の合図で勝負が始まった。

「萃香、参ったって言って」

「……言えと言われて言うアホはいないよ」

そりやそうだ。

「ただ勝負しても何の面白味もないから賭けましょう」

「……度が過ぎたのは嫌だけど」

「そこまでしないよ。うーん、何がいいかなあ……。よし、私が勝ったら私の夫になるってのは？」

「世間一般ではそれを度が過ぎてるって言うんだよ！」

「ここ幻想郷、常識通じない、オーケー？」

「片言の日本語話す外国人か！」

「私がルールだ！」

「萃香のことまだ全然知らないけど世界が荒れそうだね！」

なんとなく自由人っぽいなどは思っていたけどまさかここまでとは。

「どうしていきなり……」

「夫婦になるなんて強い奴と結ばれたとかそんなもんじゃないの？」

私は強い奴が好きだからね」

「萃香よりは弱いんじゃないかな？」

「確かに私の方が強いと思うよ。でもね、空はまだ成長段階。これから先きつと強くなるだろうね」

将来性を買ってくれるのは嬉しいのだが、内容が内容なだけにどうにも反応に困る。

萃香が「それに」と付け加えて続けた。

「家事も出来ると聞いたし、顔も私好みだ。うん、鬼の夫に相応しいよ。この勝負に勝てば結婚出来ない集まりから一抜け出来そう」

「結婚出来ない集まり？　ここにいるヒト達のこと？　まあ、確かに皆腕っぷしには自信ありそうだけど女性としては……」

ガンッ！　バキッ！　ドゴンッ！

夫婦という単語から連想してつい思ったことを口走った瞬間、会場内の至る所から物が壊れる音がした。

ついでに殺意を込めた視線が俺を突き刺してくる。主に紫さんと

か紫さんとか紫さんとか。

「紫様、いい加減身を固めるべきではありませんか？」

「わ、私は結婚出来ないんじゃないの！ 私に釣り合うような良い男がいないからしないだけよー！」

「情けない言い訳しないでください」

「どっかの巫女と違って私は問題ないけどな。むしろモテ過ぎて困るくらいだし？」

「はあ!? 魔理沙のどこにモテる要素があんのよ！ 盗人魔女よりも異変解決する健気な巫女の方がモテるに決まってるでしょうがッ！」

「一度健気という文字の意味を調べてきてはどうかしら？」

え、皆さん意外とそういうの気にしてる感じですか？

「地雷踏んだかな？」

「踏んだからこうなってるんだよ。私はそういうの気にしないけどね」

紫さんの友人だから見かけによらずそれなりにいい歳だとは思っただけ。

「参ったなあ……」

「空が参ったって言うてどうするの」

「そうだね。でも萃香、今ッ参った」って言ったよね」

「……あ」

「俺の勝ち。やったね」

「いや、今のは……ッ！」

「ダメ。負けは負け。潔く認める！」

しばらくはぐぬぬと唸り続けていたが、やがて負けを認めて肩を落とす。

俺としても今のは予想外の結末だったけれど。

「ご飯が減ってきたから作ってくる」

『おいちよつと待て、そこのクソガキ』

女性陣一同が俺を逃がすまいと取り囲む。

全員素敵な笑顔だけど米神に青筋が浮かび、目は決して笑ってない。どう見ても激おこですわわかります。

「皆さん、諦めたらそこで試合……いいえ、婚期終りよ——」  
『喧しいッ!』

「——ッ!!」

女性陣の容赦ない弾幕や鉄拳制裁により、声にならない悲鳴を上げて気絶した。

「イテテテ……。酷い目に遭ったな」

意識を取り戻して周囲を見渡した。

宴会場にいたはずだが、俺はどこかの部屋で布団で寝かされていたようだ。

流石にこのまま放置も可哀そうだと思った……。のだと思いたい。

俺がやられる瞬間を萃香が大爆笑しながら眺めていたいたのはちよつとムカついた。

「宴会はまだやってる……。みたいだね」

部屋の外はまだ騒がしい。俺が気絶してそんなに経ってないみたいだ

「よお、空。目が覚めたか」

外に出ると炎惶が待ち構えていた。

「あ、炎惶! カイラたちは?」

「あそこにいるぜ」

彼が顎で示した方にカイラが会場の隅で座っていた。

その傍には白い蛇もだ。

二人共俺と目が合うと気まずそうに目を逸らした。

「楽しんでる?」

「お前には私が楽しそうに見えるか?」

「ううん。むしろ居心地悪そう」

「なら最初から聞くな……」

「社交辞令的な? まあ、いいや。何か食べた? まだなら取って来るけど」

「いらん」

「そっか。……ああ、そうだ。少し話ししようよ。カイラのこと聞き  
たかったんだ」

「俺も空に賛成だ。お前に何があったか聞かせてくれ」

炎惺も彼のことを知りたかったようで酒と少しのつまみを持って  
輪に加わった。

今の彼に暴れる気力はもうない。

俯きながらカイラはぼつぼつと語りだした。

「……私は半妖だ。もう半分は人間の血が混ざってる」

『知ってますけど』

炎惺は昔の知り合いみたいだし、俺も記憶を覗いて知った。

俺達の余計な茶々にほんのわずかにカイラが頬引き攣らせるが咳  
払いをして話を続ける。

「……自分の生まれに不満を持ったことはなかった。両親は優し  
いヒトだったからな。だが、半妖であったが故に両親以外の周りには  
受け入れられなかったんだ。もちろん人間にもな」

妖怪からすれば半端者。人間からすれば恐怖の対象。

「どちらの陣営も私を受け入れてくれない。それがとても悔しくて、  
憎くて……だが、それでも私には叶えたい夢があった。さっき言った  
私の両親だ。仲の良い両親のように当たり前のように人間と妖怪が  
手を取れる日が出来るんじゃないかと私は考えていたんだ。……あ  
の日までは」

「あの日?」

「私と炎惺が出会ってからの話しだ」

「カイラと俺は妖怪の学校の同級生なんだよ」

「それと同時に私の夢を馬鹿にしなかった一人の友人でもあつ  
た」

俺とヴァーリみたいな関係とはまた違った友情なのかな?

「まあ、こいつがその夢を語ってくれるまで大分時間かかったけどな」

「当たり前だ。そう簡単に信じられるわけがない」

「でも信じたんでしょ?」

「……ああ。こいつは私を認めてくれた。だから話した」

「最初は拍子抜けしたもんだぜ。なんせ、俺と同じこと考える奴がいたからな」

「なら二人は似た者同士ってことだね」

「そういうこった。二人で学校で競い合いながら、妖怪と人間が仲良くするにはどうするかよく話し合った。……懐かしいな」

それを聞いていたカイラも満更でもなさそうだ。

戦闘中にカイラが言っていた邪魔だのなんだのはライバルだったから……？

「で、あの日っていうのは？」

「俺が博麗の巫女に封印されちゃった時だ」

「ああ、そう言えば俺と出会った時にはガシヤポンに封印されてたもんね」

「学校を卒業して俺はエンマ大王に、カイラは俺の補佐としてやっていこうって時だ。博麗の巫女は急に現れて妖怪を片っ端から封印してたみたいでな、俺はそれを止めようとしたら見事に返り討ちにあつて封印されたわけだ。そこからは何も知らねえ」

その後はカイラだけが知っているわけだ。

「炎惺が封印されたと聞いて復讐をしてやろうと考えた。それと同時に私を認めない者が反乱を起こしたのだ。私がどれだけ結果を残そうと半妖は半妖。炎惺という強者がいたから誰も私に何も言わなかっただけで不満はあつたのだ」

「じゃあ、炎惺がいなくなつて」

「ああ。私は昔の私に戻つたさ。あの忌々しい日々。やり返そうにも多勢に無勢、敵が多すぎた。すぐに居場所を無くしたさ」

レッドJのように慕ってくれるものもいたそうだがそれも極僅か。多すぎる敵の前には歯が立たなかった。

それからカイラは色んな場所を転々と移動しながら過ごし、やがて白蛇の彼女と出会った。

その時にはすでにカイラの心は闇が溢れ出していた。

似たような境遇にあつた二人はすぐに打ち解け、カイラは白蛇の能力を受け入れた。

だだ、誤算として白蛇の能力で強くなり過ぎた闇はカイラ本人にもどうにもならず、白蛇にも制御が出来なくなっていたようだ。

能力の解除を試みる——その前に博麗の巫女と遭遇して封印された。

「無理矢理つてわけじゃなかったんだね」

「当たり前だ！ カイラ様は私を思っただけの心に住まわせてくださったのだ！ それを貴様は……！」

「そうしなきゃこっちが死ぬところだったから文句言われる筋合いはないね」

白蛇の言い分としては三百年も封印されたが、意識はあったから博麗の巫女や弱い者いじめしてきた妖怪達に対する復讐心だけが日に日に増していき、心が完全に闇に覆われてしまったと。

だけど、復讐よりも先に炎暈と同じく博麗の巫女に封印されたわけだ。

「えーっと、つまり、互いを支え合おうとしたけど君等の復讐心が捻じれ捻じれて捻じれまくって、幻想郷の支配になったわけ？」

「現実的に考えて支配した方が夢を叶える近道と考えたこともあったからな」

考えとしては確かに支配する方が無難なんだろう。カイラは実力もあるから不可能でもなさそうだし。

「博麗の巫女への復讐は？」

「フン、死んだ者にどう復讐するというのが」

それもそっか。

博麗の巫女は人間。三百年封印されてる間に亡くなっている当然だ。霊夢さんも博麗の巫女だけれど関係ない。

そのことを知ったカイラの博麗の巫女に対する復讐心はすぐに消えたのだ。

「ま、なんにせよ。お前らを止めることが出来て——」

「お兄様！ ようやく見つけましたよー！」

炎暈がまとめて終わり——かと思いきや、緑色の髪の少女がそれを遮った。

妖怪のせいです！

妖怪のせいです！

Side空

カイラと炎惺、白蛇と俺で話し合っていたところに緑色の髪の少女が割って入って来た。

少女がお兄様と呼んだのはカイラか炎惺のどちらかみたいだが、頬を引きつらせる炎惺の反応を見て察した。

「お兄様？ 炎惺の知り合い？」

「ま、まあそんなところだ」

三百年振りに再会するのだからもう少し嬉しそうな顔をしてもいいと思うのだが、炎惺は気まずそうだ。

その反応が余計に少女の癪に障ったようで、炎惺を睨みつけながらこちらにやってくる。

「よ、よお、映姫。どうしたんだ？」

「どうしたはこちらのセリフです！」

炎惺に映姫と呼ばれた少女の形相が怖いものになっていく。

「三百年ですよ三百年！ お兄様がいなくなって私がどれだけ苦労したと思っているんですか！」

「お、よお。悪かった。でも——」

「でももすともありません！ 前々からチャランポランなところが心配でしたがまさか三百年も職務を放棄するなんてどこで何をしていたんですか!? 理由次第ではただではおきませんから覚悟してください！ 大体ですね——」

そこから映姫さんのありがたいーい説教が始まり、炎惺はいつの間にか正座をしながら説教を受けていた。

「彼女は四季映姫。炎惺の妹だ」

炎惺の苗字は四季か。

「全然似てないね」

「血が繋がっているわけじゃないからな。それでもあの二人は本当の兄妹のような関係だった」

炎惺と付き合いの長いカイラが彼女を知っていて当然か。

「炎惺がエンマ大王となり、私があいつの補佐をしていたのはさつき知っただろう？ 映姫も俺達を陰ながら支えてくれたんだ。だが、やはりというかなんというか。俺達が消えてしまったせいで大分負担を掛けてしまったようだな」

「カイラも一緒に怒られるべきだね」

「フツ、その前に逃げるに決まっている」

「決め顔でそのセリフはダサすぎだよ」

どうやら彼も映姫さんに説教された経験があるようだ。

俺も炎惺が説教されているのを見て、アレをされたいとは思わない。

「よ、ようやく終わった……」

説教されること十五分程。解放された炎惺の顔は疲れ切って足はフラフラで覚束ない。

逆に映姫さんの方は三百年の間溜め続けていた不満やらなんやらを伝えきつて満足そうだ。

「あなたが龍神空さんですね。此度の異変解決に加え、馬鹿な兄とカイラさんを助けて下さりありがとうございます」

「たまたま巻き込まれた結果がこれですけどね」

「おや？ 私の見立てでは自分から厄介ごとに突っ込んでいくタイプかと思ったのですが、違うようですね」

あー、それはあながち間違いじゃないかも……。

適当に誤魔化して話題を変えた。

「ご紹介が遅れました。四季映姫・ヤマザナドゥと申します」

「ヤマザナドゥ？」

「役職名です。以前はエンマ、もしくはエンマ大王となっていました。が、どこかの愚兄と補佐の方がいなくなったせいで私がなし崩し的にならざるを得なかったのです」

睨まれた二人がそろって視線を逸らす。

封印されていたとは言え、申し訳なさはあるようだ。

「エンマじゃないのはどうして？」

「私はあくまで代理です。先代が死んだわけでも隠居したわけでもないのにエンマ大王を名乗るなんてできません。ですが代理と言えど肩書は必要となり、閻魔の意味を持つヤマザナドウを名乗ることにしたのです。……と言ってもその肩書は今日までですがね」

本来のエンマ大王である炎惺が戻って来たのだから、彼女が代理である必要はなくなった。

「仕事の引継ぎでまだまだ忙しいでしょうけど、それが終われば自分の時間がたくさん持てそうですね」

「……もう少しやってくれてもいいのによ」

「お兄様、今何か仰いまして？」

「仕事押し付けてごめんな！ 明日からエンマ大王として頑張るから！」

「私の説教が伝わったようで何よりです。では、私はこれで」

綺麗な一札をして去って行った。

「はあ……あいつの説教は生きた心地がしねえ」

「まったくだ」

「また明日から頼むぜ」

「任せておけ」

二人は互いの拳を軽く合わせた。

「そんじゃ、飲み直しといこうぜ！」

炎惺の一言で俺達は騒ぐ輪の中に加わった。

賑やかな宴会は日付が変わるまで続いたのだった。

「——で、良い感じに終わってるけど、あなたの隣にいる女が誰かしら？」

はい、龍神空君は只今龍神家の住人やなのは達の前で正座しております。皆に睨みつけられて防御力下がりがまくりである。

場所は幻想郷ではなく、自分の家だ。

宴会後の話しを簡潔に話すと、翌日には炎惺が何を思ったのか知らないが『幻想郷一弾幕会』を開催した。

帰りがかったが幻想郷の強者と戦えると考えたら出場していた。仕方なかったんやー！　だつて霊夢さんや萃香と本気で戦えるんだもの！

賞品が願いを一つ叶えてくれるというものだった。主催者である炎傭が出来る範囲だけれど。

大会の優勝者は霊夢さん。食事のために本気の本気になった博麗の巫女は強かったとだけ言っておこう。

俺は人には言えないようなあの手この手で何とか対戦相手達を倒して準優勝したものの、全力を出し切つてぶっ倒れた。

ま、おかげで強くなれたから結果オーライかな。

大会が終わつて二日後の今日、ようやく紫さんに頼んで元居た世界に帰してもらおうよう頼んだのだ。

で、快く承諾してくれた紫さんが俺を送ろうとした瞬間、予想外の事態が起きた。

元々連れて行くことになっていたジバニャン、コマさん、ウイスパーはいいとして、タマモとフランが付いてきたのだ。

しかもスキマから出て戻つて来た場所はバニングス家の廊下ではなく龍神家のリビング。

龍神家の住人どころかいつものメンバーのほとんどがそこにいた。

そして、俺が無事とわかるよりも鉄拳が飛んできてからの事情聴取。順序がおかしいけどこうして今にいたるわけだ。

「……幻想郷っていう世界で知り合った子達。ジバニャン、コマさん、ウイスパー、フラン、タマモです」

『ふーん……』

ヤバイ。具体的に何がヤバイのかわからないけどものすごくヤバイ程皆さん怒つてらっしやる。

「……ゆ、許してニヤン♪」

手を丸めて甘えるような声でジバニヤンの真似をしてみた。

皆が俯いて肩を震わせていた。

失敗した。余計に怒らせてしまったようだ。

“お姉ちゃん好き” 作戦はなのは達同世代にも見たことのある十

香達にも通用しない。

いつその事開き直ってしまおう……！

「皆、よく聞いて」

『…………？』

「これはね——妖怪のせいなんだ！」

『……………』

あんなバカア？とでも言いたげな視線になったが構わず続ける。

「俺が幻想郷に行ったのは妖怪せいだし、異変を起こしたのも妖怪が原因。俺がすぐに帰れなかったのも（色々と学んだり、遊んだり、修行してたけど）妖怪の仕業。……そう！ 全ては妖怪のせいなんだ！

つまり俺は悪くない！」

やったか……？

「言いたいことはそれだけ？」

あ、あれー？ 余計に怒ってらっしやる？

「じゃあ、一人一回ずつ思いつきやりゃっていいから♪」

「へ？」

思いつきりって何？ さっき殴ったのじゃ足りないってことですか？

嫌な予感が出て逃げ出そうとしたが時すでに遅し。

あつという間にバインドでガチガチに拘束され、地下のトレーニングルームに連れていかれた。

一人ひとりに全力全開ならぬ全力全壊と言える攻撃を喰らって絶した。

「……………は……ああ、自分の部屋か」

数日離れていただけに、何故か懐かしく思えてしまう。

つたく、皆して本気でくるなんて酷いつての。

お帰りの言葉の代わりに全力攻撃されたことを思い出して、心の中で悪態を吐いた。

口にしなかったのはフェイトがすぐ傍にいたためだ。

「空、大丈夫？」

やった奴の内トの一人がそれを聞くのかと口に出しかけたが、機嫌を損ねてまた気絶するのは勘弁なのでなんとか堪えた。

「言っておくけど、私は謝らないからね？」

考えていることを見透かされた物言いに頬が引き攣る。

「空は唐変木で朴念仁で鈍感だからわからないだろうけどね」

「そこまで言わなくても——スイマセン。ボクガワルイデス」

「……まあいいや。今更だもんね。——これで許してあげる」

普段の俺なら避けられるはずなのに、目が覚めたばかりで油断していたところを不意打ちでフェイトの唇が俺の唇に押し付けられた。

「……………え？」

「そういうことだから」

頬を朱に染めたフェイトが今まで見たことない大人びた笑顔を見せたのだった。

S i d e o u t

## 空インデックス 学園都市です！

学園都市です！

Side空

走っている。ただひたすらに走っている。でも、走る先にゴールなど存在はしない。あるとすれば止まった時に来る絶望だけだろう。

それもここらが限界かな……？

一緒に走っているとなりにいるツンツン頭の高校生をチラリと見ると相当辛そうな表情だ。

足を動かす速度を徐々に緩め、止まった。

「お、おい！ 止まったら死ぬぞ！」

「だけど当麻さんは限界ですよね？」

「それは……」

「だからここで終わりにしましょう」

「っ！ わかった。それなら俺も覚悟を決める！」

覚悟を決めて後ろを振り返る。

迫りくる人物に頬を引きつらせる。

「……なあ、やっぱりもう一回逃げないか？」

「そうしたいけどもう無理じゃないですか？」

一瞬にして覚悟が砕けたがもう逃げられない。

「だよな……」

「——みいつけたあ」

ついに俺達を追いかけていた人物が目前に現れた。

やや逆立った茶髪と周囲に発生させてるプラズマはまるで超サイヤ人2のようだ。

俺達は無言で頷き合うとその場に正座して頭を下げた。

『ごめんなさい！』



とだろう。

どこか知ってる気がする力は感じるが悪魔や天使と言った人外も近くにはいない。

ともあれ、どうやら本当に異世界で間違いなさそうだ。

ハア……またか。

これで三回目だ。

しかも、今回は神器やデバイスのブレイブ、精霊の力が無い。つまり自力で帰ることができない……わけじゃないが、結構面倒なことになるからあまり使いたくない手段だ。

なのは達の誰かが気付いて迎えに来てれるといいんだけど……。

『不幸だ……』

不意に誰かと声が重なった。

周りを見回すと、すぐそばにツンツン頭の高校生くらいの少年がいた。

少年の方も俺に気が付いたようで目が合った。

「……お前も不幸なことでもあったのか？」

「えーっと、簡単に言うのと知り合いの実験に巻き込まれて家に帰れなくなっちゃった、って感じですよ」

「それって結構重くないか!? 俺なんか財布落として、知り合いから貰ったおにぎりを別の知り合いに食われただけだからな。怒ったら

「お腹が空いたんだよ!」って逆ギレされて噛み付かれたし……」

「それはそれでかなり辛いですよね!」

お互いの不幸話を言い終わったら、二人揃ってため息が出た。

「……帰る場所ないんだっいたらしばらく俺の住んでる寮に来るか？」

このままさよならかと思いきや、まさかの提案が出された。

「部外者が寮に入って大丈夫なんですか? しかもこんなところの誰ともわからない奴を」

「もうすでに居候がいるから大丈夫だ。それに明らかに俺よりも年下の子が困ってるのは放っておけない」

そう言われてしまっっては反論が出来ない。

結局少年の好意に甘えてしばらく寮に居座る事になった。

「お前、名前は？」

「龍神空です。空って呼んでください」

「俺は上条当麻。好きに呼んでくれ。よろしくな、空」

「こちらこそよろしくお願ひしますね、お兄さん」

「お、お兄さん……。違和感がありまくりだな。別の呼び方にしてくれ。一応妹もいるからな」

本人がそう言ったので当麻さんと呼ぶことにした。お詫びついでに俺の頭を右手でわしゃわしゃと撫でた。

その瞬間、ガラスが砕けるような音がした。

「俺の右手が反応した!? って、お前……その頭……!」

「俺の頭になにかある——え？」

気になって頭を触ってみたら、髪の毛以外に硬い突起物のようなものがあつた。

「どんなのがありますか？」

もしかして……。

「角……みたいだな。水晶みたいに透き通つててスゲー綺麗なやつ」

予想通りのものが頭にあつた。

普段隠しているはずの角があるということは本来の姿に戻りかけている状態だ。

だが、俺は自分からその姿になることは戦闘以外では滅多にない。

それなのに出ているということとはあの右手に触られたことが原因とみていいだろう。

他の部分も触られたら完全に……。出来るだけあの右手には触れないようにしておこう。いや、そんな余裕なんてもうないか。

「その角を見るに、空は人間じゃないんだな」

「そうですよ。化け物だと知って怖くなりました？」

「いや、全然」

「……え？」

「この『学園都市』には魔術とか科学とかわけわかんねーものが多い。それに天使にだって会ったことあるからな。今更頭に角が生え

「たくらいじゃ、驚かないぜ」

上条当麻はなのは達と同じように俺を拒絶しなかった。

だが、なのは達付き合いが長かったからであって、今しがた出会ったばかりの人が受け入れてくれると誰が予想できようか。

「それに、俺も生まれつき変な力があるからな」

どこか自嘲気味に自分の右手を見つめていた。

『……………』

二人の間にしんみりとした雰囲気漂う。

「は、早く寮に行きませんか!?!」

「そ、そうだな! うん、そうしよう! 寮はこっちだ!」

話が進まなくなってしまうので、強引に話題を変えた。

お兄さんが歩き出した方向に俺も進みだす。

「ね、ねえ、あんた!」

進みだした方向にどこかの制服を着た少女が現れた。

肩に触れるか触れないかくらいの長さの茶髪。歳はお兄さんよりも下に見える。

「あんた」と呼んだのは俺ではなく当麻さんの方に向けてだった。

「さっきのおにぎり……………どう、だった?」

頬を赤らめてチラチラと様子を窺う少女。

察するにこの少女がおにぎりを渡したみたいだ。

「え、おにぎり? (あ、ああ、そういやそんなのあったな。食ってないけど) ありがとな、美味しかった!」

「ん? 当麻さん、さっき知り合いに食われたって……………」

「……………食われたってどういうこと?」

恥じらっていた顔から途端に能面のような表情になった。

しまった。事情は分からないけど話を合わせるべきだった。

「実はな……………こいつが俺から奪ったんだ!」

当麻さんの指差す方にいるのは俺。

あれれー? なんか俺の所為にされかけてるよね?

「今の、ホント?」

ギロリと殺気の籠った視線が俺に向けられた。

「違います！」

「はあ!? テメエ、俺の飯盗んどきながらしらばつくれる気か!? 仏よりも仏なことで定評のある上条さんでも食い物に関しては一匹怖いんだからな! 大人しくビリビリの制裁受ける！」

仏よりも仏ってなに!?!とツツコミを入れそうになった直前で、俺達二人の間に雷撃が迸る。

攻撃が来た方向を見れば、身体の周りに電気を発生させる少女がいた。

電気を使う能力? でも、魔力は全く感知できなかった。さつき当麻さんが言っていた科学の方の力かな? あとで詳しいこと聞いてみたいな。

「ビリビリって呼ぶなって……言ってるでしょうがッ！」

って、やば! 呑気に考え事なんかしてる場合じゃない!

彼女を中心に多数の雷撃が俺達二人に襲い掛かる。これでは完全にとぼっちりだ。

当麻さんと顔を見合わせて頷きあうと一斉に駆け出した。

そして、冒頭に戻るわけだ。

「道草食ったけどこれで寮に行けるな」

小休止をしたあと、今度こそ寮に向かった。

「ここが俺の住む寮だ。ただいま」

「お邪魔しまーす」

当麻さんに続いて俺も部屋に入る。

床はフローリング。台所は部屋と隣接。トイレ、風呂がある。

ここに来るまでにボロいと愚痴っていたが、外観だけで、中身はそこまで酷いものではないと思う。

部屋の奥に進むとゲームをしている白い修道服を着た少女がいた。その傍には三毛猫が一匹。

「おーい、インデックス。帰ったぞー」

「あ、とうま! おかえり! お腹が——おや? その男の子は誰

なのかな？」

当麻さんの声に反応して少女がゲームを中断。俺の存在に気が付いた。

「こいつは空。えーっと、俺の親戚なんだよ。家庭の事情でしばらく預かることになったから」

もちろん彼の出まかせ。寮の管理人にも同じことを言ってなんとか入れてもらえた。

「へえー！ 私はインデックス！ こっちはペットのスフィックスだよ！ よろしくね、空！」

長い銀髪と緑色の瞳。14、5歳の少女だ。見た目に反して日本語がペラペラで驚いた。

「こちらこそよろしくお願いします。どのくらいここに居るかわかりませんが、手伝えることがあれば何でもやりますね」

「おおー！ 若いのになんてできた子！ とうまも不幸不幸言ってるいで好青年にならないかねえ？」

「おうおう随分な言いようですねインデックスさんよ。家事を手伝わず食べるか寝るかゲームするだけのシスターさんにだけは言われたくないね！」

皮肉たつぷりのインデックスさんに当麻さんも黙っていない。

「それが私の仕事なんだよ！」

「そんな楽な仕事があつてたまるか！ このパチモンシスターが！」  
居候シスターの仕事はただ飯食らい。俺の世界じゃ考えられない。

「……とうま、言つてはならないことを言つたね？ 今のは教会を敵に回すつてことで良いんだね？」

「はっ！ 教会だか魔術だか知らねえが……そのふざけた幻想を——」

「あ、台所借りますねー」

「言わせて！ 上条さんの決め台詞最後まで言わせて！」

良いところで遮って台所に入る。

来る途中に買ってきた材料を出し、料理を始めた。

「できましたー」

一時間程で料理が完成した。

白米、味噌汁、焼き鮭、だし巻き卵、きんぴらごぼう。ザ・和風の料理が机に並んだ。

『美味しい！』

二人からは大絶賛。

その日の夕飯はおかわりを要求しまくるインデックスさんに当麻さんが人知れず泣いたのだった。

翌日、当麻さんが高校に登校しなければならぬそうだ。

「インデックスは家にいるだろうけど、空はどうする？」

「最初と一緒に学校まで行こうかなって。そのあとは適当に散歩します」

ついでに力の正体を探すのと昨日の人に会いたい。

「わかった。暗くならないうちに帰って来いよ」

「はい」

一緒に部屋から出た。

そのまま階段を下りるかと思いきや、当麻さんは女子寮に入って誰かの部屋のチャイムを鳴らした。

「おはよ、当麻」

「おう。学校行こうぜ、英竜<sup>えりゅう</sup>」

部屋から出てきたのは小柄な体系で白髪、赤い瞳の少女。

その姿にイリヤを連想させた。

「その子は？」

「俺の親戚。しばらく家に泊まることになってる空だ」

「空です。よろしくお願いします」

「……ふーん。星空<sup>ほしぞら</sup>英竜だよ。こちらこそよろしく」

かなり訝しむ視線を向けられながらインデックスさんの時と同じように挨拶を済ませて寮の外に出た。

学校の正門に着いたらそこで二人とは別れて自由行動開始。

「どこに行こうかな？」

昨日も見たが右を見ても左を見ても同じような高層ビルばかり。興味をそそられるようなものが見つかりにくい。発展しすぎるのも考えもの。

「よーしっ！ 走りながら色々探検しよーっと！」

軽く準備運動をして学園都市内を走り出したのだった。

異世界での再会です！

異世界での再会です！

S i d e 空

新しい発見を求めて、ついでに学園都市を把握するためにあちこちを走り回っていた。

異世界から来た俺は通う学校はないし、時間はたくさんある。

うーん、でも……。

ここまで発展していると不審人物への対処は厳しそうだ。身分証の提示をしろ、なんて言われたら一発でアウトだろう。

今まで俺が迷い込んだ異世界は運良くそういう目に合わなかったからいいが、もしもの場合を考えておくべきか。

「ん？」

とある施設の前で足を止めた。

その施設に入っていく人達が着ている制服に見覚えがあつたからだ。

確か昨日会つた……：そういう名前知らないや。

魔力や神セイクリッド・ギア器——少なくとも俺の知る力とはまた違った力で

電撃を放つ少女。

あの時はそんなことよりも命が優先されたから聞けなかったが、彼女の能力にすごく興味がある。

昨夜、当麻さんに軽く説明されたけど、この学園都市は東京都西部に位置し、多数の学術研究機関、先端技術企業の集合体。総人口は約230万人でその8割が学生。日本国の一部ではあるが、高度な『自治権』と日本及び世界各国の科学サイド諸勢力に強大な影響力を持つ。『超能力』という科学分野の開発に力を注いでおり、研究のためという名目のもと全国から多くの子供が集められている。

その手の奴からすれば学生を使って人体実験し放題ってわけね。

異世界から来た俺が余計なことに自ら首を突っ込むような真似はするつもりはないが、巻き込まれたら仕方ない。悪いのは俺を巻き込んだ奴だ。

うん、だから――

「今時ナンパなんて流行らないよ、ヤンキーさん」

「ああん？ ガキが邪魔すんな。さっさとどっか行け」

学校から少し離れたところの暗い路地で、いかにもそういう風な男が青い長髪の女子生徒に迫っていた。

俺のような子供程度どうでもいいと思ったのか、ヤンキーは俺を一瞥してすぐにまた視線を女子生徒に戻した。

……絡まれているのに怯えた様子が一切ないのは気になるけど今はいつか。

「ほいっとな」

「ぬうおおおおおっ!？」

ヤンキーの金的を蹴るとあまりの痛みと身体がちよつと浮かんだ。今回の腹いせに帰ったらアザゼルさんにも食らわせよう。

「ほら、お姉さん、行こ」

倒れ伏すヤンキーを置いて女子生徒を路地裏から連れ出した。

暗い路地だったせいで最初は彼女の顔がよく見えなかったが、改めて向き合って顔を拜んでみたら青と赤のオツドアイだということがわかった。

雄人やオリヴィエさんで慣れていたもののやはり珍しいものは珍しい。

「あなた、凄いですね」

「ん？ 何が？」

「あの男を倒したことですよ」

「そうかなー？ あの人のお姉さんに夢中で油断しまくってたから余裕だったよ？」

「……そうでしたか。（この子が何者か聞くべきなのでしょうけど、一応恩人ですし、聞かないでおきましょうか）」

「ところでお姉さん」

「なんですか？」

「お姉さんの通う学校に電気を放つ人っている？」

昨日の女子生徒が着ていた制服が目の前にお姉さんと一緒の

ものだ。

もしかすると知っているのでは？と思つて尋ねてみた。

「他に特徴はありますか？」

「茶髪のセミロング、ちよつと怒りっぽい？ あとは……」

「もう十分です」

今口にしたので十分に伝わったようでそれ以上は止められた。

「その方のことは知ってますよ。……何かあったのですか？」

「うーんとね、とある人がその人を怒らせたら、なんか俺まで巻き込まれて追い掛け回されて、タンコブが出来ちやうくらいの威力で殴られただけだよ」

お姉さんが顔引き攣らせながら「そうですか……」と呟いた。

「まあ、特にやり返したいとかいうわけじゃないんだけど、どうにかその人に会えたりしないかな？」

「今すぐにでも、と言いたいところですがこれから学校がありますからね。あなたの今日の予定が無ければ放課後にでも私がお呼びしましょうか？」

となると夕方くらいか。それまでには十香達が迎えに来そうだ。

……つて、あれ？ 十香達が近くにいます？

精霊独特のオーラが割とすぐ近くにあった。だが、俺の知る十香達とは違う……：ような気がする。確証なんてものは全くないが、多分俺の知らない十香達なんだと思う。

それと他にも強いオーラがあった。これも知っているヒトのものだ。しかも精霊のすぐ傍。

……どれくらい反応するかな？

膨大な魔力を一瞬だけ放つと周囲に強い風が発生した。

目の前のお姉さんは魔力を持たないことがわかっているので感知が出来ないはずだ。だからただ風が起こつたくらいにしか思わない。

「もう一つ聞きたいんだけど、精霊って知ってる？」

「それは冒険譚に出てくるような、ですか？」

「ううん、天災レベルの力を持つ女の子達。剣とか氷とか時間を操ったり出来るんだけど」

「……知っているには知っています。どこでそれを？」

お姉さんの目付きが鋭くなる。

この様子から察するに精霊達とは知り合いのようだ。

「俺の知り合いに似たような子がいるんで気になっただけです」

余計な誤解が生まれる前にまたあとで会う約束を取り付けてその場を後にしたのだった。

広々とした公園に入り、敷地内にあつた自販機でスポーツドリンクを買った。

ベンチに腰を下ろして飲んでいるといきなり複数人の男女が何も無いところから現れた。

先程の魔力放出はこの人たちを誘い出すためだ。

「久しぶりだね」

「ええ」

黒い帽子と青ジャージの少女が皆を代表して話しかけてきた。

言葉は少ないが俺達からすれば十分だ。

「元気だったかどうかは聞かなくてもわかります。どうやらまた強くなったようですね、空」

「うん。でもまだまだ強くなるよ」

「手合わせしますか？」

「もちろん！ お姉ちゃん！」

聖剣を構えた少女——ヒロインXに全力で挑む。

「——それでは改めて。お久しぶりですね、空」

「うん！ 久しぶり！」

お姉ちゃんの他にも満足するまで存分に戦って一息ついた。

改めて再会の挨拶を笑顔で返事をするのと釣られるようにして彼女も笑った。

周りの他の人達も再会を喜んで微笑んでくれた。

彼女達は英霊と呼ばれる存在だ。簡単に言うなら、歴史に登場する偉人や英雄と言ったところか。中には聞いたことがない名前や「い

や、お前絶対に英霊ちやうやろ！」と言いたくなるような人もいるが、そこはそつとして置いておこう。

本来なら故人、しかも生まれる時代が全く違うはずの英霊達がこの場にいるのは衛宮藍という少女の『転生特典』によるものだ。

「もう三か月くらいか……。でも、また別の世界で会うなんて凄いな」  
「さ、三か月？ 何を言っているのですか？ 私達が前に会ったのは何十年も前のことですよ？」

……何十年も前？

「いやいや、それはおかしいでしょ！ 何十年も前なら俺もつと成長してるよ！」

まるでもう一度転生したようでは——……。転生？ あれ？ これはひよつとして……。

あまりにも俺達の話が食い違っている。嘘を言うにしても得することなんて何もないだろうし、妙な引っかけがある。

「ねえ、もしかして藍さんって二度目の転生した？」

「え？ ええ。前の世界で安らかに逝きました。それと同時に私達英霊も居なくなるはずだったのですが、何故かもう一度転生することになりました、赤子からやり直してますよ」

「なるほどね」

となると……。俺達の進む時間が違うということ……。でいいのかな？

俺にとつての三か月がお姉ちゃんにとつては数十年であるということ。うーん、イマイチ理解が出来ないな。……。ま、専門家に頼らなければいけない程難しすぎることは放っておけばいいか。

「難しいですね。まあ、それはさておき。空はどうしてこの世界に？

あなたもまさか転生を？」

俺と同じく頭の中で整理しきれなかったようでスパッと諦めて話題を変えてきた。

「ううん。知り合いに異世界に飛ばされただけ。ブレイヴがあれば座標特定して帰ることが出来ただけ、間が悪いことに向こうに置いて来ちゃって」

「それは、その……災難でしたね……。でも、もう大丈夫です！ 何故ならこの私が——お姉ちゃんがいるのですから！」

同情するような表情から一転、私を頼れと言わんばかりの表情になった。

他の英霊達も同じような表情ばかりだ。

過去の偉人達が助けしてくれるなんて光栄なことに違いない。

「ありがと。でも、今は当麻さんって人のところでお世話になってるから大丈夫。それに——」

思ったよりもお早いことで。

『——ッ!!』

遙か上空から知っている少女の音がする。何を言っているかはまだ遠くてわからない。

英霊達は何ごとかと困惑しながら上をみるが、上を見なくてもわかる。

『……らあああああああああああああッ!』

徐々に声が近くなる。

ふと見上げれば魔力強化した視力でその姿を捉えることが出来た。

『空あああああああッ!!』

そしてついに俺の名前を呼ぶ声はつきり聞こえた。

「下がってたほうがいいよ」

そこらの一般人よりも頑丈で強者揃いの英霊達に言う必要はないかもしれないが念のため注意して、距離を置く。

落下してくる夜色の髪を持つ少女は俺目掛けて真っすぐだ。

「受け止めてこい、空」

アタランテさんに背中をポンポンと叩かれて頷く。

『——龍神化』

身体全体から静かに力が溢れ出す。

背中に意識を集中させて黒い翼を出し、真上に飛翔。

「十香ッ!」

落下してくる少女の名前を呼んで少女を抱きとめる。

勢いが強すぎて俺まで落下しかけるが、気合を入れて空中に留まっ

た。

「や、十香。おはよう」

「おはようじゃない！ この馬鹿者！」

「ええー……」

顔を合わせるなりいきなり罵倒が飛んできた。

「また勝手にいなくなつて！ とてつもなく心配したんだぞ?!」

「わ、悪かつたよ……」

十香が泣きそうになるほど怒っている理由はわからなくもないけど、俺が望んで異世界に行つてるわけじゃないし、帰ることが出来るならとつくに帰っている。……まあ、興味が湧いちゃったら帰るまでに寄り道くらいはさせてほしいけど。

元居た場所まで降り立って十香から離れる。

「んで、他の皆はどうしてる？」

「そうだな、そろそろ落ちてくると思うぞ。ほら」

「……は？」

十香に言われて上を見上げてみれば複数人の少女達が上空から落下してきていた。

「全員受け止めてやるんだな」

ざまあみろと言いたげな十香に何も言わずに彼女達——十香以外の精霊達やなのは達を迎えに行った。

「迎えに来てくれたのは素直に嬉しいけどさ、わざわざ全員で来ることもないと思うんだけど？」

一人ひとり受けてめて下ろし終えてから呆れ気味に少女達を見やれば、キツときつく睨み返された。

『勝手にどっか行く方が悪い!』

言っていることは御もつとも。だが、それも全てアザゼルさんの所為だから俺に非はないはずだ。

『ふう……久々にここに入ったがやはり落ち着くな』

《やはり私の定位置はマスターの腕ですね》

怒ってる少女達とは関係ないところ——俺の心の世界ではドライグ達がのんびりしていて、ブレイブの声も弾んでいた。

そう言えば、最近は自分と遙のことばかりで構っている時間がほとんどなかった。

「さーてと、そんじや帰りますか、と言いたいところなんだけど、もう少しだけここにいさせて。今日中には帰るから」

『そんなのダ——』

皆にダメと言われるよりも速くに駆け出し、その場から逃げ去った。

幸い、英霊達は見てるだけで何もせず、龍神化したままだったため追いつける者は十香達やなのは達の中には存在しなかった。

「ん？ おい、テメエ！ さっきのガキだな！」

公園から逃げ出して再び街をうろちようと探検。

そしたら、あら不思議。

先程気絶させたヤンキーが似たようなお友達を連れていたところにばったり遭遇した。

「さっきのお返したーっぶりさせてもらうぜ？ 泣いても許さないからな？」

ヤンキーA が あらわれた。

ヤンキーB が あらわれた。

ヤンキーC が あらわれた。

ヤンキーD が あらわれた。

ヤンキーE が あらわれた。

「うわー、めんど……」

ソラ は めんどうになつて 逃げだした。

「逃がすかってんだ！」

しかし 囲まれて逃げられなかった。

「死ねええ！」

ヤンキーA の こうげき！

ソラ は 見聞色の覇気で パンチをよけた。

「うりゃああー！」



が近い。

しかし学生は逃がしてくれなさそうだ。

スタンド以外の能力がないことを祈るしかないか。

「知りたかったら捕まえてごらんよ」

「ハッ、鬼ごっこってわけか。いいぜ。すぐに捕まえてやるよ！」

こうしてスタンド使いの学生との鬼ごっこが始まったのだった。

転生者達と戦います！

転生者達と戦います！

Side空

「待てやコラアツ！」

「やーなこった」

追いかけてくる男子高校生の方に振り返ってあつかんべーをした。街を歩く人々俺達二人を何事かと不審がるが気にせず走る。

ちなみに周囲の地理を覚えながら走っていても彼との追いかけては余裕である。

挑発が効いたようで米神辺りに青筋を浮かべながら追いかけてくる。

「ただの人間が身体能力で俺に勝てるわけないよ」

「あぁッ!? どういう意味だ!?!」

「そのままの意味だけど。ほら、スタンド使わないの？ スタープラチナで時を止めればいいのに。それとも他にも能力あるのかな？」

ブレイブに見てもらったところ魔力量はどこにでもいる一般人と同じ——言ってしまうえば魔法を使うには不十分。俺の知らない魔力の消費量が少ない魔法を使う可能性もあるがその素振りはない。

身体能力は体力的に見て同世代の人と比べてある方だろう。息切れもしてないから相当かもしれない

「だったら見せてやるよッ！ 『スタープラチナ・ザ・ワールド』ッ！」

背後から現れた紫の巨人——スタープラチナが能力を発動する。

瞬間、周囲の時間が止まる。

それは俺も例外なく当てはまる。

まあ、動こうと思えば動けるけど。

「へっ、あれだけ煽ってたくせに随分呆気ないもんだなあ。やつぱその辺はおこちゃまってことか」

さっきまでの怒り顔が嘘のようにニヤニヤしながら俺に迫って来る。

その間俺は俺でゆっくり考えることが出来る。

スタープラチナが止めることが出来る時間は約5秒。正確に言う  
とスタープラチナのスピードが光の速さを超えることで時を止めて  
いるらしい。

分かったところで大して意味はないのだけど。

「さあして、どう遊んでやろうか」

遂に俺の前に到着。スタープラチナの射程範囲に入ってしまった。  
久々にアイツの定番だ。

「年上を怒らせるとな……泣く思いをすんのはガキなんだよ！」

彼が言い終えたのと同時にスタープラチナが拳を振るった。

だが——届かない。

ガラスが割れる音と共に俺の背後から伸びた腕がスタープラチナ  
の拳を掴んで止めたのだ。

「んなッ!？」

「——」『相手が勝ち誇ったとき、そいつはすでに敗北してる』。古事  
記にも書いてことだよ」

「書いてねえよッ! ってか、お前もスタンド使いだつてのか!？」

「そーゆーこと。わかったところでもう一度鬼ごっこ再開だね」

『鬼だな』《鬼ですな》

「それは追いかけてくる相手だから」

アバターの能力で一時的にスタンドを消し去り、本体の彼を掴んで  
投げ飛ばした。

すでに時は動き出し、周りの注目を集める。

さつきまで俺を追いかけていた男がいきなり吹き飛ぶものだから  
余計にだ。

そろそろ時間か。

朝に出会った中学生との約束がある。

それまでにはスタンド使いの高校生との鬼ごっこを終わりにしな  
ければならない。

すぐに起き上がって追いかけてくる姿を見るからに、向こうの体力  
はまだまだありそうだ。その上、複数のスタンドを持っていると考え  
るなら巻くのは至難の業。

気絶させれば楽ではあるけれど面倒ごとは増やしたくない。

「これならどうだッ！ 『ヘブンス・ドアー』ッ！」

今度は白い帽子を被った少年のような外見のスタンドが飛び出てくる。

触れようとして手を伸ばすが武装色の覇気を纏った右手で返り討ちにした。

スタープラチナよりも射程範囲は広いが能力を使うには俺に触らないと意味がない。

「エメラルドスプラッシュ！」

ヘブンス・ドアーを消し、別のスタンドを召喚。

まるで光ったメロンのような姿のスタンド——ハイエロファントグリーンだ。

緑色の液体を固めて超高速で飛ばしてくる。技名通り宝石のエメラルドのような攻撃だ。

「ほいっとな」

その場で一時停止。見聞色の覇気を使って身体を逸らすことで、エメラルドスプラッシュが俺の横を通り過ぎていく。

外れた攻撃が地面やら建物の壁といった至る所に当たる。

幸いなことに人通りが少なくなっていたので人に被害は出ていない。彼もそれがわかって使ったのだろう。

スタンドの攻撃は普通の人には見えないわけだし、あまり騒ぎにはならなさそうだ。

「あれ？ もうネタ切れ？」

攻撃がピタリと止んだことを不思議に思っただけ振り返って尋ねた。

彼の顔は諦めた表情はしていないし、足を止めていない。

作戦でも考えてるのかな？

彼が諦めようと諦めなからうとどちらでもいい。

約束の場所はもう目と鼻の先。中学生の姿も視界に入ってる。

「おーい、お姉さんー！」

俺の声に気が付いたお姉さんが小さく手を振って固まった。

多分般若の形相で後ろから追いかけてくる高校生にビックリした

のだろうけど、理由はそれだけではなさそうだ。

「翔さん!? 何をなさっているのですか!？」

「ちようどいいところに! 小夜! そのガキ捕まえてくれ!」

「え? え?」

約束していた相手、小夜と呼ばれた少女が困惑する。昨日会った中学生も何事?という顔だ。

一人は名前を知ってるということは知り合いか。

彼女達が困惑している内に行動不能にしておもう。

「ブレイブ」

《はい》

指の先から魔力を細長い糸になるように放出。

電柱や建物に引つ掛けて俺と高校生の間設置。

アメリカの蜘蛛男さんから思いついた技だ。

「うおお!! なんだこりゃ!？」

何も知らずに突っ込んできた高校生が罠に引つかかった。

絡まる魔力の糸が動きを封じていく。

魔力を感じできない人には見えないように仕組んだので見えなかったのだ。

戦っているならここで畳みかけるところだが彼とは遊んでいたわけだからその必要はない。

一応、魔力の糸はフェイトの斬撃でも切れないようにそれなりに丈夫にはあるが、スタープラチナのようなパワー系のスタンドを使えばすぐにでも千切れてしまうだろう。念のため足元にも仕掛けて転ばせようか。

高校生が間にお姉さんと昨日の電撃を使う人を連れて近くの公園に入った。

「お姉さん、お待たせー」

「えつと……あ、はい。ところで翔さんとはなにがあつたのですか?」

「ちよつとした鬼ごっこ。俺の勝ちだね! ブイ!」

「そんなことはどうでもいいわよ。私を呼んだ理由は?」

そうさそうさ。それが本題だった。

「お姉さんのこと知りたかったんだ！ あの電撃って何!? どうやって出してるの!? 他にも出来ることある!? どのくらい出し続けられるの!? 俺でも出来るようになるかな!? それから——」

「ちよつ！ ストップストップ！ ちよつと待ちなさい！ そんな一気に言われても答えられないわよ！」

「あ、ごめんなさい」

面白いものを見つけてしまったせいかな質問攻めしてしまった。

「……落ち着いたみたいだから話すわ。けどその前に私の方からいくつか聞いてもいい？」

「うん！」

「そ。じゃあ聞くけど、学園都市にいて私のこと知らないの？」

「知らないよ。あ、でも当麻さんから少し聞いたかな」

「あ、アイツは私のことなんて言ってた!？」

目をこれでもかと思開き、俺に詰め寄って来る姿にちよつと引きながらも答える。

「お嬢様学校に通ってるのに全然お嬢様っぽくないし、よく怒ってるって」

「そ、そう……。やっぱり——」

「でも、後輩思いで真っ直ぐで意外と女の子らしい可愛いところもあるって言ってた」

「!？」

落ち込んだかと思えば、一瞬にして彼女の顔が真っ赤になる。まるで瞬間湯沸かし器だ。

「ふ、ふーん、へえー。ま、まあアイツが私のことをどう思おうと私には関係ないけど。うん、ちつとも嬉しくないけど。……………えへへ」

《ニヤついてて説得力皆無ですね》

「へしー。黙っておくのがいいよ」

しばらくまともに話しが出来そうにないので小夜さんから彼女のことを聞いた。

名前は御坂美琴。

常盤台中学の二年生。  
能力は電撃使い<sup>エレクトロマスター</sup>。超電磁砲<sup>レールガン</sup>という通り名があるそうだ。

この学園都市では能力者の強さに順位があり、彼女は7人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>の第3位。

つ・ま・り——強い！

是非ともお手合わせをお願いしたいところだけど、未だにニヤついていて戦えなさそうだ。

「小夜さんはどんな能力持ってるの？」

彼女も常盤台中学の生徒だ。

なんでも常盤台中学にはレベル3以上の能力者しか入学できないそうなのだ。

そこに彼女も通っているということは能力者であることは間違いない。

「知りたければ戦ってみますか？」

その微笑みには自信があった。

「うん。やろーやろー」

結界を張って周りへ被害を無くす。

御坂さんは結界の外に出したので気にせずには戦える。

一定の距離を互いに取って構える。

戦闘開始の合図は小夜さんが持つ金のコインですることになった。

『誰を使う？』

「(うーん、今のところはいいかな)」

さっきの高校生は転生者で本気で戦ったわけではなく、この世界の基準にはなり得ない。

様子見で素の状態で戦うことにした。

「では、行きます」

親指でコインを上弾いた。

落ちてくるまでの数秒の間に鬼ごっこ<sup>この時</sup>のようなお遊び気分ではなく、戦闘モードに切り替える。

そして、地面にコインが着いた。

「ハッ！」

先に仕掛けたのは小夜さん。

左手から蒼い電撃を発生させると身に着けていた金色の腕輪が変形し、鞭のようなしなりを見せて襲い掛かって来る。

俺は左に跳んで躲す。だが、金色の鞭が急に方向転換し、俺を追って来た。

いつもなら斬るか蹴り返すところなんだけど、さっきの蒼い電撃は御坂さんと同じ能力、なのかな？　だとしたら触ったら鞭を伝って痺れそう。

呑気に考えていたら鞭が目前に迫っていた。

「ブレイブ」

《はい》

展開した防御魔法を踏み台にして躲した。距離が空いたところでブレイブを銃にして鞭を撃つ。

……硬い。

鞭に当たり、攻撃を逸らすことは出来たが魔力弾は弾かれた。

《マスター、あの物質は『金』です》

俺が言わずともいつの間にか解析をしてくれてくれたようでその結果を報告してくれた。

つまり小夜さんの能力は電撃ではなく、金属を操る能力。

恐らく金属全般ではなく、『金』限定だと思う。

そう思ったのは、金が金属の中ではそこまで硬くないから操るならもっと硬い金属を使う方がいいはずだからだ。

彼女が見た目に寄らず『金』が大好きー、とかなら話は別になってくるが。

能力が判明したところで反撃に出ますかね！

全身に魔力を巡らせて身体強化。更に足元に防御魔法を展開。踏み台代わりにして小夜さんへと突っ込む。

彼女が触った地面の一部と鞭の形の金がまた形を変えて迎え撃ってくる。

金が増えた……！　触れたものを金にする能力もあるわけか。

見聞色の覇気どこから攻撃が来るのかを全て把握し、創り出した

魔剣と聖剣を振るう。瞬間、周囲にあつた金が音もなく消えた。

「金が……！ 今何をしたのですか!？」

「喰った」

「く、喰ったって……食べたってことですか!？」

「うん」

今回俺が創った魔剣は金だけを喰らう能力がある。聖剣の方は金を消す能力を付与して創った。それらを振るえば小夜さんの操る金は俺には効かない。

名前は……聖剣がゴールドエンブレイカーで魔剣がゴールドエンイーター黄金喰らいと言ったところか。

「まだやります？ 多分これなくても勝てないと思いますけど」

「……舐めてくれますね」

彼女の答えは戦闘続行だった。

再び地面に触れると先程よりも大量の金が津波となって襲ってくる。

右腕を龍化させ、武装色の覇気で硬化させる。

「龍神の——」

硬化で黒くなった腕に魔力を集め、巨大な爪のように纏わせて黄金の津波に向けて振り下ろした。

「——覇爪」

俺に当たる直前で黄金は五つに割かれた。

やがて勢いをなくし、その場でオブジェクトのように固まった。

「ね?」

「……ッ! まだです! ゴオン・サンダー黄金雷!」

黄金を自身の腕に纏わせ殴りかかって来た。

俺は迎え撃つように右手で押し返す。

撃ち負けたのは小夜さん。彼女は悔しそうに口をかみしめていた。

「はい、これで今度こそ終わり」

これ以上抵抗される前に駆け寄り、首元に魔剣を突き付けた。小夜さんは力なく項垂れて降参のポーズをとった。それを見て剣を消した。

ついでに結界も必要が無くなったのでブレイブに解除してもらった。

御坂さんはいなかった。呆けている間に俺達が帰ったと思ったのだろう。

「……あなたは転生者ですね?」

「うん。お姉さんもでしょ? その能力、どう考えてもこの世界には合っていないから」

鋼の錬金術師もビックリ仰天の黄金製造人間がこの学園都市で普通に誕生したとは到底考えにくい。

「そうです。先程の翔さんもですよ」

「流石にスタンドは見たらわかるよ。藍さんもここにいるみたいだしね。他には?」

「二人います」

片方が精霊の力を持つてるヒトか。もう一人はどんなだろう?

「今から呼べるかな?」

「構いませんが……戦うつもりですか?」

「うん」

「わかりました。ちょっと待ってください」

小夜さんがポケットからスマホを取り出して連絡し始めた。

すると何も無い場所に扉が現れ、中から三人出てきた。

一人は藍さん。もう一人は同じ制服を着た青髪の少女。最後は今朝出会った英竜さんだ。

「おっ! 空君じゃん! 英霊達から聞いてたけど久しぶりだね!」

「どもども。お元気そうで何よりです」

俺と藍さんが再会を喜び合っていると英竜さんが小夜さんに尋ねた。

「それで? 小夜が私達を呼び出したのはこの子に会わせるため?」

「ええ。彼が転生者と戦いたいと。ちなみに私は負けてしまいました」

「空君は強いからねー。でも、空君。小夜は私達転生者四天王の中でも最弱。良い気になっていられるのも今だけだよ!」

今この場にいない翔さんを含めれば五人のはずなんだけど四天王のはどういうこと？ それから小夜が最弱とか言われて米神辺りに血管浮かんでるから。

「英霊とはもう戦ったから、残りの二人は戦ってくれますか？」

「いいよ。全力で相手してあげる」

「私も」

二人の了承を得て、青髪の少女——五河士織から戦うことになった。

周囲への被害を無くすために結界を再び展開して勝負に臨む。

「どうせなら精霊全員で掛かってきて欲しいな」

「……いいよ。本気で相手するね」

彼女が指をパチンと弾くと彼女の周囲に高校生くらいの少女達が見える。

誰もが絶世の美少女。尋ねなくとも名前はわかる。

非戦闘系の二亜や周囲への被害が大きい万由里は参加を遠慮した。

「それでは、試合開始！」

藍さんの合図で精霊達が動き出す。

「(皆、本気で行くよ！)」

『おうー！』

俺もただ立っているだけではいられない。

瞬時に両手を合わせて九喇嘛モードとなり、精霊達の攻撃を回避していく。

十香の放つ斬撃を螺旋丸で打ち消す。

六喰の死角からの攻撃をブレイブに任せて完全に動きを把握。

時間を操り、分身体を繰り出す狂三には影分身で相手。

琴里の豪快な一撃にはまともに相手にせず回避に専念。もちろん隙があれば攻撃を加えていく。

聴いたら終わりの美九には能力を発動させる前に爆音のような咆哮で音を相殺。

耶具矢と夕弦のコンビネーション攻撃には上手い事誘導して他の人達へ攻撃させた。

遠距離から氷撃を放ってくる四糸乃と能力をコピーした七罪には自立型の永遠の氷姫に丸投げ。

アフソリユート・デイマイス

十香に匹敵する能力を持つ折紙にはアルビオンの力で半減。

うん、俺の知ってる十香達じゃなくてもすることは同じだね。

彼女達の動きを見て確信した。

あの世界にやってきてから彼女達の攻撃手段は嫌というほど見てきたし、学んできた。だから次に彼女達がどう動くかなんてわかる。

バランス・ブレイカー

『禁 手を使わないイツらに負けることはないだろ』

「まあね」

身体にダメージ入るの覚悟で禁手を駆使しながら、数分で精霊達を抑えた。

残るは一番厄介そうな士織さんなのだが、見たことのない霊装を彼女は纏っていた。

禁手を解除して、龍神化。

英竜さんとの戦いもあるから余分は残しておかないといけない。

「ハアッ！」

士織さんが右手に持った扇子を振るい、炎の龍を放つ。

『俺達相手に炎の龍とはな……』

「(そういうこと言わない。) いただきます」

口を限界まで大きく開けて、向かってくる炎の龍を吸い込む。

「うん、まあ中々の美味しき」

お陰で少し力が回復した。

「龍神の咆哮！」

口から放たれた熱線が地面を焼き焦がしながら士織さんに直撃。

扇子で防がれたらしくダメージは霊装が焦げた程度だ。

俺の攻撃で使い物にならなくなった扇子を消し、十香の塵殺公を

サンダルフォン

構えた。

俺相手にそれは悪手だと思ふな。

剣先を完全に見切り、両手で白刃取り。

霊力で強化されている腕力は重いが耐えられないわけじゃない。

士織さんは塵殺公から手を離して新たに武器を出す。六喰の

封解主だ。<sup>ミカエル</sup>

槍を扱うかのように連撃を放ってくる。

それを身体を捻って躲し、封解主を蹴り上げた。

「せいッ！」

ガラ空きになった土織さんのお腹に回し蹴りを打ち込んだ。

2、3m吹き飛び地面に仰向けに倒れた。

「そこまででいいかな。空君の勝ち」

藍さんが勝負の判定を下した。

なにも殺し合いというわけではないからここでやめたのは妥当なところだろう。

「大丈夫？」

「身体は大したことないけど、年下相手にやられたのは精神的に来るかな……」

見たところケガは本人が言った通りそこまで酷くはないようだ。精霊達も土織さんと同じような感じだ。

治療は英霊達に任せ、次の試合の準備に入る。

「じゃあ、最後に英竜さんと——」

『見つけたっ！』

……もう来たか。

十香達が結界は内に侵入してきた。

これから戦うというときだというのにタイミングが悪すぎだ。

「さあ、帰るぞー！」

「お願い！ 3分だけちょうだい！」

「本当に3分か？ それが終わったらちゃんとして帰って来るのか？」

「うん。あ、でも当麻さんには別れの挨拶させて。お世話になったからそれくらい良いでしょ？」

「……はあ。わかった」

「ありがとう」

これで英竜さんと心置きなく戦える。

「待たせてごめんなさい」

「大丈夫だよ。藍、合図を」

「オツケー。それじゃあ、始め！」

十香達に3分と言ったのには訳がある。

彼女達がこれ以上は待つてくれなさそうというのもあったが、これから使う力が神滅具ロンギヌスだからだ。そして、ズルをするからでもある。

英竜さんが短いステッキみたいなのを掲げ変身するのに目もくれず、掌に展開した魔法陣から蒼いルービツクキューブを出した。

「英竜さん、先に謝っておくね。蒼き革新の箱庭」イノベート・クリア

ルービツクキューブから蒼い光が溢れ、戦っている俺と英竜さんだけでなく、その場にいた全員を包み込む。

やがて光が収まり、周囲の景色が徐々に視界に映りはじめる。

俺達がいる場所は公園ではなく、青空の広がるどこにでもあるような草原だ。

「空、何をしたの!?!」

離れたところから琴里が聞いてきた。

そう言えばこの神セイクリッド・ギアの能力は皆の前では使ったことがなかった。見せる機会は無かったし、見せる気もなかったからなのだけど。

「今は時間が惜しいからあとで教えるね」

銀色の姿に変身した英竜さんが目にも止まらぬ速さで攻撃してくる。

だが、俺に当たる寸前で不可視の壁に阻まれる。

「なにッ!?!」

自分の能力に余程自信があったのか、攻撃が防がれたことが衝撃的だったようだ。

「その姿って……ワンパンマンだっけ?」

「ウルトラマン! ちなみに私の今の姿はウルトラマンレジエンド!」

うん、知らない。強いんだろうけど。

「これならどうだ!」

英竜さんが何かが入ったカプセルを出すと大量のモンスターが出てくる。モンスターというよりもどちらかというとコスプレした少女達の姿と言った方がしっくりくるか。

「おお、これなら知ってる。ゴジラだ!」

「違う! ウルトラ怪獣! ゴジラがこんなにいるたまるか!」

あら? また違った。まあ今のは適当だったんだけど。

「行けっ、怪獣たち! 一斉に攻撃!」

怪獣たちに指示を出し、自分も混ざって攻撃してくる。

「そういうの……無駄なんだけどな」

先程と同じように全ての攻撃が不可視の壁に阻まれて俺には何一つ届かない。灼熱の火球も雷撃も拳も蹴りも光線も。

英竜さんも怪獣たちも困惑する。

「無駄無駄。この世界では何をしても無駄だよ」

「……どういう意味だい?」

「どうもこうもそのままの意味。時間がないから答える暇なんてないけどね」

指をパチンと弾けば、怪獣たちが消え去った。

一歩踏み出せば英竜さんの真正面にいた。

軽くデコピンすればどこまでも遠くに吹き飛ばされ、変身が解けた。

再び指を弾いて鳴らせば、吹き飛んだはずの英竜さんが俺の足元に倒れ込む。

「ここは固有結界か何かなのか……?」

確かにそんなところか。時間制限と俺の身体に負担があるくらいで、俺の思うがままに何でもできてしまう超有利な世界だけどね。

やろうと思えば、ここにさっきの怪獣たちを出すこともできるし、ウルトラマンに変身することだって出来てしまう。

「だったら壊せば——ッ!? 動かない……!」

拳を地面に叩きつけてこの世界を壊そうとした英竜さんの動きが止まる。

「着眼点はいいけどさせないよ」

「何もできない……!」

「うん。俺が何もさせないようにしてるから」

そう言っつて、俺は英竜さんの頭を小突いた。彼女が意識を失ったこ

とで試合が終わった。

「当麻さん、短い間でしたけどお世話になりました」

場所は変わって当麻さんの部屋で別れを告げていた。そのついでにお礼代わりに夕飯を作った。

転生者達とはあの場で解散し、十香達には一足先に帰ってもらっている。

「本当に短いよな。なんか出会って1日しか経ってないのに寂しいもんだ」

「だねー。空はどうまみたい不幸だ不幸だなんて言う男になっちゃダメだからね?」

「ちよつとインデックスさん? 上条さんだつてね、本当はそんなこと言いたくないんですよ。でもね! 世間はまるで俺が幸せになるのを拒むかのように陥れていくんだからしょうがないでしょうが!

……たまにラッキースケベなるものもありますけど、結局酷い目に遭ってプラマイゼロなんですよ!」

「うんうんそうだねー。そんなことよりもいただきまーす!」

「そんなこと!? 今上条さんの不幸をそんなことで片付けた!」

「もー、五月蠅いなー。私は静かに食事がしたいんだよ。それともなにかな? とうまはガブつとされたいのかな?」

箸を動かすのを止めて歯をガチガチと鳴らすインデックスさん。

「スイマセン。大人しく食べます」

当麻さんが大人しく食事を始めた。

賢明な判断だと思う。

三人と一匹で静かにほどほどに会話をする夕飯を過ごしたのだった。



## 番外編

### 番外編

#### S i d e 空

《奴ら》独特の呻き声が聞こえる。かなり近い。

廃墟となった建物の廊下で《奴ら》に見つからないように身を潜めて様子を窺う。

数は……三体か。ギリギリだな。

残弾は心許ない。体力だって限界が近い。芳しくない状況に思わず舌打ちしそうになるが堪える。

隣にいる年上の少年も俺と同じように表情はあまり良くない。

「ここらで弾を手に入れないと厳しいですね」

「僕もそう思う。それに二人とも早く合流しないと」

俺達二人以外にも二人の仲間がいるが《奴ら》との戦闘中にバラけてしまった。都合上仕方のない事だったのだが。

一刻も早く合流してこんな廃墟から脱出したいところ。しかし、《奴ら》の読めない動きが俺達の行動を阻んでくる。そう簡単には行かせてくれない。

「3カウントで行きましょう」

「オツケー」

「3……2……1……GO」

二人同時に静かに曲がり角から飛び出し、《奴ら》の弱点である頭を拳銃で狙い撃つ。

三体の内二体を倒した。

銃声に気が付いた一体が振り向く。

残りは一体。いける———と思われたが壁や天井から他にも《奴ら》が姿を現した。

ッ！ 弾切れ！

新たに追加された敵に向けて拳銃の引き金を引くがカチカチなるだけで銃口からは何も出てこない。

苦肉の策として拳銃を投げつける。

頭に当たったものの、弾丸程の威力がないことは言わずもがな。怯ませることも出来ず、《奴ら》の接近を許してしまう。

これ以上はどうすることも出来ずに俺はただ《奴ら》にやられるがままであった。目の前が真っ赤に染まっていく中で相棒の少年も《奴ら》に喰われていく姿が映った。

やがて赤に染まりきった後は黒くなり、赤い文字でGAMEOVERの文字が出されたのだった。

接続が切れたのを確認して頭に被っていたナーヴギアを取り外した。

「お疲れ様。ミッションに失敗したようだね」

声を掛けてきたのはナーヴギア開発者で、ソードアート・オンライン——通称SAOというゲームを開発中の茅場さんだ。

いつもの茅場さんであればSAOのテストプレイをお願いされると思っていたが、今回は茅場さんが暇潰しとテストプレイのお礼を兼ねて作ったというゲームをやっていた。ナーヴギアの改良点を見つけるためでもあるようだ。

今やっていたのはバイオオハザードを基にして作ったゲームだ。元ネタの完成度が十分だったから鞠亜の協力によつて作るのはさほど難しくなかったらしい。

著作権の問題があるので販売するつもりはないようだ。

ゲーマーなら喉から手が出る程欲しがらうに。

少し勿体ないとは思いますが本人にその意思が無いなら仕方ない。そもそもナーヴギア自体が一般に販売されているわけでも無いのだからプレイすることすら不可能な状態だ。

「くっそー！ 難しいな！」

俺の横でナーヴギアを外した少年が悔しさを叫んだ。

名前はラーク・バスター・ガルツチ。

中学生くらいの見た目の少年だ。見かけによらず途轍もなく長く生きているとは本人から聞かされている。

異世界から家族旅行でやってきた人———というか元魔神とのこと———でしばらくは海鳴市に滞在するそうだ。

勿論彼にはヴァーリ共々勝負を挑ませてもらった。

龍精霊化や龍神化しても全く歯が立たない相手だったので、『勝てばよかろうなのだ精神』で使用後の反動なんかないふり構わずイノベート・クリア蒼き革新の箱や究極の羯磨テロス・カルマを使って何とか一勝もぎ取れた。

勝負というよりは最早赤子扱いされていた気もしないでもないが、修行も付けてもらえたからいいか。

そして、勝負が一通り終わって一段落してから、偶々茅場さんが来ていたので彼にもVRを体験してもらおう、ということになって一緒にゲームをしていたわけだ。

他の皆も別のゲームで楽しんでるところだ。

「でも凄いな、このナーヴギアって。僕の旅してきた世界にはここまで発達したゲームは存在しなかったから、まるで映画の世界に入ってるか、二次元が現実になったみたいだったよ」

「ですよね！ 俺も初めてやった時驚きましたよ！」

ガルツチさんの眩きの思わず共感してしまう。

茅場さん曰く、まだまだ改良点が多いらしいが時間が解決してくれるだろう。

「もう一回やります？」

「もちろん。負けたままで終わるなんて嫌だからね」

俺達はナーヴギアを被り直して横になる。

『リンクスタート！』

リベンジに燃える二人のフルダイブが再び始まった。

俺達が立っているのはチュートリアルを終えてすぐの場所———  
廃墟の一室だった。まさかの最初からである。

一応最初からということとはガルツチさんの他に仲間———NPC  
が二人いるのだが、物語の都合上、後で離れ離れになる。

さつき俺達が進んだところまででは二人と合流はしていない。こ

の先で合流できるかどうかは今のところ不明だ。

ちなみに物語の設定としては大学サークルのメンバーで巷で噂の廃墟の調査とのことだ。

「まずはさつきゲームオーバーになったところまで行こう」

「ですね。特に弾薬は念入りに探しましょう」

大まかな方針を決めてから拳銃を構えて部屋から出た。

これで二度目になるが《奴ら》が徘徊する廃墟は異質で不気味な雰囲気は本当にゲームなのか、と疑いたくなるほどのクオリティだ。

「よし、弾薬ゲット」

柵やら引き出しを漁ると弾薬を入手した。

壁を突き破ってきた敵に向けてガルツチさんが早速引き金を引く。

《奴ら》にはヘッドショットが一番効くのだが、拳銃では威力が弱いのか一撃では倒せない。

「ショットガンでも欲しいな」

数発の弾を消費してガルツチさんが呟く。

「多分どこかにあると思うんですけど。とにかく探しましょう」

茅場さんのことだから、見つけたとしても入手するには鍵とか見つけられないとできなくてそうだけだ。

イベントによってNPC二人が強制的に離れてからしばらくして、ようやく元の場所まで戻ってこれた。

さつきと違い弾は十分にある。出てくる敵も把握してる。

「行きましょう」

カウントダウンなしで廊下から飛び出した。

元からいる三体を素早く片付け、あとから現れる二体を余裕をもって撃ち抜く。

倒された《奴ら》がドロドロの物体となって床に消えてゆくのを見送りながら、素早くリロードを済ませる。

周囲を見回して、廊下の左側に扉を発見した。

《奴ら》の身体が邪魔をして見つけにくかったようだ。

「他にも扉はあるけどひとまずここに入ろう」

ガルツチさんの意見に賛成して扉を開ける。

扉の先は書齋のようだ。

廃墟にしては本が綺麗に保存されていた。

……何かあるとみてよさそうかな。

こういう怪しい場所を見るとフランと出会った館を思い出す。

本棚に本を嵌めるか、特定の本を押すか。大方そんなところだろう。

「ガルツチさんは何か怪しい物見つけました？」

「この本かな」

そう言つて持っていた本を俺に渡してきた。

本の題名は『白雪姫』。

ゲーム攻略に関係してはとて思えないがガルツチさんが怪しいと言つた以上何かあるのだろう。パラパラページを捲つてみると、とあるページで止まつた。

「これは……メモ？」

「そう。いかにも怪しそうだろ？」

確かにページの合間に挟むのは怪しい。

メモをタップしてみると書かれている内容が空間ウィンドウに映される。

『隠し扉は本棚』

本棚を見やると本が収まっている場所に不自然に本一冊分ほどの隙間があつた。恐らくあそこに何かしらの本を入れると隠し扉が開くのだろう。

試しに『白雪姫』の本を入れてみたが厚さが違うようでも上手く収まらない。

他にも書齋にある本を手当たり次第に入れてみたのだが、どれも違うようだ。

こうなるとこの広い廃墟から探し出さねばならない。しかもどんな題名の本を見つければいいかわからないから実に面倒だ。

「空、これ見てくれ。題名のところ」

ガルツチさんが本棚の隙間の両横にある本を指示した。

筆記体で書かれた題名は俺には読み取れず、ガルツチさんに何と書

いてあるのか尋ねた。

『はじめの一步』って題名だよ」

判明した二冊の本の題名は『はじめの一步』。その1巻と3巻だった。

「ボクシング漫画じゃん！」

《奴ら》に居場所が知れ渡る危険性を忘れて叫んでしまった。

小説か題名が同じだけで中身は別物だろうと思って本を開いてみたら、紛れもなく本物だ。

高そうなブックカバーに包まれていたから漫画らしさは微塵もなかったせいで題名にまでは意識が行かなかったみたいだ。

茅場さんの趣味かな？ 世代的には外れていると思うんだけど。……それはともかく何の本を見つけてくればいいのか分かっただけでも十分な収穫だ。

「ひよっとしてここにあるの……ほとんど漫画？」

「ザっと見た限りだとそのようだ。メジャー、マイナー関わらず結構な数が揃ってる」

ちよつと興味があつたがゲームクリアを優先して『はじめの一步』の2巻を探しに部屋を出た。

廃墟を隈なく探して漫画を見つけ、隠し扉のある本棚に戻って来た。

行って帰って来る途中に当然《奴ら》が出てきた。だが、徐々に仮想世界になれてきたガルツチさんの動きが良くなり、俺達のコンビネーションも上手くいくようになったおかげで攻略は順調だ。

そして、手に入れた本を本棚に収めると本棚が横にスライドして扉が出現した。

扉の先は小部屋となっていて弾薬や回復薬。果ては探していたシヨットガンが壁に掛けてあつたのを発見した。

「……ん？ これは……」

ガルツチさんが机の中を漁っている時に無造作に置かれていた本を手を取った。

使用可能アイテムらしい。

『猿でもわかる北斗神拳 ｝入門編』

題名を見て頭を抱える。

これは……なんでこんな本があるのか、とか、バイオハザード要素はどこいった、とかツッコむべき？ 見なかったことにするべき？ それとも読んで憶えて《奴ら》相手に使えってことなの？ あのゾンビみたいなのに秘孔を突いて効くのか甚だ疑問なのだけど……。

茅場さんが暇潰しで作ったにしてははっちゃけ過ぎだと思うんだけど。もしくは手伝った鞠亜のおふざけも考えられる。

まあ覚えておいて損はないだろうと思ひ、恐る恐る本の表紙を人差し指でタップ。

《エクストラスキル “北斗神拳” を獲得しますか？》

機械音声と共にYESとNOのアイコンも現れた。

ガルツチさんが今ので気が付いたようで俺の方に寄って来る。事情を理解すると苦笑いした。

なるようになるかと思いつつ、YESのアイコンをタップした。

《エクストラスキル “北斗神拳” を獲得しました》

システムウインドウを開いてスキルを確認すると使える技は今のところ《北斗百裂拳》のみ。

『北斗百裂拳 効果：相手は死ぬ』

雑な説明はさておき、SAOのソードスキルみたいに使えば使うほどスキルの熟練度が上がり、技の威力や使用後の反動も抑えられるようだ。

入門編となっていたから続編を見つけるとさらに技を覚えられるのだろう。

「……ガルツチさん」

「断る！」

「まだ何も言っていないじゃないですか」

「どうせ僕に対して技を試したいとか言うんだろ!? 現実だったらまだしもここは仮想世界なんだから喰らったら即ゲームオーバーになるっての！」

「そんなのやってみないとわからないじゃないですか！ ここで諦め

たらゲームクリアなんて不可能ですよ!」

「今君自身の手でそれを不可能にしようとしてるんだよ!」

「ガルツチさん」

「な、なんだい?」

「死んでもいいゲームなんて楽勝ですよ」

「決め顔で言えば承諾するなんて思うなよ!」

結局ガルツチさんには北斗百裂拳を試すことはなく進むことになったのだが、俺が北斗神拳を手に入れてからの戦闘はそれはもう楽だった。例えるなら、ゴジータのスーパーサイヤ人4がラディッツと戦うようなもの。ラディッツが「戦闘力……たったの1500か……ゴミめ……」と言われる側になるレベルだ。

スキル使用後の硬直というデメリットも存在するが、ガルツチさんがカバーしてくれるので大したデメリットにもならずすんだ。

で、なんやかんやで謎解きやらストーリーを進めていくとNPC二人を助けることに成功し、ついにボスと対面。

『キサマラモ——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!』

《奴ら》の集合体のようなグロテスクな姿のボスが何か話しているのを遮って、ガルツチさんが容赦なくグレネードランチャーをぶちかます。

北斗神拳もえげつないが、ガルツチさんの戦法も相当だと思う。

「ホオオオウ……アタタタタタタタタタタタツ!」

怯んでいる隙に北斗百裂拳を叩き込んでダメージを与え、硬直中はガルツチさんがヘイトを集める。また怯んだらスキルを放つという無限ループで呆気なくボスは倒れたのだった。

「そうか。ゲームクリアおめでとう。どうだったかな?」

茅場さんにゲームをクリアしたことを伝えると感想を尋ねてきた。

「なんとというか、中盤辺りからはゲームがおかしい気がしたんですが。北斗神拳とか何で入れたんですか」

どう考えてもチートとしかいいようがない程にゲームバランスが完全に崩壊していた。さつきゲームの販売云々話したがこれでは売れなさそうだ。

「おや、アレを見つけたのか。作っている時に北斗の拳の漫画が目に入っただね、気まぐれで入れてみたんだ」

気まぐれでモーシオンを組み込めるとかどんだけ頭いいんだよ。

それを聞いた俺とガルツチさんは顔を見合わせて苦笑いしたのだった。

「マリオや恋愛ゲームなども作ってみたんだがどうかな？」

『結構です！』

ちなみに今回俺が使った北斗神拳を基に作った《体術》スキルを数年後に完成するSAOに組み込んだ結果、アインクラッドの一部地域がモヒカンで溢れる世紀末と化したとかなんとか。

T o b e c o n t i n u e d . . . . ?

## 空ハツピーデイリー編 3

これが超次元サッカーです！ (前編)

これが超次元サッカーです！ (前編)

S i d e 空

幻想郷から帰ってすぐのこと、俺が気絶してる間にフラン達の歓迎会をする流れになっていたそうだ。

飾りつけは七罪の能力ですぐにできるし、あとは大量の料理だけ。そこは俺が影分身して手分けしてどんどん作っている最中だ。

タマモが手伝うと言っていたが、歓迎される側のヒトにそんなことはさせられないと説得してタマモには待っていてもらってる。

なんだかんだ言って十香達がフラン達を拒絶するつもりはなくてよかった。

……あれ？ なら、なんで殴られたの？

ひよつとして殴られ損なのでは？という気がしてきたが、美雷や十香がお腹を空かせて待っているだろうから料理に専念することにした。

一時間程で全部の料理を作り終え、テーブルにどんどん並べていく。

全員に飲み物が行き渡るのを確認した琴里がマイクを使って声を響かせた。

「今日は幻想郷から来たフラン、タマモ、ジバニャン、コマさん、ウイスパアの歓迎会よ。皆仲良くしてあげて」

『はーい！』

皆の返事に満足げに頷くと「乾杯！」と持っていたグラスを掲げた。歓迎会の始まりだ。

「フランとタマモはここに住むってことでいいの？」

俺の左右の席に座る彼女達に聞いた。

正直、二人が付いてくることは俺の想定外だ。

「基本的にはそのつもり。お姉様が月一くらいで戻ってきてって言っ

てたからたまに帰るけど」

「私はここに永住しますよ。ご主人様のいるところにタマモありですからね！ 家事のお手伝いも是非させていただきます！」

家事を率先して手伝ってくれるのは俺としても嬉しい。

精霊達は元からだし、夜空や星奈もただで住まわせてもらうのが申し訳ないと感じているようで積極的に家事を手伝ってくれる。

影分身があれば、この家の住人が去年よりも増えていても変わりはないのだが、俺が動けない場合や今回のようにどこかに行ってる時のことを考えると家事をする人が多いに越したことはない。

「わかった。今日は部屋の用意が全く出来て無いから布団になるけど、明日には二人の家具買いに行こう」

三が日が過ぎてお店もいつも通りに開いてるはずだ。

皆の食べるペースを確認して、デザートのカッキーでも作るためにキッチンにまた戻った。

今日は……フランの好きなイチゴのショートケーキにしよう。

ケーキを作って戻るとなのは達がフランとタマモと何やら話していた。俺がいない間にもう仲良くなれたようで何より。

それから大した問題が起こることもなくフラン達の歓迎会は成功したのだった。

寝るときにフランがベッドの方がいいから俺と一緒に寝ると言い出した時に問題が起こりもしたが、何とか収まった。

歓迎会の翌日、幻想郷に行っていたせいで進められなかった学校の宿題を影分身を使って速攻で終わらせた。年を越す前に大半は終わっていたから時間が掛かることもなかったが。

ともかく、これで心置きなく修行と買い物が出来ると思ったのが、なのは達に抵抗する間もなくバインドで拘束されて河川敷のグラウンドまで強制連行された。

そしてグラウンドに集まったのは子供組のお馴染みメンバー。そこにフランやタマモもいた。

「これからサッカーをやるわよ」

『おー!』

サッカーボールを抱えたアリサの声に皆がやる気Maxといった表情で賛同する。

楽しいことをするのなら大いに結構なのだが、運動が苦手なはずなのはやネリネまでやる気なのは珍しい。

「俺、フラン達の買い物が——」

「それなら鮫島に頼んで手配済みよ」

お早いことで。

アリサのおかげで本日の予定終了。

この状況では修行はさせてもらえそうにないと大人しく準備運動を始めた。

「受けてみなさい! 『ファイアトルネード』!」

なんか試合になった途端、アリサが脚に炎をまわらせて回転しながら高くジャンプしてシュートを放った。

「そう簡単に点はやらないぜ! 『ゴツドハンド』!」

ボールが向かう先には雄人がキーパーとして立っていた。

握りしめた右手に魔力を溜めて開きながら上に掲げると巨大な手が頭上に浮かんだ。

右掌を前に突き出すと巨大な手も連動して前に出る。

そこにファイアトルネードが衝突した。

最初はいい勝負だったが徐々に雄人が押され始めた。

「うおおおおおおおっ!!」

絶対に守ってみせると言わんばかりの雄叫びを上げる。

そして——見事にボールを止めた。

「うっし! ついに止めたぜ!」

「フン、やるじゃない。でも次こそは決めてやるわ!」

……………いやいやいやいや! ちょっと待て! なにこれ!?

「君等何してんの!？」

『へ?』

俺以外の誰もが不思議そうな顔をしていた。

「へ? じゃなくて! サッカーなのになんで必殺技みたいなの使つてんの!？」

もしかして俺が幻想郷に言ってる間にサッカーが進化して超次元サッカーにでもなったというのか。

『……?』

あれえ? そんな首傾げるようなこと俺聞いてるかな!？」

「……あ、そう言えば空は幻想郷行ってたから知らないよね」

アリシアが思い出したかのように一人納得していた。

「実はね、空がいない間に必殺技を作って完成したら空に見せて驚かせようってことになったんだけど、イナズマイレブンっていうゲームを基にしてやったらなんか出来ちゃって。それで折角だから皆で必殺技覚えて超次元サッカーやってみよってことになったんだよ」

イナズマイレブンというのは去年の冬に入る頃に発売された超次元サッカーゲームだ。

俺は全くやっていないため内容は知らないが、俺のクラスでは主に男子の中でそこそこ話題になっていたのを覚えてる。

それを彼女達なりに俺がいなかった三日間で魔力で工夫して出せるようになったようだ。

自分で言うのもあれだけど、この子達はなにを目指してるんだろうと思ってしまう。

フランとタママがこの世界の常識を誤解する前に説明して俺も試合に加わった。

チーム・アリサ

FW アリサ 美雷

MF 夜空 星奈 ユーノ 愛衣

DF なのは すすか 白音 黒歌

G K 朱乃

チーム・リアス

F W シア フェイト アリシア

M F リアス ヴァーリ 明日奈 空<sup>俺</sup>

D F はやて あかり ネリネ

G K 雄人

という風にチーム分けがされていた。

ベンチには交替出来るようにユーリ、リコリス、ティアナ、タマモ、フランが座っている。ジバニャン達も彼女達の膝の上で応援してくれる。

審判であるアルフがホイッスルを鳴らして、リアスチームからのゴールキックで試合が再開された。

「空ー」

ボールがいきなり俺のところまできた。

胸で軽く弾いて足でトラップ——した瞬間、ユーノにスライディングでカットされてしまった。

「空、これが普通のサッカーだと思っているようなら、君は僕に勝てないよ」

「……え」

誰だお前、という出かかった言葉を無理矢理引っ込めてボールを追いかける。

今のユーノは身体能力を魔力で強化していた。見たところ他の皆も同じみたいだ。

チーム毎の男女比がおかしいとは思っていたが、魔力を使えば大した差も生まれないと考えたのだろうか。

これは呑気にやってたら負けるな。

現在、ボールは愛衣の下にある。

ドリブルで攻め上がり、はやてがディフェンスに来たところでバツクパス。

パスを貰ったなのはがシュートのモーションに入る。

『『ダイバインバスター』!』

なのはがよく使う魔法をそのまま必殺技にして、桜色の光を纏ったボールを空中で思いつき蹴り放った。

センターラインからのロングシュート!?

「させないわ! 『ルイン・ザ・カット』!」

ボールと雄人の間に下がっていたリアスが割り込み、振るった脚から滅びの魔力を刃のようにしてはなつた。

『『ダイバインバスター』』と『ルイン・ザ・カット』がぶつかり合う。

勝負を制したのはなのはのシュート。

だが、威力はリアスの必殺技によつて激減していたおかげで雄人は難なくキャッチに成功。

「反撃よ!」

キャプテンのリアスの掛け声で攻めに転じる。

雄人が近くに居たはやてにパスし、はやてからヴァーリにボールが渡つた。

「ヴァーリを止めなさい!」

アリサの指示に従つて星奈と夜空がヴァーリの行く手を阻む。

『『ラ・フラム』!』

星奈が舞い踊りながら業火を放つ。

意味はフランス語で炎の意味だったはずだ。

「ヴァーリ、こっち!」

俺の呼びかけにヴァーリが業火を跳んで回避して、迷うことなくパスを送ってくれる。それも俺が獲れるギリギリのだ。

「ヴァーリ、ナイスパス!」

「行かせない!」

「あらよつと」

ユーノのスライディングをボールと一緒に跳んで回避。

そのまま一人で攻め上がる。

超次元サッカー、かあ……。俺も必殺技くらい使えた方がいいのかな?

龍神化して蹴れば必殺技なんて無くても十分な気はするが、そんなに長く続くわけでもないし、態々遊びで使うほどでもないだろう。やはりここは皆の流れに合わせて俺も必殺技の一つや二つ出してみたい。

「これ以上は行かせません」

「空、覚悟するといいいニヤ。『キャットコンビネーション』！」

ユーノの次は白音と黒歌の猫又姉妹が俺の前に立ち塞がる。この姉妹を相手に無理矢理突破するのは困難を極めるだろう。

「空、こっちー！」

「アリシアー！」

姉妹が来たことでマークの外れたアリシアがフリーだ。

二人の必殺技でボールを奪われる前に白音の股にボールを通してパスを出した。

「『スノーエンジェル』！」

アリシアがシュートを放つ体勢に入った。

しかし、アリサチームのすずかが雪風を纏いながらジャンプして脚を三回振るう。すると、アリシアのいた場所から氷柱が生えて氷漬けにしてしまった。

ボールを確保したすずかが外に出してこちらチームのスロージンからとなった。

不利な体勢を整えるためにわざと出したのか。

明日奈がスロージンをする。

ユーノと愛衣のマークを外して俺が貫った。それをすぐに明日奈に返して前に上がる。

「『閃光の舞』！」

ドリブルしながら揺らめく閃光を取り出し、愛衣とユーノと接触する寸前で閃光となって加速した。

二人が抜かれたと気付いたときにはすでに明日奈は逆サイドのシアにパスを出していた。

シアがボールを蹴り上げて、追いかけるように天使の翼で天高く飛び上がる。彼女の背後に巨大な扉が出現した。

「決めるっす！ 『バイオレンス・ヘブン』！」

シアの声に応えるようにして、開かれた扉から光を纏ったボールがゴールへと向けて放たれた。

ゴールを守る朱乃はいつもと変わらない笑顔を浮かべながら、人差し指を天に向かつて突き出す。すぐに朱乃の上にバチバチと放電する黒い雲が出来上がった。

『サンダーボルト』！」

そこにボールが入った瞬間、激しい放電をした。

シアのシュートは威力を無くして黒焦げのボールが朱乃の足元に落ちたのだった。

え、えー……？ 超次元ってあそこまでいいの？

最早戦闘で使う必殺技と何ら変わらない気がするのだが。今のシアの必殺技なんて光が弱点の悪魔が喰らえば一撃死するのでは？と思うくらい強烈だった。

朱乃がボールを投げて、なのはに。それから星奈に渡って、フオワードの美雷にボールが行った。

見事としか言いようがない速攻で今度は俺達がピンチだ。

「行くぞー！」

美雷の素早いドリブルではやてとあかりが抜かれる。

残るはキーパーの雄人を除いてネリネのみ。抜かれてしまうと決定打を与えてしまうことになる。

『ゴー・トウ・ヘル』！」

ネリネが地面を踏みつけると黒いオーラが美雷の足元にあるボールに集まる。そこを中心に地面がひび割れ、衝撃波が発生して美雷を吹き飛ばした。

なんとか防いだか。

ネリネがボールを確保して前半終了を告げるホイッスルが鳴った。与えられた時間は5分。チーム毎に分かれて休憩兼作戦会議の時間となる。

俺達のチームはキャプテンであるリアスが仕切ってくれている。

「作戦会議よ。前半は0-0。後半からは相手はガンガン攻めてくる

でしょうね」

「どうしてそう思うの？」

「アリサと美雷が消極的だからよ。この二日間一緒にサッカーしたけど、あの子達はボールを積極的に要求するし、シュートもガンガン狙ってくる。恐らく後半に温存してるのね。アリサ達の動きには要注意だけど、おかげでこっちも守備に回ってないから大して体力の消費をしてないわ」

リアスは試合の中で相手の動きをよく見てる。

「後半はこっちも攻めていくわ。ポジション変更でヴァーリと空をフォワードに、アリシアとフェイトが両サイドについて。それからシアとネリネには悪いけど、ティアナとリコリスと交替してもらおうわ。それ以外はそのままよ」

リアスの指示に各々頷く。

後半は俺も必殺技やってみようか。

幻想郷でやった技がサッカーで出来るかも……。……。うん、いける。

頭の中で必殺技のイメージをする。

ある程度固まったところでハーフタイム終了の笛が鳴った。

「さあ、皆。私達の敵を吹き飛ばしてあげましょー！」

『おー！』

円陣を組んで後半戦に臨むのであった。

これが超次元サッカーです！（後編）

これが超次元サッカーです！

Side空

ポジションとメンバーの変更をしてから後半戦に臨む。相手も俺達と同じようにメンバーの変更をしてきた。

チーム・リアス

FW ヴァーリ 空<sup>俺</sup>

MF アリシア リアス ティアナ 明日奈 フェイト

DF はやて あかり リコリス

GK 雄人

チーム・アリサ

FW アリサ フラン 美雷

MF 夜空 星奈 愛衣 すずか ユーノ

DF なのは ユーリ

GK 朱乃

「フラン、サッカー出来るの？」

「蹴ればいいだけでしょ？ 楽勝よ！」

コートに立ったフランが俺の問い掛けに自信満々に答える。

元々幻想郷という魔境から来たせいとか、普通のサッカーをしたところで彼女が満足しそうにないだろう。逆にこれくらいぶっ飛んだことの方が合ってるのかもしれない。

うーん、けど、やっぱり心配だな……。

今はお昼前でお日様が出ている時間帯だ。それなのにフランが平気そうにしているのは、聖杯を使ってフランの吸血鬼の体質を変えたからだ。

これによって朝が平気になったし、太陽の光を浴びても問題ないようにはしている。

それでも今日知ったばかりのサッカーをやるというのは心配だ。

「ご主人様、頑張ってくださいーい！」

タマモはフランとは違い、今回は見送るようだ。

ベンチから（俺限定で）応援してくれるのは嬉しいが、敵味方関係なく皆の視線が鋭く突き刺さる。

……味方からパスという名の攻撃とか来ないよね？

「それじゃあ、後半戦スタート！」

内心ヒヤヒヤしながら後半は俺達からのボールで試合スタート。

リアスに視線を送ると察してくれたようで領り返された。

「ヴァーリ」

「ああ、見せてやろう」

ヴァーリと拳を軽く合わせてからボールを蹴りだした。

後ろに下げるとはせずに二人で攻めていく。

「『分身ディフェンス』！」

フォワード三人を抜き去ってすぐに夜空が分身してボールを奪おうとしてくるが、ボールを高く蹴り上げてやり過ごす。

「（ミスか？ ……いや、違う！ これは……）パスか！」

「正解」

誰よりも真っ先に反応したのはヴァーリだった。

夜空がワンテンポ遅れて跳ぶが、すでにヴァーリは空中でボールを受け止め、着地。相手の陣地へと突き進む。

「『スノー——』」

「空！」

「『——エンジェル』！ 躲された!?!」

すずかの必殺技を察知したヴァーリが踵でバックパスを俺に出す。

ヴァーリはパスを出すと同時に駆け出した。おかげですずかの必殺技は失敗に終わった。

ボールを持って攻め上がると愛衣、なのは、ユーノの三人がかりで阻んでくる。

愛衣をフェイントで、なのはとユーノをまとめてヴァーリとのワンツースで抜いた。

「ヴァーリ、頼んだ！」

「任せろ！」

必殺技を持たない俺では朱乃の必殺技を破って点を奪えそうにない。

ハーフタイム中にヴァーリは必殺技を持っていると聞いたので彼にボールを託した。

ヴァーリがボールを蹴り上げて自分も同じ高さまで跳び上がる。

空中で脚を振るうと白銀の龍がボールを中心にとぐろを巻いていく。

そこに勢いをつけたヴァーリがライダーキックの要領でボールを踏みつけた。

『ドラゴンブラスター』！』

白銀の光線と共にボールがゴールへと一直線。

シアのシュートも凄いものだったが、ヴァーリはそれ以上だった。

これなら……！

朱乃から点を奪えると期待を込めてボールを見送る。

俺の目を向けた先には——ユーリがいた。

受け止める気か？

キーパーでないユーリに止められる術があるのか考えにくい。

そう考えた矢先、黒い影が彼女の背中から溢れ出た。

『来なさい——『暗黒神ダークエクソダス』』

やがてそれは人の形となった。

黒い大剣を持ち、黒い髪にところどころ赤と白が入り混じった黒い肌の巨人だ。

あれはなんだ？と誰かに問いかける間もなく、暗黒神ダークエクソダスと呼ばれた巨人とユーリが動いた。

『魔王の斧』』

ヴァーリの必殺技にタイミングを合わせて、暗黒神ダークエクソダスが右手に持っていた大剣——ではなく斧——を振り下ろしたのと同時に、ユーリは高く跳び上がった踵落としをボールに叩き込んだ。

ユーリの必殺技によって白銀の光を呑み込み、闇を纏ったボールが俺達のゴールに向きを変えた。

ユーリはヴァーリの必殺シュートを必殺技で蹴り返したのだ。

予想だにしない防ぎ方に頭の処理が追い付かなくなる。

……サッカーはキーパーやスローイン以外だと基本的に触るのは脚。必殺技のインパクトが強すぎて忘れかけてたけど、シュートを蹴り返すのもよく考えてみれば普通か。

「さすが！」

「アリサちゃん！」

俺が呆けている間にユーリが蹴り返したボールは俺の横を通過し、ハーフライン辺りにあった。

そこに待ち構えていたアリサとさすがが互いに名前を呼び合ってボールに接近する。

アリサは右足に炎を、さすがは左足に吹雪を纏わせながらシュートを打つモーションに入った。

『『ファイアブリザード』ツ!!』

後ろからやって来たボールに合わせてダイレクトで二人がツインシュートを放った。

闇を纏ったボールに炎と吹雪がその周りに纏わりついた。

ユーリの必殺技にそのまま二人の必殺技のパワーが加わったことでより強力なシュートとなったのだ。

『『ゴッドハンド』ッ!』

雄人が巨大な手を前に突き出して止めようとする。

しかし、三人のパワーが込められたシュートの前には巨大な手は呆気なく碎け散ったのだった。

0—1

「雄人、大丈夫!?!」

点を決めて喜ぶ相手チームを余所に、俺達はシュートの衝撃で吹き飛ばされた雄人の下に駆けつけた。

完全に相手チームにしてやられた。

「あ、ああ、なんとかかな。それよりも、皆ごめん……。止められなかつ

た」

「落ち込んでる暇なんかないわ」

「そうそう！ でも向こうもやるね。まさかシュートブロックで跳ね返して、そこにシュートチェインまでしてくるなんて」

「まだ逆転は出来るチャンスはいくらでもあるからね。頑張ろう！」

「そうやで！ 空君とヴァーリ君のゴールデンコンビに任せとけば勝利確定なんやからドーンと構えとけばええねん！」

悔しそうに呟く雄人を皆が励ます。

ヴァーリはともかく、俺は必殺技一つないのに期待されてもなあ……。

「で、ユーリの出したあの巨人はなに？ スタンド？ ペルソナ？」

「ううん、そのどちらでもないよ。あれは——化身」

化身？

あかりの口から出た聞きなれない単語に首を傾げる。

「選ばれた選手にしか使えない能力。その選手の「気」とか「魔力」が具現化した存在とでも言えればいいのかな」

これだけ聞いているとやはりスタンドやペルソナの仲間じゃないのか、なんて思ってしまう。

まあ化身が何かなんて細かいことはこの際どうでもいい。

問題はあの化身とやらを使うユーリの突破方法だ。

下手にシュートを打ってもユーリに蹴り返されるのがオチだ。ヴァーリのシュートでさえ蹴り返すことが出来るのなら半端な威力では絶対に破れない。それが出来るとしたら恐らく同じ化身のみだろう。

「私達のチームで化身を使えるのはヴァーリのみ。ヴァーリにはユーリをお願いするわ」

「ああ」

目には目を、化身には化身をとってことね。

幸いなことに俺達のチームのヴァーリも化身が使えるみたいだ。

ユーリへの対策会議をしてからポジションに付いて試合再開。

さつきと違い、俺が軽く触ったボールをヴァーリがティアナにバツ

クパスをした。そこから左にいるリアスへと繋げた。

「フェイ——」

「そのボール、頂戴♪」

「なッ!?」

リアスがフェイトにパスを出す前にフランにボールを奪われる。

見様見真似でやっているのようで彼女のドリブルはお世辞にも上手とは言えないが、吸血鬼の身体能力をフルに活かして適当に前に蹴ったボールに余裕で追いつく。

その不規則なボールの動きにDF陣は惑わされ、突破されてしまう。

そして、ゴールは目前。俺達のチームが一気にピンチに陥った。

フランの身体能力を考えれば普通のシュートでも十分な威力を發揮しそうで怖い。だけどいきなり必殺技なんて——

「壊れなさい!」

フランが右手を突き出してボールに赤いオーラを纏わせる。

そのまま上空に蹴り上げると急に晴れていたはずの空が真っ暗な夜へと変わり、大きな満月がフランの背後に現れた。

「『ブラッディストーム』!」

その場で横に一回転して右足の裏でボールを強く蹴る。

すると蹴られたボールは赤い暴風と化してゴールに突き進んでいく。

『ウソオツ!?!』

フランが必殺技を繰り出したことに敵味方問わず誰もが目を見開いた。

「これ以上点はやらせるか! レオン! リミッター、解除!」

《わかった》

動揺があつたもののキーパーである雄人はすぐに切り替え、デバイスのレオンにリミッター解除を要求した。

レオンは即座にそれを実行。雄人が放つ魔力が爆発的に上昇した。

雄人は普段からリミッターを付けている。確か、今外したのを含めて三段階くらいあつたはずだ。

リミッターの理由は膨大な魔力に頼ってばかりだと魔力が使えない状況になった時に何もできなくなるのは嫌だからと本人が言っていた。

何もこの場で外すことの程でもないと思うんだけど、遊びとはいえ真剣つてことね。

膨大な量の魔力を存分に使って『ゴツドハンド』を出すのかと思いきや、モーシヨンが違った。

なんと上半身を右に捻ってボールから背を向けたのだ。

その際、彼の眼と一瞬だけ合った。

——絶対に止めてみせる！ 信じて待ってる！

雄人がそう言ってる気がして、俺は信じて走り出した。

「うおおおおおおおっ！」

雄叫びと共に力を溜めた拳を突きあげると赤茶色の髪を逆立てた黄色い巨人が姿を現した。

『マジン・ザ・ハンド』ツ！』

雄人が右手を突き出す動作に合わせて巨人——マジンも右手を突き出した。

襲い来る赤い暴風を振り払い、見事ボールを掴み取ってみせたのだ。

「ソラアアアアアアッ！」

すぐさま雄人が消さないままだったマジンがボールを投球のモーシヨンで投げてくる。

それを胸で受け止め、足元に止めた。

「残念ながらここから先は通行止めです。来なさい——『暗黒神ダークエクソダス』」

ユーリの化身が二度目の登場。

威圧感凄いな……！

「いいや、通してもらおうぞ」

化身の圧倒的存在感に気圧されかけた時、俺とユーリの間割り込むようにして現れたのはヴァーリだ。

彼の背後から黒い影が溢れ出した。

ユーリの時と同じでそれはやがて何かの形を作る。

「来い——『白龍皇アルビオン』」

現れたのは鋭利な爪と鋼を噛み砕く牙、そして白い鱗を持つドラゴンだ。——とうるかアルビオンそのものだ。

アルビオンがエクソダスを抑え込んでいる間に俺は二人の横を通り過ぎる。

皆真剣なんだから俺も真剣にならないとね。

胸の高さまで上げたボールが淡い虹色の光を纏う。

下から蹴り上げた直後に怒涛の勢いで蹴りをボールに入れてゆく。

蹴りを入れるたびに輝きを増していく光が最高潮に至った瞬間、助走をつけてから思いつきりボールを蹴り放った。

『サンダーボルト』！」

朱乃が必殺技で迎え撃つが、ボールが黒い雲を突き破ってゴールネットを揺らした。

1—1

「ま、こんなもんか」

ぶつつけ本番にしては上出来な必殺技だろう。

ゴールを決めても特に喜ぶことなく、今の必殺技に対して評価を下していた。

「さっすが、空！」

「うおっ!?!」

戦闘で使うならまだまだ改良の余地はあるだろうなと考えていたら、後ろから誰かが飛びついてきた。

こういうことする人物と声からアリシアだなと思ったら俺の予想通り彼女だった。

しばらくするとチームの皆が集まってきた。ついでにアリシアはフェイトに引き剥がされた。

「今のなんて必殺技?」

「まだ名前決めてないよ」

「えー!? じゃあ、今作ったってことなん!?!」

必殺技なのだからやっぱり名前は必要か。フランも即興でつけて

たみたいだし。

「龍が舞っていたような感じだったから——そうね、『龍乱舞』なんというのはどう?」

リアスからの命名に文句も出てくることもなく、すんなりと俺の必殺技の名前が決まった。

「サンキュ。その技名貰うよ」

所定の位置についてから試合が再開した。

ボールを持ったアリサと美雷とフランのスリートップが攻め上がる。

どうやら相手チームは同点に追いつかれたことでより燃え上がっているようだ。

彼女達を止めるのに骨が折れそう。

内心面倒だと思いつつも彼女達を止め掛かる。

アリサを美雷は他に任せて、俺はフランにマークしよう。

付き合いの長さならこの中で一番なのは俺だ。フランの不規則な動きにも多少は付いて行けるだろう。

だが、その考えが甘いことをすぐに知る羽目になった。

「アリサはフランにパスをせよ! フランはそのままゴールまで持っていけ! 美雷はフォローに入れる位置取りを! 他の者達も上がれ!」

夜空の的確な指示で相手チームの動きに無駄が無くなる。俺達の動きすら把握して封じてくるものだからやり辛い戦略だ。

「今度は決めてやるわ! 『ブラッディストーム!』」

ゴール前までやってきたフランが必殺技を放った。

赤い暴風が再び雄人を襲う。

『『マジン・ザ・ハンド』!』

雄人がシュートを難なく止めてパスをする。

「ゲットだぜ♪」

しかし、それを美雷は読んでいたようでパスカットされてしまった。

「夜空!」

「うむ。行くぞ、美雷、星奈！」

美雷からボールを貰った夜空が口笛を吹くと地面から5羽のペンギンが生えてきた。

ボールを蹴るとそれを追うようにしてペンギン達も地面から飛び出していった。そこに美雷と星奈がツインシュートを加えたことでボールの勢いとパワーが更に増した。

『皇帝ペンギン2号』ツ！』

『マジン・ザ・ハンド』！』

再びマジンが現れ、その巨大な手と5羽のペンギンが衝突。

しばらく拮抗していたが、徐々にペンギン達の勢いがなくなり、マジンがボールを止めた。

「あ、危なかった……」

「決めきれなかったか……。まあよい。次だ」

夜空が決められなくて悔しそうにするも、ほんの一瞬。すぐに切り替えてポジションに付いた。

雄人がボールをパスしてからもアリサチームの猛攻は続く。

特に俺とヴァーリへのマークは徹底されてやりたいように動けない。

「吹き荒れるー！ 『エターナルブリザード』！』」

『マジン・ザ・ハンド』！』

「喰らいなさい！ 『ファイアトルネード』！』」

「ツ！ 『マジン・ザ・ハンド』！』」

さーとど、どうするかなー。今のところ雄人のマジン・ザ・ハンドに勝てるのはユーリくらいだから問題はなさそうだけど。でも連続でシュートを打たれ続ければやがて疲労が雄人を襲う。今の段階でもちよつとやばそうだ。

チラリとコート全体を見渡して、相手チームの隙を窺う。

俺のマークはユーリとなのはの二人。ヴァーリはユーリのみ。俺達二人は相手チームに相当警戒されているらしい。

ヴァーリと視線を交わして反対方向に動き出した。当然相手もそれに反応して追いかけてくる。

「ティアナ！」

「うん！」

俺とヴァーリが動いたことで出来たスペースにマークが徹底されていなかったティアナが走り込み、ちょうどシュートをキャッチした雄人からボールを受け取った。

完全にフリーの状態でティアナがゴール前へと持っていく。

相手チームがティアナを追いかける。ユーリなんかは化身を出してまでだ。それでも俺とヴァーリに気を取られ過ぎたせいでティアナには追いつけない。

そして、相手がティアナに集中している間に俺はマークを外して動き出した。

『スカイウォーク』！」

足場のあるはずのない空中でティアナが何度も跳ねる。

今の必殺技で追いかけてくる相手を更に引き離れた。

「私だってシュートを決めてやる！」

勢いをつけて地面で宙返りを繰り返し、満月を背にしてオーバーヘッドキックを決めた。

『バウンサーラビット』！」

右へ左へ跳ねるボールが誰にも予想できない動きでゴールに向かう。

これなら朱乃の必殺技を掻い潜れると思ったが、朱乃の表情を見てその判断を下すのは早かったと悟った。

「私が何の対策もしないと思ったら大間違いよ。『雷霆の裁き』！」

魔力を込めてバチバチ放電させた両手で地面を叩く。5mにも及ぶ雷の壁が朱乃の前に現れたのだ。

ゴールに入れなきや点は取られない、ってことかね。

たとえ不規則に動くボールだろうと壁に阻まれてしまえばそれまで。ティアナの必殺技は雷の壁に阻まれ弾かれた。

だが、まだボールは誰の手にもわたっていない。チャンスはある。

弾かれて空中にあるボールに向けて俺とヴァーリが同時に跳び上がった。

相手も跳び上がった、俺達にシュートを打たせまいとしてくる。恐らく、俺達なら打ち合わせなんてしなくても何かしらしてくと踏んでのことだろう。

『せーのっ！』

二人で踵落としをボールに叩き込むと白いオーラと黒雷を纏いながら真下に落下していく。

だが、それだけではゴールには入らない。

『雄人、決めろっ！』

『任せとけ！』『エヴオリューション』ッ！』

ゴール前から全速力で走って来た雄人が落下するボールにドンピシャで右足を振り抜いた。

ボールは向きを変え、ゴールへ一直線。

朱乃が必殺技を発動する間もなく、ゴールネットを揺らした。

2—1

雄人が点を決めた瞬間、アルフが試合終了のホイッスルを鳴らしたのだった。

「負けちゃったけど楽しかったわ」

夕食後にフランが俺のベッドの上で寛ぎながら今日の出来事を振り返った。

俺としては予想外の出来事ばかりだったけど、皆が楽しめたのならそれでよし。当然俺自身もかなり楽しかった。

「けどすっごく疲れた〜！」

元引きこもりのフランにはかなりいい運動になったんじゃないだろうか。

これからも定期的に修行の一環として超次元サッカーをするみたいだし、その時には連れ出そう。

「今日はもう寝るわ。おやすみ」

「うん、おやすみ。……いや、自分の部屋で寝ろ」

さも当然のように俺の部屋で寝ようとしたフランを叩きだしたの

だ  
っ  
た。  
。

乙女の、乙女による、乙女のための会議です！

乙女の、乙女による、乙女のための会議です！

Side 明日奈

冬休み最終日の午後。アリサちゃんの家には私達はいた。

アリサちゃんがカップの中の紅茶を飲み干して静かにカップをテーブルに置くと、私達一人ひとりの顔を見ると視線だけで「そろそろいい？」と問いかけてきた。

私達が頷き返すと満足気に頷き立ち上がった。

「それでは第42回、乙女の乙女による乙女のための会議をこれより始めます！」

そう高らかに宣言したのだった。

——乙女の、乙女による、乙女のための会議。通称『乙会』おつかい。

参加しているメンバーはなのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、はやてちゃん、愛衣ちゃん、シアちゃん、ネリネちゃん、リコリスちゃん、私こと結城明日奈を含めた11人。そして、私達の意見が対立したり、ケンカが起こつた場合に備えての仲裁役としてあかりちゃんがいた。

イリヤちゃんもメンバーの一人なのだが、頻繁に海鳴市には来れないので彼女だけたまに参加となっている。

不定期に開催される『乙会』の目的は私達の共通して好きな人——「龍神空」をどうやって振り向かせるか。そして、彼をデレさせて皆で外堀埋めて逃げられないようにする。要するに、空君にハーレムを作らせるのが最終目標なのだ。

この会が発足したきっかけは私とアリサちゃん、すずかちゃんが誘拐事件の被害者となり、解決した時のこと。

すずかちゃんの正体を知った私達は、一生を共にする盟約を結ぶか、すずかちゃんに関する記憶を失うかの二択を迫られた。当然、私達は大切な友達であるすずかちゃんを忘れるなんて嫌だから盟約を

結ぶことを選んだ。

そんな中、空君だけはすずかちゃんが一番仲のいい異性ということで『婚約者』にさせられてしまったのだ。

それに納得のいかない私達は反発した。

……だって、初めて好きになった人がいきなり取られちゃうなんて嫌なもの。

だがしかし、その場合は他の女の子達と倍率の高い競争をしなければならぬ。しかもその女の子達というのは仲の良い友達ということもあって、自分が抜け駆けするということを考えて大分気が引けてしまった。

誰もが不安になる中、プレシアさんからの衝撃的な一言で私達の考えは一転する。

『ミッドチルダには一夫多妻制が認められている』

異世界独特の文化に私は喜んだ。皆一緒に結婚出来るのなら誰も不幸にならないから。恐らく、他の子も同じように喜んだに違いない。

そして私達は空君がいない時に集まって『乙会』を結成。誰も反対する人なんていなかった。皆私と同じ考えを持っていたようで安心した。

すずかちゃんも独り占め出来るのは嬉しいと思っただけで、私達のことを考えたらこうするのが一番だって考えたみたい。

だけど、すぐに安心は不安に変わった。

空君の傍には十香さんをはじめとした姉的存在がいるのだ。

彼は超が10個ついても足りないくらい鈍感だから気が付いてないだろうけど、十香さん達が空君に対して向ける目は恋する乙女だと丸わかりだ。一見、ブラコンにも見えなくてもないけど、彼女達は絶対に空君に恋してる。本人に直接聞いたわけじゃないけどそこは恋する乙女の直感というやつだ。それにリインフォースさんも同じだろう。あのデート以降、空君に対しての態度が他のヒトと明らかに違う。

それだけならまだ許せないこともない……けどギリギリ許せない

ところだが、問題はそれでではない。龍神空という少年は無自覚にフラグを建てまくる。最早感染力の強い病原菌と言っても差し支えないくらいにだ。

最近だとフランちゃんとタマモちゃん。

今日の『乙会』の議題はその二人に関してだ。

「皆も知っての通り、……また増えたわ」

「ホントに空君は……」

「そろそろその辺のことお話ししておかないとね」

「まあ、好きになった私達が言えることじゃないんだけど」

司会進行を務めるアリサちゃんの切り出しにその場にいた誰もが溜息を吐く。空君に好意を寄せていないあかりちゃんさえも溜息を吐くのだから本当に彼はどうしようもない。

「タマモは空をご主人様と呼ぶほどに慕ってる。これは間違いないわ」

良妻賢母を目指してるとか言ってたけど、実際に彼女の家事能力は高いみたいだ。

アリシアちゃんから聞いたけど、タマモちゃんは幻想郷という異世界から来たから洗濯機や洗剤といった文明の違いに驚いていたが、使い方を即覚えてすでに使いこなしているみたい。

掃除は素早く綺麗。洗濯は丁寧で皺ひとつない。炊事に関しては洋食は作ったことがないらしいが、和食にかなり秀でてる、とのこと。

空君が幻想郷でタマモちゃんの手料理を食べたらしいのだが、相当美味しいと言っていた。

私もうかうかしてられない……！

家が家だけに中々料理をさせてもらえないのだけど、このままでは女の子としてタマモちゃんに後れを取ってしまう。

空君にはすでに女子力——否、最早あれは主婦力——で負けてしまっているがそれはいい。彼は例外なのだ。

「で、そのタマモなんだけどね、一応私達と同じ相手を好きになったわけだからこの会に誘ったの」

同じ想いを持つのだからこの会に誘ったフエイトちゃんの判断は

正しい。

「でも、ここにいないってことは……」

「なのはの考えてる通りだよ。タマモはハーレムは嫌だつて」

なるほどね。タマモちゃんは一人で戦うことを選んだんだね。常識的に考えたら私達がしようとしてることって異常なわけだし、タマモちゃんが当たり前なだけだ。

だけどそれでも私達は全員で彼に好きになってもらう方針は変えない。

たとえ世間に後ろ指差されても。神や魔王が許さなくても。

あ、でも冥界や天界は悪魔や天使の数が少ないから一夫多妻制も認められてるから大丈夫かな。

——それはともかく。

「タマモちゃんは基本的に放置でこつち側に来るなら拒まず、って方向性で良いかな？」

私の提案に皆が肯定の意を込めて頷いた。

「次はフランね。……タマモよりも厄介なのよね」

タマモちゃんの次はフランちゃん。

空君が幻想郷とは違う世界に行ったときに出会った吸血鬼の少女だ。

この世界に戻って来るまでの一か月近くを一緒に過ごしていたらしい。そして、ついこの間幻想郷で再会。タマモちゃんやジバニャン達と一緒に龍神家に押しかけて、つい先日住むことになったのだ。

「空つてき、フランにやたら甘いよね？」

アリシアちゃんがフランちゃんの話になった途端に呟いた。

そう。それがフランちゃんが厄介な理由なのだ。

箱入りのお嬢様だということは空君から聞かされていたけれども、出来ないことや知らないことが多い。髪の毛のセットや箸の使い方、フランちゃんの要望には基本的になんでも応えるくらいだ。

その点に関しては仕方ないと思う。

アリサちゃんやすずかちゃん、それに私なんかは世間一般的にはお嬢様と呼ばれるものだ。シアちゃん達に至ってはお姫様だけだ。そ

れ故に少々世間の常識をしらないこともある。料理や電化製品の使い方なんかがいい例。だからその点に関して言えば、フランちゃんに強くは言えない。

……でも、本音はかなり羨ましくて、ズルいつて思っちゃうな。

彼女がまだこの世界の文化に不慣れなのは十分に理解してるつもりだ。それでもやっぱり空君を独り占めされるのは嫌だって心が伝えてくる。

「フランちゃんのお世話は私達も積極的に手伝えばいいんじゃないかな。空君の負担は減るし、私としてはフランちゃんとも仲良くなりたいつて思ってるから」

「一石二鳥ならぬ、一石三鳥つてとこやな」

フランちゃんは自分で出来ることが増える。影分身があるから負担はなさそうだけど、空君は負担が減る。私達は仲良くなれる。確かに一石三鳥だ。

「ところでさ、フランちゃんつて空君のこと好きなのかな？」

「あー、それ！ 私も聞こうとしてたんだよ！」

あかりちゃんの呟いた疑問に思わず立ち上がってまで勢いよく反応してしまった。

実はフランちゃんが厄介な理由がもう一つあった。

それは彼女が空君に好きという想いがあるか今一わからないのだ。

『空のことをどう思ってるか？ 大切な友達。それだけよ』

サツカーをやった日にさりげなく聞いてみたらフランちゃんからそんな答えが返って来た。

愛衣ちゃんは嘘を吐いてないつて言ってたけど、様子を見るにどうにも二人の距離感が友達のものとは思えない。

フェイトちゃんがタマモちゃんのように誘わなかったのは空君に対する想いがないと判断してのことだろう。

「自分で言うのもアレだけどさ、私も結構空に甘えたりするんだよね。でもフランも中々なんだよ」

サラツと聞き捨てならないことを言うアリシアちゃんに皆の視線が集まる。

詳しく聞きたいところだけどそれは後だ。

「スキンシップが激しいってこと？」

「うん。べつに美九や折紙みたいにスキンシップが激しいわけじゃないんだよね。なんか用事があるわけでもないのにさり気無く空の隣にいて、空に暇があれば膝枕してー、とか頭撫でてー、なんて要求してた。それ以外だと割と普通にいるだけなんだよね」

空君のことを考えて甘えてるわけだね。私の印象では我が儘に甘える子なのかと思っていたから、今の話を聞いて意外に思ってしまった。

他の子達も思っていたことと違って拍子抜けしてるようだ。

「空君に迷惑が掛かってないならいいんじゃないかな？ 好きだって自覚したらこつちに引き込めばいいと思うし、タマモちゃん同様に基本的に放置ってことで」

なのはちゃんの意見に誰も反対はしなかった。

「じゃあ、今回の議題をまとめるとタマモちゃんとフランちゃんは基本的に放置、こつちに来るなら引き込む。フランちゃんに関しては追加で私達でフォローして空君の負担を減らす。それでいいかな？」

『うん』

あかりちゃんがまとめて私達がそれに頷いた。

「それじゃあ、本日の『乙会』はここまで——」

「あ、ちよつと待って！」

アリサちゃんが『乙会』をお開きにしようとしたのを遮った。

「何かあった？ 明日奈」

「うん。少し早いけどバレンタインのことを話しておきたいんだ」

次の『乙会』がいつになるかわからないから早めに言っておきたいことがある。

「去年までは空君やヴァーリ君には義理チョコを渡してたと思うけど、今年は、その……」

その先を言わなくても察してくれたのようで、何人かが頬を赤らめさせた。

なのはちゃんやフェイトちゃん達と違って、私を含めた何人かは去

年までは仲の良い友達として空君とヴァーリ君に義理チョコを渡していた。

「だけど、今年渡すチョコは去年までとは違う意味を持つことになる。」

「本命、か……。そう思うと渡すの緊張しちゃうな」

「今年は手作りにチャレンジっす！」

「私は手作りには自信がないです……」

「だとしたら皆で一緒に作るのはどうかな？」

「相談してみないとわからないけど、お母さんに翠屋で教わるのもいいと思うよ」

「最悪場所に関しては私の家やすずかの家があるから問題ないわね」

「あつという間にバレンタインの話が進んで行く。」

「材料やラッピングは桃子さんに作り方と一緒に聞けば良さそうだ。」

「お金に関してはまだ使っていないお年玉があるから大丈夫なはず。」

「メンバーはここにいる私達の他に朱乃ちゃんやティアナちゃんの同世代組も一緒だ。」

「ある程度決まったから近い内にイリヤにも伝えましょ」

「あとは日程くらいだね」

「ううん。まだ大事なことがあるよ」

「?」

「大事なこと?」

「毎年空はどのくらい貰っていたか知ってる?」

「!？」

「空は私達の数を抜いてもすごく貰ってるんだよ。ついでにヴァーリや雄人も」

「そう言えばそうだった……!」

「あの三人は聖小でかなり人気者なのだ。」

「雄人君は戦闘面だけ見るとヘタレな部分が目立つが、生活面では誰とでも分け隔てなく接してくれる明るい性格で男女共に人気が高い。」

「ヴァーリ君は運動も勉強も文句なし、口数が少ないクールな性格が一部の女子に人気だ。特に上級生からはそこが可愛いんだとか。」

そして、空君。ヴァーリ君同様、運動も勉強も十分に出来るし、素直な性格で先生からの評価も高い。下級生にはお兄ちゃんになつてほしいとか、上級生には弟にしたいなんていう話がチラホラ聞こえてくる。

同級生なら知らない人はいないだろうという三人が貰わないはずがないのだ。

「今年は更に増えるんやろな」

「想像しただけで頭が痛い……」

「まあ、考えてても仕方ないわ。私達が他の子を邪魔するわけにもいかないしね」

大きな問題を抱えたまま今度こそ本日の『乙会』はお開きとなった。帰るにはまだ早いからもう少しだけ雑談してから帰ることにした。

「空君は今何してるの？」

話題になるのは必然とばかりに空君の話になる。

「中国に行ってるよ」

『はっ。』

予想だにしていけない返事がフェイトちゃんから返って来たのだった。

S i d e o u t

S i d e 空

冬休み最終日に中国の人里から離れた山の中に俺達はいた。

一緒にいるのはヴァーリと十香、六喰、黒歌にオリヴィエさんだ。霧がかかる石柱ばかりの渓谷の風景は、仙人が住んでいてもおかしくない独特の雰囲気醸し出していた。

「二亜の調べによるとここからへんにいるらしいけど……」

「霧が濃くて探しにくいですね」

足元を確認しながらゆっくり歩いていく。

俺達が中国に来たのには理由があった。西遊記に登場する斉天大聖こと孫悟空に会うためだ。

アザゼルさんの話しだと、神格化して仏になっているんだとか。孫悟空は仙術と妖術にとっても秀でているのでもし会えたなら学ぼうというのも考えてる。

《この霧のせいかはわかりませんが魔力感知上手くいけません》

ブレイブがお手上げだと言わんばかりに告げてきた。

魔力がダメなら見聞色の覇気で探り始めた。

……ダメだ。気配はある。だけど多すぎる。近くに居るようで遠くにいるような、まるで矛盾した反応だ。

これが妖術や仙術の力なのだろうか。

「手当たり次第に探すしかなさそうですね」

対処の仕様がな、それしかできない。

時間がかかるのも承知で山の中を歩き続けた。

歩き続けること二時間程して溪流の近くで休憩を取っていた。

成果は全くと言っていいほど芳しくない。

「見つからないのう」

「うん……」

「何故だか同じところを何度も歩いた気がするぞ」

「恐らく幻術の類いにや。それもこの山全体に掛かるほど大規模なやつ」

妖術や幻術を使う黒歌だからこそ気が付いたことだ。彼女がいるのは助かった。

「まだ探索するか？」

「うーん、なんだか歓迎されてないみたいだから——お？」

帰ろうかと言おうとしたら、川から何かが流れてくるのが目に入った。

気になったので十香達に協力を仰いで川から上げてみると俺とそんなに身長差のない少年だった。

白目を向いていて完全に気絶してる。

「こいつ妖怪よ」

黒歌が自分と同じ種族にいち早く気が付いた。

顔は人間みたいだが、腰から生える尻尾が妖怪であることを裏付けていた。

「ブレイブ」

《はい。頭部に何かで殴られた形跡があります。それ以外は目立ったものはありません。放っておいてもいずれ目覚めるでしょう》

ブレイブの解析結果を聞いて、治癒魔法をかける必要はないと判断して妖怪の少年を横にする。

「この妖怪が起きたら孫悟空について知ってるか聞いてみるべきだな」

ちようど行き詰っていたところだから、十香の提案を呑んだ。

それから十分程休んでいたら、妖怪の少年が目を見ました。

「……んあ？　ここは……って、お前ら誰？」

「君を助けた者さ。川から君が流れてきて驚いちやった」

「助けた？　川から？　ああああーッ！　あのクソジジイ！　よくも殴ってくれたな！」

ジジイ？　修行でもしてたのかな？　もしくは何かして怒られたとか？

「わりい、誰か知らないけど世話になったわ！　俺っちはあのジジイに仕返ししないと——」

「あ、待ってよ。聞きたいことがあるんだけど」

折角山の中で出会えた妖怪だ。何かしら知っていても可笑しくはない。

「ん？　何だ？」

「孫悟空って知ってる？」

「知ってるぜ」

「ホント!？」

「おうよ。そだな、助けてもらった礼に会わせてやるぜ。俺っちに付いて来な」

流れが一気にやってきた。

俺達は顔を見合わせてすぐに妖怪の少年を追いかけて始めた。

妖怪の少年の後ろに続く形で山の頂上付近に辿り着いた。

そこにある岩山に胡坐をかいて座る小さな人影。

「ほう、これは面白い奴らがきたもんだのお」

俺達の姿を確認した小さな人影は岩山から降りて、こちらに歩み寄って来る。

背丈は幼稚園児ほどで金色に輝く体毛、法衣を着ていて、猿のような顔。だが、皺が多い。手には長い棍と煙管。首には一つ一つの珠のサイズが大きい数珠。そして何故かサイバーなサングラスを掛けている。

「あのチビのジジイが孫悟空だぜ」

少年からの紹介に目を見開く。

西遊記で有名な孫悟空がこんなにも小さな姿だとは驚きが隠せない。

「お前さんたちはどうしてここに？」

「孫悟空さんに会いに来ました！ ついでに仙術とか教わりたくなつて」

「いいぜい。ここで会ったのも何かの縁だろうからな」

そう言つて、孫悟空さんは皺くちやな顔をさらに皺くちやにして笑つて、俺達の修行を快く引き受けてくれたのだった。

OS

OS

建物内にある暗い部屋を窓から射し込む月明かりが僅かに照らしていた。

その部屋で足を組んでソファに座る人物は手に持っていた一冊の本を開き、内容を誰かに聞かせるといっわけでも無いのに口にする。「……この本によれば、西暦2022年11月6日。フルダイブ型仮想ゲーム機、ナーヴギア専用ソフト『ソードアート・オンライン』。サービス開始初日に禍の団の介入によって開発者、茅場晶彦を利用し、10000人のプレイヤーがログアウト不能、ゲームオーバー⇨現実の死となるデスゲームと化した。

圧倒的な絶望の中、ゲームクリアを目指して剣を取るもの。恐怖に負け、他者との接触を断つもの。中にはプレイヤー同士で命を奪い合うものまでもがいた。

そして、二年後の2024年11月7日。一人のプレイヤーによってゲームクリアはされ、人々は解放された。

最終的に4000人も命が犠牲となり、茅場晶彦の死で事件はその幕を下ろす」

——それが本来ならば起こるはずの出来事だった。

「だが、実際には禍の団の思うような出来事は起こらなかった。

何故なら、とある少年の働きが全プレイヤーを救ったのだ。

たとえば、それが鋼鉄の城に囚われたお姫様を助けるための「ついで」、であったとしても。

その少年の行動理由がどうあれ、彼のおかげで犠牲となった命は0。禍の団の陰謀に巻き込まれた開発者、茅場晶彦の命さえも救ってみせた。

そんな奇跡と言っていない出来事があったなど露知らずの生還者た

ちは、政府の援助もあつて現代社会への復帰を目指すことになる」  
ページをめくり、そこに書かれている続きを読み上げる。

「しかし、S A Oから解放されたプレイヤーは全員ではなかった。  
須郷伸之という人物によつて300人のプレイヤーが未だに目覚  
めない状態。彼が助けようとしたお姫様もその中にいたのだ。

彼はそれを知つて再び動く。

妖精王『オベイロン』から妖精女王『テイターニア』を奪い返すた  
めに。

現実では彼が、ゲームの世界ではS A Oをクリアした少年『黒の剣  
士』に託して須郷伸之の陰謀を打ち砕いた。

無事囚われのお姫様と彼は再会できたのだ。

こうしてプレイヤーが全員解放され、S A O事件が二年かけて幕を  
下ろした」

またページをめくり、書かれている内容を読み上げる。

「そして、物語の時間はS A O事件解決の二年後から始まる。

その時、S A O事件の続きとも言える問題が起こるのだが、彼は一  
体——おっと、これ以上は皆にとつてはまだ未来のことだったね」  
気になる部分を言い残して本を閉じた。

決まった、とドヤ顔しているところで部屋の明かりが点く音がし  
た。

「何やってんの?」

「単なるウオズ(っこー)」

「……そう」

部屋に入つて来た少年は呆れ気味に返すだけだった。

私こと結城明日奈は、中学三年生の冬にデスゲームと化した鋼鉄の  
浮遊城『アインクラッド』に閉じ込められた。

たまたまS A Oのソフトを手に入れて、たまたま息抜き程度に遊んでみようとなーヴギアを頭に被った。偶然に偶然が重なった結果がこんな理不尽な目に遭うことを誰が予想できたであろうか。

これは悪い夢。いつかは現実に帰ることが出来る。きつと目が覚めたら彼が目の前にいて「寝坊助さん」と言って笑ってくれるに違いない。

だけど世界は残酷だった。

毎日どれだけ泣いても、宿屋で寝ても覚めても目に映るものは変わらない。

そのうち涙も涸れ果て、外から聞こえる今日は誰々が死んだという話を聞く度に私は怯えることしかできなかった。

ああ。私はこの世界で死ぬしかないのか。もう二度と家族にも友達にも、大好きな彼にも会えないのか。

いつそのこと、このまま自殺してデータの世界で消えるのもいいかもしれない。

アイコンクラウドに閉じ込められて二週間、現実を直視するのが嫌になつて自殺でもしようかなと考え始めた頃、一通のメールが来た。

バグなのか文字化けして送り主の名前や本文のほとんどが読めなかったが、最後の一言だけが読めた。

——『待ってる』

私の瞳からは涸れ果てたはずの涙が溢れ出した。

たったの四文字。でも、それだけでメールの送り主が判明できた。確証なんてものはないが、確信できた。

……そうだ。ソラ君が私を諦めるはずじゃないじゃない……！

彼を信じていなかった自分に不甲斐なさと怒りを覚えて、自分の頬を叩いた。

ようやく現実と向き合う覚悟を決めた私は宿屋を飛び出した。この最低最悪のデスゲームをクリアするために。皆が待っている場所に帰るために。

それからの私の行動は早かった。  
戦いにおいて必要な情報を集め、装備を整えてレベリングに勤しむ  
毎日。

SAO内で出会ったキリト君や友達となったりリズには私の異常さを心配されるが関係ない。

睡眠？ 食べ物？ 現実の身体じゃないんだから最低限で十分よ  
！

安全マージンがとれてない？ なら死ぬ気でレベリングしなさい  
！

攻略の鬼？ 狂戦士？ ハイサーカーそれが何か文句でも？ 私は現実世界に  
一秒でも早く帰って彼の顔が見たいのよ！

殺人ギルド？ そんなもの気合でどうにかしなさい！

他人にも自分にも無茶を押し付けながら積極的に攻略に参加し、友  
達の受け売りではあるが全力全開で挑んだ。

破竹の勢いで進められていく攻略に誰もが希望を見出す中、私はふ  
とあることに気が付いた。

足りない……。ソラ君成分が足りない……！ （ちなみに私達幼馴染の間ではソラニウムと呼んでいる）

禁断症状に似た何かが出始めたのは第十層を攻略した頃だろうか。  
その時はまだ文字化けしたメールを読み返すだけで気力を保てた。

だが、第二十層を攻略した頃にはそれだけじゃ足りなかった。もう  
半年以上もソラ君に触れていないのだ。そんなの我慢の限界が来る  
に決まっている。

毎晩ソラ君とイチャつく妄想に耽るだけで精一杯だった。  
クォーターポイントである第二十五層を攻略する時にはもうダメ  
だった。

どんな妄想をしても気持ちいが晴れない。

たとえ、嫌がるキリト君や団長に無理矢理デュエルを挑んで、それ  
ぞれに10戦10勝0敗の無敗という結果を残したとしても。

たとえ、親友のリズやシリカちゃんに大好きなソラ君の凄さやカッコ良さを引くぐらいに語ったとしても。

たとえば、ソロでフロアボスを攻略したとしても。

たとえば、毎晩のようにソラ君への愛を綴った文章を書いたとしても。

たとえば、殺人ギルドが私を罠に嵌めようとして逆に全員返り討ちにしたとしても。

何をしても私は満たされなかった。

やがて、攻略にも支障をきたすレベルの禁断症状が出始めた頃には団長から休暇を無理矢理取らされた。

だが、根本的な解決には至らず、休暇程度では私の禁断症状は治まるどころかより激しくなった。

その時のことは詳しくは憶えていないのだが、リズ曰く、壁に向かってソラ君の名前を連呼していたらしい。

「もう、無理……。ホント無理。ソラ君に会いたい」

何もかもが嫌になった時、情報屋のアルゴさんから一通のメールが届いた。

何でも第二十二層に幽霊が出ると噂が出てるらしい。それを私に調査して欲しいようだ。

多分、アルゴさんなりの気遣いなのだろう。

私、幽霊苦手なんだけどなあ……。まあ、いつか。

ソラニウムが足りなさ過ぎて頭が働かない私は、暇そうにしていたキリト君を伴い、噂の調査を始めた。

過程は大したことがないので結論から言うと、幽霊の正体は黒髪の女の子だった。

この世界にいるプレイヤーやNPCには何かしらのアイコンが表示されるのだが、彼女にはそれが無い。キリト君はバグか何かだと言っていたが私にはそうは思えなかった。根拠があるわけじゃないけど。

とりあえず溜め込んだお金で森にあったログハウスを購入して少女の面倒を私が見ることになった。

何日かして、少女は目が覚めた。

「私、アスナ。あなたは？」

「あす、な……う？ そらの、友達？」

「……………え？」

怖がらせないように自己紹介を試してみたのだが、彼女は予想外の反応を見せた。

今、ソラつてこの子は言った……………！

「あなたは何を知っているの？」

「そらにお願い、された。あすなつてという友達を、助けてつて」

ソラ君……………！

溢れそうになった涙を堪えて、彼女に色々尋ねた。

彼女——ユイちゃんはSAOのメインシステム『カーディナル』の『メンタルヘルスカウンセリングプログラム試作1号（MHCP001）、コードネーム：ユイ』。すなわち茅場晶彦の作ったAIなのだそう。

私に会いに来る前にカーディナルから消されそうだった彼女はソラ君と出会い助けてもらった。助けたお礼として自分ではSAO内に干渉できないからユイちゃんに私を助けてあげてとお願いされた。

それと制限があるがユイちゃんを介せば現実世界と連絡も出来るらしく、SAOに閉じ込められてから送られてきたメールはやはりソラ君からのものだったのだ。

「ありがとう……………！ ユイちゃん、本当にありがとう……………！」

ユイちゃんとの出会いによって、再び戦う気力を取り戻した私はようやくくまともに休むことができたのだ。

「ママ！ おはよう！」

「おはよう、ユイちゃん」

私とユイちゃんが暮らすようになって数日が経過した。

彼女からはいつの間にか「ママ」と呼ばれるようになったのは、本人曰く、呼びやすいかららしい。

なら彼女のパパであり、私の旦那様は誰なのか？という問題が当然でてくる。

最初はキリト君をそう呼ぼうとしていたのだが、残念ながら彼ではない。ソラ君だ。

私をママと呼ぶ代わりに、ソラ君のことはパパと呼ぶように仕向け、現実世界に帰ってそれを教えた時の反応が楽しみだ。

ユイちゃんのお陰で私の精神的な問題が解消され、攻略に再び繰り出すようになった。

私が抜けたことで滞っていた攻略が捗るようになり、あつという間に第七十五層。

ボスのスカル・リーパーを倒して次の階層に進もうというところでキリト君が団長に斬りかかった。

キリト君曰く、一連の行動を見て彼が茅場晶彦と判断したらしい。でも、そうじゃなかった。団長『ヒースクリフ』の正体は本人に成りすました『悪魔』だったのだ。

……実を言うと私はそのことを知っていた。ユイちゃんから事前に聞かされていたが、茅場さん本人はソラ君に助けられて無事だそう  
だ。

悪魔は気付いたご褒美としてキリト君に契約を持ち掛けた。自分  
デュエルと決闘して勝てばプレイヤーを開放すると。

その提案を呑んだキリト君は戦いに臨む際、麻痺で倒れるクラインさんやエギルさんといった仲の良いプレイヤーに話しかけた。まるでお別れを告げるかのように。

そして、それは私にもだった。

「アスナ」

「どうしたの？」

「俺、アスナのことが好きなんだ」

真つ直ぐにその想いを伝えてきた。

「知ってる」

第一層でキリト君と出会ってからここまで多くの時間を過ごした。

自慢じゃないがこれでも小学校中学校とそれなりに告白された経験がある。それ故に彼が私に向ける感情もなんとなくわかったのだ。

どこかの誰かと違って鈍感ではないから。どこかの誰かと違って  
ね！

「返事は現実で会ったら聞かせてくれないか？」

「わかった。そこまで言うんだったら勝ってよね」

「ああ。任せろ！」

そう言って彼は最後の戦いに臨んだ。

序盤はユニークスキル《二刀流》で連続攻撃するキリト君が優勢かと思われたが、悪魔はユニークスキル《神聖剣》と防御力の優れた盾で防ぐ。

やがてキリト君の剣の耐久力が尽きて碎ける。それはまるでキリト君の心が折れる音のようにも感じた。

それに反して大きなチャンスを得た悪魔は口元を三日月のように歪める。

このままじゃ、キリト君が……！

誰もがもうお終いだと思った瞬間、彼の碎けたはずのエリユシデータとダークリパルサーが光り輝く。

二本の剣は新たな剣——否、鍵へと姿を変えたのだ。

「なんだ、それは……!?!」

「うおおおおおっ！」

予想外の事態に動揺を隠し切れない悪魔にキリト君が二振りの鍵で止めを刺した。

ポリゴンとなって消えるまで悪魔の顔は驚愕に満ちたものだった。

無機質なアナウンスでゲームがクリアされたことが知らされ、私の視界はたちまち白く染め上げられた。

「……は……」

次に目が覚めた時、現実に戻って来たのかと思ったがそうではなかった。

ゲームの世界とは思えない美しい夕暮れにしばし見惚れていたが、次第に自分がどうなったのだろうと考え始めた。——が、それも一瞬で吹き飛んだ。

「おはよ、明日奈」

一番聞きたかった人の声が背後から聞こえた。勢い良く振り返り、

そこにいる人物を見る。

一人はユイちゃん。そしてもう一人は私の大好きな人。

どうしてここにいるの？ ずっと待っていてくれてありがとう！ キリト君に力を貸したのはソラ君？ 会えなくて寂しかった！

彼に聞きたいこと、言いたいことがいっぱいあるのに何から先に言ったらいいかわからない。

でも、それらを口にするよりも先に私の体は動いて彼の胸の中に収まった。

「ソラ、君……なの？」

「ああ。まさか二年も顔見てないから忘れたとか？」

「そんなことない！ 一日だってソラ君を忘れたことなんてなかった！ ソラ君に会いたくて今日まで頑張つて来た！ ずっとずっと会いたかった……、会いたかったよお……！」

「……そうか。ごめんな、寂しい思いさせちゃって」

優しく抱き締め返しながらぽつぽつと語ってくれた。

彼が言うには閉じ込められた人を開放することはできなかったけど、体力が尽きても現実では命を落とすことがないようには出来たこと。まだ確認しきれていないが死者は今のところ出ていないそうだと。

そして、今はSAOのデータ削除と生き残ったプレイヤー達が徐々にログアウトしていつてる。私もその順番待ちでその時が来るまではここでソラ君とユイちゃんと過ごすこととなる。

SAOが削除されたらユイちゃんはどうなるのかという私のナーヴギアにデータが保存されているので消える心配は必要ないらしい。

「ううん、もういいの。現実じゃないけどこうしてまた会えたから」

成長して大分身長差を付けられてしまった彼の胸に顔を埋めて、会えなかった時間を埋めるかのように甘える。

彼も仕方ないなあと言いつつも頭を優しく撫でてくれる。

ああ、この感じ懐かしい……。

「ユイもありがとな。明日奈の側で支えてくれて」

「助けてもらった恩返しです！ それにママを助けるのは娘として当

然ですよ！」

「ま、ママ!？」

ユイちゃんが私をママと呼んだことにソラ君はどういうことだと  
言わんばかりに私を見た。

「ちなみにパパは誰だと思う?」

「そんなのユイを作った茅場さんなんじゃないのか?」

「違います。ユイちゃん、誰がパパなのかな? この鈍感お馬鹿さ  
んに言っただけで」

もうっ! 身体が成長してもそういうところは相変わらずなんだ  
から……。

「はい! 私のパパはあなたです! 龍神空さん!」

「……………なんでやねん」

「ママとパパは相思相愛だと聞いてますよ!」

「あのなあ、明日奈……」

「私がソラ君のこと好きなの知ってるよね?」

少し圧を込めて聞けば、小さく呻いて露骨に目を逸らした。

しばらくして観念したのか溜め息を吐いた。

「わかったわかった。俺がパパですよ。ほら、ユイもおいで」

「はい、パパ!」

ソラ君の手招きで察したユイちゃんが勢いよく私達に抱き着く。

きつと傍から見ると私達三人は家族に見えることだろう。

ふふ、幸せな家族計画は順調に進行してる。

「そろそろ時間か。次は現実で会おう。……ああ、違うな。会いに行  
くよ」

「うん! 待ってる!」

名残惜しいけれどいつまでも仮想世界にはいられない。

ログアウトする前に彼の唇を奪って私の意識は暗転したのだった。

そうして私は現実へ帰還——とはならなかった。

小さい時から両親によって決められた婚約者、須郷伸之の実験に私

は巻き込まれたのだ。

鋼鉄の浮遊城の次は世界樹の鳥籠。

そこではSAOみたいに剣を振るうことが出来ない無力な少女だ。須郷さんが言うには私は『オベイロン』の妻『テイターニア』という役割があるそうだが、誰があなたの妻になんかなるもんですか！何とかしなければとユイちゃんを鳥籠の外に出し、助けを呼ぶことにした。

それから数日が経った。須郷さんのセクハラ行為に耐えながら助けを待つ日々が終わりが来たのだ。

「アスナー！」

「キリト君!？」

助けに来てくれたのはソラ君ではなく、キリト君だった。

彼はユイちゃんの協力によつて、須郷さんがクリア不可能だと言っていたグランドクエストをクリアしてここまでやって来たのだ。

恐らく、仮想世界はキリト君に任せて、ソラ君は現実世界で須郷さんをどうにかしようとしているのだろう。

あとはログアウトするためにシステムをどうにかしないとイケないのだが、ユイちゃんがやってくれる。

これで今度こそ………！

「どこに行く気だい？」

だが、そう上手くはいかなかった。

グランドクエストがクリアされたと知った須郷さんが私達の前に現れたのだ。

次のアップデートで実装予定の重力魔法によつて私達の動きを封じ込め、私とキリト君に好き放題し始める須郷さん。ユイちゃんは上手い事逃げてくれたから良かった。

「須郷ッ！」

「絶対に、あなたを許さない………！」

「おお。怖い怖い。そんなに怒らないでくれよ、僕のテイターニア」

誰があなたのものよ………！

キリト君を痛めつけ、狂気に歪んだ表情といやらしい手つきで私に

触れる須郷さんに殺意が沸き上がった。

私の服を取って辱めようとした時、須郷さんの腕が斬り飛ばされた。

「ぼ、僕の腕がああああああ!? 貴様ああああああッ!!」

いつの間にか立っていた全身黒で統一された服装。手に持っているのは見覚えのある鍵の形をした剣。

フードに顔全体が覆われていて誰だか判別が出来ないが、きっと彼なのだろう。

「俺、参上! ってね」

どこぞの仮面ライダーの登場を真似た彼は、独り言を呟き始めると色々なコマンドが表示された。察するに彼に管理者権限が行き渡ったのだと思う。

重力魔法と鎖が外れ自由の身となった私とキリト君は立ち上がって須郷と向かい合う。

「二人はこいつにやり返す権利がある……って、聞くまでもないか」  
私達がSAOで使い慣れた剣をシステムで呼び出し、持たせてくれた。

それではフェアじゃないので須郷さんにも『エクスキャリバー』を持たせた。

ついでにキリト君を痛めつけたようにペインアブソーバを低くすることも忘れずに。

「さあ、須郷。お前の罪を数えろ」

セクハラされた分、ALOに閉じ込められた人達の方、ソラ君に会えなかった分。キリト君と二人でありつたあの怒りを全部込めて斬りつけた。

体力が尽きた須郷さんはポリゴンとなって消滅した。

こういう時に現実世界と違って仮想世界なら死なないというのはいいものだ。

やがて怒りが収まり黒服の人物に話しかけようとしたが、いつの間にか消えていた。

私達もこれ以上ここに留まる理由はないのでログアウトした。

三度目の正直でようやく現実世界に戻ることが出来た。

長い事眠っていたせいで身体は痩せ細って重いし、視界はぼやけているし、耳はよく聞こえないという状況だ。でも、現実世界によろやく戻れたのだと思うと凄く嬉しくて涙が出てくる。

それに一番最初に会えた人が私が一番会いたい人だったこともあつて余計に、だ。

「おかえり、明日奈」

良く聞こえなかったがきつとそう言つてたのだろう。

だから、私は――

「ただいま、ソラ君！」

笑つて答えたのだつた。

こうして私は現実世界に帰還し、無事SAO事件は終わったのだつた。

「皆ーッ！ 今日俺達『The Best Bond』のライブに来てくれてありがとーッ！」

『キヤーーッ!!』

西暦2026年。場所は武道館。

最後の歌を終えて、握りしめたマイクを使って今日のライブ参加者への感謝の気持ちを伝える。すると黄色い歓声がライブ会場全体に響く程の大きさに返ってくる。

慣れないうちはその声の大きさにビビらされていたが、今では『今回のライブへの最大の賛辞』と受け取るようになった。

まだまだ引く様子のない参加者の声を背に受けながらステージか

ら消えていく。

「ライブ、大成功でしたねっ！」

ステージ袖でライブを見ていたスタッフの一人が興奮冷めやらぬ様子で俺達に話しかけてきた。

確か、彼は大きなライブのスタッフは初めてだったと準備の初日に言っていた。それなら無理もないかと苦笑いする。

「当たり前だ。俺達を誰だと思ってる」

「こら、少しは謙遜しろって。それに俺達だけじゃないだろ？」

隣にいた相棒が生意気を言うものだから軽く小突く。

「そんなことはわかってる。スタッフの皆がいなければ俺達は輝ける場所が無くなるからな。感謝してもしきれないさ」

その言葉を聞いていたスタッフ一同が破顔する。

「二人共、お疲れ様です。反省は控室でしましょう」

黒いスーツに背中まで伸びる銀髪を持つ女性——シエラが労いの言葉と共に飲み物を投げかけてくる。それを難なく受け取り、彼女の先導のもと水分補給をしながら俺達に用意された控室に入る。

俺達が座ったタイムミングを見計らって、女性が話を切り出す。

「改めて、二人共、お疲れ様です。今回も大成功に終わって良かったですね。それで、感想は？」

「……やっぱいいね。皆で一つの何かを創るって」

「初めの頃は散々嫌だって言ってたのに、やれば変わるものですね」「まあね。俺自身がすごく驚いてる」

掘り返さないで欲しい内容だが、仕方ないことだと思う。

すべての始まりは、冥界のテレビ番組『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』の劇場版に知り合いの伝手で出演したことだ。役としては劇場版限定のもう一人の主人公といったところなのだが、予想外なことにまさかの大ヒット。なぜか悪魔でもないのに俺にオファーが殺到。しかも魔王直々にお問い合わせされ渋々他の作品にも出演するようになったのだ。

冥界に娯楽が少ないのは理解しているつもりだが、それがいつの間にか歌ったり、踊ったりとアイドルの真似事をするようになるって誰が

予想できようか。いや、できまい！（反語）

今ではアイドルの美九やおっぱいドラゴンこと兵藤一誠の人気も出始めたため、多少の落ち着きは見られる。たまに冥界で仕事をするくらいになった。

さて、それだけで済めばまだ良かったのだが、そうはいかなかった。

俺の災難はまだ続いたのだ。

俺がアイドルの真似事をやっているのと知った永遠アの独身ザ墮天使ゼが他の勢力にも広めたお陰で、神々は何を思ったのか知らないが今度は人間界でデビューしようぜと俺の知らないところで話が進み、拳句の果てには親友を巻き込んでユニット結成。それがどうしてかデビュー当時から人気爆発。

ネットやニュースでは『期待の超新星！』だの『最強コンビ爆誕！』みたいな感じで騒がれ、辞めようにも家族や友達から大反対されて辞めるに辞められない状況となり、思わずタイミグ考えろよと言いたくなるようなときでも襲い掛かってくる英雄の末裔や邪龍、SAO事件、ALO事件を片手間に片付けながら今に至るわけだ。

まあ、今でははやてから頼まれた機動六課の訓練くらいしか面倒事がないから伸び伸びと活動が出来る。その上、誰かに自分の想いを届けることに遣り甲斐を感じているから文句はないのだけど。

「はあ……」

それでもいくらなんでもあれは無いだと溜め息が出るのを抑えることはない。

何度も繰り返し返した長い回想を終え、今日のライブの反省点、改善点を三人で話合って明日のスケジュールを確認する流れとなった。

「明日の午前中は池袋で新型デバイス——オーグマーのインタビューです。これは二人には別々の場所でやってもらおうことになっています。それが終わり次第オフです。質問はありますか？」

「大丈夫」「俺も問題ない」

「そうですね。ではすぐに帰宅して明日に備えましょう」

シエラの言葉に従い、タクシーに乗って帰宅した。

龍神空。

年齢は19歳。

職業は大学生とアイドル。

趣味は異世界で冒険。

これが今の俺の日常である。

## OS2

### OS2

現実世界に帰還してから私がない間の二年間のことを聞いたのだが、驚きの連続だった。

「俺、アイドルになったんだ」

「……へ？ アイドル!?!」

リハビリを始めてすぐにソラ君からアイドルになったことをいきなりカミングアウトされた。

ついぞと言わんばかりに悪魔や邪龍と戦ったらしいが詳細は語ってくれなかった。

……戦うことに関しては昔からだからあまり気にしてないけど。

小学生の頃から冥界で活躍していたことは知っていたが、まさか私が仮想世界にいる間に人間界でも活躍するアイドルになっているなんて予想できるはずなかった。

今度帰還者達を集めた特別ライブを行ってくれるそうだ。

ソラ君が活躍することが嬉しい反面、どこか遠くに行ってしまったみたいで少しだけ寂しかった。

次に開発者である茅場さんのことを聞いた。

茅場さんは今回の事件の被害者として世間には認知されているみたい。ただ開発者としての責任を取るつもりのように、多額の賠償金を支払ったそうだ。今は須郷さんの代わりにALOの運営を手伝っている。

ついでにユイちゃんは茅場さんによってALOは言わずもがな、現実でも会話出来るようにソラ君のスマホにいるらしい。

それとALO事件を引き起こした張本人である須郷さん。思い出すのも嫌だけど、彼は実験がバレて裁判にかけられる。当然婚約の話は取り消し。

お見舞いに来てくれたお母さんが申し訳なさそうに謝った後、「やっぱり恋愛結婚よね」と言った時、思わず深く頷いた。

ソラ君を落とさなさいと言つてたが言われるまでもない。

外堀は着実に埋めつつあるし、勝利するのにも年齢的な問題なのだ。

ふふふ、今の私は負ける気がしない……！

最後に帰還者についてだが、プレイヤーの中にいた学生達は政府の援助で帰還者用の学校が用意されてそこに通うこととなる。

二年も学業から離れていたのだから元の学校には通うことは今更出来ないし、するつもりもないがこの対応には助かった。

私は歩ける程度に回復するまでは学校に通うことは出来ないのだが、ソラ君がお見舞いしてくれるというだけで幸せな気分だ。それに学校に行けるようになったら送ってくれるみたいだし、良いことだらけだ。

忙しいはずなのに来てくれるのは影分身を使っているからだそう  
だ。

それに加えて二人きりの時間が多いのは、皆が気を遣つて会えなかった時間を埋めさせてくれているのだろう。

イチヤイチャするためリハビリなんてすぐに終わらせてやるんだから！

ライブの翌日。スケジュール通りに午前中はオーグマーについてのインタビューだ。

茅場晶彦が開発したナーヴギアの後継版の『アミュスファイア』に対抗するように、茅場晶彦の先生である重村徹大教授が開発したものがARデバイス『オーグマー』。

フルダイブするナーヴギアやアミュスファイアと違い、覚醒状態で使えるオーグマーは安全性と利便性が認められ、オーグマーは、コンパクトでも持ち運び可能。

若者を中心に人気が広がっているようだ。

かく言う俺も、オーグマーのCMに出演した縁で重村教授から直接オーグマーを頂いている。

「うくん！ 今日の仕事終わり！」

この後は何もなし——

メール？

オーグマーが見せる視界内にメールが届いた。

『from:結城明日奈』

件名:今暇だよね。

今からリズ達と遊ぶんだけど、ソラ君も良かったらどうかな？』

メールを見て慌てて周囲を見渡す。明日奈がどこかで見ているのかと思ったがそうではないらしい。

今暇だよねって断言できるってどういうこと!?! ……と、とりあえず、『いいよ』と返信しとこう。

明日奈からすぐに返信が返ってきて、指定された待ち合わせ場所へ向けて歩き出した。芸能人だとバレないように変装することを忘れずに。

指定された待ち合わせ——ダイシー・カフェに着くと窓から明日奈とその連れが座っているのが見えた。

店内に入ると人の出入りを知らせるベルがなるため、それに反応した人の視線が一齐に集まる。が、一人を除いて途端に『誰だ?』と言わんばかりの目を向けられる。

ここにくるまでもそうだったが、意外とサングラスだけでも十分変装になってるらしい。

「ソラ君！」

「よ、明日奈」

名前を呼びながら抱き着いてきた少女——明日奈を受け止める。

明日奈が現実世界に戻ってすでに二年が経ち、痩せ細った体もそこ

そこ肉が付いて大分健康体になってきたな、なんて抱き締めながら考えてしまう。

「おーい、皆?」

未だに俺が誰か気付いてない様子が見受けられたので、サングラスを外して「よっ」と声を掛ければ、ようやく気が付いたらしい。

「ちよ、ちよっとアスナ! 連れてくる人ってソラだったの!」

「そうだよ」

「アタシ、つてきりユウキだとばかり思ってたんだけど……」

「ふふ、私なりのサプライズってとこかな。成功してよかったよ」

どうやら明日奈は敢えて俺が来ることを教えなかったらしい。

SAOをやっている間に大人びたと思ってたなら、意外と子供っぽい部分もまだ残っていたことに何と言ったらいいか上手い言葉が思いつかない。

『パパ!』

「ユイ、元気してるか?」

周囲がいきなりの事態に大慌ての中、幼い少女の姿がオーグマーが映す視界に現れた。

背中まで伸びた黒い髪に薄桃色のワンピースと半透明な羽。御伽嚙に出てくる妖精と言っていい存在だ。もちろん本物の妖精ではなく、高性能のAIだ。

明日奈がプレイ中に見つけた少女で、短い間だがアインクラッドでは親子のように過ごしていたそうだ。

ユイが俺をパパと呼ぶのは明日奈が仕向けたからなのだが、今では俺も溺愛して可愛い娘扱いしてる。

『今日もお仕事お疲れ様です! それと昨日のライブ、ママと見ました! とーつても凄かったです!』

「ありがと。そう言ってもらえるとこれから頑張れるよ」

小さな体を命一杯使って表現してくれるユイに思わず表情が緩む。

本来ならユイとはスマホの画面か、ALOのような仮想世界でしか会えないのだが、重村教授の開発したオーグマーのおかげで日常的に会話ができるようになった。

CMの依頼を受けたのもこれが主な理由と言ってもいい。

いつかはリインフォースⅡみたいユニゾンデバイスとして身体を作るのも検討してるところだ。

俺とユイのやり取りを見て「順調順調♪」とほほ笑む明日奈は今更なので気にしない。

「よお、ロクサス」

「こんにちは、ロクサスさん」

「おつす、キリト、リーファ」

ロクサスの名前、というかALOでのプレイヤーネームを呼んだキリトこと桐ヶ谷和人とリーファこと桐ヶ谷直葉が俺に近寄る。

ネットゲームではリアルネームは出さないのが基本らしいと聞いて、適当にもじったSoraにXを加えてRoxasにしたのだ。それに俺の立場を配慮して彼らは基本的にはロクサス呼びしてくれる。

明日奈に勧められて始めたALOでは、ロクサスの容姿は明日奈からの強い要望があつてケットシーという獣耳がある種族で髪色が金髪となっている。装備はこれまた明日奈の強い要望で明日奈とペアルックである。

明日奈やユイ、ユウキが頻繁に猫耳や尻尾に触れてくるものだから、ケットシーを選んだことを若干後悔してたりしてなかったり。

「キリト、ちゃんとご飯食べてるか？　ただでさえ細いんだからもつと食った方がいいぞ」

「いつも言ってるけどな、お前は俺のお袋か！」

俺の一つ下で黒髪黒目、線の細い顔立ち。男にしては随分細い体をしているものだから、どうにも会う度に似たようなことを言ってしまう。

キリトは明日奈とはゲームの中で交流があつたらしく、彼女から聞かされたが彼はSAOのクリアに導いた英雄だ。

その後SAOのオフ会で明日奈に紹介されてからは現実でもALOでも関わりを持つようになった。

まあ、初めて対面した時は敵視されてこともあつたが、それは置いておく。

一方、リーファはキリトの従姉妹で彼女はSAOとは無関係だが、SAOクリア後も須郷伸之によってALOに閉じ込められた明日奈を助けるためにキリトと共に協力してもらった。

二人と軽く話して別れ、明日奈と並んでカウンター席に座るとこのお店の店主——エギルさんが迎えてくれた。

「ロクサス、アスナ。何か飲むか？」

「ジンジャーエールをお願いします」

「私も同じものを」

「おう。すぐできるから待ってろ」

待つこと数十秒でグラスに注がれたジンジャーエールを渡された。

エギルことアンドリユー・ギルバート・ミルズ。アフリカ系アメリカ人でガタイの良い黒人なのだが、本人曰く、生粋の江戸っ子らしい。SAOでも自分のお店を持っていたそうだ。

彼の好意でオフ会ではよくこのお店を使わせてもらっているし、落ち着いた雰囲気を入ってプライベートでも来させてもらってる。

「よお、ロクサス。相変わらずリアルは忙しいみたいだな」

「お陰でプライベートに時間がそんなにありませんよ」

俺達よりも先にカウンター席に座っていたクラインさんが俺を労ってくれた。

俺には影分身があるから皆との時間は確保できるけどね。

クラインこと壺井遼太郎さんは赤いバンダナに野武士面の男性だ。

どうにも出会いを求めてゲームをしていると女性陣が冷ややかな眼で教えてくれた。

だが、やるときはやる人らしく、仲間からの信頼は厚いみたいだ。

「ロクサスさん！ 今度のライブ、ユナとコラボするってホントですか!？」

「ちよつと、シリカ。落ち着きなさいよ」

私、気になります！と言った様子で近づいてきたのはこの場にいるメンバーで最年少のシリカと彼女を窘めるリズベット。

ツインテールの少女、シリカこと綾野珪子とショートカットの少女、リズベットこと篠崎里香。

彼女達は明日奈やキリト達同様、S A O 帰還者である。

シリカはマスコットみたいな役割……？ リズベットはS A O 内では明日奈の良き友として支えてくれたそうだ。

帰還後も明日奈、キリト、シリカ、リズベットは帰還者が通う学校で仲の良い友人関係を築いてる。

「まあね」

「わあ！ それって最っ強のベストマッチですねっ！！ あたし、絶対に見に行きますっ！！」

「お、おう……」

シリカの言った「ユナ」とは、オーグマーを使用したゲーム『オーディナル・スケール』のイメージキャラクターを務める世界初のA R アイドルのことだ。

その表情や歌声があまりにも自然すぎる為、A Iではなく生身の間が演じているのではという噂がある。

そして、そんなA R アイドルのユナと俺達『The Best B o n d』（略してB B）がオーグマーとオーディナル・スケールの宣伝としてコラボライブするのである。

シリカにチケットを用意しとくか。

それとここにはいないがシノンこと朝田詩乃を含めたメンバーがA L O で仲の良いメンバーだ。

「あ、今ので思い出したんだけど、皆はオーディナル・スケールやるの？」

明日奈の問いかけに店内の反応は様々だ。

長い間V R を体験してきた彼らからしたらA R には思うところがあるのだろう。最近ではA L O やG G O といったV R ゲームからA R ゲームに流れている傾向にあるのも一因かもしれない。

そう言えば帰還者達が通う学校の生徒は無料で配布されたんだっ  
たか？

「俺は仕事の一環としてかな。ついでの体動かせるなら丁度いいし」

これも広告塔としての役割だ。他の仕事もあるからそこまで頻繁には出来そうにないと思うけど。

「ソラ君がやるなら私もやろうかな。参加するときには必ず連絡入れてね?」

「わかった」

ここで嫌だと言えば痛い目に遭うことが分かりきっているから素直に頷く。あとは連絡することを忘れないようにしないと忘れた時が怖い。

決して尻に敷かれていているわけではない。決つつつして尻に敷かれていているわけではない!

「私もやりたいんだけど、出てくる場所がギリギリまでわからないから足がない私達には無理ね」

「なら、俺が車で送るか?」

「いいの!?!」

「ああ。明日奈が参加するなら元々そのつもりだったから。と言つてもどれくらい参加できるかわからないけど」

「お兄ちゃんも運動不足解消のためにやったら?」

「……考えとくよ」

ゲームと言えばキリト。キリトと言えばゲームと言っても過言じゃないくらいのゲーム好きのはずなのに乗り気じゃないのが気になった。

キリトにも好みのゲームとかあるんだなと適当に納得して、他愛のない会話を続けたのだった。

『オーディナル・スケール、起動!』

高層ビルに映された電子時計が9時になったと同時に、そこかしこから同じ台詞が飛び交う。

そして、世界は姿を変える。

オーグマー越しに見ていた高層ビルの群れは西洋風の建物へと変貌。

仮想世界とは違い、現実世界でここまで出来るのかと舌を巻く。さらには自分の姿もここで戦うための装備へと変わる。

しばらくの間、すっかり変わった周囲を観察していると、どこからか「おい、あそこっ！」と聞こえた。

ふとそちらを見やれば、開けた場所に白い円が描かれ炎が噴き上がった。そこから出てきたのは3、4 m程の大きさの武士だ。

「カガチ・ザ・サムライロード……！」

隣に立つ明日奈が目を見開いてその名を呟いた。

他にもSAO帰還者であるキリト達も似たような反応をしていた。

彼らの反応を察するにあればSAOに登場するモンスターと見ていいだろう。

あれが明日奈が戦ってきたモンスター、か。

だからといって俺の戦意が上がるとかはないのだけれど。

始める前から分かりきっていることだが、AIの敵よりも高校時代に鎬を削って戦った邪龍や英雄達の方が断然強い。それが覇気も何も感じないAI相手にやる気が起こるはずもないのだ。

まあ、純粹に楽しめるならそれでいいや。

ボスが現れたことで戦闘開始かと思われたが、ボスがその場から微動だにしない。

どういうことだ？と理由を考える前に誰かがまた何かに気付いて声を上げた。

一機のドローンが光を出し、少女と饅頭のような生物が現れる。現在話題沸騰中のAR型アイドル『ユナ』だ。

「ユナだ！」

「マジかよ!?!」

「結婚してくれーっ!!」

「皆ー！ 準備はいいかな？ それじゃ、戦闘開始！ ミュージック、スタート♪」

阿呆なことを言うプレイヤーを無視して戦闘開始の合図を出す。



仲間が呆れかえる中、キリトはカガチを引き連れて戻って来た。俺もそろそろ行きますかね。

「ソラ君、行くの？」

軽く体を動かし始めた俺を見て、そう察したのだろう。

「ああ。ノーコンティニューでクリアしてやるぜっ！」

こちらに戻って来たキリトと入れ替わるようにして走り出す。

手に持った剣で走り抜けるようにして一撃。カガチの右足を斬りつけた。

カガチの赤い眼光がこちらへと向き、俺の身体を両断しようと刀が振るわれる。

「ほいっ」と

上半身を反らすだけで刀は数cmギリギリを掠めるにとどまった。ダメージはない。

カウンター気味にまた一撃入れてまたギリギリで避ける。

それを何回か繰り返していると、その行動が受けたくらく周囲から称賛の言葉が飛び交う。

称賛の声を受けて、元々そういう気質なのかアイドルという職業に染まって来たのかわからないが、より場を盛り上げてみたくなる。

「歌ってるユナや他のプレイヤーには悪いけど、ここからは俺のステージだ」

連続バク転で後退し、鞭のように放たれた白い蛇を姿勢を低くして走ること躲す。

ついでに厄介だから切断できるかなと蛇を数回斬ってみたら案外あっさり切れた。やってみるものである。

仮面の奥で赤く輝く瞳が怒りに燃えた（気がする）。

「そら、背中がお留守だぞ」

足を潜り抜けて背中を逆袈裟斬りした。

良いダメージが入ったらしくカガチが一瞬の硬直を見せた。それをチャンスと捉えた虎男のプレイヤーがロケットランチャーを発射する。

決まれば大きなダメージになるのだが、カガチはギリギリのところ

で頭を傾け回避した。

「やべ……っ！」

虎男がしまったという顔をする。チャンスが無駄にしたからではなく、カガチが躲したロケットの先には歌っているユナがいたからだ。

誰もが次に起こるであろう出来事に息を？む中、ユナの前に何者かが飛び出し、ミサイルを弾いた。それどころかカガチに跳ね返しダメージも与えたのだ。

カガチが倒れ伏す状況で着地を決めた人物に注目が集まる。その人物の頭上には2の数字が映されていた。

「すげえー！」

「ランク、2位……!?」

まるでユナの騎士の如き働きを見せた男性は周りの目を気にせず、悠然と佇む。

2位。つまり廃人ゲーマーってやつか。それにあの動き……。

男性のさつきの動きに思うところがないわけではないが、まだカガチを倒していない。

カガチに目を向ければ、丁度起き上がり二刀流に戦闘パターンを変えていた。

「大技が来るぞ！ タンクの奴は付いて来い！」

駆け出した男性に周囲はやつと我に返る。

カガチが二刀を使って十字に放った斬撃をアクロバティックな動きで躲し、腰辺りに一撃入れる。

「おお！ やるじゃん！」

「それじゃあ私も！」

男性に触発されてクラインさんや明日奈もカガチに近寄り攻撃を入れていく。

“矮小な人間風情が生意気な”。カガチに話す機能があればきつとそんな風に今の心境を叫んだに違いない。

高速で放たれる斬撃をタンクに防いでもらいながら反撃の機会を窺う。

やがて技発動後の硬直によってカガチの動きが止まり、大きなチャンスが生まれた。そこに先程の男性が素早く三連撃を入れる。

もはや風前の灯火となったカガチが膝を着く。

「明日奈ー!」

「うん!」

二人同時に駆け出し男性とすれ違う。

——スイツチ。

こいつ……。

聞こえた彼の呟きに眉をひそめるも、止まることなくカガチへと一直線。

明日奈がカガチの胸にレイピアを突き刺し、俺が跳んでカガチの首を刎ねた。

まるで武士の介錯のような気がしないでもないがそれでお終い。

体力の尽きたカガチは光の粒子となって弾け飛んだ。

完全にカガチの姿が見えなくなり、ファンファーレが鳴り響く。それによってプレイヤーの勝利がわかると勝鬨を上げる者や喜びを称える者で溢れかえった。

「決まったな」

「うん、やったね!」

喜びを分かち合うように二人でハイタッチを交わす。

「ボスマンスター攻略おめでとう! ポイント、サービスしておいたよ!」

ユナのアナウンス通りに多めのポイントが加算され、大幅に順位が上がった。それにより周囲が更に沸く。

「今回一番頑張った人にご褒美を上げるね!」

そう言っただけ彼女はふわりと俺の前に降り立つ。

——チュ。

「……………は?」

『んなッ!?』

突如、頬に温かくて柔らかい感触がした。それがキスされたのだと気が付いたときには、ユナはすでに離れていた。

勝利して油断していたのもあるが、見聞色の覇気では感知不能なユナに完全に不意を突かれてしまった。

あー、今のはよくない。変装してるからまだスキャンダルにはならないと思うが、余計な注目を集めてしまった。いや、そんなことよりももつと良くないことがある。

「今日のMVPはあなた！ おめでとー！」

効果音が鳴ると画面にポイントが更に加算されていた。

だが、上がった順位を確認する間もなく、明日奈が眼が笑っていない笑顔で俺の手を万力の如き握力で握ってきた。

「あ、明日奈さん、今のは……その——」

明日奈が怒っている理由は見当がついている。だけど、俺じゃなくてユナのせいだと当の本人に非難の目を向けるも、そこにはすでにユナはいなかった。

まあ、こういうのは男が痛い目を見ると昔から身をもって学習している。古事記にも書いてあるくらいだ。

「……言わせて欲しい。」

「これも全部ユナって奴の仕業なんだ！」

「ねえ、ソラ君」

「な、なんでございましょう?」

「隣のホテルで今のことについて朝まで語り合おっか♪」

「……はい」

少しでも彼女の怒りが収まるなら、大人しく従うことが正解だ。

彼女に手を引かれるまま本当にホテルに入り、朝まで語り合った  
(意味深)。

「彼がソラかあ。今度のライブ、楽しみ！」

名前を出した人物が今どんな目に遭っているか毛ほども知らない  
ARアイドルは、無邪気に笑うのであった。

——おのれ、ユナアアアアアアアアアツ!!

そんな叫びが夜の都内に響き渡ったとかなんとか。